

岩手県埋文センター文化財調査報告書第2集

# 都南村 湯沢遺跡

(昭和52年度)

(財)岩手県埋蔵文化財センター

湯 沢 遺 跡

# 発刊のことば

当埋蔵文化財センター設立初年度の昭和52年において、19遺跡の発掘調査を実施してまいりました。

本報告書に収録された遺跡は、当センターが、岩手県住宅供給公社より委託を受けて発掘調査を実施した縄文時代中・後期を中心とした集落遺跡であります。

本遺跡は、盛岡市近郊の紫波郡都南村湯沢地内に所在し、岩手県住宅供給公社によって住宅団地が建設される対象区内に包括されたものであります。

文化財保護行政にかかわるものにとっては、極力遺跡の現状保存を図ることを主旨とするものでありますが、種々の事情により県教育委員会においては本遺跡は事前発掘調査による記録保存とし調査記録を後世に伝えることとなったものであります。今回の調査は、調査区域、工事期日との兼ね合い等多くの問題をかゝえておりますが、関係機関のご理解と調査員の努力によって無事終了し、短期日において、報告書を上梓できた事について、関係各位に心からお礼申し上げる次第であります。

昭和52年4月より試掘調査、5月より本調査を行ない竪穴住居址160棟、ピット類353基余の予想に余る多数の遺構を検出いたしました。このため、調査員各位には休日を返上して調査に当り、貴重な文化財を記録保存いたすことができ本当にその努力には、心から感謝しております。

当センターにおいては、終始岩手県教育委員会のご指導を得ながら、発掘調査はもとより整理作業においても為し得る限りの努力と細心の配慮を払ったつもりであります。

本報告書刊行にあたり、関係機関各位のご指導とご協力に感謝申し上げますと共に、発掘調査整理作業にご協力いただいた方々に対し深く感謝の意を表する次第であります。

つきましては、本報告書が広く学術研究の資料として活用され、文化財保護の一翼をになうものとなることを望んで止みません。

昭和53年3月

財団法人 岩手県埋蔵文化財センター

理事長 畑山新信

# 緒 言

1. 本報告書は、岩手県紫波郡都南村第1地割字湯沢7の12に所在する湯沢遺跡の発掘調査の結果を収録したものである。
2. 発掘調査は、湯沢住宅団地建設に伴い、その工事施行にさきがけて遺跡の記録保存を図るため、岩手県住宅供給公社の依頼と、岩手県教育委員会文化課の要請と指導を得て、財団法人岩手県埋蔵文化財センターが実施した。
3. 発掘調査は、昭和52年4月25日から9月30日まで実施し、整理作業は同年10月1日から昭和53年3月31日まで行なった。原稿の執筆は1月中旬から3月末日まで行なった。
4. 調査面積は、保存地域となる緑地帯と、礫層が露出し遺構が存在しないことが確認された部分を除く12,758m<sup>2</sup>である。
5. 発掘調査において精査された遺構数は次のとおりである。

竪穴住居址	160棟
フラスコ形ピット・ビーカー形ピット	187基
陥し穴状遺構	166基
配石遺構	5基

6. 発掘調査は主に金沢光孝、高橋信雄、高橋文夫、三浦謙一が担当し、調査協力員として齋藤邦雄（岩手大学学生）、菊池千与子（中央大学学生）、樽井今日子（中央大学学生）の諸君の協力を得た。
7. 発掘調査および整理にあたっては、次の諸氏に御教示を賜わった。  
板橋 源（岩手大学名誉教授）、草間俊一（岩手大学教授）、小林達雄（文化庁）、佐藤二郎（岩手県立博物館建設事務所）の各氏と齋藤尚己氏をはじめとする北上市教育委員会の方々。
8. 発掘調査および整理にあたっては、次の諸機関の御協力を賜わった。  
都南村教育委員会、岩手大学、岩手県立盛岡工業高等学校、都南村湯沢公民館、野原牧場、岩手県住宅供給公社湯沢団地建設事務所。
9. 発掘作業に御協力いただいたのは、藤原幸市、築田政高、中村馬太郎の各氏のほか242名の方々である。巻末に氏名を記して感謝の意を表したい。
10. 本報告書の執筆分担は次のとおりである。
  - I. 調査に至る経過……………瀬川司男
  - II. 調査方法と調査組織……………高橋文夫

III. 地形・地質……………高橋文夫

IV. 検出遺構

(1) 竪穴住居址

B III区、C III区、C IV区、D II区、D III区、E IV区、F IV区……………三浦謙一

E II区、E III区、F II区、F III区、G II区……………高橋文夫

H II区、I II区……………金沢光孝

(2) フラスコ形ピット、ピーカー形ピット

B IV区、C III区、C IV区、D II区、D III区、D IV区……………三浦謙一

E II区、E III区、E IV区、F II区、F III区、F IV区、G II区、G III区、H II区、I II

区……………金沢光孝

(3) 陥し穴状遺構……………高橋信雄

(4) 配石遺構……………三浦謙一

V. 考察（概要）……………三浦謙一・高橋信雄・斎藤邦雄

VI. あとがき……………三浦謙一

VII. 図版

図版は三浦謙一が担当し、各調査員の原図をもとに斎藤邦雄、藤沢裕之、川村京子、武蔵アサヨ、越場ミチエ、勝政タカ子、瀬川幸子、川村道子、浅沼光子、吉田律子、菅原恵子、佐藤満恵の方々の協力を得て作成した。

写真図版の作成は高橋文夫が担当し、藤原 彰はじめ上記の方々の協力を得た。

11. 本編は精査した全ての遺構についての事実記載を主体として収録している。
12. 発掘調査の結果の分析、考察の詳細はおって報告予定の『遺物編』にもり込むこととし、ここではその概要を収録するに留めた。
13. 本文中における敬称は省略した。
14. また、時間的な制約から、共同執筆者の間でそれぞれの原稿を検討しあうことができなかった。したがって、文責は各担当者にある。
15. 不整形ピットなど、一部は本編に記載されていない遺構があるが、これらについては、『遺物編』の中に収録する予定である。

# 本文目次

序 文

緒 言

I. 調査に至る経過 .....	2
II. 調査方法と調査組織 .....	3
III. 地形・地質 .....	11
IV. 検出遺構 .....	19
(1) 住居址 .....	19
B IV区 .....	19
C IV区 .....	26
D III区 .....	32
E II区 .....	19
E IV区 .....	62
F III区 .....	74
G II区 .....	81
I II区 .....	100
C III区 .....	19
D II区 .....	27
D IV区 .....	39
E III区 .....	56
F II区 .....	64
F IV区 .....	78
H II区 .....	93
(2) 配石遺構 .....	104
G II区 .....	104
H II区 .....	105
(3) フラスコ形ピット・ビーカー形ピット .....	106
B IV区 .....	106
C IV区 .....	109
D III区 .....	114
E II区 .....	122
E IV区 .....	129
C III区 .....	107
D II区 .....	111
D IV区 .....	120
E III区 .....	126
F II区 .....	130

F III区	134	F IV区	134
G II区	135	G III区	139
H II区	139	I II区	142
(4) 陥し穴状遺構	143		
B III区	143	B IV区	144
C III区	146	C IV区	152
D II区	158	D III区	161
D IV区	165	E II区	168
E III区	170	E IV区	172
F II区	173	F III区	175
F IV区	176	G II区	177
G III区	179	G IV区	180
H II区	182		
V. 考察(概要)	182		
(1) 遺構群の占地	182		
(2) 住居址群の層位的検出	182		
(3) “湯沢パターン”	182		
(4) 陥し穴状遺構	183		
(5) 集落の移動	183		
(6) 焼失住居址	183		
(7) II層の形成と遺物包含層	184		
(8) 住居址の構造	184		
(9) 「出入口」状施設	184		
(10) 炉の分類	185		
(11) フラスコ形ピット・ビーカー形ピットの形態変化とその性格	186		
(12) 石材の搬入	186		
VI. あとがき	186		





# 図版目次

図版 1	192	a	C III - 8 住居址
岩手県全体図		b	C III - 12 住居址
図版 2	193	図版 13	204
地形面区分図		a	C III - 9 住居址
図版 3	194	b	C III - 9 住居址 (断面)
遺跡位置図		c	C III - 10 住居址
図版 4	195	図版 14	205
a 周辺地形図		a	C III - 11 住居址
b 表層地質分類図		b	C III - 11 住居址 (断面)
図版 5	196	c	C IV - 1 住居址
深掘り断面柱状図		図版 15	206
図版 6	197	a	C IV - 2 住居址
斜面下方土層断面		b	D II - 1 住居址
図版 7	198	図版 16	207
a B IV - 1 住居址		a	D II - 2 住居址
b C III - 2 住居址		b	D II - 10 住居址
図版 8	199	c	D II - 10 住居址 (断面)
a C III - 1 住居址		図版 17	208
b C III - 1 住居址 (断面)		a	D II - 4 住居址
図版 9	200	b	D II - 5 住居址
a C III - 3 住居址		図版 18	209
b C III - 4 住居址		a	D II - 6 住居址
図版 10	201	b	D II - 7 住居址
a C III - 5 住居址		図版 19	210
b C III - 6 住居址		a	D II - 8 住居址
図版 11	202	b	D II - 9 住居址
a C III - 7 住居址		図版 20	211
b C III - 7 住居址 (断面)		a	D II - 12 住居址
図版 12	203	b	D III - 2 住居址

	c	D III - 2 住居址 (断面)		a	E II - 2 住居址
図版21		.....	212	b	E II - 2 住居址 (断面)
	a	D III - 1 住居址		c	E II - 4 住居址
	b	D III - 3 住居址		d	E II - 4 住居址 (断面)
	c	D III - 3 住居址 (断面)		図版29	.....
図版22		.....	213	a	E II - 3 住居址
	a	D III - 4 住居址		b	E II - 5 住居址
	b	D III - 8 住居址		図版30	.....
	c	D III - 8 住居址 (断面)		a	E II - 6 住居址
図版23		.....	214	b	E II - 7 住居址
	a	D III - 5 住居址 (1次プラン)		c	E II - 7 住居址 (断面)
	b	D III - 5 住居址 (2次プラン)		図版31	.....
図版24		.....	215	a	E II - 8 住居址
	a	D III - 6 住居址		b	E II - 9 住居址
	b	D III - 9 住居址		図版32	.....
図版25		.....	216	a	E II - 10住居址
	a	D III - 7 住居址 (1次プラン)		b	E II - 11住居址
	b	D III - 7 住居址 (断面)		図版33	.....
	c	D III - 7 住居址 (2次プラン)		a	E II - 12住居址
図版26		.....	217	b	E II - 13住居址
	a	D III - 10住居址		c	E II - 14住居址
	b	D III - 10住居址 (断面)		図版34	.....
	c	D III - 11住居址		a	E II - 16住居址
	d	D III - 11住居址 (断面)		b	E II - 15住居址
図版27		.....	218	図版35	.....
	a	D IV - 1 住居址		a	E II - 17住居址
	b	D IV - 1 住居址 (断面)		b	E II - 21住居址
	c	E II - 1 住居址		c	E II - 21住居址 (断面)
図版28		.....	219	図版36	.....
					220
					221
					222
					223
					224
					225
					226
					227
					228

	a	E II - 18住居址	
	b	E II - 19住居址	
図版37		.....	228
	a	E II - 20住居址	
	b	E II - 22住居址	
	c	E II - 23住居址 (欠番)	
図版38		.....	229
	a	E II - 24住居址	
	b	E II - 24住居址 (断面)	
	c	E II - 25住居址	
図版39		.....	230
	a	E II - 26住居址	
	b	E II - 29住居址	
図版40		.....	231
	a	E II - 28住居址	
	b	E II - 27住居址	
図版41		.....	232
	a	E III - 1住居址	
	b	E III - 2住居址	
図版42		.....	233
	a	E III - 3住居址	
	b	E III - 4住居址	
図版43		.....	234
	a	E III - 5住居址	
	b	E III - 6住居址	
図版44		.....	235
	a	E III - 7住居址	
	b	E III - 9住居址	
図版45		.....	236

	a	E III - 8住居址	
	b	E III - 10住居址	
図面46		.....	237
	a	E IV - 1住居址	
	b	E IV - 2住居址	
	c	E IV - 2住居址 (断面)	
図版47		.....	238
	a	E IV - 4住居址	
	a	E IV - 4住居址 (断面)	
	c	E IV - 5住居址	
図版48		.....	239
	a	F II - 1住居址	
	b	E II - 30住居址	
	c	F II - 2住居址	
図版49		.....	240
	a	F II - 4住居址	
	b	F II - 7住居址	
	c	F II - 3住居址	
図版50		.....	241
	a	F II - 6住居址	
	b	F II - 9住居址	
図版51		.....	242
	a	F II - 8住居址 (1次プラン)	
	b	F II - 8住居址 (断面)	
	c	F II - 8住居址 (2次プラン)	
図版52		.....	243
	a	F II - 10住居址	
	b	F II - 11住居址	
	c	F II - 11住居址 (断面)	

図版53	.....	244	図版61	.....	252
a	F II - 12住居址		a	F III - 8住居址	
b	F II - 13住居址		b	F III - 8住居址 (断面)	
c	F II - 13住居址 (断面)		c	F III - 9住居址	
図版54	.....	245	図版62	.....	253
a	F II - 15住居址		a	F IV - 1住居址	
b	F II - 15住居址 (断面)		b	F IV - 2住居址	
	F II - 14住居址 (断面)		図版63	.....	254
c	F II - 14住居址		a	F IV - 4住居址	
図版55	.....	246	b	F IV - 5住居址状遺構	
a	F II - 17住居址		図版64	.....	255
b	F II - 16住居址		a	F IV - 6住居址	
図版56	.....	247	b	F IV - 7住居址	
a	F II - 18住居址		c	F IV - 8住居址	
b	F II - 19住居址		d	F IV - 7住居址 (断面)	
図版57	.....	248	図版65	.....	256
a	F III - 1住居址		a	G II - 1住居址	
b	F III - 2住居址		b	G II - 2住居址	
図版58	.....	249	c	G II - 2住居址 (断面)	
a	F III - 3住居址		図版66	.....	257
b	F III - 4住居址		a	G II - 3住居址 (1次プラン)	
図版59	.....	250	b	G II - 3住居址 (断面)	
a	F III - 5住居址		c	G II - 3住居址 (2次プラン)	
b	F III - 5住居址 (断面)		図版67	.....	258
c	F III - 6住居址		a	G II - 4住居址	
図版60	.....	251	b	G II - 19住居址	
a	F III - 7住居址		c	G II - 19住居址 (断面)	
b	F III - 7住居址 (断面)		図版68	.....	259
c	F III - 10住居址		a	G II - 5住居址	

b	G II - 6 住居址				
図版69	.....	260			
a	G II - 7 住居址				
b	G II - 7 住居址 (断面)				
c	G II - 10 住居址				
d	G II - 10 住居址 (断面)				
図版70	.....	261			
a	G II - 8 住居址 (欠番)				
b	G II - 14 住居址				
図版71	.....	262			
a	G II - 9 住居址				
b	G II - 9 住居址 (断面)				
c	G II - 12 住居址				
d	G II - 12 住居址 (断面)				
図版72	.....	263			
a	G II - 11 住居址				
b	G II - 15 住居址				
図版73	.....	264			
a	G II - 13 住居址 (1次プラン)				
b	G II - 13 住居址 (断面)				
c	G II - 13 住居址 (2次プラン)				
d	G II - 21 住居址				
図版74	.....	265			
a	G II - 16 住居址				
b	G II - 17 住居址				
c	G II - 17 住居址 (断面)				
図版75	.....	266			
a	G II - 18 住居址				
b	G II - 20 住居址				
図版76	.....	267			
a	H II - 2 住居址				
b	H II - 3 住居址				
c	H II - 3 住居址 (断面)				
図版77	.....	268			
a	H II - 4 住居址				
b	H II - 1 住居址				
図版78	.....	269			
a	H II - 5 住居址				
b	H II - 5 住居址 (断面)				
c	H II - 7 住居址				
図版79	.....	270			
a	H II - 6 住居址				
b	H II - 8 住居址				
c	H II - 8 住居址 (断面)				
図版80	.....	271			
a	H II - 9 住居址 (1次プラン)				
b	H II - 9 住居址 (断面)				
c	H II - 9 住居址 (2次プラン)				
図版81	.....	272			
a	H II - 10 住居址				
b	H II - 11 住居址				
図版82	.....	273			
a	H II - 12 住居址				
b	H II - 13 住居址				
c	H II - 13 住居址 (断面)				
図版83	.....	274			
a	H II - 14 住居址				
b	I II - 2 住居址				

图版84	.....	275	图版91	.....	282
a	I II - 1 住居址		a	C IV - 1 住居址炉	
b	I II - 3 住居址		b	D II - 1 住居址炉	
图版85	.....	276	c	D II - 2 住居址炉	
a	I II - 4 住居址		d	D II - 3 住居址炉	
b	I II - 4 住居址 (断面)		e	D II - 4 住居址炉	
c	I II - 5 住居址		f	D II - 5 住居址炉	
图版86	.....	277	图版92	.....	283
a	I II - 6 住居址		a	D II - 7 住居址炉	
b	I II - 7 住居址		b	D II - 8 住居址炉	
c	I II - 8 住居址		c	D II - 9 住居址炉	
图版87	.....	278	d	D II - 12 住居址炉	
a	D II - 3 住居址		e	D III - 1 住居址炉	
b	E IV - 3 住居址		f	D III - 2 住居址炉	
图版88	.....	279	图版93	.....	284
a	F IV - 3 住居址		a	D III - 3 住居址炉	
图版89	.....	280	b	D III - 4 住居址炉	
a	C III - 2 住居址炉		c	D III - 5 住居址炉	
b	C III - 3 住居址炉		d	D III - 6 住居址炉	
c	C III - 4 住居址炉		e	D III - 7 住居址炉	
d	C III - 5 住居址炉		图版94	.....	285
e	C III - 6 住居址炉		a	D III - 8 住居址炉	
f	C III - 7 住居址炉 (1号炉)		b	D III - 9 住居址炉	
图版90	.....	281	c	D III - 10 住居址炉	
a	C III - 7 住居址炉 (2号炉)		d	D III - 11 住居址炉	
b	C III - 8 住居址炉		e	D IV - 1 住居址炉	
c	C III - 10 住居址炉		图版95	.....	286
d	C III - 11 住居址炉		a	E II - 1 住居址炉	
e	C III - 12 住居址炉		b	E II - 2 住居址炉	

c	E II - 3 住居址炉		b	E II - 29 住居址炉	
d	E II - 4 住居址炉		c	E II - 30 住居址炉	
e	E II - 5 住居址炉		d	E III - 1 住居址炉	
f	E II - 6 住居址炉		e	E III - 2 住居址炉	
图版96	.....	287	图版101	.....	292
a	E II - 7 住居址炉		a	E III - 3 住居址炉	
b	E II - 8 住居址炉		b	E III - 4 住居址炉	
c	E II - 9 住居址炉		c	E III - 5 住居址炉	
d	E II - 11 住居址炉		d	E III - 6 住居址炉 (1号炉)	
图版97	.....	288	e	E III - 6 住居址炉 (2号炉)	
a	E II - 12 住居址炉		f	E III - 7 住居址炉	
b	E II - 13 住居址炉		g	E III - 8 住居址炉	
c	E II - 14 住居址炉		图版102	.....	293
d	E II - 15 住居址炉		a	E III - 9 住居址炉	
e	E II - 16 住居址炉		b	E III - 10 住居址炉	
图版98	.....	289	c	E IV - 1 住居址炉	
a	E II - 17 住居址炉		d	E IV - 4 住居址炉	
b	E II - 18 住居址炉		e	E IV - 2 住居址炉	
c	E II - 19 住居址炉		图版103	.....	294
d	E II - 20 住居址炉		a	E IV - 5 住居址炉	
e	E II - 21 住居址炉		b	F II - 2 住居址炉	
图版99	.....	290	c	F II - 3 住居址炉	
a	E II - 22 住居址炉		d	F II - 4 住居址炉	
b	E II - 24 住居址炉		e	F II - 6 住居址炉	
c	E II - 25 住居址炉		图版104	.....	295
d	E II - 26 住居址炉		a	F II - 8 住居址炉	
e	E II - 27 住居址炉		b	F II - 10 住居址炉	
图版100	.....	291	c	F II - 11 住居址炉	
a	E II - 28 住居址炉		d	F II - 12 住居址炉	

e F II -13住居址炉  
图版105 ..... 296

- a F II -14住居址炉
- b F II -15住居址炉
- c F II -16住居址炉
- d F II -17住居址炉
- e F II -18住居址炉

图版106 ..... 297

- a F II -19住居址炉
- b F III - 2 住居址炉
- c F III - 5 住居址炉
- d F III - 7 住居址炉
- e F III - 9 住居址炉
- f F III -10住居址炉

图版107 ..... 298

- a F IV - 4 住居址炉
- b G II - 1 住居址炉
- c G II - 2 住居址炉
- d G II - 3 住居址炉

图版108 ..... 299

- a G II - 5 住居址炉
- b G II - 7 住居址炉
- c G II -10住居址炉
- d G II -11住居址炉

图版 109 ..... 300

- a G II -12住居址炉
- b G II -13住居址炉
- G II -21住居址炉
- c G II -14住居址炉

d G II -15住居址炉

e G II -16住居址炉

图版110 ..... 301

- a G II -18住居址炉
- b G II -19住居址炉
- c G II -20住居址炉
- d H II - 1 住居址炉
- e H II - 3 住居址炉

图版111 ..... 302

- a H II - 4 住居址炉
- b H II - 5 住居址炉
- c H II - 6 住居址炉
- d H II - 7 住居址炉

图版112 ..... 303

- a H II - 8 住居址炉
- b H II -10住居址炉
- c H II -11住居址炉 ( 1 号炉)

图版113 ..... 304

- a H II -11住居址炉 ( 2 号炉)
- b H II -12住居址炉
- c H II -13住居址炉
- d H II -14住居址炉

图版114 ..... 305

- a I II - 3 住居址炉
- b I II - 4 住居址炉
- c I II - 5 住居址炉
- d I II - 7 住居址炉

图版115 ..... 306

- a G II -201配石遺構



図版116 ..... 307

- a G II - 202配石遺構
- b G II - 203配石遺構
- c G II - 204配石遺構
- d H II - 201配石遺構

図版117 ..... 308

- a B IV - 51フラスコ形ピット(断面)
- b B IV - 52フラスコ形ピット(断面)
- c B IV - 53ビーカー形ピット(断面)
- d B IV - 54ビーカー形ピット(断面)
- e C III - 51フラスコ形ピット(断面)
- f C III - 52フラスコ形ピット(断面)

図版118 ..... 309

- a C III - 54フラスコ形ピット(断面)
- b C III - 56フラスコ形ピット(断面)
- c C III - 57フラスコ形ピット(断面)
- d C III - 59フラスコ形ピット(断面)
- e C III - 58フラスコ形ピット(平面)
- f C III - 60フラスコ形ピット(平面)
- g C IV - 52ビーカー形ピット(断面)

図版119 ..... 310

- a C IV - 53ビーカー形ピット(断面)
- b C IV - 56ビーカー形ピット(断面)
- c C IV - 54ビーカー形ピット(平面)
- d C IV - 55ビーカー形ピット(平面)
- e C IV - 57ビーカー形ピット(断面)
- f C IV - 58ビーカー形ピット(断面)
- g C IV - 59ビーカー形ピット(平面)

図版120 ..... 311

a C IV - 60ビーカー形ピット(断面)

b C IV - 61ビーカー形ピット(断面)

c D II - 52フラスコ形ピット(断面)

d D II - 53フラスコ形ピット(断面)

e D II - 55フラスコ形ピット(断面)

f D II - 56フラスコ形ピット(断面)

g D II - 54フラスコ形ピット(断面)

図版121 ..... 312

a D II - 57フラスコ形ピット(断面)

b D II - 58フラスコ形ピット(断面)

c D II - 59ビーカー形ピット(平面)

d D II - 63ビーカー形ピット(平面)

e D II - 62ビーカー形ピット(平面)

f D II - 61フラスコ形ピット(断面)

g D III - 51フラスコ形ピット(断面)

図版122 ..... 313

a D III - 52フラスコ形ピット(断面)

b D III - 53フラスコ形ピット(断面)

c D III - 54フラスコ形ピット(平面)

d D III - 55フラスコ形ピット(断面)

e D III - 56フラスコ形ピット(平面)

図版123 ..... 314

a D III - 57フラスコ形ピット(断面)

b D III - 60フラスコ形ピット(断面)

c D III - 61フラスコ形ピット(断面)

d D III - 62フラスコ形ピット(断面)

e D III - 63フラスコ形ピット(断面)

f D III - 64フラスコ形ピット(断面)

g D III - 65フラスコ形ピット(平面)

- h D III - 68 フラスコ形ピット (断面)
- i D III - 66 ビーカー形ピット (平面)
- 図版124 ..... 315
- a D III - 67 フラスコ形ピット (断面)
- b D III - 70 フラスコ形ピット (断面)
- c D III - 69 ビーカー形ピット (断面)
- d D III - 71 フラスコ形ピット (断面)
- e D III - 73 フラスコ形ピット (断面)
- f D III - 74 フラスコ形ピット (平面)
- g D III - 79 ビーカー形ピット (断面)
- h D III - 76 フラスコ形ピット (平面)
- i D III - 75 ビーカー形ピット (断面)
- 図版125 ..... 316
- a D III - 82 ビーカー形ピット (断面)
- b D III - 83 フラスコ形ピット (断面)
- c D IV - 52 フラスコ形ピット (断面)
- d D IV - 51 フラスコ形ピット (平面)
- e D IV - 51 フラスコ形ピット (断面)
- f D IV - 53 ビーカー形ピット (断面)
- g D IV - 55 ビーカー形ピット (断面)
- h D IV - 54 フラスコ形ピット (平面)
- i D IV - 61 ビーカー形ピット (平面)
- 図版126 ..... 317
- a D IV - 56 ビーカー形ピット (断面)
- b D IV - 57 ビーカー形ピット (断面)
- c D IV - 59 フラスコ形ピット (断面)
- d D IV - 58 ビーカー形ピット (断面)
- e D IV - 60 ビーカー形ピット (断面)
- f E II - 51 ビーカー形ピット (平面)

- g E II - 54 フラスコ形ピット (断面)
- h E II - 52 フラスコ形ピット (平面)
- i E II - 53 フラスコ形ピット (断面)
- 図版127 ..... 318
- a E II - 56 フラスコ形ピット (断面)
- b E II - 58 フラスコ形ピット (断面)
- c E II - 59 フラスコ形ピット (断面)
- d E II - 60 フラスコ形ピット (平面)
- e E II - 64 フラスコ形ピット (断面)
- f E II - 65 フラスコ形ピット (断面)
- g E II - 63 フラスコ形ピット (平面)
- 図版128 ..... 319
- a E II - 66 フラスコ形ピット (断面)
- b E II - 67 フラスコ形ピット (平面)
- c E II - 68 フラスコ形ピット (平面)
- d E II - 69 フラスコ形ピット (平面)
- e E II - 70 フラスコ形ピット (平面)
- f E II - 71 ビーカー形ピット (平面)
- 図版129 ..... 320
- a E III - 52 ビーカー形ピット (平面)
- b E III - 53 フラスコ形ピット (断面)
- c E III - 54 フラスコ形ピット (断面)
- d E III - 55 フラスコ形ピット (断面)
- e E III - 56 フラスコ形ピット (断面)
- f E III - 58 フラスコ形ピット (断面)
- 図版130 ..... 321
- a E III - 57 フラスコ形ピット (断面)
- b E III - 59 フラスコ形ピット (断面)
- c E III - 60 ビーカー形ピット (断面)

- d E III-61 フラスコ形ピット(断面)
- e E III-66 フラスコ形ピット(断面)
- f E III-61 フラスコ形ピット(平面)
- g E III-64 フラスコ形ピット(平面)

図版131 ..... 322

- a E IV-51 ビーカー形ピット(平面)
- E IV-52 ビーカー形ピット(平面)
- b E IV-53 フラスコ形ピット(断面)
- c E IV-54 フラスコ形ピット(平面)
- d E IV-55 フラスコ形ピット(断面)
- e E IV-56 ビーカー形ピット(平面)
- f E IV-59 ビーカー形ピット(断面)
- g E IV-58AB ビーカー形ピット(平面)

図版132 ..... 323

- a F II-51 フラスコ形ピット(断面)
- b F II-52 フラスコ形ピット(断面)
- c F II-53 フラスコ形ピット(断面)
- d F II-55 フラスコ形ピット(平面)
- e F II-57 フラスコ形ピット(平面)
- f F II-54 フラスコ形ピット(断面)
- g F II-56 フラスコ形ピット(断面)

図版133 ..... 324

- a F II-58 フラスコ形ピット(断面)
- b F II-59 フラスコ形ピット(断面)
- c F II-60 フラスコ形ピット(断面)
- d F II-61 フラスコ形ピット(断面)

図版134 ..... 325

- a F II-62 フラスコ形ピット(断面)
- b F II-63 フラスコ形ピット(断面)

- c F II-64 フラスコ形ピット(断面)
- d F II-65 フラスコ形ピット(断面)
- e F II-66 フラスコ形ピット(断面)
- f F II-67 ビーカー形ピット(平面)

図版135 ..... 326

- a F II-68 フラスコ形ピット(平面)
- b F II-69 ビーカー形ピット(平面)
- c F II-70 ビーカー形ピット(断面)
- d F III-50 ビーカー形ピット(断面)
- e F IV-52 フラスコ形ピット(断面)
- f F IV-54 フラスコ形ピット(断面)
- g G II-52 フラスコ形ピット(断面)
- h G II-51 フラスコ形ピット(断面)
- i G II-54 フラスコ形ピット(断面)

図版136 ..... 327

- a G II-53 フラスコ形ピット(断面)
- b G II-56 フラスコ形ピット(断面)
- c G II-55 フラスコ形ピット(断面)
- d G II-59 フラスコ形ピット(断面)

図版137 ..... 328

- a G II-58 フラスコ形ピット(平面)
- b G II-61 フラスコ形ピット(断面)
- c G II-60 フラスコ形ピット(平面)
- d G II-62 フラスコ形ピット(断面)
- e G II-65 フラスコ形ピット(断面)
- f G II-63 フラスコ形ピット(断面)

図版138 ..... 329

- a G II-64 フラスコ形ピット(断面)
- b G II-66 フラスコ形ピット(平面)

- c G II -67 フラスコ形ピット(断面)
- d G II -68 ビーカー形ピット(断面)
- e G II -69 フラスコ形ピット(断面)
- f G II -70 ビーカー形ピット(断面)
- g G II -71 フラスコ形ピット(断面)

図版139 ..... 330

- a G III -51 フラスコ形ピット(断面)
- b H II -51 フラスコ形ピット(断面)
- c H II -53 フラスコ形ピット(断面)
- d H II -54 フラスコ形ピット(断面)
- e H II -55 フラスコ形ピット(断面)

図版140 ..... 331

- a H II -56 フラスコ形ピット(断面)
- b H II -57 フラスコ形ピット(断面)
- c H II -58 フラスコ形ピット(断面)
- d H II -59 ビーカー形ピット(断面)
- e H II -61 ビーカー形ピット(断面)

図版141 ..... 332

- a H II -60 ビーカー形ピット(断面)
- b H II -62 ビーカー形ピット(断面)
- c H II -63 フラスコ形ピット(断面)
- d H II -65 ビーカー形ピット(断面)
- e H II -64 ビーカー形ピット(平面)
- f I II -51 フラスコ形ピット(断面)
- g I II -52 フラスコ形ピット(断面)
- h E III -67 フラスコ形ピット(断面)
- i E III -67 フラスコ形ピット(平面)
- j D II -64 フラスコ形ピット(平面)

図版142 ..... 333

- a B III -101 陥し穴状遺構(平面)
- b B III -102 陥し穴状遺構(平面)
- c B III -103 陥し穴状遺構(平面)
- d B III -102 陥し穴状遺構(断面)
- e B III -103 陥し穴状遺構(断面)
- f B IV -101 陥し穴状遺構(平面)
- g B IV -102 陥し穴状遺構(平面)
- h B IV -103 陥し穴状遺構(平面)
- i B IV -104 陥し穴状遺構(平面)
- j B IV -105 陥し穴状遺構(平面)
- k B IV -108 陥し穴状遺構(平面)
- l B IV -110 陥し穴状遺構(平面)
- m B IV -107 陥し穴状遺構(平面)
- n B IV -106 陥し穴状遺構(平面)
- o B IV -111 陥し穴状遺構(平面)
- p B IV -109 陥し穴状遺構(平面)
- q B IV -112 陥し穴状遺構(平面)

図版143 ..... 334

- a B IV -101 陥し穴状遺構(断面)
- b B IV -102 陥し穴状遺構(断面)
- c B IV -103 陥し穴状遺構(断面)
- d B IV -105 陥し穴状遺構(断面)
- e B IV -104 陥し穴状遺構(断面)
- f B IV -107 陥し穴状遺構(断面)
- g B IV -108 陥し穴状遺構(断面)
- h B IV -109 陥し穴状遺構(断面)
- i B IV -110 陥し穴状遺構(断面)
- j B IV -111 陥し穴状遺構(断面)

図版144 ..... 335

- a C III-101 陥し穴状遺構(平面)
- b C III-102 陥し穴状遺構(平面)
- c C III-103 陥し穴状遺構(平面)
- d C III-105 陥し穴状遺構(平面)
- e C III-104 陥し穴状遺構(平面)
- f C III-106 陥し穴状遺構(平面)
- g C III-107 陥し穴状遺構(平面)
- h C III-108 陥し穴状遺構(平面)
- i C III-109 陥し穴状遺構(平面)
- j C III-110 陥し穴状遺構(平面)
- k C III-111 陥し穴状遺構(平面)
- l C III-112 陥し穴状遺構(平面)
- m C III-113 陥し穴状遺構(平面)
- n C III-114 陥し穴状遺構(平面)
- o C III-115 陥し穴状遺構(平面)
- p C III-116 陥し穴状遺構(平面)
- q C III-117 陥し穴状遺構(平面)
- r C III-118 陥し穴状遺構(平面)

図版145 ..... 336

- a C III-119 陥し穴状遺構(平面)
- b C III-120 陥し穴状遺構(平面)
- c C III-121 陥し穴状遺構(平面)
- d C III-122 陥し穴状遺構(平面)
- e C III-123 陥し穴状遺構(平面)
- f C III-124 陥し穴状遺構(平面)
- g C III-125 陥し穴状遺構(平面)
- h C III-126 陥し穴状遺構(平面)
- i C III-127 陥し穴状遺構(平面)
- j C III-101 陥し穴状遺構(断面)

- k C III-102 陥し穴状遺構(断面)
- l C III-106 陥し穴状遺構(断面)
- m C III-103 陥し穴状遺構(断面)
- n C III-107 陥し穴状遺構(断面)
- o C III-104 陥し穴状遺構(断面)

図版146 ..... 337

- a C III-108 陥し穴状遺構(断面)
- b C III-109 陥し穴状遺構(断面)
- c C III-110 陥し穴状遺構(断面)
- d C III-111 陥し穴状遺構(断面)
- e C III-112 陥し穴状遺構(断面)
- f C III-114 陥し穴状遺構(断面)
- g C III-115 陥し穴状遺構(断面)
- h C III-116 陥し穴状遺構(断面)
- i C III-117 陥し穴状遺構(断面)
- j C III-118 陥し穴状遺構(断面)
- k C III-119 陥し穴状遺構(断面)
- l C III-120 陥し穴状遺構(断面)
- m C III-121 陥し穴状遺構(断面)
- n C III-122 陥し穴状遺構(断面)

図版147 ..... 338

- a C III-123 陥し穴状遺構(断面)
- b C III-124 陥し穴状遺構(断面)
- c C III-125 陥し穴状遺構(断面)
- d C III-126 陥し穴状遺構(断面)
- e C IV-101 陥し穴状遺構(平面)
- f C IV-102 陥し穴状遺構(平面)
- g C IV-103 陥し穴状遺構(平面)
- h C IV-104 陥し穴状遺構(平面)

- i C IV - 105 陥し穴状遺構(平面)
- j C IV - 106 陥し穴状遺構(平面)
- k C IV - 107 陥し穴状遺構(平面)
- l C IV - 108 陥し穴状遺構(平面)
- m C IV - 109 陥し穴状遺構(平面)
- n C IV - 116 陥し穴状遺構(平面)
- o C IV - 115 陥し穴状遺構(平面)

図版148 ..... 339

- a C IV - 112 陥し穴状遺構(平面)
- b C IV - 113 陥し穴状遺構(平面)
- c C IV - 111 陥し穴状遺構(平面)
- d C IV - 110 陥し穴状遺構(平面)
- e C IV - 117 陥し穴状遺構(平面)
- f C IV - 120 陥し穴状遺構(平面)
- g C IV - 119 陥し穴状遺構(平面)
- h C IV - 131 陥し穴状遺構(平面)
- i C IV - 118 陥し穴状遺構(平面)
- j C IV - 124 陥し穴状遺構(平面)
- k C IV - 123 陥し穴状遺構(平面)
- l C IV - 125 陥し穴状遺構(平面1)
- m C IV - 125 陥し穴状遺構(平面2)
- n C IV - 126 陥し穴状遺構(平面1)
- o C IV - 126 陥し穴状遺構(平面2)

図版149 ..... 340

- a C IV - 127 陥し穴状遺構(平面1)
- b C IV - 127 陥し穴状遺構(平面2)
- c C IV - 129 陥し穴状遺構(平面)
- d C IV - 128 陥し穴状遺構(平面)
- e C IV - 130 陥し穴状遺構(平面)

- f C IV - 101 陥し穴状遺構(断面)
- g C IV - 102 陥し穴状遺構(断面)
- h C IV - 103 陥し穴状遺構(断面)
- i C IV - 104 陥し穴状遺構(断面)
- j C IV - 105 陥し穴状遺構(断面)
- k C IV - 108 陥し穴状遺構(断面)
- l C IV - 107 陥し穴状遺構(断面)
- m C IV - 106 陥し穴状遺構(断面)

図版150 ..... 341

- a C IV - 110 陥し穴状遺構(断面)
- b C IV - 111 陥し穴状遺構(断面)
- c C IV - 116 陥し穴状遺構(断面)
- d C IV - 117 陥し穴状遺構(断面)
- e C IV - 120 陥し穴状遺構(断面)
- f C IV - 124 陥し穴状遺構(断面)
- g C IV - 123 陥し穴状遺構(断面)
- h C IV - 125 陥し穴状遺構(断面)
- i C IV - 126 陥し穴状遺構(断面)
- j C IV - 127 陥し穴状遺構(断面)
- k C IV - 130 陥し穴状遺構(断面)
- l C IV - 129 陥し穴状遺構(断面)
- m C IV - 131 陥し穴状遺構(断面)

図版151 ..... 342

- a D II - 102 陥し穴状遺構(平面)
- b D II - 101 陥し穴状遺構(平面)
- c D II - 103 陥し穴状遺構(平面)
- d D II - 104 陥し穴状遺構(平面)
- e D II - 105 陥し穴状遺構(平面)
- f D II - 106 陥し穴状遺構(平面)

- g D II - 107 陥し穴状遺構(平面)
- h D II - 108 陥し穴状遺構(平面)
- i D II - 109 陥し穴状遺構(平面)
- j D II - 110 陥し穴状遺構(平面)
- k D II - 112 陥し穴状遺構(平面)
- l D II - 101 陥し穴状遺構(断面)
- m D II - 102 陥し穴状遺構(断面)
- n D II - 111 陥し穴状遺構(平面)
- o D II - 114 陥し穴状遺構(平面)

図版152 ..... 343

- a D II - 103 陥し穴状遺構(断面)
- b D II - 104 陥し穴状遺構(断面)
- c D II - 105 陥し穴状遺構(断面)
- d D II - 107 陥し穴状遺構(断面)
- e D II - 108 陥し穴状遺構(断面)
- f D II - 112 陥し穴状遺構(断面)
- g D II - 114 陥し穴状遺構(断面)
- h D II - 101 陥し穴状遺構(平面)
- i D III - 102 陥し穴状遺構(平面)
- j D III - 103 陥し穴状遺構(平面)
- k D III - 104 陥し穴状遺構(平面)
- l D III - 105 陥し穴状遺構(平面)
- m D III - 106 陥し穴状遺構(平面)

図版153 ..... 344

- a D III - 107 陥し穴状遺構(平面)
- b D III - 108 陥し穴状遺構(平面)
- c D III - 109 陥し穴状遺構(平面)
- d D III - 111 陥し穴状遺構(平面)
- e D III - 110 陥し穴状遺構(平面)

- f D III - 112 陥し穴状遺構(平面)
- g D III - 113 陥し穴状遺構(平面)
- h D III - 114 陥し穴状遺構(平面)
- i D III - 115 陥し穴状遺構(平面)
- j D III - 116 陥し穴状遺構(平面)
- k D III - 117 陥し穴状遺構(平面)
- l D III - 118 陥し穴状遺構(平面)
- m D III - 119 陥し穴状遺構(平面)
- n D III - 120 陥し穴状遺構(平面)
- o D III - 121 陥し穴状遺構(平面)

図版154 ..... 345

- a D III - 101 陥し穴状遺構(断面)
- b D III - 102 陥し穴状遺構(断面)
- c D III - 103 陥し穴状遺構(断面)
- d D III - 104 陥し穴状遺構(断面)
- e D III - 106 陥し穴状遺構(断面)
- f D III - 108 陥し穴状遺構(断面)
- g D III - 109 陥し穴状遺構(断面)
- h D III - 105 陥し穴状遺構(断面)
- i D III - 111 陥し穴状遺構(断面)
- j D III - 110 陥し穴状遺構(断面)
- k D III - 112 陥し穴状遺構(断面)
- l D III - 113 陥し穴状遺構(断面)
- m D III - 114 陥し穴状遺構(断面)
- n D III - 115 陥し穴状遺構(断面)
- o D III - 116 陥し穴状遺構(断面)

図版155 ..... 346

- a D III - 117 陥し穴状遺構(断面)
- b D III - 118 陥し穴状遺構(断面)

- c D III-119 陥し穴状遺構(断面)
- d D IV-101 陥し穴状遺構(平面)
- e D IV-102 陥し穴状遺構(平面)
- f D IV-103 陥し穴状遺構(平面)
- g D IV-104 陥し穴状遺構(平面)
- h D IV-105 陥し穴状遺構(平面)
- i D IV-106 陥し穴状遺構(平面)
- j D IV-107 陥し穴状遺構(平面)
- k D IV-108 陥し穴状遺構(平面)
- l D IV-109 陥し穴状遺構(平面)
- m D IV-110 陥し穴状遺構(平面)

図版156 ..... 347

- a D IV-111 陥し穴状遺構(平面)
- b D IV-112 陥し穴状遺構(平面)
- c D IV-101 陥し穴状遺構(断面)
- d D IV-102 陥し穴状遺構(断面)
- e D IV-103 陥し穴状遺構(断面)
- f D IV-104 陥し穴状遺構(断面)
- g D IV-106 陥し穴状遺構(断面)
- h D IV-107 陥し穴状遺構(断面)
- i D IV-108 陥し穴状遺構(断面)
- j D IV-109 陥し穴状遺構(断面)
- k D IV-110 陥し穴状遺構(断面)
- l D IV-111 陥し穴状遺構(断面)

図版157 ..... 348

- a E II-101 陥し穴状遺構(平面)
- b E II-102 陥し穴状遺構(平面)
- c E II-103 陥し穴状遺構(平面)
- d E II-104 陥し穴状遺構(平面)

- e E II-105 陥し穴状遺構(平面)
- f E II-106 陥し穴状遺構(平面)
- g E II-107 陥し穴状遺構(平面)
- h E II-108 陥し穴状遺構(平面)
- i E II-109 陥し穴状遺構(平面)
- j E II-110 陥し穴状遺構(平面)
- k E II-101 陥し穴状遺構(断面)
- l E II-104 陥し穴状遺構(断面)
- m E II-102 陥し穴状遺構(断面)
- n E II-106 陥し穴状遺構(断面)

図版158 ..... 349

- a E III-101 陥し穴状遺構(平面)
- b E III-102 陥し穴状遺構(平面)
- c E III-103 陥し穴状遺構(平面)
- d E III-104 陥し穴状遺構(平面)
- e E III-105 陥し穴状遺構(平面)
- f E III-106 陥し穴状遺構(平面)
- g E III-108 陥し穴状遺構(平面)
- h E III-107 陥し穴状遺構(平面)
- i E III-109 陥し穴状遺構(平面)
- j E III-110 陥し穴状遺構(平面)
- k E III-101 陥し穴状遺構(断面)
- l E III-102 陥し穴状遺構(断面)
- m E III-103 陥し穴状遺構(断面)

図版159 ..... 350

- a E III-104 陥し穴状遺構(断面)
- b E III-105 陥し穴状遺構(断面)
- c E III-107 陥し穴状遺構(断面)
- d E III-108 陥し穴状遺構(断面)



- e E III-109 陥し穴状遺構(断面)
- f E IV-101 陥し穴状遺構(平面)
- g E IV-102 陥し穴状遺構(平面)
- h E IV-103 陥し穴状遺構(平面)
- i E IV-104 陥し穴状遺構(平面)
- j E IV-101 陥し穴状遺構(断面)
- k E IV-102 陥し穴状遺構(断面)
- l F II-102 陥し穴状遺構(平面)
- m F II-101 陥し穴状遺構(平面)

図版160 ..... 351

- a F II-103 陥し穴状遺構(平面)
- b F II-108 陥し穴状遺構(平面)
- c F II-104 陥し穴状遺構(平面)
- d F II-105 陥し穴状遺構(平面)
- e F II-106 陥し穴状遺構(平面)
- f F II-107 陥し穴状遺構(平面)
- g F II-109 陥し穴状遺構(平面)
- h F II-110 陥し穴状遺構(平面)
- i F II-101 陥し穴状遺構(断面)
- j F II-102 陥し穴状遺構(断面)
- k F II-103 陥し穴状遺構(断面)
- l F II-104 陥し穴状遺構(断面)
- m F II-105 陥し穴状遺構(断面)
- n F II-107 陥し穴状遺構(断面)

図版161 ..... 352

- a F II-108 陥し穴状遺構(断面)
- b F II-110 陥し穴状遺構(断面)
- c F II-109 陥し穴状遺構(断面)
- d F III-101 陥し穴状遺構(平面)

- e F III-102 陥し穴状遺構(平面)
- f F III-103 陥し穴状遺構(平面)
- g F III-105 陥し穴状遺構(平面)
- h F III-101 陥し穴状遺構(断面)
- i F III-102 陥し穴状遺構(断面)
- j F III-103 陥し穴状遺構(断面)
- k F IV-101 陥し穴状遺構(平面)
- l F IV-102 陥し穴状遺構(平面)
- m F III-105 陥し穴状遺構(断面)

図版162 ..... 353

- a F IV-103 陥し穴状遺構(平面)
- b F IV-104 陥し穴状遺構(平面)
- c F IV-104 陥し穴状遺構(断面)
- d G II-101 陥し穴状遺構(平面)
- e G II-102 陥し穴状遺構(平面)
- f G II-103 陥し穴状遺構(平面)
- g G II-104 陥し穴状遺構(平面)
- h G II-105 陥し穴状遺構(平面)
- i G II-106 陥し穴状遺構(平面)
- j G II-107 陥し穴状遺構(平面)

図版163 ..... 354

- a G II-101 陥し穴状遺構(断面)
- b G II-102 陥し穴状遺構(断面)
- c G II-105 陥し穴状遺構(断面)
- d G II-106 陥し穴状遺構(断面)
- e G III-101 陥し穴状遺構(平面)
- f G III-102 陥し穴状遺構(平面)
- g G III-103 陥し穴状遺構(平面)
- h G III-104 陥し穴状遺構(平面)

i	G III-105	陥し穴状遺構(平面)	
j	G III-101	陥し穴状遺構(断面)	
k	G III-102	陥し穴状遺構(断面)	
図版164	.....		355
a	G III-103	陥し穴状遺構(断面)	
b	G III-104	陥し穴状遺構(断面)	
c	G IV-101	陥し穴状遺構(平面)	
d	G IV-102	陥し穴状遺構(平面)	
e	G IV-103	陥し穴状遺構(平面)	
f	G IV-101	陥し穴状遺構(断面)	
g	G IV-102	陥し穴状遺構(断面)	
h	G IV-103	陥し穴状遺構(断面)	
i	H II-101	陥し穴状遺構(平面)	
j	H II-101	陥し穴状遺構(断面)	

折り込み図版第 I 図

グリッド配置図	.....	357
---------	-------	-----

折り込み図版第 II 図

遺構配置図	.....	358
-------	-------	-----

# 写真図版目次

写真図版 1	360	写真図版11	370
遺跡全景（北東からの空中写真）		a C III - 6 住居址	
写真図版 2	361	b C III - 8 住居址	
a（東からの空中写真）		写真図版12	371
b（北東からの空中写真）		a C III - 7 住居址	
写真図版 3	362	b C III - 7 住居址(埋土の状況)	
a 遺跡遠景（湯沢森から）		写真図版13	372
b 遺跡近景（湯沢森から）		a C III - 9 住居址	
写真図版 4	363	b C III - 10 住居址	
a 調査風景		写真図版14	373
b 調査風景		a C III - 11 住居址	
写真図版 5	364	（遺物出土状況）	
a 調査風景		b C III - 11 住居址	
b 第 1 回現地説明会		写真図版15	374
写真図版 6	365	a C IV - 1 住居址	
a 検出遺構群		b C IV - 2 住居址	
b 検出遺構群		写真図版16	375
写真図版 7	366	a D II - 1 住居址	
a No. 1 地点深堀り断面		D II - 2 住居址	
b E II 区土層断面		b D II - 1 住居址	
写真図版 8	367	写真図版17	376
a B IV - 1 住居址		a D II - 2 住居址	
b C III - 1 住居址		b D II - 2 住居址(埋土の状況)	
写真図版 9	368	写真図版18	377
a C III - 2 住居址		a D II - 3 住居址	
b C III - 3 住居址		b D II - 4 住居址	
写真図版10	369	写真図版19	378
a C III - 4 住居址		a D II - 5 住居址	
b C III - 5 住居址		b D II - 6 住居址	

写真図版20	.....	379	b	D III - 5 住居址 (陥し穴状遺構掘りあげ後)	
a	D II - 7 住居址				
b	D II - 9 住居址		写真図版28	.....	387
写真図版21	.....	380	a	D III - 7 住居址 (炭化材分布状況)	
a	D II - 8 住居址		b	D III - 7 住居址	
b	D II - 8 住居址 (陥し穴状遺構に切られた炉)		写真図版29	.....	388
写真図版22	.....	381	a	D III - 8 住居址 (埋土上面の火山灰分布状況)	
a	D II - 10 住居址		b	D III - 8 住居址	
b	D II - 12 住居址		写真図版30	.....	389
写真図版23	.....	382	a	D III - 9 住居址 D III - 10 住居址	
a	D III - 1 住居址		b	D III - 9 住居址	
b	D III - 2 住居址		写真図版31	.....	390
写真図版24	.....	383	a	D III - 10 住居址 (遺物出土状況)	
a	D III - 3 住居址 (陥し穴状遺構掘りあげ前)		b	D III - 10 住居址	
b	D III - 3 住居址 (陥し穴状遺構掘りあげ後)		写真図版32	.....	391
写真図版25	.....	384	a	D III - 11 住居址	
a	D III - 4 住居址		b	D III - 11 住居址 (埋土の状況)	
b	D III - 6 住居址		写真図版33	.....	392
写真図版26	.....	385	a	D IV - 1 住居址	
a	D III - 5 住居址 (炭化材出土状況)		b	E II - 2 住居址	
b	D III - 5 住居址 (炭化材出土状況)		写真図版34	.....	393
写真図版27	.....	386	a	E II - 3 住居址	
a	D III - 5 住居址 (陥し穴状遺構掘りあげ前)		b	E II - 4 住居址	
			写真図版35	.....	394
			a	E II - 5 住居址	

b	E II - 6 住居址	写真図版44	.....	403
写真図版36	.....	a	E II - 25住居址	
a	E II - 7 住居址	b	E II - 26住居址	
b	E II - 8 住居址	写真図版45	.....	404
写真図版37	.....	a	E II - 27住居址	
a	E II - 9 住居址	b	E II - 28住居址	
b	E II - 10住居址	写真図版46	.....	405
写真図版38	.....	a	E III - 1 住居址	
a	E II - 11住居址	b	E III - 3 住居址	
(遺物出土状況)		写真図版47	.....	406
b	E II - 11住居址	a	E III - 2 住居址	
写真図版39	.....	b	E III - 2 住居址	
a	E II - 12住居址	(陥し穴状遺構との切り合い)		
E II - 13住居址		写真図版48	.....	407
E II - 14住居址		a	E III - 4 住居址	
b	E II - 13住居址	b	E III - 5 住居址	
写真図版40	.....	E III - 6 住居址		
a	E II - 14住居址	E III - 7 住居址		
b	E II - 15住居址	E III - 9 住居址		
写真図版41	.....	写真図版49	.....	408
a	E II - 16住居址	a	E III - 5 住居址	
b	E II - 17住居址	b	E III - 6 住居址	
E II - 29住居址		写真図版50	.....	409
写真図版42	.....	a	E III - 7 住居址	
a	E II - 20住居址	b	E III - 9 住居址	
b	E II - 21住居址	写真図版51	.....	410
写真図版43	.....	a	E III - 8 住居址	
a	E II - 22住居址	b	E III - 8 住居址 (埋土の状況)	
b	E II - 24住居址	写真図版52	.....	411

	a	E III - 10住居址		F II - 15住居址	
	b	E IV - 1住居址	写真図版61	.....	420
写真図版53		.....	412	a	F II - 16住居址
	a	E IV - 2住居址			F II - 19住居址
	b	E IV - 4住居址		b	F II - 17住居址
		E IV - 5住居址			F II - 18住居址
写真図版54		.....	413	写真図版62	.....
	a	F II - 1住居址		a	F II - 18住居址
	b	F II - 2住居址		b	F III - 1住居址
写真図版55		.....	414	写真図版63	.....
	a	F II - 3住居址		a	F III - 2住居址
	b	F II - 4住居址		b	F III - 3住居址
写真図版56		.....	415	写真図版64	.....
	a	F II - 6住居址		a	F III - 4住居址
	b	F II - 7住居址		b	F III - 5住居址
写真図版57		.....	416	写真図版65	.....
	a	F II - 8住居址		a	F III - 6住居址
	b	F II - 8住居址		b	F III - 7住居址
		(火山灰分布状況)		写真図版66	.....
写真図版58		.....	417	a	F III - 8住居址
	a	F II - 8住居址(埋土の状況)		b	F III - 9住居址
	b	F II - 9住居址		写真図版67	.....
写真図版59		.....	418	a	F III - 10住居址
	a	F II - 10住居址		b	F IV - 5住居址状遺構
	b	F II - 11住居址		写真図版68	.....
		F II - 12住居址		a	F IV - 1住居址
写真図版60		.....	419		F IV - 2住居址
	a	F II - 13住居址		b	F IV - 3住居址
	b	F II - 14住居址		写真図版69	.....
					428

	a	FⅣ-4住居址		a	GⅡ-15住居址
	b	FⅣ-6住居址		b	GⅡ-17住居址
		FⅣ-7住居址			GⅡ-18住居址
		FⅣ-8住居址	写真図版78		437
写真図版70		429	a	GⅡ-19住居址	
	a	GⅡ-1住居址		(遺物出土状況)	
	b	GⅡ-2住居址	b	GⅡ-19住居址	
写真図版71		430	写真図版79		438
	a	GⅡ-3住居址	a	GⅡ-20住居址	
	b	GⅡ-3住居址(炉と礫群)	b	HⅡ-2住居址	
写真図版72		431	写真図版80		439
	a	GⅡ-5住居址	a	HⅡ-1住居址	
	b	GⅡ-7住居址		(遺物出土状況)	
写真図版73		432	b	HⅡ-1住居址	
	a	GⅡ-9住居址	写真図版81		440
	b	GⅡ-9住居址	a	HⅡ-3住居址	
		(遺物出土状況)	b	HⅡ-4住居址	
写真図版74		433	写真図版82		441
	a	GⅡ-10住居址	a	HⅡ-5住居址	
	b	GⅡ-12住居址	b	HⅡ-6住居址	
写真図版75		434	写真図版83		442
	a	GⅡ-13住居址	a	HⅡ-7住居址(礫出土状況)	
	b	GⅡ-13住居址	b	HⅡ-7住居址	
		GⅡ-14住居址	写真図版84		443
写真図版76		435	a	HⅡ-8住居址	
	a	GⅡ-16住居址	b	HⅡ-9住居址	
	b	GⅡ-16住居址		(火山灰分布状況)	
		(「出入口」状施設)	写真図版85		444
写真図版77		436	a	HⅡ-9住居址(火山灰断面)	

	b	H II - 9 住居址	写真図版94	.....	453
写真図版86		.....	a	C III - 4 住居址炉 (断面)	
	a	H II - 10 住居址	b	C III - 6 住居址炉 (断面)	
	b	H II - 10 住居址(埋土の状況)	c	C III - 5 住居址炉 (平面)	
写真図版87		.....	d	C III - 5 住居址炉 (断面)	
	a	H II - 11 住居址 (礫群出土状況)	e	C III - 7 住居址炉 (1号炉断面)	
	b	H II - 11 住居址	f	C III - 7 住居址炉 (2号炉断面)	
写真図版88		.....	写真図版95	.....	454
	a	H II - 12 住居址 (礫群出土状況)	a	C III - 8 住居址炉 (平面)	
	b	H II - 12 住居址	b	C III - 8 住居址炉 (断面)	
写真図版89		.....	c	C III - 10 住居址炉 (平面)	
	a	H II - 13 住居址	d	C III - 10 住居址炉 (断面)	
	b	H II - 14 住居址	e	C III - 11 住居址炉 (平面)	
写真図版90		.....	f	C III - 11 住居址炉 (断面)	
	a	I II - 1 住居址	写真図版96	.....	455
	b	I II - 2 住居址	a	C III - 12 住居址炉 (平面)	
写真図版91		.....	b	C III - 12 住居址炉 (断面)	
	a	I II - 3 住居址 (遺物出土状況)	c	C IV - 1 住居址炉 (平面)	
	b	I II - 3 住居址	d	C IV - 1 住居址炉 (断面)	
写真図版92		.....	e	C IV - 2 住居址炉 (平面)	
	a	I II - 4 住居址	f	C IV - 8 住居址炉 (平面)	
		I II - 5 住居址	写真図版97	.....	456
	b	I II - 8 住居址	a	D II - 1 住居址炉 (平面)	
写真図版93		.....	b	D II - 1 住居址炉 (断面)	
	a	I II - 7 住居址 (礫出土状況)	c	D II - 2 住居址炉 (平面)	
	b	I II - 7 住居址	d	D II - 2 住居址炉 (断面)	
			e	D II - 3 住居址炉 (平面)	



	f	D II - 3 住居址炉 (断面)		a	D III - 11 住居址炉 (平面)
写真图版98		.....	457	b	D III - 11 住居址炉 (断面)
	a	D II - 4 住居址炉 (平面)		c	D IV - 1 住居址炉 (平面)
	b	D II - 4 住居址炉 (断面)		d	D III - 12 住居址炉 (断面)
	c	D II - 5 住居址炉 (平面)		e	D IV - 1 住居址炉 (断面)
	d	D II - 5 住居址炉 (断面)		f	E II - 1 住居址炉 (断面)
	e	D II - 8 住居址炉 (平面)		写真图版103	.....
	f	D II - 8 住居址炉 (断面)		a	E II - 2 住居址炉 (断面)
写真图版99		.....	458	b	E II - 3 住居址炉 (平面)
	a	D II - 9 住居址炉 (平面)		c	E II - 4 住居址炉 (断面)
	b	D II - 9 住居址炉 (断面)		d	E II - 6 住居址炉 (平面)
	c	D II - 12 住居址炉 (平面)		e	E II - 8 住居址炉 (断面)
	d	D II - 12 住居址炉 (断面)		f	E II - 11 住居址炉 (平面)
	e	D II - 10 住居址炉 (平面)		写真图版104	.....
	f	D III - 1 住居址炉 (断面)		a	E II - 15 住居址炉 (断面)
写真图版100		.....	459	b	E II - 14 住居址炉 (平面)
	a	D III - 2 住居址炉 (断面)		c	E II - 14 住居址炉 (断面)
	b	D III - 3 住居址炉 (平面)		d	E II - 17 住居址炉 (断面)
	c	D III - 4 住居址炉 (平面)		写真图版105	.....
	d	D III - 4 住居址炉 (断面)		a	E II - 20 住居址炉 (平面)
	e	D III - 5 住居址炉 (断面)		b	E II - 24 住居址炉 (平面)
	f	D III - 6 住居址炉 (断面)		c	E II - 21 住居址炉 (平面)
写真图版101		.....	460	d	E II - 21 住居址炉 (断面)
	a	D III - 7 住居址炉 (断面)		e	E II - 27 住居址炉 (平面)
	b	D III - 8 住居址炉 (断面)		f	E II - 28 住居址炉 (断面)
	c	D III - 9 住居址炉 (断面)		写真图版106	.....
	d	D III - 10 住居址炉 (平面)		a	E II - 29 住居址炉 (断面)
	e	D III - 10 住居址炉 (断面)		b	E II - 30 住居址炉 (平面)
写真图版102		.....	461	c	E III - 1 住居址炉 (平面)

d	E III - 1 住居址炉 (断面)	f	F II - 11 住居址炉 (断面)
e	E III - 2 住居址炉 (平面)	写真图版111	..... 470
f	E III - 2 住居址炉 (断面)	a	F II - 12 住居址炉 (平面)
写真图版107	..... 466	b	F II - 12 住居址炉 (断面)
a	E III - 3 住居址炉 (平面)	c	F II - 13 住居址炉 (平面)
b	E III - 3 住居址炉 (断面)	d	F II - 13 住居址炉 (断面)
c	E III - 4 住居址炉 (平面)	e	F II - 14 住居址炉 (平面)
d	E III - 4 住居址炉 (断面)	f	F II - 14 住居址炉 (断面)
e	E III - 5 住居址炉 (平面)	写真图版112	..... 471
f	E III - 5 住居址炉 (断面)	a	F II - 16 住居址炉 (平面)
写真图版108	..... 467	b	F II - 16 住居址炉 (断面)
a	E III - 6 住居址炉 (平面)	c	F II - 18 住居址炉 (平面)
b	E III - 7 住居址炉 (平面)	d	F II - 18 住居址炉 (断面)
c	E III - 10 住居址炉 (平面)	e	F II - 19 住居址炉 (平面)
d	E III - 9 住居址炉 (断面)	f	F II - 19 住居址炉 (断面)
e	E III - 10 住居址炉 (断面)	写真图版113	..... 472
f	E IV - 1 住居址炉 (平面)	a	F III - 2 住居址炉 (平面)
写真图版109	..... 468	b	F III - 10 住居址炉 (平面)
a	E IV - 1 住居址炉 (断面)	c	F III - 5 住居址炉 (平面)
b	E IV - 2 住居址炉 (平面)	d	F III - 5 住居址炉 (断面)
c	F II - 3 住居址炉 (断面)	e	G II - 1 住居址炉 (平面)
d	E IV - 2 住居址炉 (断面)	f	G II - 2 住居址炉 (断面)
e	F II - 4 住居址炉 (平面)	写真图版114	..... 473
写真图版110	..... 469	a	G II - 3 住居址炉 (平面)
a	F II - 6 住居址炉 (断面)	b	G II - 3 住居址炉 (断面)
b	F II - 8 住居址炉 (断面)	c	G II - 4 住居址炉 (平面)
c	F II - 10 住居址炉 (断面)	d	G II - 7 住居址炉 (断面)
d	F II - 15 住居址炉 (平面)	e	G II - 5 住居址炉 (平面)
e	F II - 11 住居址炉 (平面)	f	G II - 5 住居址炉 (断面)

写真図版115 ..... 474

- a G II - 9住居址炉 (平面)
- b G II - 11住居址炉 (断面)
- c G II - 10住居址炉 (平面)
- d G II - 10住居址炉 (断面)
- e G II - 13住居址炉 (断面)
- f G II - 15住居址炉 (断面)

写真図版116 ..... 475

- a G II - 16住居址炉 (断面)
- b G II - 19住居址炉 (断面)
- c G II - 17住居址炉 (平面)
- d G II - 17住居址炉 (断面)
- e G II - 18住居址炉 (平面)
- f G II - 18住居址炉 (断面)

写真図版117 ..... 476

- a H II - 1住居址炉 (平面)
- b H II - 1住居址炉 (断面)
- c H II - 3住居址炉 (平面)
- d H II - 3住居址炉 (断面)
- e H II - 4住居址炉 (平面)
- f H II - 4住居址炉 (断面)

写真図版118 ..... 477

- a H II - 5住居址炉 (平面)
- b H II - 5住居址炉 (断面)
- c H II - 6住居址炉 (平面)
- d H II - 6住居址炉 (断面)
- e H II - 7住居址炉 (平面)
- f H II - 7住居址炉 (断面)

写真図版119 ..... 478

- a H II - 8住居址炉 (断面)
- b H II - 9住居址炉 (平面)
- c H II - 10住居址炉 (断面)
- d H II - 12住居址炉 (断面)
- e H II - 11住居址炉 (平面)
- f H II - 11住居址炉 (断面)

写真図版120 ..... 479

- a H II - 13住居址炉 (平面)
- b H II - 14住居址炉 (断面)
- c I II - 3住居址炉 (平面)
- d I II - 5住居址炉 (平面)
- e I II - 7住居址炉 (平面)

写真図版121 ..... 480

- a C III - 11住居址  
(「出入口」状施設)
- D IV - 1住居址  
(「出入口」状施設)
- c E II - 12住居址  
(「出入口」状施設)
- d E II - 13住居址  
(「出入口」状施設)
- e H II - 5住居址  
(「出入口」状施設)
- f F II - 8住居址(立石)

写真図版122 ..... 481

- a B IV - 52ピーカー形ピット  
(平面)
- b B IV - 52ピーカー形ピット  
(断面)

- c B IV - 53 ビーカー形ピット  
(平面)
  - d B IV - 53 ビーカー形ピット  
(断面)
  - e B IV - 54 ビーカー形ピット  
(平面)
  - f B IV - 54 ビーカー形ピット  
(断面)
- 写真図版123 ..... 482
- a C III - 51 フラスコ形ピット  
(平面)
  - b C III - 51 フラスコ形ピット  
(断面)
  - c C III - 52 フラスコ形ピット  
C III - 53 フラスコ形ピット  
(平面)
  - d C III - 52 フラスコ形ピット  
(断面)
  - e C III - 54 フラスコ形ピット  
C III - 55 フラスコ形ピット  
(平面)
  - f C III - 54 フラスコ形ピット  
(断面)
- 写真図版124 ..... 483
- a C III - 57 フラスコ形ピット  
(平面)
  - b C III - 57 フラスコ形ピット  
(断面)
  - c C III - 58 フラスコ形ピット

- (平面)
  - d C III - 58 フラスコ形ピット  
(断面)
  - e C III - 59 フラスコ形ピット  
(閉塞火山灰)
  - f C III - 59 フラスコ形ピット  
(断面)
- 写真図版125 ..... 484
- a C IV - 51 ビーカー形ピット  
(平面)
  - b C IV - 51 ビーカー形ピット  
(断面)
  - c C IV - 52 ビーカー形ピット  
(断面)
  - d C IV - 54 ビーカー形ピット  
(平面)
  - e C IV - 53 ビーカー形ピット  
(平面)
  - f C IV - 53 ビーカー形ピット  
(断面)
- 写真図版126 ..... 485
- a C IV - 56 ビーカー形ピット  
(断面)
  - b C IV - 58 ビーカー形ピット  
(平面)
  - c D II - 51 フラスコ形ピット  
(平面)
  - d C IV - 58 ビーカー形ピット  
(断面)

e	D II - 52 フラスコ形ピット (平面)	(断面)	
		写真図版129	488
f	D II - 53 フラスコ形ピット (平面)	a	D III - 51 フラスコ形ピット (平面)
写真図版127	486	b	D III - 51 フラスコ形ピット (断面)
a	D II - 54 フラスコ形ピット (平面)	c	D III - 53 フラスコ形ピット (断面)
b	D II - 54 フラスコ形ピット (断面)	d	D III - 54 フラスコ形ピット (断面)
c	D II - 55 フラスコ形ピット (平面)	e	D III - 55 フラスコ形ピット (平面)
d	D II - 55 フラスコ形ピット (断面)	f	D III - 57 フラスコ形ピット (断面)
e	D II - 56 フラスコ形ピット (平面)	写真図版130	489
f	D II - 58 フラスコ形ピット (平面)	a	D III - 61 フラスコ形ピット (断面)
写真図版128	487	b	D III - 64 フラスコ形ピット (平面)
a	D II - 57 フラスコ形ピット (平面)	c	D III - 62 フラスコ形ピット (平面)
b	D II - 57 フラスコ形ピット (断面)	d	D III - 62 フラスコ形ピット (断面)
C	D II - 61 フラスコ形ピット (平面)	e	D III - 63 フラスコ形ピット (平面)
d	D II - 61 フラスコ形ピット (断面)	f	D III - 63 フラスコ形ピット (断面)
e	D II - 59 フラスコ形ピット (平面)	写真図版131	490
f	D III - 52 フラスコ形ピット	a	D III - 67 フラスコ形ピット

- (平面)
  - b D III - 68 フラスコ形ピット  
(断面)
  - c D III - 70 フラスコ形ピット  
(平面)
  - d D III - 74 フラスコ形ピット  
(平面)
  - e D III - 71 フラスコ形ピット  
(平面)
  - f D III - 71 フラスコ形ピット  
(断面)
- 写真図版132 ..... 491
- a D III - 75 ビーカー形ピット  
(平面)
  - b D III - 77 ビーカー形ピット  
(断面)
  - c D III - 79 ビーカー形ピット  
(平面)
  - d D III - 82 ビーカー形ピット  
(断面)
  - e D III - 153 不整形ピット  
(平面)
  - f D IV - 51 フラスコ形ピット  
(閉塞火山灰)
- 写真図版133 ..... 492
- a D IV - 51 フラスコ形ピット  
(平面)
  - b D IV - 51 フラスコ形ピット  
(断面)

- c D IV - 52 フラスコ形ピット  
(平面)
  - d D IV - 52 フラスコ形ピット  
(断面)
  - e D IV - 55 ビーカー形ピット  
(平面)
  - f E II - 51 ビーカー形ピット  
(平面)
- 写真図版134 ..... 493
- a E II - 52 フラスコ形ピット  
(平面)
  - b E II - 53 フラスコ形ピット  
(平面)
  - c E II - 54 フラスコ形ピット  
(平面)
  - d E II - 58 フラスコ形ピット  
(平面)
  - e E II - 56 フラスコ形ピット  
(平面)
  - f E II - 56 フラスコ形ピット  
(断面)
- 写真図版135 ..... 494
- a E II - 62 フラスコ形ピット  
(平面)
  - b E II - 64 フラスコ形ピット  
(平面)
  - c E II - 66 フラスコ形ピット  
(断面)
  - d E II - 69 フラスコ形ピット

	(平面)	f	F II-62 フラスコ形ピット	
e	E III-54 フラスコ形ピット		(平面)	
	(平面)	写真図版138	.....	497
f	E III-56 フラスコ形ピット	a	F II-63 フラスコ形ピット	
	(平面)		(平面)	
写真図版136	.....	b	F II-64 フラスコ形ピット	
a	E III-66 フラスコ形ピット		(平面)	
	(平面)	c	F II-65 フラスコ形ピット	
b	E IV-53 フラスコ形ピット		(平面)	
	(平面)	d	F II-69 ビーカー形ピット	
c	E IV-54 フラスコ形ピット		(平面)	
	(平面)	e	F II-70 ビーカー形ピット	
d	E IV-59 ビーカー形ピット		(平面)	
	(平面)	f	F III-51 ビーカー形ピット	
e	F II-51 フラスコ形ピット		(平面)	
	(平面)	写真図版139	.....	498
f	F II-52 フラスコ形ピット	a	F III-51 ビーカー形ピット	
	(平面)		(断面)	
写真図版137	.....	b	F IV-52 フラスコ形ピット	
a	F II-54 フラスコ形ピット		(断面)	
	(平面)	c	G II-53 フラスコ形ピット	
b	F II-55 フラスコ形ピット		(平面)	
	(平面)	d	G II-53 フラスコ形ピット	
c	F II-56 フラスコ形ピット		(断面)	
	(平面)	e	G II-53 フラスコ形ピット	
d	F II-58 フラスコ形ピット		(土器出土状況)	
	(平面)	f	G II-54 フラスコ形ピット	
e	F II-60 フラスコ形ピット		(平面)	
	(平面)	写真図版140	.....	499

- a G II-55フラスコ形ピット  
(平面)
- b G II-55フラスコ形ピット  
(断面)
- c G II-58フラスコ形ピット  
(平面)
- d G II-61フラスコ形ピット  
(平面)
- e G II-59フラスコ形ピット  
(断面)

写真図版141 ..... 500

- a G II-62フラスコ形ピット  
(平面)
- b G II-62フラスコ形ピット  
(断面)
- c G II-63フラスコ形ピット  
(平面)
- d G II-64フラスコ形ピット  
(断面)
- e G II-65フラスコ形ピット  
(平面)
- f G II-65フラスコ形ピット  
(断面)

写真図版142 ..... 501

- a G II-66フラスコ形ピット  
(平面)
- b G II-67フラスコ形ピット  
(断面)
- c G II-68ビーカー形ピット

(断面)

- d G II-69フラスコ形ピット  
(断面)
- e G II-70ビーカー形ピット  
(平面)
- f G II-70ビーカー形ピット  
(断面)

写真図版143 ..... 502

- a G II-71ビーカー形ピット  
(平面)
- b G III-51フラスコ形ピット  
(断面)
- c H II-53フラスコ形ピット  
(平面)
- d H II-53フラスコ形ピット  
(断面)
- e H II-54フラスコ形ピット  
(平面)
- f H II-54フラスコ形ピット  
(断面)

写真図版144 ..... 503

- a H II-55フラスコ形ピット  
(平面)
- b H II-55フラスコ形ピット  
(断面)
- c H II-56フラスコ形ピット  
(平面)
- d H II-56フラスコ形ピット  
(断面)



e	H II - 51 フラスコ形ピット (平面)	(断面)	
		写真図版147	506
f	H II - 57 フラスコ形ピット (平面)	a	B III - 102 陥し穴状遺構
		b	B III - 103 陥し穴状遺構
写真図版145	504	c	B IV - 102 陥し穴状遺構
a	H II - 59 ビーカー形ピット (平面)	d	B IV - 103 陥し穴状遺構
b	H II - 59 ビーカー形ピット (断面)	e	B IV - 104 陥し穴状遺構
		f	B IV - 105 陥し穴状遺構
c	H II - 60 ビーカー形ピット (平面)	写真図版148	507
d	H II - 60 ビーカー形ピット (断面)	a	B IV - 107 陥し穴状遺構
e	H II - 61 ビーカー形ピット (平面)	b	B IV - 108 陥し穴状遺構
f	H II - 61 ビーカー形ピット (断面)	c	B IV - 109 陥し穴状遺構
		d	C III - 101 陥し穴状遺構
写真図版146	505	e	C III - 102 陥し穴状遺構
a	H II - 62 ビーカー形ピット (平面)	f	C III - 103 陥し穴状遺構
b	H II - 62 ビーカー形ピット (断面)	写真図版149	508
c	H II - 63 フラスコ形ピット (平面)	a	C III - 106 陥し穴状遺構
d	H II - 63 フラスコ形ピット (断面)	b	C III - 107 陥し穴状遺構
e	H II - 58 フラスコ形ピット (平面)	c	C III - 108 陥し穴状遺構
f	I II - 52 フラスコ形ピット	d	C III - 109 陥し穴状遺構
		e	C III - 111 陥し穴状遺構
		f	C III - 113 陥し穴状遺構
		写真図版150	509
		a	C III - 114 陥し穴状遺構
		b	C III - 115 陥し穴状遺構
		c	C III - 116 陥し穴状遺構
		d	C III - 117 陥し穴状遺構
		e	C III - 119 陥し穴状遺構
		f	C III - 120 陥し穴状遺構

	C III - 121 陥し穴状遺構		d	C IV - 125 陥し穴状遺構	
写真図版151	.....	510	e	C IV - 126 陥し穴状遺構	
a	C III - 123 陥し穴状遺構		f	C IV - 127 陥し穴状遺構	
b	C III - 124 陥し穴状遺構		写真図版155	.....	514
c	C IV - 101 陥し穴状遺構		a	C IV - 123 陥し穴状遺構	
d	C IV - 103 陥し穴状遺構		b	C IV - 124 陥し穴状遺構	
e	C IV - 104 陥し穴状遺構		c	C IV - 128 陥し穴状遺構	
f	C IV - 105 陥し穴状遺構		d	C IV - 130 陥し穴状遺構	
写真図版152	.....	511	e	D II - 101 陥し穴状遺構	
a	C IV - 106 陥し穴状遺構		f	D II - 102 陥し穴状遺構	
b	C IV - 107 陥し穴状遺構		写真図版156	.....	515
c	C IV - 108 陥し穴状遺構		a	D II - 103 陥し穴状遺構	
d	C IV - 109 陥し穴状遺構		b	D II - 105 陥し穴状遺構	
e	C IV - 110 陥し穴状遺構		c	D II - 106 陥し穴状遺構	
f	C IV - 111 陥し穴状遺構		d	D II - 107 陥し穴状遺構	
写真図版153	.....	512	e	D II - 108 陥し穴状遺構	
a	C IV - 114 陥し穴状遺構		f	D II - 111 陥し穴状遺構	
b	C IV - 117 陥し穴状遺構		写真図版157	.....	516
c	C IV - 118 陥し穴状遺構		a	D II - 112 陥し穴状遺構	
d	C IV - 119 陥し穴状遺構		b	D III - 102 陥し穴状遺構	
e	C IV - 120 陥し穴状遺構		c	D III - 103 陥し穴状遺構	
f	C IV - 121 陥し穴状遺構		d	D III - 104 陥し穴状遺構	
写真図版154	.....	513	e	D III - 105 陥し穴状遺構	
a	C IV - 125 陥し穴状遺構 (閉塞火山灰)		f	D III - 106 陥し穴状遺構	
b	C IV - 126 陥し穴状遺構 (閉塞火山灰)		写真図版158	.....	517
c	C IV - 127 陥し穴状遺構 (閉塞火山灰)		a	D III - 108 陥し穴状遺構	
			b	D III - 109 陥し穴状遺構	
			c	D III - 111 陥し穴状遺構	
			d	D III - 112 陥し穴状遺構	

	e	D III - 113	陥し穴状遺構				
	f	D III - 114	陥し穴状遺構				
写真図版159				518			
	a	D III - 117	陥し穴状遺構				
	b	D III - 119	陥し穴状遺構				
	c	D IV - 101	陥し穴状遺構				
	d	D IV - 102	陥し穴状遺構				
	e	D IV - 105	陥し穴状遺構				
	f	D IV - 106	陥し穴状遺構				
写真図版160				519			
	a	D IV - 107	陥し穴状遺構				
	b	D IV - 108	陥し穴状遺構				
	c	D IV - 109	陥し穴状遺構				
	d	D IV - 111	陥し穴状遺構				
	e	E II - 101	陥し穴状遺構				
	f	E II - 104	陥し穴状遺構				
写真図版161				520			
	a	E II - 105	陥し穴状遺構				
	b	E II - 108	陥し穴状遺構				
	c	E II - 109	陥し穴状遺構				
	d	E III - 101	陥し穴状遺構				
	e	E III - 102	陥し穴状遺構				
	f	E III - 105	陥し穴状遺構				
写真図版162				521			
	a	E III - 106	陥し穴状遺構				
	b	E III - 108	陥し穴状遺構				
	c	E III - 109	陥し穴状遺構				
	d	E III - 110	陥し穴状遺構				
	e	E IV - 101	陥し穴状遺構				
	f	E IV - 102	陥し穴状遺構				
写真図版163				522			
	a	E IV - 103	陥し穴状遺構				
	b	F II - 102	陥し穴状遺構				
	c	F II - 103	陥し穴状遺構				
	d	F II - 104	陥し穴状遺構				
	e	F II - 106	陥し穴状遺構				
	f	F II - 109	陥し穴状遺構				
写真図版164				523			
	a	F II - 110	陥し穴状遺構				
	b	F III - 101	陥し穴状遺構				
	c	F III - 103	陥し穴状遺構				
	d	F III - 105	陥し穴状遺構				
	e	F IV - 101	陥し穴状遺構				
	f	F IV - 103	陥し穴状遺構				
写真図版165				524			
	a	F IV - 104	陥し穴状遺構				
	b	G II - 102	陥し穴状遺構 (閉塞火山灰)				
	c	G II - 102	陥し穴状遺構				
	d	G II - 103	陥し穴状遺構				
	e	G II - 107	陥し穴状遺構				
	f	G III - 101	陥し穴状遺構				
写真図版166				525			
	a	G III - 102	陥し穴状遺構				
	b	G III - 103	陥し穴状遺構				
	c	G III - 104	陥し穴状遺構				
	d	G III - 105	陥し穴状遺構				
	e	G IV - 101	陥し穴状遺構				

- f H II - 101 陥し穴状遺構  
写真図版167 ..... 526
- a C IV - 127 陥し穴状遺構 (断面)  
b C IV - 129 陥し穴状遺構 (断面)  
c D IV - 107 陥し穴状遺構 (断面)  
d F II - 104 陥し穴状遺構 (断面)  
e F III - 105 陥し穴状遺構 (断面)  
f G II - 104 陥し穴状遺構 (断面)  
写真図版168 ..... 527
- a G III - 101 陥し穴状遺構 (断面)  
b G III - 102 陥し穴状遺構 (断面)  
c G III - 104 陥し穴状遺構 (断面)  
d G IV - 102 陥し穴状遺構 (断面)  
e G IV - 103 陥し穴状遺構 (断面)  
f H II - 101 陥し穴状遺構 (断面)  
写真図版169 ..... 528
- a D II - 3 住居址  
(「剥片貯蔵」)  
b D III - 7 住居址  
(「剥片貯蔵」)  
c E II - 2 住居址  
(「剥片貯蔵」)  
d H II - 3 住居址  
(「剥片貯蔵」)  
e G II - 2 住居址  
(「剥片貯蔵」)  
f G II - 2 住居址  
(「剥片貯蔵」)  
写真図版170 ..... 529
- a C III - 10 住居址 (注口土器)  
b C III - 10 住居址 (浅皿)  
c C III - 11 住居址  
(床面出土土器)  
d D II - 110 陥し穴状遺構  
(土器注口部)  
e D III - 10 住居址 (注口土器)  
f D II - 64 フラスコ形ピット  
(出土土器)  
写真図版171 ..... 530
- a E II - 7 住居址  
(土器出土状況)  
b E II - 53 フラスコ形ピット  
(出土土器)  
c E II - 63 フラスコ形ピット  
(出土土器)  
d E III - 7 住居址  
(土器出土状況)  
e G II - 2 住居址 (岩版)  
f G III - 53 フラスコ形ピット  
(土器出土状況)  
写真図版172 ..... 531
- a H II - 10 住居址 (双口土器)  
b F II - 4 住居址 (石皿と台石)  
c H II - 10 住居址  
(石皿と磨製石斧)  
d C III - 7 住居址 (ペンダント)  
e I II - 5 住居址 (有孔円礫)  
f I II - 8 住居址

(黒曜石フレイク)

写真図版173 ..... 532

- a E III-67 フラスコ形ピット  
(筒状石製品出土状況)
- b H II h<sub>2</sub> グリッド土層(土偶)
- c G II-201 配石遺構  
(小形磨製石斧)
- d G III-51 フラスコ形ピット  
(丹塗り土器)
- e D IV-51 フラスコ形ピット  
(水晶)
- f G II-5 住居址北側ピット  
(ドンダリ出土状況)

写真図版174 ..... 533

- a G II-201 配石遺構
- b G II-201 配石遺構(部分)

写真図版175 ..... 534

- a G II-201 配石遺構(部分)
- b G II-201 配石遺構(部分)

写真図版176 ..... 535

- a G II-202 配石遺構
- b H II-201 配石遺構

本 文

# I. 調査に至る経過

昭和49年日本道路公団が東北縦貫自動車道建設のため紫波郡都南村湯沢森を土取場として設定し、岩手県教育委員会に対し、遺跡の有無の確認を求めてきた。

この要請に基づいて岩手県教育委員会は、湯沢森一帯の分布調査を行なった。その結果、湯沢森東側において良好な遺跡を確認した。日本道路公団は遺跡を除外して採土することとした。

その後この湯沢森跡地利用について、日本道路公団と岩手県において話し合いがなされ、盛岡市近郊という事もあり、岩手県住宅供給公社によって、湯沢森跡地とその西側原野を含めて住宅団地を造成することになった。

これに伴ない昭和49年8月岩手県土木部建築課は、住宅団地建設計画を提示し、遺跡の確認を県教育委員会に求めてきた。この計画によると、用地54.1ha、住宅300戸、宅地580区画、その他公園、保育所等で、51年4月着工となっている。県教育委員会は、分布調査を行なったが、湯沢森東側の湯沢森遺跡と事業区域北西部において遺跡が確認された。しかし他の区域は小沢によって区画された良好な緩斜面は認められたが、原野のため確認する所までいかなかった。

県教育委員会においては51年4月県土木部建築課と協議し、先の遺跡については、事業区域内に入れ、緑地帯等で保存することになり、原野については立木伐採後第二回の分布調査をした結果が遺跡であることが判明した。

分布調査は立木の伐採終了を待って6月に行なった。この分布調査によって、段丘斜面一帯が遺跡であることが判明した。

51年7月に、段丘斜面の遺跡取扱いについて、県土木部建築課、県住宅供給公社、県教育委員会文化課の三者会議が行われた。その結果9月より範囲確認調査を文化課が行なう。費用については県住宅供給公社が負担する。本調査については、確認調査終了後に行なうことになった。しかし当時県教育委員会文化課は、東北縦貫自動車道、東北新幹線等の調査を抱えており、調査員のスケジュール調整が出来得ず結果的に調整を延期せざるを得なかった。

昭和52年4月1日財団法人岩手県埋蔵文化財センターの発足により、湯沢遺跡調査も当(財)岩手県埋蔵文化財センターが行なうことになり、4月当初に遺跡の再確認を行なった。この時点では、立木の搬出路がつくられ、表土下の状況も散見できた。表土直下が礫となる部分や、急傾斜面等を遺跡範囲から除外可能であるとの結論に達し、約26,000m<sup>2</sup>を遺跡範囲と推定した。これを基に、県教育委員会文化課・県住宅供給公社・県埋蔵文化財センターの間で協議を積み重ね昭和52年4月25日から23日間の予定で範囲確認調査を行なうこととした。

確認調査は26,000m<sup>2</sup>全域に30mメッシュを組み、そのメッシュに従って、バックホウを用い

## I. 調査に至る経過

てトレンチを入れた。表土を除外すると竪穴住居址等の遺構が次々と検出され、良好な遺跡であることが予想された。確認調査によって、遺跡面積12,758m<sup>2</sup>、竪穴住居址70棟余、ピット類30基余が確認された。30mメッシュでの検出であるから全面調査では、倍増することが予想された。

本調査打ち合せは、5月中旬より県教育委員会文化課、県住宅供給公社、県埋蔵文化財センターの間で行なわれ、調査期間、経費についての調整が難航したものの、昭和51年とのか、わりのため、工事計画にあわせざるを得なかった。本調査はかなり困難を予想したが52年8月31日までとし第二次委託を受けた。

この短期間で調査を終了させるためにはどのような方法があるか、調査担当者会議を持ち、調査方法、調査行程等協議を重ね、後述する方法を用いる事とした。それにしても、人員の確保が最大の課題となり、地元協力員の獲得のため都南村教育委員会に多大な努力をしていただくと共に県教育委員文化課道路班の協力によって盛岡市からも協力員の参加を見た。

本調査は、全域に3mグリッドをかけ、全面調査を行なった。協力員100名以上を連日投入して粗掘り、遺構検出、精査実測と並行して西側より順次東側へと進めたが、粗掘りが進むにつれてその規模は拡大し、7月前半において10,000m<sup>2</sup>を加えると竪穴住居址100棟余、ピット類ほぼ同数を数えた。末検出面積5,775m<sup>2</sup>を加えると竪穴住居址150棟、ピット類300基が想定され、残余期間での完了が困難である事が明白となった。7月11日文化課に対して協議を申し入れ、7月18日現地に於いて協議し、1カ月以上の期間延長と経費の増額を要望した。その後、教育委員会、県住宅供給公社、県土木部建築課等の現地視察が相次ぎ、遺跡の重要性、調査期間延期の必要性は理解頂いた。工事発注とのか、わりや、予算問題から協議は難航したが、最終的には、県住宅供給公社の決断によって、

1. 調査期間の1カ月延期、調査費用必要最低限度増額
2. 調査完了区域10,000m<sup>2</sup>については、8月31日をもって引き渡しを行う
3. 調査の安全を図る

で了解に達した。

これによって埋蔵文化財センターは、夏期休暇中の大学生、高校生も動員し、240名の協力員体制をとり、休日返上で鋭意調査に当り、9月30日終了した。（調査課長・瀬川司男）

## II. 調査方法と調査組織

調査に至るまでの多くの経緯や、それにかかわる調査期間の限定性などの対外的な諸問題は



すべて前項の「調査に至る経過」の中に譲り、ここでは、湯沢遺跡の発掘調査で展開されたいくつかの方法について具体的に述べることにする。これは一つには、われわれ調査班の内部において、学術調査・緊急調査という形の便宜的区分にとらわれず、調査中に展開された方法はガラス張りにして白日の下に晒すのがよい、という共通認識が根底に横たわっているためである。殊に、実質約5ヵ月間ほどで、竪穴住居址160棟・フラスコ形ピット類187基・陥し穴状遺構166基、その他の遺構を精査しおえた湯沢遺跡では、その調査方法が問題とされるであろう。これも、ここで調査方法を具体的に記載する理由の一つとしてある。

ところで、今までに刊行された多くの報告書では、少数の例外（事例・註省略）を除けば、調査方法・調査組織を具体的に記載しているものは皆無に等しいという実情がある。今、手許にある幾冊かの報告書をひろげてみても、調査方法の項目には座標軸の設定が簡単に述べられているにすぎず、調査組織にしても、団長名以下、調査員らの名前が羅列されているにすぎない、という具合である。もちろん、これは一般的な例を述べたまでであるが、従来の報告書の中において、調査方法・調査組織の占める位置が軽視されがちな傾向にあることは否定しえない事実である。特に調査方法の項目に至っては、あたかも「測量屋」が発掘調査を実施している感すらある。

しかしながら現実的には、各地の発掘担当者はフィールドにおいて、遺跡の時代・性格・規模・立地条件などを考慮した上で、それぞれの要素に対応する形の多種多様な方法を行使するであろう。それらの多種多様な方法の展開は、たとえば一律に単純化された座標軸の設定や実測方法という骨組みだけの調査方法の枠内に納まりきるものではないはずである。むしろそれは、座標軸の設定や実測方法を包摂するマトリックスのようなものとして、動的に機能するであろう。調査方法として一般的に記述されている座標軸の設定や実測方法などは、フィールドにおいて本格的な方法が展開される準備段階を用意するものではあれ、調査方法そのものではない。

紙数の関係上やや端折るが、やり直しが利かず、しかもやり直しが利かないまま不確定要素の介入する余地の大きい考古学の発掘調査では、情報収集に直結する調査方法の占める役割は予想以上に大きなものがあるはずである。フィールド・ワークの成果—というよりも遺跡の総体的把握（情報の質・量）—を左右する因子は、各発掘担当者の経験・知識・発想力などのちがいがよって生じる柔軟性に富んだ、方法の動的な側面（マトリックス部分）の中に存在しているであろう。ここで、方法の明示はフィールド・ワーカーの一つの責務であるという筆者らの考えからすれば、報告書の中では、先ず各人がフィールドで展開した方法の動的な側面を述べる必要があると思われる。それをお互いが批判的に検討して調査方法の共通基盤を整備してゆくことによって、「野外歴史科学」である考古学のフィールド・ワークは、漸次、教

科書的な貧弱さを乗り越えることができるといえるのではなからうか。

常日頃、考古学におけるフィールド・ワークの方法について考えを巡らし、また実践していたにもかかわらず、主に調査員の不足と時間的な制約から、湯沢遺跡の調査では十分に各種の方法を展開することはできなかった。この点で、調査の中にかくばくかの“手抜き”部分があったことは否定しえない。情報収集の面では、Field Card を多用して文章による記録作成に最大の重点を置いた。のちに出版される『遺物編』の中の各種の考察は、フィールド・ワークの中において、観察－分析－解釈という一連の作業過程から発想されたものである。

以下、調査方法および調査組織の運営面について項目別に記述する。( )内はその責任者名である。

### (1) 座標軸の設定 (三浦謙一)

- 岩手県住宅供給公社の測量杭の一つを利用して、それを座標軸の原点とした。
- 地区設定にあたっては、30mの大区画を設定し、それらに対して北から順にA・B・C・D・E・F・G・H・I・Jのアルファベットを付し、同様に東西方向には西側からI・II・III・IVとローマ数字をふって、それらの組み合わせで区画名とした。例えば一区画は、B III区・E II区・F IV区などと呼称されることになる。
- これらの中で、実際に調査がなされた区画は、B III・B IV・C II・C III・C IV・D II・D III・D IV・E II・E III・E IV・F II・F III・F IV・G II・G III・G IV・H II・H III・I II・I III・J IIの各区である。南北方向のI列は大半が緑地帯にかかるため、ほんの僅かを除くと調査は行なわれていない。
- 30mの区画のそれぞれを、南北方向および東西方向に10等分し、3 m×3 mのグリッドを設定してこれを調査の基本単位とした。これらのグリッドには、北からa～jまでのアルファベットを付し、西からは0～9までの番号を与えた。これによってグリッド名は、例えばE II区の場合、E II a<sub>3</sub>グリッド・E II f<sub>5</sub>グリッドなどと呼称されることになる。グリッド北西隅の測量杭を呼ぶにもこの記号を使用した。

### (2) 調査組織とその運営 (金沢光孝)

- 調査にあたっては、作業員を粗掘り班・精査班・写真班・実測班の4班に編成し、各班に対しては最低1名の調査員が責任者となった。
- 粗掘り班は一般的な粗掘りのほかに抜根作業にも従事し、精査班の前を行って遺構検出に努めた。
- 精査班は住居址は四分法、ピット類は二分法に則って遺構の第一次精査に従事し、断面図の作成段階を準備した。ピット類については最終精査まで担当した。
- 写真班は遺構－主に住居址－の第二次精査および最終精査に携わり、写真撮影・図面作

第1表 調査組織とその運営

	作業内容	実測内容	写真撮影	Field Card
粗掘り (粗掘り班)	抜根 粗掘り 遺構検出	状況に応じて図化	状況に応じて撮影	第1次カード
第1次精査 (精査班)	住居四分ピット二分	土層断面図	土層断面撮影	第2次カード
第2次精査 (写真班)	壁、床、柱穴 の検出	平面図作成	全景撮影 個別撮影	第3次カード
最終的 個別精査	炬の半割など	炬の断面図作成	炬断面撮影	第4次カード
ダメ押し	ダメ押し	状況に応じて図化	状況に応じて撮影	状況に応じて文章化

\* **ABCD** は調査員を示す。矢印はその動向

成の段階を準備した。このほか、個別的な精査作業にも従事した。

- 実測班は作業員の中で、主に20代～30代の男女で構成し、夏季休暇の際には高校生・大学生がこの班に加った。調査が最盛期の7月・8月には平日で140人～160人が調査に従事したが、班構成の上からは、実測班と、粗掘り班+精査班+写真班の比率は、25～34%：75～66%の線を維持した。
  - 調査補助員の考古学専攻の学生3名は、調査員と各班の連絡係を努めるとともに、遺物の取り上げや記録の作成に従事した。
  - 調査員のなすべき役割について何度も討議を重ねた上で、調査員が一つの遺構にへばりつく形で精査を行ったり、写真撮影や実測に従事すれば、調査の運営にすぐさま支障をきたすことは眼に見えているという実情から、調査員の仕事は主に各班への作業の指示およびフィールドからの情報収集に重点を置いた。
  - 方法の固定化を防ぐことを目的として、調査員は交代で、粗掘り班+精査班、精査班+写真班、写真班+実測班の統括にあたった。交代は複数の大区画(30m)単位で行なった。調査員の間では仕事の内容について、常に緊密な連絡を保っていたため、この交代によって調査に支障をきたすことはなかった。
  - 調査責任者である金沢は、調査の全体の動向を掌握するとともに、対外的な交渉や、作業員間の若干のトラブルの調整に努めた。
- (3) 精査法(高橋信雄・高橋文夫・三浦謙一)
- 遺構以外から出土した遺物は、層位を記入した上で、グリッド単位で取りあげた。
  - 検出された遺構には種別を問わずに大区画単位の中で通し番号の名称を付し、住居址は四分法、大形ピット類は二分法で精査を行なった。またこの遺構名は、のちの整理作業の段階で種別に編成しなおし、これも大区画単位で、住居址は1～、大形ピット類は51～、陥し穴状遺構は101～、その他のピット類は151～、配石遺構は201～、と一連の番号をつけて整理した。
  - 住居址の精査にあたっては、原則として移植ゴテおよび竹ベラを使用した。しかし、大形ピット類や陥し穴状遺構では、多くスコップ類を用いた。調査の初期には、人間がひとり入りこむにも狭い陥し穴状遺構ではかなりの掘りすぎがみられたが、のちに発掘器具を改良したことで、掘りすぎの問題は解決された。
  - 精査では、遺構間の切り合いとその新旧関係の把握に留意した。
  - 遺構数および日程との関係から、精査は主に住居址を対象に重点的に行なった。したがって、少数の例外を除けば、住居址の記載については不備な面が少い。これに反して、大形ピット類や陥し穴状遺構ではかなりの不備が目立つ。

- 切り合い関係を考慮して、住居址は四分ないしはそれ以上に分割して精査を行なったが、その際、時間的な制約から、埋土中の出土遺物は一括資料として取り扱かわざるを得なかった。また、土層断面の観察で埋土が単層と認められたものは断面図の作成を省略し、Field Card に性状を記載した上で第二次精査や最終的個別精査に進んだ。それらの実際については本文の中で記述している。
- これも主に時間的な制約から、住居址内の柱穴やその他のピットの埋土の吟味はできなかった。したがって、その断面図も作成していない。
- 住居址内の炉は少数の例外を除いてすべて半割し、その断面観察や図面の作成を行なった。しかし、図面や写真でいちじるしく不備なものは、図版には組まなかった。
- 実測班は精査の各段階において必要図面の作成を行なった。写真班についても同様である。また調査員は、Field Card を使用して情報の収集に努めた。

#### (4) 実測法（三浦謙一）

- 遺構群が検出された地区のすべてにわたって 3 m 単位の遣り方を設定し、それに基いて遣り方測量を行なった。縮尺はすべての遺構について 20分の 1 を基本としたが、炉などは状況に応じて 10分の 1 とした。また、住居址・大形ピット類・陥し穴状遺構の一部は平板によって実測をした。同時に、50cm 前後のインターヴァルでレベルの計測も行なった。しかし、これも状況に応じて、より細かい間隔での計測も行なっている。
- 実測は極言すれば単に点と点を結ぶ作業であり、短期間の訓練で誰にもできるようになる。したがって湯沢遺跡では、一般作業員・大学生・高校生がこの仕事に従事した。土層註記についても同様である。住居址については図面の不備は少ないが、大形ピット類や陥し穴状遺構ではそれが多い。これは主に、調査員の指示不足と、毎日仕上がる膨大な図面をいちいちチェックできなかったことに原因が求められる。それ故に、図面の不備の責任はすべて調査員にある。それらの実際についても本文の中に記述した。
- 平面図の作成にあたっては、木根などによる小さな攪乱ピットは無視した。
- 調査区内のⅢ・Ⅳ層上面の 200分の 1 縮尺の地形測量は齋藤邦雄らが担当した。

#### (5) 写真撮影（高橋丈夫）

- 写真撮影にあたっては 4 × 5 inch 判のカメラは使用せず、その機動性を考慮して 6 × 7 cm 判のカメラをメイン・カメラとし、それに 2 台の 35 mm 判カメラを加えて 1 セットとした。これを 2 セット用意し、2 人のカメラマン（藤原 彰・小泉修栄）が撮影に従事した。
- 被写体の量が膨大なものであるために、整理時の混乱を防ぐため、撮影にあたっては当埋文センターで作成した「撮影カード」を使用した。しかし、若干の混乱がみられた部

分もある。これらは写真図版からは割愛した。

#### (6) 文章記録 (高橋文夫)

- 湯沢遺跡の調査では、図面・写真の作成とともに、調査過程で各種の情報を得る文章による記録にも重点を置いた。
- 記録にあたっては、当埋文センターで作成した Field Card を多用した。Field Card の使用に際しては、原則として1カード1項目方式とし、フィールドではできるかぎりの情報を得て、それに記載することを心がけた。記載内容は遺構だけに限定せず、あらゆる面で気がついたことは盛りこむようにした。
- 現場第一主義をもとに、フィールドでの生情報はその場で Field Card に記載した。宿舍やプレハブで「情報」を思い出しながら、「調査日誌」風に記載する方法は一切採らなかった。
- また、発掘調査中に得られた各種の情報は公の性質をもつものであるという認識から、ともすれば個人の所有物となりがちな Field Note は使用しなかった。これは、今までの調査の中で、情報収集の手段として Field Note を使用しているため、調査班の解体と同時に Note 自体も散逸し、結局、発掘調査で得られた情報としては図面や写真しか残らないという多くの事例を、われわれが知っているためである。図面や写真だけからできあがる報告書がどのようなものであるか、想像に難くない。このことはもちろん、Field Note 自体が悪いといっているのではない。問題とされるべきは、情報の収集・管理面というものであろう。
- Field Card は書くつどに提出されるので、各人の観察事項や発想を検討・評価することができた。

#### (7) その他

- 調査中は、調査地区内やその周辺の地形・地質の検討を行なった。殊に、調査地区の層序区分にあたっては、何度も綿密な検討を重ねた。これらの成果は、次項に収録されている。
- 花粉分析やそのほかの理化学的な分析は行っていない。
- C<sup>14</sup>年代の測定成果は、『遺物編』の中に収録される予定である。

#### (8) まとめ

- 以上、項目別に湯沢遺跡で展開された方法について触れてきた。中には紙面の都合上、割愛せざるを得ない部分もあったが、基本的な点は一応述べてきたつもりである。
- これらを総括すると、個々の技術の行使や図化に際しては多くの不備が認められるが、総体的な情報収集の面からみれば、ある程度の成果をあげることができたのではないかと

と思われる。不備を生じた最大の原因は、検出された遺構数に対して調査員の絶対数が不足していたことにあると考えられる。これが細かい点での指示不足を惹起し、一部で作業内容の低下につながった面があると言える。

- 調査の初期段階では「原位置」論的な方法も試みたが、これも安孫子昭二（1974）があげたと同じような理由から、のちには断念した。
- この稿を半ばまで書き進めている時に、坪井清足（1977）の2つの文章に接した。同じ内容のものであるが、坪井はこれらの中で「遺跡」学の理論の未発達を指摘している。筆者もこの意見には賛成である。
- 今、この未発達の原因に深くかかわるものとして、少くとも今までの調査の多くでは、図面の作成や写真撮影の仕事に調査員らの主力が傾けられ、それに多大な時間を割かれることで、フィールドからの情報収集のかなりの面がなおざりにされる傾向にあった点を指摘することができよう。極端な場合には、遺跡から得られた情報は、図面・写真・土層註記だけという調査例もあろう。しかし、フィールドが内包している情報は、このように単純化される性質のものとは思えない。個々の技術レベルではいかに精密な調査方法がとられていようとも、遺跡の理解に深くかかわるマトリックス部分の情報の収集が欠落していれば、その調査は単に、“遺跡を掘って”、“図面と写真をとった”というだけのものとなろう。上記のものに、かりに宿舎で書く「調査日誌」が加算されたところで状況にそう大きな変化はない。
- カッコつきではあるが、坪井の言う「遺跡」学という言葉の借りれば、「遺跡」学を確立するための基本は、まず現場に密着した形の徹底した「取材」の中にあるものと思われる。フィールドで、できるかぎりの「取材」（観察と記録）をし、分析をし、解釈をするという一連の作業過程の中から、「遺跡」学の理論は、個々の方法とともに漸次確立されてゆくであろう。

#### 参考引用文献

- (1) 安孫子昭二他（1974）貫井南一小金井市貫井南遺跡調査一
- (2) 坪井清足（1977）遺跡学への誘い、日本原始美術大系 6 壁画石造物 講談社
- (3) 坪井清足（1977）日本考古学百年の課題、考古学研究第24巻第3・4号（高橋文夫）

## III. 地形・地質

### (1) 地形

E・S・モースは『日本その日その日』(1)の中で、簡単な記述ながら、盛岡から仙台に至る北上川の舟旅について書き残している。1878年、北海道で生物学的な調査を終えたE・S・モースは、青森から4台の人力車を連ねて東京への帰還の旅に着き、盛岡には短時間止っただけで、暑い夏の日、鮎の友釣りをする漁夫の姿を眺めながら、仙台に至るまで125マイルの距離を下る北上川の舟旅(直接仙台までは行かなかった)をすることになる。記述の中に、「河上の景色は美しかった。一日中南部富士が見えた。(中略)飲料水としては河から汲むものばかりで、生ぬるくて非常にきたなかった」(石川欣一訳)とある。東北本線開通以前のことである。

主流部の延長249km、流域面積10,250km<sup>2</sup>(2)におよぶこの北上川は、岩手県の県北部に源を發し、ほぼ南北に岩手県を縦断して宮城県北東部の石巻湾に注いでいる。北上川中流域(盛岡市～前沢町)沿岸地帯西方には、奥羽山系から流出する支流が形成した、大小の段丘化した扇状地群の發達がみられる。これらのうちのいくつかは、主として地形学的な方面から何人かの研究者によって個別的に研究がなされているが、全流域を対象とした第四系および地形の総合的な研究は中川久夫ら(3)(4)の業績によるところが大きい。中川らは、北上川中流沿岸の段丘群を、地形および構成層とそれを被覆する火山灰層の検討をとおして、古期から順に、西根段丘・村崎野段丘・金ヶ崎段丘の3群に分類した。北上川中流域北部では、これらに相当するものとして、石鳥谷段丘・二枚橋段丘・都南段丘が設定されている。

筆者は湯沢遺跡の位置する周辺の地形環境を知るために、空中写真の判読ならびに現地調査をもとに、盛岡市から紫波町日詰に至るまでの北上川中流域北部の地域を対象に地形面の細分化を試みた(図版2)。しかし時間的な制約から、現地調査は僅かな範囲で実施できたにすぎず、この細分は主に空中写真の判読と地形図の検討を基礎としてなされたものである。基図には中川らの北上川中流沿岸段丘区分図を用いた。また未発表資料ではあるが、1963年当時よりも詳細な分類図が佐藤二郎により作成されており、筆者は多くこちらを参考(5)にした。図版1には岩手県内における当地域の位置を示している。図版3には遺跡の位置を示した。

当地域内において、扇状地群が分布する西側には、箱ヶ森・赤林山・南昌山・東根山などの、第三系からなる標高850m前後またはそれ以上の山地がある。断層線崖とみられる東縁は複雑に入り組んで、その急崖は三角末端面としてよく保存されている。西側山地は主に安山岩・凝灰岩・チャートなどで構成されているが、継層線崖の東側に残丘状に取り残された山地はまれ



に安山岩の巨岩塊を含む集塊岩などからなる。西側山地を刻む谷は急峻なV字谷を形成し、それぞれの谷の集水域の大小によって、山麓部から下流地帯にかけて、規模の異なる多数の崖錐・沖積錐・扇状地群の発達が見られる。これらの中でも、もっとも規模の大きいものが、岩崎川・滝名川の形成になる扇状地群(6)である。

滝名川扇状地は上流部まで水田として利用されている部分が多いが、岩崎川扇状地では上流部の土地利用は主にリンゴなどの果樹園や植栽林によって占められている。これは両扇状地の表層地質の差を反映しているとともに、歴史的には開拓の遅速によるものとみられる。これらの主面よりも古期の開析扇状地は主として牧場・果樹園としての利用が盛んである。山地の植生は落葉広葉樹林やアカマツ林が主体をなすが、カラマツ・スギなどの植栽林もまた多い。

これらの地域は上述のように、中川らおよび佐藤によりかなり詳しく段丘群の分類がなされているので、筆者は後背山地麓部に沿う範囲に細分化の主点を置いた。この部分に湯沢遺跡が立地しているためである。当地域の洪積段丘は、全体的には5群に細分することが可能である。以下、それらについて概略的に記述する。

H面：中川らの石鳥谷段丘に相当する。紫波町日詰ふきんおよび志和南西部に主な分布がみられるほか、矢幅町集団開墾地周辺に残片的に発達している。面はかなり開析が進み、残丘状に取り残された日詰ふきんでは、頂面はなだらかな起伏面となっている。志和南西部に分布するものは小規模な断層によって切られている。H面の堆積物は、湯沢遺跡および集団開墾地南側での露頭観察によれば、上部に砂または砂礫質粘土を伴う礫層によって構成されている。上部は赤色風化を受け、全体にクサリ礫が多くみられる。構成層は1m内外またはそれ以上の厚さの黄橙色～黄褐色火山灰層により被覆されている。

M面：中川らの二枚橋段丘に相当する。紫波町日詰ふきんでH面に付着する形で分布するほか、盛岡市西方でやや広範な発達が見られる。後背山地麓部では残片的に発達し、L<sub>2</sub>面およびL<sub>3</sub>面相当の礫層に不整合に被覆されている。湯沢遺跡が載るのはこの面である。湯沢遺跡やその西北部での露頭観察によれば、構成層は主として砂礫分からなり、200cm内外の黄橙色～黄褐色火山灰層に覆われている。

L<sub>1</sub>面：中川らの花巻段丘に相当する。L<sub>2</sub>面とともに、当地域においてはもっとも広範に分布している。面はかなり新鮮で、岩崎川・滝名川の扇状地面としてよく原面が保存されている。その他にも小支流が形成したものも含まれて、全体的に複合扇状地状を呈している。崖線は比較的明瞭であるが、矢幅町北矢幅ふきんなどでは、下位のL<sub>2</sub>面との境界が不明確なものとなっている。数地点での露頭観察によれば、構成層は新鮮な礫からなり、上部には砂および粘土を伴う。この面上、またこれ以下の面には、M面以上を被覆する黄橙色火山灰層はみられない。

L<sub>2</sub>面：中川らの都南段丘に相当する。雫石川・北上川の流路に沿って主な分布がみられるほ

か、L<sub>1</sub>面の外縁部に発達する。上流部や雫石川の旧河道に沿うところでは、A面との境界が不明瞭となる部分が多い。この面は盛岡市本宮ふきんで明瞭な段丘崖をもって下位のL<sub>3</sub>面とに、細分される。太田方八丁をはじめとする数地点での露頭観察によれば、構成層は新鮮な礫を主とし、上部には砂・シルトおよび粘土を伴う。後背山地に沿う山麓扇状地面は中川らによってL<sub>2</sub>面に相当するものと考えられており、飯岡野段丘と命名されている。L<sub>1</sub>面との境界は、色調の差や傾斜変換線から読み取ることができる。

L<sub>3</sub>面：L<sub>2</sub>面の外縁部に沿って盛岡市中野ふきんで模式的に発達し、矢幅町東徳田ふきんにもこの面に相当するとみられる部分がある。構成層は新鮮な礫を主とし、上部には砂・シルト・粘土などを伴う。湯沢遺跡の載るM面を侵食して発達する礫層は、この面に相当するものと考えられる。

A面：河岸低地の自然堤防・ポイントバー・旧河道・後背湿地などを一括した。L<sub>2</sub>面・L<sub>3</sub>面を取りまく部分では、多数の旧河道の変遷がみられる。

以上、中川らおよび佐藤の基図をもとに筆者の分析を加味しながら、当地域の地形環境を概略的に述べた。これによって、遺跡の立地する地形面の位置づけはほぼ明らかになったと思われる。次に、遺跡を中心とする範囲の地形的特徴を述べることにする。その際、基図には八洲測量株式会社が作成した2,500分の1地形図を用いた(図版4 a)。また、表層地質の分類にあたっては現地調査資料を基本とし、そのほかに、日本技術開発株式会社が住宅団地開発予定地域内で行った数地点の試錐調査による成果(7)を参考にした(図版4 b)。

遺跡の西方には標高855 mの赤林山があって、山体を刻む急峻な谷からは、いくつかの小規模な扇状地形が発達している。扇状地群の内部には、湯沢森(標高197 m)などの残丘状に取り残された山地がある。これらの扇状地はすべて段丘化しており、構成層の状態やそれらを被覆する黄橙色～黄褐色火山灰層の有無、また面の交差関係・開析状態などから5群のものに細分することができる。

F<sub>1</sub>面：遺跡の載る地形面である。標高370 mふきんに扇頂をもち、200 mふきんまで沖積錐状に伸びている。上部が赤色風化を受けたH面の日詰礫層を不整合に覆う砂礫層・砂礫質粘土層や、その上位に載る黄橙色～黄褐色火山灰層の存在から、上述のM面に対比される。中央部での面の平均傾斜は6°10'であるが、発掘調査区ではやや緩傾斜となる。末端部は開析され、なだらかな起伏面となっている。北側の開析谷と遺構群密集区との比高は10～17 m前後である。この面を南北に横切る西部開拓道路の西側は、現在牧場となっている。

F<sub>2</sub>面：この面もM面に対比されると考えられるが、F<sub>3</sub>面の堆積物によって大部分が埋めこまれているために、その詳細は不明である。3 m前後の崖をもってF<sub>1</sub>面の末端部に付着する形で分布するほか、小規模ながら、F<sub>3</sub>面の扇頂よりに残片的にみられる。黄橙色火山灰層により被

覆されている。

F<sub>3</sub>面：L<sub>1</sub>面に対比され、図版4 b内では、湯沢森東方に岩崎川扇状地の側扇とみられる部分の一部分が分布しているにすぎない。

F<sub>4</sub>面：L<sub>2</sub>面に対比され、F<sub>1</sub>面の南側に分布するものは面の平均傾斜が5° 10'である。この面の扇頂はF<sub>1</sub>面とほぼ同位置かやや下位にあると推定される。北側の面は4° 50'の平均傾斜をもつ。湯沢遺跡南西部での露頭観察によれば、構成層は砂礫分を主とし、シルトおよびシルト質粘土が挟在する。

F<sub>5</sub>面：L<sub>3</sub>面に対比されるものと考えられる。野原牧場の西南部、標高で240 mふきんに扇頂をもつものとみられ、F<sub>1</sub>面とF<sub>4</sub>面の間にあって、いわゆる押し出し地形的な小扇状地面を形成している。面の平均傾斜は3° 30'で、F<sub>1</sub>面・F<sub>4</sub>面に比較して緩傾斜である。構成層は新鮮な砂礫分からなり、上部にはシルト・粘土を伴う部分もみられる。全体に地下水位が高い。F<sub>1</sub>面よりの標高196 mふきんには湧水地点がある。この面の形成時までは、後背山地から多量の岩屑の供給があったと考えられる。

A面：沖積面で、開析谷に沿って小規模に発達する。

遺跡を中心とする範囲の地形面区分の概要は上述のとおりである。この地域内の分布調査や試掘および工事中の立ち合いでみるかぎり、遺構・遺物の分布が認められるのは湯沢遺跡の載るF<sub>1</sub>面の末端部に限定され、そのほかの面には分布がみられない。ただし、F<sub>1</sub>面に付着するF<sub>2</sub>面上には僅かながら遺物の散布がみられたが、その地区は実際に調査がなされていないために、F<sub>2</sub>面上についての詳細は不明である。したがって、ここではF<sub>2</sub>面上にも何らかの遺構が存在していた可能性があると考えておく。地元の話によれば、野原牧場の牧舎の下方からも遺物が採集できるというが、調査当時は牧草が繁茂していたために、その地点の確認は行っていない。事実であるとすれば、等高線の配置からみて、標高220 mふきんまでは湯沢遺跡と一連の遺構群が分布している可能性は考えられよう。

このように、湯沢遺跡では、F<sub>1</sub>面およびF<sub>2</sub>面にのみ限って遺構・遺物の分布が認められることが明らかになった。つまり、縄文時代中期初頭～後期初頭の時期に至る居住集団は、砂礫分からなる周辺の地形面よりも、主として、厚い黄橙色火山灰層で被覆されている一段高い位置にある地形面を集落形成の場として選定していると言えよう。また同時に、中期初頭～中葉の時期には湧泉を取り巻く形の住居配置がみられる。中期末葉の時期には集落はにわかに拡大の傾向をみせるが、これも大局的には湧泉を中心とした配置と考えることができる。扇状地形の末端部に営まれた湯沢遺跡では、集落形成の一つの背景として、このような湧泉のもつ役割は大きなものがあつたと考えられよう。集落の占地・構成・移動などの諸点とともに、このことはのちの考察でも触れるが、pitfall hunting（陥し穴による狩猟）も主としてこの面上で行

われているものと推定される。

## (2) 地 質

遺跡の載るF<sub>1</sub>面の堆積物の基本層序を明らかにするために、調査地域内の数地点で深さ数mに達する深掘りを実施し、その断面観察を行った。ここではそのうち、5地点の資料をもとに説明する。その際、斜面上方と下方とは、主としてクロボク部分で構成員に若干の差異が認められるので、記載はその2つに区分して行なうこととする。またこの項を記述するにあたり、日本技術開発株式会社の試錐調査のデータ(8)を多く参考にした。

### (1) 斜面上方 (図版 5)

I層：クロボクで構成され、F<sub>1</sub>面では20cm～30cm前後の層厚がある。F<sub>2</sub>面ではやや厚い。住宅団地造成に先立つ樹木の伐採・搬出作業などにより、上部はかなりの攪乱を受けていた。地形面が北東方向に伸びる舌状部では、この層を欠く部分もある。不連続ではあるが、層中には“盛岡火山灰”(9)が挟在している。

II層：挾義の意味で湯沢遺跡にのみ分布する層である。周辺の他の地形面には分布が認められない。暗褐色～黒褐色を呈し、舌状部では全体的にIV層起源の火山灰が優占している。層中には、土器片・土製品・石製品・石器(剝片)類・礫・炭化物・焼土などが多く含まれている。遺構密集区での平均層厚は20cm±であるが、もっとも厚く分布するところでは30cm±を計る。水平分布の面からみれば、この層は遺構群と密接する在り方を示し、遺構が少なくなる部分では漸次消滅に向う。また時期的には、縄文時代中期末葉集落との相関度が高い。この層の起源および形成過程については、のちに考察で触れることにする。したがってここでは、主として縄文時代中期末葉の居住集団の廃棄行動によって形成された、人為的な色彩の濃い層である点を指摘するにとどめておく。

III層：IV層の風化帯とみられる汚れ火山灰層である。数cm～10cm±の層厚をもつ。

IV層：黄橙色～黄褐色を示す火山灰層(10)である。F<sub>1</sub>面上で、120cm±～185cm±の層厚をもつ。No.2・No.3の深掘り個所およびそのほかで、ほぼ中央部の層準に20cm±の厚さの暗色帯がみられる。この下位はかなりの風化を受けており、クラックが縦横に発達する。またEIII区内での深掘り調査では、暗色帯と同一層準で、粒径数cmの角礫質～円礫質の崖錐性の礫層の発達が認められた。これらのことから、この火山灰層は暗色帯を境にして、時期の異なる2つの層に細分される可能性があると考えられる。含まれるラピリは角～垂角の形状のものが多い。

V層：黄橙色の砂礫質粘土で、VI層およびVII層を削った侵食面上に発達する。全体に薄層で、No.4地点での層厚は110cm±である。層中には、2cm±～5cm±のクサリ礫化した円礫が包含

されている。No.3地点では、この層の中央部にM<sub>n</sub>の集積層がある。下位のV<sub>b</sub>層とともに、二枚橋礫層の構成員とみられる。

V<sub>b</sub>層：V<sub>a</sub>層の基底部に発達する砂礫層で、No.4地点で30cm±の層厚をもつ。粒径10cm前後の角～亜角の礫で構成されている。マトリックスは粗砂で、全体ににぶい褐色を呈している。この砂礫層は北東方向に向って消滅する。

VI層：下位のVII層とともに、二枚橋礫層の基盤となっている。この層は赤色風化を受けた砂礫質粘土で、石鳥谷段丘の構成層である日詰礫層の上部を構成するものである。残存部での層厚は40cm±である。No.2地点ではすべて侵食を受けて消滅している。

VII層：日詰礫層に相当する砂礫層で、粒径数cm～20cm±の亜角～円の形状の礫で構成されている。クサリ礫を多く含む。まれに数十cmの大きさの礫も包含されている。安山岩類・凝灰岩類・チャートなどからなる。砂層を挟存する。

以上、深掘り調査をもとにしたF<sub>1</sub>面の堆積物の構成を述べた。これらのうち、縄文時代の遺物が包含されるのはI層およびII層である。III層以下の層準は無遺物層となっている。湯沢遺跡では旧石器時代の遺物（ナイフ形石器・ブレイド）が少数発見されているが、IV層の黄橙色火山灰層が中位段丘以上の面を被覆しているものであることからすれば、その出土層準は、III層ないしはその上面と考えることができよう。

No.1地点では、V<sub>a</sub>層の上に不整合の関係でF<sub>2</sub>面の堆積物である淡青灰色の砂礫層が載る。数cm～20cm±の新鮮な亜角～円の形状の礫で構成されているが、まれに60cm以上の巨礫も含まれている。

## (2) 斜面下方（図版6）

FIV区では、縄文時代中期初頭～中葉にかけての住居址の検出や遺物の出土がみられたため、これらと斜面上方のII層および中期末～後期初頭遺構群との層位的関係を把握することを目的として、東西約22.2mにおよぶ深掘り調査を実施した。目的が上記の点にあったので、黄橙色火山灰層を深く掘り下げることにはせず、主としてクロボク部分の観察を重点的に行なった。この地区での堆積物には、頭にKurobokuのKを冠し層名とした。斜面上方の堆積物との関係は、それぞれ、K-I層=I層、K-II層=II層、K-VI<sub>b</sub>層=III層、K-VIII層=IV層となる。これら以外の斜面下方の堆積物は、斜面上方において上下の層に収斂する。

K-I層：斜面上方のI層と連続するクロボク層である。“盛岡火山灰”がレンズ状に認められる部分もある。

K-II層：IV層（K-VIII層）起源とみられる黄橙色～黄褐色の火山灰の細粒を多量に含む暗褐色～黒褐色土層である。この地区での分布は断続的である。層相や、FIV-53フラスコ形ピットおよびFIV-105陥し穴状遺構の上位に位置する事実から、斜面上方のII層に対比されるも

のである。

K-III層：クロボクで構成され、K-II層下位にレンズ状に付着する層である。

K-IV層：黒褐色土層であり、ほとんど混り物を含まない。FIV-53フラスコ形ピットはこの層を切っているが、FIV-105陥し穴状遺構との関係は不明である。

K-V層：上位の層と比較してやや色調の薄れる黒褐色土層である。ほとんど混り物を含まない。FIV-105陥し穴状遺構はこの層を明確に切っている。斜面下方では、K-IV層との境界が不明瞭となる。K-III層～K-V層までは無遺物層である。

K-V<sub>b</sub>層：明褐色～暗褐色を呈するK-VI層の上部を占めるもので、斜面下方ではK-VI<sub>b</sub>層との境界は不明瞭であるが、上方に向うにつれて明確に分離する。FIV-53フラスコ形ピットが存在するふきんで縄文時代中期初頭～中葉の土器片・石器類の出土がみられたほか、中期初頭に位置すると考えられるFIV-4住居址埋土下部層に連続するものであることが確認された。

K-VI<sub>b</sub>層：K-VI層の下部を構成するもので、斜面上方でIII層と連続する。FIV-4住居址はこの層を切っている。上下でかなりの揺れを示す。この層以下は無遺物層である。

K-VII層：ほとんど混り物を含まず、粘性の強い黒褐色土層である。

K-VIII層：斜面上方のIV層に連続する黄橙色～黄褐色火山灰層である。

斜面上方と下方の堆積物の状況は上述のとおりである。まだ遺物についての詳しい検討がなされていないために、正確なことは言えないが、湯沢遺跡で検出された遺構群は、II層（K-II層）を境にして層位的に大きく上下に2分することができる。縄文時代中期初頭～末葉の遺構群はII層下位で検出されるが（層位的「b」型）、後期初頭に位置するものはこれを切っている（層位的「a」型）。また、住居址の埋土の面からみると、中期初頭～中葉の住居址群はクロボクで埋土の大半が構成されているが、中期末葉のものはクロボクを欠き、II層と層相がほぼ同様の埋土で構成されている。後期初頭の住居址は、埋土の下半部がII層と性状がほぼ同様の層で構成され、上半部にはI層から連続するクロボクを伴う。これら住居址群にみられる埋土の相違は、埋没過程における堆積環境の差を反映しているものと考えられる。

空中写真の到着が遅れたために、地形面分類をするにあたっては、詳しい検討をするだけの十分な時間的余裕がなかった。したがって、その判読結果に誤りの多いことをおそれる。誤りについては、今後の検討をとおして、さらに訂正してゆくつもりである。この稿を草するにあたり、岩手県立博物館建設事務所の佐藤二郎氏（現・杜陵高校）には御指導と御助言を賜った。しかし筆者の怠慢から、原稿の仕上がりがかぎり切の間際であったために、佐藤氏に内容を吟味していただくことはできなかった。誤りは全面的に筆者の責任である。この点で佐藤二郎氏に筆者の怠慢をお詫びするとともに、御指導に対して厚く感謝申し上げます。

## 註

- (1) E・S・モース著、石川欣一訳 『日本その日その日』 2 平凡社刊 (1970)
- (2) 理科年表 (1977年版) による。東京天文台編纂 丸善
- (3) 中川久夫・石田琢二・佐藤二郎・松山 力・七崎 修 (1963) : 北上川上流沿岸の第四系および地形—北上川流域の第四紀地史(1)—、地質学雑誌第69巻第811号
- (4) 中川久夫・岩井淳一・大池昭二・小野寺信吾・森由紀子・木下 尚・竹内貞子・石田琢二 (1963) : 北上川中流沿岸の第四系および地形—北上川流域の第四紀地史(2)—、地質学雑誌第69巻第812号
- (5) 佐藤二郎氏の御厚意により拝借できた。
- (6) 矢沢大二・戸谷 洋・貝塚爽平 編 (1971) : 扇状地—地域的特性—、古今書院。この中では、岩崎川扇状地としたものは、(矢幅)扇状地として記載されている。
- (7) 岩手県住宅供給公社・日本技術開発株式会社 (1976) : 湯沢団地地質調査業務報告書
- (8) (7) に同じ
- (9) 1972年、北上市相去町成沢遺跡で土師器を伴う住居址から、粉塵状で灰白色を呈する降下火山灰が発見され、共同執筆者の一人である高橋信雄により、暫定的に“粉状パミス”と呼称された。盛岡市周辺でも平安時代集落を被覆する降下火山灰があり、肉眼的には性状がほぼ同様なところから、これも“粉状パミス”として一括されている。しかし資料の増加に伴って、この2つの降下火山灰はそれぞれ起源と分布を異にすると考えられるところから、筆者は前者のものについて“胆沢火山灰”、後者のものについて“盛岡火山灰”と仮称している。岩手県ではこれらのほかに、一関市周辺(未記載)と二戸市周辺(十和田 a 火山灰)に降下時期がほぼ同じとみられる火山灰が分布している。
- (10) この火山灰層を、中川ら(1963)の記載をもとに浜民火山灰層に相当するものとして捉えていたが、佐藤二郎氏により浜民火山灰層自体の再検討の必要性が強調されたため、ここではあえてその名称を使用することは避けた。この黄橙色～黄褐色を呈する火山灰層は、雫石町や滝沢村などの中位段丘以上の面で広く追跡することができる。(高橋文夫)

## IV. 検出遺構

### (1) 住居址

#### B IV 区（住居址実数 1 棟）

##### B IV - 1 住居址（図版 7 a、写真図版 8 a）

4.30m 土×3.90m 土の規模をもち、ほぼ六角形に近い平面形を呈する住居址である。調査の手違いから土層断面図は作成していないため、埋土については Field Card をもとにして述べる。住居址中央部の埋土最上部には“湯沢パターン”の火山灰層が分布している。しかし、規模は大きなものではない。この火山灰層の下位にはクロボクの薄層がレンズ状にみられるが、埋土の主体を占めるのは焼土・炭化物を多く含む暗褐色土層である。壁高は西壁 37cm 土・東壁 10cm 土を計る。柱穴は、P<sub>1</sub>（径 20cm 土・深さ 19cm 土）・P<sub>2</sub>（径 35cm 土・深さ 18cm 土）・P<sub>3</sub>（径 24cm 土・深さ 24cm 土）・P<sub>4</sub>（径 22cm 土・深さ 24cm 土）・P<sub>5</sub>（径 20cm 土・深さ 23cm 土）などのピット群で構成されるものと考えられる。配置的には、フラスコ形ピットに切られる南西部にもう 1 個の柱穴が存在していたものとみられる。

住居址中央部からやや北西側の床面上に、現地性の焼土がある。北東側を陥し穴状遺構に切れ、径 30cm 土の規模で残存しているにすぎないが、これが炉の一部をなすものと思われる。

当住居址は、B IV - 51 フラスコ形ピット・B IV - 103 陥し穴状遺構・B IV - 104 陥し穴状遺構などに切られている。（三浦謙一）

#### C III 区（住居址実数 12 棟）

##### C III - 1 住居址（図版 8 ab、写真図版 8 a）

8.30m 土×7.70m 土の規模をもつ大形の住居址で、ほぼ五角形に近い平面形を呈していたと推定される。しかし南壁と南東壁、北壁の立上りが緩やかな傾斜であったため、明瞭な壁の輪郭線は把握できなかった。埋土は、焼土・炭化物を少量含む暗褐色土層・黒褐色土層を主な構成層とする。壁際では上半を褐色土層、下半を火山灰が優占する黄橙色土層が占め、いずれにも混入物はほとんどみられない。壁高は西壁で 20cm 土・東壁で 10cm 土を計り、南西壁付近では高く 45cm 土ある。柱穴状のピットは数個が検出されたが、規模と位置の点からは柱穴として把握できなかった。なお西壁中央部では、壁際で高く漸次床面上に傾斜してゆく火山灰の高まり



がみられるが、その内容等は明らかでない。

床面上には現地性の焼土が2ヵ所に分布している。住居址中央部からやや北側では130cm±×80cm±、やや南側では300cm±×80cm±の規模をもって不整形に広がる。他に炉は検出されておらず、地床炉の可能性はある。

当住居址は重複するCⅢ-51フラスコ形ピットとCⅢ-102陥し穴状遺構などに切られている。

#### CⅢ-2住居址 (図版7b・9a、写真図版9a)

4.20m±×3.60m±の規模をもち、やや円形に近い平面形を呈していたと推定される。埋土は、炭化物を含む褐色土層のほぼ単層で占められており、土層断面図の作成は省略した。壁高は西壁で17cm±・東壁で11cm±を計る。柱穴は、P<sub>1</sub>(径30cm±・深さ42cm±)・P<sub>2</sub>(径32cm±・深さ33cm±)の2個が壁からやや内側に存在し、支柱穴の一部を構成する。配置的には北東壁と南西壁近くにも存在していたと考えられるが、検出されなかった。

炉は住居址中央部からやや南西側に位置している。浅皿状の形態を示し、斜位と直立の2個の埋設土器を伴う。上方に位置する斜位埋設土器は南方向に開口し、その下底部に直立埋設土器が半分程重なった状態でみられる。北側炉縁の一部は陥し穴状遺構に切られている。炉縁径は50cm±×45cm±・堀り方は床面から深さ30cm±を計り、斜位埋設土器と炉底・炉壁が良く焼成を受けている。直立埋設土器にはほとんど焼成痕が認められないが、その内部には明赤褐色焼土が充満していた。

床面上からの出土遺物としては炉の西側にあった台石があげられる。

当住居址はCⅢ-104陥し穴状遺構に切られているが、CⅢ-105陥し穴状遺構との新旧関係は不明である。

#### CⅢ-3住居址 (図版9a、89b、写真図版9b)

5.60m±×4.80m±の規模をもち、不整な六～七角形の平面形を呈していたと推定される。しかし、北東壁から東壁の一部を消失していることや他の遺構との重複が著しいことから、平面形の詳細は明らかでない。埋土は次にあげるほぼ2層で構成され、土層断面図の作成は省略した。住居址中央部の埋土上部は層厚20cm±のクロボク層が占める。しかし分布する範囲は狭く、埋土の主体を占めるのは焼土・炭化物を含む汚れ火山灰層である。壁高は西壁で35cm±・東壁で20cm±を計る。柱穴は次の7個が検出された。P<sub>1</sub>(径40cm±・深さ60cm±)・P<sub>2</sub>(径77cm±・深さ75cm±)・P<sub>3</sub>(径45cm±・深さ46cm±)・P<sub>4</sub>(径35cm±・深さ91cm±)・P<sub>5</sub>(径30cm±・深さ46cm±)・P<sub>6</sub>(径45cm±・深さ56cm±)・P<sub>7</sub>(径35cm±・深さ37cm±)。このうちP<sub>1</sub>~P<sub>6</sub>が支柱穴を構成するものであろうが、P<sub>7</sub>については明らかでない。

炉は住居址中央部からかなり南壁寄りに位置している。南側ほぼ半分の炉縁に薄い黄褐色細

礫が載る浅皿状の形態をもつもので、ほぼ北方向に開口する斜位埋設土器を伴う。平面図で示した炉は実測図作成時の状態のもので、実際の長軸線は更に北方向に伸びる。炉縁径は105cm±×60cm±を計り、埋設土器や炉底は良く焼成を受けている。炉内の最上層に推積する焼土・炭化物をわずかに含む汚れ火山灰層は、埋土下部を占める汚れ火山灰層からの連続とみることができる。また埋設土器の中心を通る長軸線上の北側炉縁下14cm±の火山灰層中には、小形の深鉢形土器がほぼ直立した状態で埋置されていた。

当住居址の床面上には小規模な現地性の焼土が3ヵ所に認められる。また微細な炭化物も床面に密着した状態で多数存在することから、焼失を受けた可能性が考えられる。

重複するCⅢ-54とCⅢ-55の各フラスコ形ピットを切っているが、CⅢ-109とCⅢ-110・CⅢ-127の各陥し穴状遺構には切られている。なおCⅢ-56フラスコ形ピットについては共伴関係も含めて新旧関係は明らかでない。

#### CⅢ-4住居址 (図版9b・89c、写真図版10a・94a)

壁の輪郭線と柱穴がほとんど把握されなかったため、規模・形態とも詳細は不明である。炉の東側を壁コーナーとみなすと南壁が炉につながってしまうことから壁の一部とは考え難い。埋土は、焼土・炭化物を多く含む暗褐色土層のほぼ単層であるため、Field Card にその性状を記しただけで土層断面図の作成は省略した。柱穴は検出されなかった。

一部残存する東壁から推定して、炉は住居址中央部から南東側に寄った位置にあると考えられる。直立埋設土器だけで構成される形態のものである。埋設土器の南側には側縁部を上にした礫が接するように埋置される。礫は長さ37cm±の安山岩類垂角礫である。埋設土器の周辺にはほとんど焼成痕がみられない。

#### CⅢ-5住居址 (図版10a、写真図版10b・94cd)

2.80m±2.50m±の規模をもつと推定される。北壁と南壁の大部分を消失しているために平面形の詳細は不明である。しかし、残存する壁からは方形または多角形の平面形を呈すると推定される。埋土は、焼土・炭化物を多く含む暗褐色土層のほぼ単層が占めるため、土層断面図の作成は行なわなかった。壁高は西壁で5cm±。東壁で11cm±を計る。柱穴は炉の西側にP<sub>1</sub>(径20cm±・深さ28cm±)が1個検出されただけであり、柱穴配置は不明である。

炉は住居址中央部からやや南東側に位置している。摺鉢状の形態を示し、北西方向に開口する斜位埋設土器を伴う。炉縁径は55cm±×45cm±、掘り方は床面から深さ24cmを計り、埋設土器を中心として炉底・炉壁が良く焼成を受けている。

当住居址の床面上には非常に小規模な現地性の焼土が所々にみられる。東壁際では焼土を伴った炭化材が壁に平行して検出されたが、これも小規模である。

床面上からの出土遺物としては、炉の北西側にあった台石があげられる。

当住居址は、重複するCⅢ-6住居址には南壁の一部を切られるが、CⅢ-60フラスコ形ピットとは共伴関係も含めて新旧関係は不明である。

#### CⅢ-6住居址（図版10b・89e・写真図版11a・94b）

2.50m±×2.10m±の規模をもち、ほぼ円形の平面形を呈する小形の住居址である。北側でCⅢ-5住居址を切っている部分の壁を消失しているために短軸方向の規模は推定である。埋土は、炭化物を含む暗褐色土層のほぼ単層で占められるため、土層断面図の作成は省略した。壁高は西壁で20cm±・東壁で22cm±を計る。柱穴状のピットは数個が検出されたが、規模と位置の点からは柱穴として把握できなかった。

炉は住居址中央部からやや南東側に位置する。浅皿状の形態を示し、直立埋設土器を伴う。埋設土器の南東側に接して側縁部を上にした長大な礫が埋置されている。礫は長さ27cm±の安山岩類亜角礫である。また、その礫の一部を埋め込むように埋設土器の一部週辺には火山灰が厚く盛られており、土器の保護を目的としたと考えられる。

重複するCⅢ-60フラスコ形ピットとの新旧関係は不明である。

#### CⅢ-7住居址（図版11ab・89f・90a、写真図版12ab・94ef・172d）

当住居址は拡張住居址であり、3個の炉跡と新旧2群の柱穴群が検出されている。以下、拡張以前を〈第一次住居址〉、拡張以後を〈第二次住居址〉と分けて記述する。

##### 〈第一次住居址〉

柱穴と炉を痕跡としてもつ住居址である。柱穴配置と〈第二次住居址〉の平面形からは、6・20m±の規模と九～十角形の平面形が推定される。柱穴として確認されたのは次の10個である。P<sub>1</sub>（径42cm±・深さ100cm±）・P<sub>2</sub>（径40cm±・深さ88cm±）・P<sub>3</sub>（径40cm±・深さ84cm±）・P<sub>4</sub>（径46cm±・深さ56cm±）・P<sub>5</sub>（径54cm±・深さ100cm±）・P<sub>6</sub>（径27cm±・深さ48cm±）・P<sub>7</sub>（径44cm±・深さ87cm±）・P<sub>8</sub>（径28cm±・深さ56cm±）・P<sub>9</sub>（径44cm±・深さ91cm±）・P<sub>10</sub>（径55cm±・深さ59cm±）。これらのピット群が支柱穴を構成して、九角形の柱穴配置を示す。またそれぞれが〈第二次住居址〉の支柱穴と対応関係を示すものである（後述）。

当住居址に伴うのは〈1号炉〉であり、後述する。

##### 〈第二次住居址〉

8.80m±×8.50m±の規模をもち、ほぼ九～十角形に近い平面形を呈する大形の住居址である。〈第一次住居址〉の柱穴群に貼床して構築されている。住居址中央部からほぼ北側で埋土最上部を占めるのは炭化物を含む暗褐色土層である。その下位には径2.40m±・中央部での層厚15cm±の規模と厚さをもつ“湯沢パターン”の火山灰層が分布するが、住居址中央部から北側に限られている。床面に至る最下部はクロボク層で構成されるが、この層は住居址中央部から南側では埋土の主体をなす。壁際には多量の汚れ火山灰が堆積する。壁高は西壁で40cm±・東壁

で30cm±を計った。柱穴として確認されたのは次の11個である。P<sub>11</sub>(径35cm±・深さ54cm±)・P<sub>12</sub>(径50cm±・深さ47cm±)・P<sub>13</sub>(径60cm±・深さ70cm±)・P<sub>14</sub>(径42cm±・深さ75cm±)・P<sub>15</sub>(径24cm±・深さ60cm±)・P<sub>16</sub>(径32cm±・深さ53cm±)・P<sub>17</sub>(径47cm±・深さ70cm±)・P<sub>18</sub>(径37cm±・深さ50cm±)・P<sub>19</sub>(径30cm±・深さ73cm±)・P<sub>20</sub>(径46cm±・深さ94cm±)・P<sub>21</sub>(径55cm±・深さ80cm±)。以上のピット群が壁際に位置して支柱穴を構成する。P<sub>22</sub>(径24cm±・深さ70cm±)・P<sub>23</sub>(径27cm±・深さ60cm±)・P<sub>24</sub>(径55cm±・深さ47cm±)の3個は、支柱穴の一部を構成する可能性もあるが明らかではない。住居址内には他に多くのピット群が検出されているが規則性は認められず、個々を位置づけることはできない。

拡張のひとつの根拠となる〈第一次住居址〉と〈第二次住居址〉との支柱穴同士の対応関係は次の通りである。P<sub>1</sub>↔P<sub>11</sub>・P<sub>2</sub>↔P<sub>12</sub>・P<sub>3</sub>↔P<sub>13</sub>・P<sub>4</sub>↔P<sub>14</sub>・P<sub>5</sub>↔P<sub>15</sub>・P<sub>6</sub>↔P<sub>16</sub>・P<sub>7</sub>↔P<sub>17</sub>・P<sub>8</sub>↔P<sub>18</sub>・P<sub>9</sub>↔P<sub>20</sub>・P<sub>10</sub>↔P<sub>21</sub>。しかしP<sub>19</sub>に対応する〈第一次住居址〉の柱穴は検出されなかった。これらの対応関係から〈第二次住居址〉は外方へほぼ放射状の拡張がなされたと言える。

当住居址の壁近くの床面上には礫が数多く存在し、一部では集中した状態でみられる。その1カ所は南東壁際の柱穴P<sub>14</sub>の北側部分にある。小形深鉢形土器2個が合せ口の状態でほぼ直立し、その周囲を囲むように6個の礫が一部重なっている。礫は10cm±～20cm±の大きさの垂角礫である。他の1カ所は柱穴P<sub>17</sub>の北側にある浅皿状ピットの底面上である。ピットは径95cm±×87cm±・深さ14cm±を計り、礫は6cm±～15cm±大の垂角礫9個である。その他にも単独あるいは3～5個がまとまった状態で検出されている。それらの礫は大きさの平均が24cm±ある安山岩類垂角礫が大部分を占める。しかしそれらのもつ内容は明らかではない。主な出土遺物には柱穴P<sub>5</sub>に貼床した床面上からの石製首飾りがある。

当住居址に伴うのは〈2号炉〉であり、詳細は後述する。

上記の通り、当住居址からは合計3個の炉跡が検出されている。それぞれを〈1号炉〉〈2号炉〉〈3号炉〉と分けて記述する。

#### 〈1号炉〉

〈第一次住居址〉に伴う。上部は層厚5cm±の褐色土で閉塞され、〈第二次住居址〉の床面とされていた。平面図が示しているのはその褐色土を掘り上げた状態のものである。南壁に近い位置にあったと考えられる。浅皿状の形態を示し、直立埋設土器を伴う。炉縁径は90cm±でほぼ円形を呈する。掘り方は床面から深さ37cm±を計り、埋設土器を中心として炉底・炉壁が良く焼成を受けている。

#### 〈〈2号炉〉〉

〈第二次住居址〉に伴う。住居址中央部からやや南側に位置する。摺鉢状の形態を示し、直立と斜位の2個の土器が埋設されている。北方向に開口する斜位埋設土器は南側にあり、その

やや北に直立埋設土器を伴う。炉縁径は110cm±×65cm±を計る。斜位埋設土器には床面から深さ37cm±の掘り方がみられ、土器を中心として良く焼成を受けている。それに対し直立埋設土器の周囲にはほとんど焼成痕が残されていない。

#### 〈3号炉〉

〈第二次住居址〉のほぼ南東壁近くに検出された。大部分をフラスコ形ピットに切られており、残存する部分の炉縁径が125cm±を計る大形の炉である。北側炉縁に薄く黄褐色細礫を載せて摺鉢状の形態を示しているが、詳細は不明である。炉底には良く焼成痕を残している。

この炉は検出位置からして〈第一次住居址〉に伴うものではない。また柱穴配置や平面形からは帰属する住居址を想定できない。他の仮定としては〈第二次住居址〉における炉だけの作り替えがある。しかし、南壁際に堆積する汚れ火山灰に覆われて貼床の有無が確認できなかったことや、この炉を切るCⅢ-58フラスコ形ピットと〈第二次住居址〉との新旧関係が共存関係も含めて不明であることから、詳細は明らかでない。

#### CⅢ-8住居址（図版12a・90b、写真図版11b・95ab）

2.70m±×2.50m±の規模をもち、不整な六角形に近い平面形を呈していたと推定される小形の住居址である。埋土は、火山灰の細粒を含む黒褐色土層のほぼ単層で占められているため、土層断面図の作成は行なわなかった。壁高は西壁で16cm±・東壁で15cm±を計る。柱穴は、P<sub>1</sub>（径22cm±・深さ24cm±）・P<sub>2</sub>（径20cm±・深さ34cm±）の2個がほぼ壁際に位置して支柱穴の一部を構成するものであろうが、他に柱穴が検出されず詳細は明らかでない。

炉は住居址中央部からやや南東側に位置する。浅皿状の形態を示し、南西方向に開口する斜位埋設土器を伴う。炉縁径は38cm±でほぼ円形を呈し、掘り方は床面から深さ25cm±を計る。埋設土器を中心として炉内は良く焼成を受けている。

埋土中からは多数の遺物が出土した。床面上からは炉のすぐ北側に深鉢形土器が出土し、炉の北西側からは石皿2点、台石1点が出土している。

当住居址は、北壁の一部で重複するCⅢ-121陥し穴状遺構に切られている。

#### CⅢ-9住居址（図版13ab・写真図版13a）

4.00m±×3.80m±の規模をもち、不整な六角形の平面形を呈している。埋土は上位から黄褐色土層、暗褐色土層、褐色土層の順序にレンズ状～水平状の堆積を示す。壁際は暗褐色土層が占める。いずれの層も焼土・炭化物を含む。壁高は西壁で20cm±・東壁で30cm±を計り、床面は堅くしまっている。柱穴は次の6個が検出された。P<sub>1</sub>（径25cm±・深さ37cm±）・P<sub>2</sub>（径68cm±・深さ54cm±）・P<sub>3</sub>（径19cm±・深さ44cm±）・P<sub>4</sub>（径30cm±・深さ37cm±）・P<sub>5</sub>（径22cm±・深さ24cm±）・P<sub>6</sub>（径62cm±・深さ55cm±）。これらのピット群はほぼコーナー近くに六角形に配置され、支柱穴を構成する。

炉は住居址中央部からやや北東側に位置している。浅皿状の形態を示し、南西方向に開口する斜位埋設土器を伴う。炉縁には8cm±～17cm±大の礫3個がまばらに載る。数が少なく、また焼成痕も認められないが、石囲い炉の構成礫の一部とも考えられる。炉縁径は70cm±×55cm±を計る。炉底・炉壁は良く焼成を受け、焼成は炉縁外の一部にも及ぶ。

出土土器には、炉の北西側の床面上に出土したミニチュア土器がある。

当住居址はCⅢ-108陥し穴状遺構を切っているが、CⅢ-112陥し穴状遺構には切られている。

#### CⅢ-10住居址（図版13c・90c、写真図版13b・95cd・170ab）

4.70m±×4.50m±の規模をもち、不整な六角形に近い平面形を呈している。埋土の大部分は炭化物を含む暗褐色土層で占められるが、住居址中央部から南側の部分では“湯沢パターン”の火山灰層を上部に伴う。壁高は西壁で30cm±・東壁で10cm±を計る。柱穴として確認されたのは、P<sub>1</sub>（径37cm±・深さ34cm±）・P<sub>2</sub>（径48cm±・深さ39cm±）・P<sub>3</sub>（径68cm±・深さ23cm±）・P<sub>4</sub>（径39cm±・深さ25cm±）・P<sub>5</sub>（径30cm±・深さ23cm±）・P<sub>6</sub>（径30cm±・深さ23cm±）の6個である。P<sub>2</sub>が壁から内側へ寄るが他はほぼ壁際に位置する。これらのピット群が主柱穴を構成すると考えられるが、他の柱穴状ピットについては明らかでない。

炉は住居址中央部からやや南側に位置する石囲い炉である。構成礫の外縁間で85cm±を計り、ほぼ円形を呈している。炉縁には8個の礫がまばらに載り、一部は埋置されている。礫は大きさが10cm±～20cm±の安山岩類である。炉内には層厚10cm±の焼土層が形成され、その上に載る1個の礫は構成礫が動いたものと考えられる。したがって炉縁に載る8個は原位置を保っているもので、実際の構成礫数は更に多いものであろう。

床面上からの出土遺物としては、北壁中央部に近い位置に小形壺形土器2個と注口土器がある。また埋土下部からは浅皿形土器が出土した。

当住居址はCⅢ-116陥し穴状遺構を切るが、CⅢ-115・CⅢ-117の各陥し穴状遺構には切られている。

#### CⅢ-11住居址（図版14ab・90d、写真図版14ab・95ef・121a・170c）

3.80m±×3.60m±の規模をもち、不整な八角形の平面形を呈する。埋土の上部は焼土・炭化物を含む褐色土層が占め、下部は暗褐色土層と火山灰層とで主に構成される。壁高は西壁で43cm±・東壁で27cm±を計る。柱穴として確認できたのは、P<sub>1</sub>（径25cm±・深さ21cm±）・P<sub>2</sub>（径20cm±・深さ12cm±）・P<sub>3</sub>（径26cm±・深さ23cm±）・P<sub>4</sub>（径25cm±・深さ24cm±）の4個である。これらのピット群が主柱穴の一部を構成するものであろう。

炉は住居址中央部からやや東側に位置している。浅皿状の形態をもつもので、直立埋設土器を伴う。埋設土器に接して側縁部を上にした垂角礫が埋置される。礫は大きさが20cm×15cm・

厚さが5cm±とやや扁平である。炉縁径は70cm±、床面から掘り方底部までの深さは22cm±を計り、埋設土器を中心に炉底・炉壁が良く焼成を受けている。

北東壁際には「出入口」状施設を伴い、側縁部を上にした礫2個が壁に直交している。礫は長さ20cm±の長大な安山岩類亜角礫で、深く埋置され床面上での高さは4cm±を残す。構成礫の外縁間で32cm±・内側では15cm±を計り、礫間には深さ8cm±の浅皿状ピットを伴う。

当住居址の埋土中と床面上からは多量の遺物が出土している。床面上と床直上からは5個体の一括深鉢形土器が出土するとともに磨製石斧と小形磨製石斧、水晶が出土した。

### C III - 12住居址 (図版12b・90e、写真図版96ab)

北壁と東壁の大部分を消失しているために平面形の詳細は不明である。しかし柱穴群の配置からは3.00m±の規模が推定される。埋土は、焼土・炭化物を含む暗褐色土層のほぼ単層で占められており、土層断面図の作成は省略した。壁高は西壁で24cm±を計る。柱穴は次の6個が確認された。P<sub>1</sub>(径25cm±・深さ21cm±)・P<sub>2</sub>(径26cm±・深さ24cm±)・P<sub>3</sub>(径23cm±・深さ25cm±)・P<sub>4</sub>(径30cm±・深さ20cm±)・P<sub>5</sub>(径22cm±・深さ21cm±)・P<sub>6</sub>(径22cm±・深さ27cm±)。これらのピット群が支柱穴を構成し、不整な六角形の配置を示す。

炉は住居址中央部からやや南側に位置する。浅皿状の形態をもつもので、直立埋設土器を伴う。炉縁径は65cm±×35cm±を計り、埋設土器の周辺が良く焼成を受けている。

床面上からは南東壁近くに台石が出土している。(三浦 謙一)

## C IV 区 (住居址実数2棟)

### C IV - 1住居址 (図版14c・91a、写真図版15a・96cd)

4.30m±×4.20m±の規模をもち、不整八角形に近い形状を示す住居址である。埋土は、焼土・炭化物を含む暗褐色土層で構成されていたが、単層であるために、Field Card に性状を記載したのみで、土層断面図の作成は省略した。壁高は、西壁40cm±・東壁10cm±を計る。柱穴としては、P<sub>1</sub>(径25cm±・深さ30cm±)・P<sub>2</sub>(径32cm±・深さ26cm±)・P<sub>3</sub>(径30cm±・深さ31cm±)・P<sub>4</sub>(径20cm±・深さ45cm±)・P<sub>5</sub>(径22cm±・深さ53cm±)などのピット群が支柱穴を、またP<sub>6</sub>(径30cm±・深さ32cm±)・P<sub>7</sub>(径27cm±・深さ16cm±)・P<sub>8</sub>(径37cm±・深さ26cm±)・P<sub>9</sub>(径30cm±・深さ20cm±)・P<sub>10</sub>(径23cm±・深さ22cm±)・P<sub>11</sub>(径26cm±・深さ36cm±)・P<sub>12</sub>(径17cm±・深さ50cm±)などのピット群が壁柱穴を、それぞれ構成するものとみられる。P<sub>1</sub>とP<sub>3</sub>は両者の役割を果たしているものであろう。

炉は住居址中央部からやや南側に位置する。浅皿状の形態をもつもので、直立埋設土器を伴う。炉縁径は55cm±、床面から掘り方底部までの深さは50cm±を計る。埋設土器を中心に良く

焼成を受けている。北東の炉縁には10cm±の大きさの垂角礫が2個載る。これらの礫は石囲い炉の構成礫の一部である可能性も考えられるが、深く埋置されたものではないため抜取り痕が認められず、詳細は不明である。

#### C IV - 2 住居址 (図版15a、写真図版15b・96e)

3.60m±×3.20m±の規模をもち、不整七角形に近い平面形を呈していると推定されるが、北東～東壁の一部を消失していることや、陥し穴状遺構に切られていることなどにより、その詳細は不明である。埋土の最上部は層厚10cm±のクロボクで占められている。その下位には、焼土・炭化物を僅かに含む火山灰層が一部にみられるものの、主体を占めるのは焼土・炭化物を含む褐色土層である。壁高は西壁で30cm±、東壁で7cm±を計る。柱穴は、P<sub>1</sub>(径22cm±・深さ23cm±)・P<sub>2</sub>(径26cm±・深さ18cm±)・P<sub>3</sub>(径28cm±・深さ38cm±)などのピット群でその一部が構成されるものと考えられる。他の柱穴は検出できなかった。

炉は住居址のほぼ中央部に位置している。長軸線上の外縁に直立埋設土器を伴う石囲いの形態をもつものである。11個の垂角礫で構成されている。開口部に接する一辺は側縁を上にして埋置された長さ14cm±のやや扁平な礫からなる。南辺は残存状態が良好である。東辺と北辺では20cm±大の板状の礫が横倒しの状態で検出されているが、これは本来、側縁部を上にした状態で埋置されていたものと考えられる。主な構成礫の大きさは13cm±～40cm±である。構成礫間の外部径は55cm±×35cm±を計り、炉底は床面から10cm±ほど窪んでいる。埋設土器上部を中心に若干の焼成痕がみられるが、石囲い部の内部には焼成痕は認められない。

当住居址は、C IV - 106 陥し穴状遺構とC IV - 107 陥し穴状遺構を切っている。床面はこの2つの遺構の上に構築されている。また石囲い部の一部は、C IV - 107 陥し穴状遺構の上に載るものであることが確認されている。C IV - 108 陥し穴状遺構には切られている。

(三浦謙一)

### D II 区 (住居址実数11棟)

#### D II - 1 住居址 (図版15b・91b、写真図版16ab・97ab)

4.20m±×3.70m±の規模をもち、不整な七～八角形の平面形を呈していたと推定されるが、東壁をD II - 2 住居址に切られているために、その詳細は不明である。埋土の主体を占めるのは焼土・炭化物を含む褐色土層であるが、下部では汚れ火山灰層が部分的にみられる。壁高は西壁で24cm±を計る。柱穴は、P<sub>1</sub>(径28cm±・深さ57cm±)・P<sub>2</sub>(径20cm±・深さ40cm±)・P<sub>3</sub>(径20cm±・深さ25cm±)・P<sub>4</sub>(径14cm±・深さ27cm±)・P<sub>5</sub>(径13cm±・深さ40cm±)・P<sub>6</sub>(径32cm±・深さ36cm±)などのピット群で構成されるものと考えられる。これらのうち、



P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>の4個は壁際で、P<sub>5</sub>・P<sub>6</sub>の2個のピットは壁からやや内に寄った位置で、それぞれ主柱穴を構成していたものであろう。他のピットは、規模と配置の点から、内容は明らかではない。

炉は住居址中央部からやや東側に位置している。浅皿状の形態をもつもので、直立埋設土器を伴う。埋設土器の北側に接するように、側縁部を上にした、大きさが20cm±、厚さが5cm±の板状礫が埋置されている。南北の炉縁部は小ピットに切られているが、炉縁径は65cm±×55cm±と推定される。なお、東側炉縁に接して円形のピットがあり、その西側縁の半分に3個の礫が載る。ピットは径30cm±・深さ6cm±であり、礫は長さが10cm±～22cm±ある。しかし、これらと炉との関係は明らかではない。

#### D II - 2 住居址 (図版16a・91c、写真図版16a・17ab・97cd)

3.90m±×3.50m±の規模をもち、不整な六～七角形の平面形を呈していたと推定されるが、D II - 1 住居址を切るために西壁を消失し詳細は不明である。埋土最上部には“湯沢パターン”の火山灰層を伴い、住居址中央部から南北2.20m±×東西2.90m±・中央部での層厚25cm±の広がりをもって分布する。それは焼土・炭化物をわずかに含む。その下位は暗褐色土層と褐色土層とが主体を占める。壁高は西壁で40cm±を計る。柱穴として確認されたのは、P<sub>1</sub>(径30cm±・深さ15cm±)・P<sub>2</sub>(径21cm±・深さ32cm±)・P<sub>3</sub>(径27cm±・深さ35cm±)の3個である。壁際にあつて主柱穴の一部を構成するものであろうが詳細は不明である。

炉は住居址中央部からやや南側に位置する。浅皿状の形態をもつもので、北西方向に開口する斜位埋設土器を伴う。炉縁径は75cm±×65cm±を計り、埋設土器を中心として炉底・炉壁も良く焼成を受けている。

当住居址の北西壁近くの床面上には、炭化材を伴った現地性の焼土がごく小規模に認められる。

#### D II - 3 住居址 (図版87a・91d、写真図版18a・97ef・169a)

当住居址に対しても、四分法による精査→土層断面図の作成→掘り上げと一連の調査方法を実施した。しかし調査の不幸から住居址平面図の作成だけが行われないうでしまった。したがって記述は土層断面図と炉平面図・炉断面図・Field Card そして写真をもとにして行なう。

径3.00m±の規模をもち、ほぼ円形の平面形を呈する住居址である。埋土は、上位から褐色土層、暗褐色土層、褐色土層の順序で構成され、いずれも焼土・炭化物を含む。壁高は西壁で43cm±・東壁で28cm±を計る。平面図を欠くために柱穴の規模と配置・個数は不明であるが、Field Card には、壁際に5個が配置され、比較的細くて浅い、と記載されている。

炉は住居址のほぼ中央部に位置している。石囲い炉の形態をもつもので、直立埋設土器を伴う。西側約 $\frac{1}{3}$ が当住居址を切るD II - 102 陥し穴状遺構によって壊われている。残存する構成礫は3個で方形に近い形に埋置されている。陥し穴状遺構の壁に沿って構成礫が1個と埋設

土器の一部が落ちている状況が観察されることから、実際の構成礫は4個またはそれ以上であろう。礫は大きさが16cm±～25cm±で側縁部を上にして埋置されている。なお埋設土器の南側に接して小礫が1個みられる。構成礫の外縁間は55cm±・床面から掘り方底部までの深さ28cm±を計り、埋設土器を中心に良く焼成を受けている。

当住居址は「剥片貯蔵」の形態をもつ。出土したのは南東壁際にある小ピット中で、剥片数は25片を数える。

#### D II - 4 住居址 (図版17a・91e、写真図版18b・98ab)

抜根の際に大きく破壊を受け、西壁の一部を除いては壁が把握できなかった。したがって平面形の詳細は不明であるが、柱穴群の配置からは2.60m±の規模が推定される。埋土の観察ができるのも一部分に限られたことから土層断面図の作成は省略したが、炭化物を含む暗褐色土層が主体を占める。壁高は西壁で45cm±を計る。床面も部分によっては削平を受けていたが、柱穴は次の6個があげられる。P<sub>1</sub>(径22cm±・深さ19cm±)・P<sub>2</sub>(径50cm±・深さ45cm±)・P<sub>3</sub>(径18cm±・深さ15cm±)・P<sub>4</sub>(径21cm±・深さ15cm±)・P<sub>5</sub>(径40cm±・深さ23cm±)・P<sub>6</sub>(径20cm±・深さ16cm)。これらのピット群が主柱穴の全体あるいは一部を占めると考えられるが詳細は明らかでない。

炉は住居址中央部からやや南側に位置すると推定される。浅皿状の形態をもつもので、北西方向に開口する斜位埋設土器を伴う。床面から掘り方底部までの深さは35cm±を計り、埋設土器を中心に良く焼成を受けている。

#### D II - 5 住居址 (図版17b・91f、写真図版19a・98cd)

3.30m±×3.00m±の規模をもち、不整な七角形の平面形を呈している。埋土は暗褐色土層が主体を占め、部分的に褐色土層と黒褐色土層をはさんで上下2層に分けられる。層相に大きな違いはみられず、焼土・炭化物を含んでいる。壁高は西壁で35cm±・東壁で25cm±を計る。柱穴は6個が確認された。P<sub>1</sub>(径20cm±・深さ13cm±)・P<sub>2</sub>(径20cm±・深さ13cm±)・P<sub>3</sub>(径30cm±・深さ18cm±)・P<sub>4</sub>(径20cm±・深さ36cm±)・P<sub>5</sub>(径35cm±・深さ22cm±)・P<sub>6</sub>(径25cm±・深さ41cm±)。これらのピット群がほぼコーナー近くに位置して主柱穴を構成すると考えられる。

炉は住居址中央部からやや東側に位置している。石囲い炉の形態をもつもので、直立埋設土器を伴う。炉の東側を陥し穴状遺構に切られ構成礫の一部を欠いている。残存する礫は6個で、10cm±～20cm±の大きさの安山岩類垂角礫が大部分である。礫の外縁間の規模は45cm±×35cm±と推定され、ほぼ長方形を呈していたものであろう。埋設土器を中心として炉内は良く焼成を受け一部は炉外にも及ぶ。埋設土器の体部の一部には、打ち欠かれた土器片が二重にめぐり、その土器片の大きさは3cm±～5cm±である。

床面上からの出土遺物としては、炉の北側と北西側に 2 個体の深鉢形土器がある。

当住居址は D II - 105 と D II - 106 の各陥し穴状遺構に切られ、南壁の一部で重複する D II - 6 住居址との新旧関係は不明である。また東壁の一部で重複すると推定される D II - 7 住居址との新旧関係も不明である。

#### D II - 6 住居址 (図版18a、写真図版19b)

3.10m ± × 2.80m ± の規模をもつ。北～北東壁を消失しているが、不整な五角形に近い平面形を呈していたと推定される。埋土は、焼土・炭化物を含む暗褐色土層のほぼ単層で占められており、土層断面図の作成は省略した。壁高は西壁で 35cm ± を計る。柱穴は P<sub>1</sub> (径 35cm ± ・ 深さ 36cm ±) ・ P<sub>2</sub> (径 30cm ± ・ 深さ 24cm ±) ・ P<sub>3</sub> (径 30cm ± ・ 深さ 24cm ±) の 3 個が壁際に検出されただけであり、柱穴の配置については不明である。

当住居址は他の遺構と重複する部分が多く炉は検出されなかった。

なお重複する D II - 106 陥し穴状遺構には切られているが、D II - 5 住居址と D II - 105 陥し穴状遺構との新旧関係は不明である。同様に、住居址中央部からやや南側にある不整形ピット (径 80cm ± ・ 深さ 20cm ±) とは共伴関係も含めて新旧関係は不明である。当住居址内の北壁際では D II - 51 フラスコ形ピットとも重複するが、その新旧関係は不明である。D II - 51 フラスコ形ピットは東側の一部が D II - 106 陥し穴状遺構とも重複する。しかし、調査上の手違いのために D II - 51 フラスコ形ピットの平面図は作成されず、遺構図版には示されていない。

#### D II - 7 住居址 (図版18b・92a、写真図版20a)

第 IV 層火山灰層上面を床面としている。第 II 層中では平面形を確認できず第 IV 層上面を検出面としたために壁の検出はできなかった。平面形は不明であるが第 II 層とほぼ同様の暗褐色土層が覆っていたと看做し得る。炉の位置から想定すると柱穴は、P<sub>1</sub> (径 36cm ± ・ 深さ 39cm ±) ・ P<sub>2</sub> (径 24cm ± ・ 深さ 26cm ±) ・ P<sub>3</sub> (径 28cm ± ・ 深さ 22cm ±) ・ P<sub>4</sub> (径 23cm ± ・ 深さ 56cm ±) ・ P<sub>5</sub> (径 28cm ± ・ 深さ 33cm ±) など構成され则认为される。

その柱穴配置から推定すると、炉は住居址中央部からやや南側に位置する。浅皿状の形態をもつもので、直立埋設土器を伴う。炉縁径は 40cm ± でほぼ円形を呈する。埋設土器の上半部が良く焼成を受けている。

当住居址は西側で D II - 5 住居址と一部重複すると考えられるが、新旧関係は不明である。

#### D II - 8 住居址 (図版19a・92b、写真図版21ab・98ef)

3.60m ± × 3.50m ± の規模をもつと推定される。平面形では南西壁にやや角張ったコーナーをもつが、東壁を消失していることや重複する遺構に切られていることなどから平面形の詳細は不明である。埋土は、焼土・炭化物を含む暗褐色土層のほぼ単層で占められており、土層断面図の作成は省略した。壁高は西壁で 16cm ± を計る。柱穴としては P<sub>1</sub> (径 23cm ± ・ 深さ 30cm ±)

・P<sub>2</sub> (径26cm±・深さ24cm±)・P<sub>3</sub> (径27cm±・深さ46cm±) の3個がある。これらのピット群が支柱穴の一部を構成すると考えられる。北壁際に並んだP<sub>4</sub> (径38cm±・深さ46cm±)・P<sub>5</sub> (径35cm±・深さ66cm±) のもつ内容や全体の柱穴配置の詳細は不明である。

炉は住居址中央部からやや東側に位置する。浅皿状の形態をもつもので、ほぼ西北向に開口する斜位埋設土器を伴う。またその埋設土器の下底部に接するように別個体の土器底部が埋置される。陥し穴状遺構によって埋設土器の上半部を含む炉の中心部が壊わされている。推定の炉縁径は長軸方向で85cm±を計る。床面から掘り方底部までの深さは30cm±を計り、埋設土器を中心に良く焼成を受けている。なお陥し穴状遺構に切られた西側炉内に一括の深鉢形土器が押し潰された状態で出土したが、炉に伴う施設ではない。

当住居址は「出入口」状施設をもつ。炉の東縁から55cm±東側にあり、本来は壁に接していたと考えられる。2個の安山岩類亜角礫が側縁部を上にして埋置される。礫は長さが30cm±あり、やや扁平である。構成礫の内側間で55cm±・外側間では65cm±を計る。

なお当住居址は、重複するD II - 108陥し穴状遺構とD II - 53フラスコ形ピットに切られている。

#### D II - 9住居址 (図版19b・92c、写真図版20b・99ab)

壁の大半を消失しており、規模・平面形の詳細は不明である。しかし南面壁にコーナーをもつことから、円形や楕円形以外の平面形が推定される。埋土を占めているのは焼土・炭火物を含む暗褐色土層のほぼ単層であり、土層断面図の作成は行なわなかった。壁高は南西コーナー付近で12cm±を計る。柱穴としては、P<sub>1</sub> (径22cm±・深さ60cm±) が1個が検出されただけで、柱穴配置の詳細は明らかでない。

炉は南壁から1.00m±北側に検出されたが、住居址中央部からやや東側に位置すると考えられる。浅皿状の形態をもつもので、ほぼ南方向に開口する斜位埋設土器を伴う。炉縁径は55cm±×40cm±、床面から掘り方底部までの深さは25cm±を計る。埋設土器を中心に良く焼成を受けている。

当住居址はD II - 114陥し穴状遺構に切られており、炉のすぐ北側にある不整形ピット (径135cm±×90cm±・深さ15cm±) とは共伴関係も含めて新旧関係は不明である。

#### D II - 10住居址 (図版16bc、写真図版22a・99e)

4.80m±×4.20m±の規模をもつ。他の遺構との重複が著しく、壁と床の大部分を消失しているために平面形の詳細は不明である。しかし残存する壁の輪郭線からは多角形のものが考えられる。埋土は、上層から黒褐色土層、暗褐色土層、黄褐色土層が主体を占める。いずれも焼土や炭化物・土器片・礫等を含む。壁高は西壁で45cm±・東壁で15cm±を計る。柱穴としては西壁際にあるP<sub>1</sub> (径27cm±・深さ40cm±) があげられるだけで、柱穴配置は不明である。

炉は住居址中央部から北東側に位置している。整理中の現時点で炉断面図の所在が不明であるために詳細を明らかにできないが、ほぼ南西方向に開口する斜位埋設土器を伴っている。焼土は140cm±×95cm±の範囲に広がり、その北東端に土器が埋設される。炉の主体部は西側に若干沈むが、炉が構築されていたのが風倒木痕の上であるために、その沈下によるものである。

当住居址は、DⅡ-55フラスコ形ピットと風倒木痕とによって住居址中央部から南側を大きく切られている。DⅡ-54ビーカー形ピット・DⅡ-109とDⅡ-110の各陥し穴状遺構にも一部を切られている。なお炉の下とその南側にみられる不整形ピットは、当住居址が構築される以前の風倒木痕である。

#### DⅡ-11住居址（欠番）

DⅡ-10住居址の平面形を検出した時点では、重複する小形の住居址として遺構登録をしたが、DⅡ-10住居址の南側部分を大きく切る風倒木痕であることが判明したため欠番とした。

#### DⅡ-12住居址（図版20a・92d、写真図版22b・99cd）

壁が破壊され、第Ⅱ層暗褐色土層～黒褐色土層で覆われていた住居址で、痕跡として炉跡と柱穴群が検出されたにすぎない。平面での形状は不明であるが柱穴配置からは4.40m±の規模と推定される。炉の位置から想定される柱穴は次の4個である。P<sub>1</sub>（径40cm±・深さ39cm±）・P<sub>2</sub>（径37cm±・深さ42cm±）・P<sub>3</sub>（径55cm±・深さ58cm±）・P<sub>4</sub>（径54cm±・深さ39cm±）。これらのピット群が支柱穴の一部を構成すると考えられるが、柱穴配置の全体については明らかでない。

炉は住居址中央部からやや北側にあると推定される。直立埋設土器だけで構成される形態のものである。床面から掘り方底部までは深さ20cm±を計り、埋設土器を中心に良く焼成を受けている。

（三浦 謙一）

### DⅢ区（住居址実数12棟）

#### DⅢ-1住居址（図版21a・92e、写真図版23a・99f）

西壁と南壁の輪郭線の一部が把握されるが、平面形の詳細については明らかでない。柱穴群の配置からは5.50m±の規模が推定される中形の住居址である。埋土は上位からクロボク層、焼土・炭化物を含む黒褐色土層の順で構成される。壁高は西壁で30cm±を計る。炉の位置から想定される柱穴は、P<sub>1</sub>（径61cm±・深さ50cm±）・P<sub>2</sub>（径32cm±・深さ57cm±）・P<sub>3</sub>（径40cm±・深さ45cm±）・P<sub>4</sub>（径30cm±・深さ41cm±）・P<sub>5</sub>（径30cm±・深さ41cm±）の5個がある。これらのピット群が支柱穴の一部を構成するものであろうが、柱穴配置の詳細については不明である。他の柱穴状のピットは配置からはそのもつ内容が明らかでない。

炉の住居址内における位置は中央部から北側に寄ると考えられる。深鉢状の形態をもつもので、南西方向に開口する斜位埋設土器を伴う。炉縁径は60cm±、床面から掘り方底部までは40cm±を計る。埋設土器とともに炉底・炉壁が良く焼成を受けている。

当住居址のほぼ中央部から南側の床面上には、60cm±×45cm±の広がりをもつ現地性焼土がみられる。

なお当住居址は重複する多くの遺構に切られている。それらはCⅢ-118とCⅢ-123・CⅢ-125・CⅢ-126の各陥し穴状遺構およびDⅢ-83フラスコ形ピットである。

#### DⅢ-2住居址(図版20bc・92f、写真図版23b・100a)

2.80m±×2.60m±の規模をもち、不整な六角形の平面形を呈する小形の住居址である。埋土の上位は焼土・炭化物を多く含む暗褐色土層、下位は褐色土層で占められる。壁高は西壁で10cm±・東壁で15cm±を計る。壁際に位置するP<sub>1</sub>(径18cm±・深さ16cm±)・P<sub>2</sub>(径40cm±・深さ26cm±)・P<sub>3</sub>(径20cm±・深さ16cm±)・P<sub>4</sub>(径50cm±・深さ47cm±)・P<sub>5</sub>(径25cm±・深さ27cm±)の5個が支柱穴を構成すると考えられる。

炉は住居址中央部からやや南東側に位置している。浅皿状の形態をもつもので、直立埋設土器を伴う。その埋設土器の南東側に接して、側縁部を上にした大きさ15cm±の小礫が埋置される。炉縁径は80cm±×60cm±、床面から掘り方底部までは深さ35cm±を計る。埋設土器や炉底が良く焼成を受けている。

床面上からの出土遺物には炉の西側に台石がある。

当住居址は、重複するDⅢ-53フラスコ形ピットに南東壁の一部を切られている。

#### DⅢ-3住居址(図版21bc・93a、写真図版24ab・100b)

4.50m±×4.25m±の規模をもち、不整な六角形のプランを呈している。埋土の上部では焼土・炭化物を含む褐色土層、下部では同様の暗褐色土層の2層を主な構成層とする。壁高は西壁で38cm±・東壁で34cm±を計る。柱穴は次の5個が検出されている。P<sub>1</sub>(径31cm±・深さ51cm±)・P<sub>2</sub>(径28cm±・深さ60cm±)・P<sub>3</sub>(径25cm±・深さ50cm±)・P<sub>4</sub>(径27cm±・深さ19cm±)・P<sub>5</sub>(径30cm±・深さ50cm±)。これらが支柱穴を構成する。なおP<sub>5</sub>とP<sub>1</sub>の間のコーナ一壁際に位置した柱穴は当住居址に切られている陥し穴状遺構を掘り込んでおり、平面図には記入されていない。したがって実際に支柱穴を構成するのは6個である。

炉は住居址中央部からやや東側に位置する。東側炉縁に厚さ10cm±の黄褐色細礫が載る摺鉢状の形態をもつもので、直立埋設土器を伴う。埋設土器は2個が配置される。下位には30cm±の器高をもつ深鉢形土器を直立させ、上位にはそれよりもやや小形の深鉢形土器が直立している。埋設土器底部までは床面から40cm±と深い。炉縁径は70cm±×60cm±を計り、炉内には焼土が堆積していた。

当住居址はDⅢ-103陥し穴状遺構を切って貼床しているが、DⅢ-104陥し穴状遺構には切られている。DⅢ-4住居址とも重複する可能性が考えられるが、新旧関係は不明である。

#### DⅢ-4住居址 (図版22a・93b、写真図版25a・100cd)

壁が破壊され、第Ⅱ層暗褐色土層～黒褐色土層で覆われていたもので、痕跡として炉跡と柱穴を残すだけである。平面形は不明であるが、柱穴配置からは4.00m±の規模と推定される。炉の位置から想定される柱穴は、P<sub>1</sub>(径40cm±・深さ45cm±)・P<sub>2</sub>(径37cm±・深さ40cm±)・P<sub>3</sub>(径26cm±・深さ41cm±)・P<sub>4</sub>(径40cm±・深さ36cm±)の4個である。これらのピット群が支柱穴の一部を構成すると考えられるが、詳細は不明である。

炉は住居址中央部からやや北側に位置すると推定される。浅皿状の形態をもつもので、直立埋設土器を伴う。炉縁径は50cm±あり、ほぼ円形を呈する。床面から深さ42cm±の掘り方が認められ、埋設土器を中心として良く焼成を受けている。

当住居址の推定プランではDⅢ-54と76の各フラスコ形ピットと重複し、またDⅢ-3住居址・DⅢ-77ピーカー形ピットと重複する可能性もあるが、新旧関係は不明である。

#### DⅢ-5住居址 (図版23ab・93c、写真図版26ab・27ab・100e)

5.00m±×4.50m±の規模をもつと推定される。住居址の東側約 $\frac{1}{2}$ 以上が壁をほぼ消失しているが、残存する壁の輪郭線および柱穴の配置から七～八角形のプランを呈すると考えられる。埋土を構成するのは、火山灰ブロックや炭化物を多く含む暗褐色土層のほぼ単層であることや住居址中央部でも5cm±の層厚しかないことから、土層断面図の作成は省略した。壁高は西壁で10cm±である。柱穴としてあげられるのは次の10個である。P<sub>1</sub>(径41cm±・深さ30cm±)・P<sub>2</sub>(径48cm±・深さ23cm±)・P<sub>3</sub>(径42cm±・深さ32cm±)・P<sub>4</sub>(径25cm±・深さ40cm±)・P<sub>5</sub>(径20cm±・深さ21cm±)・P<sub>6</sub>(径35cm±・深さ38cm±)・P<sub>7</sub>(径45cm±・深さ37cm±)・P<sub>8</sub>(径35cm±・深さ50cm±)・P<sub>9</sub>(径21cm±・深さ37cm±)・P<sub>10</sub>(径36cm±・深さ30cm±)。これらのうちP<sub>1</sub>～P<sub>6</sub>の6個は壁際に位置してそれぞれコーナーに対応する。それに対しP<sub>7</sub>～P<sub>10</sub>の4個は住居址内部で台形状の柱穴配置を示すが、拡張や重複を想定できないことから、P<sub>7</sub>～P<sub>10</sub>は支柱穴、P<sub>1</sub>～P<sub>6</sub>は支柱穴と考えられる。なおP<sub>1</sub>とP<sub>3</sub>との間に想定されるコーナーには柱穴が検出されなかった。

床面上に多量の炭化材や現地性の焼土が分布することから焼失住居址と考えられる。炭化材の集中は南西壁際に著しい。壁の一辺に沿い比較的良く残存する材の数本は、現存規模で長さ40cm±～50cm±・幅10cm±を計る。その他にも北西部壁際と南東部の壁際と推定される位置、炉の周辺に炭化材の集中した箇所がみられるが量的に多くはない。焼土はそれらの周辺に主にみらるが、いずれも小規模で、床面積に対する割合はそれ程大きくはない。最大のものは炉に接した東側にみられ、径70cm±×40cm±の広がりをもつ。一部では炭化材の下や縁の部分の床面

上に焼成がみられ、焼失による現地性焼土の形成がうかがえる。

炉は住居址中央部からやや北東側に位置する。摺鉢状の形態をもつもので、ほぼ南西方向に開口する斜位埋設土器を伴う。炉縁径は100cm±×60cm±を計り、埋設土器を中心として良く焼成を受けている。

当住居址の南壁近くの床面上からは台石が2個出土した。

なお当住居址は重複するDⅢ-106陥し穴状遺構を切って貼床していたが、DⅢ-79ピーカー形ピットには切られていた。

#### DⅢ-6住居址（図版24a・93d、写真図版25b・100f）

床面すれすれまで破壊を受け痕跡として炉と柱穴が残っているだけである。平面での形状や埋土の内容は不明である。しかし柱穴群の配置からは5.00m±の規模をもつと考えられる。炉の位置から推定される柱穴群は次の6個である。P<sub>1</sub>（径35cm±・深さ42cm±）・P<sub>2</sub>（径50cm±・深さ43cm±）・P<sub>3</sub>（径28cm±・深さ31cm±）・P<sub>4</sub>（径45cm±・深さ58cm±）・P<sub>5</sub>（径45cm±・深さ58cm±）・P<sub>6</sub>（径45cm±・深さ50cm±）。規模と配置の点から、これらのピット群が主柱穴を構成するものと考えられる。

炉は住居址中央部よりやや、北側に位置すると推定される。浅皿状の形態を示すが、埋設土器等の施設は伴っていない。炉縁径は50cm±でほぼ円形を呈する。この炉には径92cm±・深さ40cm±の掘り方が認められる。内部は汚れ火山灰で充填され、その上部が良く焼成を受けている。焼土層中には土器の小破片数点が含まれていた。

推定される規模からすると当住居址は、DⅢ-109とDⅢ-110・DⅢ-111の各陥し穴状遺構およびDⅢ-74フラスコ形ピットと重複するが、新旧関係は不明である。

#### DⅢ-7住居址（図版25abc、93e、写真図版28ab・101a・169b）

この住居址は拡張住居で、2個の炉跡と2群の柱穴群が検出されている。拡張以前を〈第一次住居址〉、拡張以後を〈第二次住居址〉として記述する。

##### 〈第一次住居址〉

痕跡として柱穴と壁の一部、炉跡を残す。柱穴群の配置からは4.70m±の規模と不整な九角形の平面形をもつと推定される。柱穴としては次の11個があげられる。P<sub>1</sub>（径22cm±・深さ60cm±）・P<sub>2</sub>（径18cm±・深さ22cm±）・P<sub>3</sub>（径20cm±・深さ40cm±）・P<sub>4</sub>（径24cm±・深さ53cm±）・P<sub>5</sub>（径38cm±・深さ44cm±）・P<sub>6</sub>（径26cm±・深さ47cm±）・P<sub>7</sub>（径22cm±・深さ46cm±）・P<sub>8</sub>（径22cm±・深さ58cm±）・P<sub>9</sub>（径27cm±・深さ30cm±）・P<sub>19</sub>（径17cm±・深さ23cm±）・P<sub>20</sub>（径23cm±・深さ21cm±）。以上のうちP<sub>1</sub>～P<sub>9</sub>が九角形の柱穴配置をもち主柱穴を構成する。P<sub>19</sub>・P<sub>20</sub>はP<sub>6</sub>とP<sub>7</sub>の間に位置する小ピットである。なおP<sub>1</sub>をはさんだP<sub>2</sub>とP<sub>9</sub>との部分には当住居址の北壁の痕跡がかすかに残されている。



炉跡は〈第二次住居址〉の炉の南東縁に接した浅皿状のピット（径65cm±・深さ22cm±）と考えられる。炉縁の一部に黄褐色細礫が薄く載る痕跡を残すだけで、焼成痕や埋設土器等は認められない。内部に充填されていた埋土については明らかでなかった。

〈第二次住居址〉

6.30m±×6.00m±の規模をもち、やや不整な九角形の平面形を呈する大形の住居址である。埋土の構成はおおむね次の通りである。焼土・炭化物を含む褐色土層を最上層とし以下、汚れ火山灰層－暗褐色土層－汚れ火山灰層－暗褐色土層－汚れ火山灰層の順序に交互に堆積している。床面を覆う汚れ火山層には多量の炭化物が含まれる。壁高は西壁で50cm±・東壁で20cm±を計る。柱穴は次の11個があげられる。P<sub>10</sub>（径27cm±・深さ60cm±）・P<sub>11</sub>（径17cm±・深さ60cm±）・P<sub>12</sub>（径20cm±・深さ31cm±）・P<sub>13</sub>（径37cm±・深さ53cm±）・P<sub>14</sub>（径24cm±・深さ34cm±）・P<sub>15</sub>（径27cm±・深さ55cm±）・P<sub>16</sub>（径26cm±・深さ26cm±）・P<sub>17</sub>（径30cm±・深さ44cm±）・P<sub>18</sub>（径20cm±・深さ74cm±）・P<sub>21</sub>（径30cm±・深さ30cm±）・P<sub>22</sub>（径22cm±・深さ68cm±）・P<sub>23</sub>（径18cm±・深さ45cm±）。これらのピット群のうちP<sub>10</sub>～P<sub>18</sub>は各コーナーの壁際に位置して主柱穴を構成し、〈第一次住居址〉の主柱穴P<sub>1</sub>～P<sub>9</sub>にそれぞれ対応する関係にある。したがって〈第二次住居址〉は〈第一次住居址〉のほぼ放射線上に拡張がなされたものと言える。なおP<sub>21</sub>～P<sub>23</sub>の3個はP<sub>10</sub>・P<sub>11</sub>・P<sub>18</sub>とほぼ近接するが、その関係及び柱穴配置に占める位置については明らかでない。

炉は住居址中央部からやや南東側に位置する。炉縁には薄い黄褐色細礫が載る浅皿状の形態をもつもので、直立埋設土器を伴う。埋設土器は上下に2個が配置される。下位には体部下半～底部をもつ深鉢形土器を直立させ、その上位に体部のみを用いた土器を一部接する形で直立させている。炉縁径は95cm±×78cm±、床面から掘り方底部までは深さ50cm±を計る。上位の埋設土器を中心に炉底・炉壁は良く焼成を受けている。

床面上には多量の炭化材と現地性焼土が広く分布していることから、焼失住居址と認められる。炭化材は住居址内ほぼ全体に検出されるが、多くは形を失つしている。しかし壁に沿う形で材が良く残り、それらは残存部分では50cm±～70cm±・幅10cm±～25cm±の規模をもつ割り材とみられる。炭化材の検出状況をみると、住居址中央部ではほぼ床面に密着している。壁際の炭化材は大きくは上下2層に亘って分布し、その間には焼土・炭化物を多く含む層厚10cm±の暗褐色土層をはさむ。その場合上位の炭化材直下には焼成面が形成されない。そして炭化材が壁際から中央部へ連続する場合には、壁寄りでは暗褐色土層をはさみながら漸次傾斜して床面密着の状態になることが観察される。

当住居址の2カ所に「剥片貯蔵」の形態が認められ、柱穴P<sub>23</sub>の埋土上部（No.1）では26片、No.2の小ピット中では22片の剥片数を数える。

埋土中からは多量の出土土器がある。いずれも褐色～暗褐色土層中からの出土で、その他にも水晶や石棒状土製品・クルミの炭化物等が出土している。

当住居址は重複するDⅢ-116陥し穴状を切って貼床を施し、東壁では不整形ピットをも切っている。しかしDⅢ-60フラスコ形ピットとの新旧関係は不明であり、東壁のやや内側にある不整形ピットとは共伴関係も含めて新旧関係は不明である。

#### DⅢ-8住居址（図版22bc・94a、写真図版29ab・101b）

南側ほぼ半分および北西コーナーで大形ピット類や陥し穴状遺構と重複するため長軸の規模は推定であるが、4.45m±×3.60m±の長方形の平面形を呈する。埋土の最上層を占めるのは“湯沢パターン”の火山灰層であり、住居址中央部から南北3.30m±×東西2.70m±・中央部の層厚35cm±の広がりとして厚さをもって分布する。その下位を主に占めるのは焼土・炭化物を多量に含む褐色土層である。壁高は西壁で25cm±・東壁で20cm±を計り、床面は堅くしまっていた。

柱穴はP<sub>1</sub>（径25cm±・深さ50cm±）、P<sub>2</sub>（径34cm±・深さ20cm±）・P<sub>3</sub>（径33cm±・深さ37cm±）・P<sub>4</sub>（径20cm±・深さ58cm±）の4個が検出され、P<sub>1</sub>・P<sub>4</sub>は北側のコーナーからやや内側に入る位置、P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>は東壁と西壁の中央部壁際に位置して主柱穴の一部を構成する。配置的には南側の両コーナーにも2個が配置され、合計6個の柱穴群があると仮定されるが、大形ピット類との重複のため検出されなかった。

炉は住居址中央部からやや西側に位置する。摺鉢状の形態をもつもので、2個の埋設土器を伴う。その配置は西側炉縁に斜位埋設土器があつてほぼ北東方向に開口し、炉の中央部に直立埋設土器がある。東側と南側の炉縁を大形ピットに切られていることや一部掘り過ぎがあり、炉縁径は110cm±×65cm±と推定される。斜位埋設土器を中心として良く焼成を受けているのに対し、直立埋設土器には床面から深さ44cm±の掘り方が認められ、土器上半の一部が焼成を受けているにすぎない。

当住居址は「剥片貯蔵」の形態をもつ。出土地点は柱穴P<sub>2</sub>の埋土上部からで剥片数は34片を数える。

また、北壁際の床面上には110cm±×65cm±の範囲に現地性焼土が分布するのが認められる。

当住居址は多くの遺構と重複する。DⅢ-61とDⅢ-62・DⅢ-63・DⅢ-73の各フラスコ形ピット、DⅢ-121陥し穴状遺構などには切られている。DⅢ-64フラスコ形ピットとの新旧関係は不明である。

#### DⅢ-9住居址（図版24b・94b、写真図版30ab・101c）

径3.50m±の規模をもつ。しかし南東壁をDⅢ-10住居址に切られ、東側では壁の大部分を消失し、また北西壁では木根による攪乱を受けていることから、平面形の詳細は不明である。

埋土を占めるのは焼土・炭化物を含む暗褐色土層のほぼ単層であり、土層断面図の作成は行なわなかった。壁高は西壁で30cm±を計る。柱穴状のピットとしてはP<sub>1</sub>(径25cm±・深さ25cm±)・P<sub>2</sub>(径20cm±・深さ30cm±)の2個があげられるだけで、柱穴配置は不明である。

炉は住居址中央部のほぼ中央部に位置する。径70cm±×60cm±のほぼ円形を呈し、わずかに浅く窪む。北東側の炉外には炭化物を伴っている。良く焼成を受け炉面下5cm±～10cm±の深さにまで及んでいる。

#### D III-10住居址(図版26ab・94c、写真図版30a・31ab・101de・170e)

5.50m±×5.40m±の規模をもち、不整な七角形の平面形を呈する。埋土中には“湯沢パターン”の火山灰層を3層伴う。最上層にクロボク層がレンズ状に推積し、その下部に上位の火山灰層が分布する。規模は住居址ほぼ中央部から径170cm±・層厚20cm±を計る。褐色土層をはさんで住居址中央部からやや東側で径3.00m±・層厚15cm±の広がりを持つ中位の火山灰層が分布する。下位の火山灰層は褐色土層をはさんで床面のほぼ全面を覆う。層厚は中央部で7cm±、壁際に行くにしたがって層厚を増し最大層厚は40cm±を計る。壁高は西壁で60cm±・東壁で20cm±と高い。柱穴として確認されたのは次の13個である。P<sub>1</sub>(径30cm±・深さ20cm±)・P<sub>2</sub>(径40cm±・深さ65cm±)・P<sub>3</sub>(径30cm±・深さ62cm±)・P<sub>4</sub>(径22cm±・深さ18cm±)・P<sub>5</sub>(径22cm±・深さ56cm±)・P<sub>6</sub>(径25cm±・深さ68cm±)・P<sub>7</sub>(径18cm±・深さ56cm±)・P<sub>8</sub>(径25cm±・深さ23cm±)・P<sub>9</sub>(径30cm±・深さ45cm±)・P<sub>10</sub>(径18cm±・深さ34cm±)・P<sub>11</sub>(径24cm±・深さ26cm±)・P<sub>12</sub>(径18cm±・深さ50cm±)・P<sub>13</sub>(径35cm±・深さ68cm±)。これらのピット群のうちP<sub>1</sub>～P<sub>9</sub>の9個は壁際に位置して主柱穴を構成するものであろう。ただP<sub>7</sub>とP<sub>8</sub>は近接しており、いずれかの1個である可能性がある。P<sub>10</sub>～P<sub>13</sub>の4個は壁よりやや内側へ寄った位置にあり、柱穴配置においてどのような位置をもつものかは明らかでない。また南壁中央部のコーナーには柱穴が検出されなかった。

炉は住居址中央部からやや南側に位置する。浅皿状の形態を示し、やや北西方向に開口する斜位埋設土器を伴う。炉縁径は80cm±で平面形はほぼ円形である。床面から深さ38cm±の掘り方が認められ、埋設土器開口部の下方には体部下半から底部をもつ土器を直立させている。埋設土器や炉底、炉壁は良く焼成を受けていた。なお、埋設土器の開口部に一部が入り込む形で大きさ22cm±の垂角礫が存在するが、炉に伴うものではない。炉に近接した南東側には浅皿状のピット(径75cm±×65cm±・深さ20cm±)が検出された。床面から深さが27cm±ある掘り方内は火山灰が優占する褐色土層で一部が充填され、斜位埋設土器の残存部と考えられる土器が埋置されている。焼土の痕跡は認められないが、廃絶された炉跡であろう。しかし、当住居址の平面形や柱穴配置からは拡張・重複等は想定されず、炉だけの作り替えの可能性をもつが詳細は明らかでない。

住居址中央部からやや北西側床面上には最長部で50cm±を計る現地性の焼土が炭化材を伴って検出されているが、小規模である。

なお当住居址は、重複するDⅢ-9住居址を切っているが、北東壁にある浅皿状のピットとの新旧関係は不明である。

#### DⅢ-11住居址（図状26cd・94d、写真図版32ab・102ab）

3.10m±×2.60m±の規模をもち、不整な五角形に近い平面形を呈するが西壁がやや曲線的である。埋土の最上層には“湯沢パターン”の火山灰層を伴い、住居址ほぼ中央部から径150cm±・中央部での層厚14cm±の広がりや厚さで分布する。その下位は、火山灰が優占して焼土・炭化物を含む褐色土層が占め、最下部は同様の混入部を含む褐色土層・暗褐色土層・黒色土層などで構成される。壁高は西壁で25cm±・東壁で16cm±を計る。床面は木根による攪乱が著しいが、柱穴は、P<sub>1</sub>（径25cm±・深さ40cm±）・P<sub>2</sub>（径32cm±・深さ39cm±）・P<sub>3</sub>（径28cm±・深さ51cm±）・P<sub>4</sub>（径20cm±・深さ30cm±）などのピット群で構成される。

炉は住居址中央部からやや西側に位置する。東側炉縁には黄褐色細礫が薄く載って浅皿形の形態をもつもので、ほぼ東方向に開口する斜位埋設土器を伴う。炉縁径が55cm±のほぼ円形を呈し、埋設土器周辺がわずかに焼成を受けている。

当住居址中央部から北側床面上に2カ所、南側床面上に3カ所の小規模な現地性焼土が認められる。

なお床面上からは炉周辺に台石と石皿が出土している。

#### DⅢ-12住居址（写真図版102d）

第Ⅱ層暗褐色～黒褐色土層中に石囲い炉が検出されただけで、壁や柱穴は不明である。炉は一辺が55cm±を計り、ほぼ方形を呈している。構成礫数は9個で大きさは10cm±～20cm±である。礫は第Ⅱ層中に埋置され、その下底はほぼ第Ⅳ層火山灰層中に達している。しかし、炉内の暗褐色土層上面に層厚4cm±の焼土層が形成されることから、生活面は第Ⅱ層であると考えられる。

この炉に対しても平面図作成→土層断面図の作成を行なった。しかし調査上の手違いから座標軸線が不明で、検出区が明らかな以外正確な位置は不明である。（三浦 謙一）

### DⅣ区（住居址実数1棟）

#### DⅣ-1住居址（図版27ab・94e、写真図版33a・102ce・121b）

4.00m±×3.90m±の規模をもち、不整な六角形に近い平面形を呈している。南東壁の一部は木根による攪乱を受けていた。埋土中には“湯沢パターン”の火山灰層がみられる。しか

し、その火山灰層とその上位のクロボク層が一部削平を受け、現代の置土が載る。クロボク層は西壁から層厚10cmの厚さで分布するが住居址中央部付近では消滅する。“湯沢パターン”の火山灰層は住居址中央部から西側に大きく分布して、径1.80m±・中央部での層厚15cm±の広がりもつ。その下位を占めるのは焼土・炭化物を含む褐色土層と暗褐色土層の2層である。壁高は西壁で40cm±・東壁で12cm±を計る。柱穴は次の6個が壁際に配置される。P<sub>1</sub>(径19cm±・深さ13cm±)・P<sub>2</sub>(径36cm±・深さ48cm±)・P<sub>3</sub>(径23cm±・深さ27cm)・P<sub>4</sub>(径25cm±・深さ31cm±)・P<sub>5</sub>(径28cm±・深さ17cm±)・P<sub>6</sub>(径27cm±・深さ17cm±)。全体の柱穴配置がつかめないためこれらのピット群の位置づけは明らかでない。

炉は住居址中央部からやや北東側に位置する。浅皿状の形態を示し、直立埋設土器を伴う。埋設土器の東側にほぼ接して安山岩類亜角礫が1個載る。礫は長さ17cm±・厚さ6cm±とやや扁平である。炉縁径は50cm±でほぼ円形を呈し、埋設土器土器を中心として炉内が良く焼成を受けている。この炉の東側には径55cm±×45cm±・深さ15cm±の浅皿状ピットがある。壁の一部に焼成痕が認められることや位置・形態から廃絶された炉の痕跡と考えられる。しかし、平面形や柱穴配置からは拡張や重複が想定できず、炉だけの作り替えの可能性をもつが詳細は明らかでない。

北東壁際に「出入口」状施設を伴う。長さ28cm±の長大な礫2個が側縁部を上にして埋置され、床面では4cm±の高さを残している。構成礫の内側間で36cm±・外縁間で55cm±を計る。

床面上からの遺物としては炉の西側に一括の深鉢形土器2個体が出土している。

重複するDⅣ-53とDⅣ-60ピーカー形ピットは当住居址に切られ、一部には貼床の痕跡が認められる。

(三浦 謙一)

## EⅡ区(住居址実数29棟)

### EⅡ-1住居址(図版27c・95a、写真図版102f)

2.9m±×2.6m±の規模をもち、不整な五角形に近い形状を示す住居址である。しかし全体的に、壁の輪郭線ははっきりとしたものではない。埋土は炭化物を多く含む暗褐色土層で構成されていたが、単層であるために、Field Cardに性状を記載したのみで、土層断面図の作成は省略した。壁高は西壁10cm±・東壁5cm±である。柱穴は、P<sub>1</sub>(径60cm±・深さ35cm±)・P<sub>2</sub>(径40cm±・深さ16cm±)などのピットで一部が構成されるものとみられる。他のピットはいずれも浅く、柱穴として把握することはできなかった。

炉は住居址中央部よりやや北東に位置している。摺鉢状の形態をもつもので、南西方向に開口する斜位埋設土器を伴う。礫や黄褐色細礫は使用されていない。炉縁径は55cm±、床面から

斜位埋設土器下底部までの深さは20cm±を計る。斜位埋設土器の上に乗る汚れ火山灰は焼成を受けているが、炉壁や炉底には焼成痕は認められない。炉内の埋土は、微細な焼土粒を含む黒褐色土層で構成されている。

この住居址はD II - 111 陥し穴状遺構と北部で、またE II - 101 陥し穴状遺構と西南部で壁を接しているようにみえるが、これはともに壁が崩壊した後に、それぞれの輪郭線がつながった結果であると考えられる。

#### E II - 2 住居址 (図版28ab・95b、写真図版33b・103a・168c)

4.0m±×3.7m±の規模をもつ、若干楕円形気味の住居址である。埋土上部には“湯沢パターン”の火山灰層を伴う。この火山灰層は住居址中央部より少し南側によった地点に、東西1.8m±×南北1.3m±・中央部での層厚10cm±の広がりをもって分布している。火山灰層中には微細な炭化物が多く含まれている。下位の埋土は主に、炭化物の細粒を多量に含む明褐色土層で構成されている。壁高は、北壁10cm±・東壁15cm±・南壁18cm±・西壁20cm±を計る。柱穴は、P<sub>1</sub>(径35cm±・深さ20cm±)・P<sub>2</sub>(径40cm±・深さ30cm±)・P<sub>3</sub>(径45cm±・深さ30cm±)・P<sub>4</sub>(径20cm±・深さ27cm±)・P<sub>5</sub>(径40cm±・深さ32cm±)などのピット群で構成されるものとみられる。他の柱穴は、E II - 51 フラスコ形ピット・E II - 52 フラスコ形ピット・E II - 110 陥し穴状遺構などにより切られているものと推定される。

炉は住居址中央部よりやや東側に位置している。摺鉢状の形態をもつもので、ほぼ西北方向に開口する斜位埋設土器を伴う。炉縁径は75cm±、床面から斜位埋設土器下底部までの深さは25cm±を計る。炉の断面図には載っていないが、斜位埋設土器の長軸方向の北西炉縁部には、長さ20cm±の安山岩類垂角礫が埋置されている。斜位埋設土器の上には現地性の焼土塊が存在し、炉も全体にわたってよく焼成を受けている。また、埋設土器下位の掘り方内には、別個体の幅広の土器片が横たわっていた。

この住居址では、壁際の2カ所のピットにおいて「剥片貯蔵」形態がみられた。一つ(No.1)は柱穴P<sub>4</sub>に接する形で存在するピットP<sub>5</sub>(径20cm±・深さ35cm±)内のもので、ここでは総数75個の剥片が一括出土している。剥片類は床面と同レベルのところに集中しているが、ピットの底部に至るまでかなりの数が存在した。他の一つ(No.2)は柱穴P<sub>5</sub>に接する床面直上から出土したもので、8個の剥片からなる。P<sub>5</sub>の埋土中にも、若干の剥片類が存在した。

また、北壁に近い床面上からは一括土器が出土している。

当住居址と切り合い関係を示しているものに、E II - 51 フラスコ形ピット・E II - 52 フラスコ形ピット・E II - 110 陥し穴状遺構がある。これらの3遺構はいずれも、当住居址よりも新しいものであることが確認されている。

#### E II - 3 住居址 (図版29a・95c、写真図版34a・103b)

北壁部分が消滅しているために詳細は不明であるが、推定3.0m±×2.6m±の規模をもち、平面形が楕円の形状を示す住居址であると思われる。埋土は暗褐色土層で構成されていたが、単層であるために、Field Card に性状を記載したのみで、土層断面図の作成は省略した。壁高は、東壁10cm±・南壁28cm±・西壁20cm±を計る。柱穴は明確なものはみいだすことができなかったが、P<sub>1</sub>（径25cm±・深さ47cm±）・P<sub>2</sub>（径25cm±・深さ18cm±）などのピットで一部が構成されているものと考えられる。東南壁は一部であるが攪乱を受けている。

炉は住居址のほぼ中央部に位置している。直立埋設土器だけで構成されるもので、黄褐色細礫や礫の使用はみられない。炉縁の下部には、部分的なものであるが、2個の土器片がほぼ直立に埋設されている。炉縁径は53cm±、床面から直立埋設土器底部までの深さは25cm±を計る。直立埋設土器の胴部下半に至るまで、炉は全体にわたってかなりの焼成を受けている。

#### E II - 4 住居址（図版28c d・95d、写真図版34b・103c）

この住居址は保存地域となる緑地帯にかかったため、西壁は検出しなかった。そのために詳細は不明であるが、壁の輪郭線と柱穴の配置から、推定7.5m±×5.6m±の規模をもち、平面形が楕円の形状を示す住居址であると考えられる。埋土には“湯沢パターン”の火山灰層を伴う。この火山灰層は住居址中央部より少し北側によった位置に、東西4.5m±×南北4.3m±・中央部での層厚20cm±の広がりと厚さをもって分布している。この層の上面は、荷馬車による木材の搬出路にあたっていたために、全体的に激しい攪乱を受けていた。住居址中央部よりやや北東の位置では、粒径5cm±～10cm±の亜角～円の形状を示す安山岩類・凝灰岩類が、この火山灰層中に密集して存在している状況が観察された。礫原皮中にも火山灰が隙間なく入りこんでいる状態から、これらの礫群の起源は黄褐色火山灰層中の暗色帯の一部にみられる崖錐性の堆積物にあると推定される。火山灰層下位の埋土は、多量の炭化物を含む茶～暗褐色土層で構成されているが、中央部では漸次消滅し、火山灰層が直接床面に載る在り方を示している。壁高は北壁12cm±・東壁10cm±・南壁30cm±である。柱穴として確認されたピットは全部で10個ある。これらの中で、P<sub>7</sub>（径55cm±・深さ62cm±）・P<sub>2</sub>（径45cm±・深さ58cm±）・P<sub>8</sub>（径33cm±・深さ50cm±）・P<sub>9</sub>（径25cm±・深さ37cm±）・P<sub>10</sub>（径28cm±・深さ36cm±）のピット群が主柱穴を、またP<sub>1</sub>（径40cm±・深さ55cm±）・P<sub>3</sub>（径30cm±・深さ53cm±）・P<sub>4</sub>（径25cm±・深さ45cm±）・P<sub>5</sub>（径35cm±・深さ44cm±）・P<sub>6</sub>（径25cm±・深さ55cm±）のピット群が壁柱穴をそれぞれ構成するものとみられる。東壁が2基のフラスコ形ピットに切られていることや、西壁を検出していないことなどにより、確実なことは言えないが、上記の柱配置からすれば、東壁よりにさらに1個の主柱穴が、西壁よりにさらに1個の壁柱穴が存在するものと考えられる。この仮定に立てば、この住居址は主柱穴が6個、壁柱穴が6個で構成されているものとみることが可能である。

炉は住居址中央部よりやや東側に位置している。浅皿状の形態をもつもので、西方向に開口する斜位埋設土器を伴う。西側炉縁部には黄褐色細礫が載る。炉縁径は85cm±、床面から斜位埋設土器下底部までの深さは23cm±である。炉は全体にわたって焼成を受けて赤褐色を呈し、斜位埋設土器の内部は焼土で充填されている。

住居址南西部の床面上の数地点には、現地性の焼土が分布している。この焼土と、床面上の多量の炭化物の存在から、この住居址は焼失を受けていると考えられる。

また、この住居址には「剥片貯蔵」形態が3カ所にわたってみられた。一つ(No.1)は壁柱穴P<sub>3</sub>の東南部に接する小ピット(径17cm±・深さ7cm±)中のもので、26個の剥片からなる。二つ目(No.2)のものは壁柱穴P<sub>4</sub>の埋土最上部から住居址床面にかけて存在した。材質はすべて鉄石英で、19個の剥片からなる。No.3は壁柱穴P<sub>5</sub>の北西部に接する浅皿状のピット中にみられた。18個の剥片からなる。この他に、住居址の南西壁よりには、小部分ではあるが暗褐色土層の下に火山灰層が存在し、その中から多量の剥片類が得られている。しかしその出土状態から、この地点のものは「剥片貯蔵」形態のものともみならずはできなかった。

住居址中央部よりやや南西ふきんの床面上からは、磨製石斧が出土している。

当住居址は、E II-53フラスコ形ピット・E II-54フラスコ形ピットに切られている。しかし、E II-5住居址との新旧関係は不明である。推測の域を出ないが、壁の残存状況や床面の高低差などから、当住居址がE II-5住居址を切っていると考えられる。

#### E II-5住居址(図版29b・95e、写真図版35a)

住居址の半分以上が西側の緑地帯にかかっていること、北東部が荷馬車による木材の搬出路にあたっていること、および東壁よりが不整形なピットによりかなりの攪乱を受けていることなどから、全体を把握することはできなかった。柱穴とみられるピット群の配置から、4.0 m前後の規模をもち、平面形が円形を呈する住居址であると推定される。壁高は南壁で12cm±を計る。柱穴としては、P<sub>1</sub>(径25cm±・深さ20cm±)・P<sub>2</sub>(径26cm±・深さ12cm±)・P<sub>3</sub>(径35cm±・深さ20cm±)・P<sub>4</sub>(径33cm±・深さ10cm±)・P<sub>5</sub>(径30cm±・深さ13cm±)・P<sub>6</sub>(径22cm±・深さ18cm±)が壁柱穴を、またP<sub>7</sub>(径36cm±・深さ30cm±)・P<sub>8</sub>(径27cm±・深さ30cm±)・P<sub>9</sub>(径41cm±・深さ55cm±)のいずれかが主柱穴をそれぞれ構成するものと考えられるが、その詳細は不明である。

炉は住居址中央部よりやや東側に位置していると考えられる。浅皿状の形態をもつもので、北東方向に開口する斜位埋設土器を伴う。この土器の上には粒径43cm±の安山岩類亜角礫が載っている。黄褐色細礫は使用されていない。残存状態が不良でよくわからないが、炉縁径は70cm±、床面から斜位埋設土器下底部までの深さは12cm±を計る。斜位埋設土器およびその周辺はよく焼成を受けている。



## E II - 6 住居址 (図版30a・95f、写真図版35b・103d)

東壁および南壁沿いの検出面の火山灰層がきわめてルーズであったため、その部分の壁をきちんと検出することはできなかったが、壁の輪郭線およびピット群の配置から、4.2m±×3.6m±の規模をもち、六角形ないし七角形の形状を示す住居址であると推定される。埋土は炭化物・焼土粒を僅かに含む暗褐色土層で構成されていたが、単層であるために、Field Card に性状を記載したのみで、土層断面図の作成は省略した。壁高は、北壁15cm±・東壁9cm±・西壁34cm±である。ピット群は主に、壁に沿う配置を示している。それらの中で、径および深さから、P<sub>1</sub>(径20cm±・深さ60cm±)・P<sub>2</sub>(径32cm±・深さ49cm±)・P<sub>3</sub>(径22cm±・深さ40cm±)・P<sub>4</sub>(径23cm±・深さ45cm±)・P<sub>5</sub>(径23cm±・深さ48cm±)・P<sub>6</sub>(径25cm±・深さ38cm±)・P<sub>7</sub>(径24cm±・深さ40cm±)・P<sub>8</sub>(径24cm±・深さ59cm±)などのピット群が支柱穴を構成するものとみられる。他のピットは上記のものと同様と比べるといずれも浅く、支柱穴的な性格をもつものと思われる。

炉は住居址中央部よりやや東側に位置している。摺鉢状の形態をもつもので、真中に直立埋設土器を伴う。直立埋設土器は部分的に二重ないし三重に土器片で周囲が囲まれている。またそれと北東部で接する位置には、粒径30cm±の安山岩類亜角礫が埋置されている。炉縁径は70cm±、床面から埋設土器底部までの深さは32cm±を計る。炉は全体によく焼成を受けている。

## E II - 7 住居址 (図版30b c・96a、写真図版36a・171a)

4.3m±×4.0m±の規模をもち、不整形の形状を示す住居址である。埋土のほとんどは暗褐色土層で構成されている。壁高は、北壁27cm±・東壁25cm±・南壁29cm±・西壁40cm±を計る。柱穴は、P<sub>1</sub>(径40cm±・深さ65cm±)・P<sub>2</sub>(径24cm±・深さ50cm±)・P<sub>3</sub>(径22cm±・深さ46cm±)・P<sub>4</sub>(径20cm±・深さ45cm±)・P<sub>5</sub>(径33cm±・深さ57cm±)の5個のピットで構成され、五角形の配置を示している。

この住居址では、中央よりやや南東よりの地点に、新旧2つの炉が存在していることが確認された。南側のもの(1号)は石囲い炉で、径15cm±~35cm±の安山岩類亜角礫11個で構成され、中央部には直立埋設土器を伴う。構成礫は床面から23cm±、直立埋設土器は床面から27cm±の深さでそれぞれ埋置されている。掘り方の内部にも、いくつかの土器片がある。炉縁径は76cm±×67cm±を計る。直立埋設土器とともに炉は全体にわたってよく焼成を受けているが、特に、南側の構成礫の外部の火山灰にも焼成が及んでいる点が注目される。炉内の埋土は、炭化物・焼土を僅かに含む黒褐色土層である。さらにこの炉から北側に50cm±離れた床面直下から、浅皿状の形態をもつ炉(2号)が発見された。この炉は明らかに1号の炉に先行するものである。炉縁径は42cm±を計り、真中には直立埋設土器を伴う。この土器は床面から18cm±の深さに埋設されており、北西側の一部では、この土器の外側をさらに二重三重の土器片が取り

巻いている。炉の南側部分はかなりの焼成を受けている。

炉に近い床面上からは一括土器が得られている。

この住居址内の東南壁に接してE II-71ピーカー形ピットがあるが、これら両者の新旧関係または共伴関係については不明である。

#### E II-8 住居址 (図版31a・96b、写真図版36b・103e)

4.9m ± × 4.8m ± の規模をもち、ほぼ六角形の形状を示す住居址である。埋土は主に、多量の炭化物を含む暗褐色～黒褐色土層で構成されている。壁高は、北壁12cm ± ・東壁5cm ± ・南壁9cm ± ・西壁30cm ± を計る。一部ではあるが、南側のE II-9住居址と切り合う部分において周溝の存在が確認された。柱穴は、P<sub>1</sub> (径60cm ± ・深さ51cm ±) ・ P<sub>2</sub> (径47cm ± ・深さ50cm ±) ・ P<sub>3</sub> (径31cm ± ・深さ60cm ±) ・ P<sub>4</sub> (径27cm ± ・深さ54cm ±) の4個のピットで構成される一群と、P<sub>5</sub> (径50cm ± ・深さ24cm ±) ・ P<sub>6</sub> (径38cm ± ・深さ39cm ±) ・ P<sub>3</sub> (前記) ・ P<sub>7</sub> (径41cm ± ・深さ30cm ±) のピットで構成される一群の、合わせて二群のものが検出された。前者はP<sub>1</sub>を要としてP<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>と扇状に、また後者はP<sub>5</sub>を要としてP<sub>6</sub>・P<sub>3</sub>・P<sub>7</sub>と扇状に展開する配置を示している。この二群の柱穴配置から、当住居址はP<sub>3</sub>を共有の柱穴として、P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>の群からP<sub>5</sub>・P<sub>6</sub>・P<sub>3</sub>・P<sub>7</sub>の群へ、方向で言えば、北東部から東側にかけて拡張がなされているものと考えられる。

炉は住居址中央部よりやや東北方向に位置している。炉縁部に黄褐色細礫が敷設された摺鉢状の形態をもつもので、西南方向に開口する斜位埋設土器を伴う。斜位埋設土器の上では、黄褐色細礫が殊に厚く敷設されている。炉縁径は115cm ±、床面から斜位埋設土器下底部までの深さは30cm ± を計る。炉は全体に、かなりの焼成を受けている。

北西壁よりの床面上には、43個の剥片からなる「剥片貯蔵」形態がみられた。また、西壁よりからは土製小玉の出土があった。その他に、北東壁に近い床面には台石が、また炉の東側の床面には石皿がある。性格は不明であるが、西壁を除く他の壁沿いの床面上には、安山岩類・凝灰岩類の垂角～円礫が10数個点在していた。

当住居址は、南側で接するE II-9住居址の北壁部分を僅かながら切っている。

#### E II-9 住居址 (図版31b・96c、写真図版37a)

全体に壁の輪郭線がはっきりとしないために、その詳細は不明であるが、柱穴とみられるピット群の配置から、4.2m ± × 3.7m ± の規模をもち、五角形の形状を示す住居址であると推定される。“湯沢パターン”の火山灰層を埋土上部にもっているが、大半はこの住居址よりも上位にあるE II-10住居址に削り取られており、火山灰層の分布や層厚をはっきりと知ることはできなかった。火山灰層下位の埋土は、炭化物や焼土の微細な粒子を多く包含する暗褐色土層で構成されている。この住居址は南側に位置するE II-14住居址を切っており、切り合いを示

す部分には、汚れ火山灰を使用した幅30cm±の貼り壁がみられた。壁高は、東壁14cm±・西壁44cm±を計る。柱穴は、P<sub>1</sub>（径30cm±・深さ42cm±）・P<sub>2</sub>（径24cm±・深さ72cm±）・P<sub>3</sub>（径33cm±・深さ32cm±）・P<sub>4</sub>（径30cm±・深さ65cm±）・P<sub>5</sub>（径30cm±・深さ47cm±）などの5個のピットで構成されるものと考えられる。

炉は住居址中央部より若干南側に位置している。炉縁部に黄褐色細礫が敷設された浅皿状の形態を示すもので、ほぼ北方向に開口する斜位埋設土器を伴う。炉縁径は60cm±、床面から斜位埋設土器下底部までの深さは25cm±を計る。炉は全体にわたって、かなりの焼成を受けている。

炉を中心とする範囲およびその北側の床面上には、現地性の焼土と多量の炭化物の分布がみられた。

床面上の遺物としては、炉の南東部ふきんから出土した2点の石皿破片と、北東部壁際の台石がある。安山岩類の垂角礫を利用したこの台石は表面が平滑で、数個の破片にひび割れた状態で存在していた。

当住居址は、E II - 8住居址・E II - 10住居址に切られ、E II - 14住居址を切っている。

#### E II - 10住居址（図版32a、写真図版37b）

E II - 9住居址の上に載り、“湯沢パターン”の火山灰やその埋土を床面としているが、全体的に形状ははっきりせず、詳細は不明である。推定3.7m±×2.9m±の規模をもち、やや楕円に近い形状を示すものと考えられる。埋土はクロボクで構成されている。確認しえたかぎりでは、壁高は西壁で18cm±、東壁で4cm±を計る。柱穴の存在は不明である。

炉は住居址中央部よりやや東側に位置するものと思われる。浅い凹みだけのものであるが、現地性の焼土がみられた。

#### E II - 11住居址（図版32b・96d、写真図版38ab・103f）

東側から南側にかけての壁の残存状態が不明であるために全体の輪郭は知りえないが、北壁と西壁の輪郭線の形状や柱穴の配置などから、4.5m±×4.5m±の規模をもち、不整な多角形の平面形を呈する住居址であると思われる。埋土は炭化物を多量に含む暗褐色土層で構成されていたが、単層であるために、土層断面図の作成は省略した。壁高は北壁7cm±・西壁14cm±を計る。柱穴はP<sub>1</sub>（径48cm±・深さ29cm±）・P<sub>2</sub>（径38cm±・深さ22cm±）・P<sub>3</sub>（径45cm±・深さ15cm±）・P<sub>4</sub>（径34cm±・深さ36cm±）・P<sub>5</sub>（径30cm±・深さ32cm±）・P<sub>6</sub>（径25cm±・深さ21cm±）の6個のピットで構成されるものとみられる。P<sub>1</sub>・P<sub>4</sub>・P<sub>5</sub>・P<sub>6</sub>の各柱穴は、住居址のコーナーに位置している。また北東部では、深さ20cm±～31cm±のピットが6個検出されているが、これらと柱穴との関係は不明である。

住居址に伴う施設として、「出入口」状施設と、3群の配礫がある。「出入口」状施設は南

東部に位置し、粒径30cm±の2個の安山岩類亜角礫からなる。下部は床面下に埋めこまれている。礫間隔は31cm±、外側での幅は70cm±である。この部分の壁の輪郭線ははっきりとしないが、これらの礫は壁に沿って配置されているものと考えられる。配礫は北壁および西壁にはほぼ直交する形で2個で一組になる配置を示している。粒径15cm±～25cm±の角～亜角の形状の安山岩類・凝灰岩類よりなり、それぞれの構成礫の下部は床面下に埋めこまれている。礫間隔は、No.1 配礫29cm±・No.2 配礫48cm±・No.3 配礫21cm±を計る。この他に、この住居址内には多数の角～亜角の形状の安山岩類・凝灰岩類がみられたが、それらはいずれも、床面から若干浮いた状態で出土したものである。

炉は住居址中央部の南側に位置している。炉縁部に黄褐色細礫が敷設された摺鉢状の形態をもつもので、真中には直立埋設土器を伴う。南側の炉壁には粒径35cm±の安山岩類亜角礫が埋置されている。炉縁径は60cm±、床面から直立埋設土器底部までの深さは30cm±を計る。炉は全体によく焼成を受けている。

炉の北東部および南部の床面上には現地性の焼土がみられるが、その分布する範囲は狭い。

住居址内の遺物としては、北西部の床面から滑車型耳飾りが、また柱穴P<sub>3</sub>の下部から小形石棒がそれぞれ出土している。北壁よりの床面上からは、マトリックスが粘土の淡黄褐色細礫が数十cmの範囲で検出された。構成物の諸特徴から、この細礫は炉縁部を取り巻くものと起源が同じものであると考えられる。

当住居址は、南側で接するE II-12住居址・E II-13住居址を切っている。しかし、E II-14住居址との新旧関係は不明である。

#### E II-12住居址 (図版33a・97a、写真図版39a・104a・121c)

北壁部分がE II-11住居址に切られていることや、東壁および西壁のかなりの部分が風倒木によって破壊を受けているために、詳細は不明であるが、壁の残存部の状況から、4.0m前後の規模をもち、平面形が円形を呈する住居址であると推定される。住居址北半部の埋土上部には“湯沢パターン”の火山灰層がみられた。しかし、この火山灰層もかなりの削剝を受けていたために、分布範囲をはっきりと把握することはできなかった。下位の埋土は、炭化物・焼土の細粒を多量に包含する暗褐色土層で構成されている。Field Card に性状を記載したのみで、この住居址の土層断面図の作成は省略した。壁高は、南壁4cm±・西壁14cm±を計る。柱穴と考えられるピットは、P<sub>1</sub>(径24cm±・深さ46cm±)・P<sub>2</sub>(径28cm±・深さ21cm±)の2個が検出されたのみである。

この住居址にも、E II-11住居址と同様に、炉の南東方向の位置に「出入口」状施設がある。この施設は並びが壁に平行する2個の安山岩類亜角礫からなる。礫の大きさはそれぞれ36cm±と37cm±の値を示し、下半部は床面下に埋めこまれている。礫間隔は34cm±あり、外側での幅

は60cm±を計る。

炉は住居址中央部より南側に位置している。浅皿状の形態をもつもので、北方向に開口する斜位埋設土器を伴う。炉縁径は65cm±を計り、床面から斜位埋設土器下底部までの深さは23cm±である。炉は全体的に、よく焼成を受けている。

この住居址は北東で接するE II-13住居址を切り、北で接するE II-11住居址には切られている。

#### E II-13住居址 (図版33b・97b、写真図版39b・121d)

この住居址は、E II-11住居址・E II-12住居址・E II-14住居址などにより大きく切られているために、西壁および床面の一部と炉が痕跡的に残っていたにすぎない。この住居址の炉の北東の床面上には、E II-11住居址の「出入口」状施設が載る。

上記におけるような状況から、住居址内における炉の位置は不明である。ほとんど直立埋設土器だけで構成される形態のものである。炉縁径は27cm±、床面から埋設土器底部までの深さは28cm±である。炉は一部分が焼成を受けているにすぎない。

#### E II-14住居址 (図版33c・97c、写真図版40a・104cd)

3棟の住居址に切られているために詳細は不明であるが、径5.2 m前後の規模をもち、七角形の形状を示す住居址であると考えられる。西壁よりの埋土上部には、径1.2 m±・中央部での層厚16cm±の規模で“湯沢パターン”の火山灰層がみられた。下位の埋土は、炭化物・焼土を僅かに含む褐色系統の土層群で構成されている。壁高は、東壁15cm±・南壁17cm±・西壁45cm±を計る。柱穴は住居址のコーナー、またはコーナー近くに位置し、P<sub>1</sub> (径37cm±・深さ60cm±)・P<sub>2</sub> (径21cm±・深さ63cm±)・P<sub>3</sub> (径26cm±・深さ41cm±)・P<sub>4</sub> (径29cm±・深さ41cm±)・P<sub>5</sub> (径24cm±・深さ53cm±)・P<sub>6</sub> (径25cm±・深さ58cm±)などのピット群で構成されるものと思われる。この柱穴配置からすれば、少くともあと1個の柱穴はE II-9住居址の炉ふきんに位置するものと推定されよう。この住居址にはこれらの柱穴群の他に、北西部に弧状に展開する4個のピット群(深さ24cm±~48cm±)と、南東方向にほぼ等間隔に並ぶ4個のピット群(深さ13cm±~17cm±)が存在する。この2つのピット群と柱穴との関係は不明である。配置から、これらは間仕切りの機能をもつものと考えられるのかもしれない。

炉は住居址中央部の南側に位置している。黄褐色細礫が敷設された浅皿状の形態をもつもので、やや北西方向に開口する斜位埋設土器を伴う。黄褐色細礫は炉縁部を取り巻くだけでなく、炉壁および炉底に至るまで炉の全体を被覆しており、表面は平滑に作りだされている。炉縁径は85cm±、床面から斜位埋設土器下底部までの深さは30cm±である。埋設土器とともに、炉は全体にわたってよく焼成を受けている。

炉の南側と北西側の一部床面上には、現地性の焼土が3地点ほどの分布となってみられた。

しかし、いずれも狭い範囲を占めているにすぎない。中央部より北西の床面には埋襲がある。

この住居址と切り合い関係を示している住居址は、E II - 9住居址・E II - 10住居址・E II - 11住居址・E II - 13住居址・E II - 15住居址の5棟がある。これらの中で、当住居址に先行するものはE II - 13住居址のみである。また、“湯沢パターン”の火山灰層を伴うE II - 9住居址と、同じく“湯沢パターン”の火山灰層を伴う当住居址との切り合い関係は、“湯沢パターン”の実態に迫りうる一つの要素を提供している点で注目すべきものであろう。

#### E II - 15住居址 (図版34b・97d、写真図版40b・104b)

6.3m±×6.0m±の規模をもち、不整八角形に近い平面形を呈する住居址である。埋土の大半は焼土粒を僅かに含むクロボクで構成されているが、下半部には一部暗褐色土層の堆積がみられた。この住居址内の埋土は、ほぼ単層であるために土層断面図の作成は省略し、Field Card に性状だけを記載した。壁高は西壁で40cm±、東壁で5cm±を計る。柱穴内の埋土は、全体に火山灰が優占している。配置および深さから、P<sub>1</sub> (径35cm±・深さ49cm±)・P<sub>2</sub> (径32cm±・深さ62cm±)・P<sub>3</sub> (径50cm±・深さ60cm±)・P<sub>4</sub> (径26cm±・深さ30cm±)・P<sub>5</sub> (径50cm±・深さ61cm±)・P<sub>6</sub> (径35cm±・深さ52cm±)・P<sub>7</sub> (径18cm±・深さ40cm±)などのピット群が柱穴を構成しているものと考えられる。この他のピット群はいずれも浅く、10cm±～23cm±の深さを示すにすぎない。

炉は住居址中央部より南東に位置し、やや北西方向に開口する斜位埋設土器を伴う。この斜位埋設土器は黄褐色細礫で被覆されている。また浅皿状を示す炉の周囲には、いくつかの礫の抜き取り痕がみられた。このことから、この炉はもともと石囲い炉であったものと推定される。炉は南北に長い楕円形に近い形状を示し、長軸方向で径115cm±を計る。床面から斜位埋設土器下底部までの深さは11cm±である。また、この炉の掘り方内部には、数片の土器片が存在した。炉は全体的にかなりの焼成を受けている。

炉に近い東および南東の床面上には、小範囲であるが現地性の焼土がある。

また、この住居址の西南壁よりの床面上には、51個の剥片類からなる「剥片貯蔵」形態がみられた。E II - 17住居址に近い北壁よりの床面には、単体の埋襲が存在していた。この他に、床面からやや浮いたレベルには、径5cm±～30cm±の安山岩類・凝灰岩類からなる亜角～円礫が多数分布していた。

この住居址と切り合い関係を示している遺構として、E II - 14住居址・E II - 17住居址・E II - 22住居址・E II - 63フラスコ形ピットなどがある。当住居址は、これらの遺構のすべてを切っている。南壁下にあるE II - 63フラスコ形ピットは、上部が5～20cm±の厚さの火山灰で被覆され、当住居址の貼り床とされていた。

#### E II - 16住居址 (図版34a・97e、写真図版41a)

東半部をE II-17住居址に切られていることや、住居址全体が荷馬車による木材の搬出路にあたっていたことなどにより、この住居址では床面の一部と炉が痕跡的に残っていたにすぎない。規模や埋土の状況は、上記の理由により不明である。西側の一部には数cmの段差がみられたが、あるいはこの個所が西壁となるのかもしれない。

炉は、炉縁部に僅かに黄褐色細礫が敷設された浅皿状の形態をもつもので、ほぼ北方向に開口する斜位埋設土器を伴う。炉縁径は70cm±、床面から斜位埋設土器下底部までの深さは23cm±を計る。炉は全体に、よく焼成を受けている。

炉の西北部には、単体の埋嚢がみられた。この住居址に共伴するものと考えられる。

#### E II-17住居址（図版35a・98a、写真図版41b・104e）

他の住居址と切り合っている部分が多く、全体の形状は不明であるが、5.1m前後の規模をもち、不整な八角形を呈する住居址であると思われる。埋土は炭化物・焼土の細粒を多く含む暗褐色～黒褐色土層で構成されていたが、明確な層序区分はなしえず、Field Cardに性状を記載したのみで、土層断面図の作成は省略した。壁高は西壁で24cm±、北壁で9cm±を計る。当住居址は柱穴配置および新旧2つの炉の存在から、拡張住居址であると考えられる。しかし、古い時期の炉が火山灰で閉塞されている以外は、貼り床などの痕跡はみられなかった。拡張前の住居址の柱穴は、P<sub>8</sub>（径34cm±・深さ53cm±）・P<sub>9</sub>（径30cm±・深さ51cm±）・P<sub>10</sub>（径26cm±・深さ53cm±）・P<sub>11</sub>（径28cm±・深さ56cm±）・P<sub>12</sub>（径35cm±・深さ31cm±）・P<sub>13</sub>（径21cm±・深さ50cm±）・P<sub>14</sub>（径25cm±・深さ49cm±）などのピット群で構成されるものと推定される。また、P<sub>1</sub>（径30cm±・深さ11cm±）・P<sub>2</sub>（径38cm±・深さ20cm±）・P<sub>3</sub>（径30cm±・深さ18cm±）・P<sub>4</sub>（径33cm±・深さ19cm±）・P<sub>5</sub>（径24cm±・深さ13cm±）・P<sub>6</sub>（径27cm±・深さ13cm±）・P<sub>7</sub>（径34cm±・深さ34cm±）などのピット群が拡張後の柱穴を構成するものとみられる。

古い住居址に伴う炉（2号）はほぼ中央部に位置し、厚さ8cm±の汚れ火山灰で床面のレベルまで閉塞されている。摺鉢状に近い形態をもつもので、真中に直立埋設土器を伴う。掘り方内の南西部には、直立した形で数片の土器片が存在した。炉縁径は90cm±、床面から埋設土器底部までの深さは18cm±である。炉は全体にわたってかなりの焼成を受けている。新しい炉（1号）は住居址中央部より北東方向に位置している。浅皿状の形態をもつもので、南西方向に開口する斜位埋設土器を伴う。炉縁径は100cm±、床面から斜位埋設土器下底部までの深さは22cm±である。この炉も、全体的にかなりの焼成を受けている。

住居址の北壁よりには、「出入口」状施設がある。この施設は、26cm±と31cm±の大きさをもつ2個の安山岩類垂角礫からなり、下半部は床面下に埋めこまれている。礫間隔は46cm±を計り、外側での幅は66cm±である。これらの2個の礫の下位には、汚れ火山灰で内部が充填され

た、長軸55cm±・短軸38cm±・深さ4cm±の浅皿状のピットが伴う。2個の礫は、ちょうどこのピットの長軸上のへりに配置された形になっている。このピットの壁面には現地性の焼土がみられた。また、炉（1号）の北西に接して、長軸108cm±・短軸60cm±・深さ20cm±のピットがある。上記の「出入口」状施設より規模は大きい、あるいはこのピットは、拡張前の同様の施設の痕跡を示しているものなのかもしれない。

当住居址は、E II-16住居址を切り、また、E II-15住居址・E II-29住居址・E II-104陥し穴状遺構により切られていた。

#### E II-18住居址（図版36a・98b）

埋土の主体がクロボクで構成される。層位的には新しい時期の住居址である。全体的に保存状態が悪く、住居址であることを示す痕跡として、北方向に開口する斜位埋設土器を伴う石囲い炉が確認されたにすぎない。炉は安山岩類角礫を構成礫としている。斜位埋設土器は、かなりの焼成を受けていた。

#### E II-19住居址（図版36b・98c）

切り合いによる破壊をかなり受けており、全体の形状を把握することはできなかった。一部残存している北壁および南壁から、径2.8m±の規模をもつ住居であろうと思われる。埋土は暗褐色土層で構成されていたが、単層であるために、性状をField Cardに記載したのみで土層断面図の作成は省略した。壁高は北壁で10cm±、南壁で10cm±である。柱穴として確認されたピットはP<sub>1</sub>（径35cm±・深さ12cm±）のみで、他はいくら探しても検出することができなかった。

炉は住居址中央部よりやや南東に位置するものと思われる。摺鉢状の形態をもつもので、真中に直立埋設土器を伴う。炉縁径は50cm±、床面から直立埋設土器下底部までの深さは18cm±を計る。炉壁の部分で僅かに焼成を受けている。

この住居址は、E II-18住居址・E II-20住居址・E II-29住居址などにより切られている。E II-17住居址との新旧関係は不明である。

#### E II-20住居址（図版37a・98d、写真図版42a・105d）

5.8m±×5.8m±の規模をもち、不整な六角形の形状を示す住居址である。埋土最上部および中層～下層には、“湯沢パターン”の火山灰の堆積がみられた。上位の火山灰は径3.5m±・層厚20cm±の規模で主に住居址の東半部に分布している。中層のものは径2.1m±・層厚8cm±の規模で、主に住居址中央部から西半部にかけて分布している。下層にみられる火山灰は径1.2m±・層厚20cm±の規模で、住居址東半部の床面上に分布している。これらの火山灰の間を充填する埋土は、土器片・炭化物・焼土などを多く包含する褐色～暗褐色系の土層で構成されている。また、上層に分布する火山灰の上部および下部には現地性の焼土が存在し、それに接



して一括土器が出土している。上層と中層の火山灰層の間の暗褐色土層中からは、炭化した堅果類の出土があった。壁高は西壁で40cm±、東壁で16cm±を計る。柱穴は配置と深さから、P<sub>1</sub>（径37cm±・深さ40cm±）・P<sub>2</sub>（径28cm±・深さ45cm±）・P<sub>3</sub>（径29cm±・深さ46cm±P<sub>4</sub>）・（径36cm±・深さ57cm±）・P<sub>5</sub>（径20cm±・深さ57cm±）・P<sub>6</sub>（径28cm±・深さ48cm±P<sub>7</sub>）・（径35cm±・深さ47cm±）などのピット群で構成されるものとみられる。他のピットは深さ10cm±～35cm±の範囲内にあり、支柱穴的なものと推定される。

炉は住居址中央部よりやや北東に位置している。摺鉢状に近い形態をもつもので、中央部には斜位埋設土器を伴う。炉縁径は88cm±、床面から斜位埋設土器下底部までの深さは27cm±を計る。炉は全体的に、かなりの焼成を受けている。

出土遺物としては、炉の西側の長径1.2m±の浅皿状のピット内から数個の一括土器が得られている。

炉の北西部の床面上には、一部ではあるが現地性の焼土がみられた。

当住居址はE II-19住居址を切っている。

#### E II-21住居址（図版35bc・98e、写真図版42b・105cd）

東北部の壁が消滅しているために正確な規模・形状は不明であるが、残存部から、3.8m前後の規模をもち、円の形状を呈する住居址であると推定される。埋土は炭化物・焼土を含む黒褐色～暗褐色土層で構成されている。この住居址のほとんどの部分はプライマリーな火山灰を壁としているが、F II-1住居址と切り合う南西部では、F II-1住居址埋土に厚さ30cm±の汚れ火山灰による貼り壁が施されていた。壁高は北西壁で16cm±、東南壁で22cm±を計る。柱穴は、P<sub>1</sub>（径40cm±・深さ13cm±）・P<sub>2</sub>（径26cm±・深さ33cm±）・P<sub>3</sub>（径45cm±・深さ18cm±）・P<sub>4</sub>（径36cm±・深さ22cm±）・P<sub>5</sub>（径31cm±・深さ47cm±）・P<sub>6</sub>（径42cm±・深さ15cm±）などの6個のピット群で構成されるものとみられる。

炉は住居址のほぼ中央部に位置している。摺鉢状の形態をもつもので、真中に直立埋設土器を伴う。炉縁径は60cm±、床面から埋設土器底部までの深さは22cm±を計る。炉は全体にわたって、よく焼成を受けている。

この住居址はF II-1住居址を切っているが、北東部ではE II-62フラスコ形ピットにより切られている。

#### E II-22住居址（図版37b・99a、写真図版43a）

全体的にかなりの削剝を受けており、西壁も数cmの壁高しかなかったために、正確な規模や形状は不明である。北東部は荷馬車による木材の搬出路にあたっている。このような理由から、最下部が暗褐色土層で構成されていたことを知りえた以外、埋土の全体的な性状も不明であった。柱穴は、P<sub>1</sub>（径42cm±・深さ69cm±）・P<sub>2</sub>（径73cm±・深さ52cm±）・P<sub>3</sub>（径34cm±・深さ

60cm±)・P<sub>4</sub>(径33cm±・深さ39cm±)・P<sub>5</sub>(径23cm±・深さ36cm±)などのピット群で構成されているものと考えられる。その中でも、P<sub>4</sub>を要としてP<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>と扇状に展開する配置が妥当なものと思われる。P<sub>1</sub>とP<sub>2</sub>およびP<sub>2</sub>とP<sub>3</sub>の間にあるピットは、深さが15cm±～17cm±を示し、支柱穴的な性格をもつものであろう。

炉は住居址中央部よりやや北東に位置していると思われる。炉縁部に黄褐色細礫が敷設された浅皿状の形態をもつもので、炉の中心より少し南東によった位置に直立埋設土器を伴う。直立埋設土器と対面の炉縁部には、粒径30cm±の安山岩類垂円礫が埋置されている。炉縁径は55cm±、床面から埋設土器底部までの深さは18cm±を計る。炉は全体的に、よく焼成を受けている。

この住居址は、E II-15住居址により僅かに切られている。また、炉の南西部は不整形なピットにより切られ、攪乱を受けている。

#### E II-23住居址

E II-22住居址南東部に焼土を伴う小ピットが検出されたので、住居址の痕跡的なものとして調査を開始したが、すぐに単なるピットであることが明らかになった。しかし調査中の登録名を訂正することなく整理作業に入ったため、不手際からこのピットが住居址として登録されたままになった次第である。整理作業に多忙な今、あえて住居址名を抹消することなくここに載せた。このような事情から、E II-23住居址は欠番とする。

#### E II-24住居址 (図版38ab・99b、写真図版43b・105b)

4.0m前後の規模をもち、不整な多角形の平面形を示す住居址であるが、東壁部分の輪郭がはっきりとしないために詳細は不明である。埋土は数層に分れる褐色系の土層で構成されている。壁高は西壁で31cm±を計る。柱穴は、P<sub>1</sub>(径21cm±・深さ29cm±)・P<sub>2</sub>(径28cm±・深さ38cm±)・P<sub>3</sub>(径28cm±・深さ20cm±)・P<sub>4</sub>(径23cm±・深さ20cm±)・P<sub>5</sub>(径22cm±・深さ39cm±)・P<sub>6</sub>(径20cm±・深さ31cm±)などのピット群からなるものと考えられる。

炉は住居址中央部よりやや南西に位置している。浅皿状の形態をもつもので、北東方向に開口する斜位埋設土器を伴う。炉は全面が黄褐色細礫で被覆され、平滑な面に仕上げられている。斜位埋設土器の上では、この黄褐色細礫は10cm±の厚さで敷設されている。炉縁径は90cm±、床面から埋設土器下底部までの深さは18cm±を計る。炉は全体に、よく焼成を受けている。

東南壁よりには埋甕がある。この埋甕は出土状況から考えて、この住居址に共伴するものと推定される。北西部の床面上には台石がある。

また、図面には示されていないが、この住居址の床面上には広範囲にわたって現地性の焼土が分布しており、小さな炭化物片も全面的に散布していることが認められた。炉の西側には炭化材も存在する。このような状況から、この住居址は焼失を受けている可能性があると考えら

れる。

#### E II-25住居址 (図版38c・99c、写真図版44a)

全体に保存状態が悪く、規模・形状は不明である。柱穴と考えられるピット群の配置からみると、いびつではあるが長方形に近い形状をもつものであるのかもしれない。住居址に伴う埋土もほとんど残っていないが、床面上に数cmの厚さで残存していた部分の観察では、基本的には暗褐色土層で構成されているものとみられる。土層断面図の作成は省略した。壁高は西壁で10cm土を計る。他の部分では壁の輪郭線をつかむことはできなかった。柱穴は、P<sub>1</sub> (径45cm土・深さ48cm土)・P<sub>2</sub> (径55cm土・深さ84cm土)・P<sub>3</sub> (径32cm土・深さ34cm土)・P<sub>4</sub> (径30cm土・深さ45cm土)・P<sub>5</sub> (径34cm土・深さ35cm土)・P<sub>6</sub> (径46cm土・深さ79cm土)・P<sub>7</sub> (径30cm土・深さ61cm土)・P<sub>8</sub> (径59cm土・深さ51cm土)・P<sub>9</sub> (径24cm土・深さ78cm土)などのピット群で構成されるものと考えられるが、確実なことは不明である。

炉は住居址中央部よりやや南西に位置するものと思われる。炉全体に破壊が激しく及んでおり、詳細は不明である。本来は北東方向に開口する斜位埋設土器を伴うものであろうが、底部の部位しか残存していなかった。炉縁径は75cm土を計る。全体に、よく焼成を受けている。

炉の西側および東側の床面上には、小範囲ではあるが現地性の焼土の分布がみられた。

この住居址は北壁沿いでE II-108陥し穴状遺構により切られている。また、南東部にはE II-61フラスコ形ピットが存在しているが、これとの切り合いによる新旧関係は不明である。

#### E II-26住居址 (図版39a・99d、写真図版44b)

2棟の住居址に切られていることにより詳細は不明であるが、推定規模2.4m土をもち、円の形状を示すと考えられる小形住居址である。埋土は下部に炭化物を多く含む暗褐色土層で構成されていたが、単層であるために、土層断面図の作成は省略した。壁高は西壁で14cm土を計る。柱穴はP<sub>1</sub> (径24cm土・深さ22cm土)・P<sub>2</sub> (径44cm土・深さ35cm土)などのピットで一部が構成されるものと思われる。

炉は住居址中央部よりやや東側に位置するものと推定される。ほとんど直立埋設土器だけで構築されている形態のものである。炉縁径は40cm土、床面から埋設土器底部までの深さは22cm土を計る。炉には僅かな焼成痕しか認められない。

床面上から、磨製石斧刃部破片が出土している。

この住居址は東側でE II-28住居址に、南側でF II-6住居址にそれぞれ切られている。

#### E II-27住居址 (図版40b・99e、写真図版45a・105e)

全体的にかなりの削剝を受けており、壁の輪郭線をつかむことはできなかった。そのために、規模・形状は不明である。住居址固有の埋土も残存していない。柱穴は、P<sub>1</sub> (径30cm土・深さ65cm土)・P<sub>2</sub> (径53cm土・深さ49cm土)・P<sub>3</sub> (径30cm土・深さ43cm土)などのピットで一部が

構成されるものとみられる。

炉は柱穴の配置から、住居址中央部よりやや南西に位置するものと考えられる。浅皿状の形態をもつもので、北東方向に開口する斜位埋設土器を伴う。僅かではあるが、斜位埋設土器の上には黄褐色細礫が載る。炉縁径は110cm±、床面から土器下底部までの深さは20cm±を計る。炉は全体的に、かなりの焼成を受けている。

住居址北側の床面上には割れた状態の台石が存在した。

また、柱穴を構成するピット群は、それぞれ重複関係にある他のピットを伴うことから、この住居址は建て替えが行われている可能性が考えられる。

当住居址は西側においてE II-68フラスコ形ピットにより切られているが、E II-28住居址との切り合いでは、新旧関係が不明である。

#### E II-28住居址 (図版40a・100a、写真図版45b・105f)

4.2m±×3.8m±の規模をもち、円味を帯びた八角形に近い平面形を呈する住居址である。埋土は、土器片・炭化物・焼土を多量に含む暗褐色土層で構成されていたが、単層のために、土層断面図の作成は省略した。西壁よりの炉の上のレベルには、径2m±の範囲で土器片を多く包含する異地性の焼土が分布している。壁高は西壁で17cm±、東壁で1cm±を計る。柱穴は、P<sub>1</sub>(径30cm±・深さ22cm±)・P<sub>2</sub>(径39cm±・深さ34cm±)・P<sub>3</sub>(径23cm±・深さ30cm±)・P<sub>4</sub>(径63cm±・深さ41cm±)・P<sub>5</sub>(径33cm±・深さ41cm±)・P<sub>6</sub>(径24cm±・深さ33cm±)・P<sub>7</sub>(径22cm±・深さ29cm±)・P<sub>8</sub>(径31cm±・深さ32cm±)・P<sub>9</sub>(径32cm±・深さ33cm±)などのピット群で構成されるものと考えられる。

炉は住居址中央部より僅かに西南部に位置している。土器片囲い炉である。土器片はすべて内面を炉の内側に向け、三重ないし四重に、直立した状態で埋設されている。この炉の南西部の半分近くは構成土器片を欠き、その欠いた部分に、床面から8cm±盛りあがった形で黄褐色細礫が敷設されている。炉縁径は82cm±を計る。炉は全体にわたって、かなりの焼成を受けている。

北壁に近い床面上には、割れた状態の台石がある。

北西壁よりには径90cm±・深さ19cm±の浅いピットが存在しているが、この住居址に伴うものかどうかは不明である。

当住居址はE II-26住居址を切り、また北壁部分ではE II-109陥し穴状遺構によって切られている。E II-27住居址との新旧関係は前述のとおり不明である。

#### E II-29住居址 (図版39b・100b、写真図版41b・106a)

この住居址はE II-17住居址・E II-19住居址を切っているが、全体的に残存状態が悪く、詳細は不明である。しかし、僅かな段差となって検出された壁の輪郭線から、径4m前後の規

模をもち、円の形状を示す小形住居址であると考えられる。この住居址固有の埋土についても詳細は不明である。

炉は住居址中央部のやや東側に位置すると考えられる。浅皿状に近い形態をもつもので、直立埋設土器と、南東方向に開口する斜位埋設土器を伴う。炉縁径は75cm±を計る。床面から直立埋設土器底部までの深さは22cm±、斜位埋設土器下底部までの深さは23cm±である。炉は全体的に、かなりの焼成を受けている。

住居址南西部の壁際の床面上には台石がある。

当住居址と切り合い関係にある2棟の住居址との新旧は上述のとおりである。E II-17住居址との切り合いにおいては、僅かながら炉も切っていることが確認された。

#### E II-30住居址 (図版100c、写真図版106b)

住居址全体にわたってかなりの破壊を受けていたために、炉と炉の周辺の床面が一部しか残っていない、規模および形状などの詳細は不明である。層位的にはII層下位に位置するものである。切り合い関係にあるF II-1住居址の埋土中に僅かながら当住居址の貼り床が認められたが、これもはっきりとしたものではない。

炉は浅皿状に近い形態をもつもので、直立埋設土器と、やや北東方向に開口する斜位埋設土器を伴う。炉縁径は90cm±を計る。床面から直立埋設土器底部までの深さは6cm±、斜位埋設土器下底部までの深さは18cm±である。直立埋設土器の残存状態は不良である。炉は全体にわたって、よく焼成を受けている。

この住居址はF II-1住居址を切っているが、E II-66フラスコ形ピット・E II-67フラスコ形ピットには切られている。 (高橋文夫)

### E III区 (住居址実数10棟)

#### E III-1住居址 (図版41a・100d、写真図版46a・106cd)

2基の陥し穴状遺構に切られているために、全体形は明らかにしえないが、3.0m±×2.8m±の規模をもち、やや円味を帯びた多角形に近い平面形を呈する小形住居址であると思われる。埋土は炭化物や焼土の細粒を僅かに含む暗褐色土層で構成されているが、単層であるために、土層断面図の作成は省略した。壁高は西壁で13cm±、東壁で4cm±を計る。柱穴はP<sub>1</sub>(径33cm±・深さ15cm±)・P<sub>2</sub>(径43cm±・深さ25cm±)・P<sub>3</sub>(径37cm±・深さ35cm±)・P<sub>4</sub>(径27cm±・深さ22cm±)・P<sub>5</sub>(径34cm±・深さ28cm±)・P<sub>6</sub>(径28cm±・深さ17cm±)などのピット群で構成されるものとみられる。

炉は住居址中央部より僅かに東側に位置している。摺鉢状の形態をもつもので、真中には直

立埋設土器を伴う。埋設土器に接する東側炉壁部には、扁平な安山岩類亜角礫が埋置されている。炉縁径は40cm±、床面から直立埋設土器底部までの深さは20cm±である。炉は全体に、よく焼成を受けている。

当住居址は、E III-101陥し穴状遺構・E III-102陥し穴状遺構などにより切られている。

#### E III-2 住居址 (図版41b・100e、写真図版47ab・106ef)

3.7m±×3.5m±の規模をもち、いびつな五角形に近い形状を示す住居址である。保存状態が良く、全形を明確に把握することができた。埋土は炭化物・焼土を僅かに含む明褐色～黒褐色土層で構成されている。壁高は西壁で60cm±、東壁で23cm±を計る。柱穴は、P<sub>1</sub>(径28cm±・深さ51cm±)・P<sub>2</sub>(径30cm±・深さ50cm±)・P<sub>3</sub>(径41cm±・深さ46cm±)・P<sub>4</sub>(径40cm±・深さ24cm±)・P<sub>5</sub>(径30cm±・深さ44cm±)・P<sub>6</sub>(径25cm±・深さ46cm±)の6個のピットで構成されている。

炉は住居址のほぼ中央部に位置している。炉縁部の全体に黄褐色細礫が敷設された摺鉢状の形態をもつもので、真中には直立埋設土器を伴う。埋設土器と接する北東の炉壁部には、粒径32cm±の扁平な安山岩類亜角礫が埋置されている。炉縁径は79cm±、床面から直立埋設土器底部までの深さは33cm±である。炉は全体的にかなりの焼成を受けており、礫の外側の掘り方内部にも火熱が回っている。南西の炉縁部から床面にかけて、潰れた状態で一括土器が存在した。

北壁際の床面上には「出入口」状施設がある。この施設は、粒径51cm±と13cm±の2個の礫の組み合わせからなり、いずれも下部が床面に埋めこまれている。礫間隔は23cm±、外側での幅は43cm±を計る。

この住居址と切り合い関係を示しているものにE III-103陥し穴状遺構がある。北西から南東に長軸をもつこの陥し穴状遺構は、当住居址よりも古い時期の所産であることが確認された。陥し穴状遺構と交差する当住居址の北西壁には、汚れ火山灰を使用した貼り壁がみられた。住居址の床面は陥し穴状遺構の埋土の上に載り、その部分では、汚れ火山灰による厚さ数cmの貼り床が施されている。また、炉も陥し穴状遺構の埋土を切って作られている。直立埋設土器が埋土中にくいこんでいる状況を写真からも読み取ることができよう。

また、この住居址の埋土中からは、特殊遺物として笛状石製品が得られている。しかし、埋土中の出土遺物はすべて一括として取り上げているために、その出土層位は不明である。

#### E III-3 住居址 (図版42a・101a、写真図版46b・107ab)

全体に削剝や破壊を受けており、規模・形状は不明である。埋土の上層には若干の火山灰層がみられたが、これが“湯沢パターン”を構成するものであるかどうかはつかむことができなかった。火山灰の下位には、炭化物を多量に包含する暗褐色土層が堆積している。壁高は西壁で16cm±を計る。柱穴は、P<sub>1</sub>(径22cm±・深さ43cm±)・P<sub>2</sub>(径57cm±・深さ37cm±)・P<sub>3</sub>(径

径60cm±・深さ34cm±)・P<sub>4</sub>(径35cm±・深さ35cm±)・P<sub>5</sub>(径28cm±・深さ23cm±)などのピット群で構成されるものと思われるが、これも確実なことは不明である。

炉は住居址中央部よりやや南東に位置しているものと考えられる。摺鉢状の形態をもつもので、真中に直立埋設土器を伴う。南東の炉壁部には、粒径35cm±の安山岩類垂角礫が埋置されている。炉縁径は60cm±、床面から直立埋設土器底部までの深さは34cm±を計る。礫のある方向で、炉壁・炉底ともかなりの焼成を受けている。

当住居址は、EⅢ-52フラスコ形ピットにより切られているが、EⅢ-53フラスコ形ピット・EⅢ-151ピットとの新旧関係は不明である。

#### EⅢ-4住居址(図版42b・101b、写真図版48a・107cd)

4.3m±×3.5m±の規模をもち、いびつで、円味を帯びた六角形に近い平面形を呈する住居址である。埋土の最上部には“湯沢パターン”の火山灰を伴う。この火山灰は、住居東半部において2.1m前後の規模と12cm±の層厚をもって分布している。下位の埋土は、炭化物・焼土の細粒を僅かに含む暗褐色～黒褐色土層で構成されている。壁高は西壁で28cm±、東壁で7cm±を計る。柱穴は、P<sub>1</sub>(径22cm±・深さ66cm±)・P<sub>2</sub>(径18cm±・深さ38cm±)・P<sub>3</sub>(径19cm±・深さ29cm±)・P<sub>4</sub>(径25cm±・深さ47cm±)などのピット群で構成され、P<sub>1</sub>を要として、P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>と扇状に展開する配置を示している。

炉は住居址中央部よりやや西側に位置している。石囲い炉で、内部には北東方向に開口する斜位埋設土器を伴う。石囲い部は、最大粒径44cm±の垂角～角の6個の安山岩類で構成されている。炉縁径は60cm±、床面から構成礫下底部までの深さは20cm±、斜位埋設土器下底部までの深さは27cm±を計る。炉はあまり焼成を受けていない。

炉の北東部の床面上には、粒径35cm±の台石が1点ある。

#### EⅢ-5住居址(図版43a・101c、写真図版48b・49a・107ef)

3.9m±×3.4m±の規模をもち、隅丸長方形に近い形状を示す住居址である。埋土は単一な暗褐色土層で構成されている。土層断面図の作成は省略した。壁高は北壁で15cm±、南壁で5cm±、西壁で11cm±を計る。柱穴は、P<sub>1</sub>(径38cm±・深さ14cm±)・P<sub>2</sub>(径51cm±・深さ58cm±)・P<sub>3</sub>(径43cm±・深さ11cm±)・P<sub>4</sub>(径42cm±・深さ53cm±)などのピット群で構成され、P<sub>4</sub>を要としてP<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>と扇状に展開する配置を示している。

炉は住居址中央部よりやや北東方向に位置している。炉縁部のほぼ全面に黄褐色細礫が敷設される摺鉢状の形態をもつもので、南西方向に開口する斜位埋設土器を伴う。東北の炉縁部には、扁平な安山岩類垂角礫が2個埋置されている。炉縁径は50cm±、床面から斜位埋設土器下底部までの深さは27cm±を計る。

西部および南部の床面上には、現地性の焼土が3カ所にわたって分布している。

当住居址は、僅かではあるがE III-6住居址と切り合っている。壁の残存状況から、E III-6住居址が当住居址に先行するものとみられる。

#### E III-6住居址 (図版43b・101de、写真図版48b・49b・108a)

切り合いなどにより全体的に削剝や破壊を多く受けているために、規模・形状ともに明らかではない。北西壁および南西壁からの推定復元によれば、径4.5m前後の規模をもつ住居址であると考えられる。埋土は炭化物・焼土の細粒を僅かに含む黄橙色～暗褐色系の土層で構成されている。床面に接する埋土最下部層中には、異地性の焼土や炭化材が多く混入していた。また、土層断面図では、埋土の中央部に層厚15cm±の火山灰層の堆積がみられるが、Field Cardにはこれについての記載がないために、この火山灰が“湯沢パターン”を構成するものであるかどうかは不明である。柱穴は、P<sub>1</sub>(径28cm±・深さ43cm±)・P<sub>2</sub>(径33cm±・深さ29cm±)などのピットで構成されるものとみられるが、他の柱穴の存在も含めて、確実なものを把握することはできなかった。

炉は住居址のほぼ中央部に位置すると考えられるもの(1号)と、それに接するような形でやや東北部に位置するもの(2号)の2つが検出された。1号炉は中央部に、北東方向に開口する斜位埋設土器を伴う。この斜位埋設土器の周囲には拳大の礫が数点存在していたが、残存状態が悪いため、この炉が石囲いの形態に属するものかまたは摺鉢状の形態に分類されるものか明らかにしえなかった。炉縁径は110cm±、床面から斜位埋設土器下底部までの深さは20cm±を計る。この炉は全体的に、あまり焼成を受けていない。2号炉はほぼ東西方向に長軸をもち、石囲い部が存在したとみられる掘りこみの西側には、礫を一つ隔てて直立埋設土器を伴う。この直立埋設土器は、径45cm±の扁平な安山岩類角礫で上部が閉塞されていた。炉の規模は長軸方向で140cm±を計り、床面から直立埋設土器底部までの深さは12cm±である。石囲い部を構成するものとみられる部分では大半の礫が抜き取られている。直立埋設土器の脇の、横位の状態で埋めこまれている安山岩類角礫の計測値は、床面上に露出している部分で18cm±、床面下の部分で22cm±を計り、この構成礫の状態からある程度、2号炉の全容を推定することができる。掘りこみ部分の深さは床面から18cm±である。炉は全体的に、かなりの焼成を受けている。その形状から、この炉はいわゆる複式炉の系統の中に位置づけられるものと考えられる。1号炉と2号炉の先後関係は、2号炉の構成礫が抜き取られていることや直立埋設土器が扁平礫で閉塞されているなどの事実から、2号炉が1号炉に先行するものとみられる。

2つの炉の先後関係やその状況から、この住居址は炉のつけ替えとともに増改築がなされている可能性が考えられる。

炉の周辺の床面上からは、数点の一括土器が得られている。

この住居址は、E III-5住居址・E III-7住居址およびE III-109陥し穴状遺構によって切



られている。

### E III-7 住居址 (図版44a・101f、写真図版48b・50a・108b・171d)

全体的に残存状態が悪いため、規模・形状の詳細は不明である。壁の輪郭線も、西側の一部しか把握することができなかった。住居址固有と考えられる埋土は、中央部での層厚が5cm土しか残っていないために、土層断面図の作成は省略した。下位に炭化物・炭化材(異地性)を多く含む暗褐色土層で構成されている。柱穴は、P<sub>1</sub>(径40cm土・深さ45cm土)・P<sub>2</sub>(径60cm土・深さ47cm土)・P<sub>3</sub>(径30cm土・深さ51cm土)・P<sub>4</sub>(径53cm土・深さ56cm土)などのピット群で構成されるものかもしれないが、これも確実なことは不明である。東半部にはこれらの他に、深さ11cm土～34cm土のピット群が集中して存在しているが、柱穴との関係は明らかにすることができなかった。

炉は住居址の北壁よりに位置している。摺鉢状のものであり、ほぼ南方向に開口する斜位埋設土器を伴う。黄褐色細礫は炉縁部の北半分に敷設されているにすぎない。炉縁径は80cm土を計るが、床面から斜位埋設土器下底部までの深さは、炉の断面図が行方不明であるためにわからない。Field Cardの記載によれば、斜位埋設土器の周辺部の掘り方はかなりの焼成を受けているが、炉底部には焼成痕を認めることができない。

炉の南側の床面上には現地性の焼土が分布している。また北西部の床面からは、一括土器が得られている。

この住居址はE III-6住居址を切っているが、西南壁のE III-64フラスコ形ピットには切られている。E III-6住居址と切り合いを示す部分では、汚れ火山灰による貼り壁が認められた。この貼り壁の下に、E III-6住居址の堅い床面が潜りこむ状態にあることが観察されている。

### E III-8 住居址 (図版45a・101g、写真図版51ab)

5.8m土×5.8m土の規模をもつ住居址である。北東部がフラスコ形ピットと切り合い関係にあるために正確に形状を把握することはできないが、北半部が若干丸味を帯びた七角形か八角形の平面形を呈するものと推定される。埋土の最上部には“湯沢パターン”の火山灰層がみられた。この火山灰層は、径3.2m前後の円形に近い広がりとし、15cm土～20cm土の層厚をもって住居址中央部に分布している。この火山灰層中には混入物は認められず、ほぼ純粋な層相を示している。火山灰層下位の埋土は2層に細分される。中層は炭化物・焼土の細粒を僅かに含む暗褐色土層で構成されているが、下層は炭化物を多量に含む黄褐色土層で構成されている。壁高は西壁で36cm土、東壁で8cm土を計る。柱穴は、主柱穴がP<sub>4</sub>(径25cm土・深さ48cm土)・P<sub>5</sub>(径30cm土・深さ48cm土)・P<sub>6</sub>(径26cm土・深さ46cm土)・P<sub>7</sub>(径25cm土・深さ41cm土)・P<sub>8</sub>(径40cm土・深さ45cm土)・P<sub>9</sub>(径31cm土・深さ32cm土)・P<sub>10</sub>(径40cm土・深さ39cm土)などのピット群で、また壁柱穴がP<sub>1</sub>(径32cm土・深さ36cm土)・P<sub>2</sub>(径26cm土・深さ42cm土)・

P<sub>3</sub> (径25cm±・深さ41cm±)などのピット群でそれぞれ構成されるものと考えられる。P<sub>1</sub>とP<sub>2</sub>の間には深さが7cm±~14cm±のピットがいくつかあるが、これらも壁柱穴の一部とみなせるのかもしれない。フラスコ形ピットで切られている北東部には、支柱穴に相当するピットが1個存在していたものと推定される。

炉は住居址中央部より北西部に位置し、浅皿状のもので、直立埋設土器と、東南方向に開口する斜位埋設土器を伴う。炉縁径は86cm±を計り、床面から直立埋設土器底部までの深さは17cm±、斜位埋設土器下底部までの深さは20cm±である。2個体の埋設土器を含めて、炉は全体にわたってかなりの焼成を受けている。

壁柱穴P<sub>3</sub>の内部および埋土上部から床面にかけては、65個の剥片からなる「剥片貯蔵」形態がみられた。また、北西壁際の床面上には、数個の安山岩類・凝灰岩類の垂角礫がかたまっている。

この住居址はEⅢ-63フラスコ形ピットにより切られているが、EⅢ-154フラスコ形ピットとの新旧関係は不明である。

#### EⅢ-9住居址 (図版44b・102a、写真図版50b・108d)

4.0m±×3.7m±の規模をもち、やや楕円形に近い平面形を呈する住居址である。埋土は全体的に炭化物・焼土を僅かに含む暗褐色~黒褐色土層で構成されている。壁高は西壁で37cm±、東壁で15cm±を計る。柱穴は、P<sub>1</sub> (径35cm±・深さ20cm±)・P<sub>2</sub> (径17cm±・深さ29cm±)・P<sub>3</sub> (径50cm±・深さ18cm±)・P<sub>4</sub> (径23cm±・深さ15cm±)・P<sub>5</sub> (径23cm±・深さ14cm±)などのピット群で構成され、P<sub>3</sub>を要としてP<sub>5</sub>・P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>と扇状に展開する配置を示している。P<sub>4</sub>は支柱穴的なものとみられる。

炉は住居址中央部より北側に位置し、摺鉢状のもので、直立埋設土器を伴う。この直立埋設土器の上には大きさが30cm±の安山岩類角礫が存在した。炉の北西部では、潰れた状態で一括土器が出土している。また、直立埋設土器に接して北西の炉縁部には、2個の安山岩類垂角礫が埋置されている。炉縁径は60cm±を計り、床面から直立埋設土器下底部までの深さは23cm±である。炉は全体に、あまり多くの焼成を受けていない。

炉の周囲には、一部ではあるが汚れ火山灰による貼り床がみられた。

この住居址の南壁際の床面は不整形ピットにより破壊を受けているが、その他には切り合いを示す遺構は認められない。

#### EⅢ-10住居址 (図版45b・102b、写真図版52a・108ce)

東壁部分が木根などによってかなりの攪乱を受けているために、詳細な規模・形状を把握することはできないが、他の残存部からの推定によれば、3.3m±×3.2m±の規模をもち、ほぼ円の形状を示す住居址であると思われる。埋土は炭化物・焼土を僅かに含む暗褐色土層で構成

されていたが、ほとんど単層であるために、Field Card に性状を記載したのみで土層断面図の作成は省略した。壁高は北壁で19cm±、南壁で28cm±、西壁で37cm±を計る。柱穴は、P<sub>1</sub>(径34cm±・深さ25cm±)・P<sub>2</sub>(径37cm±・深さ32cm±)・P<sub>3</sub>(径35cm±・深さ32cm±)・P<sub>4</sub>(径33cm±・深さ34cm±)の4個のピットで構成されており、P<sub>4</sub>を要としてP<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>と扇状に展開する配置を示している。

炉は住居址中央部よりやや北西部に位置している。石囲い炉であり、埋設土器は伴わない。大きさが21cm±～42cm±の安山岩類・凝灰岩類の扁平な垂角礫9個で構成されている。これらの構成礫は、いずれも横位の状態で火山灰中に埋めこまれている。この中の3点に赤色顔料の塗布がみられた。No.1構成礫は内面のほぼ全面に、No.2構成礫は中外2面のほぼ全面に、No.3構成礫は上面に、それぞれ赤色顔料による塗布が施されている。No.2構成礫での観察によると、炉底の焼成面よりも下位に埋めこまれた部分にも赤色顔料の塗布が及んでいるので、炉の構築以前にそのような処置が取られたものであることが知られる。構成礫の配置から、この炉は五角形に近い平面形を呈している。規模は最大部で115cm±、最小部で86cm±を計る。床面からの深さは、No.2構成礫で42cm±である。炉にはほとんど焼成痕は認められない。

この住居址と切り合い関係にある遺構はない。 (高橋文夫)

## E IV 区 (住居址実数 5 棟)

### E IV - 1 住居址 (図版46a・102c、写真図版52b・108f・109a)

4.50m±×4.30m±の規模をもつ。壁の輪郭線および柱穴配置はほぼ七角形の平面形を呈している。埋土最上層には“湯沢パターン”の火山灰層を伴い、住居址中央部から南北2.00m±×東西2.20m±・中央部での層厚20cm±の広がりとして厚さで分布する。その下位は褐色土層が主体を占めるが、炭化物・焼土を多く含み特に床面近くに著しく多い。壁高は西壁で34cm±・東壁で28cm±を計る。柱穴としては次の7個が検出された。P<sub>1</sub>(径25cm±・深さ54cm±)・P<sub>2</sub>(径23cm±・深さ56cm±)・P<sub>3</sub>(径35cm±・深さ70cm±)・P<sub>4</sub>(径22cm±・深さ55cm±)・P<sub>5</sub>(径25cm±・深さ16cm±)・P<sub>6</sub>(径18cm±・深さ53cm±)・P<sub>7</sub>(径25cm±・深さ48cm±)。これらのピット群が各コーナーの壁際に配置されて支柱穴を構成する。

炉は住居址中央部からやや南西側に位置している。石囲い炉の形態をもつもので、直立埋設土器を伴う。東側をビーカー形ピットに切られて構成礫の一部を欠いている。埋設土器に接した南西側に60cm±の長大な安山岩類垂角礫を埋置する他は、残存する19個の礫が側縁部を上にし、長軸方向が炉の中心を向く放射状に埋置される。礫は大きさが10cm±～17cm±の垂角礫である。構成礫の外縁間は70cm±×65cm±とほぼ方形の平面形を示し、炉内は良く焼成を受けて

いる。なお床面から深さ24cm±の掘り方が認められる。

床面上には広い範囲に亘る現地性の焼土・炭化物が検出されている。個々の規模は小さいが焼失を受けた可能性を示すと考えられる。

床面上からの出土遺物には、台石と石皿がある。

当住居址は重複するEⅣ-51と52ビーカー形ピットのいずれにも切られている。

#### EⅣ-2 住居址 (図版46bc・102e、写真図版53a・109bd)

4.50m±×4.10m±の規模をもち、不整な七角形に近いプランを呈している。埋土上半は焼土・炭化物を少量含む褐色～黒褐色土層によって構成され、下半は火山灰が優占する褐色土層が占める。壁高は西壁で40cm±・東壁で20cm±を計る。柱穴状のピットとしてはP<sub>1</sub>(径17cm±・深さ32cm±)・P<sub>2</sub>(径38cm±・深さ17cm±)・P<sub>3</sub>(径15cm±・深さ15cm±)・P<sub>4</sub>(径16cm±・深さ10cm±)・P<sub>5</sub>(径20cm±・深さ24cm±)の5個がある。これらのピット群がどのような柱穴配置をもつものかは不明である。

炉は住宅址中央部からやや東側に位置する。石囲い炉にほぼ北方向に開口する斜位埋設土器を伴っている。構成礫は長さ40cm±の長大な安山岩類亜角礫が四方に埋置されほぼ台形状の平面形を示す。東コーナーの礫間には10cm±大の亜円礫を埋置すると同時に、大形の土器片2片をその礫の外側に埋め込んであり、南コーナーの礫間には埋設土器がみられる。礫の外縁間の規模は長軸方向が65cm、短軸方向では38cm±～57cm±を計る。炉内にはほとんど焼成痕を残していない。炉底は床面に比べて深く浅皿状を呈していた。

#### EⅣ-3 住居址 (図版87b)

第Ⅳ層火山灰層上面において径80cm±を計るほぼ円形の現地性焼土が検出されただけであり、壁・柱穴等は検出されなかった。住居址が破壊を受け炉の一部を痕跡的に残したものの可能性があり、住居址として分類する。

EⅣ-101陥し穴状遺構と重複すると推定されるが新旧関係は不明である。

#### EⅣ-4 住居址 (図版47ab・102d、写真図版53b)

5.00m±×4.50m±の規模をもち、ほぼ方形に近い平面形を呈すると推定される。しかし、EⅣ-5住居址と重複して東壁を消失しているために規模・平面形とも詳細は明らかでない。埋土の大部分をクロボク層が占めるが、床面を覆うのは焼土・炭化物を含む暗褐色土層である。壁面は西壁で80cm±と非常に高く、西壁と南壁では壁半ばにテラス状の平坦面が形成される。柱穴としてはP<sub>1</sub>(径31cm±・深さ45cm±)・P<sub>2</sub>(径32cm±・深さ50cm±)の2個が南西と北西コーナー近くに位置するが、全体の柱穴配置は明らかでない。

住居址中央部には径100cm±のほぼ円形の地床炉が検出された。良く焼成を受け、炉面下10cm±の深さまで及んでいる。

当住居址はEⅣ-5住居址を切るが、FⅣ-101陥し穴状遺構には切られている。

なお、当住居址は占地と埋土構成、出土遺物から縄文時代中期初頭に属する。

#### EⅣ-5住居址（図版47c・103a、写真図版53b）

一辺が3.50m±の規模をもち、ほぼ方形に近い平面形を呈していたと推定される。しかし、西壁の部分はEⅣ-4住居址に切られて壁を消失しているため、規模・平面形の詳細は明らかでない。埋土はクロボク層が主体を占めるが、床面を覆うのは焼土・炭化物を含む暗褐色土層である。壁高は西壁で20cm±を計る。柱穴としては、P<sub>1</sub>（径28cm±・深さ34cm±）・P<sub>2</sub>（径30cm±・深さ78cm±）の2個が南西と北西コーナー近くに位置するが、全体の柱穴配置は不明である。

炉は住居址中央部からやや南側に位置する。東側の一部が木根により攪乱を受けるが、径90cm±のほぼ円形を呈している。炉に接した北側にも現地性焼土が床面上の2カ所に広がる。炉の断面の観察からは、床面から20cm±の深さで浅皿状に掘り窪められ底面にわずかに焼成痕を残すことが観察される。内部には焼土を多量に含む黒褐色土層が8cm±の厚さで堆積し、更に上位に層厚12cm±の現地性焼土が形成されることから、炉は二時期にわたる使用が考えられる。

北壁で重複するEⅣ-104陥し穴状遺構には切られている。

なお、当住居址は占地と埋土構成・出土遺物から縄文時代中期に属する。（三浦 謙一）

## FⅡ区（住居址実数18棟）

### FⅡ-1住居址（図版48a、写真図版54a）

5.5m±×3.7m±の規模の、東西方向に長軸をもつ長方形の住居址である。“湯沢パターン”の火山灰を埋土上部に伴う。この火山灰は埋土全体を被覆していたために第Ⅲ層の汚れ火山灰層との区別がなかなかつかず、第一次精査の段階で調査方法に若干の混乱を招いたので、土層断面図は一部しか作成することができなかった。EⅡ-21住居址との切り合い部分を示すそれである。しかし、それには埋土の主要部分の状況がよく現われていないので、ここでは主に、Field Card の記載をもとにして堆積状態と性状を述べる。住居址中央部での観察によれば、埋土は上位より、“湯沢パターン”の火山灰層（層厚30cm±）・焼土や炭化物の細粒を含む暗褐色土層（層厚10cm±）・焼土の細粒を含むクロボク（層厚20cm±）となる。この火山灰層は全体的に壁高自体よりも高くに位置し、その上面は第Ⅲ層の汚れ火山灰層とほぼ同一レベルである。壁高は北壁で28cm±、南壁で23cm±、西壁で23cm±を計る。北壁沿い、南壁沿い、それに東壁の一部には周溝が巡っている。この周溝は平均値で、幅25cm±・深さ4cm±である。主柱穴は、P<sub>1</sub>（径53cm±・深さ45cm±）・P<sub>2</sub>（径35cm±・深さ46cm±）・P<sub>3</sub>（径50cm±・深さ40

cm土)・P<sub>4</sub>(径35cm土・深さ27cm土)・P<sub>5</sub>(径48cm土・深さ46cm土)・P<sub>6</sub>(径20cm土・深さ31cm土)・P<sub>7</sub>(径25cm土・深さ45cm土)のピット群で構成されている。E II-66フラスコ形ピットで切られている北西隅には、さらにもう1個の支柱穴が存在していたのであろう。この住居址は結局、8本柱の構造をもつものと思われる。その他のピット群は配置や深さの点でかなりのばらつきがあり、柱穴などとの関係は明確なものではない。また、支柱穴P<sub>2</sub>の北西には、それと重複関係にある1個の古いピットがみられる。このことから、P<sub>2</sub>の位置で柱穴のつけ替えが行われた可能性が考えられる。

炉は明確なものではないが、住居址中央部よりも西側に位置する焼土がそれに相当するものとみられる。僅かに凹みがあり、礫の抜き取り痕などが認められないことから、地床炉として分類されるものであると考えられる。40cm土の広がりをもつ。

この住居址に伴う施設として、周溝の他にいわゆるベッド状遺構がある。このベッド状遺構は西壁沿いに位置し、幅40cm土、床面からの高さ9cm土を計る。南西壁よりで漸次段差が減少することや、北西隅でフラスコ形ピットに切られていることなどにより全長は明確ではない。長さ150cm土の部分が現存している。この施設の表面は内部の床面と同様にかたくしまる。また、壁にあたる部分には現地性の焼土がみられる。

住居址の西北部の床面上からは炭化材が一括して出土している。また、床面上のところどころには現地性の焼土が分布し、一面にわたって炭化物が存在した。このような事実から、この住居址は焼失を受けている可能性があると考えられる。

床面上の遺物として、南西壁よりには安山岩類の台石が存在した。少数ではあるが、床面上からはまた、縄文時代中期中葉に位置すると考えられる土器片が出土している。埋土の最下層を構成するクロボクは無遺物層であるが、その上位の暗褐色土層中からは中期末葉の土器片が得られている。

当住居址は、E II-21住居址・E II-30住居址・E II-66フラスコ形ピットにより切られている。

#### F II-2 住居址 (図版48c・103b、写真図版54b)

全体的に木根などによる攪乱が激しいことや東半部の壁が消滅していることなどにより詳細は不明であるが、柱穴と考えられるピット群の配置状況から、4m前後の規模をもつ住居址であると推定される。保存状態が悪いために土層断面図は作成していない。しかし、Field Cardにも埋土についての記載はないために、その性状は不明である。壁高は西壁で12cm土、南壁で15cm土を計る。柱穴は配置と深度から、P<sub>1</sub>(径55cm土・深さ60cm土)・P<sub>2</sub>(径30cm土・深さ56cm土)・P<sub>3</sub>(径55cm土・深さ79cm土)などの二等辺三角形の配置を示す一群と、P<sub>4</sub>(径40cm土・深さ38cm土)・P<sub>5</sub>(径58cm土・深さ33cm土)・P<sub>6</sub>(径60cm土・深さ27cm土)などのほぼ正三

角形に配される一群との、2つのピット群から構成されるものとみられるが、詳細は不明である。その他のピットは、支柱穴的なものと考えられるのかもしれないが、柱穴などとの関係を把握することはできなかった。炉に接するような形で東南部に位置する深さ45cm±のピットは、上部が安山岩類垂角礫で閉塞されている。

炉は住居址中央部から少し南側に位置していると考えられる。摺鉢状を呈する炉で、東南方向に開口する斜位埋設土器を伴う。この土器は上に載る、大きさが40cm±の安山岩類垂角礫によって一部が潰された状態で検出された。掘り方内には、斜位埋設土器と平行するような形で2個の土器片が存在した。炉縁径は85cm±、床面から斜位埋設土器下底部までの深さは24cm±である。炉には僅かな焼成痕しか認められない。

住居址北西部の床面上には径40cm±の扁平な安山岩類垂角礫を使用した台石がある。

この住居址はF II-52フラスコ形ピットと切り合っているが、その新旧関係については不明である。

#### F II-3 住居址 (図版49c・103c、写真図版55a・109c)

全体的に攪乱による破壊をかなり受けているために、規模・形状を正確に把握することはできないが、残存部の状況から、5.9m±×3.7m±の規模をもち、北西から東南方向に長軸をもつ楕円の形状を示す住居址であると推定される。土層断面図はとっていないが、Field Cardにも埋土についての記載は洩れており、その性状は不明である。壁高は西壁で13cm±、南壁で13cm±である。柱穴は、P<sub>1</sub>(径33cm±・深さ14cm±)・P<sub>2</sub>(径31cm±・深さ33cm±)・P<sub>3</sub>(径40cm±・深さ23cm±)・P<sub>4</sub>(径55cm±・深さ28cm±)・P<sub>5</sub>(径20cm±・深さ18cm±)・P<sub>6</sub>(径36cm±・深さ11cm±)などのピット群で構成されるものと思われるが、確実な配置を捉えることはできなかった。

炉は住居址中央部よりやや西側に位置している。浅皿状を示すもので、西南に開口する斜位埋設土器を伴う。この炉の北西部と南東部は、陥し穴状遺構とビーカー形ピットにより切られているが、主体部は残存していた。炉縁径は35cm±、床面から斜位埋設土器下底部までの深さは14cm±を計る。炉は全体にあまり焼成を受けていない。

当住居址は、F II-54フラスコ形ピット・F II-67ビーカー形ピット・F II-101 陥し穴状遺構・F II-102 陥し穴状遺構・F II-152 不整形ピットなどにより切られている。

#### F II-4 住居址 (図版49a・103d、写真図版55b・109e)

5.6m±×3.9m±(短軸中央部)の規模を示し、東北-南西方向に長軸をもつ楕円に近い形状の住居址である。埋土は、炭化物を多量に含む暗褐色土層で構成されている。僅かではあるが焼土もみられた。単層であるために、Field Cardに性状を記載したのみで、土層断面図の作成は省略した。壁高は北壁で10cm±・南壁で4cm±・西壁で18cm±を計る。柱穴は、支柱穴

がP<sub>9</sub>(径28cm±・深さ68cm±)・P<sub>10</sub>(径30cm±・深さ49cm±)・P<sub>5</sub>(径38cm±・深さ30cm±)・P<sub>7</sub>(径43cm±・深さ45cm±)・P<sub>11</sub>(径35cm±・深さ50cm±)などのピット群で、また支柱穴がP<sub>1</sub>(径37cm±・深さ43cm±)・P<sub>2</sub>(径50cm±・深さ56cm±)・P<sub>3</sub>(径37cm±・深さ49cm±)・P<sub>4</sub>(径66cm±・深さ30cm±)・P<sub>8</sub>(径45cm±・深さ68cm±)などのピット群でそれぞれ構成されるものと考えられる。P<sub>6</sub>ふきんは深さ60cm±の不整形ピットで切られているが、ここにも本来は支柱穴が1個存在していたのであろう。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>ふきんの床面は、攪乱によりかなりの破壊を受けている。

炉は住居址中央部よりやや南側に位置し、浅皿状のもので、西方向に開口する斜位埋設土器を伴う。炉縁径は70cm±、床面から斜位埋設土器下底部までの深さは24cm±を計る。炉は全体によく焼成を受けている。

住居址東南壁際の床面上には、石皿が4個体分、台石状の礫が3個体一括して存在していた。また、北西壁の床面上には、大きさが50cm±の扁平な安山岩類亜角礫を使用した台石が1個ある。

当住居址はF II - 7住居址を切っているが、F II - 153不整形ピットには切られている。

#### F II - 5 住居址

整理作業の初期段階の不手際のために、架空の住居址名が登録された。E II - 23住居址と同様な理由のもとに、F II - 5住居址をここにおいて欠番扱いとする。

#### F II - 6 住居址 (図版50a・103e、写真図版56a・110a)

4.1m±×3.7m±の規模をもち、不整な七角形に近い形状を示すと考えられる住居址である。埋土は、炭化物・焼土の細粒や火山灰の小ブロックを全体に含む暗褐色土層で構成されていたが、ほぼ単層であるために、土層断面図の作成は省略した。壁高は西壁で17cm±、東壁で7cm±を計る。柱穴は、P<sub>1</sub>(径35cm±・深さ25cm±)・P<sub>2</sub>(径20cm±・深さ18cm±)・P<sub>3</sub>(径25cm±・深さ40cm±)・P<sub>4</sub>(径18cm±・深さ33cm±)の4個で構成され、P<sub>1</sub>を要としてP<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>と扇状に開く配置を示している。壁輪郭線の外側を巡るP<sub>5</sub>(径28cm±・深さ28cm±)・P<sub>6</sub>(径50cm±・深さ40cm±)・P<sub>7</sub>(径31cm±・深さ15cm±)・P<sub>8</sub>(径23cm±・深さ30cm±)などのピット群は支柱穴的な性格をもつものと考えられる。

炉は住居址中央部よりも西側に位置し、摺鉢状のもので、東北方向に開口する2個の斜位埋設土器を伴う。黄褐色細礫は主に南東部の炉縁と斜位埋設土器の上に敷設されているが、一部、炉の西南部の床面上にもみられた。炉内には2個の安山岩類亜角礫が存在していたが、埋置された状態を示すものではない。炉縁径は55cm±、床面から斜位埋設土器下底部までの深さは25cm±を計る。炉は全体に、かなりの焼成を受けている。

北壁に近い床面上には、大きさがそれぞれ15cm±・18cm±の、扁平な安山岩類亜角礫を使用



した台石が2個並んで存在した。

当住居址は北東部において、僅かにE II-26住居址を切っている。

#### F II-7 住居址 (図版49b、写真図版56b)

全体的に削剝をかなり受けているために規模・形状を正確に把握することはできないが、半円形を示す柱穴状のピット群の配置から、2.8 m前後の規模をもち、円の形状を呈する遺構であると考えられる。ピットの深さには、12cm±~51cm±までかなりのばらつきがみられる。埋土や壁の状況は不明である。また、床面や炉は確認できなかった。東側と南側に散在するピット群とこの遺構との関係も不明である。

このピット群のほぼ中央部に存在するP<sub>1</sub>(径30cm±・深さ30cm±)の底面には、11個の剥片からなる「剥片貯蔵」形態がみられた。このことから、一応、この遺構を住居址として認定した。

当住居址の北西部の大半は、F II-4住居址により切られている。

#### F II-8 住居址 (図版51abc・104a、写真図版57ab・58a・110b・121f)

7.1m±×6.0m±の規模の、北東-南西方向に長軸をもつ楕円形の住居址である。この住居址は、“湯沢パターン”の火山灰を埋土上部に伴う。火山灰層は、4.3 m前後の不整形な広がり、最大35cm±の層厚をもって住居址中央部に分布していた。この火山灰層上面からは、密着した形で、一括土器が数点出土している。下位の埋土は、炭化物を少量含む暗褐色~黒褐色土層で構成されている。埋土全体にわたって土器片の出土が多い。壁高は北壁で23cm±、東壁で3 cm±、南壁で10cm±、西壁で51cm±を計る。この住居址は拡張を受けており、新旧2つの柱穴群が検出された。古期の柱穴は、P<sub>1</sub>(径40cm±・深さ68cm±)・P<sub>2</sub>(径33cm±・深さ46cm±)・P<sub>3</sub>(径47cm±・深さ69cm±)・P<sub>4</sub>(径62cm±・深さ54cm±)・P<sub>5</sub>(径28cm±・深さ55cm±)・P<sub>6</sub>(径44cm±・深さ37cm±)・P<sub>7</sub>(径27cm±・深さ77cm±)の7個のピット群で構成されている。また新期の柱穴は、P<sub>8</sub>(径25cm±・深さ48cm±)・P<sub>9</sub>(径33cm±・深さ36cm±)・P<sub>10</sub>(径25cm±・深さ29cm±)・P<sub>11</sub>(径25cm±・深さ36cm±)・P<sub>12</sub>(径35cm±・深さ53cm±)・P<sub>13</sub>(径30cm±・深さ38cm±)・P<sub>14</sub>(径20cm±・深さ44cm±)・P<sub>15</sub>(径30cm±・深さ52cm±)などのピット群で構成されている。検出されていないが、その規則的な配置から、P<sub>5</sub>の西側に新期の柱穴を構成するピットが1個存在しているものとみられる。この拡張住居址は、古期が7本の柱で、新期が9本の柱で、それぞれ構成されているものと考えられる。柱穴数は増加しているが、新期のものは古期のものに比して、径・深さともに全体に小振りなものとなっている。

柱穴群と同様に、この住居址には新旧2つの炉が存在していることが確認された。古期の炉(1号)は、新期の炉(2号)のやや南側に位置し、摺鉢状のもので、直立埋設土器を伴う。この炉は厚さ7 cm±の火山灰で閉塞されていた。推定炉縁径は48cm±を計り、床面から直立埋設土器下底部までの深さは24cm±である。炉は全体にわたってよく焼成を受けている。新期の

炉は住居址中央部よりやや北東部に位置し、摺鉢状のもので、南方向に開口する斜位埋設土器を伴う。この斜位埋設土器の上には、僅かではあるが黄褐色細礫の敷設がみられる。炉縁径は100cm±、床面から斜位埋設土器下底部までの深さは44cm±を計る。炉は全体に、かなりの焼成を受けている。

東壁際の床面には立石が存在した。この立石は安山岩類垂角礫を利用したもので、床面下13cm±の深さに埋めこまれている。床面上に露出する部分は15cm±を計る。この立石の掘り方内の埋土は、汚れ火山灰と黒褐色土層で構成されている。

当住居址はF II-57フラスコ形ピット・F II-58フラスコ形ピット・F III-103陥し穴状遺構などと壁で接しているが、それらとの新旧関係は不明である。

#### F II-9 住居址 (図版50b、写真図版58b)

木根などによる攪乱や削剝をかなり受けており、規模・形状ともに不明である。埋土は炭化物・焼土を僅かに含む暗褐色土層で構成されていたが、単層であるために、Field Card にその性状を記載したのみで、土層断面図の作成は省略した。全体に、壁の輪郭線もはっきりとしない。柱穴は、P<sub>1</sub>(径36cm±・深さ58cm±)・P<sub>2</sub>(径73cm±・深さ60cm±)・P<sub>3</sub>(径54cm±・深さ63cm±)・P<sub>4</sub>(径66cm±・深さ50cm±)・P<sub>5</sub>(径56cm±・深さ67cm±)・P<sub>6</sub>(径38cm±・深さ65cm±)・P<sub>7</sub>(径60cm±・深さ47cm±)などのピット群で構成されるものと思われる。

若干の焼土が床面上から検出されたが、炉自体は確認されていない。これは、この住居址の炉にあたる部分が、F II-59フラスコ形ピットにより切られている結果であると考えられる。

#### F II-10 住居址 (図版52a・104b、写真図版59a・110c)

全体的に木根による攪乱や削剝を受けており、規模・形状ともに不明である。埋土は暗褐色土層で構成されていたが、単層であるために、土層断面図の作成は省略した。壁高は西南壁で11cm±を計る。柱穴は、P<sub>1</sub>(径35cm±・深さ31cm±)・P<sub>2</sub>(径35cm±・深さ36cm±)・P<sub>3</sub>(径35cm±・深さ28cm±)・P<sub>4</sub>(径34cm±・深さ35cm±)・P<sub>5</sub>(径20cm±・深さ31cm±)などのピット群で構成されるものとみられる。

炉は住居址中央部よりやや北西に位置すると思われる。浅皿状を呈する炉で、南東方向に開口する斜位埋設土器を伴う。この土器は精査中に持ち去られてしまった。炉縁径は47cm±、床面から斜位埋設土器下底部までの深さは10cm±を計る。炉は全体によく焼成を受けている。

西壁よりの床面上から、凹石が1点出土している。

当住居址は南東部でF II-107陥し穴状遺構によって切られている。東北部のF II-12住居址との切り合い関係は明確ではない。

#### F II-11 住居址 (図版52bc・104c、写真図版59b・110ef)

2.9m前後の規模をもつ、ほぼ円形の住居址である。埋土は炭化物・焼土を少量含む暗褐色～

黒褐色土層で構成されている。壁高は西壁で31cm±、東壁で12cm±を計る。柱穴は、P<sub>1</sub> (径50cm±・深さ29cm±)・P<sub>2</sub> (径35cm±・深さ34cm±)・P<sub>3</sub> (径22cm±・深さ13cm±)・P<sub>4</sub> (径27cm±・深さ25cm±)の4個のピットで構成され、P<sub>4</sub>を要としてP<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>と扇状に開く配置を示している。

炉は住居址のほぼ中央部に位置し、浅皿状のもので、若干北東方向に開口する斜位埋設土器を伴う。炉縁径は65cm±、床面から斜位埋設土器下底部までの深さは16cm±を計る。炉は全体に、かなりの焼成を受けている。

この住居址はF II-12住居址を切っているが、F II-105陥し穴状遺構・F II-106陥し穴状遺構には切られている。

#### F II-12住居址 (図版53a・104d、写真図版59b・111ab)

削剝をかなり受けているために正確な規模・形状は不明であるが、柱穴とみられるピット群の配置から、3.4m前後の規模をもつ住居址であると推定される。埋土は炭化物・焼土を僅かに含む暗褐色～黒褐色土層で構成されている。壁高は南壁で6cm±を計る。柱穴は、P<sub>1</sub> (径36cm±・深さ54cm±)・P<sub>2</sub> (径53cm±・深さ32cm±)・P<sub>3</sub> (径34cm±・深さ62cm±)・P<sub>4</sub> (径47cm±・深さ29cm±)・P<sub>5</sub> (径24cm±・深さ24cm±)などのピット群で構成されるものと考えられる。

炉は住居址中央部よりやや西南部に位置し、摺鉢状のもので、南東方向に開口する斜位埋設土器を伴う。この斜位埋設土器の上には、黄褐色細礫が厚く敷設されている。炉縁径は60cm±、床面から斜位埋設土器下底部までの深さは23cm±である。炉はよく焼成を受けている。

この住居址は、F II-11住居址・F II-60フラスコ形ピット・F II-106陥し穴状遺構などにより切られている。F II-10住居址との関係は不明である。

#### F II-13住居址 (図版53bc・104e、写真図版60a・111cd)

東半部が荷馬車による木材の搬出路にあたっていることや、西壁沿いにフラスコ形ピットが集中していることなどにより、全体の規模・形状は明らかではない。この住居址の埋土上部には“湯沢パターン”の火山灰がみられた。この火山灰層は2.3m±の不整形な広がり、18cm±の厚さをもって住居址のほぼ中央部に分布している。下位の埋土は、明褐色～暗褐色系の土層で構成されている。壁高は北壁で20cm±、南壁で17cm±、西壁で23cm±を計る。柱穴は、P<sub>1</sub> (径26cm±・深さ52cm±)・P<sub>2</sub> (径63cm±・深さ84cm±)・P<sub>3</sub> (径21cm±・深さ28cm±)・P<sub>4</sub> (径35cm±・深さ69cm±)・P<sub>5</sub> (径28cm±・深さ44cm±)などのピット群で構成されるものと考えられる。P<sub>2</sub>を要として、P<sub>3</sub>・P<sub>5</sub>・P<sub>1</sub>と扇状に開く配置を示しているものかもしれない。

炉は住居址中央部よりも若干東南部に位置していると思われる。摺鉢状のもので、東南方向に開口する斜位埋設土器を伴う。黄褐色細礫は炉縁部から炉壁にかけて敷設され、全面が平滑

に整形されている。斜位埋設土器の上に載るものは数cmの盛り上がりを見せる。炉縁径は120cm±を計り、床面から斜位埋設土器下底部までの深さは23cm±である。炉は全体にわたって、かなりの焼成を受けている。

炉の北西部から南西部の床面上には、安山岩類・凝灰岩類が多数存在していた。また、炉内の埋土中からは石鏃が出土している。

当住居址は西壁沿いにおいて、F II-60フラスコ形ピット・F II-61フラスコ形ピットにより切られている。F II-62フラスコ形ピットは住居址床面上に、火山灰による張り出し状の部分をもつもので、あるいはこの住居址と共存するものなのかもしれない。この張り出し部はプライマリーな火山灰で形成されている。

#### F II-14住居址（図版54c・105a、写真図版60b・111ef）

3.9m±×3.7m±の規模をもち、いびつな六角形に近い形状を示す住居址である。埋土は主に、炭化物・焼土の細粒を僅かに含む暗褐色～黒褐色土層で構成されている。壁高は北壁で5cm±、南壁で15cm±、西壁で11cm±を計る。支柱穴は、P<sub>1</sub>（径30cm±・深さ37cm±）・P<sub>2</sub>（径38cm±・深さ26cm±）・P<sub>3</sub>（径30cm±・深さ37cm±）・P<sub>4</sub>（径20cm±・深さ26cm±）・P<sub>5</sub>（径75cm±・深さ47cm±）・P<sub>6</sub>（径20cm±・深さ41cm±）の6個のピットで構成されている。その他のピット群は深さが12cm±～19cm±の値を示し、支柱穴的なものとみられる。F II-15住居址と切り合いを示す東側には、幅20cm±・深さ8cm±の周溝がある。この周溝内には、深さ7cm±～14cm±の小ピットが数個存在した。

炉は住居址中央部より北側に位置している。浅皿状のものであり、南方向に開口する斜位埋設土器を伴う。炉縁部には僅かではあるが黄褐色細礫の敷設が認められた。斜位埋設土器の上半部が失せていることから、少なくとも炉の一部は削剝を受けていると考えられる。炉縁径は80cm±、床面から斜位埋設土器下底部までの深さは8cm±である。炉は全体に、よく焼成を受けている。

炉の北西部の床面上には石皿が、南西部の床面上には台石が存在した。

また、P<sub>5</sub>の東に位置する径55cm±・深さ35cm±のピットには汚れ火山灰による貼り床がみられた。

この住居址はF II-15住居址を切っている。

#### F II-15住居址（図版54ab・105b、写真図版60b）

F II-14住居址に切られていることや全体的に木根などによる攪乱をかなり受けているために、規模・形状ともに不明である。埋土は炭化物・焼土の細粒を僅かに含む暗褐色～黒褐色土層で構成されている。壁高は北壁で12cm±、南壁で6cm±を計る。柱穴は、P<sub>1</sub>（径43cm±・深さ40cm±）・P<sub>2</sub>（径44cm±・深さ47cm±）・P<sub>3</sub>（径47cm±・深さ52cm±）で構成されているが、

その他のものについては不明である。

柱穴の配置からみて、炉は住居址中央部より北側に位置するものと考えられる。浅皿状のものであり、直立埋設土器を伴う。炉縁径は70cm±、床面から直立埋設土器底部までの深さは23cm±を計る。炉は全体に、あまり焼成を受けていない。

#### F II - 16住居址 (図版55b・105c、写真図版61a・112ab)

西北部の壁が検出されていないために詳細は不明であるが、他の部分の残存している壁の状況から推定すると、4.1m±×3.7m±の規模をもち、北西-南東方向に長軸をもつ楕円形の住居址であると考えられる。埋土は主に暗褐色土層で構成されているが、西南壁よりの一部では埋土最上部に径1m±の火山灰の堆積がみられた。しかし、埋土は全体に残りが悪く、しかも火山灰の部分以外はほぼ単層であるために、土層断面図の作成は省略した。壁高は北壁で11cm±、東壁で3cm±、南壁で11cm±を計る。柱穴は、P<sub>1</sub>(径27cm±・深さ25cm±)・P<sub>2</sub>(径33cm±・深さ20cm±)・P<sub>3</sub>(径21cm±・深さ23cm±)以外に見いだすことはできなかった。

炉は住居址中央部よりもやや南側に位置している。10個ほどの拳大の安山岩類垂角礫で構成される石囲い炉であり、東方向に開口する斜位埋設土器を伴う。この斜位埋設土器の上には薄く黄褐色細礫が敷設されている。構成礫は数cmの深さで埋めこまれている。炉縁径は50cm±、床面から斜位埋設土器下底部までの深さは18cm±を計る。炉は全体によく焼成を受けている。

北西部の床面には数点の一括土器が存在していた。すべて床面に密着していたものである。

この住居址はF II - 19住居址を切り、大半がその上に載る形になっている。F II - 19住居址の土器片囲い炉や炭化材のある床面上には、F II - 16住居址に伴う汚れ火山灰による貼り床(厚さ3cm±)がみられた。しかし、貼り床の範囲を正確に把握することはできなかった。

#### F II - 17住居址 (図版55a・105d、写真図版61b)

F II - 18住居址によって東半部を切られているために、詳細は不明であるが、残存部から推定すると、5.5m±×3.5m±の規模をもち、南北に長い形の六角形を呈する住居址であると考えられる。埋土は炭化物を含む暗褐色土層で構成されていたが、Field Card に性状を記載したのみで、土層断面図の作成は省略した。壁高は比較的よく残っている西壁部で17cm±を計る。柱穴は、P<sub>1</sub>(径50cm±・深さ30cm±)・P<sub>2</sub>(径43cm±・深さ41cm±)・P<sub>3</sub>(径32cm±・深さ77cm±)・P<sub>4</sub>(径42cm±・深さ60cm±)・P<sub>5</sub>(径50cm±・深さ69cm±)・P<sub>6</sub>(径30cm±・深さ64cm±)の6個のピット群で構成されるものとみられる。P<sub>1</sub>・P<sub>4</sub>・P<sub>5</sub>・P<sub>6</sub>が壁の各コーナーに位置することから、P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>も同様の配置を示していたものと推定される。

炉は住居址中央部よりも南側に位置し、黄褐色細礫と北方向に開口する斜位埋設土器を伴う摺鉢状の形態を示している。黄褐色細礫は斜位埋設土器の上部に敷設されている。西側が木根によって破壊され、また東側がF II - 18住居址に切られているために、保存状態は不良である。

炉縁径は70cm±、床面から斜位埋設土器下底部までの深さは31cm±を計る。土器の周囲を中心にかなりの焼成を受けている。

当住居址はG II-1住居址を切っているが、F II-18住居址・F II-66フラスコ形ピットには切られている。柱穴P<sub>5</sub>とF II-66フラスコ形ピットが切り合いを示している部分では、10cm±の円礫を5個ほど使用した閉塞施設がみられた。これはフラスコ形ピット側からなされたものである。また、住居址北半部には最深部で86cm±の値を示す、貼り床の施された不整形ピットが存在している。

#### F II-18住居址 (図版56a・105e、写真図版61b・62a・112cd)

東壁部分が試掘の際にバック・ホーによって破壊を受けていることから、正確な規模・形状は不明であるが、残存部の状況から、7.2m±×7.2m±の規模をもち、円に近い多角形気味の形状を示す住居址であると推定される。住居址ほぼ中央部の埋土上部には、“湯沢パターン”の火山灰がみられた。この火山灰は南北3.4m±×東西2.5m±の規模をもって不整形な広がりを示し、中央部での層厚は10cm±ある。この下位の層は、炭化物・焼土の細粒を多く包含する黒褐色土層で構成されている。しかし埋土は全体的に保存状態が悪く、Field Card に性状を記載したのみで、土層断面図の作成は省略した。壁高は北壁で15cm±、南壁で12cm±、西壁で14cm±を計る。柱穴は、主柱穴がP<sub>1</sub>(径48cm±・深さ60cm±)・P<sub>2</sub>(径34cm±・深さ不明)・P<sub>3</sub>(径20cm±・深さ37cm±)・P<sub>4</sub>(径30cm±・深さ51cm±)・P<sub>5</sub>(径32cm±・深さ77cm±)・P<sub>6</sub>(径43cm±・深さ41cm±)・P<sub>7</sub>(径34cm±・深さ43cm±)のピット群で、また壁柱穴がP<sub>8</sub>(径46cm±・深さ不明)・P<sub>9</sub>(径36cm±・深さ不明)・P<sub>10</sub>(径46cm±・深さ38cm±)・P<sub>11</sub>(径24cm±・深さ48cm±)・P<sub>12</sub>(径51cm±・深さ22cm±)・P<sub>13</sub>(径32cm±・深さ53cm±)・P<sub>14</sub>(径32cm±・深さ35cm±)のピット群で、それぞれ構成されるものとみられる。深さが不明の3個のピットは、かなりの深さをもっていたにもかかわらず、平面図作成の段階で計測値を取り忘れたものである。また、主柱穴P<sub>5</sub>・P<sub>6</sub>は、2つの住居址の柱穴配置から考えて、F II-17住居址のP<sub>3</sub>・P<sub>2</sub>の柱穴を再利用したものと推定される。北壁沿いには平均的な地点で幅20cm±、床面からの深さ13cm±の周溝が巡っている。

炉は住居址中央部よりやや南西部に位置している。南半分で、コの字に近い形状に黄褐色細礫が炉縁に敷設されているが、北半分にはこれがみられない。炉は全体に浅皿状に凹んだだけの形態で、埋設土器は伴わない。炉縁径は95cm±を計る。炉壁・炉底ともにあまり焼成を受けていない。

炉に近い南西部の床面上には、現地性の焼土が分布している。また、焼土の一つと接する形で、南壁よりの床面上には、安山岩類垂角礫を利用した大きさが72cm±の台石がみられた。この台石の表面は平滑であるが、全体に細かく破碎を受けていた。

この住居址はF II-17住居址を切っているが、中央よりやや北東部ではF II-64フラスコ形ピットにより切られている。このフラスコ形ピットも“湯沢パターン”の火山灰で覆われていたので、当住居址とこれら二者との関係は古い方より順に、F II-18住居址〈F II-64フラスコ形ピット〉“湯沢パターン”の火山灰というものとなろう。

#### F II-19住居址（図版56b・106a、写真図版61a・112f）

F II-16住居址に大半が貼り床されているために、規模・形状などは不明である。埋土についても同様である。僅かに残っている西壁で、壁高は15cm±を計る。住居址固有と考えられる柱穴は、P<sub>1</sub>（径20cm±・深さ32cm±）以外に見いだすことができなかった。

このような状況なので、住居址内における炉の位置は不明である。F II-16住居址の汚れ火山灰を剝したところ、当住居址に伴う土器片囲い炉が検出された。土器片は炉の東半部で三重乃至四重に埋めこまれている。土器片は内面が炉の内側に向けられている。また口縁部の破片は倒立した形で埋置されている。西側には、東北方向に開口する斜位埋設土器を伴う。炉縁径は75cm±、床面から斜位埋設土器下底部までの深さは18cm±を計る。炉は埋設土器を中心にかなりの焼成を受けている。

住居址南壁および南西壁沿いには、いくつかの炭化材が存在している。これらの炭化材は分布する地点において、現地性の焼土を伴っている。また、柱穴P<sub>1</sub>の南東部には埋甕の存在がみられた。

当住居址とF II-16住居址の切り合い関係は前述のとおりである。当住居址は北西部においてF II-68フラスコ形ピットとも切り合い関係にあるが、両者の新旧関係は不明である。

（高橋文夫）

### F III区（住居址実数10棟）

#### F III-1住居址（図版57a、写真図版62b）

全体的に削剝や破壊をかなり受けているために、規模・形状などの詳細を知ることはできないが、僅かに残存している西壁部の状況と、柱穴と考えられるピット群の配置とから、4.3m±×3.0m±の規模をもち、東北-西南方向に長軸がある長方形の形状を示す住居址であると考えられる。層厚は薄いが、埋土上部には“湯沢パターン”の火山灰を伴う。この火山灰は、住居内のほぼ全域にわたってみられた。その下位の埋土は暗褐色土層で構成されている。しかし、埋土は全般に保存状態が悪く、かつ薄層であるために、Field Cardに性状を記載したのみで、土層断面図の作成は省略した。壁高は北壁で10cm±、西壁で11cm±を計る。柱穴は、主柱穴がP<sub>2</sub>（径30cm±・深さ27cm±）・P<sub>3</sub>（径40cm±・深さ37cm±）・P<sub>4</sub>（径57cm±・深さ25cm

土)・P<sub>5</sub>(径55cm±・深さ34cm±)・P<sub>6</sub>(径82cm±・深さ33cm±)などのピット群で、また支柱穴がP<sub>1</sub>(径43cm±・深さ25cm±)・P<sub>7</sub>(径38cm±・深さ47cm±)・P<sub>8</sub>(径32cm±・深さ35cm±)などのピット群で、それぞれ構成されるものと思われる。しかし、詳細は不明である。

炉は住居址のほぼ中央部に位置し、広いところで150cm±ほどの焼土の分布をもつだけの地床炉である。焼土の層厚は5cm±ある。

当住居址は北部で風倒木に、南部および西部ではFⅢ-2住居址・FⅢ-101陥し穴状遺構により切られている。

#### FⅢ-2住居址(図版57b・106b、写真図版63a・113a)

3.7m±×3.2m±の規模をもち、やや丸味を帯びた六角形に近い形状を示す住居址である。埋土は主に暗褐色土層で構成されている。壁高は北壁で10cm±、東壁で6cm±、南壁で10cm±、西壁で23cm±を計る。柱穴は、P<sub>1</sub>(径22cm±・深さ53cm±)・P<sub>2</sub>(径30cm±・深さ26cm±)・P<sub>3</sub>(径28cm±・深さ33cm±)・P<sub>4</sub>(径29cm±・深さ20cm±)・P<sub>5</sub>(径24cm±・深さ37cm±)・P<sub>6</sub>(径35cm±・深さ25cm±)などのピット群で構成されている。

炉は住居址中央部よりやや北東に位置し、直立埋設土器と、ほぼ南方向に開口する斜位埋設土器を伴う摺鉢状の形態のものである。炉縁径は55cm±を計る。床面から直立埋設土器底部までの深さは24cm±、斜位埋設土器下底部までの深さは16cm±である。斜位埋設土器の周囲の火山灰はかなりの焼成を受けているが、直立埋設土器の周囲には焼成痕は認められない。

FⅢ-2住居址はFⅢ-1住居址を切っているが、FⅢ-101陥し穴状遺構には切られている。また、床面上には若干攪乱の跡がみられた。

#### FⅢ-3住居址(図版58a、写真図版63b)

2.5m±×1.9m±の規模をもち、楕円の形状を示す小形住居址である。埋土は暗褐色土層で構成され、土器片を多く包含している。しかし単層であるために、Field Cardに性状を記載したのみで、土層断面図の作成は省略した。柱穴を構成するピットは存在しない。

住居址のほぼ中央部には、径40cm±・深さ7cm±の浅皿状のピットがある。このピットの一部には現地性の焼土がみられるので、地床炉としての形態を示すものと考えられる。

壁高は、北壁で15cm±、東壁で8cm±、南壁で15cm±、西壁で14cm±を計る。

#### FⅢ-4住居址(図版58b、写真図版64a)

2.2m±×2.0m±の規模をもち、やや円に近い形状を示す小形住居址である。埋土は主に、炭化物・焼土の細粒を含む明褐色～暗褐色土層で構成されている。しかしほぼ単層に近いために、土層断面図の作成は省略した。壁高は北壁で20cm±、東壁で19cm±、西壁で32cm±を計る。

住居址中央部よりやや北側には、径45cm±・深さ14cm±の浅皿状のピットが存在している。一部に現地性の焼土が認められることから、これもFⅢ-3住居址と同様、地床炉の一種と考



えられる。

この住居址は南西部で、僅かではあるがF III-104陥し穴状遺構に切られている。

#### F III-5 住居址 (図版59ab・106c、写真図版64b・113cd)

3.0m±×2.9m±の規模をもち、ほぼ円に近い形状を示す住居址である。埋土上部には、“湯沢パターン”の火山灰がみられる。この火山灰層は、住居址中央部を中心に径150cm±・層厚10cm±の規模をもって分布している。下位の埋土は、炭化物・焼土などを包含する暗褐色土層で構成されている。壁高は、北壁で11cm±、東壁で6cm±、南壁で10cm±、西壁で20cm±を計る。柱穴は、P<sub>1</sub>(径29cm±・深さ16cm±)・P<sub>2</sub>(径27cm±・深さ7cm±)・P<sub>3</sub>(径23cm±・深さ12cm±)・P<sub>4</sub>(径33cm±・深さ14cm±)・P<sub>5</sub>(径18cm±・深さ29cm±)・P<sub>6</sub>(径18cm±・深さ16cm±)・P<sub>7</sub>(径30cm±・深さ12cm±)などのピット群で構成されるものとみられるが、詳細は不明である。

炉は住居址中央部よりやや東側に位置している。摺鉢状の形態を示し、その中央部には直立埋設土器を伴う。炉縁径は55cm±、床面から直立埋設土器底部までの深さは25cm±である。炉は直立埋設土器の周囲を中心に、全体にかなりの焼成を受けている。

#### F III-6 住居址 (図版59c、写真図版65a)

3.3m±×3.1m±の規模をもち、ほぼ円の形状を示す住居址である。埋土は上部がクロボクで、下部が炭化物を含む暗褐色土層で構成されている。しかし、Field Cardに性状を記載したのみで、土層断面図の作成は省略した。壁高は北壁で16cm±、東壁で6cm±、南壁で8cm±、西壁で28cm±を計る。柱穴は、P<sub>1</sub>(径58cm±・深さ31cm±)以外に確実なものは発見されなかった。他のピットは深さが5cm±～8cm±しかなく、不規則な形状から木根による攪乱痕と思われる。

炉は住居址の中央部に位置している。40cm±×27cm±の広がりを示す焼土をもつだけの地床炉である。焼土の厚さは3cm±である。一応、炉の立ち割りはしたが、単純な構成を示すものであるために、その断面図作成は省略した。

住居址北西部の、壁にほど近い地点には、火山灰中に埋めこまれた単体の埋甕が存在している。しかし、この埋甕が住居址に伴うものであるかどうかは不明である。

#### F III-7 住居址 (図版60ab・106d、写真図版65b)

3.0m±×2.5m±の規模をもち、楕円に近い形状を示す住居址である。埋土は主に、炭化物・炭化材を含む褐色土層で構成されている。壁高は北壁で13cm±、南壁で5cm±、西壁で18cm±を計る。柱穴は存在しない。

炉は住居址中央部よりやや北側に位置している。直立埋設土器だけの炉である。掘り方は土器よりも僅かに大きいだけであり、内部は火山灰で充填されている。炉縁径は20cm±、床面か

ら直立埋設土器底部までの深さは12cm±である。僅かながら焼成痕がみられる。

#### F III-8 住居址 (図版61ab、写真図版66a)

炉や床面上の現地性の焼土などは検出されなかったが、壁の残存状態や柱穴とみられるピットの配置から、この遺構を住居址と認定した。東壁および南壁部分は消滅しており、その詳細な規模・形状は不明であるが、推定6.2m±×5.0m±の規模をもち、楕円の形状を示していると考えられる。埋土は主に、炭化物・焼土の細粒を含む暗褐色土層で構成されている。壁高は北壁で15cm±、西壁で35cm±を計る。柱穴は、P<sub>1</sub>(径70cm±・深さ54cm±)・P<sub>2</sub>(径72cm±・深さ33cm±)のピットで一部が構成されるものと思われる。

床面上には数個の安山岩類垂角礫が散在していた。

この住居址は上記のように、北壁および西壁がある高さをもって残存していること、柱穴とみられるピットが存在すること、しかし炉は認められないこと、また床面は一定のかたさを保ちしかもその直上に礫を載せることなどにより、構築半ばで廃絶処分を受けたものと考えられる。

当住居址は南側で、F III-151不整形ピットにより切られている。

#### F III-9 住居址 (図版61c・106e、写真図版66b)

全体的に残存状態が悪いために、規模・形状の詳細は不明である。埋土はクロボクで構成されているが、ほぼ単層であるために、Field Card に性状を記載したのみで、土層断面図の作成は省略した。僅かにつかめた西壁での壁高は9cm±を計る。周囲には深さ8cm±～27cm±のピットがいくつか巡るが、いずれも非常に不整形であり、どれが柱穴を構成するものか把握することはできなかった。

炉は住居址中央部よりやや南側に位置していると考えられる。形態上は地床炉として分類されるものである。炉縁径は110cm±を計る。炉内には、厚さ15cm±の焼土の堆積がみられた。またその焼土中には、若干の土器片が存在していた。

#### F III-10住居址 (図版60c・106f、写真図版67a・113b)

北部から東南部にかけての壁が消滅しているために、規模・形状の詳細は不明であるが、他の残存している壁の状況から推定すると、径4m前後の規模をもち、円の形状を示す住居址であると考えられる。Field Card には、埋土は暗褐色土層の単層で構成されている。と記載されているが、詳細は不明である。調査の手違いにより、土層断面図の作成も行っていない。壁高は南壁で10cm±、西壁で14cm±を計る。柱穴は検出されていない。

炉は住居址中央部よりやや西側に位置していると考えられる。4個の安山岩類垂角礫で構成される石囲い炉である。他にも構成礫が存在したのかどうかつかむことはできなかった。明瞭な礫の抜き取り痕は認められない。また、埋設土器は伴わない。炉縁径は40cm±を計る。炉の

中央部は若干の焼成を受けている。

(高橋文夫)

## F IV 区 (住居址実数 7 棟・竪穴状遺構実数 1 棟)

### F IV - 1 住居址 (図版62a、写真68a)

一辺が4.50m±の規模をもち、壁の輪郭線からはほぼ六角形に近い平面形を呈していたと推定される。しかし、F IV - 2 住居址と重複して東壁を消失していることや南壁の一部で壁の輪郭線が確認できなかったことから、規模・平面形とも詳細は明らかでない。埋土の大部分を占めるのはクロボク層のほぼ単層であり、土層断面図の作成は省略した。壁高は西壁で20cm±、北壁も同様の壁高をもつが壁の立ち上がりは非常にゆるやかである。木根による攪乱を多く受けて床面は凹凸が激しく、柱穴の検出は困難で、炉をはさんで位置するP<sub>1</sub>(径43cm±・深さ47cm±)・P<sub>2</sub>(径47cm±・深さ46cm±)の2個の柱穴が検出されたにすぎない。

炉は住居址中央部からやや北東側に位置する地床炉である。130cm±×70cm±の規模をもち平面形はほぼ楕円形を呈している。

重複するF IV - 2 住居址との新旧関係は不明である。

なお、当住居址は占地と埋土構成、出土遺物から縄文時代中期初頭に属する。

### F IV - 2 住居址 (図版62b、写真図版68a)

南北壁間が3.90m±の規模をもつ。壁の輪郭線は不明瞭であるが、多角形に近い平面形を呈していたと推定される。他に木根による攪乱も著しいため規模・平面形とも詳細は不明である。埋土はクロボク層のほぼ単層が占めるため、土層断面図の作成は省略した。壁高は北壁で5cm±・南壁で10cm±を計る。柱穴としては、P<sub>1</sub>(径33cm±・深さ62cm±)・P<sub>2</sub>(径34cm±・深さ25cm±)の2個が検出されただけで、柱穴配置の詳細は不明である。

炉は住居址のほぼ中央部に位置した地床炉で、190cm±×85cm±の規模をもちほぼ楕円形に焼土の広がりがみられる。

重複するF IV - 1 住居址との新旧関係は不明である。

なお、当住居址は占地と埋土構成、出土遺物から縄文時代中期初頭に属する。

### F IV - 3 住居址 (図版88a・写真図版68b)

東壁が消失しているが3.90m±×3.60m±の規模をもち、ほぼ円形に近い平面形を呈していたと推定される。埋土はクロボク層と火山灰が優占し炭化物をわずかに含む褐色土層を主な構成層とするが、床面と西壁際の一部を汚れ火山灰層が占める。壁高は西壁で50cm±を計る。柱穴状のピットとして確認されたのはP<sub>1</sub>(径25cm±・深さ25cm±)・P<sub>2</sub>(径20cm±・深さ12cm±)の2個だけであり、柱穴構成の詳細は明らかでない。なお炉は検出されなかった。

北東壁の一部をFⅣ-51フラスコ形ピットに切られるが、FⅣ-54フラスコ形ピットとは合併関係も含めて新旧関係は不明である。

なお、当住居址は占地と埋土構成、出土遺物から縄文時代中期初頭に属する。

#### FⅣ-4住居址（図版63b・107a、写真図版69a）

当住居址は拡張住居址と考えられ、2群の柱穴群をもつ。拡張以前を〈第一次住居址〉、拡張以降を〈第二次住居址〉として分けて記述する。

##### 〈第一次住居址〉

当住居址に伴う柱穴は次の4個である。P<sub>1</sub>（径30cm±・深さ33cm±）・P<sub>2</sub>（径23cm±・深さ44cm±）・P<sub>3</sub>（径16cm±・深さ40cm±）・P<sub>4</sub>（径25cm±・深さ96cm±）。これらを支柱穴としてほぼ方形の柱穴配置を示している。周溝と柱穴から一辺が2.50m±の規模をもち、ほぼ方形の平面形を呈していたと推定される。周溝は東側を除く三方にみられるが連続するものではない。三本とも長さ145cm±～220cm±・幅7cm±～20cm±・深さ5cm±～15cm±の規模の内におさまる。

##### 〈第二次住居址〉

一辺が3.90m±の規模をもち、ほぼ方形の平面形を呈する。東壁は消失し輪郭線は不明である。埋土は西壁際を焼土・炭化物を含む暗褐色土層が占める以外はほぼクロボク層の単層であり、土層断面図の作成は行なわなかった。柱穴はP<sub>5</sub>（径25cm±・深さ59cm±）・P<sub>6</sub>（径22cm±・深さ57cm±）・P<sub>7</sub>（径18cm±・深さ45cm±）・P<sub>8</sub>（径17cm±・深さ54cm±）の4個が支柱穴としてあり、ほぼ長方形の柱穴配置を示す。

当初、当住居址は周溝外に「ベッド状」施設を伴うものと考えた。しかし床面との高低差が2cm±～5cm±と非常に小さいことや2組のそれぞれ独立した柱穴配置をもつこと、そして周溝の存在から、〈第一次住居址〉の床面のレベルを利用する形で拡張した住居址であると考えた。したがって住居址中央部に位置する地床炉は〈第二次住居址〉に伴うと同時に〈第一次住居址〉においても使用された可能性を含むものである。地床炉の規模は130cm±×100cm±と大きく、ほぼ楕円形を呈する。

一部重複するFⅣ-5住居址状遺構との新旧関係は不明である。

なお、当住居址は占地と埋土構成・出土遺物から縄文時代中期初頭に属する。

#### FⅣ-5住居址状遺構（図版63b、写真図版67b）

当遺構は〈FⅣ-5住居址〉として処理してきた。しかし規模や形態の点から住居址としての分類から除外される。したがって住居址状遺構として分類し、記述は住居址の項に含めて行なうものとする。

2.25m±×1.65m±の規模をもち、長方形の平面形を呈する。非常に小形で炉の施設も伴な

っていない。埋土を構成しているのはクロボク層であるが、ほぼ単層であるため、土層断面図の作成は省略した。壁高は北壁で30cm±・東壁で10cm±ある。壁際を周溝が一周し、幅7cm±～20cm±・深さ2cm±～11cm±を計る。北壁と南壁のほぼ中央部には、周溝を切ってP<sub>1</sub>(径20cm±・深さ24cm±)・P<sub>2</sub>(径14cm±・深さ11cm±)の2個の柱穴状のピットが検出されている。一部重複するFⅣ-4住居址との新旧関係は不明である。

なお、当遺構は出土遺物を伴わないが、占地と埋土構成から縄文時代中期初頭に属すると考えられる。

#### FⅣ-6住居址(図版64a、写真図版69b)

3.90m±×3.60m±の規模をもつと推定される。壁の輪郭線はほぼ円形に近い平面形を呈している。しかし、東側ではFⅣ-7住居址と重複して壁を消失していることや南壁の立ち上がりの部分が不明瞭であるために、規模・平面形とも詳細は明らかでない。埋土はクロボク層が主体を占めるが、下部を褐色～黒褐色土層の薄層が構成する。壁高は西壁で60cm±を計る。住居址中央部の床面がやや窪み壁際に近づくにつれて高くなってゆく。特に南壁が不明瞭ながら緩やかな立ち上がりを示す。柱穴としてはP<sub>1</sub>(径20cm±・深さ25cm±)・P<sub>2</sub>(径30cm±・深さ53cm±)・P<sub>3</sub>(径15cm±・深さ20cm±)の3個が検出された。これらのピット群が支柱穴の一部を構成すると考えられるが、詳細は不明である。

炉は住居址中央部に位置する地床炉の形態をもつものである。炉を中心とした東側の床面が試掘の際に使用した重機によって一部破壊を受けた。炉の残存部分は55cm±×45cm±で不整形を呈する。炉面下5cm±の深さまで良く焼成を受けている。また炉のほぼ東側の床面上には、小規模な現地性の焼土が点々と連なってみられる。

埋土中からは多数の土器片が出土したほか、石匙や半円状扁平磨製石器も出土している。

重複するFⅣ-7住居址との新旧関係は不明である。

なお、当住居址は占地と埋土構成・出土遺物から縄文時代中期初頭に属する。

#### FⅣ-7住居址(図版64bc、写真図版69b)

他の住居址と重複して東壁と西壁を消失し、規模・平面形とも詳細は不明であるが、南北壁間は3.60m±を計る。埋土はクロボク層が主体を占めるが、床面は汚れ火山灰層の薄層に覆われている。壁高は北壁で25cm±・南壁で18cm±を計る。床面は凹凸が激しく、また北壁も含めて木根による攪乱が著しい。柱穴と考えられるピットは検出されなかった。

炉は住居址のほぼ中央部に位置する。地床炉の形態をもつもので、径70cm±の不整な円形を呈する。炉面は良く焼成を受け、それは深さ10cm±の部分にまで及んでいる。

当住居址はFⅣ-6住居址とFⅣ-8住居址と重複するが、新旧関係は不明である。

なお、当住居址は占地と埋土構成・出土遺物から縄文時代から中期初頭に属する。

## F IV - 8 住居址 (図版64d、写真図版69b)

西側でF IV - 7住居址と大きく重複し、東側では木根等による攪乱が著しいため、北壁と床面の一部を痕跡として残すだけである。したがって規模・平面形の詳細は不明である。埋土を構成するのはクロボク層であるが、ほぼ単層であったために土層断面図の作成は省略した。壁高は北壁で35cm±を計り、壁の立ち上がりは緩やかである。柱穴と炉は検出されなかった。

重複するF IV - 7住居址との新旧関係は不明である。

当住居址はほとんど遺物を伴わないが、占地と埋土構成・重複関係から縄文時代中期初頭に属すると考えられる。(三浦 謙一)

## G II 区 (住居址実数20棟)

## G II - 1 住居址 (図版65a・107b、写真図版70a・113e)

全体的に削剝や、他遺構との切り合いによる破壊をかなり受けているために、規模・形状などの詳細は不明である。しかし、南側に僅かに残存している壁と柱穴の位置から、角張った形状を示す住居址であると考えることができる。住居址固有の埋土は認めることができず、II層によって直接被覆されている部分が多い。壁高は南西部で8cm±を計るにすぎない。柱穴は位置と深さから、P<sub>1</sub>(径34cm±・深さ41cm±)・P<sub>2</sub>(径48cm±・深さ35cm±)・P<sub>3</sub>(径50cm±・深さ53cm±)などのピット群で構成されていると思われるが、詳細は不明である。主に北半部に深さ22cm±～67cm±のピット群の集中がみられるが、これらと住居址の関係をつかむことはできなかった。

炉は住居址中央部より東南部に位置していると考えられる。火山灰を掘り凹めただけの摺鉢状の形態を示し、北西方向に開口する斜位埋設土器を伴う。炉縁径は75cm±、床面から斜位埋設土器下底部までの深さは27cm±を計る。炉は斜位埋設土器を中心に、よく焼成を受けている。

当住居址は、F II - 17住居址・G II - 2住居址により切られている。

## G II - 2 住居址 (図版65bc・107c、写真図版70b・113f・169ef・171e)

4.9m±×4.5m±の規模をもち、不整な六角形の形状を示す住居址である。埋土は主に、炭化物・焼土を含む暗褐色～黒褐色土層で構成されている。壁高は、北壁で10cm±、東壁で13cm±、南壁で20cm±、西壁で40cm±を計る。柱穴はP<sub>1</sub>(径38cm±・深さ34cm±)・P<sub>2</sub>(径35cm±・深さ46cm±)・P<sub>3</sub>(径26cm±・深さ33cm±)のピット群のほか、壁際に沿っての配置を示す深さ9cm±～19cm±の小ピット群などで構成されるものとみられる。P<sub>4</sub>(径40cm±・深さ28cm±)は、何らかの形で「出入口」状施設に伴うものであろう。

この「出入口」状施設は住居址南西部の壁際に位置し、大きさがそれぞれ40cm±・45cm±の2

個の安山岩類垂角礫で構成されている。いずれも、長軸は壁に直交した形であり、下半部は床面下に埋めこまれている。礫間隔は25cm±、外側での幅は55cm±を計る。この2個の礫の間に、径21cm±の安山岩類が存在するが、床面下に埋めこまれていないことにより、「出入口」状施設とは直接関係しないものとみられる。西壁沿いには一部ではあるが、幅20cm±・深さ8cm±の周溝が巡る。

炉は住居址中央部よりやや西南に位置している。炉縁部に黄褐色細礫が敷設される摺鉢状の形態を示し、その中央部には直立埋設土器を伴う。炉縁径は100cm±、床面から直立埋設土器底部までの深さは34cm±を計る。炉壁・炉底ともかなりの焼成を受けているが、直立埋設土器下半部には焼成痕は認められない。

この住居址では、3地点にわたって「剥片貯蔵」形態がみられた。北西壁よりの小ピット(径12cm±・深さ7cm±)中のもの(No.1)は33個の剥片からなる。他は西壁沿いの周溝と壁の間地点にみられ、No.2は17個の、No.3は数個の剥片からなる。また、P<sub>5</sub>(径30cm±・深さ19cm±)の埋土中からは岩版が出土している。この他に、床面密着の一括土器や土器片が東南部に集中して存在していた。北側の床面上には台石がある。

当住居址はG II-1住居址を切っているが、南側で壁を接するG II-53フラスコ形ピットとの新旧関係は不明である。

#### G II-3住居址 (図版66abc・107d、写真図版71ab・114ab)

5.8m±×5.4m±の規模をもち、八角形の形状を示す住居址である。住居址南西部の埋土上部には“湯沢パターン”の火山灰がみられた。しかし、土層断面図にもよく現われていず、Field Cardにも具体的な記載を欠いているために、その詳細は不明である。下位の埋土は主に、炭化物・焼土の細粒を含む暗褐色～黒褐色土層で構成されている。壁高は北壁で22cm±、東壁で4cm±、南壁で25cm±、西壁で32cm±を計る。柱穴は、P<sub>1</sub>(径41cm±・深さ34cm±)・P<sub>2</sub>(径26cm±・深さ15cm±)・P<sub>3</sub>(径44cm±・深さ43cm±)・P<sub>4</sub>(径28cm±・深さ31cm±)・P<sub>5</sub>(径22cm±・深さ35cm±)・P<sub>6</sub>(径40cm±・深さ45cm±)・P<sub>7</sub>(径22cm±・深さ23cm±)・P<sub>8</sub>(径28cm±・深さ27cm±)の8個のピット群で構成され、それぞれが壁のコーナーに位置する配置を示している。

炉は住居址中央部より西側に位置している。火山灰を掘り凹めただけの摺鉢状の形態をもつもので、その中央部には直立埋設土器を伴う。炉内の、直立埋設土器の上には焼成を受けた数個の安山岩類の角礫が載っているが、その在り方から炉に伴うものではなく、西壁よりに集中して存在する礫群の一部を構成しているものと考えられる。炉縁径は80cm±、床面から直立埋設土器下底部までの深さは24cm±を計る。炉は、埋設土器上部から炉壁・炉底にかけてよく焼成を受けている。

この住居址は炭化材と焼土の在り方から、焼失を受けていると考えられる。現地性の焼土は床面上に広範囲に分布しているが、殊に、住居址西半部にその集中がみられる。西壁沿いには焼土とともに、数本の炭化材が床面に密着した形で存在している。この範囲にはまた、安山岩類・凝灰岩類の垂角～垂円礫が床面に密着して集中している。この礫群は炭化材・焼土の上に直接載り、一部ではあるが焼成を受けている。この礫群の住居址内における位置づけは不明であるが、炉内や床面上の在り方から住居使用時の現位置を示しているものではなく、火災に密着した時間の中で現在の位置にもたらされたものであると考えることができよう。

住居址西北部の壁際の床面には、埋蔵がある。この埋蔵は、床面下33cm±の深さに埋めこまれている。東半分の掘り方内には、埋蔵に接する形で土器片が二重に巡っている。また、北壁に近い床面上からは有茎石鏃が出土している。その他に、住居址の壁際に、全体にわたって床面密着の礫が存在しているが、これらと先に述べた礫群との関係は不明である。

#### G II - 4 住居址 (図版67a、写真図版114c)

この住居址はII層上面で検出されたものであるが、壁・柱穴ともにはっきりとしたものはつかめないうえに、その説明は不明である。この遺構の上にはクロボクが直接載っている。

炉は4個の安山岩類垂角礫で構成され、南側は開口している。埋設土器は伴わない。構成礫のうち、南北に長軸をもつ2個のものは割れている。炉縁径は長軸方向で75cm±、短軸方向で65cm±を計る。焼成痕は認められない。

この住居址に伴うものかどうかかわからないが、炉の南東部には、P<sub>1</sub> (径40cm±・深さ33cm±)・P<sub>2</sub> (径41cm±・深さ43cm±)・P<sub>3</sub> (径42cm±・深さ45cm±)・P<sub>4</sub> (径28cm±・深さ40cm±)などのピット群が存在している。

以上、この遺構を住居址として取り扱ってきたが、見方を変えれば、コの字状の形状を示す石組は、配石の一種であると見做すこともできるであろう。

#### G II - 5 住居址 (図版68a・108a、写真図版72a・114ef・173f)

北壁および東壁が消失しているために全体の規模・形状は不明であるが、柱穴とみられるピット群の配置から推定すると、最大部で5.5m前後の径をもち、六角形の形状を示す住居址であると考えられる。住居址中央部から南西部を中心とする範囲の埋土上部に“湯沢パターン”の火山灰がみられた。この火山灰はField Cardの記載によれば、径150cm+ $\alpha$ 、層厚10cm±の規模をもって分布している。その下位の埋土は、炭化物を多く含む黒褐色土層で構成されている。埋土自体の層厚が薄いことや、全体的に保存状態が悪いなどの理由から、土層断面図の作成は省略した。壁高は西壁で15cm±、南壁で5cm±を計る。柱穴は、P<sub>1</sub> (径46cm±・深さ44cm±)・P<sub>2</sub> (径50cm±・深さ28cm±)・P<sub>3</sub> (径30cm±・深さ42cm±)・P<sub>4</sub> (径52cm±・深さ32cm±)・P<sub>5</sub> (径26cm±・深さ45cm±)・P<sub>6</sub> (径55cm±・深さ61cm±)などのピット群で構成さ



れるものと考えられる。またその配置から、P<sub>7</sub>（径48cm±・深さ57cm±）・P<sub>8</sub>（径18cm±・深さ39cm±）・P<sub>9</sub>（径26cm±・深さ32cm±）のピット群は壁柱穴を構成するものとみられる。

炉は住居址中央部より南側に位置している。摺鉢状の形態を示すもので、真中には直立埋設土器を伴う。炉縁径は63cm±、床面から直立埋設土器底部までの深さは23cm±を計る。炉は埋設土器を中心に、主に上部が焼成を受けている。

壁柱穴P<sub>9</sub>に接する北側床面上には数個の剥片からなる「剥片貯蔵」形態がみられた。また、炉の南東部の壁よりには埋甕が存在した。

この住居址は南壁で不整形ピットにより切られている。

#### G II - 6 住居址（図版68b）

全体的にかなりの削剥や破壊を受けているために壁の輪郭線がつかめなかったことや、炉の存在も不明確であることから、この遺構がはたして住居址かどうかはわからない。しかし、柱穴とみられるピット群の配置から、一応住居址として登録した。規模・形状は不明である。床面もはっきりとしたものではない。この遺構固有の埋土は見いだせず、II層が直接、床面と想定される火山灰上に載る在り方を示している。柱穴と考えられるピット群は、P<sub>1</sub>（径28cm±・深さ32cm±）・P<sub>2</sub>（径31cm±・深さ23cm±）・P<sub>3</sub>（径35cm±・深さ33cm±）・P<sub>4</sub>（径30cm±・深さ18cm±）・P<sub>5</sub>（径38cm±・深さ40cm±）の5個である。その他のピットはいずれも不規則でしかも浅く、柱穴を構成するものとはみなせなかった。かなりの部分が、不整形ピットにより切られている。

#### G II - 7 住居址（図版69ab・108b、写真図版72b・114d）

東半部の壁が消滅していることにより全体の規模・形状は不明であるが、残存部の壁の状況と柱穴とみられるピット群の配置から、4.5m～5.0m前後の規模をもち、多角形の形状を示す住居址であると推定される。埋土は主に、暗褐色～黒褐色土層で構成されている。壁高は北壁5cm±・南壁21cm±・西壁18cm±を計る。柱穴ははっきりとしたものは見いだされていないが、P<sub>1</sub>（径22cm±・深さ65cm±）・P<sub>2</sub>（径22cm±・深さ60cm±）・P<sub>3</sub>（径30cm±・深さ63cm±）が主柱穴を、P<sub>4</sub>（径27cm±・深さ45cm±）・P<sub>5</sub>（径16cm±・深さ25cm±）・P<sub>6</sub>（径28cm±・深さ31cm±）・P<sub>7</sub>（径40cm±・深さ56cm±）・P<sub>8</sub>（径29cm±・深さ36cm±）・P<sub>9</sub>（径20cm±・深さ31cm±）が壁柱穴を、それぞれ構成するものと考えられる。

炉は住居址中央部よりやや北側に位置している。10個ほどの安山岩類・凝灰岩類垂角礫を構成礫とする石囲い炉で、埋設土器は伴わない。炉縁径は最大部で72cm±を計る。炉底はかなりの焼成を受けている。この炉に接する北西部には、最大幅80cm±の、焼成を受けた黄褐色細礫の存在が認められたが、床面上8cm±の厚さをもつ暗褐色土層の上に位置していることから、炉とは直接関連をもたない異地性のものであると考えられる。

炉の西側および西南部の床面上には、一括土器や土器片がいくつかみられた。また、安山岩類、凝灰岩類亜角礫も、炉の北西側の床面を中心にいくつか存在している。

当住居址は、G II-55フラスコ形ピット・G II-102陥し穴状遺構により切られている。しかし、G II-4住居址との切り合い関係では、G II-4住居址の輪郭がはっきりとしないために、正確なことは不明である。層位的には、当住居址はG II-4住居址に切られるものである。

#### G II-8住居址

この住居址に関するデータは、1枚のField Cardに記載されているにすぎず、全体的に残存状態が悪いために、その詳細は不明である。Field Cardには、中央部に“湯沢パターン”の火山灰層を伴う住居址として記載されている。しかし、火山灰層の分布する正確な範囲や層厚についての記載はない。

壁の輪郭線がはっきりとしないこと、柱穴とみられるピット群もすべて不整形で深さにもある程度の統一が認められないこと、炉の痕跡も見いだせないことなどから、住居址として一度登録されたものではあるが、ここに欠番とする。Field Cardの記載事項は、調査前段階における事実誤認であろう。

#### G II-9住居址（図版71ab、写真図版73ab・115a）

最大部で3.3m前後の規模をもち、不整六角形を呈する住居址である。埋土は主に暗褐色土層で構成されている。壁高は、南壁10cm±・西壁23cm±を計る。柱穴は、P<sub>1</sub>（径22cm±・深さ41cm±）・P<sub>2</sub>（径32cm±・深さ56cm±）・P<sub>3</sub>（径45cm±・深さ21cm±）・P<sub>4</sub>（径37cm±・深さ25cm±）・P<sub>5</sub>（径28cm±・深さ34cm±）・P<sub>6</sub>（径21cm±・深さ46cm±）の6個のピットで構成されている。

炉は検出されていない。しかし、住居址中央部より南東の位置に、長軸80cm±・深さ26cm±の不整形ピットと、径60cm±・深さ43cm±のほぼ円形のピットがみられ、この個処に炉が存在していたものと考えられる。この2つのピットの埋土は、炭化物を含む黄褐色土層で構成されている。推定の域を出ないが、この2つのピットは、炉が破壊され、埋設土器が持ち出された痕跡として捉えておくことができるのかもしれない。

住居址の北・西・南側の床面上には、多数の安山岩類・凝灰岩類亜角礫が土器とともに存在している。また、北壁に近い床面上からは、滑車形耳飾が得られている。

当住居址は、火山灰で全体が閉塞されているG II-104陥し穴状遺構により切られている。しかし、G II-104陥し穴状遺構に同じく切られているG II-56フラスコ形ピットと当住居址の新旧関係は不明である。

#### G II-10住居址（図版69cd・108c、写真図版74a・115cd）

長軸4.5m±×短軸4.1m±の規模をもち、ほぼ正六角形の形状を示す住居址である。埋土は

主に褐色～暗褐色系の土層で構成されている。全体に、土器片・炭化物・焼土の包含が多い。壁高は、北壁19cm±・東壁9cm±・南壁25cm±・西壁13cm±を計る。柱穴は、P<sub>1</sub>（径45cm±・深さ59cm±）・P<sub>2</sub>（径28cm±・深さ33cm±）・P<sub>3</sub>（径28cm±・深さ46cm±）・P<sub>4</sub>（径52cm±・深さ62cm±）・P<sub>5</sub>（径32cm±・深さ66cm±）などのピット群で構成されている。柱穴配置の上からは、G II-104 陥し穴状遺構に切られている西壁際に、もう1つの柱穴が存在していたものと考えられる。この住居址は、本来は6個の柱穴を伴うものであろう。P<sub>4</sub>とP<sub>5</sub>の間には短いものではあるが、幅20cm±・深さ20cm±の周溝が巡る。

炉は住居址中央部よりやや南東に位置している。炉縁部に黄褐色細礫を敷設された摺鉢状の形態をもつもので、北西方向に開口する斜位埋設土器を伴う。黄褐色細礫は炉縁部の全面に敷設され、斜位埋設土器の上では特に厚い。埋設土器は3個体のものが使用されており、胴部で二重、底部よりで三重構造となっている。炉縁径は90cm±、床面から斜位埋設土器下底部までの深さは30cm±を計る。炉は埋設土器を中心に、よく焼成を受けている。

この住居址の炉を中心とする範囲の床面上には、一括土器・土器片・礫などが多数、密着した形で存在していた。殊に、炉の南西側にその集中がみられる。炉近くの床面上からは、石鏝・円盤状石製品・水晶（2点）・土偶破片・クルミ炭化物などが得られている。

また、この住居址には、20個の剥片からなる「剥片貯蔵」形態がみられた。この剥片類は、炉に近い東北部の床面上に位置している。

上記の遺物の他に、炉の南西部の床面上には、径27cm±の範囲で黄褐色細礫の分布がみられた。

当住居址はG II-12住居址を切っているが、G II-104 陥し穴状遺構には切られている。G II-11住居址との切り合い関係は不明である。

#### G II-11住居址（図版72a・108b、写真図版115b）

全体的に削剝を受けているために、この住居址の規模・形状は不明である。しかし、柱穴と考えられるピット群の配置から、4.0m前後の規模をもつものであると推定される。埋土は、II層が直接床面に載る在り方を示している。柱穴は、P<sub>1</sub>（径45cm±・深さ65cm±）・P<sub>2</sub>（径56cm±・深さ48cm±）・P<sub>3</sub>（径36cm±・深さ22cm±）・P<sub>4</sub>（径47cm±・深さ62cm±）の4個のピットで構成され、P<sub>1</sub>を要としてP<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>と扇状に展開する配置をもつものと考えられる。

炉は住居址中央部より南側に位置していると思われる。炉縁部に黄褐色細礫が敷設された摺鉢状の形態をもつもので、真中に直立埋設土器を伴う。炉縁径は65cm±、床面から直立埋設土器底部までの深さは22cm±を計る。炉は全体にわたって、よく焼成を受けている。

この住居址の上には、大きく2つの礫群で構成されるG II-203配石遺構が載っている。一時は、この礫群を当住居址に伴うものとも考えたが、構成礫が住居址床面を若干掘りこんで埋置

されていることや、炉や柱穴P<sub>3</sub>の上に構成礫が載っているところから、当住居址とは独立した存在であると認定した。

#### G II-12住居址 (図版71cd・109a、写真図版74b)

北側および東側で破壊を受けているために全体の規模・形状は不明であるが、残存部の壁から推定復元すると、最大部で5.5 m 前後の規模をもち、ほぼ正六角形の形状を示す住居址であると考えられる。埋土は主に暗褐色土層で構成されている。壁高は、南壁14cm±・西壁13cm±を計る。柱穴は、P<sub>1</sub>(径26cm±・深さ不明)・P<sub>2</sub>(径33cm±・深さ不明)・P<sub>3</sub>(径28cm±・深さ60cm±)・P<sub>4</sub>(径20cm±・深さ47cm±)などのピット群で構成されるものと思われる。他の柱穴については不明である。P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>の深さが不明なのは、実測の際の下手際によるものであるが、ある程度の深さをもつものであることは、写真から読みとることができよう。

炉は住居址中央部より北側に位置している。浅皿状の形態を示し、やや北によった位置に直立埋設土器を伴う。しかし、直立埋設土器の掘りこみはきわめて浅く、上半部が潰れた状態で出土している。炉縁径は80cm±、床面から直立埋設土器下底までの深さは16cm±を計る。炉は僅かに焼成を受けているにすぎない。

この住居址の北壁際には埋嚢が存在している。この埋嚢に近い床面からは凹石が1点出土している。また、西北壁よりの床面上からは、有孔の台付土器が得られている。

当住居址は、G II-10住居址およびG II-105陥し穴状遺構により切られている。

#### G II-13住居址 (図版73abc・109b、写真図版75ab・115e)

東南壁および南壁が消滅しているために全体の規模・形状は明らかではないが、他の残存している壁の状況から推定すると、4.0 m 前後の規模をもち、ほぼ円形に近い住居址であると考えられる。この住居址の主要部分を占める埋土は“湯沢パターン”の火山灰層である。この火山灰層は、南北2.5 m±×東西2.7 m±の規模と27cm±の層厚をもって、住居址中央部に分布している。住居址中央部では、この火山灰層は一部ではあるが、床面に密着する在り方を示している。火山灰層下位の、住居址壁よりの埋土は、主に暗褐色土層で構成されている。壁高は、北壁6 cm±・東壁6 cm±・西壁16cm±を計る。柱穴は明確なものは多く見いだされていないが、P<sub>1</sub>(径27cm±・深さ20cm±)・P<sub>2</sub>(径30cm±・深さ16cm±)・P<sub>3</sub>(径34cm±・深さ25cm±)・P<sub>4</sub>(径28cm±・深さ17cm±)・P<sub>5</sub>(径27cm±・深さ42cm±)・P<sub>6</sub>(径22cm±・深さ60cm±)などのピット群で構成されているものとみられる。

炉は住居址中央部よりやや西南方向に位置している。浅皿状の形態を示し、南東方向に開口する斜位埋設土器を伴う。炉縁径は55cm±、床面から斜位埋設土器下底部までの深さは16cm±を計る。この炉は全体にわたって、よく焼成を受けている。南東部には、汚れ火山灰で閉塞され、焼成を受けた浅皿状の凹みがみられるが、これはG II-21住居址に伴う炉の痕跡であると

考えられる。2つの炉の焼土層が連続してみえるのは、ほぼ同じ個所に炉が設置されたためであろう。

西南壁よりの床面には「出入口」状施設がある。壁に直交する形の構成礫はいずれも小さく、長軸でそれぞれ、21cm±・19cm±を計るにすぎない。下半部は床面下に埋めこまれている。礫間隔は37cm±、外側での幅は53cm±である。この構成礫の間には、床面に僅かに食いこむ形の径15cm±の礫があり、これも「出入口」状施設の一部をなすものと思われる。

炉の南側の床面には現地性の焼土が、また東南部の床面には広範囲にわたって炭化物が分布している。

当住居址はG II-21住居址の大半を切っている。しかし、G II-14住居址との新旧関係は不明である。G II-62フラスコ形ピットには切られている。

#### G II-14住居址 (図版70b・109c、写真図版75b)

全体的に削剝を受けているために、規模・形状は不明である。しかし、柱穴とみられるピット群の配置から、3.0m前後の規模をもつ住居址であると推定される。この住居址固有の埋土はみられず、II層が直接床面に載る在り方を示している。単層であるために、Field Cardに埋土の状況を記載したのみで、土層断面図の作成は省略した。柱穴は、P<sub>1</sub>(径65cm±・深さ33cm±)・P<sub>2</sub>(径78cm±・深さ27cm±)・P<sub>3</sub>(径32cm±・深さ32cm±)・P<sub>4</sub>(径34cm±・深さ56cm±)などのピット群で構成されていると考えられる。それ以外のP<sub>5</sub>・P<sub>6</sub>・P<sub>7</sub>・P<sub>8</sub>のピット群は深さが11cm±～18cm±を示しており、これらも柱穴を構成するピット群として把握できるのかもしれない。

炉は住居址のほぼ中央部に位置している。摺鉢状に近い形態を示すもので、真中に東北方向に開口する斜位埋設土器を伴う。炉縁径は80cm±、床面から斜位埋設土器下底部までの深さは26cm±を計る。炉は、斜位埋設土器の上部で僅かに焼成を受けているにすぎない。

当住居址は、G II-13住居址・G II-21住居址と切り合っているが、その新旧関係は不明である。

#### G II-15住居址 (図版72b・109d、写真図版77a・115f)

6.9m±×6.5m±の規模をもち、丸味を帯びた多角形の形状を示す住居址である。住居址中央部を中心とする範囲には、広く“湯沢パターン”の火山灰の分布がみられた。この火山灰は一部が断続的ながら、3.7m±の規模と25cm±の層厚をもって分布し、住居址中央部では床面に密着する在り方を示している。この火山灰の上面には、密着した形で多数の安山岩類・凝灰岩類の亜角礫群がみられた。下位に位置する壁際の埋土は、褐色～暗褐色系の土層で構成されている。住居址南部で、“湯沢パターン”の火山灰とともに、埋土が不整形ピットにより切られている状況が観察されているが、このピットの性格は不明である。壁高は、北壁16cm±・東

壁 3 cm 土・南壁 36 cm 土・西壁 57 cm 土を計る。柱穴は、P<sub>1</sub> (径 24 cm 土・深さ 30 cm 土)・P<sub>2</sub> (径 24 cm 土・深さ 55 cm 土)・P<sub>3</sub> (径 31 cm 土・深さ 39 cm 土)・P<sub>4</sub> (径 30 cm 土・深さ 58 cm 土)・P<sub>5</sub> (径 22 cm 土・深さ不明)・P<sub>6</sub> (径 22 cm 土・深さ 43 cm 土)・P<sub>7</sub> (径 26 cm 土・深さ 51 cm 土) などのピット群で構成されているものと考えられる。

炉の住居址中央部より北側に位置している。浅皿状の形態をもつもので、埋設土器や黄褐色細礫は伴わない。炉縁径は 140 cm 土、床面から炉底までの深さは 15 cm 土を計る。炉縁部に沿って現地性の焼土の分布がみられたが、炉壁・炉底部はあまり焼成を受けていない。

炉は北東部の壁際には、「出入口」状施設および埋襲がある。「出入口」状施設は、床面下 25 cm 土で埋めこまれた 2 個の安山岩類亜角礫で構成されている。粒径はそれぞれ、38 cm 土・50 cm 土を計る。礫間隔は 40 cm 土、外側での幅は 83 cm 土である。埋襲は、「出入口」状施設の西側の構成礫と壁との間の狭い範囲に位置している。

住居址中央部より北側および北西側の床面上には、深さ 12 cm 土の不整形なピットが広がっており、この範囲には、汚れ火山灰による貼り床がみられた。

出土遺物としては、柱穴 P<sub>5</sub> に接するようにして床面上には、安山岩類の礫群とともに一括土器が密着していた。柱穴 P<sub>6</sub> の西側床面上には、礫だけの集合がみられる。また、床面に近い埋土中からは、小形石製容器が得られている。

この住居址は G II-65 フラスコ形ピットに切られているが、G II-64 フラスコ形ピットとの新旧関係は不明である。

#### G II-16 住居址 (図版 74a・109e、写真図版 76ab・116a)

壁の大半が消失していることにより正確なことはわからないが、柱穴とみられるピット群の配置から、6.5 m 土×4.8 m 土の規模をもつ楕円形の住居址であると推定される。埋土は、小規模ではあるが“湯沢パターン”の火山灰層を伴う。この火山灰は主に、住居址中央部から西側の埋土上部に分布していた。土層断面図には 1.5 m 土の規模にしか表現されていないが、実際にはもう少し大きな分布を示している。層厚は 12 cm 土を計る。下位の埋土は主に暗褐色土層で構成されている。壁高は西壁で 30 cm 土である。柱穴は、P<sub>1</sub> (径 42 cm 土・深さ 26 cm 土)・P<sub>2</sub> (径 45 cm 土・深さ 36 cm 土)・P<sub>3</sub> (径 38 cm 土・深さ 39 cm 土)・P<sub>4</sub> (径 38 cm 土・深さ 24 cm 土)・P<sub>5</sub> (径 33 cm 土・深さ 25 cm 土)・P<sub>6</sub> (径 49 cm 土・深さ 46 cm 土)・P<sub>7</sub> (径 25 cm 土・深さ 34 cm 土)・P<sub>8</sub> (径 35 cm 土・深さ 29 cm 土) などのピット群で構成されるものとみられる。上記のピット群とは別に、P<sub>9</sub> (径 32 cm 土・深さ 47 cm 土)・P<sub>10</sub> (径 32 cm 土・深さ 64 cm 土)・P<sub>11</sub> (径 33 cm 土・深さ 37 cm 土)・P<sub>12</sub> (径 24 cm 土・深さ 54 cm 土)・P<sub>13</sub> (径 24 cm 土・深さ 54 cm 土) の三角形の配置を示すピット群があり、これらも柱穴群の一単位を構成するものと考えられる。前者のピット群は壁柱穴に、後者のピット群は支柱穴に、それぞれ相当するものであろう。

炉は住居址中央部よりやや北西に位置している。摺鉢状の形態をもつもので、南東部に開口する斜位埋設土器を伴う。斜位埋設土器の上部には、7cm±の厚さで黄褐色細礫が敷設されている。炉縁径は90cm±、床面から斜位埋設土器下底部までの深さは17cm±を計る。炉は全体に、よく焼成を受けている。

炉の北西部の壁際には「出入口」状施設がある。この施設は、5cm±～10cm±の深度で床面下に埋めこまれた3個の安山岩類亜角礫で構成されている。両端の礫はそれぞれ粒径31cm±・33cm±を計るが、中央部に埋置されているものは18cm±を計る扁平礫である。両端のもので礫間隔は41cm±、外側での幅は63cm±を計る。この「出入口」状施設に接するような形で、東側には床面下17cm±の深度で埋めこまれた円筒状の形状をもつ安山岩類の立石がある。この立石の両端はほぼ平らに打ち欠かされている。全長は44cm±、径21cm±を計る。この立石は中央部で割れていた。また立石の下位には、埋土が僅かに炭化物を含む明暗褐色～暗褐色土層で構成される56cm±の深さのピットが存在した。南西壁際にも並列の形の2個の安山岩類がみられるが、大きさの点で、「出入口」状施設とみなせるものではない。

出土遺物としては、炉中からトチの実の炭化物、またP<sub>14</sub>中から小形磨製石斧が得られている。

#### G II-17住居址 (図版74bc、写真図版77b・116cd)

全体的にかなりの削剝を受けているために、規模・形状の詳細は不明である。しかし、残存している壁の状況と柱穴とみられるピット群の配置から、最大部で4.5m前後の規模をもち、多角形の形状を示す住居址であると推定される。一部ではあるが埋土上部には“湯沢パターン”の火山灰層の堆積がみられた。この火山灰は住居址のほぼ中央部から西部にかけて、一部断続的ながら径2.0m±・層厚18cm±の規模で分布している。プライマリな火山灰に近い層相を示しているが、中には若干の炭化物・焼土の細粒が含まれている。下位の埋土は主に、炭化物・焼土を微量に混入する暗褐色～黒褐色土層が構成されている。壁高は西壁で20cm±を計る。柱穴は、P<sub>1</sub>(径31cm±・深さ31cm±)・P<sub>2</sub>(径35cm±・深さ44cm±)・P<sub>3</sub>(径48cm±・深さ36cm±)・P<sub>4</sub>(径24cm±・深さ16cm±)・P<sub>5</sub>(径37cm±・深さ23cm±)・P<sub>6</sub>(径26cm±・深さ16cm±)・P<sub>7</sub>(径25cm±・深さ30cm±)などのピット群で構成されるものと考えられる。

炉は住居址中央部よりやや北西方向に位置している。摺鉢状の形態をもつもので、南東方向に開口する斜位埋設土器を伴う。炉は攪乱をかなり受けていたために、Field Cardに状況を記載したのみで、断面実測図の作成は省略した。斜位埋設土器は潰れた状態で出土している。炉内には、異地性と考えられる安山岩類亜円礫が3点みられた。炉は全体に、よく焼成を受けている。

北西壁よりの床面上には、いくつかの安山岩類の集積がみられた。また、メノウの有孔円礫も出土している。

当住居址はG II-18住居址に切られているものと推定される。

#### G II-18住居址 (図版75a・110a、写真図版77b・116ef)

大半がかなりの削剝を受けているために、全体の規模・形状は明らかではない。埋土は暗褐色土層で構成されているが、東半部ではII層との見分けがつかない。壁高は西壁で7cm±を計る。柱穴は配置と深度から、P<sub>1</sub>(径58cm±・深さ52cm±)・P<sub>2</sub>(径28cm±・深さ36cm±)・P<sub>3</sub>(径48cm±・深さ28cm±)などのピット群で構成されるものとみられるが、確実なものを把握することはできなかった。

炉は住居址のほぼ中央部に位置していると考えられる。土器片囲い炉で、南東方向に開口する斜位埋設土器を伴う。この斜位埋設土器は、斜位とはいうものの、ほぼ水平に近い状態で埋設されている。炉を構成する土器片はすべて内面を炉の内側に向け、多いところでは三重・四重の重なりとなって炉縁部を形成している。炉縁径は80cm±を計る。炉は斜位埋設土器を中心に、よく焼成を受けている。

炉の北西部には、下半部を床面下に埋置された2個の安山岩類垂角礫よりなる「出入口」状施設がみられた。粒径はそれぞれ37cm±・37cm±を計り、礫間隔は27cm±・外側での幅は45cm±である。この施設と炉の間には3個の礫がみられるが、床面下に埋置されていないことなどにより、この施設とは無関係なものであると考えられる。

当住居址はG II-17住居址を切っているものと推定される。G II-71フラスコ形ピットには切られている。

#### G II-19住居址 (図版67bc・110b、写真図版78ab・116b)

北側および東側の壁が一部消滅しているために、規模・形状の詳細は不明であるが、残存している壁の状況と柱穴とみられるピット群の配置から、最大径6.6m±の規模をもち、不整六角形の形状を示す住居址であると推定される。埋土の上部には“湯沢パターン”の火山灰層を伴う。この火山灰は住居址中央部よりやや西側に、2.5m±の径と15cm±の層厚をもって分布している。下位の埋土は主に、炭化物・焼土を少量混入する暗褐色土層で構成されている。壁高は、北壁14cm±・南壁6cm±・西壁42cm±を計る。柱穴は、P<sub>1</sub>(径97cm±・深さ85cm±)・P<sub>2</sub>(径40cm±・深さ70cm±)・P<sub>3</sub>(径27cm±・深さ84cm±)・P<sub>4</sub>(径32cm±・深さ55cm±)・P<sub>5</sub>(径58cm±・深さ75cm±)・P<sub>6</sub>(径32cm±・深さ74cm±)などのピット群で構成されるものと考えられる。この他に、壁沿いには断続的ながら、深さ15cm±~60cm±のピットがいくつか存在している。これらは壁柱穴を構成するものであろう。

炉は住居址中央部よりやや北西方向に位置している。炉縁部に黄褐色細礫が敷設された摺鉢状の形態をもつもので、北西側には直立埋設土器を伴う。炉縁径は90cm±、床面から直立埋設土器底部までの深さは20cm±を計る。炉は全体的に、かなりの焼成を受けている。



南側には狭い範囲ではあるが、床面から5cm±の段差をもつベッド状遺構が検出された。しかし、その東西の延長部分では段差が床面のレベルに収斂し、確実な規模をおさえることはできなかった。段差の部分は現位置で焼成を受けている。東南壁際には、30cm±の深さで床面下に埋めこまれた安山岩類垂角礫からなる2個の立石がある。北壁には一部ではあるが周溝が巡る。

床面上にはほぼ全体にわたって、現地性の焼土と炭化物が分布している。とりわけ、炉を中心とする範囲の床面がかなりの焼成を受けている。

主に南東部の床面上には一括土器や礫群の出土が多く、中には底部を欠いた2個の伏せ甕が存在していた。壁柱穴P<sub>7</sub>に接する東側床面上には、9個の剥片からなる「剥片貯蔵」形態がみられた。

当住居址はG II-20住居址を切っている。

#### G II-20住居址 (図版75b・110c、写真図版79a)

全体にかなりの削剝を受けているために、規模・形状の詳細は不明である。残存している壁の状況から推定すると、楕円形の形状を示しているものと考えられる。炭化物を多量に含む暗褐色土層が埋土を構成していたが、土層断面図の作成は省略した。壁高は西壁で6cm±を計る。柱穴は、P<sub>1</sub>(径38cm±・深さ24cm±)・P<sub>2</sub>(径37cm±・深さ31cm±)・P<sub>3</sub>(径24cm±・深さ40cm±)・P<sub>4</sub>(径24cm±・深さ44cm±)などのピット群で構成されるものとみられるが、これも確実なことは不明である。

炉は住居址中央部よりやや北東に位置していると考えられる。浅皿状の形態をもつもので、北東部には直立埋設土器を伴う。炉縁径は65cm±、床面から直立埋設土器底部までの深さは10cm±を計る。炉は全体に、かなりの焼成を受けている。

この住居址の埋土および床面上には、多数の安山岩類・凝灰岩類の礫群が存在していた。

当住居址はG II-19住居址により切られている。

#### G II-21住居址 (図版73d・109b)

G II-13住居址に大半が切られていることにより、詳細は不明である。床面上には直接II層が載って埋土を構成している。壁高は南壁で8cm±を計るにすぎない。柱穴は、P<sub>1</sub>(径22cm±・深さ29cm±)・P<sub>2</sub>(径23cm±・深さ17cm±)・P<sub>3</sub>(径21cm±・深さ42cm±)などのピット群で構成されるものとみられる。その他のものについては不明である。

以上のような状況により、炉の住居址内における位置は不明確である。G II-13住居址の炉の東南部に位置する、汚れ火山灰で貼り床が施されたピットが、当住居址の炉をなすものであろう。炉縁径は50cm±を計る。埋設土器などの施設を欠いているが、全体的によく焼成を受けている。

当住居址は、G II-13住居址に切られているが、G II-14住居址との新旧関係は不明である。

(高橋文夫)

## H II 区 (住居址)

### H II-1 住居址 (図版110d、写真図版79ab)

東壁が消失しているため、詳細は不明であるが、推定3.3m±×3.2m±の規模で、平面形が楕円形の形状を呈する住居址であると考えられる。埋土は多量の炭化物と焼土ブロックを包含する黒褐色土層で構成されているが、単層であるため土層断面図の作成は行なわなかった。壁高は西壁で20cm±、南壁で8cm±である。柱穴は明確に把握しえなかったが、P<sub>1</sub>(径23cm±・深さ46cm±)・P<sub>2</sub>(径23cm±・深さ46cm±)・P<sub>3</sub>(径38cm±・深さ30cm±)・P<sub>4</sub>(径25cm±・深さ31cm±)・P<sub>5</sub>(径35cm±・深さ37cm±)・P<sub>6</sub>(径30cm±・深さ26cm±)のピット群が柱穴の一部を構成しているものと考えられる。

炉は住居址中央部より北に寄って位置している。摺鉢状の形態を示し、南東方向に開口する斜位埋設土器を伴っている。炉縁径は52cm±×50cm±を計り、斜位埋設土器下底部までの深さは22cm±である。炉は全体によく焼成を受けている。

床面には中央部を中心として、ほぼ全面に現地性の焼土が見られる。この焼土と床面全域に広がっている炭化物から、この住居址は焼失家屋であると考えられる。

床面上からは土器片が比較的多量に、まとまって出土した。

### H II-2 住居址

この住居址の西側過半部は、保存地域となる緑地帯にかかっている。検出された壁は南東壁の一部のみで、柱穴も不明確であるため、住居址の規模・形状は不明である。壁高は南東壁で5cm±である。埋土は炭化物が僅かに混入する黒褐色土層であるが、単層であるため土層断面図の作成は行なわなかった。

炉は検出されていないが、緑地帯に接して現地性の焼土が見られ、緑地帯にかかる部分に炉の存在がうかがわれる。

この住居址をH II-151不整形ピットが切っている。

### H II-3 住居址 (図版110a、写真図版80a)

H II-4住居址により東壁を切られているので詳細は不明であるが、推定4.6m±×4.2m±の規模をもち、平面形が六角形に近い形状を示す住居址であると考えられる。埋土上層部は黒褐色土層、下層部は暗褐色土層で、炭化物、焼土ブロックを多量に包含している。壁高は北壁で7cm±、南壁で28cm±、西壁で12cm±である。柱穴はP<sub>1</sub>(径20cm±・深さ34cm±)・P<sub>2</sub>(径

35cm±・深さ20cm±)・P<sub>3</sub>(径18cm±・深さ13cm±)・P<sub>4</sub>(径20cm±・深さ24cm±)・P<sub>5</sub>(径18cm±・深さ10cm±)・P<sub>6</sub>(径25cm±・深さ41cm±)・P<sub>7</sub>(径21cm±・深さ19cm±)・P<sub>8</sub>(径35cm±・深さ17cm±)のピット群が壁柱穴を構成するものと推定され、主柱穴としてはP<sub>9</sub>(径21cm±・深さ13cm±)・P<sub>10</sub>(径35cm±・深さ21cm±)・P<sub>11</sub>(径31cm±・深さ17cm±)・P<sub>12</sub>(径21cm±・深さ17cm±)のピット群が考えられる。

炉は住居址中央部よりやや東に寄って位置している。この炉は摺鉢状で、北方向に開口する斜位埋設土器を伴っている。炉縁径は92cm±×85cm±を計り、斜位埋設土器下底部までの深さは31cm±である。炉縁部の東側部分には、黄褐色細礫が敷設されている。炉は全体にあまり焼成を受けておらず、現地性の焼土もほとんどない。炉面上に4個の安山岩礫と土器の底部片が載っているが、これらは炉の施設に伴うものとは考えられない。

この住居址は東側をHⅡ-4住居址に切られている。

この住居址には「剥片貯蔵」形態が見られる。これは南壁に接している小ピットの中のもので46片の剥片から成っている。このピットは径20cm±、床面からの深さは7cm±である。

P<sub>7</sub>ピットとP<sub>13</sub>ピットの間位置するピット(径20cm±・深さ14cm±)中から貯蔵されたとみられるどんぐりが多量に出土した。

#### HⅡ-4住居址(図版111a、写真図版80b)

3.1m±×2.5m±の規模をもつ、不整形な六角形の形状を示す住居址である。埋土は黒～暗褐色土層で構成され、焼土ブロック、炭化物微粒が多量に混入している。壁高は東壁で10cm±北壁で11cm±、西壁で6cm±、南壁で6cm±である。床面中央部には、炉周辺のほか2ヶ所に現地性の焼土が拡がっている。壁柱穴と考えられるピット群はP<sub>1</sub>(径20cm±・深さ22cm±)・P<sub>2</sub>(径15cm±・深さ24cm±)・P<sub>3</sub>(径23cm±・深さ22cm±)・P<sub>4</sub>(径11cm±・深さ30cm±)・P<sub>5</sub>(径25cm±・深さ18cm±)・P<sub>6</sub>(径10cm±・深さ22cm±)・P<sub>7</sub>(径12cm±・深さ38cm±)・P<sub>8</sub>(径15cm±・深さ19cm±)・P<sub>9</sub>(径20cm±・深さ15cm±)・P<sub>10</sub>(径35cm±・深さ15cm±)・P<sub>11</sub>(径15cm±・深さ28cm±)で、P<sub>12</sub>(径11cm±・深さ23cm±)・P<sub>13</sub>(径18cm±・深さ11cm)・P<sub>14</sub>(径19cm±・深さ14cm±)・P<sub>15</sub>(径14cm±・深さ18cm±)で主柱穴を構成しているものと考えられる。

炉は住居址中央部よりやや東に位置している。この炉は浅皿状で、北西方向に開口する斜位埋設土器を伴っている。炉縁径は60cm±×60cm±を計り、斜位埋設土器下底部までの深さは25cm±である。斜位埋設土器の埋土は、炭化物混りの焼土が上位を占め、下位は黒褐色土である。斜位埋設土器の上部に密着して、幅広の土器片が埋置されているが、これは補強用の意味をもつものと思われる。

#### HⅡ-5住居址(図版111b、写真図版81a)

この住居址は拡張住居址で、北西壁をH II-13住居址に切られ、東壁と北壁は消失している。残存する南壁と柱穴の配置の状況から推定すると、新期住居址は $5.2\text{m} \pm \times 4.5\text{m} \pm$ の規模をもち、平面形が六角形に近い形状を示すものであると考えられる。古期住居址は $4.5\text{m} \pm \times 4.5\text{m} \pm$ の規模であると推定される。埋土は焼土・炭化物の微粒が僅かに混入する黒～暗褐色土層が主体をなしている。壁高は南西壁で $31\text{cm} \pm$ ・南東壁で $11\text{cm} \pm$ である。古期住居址の柱穴はP<sub>1</sub>(径 $48\text{cm} \pm$ ・深さ $37\text{cm} \pm$ )・P<sub>2</sub>(径 $41\text{cm} \pm$ ・深さ $66\text{cm} \pm$ )・P<sub>3</sub>(径 $25\text{cm} \pm$ ・深さ $32\text{cm} \pm$ )・P<sub>4</sub>(径 $28\text{cm} \pm$ ・深さ $61\text{cm} \pm$ )・P<sub>5</sub>(径 $44\text{cm} \pm$ ・深さ $35\text{cm} \pm$ )・P<sub>6</sub>(径 $14\text{cm} \pm$ ・深さ $20\text{cm} \pm$ )・P<sub>7</sub>(径 $46\text{cm} \pm$ ・深さ $45\text{cm} \pm$ )のピット群によって構成され、P<sub>8</sub>(径 $32\text{cm} \pm$ ・深さ $53\text{cm} \pm$ )・P<sub>9</sub>(径 $45\text{cm} \pm$ ・深さ $27\text{cm} \pm$ )・P<sub>10</sub>(径 $34\text{cm} \pm$ ・深さ $41\text{cm} \pm$ )・P<sub>11</sub>(径 $25\text{cm} \pm$ ・深さ $40\text{cm} \pm$ )・P<sub>12</sub>(径 $35\text{cm} \pm$ ・深さ $33\text{cm} \pm$ )・P<sub>13</sub>(径 $50\text{cm} \pm$ ・深さ $51\text{cm} \pm$ )・P<sub>14</sub>(径 $34\text{cm} \pm$ ・深さ $54\text{cm} \pm$ )・P<sub>15</sub>(径 $23\text{cm} \pm$ ・深さ $11\text{cm} \pm$ )のピット群が新期住居址の柱穴を構成するものと考えられる。

炉は住居址中央部よりやや北に寄って位置している。炉の形態は摺鉢状で、埋設土器は伴わない。炉縁径は $95\text{cm} \pm \times 83\text{cm} \pm$ を計り、焼土の厚さは $10\text{cm} \pm$ である。炉の焼土上に径 $25\text{cm} \pm$ の亜角凝灰岩礫が3個載っているが、焼成痕はなく、構成礫をなすものであったかどうかは不明である。

この住居址に伴う施設としては、炉の北側に2個の安山岩類亜角礫を配置した「出入口」状施設がある。これらの礫は径 $30\text{cm} \pm$ で下部を床面上に埋め込まれており、両礫の間隔は $40\text{cm} \pm$ である。この部分での壁の輪郭線は、はっきりしないが、これらの礫は壁に沿って配置されたものと考えられ、新期住居址に伴うものである。

この住居址は北西壁をH II-13住居址に切られ、北壁はH II-62ビーカー形ピットによって切られている。

この住居址の床面上からは、多量のドングリが出土している。

#### H II-6 住居址 (図版111c、写真団版81b)

削剝や他遺構との切り合いなどによる破壊が激しく、全体の規模・形状は不明であるが、残存する西壁の状態から推定すると、多角形の形状を示す住居址とも考えられる。

埋土はほぼ単一の暗褐色土層であるため、土層断面図の作成は行なわなかった。住居址内には多数の小ピットがあるが、浅いものが多く、柱穴として認められるのはP<sub>1</sub>(径 $20\text{cm} \pm$ ・深さ $12\text{cm} \pm$ )・P<sub>2</sub>(径 $31\text{cm} \pm$ ・深さ $30\text{cm} \pm$ )のみで、柱配置の詳細は不明である。

炉は安山岩類凝灰岩類の亜角礫で構成する石囲い炉で、東側は開口している。埋設土器は伴っていない。炉縁径は $71\text{cm} \pm \times 68\text{cm} \pm$ を計り、焼土の厚さは最厚部で $10\text{cm} \pm$ である。炉は全体によく焼成を受け、赤褐色を呈している。

この住居址は南側をH II-11住居址によって切られている。また、H II-57フラスコ形ピット

ト、H II-58フラスコ形ピットとも切り合っていると考えられるが、新旧関係、共伴関係は明らかにできなかった。

#### H II-7 住居址 (図版111d、写真図版82ab)

3.8m±×3.2m±の規模をもつ、不整形なひし形の形状を示す住居址である。埋土は垂角～垂円の安山岩礫、凝灰岩礫を包含する暗褐色土層であるが、単層であるため土層断面図の作成は省略した。壁高は西壁で21cm±・南壁で15cm±・東壁で15cm±・北壁で14cm±である。住居址内のピット群は、ほぼ壁に沿って配置されているが、柱穴を構成するピットはP<sub>1</sub>(径33cm±・深さ47cm±)・P<sub>2</sub>(径25cm±・深さ20cm±)・P<sub>3</sub>(径21cm±・深さ24cm±)・P<sub>4</sub>(径30cm±・深さ25cm±)・P<sub>5</sub>(径23cm±・深さ20cm±)・P<sub>6</sub>(径22cm±・深さ21cm±)・P<sub>7</sub>(径35cm±・深さ20cm±)・P<sub>8</sub>(径20cm±・深さ24cm±)であると考えられる。

炉は石囲い炉で、住居址中央部よりわずかに南に位置し、北方向に開口する斜位埋設土器を伴っている。炉縁径は83cm±×53cm±で、斜位埋設土器下底部までの深さは30cm±である。この炉はH II-53フラスコ形ピットの埋土上に作られており、この埋土の沈下に伴って構成礫、焼土も沈下した状態を示している。

この住居址はH II-53フラスコ形ピットを切っている。

住居址内の遺物としては、北東側床面上より小型磨製石斧が出土している。炉の焼土中からは栗の炭化物が、炉周辺からはドングリが多量に出土した。

#### H II-8 住居址 (図版112a、写真図版83a)

北東壁が消失し、南西壁はH II-55フラスコ形ピットと切り合っているため、壁の輪郭線の全体は明確ではないが、推定4.7m±×4.7m±の規模をもち、平面形がほぼ六角形の形状を呈する住居址であると考えられる。埋土は中央部上位がクロボク層、周辺部および下位が暗褐色土層である。中央部の埋土下層部に焼土の堆積層がある。壁高は北壁で16cm±・南壁で25cm±である。柱穴は壁に沿ってほぼ等間隔に配置されているP<sub>1</sub>(径27cm±・深さ16cm±)・P<sub>2</sub>(径18cm±・深さ22cm±)・P<sub>3</sub>(径23cm±・深さ21cm±)・P<sub>4</sub>(径16cm±・深さ10cm±)・P<sub>5</sub>(径37cm±・深さ25cm±)・P<sub>6</sub>(径31cm±・深さ19cm±)・P<sub>7</sub>(径27cm±・深さ14cm±)のピット群が壁柱穴の一部を構成し、P<sub>8</sub>(径35cm±・深さ46cm±)・P<sub>9</sub>(径25cm±・深さ48cm±)・P<sub>10</sub>(径10cm±・深さ34cm±)・P<sub>11</sub>(径45cm±・深さ59cm±)が主柱穴を構成しているものと考えられる。

炉は石囲い炉で、住居址のほぼ中央に位置し、炉の北西側に北東方向に開口する斜位埋設土器と、北東側に直立埋設土器を伴っている。構成礫は垂角～垂円の安山岩礫凝灰岩礫で、南東側は開口している。炉縁径は110cm±×65cm±で、床面から直立埋設土器底部までの深さは23cm±、斜位埋設土器下底部までの深さは22cm±である。斜位埋設土器は全体を粘土により被覆さ

れている。炉は全体にあまり焼成を受けていない。両埋設土器の埋土は、上位は炭化物の混入する黒褐色土、下位は汚れ火山灰である。

この住居址と切り合い関係を示すのは、H II-54フラスコ形ピット、H II-55フラスコ形ピットである。両ピットの埋土上に当住居址の床面が貼られており、両ピットが当住居址に先行するものであることを示している。

住居址床面上からは大量のドングリが出土している。東壁際に安山岩礫の台石が存在した。

#### H II-9 住居址 (写真図版83a・84ab)

東壁が消失しているために壁の輪郭線の詳細は不明であるが、推定3.0m±×2.5m±の規模で、平面形が長楕円形の形状を示す住居址と考えられる。この住居址は“湯沢パターン”の火山灰層を伴っている。火山灰層は住居址中央部に東西145cm±・南北135cm±・中央部での層厚15cm±の広がりと厚さをもって分布している。“湯沢パターン”下位の埋土は黒～暗褐色土層で、多量の炭化物を包含している。南西壁に沿って幅7cm±・深さ10cm±・長さ160cm±の規模の周溝が巡っている。壁高は北壁で10cm±、南壁で9cm±、西壁で24cm±である。柱穴と認められるピットはP<sub>1</sub>(径15cm±・深さ22cm±)・P<sub>2</sub>(径17cm±・深さ27cm±)・P<sub>3</sub>(径21cm±・深さ40cm±)の3個のみで、柱配置の詳細は不明である。

炉は垂角～亜円の安山岩礫・凝灰岩礫10個で構成される石囲い炉で、住居址中央部より北東に寄って位置している。炉縁径は60cm±×55cm±を計る。炉は全体によく焼成を受け、炉周辺にも広く現地性の焼土が広がっている。

床面は非常に硬く、炉周辺から北東壁にかけて1.2m±×1.3m±の範囲にわたって焼土が広がり、中央部から西南部にかけても、現地性の焼土が数ヶ所認められる。この焼土と埋土に包含される多量の炭化物から、この住居址は焼失家屋の可能性がある。

炉の西南部の床面から土器の底部が出土した。南壁際の床面上には台石の機能をもつものと考えられる安山岩類の垂角礫が存在している。

#### H II-10居址 (図版112b、写真図版85ab)

北壁から南東壁にかけて消失しているが、柱穴の配置から推定すると平面形がほぼ五角形に近い形状を示す住居址と考えられる。規模は推定4.4m±×3.6m±である。住居址西半部の埋土上部には“湯沢パターン”の火山灰層がみられる。火山灰層は東西110cm±・南北95cm±、中央部での層厚10cm±の広がりとし厚さをもち、円周部になるにしたがって層厚が漸減するレンズ状の堆積を示している。“湯沢パターン”の下位の埋土は、炭化物を僅かに含む黒～暗褐色土層である。壁高は北東壁で18cm±・南西壁で28cm±・南壁で13cm±である。柱穴は壁に沿って配置されているP<sub>2</sub>(径31cm±・深さ45cm±)・P<sub>5</sub>(径38cm±・深さ43cm±)・P<sub>8</sub>(径33cm±深さ49cm±)・P<sub>11</sub>(径46cm±・深さ50cm±)が主柱穴を、P<sub>1</sub>(径21cm±・深さ30cm±)・P<sub>3</sub>(径

20cm±・深さ40cm±)・P<sub>4</sub>(径16cm±・深さ19cm±)・P<sub>6</sub>(径20cm±・深さ20cm±)・P<sub>7</sub>(径20cm±・深さ21cm±)・P<sub>9</sub>(径16cm±・深さ18cm±)・P<sub>10</sub>(径14cm±・深さ21cm±)のピットが壁柱穴を構成しているものと考えられる。柱配置は5角形の住居址の各コーナーに支柱をもち、各辺に2本ずつの壁柱をもつものと考えられ、このことからすれば西壁際のHⅡ-59号ビーカー形ピットによって切られている部分にもう1個の支柱穴が存在したと推定される。

炉は住居址中央部よりやや北に寄って位置している。炉縁部に黄褐色細礫を敷設された摺鉢状の形態を示し、炉縁径は65cm±×55cm±を計り、焼土の厚さは17cm±である。

住居址内の西壁に接してHⅡ-59ビーカー形ピットがあるが、相伴関係または新旧関係については不明である。

この住居址の南壁寄りの床面上から「双口土器」が出土した。また、南西壁際の床面上からは磨製石斧が石皿の上に乗った状態で出土した。

#### HⅡ-11住居址 (図版113a、写真図版86ab)

この住居址は拡張住居址と考えられ、新期住居址は東壁が消失しているが推定4.9m±×4.7m±の規模で、平面形が八角形に近い形状を示している。埋土は黒～暗褐色土層で、1cm～3cmの垂角～垂円の安山岩礫・凝灰岩礫が多量に包含されている。壁高は北壁で26cm±、南壁で9cm±、西壁で32cm±である。柱穴はP<sub>1</sub>(径15cm±・深さ41cm±)・P<sub>2</sub>(径30cm±・深さ40cm±)・P<sub>3</sub>(径28cm±・深さ21cm±)・P<sub>4</sub>(径21cm±・深さ36cm±)・P<sub>5</sub>(径31cm±・深さ53cm±)のピット群が新期住居址の柱穴の一部と考えられるが、壁に沿うピットの検出が少なく柱配置の詳細は明らかでない。古期住居址の柱穴を構成すると考えられるピット群はP<sub>6</sub>(径32cm±・深さ50cm±)・P<sub>7</sub>(径31cm±・深さ50cm±)・P<sub>8</sub>(径32cm±・深さ24cm±)・P<sub>9</sub>(径31cm±・深さ56cm±)・P<sub>10</sub>(径55cm±・深さ56cm±)・P<sub>11</sub>(径38cm±・深さ22cm±)・P<sub>12</sub>(径24cm±・深さ69cm±)である。P<sub>13</sub>(径25cm±・深さ20cm±)・P<sub>14</sub>(径28cm±・深さ57cm±)・P<sub>15</sub>(径23cm±・深さ40cm±)・P<sub>16</sub>(径21cm±・深さ44cm±)のピット群は支柱穴的性格をなすものと考えられるが、新旧いずれの住居址に伴うものかは不明である。

新期住居址の炉(1号炉)は住居址中央部よりやや南東に寄って位置する石囲い炉で、北方向に開口する斜位埋設土器を伴っている。炉縁径は60cm±×55cm±を計り、床面から斜位埋設土器下底部までの深さは30cm±である。構成礫は径7cm±～21cm±の安山岩類垂角礫11個が配置され、斜位埋設土器の上は火山灰によって被覆されている。石囲い炉の北に接して小ピット(径23cm±・深さ50cm±)があるが、これは直立埋設土器の代用をなしていたもの見做され、このピットの周囲にも焼成が及んでいる。古期住居址の炉(2号炉)は中央部より北に寄って位置している。この炉は直立埋設土器を伴うもので、形態は浅皿状を呈している。炉縁径は58cm±×56cm±を計り、床面から直立埋設土器底部までの深さは16cm±である。この炉の北側に

は直立埋設土器を抜き取った跡と思われる小ピット（径18cm±・深さ25cm±）がある。

この住居址は北側でH II - 6 住居址を切り、北東壁がH II - 60フラスコ形ピットを切っている。

住居址中央部の床面上から完形のミニチュア土器が出土した。

#### H II - 12住居址（図版113b、写真図版87ab）

壁の輪郭線が明確なのは西壁のみであるが、柱穴の配置と残在する壁の状況から推定して、5 m前後の規模をもち、平面形が多角形の形状を示す住居址と考えられる。壁高は西壁で17cm±である。埋土は炭化物の微粒と3 cm～5 cmの安山岩類凝灰岩類礫を多数包含する暗褐色土層であるが、単一層であるため土層断面図の作成は行なわなかった。床面には重機による攪乱の跡がみられる。住居址内のピット群のうち、位置と深さからP<sub>1</sub>（径32cm±・深さ79cm±）・P<sub>2</sub>（径45cm±・深さ33cm±）・P<sub>3</sub>（径33cm±・深さ33cm±）・P<sub>4</sub>（径32cm±・深さ11cm±）・P<sub>5</sub>（径35cm±・深さ40cm±）・P<sub>6</sub>（径31cm±・深さ44cm±）・P<sub>7</sub>（径38cm±・深さ69cm±）・P<sub>8</sub>（径32cm±・深さ70cm±）が壁柱穴を構成し、P<sub>9</sub>（径50cm±・深さ22cm±）・P<sub>10</sub>（径55cm±・深さ33cm±）・P<sub>11</sub>（径32cm±・深さ36cm±）・P<sub>12</sub>（径24cm±・深さ59cm±）・P<sub>13</sub>（径31cm±・深さ75cm±）・P<sub>14</sub>（径47cm±・深さ12cm±）が主柱穴を構成するものと考えられる。

炉は住居址中央部より南西に寄って位置する石囲い炉で、南側に北方向に開口する斜位埋設土器を伴っている。炉縁径は85cm±×82cm±を計り、床面から斜位埋設土器下底部までの深さは12cm±である。構成礫は4 cm～12cmの安山岩類凝灰岩類垂角垂円礫で、北東側のほぼ1個分が開口している。炉は全体にわたってかなりの焼成をうけている。

この住居址は南東側でI II - 51フラスコ形ピットを切り、北東壁はH II - 64ビーカー形ピットにより切られている。

住居址床面上の遺物としては、磨製石斧2個が出土している。

#### H II - 13住居址（図版113c、写真図版88a）

北壁が検出されていないため詳細は不明であるが、他の残存する壁の状況から推定すると、2.9m±×2.7m±の規模をもち、平面形が多角形の形状を示す住居址であると考えられる。埋土上層部は炭化物、焼土の微粒を僅かに含む火山灰層でその下位に黒褐色土層が椀状に堆積している。中層部は主に暗褐色土層で焼土・炭化物が混入し、下層部にはほぼ純粹の火山灰層がある。住居址中央部は表土面から住居址床面まで激しい攪乱を受けているので詳細は不明であるが、埋土上部には“湯沢パターン”の火山灰を伴っていたとも考えられる。東壁際の床面には火山灰による貼り床が認められる。柱穴と認められるピットは南壁のP<sub>1</sub>（径32cm±・深さ25cm±）1個のみで、柱配置は不明である。

炉は住居址中央部より東に寄って位置している。摺鉢状の形態を呈し、西方向に開口する斜



位埋設工器を伴っている。炉の西過半部は攪乱を受けているため炉縁径は不明であるが、床面から斜位埋設土器下底部までの深さは35cm±である。斜位埋設土器の上は層厚4cm±の黄褐色細礫で被覆されている。炉は全体にあまり焼成を受けていない。

この住居址は東側でH II - 5 住居址を切っている。北東壁はH II - 62ピーカー形ピットによって切られている。

#### H II - 14住居址 (図版113b、写真図版88b)

西壁は保存地域となる緑地帯にかかり、東壁も削剥されているため、形状、規模ともに不明である。埋土は炭化物の微粒を多く含む黒褐色土層で構成されていたが、単層であるため土層断面図の作成は省略した。柱穴と認められるピットはP<sub>1</sub>(径32cm±・深さ58cm±)・P<sub>2</sub>(径55cm±・深さ23cm±)・P<sub>3</sub>(径35cm±・深さ27cm±)の3個であり、全体の柱配置を把握することはできなかった。

炉は摺鉢状で中央部に直立埋設土器を伴っている。炉縁径は65cm±で、床面から直立埋設土器底部までの深さは31cm±である。炉は全体によく焼成を受け、直立埋設土器も焼土で充填されている。炉の東側に73cm±×32cm±の範囲で現地性の焼土が広がっている。

この住居址は東南側でH II - 56フラスコ形ピットと切り合っているものと考えられるが詳細は不明である。  
(金沢光孝)

## I II区 (住居址)

### I II - 1住居址 (写真図版89a)

壁の輪郭線のはっきりしているのは、北西壁のみであるため、規模・平面形などの詳細は不明であるが、柱穴の位置と残存する壁の状態から多角形の形状を示す住居址であると考えることができる。埋土は、炭化物の微粒をわずかに含む暗褐色土層であるが、単層であるため土層断面図の作成は行なわなかった。壁高は、北西壁で10cm±である。柱穴は、壁に沿っていたものと考えられるP<sub>1</sub>(径32cm±・深さ20cm±)・P<sub>2</sub>(径36cm±・深さ60cm±)・P<sub>3</sub>(径36cm±・深さ32cm±)・P<sub>4</sub>(径34cm±・深さ32cm±)・P<sub>5</sub>(径30cm±・深さ20cm±)・P<sub>6</sub>(径26cm±・深さ21cm±)・P<sub>7</sub>(径34cm±・深さ10cm±)・P<sub>8</sub>(径24cm±・深さ23cm±)・P<sub>9</sub>(径38cm±・深さ30cm±)・P<sub>10</sub>(径35cm±・深さ35cm±)のピット群が壁柱穴を構成し、P<sub>11</sub>(径25cm±・深さ21cm±)・P<sub>12</sub>(径33cm±・深さ17cm±)・P<sub>13</sub>(径38cm±・深さ20cm±)・P<sub>14</sub>(径30cm±・深さ36cm±)が主柱穴となるものと考えられる。

炉は石囲い炉で、住居址中央部より僅かに南に寄って位置し、北東方向に開口する斜位埋設土器を伴っている。構成礫は、安山岩類、凝灰岩類垂角～亜円礫であるが、ほとんど散逸してお

り、北側4個のみが原型を留めている。炉縁径は103cm±×72cm±である。この斜位埋設土器は、むしろ水平に近い状態に埋設され、下部には補強のための幅広の土器片が埋置されている。炉は全体によく焼成を受けている。

#### I II - 2 住居址 (写真図版89b)

全体的に削剥され破壊がはげしく、壁は全く検出されず、炉の存在も不明確であるが、柱穴とみられるピット群の配置から住居址とした。規模・形状は不明である。埋土は実測前に除去されてしまい、土層断面図は作成できなかった。柱穴と考えられるピット群はP<sub>1</sub>(径32cm±・深さ25cm±)・P<sub>2</sub>(径20cm±・深さ31cm±)・P<sub>3</sub>(径43cm±・深さ20cm±)・P<sub>4</sub>(径34cm±・深さ31cm±)・P<sub>5</sub>(径35cm±・深さ33cm±)・P<sub>6</sub>(径33cm±・深さ32cm±)・P<sub>7</sub>(径36cm±・深さ31cm±)・P<sub>8</sub>(径39cm±・深さ36cm±)・P<sub>9</sub>(径51cm±・深さ76cm±)の9個である。

住居址中央部よりやや南に寄って97cm±×45cm±の範囲に現地性の焼土が広がっているが、上面を削剥されており、炉として確認することができなかった。

P<sub>9</sub>ピット付近よりナイフ形石器が出土したが、出土層位は不明である。

#### I II - 3 住居址 (図版114a、写真図版90ab)

東壁および南壁が消失しているため、全体の規模・平面形は不明であるが、西壁と柱穴と思われるピット群の位置から推定して、4m前後の径をもつ、ほぼ円形の形状を示す住居址と考えられる。埋土は径5cm±~30cm±の安山岩類、凝灰岩類垂角垂円礫を多数包含する黒褐色土層で構成されている。住居址中央部の埋土には、焼土および炭化物の微粒が著しく混入している。壁高は西壁で12cm±である。床面は全体的にゆるやかに東方に傾斜し、東側では火山灰面本来の硬度と区別がつかなくなっている。柱穴は位置と深さからP<sub>1</sub>(径34cm±・深さ27cm±)・P<sub>2</sub>(径32cm±・深さ34cm±)・P<sub>3</sub>(径20cm±・深さ32cm±)・P<sub>4</sub>(径25cm±・深さ21cm±)・P<sub>5</sub>(径24cm±・深さ26cm±)・P<sub>6</sub>(径35cm±・深さ22cm±)・P<sub>7</sub>(径23cm±・深さ22cm±)のピット群が壁柱穴を、P<sub>8</sub>(径45cm±・深さ15cm±)・P<sub>9</sub>(径23cm±・深さ23cm±)・P<sub>10</sub>(径22cm±・深さ20cm±)・P<sub>11</sub>(径25cm±・深さ22cm±)・P<sub>12</sub>(径35cm±・深さ23cm±)が主柱穴を構成するものと考えられるが、柱配置の詳細は把握できなかった。

炉は住居址中央部より、やや南側に位置している。この炉は石囲い炉で、北側に直立埋設土器を伴い、南側には斜位埋設土器を伴っている。炉縁径は55cm±×51cm±を計り、直立埋設土器底部までの深さは、20cm±である。炉は全体によく焼成を受け、埋設土器も焼土で充填されている。

#### I II - 4 住居址 (図版114b、写真図版91a)

南壁をI II - 5 住居址によって切られ、北東壁は消失しているが、北西壁、西壁、東壁の状況から推定して、3.7m±×2.7m±の規模をもつ、ほぼ五角形の形状を示す住居址と考えられ

る。埋土は炭化物の微粒をわずかに含む黒褐色～暗褐色土層で構成されている。壁高は西壁で12cm±・東壁で9cm±である。床面上には5cm±～30cm±の垂角～垂円安山岩礫、凝灰岩礫が点在し、南側の一部に火山灰による貼り床が認められ。柱穴はP<sub>1</sub>(径32cm±・深さ66cm±)・P<sub>2</sub>(径34cm±・深さ10cm±)・P<sub>3</sub>(径36cm±・深さ22cm±)・P<sub>5</sub>(径22cm±・深さ28cm±)のピット群が壁柱穴の一部を構成しているものと考えられ、主柱穴と推定されるピットはP<sub>6</sub>(径20cm±・深さ20cm±)・P<sub>7</sub>(径32cm±・深さ22cm±)であるが、柱配置の詳細は不明である。

炉は住居址中央部よりやや北東に寄って位置している。この炉は摺状型で南側に直立埋設土器を伴っている。炉縁径は85cm±×43cm±を計り、直立埋設土器底部までの深さは22cm±である。炉は直立埋設土器を含めてよく焼成を受けている。

この住居址の床面をI II-151不整形ピット・I II-152不整形ピット・I II-153不整形ピットが切り、南壁はI II-5住居址によって切られている。

#### I II-5住居址 (図版114c、写真図版91a)

北壁はI II-4住居址と切り合い、東壁、南壁は削剥されているため、全体の規模・形状は不明であるが、残存する西壁、南西壁の状況と柱穴から推定すると、最大3.5m前後の径をもつ多角形の形状を示す住居址であると考えられる。埋土は僅かに炭化物の混入する黒～暗褐色土層で構成されている。壁高は西壁で4cm±である。柱穴は西壁に沿っているP<sub>2</sub>(径20cm±・深さ13cm±)・P<sub>3</sub>(径34cm±・深さ47cm±)・P<sub>4</sub>(径21cm±・深さ22cm±)と、切り合いによりI II-4住居址内に検出されたP<sub>1</sub>(径23cm±・深さ23cm±)・P<sub>5</sub>(径23cm±・深さ12cm±)のピット群が壁柱穴の一部を構成するものと考えられるが、全体の壁柱穴の配置は不明である。主柱穴とみられるピットはP<sub>6</sub>(径27cm±・深さ21cm±)・P<sub>7</sub>(径30cm±・深さ32cm±)・P<sub>8</sub>(径40cm±・深さ31cm±)・P<sub>9</sub>(径24cm±・深さ34cm±)である。

炉は住居址中央部よりやや北東に寄って位置し、南西方向に開口する斜位埋設土器を伴っている。炉縁径は40cm±×35cm±を計り、斜位埋設土器の下底部までの深さは20cm±である。炉は全体にかなりの焼成を受けている。

この住居址は北壁でI II-4住居址を切っている。

西壁寄りの床面から有孔円礫、小型磨製石斧が出土した。

#### I II-6住居址

西壁部分は保存地域となる緑地帯にかかり、東壁はI II-7住居址によって切られている。南壁、北壁も試掘の際にバック・ホーによって破壊されてしまっており、住居址としての規模・形状は不明であるが、直立埋設土器を伴う炉の存在によって、一応住居址として登録した。柱穴として考えられるピットはP<sub>1</sub>(径25cm±・深さ27cm±)・P<sub>2</sub>(径36cm±・深さ26cm±)・P<sub>3</sub>(径36cm±・深さ26cm±)の3個が検出されたのみである。

炉は直立埋設土器を伴っており、現地性の焼土も僅かに残存しているが、バック・ホーによって破壊されており、全体の規模・形状は不明である。直立埋設土器に接して台石状の安山岩礫があるが、床面から浮いており、炉の施設のものであるかどうかは不明である。

炉付近より石鏝が出土している。

#### I II - 7 住居址 (図版114d)

北東壁から南壁にかけて消失しているが、残存する壁の状況と柱穴の位置から推定して、3.5 m 土×3.1 m 土の規模をもつ、平面形が楕円形に近い形状を示す住居址であると考えられる。壁高は北壁で 8 cm 土、西壁で 12 cm 土である。床面はプライマリな火山灰で、全体にゆるやかに東方に傾斜している。埋土は主に黒褐色、暗褐色土層で、炭化物の微粒が多量に混入している。柱穴は P<sub>1</sub> (径 33 cm 土・深さ 10 cm 土)・P<sub>2</sub> (径 26 cm 土・深さ 26 cm 土)・P<sub>3</sub> (径 25 cm 土・深さ 16 cm 土)・P<sub>4</sub> (径 23 cm 土・深さ 20 cm 土)・P<sub>5</sub> (径 25 cm 土・深さ 15 cm 土)・P<sub>6</sub> (径 33 cm 土・深さ 10 cm 土) のピット群が壁柱穴の一部を構成し、P<sub>7</sub> (径 21 cm 土・深さ 16 cm 土)・P<sub>8</sub> (径 33 cm 土・深さ 30 cm 土)・P<sub>9</sub> (径 20 cm 土・深さ 12 cm 土)・P<sub>10</sub> (径 18 cm 土・深さ 19 cm 土)・P<sub>11</sub> (径 30 cm 土・深さ 20 cm 土) が主柱穴を構成しているものと考えられる。

炉は住居址中央部よりやや東に位置している。この炉は石囲い炉で、西方向に開口する斜位埋設土器を伴っている。構成礫は安山岩類、凝灰岩類亜角～亜円礫で、西側部分が欠けている。炉縁径は 65 cm 土×60 cm 土を計り、斜位埋設土器下底部までの深さは 30 cm 土である。炉は全体によく焼成を受け、構成礫も若干の火熱を受けている。

#### I II - 8 住居址 (写真図版91b)

壁の残存しているのは南壁のみであるため、規模・形状などの詳細は不明であるが、壁柱穴と思われるピットの配置状況から推定して、3.2 m 前後の径をもつ、ほぼ円形に近い形状を示す住居址と考えられる。埋土は炭化物を多量に含む黒褐色土層で構成されているが、単層であるため土層断面図の作成は行なわなかった。壁高は南壁で 5 cm 土である。床面は、攪乱をうけている部分が多いが、全体としてゆるやかに東方に傾斜していたものと考えられる。壁柱穴と考えられるピットは P<sub>1</sub> (径 30 cm 土・深さ 39 cm 土)・P<sub>2</sub> (径 28 cm 土・深さ 11 cm 土)・P<sub>3</sub> (径 33 cm 土・深さ 26 cm 土)・P<sub>4</sub> (径 33 cm 土・深さ 26 cm 土)・P<sub>5</sub> (径 26 cm 土・深さ 19 cm 土)・P<sub>6</sub> (径 40 cm 土・深さ 13 cm 土)・P<sub>7</sub> (径 25 cm 土・深さ 18 cm 土)・P<sub>8</sub> (径 32 cm 土・深さ 31 cm 土)・P<sub>9</sub> (径 37 cm 土・深さ 11 cm 土)・P<sub>10</sub> (径 32 cm 土・深さ 11 cm 土)・P<sub>11</sub> (径 23 cm 土・深さ 20 cm 土)・P<sub>12</sub> (径 30 cm 土・深さ 12 cm 土) で P<sub>13</sub> (径 22 cm 土・深さ 17 cm 土)・P<sub>14</sub> (径 24 cm 土・深さ 18 cm 土)・P<sub>15</sub> (径 31 cm 土・深さ 13 cm 土) が主柱穴を構成するものと考えられる。

住居址中央部よりやや南側に斜位埋設土器を伴う石囲い炉が存在したと思われるが、破壊されてしまっており、斜位埋設土器の底部が残存しているに過ぎない。(金沢光孝)

## (2) 配石遺構

### G II 区 (実数 4 基)

#### G II-201 配石遺構 (図版115、写真図版173ab・174ab)

座標軸上の位置はN114～N118・E3～E9の範囲である。今回の調査区域内では、遺跡中央部よりほぼ南西にあたる。検出面は第II層暗褐色土層下部である。3群の配石が北方向に開く半弧状に連なる。長さは8.00m±・幅は60cm±～120cm±あり、西側が狭くなる。西側の群は北西～南東方向に帯状に配石される。中央の群は8個の礫が不規則な形で配石される。南東外方に帯状に伸びる小礫群を伴うが、調査上の手違いから平面図に記入がなく、その規模等の詳細は不明である。東側の群も不規則な形で配石され、礫数は17個を数える。各群の間隔は70cm±～100cm±である。いずれの群も30cm±～40cm±大の礫を主体に生まれ、それらの間に小礫が配される。礫は大きさが10cm±～50cm±の大部分が安山岩類・凝灰岩類の自然礫で、加工痕等のある礫は使用されていない。周辺にも同形の礫が若干散乱しており、それらの一部は配石中から移動したことも考えられる。当遺構の下部には伴出遺構は検出されなかった。

当遺構を中心とした北側の一定範囲内には、小数のフラスコ形ピット・ビーカー形ピットが存在するだけであり、住居址群を中心とした遺構群の存在する区域とは区画を異にすると考えられる。

#### G II-202 配石遺構 (図版116a、写真図版175a)

座標軸上の位置はN101～N103・E1～E3の範囲である。今回の調査区域内では、遺跡中央部よりほぼ南西にあたる。検出面は第II層暗褐色土層下部である。近接した南北の2群に分けられる。北群は140cm±×80cm±の範囲に、礫が一部重なり合った状態で不規則に配石される。礫は大きさが15cm±～60cm±の凝灰岩類の自然礫で、13個が配される。西端には長さ60cm±の長大な礫が他の礫に一部重なる状態で存在するが、本来は立石していた可能性も考えられる。南群では棒状の礫を中心とした両側に30cm±の平石が配石される。棒状の礫は断面がほぼ三角形を呈し長さが50cm±あり、下半の一部が埋置されている。検出時には斜めに傾いていたが、本来は立石していたと考えられる。南群の下部にはピットが検出された。径2.70m±×2.00m±・深さ30cm±を計る浅皿状を呈し、礫はその西端の埋土上部に載る。

当遺構を中心とした一定範囲には、小数のフラスコ形ピット・ビーカー形ピットが存在するが、住居址群はその一定範囲の外方を馬蹄形状に取り囲む。当遺構と住居址群を中心とした遺構群の存在する区域とは、区画が異なることが考えられる。

#### G II-203 配石遺構 (図版116b)

当遺構はG II-11住居址の床面上に載る配石である。住居址の床面を若干掘り込んで一部の礫が埋置され、炉や柱穴の上にも構成礫が載ることから、住居址に伴うものではなく独立した存在である。礫群は大きくは南北の2群に分けられる。北群は南東に開く「コ」字状に近い形を呈する。礫は大きさ10cm±~20cm±の5個が配される。凝灰岩類の自然礫と一部加工されたとおもわれる凹凸をもつ礫である。石組みの内側には丸棒状の礫が一部を床面下に埋置されている。検出時には斜めに傾き、床面上の部分で長さ16cm±を計るが、本来は立石していたと考えられる。南群は25cm±~40cm±の大きさの自然礫8個が不規則な形で配石されている。その内の1個はほぼ横倒しの状態で検出されたが、床面下に一部を埋置されている。長さ40cm±の長大な礫で、もともとは立石していた可能性が考えられる。両群の間には2個の小礫が埋置されているが、どの群に属するかあるいは独立のものか詳細は不明である。

#### G II-204配石遺構 (図版116c)

座標軸上の位置はN 118~N 121・E 13~E 14の範囲である。G II-201配石遺構の東端から5 m±北東にある。検出面は第II層暗褐色土層下部である。大きさ20cm±~40cm±の垂角礫~垂円礫8個が一行に配石されるが、北端の礫が若干西にずれる。礫は最大長の部分を北東~南西に向け、全体の長さは2.90m±を計る。

当遺構の西側の一定範囲内には、小数のフラスコ形ピット・ビーカー形ピット・配石遺構等が存在するが、住居址群は当遺構の東の外側から当遺構を馬蹄形状に取り囲む。住居址群を中心とした遺構群の存在する区域とは区画を異にすることが考えられる。 (三浦 謙一)

## H II区 (実数1基)

#### H II-201配石遺構 (図版116d、写真図版175b)

座標軸上の位置はN 62~N 65・E 19~E 21の範囲である。今回の調査区域内では、遺跡南東側の斜面上にあたる。検出面は第II層暗褐色土層下部である。南北に3群に分けられる。北側の群は径75cm±の円形に礫が密に集合している。中央部に小礫が配され、その周縁にやや大形の礫が一部重なり合って配される。礫は5 cm±~15cm±の大きさの垂角礫、垂円礫である。中央の群は北東~南西方向に不規則な形で配石される。長さは17.0m±・幅は10cm±~70cm±あるが、北東側半分が大きく広がる。大きさが15cm±の礫を主体をなし、それらの間に5 cm±~10cm±大の礫が配される。南側の群はほぼ東西方向に帯状に伸び、長さ70cm±・幅は15cm±~30cm±を計る。15cm±~20cm±大の礫を主体に配されるが、他の群に比べ礫数は少なくややまばらな状態である。いずれの群も安山岩類・凝灰岩類が礫の大部分を占める。なお周辺には小礫が若干散乱するが、それらの一部は当遺構の構成礫が移動したものと考えられる。

当遺構の周辺には住居址・フラスコ形ピット・ビーカー形ピット等の遺構は検出されず、ほぼ独立の存在となる。礫群の間には後期初頭土器が多く存在していた。(三浦 謙一)

### (3) フラスコ形ピット・ビーカー形ピット

#### BⅣ区 (フラスコ形ピット実数1基・ビーカー形ピット実数3基)

##### BⅣ-51フラスコ形ピット (図版117a)

重複するBⅣ-1住居址を切るが、BⅣ-103陥し穴状遺構との新旧関係は不明である。開口部径90cm±・頸部径90cm±・底部径120cm±の規模をもち、深さは住居址の床面から116cm±を計る。北西側では底部に比して開口部がやや開くが、壁は頸部をはさんで緩やかな湾曲を示す。南東側では開口部からやや下方に形成される頸部まではほぼ直壁で、頸部から底部にかけてはややオーバーハング気味に底部に至る。埋土上半は炭化物を含む暗褐色土層と褐色土層で主に構成される。下半は数層の汚れ火山灰が主体を占め、全体に炭化物を含み下部ほどその量は多くなる。堆積はレンズ状～水平状を示し、埋土は全体にルーズである。

##### BⅣ-52ビーカー形ピット (図版117a、写真図版122ab)

開口部径170cm±・底部径92cm±の規模をもち、深さ112cm±を計る。底部に比して開口部は大きく開き、壁半ば～下半がくびれて頸部状を呈する。埋土上半は炭化物を含む暗褐色土層と黒褐色土層、下半は火山灰が優占する褐色土層で主に構成される。壁際から底面にかけては汚れ火山灰と火山灰の薄層がみられる。埋土上半はやや堅くしまるが、下半はルーズである。

##### BⅣ-53ビーカー形ピット (図版117c、写真図版122cd)

開口部径172cm±・底部径90cm±の規模をもち、深さ136cm±を計る。底部に比して開口部が大きく開き、壁半ばがくびれて頸部状を呈する。その下方はほぼ直壁で底部に至る。埋土の構成はおおむね次の通りである。開口部のやや下方から、炭化物をわずかに含む汚れ火山灰層が壁際に厚く堆積して下部に至る。その間を埋めるのは褐色～黒褐色土層である。いずれも焼土・炭化物を含み、やや乱堆積状である。底面を覆うのは層厚20cm±の火山灰層であるが、層相に若干の違いがあり2層に分けられる。埋土上半は堅くしまり、下半はルーズである。

##### BⅣ-54ビーカー形ピット (図版117d、写真図版121ef)

開口部径126cm±・底部径100cm±×75cm±の規模をもち、深さ142cm±を計る。底部に比して開口部がやや開き、壁半ばが若干くびれて頸部状を呈する。埋土上部から下部は褐色～黒褐色土層がやや乱堆積状に占め、いずれも焼土・炭化物を少量含むルーズな層である。開口部の若干下方の壁際から底面にかけては、厚い火山灰層が主体を占める。(三浦 謙一)

## C III区 (フラスコ形ピット実数10基)

## C III-51フラスコ形ピット (図版117e、写真図版123ab)

重複するC III-1住居址を切っている。開口部径160cm±・頸部径115cm±・底部径130cm±の規模をもち、深さ106cm±を計る。東側では開口部が若干開き気味であるが、開口部から底部までほぼ直壁である。西側では壁下半に頸部が形成され、その下方は湾曲気味に底部に至る。埋土最上層は焼土・炭化物を含む暗褐色土層と褐色土層が占める。開口部から底部に至る壁際には火山灰層が厚く堆積し、その間を埋める黒褐色土層が埋土の主体を占める。その下位には汚れ火山灰層、底面を覆う火山灰層が堆積する。

## C III-52フラスコ形ピット (図版117f、写真図版123cd)

東壁で重複するC III-53フラスコ形ピットとの新旧関係は不明である。開口部径145cm±・頸部径120cm±・底部径150cm±の規模をもち、深さ153cm±を計る。開口部と底部はほぼ同径の値を示す。開口部から壁半ばに形成された頸部まではほぼ直壁に近い。頸部のくびれは小さく壁の広がりには緩やかである。埋土最上層には焼土・炭化物を含む黒褐色土層が堆積する。その下位から底面までは汚れ火山灰層と火山灰層が主体を占める。細分されるが層相に大きな違いはなく、全体的に焼土・炭化物がわずかに含まれる。

## C III-53フラスコ形ピット (写真図版123c)

C III-52フラスコ形ピット・C III-106陥し穴状遺構と重複するが、新旧関係は不明である。開口部径110cm±・頸部径100cm±・底部径105cm±の規模をもち、深さ140cm±を計る。重複のために約半分の規模を消失し、深さ以外は推定である。北東部では壁が開口部から大きく広がって底部に至る。当ピットはC III-52フラスコ形ピットと共に掘りあげてしまい、土層断面の観察と断面図の作成は行なうことができなかった。

## C III-54フラスコ形ピット (図版118a、写真図版123ef)

重複するC III-3住居址には切られるが、C III-55フラスコ形ピットとの新旧関係は不明である。開口部径154cm±・頸部径150cm±×130cm±・底部径208cm±の規模をもち、深さ177cm±を計る。開口部から頸部まではほぼ直壁である。北東の部分では頸部にテラス状の段が形成されて内側へ張り出し、その下方はほぼ直壁で底部に至る。他の部分では頸部から壁が大きく広がって底部に至る。埋土最上層には層厚40cm±の汚れ火山灰層が堆積する。その下位から底面に至るまでの全体を火山灰層が占める。部分的に硬軟はあるが、層相に違いは認められない。焼土・炭化物は最上層の汚れ火山灰層中にみられ、埋土はルーズである。出土土器重量は0.15kgを計る。上記の火山灰層は崩壊による堆積や自然流入の結果とは考え難く、人為的に充填された可能性がある。



### CⅢ-55フラスコ形ピット（写真図版123e）

重複するCⅢ-54フラスコ形ピットと共に掘り上げてしまい開口部を確認できなかった。またCⅢ-3住居址、CⅢ-56フラスコ形ピットにも切られ、残存状態は良くない。CⅢ-54フラスコ形ピットとの新旧関係は不明であるが、CⅢ-54フラスコ形ピットが深く、当ピットの底部は一部残存するだけである。底部径140cm±・深さ150cm±を計る。土層断面図の作成は行なうことができなかったが、Field Cardには、埋土は火山灰層のほぼ単層で占められる、と記載がある。

### CⅢ-56フラスコ形ピット（図版118b）

重複するCⅢ-55フラスコ形ピットを切るが、CⅢ-3住居址とは共伴関係も含めて不明である。開口部径143cm±・頸部径130cm±・底部径237cm±の規模をもち、深さ180cm±を計る。東壁は開口部から頸部までほぼ直壁であるが、他の部分は頸部が「く」字状を呈し、壁は大きく広がる。埋土最上部の一部を占める褐色土層以外は、底面に至るまで汚れ火山灰層と火山灰層として構成される。それらは細分されるが、全体的に焼土・炭化物を含み、ルーズである。

### CⅢ-57フラスコ形ピット（図版118c、写真図版124ab）

重複するCⅢ-110陥し穴状遺構には切られている。開口部径135cm±・頸部径115cm±・底部径115cm±の規模をもち、深さ60cm±を計る。開口部が大きく開き、頸部は「く」字状にくびれ、袋状ピットに近い形態を示す。埋土はほぼ3層に大別され、上層から褐色土層、黒褐色土層、褐色土層の順序で構成される。全体に焼土・炭化物を含むが、下部ほど多く含まれる。埋土はやや堅くしまっている。出土土器重量は1.42kgを計る。

### CⅢ-58フラスコ形ピット（図版118e、写真図版124cd）

CⅢ-7住居址内の南壁際に位置するが、新旧関係は不明である。開口部径125cm±・頸部径87cm±・底部径120cm±の規模をもち、深さ142cm±を計る。全体的に頸部のくびれは緩やかで、北壁は頸部からほぼ直壁で底部に至る。しかし南東壁は「く」字状にくびれ、その下方から壁は大きく広がって底部に至る。底面中央部に小ピット（径30cm±・深さ10cm±）を伴う。埋土は火山灰が優占する褐色土層で主に構成される。4層に細分されるが層相に大きな違いはみられない。炭化物は埋土中層部に含まれ、底面を覆う層は凸レンズ状の堆積を示す。埋土は全体にルーズである。多くの土器片が出土し、重量は3.20kgを計る。

### CⅢ-59フラスコ形ピット（図版118d、写真図版124ef）

開口部径160cm±・頸部径135cm±・底部径180cm±の規模をもち、深さ150cm±を計る。壁上半に形成された、頸部をはさんで、壁はやや湾曲気味となる。埋土最上部に「閉塞」の火山灰層を伴い、開口部ほぼ中央部に径70cm±・中央部での層厚14cm±の規模でレンズ状に堆積する。その下位は、炭化物が占める暗褐色土層をはさんで汚れ火山灰層が構成する。更に下位

は焼土・炭化物を含む褐色土層が占める。埋土下半はほぼ全体が火山灰層であり、硬軟が違って数層に分けられる。火山灰層はレンズ状～水平状の堆積を示し、焼土・炭化物の混入は少ない。

#### C III-60 フラスコ形ピット (図版118f)

重複するC III-5 住居址とは共伴関係も含めて新旧関係は不明である。開口部径65cm±・底部径75cm±の規模をもち、深さ70cm±を計る。頸部は形成されず、壁は開口部から緩やかに広がって底部に至る。調査上の手違いから、土層断面の観察と断面図の作成を行なわないで掘り上げたために、埋土の構成は明らかでない。(三浦 謙一)

### C IV 区 (ビーカー形ピット実数12基)

#### C IV-51 ビーカー形ピット (写真図版125ab)

開口部径155cm±×105cm±・底部形130cm±×80cm±の規模をもち、深さ50cm±を計る。平面形は不整な楕円形を呈する。開口部から底部までほぼ直壁である。埋土は暗褐色土層が主体を占めるが、壁際と底面上には汚れ火山灰層がみられる。

#### C IV-52 ビーカー形ピット (図版118g、写真図版124c)

北側で重複するC IV-109 陥し穴状遺構を切っている。開口部径110cm±・底部径52cm±の規模をもち、深さ130cm±を計る。開口部がやや大きく開くが、ほぼ直壁で底部に至る。埋土最上層の一部に火山灰層が載る。埋土上半は焼土を含む黒褐色土層、下半は褐色土層が主体を占め、南壁半ばから下方には汚れ火山灰層がみられる。埋土は全体にルーズである。

#### C IV-53 ビーカー形ピット (図版119a、写真図版125ef)

C IV-109 陥し穴状遺構と一部重複するが、新旧関係は不明である。開口部径130cm±・底部径52cm±の規模をもち、深さ130cm±を計る。底部に比して壁上半が大きく開き、北側では頸部状のくびれが形成される。埋土上部を占めるのは焼土・炭化物を含む褐色～暗褐色土層で、一部にはクロボク層がみられる。中部からは汚れ火山灰層、火山灰層の順序で堆積し、層厚は中央部で60cm±と厚い。最下部は暗褐色土層と黒褐色土層が占める。最上部を除くと、埋土は全体的にルーズである。

#### C IV-54 ビーカー形ピット (図版119c、写真図版125d)

C IV-116 陥し穴状遺構と重複して北側の半分を消失するが、その新旧関係は不明である。開口部径80cm±・底部径75cm±の規模をもち、深さ106cm±を計る。開口部から底部までほぼ直壁である。当ピットはC IV-116 陥し穴状遺構とともに掘り上げてしまい、土層断面の観察と断面図の作成は行なうことができなかった。

#### C IV-55ピーカー形ピット (図版119d)

重複するC IV-116陥し穴状遺構との新旧関係は不明である。開口部径120cm±・底部径50cm±の規模をもち、深さ63cm±を計る。底部に比して開口部が大きく開き、頸部状のくびれが壁上半と下半に形成される。土層断面図の作成を行なった後に掘り上げたが、整理上の不手際から現時点では埋土については明らかにすることができない。

#### C IV-56ピーカー形ピット (図形119b、写真図版126a)

開口部径130cm±・底部径55cm±の規模をもち、深さ156cm±を計る。底部に比して開口部が大きく開き、壁半ばに頸部状のくびれが形成される。埋土上半を構成するものは汚れ火山灰と褐色～黒褐色土層で、焼土・炭化物をわずかに含む。下半はクロボク層をはさんだ汚れ火山灰層が主体を占める。数層に細分されるが層相の違いは大きなものではない。下部にゆくほど火山灰に層相が似る。埋土はほぼレンズ状～水平状の堆積を示し、全体にルーズである。

#### C IV-57ピーカー形ピット (図版119e)

重複するC III-119陥し穴状遺構との新旧関係は不明である。開口部径155cm±・底部径80cm±の規模をもち、深さ152cm±を計る。南側では開口部下方に頸部状のくびれが形成されるが、北側では開口部から底部までほぼ直壁である。埋土上半は暗褐色土層と黒褐色土層・クロボク層で主に構成される。クロボク層を除いては焼土・炭化物を含み、やや堅くしめる。下半では火山灰層と暗褐色土層がレンズ状～水平状に互層をなす。焼土・炭化物をほとんど含まず、全体にルーズである。

#### C IV-58ピーカー形ピット (図版119f、写真図版126bd)

開口部径140cm±・底部径72cm±の規模をもち、深さ147cm±を計る。底部に比して開口部が大きく開き、壁上半に頸部状のくびれが形成される。埋土上半は堅くしまった褐色土層と暗褐色土層とで構成される。焼土・炭化物は上部ほど多く含まれる。下半は数層にわたってみられる火山灰層と火山灰が優占する褐色土層とで主に構成され、底面は汚れ火山灰層に覆われる。埋土下半は全体にルーズである。

#### C IV-59ピーカー形ピット (図版119g)

重複するC IV-124陥し穴状遺構とともに掘り上げてしまい、新旧関係および埋土構成は確認できず平面図の作成だけを行なった。開口部径100cm±・底部径80cm±の規模をもち、深さ71cm±を計る。開口部から底部までほぼ直壁である。

#### C IV-60ピーカー形ピット (図版120a)

重複するC IV-129陥し穴状遺構には切られるが、C IV-128陥し穴状遺構との新旧関係は不明である。それら2基との重複は北側の一部に限られ、大部分は残存する。開口部径95cm±・底部径75cm±の規模をもち、深さ92cm±を計る。開口部から底部までほぼ直壁である。埋土

は全体が黒褐色土層で構成される。細分されるが層相の違いはわずかである。全体にわたって焼土・炭化物がみられる。埋土は水平状の堆積を示し、堅くしまっている。

#### C IV-61 ビーカー形ピット (図形120b)

開口部径148 cm ±・底部径61 cm ±の規模をもち、深さ120 cm ±を計る。やや丸味をおびた底部に比して開口部が大きく開く。埋土上半は暗褐色土層・黒褐色土層で構成される。細分され焼土・炭化物が含まれる。下半には汚れ火山灰層が厚く堆積し、底面を覆うのは一部にクロボク層をはさんだ褐色土層である。全体の壁際は火山灰層が主に占める。火山灰層を除いて埋土は全体にルーズである。

#### C IV-62 ビーカー形ピット

重複するC IV-130 陥し穴状遺構との新旧関係は不明である。開口部径120 cm ±・底部径65 cm ±の規模をもち、深さ110 cm ±を計る。底部に比して開口部が大きく開き、壁半ばに頸部状のくびれが形成される。土層断面の観察と断面図の作成を行なわないで掘り上げてしまい、埋土構成については不明である。

(三浦 謙一)

### D II 区 (フラスコ形ピット実数12基・ビーカー形ピット実数3基)

#### D II-51 フラスコ形ピット (写真図版126c)

D II-6 住居址内の北壁際に位置するが、新旧関係は不明である。またD II-106 陥し穴状遺構とも東側の一部で重複するが、新旧関係は不明である。調査上の手違いがあり、平面図の作成を行なわないでしまった。なお土層断面図の作成は実施したが、陥し穴状遺構と重複する関係上、部分的な状態を示すにしかすぎず、遺構図版からは省いた。したがって当ピットは写真図版中でだけ示される。平面形の規模は不明であるが、深さは住居址床面から92 cm ±を計る。埋土は上位からクロボク層、汚れ火山灰層、火山灰層の順序で構成され、全体にルーズである。

#### D II-52 フラスコ形ピット (図版120c、写真図版126e)

開口部径160 cm ±×120 cm ±・頸部径103 cm ±・底部径130 cm ±の規模をもち、深さ92 cm ±を計る。開口部から壁半ばに形成された頸部まではほぼ直壁である。頸部から底部につけての壁の広がりはやや緩やかである。埋土上半は遺構検出時に掘り上げたために不明である。下半は暗褐色土層が主体を占める。層相の若干の違いにより細分されるが、全体に焼土・炭化物を含む。火山灰層は中央部、汚れ火山灰層は北壁際にわずかにみられる。

#### D II-53 フラスコ形ピット (図版120d、写真図版126f)

重複するD II-8 住居址を切っている。開口部径130 cm ±・頸部径76 cm ±・底部径105 cm ±×87 cm ±の規模をもち、深さ126 cm ±を計る。東側では「く」字状の頸部が形成されるが、西

側は開口部から底部までほぼ直壁である。埋土の最上部を黒褐色土層が占め、層厚は30cm±を計る。その下位から底部に至るまでは汚れ火山灰層と火山灰層がレンズ状～水平状の堆積を示す。これらは層相に若干の違いがあって細分される。焼土・炭化物の混入一部をのぞいてわずかである。埋土は最上部がやや堅くしまる他はルーズである。埋土中からの出土土器重量は0.52kgを計る。

#### D II-54 フラスコ形ピット (図版120g、写真図版127ab)

重複するD II-10住居址を切っている。開口部径115cm±・頸部径70cm±・底部径85cm±の規模をもち、深さ72cm±を計る。西側の底部上方に段をもち、その上方はややオーバーハング気味となる。埋土はルーズな褐色～黒褐色土層で主に構成される。含まれる焼土・炭化物は少ない。汚れ火山灰層は底面の一部を覆う。

#### D II-55 フラスコ形ピット (図版120e、写真図版127cd)

重複D II-10住居址を切っている。開口部径105cm±×95cm±・底部径180cm±の規模をもち、深さは住居址の床面から130cm±を計る。開口部から緩やかに壁が広がって底部に到りし頸部は形成されない。底面に2個の中形のピットを伴う。1個は北西隅にあり、開口部径70cm±・底部径70cm±の規模をもち、深さ66cm±を計る。他の1個は南東隅にあり、開口部径70cm±・底部径70cm±の規模をもち、深さ44cm±を計る。いずれもフラスコ形ピットに近い形態を示す。なお遺構図版中に示したのは北西隅に伴うピットである。埋土は暗褐色土層をはさんだ汚れ火山灰層が大半を占め、その下位は黄褐色土層で構成される。いずれもルーズで、焼土・炭化物・土器片・礫を含む。底面を覆うのは火山灰層である。径20mm±～50mm±の礫を多数含み、層厚は10cm±を計る。伴う2個のピットの埋土は暗褐色土層と黄褐色土層とで構成される。いずれも焼土・炭化物を含み、ルーズな層である。埋土中からの出土土器重量は0.32kgを計る。

#### D II-56 フラスコ形ピット (図版120f、写真図版127e)

開口部径125cm±・頸部径106cm±・底部径170cm±の規模をもち、深さ152cm±を計る。開口部の開きは大きい。西側では「く」字状のくびれが形成され、頸部下方の壁が大きく広がって底部に至る。東側では開口部直下に頸部が形成され、その下方の壁は緩やかな広がりを示す。埋土の大部分を構成するのは褐色～暗褐色土層で、焼土・炭化物を少量含む。汚れ火山灰層は東壁際と底面上を占め、火山灰層は下部にみられる。埋土は全体にルーズである。

#### D II-57 フラスコ形ピット (図版121a、写真図版128ab)

開口部径160cm±・頸部径140cm±・底部径180cm±の規模をもち、深さ160cm±を計る。底部に比して開口部の開きは大きい。東側では壁半ばが緩やかな「く」字状にくびれる。西側では開口部直下に頸部が形成され、その下方の壁の広がりも緩やかである。最上層は汚れ火山灰が占めるが、埋土の大部分を構成するのは明褐色土層～黒褐色土層で、焼土・炭化物を多く

含む。下半の壁際は汚れ火山灰層と火山灰層が占める。最下部は焼土・炭化物を多く含む暗褐色土層が占めるが、底面の大部分は層厚10cm±の異地性の焼土に覆われる。焼土は投棄されたものと考えられる。埋土中からの出土土器重量は0.7kgを計る。

#### D II-58 フラスコ形ピット (図版121b、写真図版127f)

開口部径125cm±×100cm±・頸部径78cm±・底部径170cm±×140cm±の規模をもち、深さ57cm±を計る。開口部から10cm±～35cm±下方に頸部が形成され、頸部からはややオーバーハング気味に底部に至る。壁には凹凸がある。埋土最上部の一部を汚れ火山灰層が占める。上部は褐色～黒褐色土層、下部はクロボクが優占する黒褐色土層で主に構成される。汚れ火山灰層は壁際の一部と底面上にみられる。焼土・炭化物を含み、埋土は全体に堅くしまっている。埋土中からの出土土器重量は0.41kgを計る。

#### D II-59 フラスコ形ピット (図版121c、写真図版128e)

開口部径140cm±×125cm±・頸部径100cm±・底部径92cm±の規模をもち、深さ100cm±を計る。底部に比して開口部が大きく開き、壁上半に頸部状のくびれが形成される。底部はやや丸味をおびる。埋土最上部に黒褐色土層がレンズ状に堆積し、その下位は黄褐色土層・褐色土層・暗褐色土層の数層で構成される。下部にはブロック状の火山灰がみられる。埋土中からの出土土器重量は0.2kgを計る。

#### D II-60 フラスコ形ピット

フラスコ形ピットとして処理してきたが、形態・規模の点からその分類には含まれず除外した。

#### D II-61 フラスコ形ピット (図版121f、写真図版128cd)

開口部径252cm±・頸部径175cm±・底部径220cm±の規模をもち、深さ196cm±を計る大形のピットである。底部に比して開口部の開きは大きく、壁上半～半ばに形成された頸部は緩やかな「く」字状を呈する。埋土最上部に「閉塞」の火山灰層を伴い、開口部中央部で径150cm±・層厚40cm±の規模をもつ。中間にレンズ状の褐色土層の薄層をはさんで上下2層に分けられる。上層は良くしまった火山灰層、下層は若干ルーズでやや汚れた火山灰層である。開口部の北壁際から底部にかけては、中央部に向いおおむねレンズ状に堆積する多量の汚れ火山灰層が認められる。埋土の他の主な構成層は上半・下半ともに暗褐色土層である。レンズ状～指交状の堆積を示し、全体にルーズである。焼土・炭化物の混入も少ない。主な遺物としては「閉塞」の火山灰層直下の褐色土層中に大形深鉢形土器が出土している。土器は体部下半を欠き、口縁部を下にして斜位の状態にある。「閉塞」の火山灰層を伴う意図的な埋置と考えられる。その他に埋土中から出土した土器の重量は0.07kgを計る。

#### D II-62 ビーカー形ピット (図版121e)

開口部径200cm±・底部径160cm±の規模をもち、深さ152cm±を計る。開口部から底部までほぼ直壁である。土層断面図の作成を行なって掘り上げたが、調査上の手違いがあり埋土構成については明らかにできない。

#### D II-63 ビーカー形ピット (図版121d)

開口部径100cm±・底部径65cm±の規模をもち、深さ70cm±を計る。底面の南東隅に小ピット(径23cm±×15cm±・深さ30cm±)を伴う。開口部から底部までほぼ直壁である。調査上の手違いから二分法によらず掘り上げてしまい平面図の作成だけを行なった。

#### D II-64 フラスコ形ピット (図版141j、写真図版170f)

開口部84cm±×74cm±・底部98cm±×74cm±の規模をもち、深さ47cm±を計る。開口部は不整な方形を呈し、底部は不整形円形に近い形を呈する。開口部から底部にかけての壁の広がりはいくつもの大きいものではない。土層断面の観察と断面図の作成は行なはなかった。西側コーナーの壁際のはほぼ床面上に深鉢形土器が存在する。土器は体部下半～底部をもち、直立の状態である。底部の下には5cm±の大きさをもつ円礫2個と10cm±の長さをもつ垂角礫1個を伴ない、意図的に土器の下に置かれたものと考えられる。(三浦 謙一)

### D III区 (フラスコ形ピット実数21基・ビーカー形ピット実数6基)

#### D III-51 フラスコ形ピット (図版121g、写真図版129ab)

開口部径170cm±・頸部径136cm±・底部径180cm±の規模をもち、深さ160cm±を計る。底部に比して開口部の開きは大きい。北側では頸部のくびれは非常に緩やかである。南側では壁上半に「く」字状のくびれが形成されるが、その下方の壁は緩やかな広がりである。埋土最上部に「閉塞」の火山灰層を伴い、開口部中央部から径90cm±・中央部での層厚10cm±の規模でレンズ状の堆積を示す。その下面に沿っては焼土・炭化物を多量に含む暗褐色土層がレンズ状に入る。その他に埋土上半を主に構成するのは褐色土層であるが、焼土・炭化物を全体に含み、ルーズである。汚れ火山灰層と火山灰層は南壁際と下部の一部を占める。最下部では褐色～黒褐色土層が底面を凸レンズ状に覆う堆積を示す。埋土中からの出土土器重量は0.72kgを計る。

#### D III-52 フラスコ形ピット (図版122a)

重複するD III-102 陥し穴状遺構に切られている。開口部径76cm±・頸部径62cm±・底部径116cm±の規模をもち、深さ108cm±を計る。北側では壁半ばからオーバーハングして底部に至る。南側では開口部直下に頸部が形成され、その下方は緩やかに外方にふくらむが、底部の上方で若干内側に張り出す形となる。埋土最上部を層厚20cm±の汚れ火山灰層が占める他、埋

土上半は褐色土層・暗褐色土層が占める。下半は汚れ火山灰層と暗褐色土層とで構成される。最上部の汚れ火山灰層を除いては、全体に焼土・炭化物を少量含み、ルーズである。埋土中からの出土土器重量は0.14kgを計る。

#### D III-53 フラスコ形ピット (図版122b、写真図版129c)

重複するD III-2住居址を切っている。開口部径140cm±・頸部径110cm±・底部径156cm±の規模をもち、深さ156cm±を計る。開口部径と底部径が近似し、頸部のくびれは緩やかである。北東隅の底面に小ピット(径62cm±×46cm±・深さ20cm±)と、そのピットから南西隅に向う溝(幅20cm±・深さ6cm±)の溝を伴うが、溝は壁の直前で途切れる。埋土最上部に「閉塞」の火山灰層を伴い、開口部中央部から径105cm±・中央部での層厚26cm±の規模でレンズ状に堆積し、堅くしまっている。埋土上半を構成するのは主に褐色土層・暗褐色土層である。細分されるが層相の違いはわずかである。下半は褐色土層が主体を占める。汚れ火山灰層と火山灰層は南壁際から中央部に向う数層がみられる。埋土上半には焼土や炭化物・土器片等が含まれる。埋土は全体にルーズである。出土土器重量は0.09kgを計る。

#### D III-54 フラスコ形ピット (図版122c、写真図版128d)

重複するD III-4住居址との新旧関係は不明である。開口部径95cm±・頸部径73cm±・底部径90cm±の規模をもち、深さ75cm±を計る。西側では底部に比して開口部が開き、壁上半に形成された頸部からはほぼ直壁で底部に至る。東側では壁上半に形成された頸部から下方の壁は大きく広がってゆく。埋土上半の西壁際を火山灰層が占める他は、炭化物を少量含む暗褐色土層が主体を占める。

#### D III-55 フラスコ形ピット (図版122d、写真図版129e)

開口部径215cm±・頸部径158cm±・底部径212cm±の規模をもち、深さ200cm±を計る大形のピットである。開口部径と底部径が近似し、東側では開口部直下に頸部が形成されるが、その下方の壁は緩やかな広がりを示す。西側では壁上半に形成された頸部は緩やかな「く」字状を呈する。埋土上部は褐色～黒褐色土層で構成され、細分されるが層相の違いはわずかである。焼土・炭化物を含み、やや堅くしまる。中部～下部は火山灰層が主体を占め、最下部は小礫と炭化物を含む褐色土層と黒褐色土層が占める。いずれもルーズである。主な出土遺物には上部の褐色土層中から出土した水晶がある。

#### D III-56 フラスコ形ピット (図版122e)

一部重複するD III-57フラスコ形ピットとの新旧関係は不明である。開口部径150cm±・底部径135cm±の規模をもち、深さ52cm±を計る。北側では開口部からはほぼ直壁で底部に至る。西～南側では頸部を形成せずに開口部から壁は若干広がって底部に至る。埋土を主に構成するのは暗褐色土層と黒褐色土層で、焼土・炭化物を含み、やや堅くしまる。



### D III-57 フラスコ形ピット (図版123a、写真図版129f、170f)

一部重複するD III-56 フラスコ形ピットとの新旧関係は不明である。開口部径130cm±・底部径115cm±の規模をもち、深さ74cm±を計る。東側では開口部から底部までほぼ直壁で、西側がやや袋状を呈する浅いピットである。埋土は黄橙色火山灰層～黒褐色土層で構成される。汚れ火山灰層と火山灰層とが顕著にみられる。まず上部には2層がレンズ状にみられ、下位の火山灰層上面には層厚2cm±の焼土層が形成されるが、現地性と考えられる。下部では東壁際から厚い火山灰層が堆積するが、底面に埋置された深鉢形土器の周囲の暗褐色土層とは明確に区別される。埋置された土器は西壁の中央部壁際底面上に口縁部を下にした逆位で在るが、体部下半を欠く。この状態からは、当ピットが一定程度埋没した後に掘り込んで土器を埋置したことが考えられる。

### D III-58 フラスコ形ピット

フラスコ形ピットとして処理してきたが、形態や規模の点からはその分類に含まれず除外した。

### D III-59 フラスコ形ピット

フラスコ形ピットとして処理してきたが、形態や規模の点からはその分類に含まれず除外した。

### D III-60 フラスコ形ピット (図版122b)

一部重複するD III-7 住居址との新旧関係は不明である。開口部径125cm±・頸部径115cm±・底部径165cm±の規模をもち、深さ134cm±を計る。壁上半～半ばに緩やかな頸部が形成されるが、頸部下方の壁の広がりは大きくはない。埋土上半は褐色土層・暗褐色土層で主に構成され、一部には大形の火山灰ブロックが含まれる。その下位から埋土半ばまでは火山灰層が主体を占め、一部には汚れ火山灰層がみられる。下半を主に構成するのは暗褐色土層・黒褐色土層であるが、北壁際と底面上には火山灰層がみられる。火山灰層を除いては、焼土・炭化物・礫・土器片等を含み、出土土器重量は1.14kgを計る。

### D III-61 フラスコ形ピット (写真図版130a)

重複するD III-8 住居址の壁の一部を切っている。開口部径112cm±・頸部径100cm±・底部径136cm±の規模をもち、深さ112cm±を計る。埋土上半～半ばに緩やかな「く」字状の頸部が形成される。埋土最上部に「閉塞」の火山灰層を伴い、開口部中央部から径70cm±・層厚40cm±の規模をもち、ほぼ埋土上半を占める。壁際は汚れ火山灰層と火山灰層が占める。下半は焼土・炭化物を少量含む暗褐色土層で主に構成される。「閉塞」の火山灰層は堅くしまるが、他の埋土はルーズである。

### D III-62 フラスコ形ピット (図版123d、写真図版130cd)

重複するD III-8住居址を切っている。D III-63フラスコ形ピットとも重複するが、新旧関係は不明である。開口部径105cm±×93cm±・底部径100cm±の規模をもち、深さ100cm±を計る。開口部直下～壁上半に頸部状のくびれが形成され、その下方の壁が若干広がり底部に至る。埋土は数層の褐色土層・暗褐色土層で主に構成される。火山灰層は上半の南東壁際に若干みられる。焼土・炭化物の混入は少なく、埋土は下部ほどルーズである。

#### D III-63フラスコ形ピット（図版123e、写真図版130ef）

重複するD III-8住居址を切っているが、D III-62ピーカー形ピットとの新旧関係は不明である。開口部径150cm±×112cm±・底部径195cm±の規模をもち、深さ80cm±の規模をもつ、北側の壁は開口部から外湾気味に壁下半に至り、オーバーハングして底部に到する。南側では頸部は形成されず、開口部から底部まで壁は大きく広がる。埋土は南壁際の一部を暗褐色土層が占める以外ほぼ汚れ火山灰層と火山灰層とで構成される。その2層はやや乱堆積状を呈し、硬軟の層が混同する。その量と検出された形態とからは、一部に崩壊あるいは流入による埋土形成があるにしても、意図された埋土の充填が考えられる。

#### D III-64フラスコ形ピット（図版123f、写真図版130b）

重複するD III-8住居址とは共伴関係も含めてその新旧関係は不明である。また、D III-118陥し穴状遺構との新旧関係は不明である。埋土を構成していたのが火山灰層であるために壁との区別が難しく、掘り過ぎの部分があって上半の形状は不明である。底部径150cm±×130cm±・深さは住居址床面から100cm±を計る。東壁下半がややオーバーハング気味である。埋土を構成する大部分が火山層であり、層相若干の違いから細分される。埋土の上部には焼土・炭化物がブロック状に含まれ、下部の火山灰層中にも炭化物は多い。埋土は全体に堅くしまっている。この様な埋土のあり方からは、一部に崩壊や流入による埋土形成があるとしても、意図的な埋土の充填が考えられる。

#### D III-65フラスコ形ピット（図版123g）

開口部径92cm±・頸部径85cm±・底部径90cm±の規模をもち、深さ42cm±を計る。北壁・南壁は壁上半に形成された頸部からほぼ直壁で底部に至る。東壁と西壁では頸部下方からわずかに壁が広がって底部に至る。埋土上半は黒褐色土層下半は暗褐色土層が主体を占める。いずれも焼土・炭化物を含む。埋土上部からは双口土器が出土しているが、他に出土土器の重量は0.25kgを計る。

#### D III-66ピーカー形ピット（図版123i）

重複するD III-121陥し穴状遺構との新旧関係は不明である。開口部径132cm±・底部径130cm±の規模をもち、深さ59cm±を計る。開口部から底部まではほぼ直壁である。埋土は壁際と底部に堆積する暗褐色土層以外は、ほぼクロボク層が占める。埋土中からの出土土器重量は0.

69kgを計る。

**D III-67 フラスコ形ピット (図版124 a、写真図版131 a)**

開口部径135 cm ± × 65 cm ± ・ 頸部径54 cm ± ・ 底部径122 cm ± の規模をもち、深さ98 cm ± を計る。西側開口部が破壊を受け大きく開く。頸部は開口部直下で強い「く」字状のくびれを示し狭い。頸部下方の壁は大きく広がって底部に至る。底面ほぼ中央部に小ピット(径35 cm ± × 25 cm ± ・ 深さ14 cm ± )を伴う。埋土を主に構成するのは褐色～黒褐色土層で、焼土・炭化物を多く含む。汚れ火山灰層は壁際の一部を占める。埋土中からの出土土器重量は0.05kgを計る。

**D III-68 フラスコ形ピット (図版123 h、写真図版131 b)**

開口部径116 cm ± ・ 底部径98 cm ± の規模をもち、深さ82 cm ± を計る。壁は袋状を呈する。埋土を構成するのは主に褐色～黒褐色土層である。火山灰層は開口部西側からレンズ状に中央部に向う薄層としてみられ、汚れ火山灰層は底面の一部を覆う。埋土はややルーズである。

**D III-69 ビーカー形ピット (図版124 c)**

開口部径83 cm ± ・ 底部径71 cm ± の規模をもち、深さ71 cm ± を計る。開口部直下に頸部状のくびれが形成される。埋土はルーズな暗褐色土層で主に構成されるが、層相に若干の違いがあり細分される。汚れ火山灰層は南壁際の一部を占める。

**D III-70 フラスコ形ピット (図版124 b、写真図版131 c)**

開口部径200 cm ± × 175 cm ± ・ 頸部径165 cm ± ・ 底部径208 cm ± の規模をもち、深さ138 cm ± を計る大型のピットである。開口部が大きく開くが、南側では壁半ばまで緩やかに湾曲気味で、その下方から底部に至る間がオーバーハングする。北側では開口部から底部まで壁はイレギュラーである。底面の壁際に周溝(幅13 cm ± ・ 深さ10 cm ± )が巡り、南側と東側ではその内に浅皿状の小ピットを伴う。埋土を主に構成するのは焼土・炭化物を含む暗褐色土層と黒褐色土層である。北壁半ばからは汚れ火山灰層が底面をほぼ覆うように堆積する。全体にやや乱堆積状を呈し、埋土は最上部を除いてルーズである。底面には礫群がある。礫は大きさが15 cm ± ～60 cm ± の垂円～垂角礫で10個がある。東壁際周溝上の群とその群からやや西側の群と分けられる。出土状態からは原位置を保つものか、転落や投棄等によるものかは明らかでない。

**D III-71 フラスコ形ピット (図版124 d、写真図版131 e f)**

開口部径125 cm ± ・ 頸部径97 cm ± ・ 底部径126 cm ± の規模をもち、深さ93 cm ± を計る。壁上半に形成された頸部は緩やかな「く」字状を呈する。底面ほぼ中央部に小ピット(径20 cm ± ・ 深さ16 cm ± )を伴う。埋土最上部に「閉塞」の火山灰層を伴い、開口部中央部から100 cm ± ・ 中央部での層厚40 cm ± の規模でレンズ状に堆積する。その下位から底部までは暗褐色土層を主な構成層とし、3層に分けられる。それらは焼土・炭化物を含み、ほぼ水平状の堆積を示すルーズな層である。頸部下方の東壁際と底面上の一部には汚れ火山灰層がみられる。埋土中から

の出土土器重量は0.42kgを計り、内1点は朱塗りの土器片である。

#### D III-72 フラスコ形ピット

開口部径58cm±・頸部径45cm±・底部径65cm±の規模をもち、深さ60cm±を計る。壁半ばに形成された頸部は緩やかな「く」字状を呈する。埋土は焼土・炭化物を含む暗褐色土層が主体を占める。埋土中からの出土土器重量は0.42kgを計る。

#### D III-73 フラスコ形ピット (図版124e)

重複するD III-8 住居址を切っている。開口部径115cm±・底部径116cm±の規模をもち、深さ95cm±を計る。遺構図版中の断面図は南北に二分した状態のもので開口部からほぼ直壁で底部に至る。東壁と西壁は開口部から壁は緩やかに広がって底部に至る。埋土の大部分を火山灰層が占め5層に細分される。上位2層は焼土・炭化物をわずかに含むが、他の3層には含まれない。いずれの層もほぼ水平状に堆積し、堅くしまっている。埋土の状態からは、一部に崩壊や流入による埋土形成があるとしても、意図的な埋土の充填が考えられる。

#### D III-74 フラスコ形ピット (図版124f、写真図版131d)

重複するD III-6 住居址との新旧関係は不明である。開口部径70cm±・底部径112cm±の規模をもち、深さ60cm±を計る。頸部は形成されず、開口部から底部への壁の広がりはやや大きい。当ピットはD III-6 住居址とともに掘り上げてしまい、埋土構成は不明である。

#### D III-75 ビーカー形ピット (図版124i、写真図版132a)

開口部径70cm±・底部径62cm±の規模をもち、深さ112cm±を計る。開口部から底部までは直壁である。埋土は褐色～黒褐色土層で主に構成される。炭化物は少量含まれる。汚れ火山灰層は下半の一部を占めている。

#### D III-76 フラスコ形ピット (図版124h)

重複するD III-4 住居址との新旧関係は不明である。開口部径132cm±・頸部径122cm±・底部径120cm±の規模をもち、深さ44cm±を計る。頸部は壁上半に形成され、北壁と南壁がわずかに「く」字状にくびれるが、東壁と西壁では頸部からほぼ直壁で底部に至る。調査上の手違いから土層断面の観察と断面図の作成を行わずに掘り上げたため、埋土構成については不明である。

#### D III-77 ビーカー形ピット (写真図版132b)

開口部径110cm±・底部径85cm±の規模をもち、深さ45cm±を計る。東壁はやや丸味をおびる。埋土最上部に「閉塞」のやや汚れた火山灰を伴い、開口部中央部から径50cm±・中央部での層厚15cm±の規模をもつ。その下部は褐色土層と暗褐色土層とで主に構成される。下部には少量の炭化物が含まれ、埋土は全体にルーズである。

#### D III-78 ビーカー形ピット

ビーカー形ピットとして処理してきたが、形態や規模の点からその分類には含まれず除外した。

#### D III-79ビーカー形ピット (図版124g、写真図版132c)

重複するD III-5住居址を切っている。開口部径138cm±・底部径122cm±の規模をもち、深さは住居址の床面から52cm±を計る。開口部から底部までほぼ直壁である。開口部から入り込んで底面を覆う火山層の他は、埋土は暗褐色土層・黒褐色土層で主に構成される。焼土・炭化物をわずかに含み、埋土はやや堅くしまる。

#### D III-80ビーカー形ピット

ビーカー形ピットとして処理してきたが、形態や規模の点からその分類には含まれず除外した。

#### D III-81ビーカー形ピット

ビーカー形ピットとして処理してきたが、形態や規模の点からその分類には含まれず除外した。

#### D III-82ビーカー形ピット (図版125a、写真図版132d)

開口部径114cm±・底部径82cm±の規模をもち、深さ95cm±を計る。北壁がややイレギュラーであるが、開口部から底部までほぼ直壁である。埋土最上部をクロボク層が占め、その下位から埋土半ばまでは、暗褐色土層が主体を占める。含まれる焼土・炭化物はわずかである。下半は汚れ火山灰層と火山灰層とで構成される。埋土は全体にルーズである。

#### D III-83フラスコ形ピット (図版125b)

掘り過ぎがあったため開口部径は不明である。頸部径105cm±・底部径138cm±の規模をもち、深さ100cm±を計る。開口部が残存する東側では、底部から若干上方に形成され頸部までは開口部からほぼ直壁で、その下方から底部の間がややオーバーハングする。埋土の大部分は褐色～暗褐色土層で占められ全体に堅くしまる。焼土・炭化物の混入は少ない。火山灰層は底面を覆ってみられる。  
(三浦 謙一)

### D IV区 (フラスコ形ピット実数5基・ビーカー形ピット実数6基)

#### D IV-51フラスコ形ピット (図版125de、写真図版132f・133ab・173e)

開口部径148cm±・頸部径122cm±・底部径142cm±の規模をもち、深さ130cm±を計る。開口部径と底部径がほぼ近似し、壁上半～半ばに形成された頸部は緩やかな「く」字状を呈する。埋土最上部に「閉塞」の火山灰層を伴い、開口部のほぼ中央部から径85cm±・中央部での層厚15cm±の規模でレンズ状に堆積する。この層は堅くしまっている。その下位には多量の炭

化物を含む黒色土層が黒褐色土層の薄層をはさんでレンズ状にみられる。この層中からは水晶が出土している。他に埋土上半は暗褐色土層で構成される。壁際からは数層の汚れ火山灰層が堆積する。底面の大部分を覆うのは褐色土層で凸レンズ状～水平状の堆積を示す。全体に含まれる焼土・炭化物は少なく、埋土はルーズである。

#### D IV-52 フラスコ形ピット (図版125c、写真図版133cd)

開口部径156cm±・頸部径138cm±・底部径163cm±の規模をもち、深さ93cm±を計る。開口部径と底部径が近似し、壁上半に形成された頸部は緩やかな「く」字状を呈する。D IV-51 フラスコ形ピットから6.00m±ほぼ南側に位置する。埋土最上部に「閉塞」の汚れ火山灰層を伴い、開口部ほぼ中央部から径120cm±・中央部での層厚30cm±の規模をもつ。部分的には火山灰が占める。その下位は焼土・炭化物を多量に含む黒褐色土層・暗褐色土層で主に構成される。下半の西壁際には厚い汚れ火山灰層がみられる。埋土は全体的にルーズである。なお埋土中からの出土土器重量は0.06kgを計る。

#### D IV-53 ビーカー形ピット (図版125f)

重複するD IV-1 住居址には切られるが、D IV-54 フラスコ形ピットとの新旧関係は不明である。開口部径100cm±・底部径95cm±の規模をもち、深さ70cm±を計る。開口部から底部までほぼ直壁である。埋土最上部には貼床が施されている。埋土を主に構成するのは、焼土を含む褐色～黒褐色土層であるが、壁際から中央部にかけては汚れ火山灰層がみられる。埋土は全体的に堅くしまっている。

#### D IV-54 フラスコ形ピット (図版125h)

重複するD IV-53 ビーカー形ピットとの新旧関係は不明である。開口部径105cm±・頸部径80cm±・底部径135cm±の規模をもち、深さ112cm±を計る。壁半ばに形成された頸部は緩やかな「く」字状のくびれを呈する。調査上の手違いがあり、土層断面の観察と断面図の作成を行なうことができなかった。

#### D IV-55 ビーカー形ピット (図版125g、写真図版133e)

重複するD IV-101 陥し穴状遺構との新旧関係は不明である。開口部径90cm±・底部径85cm±の規模をもち、深さ100cm±を計る。開口部から底部までほぼ直壁である。埋土は褐色～黒褐色土層で主に構成され、焼土・炭化物は上部ほど多く含まれる。汚れ火山灰層は壁際の一部を占める。埋土は全体的にルーズである。

#### D IV-56 ビーカー形ピット (図版126a)

重複するD IV-103 陥し穴状遺構との新旧関係は不明である。開口部径110cm±・底部径78cm±の規模をもち、深さ80cm±を計る。北側の壁が緩やかに外湾し、また底面には凹凸がある。埋土は焼土・炭化物を含む黒褐色土層が上部を占め、以下暗褐色土層、底面を覆う汚れ火山灰

層の順序で構成される。埋土は全体的に堅くしまっている。

#### D IV - 57 ビーカー形ピット (図版126b)

開口部径 135 cm 土 × 125 cm 土 ・ 底部径 45 cm 土 の規模をもち、深さ 125 cm 土 を計る。底部に比して開口部上半が大きく開き、壁上半に頸部状のくびれが形成される。埋土上部では焼土を少量含む黒褐色土層が主体を占める。その下位から底部に至るまでは汚れ火山灰層で構成される。層相の違いはわずかであるが細分され、最下部を占める層中には炭化物が多く含まれる。上部を除くと埋土は全体的にルーズである。

#### D IV - 58 ビーカー形ピット (図版126d)

開口部径 100 cm 土 ・ 底部径 76 cm 土 の規模をもち、深さ 96 cm 土 を計る。壁上半に頸部状のくびれが形成される。埋土上半は黒褐色土層と暗褐色土層とで構成される。焼土・炭化物を含み、堅くしまる。下半は上位からクロボク層、汚れ火山灰層、層厚 5 cm 土 の炭化物の層、炭化物を多量含む暗褐色土層の順序で構成される。黒色炭化物層は異地性のものである。埋土は全体的にルーズである。

#### D IV - 59 フラスコ形ピット (図版126c)

開口部径 105 cm 土 ・ 頸部径 105 cm 土 ・ 底部径 126 cm 土 の規模をもち、深さ 68 cm 土 を計る。東壁は開口部から内湾気味に底部に至る。西側では壁半ばに頸部が形成され、その下方から底部の間が若干オーバーハング気味となる。埋土上半は焼土・炭化物を含む褐色土層、下半は汚れ火山灰層と火山灰層とで主に構成される。いずれの層も堅くしまっている。

#### D IV - 60 ビーカー形ピット (図版126e)

重複する D IV - 1 住居址には切られている。開口部径 135 cm 土 ・ 底部径 90 cm 土 × 65 cm 土 の規模をもち、深さ 85 cm 土 を計る。底部に比して開口部が若干大きく開く。埋土上半はクロボク層と暗褐色土層、壁際と下半は汚れ火山灰層で主に構成される。いずれも焼土・炭化物を含み、埋土はルーズである。

#### D IV - 61 ビーカー形ピット

開口部径 150 cm 土 ・ 底部径 70 cm 土 の規模をもち、深さ 160 cm 土 を計る。底部径に比して開口部が大きく開くのは、西側半分にテラス状の浅い段が形成されているためである。土層断面の観察と断面図の作成を行なわないで掘り上げてしまい、埋土構成は不明である。(三浦 謙一)

### E II 区 (フラスコ形ピット実数17基・ビーカー形ピット実数3基)

#### E II - 51 ビーカー形ピット (図版126f、写真図版133f)

E II - 2 住居址を切り、E II - 110 陥し穴状遺構によって切られている。規模は開口部径134

cm土、底部径115cm土、深さ89cm土である。調査上の手違いから、埋土の土層構成は明らかにできなかった。

#### E II-52 フラスコ形ピット (図版126h、写真図版134a)

E II-2 住居址を切って構築されている。規模は開口部径105cm土、頸部径100cm土・底部径143cm土である。調査上の手違いから、このピットの埋土も構成を明らかにできなかった。

#### E II-53 フラスコ形ピット (図版126i、写真図版134b)

E II-4 住居址を切って構築されている。規模は開口部径75cm土・頸部径81cm土・底部径127cm土、深さ105cm土である。東壁は開口部よりほぼ垂直に落ち、西壁にもはっきりとした頸部のくびれが形成されていない。埋土はほぼ4層から成っている。最上層は汚れ火山灰層で非常に堅い。その下位は軟らかい暗褐色土層が西壁方向に傾斜して堆積している。中層部から下層部にかけては火山灰の優占する明褐色土層が占めている。

#### F II-54 フラスコ形ピット (図版126g、写真図版134c)

E II-4 住居址を切って構築されている。規模は開口部径76cm土、底部径127cm土、深さ120cm土で、はっきりとした頸部のくびれは認められない。埋土最上層はU字状に堆積する炭化物微粒を多く含む暗褐色土層である。中層部から下層部を占めているのは火山灰の優占する褐色～明褐色土層である。底面は黒褐色土層がほぼ水平に堆積して覆っている。

#### E II-55 ビーカー形ピット

ビーカー形ピットとして登録されているが、規模・形態からこの分類に含まれず、除外した。

#### E II-56 フラスコ形ピット (図版127a、写真図版134ef)

E II-57 フラスコ形ピットと東壁で切り合っているが、その新旧関係は不明である。規模は開口部径160cm土、頸部径106cm土・底部径127cm土・深さ105cm土で、南北両壁とも大きくくびれて頸部を形成している。埋土上層部から頸部にかけて占めているのは堅い黒褐色土層で炭化物、焼土の微粒の混入がみられる。中層部～下層部は汚れ火山灰層が数層に分かれて入り組んでいるが、ほぼ中央部が盛り上がる状態の堆積である。底面は黒褐色土層が覆っている。開口部黒褐色土層中に14cm土の安山岩礫がある。

#### E II-57 フラスコ形ピット

E II-56 フラスコ形ピットと切り合っているが、その新旧関係は不明である。規模は開口部径120cm土・頸部径105cm土・底部径118cm・深さ60cm土で、開口部が大きく開く形状を示している。西壁は大きくくびれて頸部を形成するが、東壁には僅かのくびれしか認められない。埋土の堆積は全体に非常に不規則である。汚れ火山灰のみられるのは開口部西壁際、頸部から底部にかけての東壁際、最下層である。

#### E II-58 フラスコ形ピット (図版127b、写真図版134d)



規模は開口部径95cm±・頸部径80cm±・底部径134cm±・深さ114cm±である。底面東壁寄りに副穴（径23cm±・深さ8cm±）を伴っている。埋土は開口部を炭化物・焼土・凝灰岩礫が混入する褐色土層が占め、頸部から中層部は炭化物が多量に混入する暗褐色土層である。中層から下層部は暗褐色・褐色土層が東壁から西壁方向に傾斜して堆積し、東壁際には汚れ火山灰層が僅かにみられる。底面および副穴は黒褐色土層によって覆われている。頸部の暗褐色土層より土器片が出土した

#### E II-59 フラスコ形ピット（図版127c）

E II-106 陥し穴状遺構によって切られている。規模は開口部径110cm±・頸部径110cm±底部径126cmで、壁は開口部から僅かにふくらみをもったのち頸部を形成している。埋土上層部は炭化物微粒が混入する黒褐色土層である。頸部には薄く汚れ火山灰層がみられる。中層部を占めているのは炭化物、焼土微粒が混入する暗褐色土層である。この暗褐色土層の下位は西壁から中央部にかけて堆積する汚れ火山灰層である。下層部東壁際にも厚く汚れ火山灰層の堆積がある。最下層は暗褐色土層が占め、炭化物の混入が僅かにみられる。中層部暗褐色土層から土器片が数片出土した。

#### E II-60 フラスコ形ピット（図版127d）

E II-61 フラスコ形ピットと切り合っているが、その新旧関係は不明である。規模は開口部径141cm±・頸部径121cm±・底部径205cm±・深さ172cm±である。西壁側は頸部下位より大きく張り出して底部に至っている。埋土は Field Card の記載によれば、上層部は汚れ火山灰層が占め、中層部は火山灰が霜降状に混入する黒褐色土層で、開口部北壁際から中層部北壁際さらに下層にかけて大きく占めているのは火山灰の優占する褐色土層である。

#### E II-61 フラスコ形ピット

E II-60 フラスコ形ピットと切り合っているが、新旧関係は不明である。規模は開口部径83cm±・頸部径68cm±・底部径205cm±・深さ172cm±で、北壁側が大きく張り出す形状を呈している。埋土の土層断面図が行方不明で、土層構成は明らかにできなかった。

#### E II-62 フラスコ形ピット（写真図版135a）

E II-21 住居址を切って構築されている。フラスコ形ピットとして登録されているが、調査上の手違いから平面図、断面図の作成がなされず、詳細は不明である。

#### E II-63 フラスコ形ピット（図版127g）

E II-15 住居址に切られている。規模は開口部径115cm±・頸部径103cm±・底部径143cm±・深さ133cm±である。北西側の壁には頸部状のくびれがなく、ほぼ垂直に落ちて底部に至っている。南壁は頸部の下位から大きく張り出して底部に至っている。このピットの埋土は、Field Card の記載によると全体に暗褐色土層と火山灰の優占する褐色土層が重なり合う層で、

下層部に数層の炭化物の薄層が認められる。

**E II-64 フラスコ形ピット (図版127 e、写真図版135 b)**

規模は開口部径 150 cm 土・頸部径 112 cm 土・底部径 122 cm 土・深さ 102 cm 土である。北壁には頸部のくびれが形成されているが、南壁にはくびれが認められない。南壁、北壁ともに底部で僅かなふくらみをもったのち底面に至っている。底面のほぼ中央に副穴(径40cm土・深さ11cm土)を伴っている。埋土上層部は堅い暗褐色土層で、炭化物、焼土微粒を僅かに含んでいる。中層部を占めているのは軟らかい暗褐色土層と火山灰の優占する褐色土層である。下層部は暗褐色土層と褐色土層が入り組んでおり、中央部と南壁寄りにはほぼ純粋の火山灰が薄く堆積している。副穴を埋めているのは火山灰の優占する褐色土層である。

**E II-65 フラスコ形ピット (図版127 +)**

規模は開口部径52cm土・底部径128cm土・深さ130cm土で、頸部のくびれは認められない。埋土開口部にレンズ字状の堆積を示す火山灰層があり、その下位に炭化物の薄層が認められるが、この両者によって“閉塞”の機能をはたしていたものと推定される。埋土上層部～下層部は炭化物微粒を多量に含む褐色～暗褐色土層が入り組んで堆積している。下層部に異地性の焼土が層厚6cm土でほぼ水平に堆積し、この焼土層を包む黄褐色土層にも多量の炭化物と焼土の微粒が混入している。底面に20cm土の凝灰岩礫が載っている。

**E II-66 フラスコ形ピット (図版128 a、写真図版135 c)**

E II-30住居址を切って構築されている。規模は開口部径 292 cm 土・頸部径 176 cm 土・底部径 285 cm 土・深さ 164 cm 土で、大形のフラスコ形ピットである。西壁が頸部状のくびれをもつのは下半部に至ってからである。埋土はほぼ全体が火山灰層または火山灰優占の黄褐色土層である。上層部はほぼU字状の堆積を示しているが、中層部は南壁側から北壁方向へ傾斜する堆積状態を示している。下層部にはほぼ純粋の火山灰が凸レンズ状を示す堆積をしている。

**E II-67 フラスコ形ピット (図版128 b)**

E II-30住居址を切って構築されている。規模は開口部径 107 cm 土・頸部径 91 cm 土・底部径 230 cm 土・深さ 159 cm 土で、開口部に比して底部が大きく広がる形状である。東壁には開口部の崩壊によると考えられる頸部が形成されている。底面南壁際に副穴(上部径64cm土・下部径36cm土・深さ18cm土)を伴っている。埋土の土層構成は土層断面図が行方不明のため明らかにできなかった。

**E II-68 フラスコ形ピット (図版128 c)**

E II-27住居址を切って構築されている。規模は開口部径 138 cm 土・底部径 163 cm 土・深さ 105 cm 土で、壁は開口部より僅かに傾斜して落ち、頸部のくびれをもたない。埋土の土層断面図が行方不明で、土層構成を明らかにすることができなかった。

**E II-69 フラスコ形ピット** (図版128d、写真図版134d)

規模は開口部径 183 cm ± × 90 cm ± ・ 頸部径 154 cm ± × 84 cm ± ・ 底部径 195 cm ± ・ 深さ 80 cm ± で、開口部の平面形は長楕円形を呈している。このピットの埋土の土層断面図も行方不明で、土層構成を明らかにすることができなかった。

**E II-70 フラスコ形ピット** (図版128e)

E II-25 住居址を切って構築されている。規模は開口部径 112 cm ± ・ 頸部径 93 cm ± ・ 底部径 151 cm ± で、開口部の崩壊によると考えられる頸部のくびれが形成されている。東壁は頸部からほぼ垂直に底部まで落ち、西壁は大きく張り出して底部に至っている。埋土の土層構成は断面図が行方不明で明らかにできなかった。

**E II-71 ビーカー形ピット** (図版128f)

E II-7 住居址を切って構築されている。規模は開口部径 109 cm ± ・ 底部径 92 cm ± ・ 深さ 42 cm ± で、開口部の崩壊と考えられる頸部状のくびれが僅かに形成されている。調査上の手違いから土層断面図作成前に埋土を掘り上げ、土層構成は不明である。 (金沢光孝)

**E III 区 (フラスコ形ピット実数12基・ビーカー形ピット実数2基)**

**E III-51 フラスコ形ピット** (図版129a)

フラスコ形ピットとして登録されているが、規模・形態からこの分類に含まれず除外した。

**E III-52 ビーカー形ピット**

E III-3 住居址を切って構築されている。規模は開口部径 116 cm ± ・ 底部径 131 cm ± ・ 深さ 50 cm ± で、北東壁に開口部の崩壊によると考えられる頸部状のくびれが形成されている。このピットの埋土は調査上の手違いにより、観察、実測を行なう以前に掘り上げ、土層の構成を明らかにできなかった。

**E III-53 フラスコ形ピット** (図版129b)

E III-3 住居址と切り合っているが、新旧関係は不明である。規模は開口部径 150 cm ± ・ 頸部径 128 cm ± ・ 底部径 154 cm ± ・ 深さ 143 cm ± である。北壁で頸部が形成されるのは、下半部に至ってからである。埋土上半は開口部にクロボク層がレンズ状に堆積し、中央部を大きく占めているのは炭化物、焼土微粒が多量にみられる。暗褐色土層である。南北両壁際には明褐色土と黒褐色土層が入り組んで堆積している。埋土下半は暗褐色土層と黒褐色土層によって占められている。汚れ火山灰層は中層部南壁際と底部北壁側にみられる。

**E III-54 フラスコ形ピット** (図版129c、写真図版135e)

規模は開口部径 150 cm ± ・ 頸部径 120 cm ± ・ 底部径 146 cm ± ・ 深さ 166 cm ± である。東壁は

僅かに頸部のくびれをもつほかは、ほぼ垂直に下がって底部に至っている。西壁は頸部下位から大きく張り出したのち、ほぼ垂直に落ちている。埋土上半は主に黒褐色～暗褐色土層で、U字状に堆積している。埋土下半には汚れ火山灰層が南壁際から中央部にかけて数層みられ、これと黒褐色土層、暗褐色土層、火山灰の優占する褐色土層が入り組んでいる。上層部の黒褐色土層より深鉢型土器1個体分の土器片が出土した。

#### E III-55 フラスコ形ピット (図版129d)

規模は開口部径74cm±・頸部径65cm±・底部径80cm±・深さ94cm±で、小形のフラスコ型ピットである。底面は浅皿状に丸味を帯びている。西壁は頸部下位から大きく張り出したのち、ほぼ垂直に落ちている。埋土は開口部をクロボク層と明褐色土層が占め、中層部は汚れ火山灰層が大きく占めている。下層部には焼土の微粒を多量に含むクロボク層がほぼ水平に堆積している。開口部西壁際の黒褐色土層中に15cm±の凝灰岩礫が混在している。

#### E III-56 フラスコ形ピット (図版129e)

規模は開口部径74cm±・頸部径64cm±・底部径80cm±・深さ84cm±で、全体に東側に傾斜した形で構築されている。埋土上層部は西壁側を汚れ火山灰層が占め、中央部はクロボク層が、東壁側は黒褐色土層がそれぞれ占めている。中層部～下層部は黒褐色土層、暗褐色土層、火山灰の優占する褐色土層が入り組む不規則な堆積状態を呈している。

#### E III-57 フラスコ形ピット (図版130a)

規模は開口部径106cm±・頸部径74cm±・底部径136cm±・深さ120cm±である。東壁は頸部から僅かにふくらみをもって底部に下り、西壁は緩く傾斜して落ちたのち、底部で僅かにふくらみをもっている。埋土上層部は主に暗褐色土層で、東壁には開口部の崩壊と考えられる汚れ火山灰層がある。中層部はほぼ汚れ火山灰層が占め、下層部は黒褐色土層、暗褐色土層が入り組んでいる。底部東壁際と底面中央部直上には汚れ火山灰の堆積がみられる。

#### E III-58 フラスコ形ピット (図版129f)

規模は開口部径105cm±・頸部径72cm±・底部径100cm±・深さ78cm±である。西壁は頸部の他に下半部に壁の崩壊によると考えられるもう一つのくびれをもっている。埋土は主に火山灰の優先する褐色土層で、底面はほぼ水平に堆積する汚れ火山灰によって覆われている。最上層の褐色土層と東壁際の褐色土層から土器片が数片出土した。

#### E III-59 フラスコ形ピット (図版130b)

規模は開口部径178cm±・頸部径106cm±・底部径140cm±・深さ105cm±で、底面は丸味を帯びている。埋土最上部は東壁側が暗褐色土層、中央部がクロボク層、西壁側が暗褐色土層と分れている。中層部～下層部はほぼ汚れ火山灰層が占め、純粹の火山灰層も数層みられる。底面は汚れ火山灰層が水平に堆積して覆っている。

### **E III-60 ビーカー形ピット (図版130c)**

E III-108 陥し穴状遺構に西半部を切られているため、開口部径、底部径は不明である。深さは110cm±である。東壁に開口部の崩壊によると考えられる頸部状のくびれをもっている。埋土全体がほぼ汚れ火山灰によって占められている。

### **E III-61 フラスコ形ピット (図版130d)**

開口部東側をE III-108 陥し穴状遺構に切られている。規模は頸部径50cm±・底部径45cm± 深さ95cm±で、開口部径は不明である。壁にははっきりとした頸部のくびれが形成されている。埋土上層部は堅い暗褐色土層で、中層部はほぼ純粹の火山灰が占めている。底面は汚れ火山灰によって覆われている。

### **E III-62 フラスコ形ピット**

E III-8 住居址を切って構築されている。開口部径105cm±・頸部径85cm±・底部径123cm±・深さ60cm±の規模をもっている。埋土の土層構成はField Cardの記載によると炭化物の混入する黒褐色・暗褐色土層によって占められている。

### **E III-63 フラスコ形ピット**

フラスコ形ピットとして登録されているが、規模・形態からこの分類に含まれず除外した。

### **E III-64 フラスコ形ピット (図版130g)**

E III-7 住居址を切って構築されている。規模は開口部径93cm±・頸部径91cm±・底部径95cm±で、頸部のくびれが僅かに形成されている。埋土の土層構成については、土層断面図が行方不明で明らかにできなかった。

### **E III-65 フラスコ形ピット**

フラスコ形ピットとして登録されているが、規模・形態からこの分類に含まれず除外した。

### **E III-66 フラスコ形ピット (図版130e、写真図版136a)**

規模は開口部径223cm±・頸部径180cm±・底部径155cm±・深さ107cm±である。開口部は大きく開き、開口部の僅か下位に大きくくびれた頸部が形成されている。東壁はさらに2ヶ所に頸部状のくびれをもっている。埋土上半は暗褐色土層と火山灰優占の褐色土層が入り組んで乱雑な堆積状態である。頸部の東壁際に僅かに火山灰層がみられる。埋土下半は炭化物の微粒が多量に混入する暗褐色土層が占め、底面は汚れ火山灰によって覆われている。

### **E III-67 フラスコ形ピット (図版141hi)**

規模は開口部径120cm±・頸部径102cm±・底部径97cm±・深さ31cm±で、東壁には頸部状のくびれが形成されているが、西壁にはくびれが認められない。底面中央に径6cm±・深さ5cmの副穴と考えられるくぼみを伴っている。埋土は暗褐色土層・褐色土層・黒褐色土層が入り組み、全体に乱雑な堆積である。開口部東壁際から中層部にかけて汚れ火山灰が堆積する。頸

部東壁際の黒褐色土層から笛状石製品が出土した。

(金沢光孝)

### E IV区 (フラスコ形ピット実数3基・ピーカー形ピット実数7基)

#### E IV-51ピーカー形ピット (図版131a)

E IV-1住居址を切りE IV-52ピーカー形ピットに南側過半部を大きく切られている。規模は開口部径108cm±・底部径112cm±・深さ40cm±である。埋土はField Cardの記載によれば黒褐色土層がほぼ全層を占め、火山灰ブロックの混入が著しい。

#### E IV-52ピーカー形ピット (図版131a)

E IV-1住居址およびE IV-51ピーカー形ピットを切って構築されている。規模は開口部径151cm±、底部径152cm±・深さ45cm±で、開口部の崩壊によると考えられる頸部状のくびれが形成されている。埋土はField Cardの記載によれば、焼土の細粒、火山灰ブロックの混入する黒褐色土層のほぼ単層である。

#### E IV-53フラスコ形ピット (図版131b、写真図版136b)

規模は開口部径122cm±・頸部径110cm±・底部径182cm±・深さ80cm±で、南壁には頸部のくびれが形成されているが、北壁にはくびれが認められない。埋土は全体に乱堆積状であるが主に火山灰層または火山灰の優占する黄褐色土層である。ほぼ純粋の火山灰が最下部中央から南壁寄りに堆積している。

#### E IV-54フラスコ形ピット (図版131c、写真図版136c)

E IV-102陥し穴状遺構により中央部を大きく切られている。規模は開口部径181cm±・頸部径123cm±・底部径172cm±・深さ95cm±である。埋土は土層断面図作成前に掘り上げ、土層構成を明らかにできなかった。

#### E IV-55フラスコ形ピット (図版131d)

規模は開口部径120cm±・頸部径102cm±・底部径182cm±・深さ146cm±で、北壁は開口部よりほぼ垂直に落ちて、僅かのくびれをもって頸部を形成している。埋土上半はほぼ4層に分かれる。暗褐色土層によって構成されている。下半は黒褐色土層・明褐色土層・褐色土層が入り組んでいる。最上部の暗褐色土層より土器片が出土した。

#### E IV-56ピーカー形ピット (図版131e)

規模は開口部径134cm±・底部径96cm±・深さ35cm±で、開口部の崩壊と考えられる頸部状のくびれがある。Field Cardの記載によれば、埋土は主に汚れ火山灰層である。

#### E IV-57ピーカー形ピット

ピーカー形ピットとして登録されているが、形態から不整形ピットとして処理し、ここでは除外した。

#### E IV-58A ビーカー形ピット (図版131 g)

E IV-58B ビーカー形ピットと切り合うが、その新旧関係は不明である。規模は開口部径150 cm±、底部径132 cm±・深さ66cm±で、開口部の崩壊によると考えられる頸部状のくびれが形成されている。Field Card の記載によれば、埋土は底面を覆う汚れ火山灰のほかは、ほぼ黒褐色土層によって占められている。

#### E IV-58B ビーカー形ピット (図版131 g)

E IV-58A ビーカー形ピットと切り合うが、その新旧関係は不明である。規模は開口部径160 cm±・底部径145 cm±・深さ74cm±で、開口部の崩壊によるとみられる頸部状のくびれが形成されている。Field Card の記載によれば、埋土上半はほぼ黒褐色土層が占め、下半は主に汚れ火山灰層である。

#### E IV-59 ビーカー形ピット (図版131f、写真図版136d)

規模は開口部径120 cm±、底部径70cm±・深さ118 cm±で、開口部が大きく開く朝顔状の形状を呈している。埋土上層部はクロボク層がU字状に堆積して中央部を占め、東西の壁際には火山灰の優占する黄褐色土層・明褐色土層が入り組み乱雑な堆積となっている。中層部はほぼ汚れ火山灰層が占め、底面は黒色土層によって覆われている。 (金沢光孝)

### F II区 (フラスコ形ピット実数17基・ビーカー形ピット実数3基)

#### F II-51 フラスコ形ピット (図版132a、写真図版136e)

規模は開口部径120 cm±、頸部径110 cm±、底部径180 cm±・深さ148 cm±である。西壁にははっきりした頸部のくびれが認められない。埋土上層部は明褐色土層が占め、頸部に汚れ火山灰が凹レンズ状に堆積している。中層部は東壁から西壁に向かって傾斜する堆積状態を示している。中層部黒褐色土層には炭化物の混入が著しい。下層部は火山灰層が主体となり、底面の西壁側はほぼ純粋の火山灰が覆っている。

#### F II-52 フラスコ形ピット (図版131a、写真図版136f)

規模は開口部径120 cm±・頸部径102 cm±・底部径190 cm±・深さ100 cm±である。埋土は全体に北壁側から南壁方向に土層が傾斜する堆積状態を示している。上層部から中層部にかけては暗褐色土層・黒褐色土層が占め、炭化物の微粒が多量に混入している。中層部北壁際にはほぼ純粋の火山灰の堆積がみられる。下層部は汚れ火山灰層が占め、底面に11cm±の凝灰岩礫が載っている。

#### F II-53 フラスコ形ピット (図版132c)

規模は開口部径102 cm±・頸部径56cm±・底部径150 cm±・深さ162 cm±で、頸部は開口部

・底部に比して狭く、はっきりしたくびれをもって頸部を形成している。埋土上層部はクロボク層で、ほぼ水平に堆積している。中層部は黒褐色土層で東壁から西壁方向に傾斜する堆積状態を示している。下層部は炭化物の微粒が多量に混入する黒褐色土層が占めている。頸部の黒褐色土層と中層部西壁際の暗褐色土層から土器片が数片出土した。

#### F II-54 フラスコ形ピット (図版132f、写真図版137a)

規模は開口部径80cm±・頸部径65cm±・底部径152cm±・深さ164cm±である。壁は開口部より頸部までほぼ垂直に落ちている。埋土上層部は黒褐色・暗褐色土層で、炭化物の微粒が多量に混入し、焼土の微粒も僅かにみられる。中層部は褐色土層と暗褐色土層が交互に堆積し、南壁から北壁方向に傾斜する状態を示している。下層部は暗褐色土層によって占められ、炭化物の微粒が僅かに混入している。最下部は汚れ火山灰層で、底面をほぼ全面に亘って覆っている。

#### F II-55 フラスコ形ピット (図版132d、写真図版137b)

規模は開口部径78cm± 底部径176cm±・深さ153cm±で、南壁は頸部下位から大きく張り出し底部に至っている。北壁は頸部のくびれをもたず、開口部よりほぼ垂直に落ち、頸部から僅かに傾斜して底部に至っている。埋土は土層の観察と実測を行なう以前に掘り上げ、土層断面図の作成が行なわれなかった。

#### F II-56 フラスコ形ピット (図版132g、写真図版137c)

規模は開口部径128cm±・頸部径108cm±・底部径162cm±・深さ62cm±で、北壁には頸部のくびれが形成されていない。埋土は主に炭化物・焼土の微粒が僅かに混入する黒褐色土層である。北壁、南壁際および最下部に汚れ火山灰の堆積がみられる。中層部黒褐色土層から土器片が出土した。

#### F II-57 フラスコ形ピット (図版132e)

規模は開口部径148cm±・頸部径108cm±・底部径118cm±・深さ56cm±である。西壁は頸部で大きくくびれるが、東壁には僅かのくびれしかない。埋土の堆積状態は全体に不規則である。汚れ火山灰層が存在するのは開口部西壁際、頸部から底部にかけての東壁際および最下層である。

#### F II-58 フラスコ形ピット (図版133a、写真図版137d)

規模は開口部径102cm±・頸部径74cm±・底部径206cm±・深さ164cm±である。東壁には頸部のくびれが形成されていない。

埋土の堆積状態は、上層部は西壁から東壁方向に向って傾斜し、中層部では東壁から西壁方向に傾斜し、下層部ではほぼ水平である。埋土は主に黒褐色土層と暗褐色土層で、焼土・炭化物微粒の混入が著しい。頸部および中層部より土器片が数片出土した。



#### F II-59 フラスコ形ピット (図版133b)

規模は開口部径68cm±・頸部径57cm±・底部径190cm±・深さ152cm±である。壁は開口部より頸部までほぼ垂直に落ち、くびれは形成されていない。埋土は開口部より頸部まではクロボク層である。中層部～下層部は黒褐色・暗褐色土層が入り組み、乱堆積状を呈している。最下層は汚れ火山灰層で、その上位に多量の焼土微粒の混入する暗褐色土層がある。埋土全体に炭化物微粒の混入がみられる。

#### F II-60 フラスコ形ピット (図版133c、写真図版137e)

F II-11住居址を切って作られている。規模は開口部径136cm±・頸部径72cm±・底部径208cm±・深さ194cm±である。壁は頸部のくびれをもたず、ほぼ垂直に落ちたのち北壁が大きく張り出す形状を示している。埋土は炭化物・焼土の微粒の混入する黒褐色・暗褐色土層がほぼ全体を占め、水平に近い状態の堆積を示している。頸部北壁際と最下層部には汚れ火山灰が堆積している。底面には炭化物が層状をなして載っている。

#### F II-61 フラスコ形ピット (図版133d)

F II-13住居址を切って構築されている。規模は開口部径170cm±・頸部径140cm±・底部径182cm±・深さ185cm±である。西壁は頸部がほぼ垂直に落ちたのち、大きく張り出す形状を示している。底面西壁際に副穴状のくぼみを伴う。埋土の堆積は乱堆積状であるが、ほぼ西壁方向に傾斜する状態を示している。頸部から中層部にかけての西壁際に汚れ火山灰が堆積し、頸部東壁側にも汚れ火山灰層がみられる。底面上に炭化物層が径45cm±・層厚3cm±の範囲に堆積している。上層部黒褐色土層と下層部黒褐色土層から土器片が数片出土した。

#### F II-62 フラスコ形ピット (図版134a、写真図版137f)

規模は開口部径95cm±・頸部径85cm±・底部径217cm±である。南壁は頸部のくびれが形成されず、開口部より緩やかに傾斜して落ち、底部で僅かにふくらみをもっている。埋土の堆積は全体に乱堆積状であるが、上層部はU字状の堆積を示し、中層部～下層部はほぼ水平である。火山灰層は頸部南壁際と北壁際および下層部北壁から中央部にかけて存在する。中層部の中央に黄褐色細礫が混入している暗褐色土層がある。最上部暗褐色土層と頸部南壁際から土器片数片が出土した。

#### F II-63 フラスコ形ピット (図版134b、写真図版138a)

規模は開口部径105cm±・頸部径60cm±・底部径143cm±・深さ167cm±で、壁は頸部ではほぼ垂直に落ちている。底面南壁際に副穴状のくぼみをもっている。埋土は開口部に焼土微粒を多量に含む黒褐色土層がU字状に堆積し、頸部は褐色土層と黒褐色土層が占めている。中層部は炭化物、焼土の微粒が混入する暗褐色土層が占め、底面は汚れ火山灰層と、火山灰優占の褐色土層によって覆われている。

**F II-64 フラスコ形ピット** (図版134c、写真図版138b)

規模は開口部径142cm±・頸部径102cm±・底部径125cm±・深さ125cm±である。壁は頸部で僅かにくびれたのち、底部にほぼ垂直に落ちる。埋土は全体にU字状の堆積を示している。汚れ火山灰が最上層にあり、堅くしまっている。中層部から下層部にかけても汚れ火山灰層が大きく占めている。上層部黒褐色土層から土器片が出土した。

**F II-65 フラスコ形ピット** (図版134d、写真図版138c)

規模は開口部径192cm±・頸部径132cm±・底部径195cm±である。このフラスコ形ピットの開口部には“閉塞”のための火山灰が存在している。開口部のほぼ中央で27cm±の層厚をもつ火山灰がレンズ状に堆積している。この火山灰層の下位に炭化物層があり、この火山灰層と炭化物層によって“閉塞”の機能をはたしていたものと考えられる。埋土上半は主に黒褐色・暗褐色土層でU字状の堆積を示している。下半は汚れ火山灰層が占めているが、中央部から底部北壁際にかけてはほぼ純粹の火山灰層がみられる。頸部の暗褐色土層から土器片が数片出土した。

**F II-66 フラスコ形ピット** (図版134e)

規模は開口部径70cm±・頸部径73cm±・底部径125cm±・深さ166cm±である。壁は開口部より垂直に落ち、頸部のくびれは形成されていない。埋土上半は不規則な堆積を示す黒褐色・暗褐色土層が占めている。下層部に汚れ火山灰が層厚23cm±でほぼ水平に堆積している。この火山灰層の上位に炭化物層が21cm±の広がりをもって堆積している。

**F II-67 ビーカー形ピット** (図版134f)

F II-3 住居址を切って構築されている。規模は開口部径114cm±・底部径110cm±・深さ39cm±で、底面に径23cm±・深さ10cm±の副穴を伴う。調査上の手違いからこのピットの埋土は観察、実測を行う以前に掘り上げてしまい、土層構成を明らかにできなかった。

**F II-68 フラスコ形ピット** (図版135a)

F II-19 住居址と切り合っているが、その新旧関係は不明である。規模は開口部径121cm±・頸部径110cm±・底部径93cm±・深さ66cm±である。Field Card の記載によれば、埋土は黒褐色土層、暗褐色土層が入り組み、最上層には焼土微粒が多量に混入している。

**F II-69 ビーカー形ピット** (図版135b、写真図版138d)

規模は開口部径96cm±・底部径61cm±・深さ129cm±である。埋土の構成については観察と実測を行なっておらず、明らかにすることができなかった。

**F II-70 ビーカー形ピット** (図版135c、写真図版138e)

規模は開口部径100cm±・頸部径67cm±・底部径61cm±・深さ124cm±である。壁は開口部より頸部まで僅かにふくらみをもって落ち、頸部から底部まではほぼ垂直である。埋土上半は

黒褐色土層が開口部から頸部までU字状に堆積し、これを汚れ火山灰層がとり囲む状態を示している。埋土下半はほぼ純粹の火山灰層、褐色土層・汚れ火山灰層の順に水平に堆積し、層厚はそれぞれ8cm±・10cm±・14cm±である。

#### F II-71 ビーカー形ピット

ビーカー形ピットとして登録されているが、規模・形態からこの分類に含まれず、除外した。

(金沢光孝)

### F III区 (ビーカー形ピット実数1基)

#### F III-51 ビーカー形ピット (図版135d、写真図版139a)

F III-7 住居の東壁に接して構築されているが、その共伴または新旧関係は不明である。規模は開口部径186cm±・底部径56cm±・深さ143cm±である。壁は中層部から底部まではほぼ垂直に落ちている。埋土上層部は主に暗褐色土層で、僅かに炭化物を含んでいる。中層部は汚れ火山灰層が占め、東壁際にはほぼ純粹の火山灰が径15cm±・層厚22cm±の範囲で堆積している。下層部の東壁際から最下層部にかけての黒褐色土層には炭化物が多量に混入している。

### F IV区 (フラスコ形ピット実数4基)

#### F IV-50 フラスコ形ピット

F IV-101 陥し穴状遺構に中央部を大きく切られている。規模は開口部径75cm±・底部径103cm±・深さ83cm±で、頸部径は不明である。調査上の手違いにより埋土は観察と実測を行なう以前に掘り上げ、土層構成を明らかにできなかった。

#### F IV-51 フラスコ形ピット

F IV-50 フラスコ形ピットはF IV-51 フラスコ形ピットと登録すべきものであったため、ここでは欠番として処理した。

#### F IV-52 フラスコ形ピット (図版135e、写真図版139b)

規模は開口部径126cm±・頸部径100cm±・底部径155cm±・深さ75cm±である。埋土は主に火山灰ブロックの混入する黒褐色土層で全体に軟かい。中層部～下層部の東壁、西壁際には汚れ火山灰とほぼ純粹の火山灰が入り組んで堆積している。

#### F VI-53 フラスコ形ピット

F IV-102 陥し穴状遺構の東南側に位置すると登録されているが、平面図、断面図が作成されておらず、詳細は不明である。

**F IV-54 フラスコ形ピット (図版135f)**

規模は開口部径104cm±・頸部径106cm±・底部径132cm±・深さ74cm±である。南壁には頸部のくびれが形成されていない。埋土は主に黒褐色・暗褐色土層であるが、堆積はきわめて不規則である。汚れ火山灰が堆積しているのは南壁際、開口部北壁際、底部北壁際である。中層部にほぼ純粹の火山灰層が径25cm±・層厚16cm±の範囲で堆積する。中層部の黒褐色土層から土器片が出土した。

(金沢光孝)

**G II区 (フラスコ形ピット実数17基・ビーカー形ピット実数3基)****G II-51 フラスコ形ピット (図版135h)**

G II-101 陥し穴状遺構に切られている。規模は開口部径98cm±・頸部径100cm±・底部径195cm±・深さ152cm±である。壁は開口部より頸部までほぼ垂直に落ちている。南東壁の頸部下位に崩壊のためと考えられるくぼみがある。埋土はG II-101 陥し穴状遺構に切られている部分がほぼ汚れ火山灰で埋められ、埋土下層部は暗褐色土層で安山岩類・凝灰岩類亜角～亜円礫の混入がみられる。下層部暗褐色土層から土器片が出土した。

**G II-52 フラスコ形ピット (図版135g)**

G II-1 住居址の南壁に接して作られているが伴関係または新旧関係は不明である。規模は開口部径70cm±・頸部径65cm±・底部径75cm±・深さ52cm±である。埋土は暗褐色土層のほぼ単層であるが、下半層は上半層に比してやや軟らかい。開口部直下に異地性の焼土層が径15cm±・層厚5cmの範囲に存在する。下半部中央に汚れ火山灰層が径38cm±・層厚10cm±でほぼ水平に堆積している。下層部より土器片が1片出土している。

**G II-53 フラスコ形ピット (図版136a、写真図版139cde)**

規模は開口部径143cm±・頸部径110cm±・底部径200cm±・深さ192cm±で、底部床面に上部径48cm±・下部径28cm±・深さ12cm±の副穴がある。埋土は全体に不規則な堆積状態である。上層部は焼土の微粒が混入する黒褐色～暗褐色土層が主体をなし、ほぼU字状の堆積を示している。中層部も主に暗褐色土層・黒褐色土層であるが南北両壁際には汚れ火山灰の堆積がある。下層部は中央部の盛り上がる状態の堆積で、暗褐色土層が占めている。副穴中に炭化物層(径23cm±・層厚1cm±)がある。中層部から深鉢型土器1個体が、水平に潰れた状態で出土した。

**G II-54 フラスコ形ピット (図版135i、写真図版139f)**

規模は開口部径120cm±・頸部径72cm±・底部径152cm±・深さ150cm±である。壁は頸部より垂直に落ちたのち傾斜して底部に至っている。埋土最上部はU字状に堆積する黒褐色土層

で、炭化物の混入が多い。開口部南壁際には汚れ火山灰層がある。頸部の埋土は炭化物・焼土微粒の混入する黒褐色土層が占めている。中層部から下層部にかけては暗褐色土層・褐色土層・汚れ火山灰層が入り組み、不規則な堆積状態である。

#### G II-55 フラスコ形ピット (図版136c、写真図版140ab)

G II-7 住居址の北西壁を切って作られている。規模は開口部径82cm±・底部径154cm±・深さ124cm±である。壁には頸部のくびれがない。埋土上層部は主に暗褐色土層で5cm±の炭化物が混在し、焼土の微粒も多い。開口部北壁際に焼土ブロックがみられる。中層部に炭化物細粒と焼土ブロックを多量に含む暗褐色土層がほぼ水平に堆積し、下層部には汚れ火山灰が中央が盛り上がる状態で推積している。

#### G II-56 フラスコ形ピット (図版136b)

G II-104 陥し穴状遺構によって西側過半部を切られている。規模は開口部径85cm±・頸部径70cm±・底部径167cm±・深さ186cm±である。東壁は頸部からほぼ垂直に落ちたのち、大きく外側に張り出し、底面上でさらに内側に湾曲する形状を示している。埋土上層部は北壁際から中央部にかけて汚れ火山灰層によって占められている。中層部は主に黒褐色土層であるが、これに汚れ火山灰層がほぼ水平に入り込む。最下層は汚れ火山灰が25cm±の層厚で堆積している。底面から土器片が1片出土した。

#### G II-57 フラスコ形ピット

フラスコ形ピットとして登録されているが、形態から不整形ピットとして処理し、ここでは除外した。

#### G II-58 フラスコ形ピット (図版137a、写真図版140c)

規模は開口部径112cm±・頸部径73cm±・底部径188cm±・深さ158cm±で、南西側で壁が大きく張り出している。埋土の土層断面図が行方不明で、土層構成を明らかにできなかった。

#### G II-59 フラスコ形ピット (図版136d、写真図版140e)

規模は開口部径110cm±・頸部径65cm±・底部径130cm±・深さ207cm±で、深底の形状である。底部に副穴(上部径25cm±・下部径15cm±・深さ7cm±)を伴う。埋土は全体に不規則な堆積状態であるが、上半はほぼ汚れ火山灰層または火山灰混入の黄褐色土層で、非常に堅くしまり、下半は主に黒褐色土層で、炭化物・焼土微粒の混入がみられ、全体にやわらかい。副穴の埋土は黒褐色土である。最上層に14cm±の安山岩礫が2個混在し、頸部汚れ火山灰層から土器片が1個出土した。下層部中央に炭化物層が2層、南壁際に1層いずれも黒褐色土層中にみられる。このフラスコ形ピットの南壁に貼り付くように層厚3cm±の黒褐色土層がみられるが、これはライニング(内張り)施設の可能性が考えられる。

#### G II-60 フラスコ形ピット (図版137c)

規模は開口部径 105 cm ± ・頸部径 103 cm ± ・底部径 121 cm ± ・深さ 50 cm ± である。埋土は黒褐色土層がほぼ全体を占めているが、土層の実測前に埋土を掘り上げたため、詳細を知ることができなかった。底面から 12 cm ± の安山岩・凝灰岩亜角亜円礫が多量に出土した。

**G II-61 フラスコ形ピット** (図版 137 b、写真図版 140 d)

規模は開口部径 121 cm ± ・頸部径 90 cm ± ・底部径 155 cm ± ・深さ 172 cm ± である。東壁は頸部でわずかにくびれたのち、ほぼ垂直に底部に至っている。西壁は頸部からゆるやかに傾斜し底部上 30 cm ± からは垂直に底部に落ちている。埋土上層部は主に暗褐色～褐色土層で、ほぼ U 字状の堆積を示し、焼土・炭化物の微粒が多量に流入している。中層部西壁寄りに径 25 cm ± ・層厚 8 cm ± の範囲にはほぼ純粹の火山灰が堆積し東壁際には壁の崩壊土と思われる汚れ火山灰層がある。埋土下層部は主に汚れ火山灰層と、火山灰の混入する暗褐色土層で、中央部が盛り上がる堆積状態を示している。

**G II-62 フラスコ形ピット** (図版 137 d、写真図版 141 a b)

G II-13 住居址に切られている。規模は開口部径 120 cm ± ・頸部径 100 cm ± ・底部径 128 cm ± ・深さ 112 cm ± である。頸部はわずかにくびれが認められるのみで、はっきりとした締りは形成されていない。埋土上層部は暗褐色土層で炭化物微粒が多量に混入し、U 字状に堆積している。この層からは土器片が数片出土している。中層部から下層部へかけて主に黒褐色土層によって占められている。中層部中央に炭化物層がみられ、微粒も多量に混入している。下層部から土器片が多数出土したが一括できるものではなかった。

**G II-63 フラスコ形ピット** (図版 137 f、写真図版 141 c)

規模は開口部径 110 cm ± ・頸部径 85 cm ± ・底部径 205 cm ± ・深さ 194 cm ± である。東壁は頸部からほぼ垂直に落ち、中層部でふくらみをもって底部に至っている。埋土は主に黒褐色・暗褐色土層で、多量の炭化物・焼土の微粒が混在している。堆積は不規則であるが、ほぼ東壁から西壁に向かって傾斜する状態を呈している。頸部にほぼ純粹の火山灰が堆積し、中層部西壁際には汚れ火山灰の堆積がある。

**G II-64 フラスコ形ピット** (図版 138 a、写真図版 141 d)

G II-15 住居址と重複するが新旧関係、共伴関係は不明である。規模は開口部径 160 cm ± ・頸部径 108 cm ± ・底部径 124 cm ± ・深さ 132 cm ± である。西壁は頸部よりほぼ垂直に下り、東壁の頸部下位には崩壊の痕跡がある。埋土は全体に不規則な堆積であるが、上半層は主に暗褐色土層で、炭化物の微粒が多量に混入している。開口部西壁側から中層部にかけては主に褐色土層で、焼土、炭化物の微粒を僅かに含んでいる。下層部は汚れ火山灰層と褐色土層が主体となり、異地性の焼土層が径 65 cm ± ・層厚 12 cm ± で中央部から東壁にかけて拡がっている。底面に 70 cm ± の凝灰岩類亜角礫がある。

**G II-65 フラスコ形ピット** (図版137e、写真図版141ef)

G II-15住居址を切ってつくられている。規模は開口部径152cm±・頸部径94cm±・底部径128cm±・深さ120cm±である。東壁は頸部で2つのしびれを示している。底面中央に副穴(径16cm±・深さ8cm±)を伴っている。埋土上層部へ中層部はほぼU字状の堆積を示している。最上部は暗褐色土層で、土器片が4片出している。頸部に弓状に堆積する汚れ火山灰層がある。中層部を占めるのは黒褐色土層で炭化物微粒の混入がみられる。下層部東壁際から中央部にかけて大きく占めているのは暗褐色土層である。下層部西壁際と最下層西壁側には汚れ火山灰の堆積がある。副穴の埋土は暗褐色土である。

**G II-66 フラスコ形ピット** (図版138b、写真図版142a)

規模は開口部径100cm±・底部径187cm±・深さ135cm±である。頸部のくびれをもたず壁は僅かにふくらみをもって落ち、底部に至っている。調査上の手違いにより、埋土の土層断面の観察を行なう前に掘り上げてしまったため、土層の構成は明らかにできなかった。

**G II-67 フラスコ形ピット** (図 138c、写真図版142b)

規模は開口部径75cm±・頸部径40cm±・底部径100cm±・深さ175cm±である。南壁は開口部よりほぼ垂直に落ち、頸部のくびれがないが、東壁は大きくくびれるため、開口部・底部に比して頸部は非常に狭い。埋土最上層は暗褐色土層が占め、その下位に汚れ火山灰層が北壁にかけて傾斜して堆積している。頸部から中層部にかけては暗褐色土層が占め、多量の炭化物の混入がみられる。中層部は暗褐色土層・黄褐色土層がほぼ水平に堆積し、下層部は黒褐色土層・暗褐色土層が波状に折り重なっている。このピットの南北両壁に貼り付くように層厚3cm±～10cm±の黒褐色土層がみられるが、これはライニング(内張り)施設としての可能性が考えられる。中層部より深鉢形土器の底部と土器片が数片出土した。

**G II-68 ビーカー形ピット** (図版138d、写真図版142c)

規模は開口部径160cm±・頸部径110cm±・底部径90cm±・深さ106cm±である。西壁は頸部よりほぼ垂直に下り、東壁はわずかに内側に傾斜して底部に至っている。埋土の堆積状態は全体的にはほぼU字状を呈している。埋土上半は堅いクロボク層が深さ63cm±までを占め、これを包むように黒褐色土層がある。下半はわずかに炭化物微粒の混入する褐色土層と明褐色土層で占められている。これらの層は火山灰が優占し、上半に比して非常に軟らかい。埋土上半は火山灰ブロックが混入する堅くしまった黒褐色土層で占められている。下半は暗褐色土層と褐色土層が入り組み、不規則な堆積である。これらの層にはいずれも火山灰の混入が著しい。最下層は炭化物微粒が多く混入する褐色土層である。

**G II-69 フラスコ形ピット** (図版138e、写真図版142d)

規模は開口部径110cm±・頸部径93cm±・底部径90cm±・深さ78cm±である。西壁はほぼ垂

直に落ちたのち、半円形に張り出している。埋土のおおよそを占めるのは黒褐色土層であるが中央部は暗褐色土層が占めている。頸部の東壁際と西壁寄りに汚れ火山灰層がある。暗褐色土層中に8cm±の凝灰岩垂角礫が混在している。底部から土器片が数片出土した。

#### G II-70 ビーカー形ピット (図版138f、写真図版142ef)

規模は開口部径128cm±・底部径91cm±・深さ136cm±である。埋土上層部は火山灰が僅かに混入する黒褐色土層が占め、中層部の中央は炭化物が多量に混入する汚れ火山灰層が占めている。汚れ火山灰層は北壁際から黒褐色土層の下位にかけてで、U字状の堆積をしている。下層部はほぼ汚れ火山灰層が占めており、最下層はほぼ純粹の火山灰層である。

#### G II-71 ビーカー形ピット (図版138g、写真図版143a)

G II-18住居址を切って作られている。規模は開口部径125cm±・底部径122cm±・深さ78cm±である。このピットの底部はU字状を呈している。(金沢光孝)

### G III区 (フラスコ形ピット実数1基)

#### G III-51 フラスコ形ピット (図版139a、写真図版143b)

規模は開口部径168cm±・頸部径100cm±・底部径165cm±・深さ136cm±である。西壁は頸部下位から大きく張り出している。埋土は最上部に炭化物・焼土微粒の混入する堅い黒褐色土層がU字状に堆積している。この層からはほぼ完形の小形土器が出土した。西壁の頸部から底部にかけてと東壁際から中層部にかけては汚れ火山灰層が占めている。中層部のほぼ中央より赤色顔料が50cm±の範囲で検出された。底面からは深鉢型土器1個体分の土器片が出土した。

(金沢光孝)

### H II区 (フラスコ形ピット実数7基・ビーカー形ピット実数6基)

#### H II-51 フラスコ形ピット (図版139b、144e)

規模は開口部径106cm±・頸部径74cm±・底部径246cm±・深さ180cm±である。南壁は頸部からほぼ垂直に落ちたのち、外側に大きく張り出して底部に至っている。埋土上層部は黒褐色土層・汚れ火山灰層・暗褐色土層がU字状の堆積を示し、中層部はほぼ褐色土層によって占められている。下層部の中央から南壁際にかけて純粹の火山灰が中央が盛り上がる状態の堆積をしている。

#### H II-52 フラスコ形ピット

フラスコ形ピットとして登録されているが、規模・形態からこの分類に含まれず除外した。



#### H II-53 フラスコ形ピット (図版139c、写真図版143cd)

H II-7 住居址の床面下につくられている。規模は開口部径74cm±・頸部径71cm±・底部径194cm±・深さ120cm±である。壁は頸部でくびれをもたずに垂直に落ちたのち、大きく張り出して底部に至っている。埋土上層部に主に黒褐色・暗褐色土層で、南壁際と頸部に安山岩礫が混入している。中層部は炭化物の微粒が多量に混入する暗褐色土層が占めている。下層部は黒褐色土層が入り組み、ルーズな堆積である。最下層は暗褐色がほぼ水平に堆積し、焼土、炭化物の微粒の混入がみられる。底面から深鉢型土器1個体分の一括土器片が出土した。

#### H II-54 フラスコ形ピット (図版139d、写真図版143f)

H II-8 住居址の床面下に作られている。規模は開口部径67cm±・底部径110cm±・深さ135cm±である。壁は頸部のくびれをもたず、開口部より緩かに傾斜し、下層部で僅かにふくらみをもって底部に至っている。埋土最上部はH II-8 住居址の貼り床と思われる汚れ火山灰層である。上層部～中層部の埋土の主体をなすのは暗褐色土層で、南壁際、北壁際には汚れ火山灰層、褐色土層が小範囲に堆積する。下層部は汚れ火山灰層、褐色土層、黒褐色土層が入り組んでいるが、ほぼ弓状に中央部が盛り上がる堆積である。埋土全体に炭化物、焼土微粒の混入がみられる。

#### H II-55 フラスコ形ピット (図版139e、写真図版144ab)

H II-8 住居址の南西壁に切られている。規模は開口部径134cm±・頸部径38cm±・底部径164cm±である。北壁は開口部よりほぼ垂直に下り、頸部のくびれをもたない。埋土上層部は主に黒褐色土層でしまっていて堅い。中層部～下層部は暗褐色土層が主体となるが、汚れ火山灰層も数層に亘ってみられる。最下層の中央から南壁にかけて火山灰がブロック状に混入する暗褐色土層がある。

#### H II-56 フラスコ形ピット (図版140a、写真図版144cd)

H II-14 住居址と切り合っている。規模は開口部径105cm±・頸部径94cm±・底部径155cm±・深さ124cm±である。壁は開口部よりほぼ垂直に下り、頸部のくびれをもたない。北壁は底部上でふくらみをもっている。このフラスコ形ピットの開口部には「閉塞」のためと考えられる火山灰が存在する。開口部のほぼ中央に径65cm±・中央部での層厚16cm±の規模のほぼ純粹の火山灰がレンズ状に堆積している。この火山灰層の下位に2mm～10mmの炭化物が層状をなしており、この火山灰層と炭化物層により「閉塞」の機能をはたしていたものと考えられる。埋土上層部は黒褐色・暗褐色土層が占め、炭化物の微粒が多量混入している。中層部は壁の崩壊土と思われる火山灰層が占めている。下層部は炭化物、焼土の微粒が僅かに混入する黒褐色・暗褐色土層である。

#### H II-57 フラスコ形ピット (図版140b、写真図版144f)

H II-6 住居址と切り合っていると考えられるが、詳細は不明である。規模は開口部径80cm±・頸部径75cm±・底部径136cm±・深さ140cm±である。壁は開口部よりほぼ垂直に落ち、頸部のくびれをもたない。埋土上層部は炭化物細粒が混入する暗褐色土層が占めている。中層部は暗褐色土層・黄褐色土層・汚れ火山灰層が入り組み、不規則な堆積を示している。中層下部は黒褐色土層で焼土の微粒が混入し、南壁際から中央部にかけては異地性の焼土層が最厚部で11cm±で堆積する。最下層はレンズ状に堆積する汚れ火山灰である。

#### H II-58 フラスコ形ピット (図版140c、写真図版146)

規模が開口部径173cm±・頸部径117cm±・底部径210cm±・深さ192cm±の大形のフラスコ形ピットである。埋土上層部は火山灰ブロックの混入する暗褐色・褐色土層が不規則に堆積し、ほぼ純粹の火山灰層が開口部から頸部にかけての南壁際に存在する。中層部北壁際から中央部にかけては炭化物微粒が多く混入する暗褐色土層が占め、下層部は南壁から北壁方向に傾斜する堆積状態で、汚れ火山灰層・暗褐色土層が主体となっている。最下層はレンズ状に堆積する非常に堅い汚れ火山灰層である。

#### H II-59 ビーカー形ピット (図版140d、写真図版145ab)

H II-10住居址と重複しているが、新旧関係、共伴関係は不明である。規模は開口部径185cm±・底部径108cm±・深さ125cm±で、開口部が大きく開く形状を呈している。埋土最上層は炭化物の微粒を含む暗褐色土層であるが、上層部から中層部を占めているのはほぼ純粹の火山灰層で、U字状の堆積を示し、堅くしまっている。下層部は黒褐色土層・暗褐色土層、が入り組み、乱雑な堆積状態である。南壁際、北壁際には小範囲にほぼ純粹の火山灰の堆積がみられる。

#### H II-60 ビーカー形ピット (図版141a、写真図版145cd)

西壁をH II-11住居址によって切られている。規模は開口部径が145cm±・底部径124cm±・深さ82cm±で、壁は開口部より底部まではほぼ垂直に落ちていたものと考えられる。埋土の堆積状態は全体に非常に乱雑である。上層部を汚れ火山灰層が占めるが、中層部・下層部は、黒褐色土層・暗褐色土層・茶褐色土層が入り組んでいる。中層部中央の黒褐色土層中に炭化物層がみられる。東壁際に汚れ火山灰が僅かに堆積する。

#### H II-61 ビーカー形ピット (図版140e、写真図版145ef)

規模は開口部径170cm±・底部径67cm±・深さ115cm±である。底部に比して開口部が大きく開き、朝顔状とも言える形状を呈している。埋土の堆積は全体に不規則であるが、ほぼU字状の堆積を示している。暗褐色・黒褐色土層が主体をなし、炭化物・焼土微粒の混入が顕著である。中層部褐色土層中に10cm±の拡がりて異地性の焼土層がみられる。下層部南壁から北壁際にかけて、ほぼ純粹の火山灰が堆積する。

#### H II-62 ビーカー形ピット (図版141b、写真図版146ab)

H II-13住居址の北東壁を切って構築されている。規模は開口部径200cm±・底部径78cm±・深さ146cm±で開口部が大きく開く朝顔状とでも言える形状を呈している。埋土最上部はクロボク層であるが、上層部から中層部にかけて大きく占めているのは粘性の強い黒褐色土層である。東壁際は暗褐色土層で、焼土微粒が混入する。下層部の中央部は暗褐色土層が占め、東壁・西壁際には汚れ火山灰の堆積がある。最上層から土器片が出土した。

#### H II-63 フラスコ形ピット (図版141c、写真図版146cd)

規模は開口部径90cm±・底部径143cm±・深さ125cm±である。壁は頸部のくびれをもたず開口部より底部にゆるやかに傾斜して落ちる。底面には径85cm±・深さ11cm±のくぼみが形成されている。埋土上層部から中層部を占めるのは軟かい汚れ火山灰層で、炭化物、焼土の微粒が混入する。西壁に沿って黒褐色土層があり、東壁際には小規模に暗褐色土層がある。下層部は5mm±の炭化物細粒が混在する黒褐色土層が占め、底面およびくぼみは汚れ火山灰層によって覆われている。

#### H II-64 ビーカー形ピット (図版141e)

H II-12住居址を切って作られている。規模は開口部径95cm±・底部径74cm±・深さ44cm±で、開口部の崩壊と考えられる頸部状のくびれが形成されている。埋土は Field Card の記載によれば、上層部はほぼ黒褐色土層が占め、中層部～下層部は主に汚れ火山灰層である。

#### H II-65 ビーカー形ピット

規模は開口部径93cm±・底部径53cm±・深さ85cm±である。壁は開口部から僅かにふくらみをもって底部に至っている。埋土最上部の東壁際から中央部にかけて堅くしまった汚れ火山灰層がある。この火山灰層の下位は炭化物微粒を僅かに含む暗褐色土層である。開口部西壁側から底部までを大きく占めているのは火山灰の優占する褐色土層である。中層部西壁際に汚れ火山灰層と27cm±の範囲に拡がる炭化層である。  
(金沢光孝)

### I II 区 (フラスコ形ピット実数2基)

#### I II-51 フラスコ形ピット (図版141f)

H II-12住居址によって切られている。規模は開口部径94cm±・頸部径72cm±・底部径120cm±・深さ95cm±である。南壁には頸部のほか下半部で壁の崩壊によると考えられるくびれが形成されている。埋土上層部は暗褐色土層と火山灰優占の褐色土層が入り組み、中層部は暗褐色土層と数層に亘ってみられる汚れ火山灰によって構成され、底部は暗褐色土層がほぼ水平に堆積して占めている。

## I II-52 フラスコ形ピット (図版141g、写真図版146f)

規模は開口部径77cm±・頸部径62cm±・底部径139cm±・深さ108cm±である。頸部にははっきりとしたくびれが形成され、底面のほぼ中央に副穴(径12cm±・深さ22cm±)を伴っている。埋土上層部は黒褐色土層・暗褐色土層・茶褐色土層で、黒褐色土層には凝灰岩礫の混入がみられる。中層部～下層部は黒褐色土層がおおよそを占め、これに汚れ火山灰が数層に亘ってほぼ水平に入り込んでいる。副穴の埋土は黒褐色土層である。(金沢光孝)

## (4) 陥し穴状遺構

## B III区 (実数3基)

## B III-101 陥し穴状遺構 (図版142a)

302(270)cm±×55(20)cm±の規模をもち、深さは116cm±を計る。遺跡の北東部に位置し、西に下る緩斜面に在る。長軸は斜面に対し斜めの方向にあり、N-10°-Wの方向を示す。遺構の大部分は深掘りによって壊されたため、断面図の作成は省略したが、埋土のほとんどは汚れ火山灰より構成されていた。

## B III-102 陥し穴状遺構 (図版142bd、写真図版147a)

327(286)cm±×51(11)cm±の規模をもち、深さ135cm±を計る。北東に延びる尾根状部分の頂部に位置し、標高197.5m±のところにある。長軸は西側の斜面に対しほぼ直交し、N-60°-Wの方向を示す。埋土の上部は少量の焼土及び炭化物を含むクロボクがみられ、下部は汚れ火山灰を主とする層より構成されている。横断面は上部が最も広く徐々に狭まり、中間部より下はほぼ垂直に下る。上部から中位にかけての幅の広い部分は、廃棄後の崩壊作用により広がったものと思われる。底面はほぼ平坦である。

## B III-103 陥し穴状遺構 (図版142ce、写真図版147b)

316(300)cm±×56(22)cm±の規模をもち、深さ100cm±を計る。北東に延びる尾根状部分の頂部に位置し、標高197.5m±のところにある。長軸は西側の斜面に対しほぼ直交し、N-60°-Wの方向を示す。埋土は上部に火山灰と僅かに炭化物と焼土の混入のみみられる暗褐色土がみられ、中位以下は汚れ火山灰が主体を占める。横断面は上部が最も広く、徐々に狭まり、ほとんどのところより急に細くなりほぼ垂直に下る。西側上部の形状はややイレギュラーであるが上部の広い部分は廃棄後の崩壊によるもので、人為的なものではないと思われる。長軸の両端は上部から内側に向かって下り、中位よりほぼ垂直に下る。底面はほぼ平坦である。

(高橋信雄)

## B IV区（実数12基）

### B IV-101 陥し穴状遺構（図版142f、143a）

323(335)cm±×76(10)cm±の規模をもち、深さ116cm±を計る。北東に延びる尾根状部分の頂部に位置し、標高197.0m±のところにある。長軸はN-81°-Wの方向を示す。埋土の上にはクロボクと暗褐色土があり、中位～下位にかけてはルーズな汚れ火山灰が主体を占め最下部に薄く暗褐色土がみられる。横断面は上部が広く中位より急に幅が狭くなり、その下はほぼ垂直に下る形を呈する。上部は廃棄後崩壊作用により崩れた部分で、西半分の形状はイレギュラーな線となっている。長軸の西端は、上面から内側に向かって急傾斜で下っているが、東端の下部は奥に挟り込まれている。底面幅にも若干の違いがみられ、中央部から西端にかけて底面幅がやや広がり、レベルも20cm±低くなっている。

### B IV-102 陥し穴状遺構（図版142g、143b、写真図版147c）

357(330)cm±×65(22)cmの規模をもち、深さ120cm±を計る。北東に延びる尾根状部分の頂部に位置し、標高197.2m±のところにある。長軸はN-68°-Wの方向を示す。埋土は火山灰が主の褐色土層より構成されているが、上部の一部に細粒の焼土が僅かに認められるし、中位はかなりルーズであり、最下部に少量の炭化物粒がみられる。横断面は上部が広く、中位より幅が狭くなりほぼ垂直に下る形を呈する。上部は廃棄後の崩壊によって広がったものと思われる。底面の中はやや不規則であり、レベルは東側に向かって50cm±低くなっている。

### B IV-103 陥し穴状遺構（図版142h、143c）

350cm±×82(18)cm±の規模をもち、深さ125cm±を計る。北東に延びる尾根状部分の頂部に位置し、標高197.0m±のところにある。長軸はN-73°-Wの方向を示す。当遺構は、東端でB IV-1住居址とB IV-51フラスコ形ピットと重複しているが、新旧関係は不明である。埋土は上位に火山灰粒とクロボクの混在した暗褐色土、中位は粒状炭化物を僅かに含む暗褐色土、下位のルーズな汚れ火山灰より構成されている。横断面は上部が広く、中位より幅が狭くなりほぼ垂直に下る形を呈する。上部は廃棄後の崩壊によって広がったものと思われる。底面の幅がやや不規則であり、レベルは東端に向かって50cm±低くなる。

### B IV-104 陥し穴状遺構（図版142i・143e、写真図版147e）

425(445)cm±×59(20)cm±の規模をもち、深さ103cm±を計る。北東に延びる尾根状部分の頂部に位置し、標高197.1m±のところにある。長軸はN-44°-Wの方向を示す。当遺構の西半分がB IV-1住居址と重複しており、当遺構が住居址を切って作られている。埋土の上部に僅かに粒状の炭化物を含む褐色土をもち、中位は黒色土のにじみがみられるかなり汚れた火山灰よりなり、最下部はほぼ純粹の火山灰より構成されている。横断面は上面から底面に向って

除々に狭まり底部は平坦である。長軸の両端とも奥に挟りこまれ、袋状を呈する。底面のレベルは中央部が5cm±低くなっている。

**B IV - 105 陥し穴状遺構 (図版142j・143d、写真図版147f)**

250(265)cm±×42(13)cm±の規模をもち、深さ87cm±を計る。北東に延びる尾根状部分の頂部に位置し、標高197.2m±のところにある。長軸はN-72°-Eの方向を示す。埋土は僅かに汚れのみられる火山灰で構成されている。横断面は細長い「U」字状を呈する。長軸の東端下部が挟りこまれており、西端はほぼ垂直に下る。レベルは西に向って12cm±ほど低くなる。

**B IV - 106 陥し穴状遺構 (図版142n)**

290(240)cm±×50(10)cm±の規模をもつ。北東に延びる尾根状部分の頂部に位置し、標高198.0m±のところにある。長軸はN-70°-Wの方向を示す。当遺構の南側中央が、B IV - 107 陥し穴状遺構と重複しているが、新旧関係は不明である。埋土は、上部の焼土と炭化物混じりの褐色土・中位～下位の汚れ火山灰層より構成されている。西半分が中央部で段がついて落ち込み20cm±低くなっている。

**B IV - 107 陥し穴状遺構 (図版142m・143f、写真図版148a)**

160cm±×40(15)cm±の規模をもち、深さ97cm±を計る。北東に延びる尾根状部分の頂部に位置し、標高198.0m±のところにある。長軸はN-30°-Wの方向を示す。当遺構は北端でB IV - 106 陥し穴状遺構と重複しているが、新旧関係は不明である。埋土は断面図作成前に掘られたため不明である。

**B IV - 108 陥し穴状遺構 (図版142k・143g、写真図版148b)**

420(412)cm±×90(28)cm±の規模をもち、深さ153cm±を計る。遺跡の北東部に位置し、東に下る斜面上部の標高197.0m±のところにある。長軸は斜面に対しほぼ直交し、N-76°-Wの方向を示す。埋土は、上部の中央に暗褐色土・壁際に褐色土がみられ中位～下位にかけてはほぼ純粋の火山灰土より構成されていた。横断面は上面が最も広く、北壁は中位よりほぼ垂直に下り、南壁では3/4下の部分より垂直に下る。上部は廃棄後の崩壊によって広がったものであり、南壁の方が崩れが多かったようである。底面は西端下部が奥に挟りこまれており、レベルは西側が20cm±低くなっている。

**B IV - 109 陥し穴状遺構 (図版142p・143h、写真図版148c)**

437(467)cm±×70(15)cm±の規模をもち、深さ143cm±を計る。遺跡の北東部に位置し、東に下る緩斜面の標高197.5m±のところにある。長軸は斜面に対しほぼ直交し、N-76°-Wの方向を示す。北壁の西側でB IV - 110 陥し穴状遺構と重複しているが、新旧関係は不明である。埋土は、上部に焼土と炭化物を僅かに含む暗褐色土、中位～下位にかけて汚れ火山灰より構成されているが、底部近くにクロボクが小ブロックで点在している。横断面は上部が広く、

中位より狭くなりほぼ垂直に下り、底面は平坦な形を呈する。長軸の両端下部は奥に抉りこまれており、底面は東側に向って15cm±ほど低くなっている。

#### B IV-110 陥し穴状遺構 (図版142l・143i)

315(310)cm±×55(18)cmの規模をもち、深さ143cmを計る。遺跡の北東部に位置し、東に下る緩斜面の上方で、標高197.0m±のところにある。長軸は斜面に対しほぼ直交し、N-80°-Wの方向を示す。南壁の東側半分がB IV-109 陥し穴状遺構と重複しているが、新旧関係は不明である。埋土は、上位に炭化物を僅かに含む暗褐色土、中位～下位は汚れ火山灰より構成されている。下位に微量の炭化物を含むクロボクの小ブロックがみられる。長軸の両端は上面から内側に向って落ちこみ、中位より奥に抉りこまれている。底面は東側に向って5cm±ほど低くなっている。

#### B IV-111 陥し穴状遺構 (図版142o・143j)

244(195)cm±×90(62)cm±の規模をもち、深さ37cm±を計る。遺跡の北東部に位置し、東に下る斜面の上端で標高197.0m±のところにある。長軸は斜面に対しほぼ直交し、N-73°-Wの方向を示す。埋土は、上部に黒褐色土、中部に褐色土、下部に薄く暗褐色土がみられる。横断面は、北側がほぼ垂直に下り、南側は中位に段をもつ。上部の広い部分は崩壊により広がったものと思われる。当遺構の底面はやや広く、長軸と短軸との比率はかなり小さい。

#### B IV-112 陥し穴状遺構 (図版142q)

131(140)cm±×64(14)cm±の規模をもち、深さ137cm±の比較的小さい陥し穴状遺構である。遺跡の北東部に位置し、東に下る緩斜面の上方で標高196.7m±のところにある。長軸は斜面に対し斜めの方向にあり、N-40°-Wの方向を示す。長軸が非常に短く短軸との比率が小さい。長軸の北西端下部はかなり抉りこまれており、底面のレベルは東側の方が10cm±低くなっている。  
(高橋 信雄)

### C III区 (実数27基)

#### C III-101 陥し穴状遺構 (図版144a・145j、写真図版148d)

350(351)cm±×64(10)cm±の規模をもち、深さ125cm±を計る。遺跡の北東部に位置し、標高198.5m±のところにある。長軸はN-65°-Wの方向を示す。埋土は、上部中央に僅かに炭化物を含む暗褐色土がみられ、その他は火山灰を主体とする層より構成され、中位はかなりルーズな堆積をしている。横断面は上面が最も広く徐々に狭まり、中位より細くなりほぼ垂直に下る。上部の広い部分は崩壊により広がったものと思われる。底面の西半分がやや西にカーブしており、西端下部が奥に抉りこまれている。中央部のレベルが10cm±低くなっている。

**C III-102 陥し穴状遺構** (図版144b・145k、写真図版148e)

360(325)cm±×39(12)cm±の規模をもち、深さ107cm±を計る。遺跡の北東部に位置し、標高198.5m±のところにある。長軸はN-37°-Wの方向を示す。埋土は、上面の中央にクロボクをもちその下に暗褐色土がみられ、中～下位にかけては汚れ火山灰で構成されている。横断面は上部から底部までほぼ垂直に下り、崩壊がほとんどみられない。当遺構はC III-1住居址の中に入った形で検出されたが、住居址を切り込んで作られていた。底面のレベルは西側が5cm±低く、中央部が僅かに高くなっている。

**C III-103 陥し穴状遺構** (図版144c・145m、写真図版148f)

287(277)cm±×60(12)cm±の規模をもち、深さ130cm±を計る。遺跡の北東部の西辺に位置し、標高199.1m±のところにある。長軸はN-89°-Wの方向を示す。埋土は、上層に黒褐色土、中層は厚く汚れ火山灰が堆積し、最下部に褐色土がみられる。横断面は上部が広く、中央部より細くなりほぼ垂直に下る。上部は崩壊により広がったものと思われる。長軸の東端下部が奥に挟られており、東側に向って20cm±低くなっている。

**C III-104 陥し穴状遺構** (図版144e・145o)

428(322)cm±×100(25)cm±の規模をもち、深さ157cm±を計る。遺跡の北東部西辺に位置し、標高199.1m±のところにある。長軸はN-79°-Wの方向を示す。当遺構の西半分はC III-2住居址と重複しており、当遺構が住居址を切りこんで作っている。埋土は、微量の炭化物を含むクロボクと暗褐色土が上部にあり、中部はルーズな汚れ火山灰層、最下部は炭化物を僅かに含む薄い暗褐色土がみられる。横断面は上部から中間部にかけて丸味をもってすぼまり、中位より下はほぼ垂直に下る。上半分の広い部分は廃棄後の崩壊により広がったものと思われる。東側の底面がやや低くなっており、幅も僅かに広がっている。

**C III-105 陥し穴状遺構** (図版144d)

332(377)cm±×55(28)cm±の規模をもち、深さ110cm±を計る。遺跡の北東部西辺に位置し、標高195.0m±のところにある。長軸はN-80°-Wの方向を示す。当遺構は北壁でC III-2住居址と接している。精査中の観察では住居址が当遺構を切っているように見える部分もあったが正確に新旧関係を判定することが出来なかった。埋土は断面図不備のため判らない長軸の両端とも下部が奥に挟りこまれている。

**C III-106 陥し穴状遺構** (図版144f・145l、写真図版149a)

300cm+α×65(24)cm±の規模をもち、深さ143cm±を計る。遺跡の北東部西辺に位置し、標高199.7m±のところにある。長軸はN-70°-Wの方向を示す。当遺構は西端でC III-53プラスチック形ピットと重複しているが、新旧関係は不明である。埋土は、上部中央に暗褐色土と褐色土、土壁際に黒褐色がみられ、中位は僅かにクロボクが小ブロック状に混入している汚れ火山灰



があり、下部は最下部の火山灰粒の混入しているクロボクを入れて、下半に同様の層が薄く3層みられ、その間は汚れ火山灰が占める。横断面は上部が広く、中間部より下は細くなる。長軸の東端下部が奥に挟りこまれており、レベルは東に向って10cm±低くなっている。

**C III-107 陥し穴状遺構** (図版144g・145n、写真図版149b)

444(415)cm±×60(12)cm±の規模をもち、深さ142cm±を計る。遺跡の北東部に西辺に位置し、標高199.6m±のところにある。長軸はN-60°-Wの方向を示す。埋土は、上部中央に火山灰が主の黄褐色土と壁際から中位にかけて僅かに炭化物と焼土を含む暗褐色土、中～下位はルーズな汚れ火山灰、最下部は多くの炭化物を含む黒褐色より構成されている。横断面は上部が広く、底部に向って不規則な形で狭まる。上半分は崩壊によって広がったものと思われる。底面はほぼ平坦である。

**C III-108 陥し穴状遺構** (図版144h・146a、写真図版149c)

120(92)cm±×50(18)cm±の規模をもち、深さ110cm±を計る。遺跡の北東部に位置し、標高199.5m±のところにある。長軸はN-35°-Wの方向を示す。当遺構はC III-9住居址の床面下で確認され、住居址よりも古い遺構である。埋土は上半に僅かに炭化物を含む汚れ火山灰がみられ、下部は柔かい暗褐色土よりなる。

**C III-109 陥し穴状遺構** (図版144j・146b、写真図版149d)

330(320)cm±×46(13)cm±の規模をもち、深さ90cm±を計る。遺跡の北東部に位置し、標高199.0m±のところにある。長軸はN-45°-Wの方向を示す。当遺構はC III-3住居址内にあるが、住居址を切り込んで作られている。埋土は上～下部まで暗褐色土より構成されており中に火山灰粒が混じり、所々に微量の炭化物を含む。底面は東に向い30cm±低くなっている。

**C III-110 陥し穴状遺構** (図版144j・146c)

365(340)cm±×50(10)cm±の規模をもち、深さ100cm±を計る。遺跡の北東部に位置し、標高199.0m±のところにある。長軸はN-34°-Wの方向を示す。当遺構は北西端でC III-3住居址と南西壁中央部でC III-57フラスコ形ピットと重複している。当遺構はいずれの遺構をも切り込んで作られていた。埋土は、上部中央にクロボク、その下に暗褐色土がレンズ状に入り、その下は下部までクロボクが小ブロックで混じるルーズな火山灰で占められている。横断面は上面が最も広く、そこから摺鉢状に下り、中間部より細くなり更にそこからほぼ垂直に下る形を呈する。床面はほぼ平坦である。

**C III-111 陥し穴状遺構** (図版144k・146d、写真図版149e)

341(340)cm±×70(35)cmの規模をもち、深さ114cm±を計る。遺跡の北東部に位置し、標高199.8m±のところにある。長軸はN-60°-Wの方向を示す。当遺構の上にB III-201焼土遺構が載っている。

## C III-112 陥し穴状遺構 (図版144l・146e)

280(270)cm±×55(15)cm±の規模をもち、深さ80cm±を計る。遺跡の北東部に位置し、標高199.7m±のところにある。長軸はN-19°-Wの方向を示す。南東方向半分がC III-9 住居址と重複しており、当陥し穴状遺構が住居址を切りこんで作っている。埋土は、上部に黒褐色土と暗褐色土をもち、中位に火山灰主体の褐色土、下位に火山灰とクロボクの混在した層をもつ。横断面は上部のやや広い「U」字状を呈する。底面のレベルは北西部に向い5cm±低くなっている。

## C III-113 陥し穴状遺構 (図版144m、写真図版149f)

270cm±×30(16)cm±の規模をもち、深さ100cm±を計る。遺跡の北東部に位置し、標高199.7m±のところにある。長軸はN-54°-Wの方向を示す。中央部で僅かに屈曲している。床面のレベルは中央部が10cm±低くなっている。埋土については断面図不備のため省略する。

## C III-114 陥し穴状遺構 (図版144n・146f、写真図版150a)

350(332)cm±×40(15)cm±の規模をもち、深さ86cm±を計る。遺跡の北東部に位置し、標高199.0m±のところにある。長軸はN-59°-Wの方向を示す。埋土は硬い暗褐色土を上部にもち、中層に僅かに炭化物を含むクロボクが小ブロックで混入している暗褐色土、下層は火山灰で構成されている。横断面は上幅のやや広い「U」字状を呈する。床面は東に向い17cm±低くなっている。

## C III-115 陥し穴状遺構 (図版144o・146g、写真図版150b)

325(294)cm±×55(6)cm±の規模をもち、深さ111cm±を計る。遺跡の北東部に位置し、標高200.2m±のところにある。長軸はN-35°-Wの方向を示す。当遺構は南端でC III-10住居址及びC III-116陥し穴状遺構と重複している。これらとの新旧関係は、当陥し穴状遺構が最も新しいことが確認された。埋土は最上部中央にレンズ状にクロボクがみられ、その下に暗褐色土、下半部は火山灰が主体の層が堆積している。横断面は上面が最も広く摺鉢状に下り中位から細くなりほぼ垂直に下る形を呈する。床面はかなり狭く、西で僅かに屈曲する。レベルは東に向い4cm±低くなっている。

## C III-116 陥し穴状遺構 (図版144p・146h、写真図版150c)

290cm±×20(9)cm±の規模をもち、深さ160cm±を計る。遺跡の北東部に位置し、標高200.2m±のところにある。長軸はN-39°-Wの方向を示す。当遺構はC III-10住居址内にあり、西端でC III-115陥し穴状遺構と接している。当遺構は住居址の床面下で検出され、北端もC III-115陥し穴状遺構で切られており、いずれの遺構よりも古い段階のものである。埋土は住居址の床面下に炭化物と焼土を僅かに含む褐色土があり、最下部に暗褐色土が薄くみられる。横断面は「U」字状を呈する。

**C III-117 陥し穴状遺構** (図版144r・146i、写真図版150d)

340(314)cm±×45(11)cm±の規模をもち、深さ112cm±を計る。遺跡の北東部中央に位置し、標高200.0m±のところに在る。長軸はN-53°-Wの方向を示す。当遺構はC III-10住居址とC III-118 陥し穴状遺構と重複している。当遺構は住居址よりも新しいが、C III-118 陥し穴状遺構との新旧関係は不明である。埋土は上部にクロボクをもち、その他は汚れ火山灰より構成されている。床面のレベルは東側の方が5cm±低くなっている。

**C III-118 陥し穴状遺構** (図版144q・146j)

450(460)cm±×30(12)cm±の規模をもち、深さ80cm±を計る。遺跡の北東部に位置し、標高200.0m±のところに在る。長軸はN-76°-Eの方向を示す。当遺構は東側でC III-117 陥し穴状遺構と重複しているが、新旧関係は不明である。埋土は次の3層に大別される。上層は黒褐色土と暗褐色土よりなり、中層は火山灰が主体で下部に薄く暗褐色土がみられる。下部は汚れ火山灰より成る。横断面は「U」字状を呈し、床面はほぼ平坦である。

**C III-119 陥し穴状遺構** (図版145a・146k、写真図版150e)

364(356)cm±×70(10)cm±の規模をもち、深さ137cm±を計る。遺跡北東部の中央に位置し、東に下る緩斜面の標高199.0m±のところに在る。長軸は傾斜に対し斜めの方向にありN-28°-Wの方向を示す。当遺構は北西部でC VI-57ピーカー形ピットと重複しているが、新旧関係は不明である。埋土は上部中央にクロボクをもち、その周辺に暗褐色土、中～下層にかけてはかなり汚れたルーズな火山灰より構成されている。横断面は上面が最も広く摺鉢状に落ち込み、中位以下より細くなりほぼ垂直に下る。上部は崩壊により広がったものと思われる。床面はほぼ平坦である。

**C III-120 陥し穴状遺構** (図版145b・146l、写真図版150f)

250(250)cm±×36(22)cm±の規模をもち、深さ65cm±を計る。遺跡の北東部西辺に位置し、標高200.0m±のところに在る。長軸はN-64°-Wの方向を示す。埋土は中間部に暗褐色土を抜き、上下層とも汚れ火山灰層より構成されている。床面はほぼ平坦である。

**C III-121 陥し穴状遺構** (図版145c・146m、写真図版150g)

330(325)cm±×50(20)cm±の規模をもち、深さ123cm±を計る。遺跡の北東部西辺に位置し、標高200.0m±のところに在る。当遺構は西側でC III-8住居址を切り込んで作られている。長軸はN-70°-Wの方向を示す。埋土は次の3層に大別される。上層は暗褐色土が主であるが薄くクロボクの層がみられる。中層はクロボクが小ブロックで混入している褐色土よりなり、下層は暗褐色土がみられる。横断面は上面が最も広く、3/4ほどのところより細くなり、その下はほぼ垂直に下る。底面は若干の屈曲がみられ、東側が僅かに低くなっている。

**C III-122 陥し穴状遺構** (図版145d・146n)

232(217)cm±×75(25)cm±の規模をもち、深さ105cm±を計る。遺跡の北東部西辺に位置し、標高200m±のところに在る。長軸はN-72°-Wの方向を示す。埋土は次の通り大別される。上部は黒褐色土と暗褐色土、中部はクロボク混じりの火山灰層、下層は火山灰主体の黄褐色土よりなる。底面は東側に向い15cm±低くなっている。

**C III-123 陥し穴状遺構** (図版145e・147a、写真図版151a)

222(246)cm±×80(19)cm±の規模をもち、深さ143cm±を計る。遺跡の北東部に位置し、標高200.2m±のところに在る。長軸はN-60°-Eの方向を示す。当遺構はD III-1住居址を切り込んで作られている。埋土は上部中央に暗褐色土、壁際に火山灰主体の褐色土、中～下部にかけて火山灰主体の黄褐色土、最下部の暗褐色土より構成されている。横断面の上部がかなり広がっているのは廃棄後の崩壊によるものと思われる。長軸の両端とも挟りこまっておき、底面はほぼ平坦である。

**C III-124 陥し穴状遺構** (図版145f・147b、写真図版151b)

350(370)cm±×50(18)cm±の規模をもち、深さ92cm±を計る。遺跡の北東部中央に位置し、標高200.5m±のところに在る。長軸はN-59°-Wの方向を示す。埋土は上部にクロボクが小ブロックで混じる火山灰主体の褐色土、中位は火山灰土を挟んだ暗褐色土、下部の火山灰主体の明褐色土より構成されている。横断面は「U」字状を呈し、長軸の両端下部が奥に挟りこまれている。

**C III-125 陥し穴状遺構** (図版145g・147c)

325(310)cm±×37(10)cmの規模をもち、深さ106cm±を計る。遺跡の北東部中央に位置し、標高200.4m±のところに在る。長軸はN-81°-Wの方向を示す。当遺構は東端でD III-1住居址と重複しており、住居址を切り込んで作られている。埋土は、クロボクと火山灰が粒状に混入している暗褐色土が上～中層にみられ、下半は火山灰主体の褐色土で構成されている。横断面は上部からやや内側に傾斜をもち底部に至る。上面がやや不整なプランを呈するが、これは崩壊によるものと思われる。底面はほぼ平坦である。

**C III-126 陥し穴状遺構** (図版145h・147d)

350(340)cm±×33(15)cm±の規模をもち、深さ110cm±を計る。遺跡の北東部中央に位置し、標高199.8m±のところに在る。長軸はN-54°-Wの方向を示す。当遺構はD III-1住居址内にあるが、住居址を切り込んで作られており、住居址よりも新しい遺構である。埋土は、次の3層に大別される。上層に黒褐色土、中層に焼土、炭化物を僅かに含むルーズな汚れ火山灰、下層に暗褐色土がみられる。床面は中央部が8cm±低くなっている。

**C III-127 陥し穴状遺構** (図版145i)

398(260)cm±×78(8)cm±の規模をもち、深さ91cm±を計る。遺跡の北東部西辺に位置し、

標高 199.3m 土のところに在る。長軸は N-38°-W の方向を示す。当遺構は C III-3 住居址を切りこんで作られている。床面はほぼ平坦である。埋土については図面が不備のため省略する。

(高橋信雄)

## C IV 区 (実数30基)

### C IV-101 陥し穴状遺構 (図版147e・149f、写真図版151c)

259(257)cm 土×110(12)cm 土の規模をもち、深さ 110cm 土を計る。遺跡の北東部に位置し、標高 197.8m 土のところに在る。長軸は N-45°-W の方向を示す。埋土は大きく 3層に分けられる。上部は黒褐色土、中部に火山灰主体の褐色土、最下部に炭化物を僅かに含む汚れ火山灰がみられる。

### C IV-102 陥し穴状遺構 (図版147f・149g)

361(375)cm 土×35(8)cm 土の規模をもち、深さ 110cm 土を計る。遺跡の北東部に位置し、標高 198.0m 土のところに在る。長軸は N-51°-W の方向を示す。埋土は、上部中央に暗褐色土をもち、中～下部は汚れ火山灰で構成されている。長軸の両端下部とも奥に挟りこまれており、床面は東に向い 10cm 土低くなっている。

### C IV-103 陥し穴状遺構 (図版147g・149h、写真図版151d)

286(270)cm 土×60(19)cm 土の規模をもち、深さ 116cm 土を計る。遺跡の北東部に位置し、標高 198.0m 土のところに在る。長軸は N-44°-W の方向を示す。埋土は、上部に暗褐色土がみられ、その下は火山灰主体の明黄褐色よりなる。横断面は上部が広く、中位よりほぼ垂直に下る。床面は南端が奥に挟りこまれており、南側が 8cm 土低くなっている。

### C IV-104 陥し穴状遺構 (図版147h・149i、写真図版151e)

365(386)cm 土×70(15)cm 土の規模をもち、深さ 140cm 土を計る。遺跡北東部の東斜面上部に位置し、標高 197.5m 土のところに在る。長軸は傾斜に対し斜めの方向にあり、N-70°-E の方向を示す。埋土は大きく 3つに分けられる。上部にクロボクと僅かに炭化物と焼土を含む黒褐色土、中位にクロボクが僅かに混じる褐色土、下位に少量の炭化物を含む黒褐色土がみられる。横断面は上部が広く、下より細く落ちこむ形を呈する。上部は崩壊により広がったものと思われる。

### C IV-105 陥し穴状遺構 (図版147i・149j、写真図版151f)

348(393)cm 土×70(16)cm 土の規模をもち、深さ 93cm 土を計る。遺跡の北東部東斜面上部に位置し、標高 197.5m 土のところに在る。長軸は斜面に対し斜めの方向にあり、N-70°-E の方向を示す。埋土は上部に暗褐色土をもち、中位に暗褐色土及び炭化物と焼土を僅かに含む黒

褐色土、下位に汚れ火山灰が主体の褐色土がみられる。横断面は「U」字状を呈する。底部は東側でやや屈曲しており、長軸の両端とも奥に挟りこまれている。

**C IV-106 陥し穴状遺構** (図版147j・149m、写真図版152a)

247(275)cm±×48(27)cm±の規模をもち、深さ72cm±を計る。遺跡の北東部に位置し、標高198.0m±のところにいる。長軸はN-19°-Eの方向を示す。当遺構はC IV-2住居址内にあり、住居址の床面下で検出された。したがって住居址よりも古い陥し穴状遺構である。長軸の両端は奥に挟りこまれており、床面はほぼ平坦である。埋土については図面が不備のため省略する。

**C IV-107 陥し穴状遺構** (図版147k・149l、写真図版152b)

278(315)cm±×40(31)cm±の規模をもち、深さ87cm±を計る。遺跡の北東部、標高197.8m±のところにいる。長軸はN-20°-Eの方向を示す。当遺構の南半分はC IV-2住居址と重複している。住居址の床面が陥し穴状遺構の上に認められること、炉石の一部が当遺構の上に認められること等により、当陥し穴状遺構は住居址よりも古い段階のものであると考えられる。埋土のほとんどは火山灰主体の褐色土より構成されており、最下部に薄く暗褐色土が認められる。長軸の両端とも下部が奥に挟りこまれており、床面のレベルはほぼ平坦である。

**C IV-108 陥し穴状遺構** (図版147l・149k、写真図版152c)

320(317)cm±×64(20)cm±の規模をもち、深さ119cm±を計る。遺跡北東部の東に下る緩斜面の上端に位置し、標高197.8m±のところにいる。長軸は傾斜に対しほぼ直交し、N-70°-Wの方向を示す。当遺構は西端でC IV-2住居址と重複している。住居址の東側の壁が明確でなく、疑問の点もあるが調査時の観察では、当陥し穴状遺構が新しいと考えられる。埋土は上部に暗褐色土、中～下部に汚れ火山灰がみとめられる。横断面は上部が広く、徐々に狭まり中位より下はほぼ垂直に下る。上部は崩壊により広がったものと考えられる。床面はほぼ平坦である。

**C IV-109 陥し穴状遺構** (図版147m、写真図版152d)

360cm±×70(12)cm±の規模をもち、深さ119cm±を計る。遺跡北東部の東に下る緩斜面上端に位置し、標高198.0m±のところにいる。長軸は傾斜に対しほぼ直交し、N-53°-Wの方向を示す。当遺構は東側でC IV-52ピーカー形ピットとC IV-53ピーカー形ピットと重複している。当遺構はC IV-52ピーカー形ピットによって切られているが、C IV-53ピーカー形ピットとの新旧関係は不明である。横断面は上面が最も広く、下に向って狭まくなり、中段より下はほぼ垂直に下る。上部は崩壊により広がったものと思われる。埋土については図面不備のため省略する。

**C IV-110 陥し穴状遺構** (図版148e・150a、写真図版152e)

270cm +  $\alpha \times (10)$  cm ± の規模をもち、深さ 126 cm ± を計る。遺跡の北東部に位置し、東に下る緩斜面の上端で、標高 197.8 m ± のところに在る。長軸は斜面に対しほぼ直交し、N-37°-W の方向を示す。当遺構は C IV-111、C IV-112、C IV-113 陥し穴状遺構と重複しているが、いずれとの新旧関係も不明である。長軸の北西端下部が奥に挟り込まれており、床面は東に向い 30 cm ± 低くなっている。

**C IV-111 陥し穴状遺構** (図版148 d・150 b、写真図版152 f)

200 cm +  $\alpha \times 40$  (15) cm ± の規模をもち、深さ 126 cm ± を計る。遺跡の北東部に位置し、東に下る緩斜面の上端で、標高 197.8 m ± のところに在る。長軸は斜面に対しほぼ直交し、N-52°-W の方向を示す。当遺構は C IV-110、C IV-112、C IV-113 陥し穴状遺構と重複しているが、いずれとの新旧関係も不明である。

**C IV-112 陥し穴状遺構** (図版148 a)

110 cm +  $\alpha \times (20)$  cm の規模をもち、深さ 107 cm ± を計る。遺跡の北東部に位置し、東に下る緩斜面の上端で標高 197.8 m ± のところに在る。長軸は斜面に対しほぼ直交し、N-72°-W の方向を示す。当遺構は C IV-110、C IV-111、C IV-113 陥し穴状遺構と重複しているが、いずれとの新旧関係も不明である。底面は東に向って 10 cm ± 低くなっている。

**C IV-113 陥し穴状遺構** (図版148 b)

(430) cm ± × (25) cm ± の規模をもち、遺跡の北東部に位置し、東に下る緩斜面の上端で標高 197.8 m ± のところに在る。長軸は斜面に対しほぼ直交し、N-75°-W の方向を示す。当遺構は C IV-110、C IV-111、C IV-112 陥し穴状遺構と重複しているが、新旧関係については不明である。底面は東に向って 17 cm ± 低くなっており、長軸の東端下部が奥に挟り込まれている。

**C IV-115 陥し穴状遺構** (図版147 o)

168(146) cm ± × 70 (30) cm ± の規模をもち、深さ 121 cm ± を計る。遺跡の北東部に位置し、東に下る緩斜面の上端で標高 197.7 m ± のところに在る。長軸は斜面に対しほぼ直交し、N-47°-W の方向を示す。長軸と短軸との比率の小さい遺構で、断面は摺鉢状を呈する。

**C IV-116 陥し穴状遺構** (図版147 n・150 c)

346(350) cm ± × 27 (10) cm ± の規模をもち、深さ 131 cm ± を計る。遺跡の北東部に位置し、東に下る緩斜面の上端で標高 197.8 m ± のところに在る。長軸は斜面に対しほぼ直交し、N-64°-W の方位を示す。当遺構は C IV-54 ビーカー形ピットと C IV-55 ビーカー形ピットと重複しているが、新旧関係については不明である。埋土は 3 層に大別される。上部は中央に黒褐色土と壁際に褐色土がみられ、中層はルーズな火山灰主体の黄褐色土が堆積し、下部には暗褐色土が認められる。横断面は上部が広くゆるいところより細くなり、ほぼ垂直に下る。上部は

崩壊により広がったものと思われる。底面は西に向い15cm±低くなり、C IV-55ピーカー形ピットより55cm±低く、C IV-54ピーカー形ピットより100cm±低い。

**C IV-117 陥し穴状遺構** (図版148f・150d、写真図版153b)

165(155)cm±×72(23)cm±の規模をもち、深さ127cm±を計る。遺跡の北東部に位置し、東に下る緩斜面の上端で標高198.0m±のところに在る。長軸は斜面に対しほぼ直交し、N-61°-Wの方向を示す。埋土は上部に暗褐色土と僅かに焼土と炭化物を含む火山灰主体の褐色土があり、中位に僅かに炭化物を含む火山灰優先の黄褐色土があり下に薄くクロボクのパンドがみられる、下部は火山灰主体の黄褐色土で構成されている。横断面は上部が広く中位より細くなり、ほぼ垂直に下る。上部は崩壊により広がったものと思われる。底面は5cm±ほど中央部が低くなっている。

**C IV-118 陥し穴状遺構** (図版148j、写真図版153c)

398(447)cm±×60(15)cm±の規模をもち、深さ126cm±を計る。遺跡の北東部に位置し、東に下る緩斜面の標高198.0m±のところに在る。長軸は斜面に対しほぼ直交し、N-81°-Wの方向を示す。当遺構はC IV-131陥し穴状遺構と南側で重複しているが、新旧関係は不明である。長軸の両端下部が奥に挟りこまれており、底面のレベルは東に向い20cm±低くなっている。埋土については図面不備のため省略する。

**C IV-119 陥し穴状遺構** (図版148h、写真図版153d)

180(190)cm±×(39)cm±の規模をもち、深さ145cm±を計る。遺跡の北東部に位置し、東に下る緩斜面で標高198.0m±のところに在る。長軸は斜面に対しやや斜めの方向にあり、N-55°-Wの方向を示す。当遺構は北西部半分がC IV-131陥し穴状遺構と接しているが、新旧関係は不明である。埋土については図面不明のため省略する。

**C IV-120 陥し穴状遺構** (図版148g・150e、写真図版153e)

242(154)cm±×115(36)cm±の規模をもち、深さ99cm±を計る。遺跡の北東部に位置し、東に下る緩斜面で標高198.0m±のところに在る。長軸は斜面に対しほぼ直交し、N-62°-Wの方向を示す。埋土は上半に粒状の火山灰を含む暗褐色土・下半の火山灰主体の明褐色土より構成されている。断面は摺鉢状を呈し、底部の中央が5cm±低くなっている。

**C IV-121 陥し穴状遺構** (写真図版153f)

300(330)cm±×55(32)cm±の規模をもち、深さ117cm±を計る。遺跡の北東部に位置し、東に下る緩斜面で標高198.2m±のところに在る。長軸は斜面に対しほぼ平行し、N-14°-Eの方向を示す。長軸の両端下部が奥に挟りこまれており、床面はほぼ平坦である。当遺構はC IV-122陥し穴状遺構北部に重複しているが、新旧関係は不明である。埋土については図面不備のため省略する。



#### C IV-122 陥し穴状遺構

307(320)cm±×60(17)cm±の規模をもち、深さ109cm±を計る。遺跡の北東部に位置し、東に下る緩斜面の標高198.2m±のところに在る。長軸は斜面に対しほぼ直交し、N-62°-Wの方向を示す。長軸の両端下部が挟りこまれており、底面は東に向い5cm±低くなっている。当遺構はC IV-121 陥し穴状遺構と重複しているが、新旧関係については不明である。埋土については図面不備のため省略する。

#### C IV-123 陥し穴状遺構 (図版148k・150g、写真図版155a)

382(367)cm±×52(10)cm±の規模をもち、深さ168cm±を計る。遺跡の北東部に位置し、東に下る緩斜面の標高198.2m±のところに在る。長軸は斜面に対しほぼ直交し、N-72°-Wの方向を示す。当遺構は中央部でC IV-124 陥し穴状遺構と重複しているが、新旧関係については不明である。埋土は上部に黒褐色土・下部に汚れ火山灰がみられる。長軸の西端下部が奥に挟りこまれており、床面は東に向い10cm±ほど低くなっている。横断面は上部が広く中位より細くなる形を呈するが、上部は崩壊により広がったものと思われる。

#### C IV-124 陥し穴状遺構 (図版148j・150f、写真図版155b)

200cm+α×150cm+αの規模をもち、深さ134cm±を計る。遺跡の北東部に位置し、東に下る緩斜面で標高198.2m±のところに在る。長軸は斜面に対しほぼ直交し、N-51°-Wの方向を示す。当遺構は北側でC IV-123 陥し穴状遺構、南側でC IV-59 ビーカー形ピットと重複している。いずれとの新旧関係も不明である。埋土は上半に黒褐色土と暗褐色土がみられ、下半は汚れ火山灰が占める。横断面は細長い「U」字状を呈する。

#### C IV-125 陥し穴状遺構 (図版148l・m・150h、写真図版154a・d)

332(320)cm±×51(12)cm±の規模をもち、深さ100cm±を計る。遺跡の北東部に位置し、東に下る緩斜面の標高197.9m±のところに在る。長軸は斜面に対しほぼ直交し、N-61°-Wの方向を示す。当陥し穴状遺構は埋土上部に特徴をもつ。細長いプランの縁に沿って5~10cm±の中でクロボクがみられ、内側は汚れ火山灰がみられる。つまり当遺構がある程度埋まり細長い凹状の部分に汚れ火山灰で蓋をした形を呈する。埋土は、上部中央に汚れ火山灰その両端及び下部にクロボクがみられ、中層に暗褐色土、下部は主に火山灰主体の黄褐色土よりなるが、最下部に薄く暗褐色土がみられる。横断面は上部が広く除々に狭まり、中位よりほぼ垂直に下る形を呈する。上部は崩壊によって広がったものと思われる。底部は東側に向い6cm±低くなっている。

#### C IV-126 陥し穴状遺構 (図版148n・o・150i、写真図版154b・e)

360(315)cm±×54(8)cm±の規模をもち、深さ100cm±を計る。遺跡の北東部に位置し、東に下る緩斜面で標高197.8m±のところに在る。長軸は斜面に対しほぼ直交し、N-60°-W

の方向を示す。埋土は上部中央全体に汚れ火山灰土をもつ。上部中央にこの汚れ火山灰がみられ、その周辺及び下位に暗褐色土が堆積し、中～下位は火山灰主体の明褐色土より成る。横断面は上部が広く、中位より細くなり垂直に下る形を呈する。上部は崩壊により広がったものと思われる。底面は東の方に向い20cm±低くなっている。

**C IV-127 陥し穴状遺構** (図版149 a・b・150 j、写真図版154 c・f・167 a)

356(320)cm±×94 (10) cm±の規模をもち、深さ120 cm±を計る。遺跡の北東部に位置し、東に下る緩斜面で標高198.0m±のところに在る。長軸は斜面に対しほぼ直交し、N-86°-Wの方向を示す。埋土の上面中央に汚れ火山灰がみられる。この汚れ火山灰の広がり、遺構の上面プランに沿って内側全体にみられる。横断面をみるとこの汚れ火山灰が上部中央にみられ、その両側から下にかけて僅かに炭化物を含むクロボクが入り、中～下位にかけては火山灰主体の褐色土で構成されているが、最下部に僅かに炭化物の混入した汚れ火山灰が薄くみられる。上部が広く中位より細くなる形を呈すが、上部は崩壊によって広がったものと思われる。底面は東に向い10cm±低くなっている。

**C IV-128 陥し穴状遺構** (図版149 d・写真図版155 c)

120cm+α×72 (12) cm±の規模をもち、深さ114 cm±を計る。遺跡の北東部に位置し、東に下る緩斜面で標高196.5m±のところに在る。長軸は斜面に対しやや斜めの方向にあり、N-45°-Wの方向を示す。当遺構は南側でC IV-60ピーカー形ピット、南側でC IV-129 陥し穴状遺構と重複しているが、新旧関係については不明である。埋土については図面不備のため省略する。

**C IV-129 陥し穴状遺構** (図版149 c・150 l、写真図版167 b)

(405) cm±×40 (20) cm±の規模をもち、深さ178 cm±を計る。遺跡の北東部に位置し、東に下る緩斜面の標高196.0m±のところに在る。長軸は斜面に対しほぼ直交し、N-67°-Wの方向を示す。当遺構は北西部でC IV-60ピーカー形ピットとC IV-128 陥し穴状遺構と重複している。C IV-60ピーカー形ピットを切って作られているが、C IV-128 陥し穴状遺構との新旧関係は不明である。埋土は上部～下部上半まで黒褐色土がみられ、この中に部分的に焼土が僅かに混入しており、炭化物もみられる。下部下半は火山灰主体の黄褐色土がみられる。長軸の東端下部が奥に挟りこまれており、底部は東に向い40cm±低くなっている。

**C IV-130 陥し穴状遺構** (図版149 e、写真図版155 d)

320+α×65 (12) cm±の規模をもち、深さ92cm±を計る。遺跡の北東部やや南寄りに位置し東に下る緩斜面の標高197.8m±のところに在る。長軸は斜面に対しほぼ平行し、N-10°-Wの方向を示す。当遺構は、南端でC IV-62ピーカー形ピットと重複しているが、新旧関係については不明である。埋土の上部は黒褐色土、下部は汚れ火山灰層で構成されている。横断面は

上部が広く除々に狭まり、中位より細くなりほぼ垂直に下る。上部は崩壊により広がったものと思われる。床面はほぼ平坦であり、ピーカー形ピットより20cm±浅い。

#### C IV - 131 陥し穴状遺構 (図版148h・150m)

(420)cm±×73(10)cm±の規模をもち、深さ150cm±を計る。遺跡の北東部に位置し、東に下る緩斜面の標高 198.0m±のところに在る。長軸は斜面に対しほぼ直交し、N-57°-Wの方向を示す。当遺構は北東端でC IV - 118 陥し穴状遺構、南側西半分がC IV - 119 陥し穴状遺構と重複しているが、新旧関係については不明である。埋土の上半はクロボクと暗褐色土、下半は火山灰主体の黄褐色土より構成されている。横断面は上面が最も広く除々に狭まり、ほど下のところよりほぼ垂直に下る。上部は崩壊により広がったものであると考えられる。長軸の東端下部が奥に挟りこまれており、東に向い僅かに低くなっている。(高橋信雄)

### D II 区 (実数13基)

#### D II - 101 陥し穴状遺構 (図版151b・1、写真図版155e)

343(310)cm±×54(12)cm±の規模をもち、深さ139cm±を計る。遺跡中央部よりやや北寄りに位置し、標高 201.6m±のところに在る。長軸はN-69°-Wの方向を示す。当遺構はD II - 102 陥し穴状遺構と接しているが、新旧関係は不明である。埋土は次の通り大別される。上部中央にクロボクをもち、両端に火山灰主体の明黄褐色土と暗褐色がみられ、中位には火山灰主体の黄褐色土と下にクロボクがブロック状に混入している薄い層がみられる。下位には柔かい黒褐色土がみられる。横断面は上部から中位まで摺鉢状に落ちこみ、中位より細くなりほぼ垂直に下る形を呈するが、上部は崩壊によって広がったものと思われる。床面はほぼ平坦である。

#### D II - 102 陥し穴状遺構 (図版151a・m、写真図版155f)

453(470)cm±×65(15)cm±の規模をもち、深さ159cm±を計る。遺跡の中央部よりやや北寄りに位置し、北東に向って下る緩斜面の上端で標高 201.7m±のところに在る。長軸は斜面に対し斜めの方向にあり、N-27°-Wを示す。当遺構はD II - 101 陥し穴状遺構と北端で接しているが、新旧関係は不明である。埋土は次の通りである。上部は中央に僅かに焼土粒を含むクロボクとその周辺の暗褐色土よりなり、中部は上半に土器の小破片及びクルミの炭化物を含む火山灰主体の褐色土、下半には汚れ火山灰がみられ、下層最下部に粒状炭化物を僅かに含む黒褐色土がみられる。底部はいくらか屈曲しており、南に向いやや低くなっている。

#### D II - 103 陥し穴状遺構 (図版151c・152a、写真図版156a)

317(262)cm±×67(10)cm±の規模をもち、深さ93cm±を計る。遺構の中央部よりやや北寄

りに位置し、東に向って下る緩斜面の上部で標高 202.2m 土のところに在る。長軸は斜面に対し斜めの方向にあり、N-17°-W の方向を示す。埋土は、上部にクロボクと暗褐色土、中部に火山灰主体の褐色土、最下部に黒褐色土がみられる。横断面は上部から徐々に狭まり中央部で段をもち、そこからほぼ垂直に下る形を呈する。上部は崩壊作用により広がったものと思われる。底面はいくらか屈曲しており、中央部が 5 cm 土低くなっている。

#### D II-104 陥し穴状遺構 (図版151d・152b)

285(260)cm 土×55 (10) cm 土の規模をもち、深さ 86cm 土を計る。遺跡の中央部よりやや北寄りに位置し、東に下る緩斜面の上部で標高 202.2m 土のところに在る。長軸は斜面に対し斜めの方向にあり、N-34°-W の方向を示す。埋土は上部中央にクロボクをもち、その下に暗褐色土が入り、下部はルーズな汚れ火山灰で構成されている。横断面は上部が広く、中央部より細くなりほぼ垂直に下る形を呈するが、上部は崩壊により広がったものと思われる。底部は北に向って 5 cm 土低くなっている。

#### D II-105 陥し穴状遺構 (図版151e・152c、写真図版156b)

290(250)cm 土×60 (8) cm 土の規模をもち、深さ 140 cm 土を計る。遺跡の中央部よりやや北寄りに位置し、標高 203.3m 土のところに在る。長軸は N-2°-W の方向を示す。当遺構は北側で D II-5 住居址と重複している。新旧関係は、当遺構が住居址を切りこんで作られており、住居址も切り込んで作っており、住居址より新しいことが確認されたが、D II-51 ピーカー形ピットとの新旧関係は不明である。埋土は上部にクロボクをもち、中～下部には火山灰主体の褐色土がみられ、最下部にクロボクがブロック状にみられる褐色土が堆積している。底部幅は全体に細く、中央部が 5 cm 土低くなっている。

#### D II-106 陥し穴状遺構 (図版151f、写真図版156c)

300(260)cm 土×50 (5) cm 土の規模をもち、深さ 140 cm 土を計る。遺跡の中央部よりやや北寄りに位置し、標高 203.3m 土のところに在る。長軸は N-25°-W の方向にある。当遺構は西端で D II-5 住居址、D II-6 住居址、D II-51 フラスコ形ピットと重複している。いずれの住居址も切り込んで作っており、住居址より新しいことが確認されたが、D II-51 ピーカー形ピットとの新旧関係は不明である。埋土は上部にクロボクをもち、中～下部には火山灰主体の褐色土がみられ、最下部にクロボクがブロック状にみられる褐色土が堆積している。底部幅は全体に細く、中央部が 5 cm 土低くなっている。

#### D II-107 陥し穴状遺構 (図版151g・152d、写真図版156d)

332(350)cm 土×70 (13) cm 土の規模をもち、深さ 141 cm 土を計る。遺跡の中央部北寄り西端に位置し、西に下る斜面の上部で標高 204.0m 土のところに在る。長軸は斜面に対し斜めの方向にあり、N-88°-W の方向を示す。埋土は大きく 3 つに分けられる。上部は黒褐色土と暗褐

色土、中部は火山灰が主で僅かにクロボクブロックがみられるルーズな褐色土が厚く堆積しており、下部はクロボクと汚れ火山灰よりなるが最下部に黒褐色土が薄くみられる。長軸の両端とも下部が奥に挟りこまれており、床面は中央部が5cm±高くなっている。

**D II-108 陥し穴状遺構** (図版151h・152e、写真図版156e)

342(335)cm±×53(7)cm±の規模をもち、深さ108cm±を計る。遺跡の中央部より北西に位置し、西に下る緩斜面の上部で標高203.6m±のところに在る。長軸は斜面に対しほぼ直交し、N-2°-Eの方向を示す。当遺構はD II-8住居址と重複しており、住居址を切り込んで作られている。埋土は上部にクロボクと黒褐色土、中部に火山灰主体の褐色土、下部に黒褐色土がみられる。横断面は、上半が上に向かって広がり、下半はほぼ垂直に下る。上部は崩壊によって広がったものと思われる。底部は僅かに屈曲しており、幅にもバラツキがみられる。床面は北に向かって10cm±低くなっている。

**D II-109 陥し穴状遺構** (図版151i)

313(296)cm±×30(17)cm±の規模をもち、深さ70cm±を計る。遺跡中央部のやや北寄りに位置し、標高203.8m±のところに在る。長軸はN-79°-Wの方向を示す。当遺構は西側でD II-10住居址と重複しており、住居址を切り込んで作られている。底部は東に向い10cm±低くなっている。埋土については図面不備のため省略する。埋土上部で注口土器の破片が出土した。

**D II-110 陥し穴状遺構** (図版151j)

352(334)cm±×40(12)cm±の規模をもち、深さ93cm±を計る。遺跡の中央部やや北寄りに位置し、標高203.2m±のところに在る。長軸はN-89°-Eの方向を示す。当遺構は西側でD II-10住居址と重複しているが、新旧関係は不明である。底面は東に向かって15cm±低くなっている。埋土については図面不備のため省略する。

**D II-111 陥し穴状遺構** (図版151n、写真図版156f)

250(220)cm±×46(18)cm±の規模をもち、深さ95cm±を計る。遺跡中央部の北西端に位置し、標高204.5m±のところに在る。長軸は西斜面に対し斜めの方向にあり、N-15°-Wの方向を示す。底部はやや屈曲しており、北に向かって10cm±低くなっている。埋土については図面不備のため省略する。

**D II-112 陥し穴状遺構** (図版151k・152f、写真図版157a)

200(190)cm±×97(28)cm±の規模をもち、深さ127cm±を計る。遺跡の中央部やや北寄りに位置し、標高204.5m±のところに在る。長軸と短軸の比率の小さい陥し穴状遺構である。埋土は上部に黒褐色土と褐色土がみられ、中部には厚く火山灰主体のルーズな黄褐色土が堆積し、下部はクロボクの小ブロックが混入している火山灰主体の層より構成されている。横断面は上部が広く除々に狭まり、中位より段をもち急に下る。上部は崩壊によって広がったものと

思われる。

**D II-114 陥し穴状遺構** (図版151o・152g)

155(144)cm±×50(24)cm±の規模をもち、深さ82cm±を計る。遺跡の中央より北西寄りに位置し、西に下る斜面上部で標高 204.0m±のところに在る。長軸は斜面に対しほぼ直交しN-11°-Wの方向を示す。当遺構はD II-9 住居址を切って作られている。埋土は上部に暗褐色土と黒褐色土をもち、下部は汚れ火山灰がみられる。床面はほぼ平坦である。(高橋信雄)

**D III区 (実数21基)**

**D III-101 陥し穴状遺構** (図版152h・154a)

199(200)cm±×110(30)cm±の規模をもち、深さ126cm±を計る。遺跡の中央よりやや北寄りに位置し、東に下る緩斜面で標高 200.5m±のところに在る。長軸は斜面に対し平行し、N-7°-Eの方向を示す。埋土は上部にクロボクと暗褐色土・下部に火山灰主体の黄褐色土が主体を占めるが、底部近くに炭化物の含む暗褐色土の薄い層がみられる。横断面は摺鉢状を呈す。長軸の南端下部は奥に挟りこまれており、床面は中央が4cm±低くなっている。

**D III-102 陥し穴状遺構** (図版152i・154b・写真図版157b)

325(285)cm±×67(8)cm±の規模をもち、深さ138cm±を計る。遺跡の中央よりやや北寄りに位置し、標高 201.1m±のところに在る。長軸はN-56°-Wの方向を示す。当遺構は北東部でD III-52 フラスコ形ピットと重複しており、フラスコ形ピットを切りこんで作られている。埋土は上部にクロボクと暗褐色土をもち、中位には炭化物を僅かに含むクロボクの小ブロックを含む火山灰主体の褐色土がみられ、下位は暗褐色土よりなる。床面はほぼ平坦である。

**D III-103 陥し穴状遺構** (図版152j・154c・写真図版157c)

370(380)cm±×25(15)cm±の規模をもち、深さ100cm±を計る。遺跡の中央よりやや北寄りに位置し、標高 200.5m±のところに在る。長軸はN-36°-Wの方向を示す。当遺構はD III-3 住居址内にあり、床面下で検出された遺構で住居址より古い陥し穴状遺構である。埋土は上位に火山灰主体の褐色土と暗褐色土をもち、中位には汚れ火山灰が厚く堆積しており、下位には暗褐色土がみられる。横断面は「U」字状を呈する。

**D III-104 陥し穴状遺構** (図版152k・154d・写真図版157d)

293(255)cm±×65(12)cm±の規模をもち、深さ85cm±を計る。遺跡の中央よりやや北寄りに位置し、標高 201.0m±のところに在る。長軸はN-51°-Wの方向を示す。当遺構はD III-3 住居址と重複しており、住居址を切りこんで作られている。埋土は上位にクロボクと炭化物を含む暗褐色土をもち、中位から下位にかけては火山灰主体の暗褐色土と褐色土がみられる。

床面はほぼ平坦である。

**D III-105 陥し穴状遺構** (図版152 l・154 h、写真図版157 e)

356(350)cm±×83(20)cm±の規模をもち、深さ90cm±を計る。遺跡の中央よりやや北寄りに位置し、東に下る緩斜面の上方で標高 200.2m±のところに在る。長軸は斜面に対しほぼ直交し、N-63°-Wの方向を示す。埋土は上半中央に多くの焼土と炭化物を含む火山灰主体の褐色土をもち、下半分には火山灰主体の黄褐色土がみられる。長軸の東端下部が奥に挟りこまれており、中央から東側が10cm±低くなっている。

**D III-106 陥し穴状遺構** (図版152 m・154 e、写真図版157 f)

262(244)cm±×39(14)cm±の規模をもち、深さ80cm±を計る。遺跡の中央よりやや北寄りに位置し、標高 201.6m±のところに在る。長軸はN-12°-Wの方向を示す。当遺構はD III-5 住居址内にあり、床面下に認められ、住居址よりも古い陥し穴状遺構であることが確認された。埋土は、床面下に暗褐色土をもち、中位から下は火山灰主体の褐色土で占められているが最下部に薄く汚れの強い部分がみられる。横断面は「U」字状を呈する。床面はほぼ平坦である。

**D III-107 陥し穴状遺構** (図版153 a)

282(310)cm±×67(37)cm±の規模をもち、深さ98cm±を計る。遺跡の中央よりやや北寄りに位置し、東に下る緩斜面の上方で標高 201.0m±のところに在る。長軸は斜面に対しほぼ平行し、N-14°-Eの方向を示す。長軸の両端とも下部が奥に挟りこまれており、床面はほぼ平坦である。埋土については図面不備のため省略する。

**D III-108 陥し穴状遺構** (図版153 b・154 f、写真図版158 a)

300(336)cm±×55(22)cm±の規模をもち、深さ76cm±を計る。遺跡の中央よりやや北寄りに位置し、東に下る緩斜面の上方で標高 201.0m±のところに在る。長軸は斜面に対しほぼ平行し、N-17°-Eの方向を示す。埋土は上部に炭化物を僅かに含む褐色土と暗褐色土をもち、下部には火山灰主体の黄褐色土がみられる。横断面は上方が広く、中位より下は狭くほぼ垂直に下る。上部は崩壊により広がったものと思われる。底面は北に向い20cm±低くなる。

**D III-109 陥し穴状遺構** (図版153 c・154 g、写真図版158 b)

175(142)cm±×54(28)cm±の規模をもち、深さ100cm±を計る。遺跡の中央よりやや北寄りに位置し、東に下る緩斜面の上方で標高 200.8m±のところに在る。長軸は斜面に対しやや斜めの方向にあり、N-26°-Wの方向を示す。埋土は大別して次の5層に分けられる。上層に僅かに焼土と炭化物を含む暗褐色土をもち、中層上部には汚れ火山灰、中層下部には暗褐色土がみられる。下層上部には汚れ火山灰、下層下部にはクロボク混じりの褐色土がみられる。上面プランがやや不整であるが、これは崩壊により広がったためと思われる。床面は南東部に向

い8cm±低くなっている。

**D III-110 陥し穴状遺構** (図版153e・154j)

310(302)cm±×40(19)cm±の規模をもち、深さ83cm±を計る。遺跡の中央よりやや北寄りに位置し、東に下る緩斜面の上方で標高200.7m±のところに在る。長軸は斜面に対しほぼ直交し、N-75°-Wの方向を示す。当遺構はD III-6住居址と重複しており、住居址を切りこんで作られている。埋土のほとんどは暗褐色土で構成されているが、最下部に薄く汚れ火山灰層がみられる。横断面は「U」字状を呈し、床面は中央が15cm±低くなっている。

**D III-111 陥し穴状遺構** (図版153d・154i、写真図版158c)

215(230)cm±×100(30)cm±の規模をもち、深さ126cm±を計る。遺跡の中央よりやや北寄りに位置し、東に下る緩斜面の上方で標高200.7m±のところに在る。長軸は斜面に対しほぼ直交し、N-76°-Wの方向を示す。当遺構はD III-6住居址と重複しており、住居址を切りこんで作られている。埋土は上部に火山灰主体の黄褐色土と暗褐色土があり、中層には汚れ火山灰が厚く堆積し、最下部には薄くクロボクがみられる。横断面は底部幅が広く上面から摺鉢状に落ちこむ。長軸の東端下部が奥に挟りこまれており、床面のレベルはほぼ平坦である。

**D III-112 陥し穴状遺構** (図版153f・154k、写真図版158d)

337(320)cm±×75(20)cm±の規模をもち、深さ89cm±を計る。遺跡の中央よりやや北寄りに位置し、東に下る緩斜面の上方で標高200.5m±のところに在る。

**D III-113 陥し穴状遺構** (図版153g・154l、写真図版158e)

392(380)cm±×50(22)cm±の規模をもち、深さ92cm±を計る。遺跡の中央よりやや北寄りに位置し、東に下る緩斜面の上方で標高201.3m±のところに在る。長軸は斜面に対しやや斜めの方向にあり、N-44°-Eの方向を示す。埋土は大別して次の4層より構成されている。上部上半の黒褐色土、上部中央の黒土をまだらに含む火山灰が主の褐色土、上部下半の暗褐色土下部はルーズな汚れ火山灰層で3層に細分される。横断面は上部が広く除々に狭まり、中位よりほぼ垂直に下り底面は平な形を呈する。上部の広い部分は崩壊により広がったものと思われる。長軸の南西端下部は奥に挟りこまれており、床面は中央部が10cm±低くなっている。

**D III-114 陥し穴状遺構** (図版153h・154m、写真図版158f)

388(335)cm±×48(8)cm±の規模をもち、深さ91cm±を計る。遺跡の中央部よりやや北東寄りに位置し、東に下る緩斜面の上方で標高201.0m±のところに在る。長軸は斜面に対しほぼ直交し、N-61°-Wの方向を示す。埋土は上部が2層、下部が4層に分けられる。上部は中央にクロボク、その両端と下部に僅かに炭化物を含む黒褐色土がみられ、下部は上半に暗褐色土、その下に薄く汚れ火山灰、その下に暗褐色土、最下部に薄く火山灰層がみられる。横断面は南側が中位で段をもちやや広がっているが、北側は急傾斜で下り、底部は平坦である。長軸



の西端下部がやや挟り込まれており、床面のレベルは両端に向い5cm±低くなっている。

**D III-115 陥し穴状遺構** (図版153i・154n)

350(299)cm±×36(5)cm±の規模をもち108cm±を計る。遺跡の中央部より北東寄りに位置し、東に下る緩斜面の上方で、標高200.8m±のところに在る。長軸は斜面に対しほぼ直交し、N-79°-Wの方向を示す。埋土は上部が2層、下部が2層に大別される。上部は上半にクロボク、下半の暗褐色土よりなり、下部は上半に火山灰主体の褐色土、下半が暗褐色より構成されている。横断面は、非常に細く「U」字状を呈する。底面のレベルは東側に向い15cm±低くなっている。

**D III-116 陥し穴状遺構** (図版153j・154o)

340(332)cm±×60(20)cm±の規模をもち、深さ85cm±を計る。遺跡中央部よりやや北寄りに位置し、北東に下る緩斜面の上方で標高202.0m±のところに在る。長軸は斜面に対しやや斜めの方向にあり、N-47°-Wの方向を示す。当遺構の北西部半分がD III-7住居址と重複しているが、当遺構の北西部半分は明らかに住居址の床面下にもぐりこみ、住居址より古い陥し穴状遺構である。埋土は上層中央にクロボクをもち、その下に暗褐色があり、中層はルーズな汚れ火山灰よりなり、下部は汚れ火山灰にブロック状の黒色土が混じる層より構成されている。床面は東に向い12cm±低くなっている。

**D III-117 陥し穴状遺構** (図版153k・155a、写真図版159a)

285(330)cm±×55(15)cm±の規模をもち、深さ120cm±を計る。遺跡中央部よりやや北寄りに位置し、北東に下る緩斜面の上方で標高202.1m±のところに在る。長軸は斜面に対しやや斜めの方向にあり、N-53°-Eの方向を示す。当遺構は南東壁中央でD III-154ピットと重複しているが、新旧は不明である。埋土は次の4層で構成されている。上部上半の僅かに火山灰粒と炭化物の含む黒褐色土、上部下半の硬い暗褐色土、中層のルーズな火山灰層、下層の柔かく僅かに黒土の混じる暗褐色土以上4層である。長軸の両端下部はかなり奥に挟り込まれており、床面はほぼ平坦である。

**D III-118 陥し穴状遺構** (図版153l・155b)

150cm±×90(12)cm±の規模をもち、深さ126cm±を計る。遺跡中央部のやや北東部に位置し、東に下る緩斜面の上方で標高201.1m±のところに在る。長軸は斜面に対し斜めの方向にあり、N-26°-Wの方向を示す。当遺構は北側でD III-8住居址とD III-64フラスコ形ピットと重複しているが、新旧関係についてはわからなかった。埋土は上部にクロボクを持ち、他はすべて汚れ火山灰より構成されており、部分的に黒土がブロック状に認められる。

**D III-119 陥し穴状遺構** (図版153m・155c、写真図版159b)

230(200)cm±×108(200)cm±の規模をもち、深さ140cm±を計る。遺跡中央部のやや北東部

寄りに位置し、東に下る緩斜面の上方で標高 201.4m 土のところに在る。長軸は斜面に対し斜めの方向にあり、N-49°-W の方向を示す。長軸の両端下部が奥にやや挟り込まれており、やや底部幅が広い。埋土については図面不備のため省略する。

#### D III-120 陥し穴状遺構 (図版153n)

140(130)cm 土×30 (15) cm 土の規模をもち、深さ 81cm 土を計る。遺跡中央部の北側に位置し、東に下る緩斜面の上方で標高 201.4m 土のところに在る。長軸は斜面に対し斜めの方向にあり、N-26°-W の方向を示す。長軸の南端下部が奥に挟り込まれている。埋土については、図画が不備のため省略する。

#### D III-121 陥し穴状遺構 (図版153o)

160(135)cm 土×40 (13) cm 土の規模をもち、深さ 67cm 土を計る。遺跡中央部よりやや北東寄りに位置し、標高 201.0m 土のところに在る。長軸は N-25°-W の方向を示す。当遺構は北西部で D III-66 ビーカー形ピットと重複しているが、新旧関係については不明である。埋土については図面不備のため省略する。 (高橋信雄)

### D IV 区 (実数12基)

#### D IV-101 陥し穴状遺構 (図版155 d・156 c)

403(347)cm 土×68 (15) cm 土の規模をもち、深さ 100 cm 土を計る。遺跡の北東部に位置し、東に下る緩斜面で標高 199.1m 土のところに在る。長軸は斜面に対し直交し、N-90°-W の方向を示す。当遺構は西端で D IV-112 陥し穴状遺構と重複しているが、新旧関係は不明である。埋土は大別して 3 層に分けられる。上層は僅かに焼土と炭化物を含むクロボクと暗褐色土よりなり、中層は僅かに炭化物を含むルーズな汚れ火山灰層で、下層には火山灰がブロック状に入る暗褐色土がみられる。横断面は上面が最も広く、中位より細くほぼ垂直に下り床面は平坦な形を呈する。上部は崩壊により広がったものと思われる。床面はほぼ平坦である。東側の一部は掘り過ぎている。

#### D IV-102 陥し穴状遺構 (図版155 e・156 d、写真図版159 d)

346(365)cm 土×77 (20) cm 土の規模をもち、深さ 152 cm 土を計る。遺跡の北東部に位置し、東に下る緩斜面で標高 199.1m 土のところに在る。長軸は斜面に対し斜めの方向にあり、N-56°-W の方向を示す。埋土は上部にレンズ状のクロボクの堆積がみられ、その下に暗褐色土をもち、中位以下はルーズな汚れ火山灰主体の黄褐色土よりなる。

#### D IV-103 陥し穴状遺構 (図版155 f・156 e)

337(330)cm 土×95 (12) cm 土の規模をもち、深さ 145 cm 土を計る。遺跡の北東部に位置し、

東に下る緩斜面の標高 198.5m 土のところに在る。長軸は斜面に対し斜めの方向にあり、N-27°-W の方向を示す。当遺構は東端で D IV-ピーカー形ピットと接しているが、新旧関係は不明である。埋土は大別して 3 層に分けられる。上層はクロボクを中央に黒褐色と暗褐色土をもち、中層は厚くルーズな火山灰主体の黄褐色が堆積し、下層には薄く暗褐色がみられる。横断は上部が上に向って開く形を呈し、中位以下は細長く垂直に下る形を呈する。

#### D IV-104 陥し穴状遺構 (図版155g・156f)

342(390)cm 土×60 (22) cm 土の規模をもち、深さ 137 cm 土を計る。遺跡の北東部に位置し、東に下る緩斜面で標高 198.9m 土のところに在る。長軸は斜面に対し斜めの方向にあり、N-28°-W の方向を示す。埋土は大別して 3 層に分けられる。上層はクロボクを主体にするが火山灰の大ブロックがいくつかみられる層よりなり、中層には厚く汚れ火山灰が堆積し、最下部には薄く暗褐色土がみられる。長軸の両下端とも奥に抉りこまれている。

#### D IV-105 陥し穴状遺構 (図版155h、写真図版159e)

350(342)cm 土×62 (15) cm 土の規模をもち、深さ 98 cm 土を計る。遺跡の北東部に位置し、東に下る緩斜面の標高 198.8m 土のところに在る。長軸は斜面に対し斜めの方向にあり、N-33°-W の方向を示す。底面のレベルは南東に向い 5 cm 土低くなっている。埋土については図面不備のため省略する。

#### D IV-106 陥し穴状遺構 (図版155i・156g、写真図版159f)

323(356)cm 土×75 (10) cm 土の規模をもち、深さ 120 cm 土を計る。遺跡の中央部より北東寄りに位置し、東に下る緩斜面の標高 199.6m 土のところに在る。長軸は斜面に対し斜めの方向にあり、N-38°-W の方向を示す。埋土は大別して 2 層に分けられる。上層は中央部にクロボクをもち壁際とその下に暗褐色土が入る。下層は火山灰主体のルーズな褐色土よりなるが、火山灰の汚れ具合によりいくつか細分される。横断面は上部が広く除々に狭まり、中位より垂直に下る。上部は崩壊により広がったものと思われる。縦断面は両端とも下部が奥に抉りこまれており、底面のレベルは南東部に向い 20 cm 土低くなっている。

#### D IV-107 陥し穴状遺構 (図版155j・156h、写真図版160a・167c)

352(327)cm 土×60 (9) cm 土の規模をもち、深さ 128 cm 土を計る。遺跡の中央部より北東寄りに位置し、東に下る緩斜面の標高 199.7m 土のところに在る。長軸は斜面に対し斜めの方向にあり、N-29°-W の方向を示す。埋土は大別して次の 4 層に分けられる。上部は僅かに炭化物を含む黒褐色土よりなり、次に火山灰主体の褐色土が厚く堆積し、中位に薄くクロボク混じりの褐色土が入り、その下の層は再び汚れ火山灰主体の層がみられる。横断面は上部が広がりをもち、下部は細長い「U」字状を呈する。上部は崩壊により広がったものと思われる。床面は中央部に向い 5 cm 土低くなっている。

**D IV - 108 陥し穴状遺構 (図版155k・156i、写真図版160b)**

400(367)cm±×96(15)cm±の規模をもち、深さ108cm±を計る。遺跡の中央部より北東寄りに位置し、東に下る緩斜面の標高199.3m±のところに在る。長軸は斜面に対し斜めの方向にあり、N-33°-Wの方向を示す。埋土は上部中央にクロボクをもち壁際に黒褐色土が入っており、それ以下は汚れ火山灰層より構成されていて、汚れ具合によりかなり細分される。横断面は南部上半がかなり広がっており、 $\frac{2}{3}$ 下のところよりほぼ垂直に下る。上部は崩壊により広がったものと思われる。長軸の南東端下部がやや奥に挟りこまれており、床面のレベルは中央部が4cm±低くなっている。

**D IV - 109 陥し穴状遺構 (図版155l・156j、写真図版160c)**

373(340)cm±×92(15)cm±の規模をもち、深さ128cm±を計る。遺跡の中央部より北東寄りに位置し、東に下る緩斜面の標高199.2m±のところに在る。長軸は斜面に対し斜めの方向にあり、N-54°-Wの方向を示す。埋土は大別して3層に分けられる。上層は中央部にクロボクをもちその下の暗褐色土よりなり、中層は厚く下位まであり汚れ火山灰層で構成され中位に僅かに粒状の炭化物を含む。下層は最下部に薄くみられる層で非常に柔かい汚れの強い火山灰が堆積している。横断面は上面が最も広く除々にすぼまり、中位よりほぼ垂直に下る。底面は東側に向い10cm±低くなっている。

**D IV - 110 陥し穴状遺構 (図版155m・156k)**

425(397)cm±×95(25)cm±の規模をもち、深さ173cm±を計る。遺跡の中央部より北東寄りに位置し、東に下る緩斜面の標高198.6m±のところに在る。長軸は斜面に対し斜めの方向にあり、N-39°-Wの方向を示す。埋土は上部にクロボクをもち、その下と両側に火山灰粒と炭化物の含む暗褐色土がみられ中位以下は汚れ火山灰層で構成されているが、下位に薄く炭化物の含む暗褐色土が入り、その下に再び火山灰層がみられ最下部に再び暗褐色土が薄く堆積している。横断面は上半がゆるやかに開く形を呈する。上部は崩壊により広がったものと思われる。長軸の両端とも下部が奥に挟りこまれており、底部は東側がやや屈曲しており3cm±低くなっている。

**D IV - 111 陥し穴状遺構 (図版156a・l、写真図版160d)**

380(352)cm±×37(20)cm±の規模をもち、深さ92cm±を計る。遺跡の中央部の北東寄りに位置し、東に下る緩斜面の標高200.0m±のところに在る。長軸は斜面に対しほぼ直交し、N-80°-Eの方向を示す。埋土は上位に黒褐色土と暗褐色土、中位上半に薄く火山灰主体の黄褐色土がみられ、その下にクロボクと火山灰粒の混じった非常に柔かい黒褐色土が堆積し、下位に火山灰主体の明褐色土がみられる。底面は東に向い30cm±低くなっている。

**D IV - 112 陥し穴状遺構 (図版156b)**

197(216)cm±×82(14)cm±の規模をもち、深さ116cm±を計る。遺跡の北東部に位置し、東に下る緩斜面の標高199.1m±のところに在る。長軸は斜面に対し斜めの方向にあり、N-29°-Wの方向を示す。当遺構は北端でDⅣ-101陥し穴状遺構と重複しているが、新旧関係をつかまえることが出来なかった。長軸の両端下部が奥に挟りこまれており袋状を呈する。埋土は図面不備のため省略する。(高橋信雄)

## EⅡ区(実数10基)

### EⅡ-101陥し穴状遺構(図版157a・158a、写真図版160e)

330(328)cm±×56(8)cm±の規模をもち、深さ79cm±を計る。遺跡中央部の西端に位置し、標高205.0m±のところに在る。長軸はN-22°-Wの方向を示す。当遺構は南端でEⅡ-1住居址と接しているが、新旧関係をつかまえることが出来なかった。埋土は上面に僅かに炭化物と焼土を含む火山灰主体の褐色土をもちその下にクロボク、中位に僅かに炭化物の含む汚れ火山灰層、下位に炭化物を含みクロボクと火山灰の混在した暗褐色土がみられる。横断面は中位より上が開く形を呈する。長軸の北端下部が奥に挟りこまれており、レベルも北に向い17cm±低くなっている。

### EⅡ-102陥し穴状遺構(図版157b・158b)

323(295)cm±×72(13)cm±、深さ126cm±の規模をもち。遺跡中央部の西端に位置し標高205.0m±のところに在る。長軸はN-42°-Wの方向を示す。埋土は、3層に大別される。上層は僅かに炭化物と焼土を含む黒褐色土、中層は厚くルーズな汚れ火山灰層が堆積しており、部分的にクロボクのブロックや炭化物の混入がみられる。下層は最下部に薄くみられる炭化物とクロボクの混じった層である。底部はやや屈曲しており、南東部がやや細くなっている。床面はほぼ平坦である。

### EⅡ-103陥し穴状遺構(図版157c・158c)

215(187)cm±×116(20)cm±の規模をもち、深さ138cm±を計る。遺跡中央部の北西寄りに位置し、東に下る緩斜面の標高203.8m±のところに在る。長軸は斜面に対し平行し、N-12°-Eの方向を示す。長軸の北端下部は奥に挟りこまれており、床面はほぼ平坦である。埋土は図面不備のため省略する。

### EⅡ-104陥し穴状遺構(図版157d・158d、写真図版160f)

265(248)cm±×63(15)cm±の規模をもち、深さ84cm±を計る。遺跡中央の西寄りに位置し、東に下る緩斜面の上方で標高204.7m±のところに在る。長軸は斜面に対しほぼ平行し、N-13°-Eの方向を示す。当遺構は南端でEⅡ-17住居址と重複している。住居址を切り込んで作

られており、住居址よりも新しい陥し穴状遺構である。埋土は上面にクロボクをもち、他はほとんど汚れ火山灰で構成されているが、下部に薄くややクロボクの目立つ層がみられる。横断面は上面が最も広く徐々に狭まくなり $\frac{1}{2}$ ほどのところよりほぼ垂直に下る形を呈するが、上部は崩壊により広がったものと思われる。床面はほぼ平坦である。

#### E II-105 陥し穴状遺構 (図版157e・158e、写真図版161a)

260(262)cm $\pm$ ×60(15)cm $\pm$ の規模をもち、深さ90cm $\pm$ を計る。遺跡中央の西寄りに位置し、東に下る緩斜面の上方で標高204.5m $\pm$ のところにある。長軸は斜面に対しほぼ平行し、N-13°-Eの方向を示す。上面プランがやや不整であるが、崩壊による違いであると思われる。長軸の両端下部が奥に挟りこまれており、袋状を呈する。床面はやや屈曲しており、北側に向い10cm $\pm$ 低くなっている。埋土については図面不備のため省略する。

#### E II-106 陥し穴状遺構 (図版157f・158f)

150cm $\pm$ ×35(17)cm $\pm$ の規模をもち、深さ86cm $\pm$ を計る。遺跡のほぼ中央部に位置し、東に下る緩斜面の標高204.2m $\pm$ のところにある。長軸は斜面に対し平行し、N-23°-Eの方向を示す。当遺構は北側でE II-59フラスコ形ピットと南側でE II-60フラスコ形ピットと重複している。E II-59フラスコ形ピットを切り込んで当陥し穴状遺構が作られているが、E II-60フラスコ形ピットとの新旧関係はとらえることが出来なかった。埋土は5層に大別される。上位より、黒褐色土、僅かに焼土と炭化物を含む火山灰主体の褐色土、僅かに炭化物を含む薄い堆積の暗褐色土、ルーズな汚れ火山灰層、最下部の僅かに炭化物の含む非常に柔らかい暗褐色土の薄い層以上5層より構成されている。両端が重複しているため正確でないが底面は北に向って若干低くなっている。

#### E II-107 陥し穴状遺構 (図版157g・158h)

263(264)cm $\pm$ ×25(15)cm $\pm$ の規模をもち、深さ29cm $\pm$ を計る。遺跡のほぼ中央部に位置し、東に下る緩斜面の上方で標高204.0m $\pm$ のところにある。長軸は斜面に対しほぼ平行し、N-32°-Eの方向を示す。当遺構は南端でE II-20住居址と重複しており、住居址を当陥し穴状遺構が切り込んで作っている。全体に上面を調査の段階で掘り過ぎておりレベルに若干の違いがあると思われる、また埋土についても図面が不備のため省略する。

#### E II-108 陥し穴状遺構 (図版157h・158g、写真図版161b)

345(320)cm $\pm$ ×50(10)cm $\pm$ の規模をもち、深さ96cm $\pm$ を計る。遺跡の中央部やや南西寄りに位置し、東に下る緩斜面の上部で標高204.5m $\pm$ のところにある。長軸は斜面に対しほぼ直交し、N-89°-Eの方向を示す。当遺構はE II-24住居址とE II-25住居址との間にあり、いずれの住居址とも重複しており、どちらの住居址をも当陥し穴状遺構が切りこんで作っている。埋土については図面不明のため省略する。

#### E II-109 陥し穴状遺構 (図版157i・158i・写真図版161c)

320(330)cm±×55(17)cm±の規模をもち、深さ94cm±を計る。遺跡の中央部やや南西寄りに位置し、東に下る緩斜面の標高204.1m±のところに在る。長軸は斜面に対し斜めの方向にあり、N-57°-Wの方向を示す。当遺構の南東部半分がE II-28住居址と重複関係にあり、陥し穴状遺構が住居址よりも新しいことが確認された。長軸の北西端下部が奥に抉りこまれており、床面はほぼ平坦である。埋土は図面不備のため省略する。

#### E II-110 陥し穴状遺構 (図版157i・158j)

160(166)cm±×50(22)cm±の規模をもち、深さ85cm±を計る。遺跡中央部の西端に位置し、標高204.8m±のところに在る。長軸はN-23°-Eの方向を示す。当遺構はE II-2住居址内に200(190)cm±×97(28)cm±の規模をもち、深さ127cm±を計る。当遺構はE II-2住居址内にあり、E II-51フラスコ形ピットとも重複している。住居址よりも新しいことが確認されたがフラスコ形ピットとの新旧関係はつかまえることが出来なかった。埋土については図面が不備のため省略する。  
(高橋信雄)

### E III区 (実数10基)

#### E III-101 陥し穴状遺構 (図版158a・k、写真図版161d)

235(285)cm±×75(28)cm±の規模をもち、深さ142cm±を計る。遺跡中央部北寄りに位置し、東に下る緩斜面の標高202.8m±のところに在る。長軸は斜面に対し斜めの方向にあり、N-35°-Wの方向を示す。当遺構はE III-1住居址と接しており、住居址を切り込んで作られている。長軸の両端とも下部が抉りこまれており袋状を呈する。床面は中央部で5cmほど低くなっている。埋土については図面不備のため省略する。

#### E III-102 陥し穴状遺構 (図版158b・l、写真図版161e)

236(240)cm±×60(34)cm±の規模をもち、深さ140cm±を計る。遺跡中央部北寄りに位置し、東に下る緩斜面の標高202.8m±のところに在る。長軸は斜面に対し斜めの方向にあり、N-30°-Wの方向を示す。当遺構は北端でE II-1住居址と重複しており、住居址を切りこんで作られている。埋土は上部にクロボクと暗褐色土をもち、中層は厚くルーズな汚れ火山灰が堆積し、最下部に薄くクロボクがみられる。横断面は上半が広く、中位より下は細長い形を呈する。上部は崩壊により広がったものと思われる。長軸の南端下部が奥に抉りこまれており、床面は両端より中央部が広がり、7cm±低くなっている。

#### E III-103 陥し穴状遺構 (図版158c・m)

371(366)cm±×70(34)cm±の規模をもち、E II-2住居址床面より58cm±の深さを計る。

遺跡の中央部北寄りに位置し、東に下る緩斜面の標高 202.5m 土のところに在る。長軸は斜面に対し斜めの方向にあり、N-35°-W の方向を示す。当遺構は南側で E III-2 住居址と重複している。当陥し穴状遺構と住居址との重複部分には住居址の貼り床がみられ、また当遺構の上に炉が構築されていたこと等により、E III-2 住居址よりも古い陥し穴状遺構であることが確認された。埋土は上面に火山灰主体の褐色土による貼り床、その下に僅かに炭化物の含む黄褐色土、最下部にはクロボクと火山灰の混在した黒褐色土がみられる。住居址外の部分では上面に暗褐色土の堆積がみられた。長軸の南端は奥に挟りこまれており、床面は中央から南に向って 12cm 土低くなっている。

#### E III-104 陥し穴状遺構 (図版158d・159a)

190(140)cm 土×80(47)cm 土の規模をもち、深さ 70cm 土を計る。遺跡中央の東に位置し、東に下る緩斜面の標高 201.3m 土のところに在る。長軸は斜面に対しほぼ直交し、N-6°-W の方向を示す。埋土は上部に炭化物と焼土を僅かに含む黒褐色土、中位に粒状の焼土と炭化物を含むクロボク、下部にやや汚れた火山灰がみられる。当遺構は長軸と短軸の比率が極端に小さく、底部もかなり屈曲しており、他の陥し穴状遺構と趣を異にする。

#### E III-105 陥し穴状遺構 (図版158・159b、写真図版161f)

280(332)cm 土×60(14)cm 土の規模をもち、深さ 87cm 土を計る。遺跡の中央部に位置し、東に下る緩斜面の標高 203.2m 土のところに在る。長軸は斜面に対しほぼ平行し、N-2°-E の方向を示す。埋土は上部中央に黒褐色土、中位にブロック状に暗褐色土がみられる他は火山灰主体の褐色土で構成されている。横断面は上部が広く上に向って開く形を呈し、中位以下は細長い形を呈する。上部は崩壊により広がったものと思われる。長軸の両端下部が奥に挟りこまれており袋状を呈する。床面はほぼ平坦である。

#### E III-106 陥し穴状遺構 (図版158f・写真図版162a)

345(349)cm 土×55(16)cm 土の規模をもち、深さ 64cm 土を計る。遺跡のほぼ中央部に位置し、東に下る緩斜面の標高 202.5m 土のところに在る。長軸は斜面に対しほぼ平行し、N-30°-E の方向を示す。長軸の南端下部が奥に挟りこまれており、床面は南に向い 20cm 土低くなっている。床面の幅がかなり不規則である。埋土については、図面が不備のため省略する。

#### E III-107 陥し穴状遺構 (図版158h・159c)

277(257)cm 土×68(21)cm 土の規模をもち、深さ 95cm 土を計る。遺跡の中央部に位置し、東に下る緩斜面の標高 202.5m 土のところに在る。長軸は斜面に対しほぼ平行し、N-28°-E の方向を示す。埋土は上半に炭化物を僅かに含む暗褐色土と黒褐色土、下半は部分的にクロボクの点在がみられる火山主体のルーズな黄褐色土で構成されている。横断面は上面がやや開く「U」字状を呈する。床面は幅にかなり不規則なところもみられ、南に向い 15cm 土低くなっている。



**E III-108 陥し穴状遺構** (図版158g・159d、写真図版162b)

350(350)cm±×50(12)cm±の規模をもち、深さ112cm±を計る。遺跡の中央部より南東寄りに位置し、東に下る緩斜面の標高202.2m±のところに在る。長軸は斜面に対し斜めの方向にあり、N-45°-Wの方向を示す。当遺構は北端でE III-60フラスコ形ピットと北端でE III-154ピットと重複している。E III-60フラスコ形ピットより当陥し穴状遺構が新しいことは確認したがE III-154ピットとの新旧関係はとらえることが出来なかった。埋土は上層に炭化物を僅かに含む暗褐色土、中層は厚く火山灰主体の褐色土が厚く堆積し、最下部に再び暗褐色土がみられる。横断面は上半が上に向かって広がり、下半は「U」字状を呈する。長軸の北端下部が奥に挟りこまれており、床面はほぼ平坦である。

**E III-109 陥し穴状遺構** (図版158i・159e、写真図版162c)

358(356)cm±×60(12)cm±の規模をもち、深さ145cm±を計る。遺跡中央部の南寄りに位置し、東に下る緩斜面の標高203.1m±のところに在る。長軸は斜面に対しやや斜めの方向にありN-10°-Wの方向を示す。当遺構は東側でE III-6住居址と接しており、住居址よりも新しい陥し穴状遺構であることが確認された。埋土は全体にクロボクが主体を占め、中位と最下部に薄く火山灰の層がみられる、他に火山灰は小ブロック状でしかみられない。床面は南に向い12cm±低くなっている。

**E III-110 陥し穴状遺構** (図版158j、写真図版162d)

335(308)cm±×42(14)cm±の規模をもち、深さ110cm±を計る。遺跡の東側に位置し、東に下る緩斜面の標高201.2m±のところに在る。長軸は斜面に対しほぼ平行し、N-15°-Eの方向を示す。埋土については図面不備のため省略する。(高橋信雄)

**E IV区 (実数4基)**

**E IV-101 陥し穴状遺構** (図版159f・j、写真図版162e)

345(317)cm±×60(12)cm±の規模をもち、深さ133cm±を計る。遺跡の東側に位置し、東に下る緩斜面の標高200.4m±のところに在る。長軸は斜面に対し斜めの方向にあり、N-26°-Wの方向を示す。埋土は上部にクロボクと少量の炭化物を含む黒褐色土がみられ下部はほとんど火山灰主体の褐色土よりなるが、中位に僅かに炭化物の含む薄い暗褐色土の層がみられる。横断面は上面が最も広く徐々に狭まり約2/3ほどのところよりほぼ垂直に下る。上部は崩壊によって広がったものと思われる。底部は南に向い10cm±低くなっている。

**E IV-102 陥し穴状遺構** (図版159g・k、写真図版162f)

374(380)cm±×65(14)cm±の規模をもち、深さ120cm±を計る。遺跡の東側に位置し、東

に下る緩斜面の標高 200.1m 土のところに在る。長軸は斜面に対し斜めの方向にあり、N-45°-W の方向を示す。当遺構は中央部で E IV-53 フラスコ形ピットと重複している。当陥し穴状遺構がフラスコ形ピットを切り込んで掘られていた。埋土は 3 層に大別される。上層は焼土・炭化物を僅かに含む黒褐色土、中層は汚れ火山灰、下層は黒褐色土で構成されている。長軸の両端とも下部が奥に挟りこまれており、床面は南に向い 4 cm 土ひくくなっている。

#### E IV-103 陥し穴状遺構 (図版159h、写真図版163a)

405(390)cm 土×70 (14) cm 土の規模をもち、深さ 161 cm 土を計る。遺跡の東側に位置し、東に下る緩斜面の標高 200.5m 土のところに在る。長軸は斜面に対し斜めの方向にあり、N-23°-W の方向を示す。長軸の北西端下部が奥に挟りこまれており、東南部に向い 12cm 土低くなっている。埋土については、図面不備のため省略する。

#### E IV-104 陥し穴状遺構 (図版159i)

282(278)cm 土×70 (8) cm 土の規模をもち、深さ 136 cm 土を計る。遺跡の東側に位置し、東に下る緩斜面の標高 199.6m 土のところに在る。長軸は斜面に対し斜めの方向にあり、N-38°-W の方向を示す。当遺構は南側で E IV-5 住居址を切り込んで掘りこまれていた。床面は中央部が 8 cm 土低くなっている。埋土は図面不備のため省略する。 (高橋信雄)

### F II 区 (実数10基)

#### F II-101 陥し穴状遺構 (図版159m・160i)

160(118)cm 土×66 (10) cm 土の規模をもち、深さ 96cm 土を計る。遺跡の中央部南西寄りに位置し、標高 205.0m 土のところに在る。長軸は N-62°-E の方向を示す。当遺構は F II-3 住居址内にあるが、住居址を切り込んで掘られている。埋土は上部に黒褐色土、それ以下は火山灰主体の黄褐色土で構成されている。全体に摺鉢状の落ち込みを呈する。

#### F II-102 陥し穴状遺構 (図版159l・160j、写真図版163b)

171(130)cm 土×90 (15) cm 土の規模をもち、深さ 118 cm 土を計る。遺跡の中央部南西寄りに位置し、標高 205.0m 土のところに在る。長軸は N-68°-E の方向を示す。当遺構は F II-3 住居址と重複しており、住居址を切り込んで掘られている。埋土は上部にクロボクをもち、それ以下は汚れ火山灰層で構成されている。横断面は上部が広く徐々に狭まくなり、傾斜のきつい摺鉢状を呈する。上部は崩壊により広がったものと思われる。底面はほぼ平坦である。

#### F II-103 陥し穴状遺構 (図版160a・k、写真図版163c)

190(146)cm 土×90 (11) cm 土の規模をもち、深さ 114 cm 土を計る。遺跡の中央部南西寄りに位置し、標高 204.9m 土のところに在る。長軸は N-46°-E の方向を示す。埋土は上部にクロ

ボクをもち、中～下位にかけては汚れ火山灰がみられる。横断面は傾斜のきつい摺鉢状を呈する。北に向い4 cm±低くなっている。

**F II-104 陥し穴状遺構** (図版160c・1、写真図版163d・167d)

390(422)cm±×35(8) cm±の規模をもち、深さ108 cm±を計る。遺跡の中央部南寄りに位置し、東に下る緩斜面の上部で標高 204.3m±のところにある。長軸は斜面に対し直交し、N-79°-Wの方向を示す。当遺構はF II-7住居址とF II-105陥し穴状遺構と重複している。当陥し穴遺構が住居址よりも新しいことが確認出来たが、F II-105陥し穴状遺構との新旧関係は不明である。埋土は全体に暗褐色土及び黒褐色土を主体に構成されており、火山灰は上部下方及び中位に薄くみられるのと下部にみられる層だけである。横断面は上部に広がりをもたず底部まで急傾斜で落ち込んでいる。崩壊が少なかったものと思われる。長軸の両端とも下部が奥に挟りこまれており、底部は中央部から両端に向い10cm±低くなっている。

**F II-105 陥し穴状遺構** (図版160d・m)

325(370)cm±×35(15) cm±の規模をもち、深さ94cm±を計る。遺跡の中央部南寄りに位置し、東に下る緩斜面の標高 204.4 m±のところにある。長軸は斜面に対し斜めの方向にあり、N-51°-Wの方向を示す。当遺構はF II-11住居址とF II-104陥し穴状遺構と重複している。当陥し穴状遺構が住居址よりも新しいことは確認できたが、F II-104陥し穴状遺構との新旧関係はとらえることが出来なかった。埋土は上層にクロボクと火山灰の混在した暗褐色土、中層に火山灰主体のルーズな黄褐色土、下層に柔らかい黒褐色土以上の3層より構成されている。横断面は上部の幅が広くなく、やや底部幅の狭まい台形を呈する。縦断面は中央部が10cm±低く両端下部が奥に挟りこまれており袋状を呈する。

**F II-106 陥し穴状遺構** (図版160e、写真図版163e)

360(352)cm±×38(16) cm±の規模をもち、深さ87cm±を計る。遺跡の中央部南寄りに位置し、東に下る緩斜面の標高 204.5m±のところにある。長軸は斜面に対し斜めの方向にあり、N-51°-Wの方向を示す。当遺構はF II-11住居址及びF II-12住居址と重複関係にあるが、いずれの住居址をも切り込んで作られており、どちらの住居址よりも新しい陥し穴状遺構であることが確認された。横断面は上部があまり広くなく上方がやや広い台形を呈する。床面は中央部が5 cm±低くなっている。埋土については図面不備のため省略する。

**F II-107 陥し穴状遺構** (図版160f・n)

305(323)cm±×75(15) cm±の規模をもち、深さ118 cm±を計る。遺跡の中央部南寄りに位置し、東に下る緩斜面の標高 204.7m±のところにある。長軸は斜面に対し斜めの方向にあり、N-71°-Wの方向を示す。当遺構はF II-10住居址を切り込んで作られており、住居址よりも新しい陥し穴状遺構である。埋土は上位からクロボク、暗褐色土、茶褐色土、汚れ火山灰層、

最下部のクロボク以上5層で構成されている。横断面は上面が最も広く除々に狭まくなり、中位よりほぼ垂直に下り、底面は平坦な形を呈する。上部は崩壊により広がったものと思われる。底面は中央部が16cm±低くなっている。

#### F II-108 陥し穴状遺構 (図版160b・161a)

156(75) cm±×85 (20) cm±の規模をもち、深さ108 cm±を計る。遺跡中央部の南西に位置し、標高 205.0m±のところにいる。長軸はN-85°-Wの方向を示す。埋土は上部に炭化物を僅かに含む暗褐色土と黒褐色土、中層に厚く火山灰主体の明褐色土、最下部にやはり火山灰主体の明褐色土の以上大別して3層に分けられる。長軸と短軸の比率が小さく、全体にやや細長い摺鉢状の落ちこみを示す。

#### F II-109 陥し穴状遺構 (図版160g・161c、写真図版163f)

290(260)cm±×60 (15) cm±の規模をもち、深さ83cm±を計る。遺跡中央部の南に位置し、東に下る緩斜面の標高 204.0m±のところにいる。長軸は斜面に対し直交し、N-88°-Wの方向を示す。当遺構は西端でF II-110 陥し穴状遺構と重複しており、当陥し穴状遺構がF II-110 陥し穴状遺構を切り込んで作られており、新しいことが確認された。埋土は上部に火山灰粒と焼土を含むクロボクの層、中層の火山灰主体のルーズな褐色土、下層の火山灰とクロボクの混在した黒褐色土、以上3層に大別される。床面は東に向い20cm±低くなっている。

#### F II-110 陥し穴状遺構 (図版160h・161b、写真図版164a)

370(342)cm±×52 (12) cm±の規模をもち、深さ90cm±を計る。遺跡中央部の南に位置し、東に下る緩斜面の標高 204.0m±のところにいる。長軸は斜面に対し平行し、N-8°-Eの方向を示す。当遺構の北端がF II-109 陥し穴状遺構に切られている。埋土は上部に黒褐色土、その下は火山灰主体の層がみられる。  
(高橋信雄)

### F III区 (実数4基)

#### F III-101 陥し穴状遺構 (図版161d・h、写真図版164b)

370(357)cm±×35 (14) cm±の規模をもち、深さ119 cm±を計る。遺跡中央部の南に位置し、東に下る緩斜面の標高 203.5m±のところにいる。長軸は斜面に対しほぼ平行し、N-10°-Wの方向を示す。当遺構の南半分はF III-2 住居址と重複しており、当遺構が住居址を切って作られている。埋土は上層に暗褐色土、中層に火山灰主体で僅かに炭化物と焼土を含む褐色土が入り、下層は中間に汚れ火山灰層を挟さむ形で黒褐色土が堆積している。上方の黒褐色土には僅かに炭化物を含む。床面は中央部が12cm±低くなっている。北側の上面プランが広がっているが、一部調査の際掘り過ぎた部分である。

### F III-102 陥し穴状遺構 (図版161e・i)

375(400)cm±×52(8)cm±の規模をもち、深さ92cm±を計る。遺跡中央部の南に位置し、東に下る緩斜面の標高 202.8m±のところにある。長軸は斜面に対し斜めの方向にあり、N-50°-Eの方向を示す。埋土は大別して次の5層に分けられる。最上部は僅かに焼土を含む黒褐色土、次に汚れ火山灰、その下に僅かに炭化物を含む黒褐色土以上が上層を形成し、中層は僅かに焼土を含むルーズな汚れ火山灰が占め、下層には僅かに炭化物を含み火山灰が粒状に点在する黒褐色がみられる。横断面は急傾斜で落ちこむ上方のやや広い「U」字状を呈する。縦断面は両端下部が奥に挟りこまれており、底部は北東部に向い17cm±低くなっている。

### F III-103 陥し穴状遺構 (図版161f・j、写真図版164c)

360(348)cm±×54(13)cm±の規模をもち、深さは96cm±を計る。遺跡中央部の南に位置し、東に下る緩斜面の標高 203.5m±のところにある。長軸は斜面に対し直交に近い斜めの方向にあり、N-83°-Eの方向を示す。埋土は次の4層に大別される。上部はクロボクと黒褐色土、中位上部はクロボクのにじみがみられる火山灰主体の褐色土で中位下部は柔らかい暗褐色土、そして最下部に火山灰主体の褐色土がみられる。横断面は上部が両側に広がるが、ほぼ垂直に近い角度で下る形を呈する。当遺構は西側でF II-8住居址と東側でF II-4住居址と重複しているが、いずれも新旧関係については不明である。床面は西に向い5cm±低くなっている。

### F III-105 陥し穴状遺構 (図版161g・m、写真図版164d・167e)

406(380)cm±×75(13)cm±の規模をもち、深さ107cm±を計る。遺跡中央部の南に位置し、東に下る緩斜面の標高 203.1m±のところにある。埋土は上半はクロボク主体の層で、部分的に火山灰がブロック状あるいは粒状に混入しているし、下半部は火山灰主体のルーズな黄褐色土の大別して2層より構成されている。横断面は上方が広く除々に狭まり中位で段をもち急に下る形を呈する。上部は崩壊によって広がったものと思われる。床面は東に向い20cm±低くなっている。  
(高橋信雄)

## F IV区 (実数4基)

### F IV-101 陥し穴状遺構 (図版161k、写真図版164e)

(320)cm±×58(10)cm±の規模をもち、深さ120cm±を計る。遺跡中央部の東に位置し、東に下る緩斜面の標高 199.6m±のところにある。長軸は斜面に対し斜めの方向にあり、N-25°-Wの方向を示す。当遺構はF IV-51フラスコ形ピットを切って作られており、フラスコ形ピットより新しい陥し穴状遺構である。床面はフラスコ形ピットより30cm±低く、ほぼ平坦である。埋土については図面不明のため省略する。

## F IV-102 陥し穴状遺構 (図版1611)

(276) cm±×42 (4) cm±の規模をもち、深さ100 cm±を計る。遺跡中央部の東に位置し、東に下る緩斜面の標高 200.0m±のところにある。長軸は斜面に対し斜めの方向にあり、N-32°-Wの方向を示すが、やや屈曲している。埋土については図面不備のため省略する。

## F IV-103 陥し穴状遺構 (図版162a、写真図版164f)

317(298)cm±×45 (14) cm±の規模をもち、深さ137 cm±を計る。遺跡の中央部の東に位置し、東に下る緩斜面の標高 200.3m±のところにある。長軸は斜面に対し斜めの方向にあり、N-25°-Wの方向を示す。底部は僅かに曲っており、南側に向い7 cm±低くなっている。埋土については図面不明のため省略する。

## F IV-104 陥し穴状遺構 (図版162b・c、写真図版165a)

370(408)cm±×63 (13) cm±の規模をもち、深さ135 cm±を計る。遺跡中央部の南東に位置し、東に下る斜面の標高 200.0m±のところにある。長軸は斜面に対し斜めの方向にあり、N-28°-Wの方向を示す。埋土は上部にクロボクと暗褐色土、中層は中間に薄く暗褐色土を挟んで火山灰主体の明褐色土、下位は暗褐色土と黒褐色土の大別して3層より構成されている。横断面は、上面が最も広く約1/2ほど下のところより段をもち急に落ち込む形を呈する。上部は崩壊により広がったものと思われる。縦断面は両端下部が奥に挟りこまれており袋状を呈する。床面はほぼ平坦である。

(高橋信雄)

## G II区 (実数7基)

## G II-101 陥し穴状遺構 (図版162d・163a)

(530) cm±×65 (23) cm±の規模をもち、深さ164 cm±を計る。遺跡の南側に位置し、東に下る緩斜面の上方で標高 205.0m±のところにある。長軸は斜面に対し平行し、N-27°-Eの方向を示す。当遺構はG II-51フラスコ形ピットを切り込んで作られている。埋土は上部の僅かに炭化物の含む暗褐色土以外はほとんど汚れ火山灰により構成されており、部分的に小ブロックでクロボクがみられる。特に最下部にクロボクがやや多い土が薄くみられる。横断面は上方がやや広がっているが、かなり急傾斜で落ちこむ形を呈する。床面は北に向い15cm±低くなっている。

## G II-102 陥し穴状遺構 (図版162e・163b、写真図版165b・c)

380(340)cm±×60 (8) cm±の規模をもち、深さ150 cm±を計る。遺跡の南側に位置し、東に下る緩斜面の上方で標高 205.3m±のところにある。長軸は斜面に対しほぼ直交し、N-88°-Eの方向を示す。埋土は次の3層に大別される。上層は焼土と炭化物を僅かに含む暗褐色土

中層は厚く汚れ火山灰層が堆積しており、下層は薄く炭化物と焼土を僅かに含む黒褐色土がみられる。底部はやや屈曲しているが、ほぼ平坦である。当遺構は調査の際部分的に掘りすぎた箇所がある。

**G II-103 陥し穴状遺構** (図版162f、写真図版165d)

220(198)cm±×68(15)cm±の規模をもち、深さ80cm±を計る。遺跡の南西に位置し、東に下る緩斜面の上方で標高206.3m±のところに在る。長軸は斜面に対しほぼ平行し、N-9°-Eの方向を示す。当遺構はG II-8住居址を切りこんで作られている。底部巾は南側がやや細くなっているが、床面はほぼ平坦である。埋土については図面が不備のため省略する。

**G II-104 陥し穴状遺構** (図版162g・写真図版167f)

415(不明)cm±×42(26)cm±の規模をもち、深さ100cm±を計る。遺跡の南西部に位置し、東に下る緩斜面の標高205.3m±のところに在る。長軸は斜面に対しほぼ平行し、N-34°-Eの方向を示す。当遺構はG II-10住居址とG II-56フラスコ形ピットと重複している。新旧関係は当陥し穴状遺構が住居址とフラスコ形ピットを切りこんで掘られており、それらよりも新しいことが確認された。埋土はすべて汚れ火山灰で構成されているが僅かな色の違いでいくつかに分けられ、最下部にやや汚れの強い火山灰がみられた。横断面は「U」字状を呈し、崩壊もあまり行なわれていないことから、この陥し穴状遺構は意識的に埋められた可能性が強い。

**G II-105 陥し穴状遺構** (図版162h、163c)

420(400)cm±×96(18)cm±の規模をもち、深さ180cm±を計る。遺跡の南側に位置し、東に下る緩斜面の標高204.7m±のところに在る。長軸は斜面に対しほぼ平行し、N-7°-Wの方向を示す。当遺構はG II-12住居址と重複関係にあり、住居址を切りこんで作られている。埋土は上部に炭化物と焼土を含む暗褐色土、中位に僅かに炭化物を含み、クロボクの混入した汚れ火山灰、下位にルーズな汚れ火山灰がみられ、最下部に薄く僅かに炭化物と焼土が混入した暗褐色土がみられる。床面はほぼ平坦である。

**G II-106 陥し穴状遺構** (図版162i・163d)

348(333)cm±×82(18)cm±の規模をもち、深さ89cm±を計る。遺跡の南側に位置し、東に下る緩斜面の標高204.5m±のところに在る。長軸は斜面に対しほぼ直交し、N-88°-Wの方向を示す。埋土は上半に僅かに炭化物と焼土の混入した黒褐色土、下半の汚れ火山灰より構成されている。構断面は上部が広く段をもって狭まり、下よりほぼ垂直に下り「U」字状を呈する。上部の広がりには崩壊によるものと思われる。底面は中央部が7cm±低くなっている。

**G II-107 陥し穴状遺構** (図版162j、写真図版165e)

400(347)cm±×76(9)cm±の規模をもち、深さ166cm±を計る。遺跡の南側に位置し、東に下る緩斜面の標高204.4m±のところに在る。長軸は斜面に対しほぼ平行し、N-15°-Eの

方向を示す。底部はやや屈曲しており、巾もやや不規則で、中央部が10cm±低くなっている。  
埋土については図面不備のため省略する。(高橋信雄)

### G III区 (実数5基)

#### G III-101 陥し穴状遺構 (図版163e・j、写真図版165f・168a)

395(380)cm±×70(18)cm±の規模をもち、深さ124cm±を計る。遺跡の南東部に位置し、東に下る緩斜面の標高202.9m±のところに在る。長軸は斜面に対しほぼ直交し、N-89°-Eの方向を示す。埋土は上部にクロボクをもち、その下にクロボクと火山灰粒の混在した暗褐色土及び褐色土がみられ、この中に土器片の混入がみられた。中位～下位にかけてはルーズな汚れ火山灰が厚く堆積し、最下部に薄く柔かい暗褐色土がみられる。横断面は上部が上に向かって開き、中位以下はほぼ垂直に下る「U」字状を呈する。床面は東に向い22cm±低くなっている。

#### G III-102 陥し穴状遺構 (図版163f・k、写真図版166a・168b)

477(355)cm±×82(22)cm±の規模をもち、深さ186cm±を計る。遺跡の南東部に位置し、東に下る緩斜面の標高203.1m±のところに在る。長軸は斜面に対しほぼ平行し、N-3°-Wの方向を示す。埋土は上部に火山灰粒の混入した黒褐色土、上部中央から中位にかけて中央に細くクロボク混じりの土がみられるが、その他はすべて火山灰主体の黄褐色土より構成されている。横断面は上部が広く上に向いて開く形を呈し、中位以下はほぼ垂直に下る「U」字状を呈する。長軸の両端30cm±がやや高く、そこから段をもって下り、中央部はほぼ平坦になる。

#### G III-103 陥し穴状遺構 (図版163g・164a、写真図版166b)

420(418)cm±×47(16)cm±の規模をもち、深さ142cm±を計る。遺跡の南東部に位置し、東に下る緩斜面の標高202.7m±のところに在る。長軸は斜面に対しほぼ平行し、N-26°-Eの方向を示す。埋土は上部にクロボクをもち、中位にクロボクが点在する褐色土がわずかにみられる他はほとんど火山灰主体の褐色、明褐色土より構成されており、色調等により細分される。上部がやや広がっているが全体に垂直に下る細長い「U」字状の横断面を呈する。床面は北に向い14cm±低くなっている。

#### G III-104 陥し穴状遺構 (図版163h・164b、写真図版166c・168c)

360(363)cm±×75(10)cm±の規模をもち、深さ145cm±を計る。遺跡の南東部に位置し、東に下る緩斜面の標高203.5m±のところに在る。長軸は斜面に対しほぼ直交し、N-82°-Wの方向を示す。埋土は上部にクロボクをもち、その下に火山灰主体の褐色土、中位上部に薄く黒褐色土があり、その下は火山灰主体のルーズな褐色土、最下部に薄くクロボクがみられる。横断面は僅かに広がっているが全体に細長い「U」字状を呈する。床面は東に向い15cm±低く



なっている。

#### G III-105 陥し穴状遺構 (図版163i・写真図版166d)

407(405)cm±×45(20)cm±の規模をもち、深さ132cm±を計る。遺跡の南東部に位置し、東に下る緩斜面の標高202.3m±のところに在る。長軸は斜面に対しほぼ平行し、N-8°-Eの方向を示す。埋土はあまり火山灰を含まずクロボク主体の層より構成されている。横断面はほぼ垂直に下る細長い「U」字状を呈するが、やや西側部分が抉りこまれている。床面は中央部から南側にかけて10cm±低くなっている。

### G IV区 (実数3基)

#### G IV-101 陥し穴状遺構 (図版164c・f、写真図版166e)

380(400)cm±×60(19)cm±の規模をもち、深さ140cm±を計る。遺跡の南東部に位置し、東に下る緩斜面の標高200.2m±のところに在る。長軸は斜面に対しやや斜めの方向にあり、N-37°-Eを示す。埋土は上部にクロボクをもち、中～下位にかけて厚く火山灰主体の黄褐色土が堆積し、最下部に薄くクロボクがみられる。横断面は中位より上は広く上に向かって開く形を呈し、中位以下は細長い「U」字状を呈する。長軸の南端下部が奥に抉りこまれており、レベルも南に向い14cm±低くなっている。

#### G IV-102 陥し穴状遺構 (図版164g・写真図版168d)

392(365)cm±×40(10)cm±の規模をもち、深さ127cm±を計る。遺跡の南東部に位置し、東に下る緩斜面の標高201.2m±のところに在る。長軸は斜面に対しやや斜めの方向にあり、N-17°-Wの方向を示す。埋土は全体にクロボク主体の層で構成されるが、中央部にやや火山灰粒を多く含んでいる。当遺構は一部上面がトレンチによって掘りこまれた。横断面は「U」字状を呈し、長軸の南端下部が奥に抉りこまれており、床面はほぼ平坦である。

#### G IV-103 陥し穴状遺構 (図版164e・h、写真図版168e)

402(435)cm±×70(12)cm±の規模をもち、深さ137cm±を計る。遺跡の南東部に位置し、東に下る緩斜面の標高200.2m±のところに在る。長軸は斜面に対しほぼ直交し、N-54°-Wの方向を示す。埋土は上部にクロボクをもち、中～下位にかけて火山灰、最下部にクロボク混じりの黄褐色土がみられる。横断面は上部が広く全体に不規則ながらも下に向かって狭まる形を呈する。上部は崩壊により広がったものと思われる。長軸の両端下部が奥に抉りこまれており、袋状を呈する。床面は中央から両端に向い7cm±低くなっている。 (高橋信雄)

## H II 区 (実数 1 基)

## H II - 101 陥し穴状遺構 (図版164i・j、写真図版166f・168f)

337(332)cm±×37(17)cm±の規模をもち、深さ107cm±を計る。遺跡の南側に位置し、東に下に緩斜面の標高206.9m±のところにある。長軸は斜面に対しほぼ直交し、N-73°-Wの方向を示す。埋土は全体にクロボク主体の層で、部分的に火山灰がブロック状にみられ比較的柔かい。横断面は細長い「U」字状を呈する。当遺構の床面より縄文土器(後期初頭)の破片が数片出土した。

(高橋 信雄)

## (註) 陥し穴状遺構の記述方法

1. 規模の数値は、上面の計測値を優先させ、下面の数値は( )付で示した。複合等により部分的にしか残存していないものは、現存する数値を示しその後には+ $\alpha$ の表示を行った。
2. 深さは、中央部の計測値を示した。
3. 長軸の方位は磁北を基にしたものである。
4. 標高は、全体の検出面の数値を基にしており、中央部の数値を示した。

## V. 考 察 (概要)

### (1) 遺構群の占地

本遺構の遺構群は、占地の在り方から時期的には大きく2群に分けられる。1群は、縄文時代中期初頭に属するものである。遺跡中央部のもっとも東側に位置し、段丘の崖線近くに小規模な谷地形の谷頭を取り巻く形で分布する。谷地形は、湧水の浸蝕作用によると考えられ、湧水を中心とした占地形態を示すものであろう。住居址10棟・住居址状遺構1棟で構成されるが、住居址の重複や拡張があり、時期的には数群に細分される。他の1群は、縄文時代中期末～後期初頭に属するものである。中期初頭遺構群よりも数m高い斜面部を中心として営なまれ、北東方向に舌状に伸びる尾根状の部分にも遺構が密に分布する。この群は、住居址やフラスコ形ピット・ビーカー形ピット・陥し穴状遺構・配石遺構などで主に構成される。フラスコ形ピットやビーカー形ピットなどは住居址群と密接した分布を示す。陥し穴状遺構はそれらと占地を同じくするが、主要な分布は東側斜面部から尾根状の部分にみられ、住居址群や大形ピット類とはかなり重複する関係にある。陥し穴状遺構の用途を考え併せると、集落地の無人化状態と陥し穴状遺構の構築とが密接な関係にあることが推定される。

### (2) 住居址群の層位的検出

中期末～後期初頭に属する住居址群は、II層を鍵層として層位的に大きく2つの面区分がなされる。それらを、層位的「a」型・層位的「b」型と分類した。層位的「a」型はII層上面を遺構検出面とするもので、埋土上部にはI層から連続するクロボク層をもつ。層位的「b」型の住居址はII層下部に埋没しているもので、III層上面を遺構検出面とする。層位的「b」型は、住居址間の重複による新旧関係からいくつかに分けられる。埋土は、II層とほぼ同様の暗褐色～黒褐色土層で構成される。現在はまだ出土土器の検討を行っていないが、層位的区分は土器型式の時期差を反映すると考えられる。なお、図版中の住居址断面図において、層位的に把握されたものを、大きく「a」型と「b」型に分け、スクリーン・トーンで指示した。

### (3) 湯沢パターン

住居址の埋土最上部を、汚れのほとんどみられない黄橙色火山灰層が占める例が数多くある。例外的には、埋土中に2～3層の分布が認められる場合もある。層位的「b」型に分類した住居址に伴うものであるが、層位的「a」型の住居址にも少数例がある。埋土最上部を占める場合の火山灰層は、下底部がゆるやかな「U」字状の線を示し、その上面は多くが水平である。この火山灰層は、自然の営力によって斜面上方から運搬され再堆積したのではなく、人為的堆積物であると考えられる。その起源の一部は、住居やピット類を掘り上げた際に産出される

黄橙色火山灰の移動一廃棄によるものであろう。従来の土器の廃棄に関する“パターン論”の用語を踏襲する形で“湯沢パターン”と仮称しておく。

#### (4) 陥し穴状遺構

当遺構は、岩手県内では1972年の東北縦貫自動車道に伴う遺跡調査やその他の遺跡で発見されて以来、多くの遺跡で相当数が検出されてきた。平面形は細長い溝状を呈し、短軸方向の横断面が「V」字状の形状をもつことから、「V字状溝」・「V字形溝状遺構」などと仮称されてきたものである。今回の調査では170基と数多く検出され、その形態や占地から用途を明確にするなかで「陥し穴状遺構」という呼称を使用するに至った。占地については(1)遺構群の占地、を参照して欲しい。当遺構の期期については、従来、不明とされてきた。それは当遺構が単独で検出される例が多く、また出土遺物がほとんど認められないことなどによる。しかし本遺跡では、住居址群やフラスコ形ピット・ピーカー形ピットの群との重複関係を多くもち、その新旧関係を把握するなかで、中期末～後期初頭に属するもの、と考えられる資料を得た。同時に、ほぼ底面から後期初頭に属する土器片が出土していることや住居址と同様に、層位的「a」型・層位的「b」型と区分されることから、その時期は該当性をもつものとする。用途については、Pitfall-Hunting というべきものが想定され、縄文時代の狩猟形態を知る手がかりになるであろう。また、居住集団の移動や集団規模・テリトリーの問題等数多くの問題点を示唆するものでもある。

#### (5) 集落の移動

遺構群の在り方からは、本遺跡はひとつには集落地として把握されるであろう。集落を構成するのは住居址や大形ピット類であったと考えられる。それに対して陥し穴状遺構は、住居址や大形ピット類との重複関係や占地、さらに埋土や用途などから推定して、集落地の空白期に構築された可能性が強い。住居址や大形ピット類の密な分布と重複関係は、集落地の空白期が頻繁に繰り返えされた結果と考えられる。多数検出された陥し穴状遺構は、その空白期と相関的な関係をもつものであろう。集落地の空白期は居住集団の移動に起因するものであり、重複関係からは同一土器型式内でもたびたび移動が繰り返えされたと考えられる。また“湯沢パターン”は一面的には、そのような移動にかかわるものとしてある。

#### (6) 焼失住居址における廃棄のパターン

本遺跡で検出された焼失住居址を分析した結果、焼失住居址として認定するための条件として、次の点を想定した。①床面密着またはそれに近い層序にある炭化材・炭化物の存在、②床面や壁に現地性の焼成痕が認められ、それがある程度の広がりをもつこと、③住居址に伴う遺物が二次的な焼成を受けていること、などである。炭化材と現地性焼土の形成および量的対比から、②の条件だけをもつものでも妥当性をもつと考えられる。焼失住居址の検出時の形態の

差異は、廃絶時の形態の差異をあらわすものであろう。すなわち①～③の条件を併せもつ例は、焼失住居址の一般的な在り方を示し、焼失後そのまま廃絶されたものと解釈される。②の条件だけをもつ例には、2つの廃絶の形態が考えられる。1つは、焼失後に清掃に類する行為を行なって廃絶する場合、他の1つは、焼失後に清掃に類する行為を行ない、住居址の再使用後に廃絶する場合である。これらの場合には、①や③の条件が失なわれ、結果として現地性焼土を床面や壁に痕跡的に残すこの条件をもつことになる。このように、焼失住居址が廃絶される過程には、3つの形態があると考えられる。

#### (7) II層の形成と遺物包含層

「地質」の項で述べられているように、本遺跡の基本層序のなかでII層は特殊な位置を占める。II層の性状と分布の在り方からは、主に中期末の「廃棄」による人為的な形成層と考えられる。本遺跡の遺構群・遺物群の種類や数量、分布の在り方などは、居住集団の行動の多様性を反映するものであろうが、II層の形成は、生活廃棄物を含むマトリックス部分の「土」の廃棄行為を推定させる。住居やピット類等の諸施設を構築する際に産出する「土」は生活廃棄物とともに、主に居住区域周辺に廃棄されたと考えられる。“湯沢パターン”はその一部を示すものであろう。II層は結果として遺物包含層としての内容を併せもつものである。そのような廃棄行為と自然の営力が作用した結果、現在の本遺跡にみられる分布と位置を占めると考えられる。

#### (8) 住居址の構造

中期末～後期初頭の住居址群に限って述べると、平面形の多くは五角形～十角形の不整多角形を呈する。方形や円形は少数例である。柱穴は、住居址内部の壁際に沿うピット群を支柱穴とする例が多い。また中央部に寄った内部に支柱穴群が認められ、壁際に沿うピット群は支柱穴としてある例もある。炉は、大部分が住居址中央部から壁の一方へ若干寄った位置を占める。一部の住居址は、その炉に近い壁際に「出入口」状施設を伴なう。周溝はほとんどみられず、「ベッド状」遺構をもつ例が2例ほどあるが、1例は中期中葉に属する長方形の平面形をもつ住居址であり、中期末～後期初頭に属する例は1例だけである。この「ベッド」状遺構は、壁近くの床面が周辺の床面に比べて若干高く、ある程度の広がりをもつ。「剥片貯蔵」の在り方や「出入口」状施設の存在、台石や土器の出土位置からは、緩やかな空間分割がなされた可能性も考えられる。この台石は石器製作のそれを指すものでなく、堅果類の処理に使用された可能性が考えられるものである。

#### (9) 「出入口」状施設

住居址壁際の床面に、長大な礫2個が埋置される例が数多くある。礫は2個が平行し、住居址中央部を向くように壁に直交させた状態で存在するが、それを「出入口」状施設と呼称した。

礫間に更に1個の礫を伴うもの、礫の1個の外側に立石を伴うもの、礫間に浅皿状の窪みを伴うもの、などの例もある。伴う住居址に1施設を原則とし、炉にもっとも近い壁際に位置するのが一般的である。その存在位置と形態からは炉との密接な関係が考えられるが、当施設を伴わない住居址においても、炉に近い側に「出入口」をもつことが推定される。

(三浦謙一)

#### (10) 炉の形態分類

湯沢遺跡において検出された竪穴住居址数は総数160棟にのぼる。これらの竪立住居址は縄文時代中期初頭・縄文時代中期末葉から縄文時代後期初頭と時期的に2大別される。ここで行なう炉の形態分類は縄文時代中期初頭の竪穴住居址に伴って検出された地床炉以外を対象としたものである。分類にさきだち炉の各部の名称を挿図1に示した。

炉を形態分類すると4群にわかれる。さらにこれらは構築施設の種類(直立埋設土器・斜位埋設土器・黄褐色細礫・礫の埋置)による細分される。

第1群：石囲いなどの複数の構成礫を伴わず、平面形が円形～楕円形を呈し、断面形が摺鉢状ないしは浅皿状を呈する凹みだけの炉である。

A類：火山灰層を掘りくぼめただけで埋設土器以外の施設を持たないもの。

B類：炉縁に長大な礫が横位の状態で埋置されたもの。

C類：炉縁の一部あるいは全体に黄褐色細礫の敷設されたもの。

D類：炉縁に長大な礫が横位の状態で埋設され、さらに黄褐色細礫の敷設されたもの。

E類：火山灰層を掘りくぼめ、凹みの外に隣接する形で小ピットを伴うもの。

第II群：火山灰層をわずかに掘りくぼめ(埋設土器収納分)、直立埋設土器を持つものである。

第I群のような明瞭な掘り方を持たない。

A類：炉縁に何の施設ももたないもの。

B類：炉縁に長大な礫が横位の状態で埋置されたもの。

第III群：構成礫を円形～楕円形・方形～長方形に配した「石囲い」炉である。各類はさらに埋設土器の種類・埋設される位置により細分される。

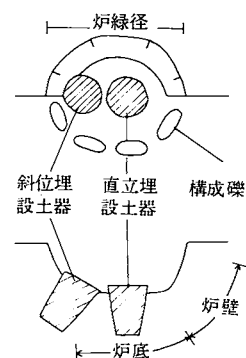
A類：構成礫だけで炉が構成されるもの。

B類：構成礫と埋設土器で炉が構成されるもの。

C類：「石囲い」の構成礫の一部を構成する形で長大な礫が横位の状態で埋設されたもの。

D類：「石囲い」に黄褐色細礫が敷設されたもの。

第IV群：土器片の内面を炉の内側に向け三重へ四重に炉縁をめ



挿図1

ぐらし炉が構成される「土器片囲い」炉である。

A類：土器片と埋設土器で炉が構成されるもの。

B類：土器片と黄褐色細礫で炉が構成されるもの。

以上本遺跡で検出された炉址を形態分類すると4群13類にわけられる。これらは時間的な前後関係を示しているのではない。今後、遺物の検討を通し共伴関係・新旧関係を明らかにし、本遺跡での炉形態の変遷を確立してゆきたい。  
(齊藤 邦雄)

#### (1) フラスコ形ピット・ピーカー形ピットの形態変化とその性格

フラスコ形ピット・ピーカー形ピットも住居址と同様に、II層を鍵層として層位的に区分される。フラスコ形ピットの大部分は層位的「b」型に属し、一部のフラスコ形ピットとピーカー形ピットは層位的「a」型に属することから、形態的な変化を把握することができる。

フラスコ形ピットの埋土の観察からは、壁へのlining（裏張り）の存在が推定される例が数例あることが知られる。そのような施設の存在が推定される状況や埋土の状態などからは、フラスコ形ピットの第一義的用途は「貯蔵」にあったと考えられる。

また、フラスコ形ピット・ピーカー形ピットとも、開口部中央の埋土最上部に黄橙色火山灰層をもつ例がある。住居址における“湯沢パターン”とは異なった意味をもつ人為的堆積物としてとらえられ、「閉塞」施設と仮称した。

#### (2) 「剥片貯蔵」

住居址内の壁際にある柱穴や小ピット中に、剥片の集合の状態をあらわす例が数多くある。剥片は同一石核から剥離されたものが主体を占めるが、別の石核からの剥片が混入する場合もある。量的には10数片から多いもので70数片の集合を数え、残核や碎片の混入はみられない。1住居址に2～3カ所みられる場合もある。壁際の柱穴や小ピット中という存在位置は共通してみられる。また選別された剥片の集合の状態は、廃棄にかかわるものではなく、貯蔵形態をあらわすものと考えられ、「剥片貯蔵」という仮説をもつにいたった。  
(三浦 謙一)

## VI. あとがき

本書は湯沢遺跡発掘調査の報告であるが、検出遺構・出土遺物の数量が膨大であることから『遺構編』と『遺物編』とに分け、今回は『遺構編』として刊行したものである。遺物および考察については『遺物編』として近い将来に刊行する予定である。

湯沢遺跡の遺構群は、時期的に縄文時代中期初頭と中期末～後期初頭の大きくは2群に分けられる。中期初頭遺構群は、住居址と住居址状遺構とによって構成されるが、占地・数量とも

限定される。主体を占めるのは中期末～後期初頭遺構群で、住居址やフラスコ形ピット・ピーカー形ピット・陥し穴状遺構・配石遺構、そして不整形ピット類で構成される。不整形ピット類については次回へ回さざるを得なかったが、他の遺構はその全部を収録した。

発掘調査開始後、当初の約1カ月間の試掘を行なった結果、南東側斜面部の一部を除いたほぼ遺跡全域にわたる、多数の遺構の存在が予想された。後に当事者間で協議がなされ、1カ月間、調査期間が延長されたが、調査期間の不足や調査員の不足などは制約としてあり、効率的な調査方法が要求された。しかし、単に効率としてではなく、発掘調査はまず野外調査であるという視点から調査方法を志向し、いわゆる“緊急調査”や“学術調査”の枠にとらわれない方法を模索した。勿論、“緊急調査”につきものの種々の制約が、現実には調査の内容にまで影響をおよぼしてきていることは、否定されない事実である。

期間の不足は多数の作業員を動員することによって、また調査員の不足は、若い作業員や大学生・高校生のグループを実測作業や写真撮影へ従事させることにより、実際の調査のなかで解決に向けていった。実測作業や写真撮影は、訓練しだいで誰にでも可能なものであり、調査員がそれらから解放されれば、野外からの情報収集へと多くの時間・視点をさくことができるであろう。また、遺構の絶対量に対して調査の精度を落さないための手段でもある。

情報収集は、まず観察され記録されることから始まる。発掘調査は、歴史的・地理的一回性に規制された、反復不能な“実験”である。どのように観察され記録されたかが必要である。本調査の調査記録には、Field Cardが使用された。複数の調査員による共同作業である場合、資料の処理段階ではなく情報収集の段階に、各調査員の観察記録が公開的であるためにはカード化が必要とされた。またカード化され提出されることにより、問題点の明確化、資料の共有化が進められてゆくと同時に、次の段階での情報収集の基礎となる。各調査員の観察記録が多様・多様なものであるほど、その野外調査全体の情報収集は成果が大きいと言える。

本調査では、情報収集の面では一定程度の成果が得られたと考える。だが情報収集が住居址中心に傾き、フラスコ形ピットやピーカー形ピット・陥し穴状遺構などの観察記録は住居址のそれに比べて劣り、総体的に情報量が少なかった点がある。それは遺構がもつ性格による情報の定性的・定量的差異でもあるが、調査期間や調査員数の不足など調査方法ではカバーしきれないことにもよる。また、実測作業で不備を生じた面もある。その内容は、作業上の手違いで作図が行なわれなかった場合や座標軸・遺構名の誤記や記入もれなどが大部分である。調査体制の強化や調査方法のより綿密な計画性などによって、その多くを防ぐことができる種類のものである。

整理作業においても、図面整理やトレース・写真処理・遺物の処理などの大部分は、室内作業員の手によるものである。各遺構の記述はField Cardに基づく部分が多い。しかし、情報



量として多い住居址と、不足がちであったフラスコ形ピットやビーカー形ピット・陥し穴状遺構などとは差別される。Field Card による記述は、観察記録を「生」の事実報告として詳細に提供することがねらいである。勿論、単に事実報告としてではなく報告者のフィルターを通したものもあり、それらは仮説的に提示した。しかし、調査上の不備に起因し、本文に記述がなされない場合もある。調査体制や調査方法で防げる面が多いとしても、野外調査ではさけられない不確定要素の部分もあり、全情報量との相対化のなかで許容限界的にあつかわざるを得ないものであろう。だが、遺構に固有の情報の欠落は、統合化過程では資料の欠落としてあらわれてくる。調査上の不備による情報の欠落の理由は、本文中に記することにした。

本調査の考察は、今回は概要として簡単に記したが、各項目は、個別の現象から普遍化されるものとして観察されたもので、野外からの情報を大まかに分類したものである。現段階では基礎的な資料の域をでるものではなく、今後それらを統合化してゆく過程のなかで、本遺跡がもつ全体像に接近し得るであろう。その内容展開は『遺物編』で行なうつもりである。

(三浦 謙一)

版 图

# 図 版 凡 例

1. 遺構図版の掲載は次の通り行なう。

- (1) 住居址は平面図と大半の土層断面図を掲げる。
- (2) フラスコ形ピット・ビーカー形ピットは原則として土層断面図を掲げ、一部は平面図を掲げる。しかし、図面の不備等の理由で掲載を省略したことがある。
- (3) 陥し穴状遺構は原則として平面図と土層断面図とを併せて掲げる。しかし、図面の不備等の理由で掲載を省略したことがある。

2. 遺構図版中の指示は次の通りである。

(1) 縮 尺

住居址…… $\frac{1}{40}$ ・ $\frac{1}{60}$ を原則とし、縮尺不定の場合にのみスケールを付した。

住居址炉断面図…… $\frac{1}{20}$

配石遺構…… $\frac{1}{40}$ （但し、H II-201配石遺構のみ $\frac{1}{20}$ でありスケールを付した。）

フラスコ形ピット・ビーカー形ピット…… $\frac{1}{40}$ （但し、図版141は縮尺不定である。）

陥し穴状遺構…… $\frac{1}{60}$

(2) 住居址の多くが重複関係をもつ。当該住居址の図版中では図面上の煩雑さを避け、併せて新旧関係を明確にするためにスクリーン・トーンを使用した。その指示は次の通りである。

■■■■ 当該住居址より新しい住居址。

■■■■ 当該住居址より旧いあるいは新旧関係不明の住居址。

■■■■ 当該住居址より新しいフラスコ形ピット・ビーカー形ピット。

■■■■ 当該住居址より旧いあるいは新旧関係不明のフラスコ形ピット・ビーカー形ピット。

■■■■ 当該住居址より新しい陥し穴状遺構

■■■■ 当該住居址より旧いあるいは新旧関係不明の陥し穴状遺構

■■■■ 当該住居址と重複する不整形ピット

以上の他に、重複関係をあらわす以外のスクリーン・トーンの指示がある。

■■■■ “湯沢パターン”の火山灰

■■■■ 焼土

■■■■ 炭化物

■■■■ 黄褐色細礫

|||||攪乱

◇◇◇住居址土層断面図において層位的「a」型をあらわす。

≡≡≡住居址土層断面図において層位的「b」型をあらわす。

但し、焼土・黄褐色細礫のスクリーン・トーンは炉断面図中においても使用される。

- (3) フラスコ形ピット・ビーカー形ピット・陥し穴状遺構の図版中の平面図において、重複する遺構との新旧関係をあらわす指示は次の通りである。

———当該遺構よりも新しい遺構

-----当該遺構よりも古いあるいは新旧関係不明の遺構

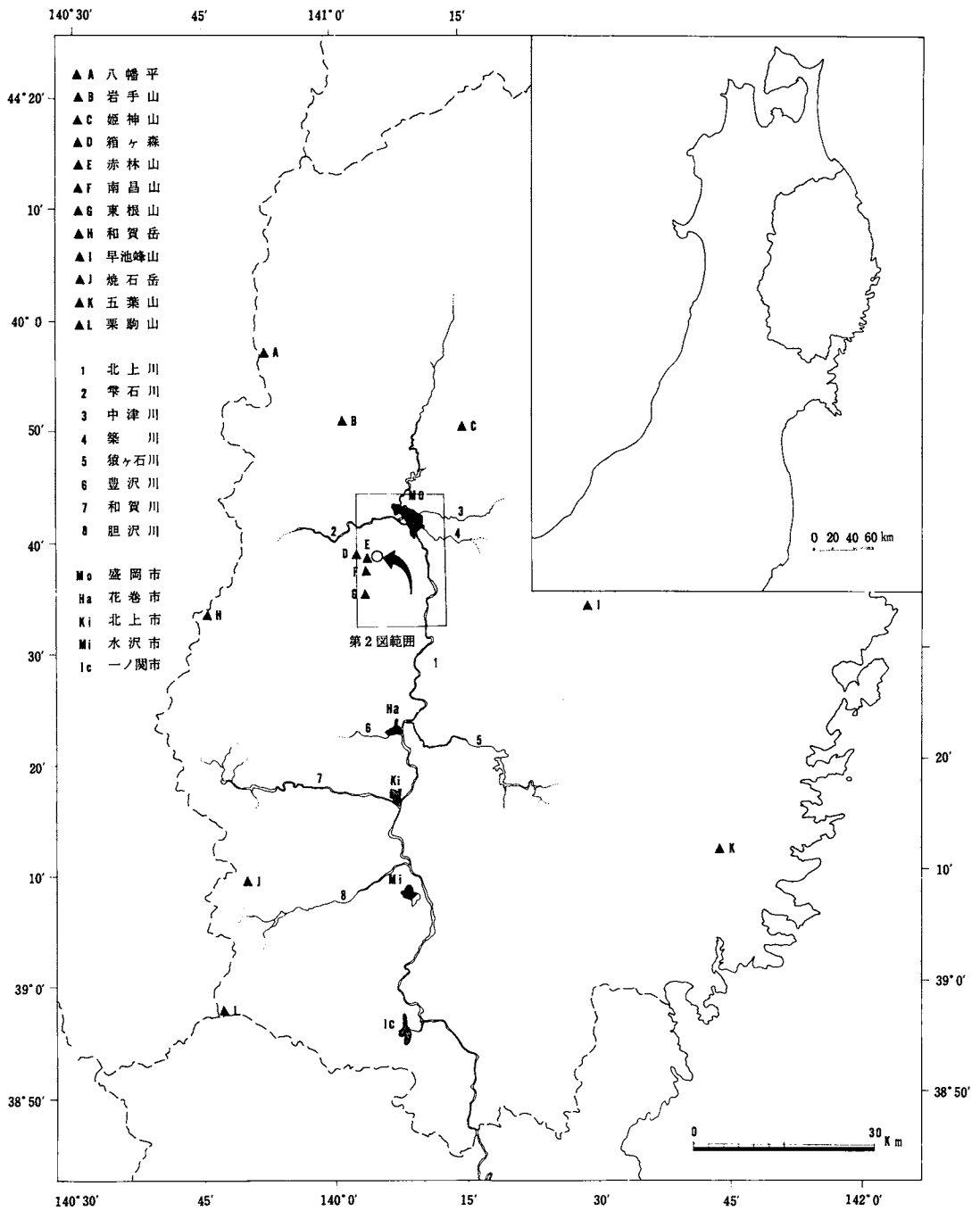
但し、住居址と上記の遺構が重複関係にある場合には、スペースの都合上から住居址は図示しなかった。陥し穴状遺構同土が複数で重複し、同一平面図に掲げた場合には新旧関係の指示はない。

- (4) 遺構図版中の記号・略号の指示は次の通りである。

PあるいはPot……土器      G……礫      ↑……磁北（矢印の方向）

但し、住居址平面図版におけるP<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>……は柱穴ナンバーをあらわす。

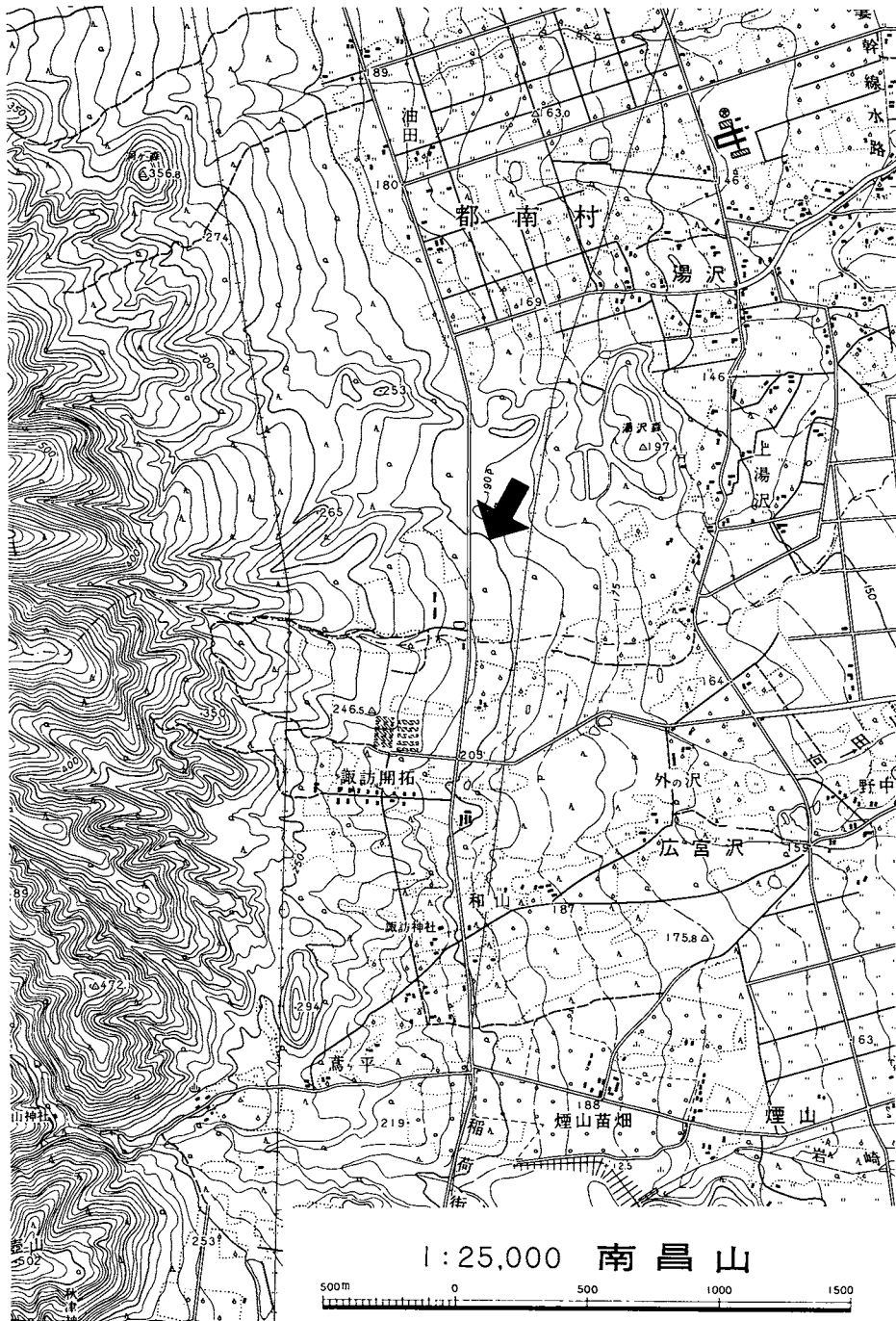
3. 遺構の配列は原則として番号順に掲げた。しかし図版作成上から、一部順序不同となる場合がある。
4. 写真図版の縮尺および方向は不定である。また遺構の配列は原則として番号順であるが、一部は順序不同となる場合がある。
5. 陥し穴状遺構は図版・写真図版ともスペースの都合上、番号だけを附した。



図版1 岩手県全体図(矢印：湯沢遺跡)

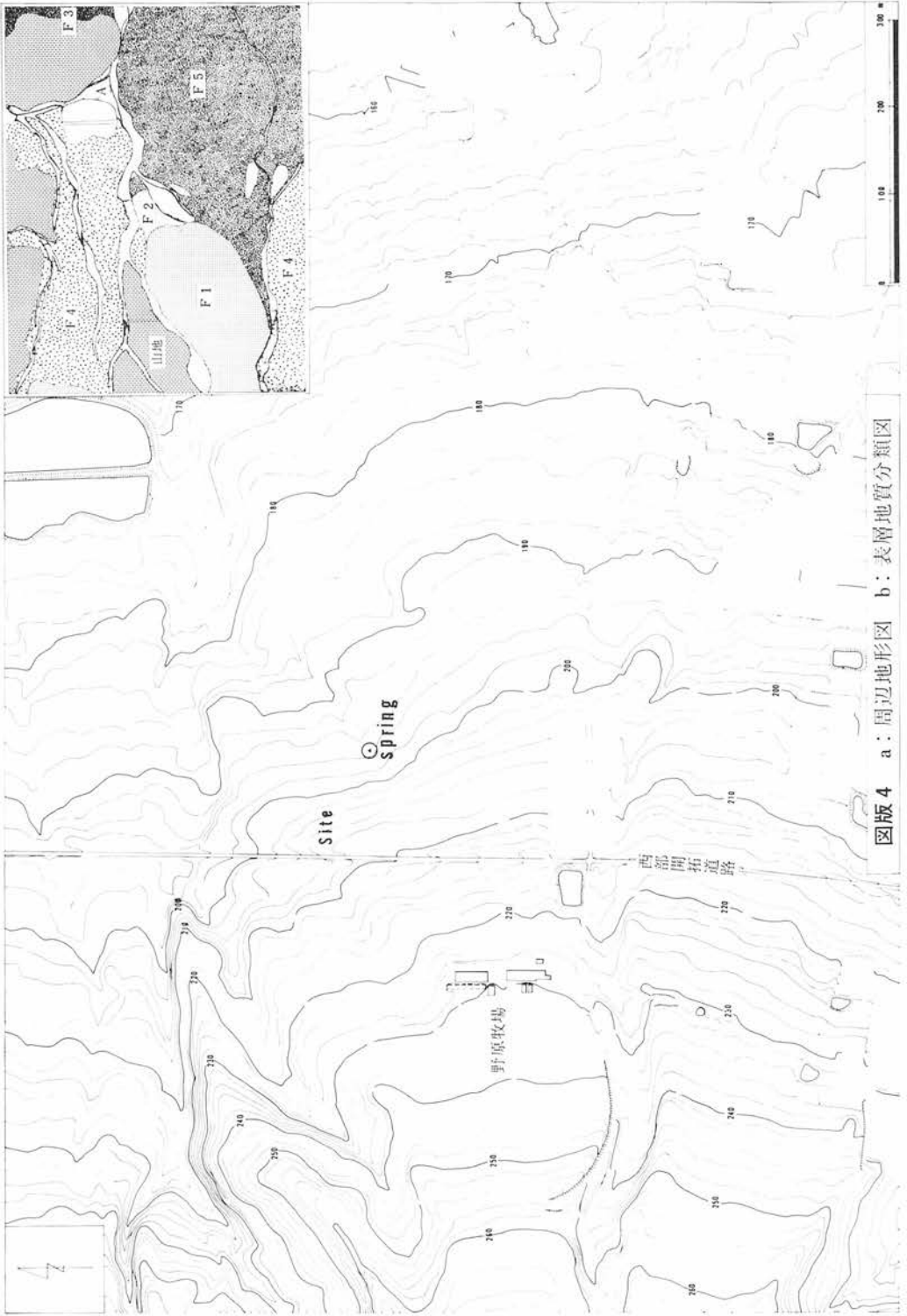


图版2 地形面区分图(矢印：湯沢遺跡)



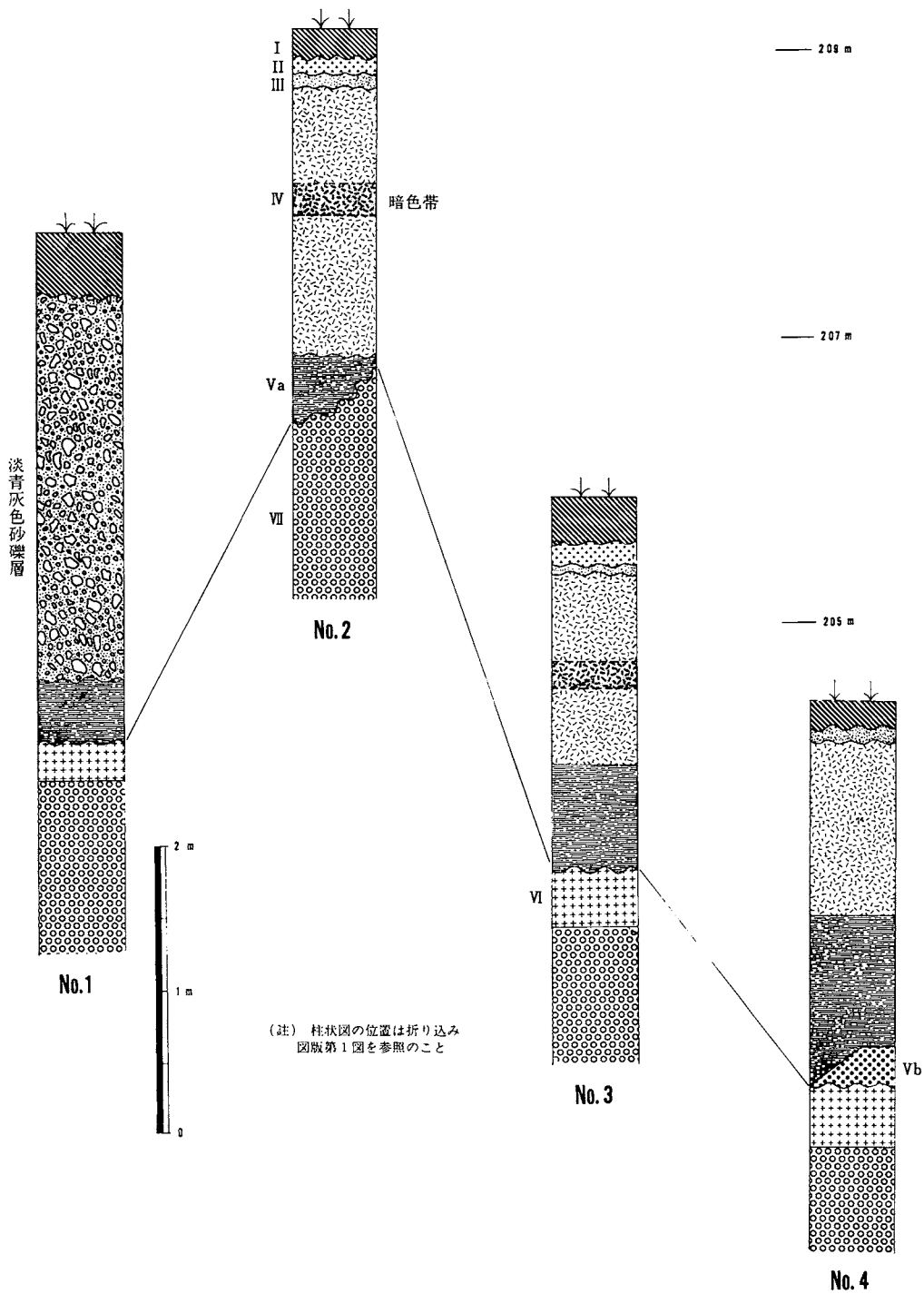
建設省国土地理院承認  
 (承認番号)昭53東複、第161号

図版3 遺跡位置図(矢印：湯沢遺跡)

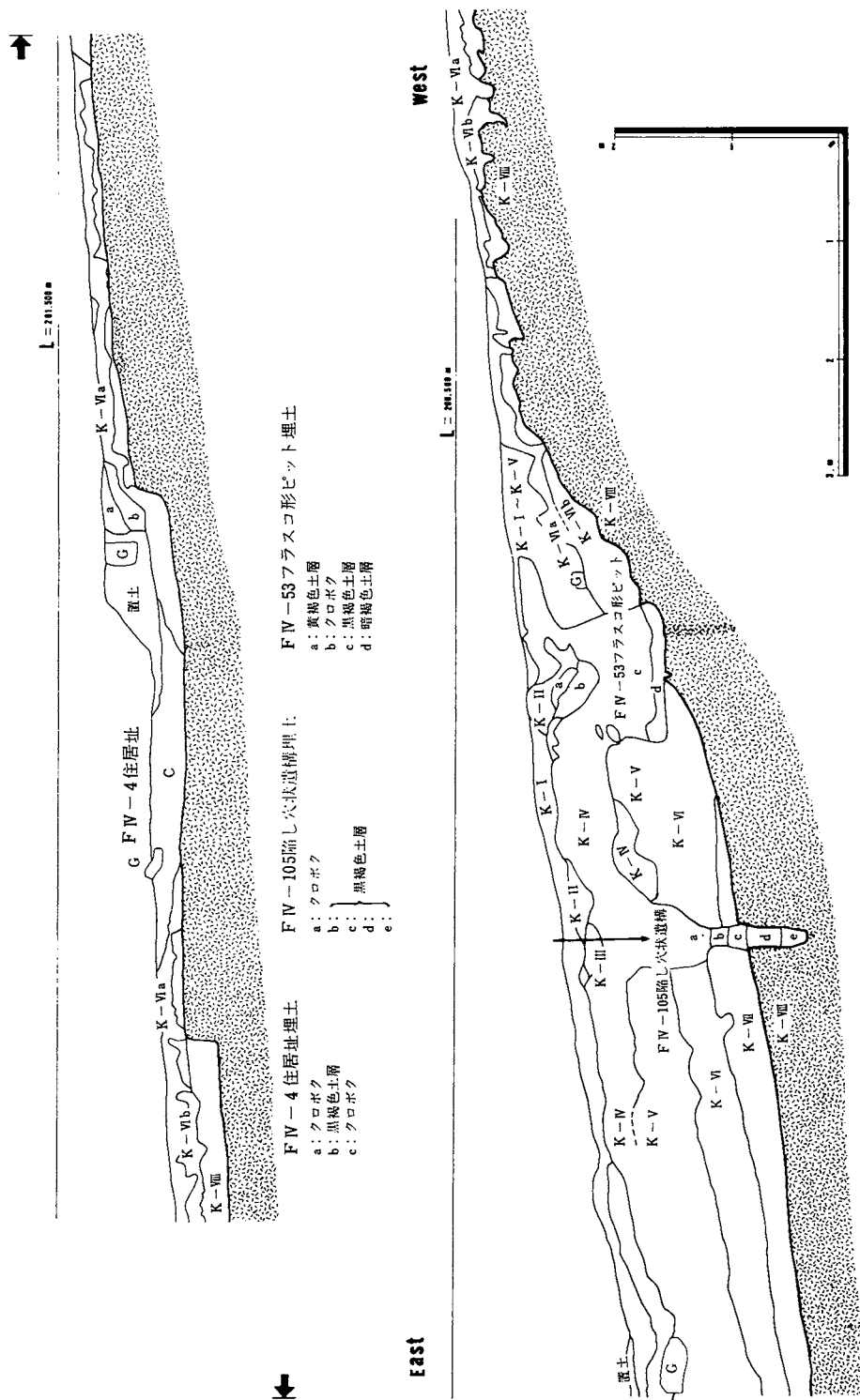


図版 4 a: 周辺地形図 b: 表層地質分類図





図版5 深掘り断面柱状図

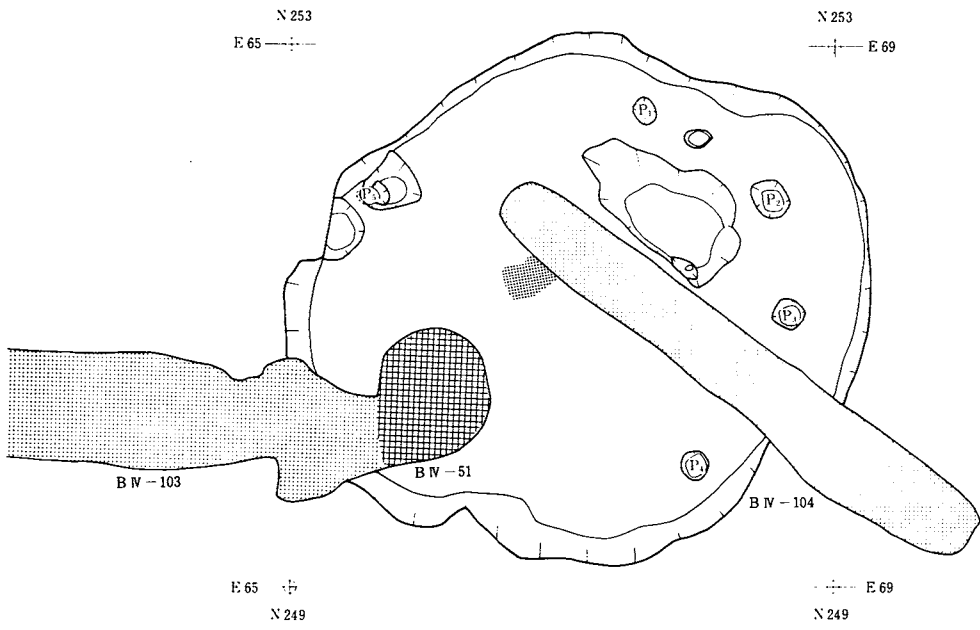


**F IV-4 住居址埋土**  
 a: クロボク  
 b: 黒褐色土層  
 c: クロボク

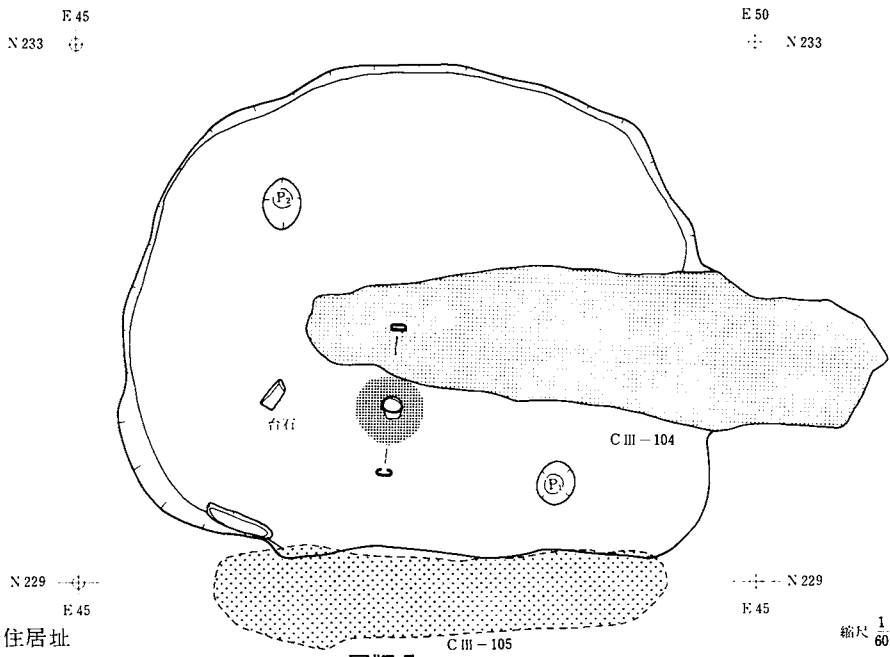
**F IV-105跡し穴状遺構埋土**  
 a: クロボク  
 b: }  
 c: } 黒褐色土層  
 d: }  
 e: }

**FW-53フラスコ形ピット埋土**  
 a: 黄褐色土層  
 b: クロボク  
 c: 黒褐色土層  
 d: 暗褐色土層

図版 6 斜面下方土層断面図



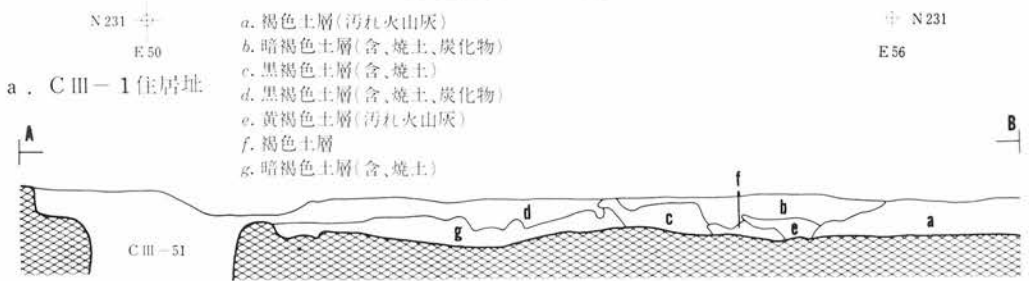
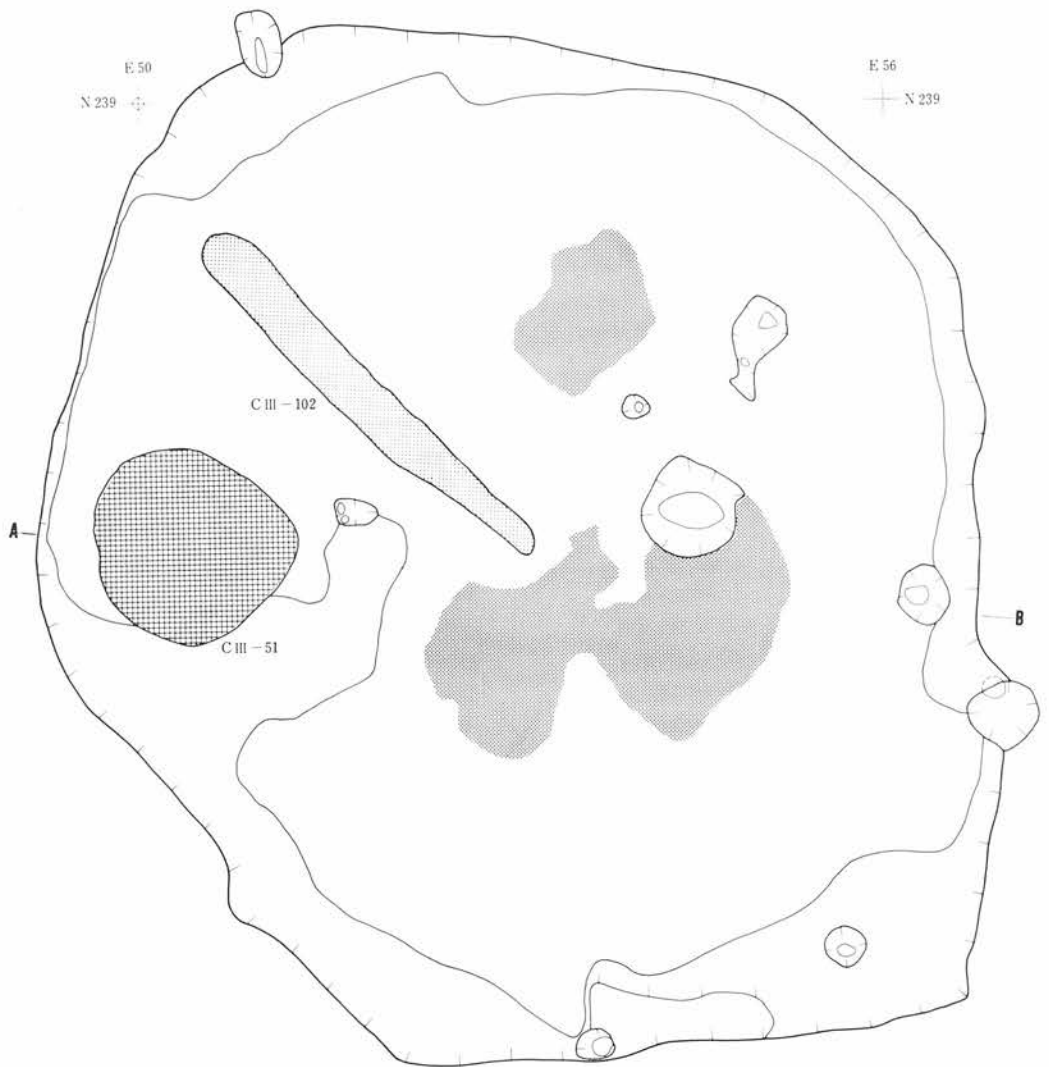
a. B IV-1 住居址



b. C III-2 住居址

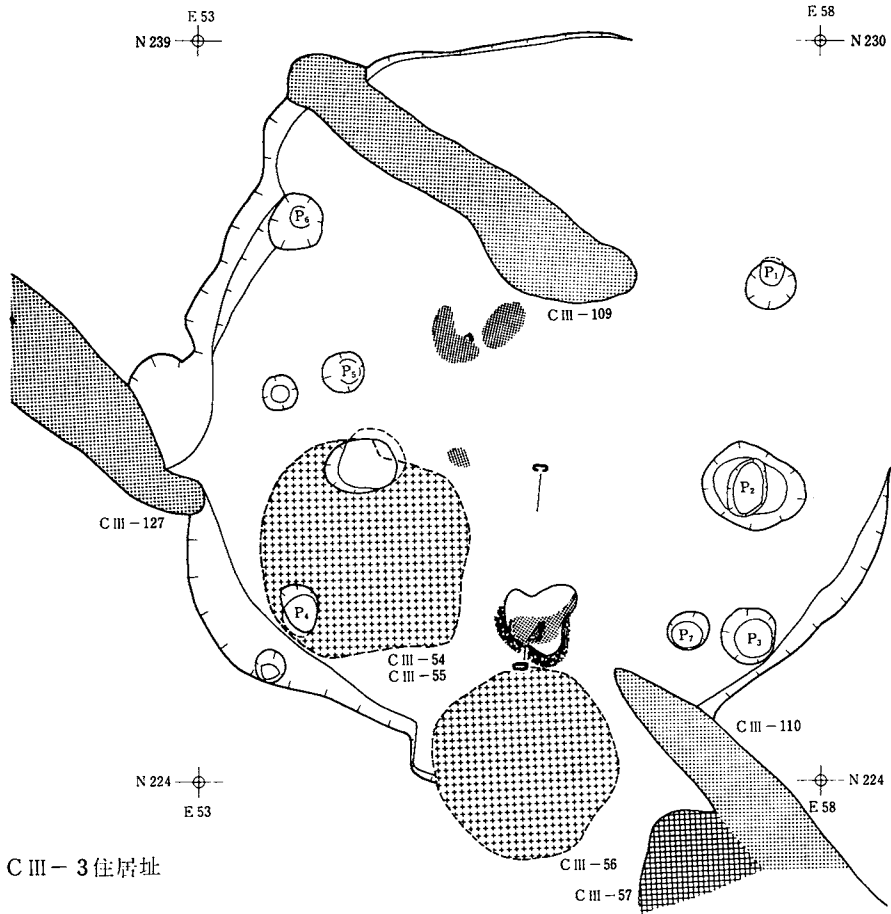
图版 7

縮尺 1/60

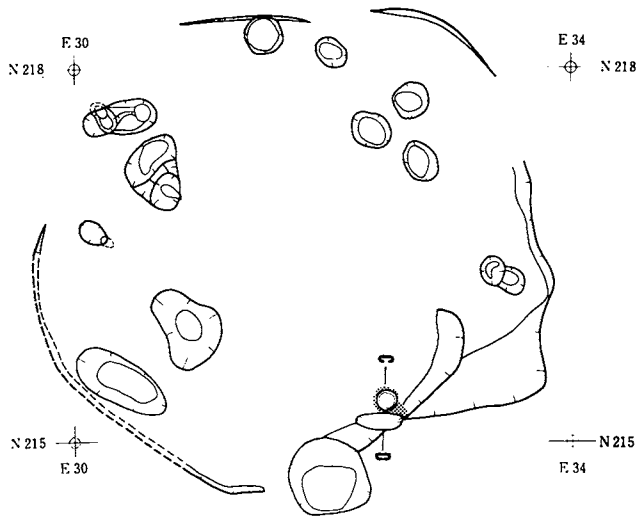


b. C III-1 住居址(断面)

縮尺 1/60



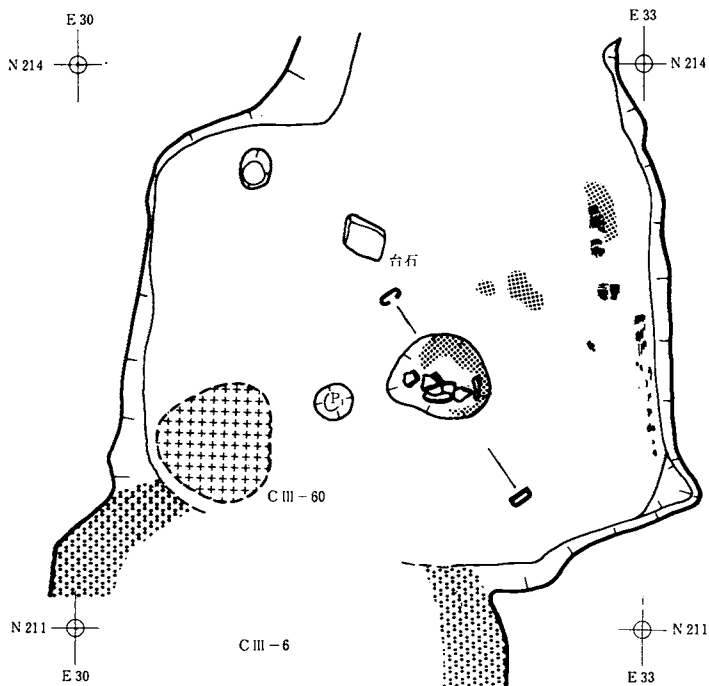
a. C III-3 住居址



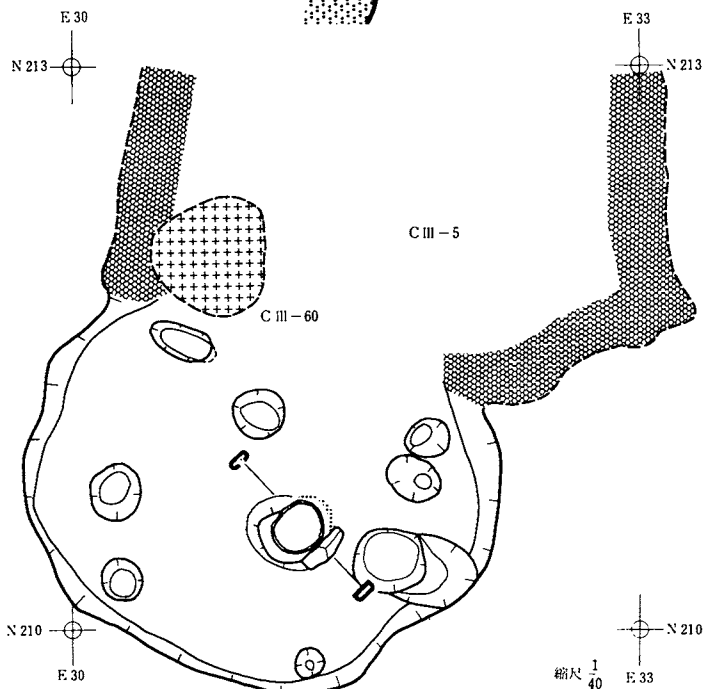
b. C III-4 住居址

图版 9

縮尺  $\frac{1}{60}$



a. C III-5 住居址

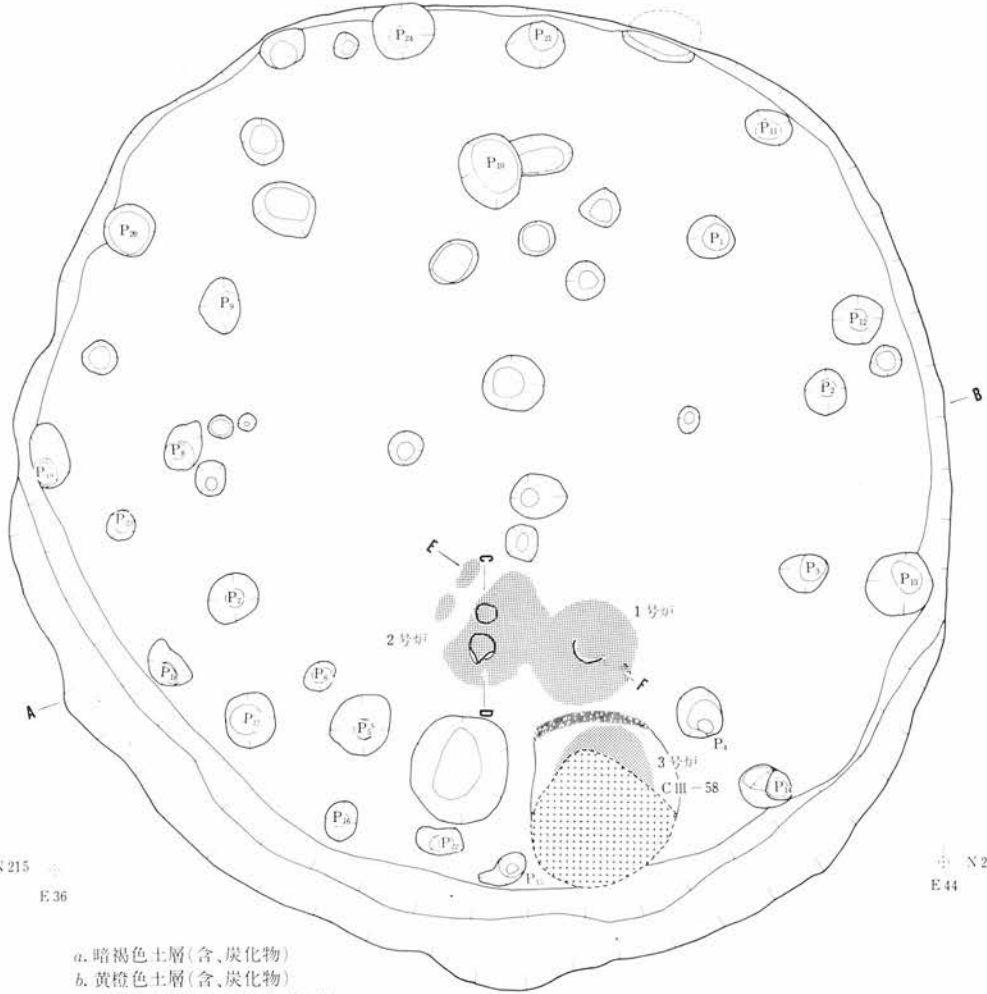


b. C III-6 住居址

图版 10

E 36  
N 223

E 44  
N 223

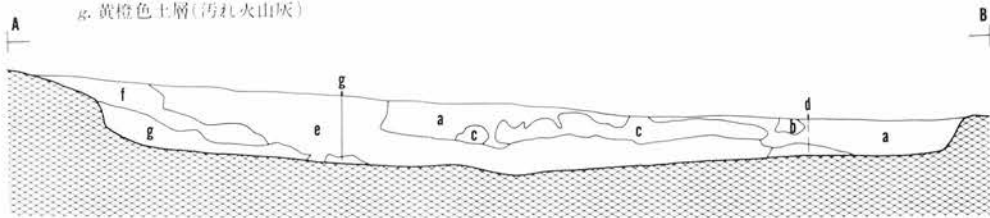


N 215  
E 36

N 215  
E 44

- a. 暗褐色土層(含炭化物)
- b. 黄橙色土層(含炭化物)
- c. 黄橙色土層(含炭化物、燒土)
- d. 黑褐色土層
- e. 黑色土層(含燒土)
- f. 黄橙色土層(汚丸火山灰)
- g. 黄橙色土層(汚丸火山灰)

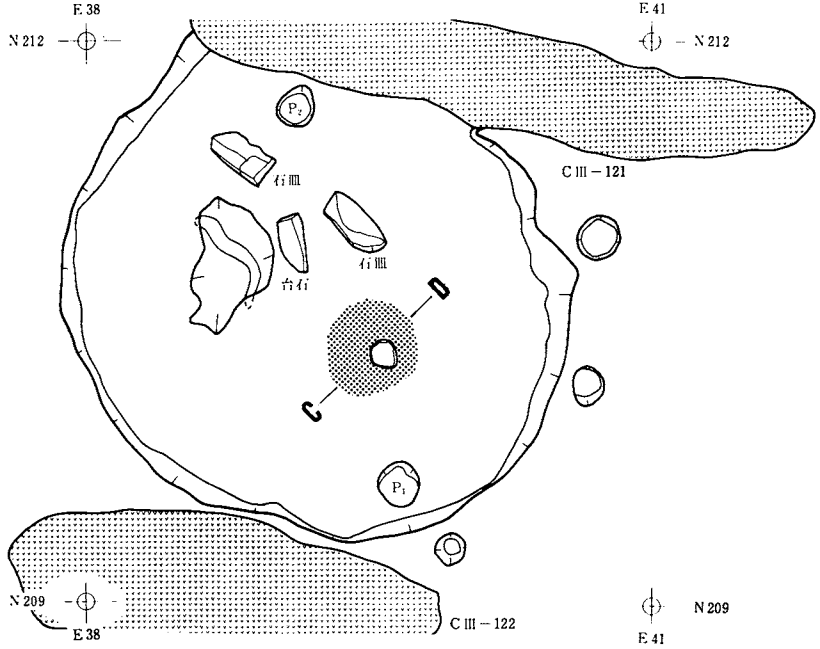
a. C III-7 住居址



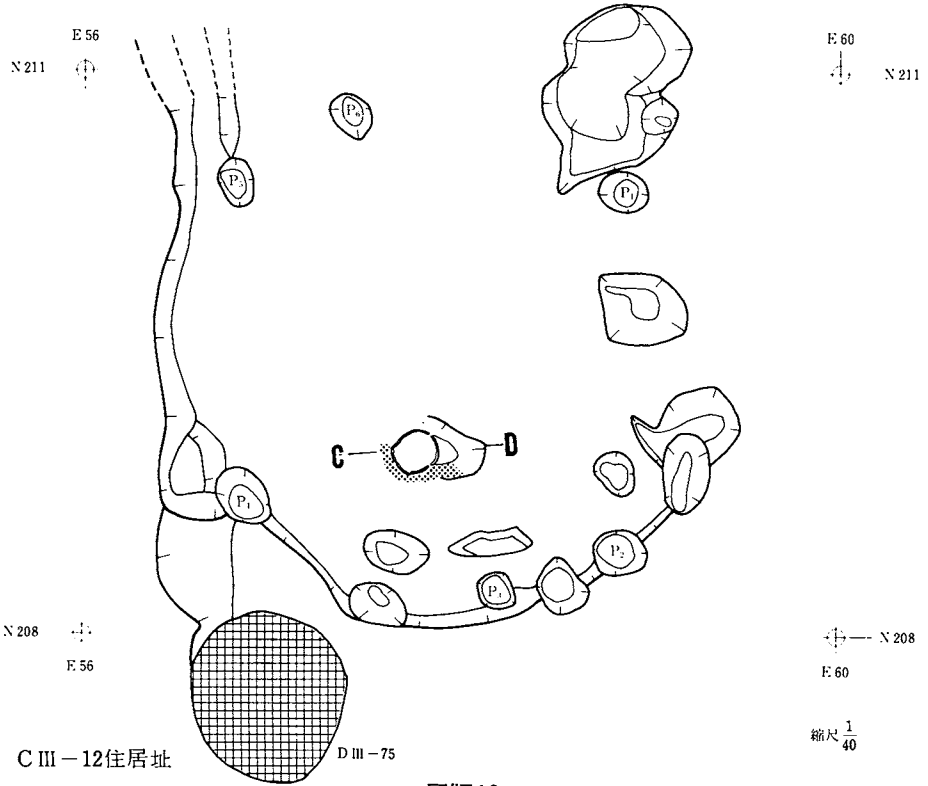
b. C III-7 住居址(断面)

0 1m

图版 11



a . C III - 8 住居址

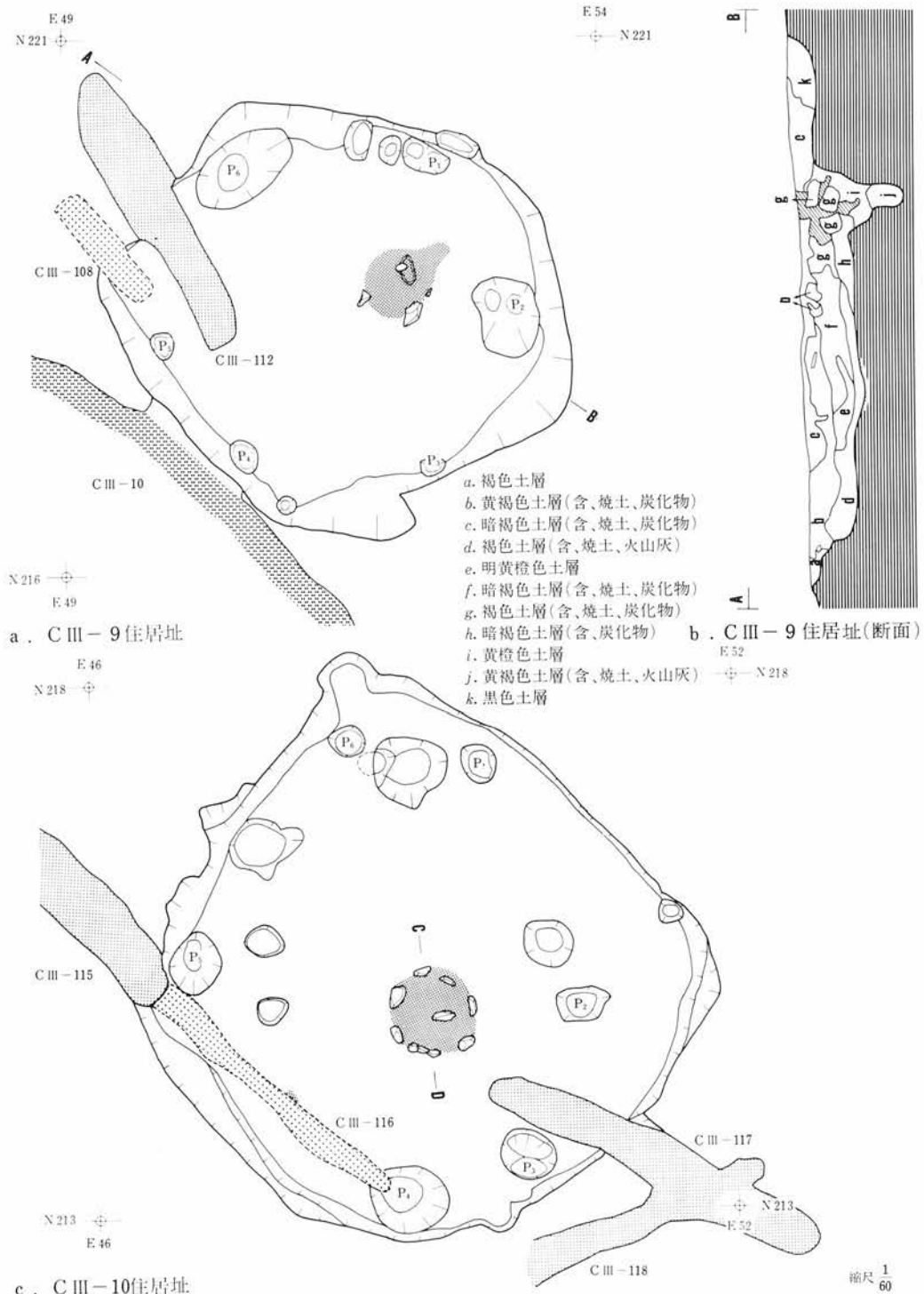


b . C III - 12 住居址

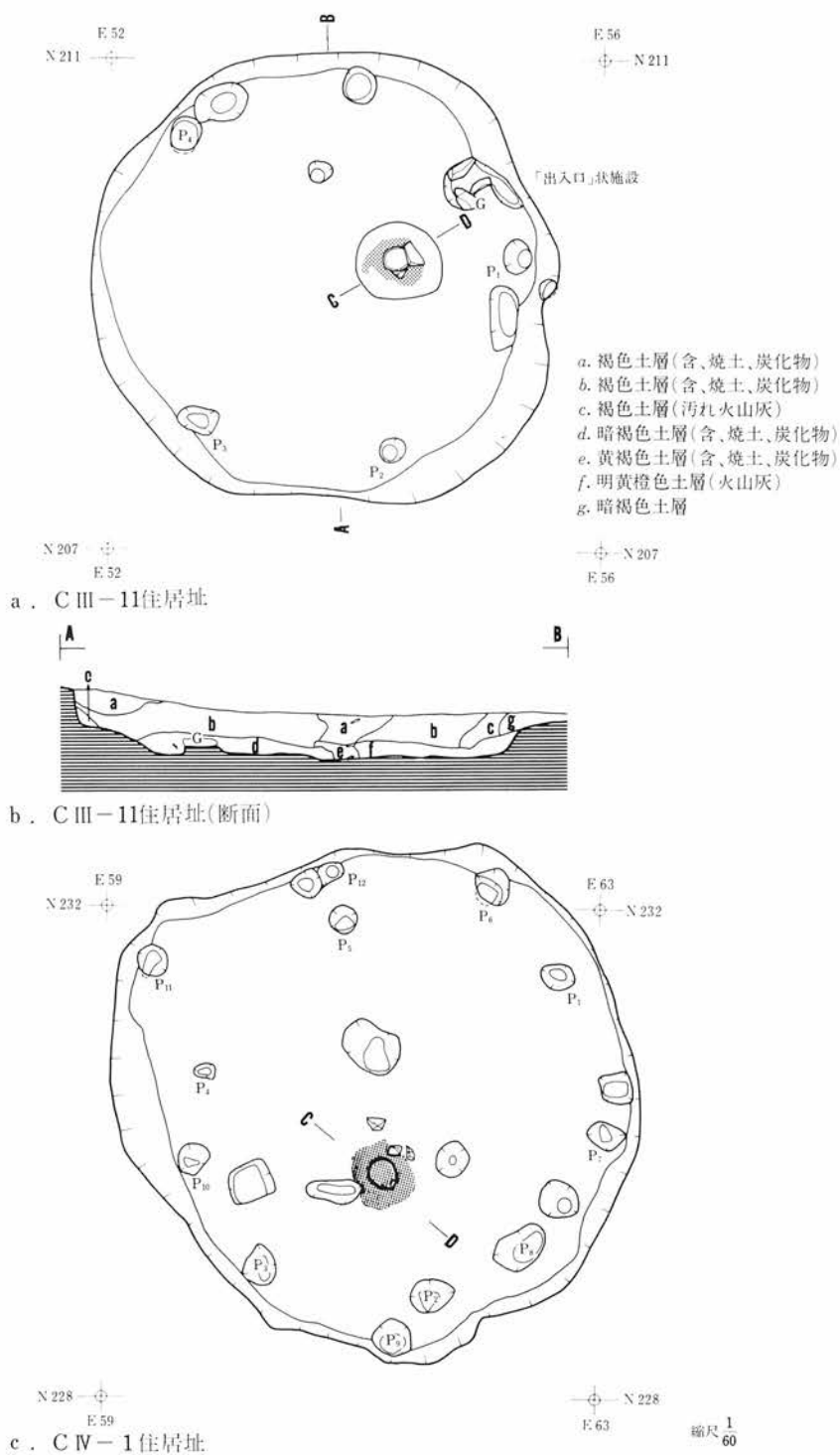
图版 12

縮尺  $\frac{1}{40}$

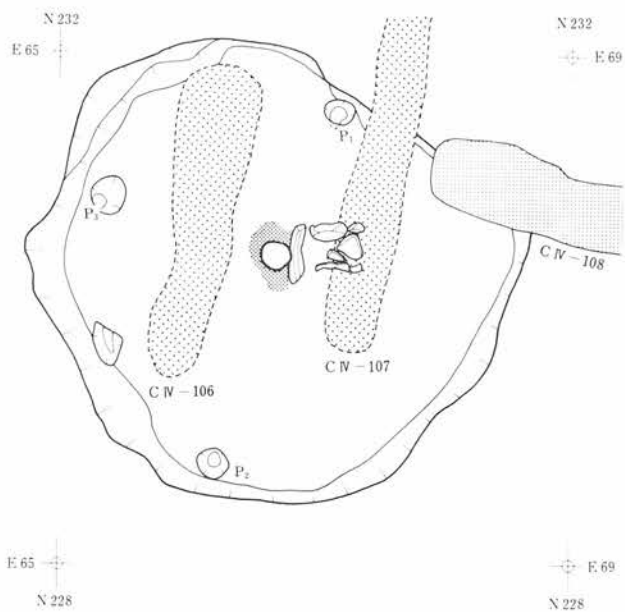




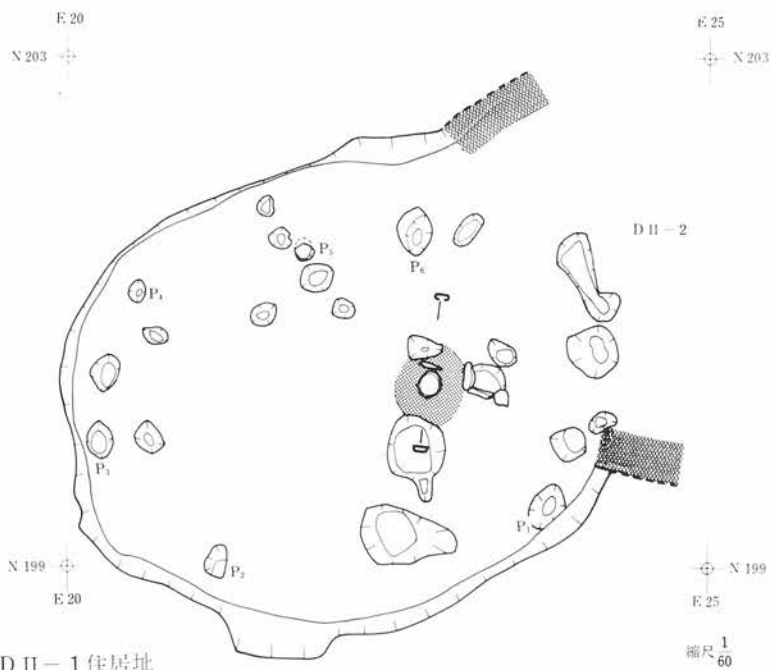
图版 13



図版 14

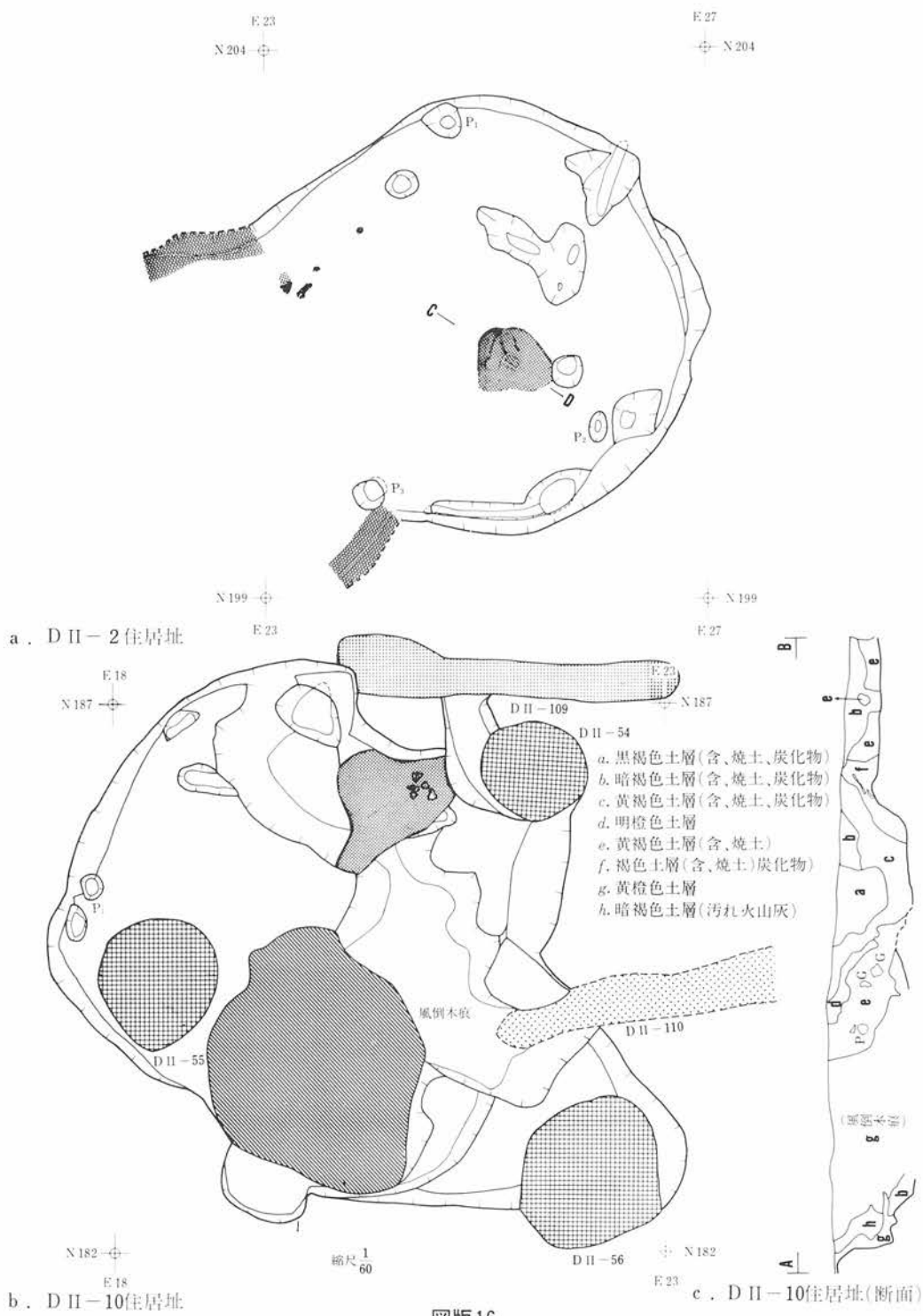


a. C IV-2 住居址

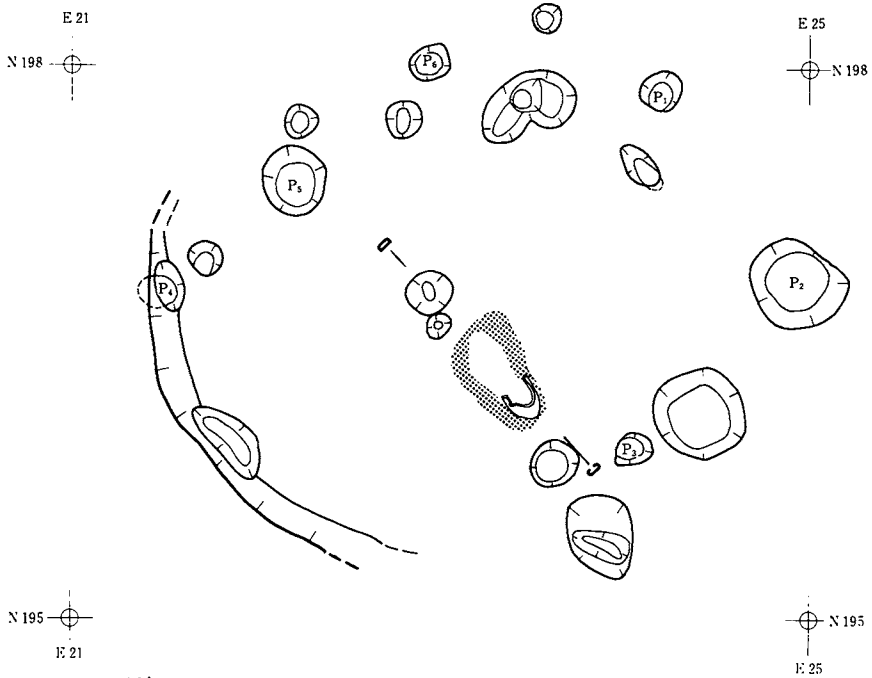


b. D II-1 住居址

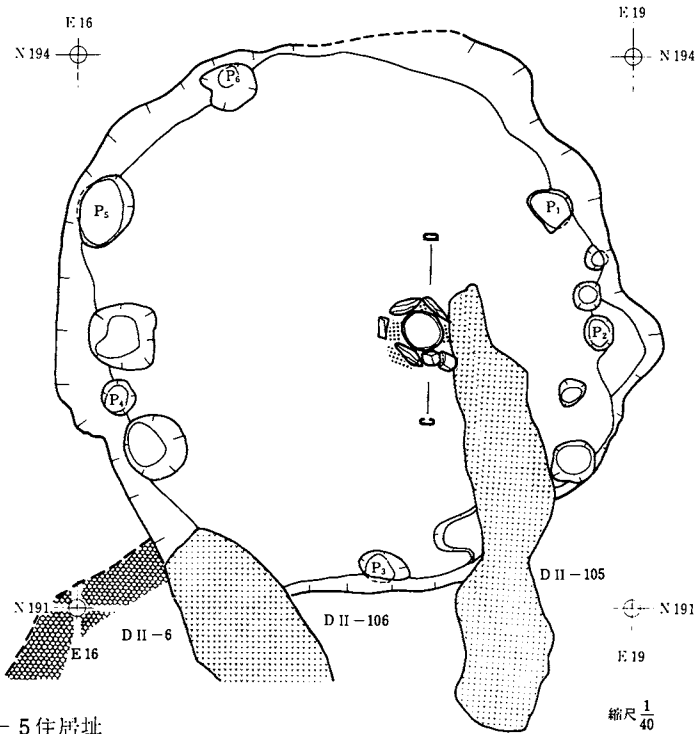
图版15



図版 16

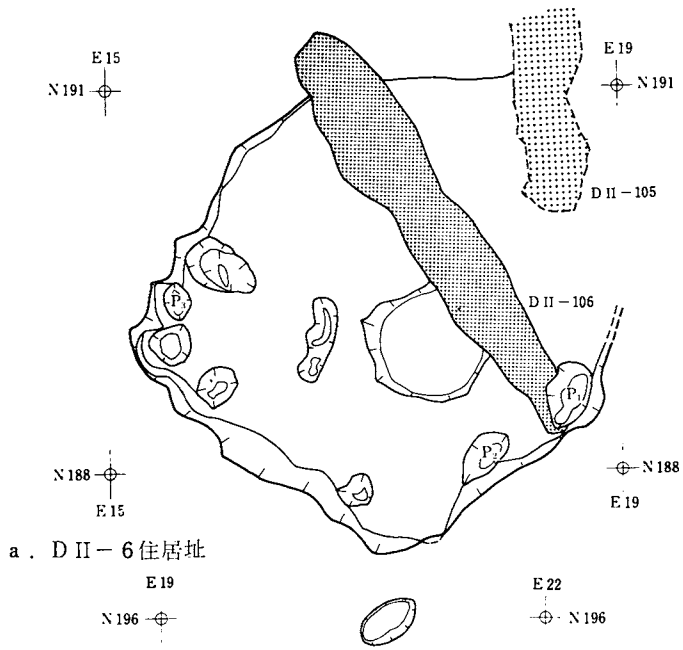


a. D II - 4 住居址



b. D II - 5 住居址

图版 17

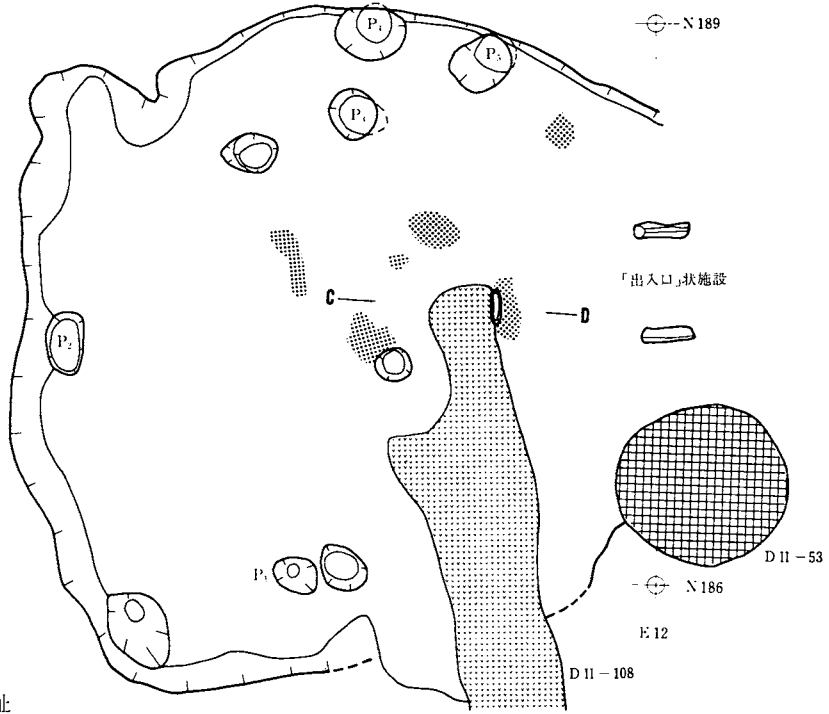


图版 18

E 8  
N 189

E 12  
N 189

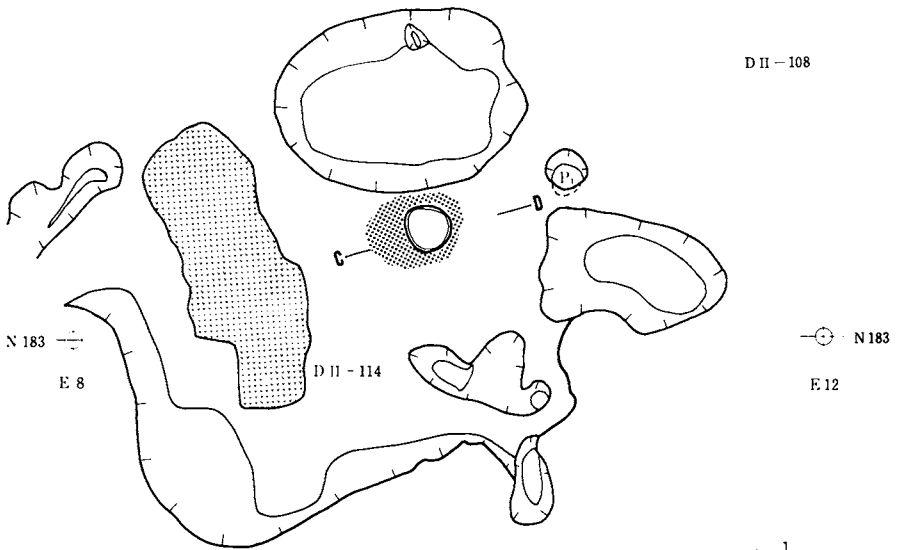
N 18f  
E 8



a. D II - 8 住居址

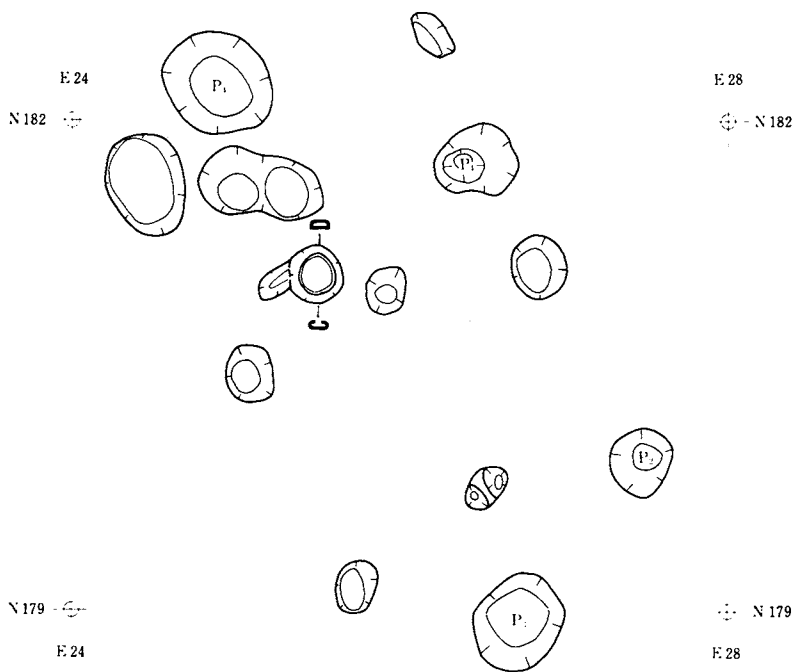
E 8  
N 185

E 12  
N 185

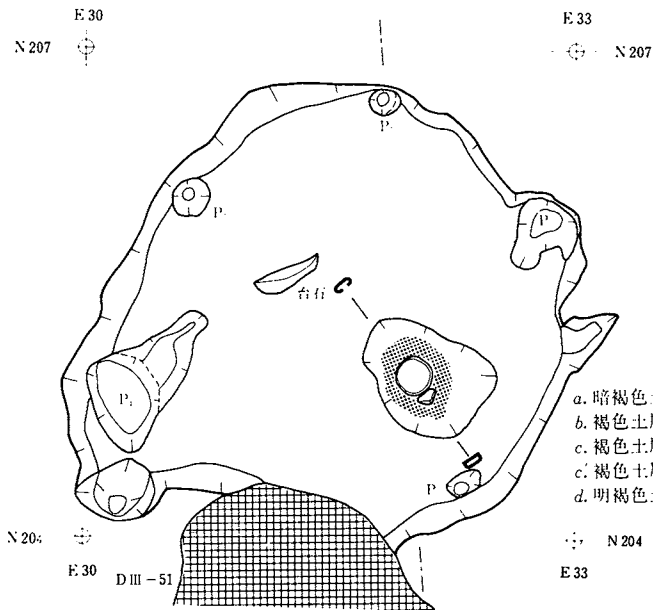


b. D II - 9 住居址

縮尺  $\frac{1}{40}$

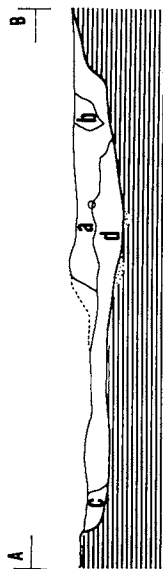


a. D II-12住居址



b. D III-2住居址

- a. 暗褐色土層(含、燒土、炭化物)
- b. 褐色土層(含、燒土、炭化物)
- c. 褐色土層(含、燒土、炭化物)
- d. 明褐色土層

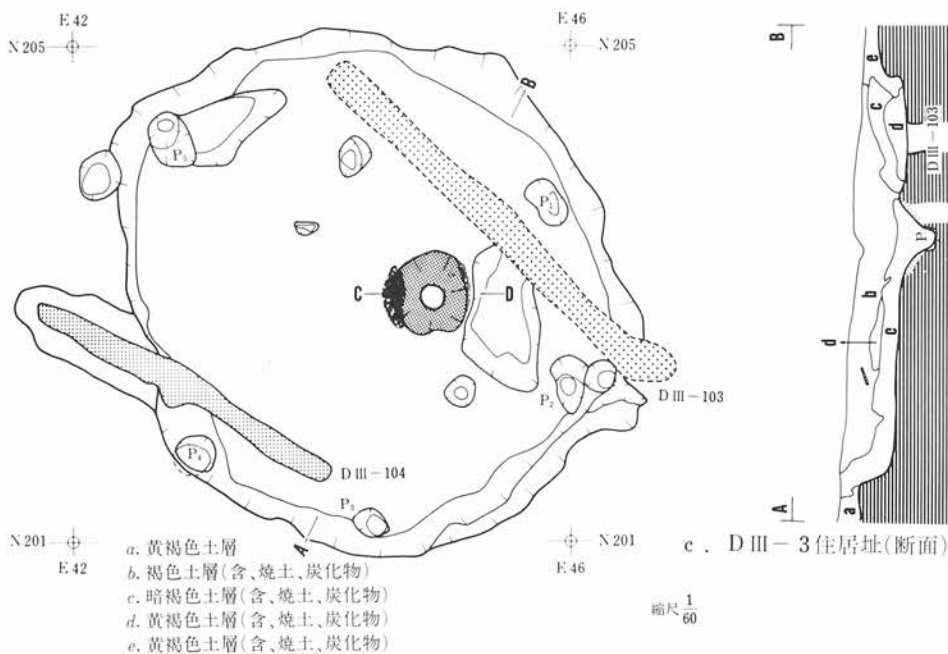
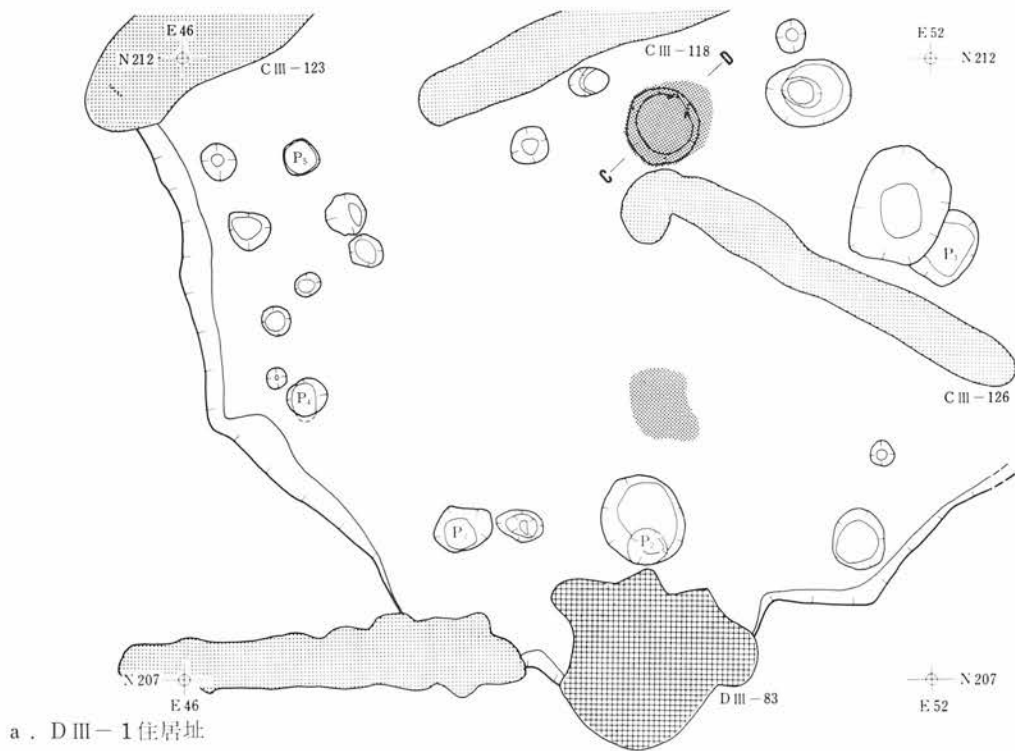


c. D III-2住居址(断面)

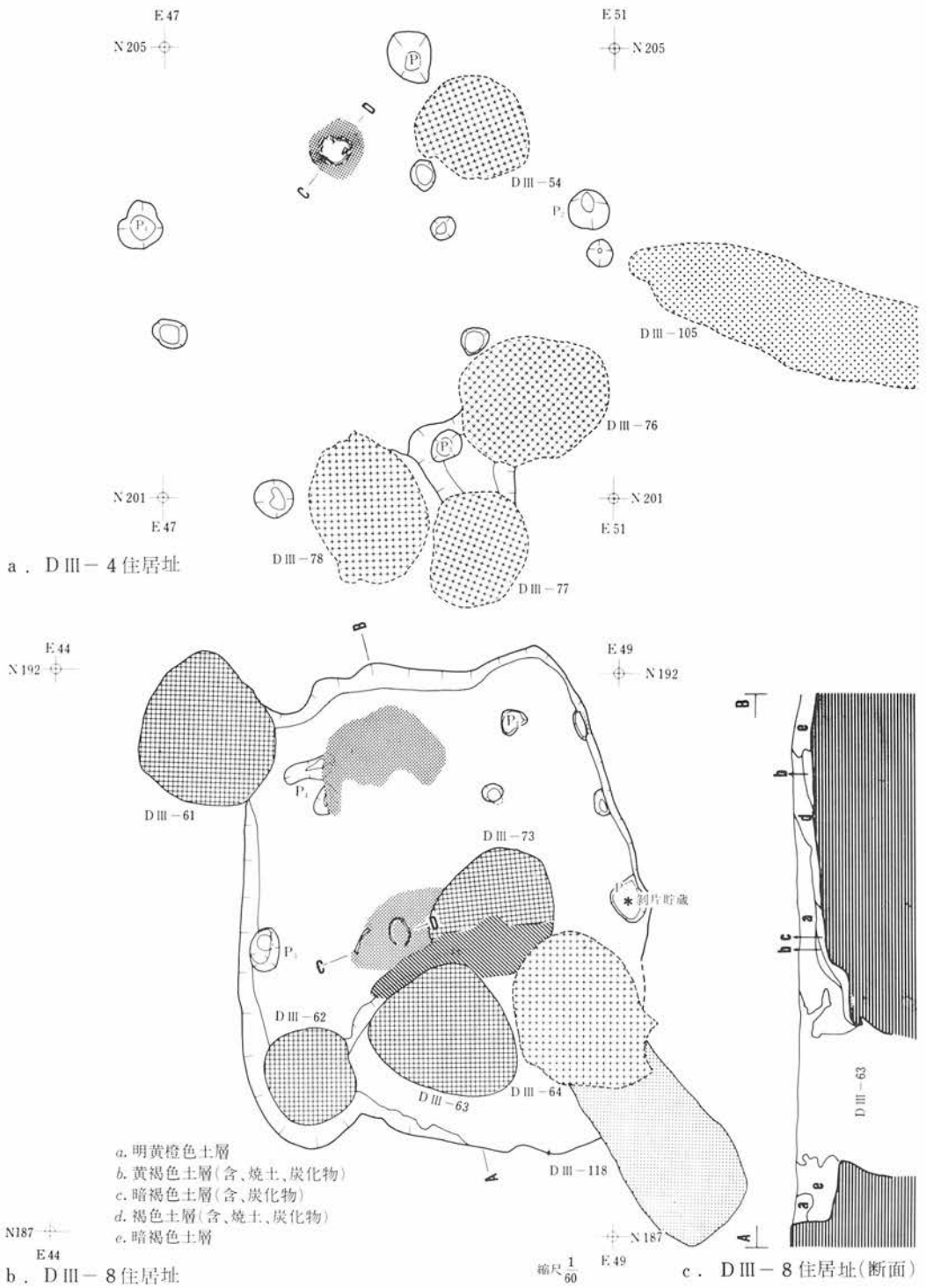


图版20

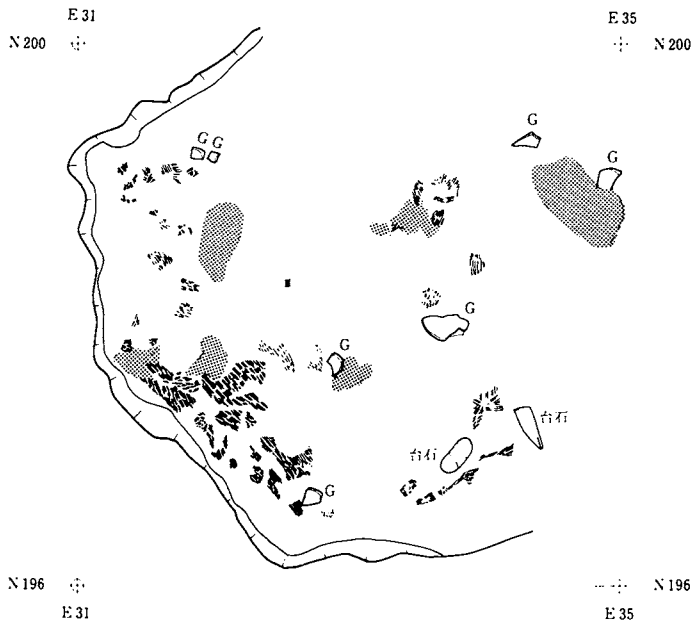




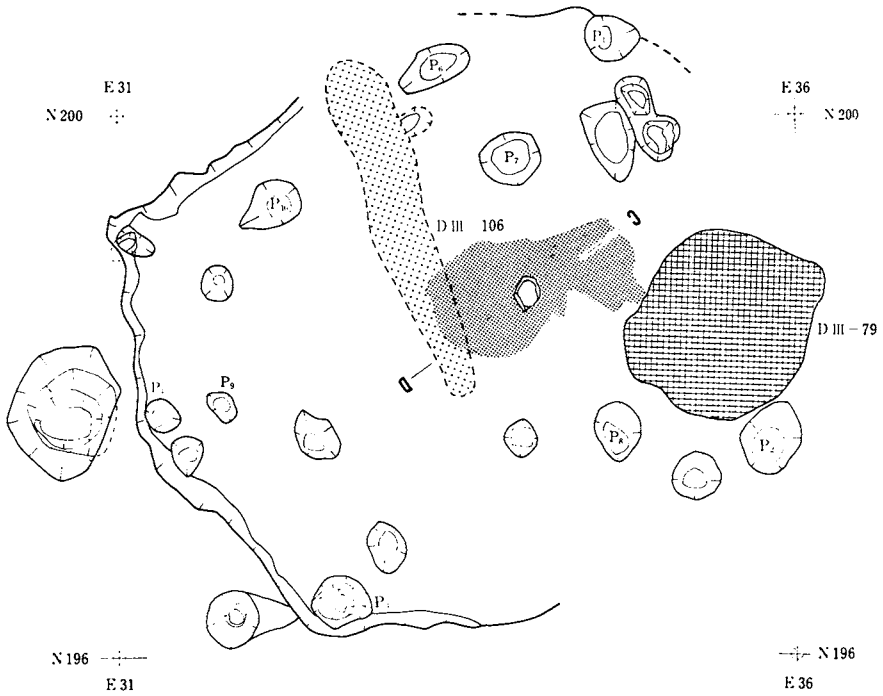
图版21



図版 22

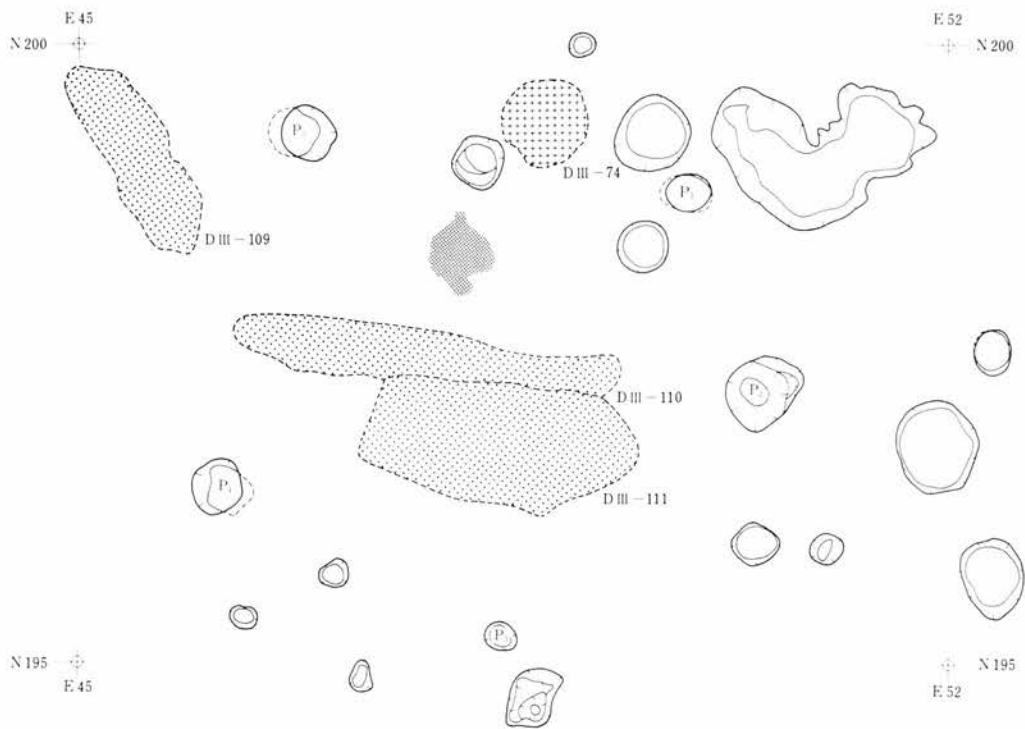


a. D III-5 住居址(1次プラン)

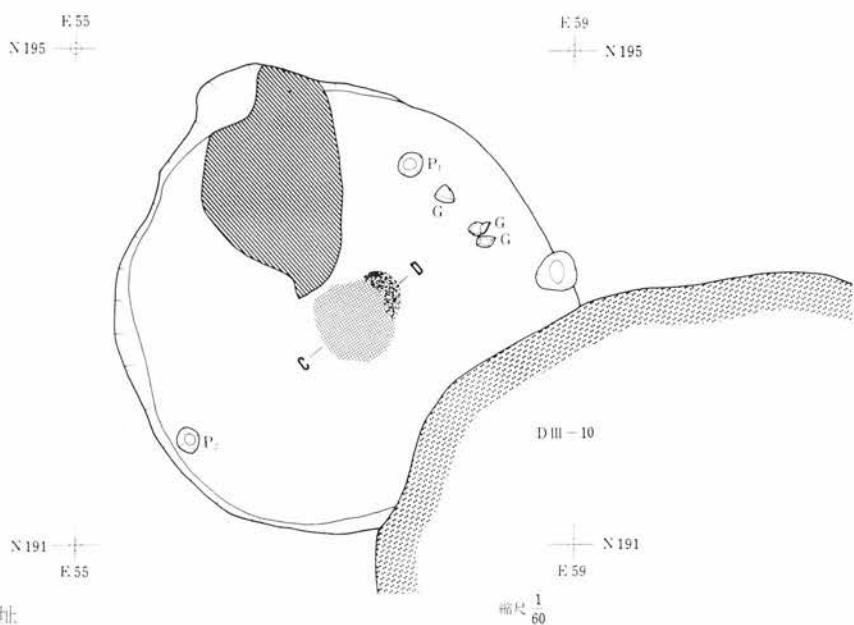


b. D III-5 住居址(2次プラン)

縮尺  $\frac{1}{60}$



a. D III - 6 住居址

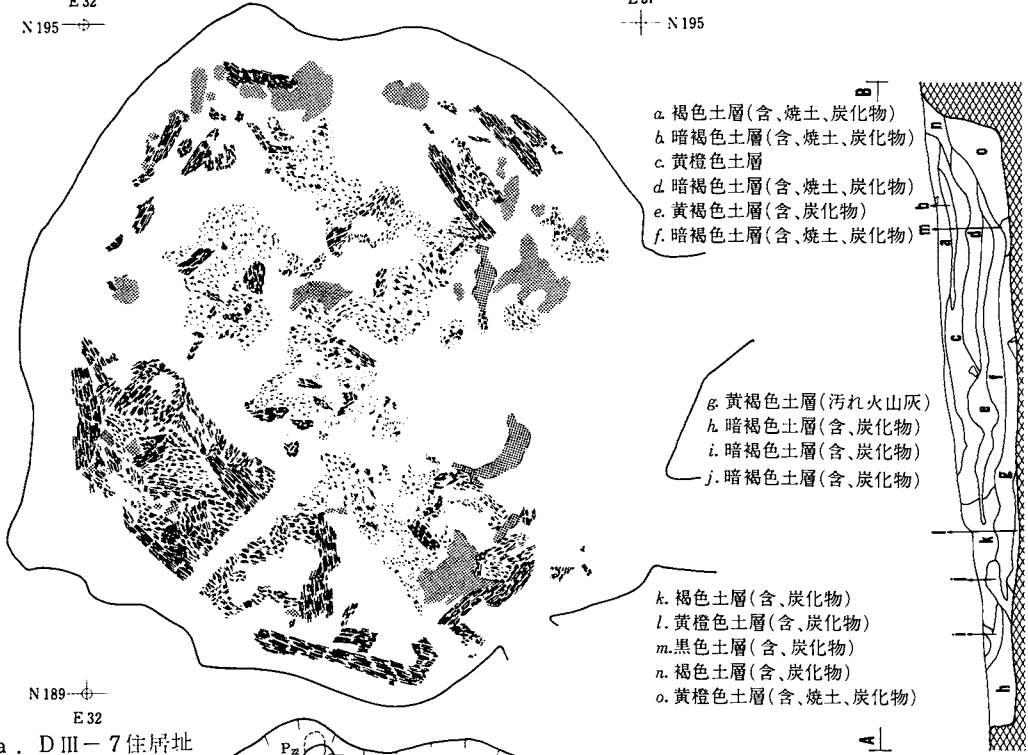


b. D III - 9 住居址

图版 24

E 32  
N 195

E 37  
N 195



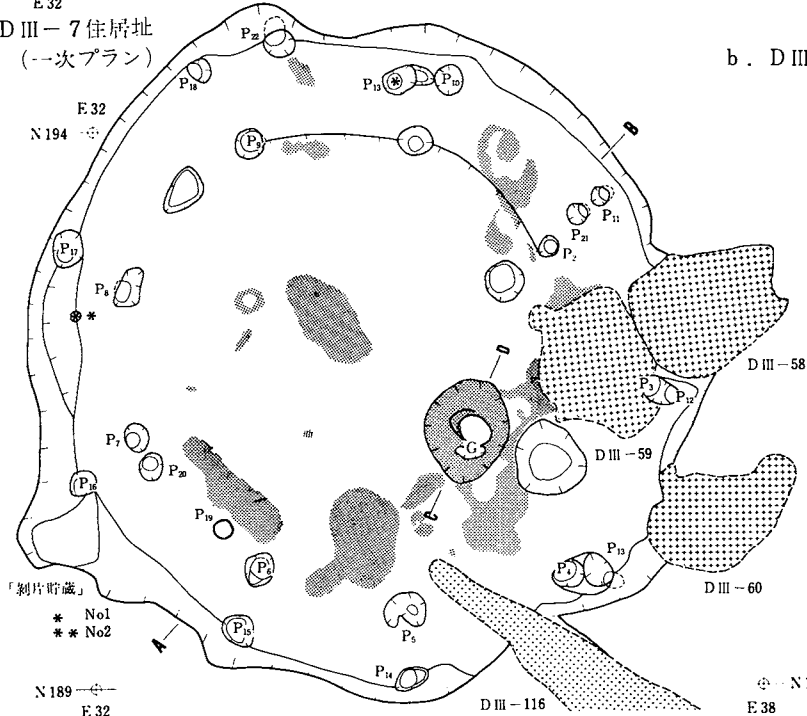
- a. 褐色土層(含、焼土、炭化物)
- b. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- c. 黄橙色土層
- d. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- e. 黄褐色土層(含、炭化物)
- f. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)

- g. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- h. 暗褐色土層(含、炭化物)
- i. 暗褐色土層(含、炭化物)
- j. 暗褐色土層(含、炭化物)

- k. 褐色土層(含、炭化物)
- l. 黄橙色土層(含、炭化物)
- m. 黒色土層(含、炭化物)
- n. 褐色土層(含、炭化物)
- o. 黄橙色土層(含、焼土、炭化物)

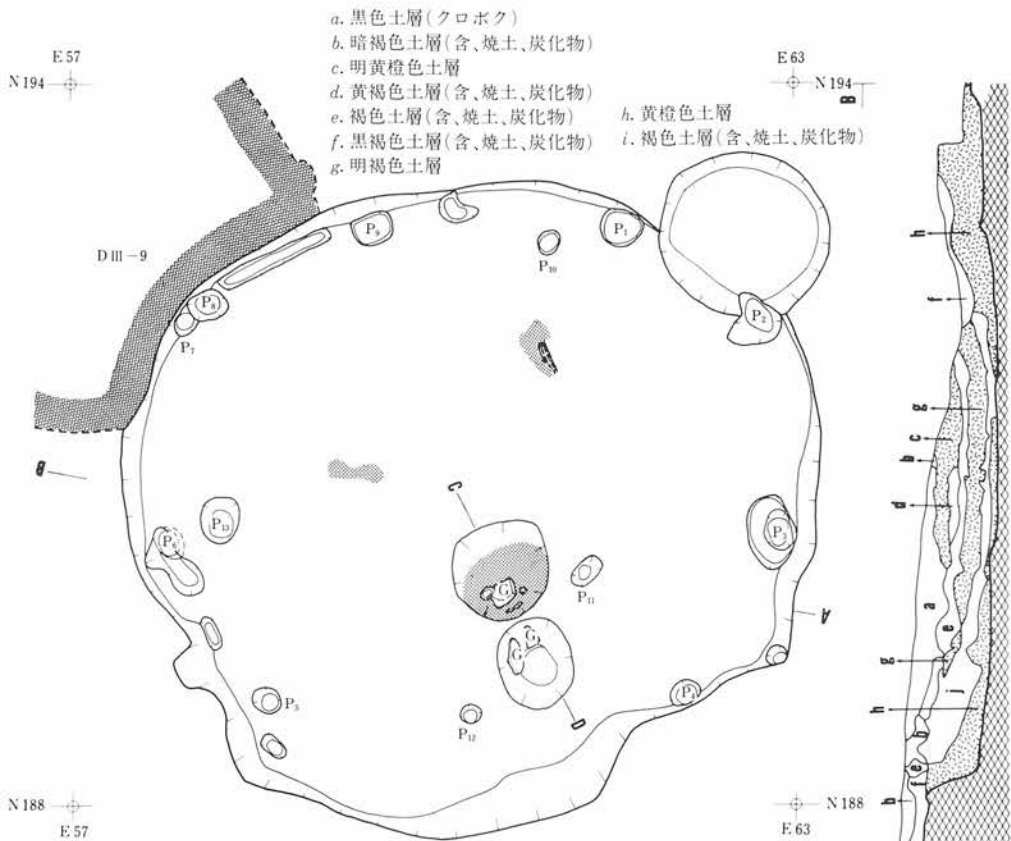
N 189  
E 32  
a. D III-7 住居址  
(一次プラン)

b. D III-7 住居址(断面)



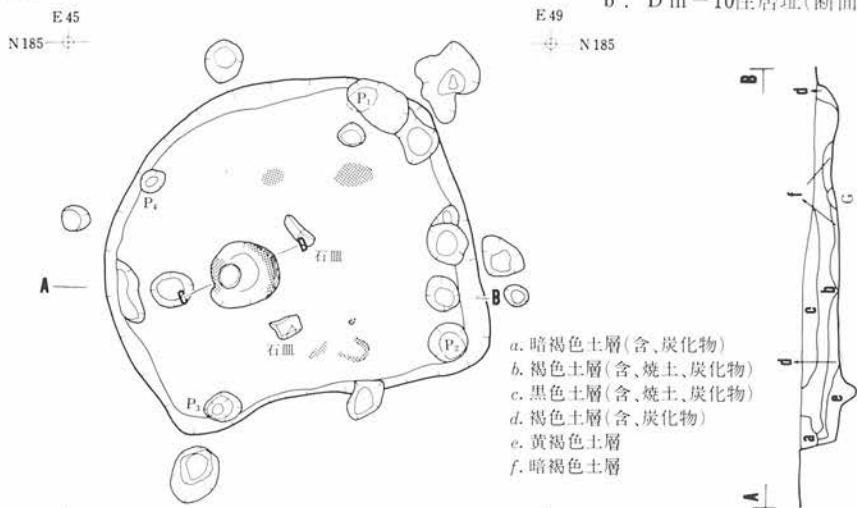
c. D III-7 住居址(二次プラン)

図版 25



a. D III-10住居址

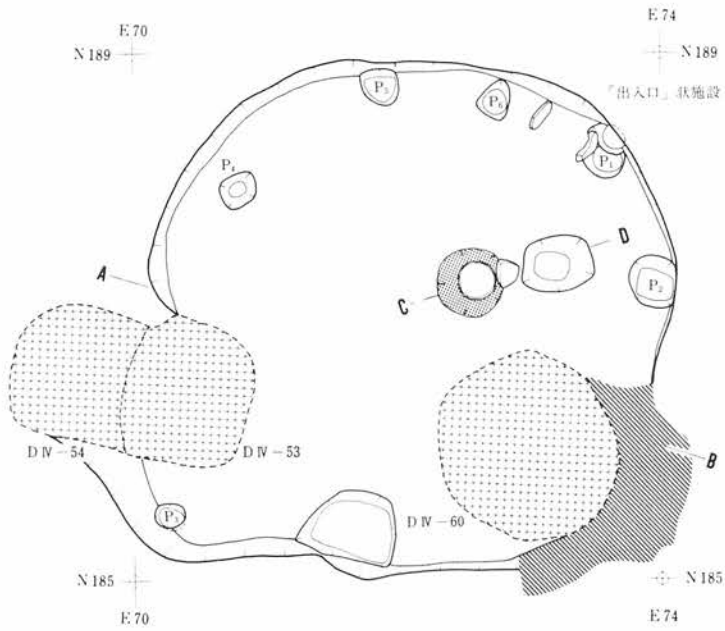
b. D III-10住居址(断面)



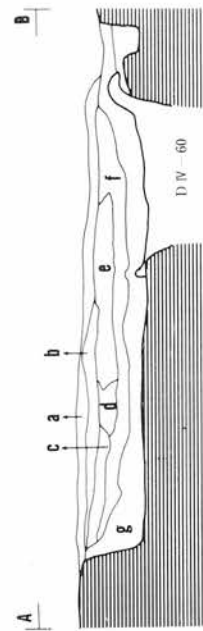
c. D III-11住居址

d. D III-11住居址(断面)

縮尺 1/60

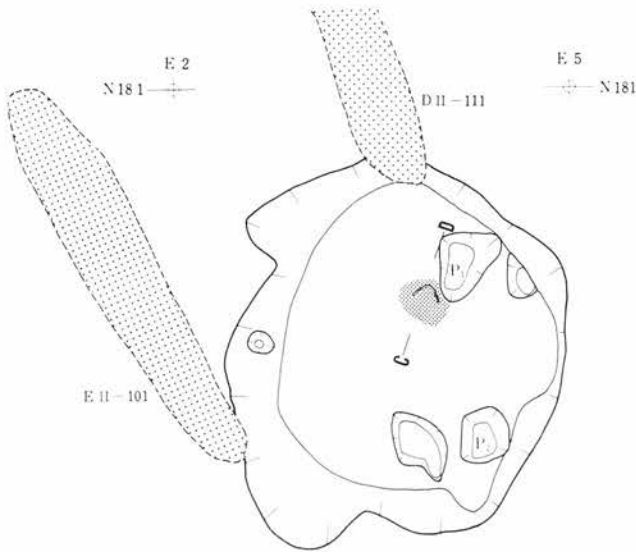


a. D III-1 住居址



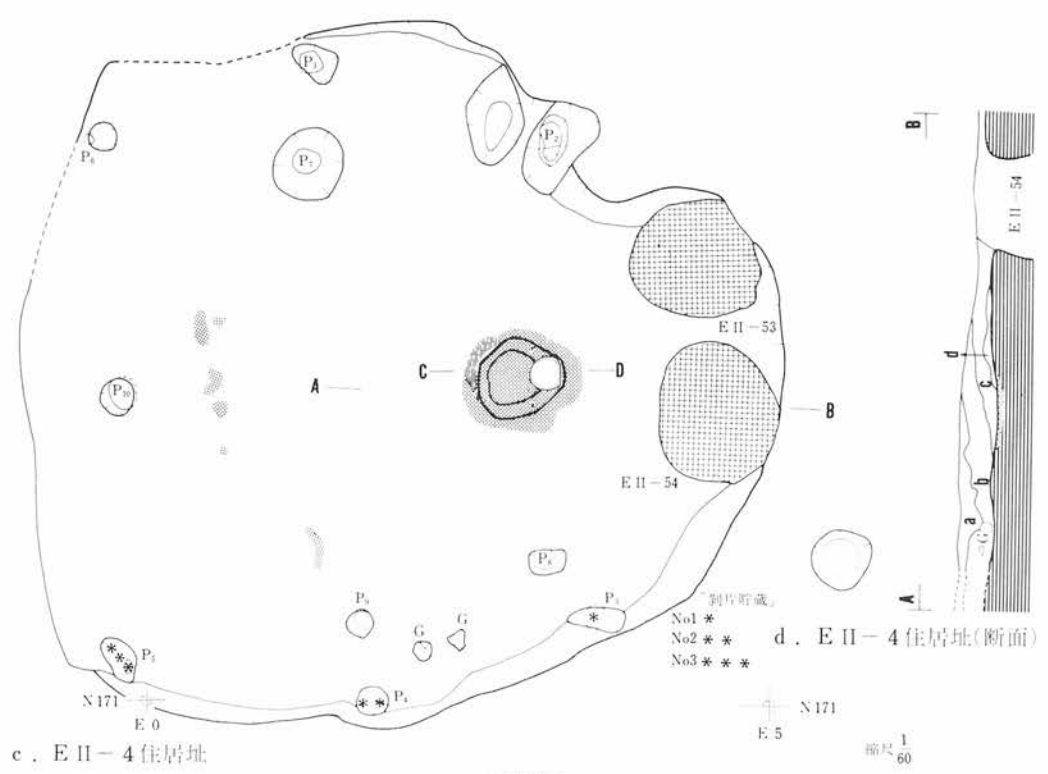
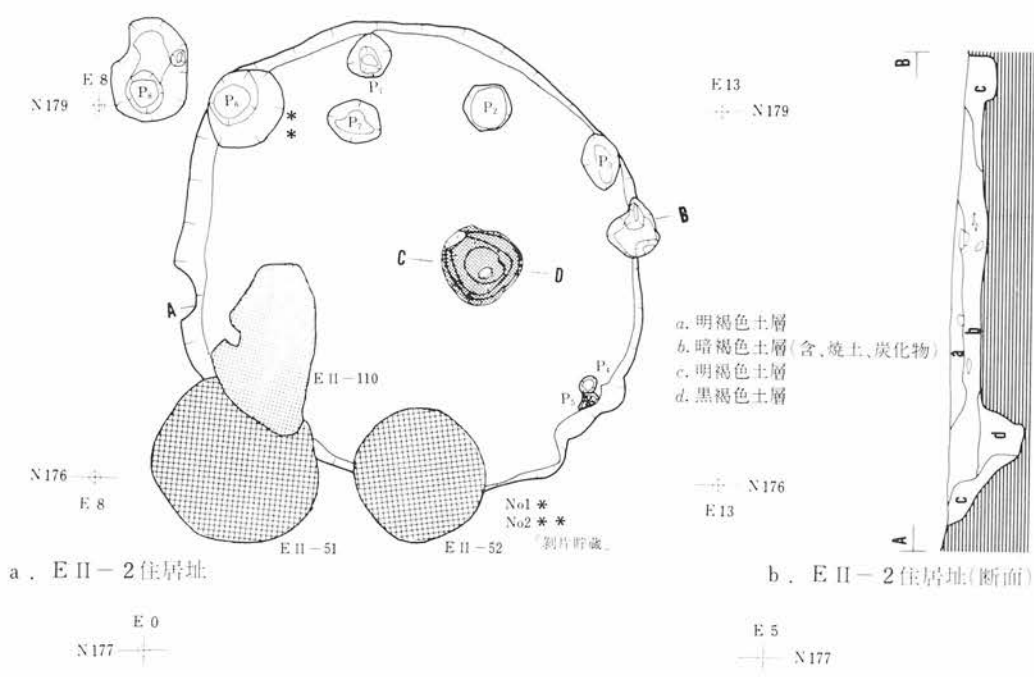
b. D IV-1 住居址(断面)

- a. 暗褐色土層(置土)
- b. 黑色土層(含、燒土、炭化物)
- c. 黃褐色土層(汚土、火山灰)
- d. 暗褐色土層(含、炭化物)
- e. 黃褐色土層(含、燒土)
- f. 褐色土層(含、燒土、炭化物)
- g. 暗褐色土層(含、燒土、炭化物)



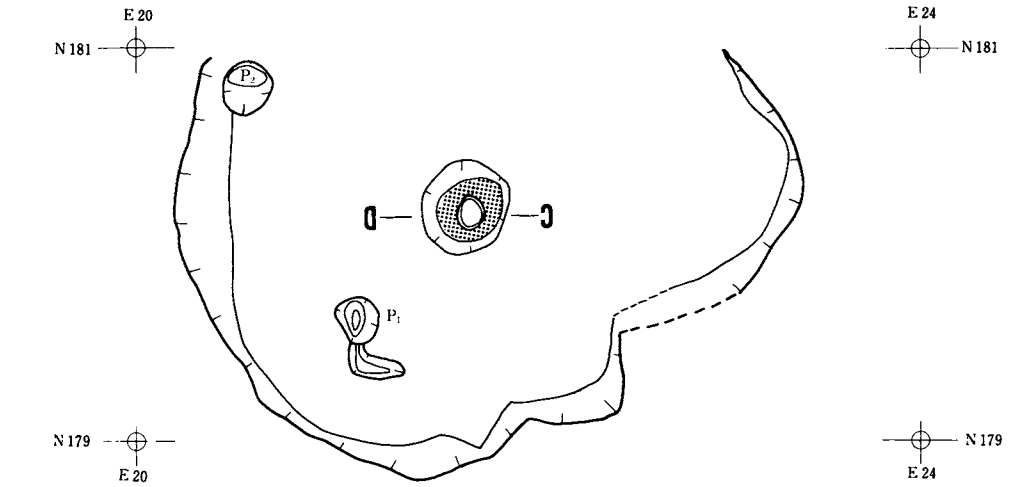
c. E II-1 住居址

縮尺  $\frac{1}{60}$

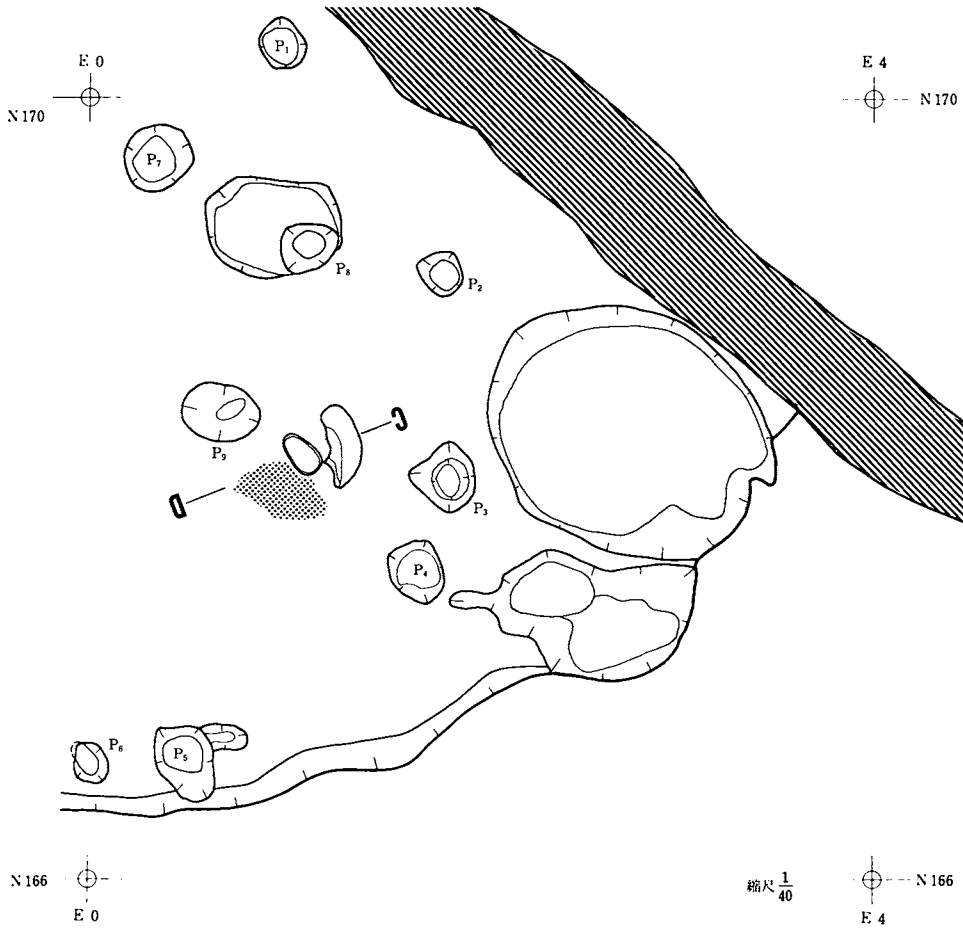


図版 28



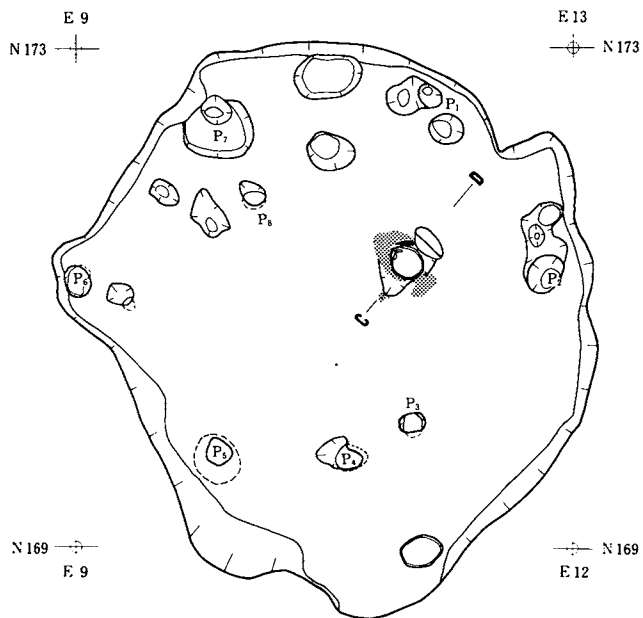


a. E II - 3 住居址

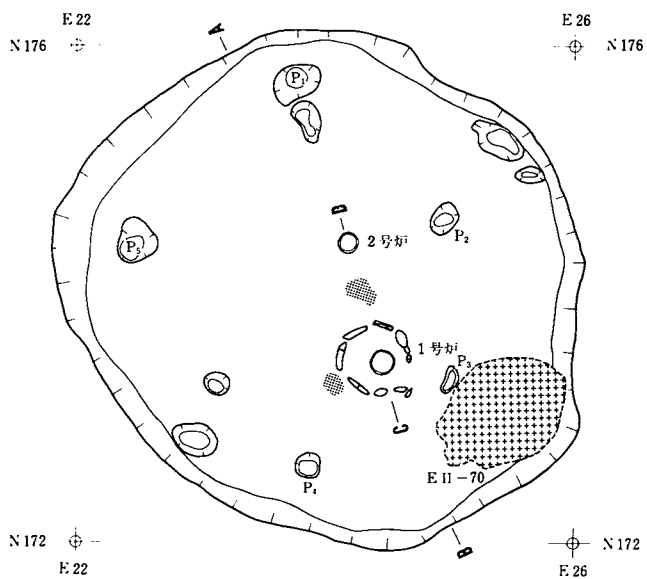


b. E II - 5 住居址

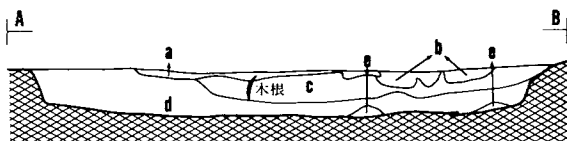
图版 29



a. E II-6 住居址



b. E II-7 住居址

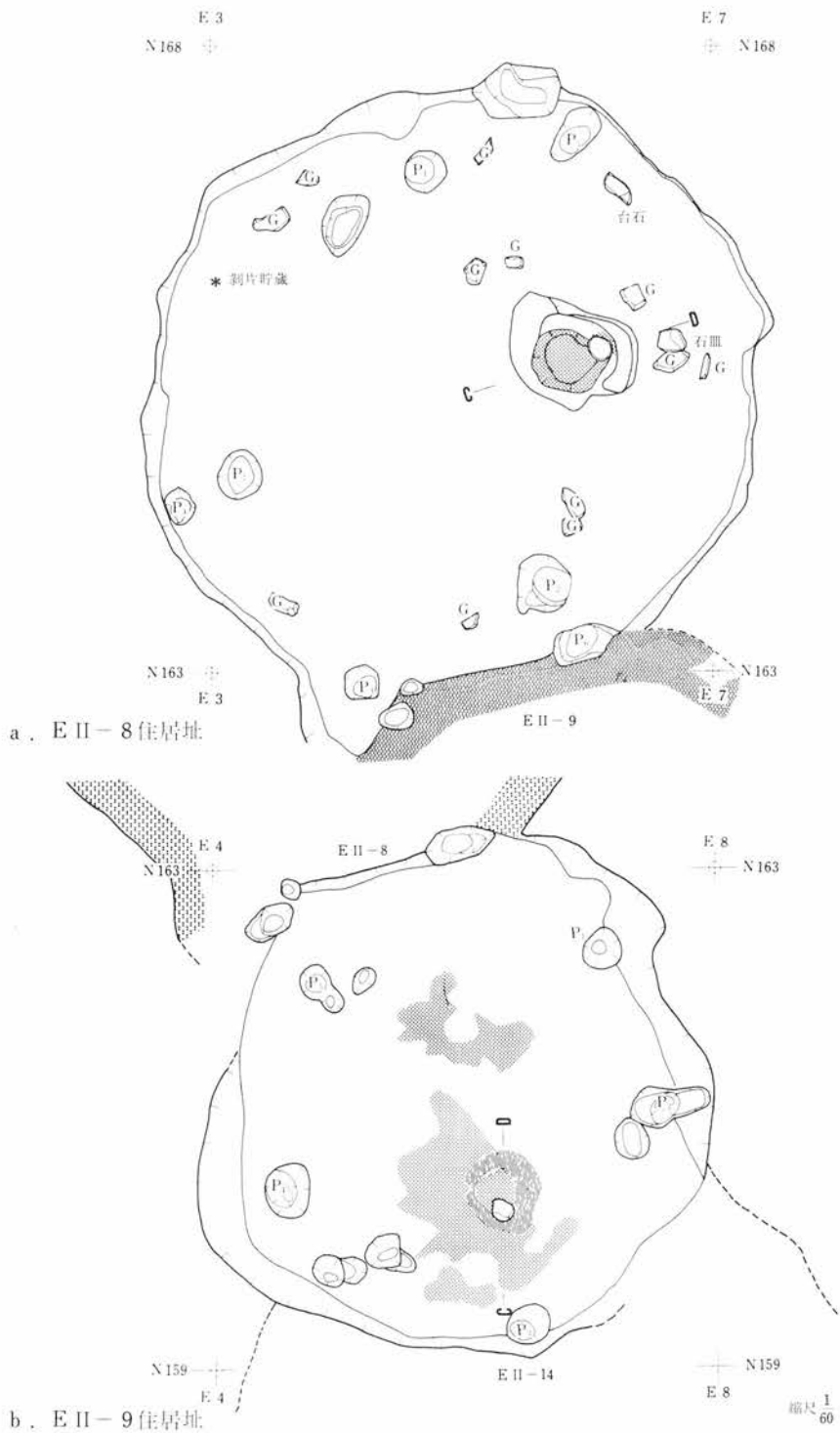


c. E III-7 住居址(断面)

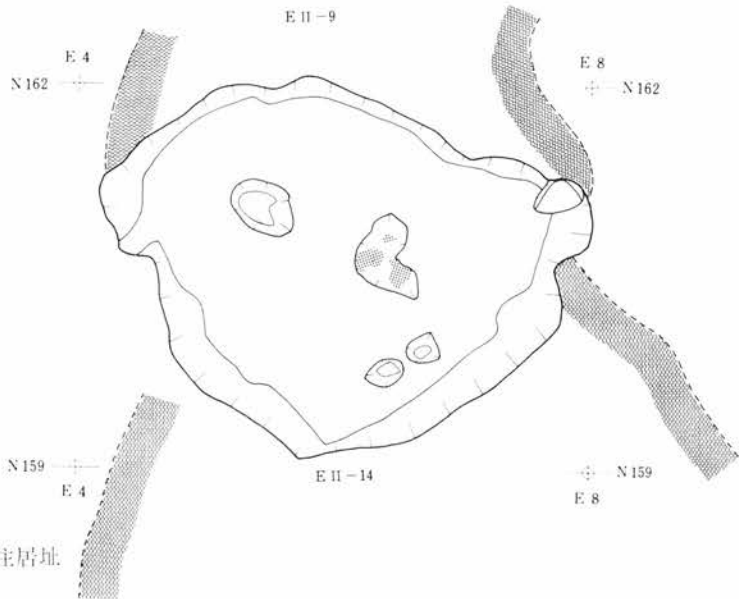
- a. 黑色土層(含、燒土、炭化物)
- b. 褐色土層
- c. 褐色土層(含、燒土、炭化物)
- d. 暗褐色土層(含、燒土、炭化物)
- e. 褐色土層(汚れ火山灰)

縮尺  $\frac{1}{60}$

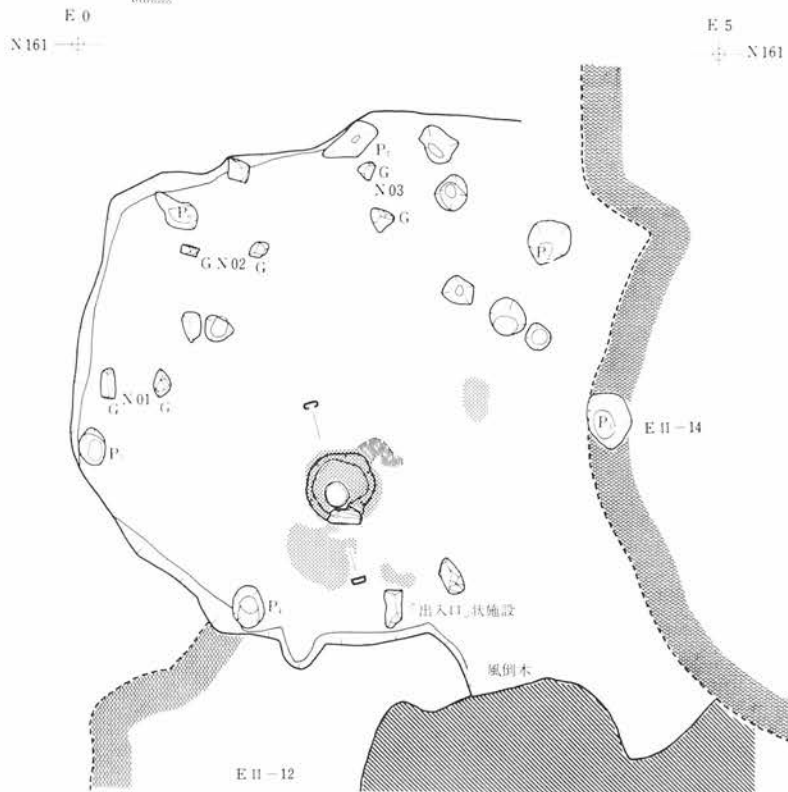
圖版30



図版31



a. E II-10住居址

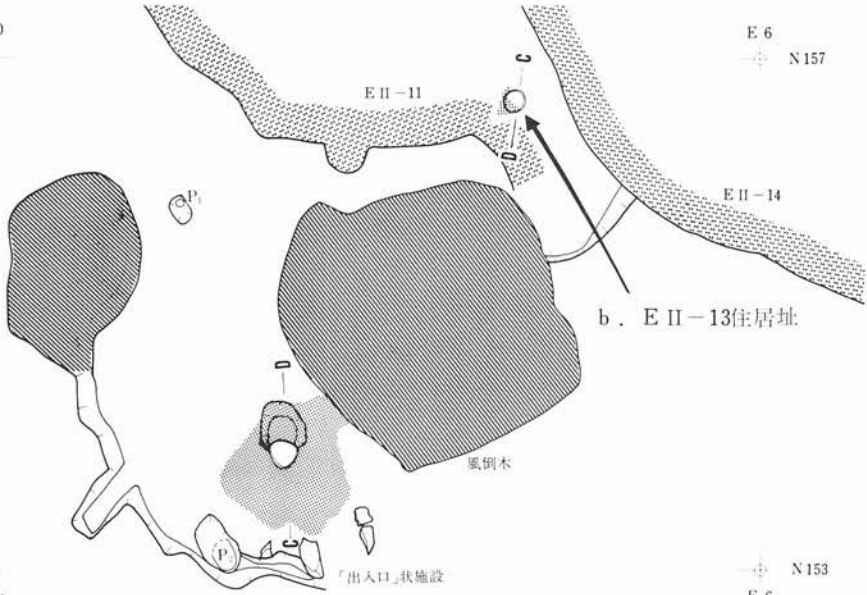


b. E II-11住居址

図版32

E 0  
N 157

E 6  
N 157



b. E II-13住居址

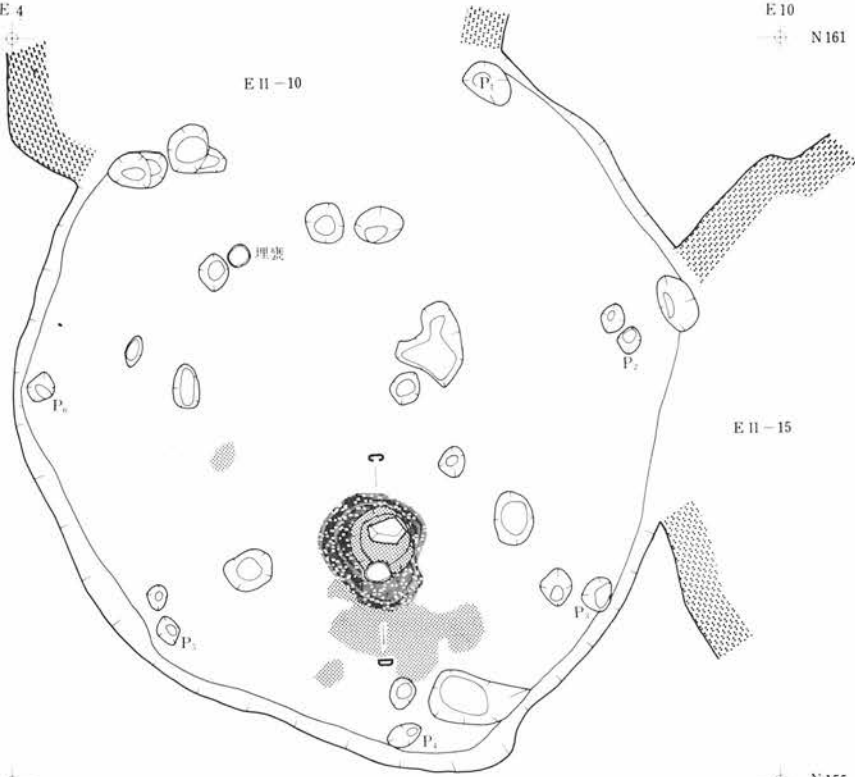
N 153  
E 0

N 153  
E 6

a. E II-12住居址

E 4  
N 161

E 10  
N 161

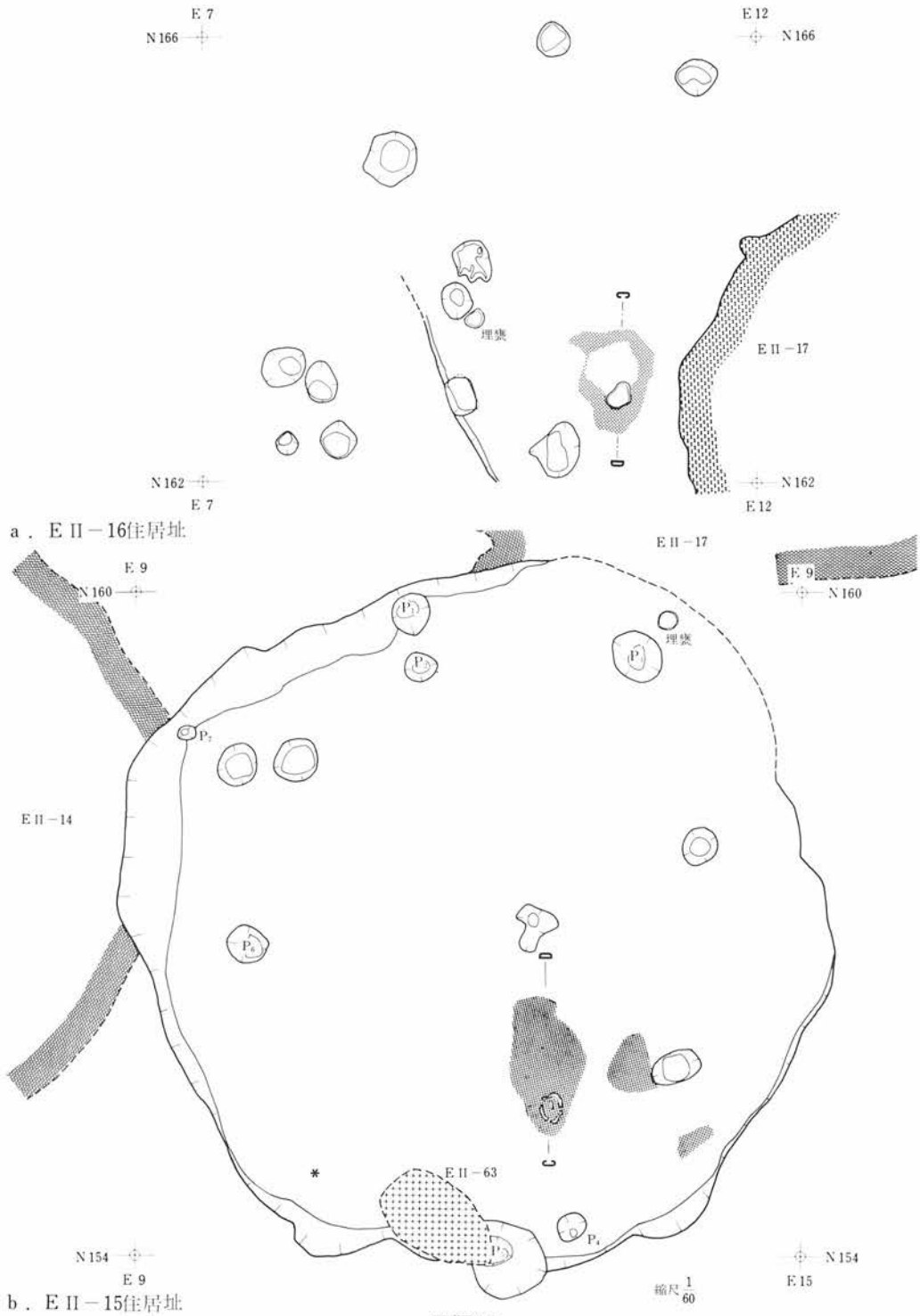


c. E II-14住居址

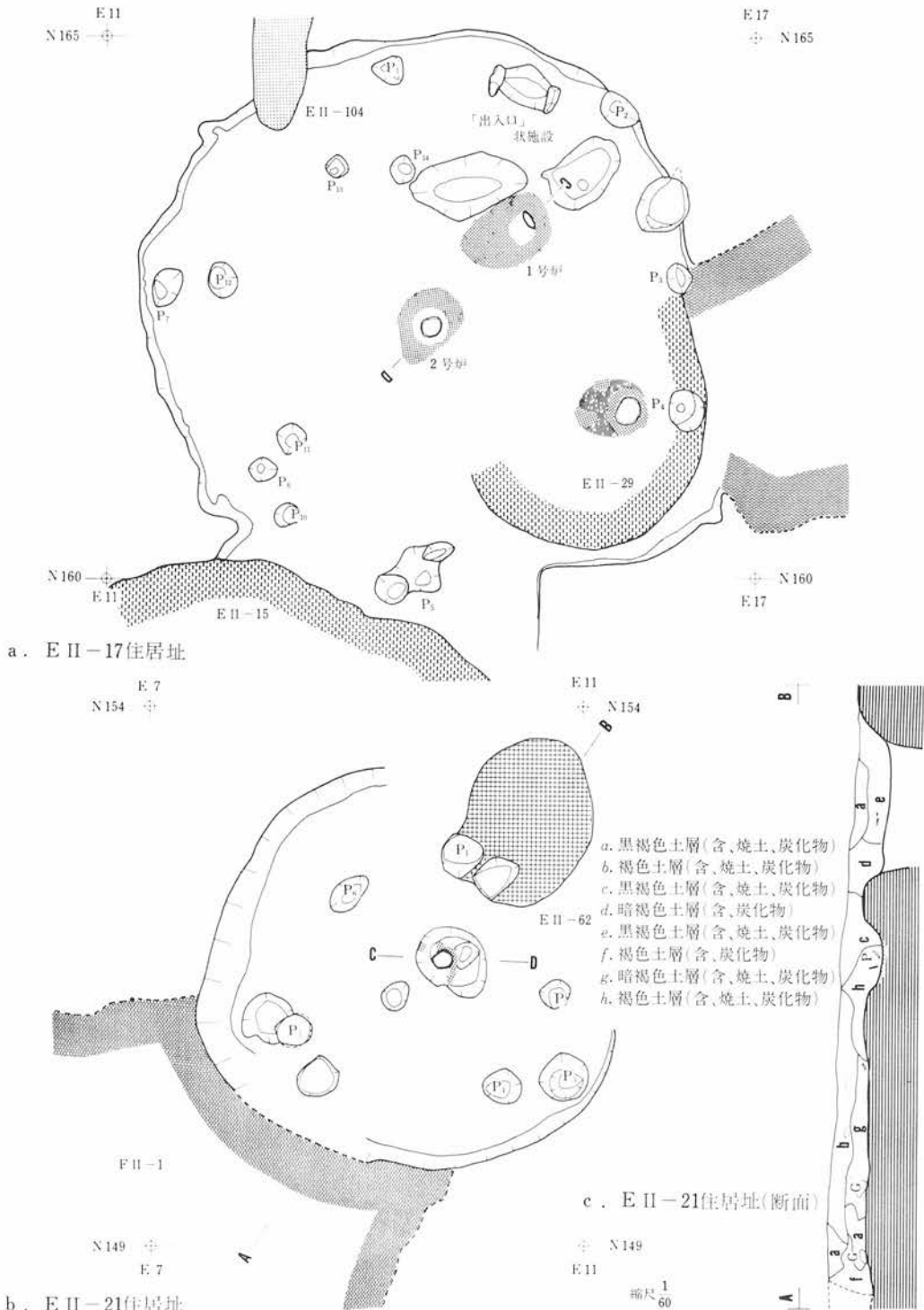
N 155  
E 4

N 155  
E 10

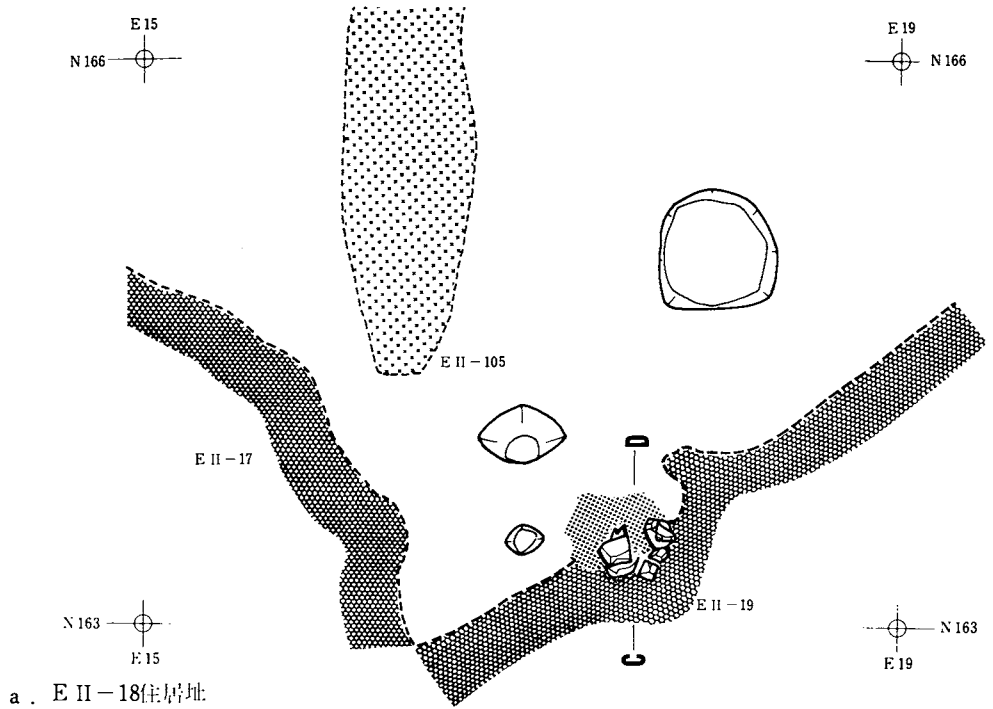
図版33



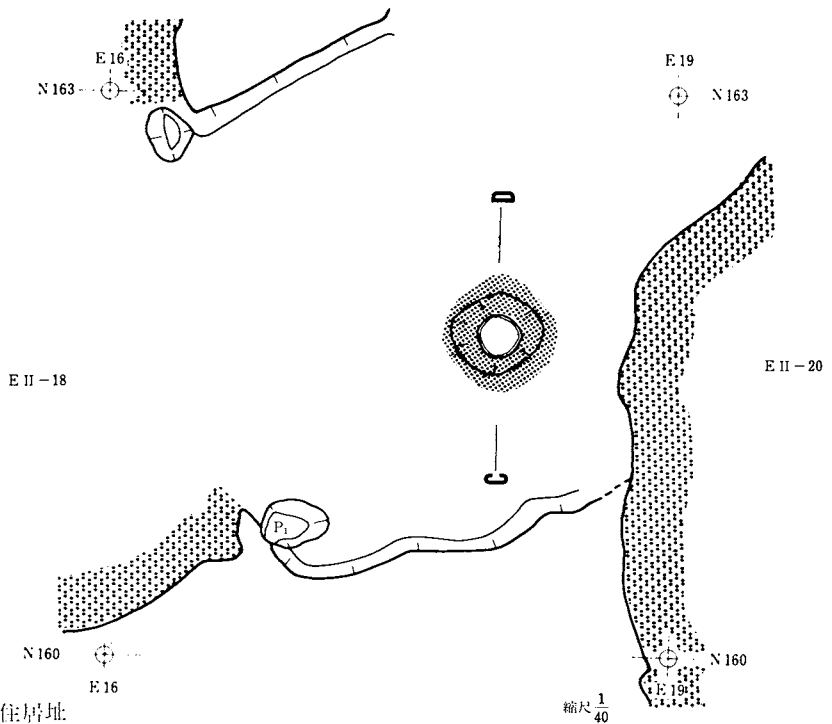
图版 34



図版35



a. E II-18住居址



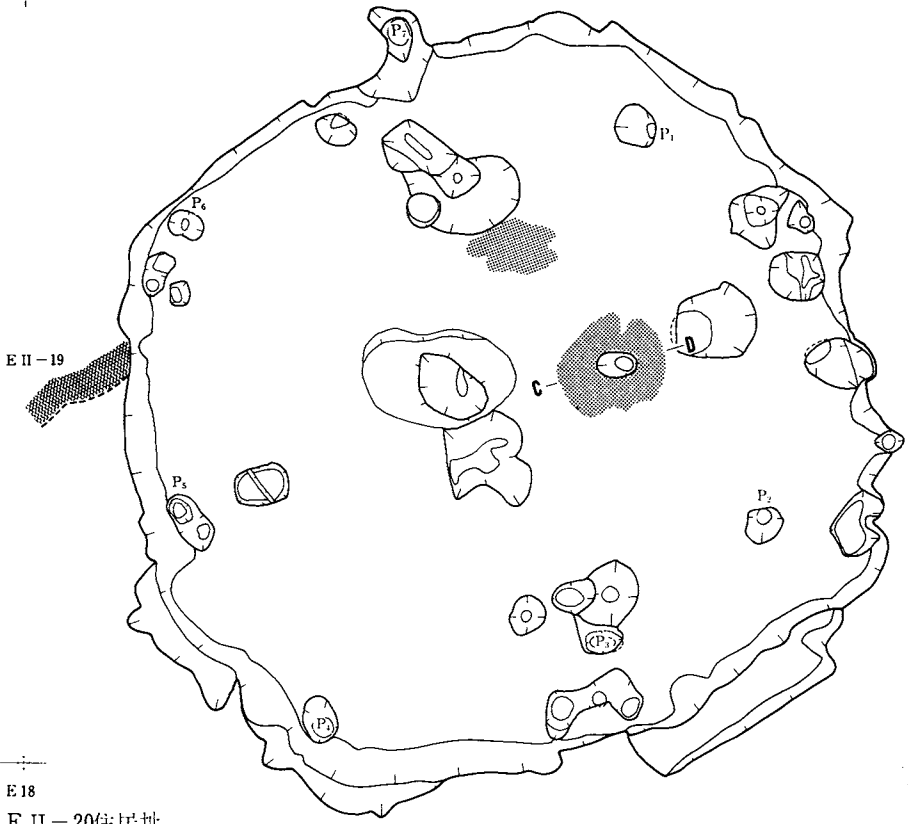
b. E II-19住居址

图版36



E 18  
N 164

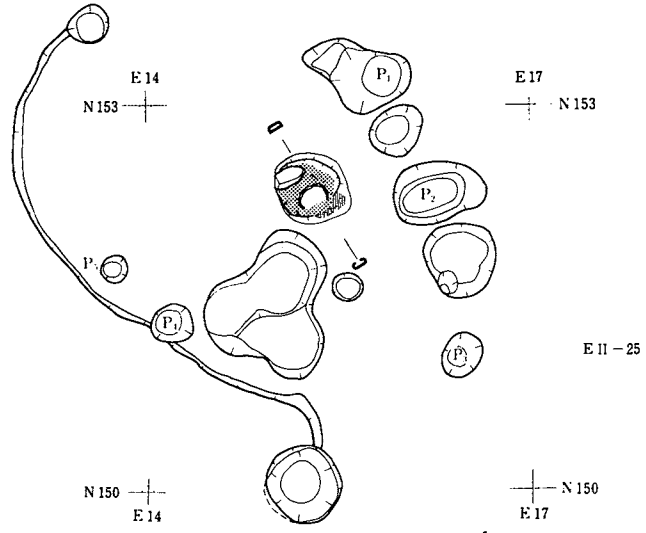
E 25  
N 164



N 158  
E 18

N 158  
E 25

a. E II-20住居址



N 150  
E 14

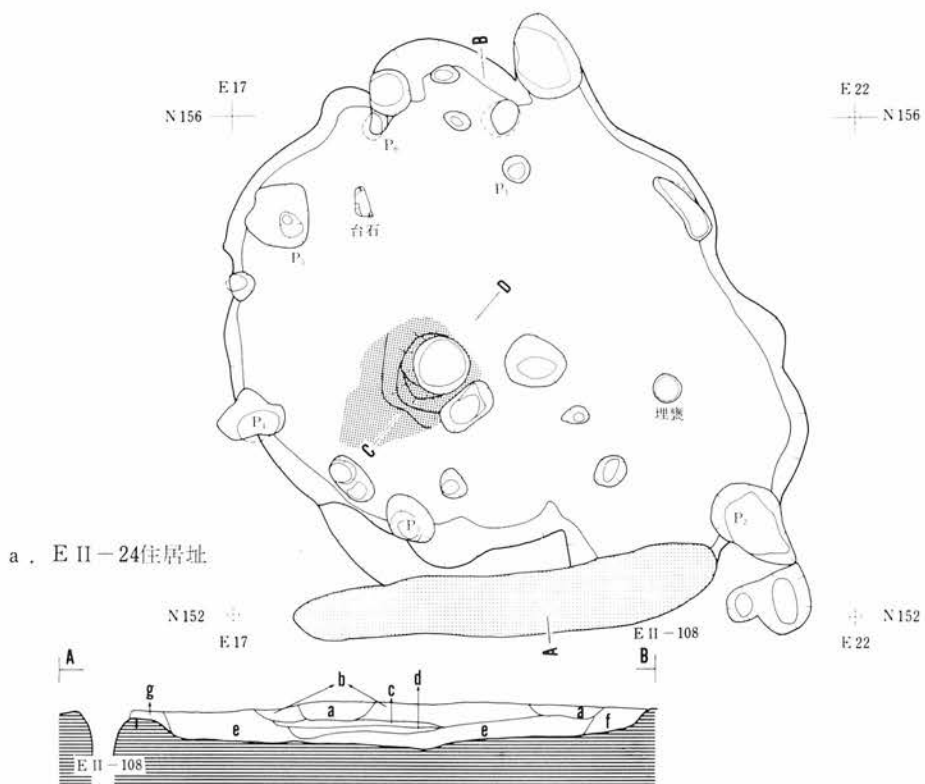
N 150  
E 17

b. E II-22住居址

E II-23住居址(欠番)

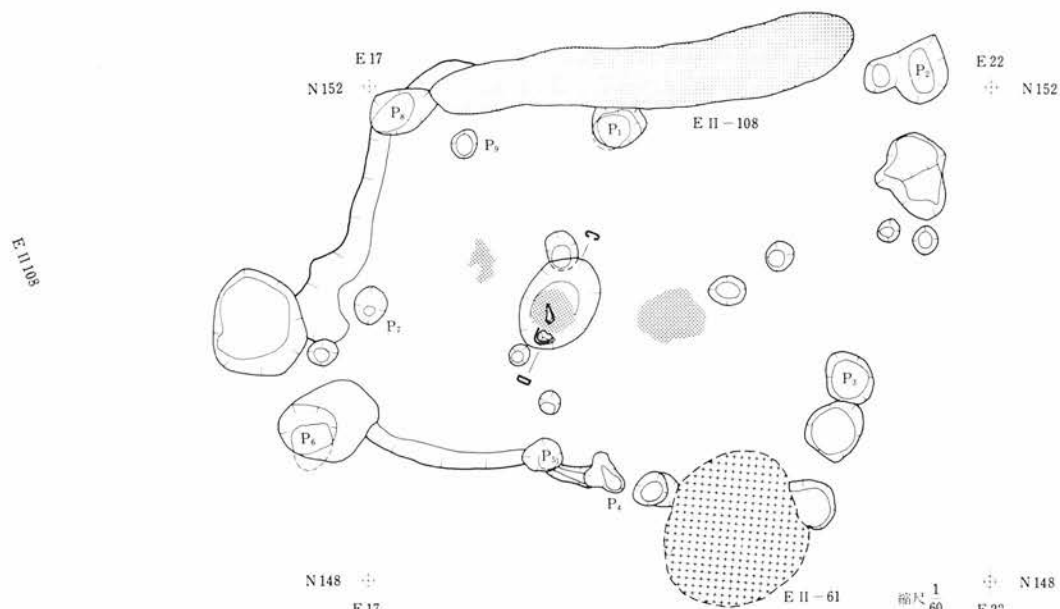
縮尺  $\frac{1}{60}$

图版 37

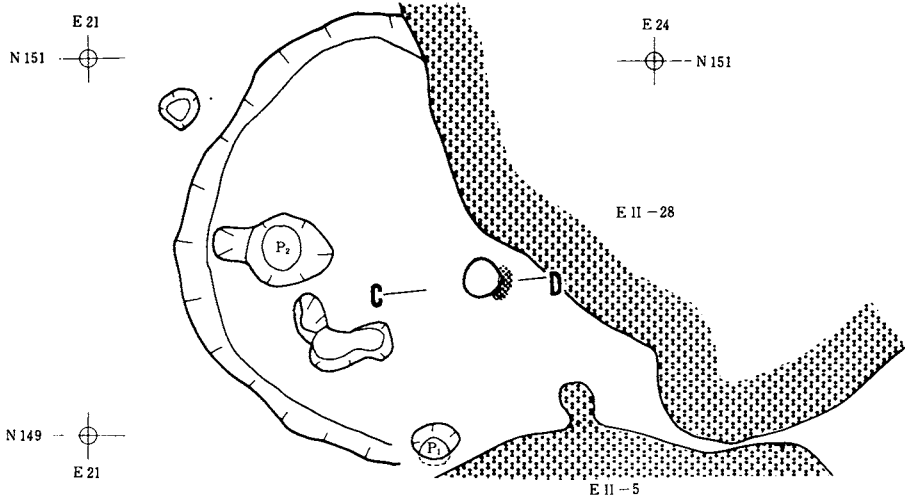


a. E II-24住居址

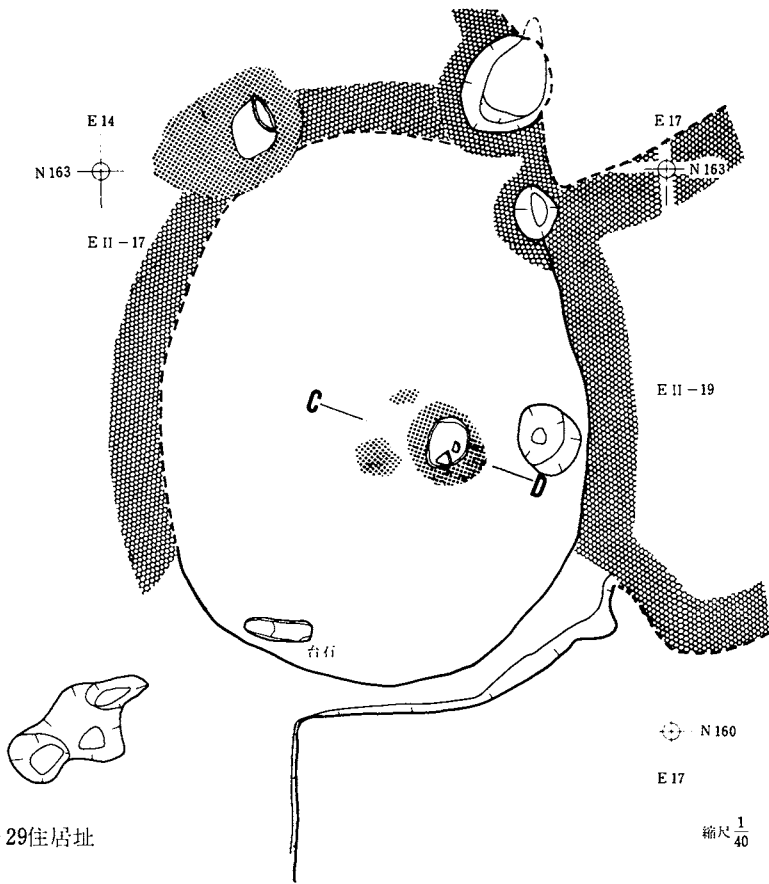
b. E II-24住居址(断面)



图版38



a. E II-26住居址

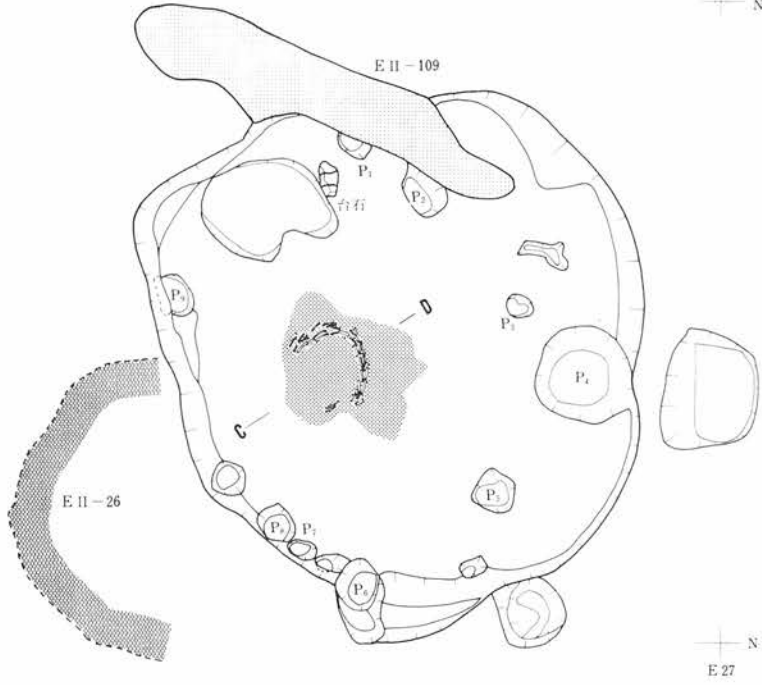


b. E II-29住居址

图版 39

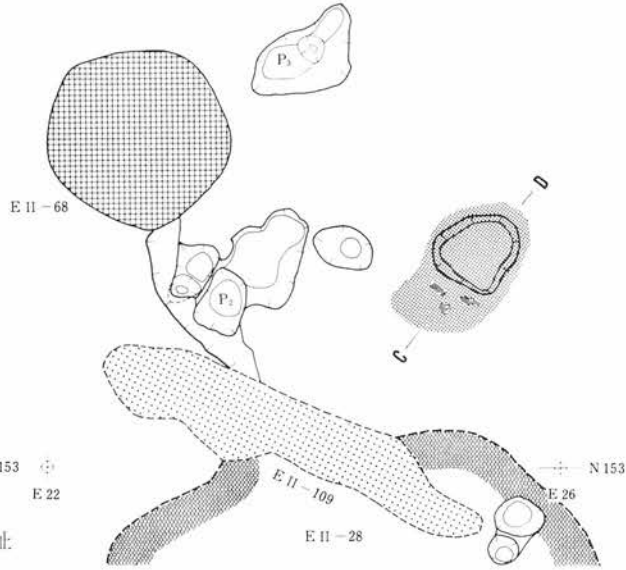
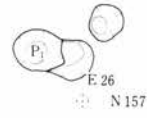
E 21  
N 154

E 27  
N 154



a. E II-28住居址

E 22  
N 157

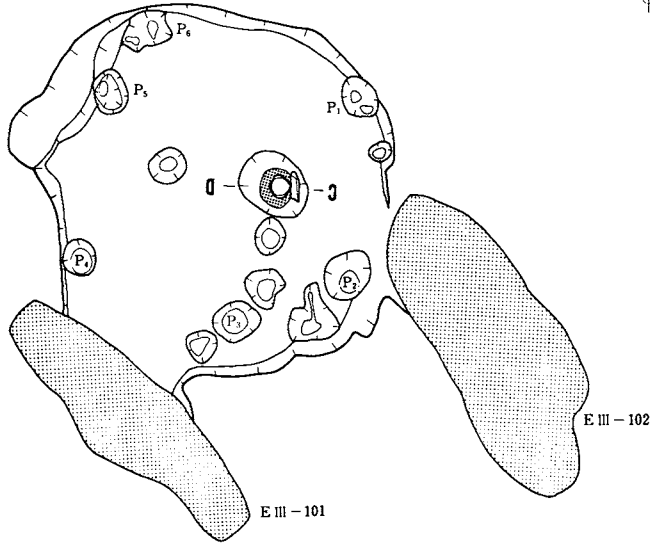


b. E II-27住居址

縮尺  $\frac{1}{60}$

E 29  
N 181

E 34  
N 181



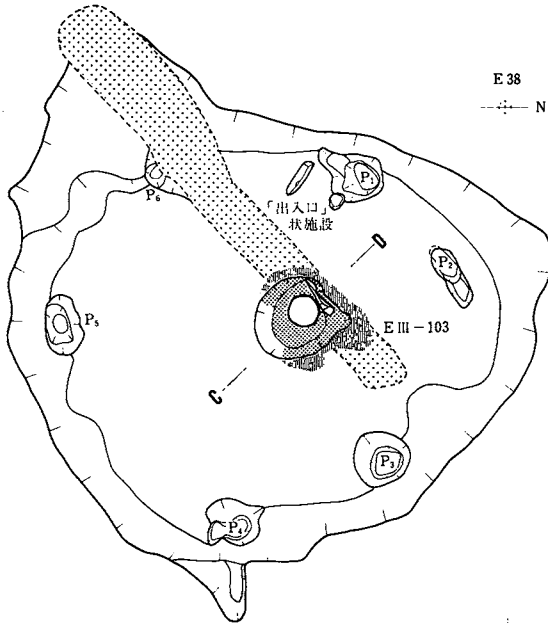
N 176  
E 29

N 176  
E 34

a. E III-1 住居址

E 35  
N 179

E 38  
N 179



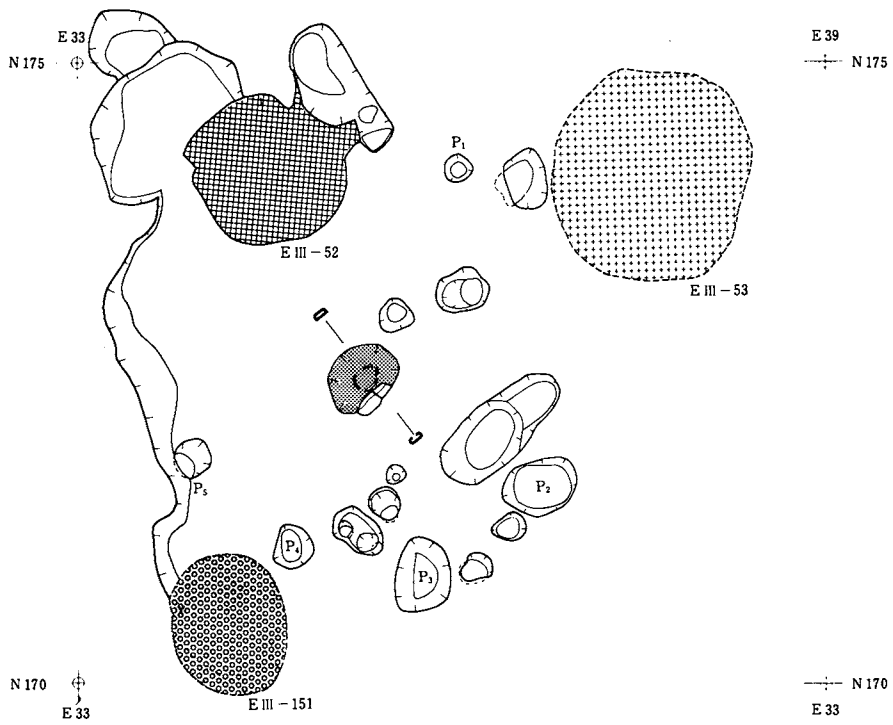
N 175  
E 35

N 175  
E 38

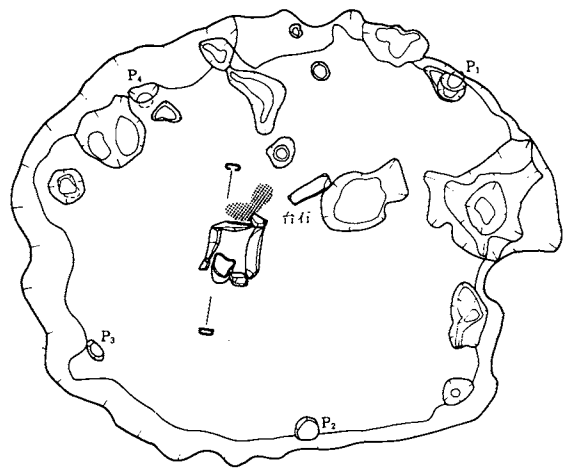
縮尺  $\frac{1}{60}$

b. E III-2 住居址

図版 41



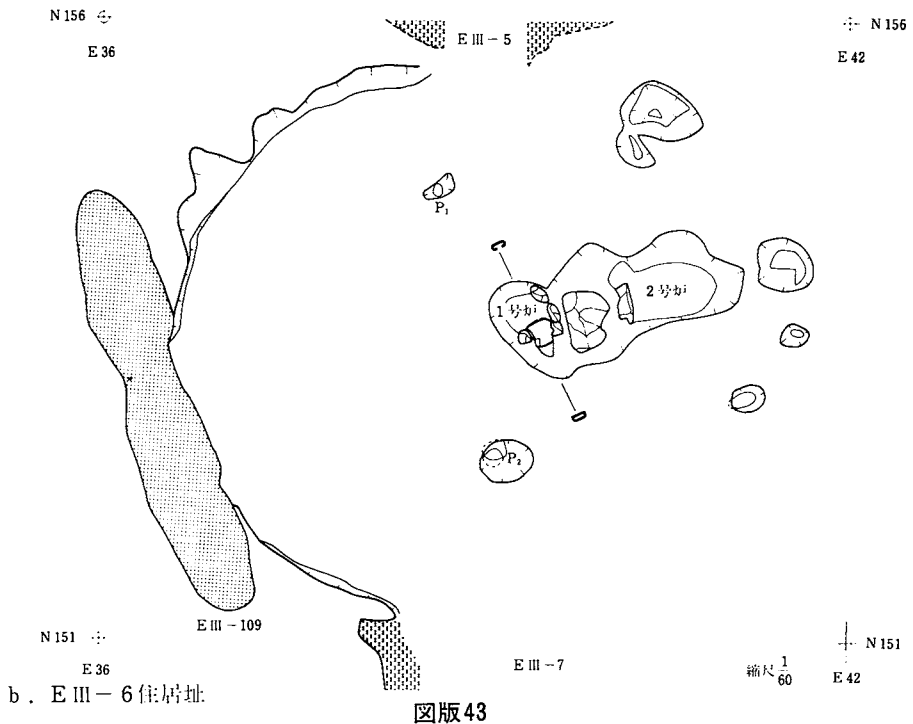
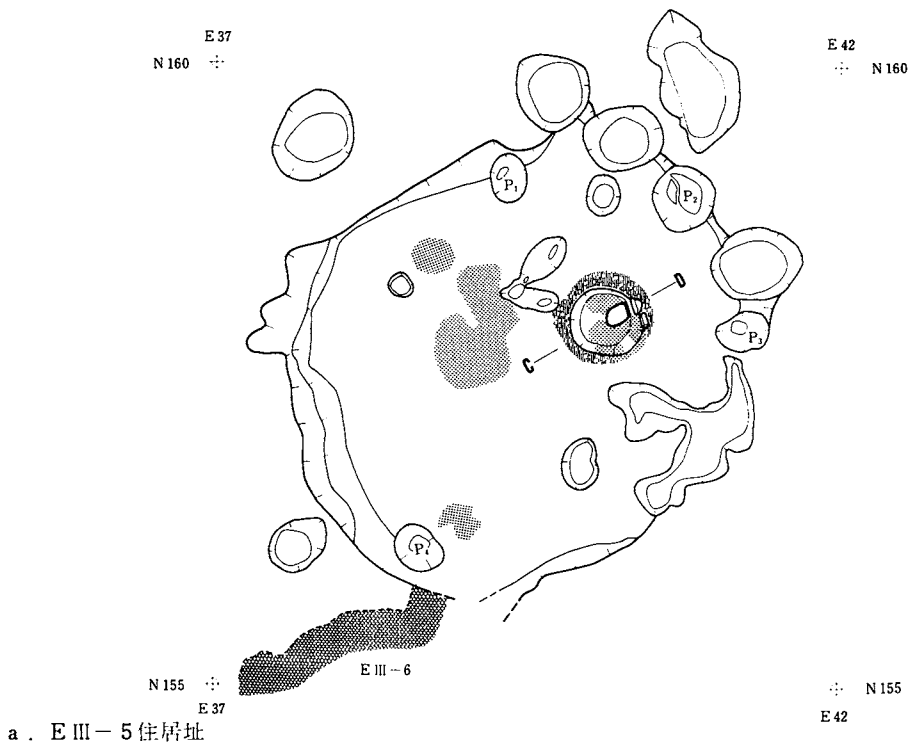
a. E III-3 住居址  
E 43  
N 179



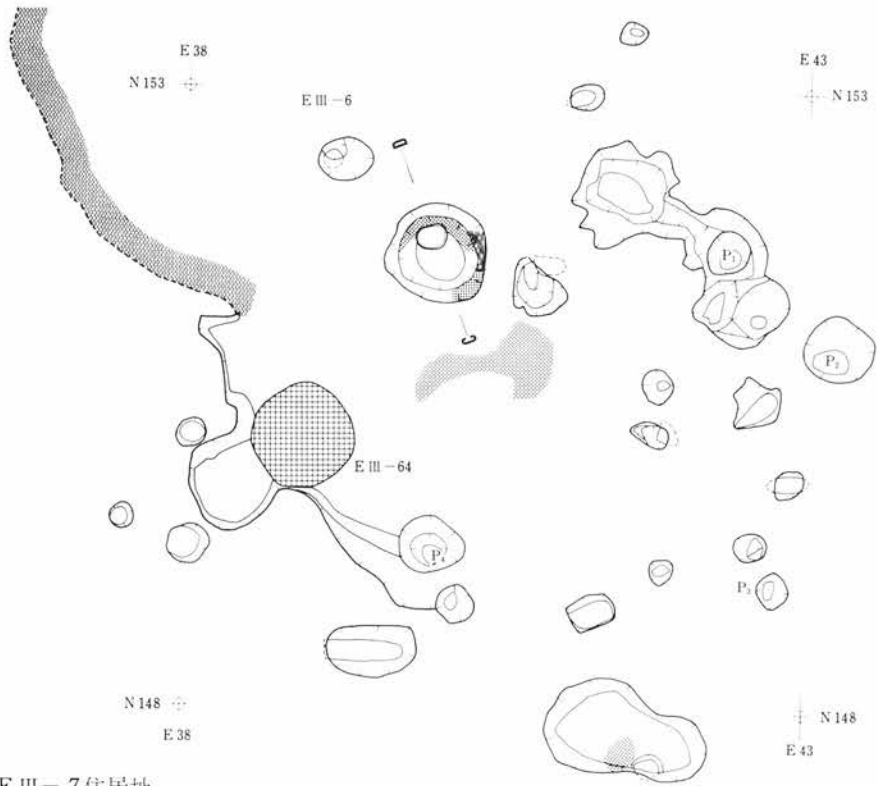
b. E III-4 住居址  
N 174  
E 43

縮尺  $\frac{1}{60}$  E 48 N 174

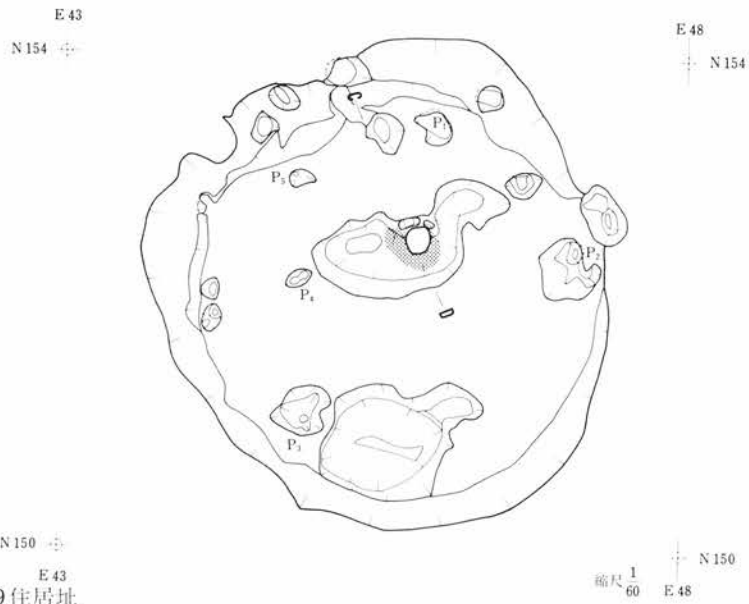
图版42



图版43



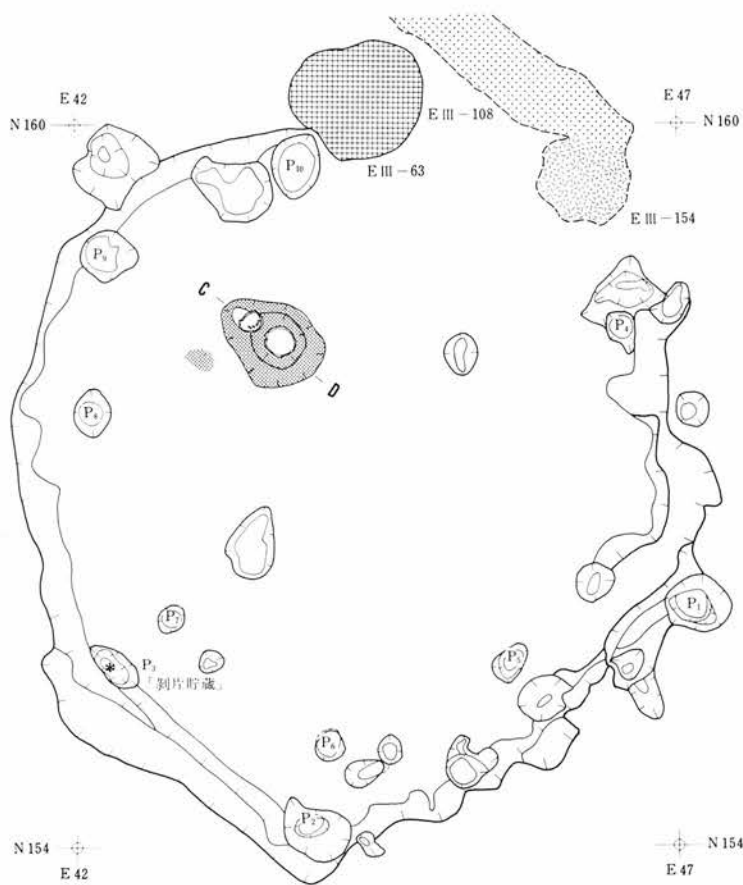
a. E III-7 住居址



b. E 9 住居址

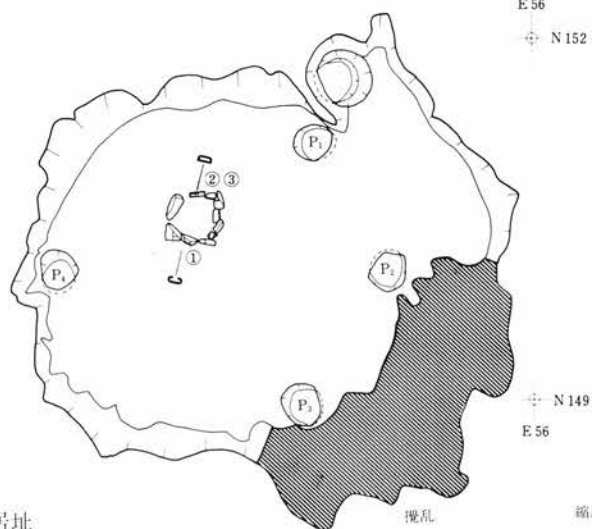
图版 44





a. E III-8 住居址

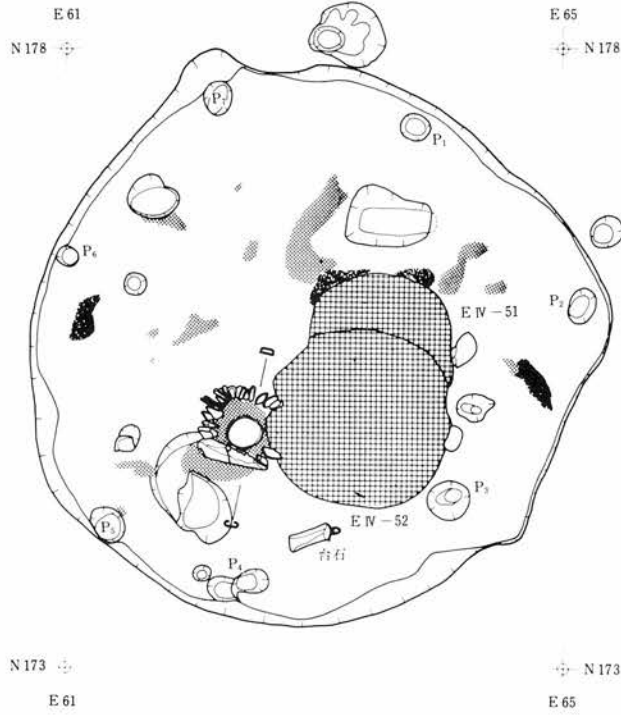
E 51  
N 152



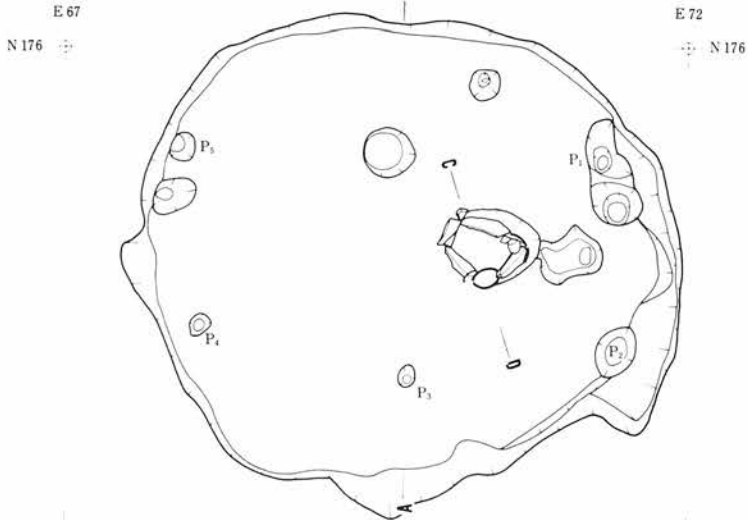
b. E III-10 住居址

縮尺 1/60

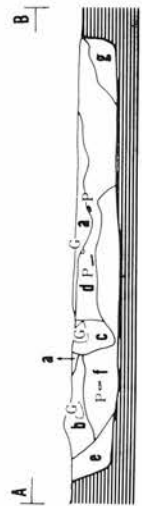
図版 45



a. E IV-1 住居址



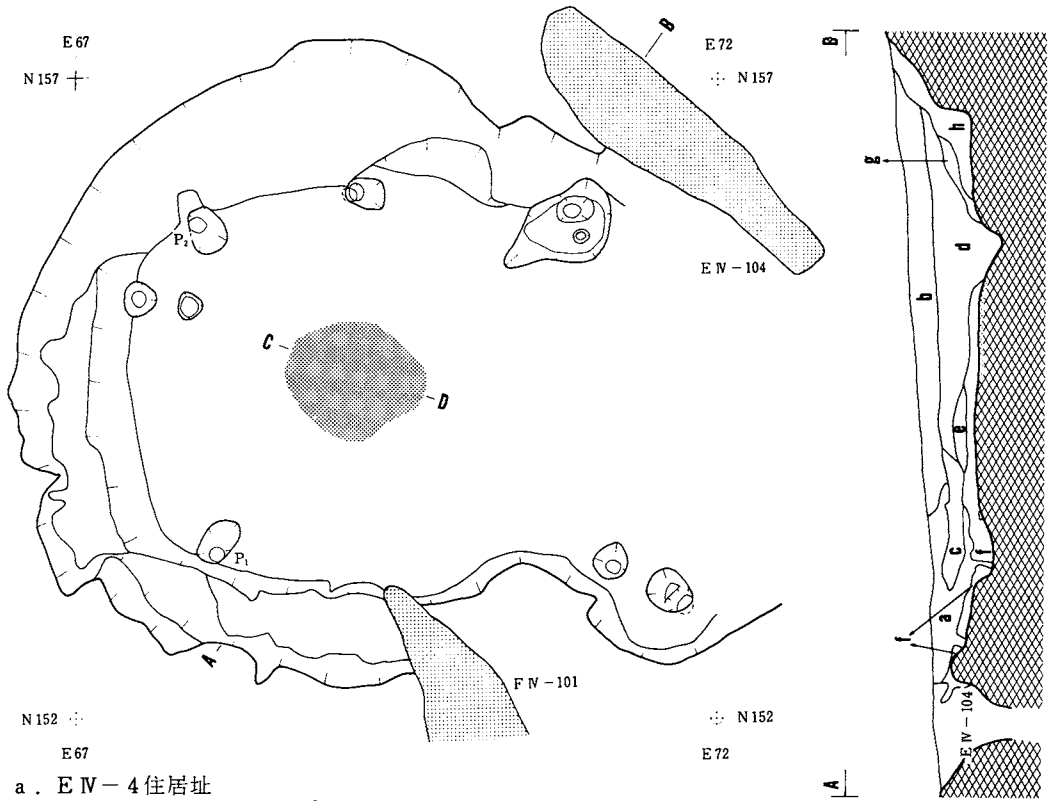
b. E IV-2 住居址



c. E IV-2 住居址(断面)

- a. 暗褐色土層(含、燒土、炭化物)
- b. 褐色土層(含、燒土、炭化物)
- c. 暗褐色土層(含、燒土)
- d. 黑褐色土層(含、燒土、炭化物)
- e. 暗褐色土層(含、炭化物)
- f. 褐色土層(含、燒土、炭化物)
- g. 褐色土層(含、燒土)

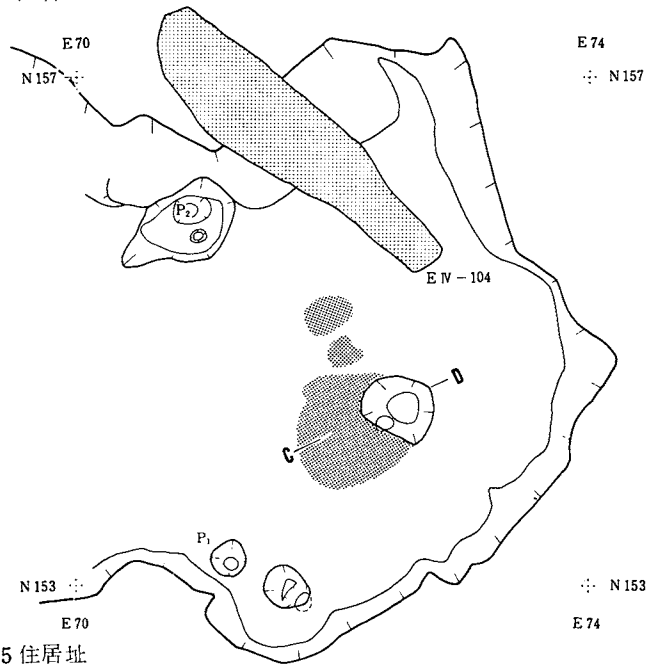
縮尺  $\frac{1}{60}$



a. E IV-4 住居址

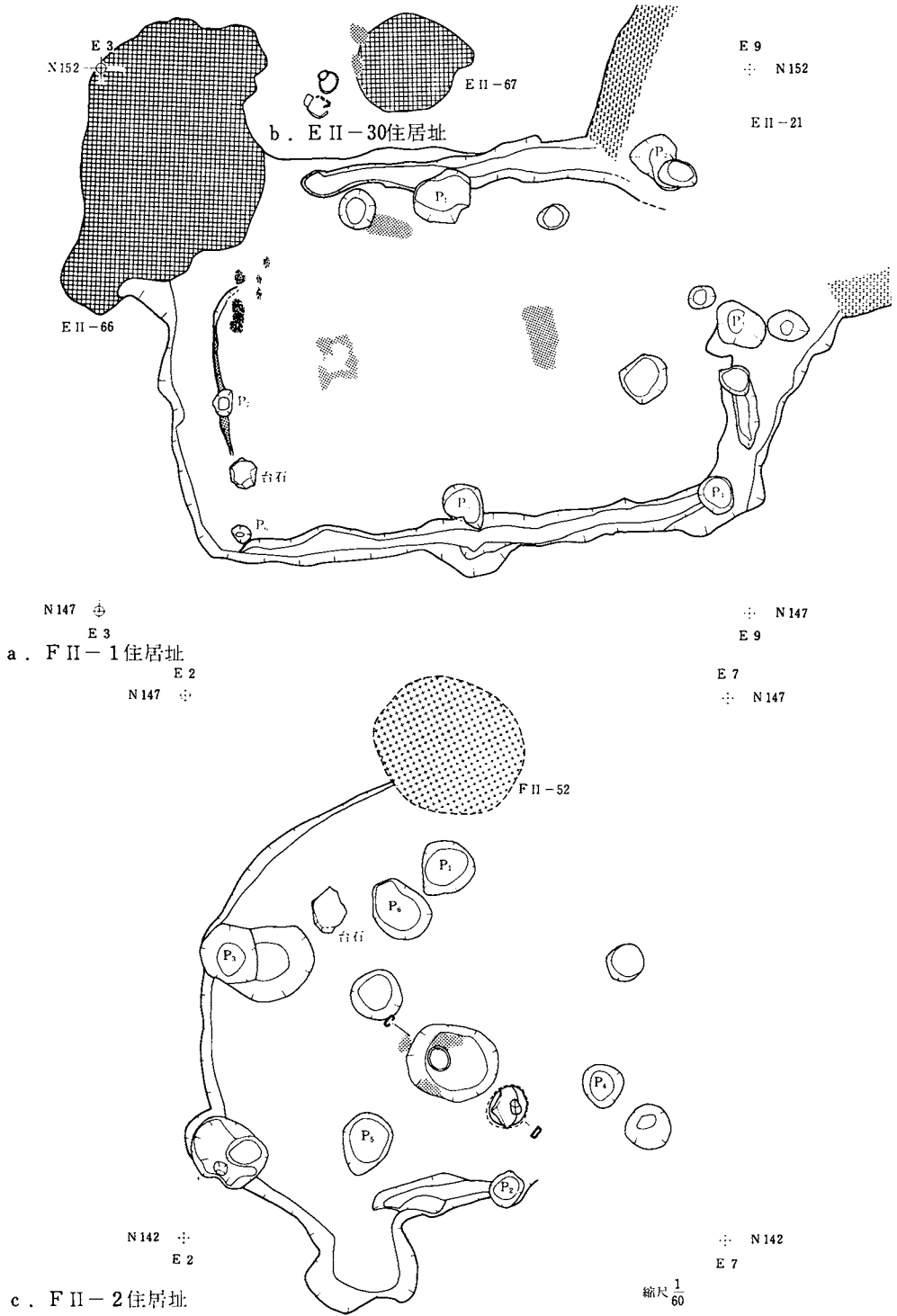
b. E IV-4 住居址(断面)

- a. 黄褐色土層
- b. 黑褐色土層
- c. 暗褐色土層
- d. 黑褐色土層
- e. 暗褐色土層
- f. 暗褐色土層(含、燒土、炭化物)
- g. 褐色土層
- h. 褐色土層

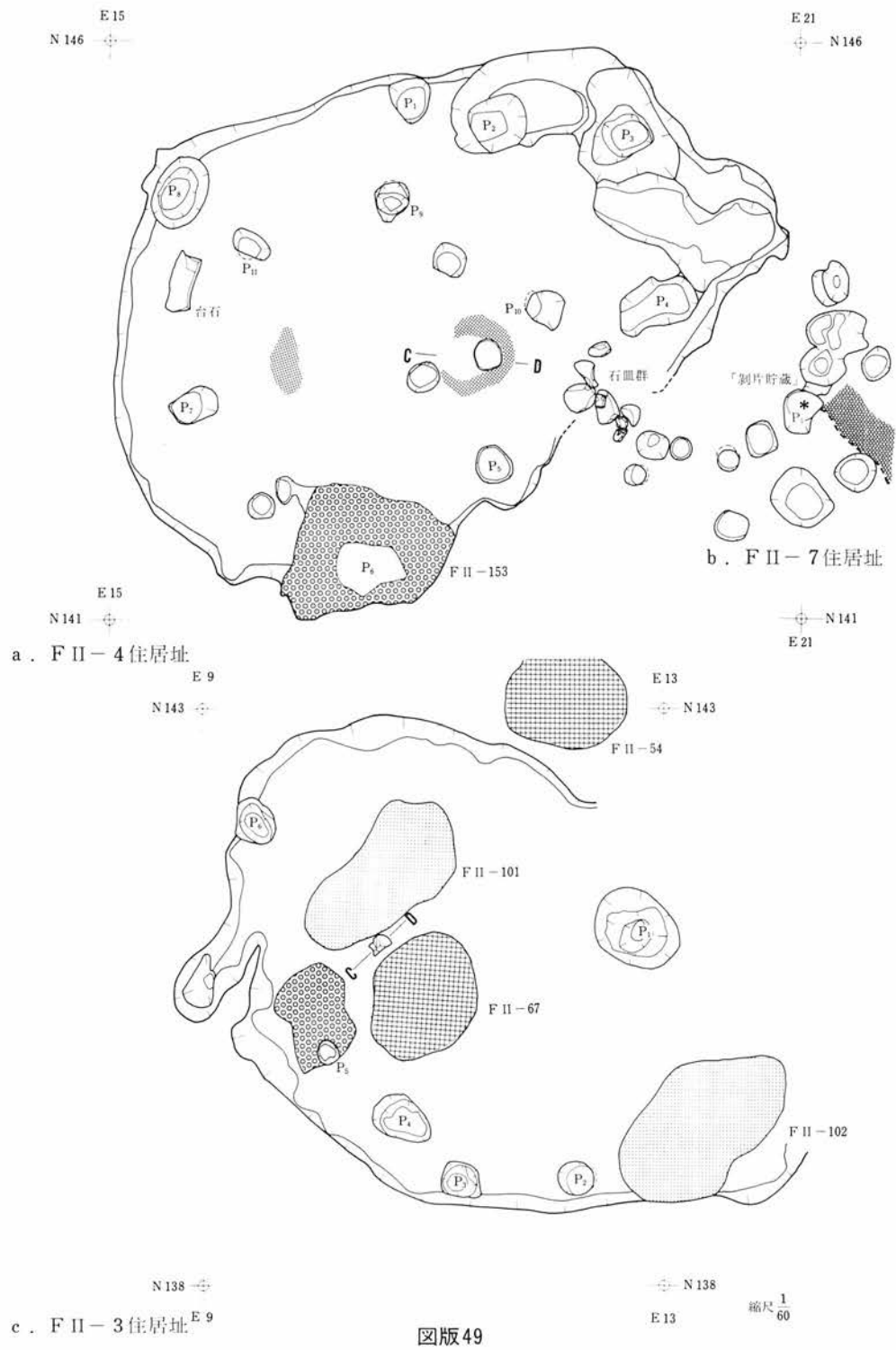


c. E IV-5 住居址

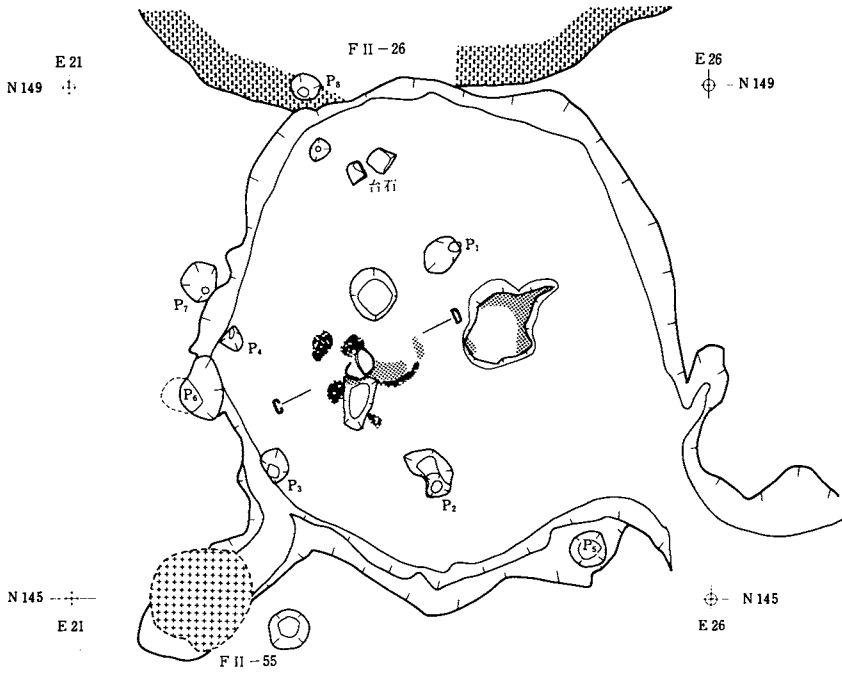
縮尺  $\frac{1}{60}$



图版48



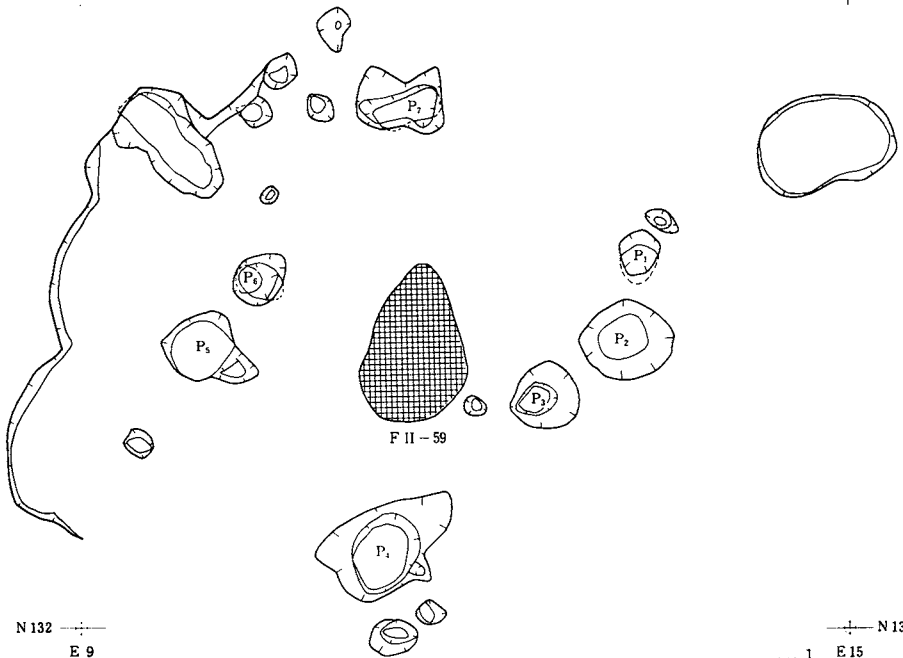
図版49



a. F II - 6 住居址

E 9  
N 137

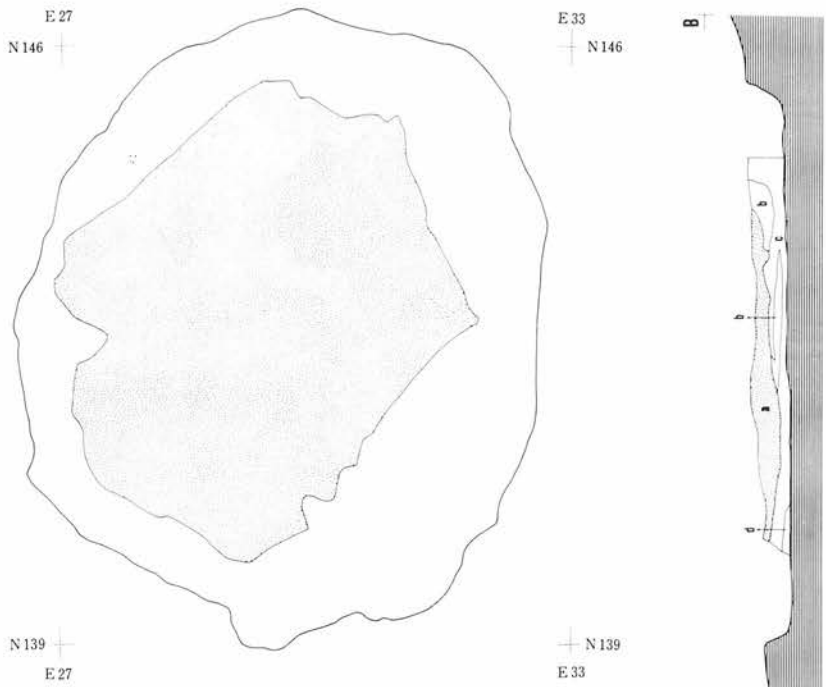
E 15  
N 137



b. F II - 9 住居址

縮尺  $\frac{1}{60}$   
E 15

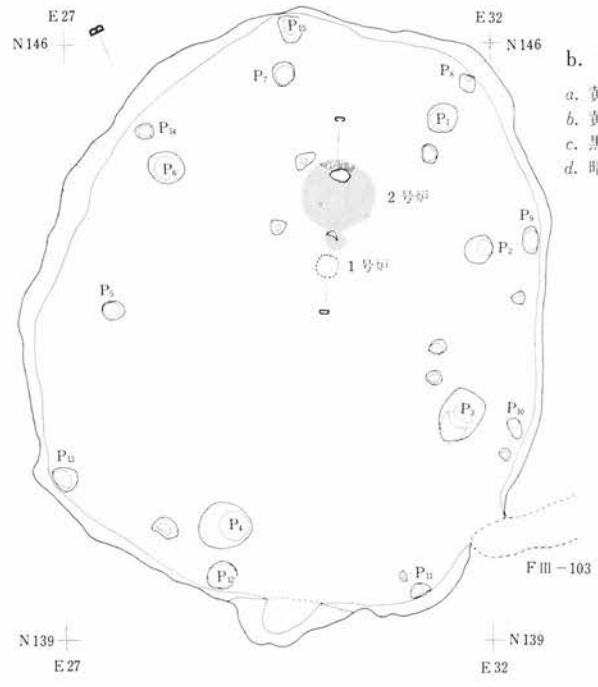
图版 50



a. F II-8 住居址(第1次プラン)

b. F II-8 住居址(断面)

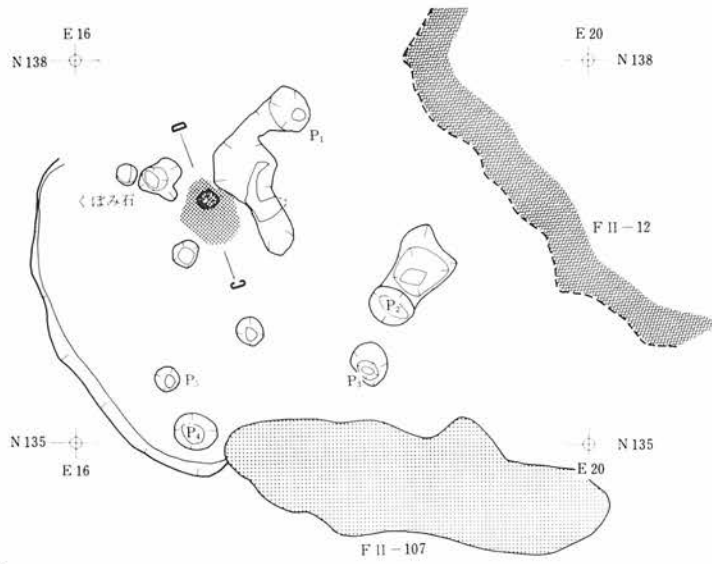
- a. 黄橙色土層
- b. 黄橙色土層(汚れ火山灰)
- c. 黒褐色土層(含、焼土、炭化物)
- d. 暗褐色地層(含、炭化物)



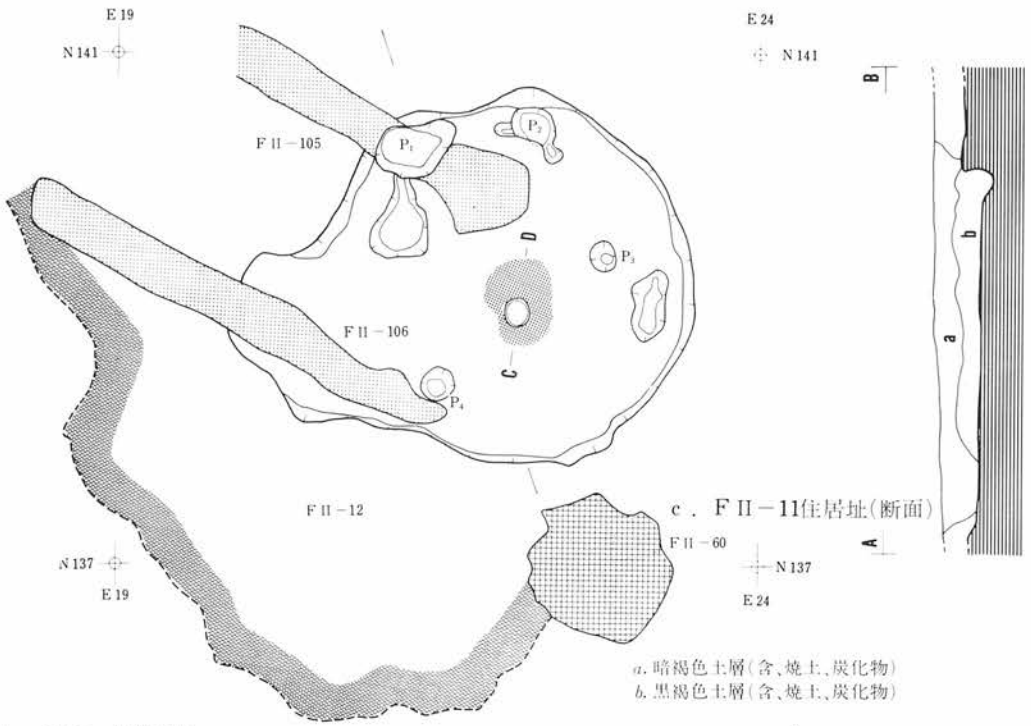
c. F II-8 住居址(第2次プラン)



図版51



a. F II-10住居址

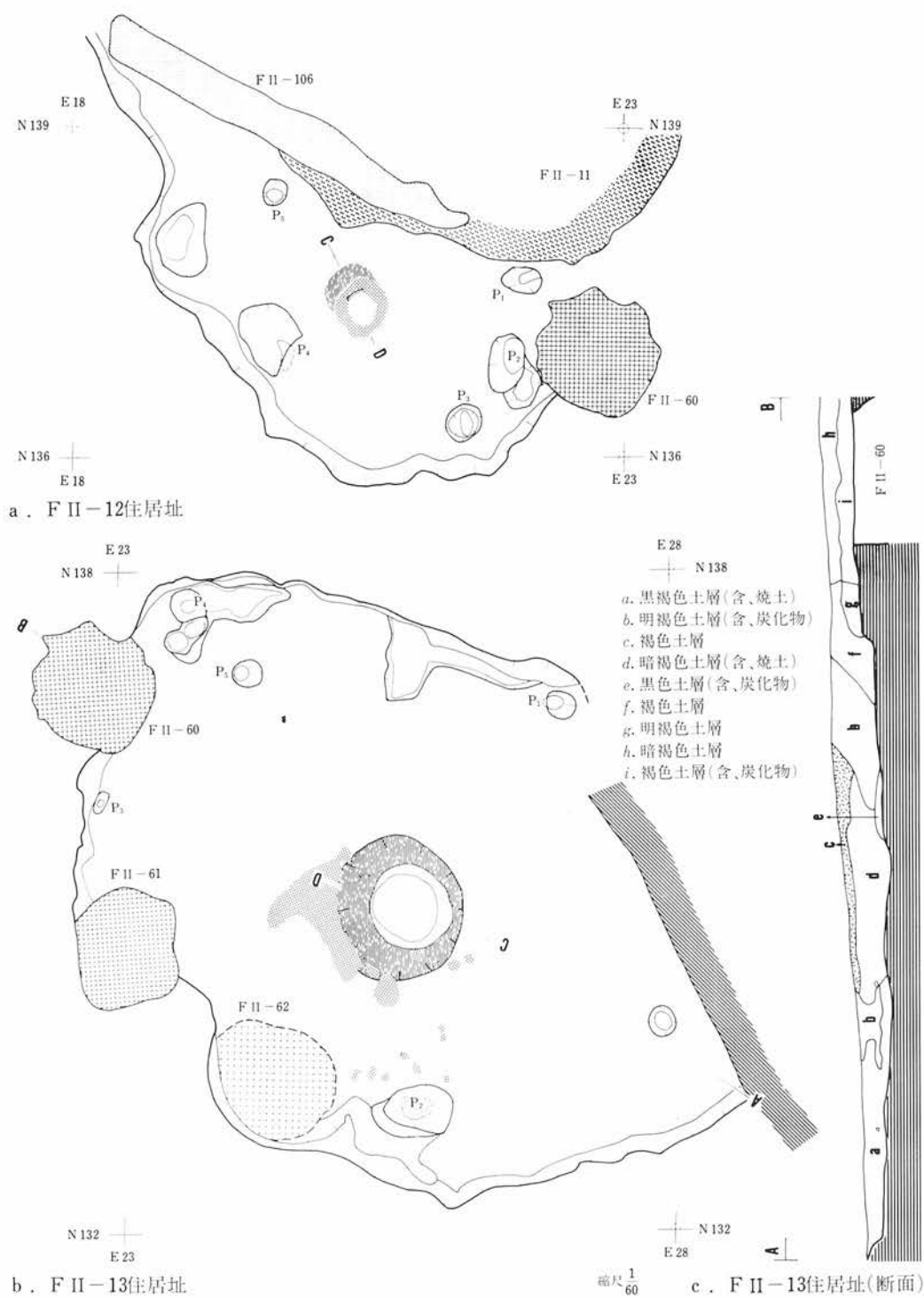


b. F II-11住居址

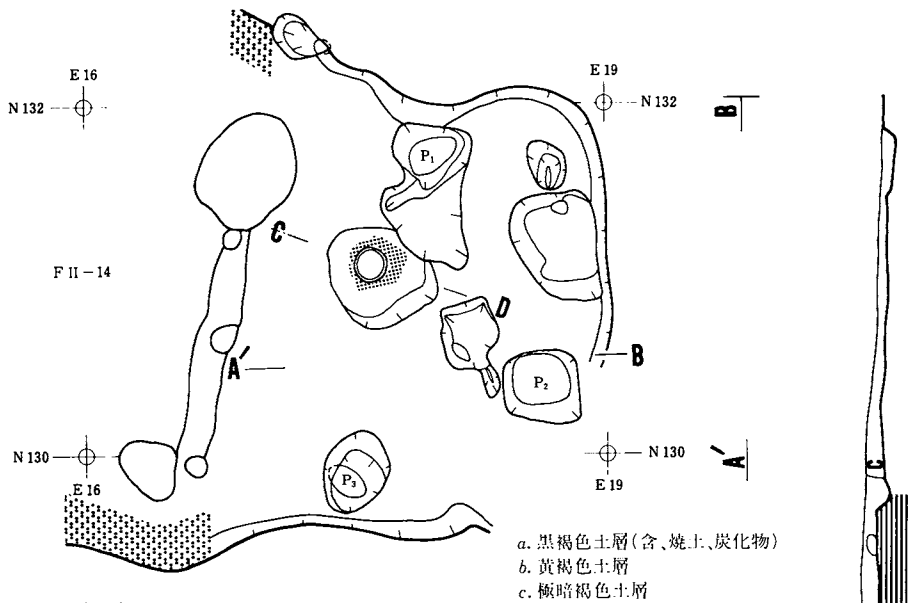
a. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)  
 b. 黒褐色土層(含、焼土、炭化物)

縮尺  $\frac{1}{60}$

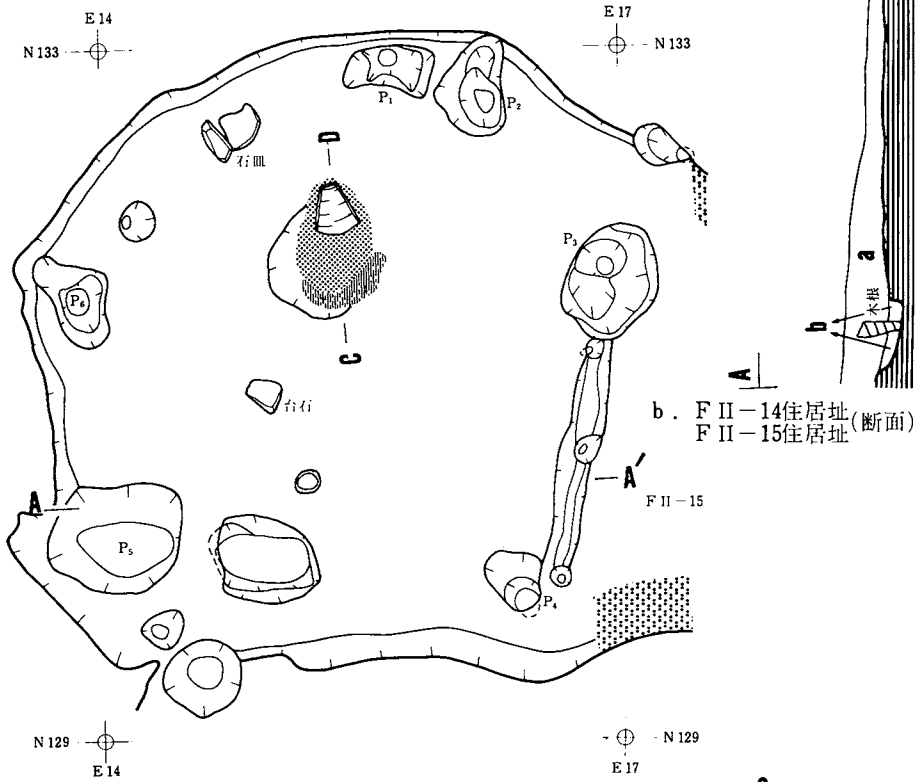




图版53



a. F II-15住居址

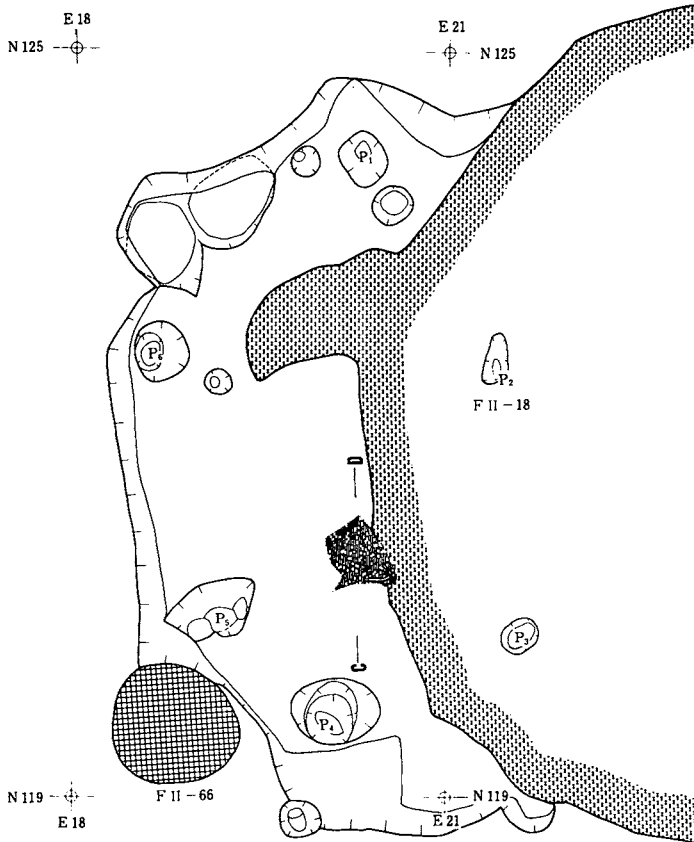


b. F II-14住居址  
F II-15住居址(断面)

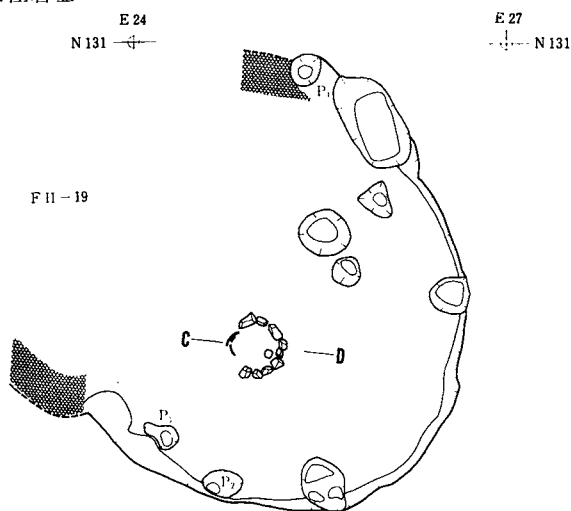
c. F II-14住居址



图版54



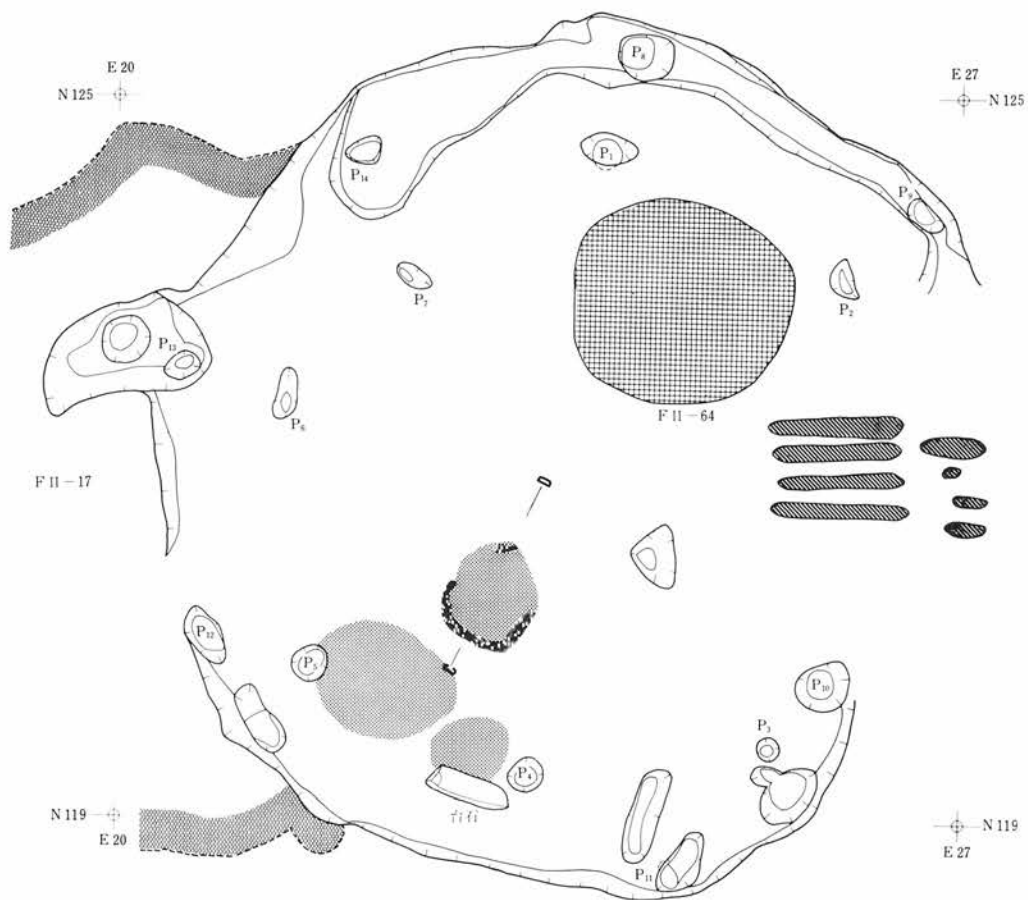
a. F II-17住居址



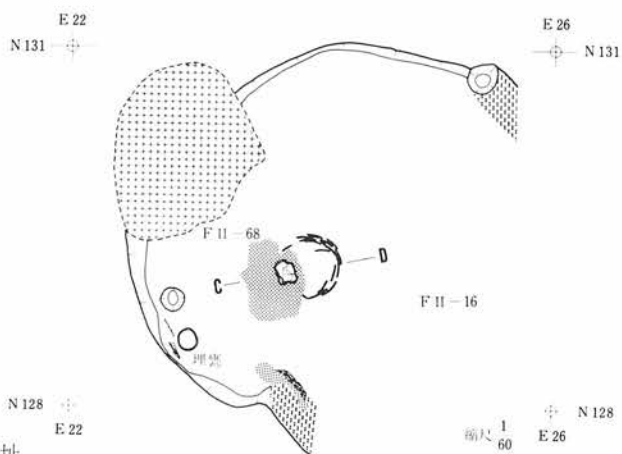
b. F II-16住居址

图版55

縮尺  $\frac{1}{60}$

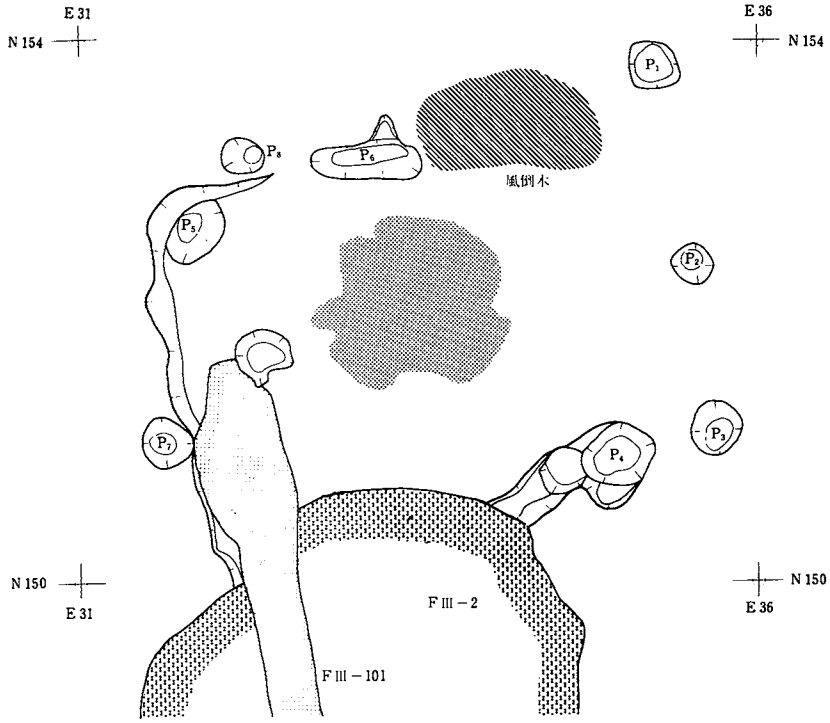


a. F II-18住居址

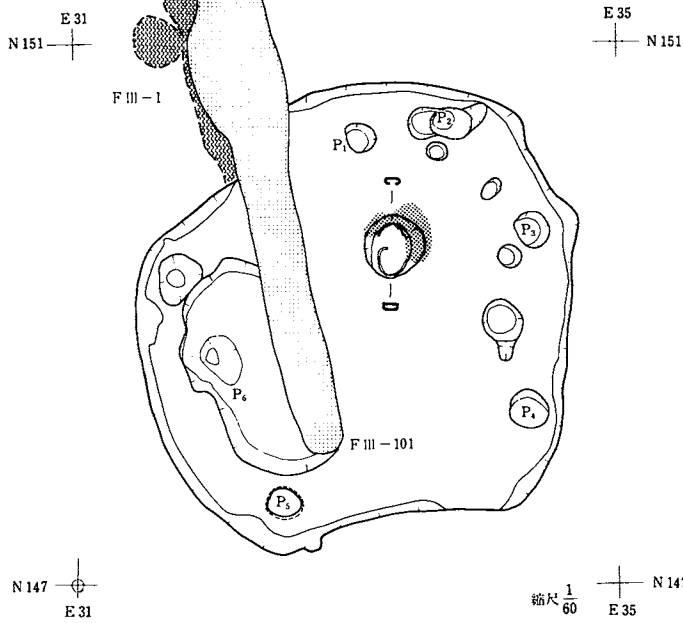


b. F II-19住居址

图版56

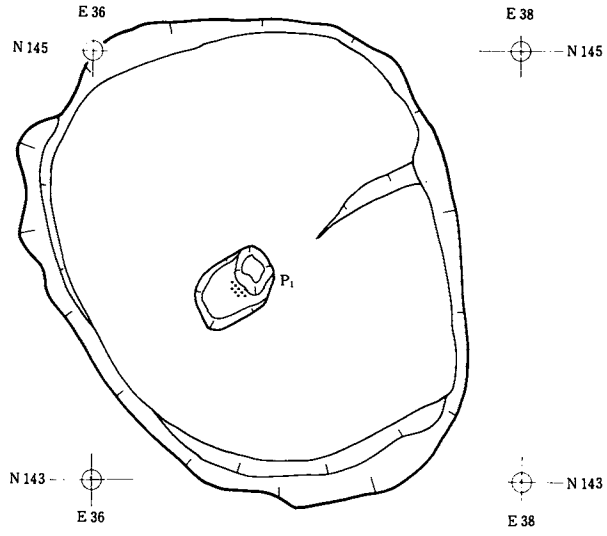


a. F III-1 住居址

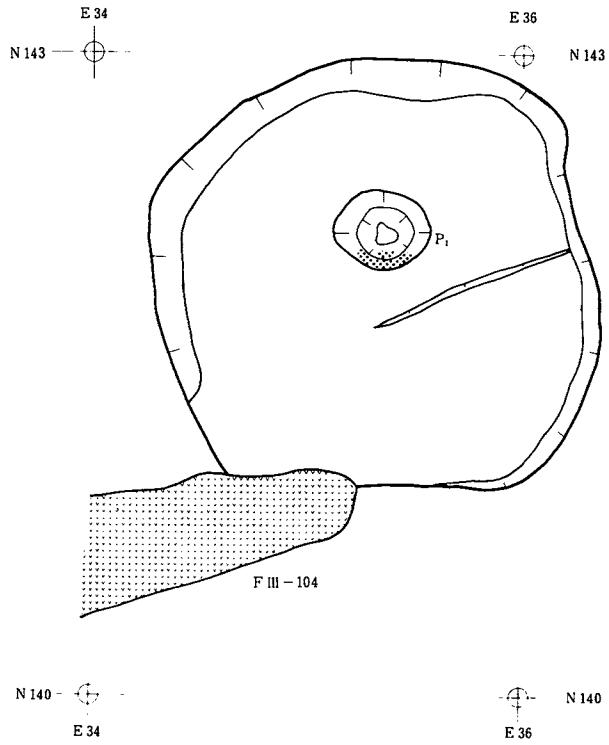


b. F III-2 住居址

図版57

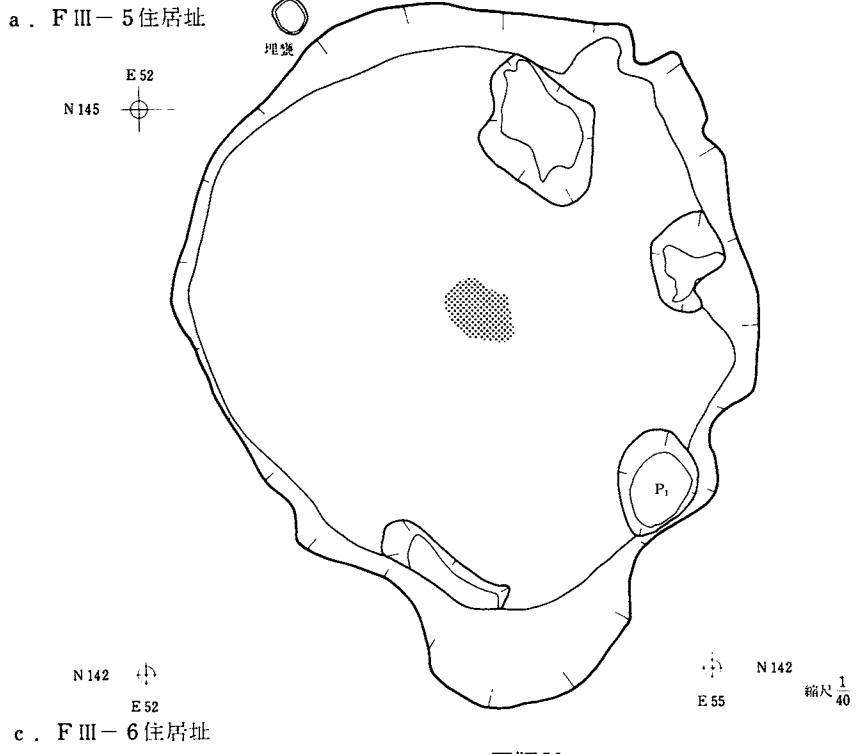
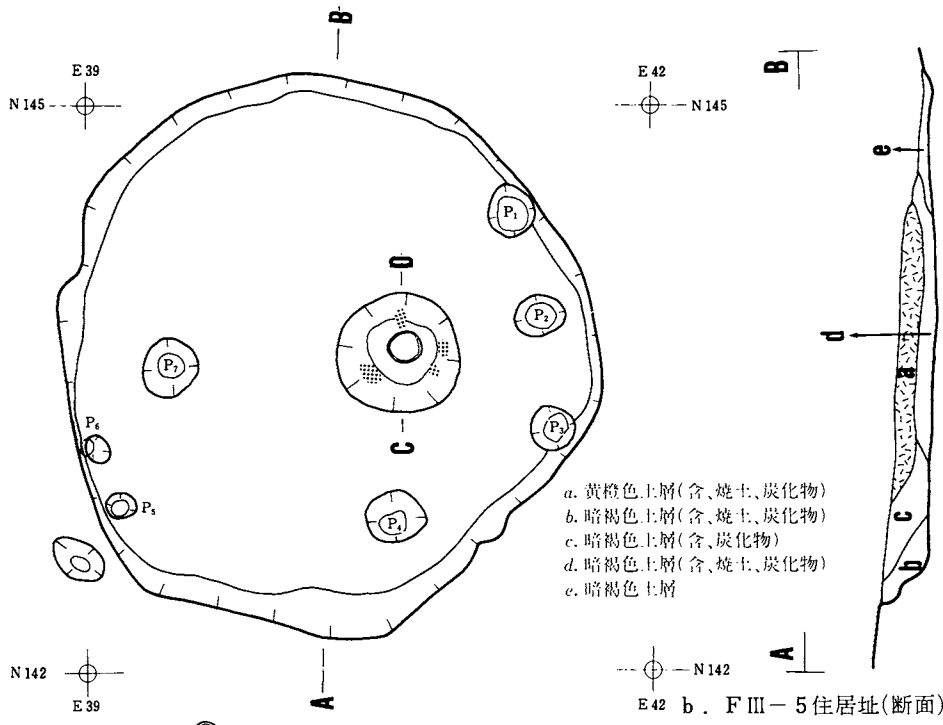


a. F III-3 住居址

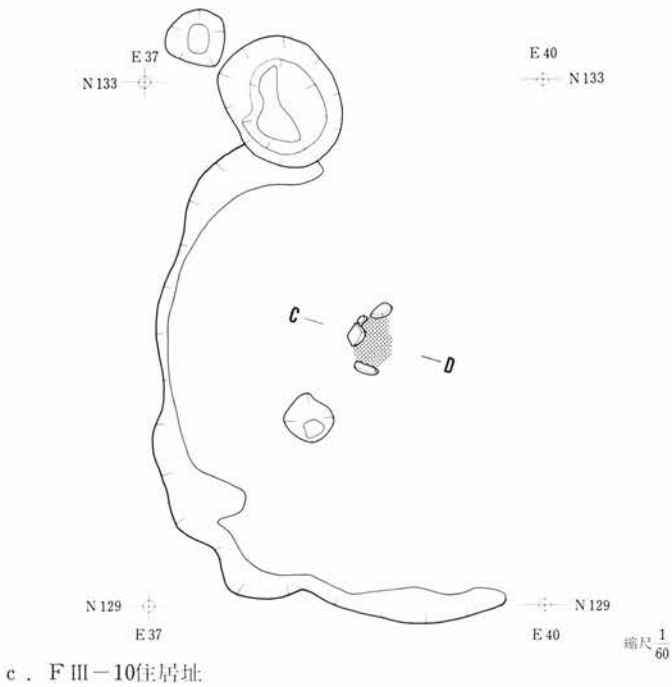
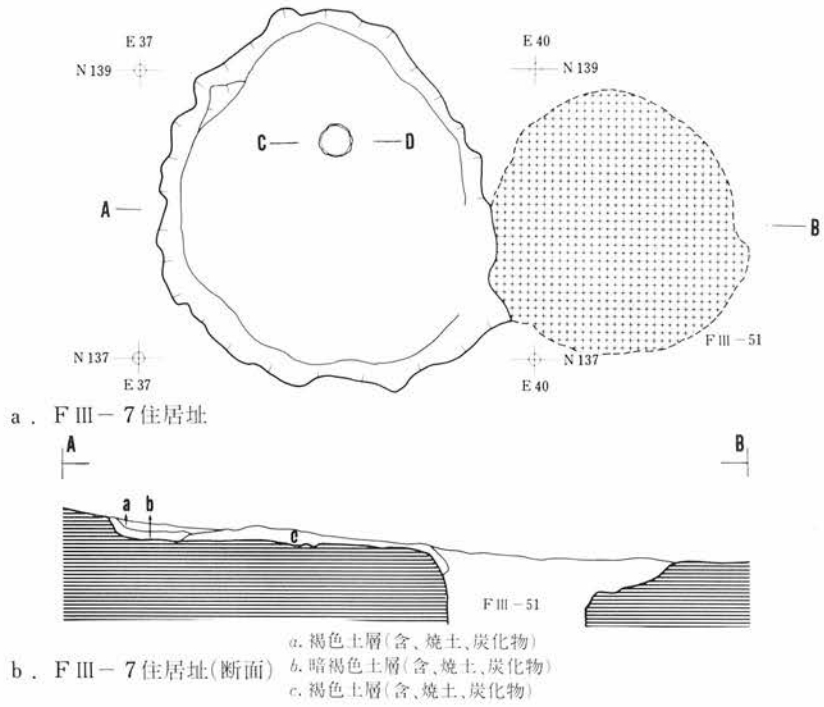


b. F III-4 住居址

縮尺  $\frac{1}{40}$

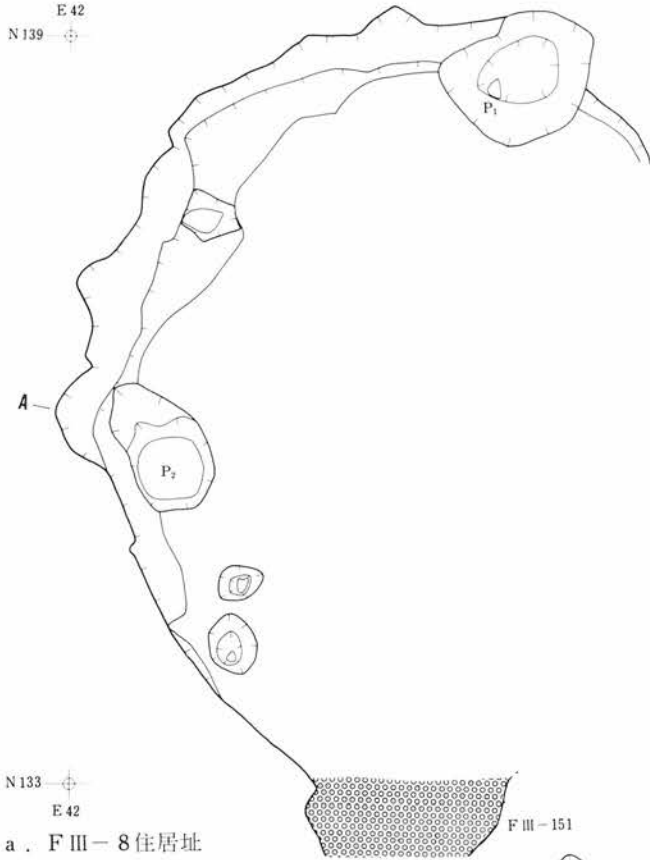


图版59

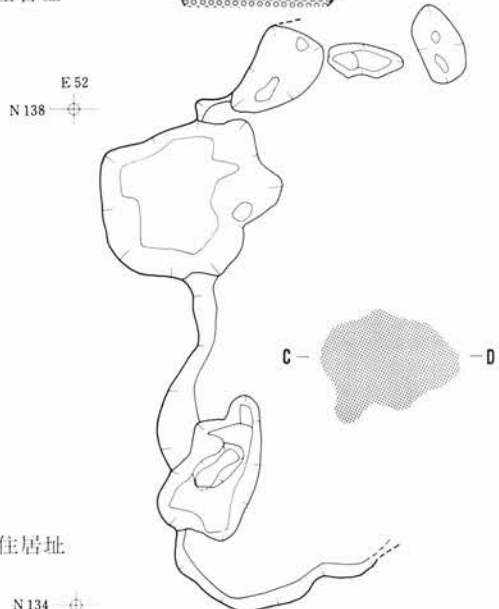


图版60

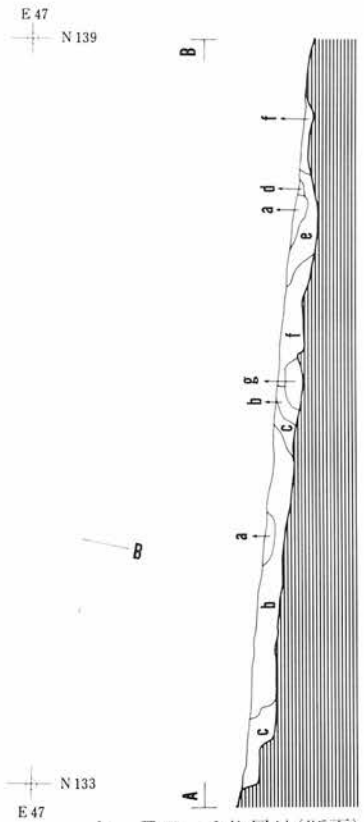




a. F III-8 住居址

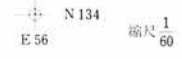


c. F III-9 住居址

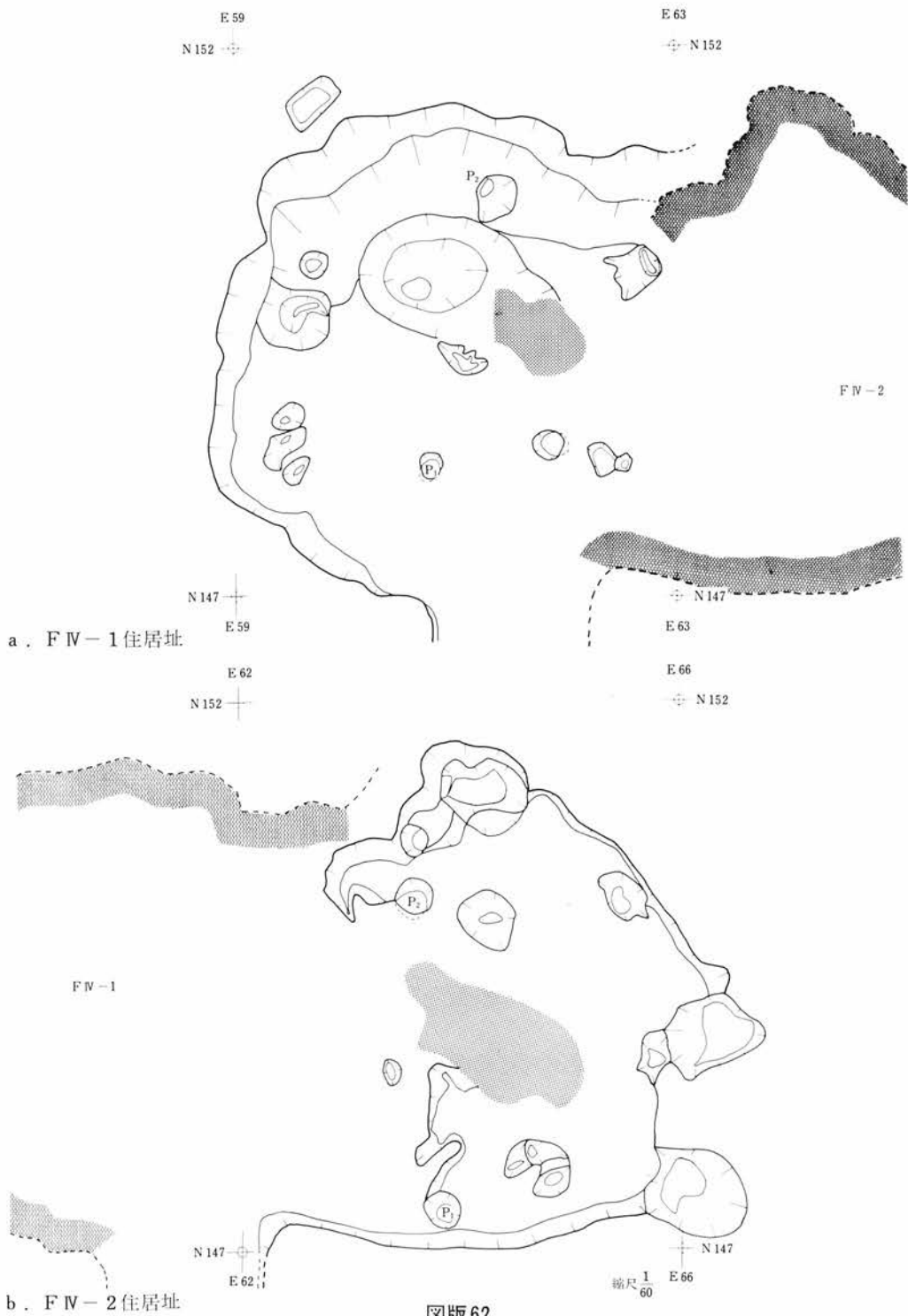


b. F III-8 住居址(断面)

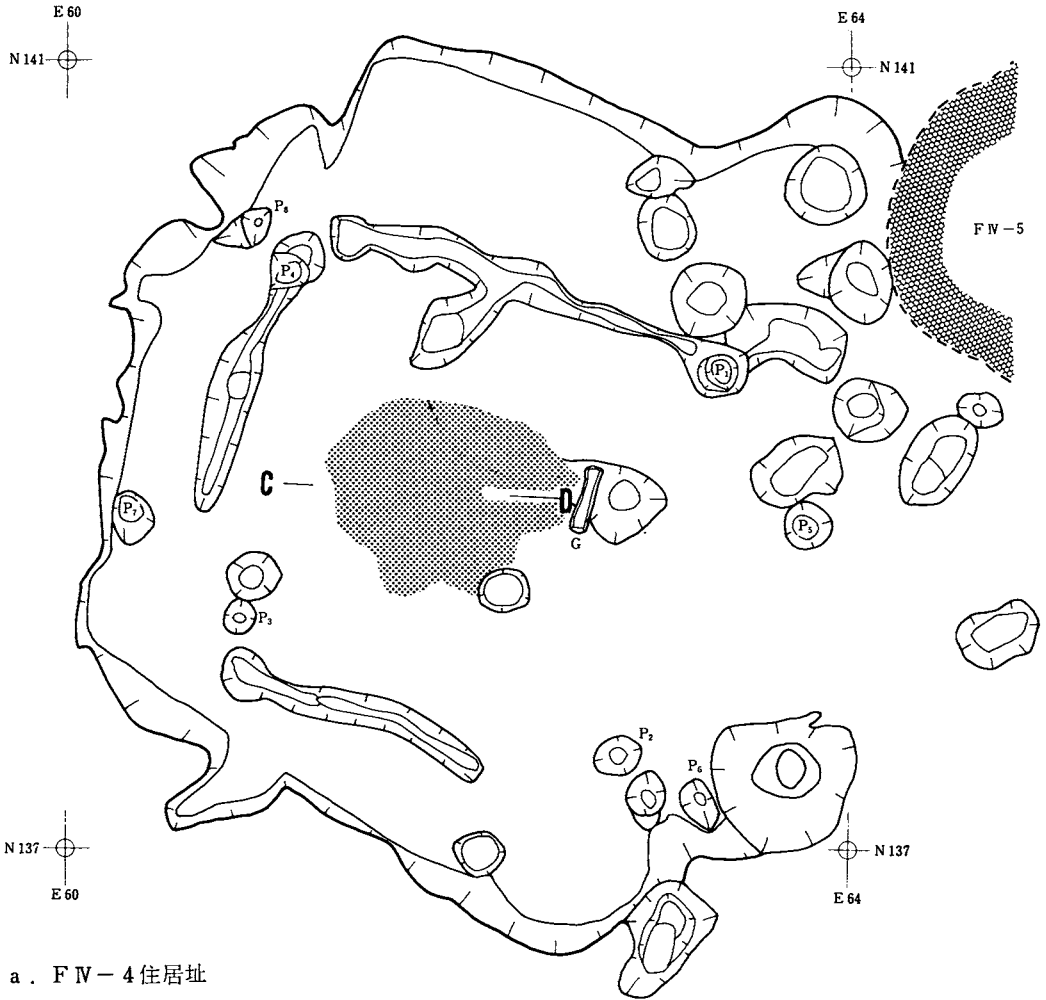
- a. 黒色土層(クロボク)
- b. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- c. 褐色土層(含、焼土、炭化物)
- d. 赤褐色土層(焼土)
- e. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- f. 褐色土層(含、焼土、炭化物)
- g. 黄褐色土層(含、炭化物)



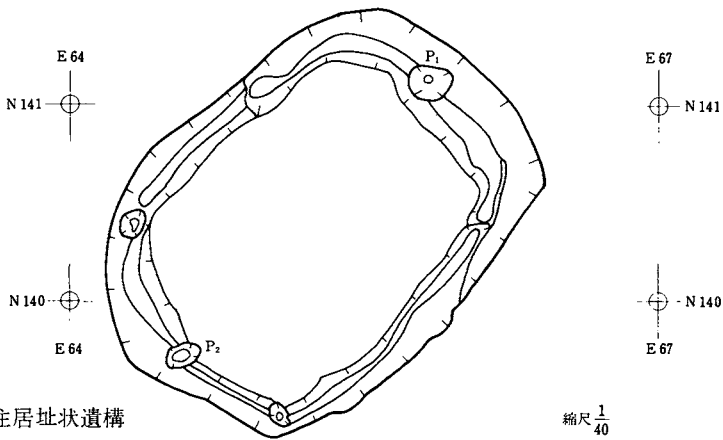
図版 61



图版 62



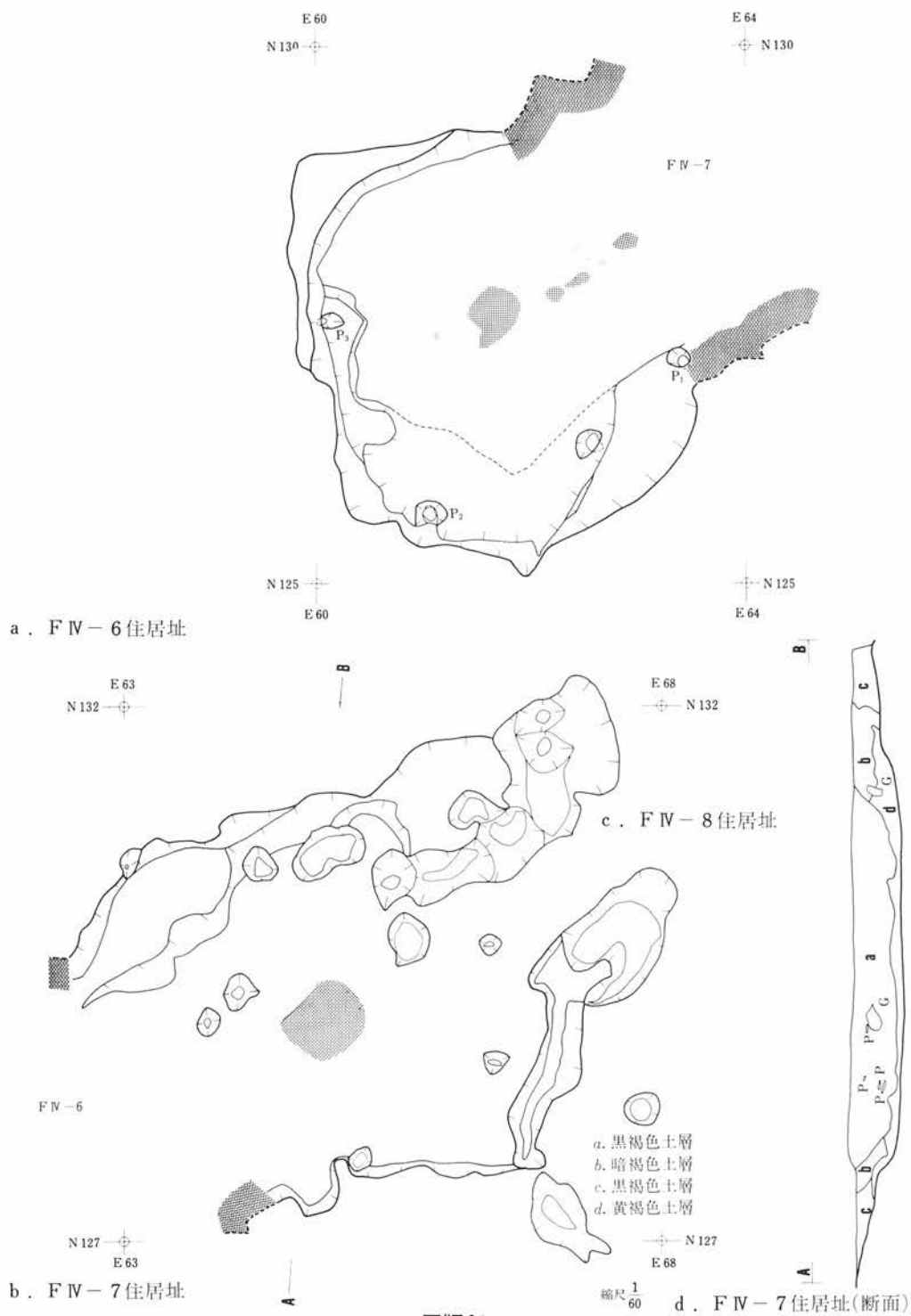
a. FV-4 住居址



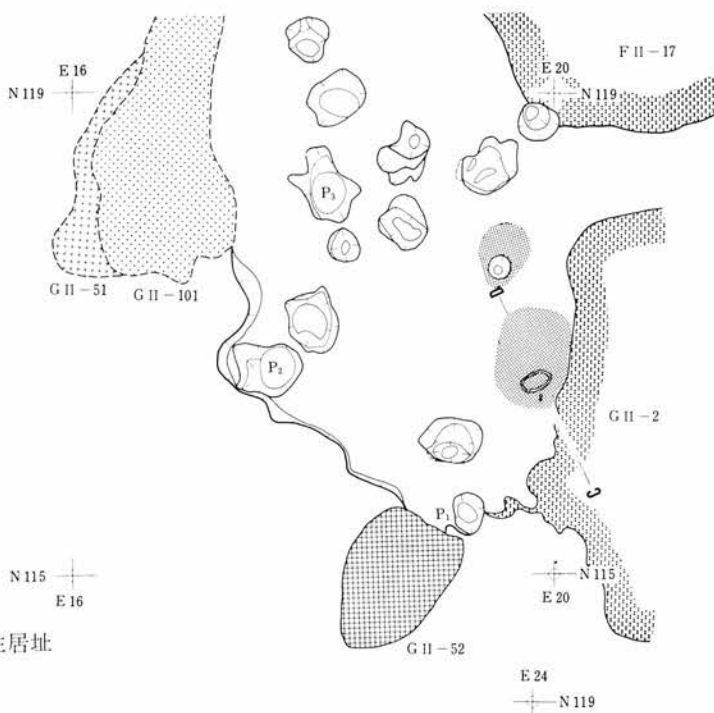
b. FV-5 住居址遺構

縮尺  $\frac{1}{40}$

圖版 63

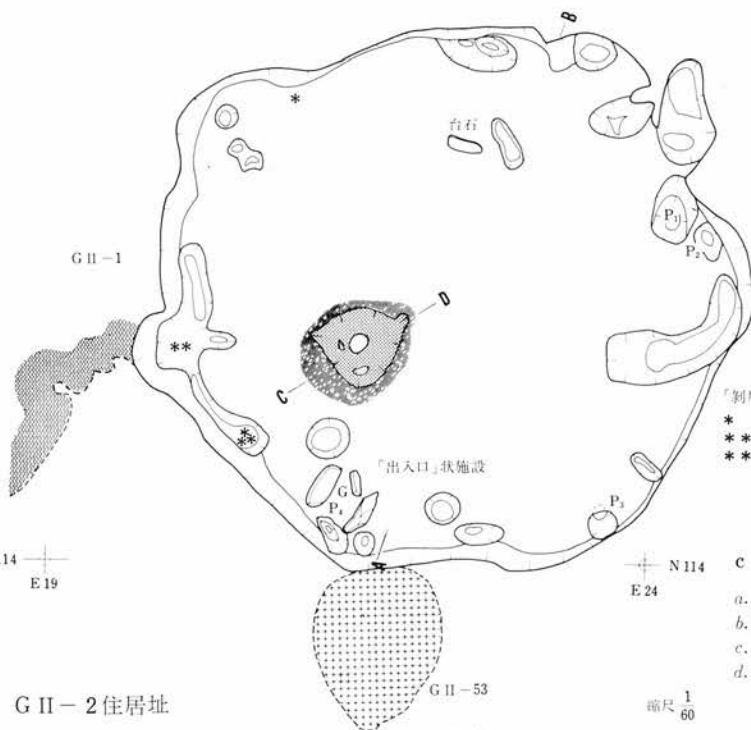


図版64



a. G II-1 住居址

E 19  
N 119



b. G II-2 住居址

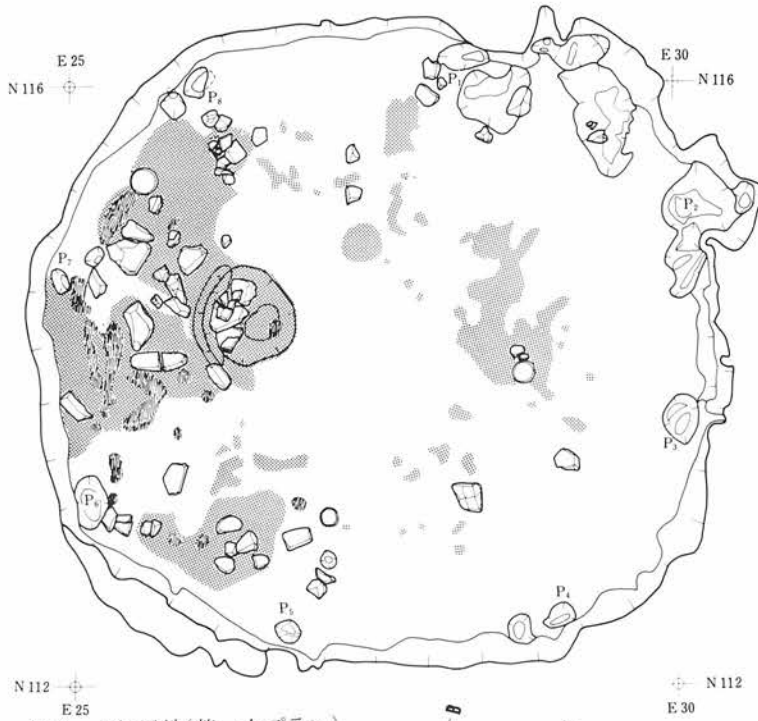
「剥片貯蔵」  
\* No 1  
\*\* No 2  
\*\*\* No 3

c. G II-2 住居址(断面)

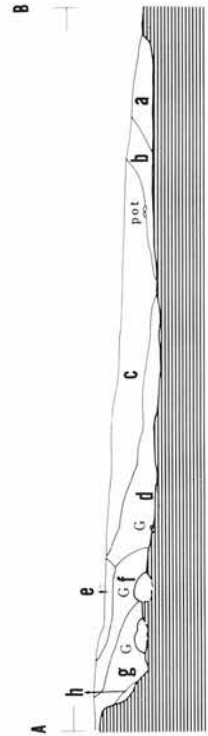
- a. 黑褐色土層(含、炭化物)
- b. 暗褐色土層(含、燒土、炭化物)
- c. 黑褐色土層(含、燒土、炭化物)
- d. 褐色土層(含、炭化物)

縮尺 1/60

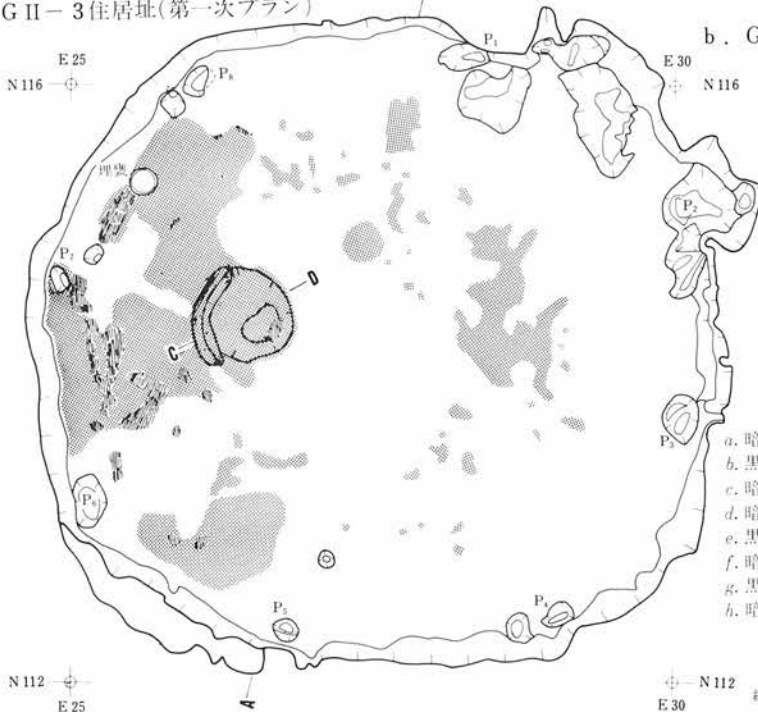
図版65



a. G II-3 住居址(第一次プラン)



b. G II-3 住居址(断面)

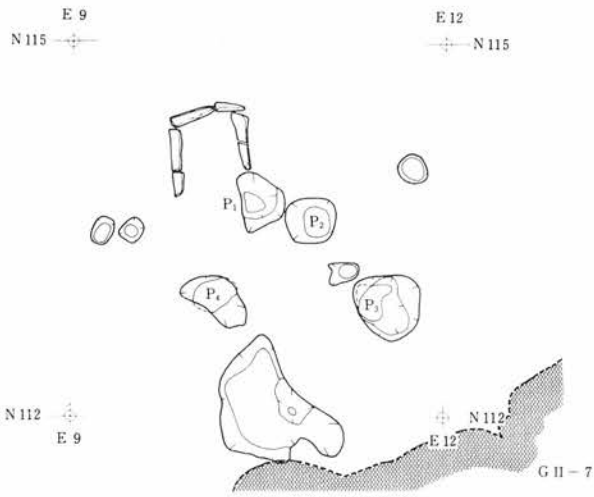


c. G II-3 住居址(第二次プラン)

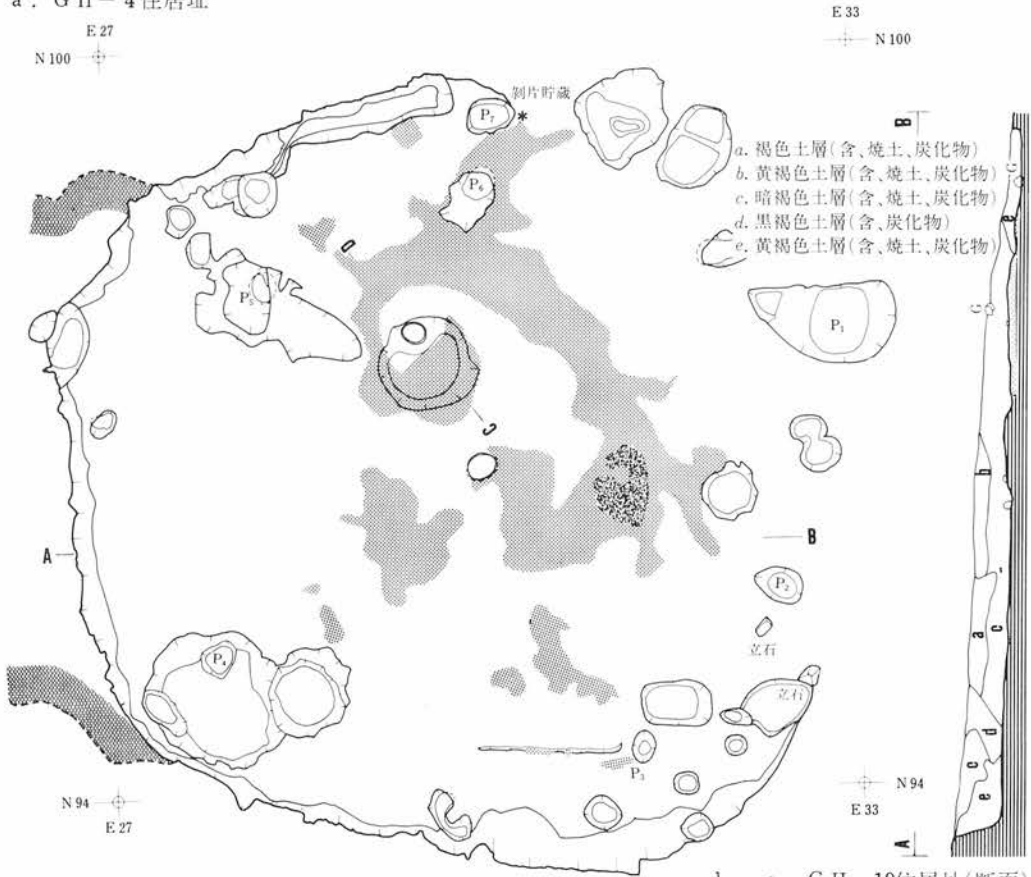
- a. 暗褐色土層(含、炭化物)
- b. 黒褐色土層(含、炭化物)
- c. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- d. 暗褐色土層(含、岩化物) 炭
- e. 黒褐色土層(含、焼土、炭化物)
- f. 暗褐色土層(含、炭化物)
- g. 黒褐色土層
- h. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)

縮尺 1/60

図版66



a. G II-4 住居址



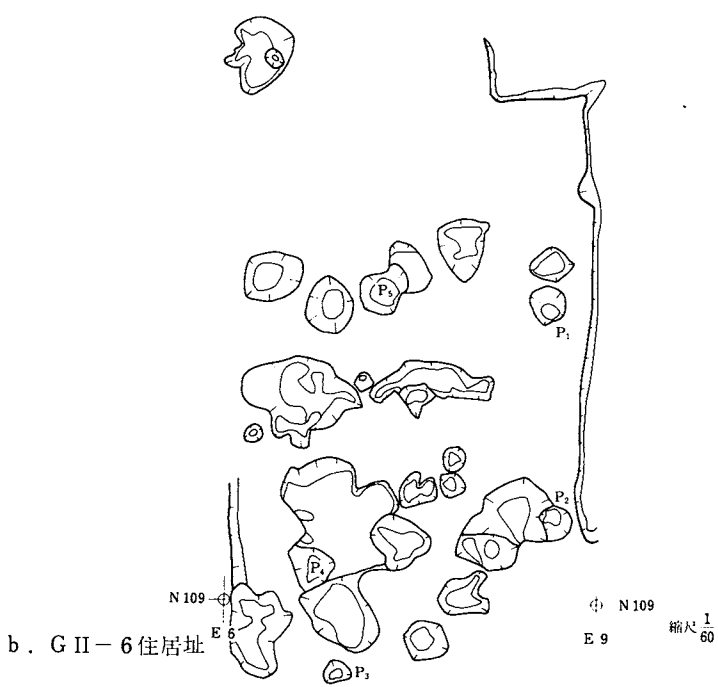
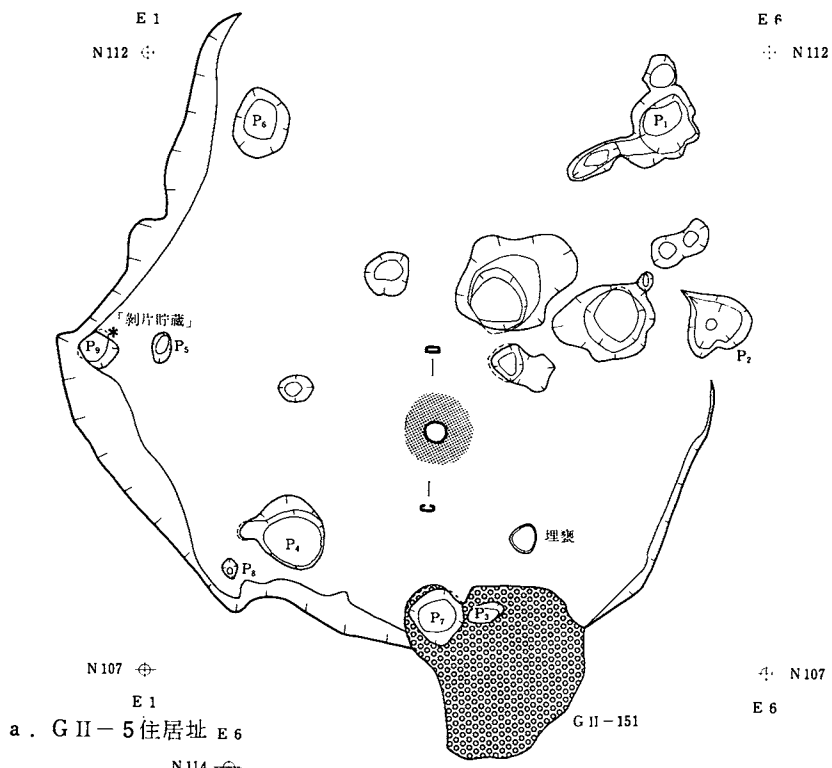
- a. 褐色土層(含、燒土、炭化物)
- b. 黃褐色土層(含、燒土、炭化物)
- c. 暗褐色土層(含、燒土、炭化物)
- d. 黑褐色土層(含、炭化物)
- e. 黃褐色土層(含、燒土、炭化物)

b. G II-19住居址

c. G II-19住居址(断面)

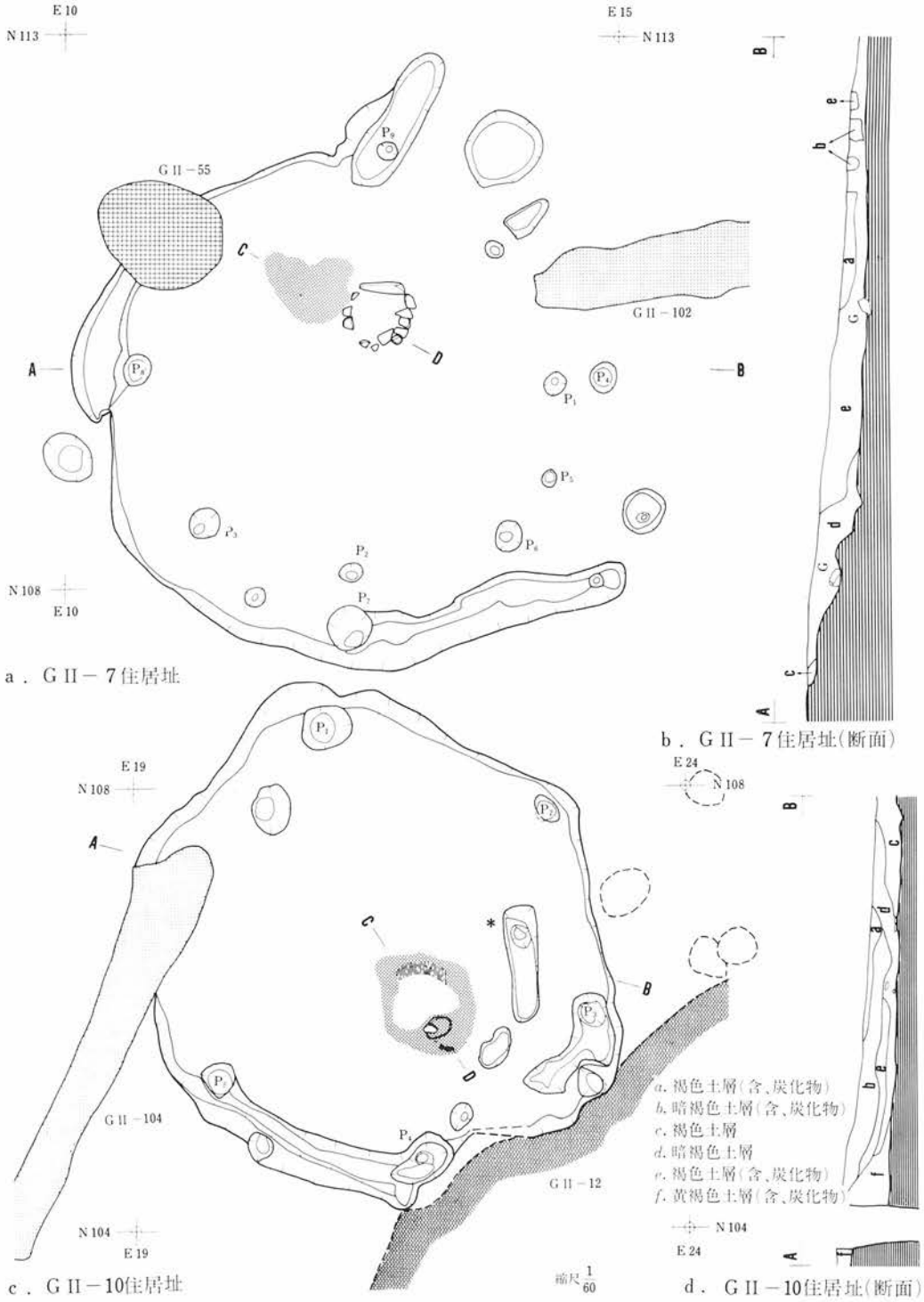
縮尺  $\frac{1}{60}$

图版 67

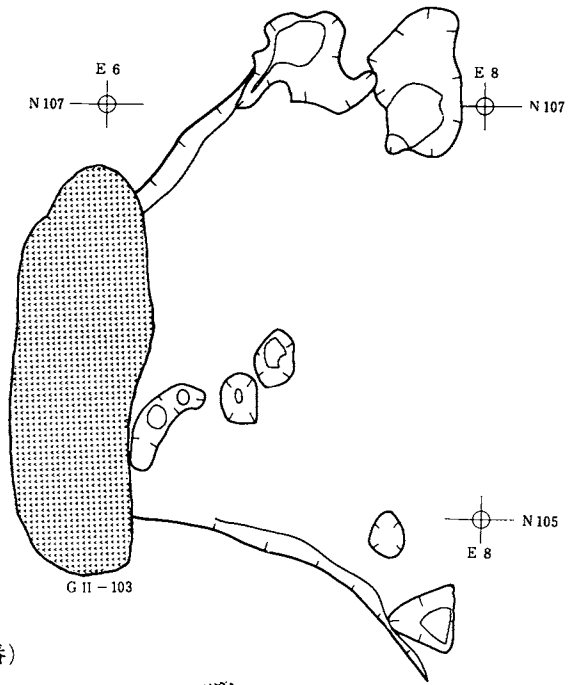


图版68

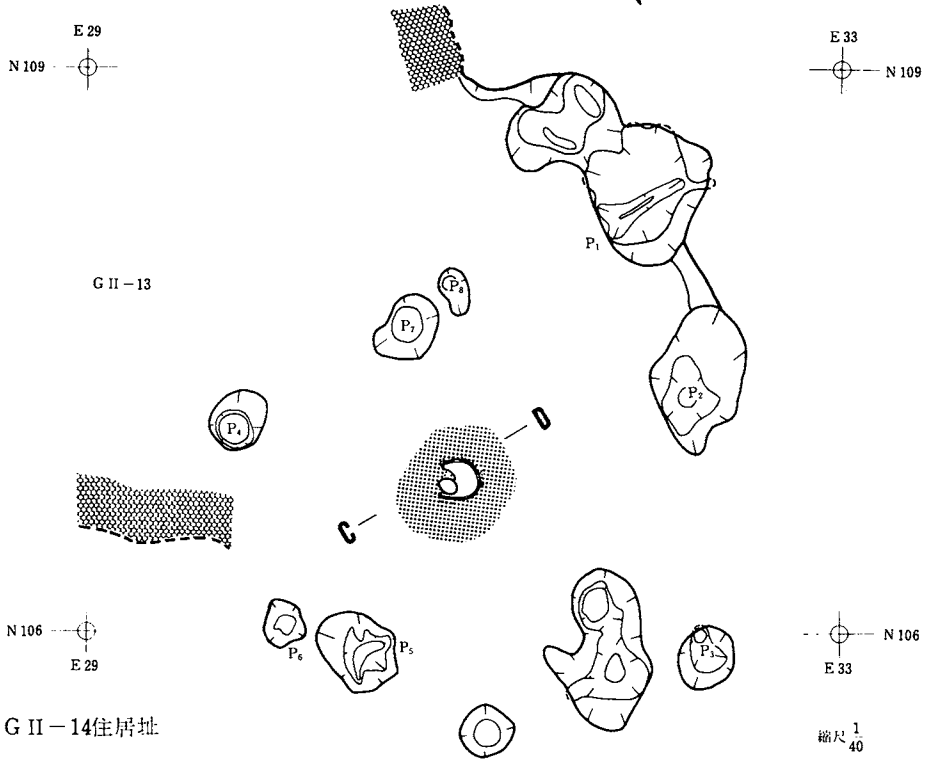




图版69



a. G II-8 住居址(欠番)



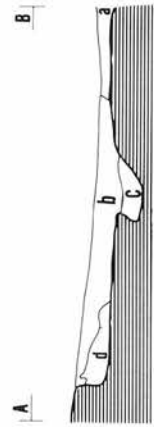
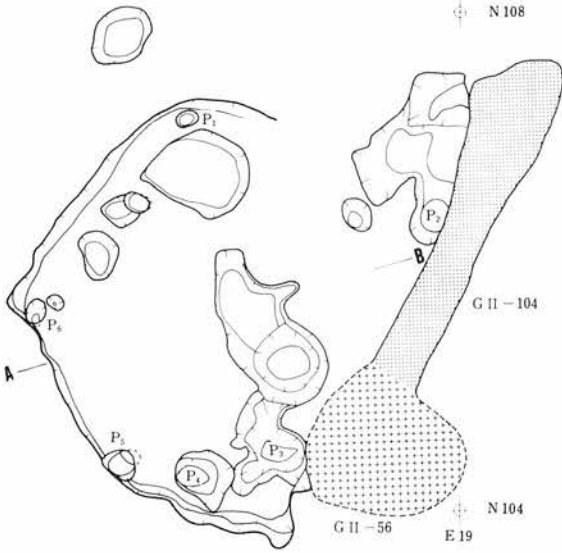
b. G II-14 住居址

縮尺  $\frac{1}{40}$

图版70

E 15  
N 108

E 19  
N 108



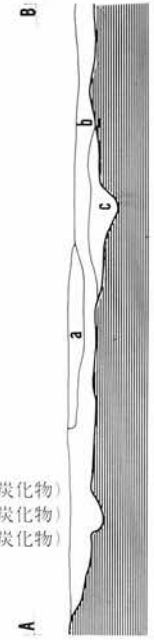
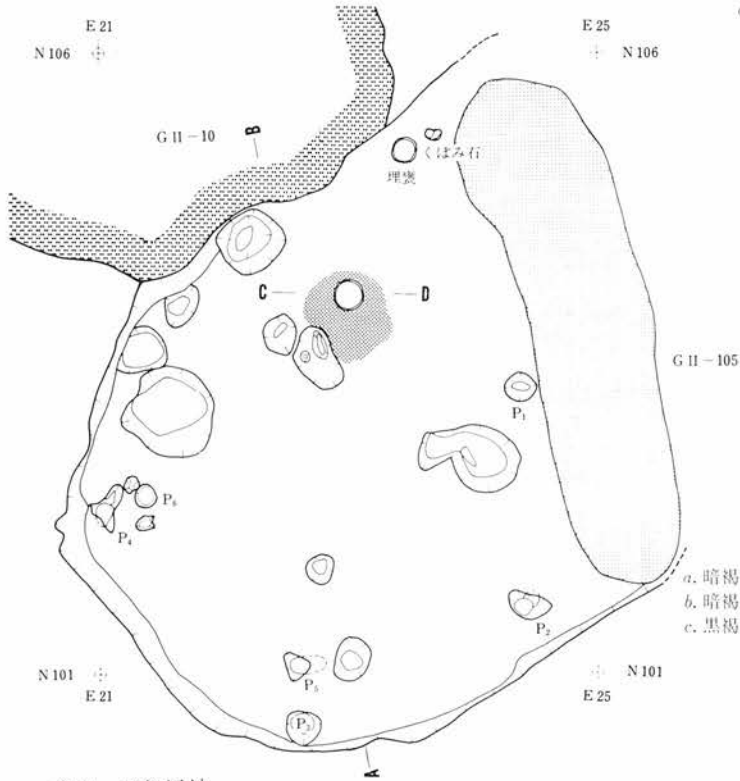
b. G II-9住居址(断面)

- a. 黄褐色(含、炭化物)
- b. 暗褐色土層(含、炭化物)
- c. 褐色土層(含、炭化物)
- d. 明褐色土層

a. G II-9住居址

E 21  
N 106

E 25  
N 106

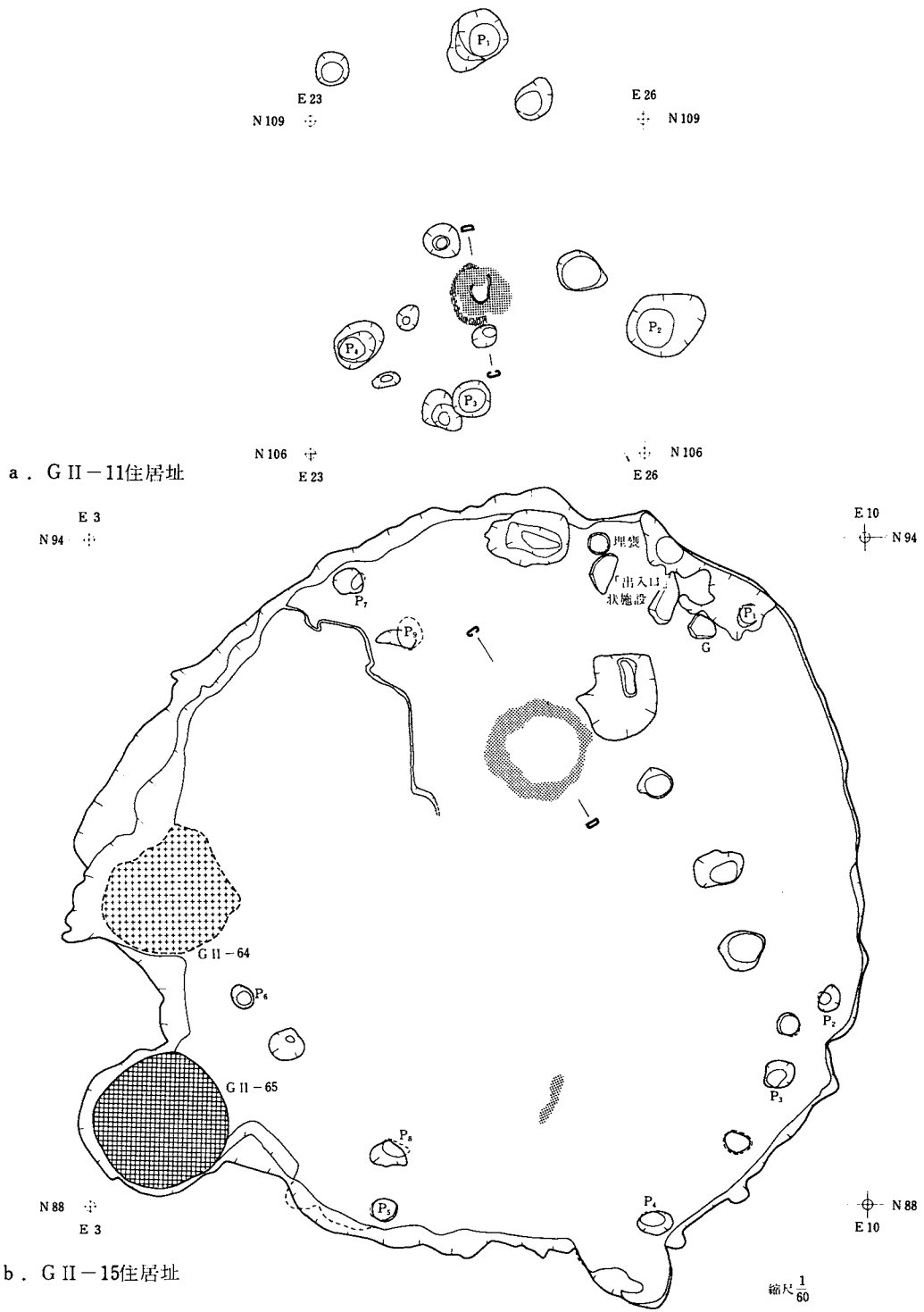


d. G II-12住居址(断面)

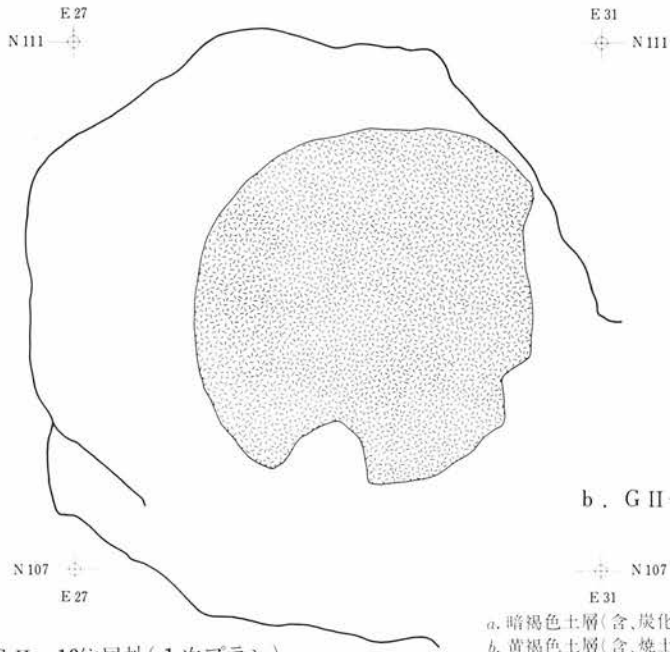
- a. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- b. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- c. 黒褐色土層(含、焼土、炭化物)

c. G II-12住居址

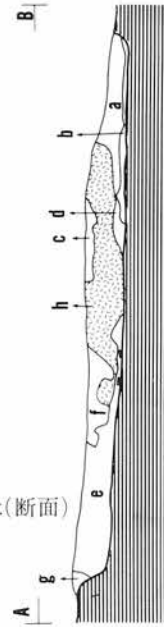
縮尺  $\frac{1}{60}$



図版72

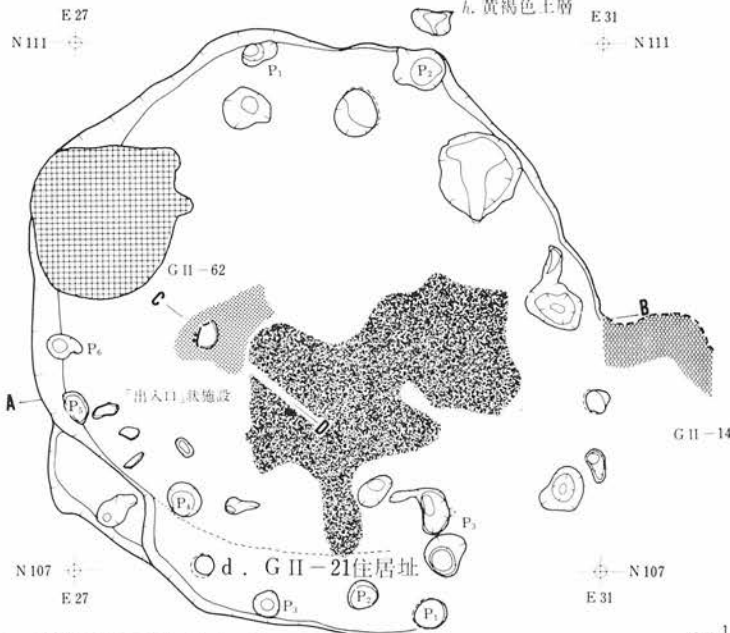


a. G II-13住居址(1次プラン)



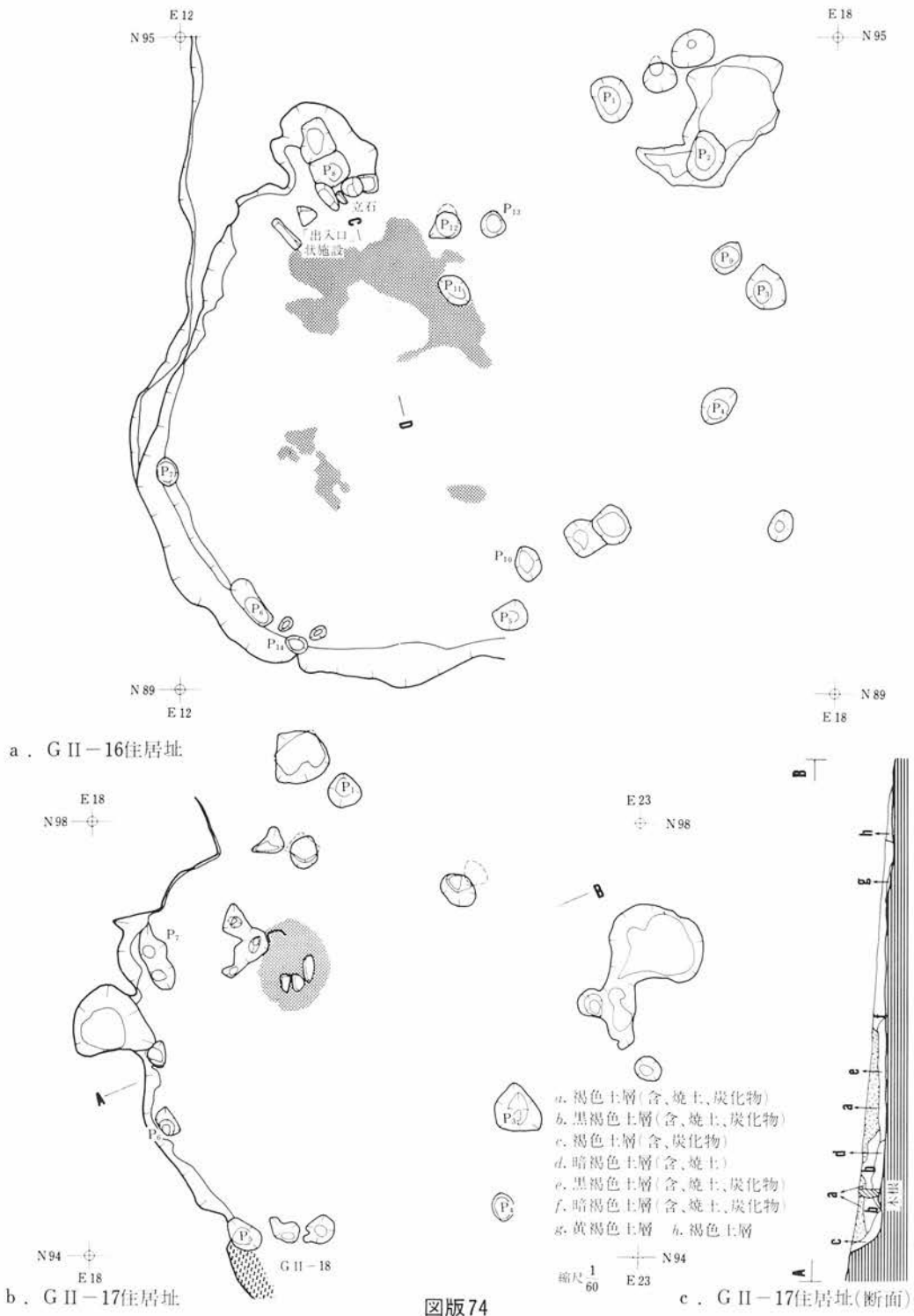
b. G II-13住居址(断面)

- a. 暗褐色土層(含、炭化物)
- b. 黄褐色土層(含、焼土、炭化物)
- c. 褐色土層
- d. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- e. 黒褐色土層(含、焼土、炭化物)
- f. 黄褐色土層(含、焼土、炭化物)
- g. 黄褐色土層
- h. 黄褐色土層

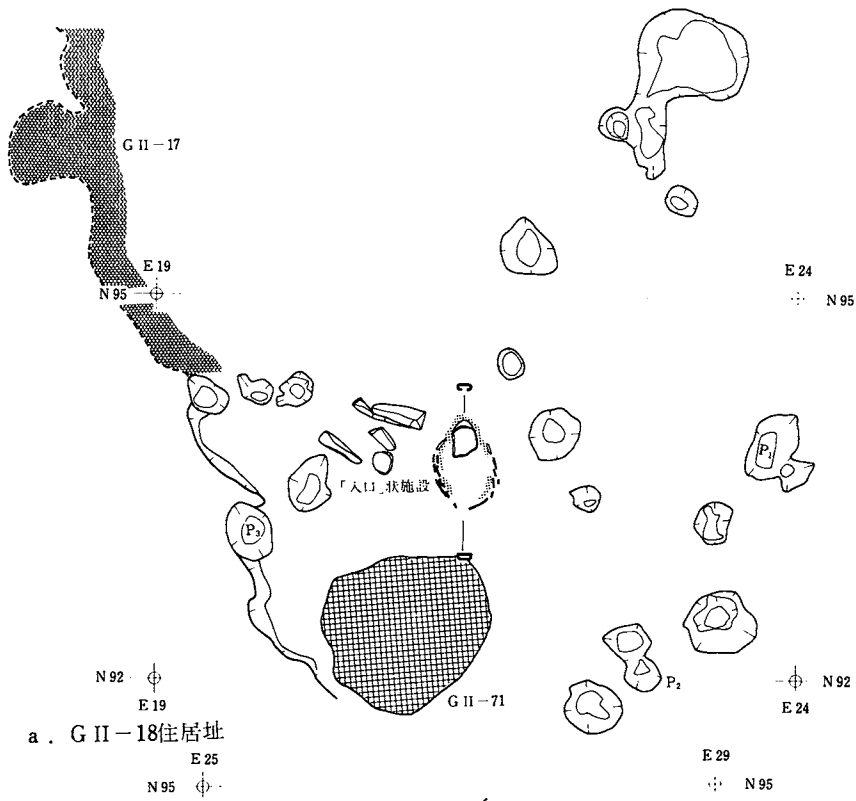


c. G II-13住居址(2次プラン)

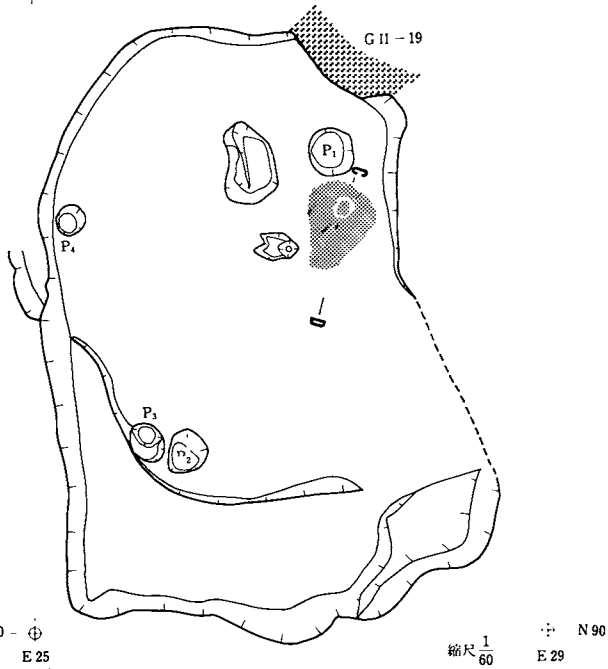
縮尺  $\frac{1}{60}$



図版74

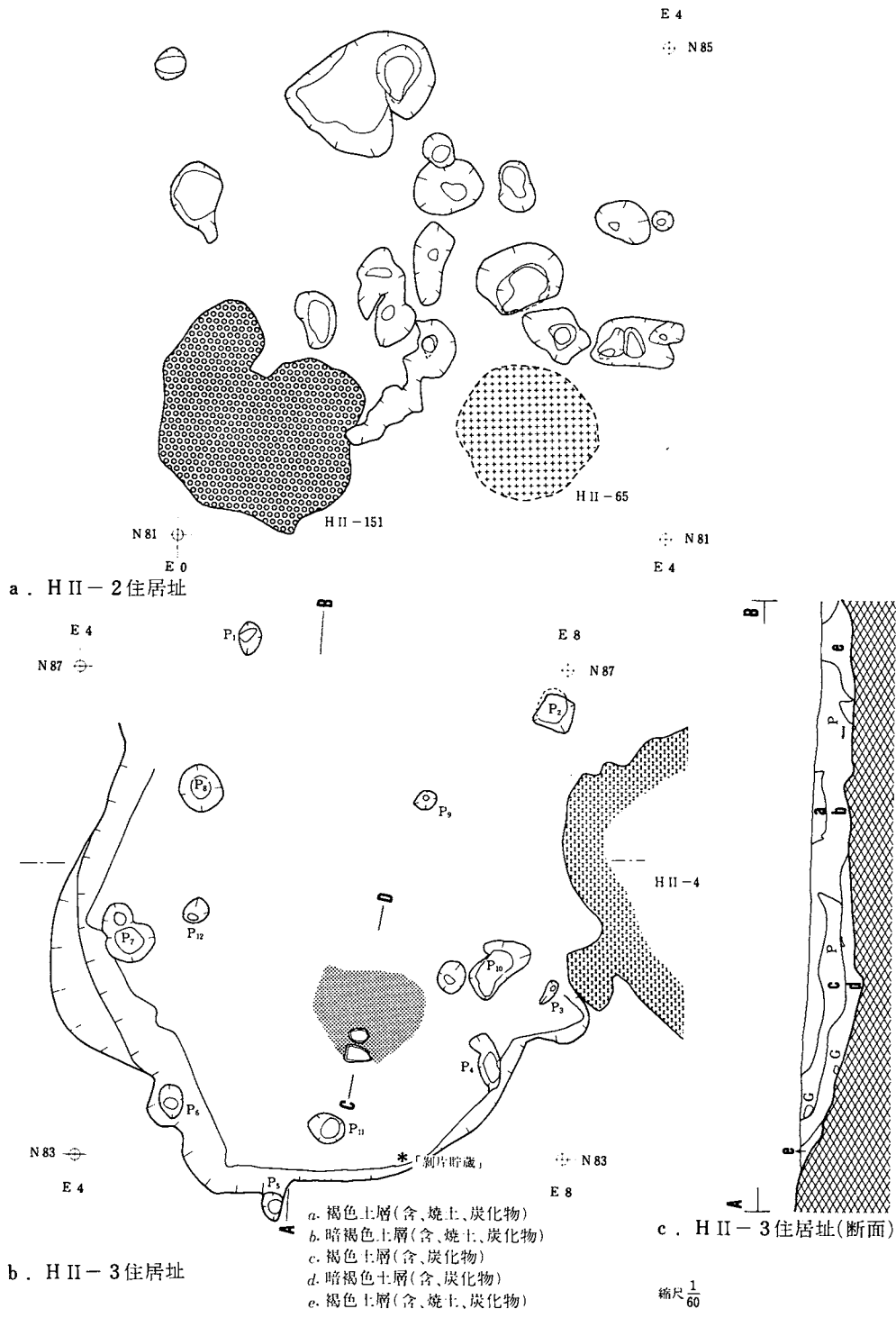


a. G II-18住居址



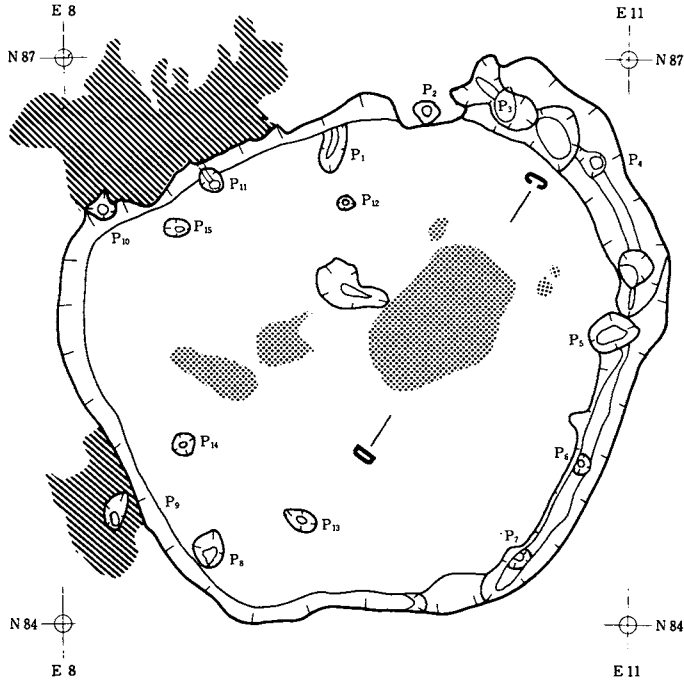
b. G II-20住居址

図版75

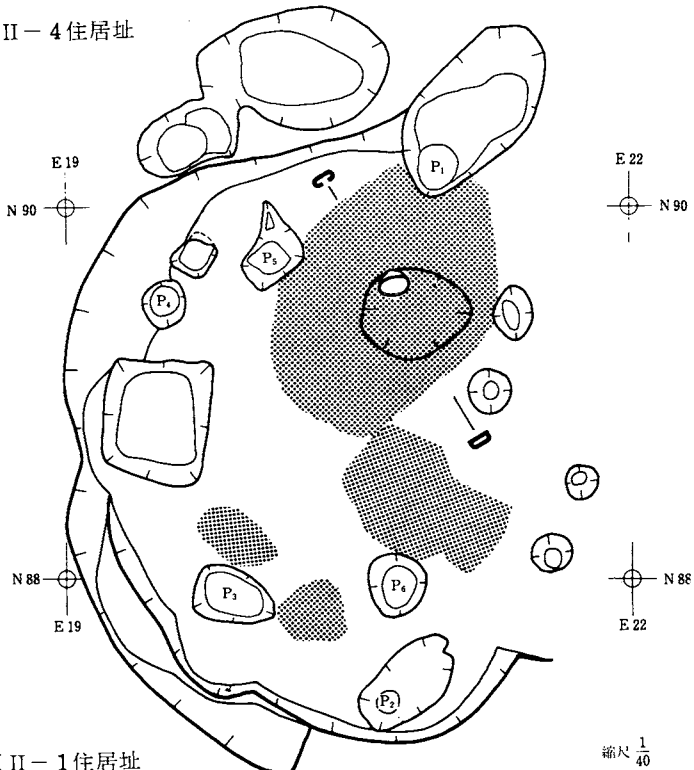


图版76





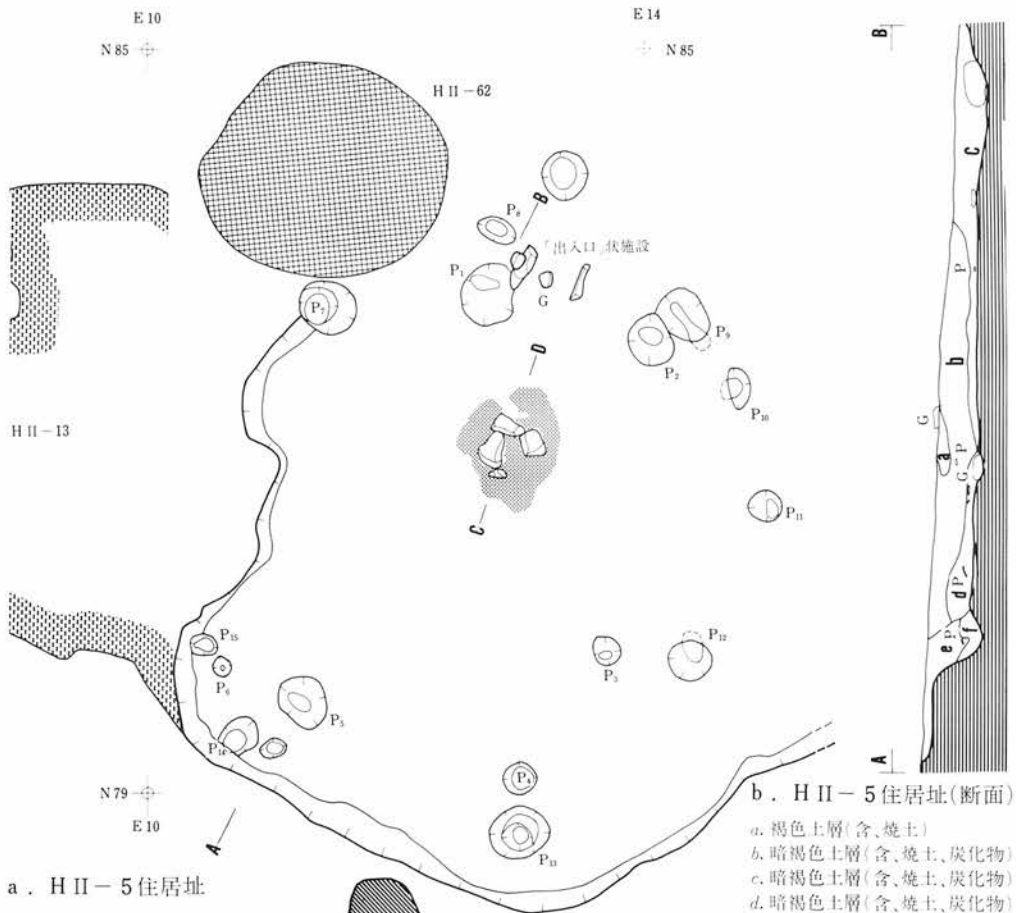
a. H II - 4 住居址



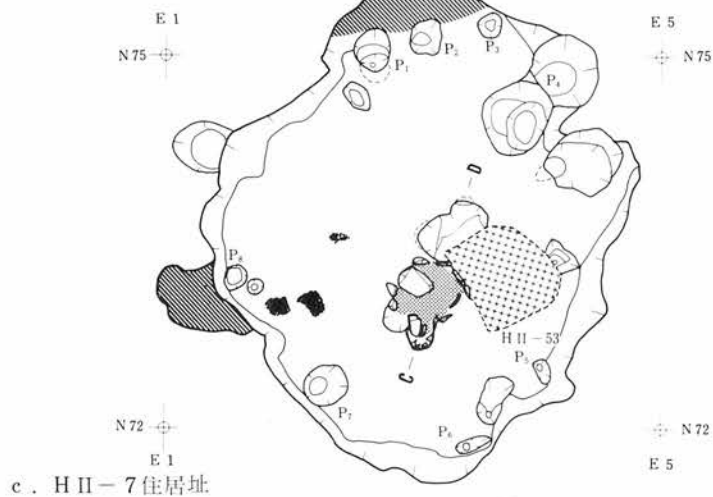
b. H II - 1 住居址

縮尺  $\frac{1}{40}$

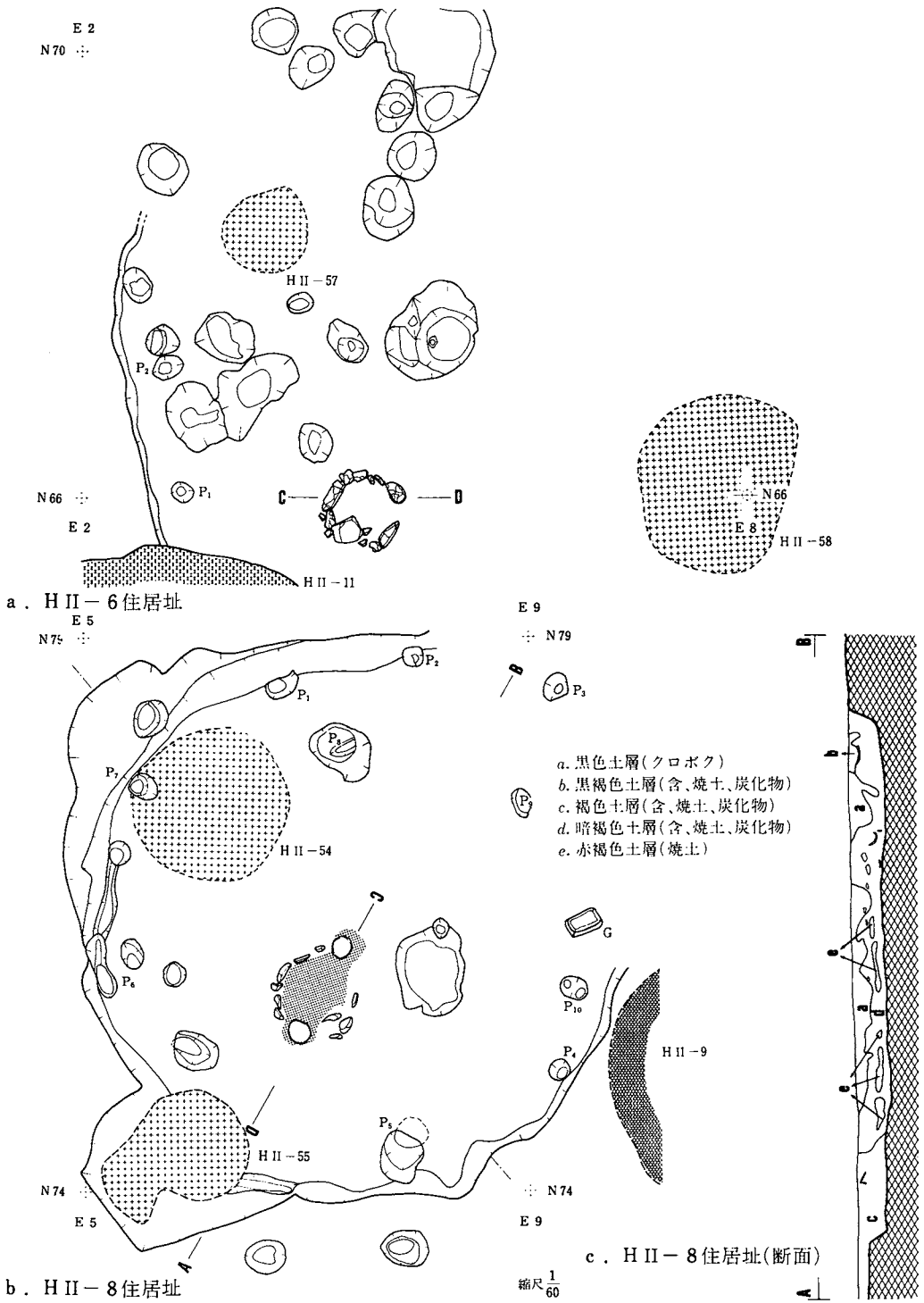
图版 77



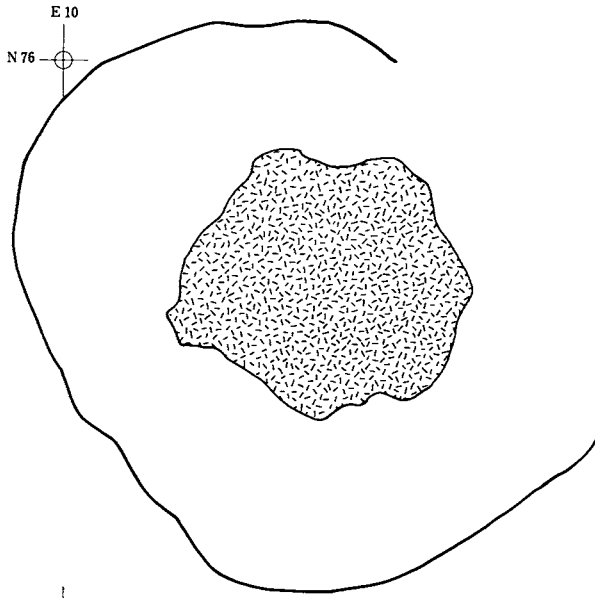
- a. 褐色土層(含、燒土)
- b. 暗褐色土層(含、燒土、炭化物)
- c. 暗褐色土層(含、燒土、炭化物)
- d. 暗褐色土層(含、燒土、炭化物)
- e. 褐色土層(含、燒土、炭化物)
- f. 黃橙土層(含、炭化物)



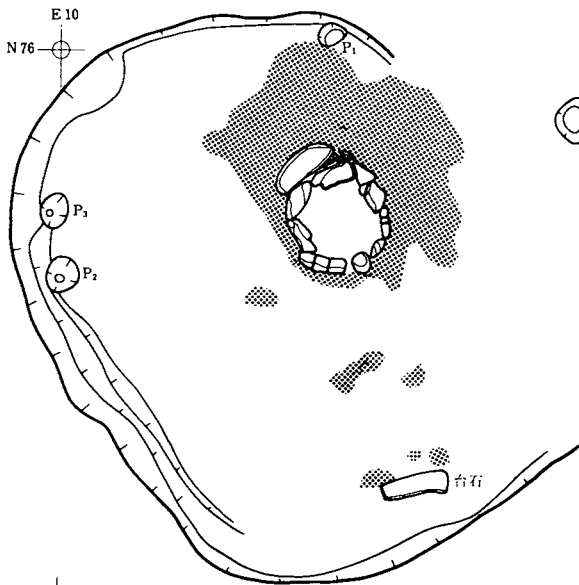
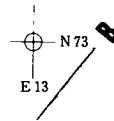
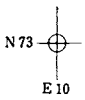
図版78



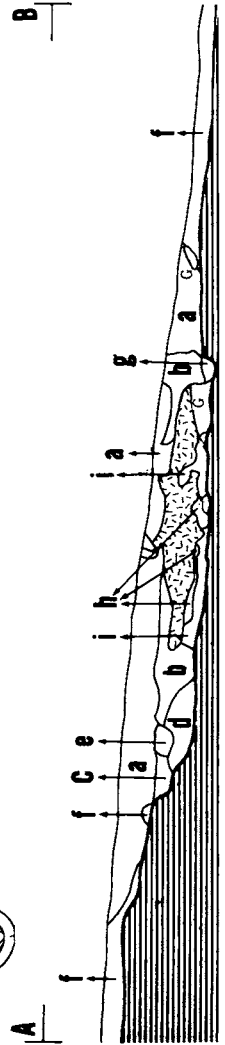
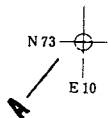
図版 79



a. H II-9 住居址(第1次プラン)



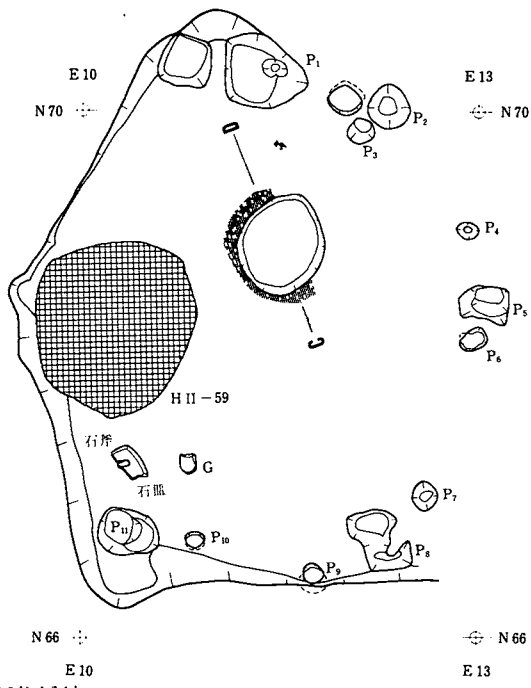
c. H II-9 住居址(第2次プラン)



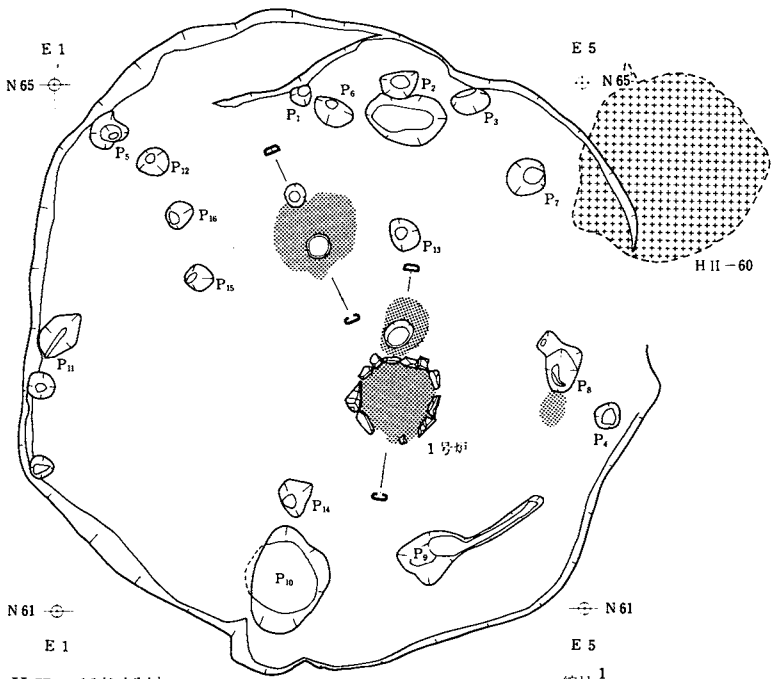
b. H II-9 住居址(断面)

- a. 黒褐色土層(含、岩化物)
- b. 黒褐色土層(含、焼土、炭化物)
- c. 黒褐色土層
- d. 黒褐色土層(含、焼土)
- e. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- f. 褐色土層
- g. 黒褐色土層(含、焼土、炭化物)

縮尺  $\frac{1}{40}$

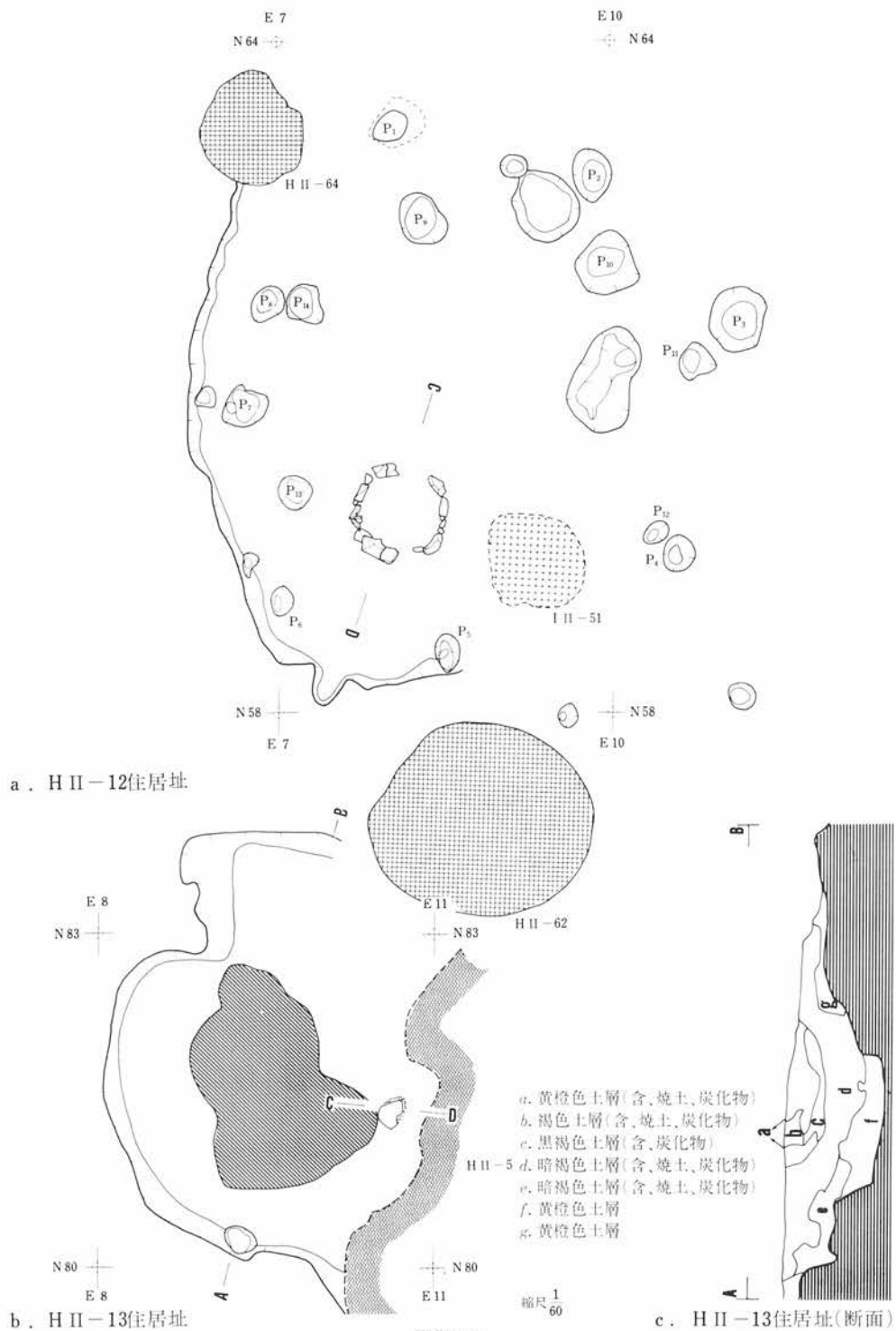


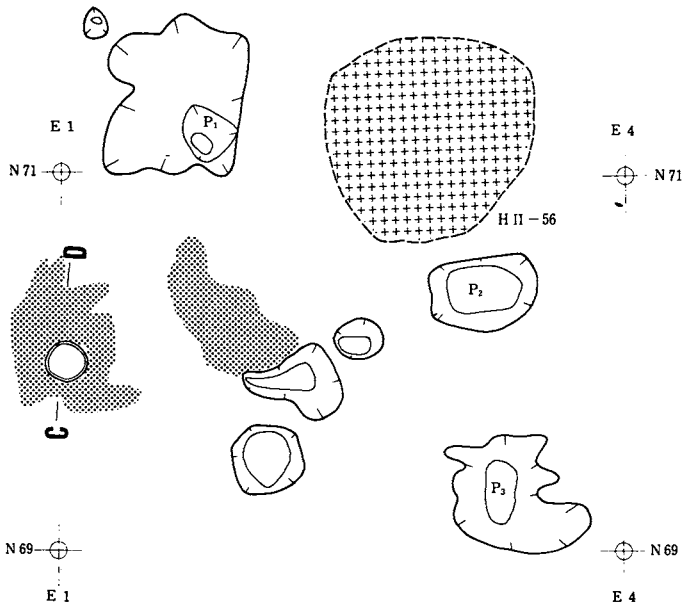
a. H II-10住居址



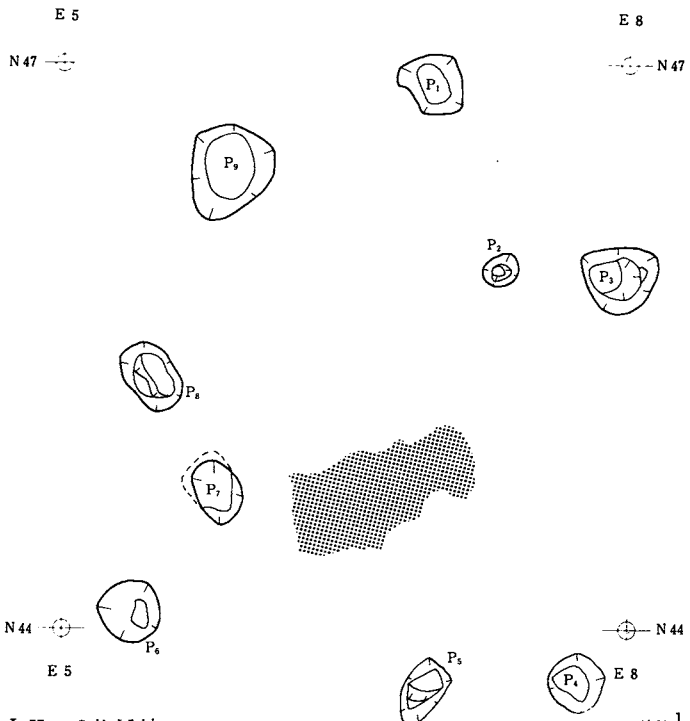
b. H II-11住居址

图版81



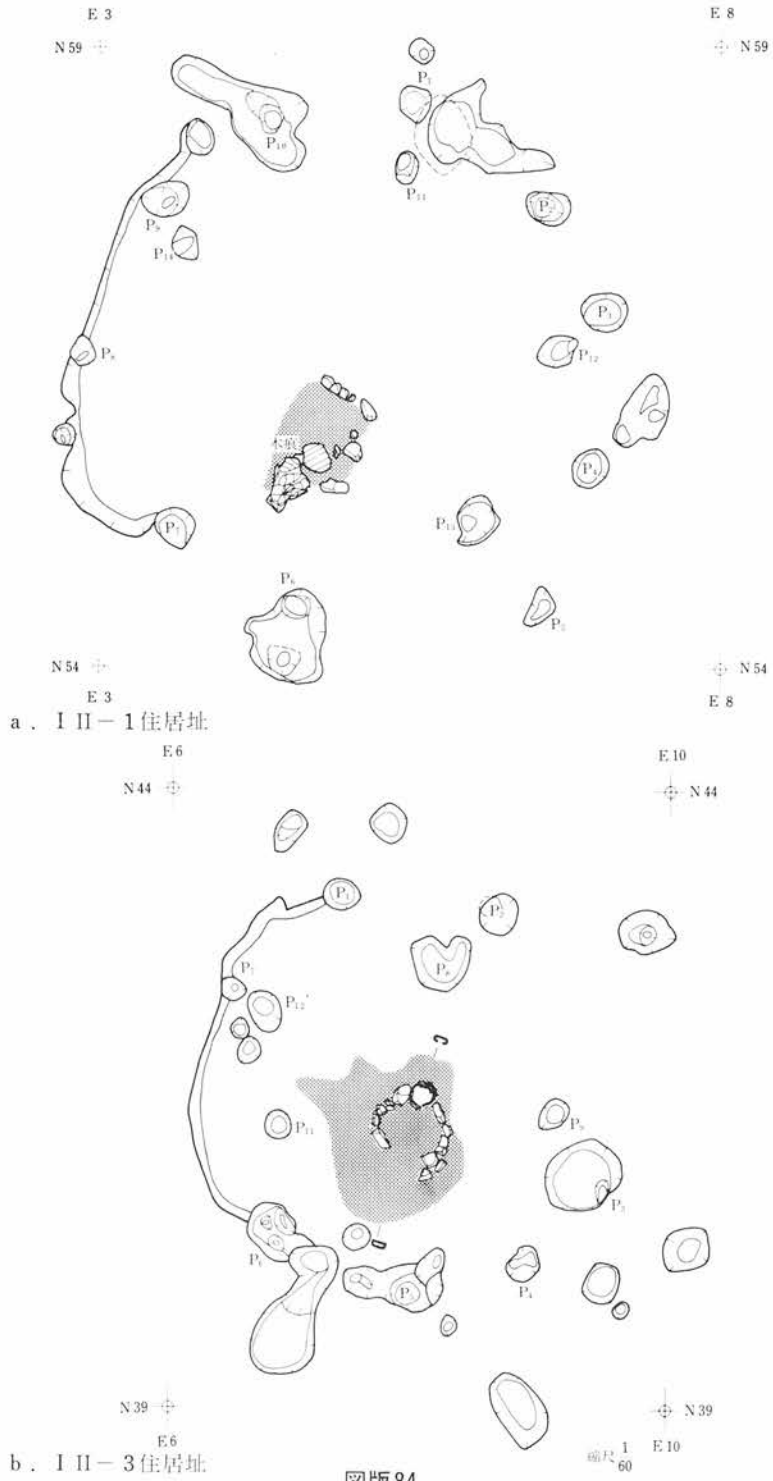


a. H II-14 住居址



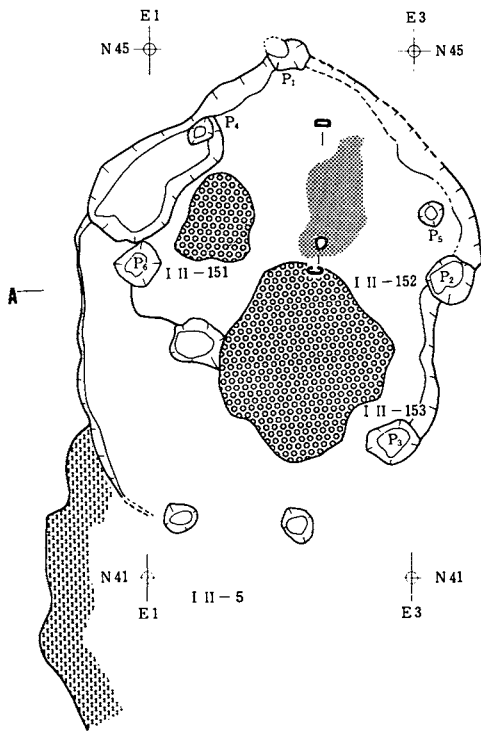
b. I II-2 住居址

图版 83

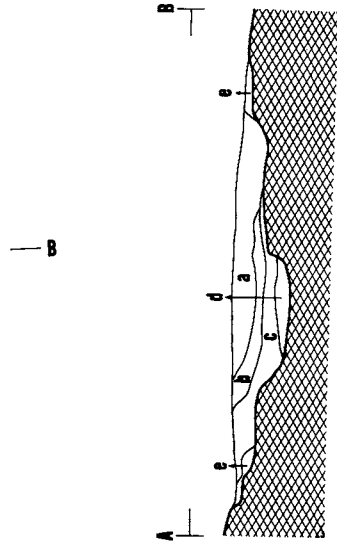


图版84



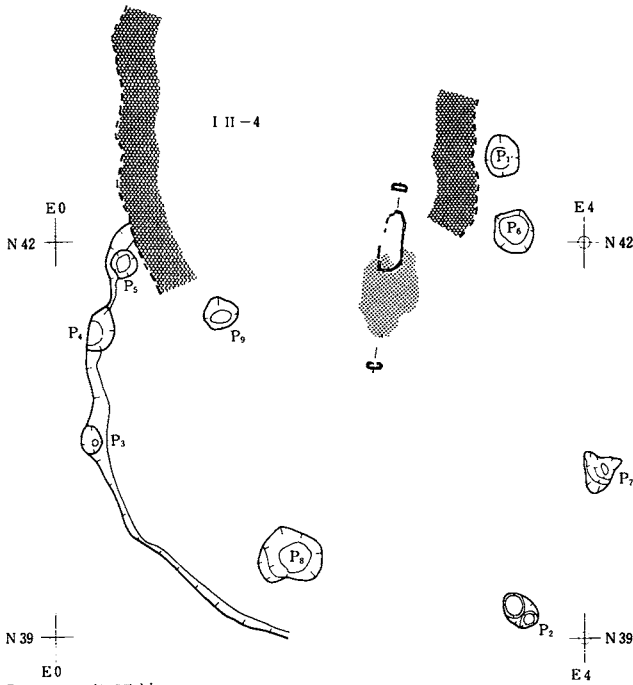


a. I II-4 住居址



b. I II-4 住居址(断面)

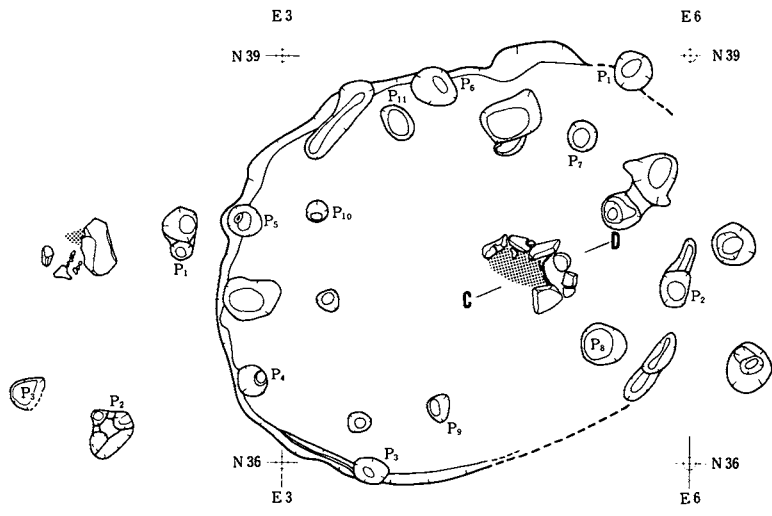
- a. 黑褐色土層(含、炭化物)
- b. 黑色土層(含、炭化物)
- c. 暗褐色土層(含、燒土、炭化物)
- d. 黑色土層(含、炭化物)
- e. 褐色土層(含、燒土、炭化物)



c. I II-5 住居址

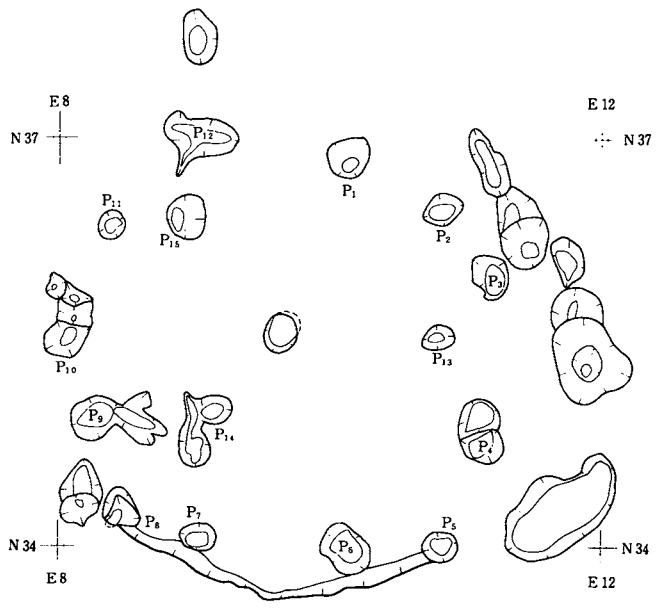
图版 85

縮尺  $\frac{1}{60}$



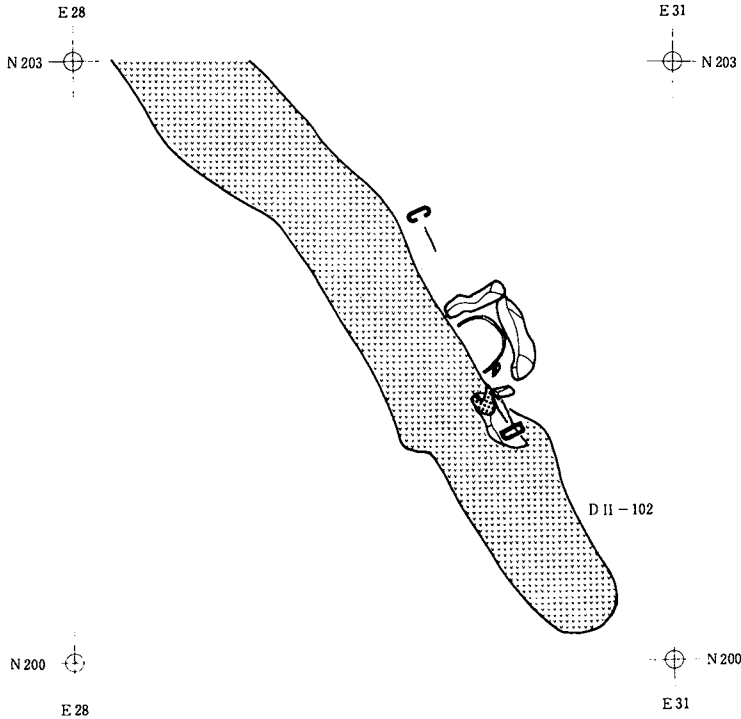
b. I II-7 住居址

a. I II-6 住居址

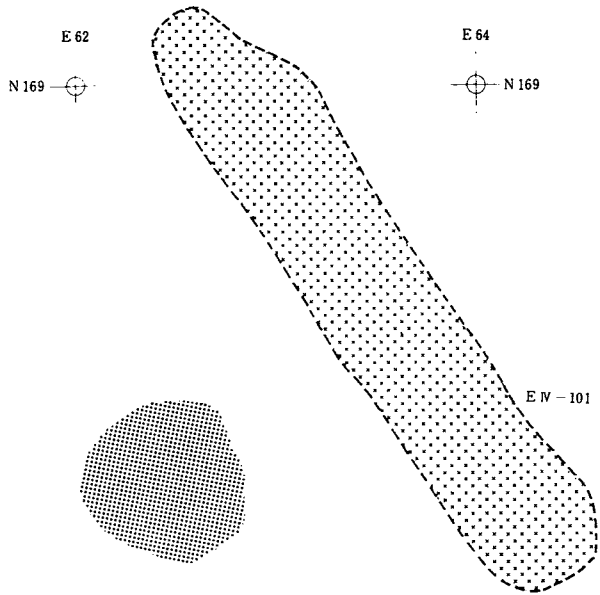


c. I II-8 住居址

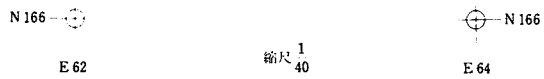
縮尺  $\frac{1}{60}$



a . D II - 3 住居址

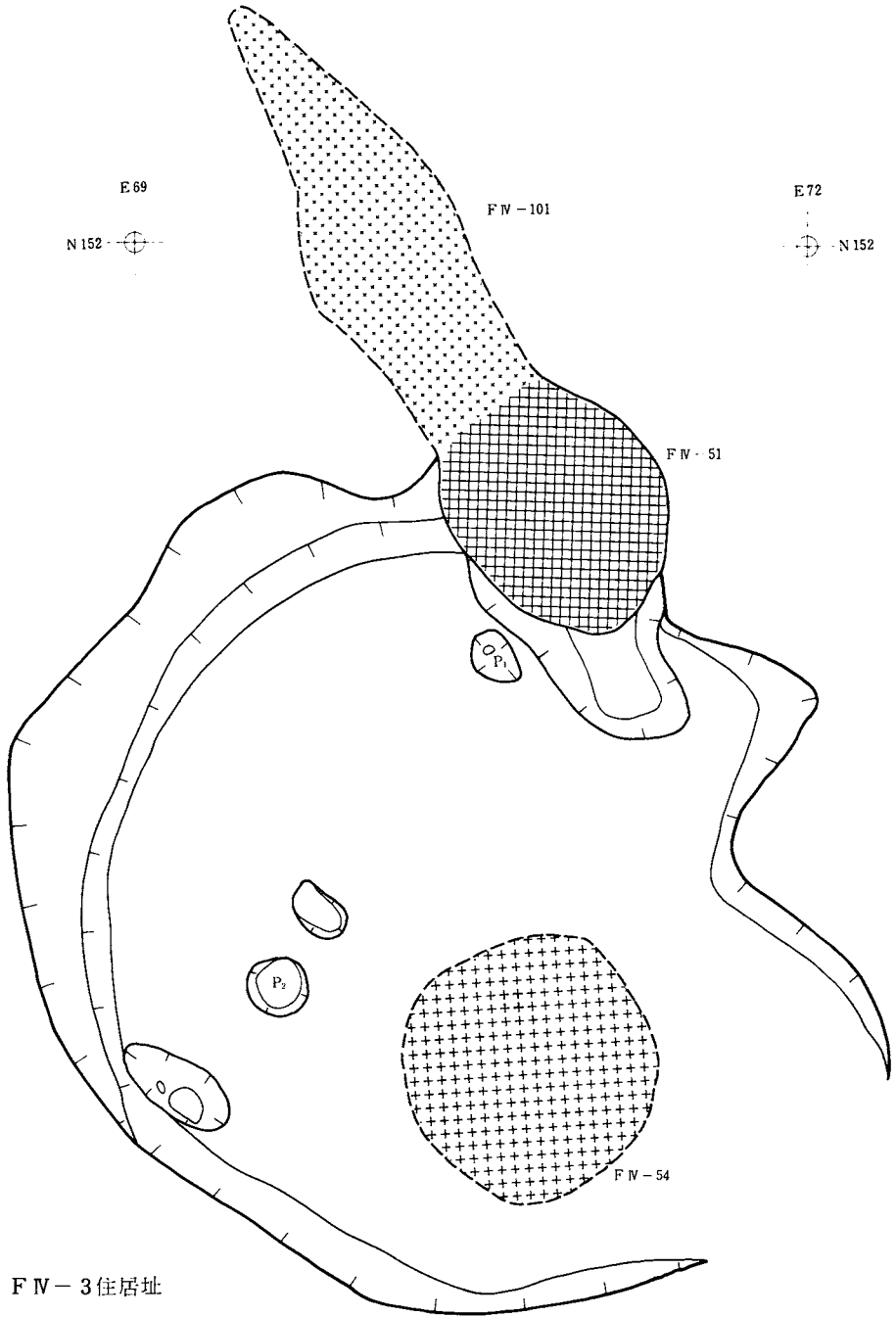


b . E IV - 3 住居址



图版 87

縮尺  $\frac{1}{40}$



a . F IV - 3 住居址

N 147

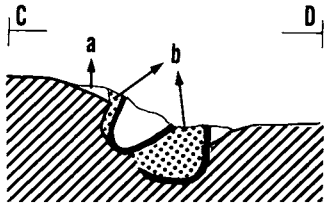
E 69

N 147

E 72

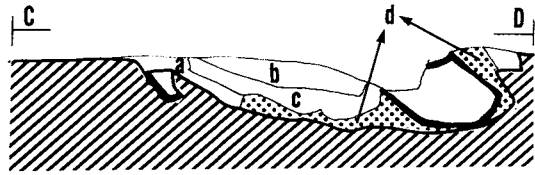
图版 88

縮尺  $\frac{1}{40}$



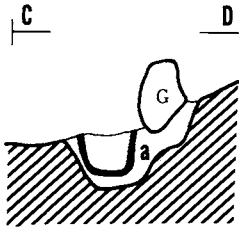
a. C III-2 住居址<sup>1</sup>

- a. 黒褐色土層(少量の炭化物を含む焼土)
- b. 赤褐色土層(焼土)



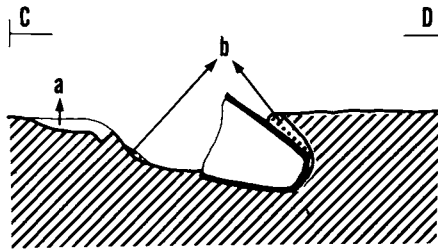
b. C III-3 住居址

- a. 褐色土層(焼土を含むよごれ火山灰)
- b. 褐色土層(焼土・炭化物を含む)
- c. 暗褐色土層(焼土・炭化物を含む)
- d. 赤褐色土層(焼土)



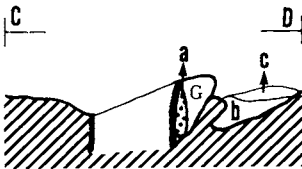
c. C III-4 住居址

- a. 黄褐色土層(焼土を含む)



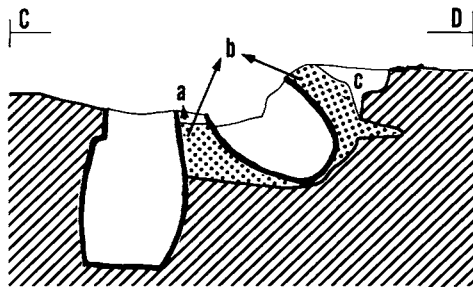
d. C III-5 住居址

- a. 黄褐色土層(炭化物を含む)
- b. 赤褐色土層(焼土)



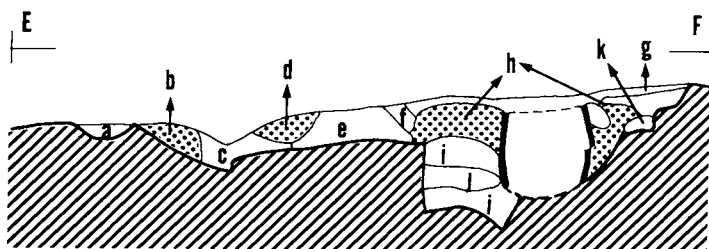
e. C III-6 住居址

- a. 赤褐色土層(焼土)
- b. 暗褐色土層
- c. 黄褐色土層



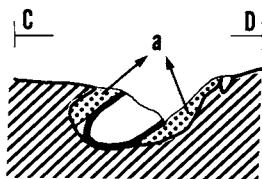
f. C III-7 住居址(1号炉)

- a. 褐色土層
- b. 赤褐色土層(焼土)
- c. 褐色土層(よごれ火山灰)



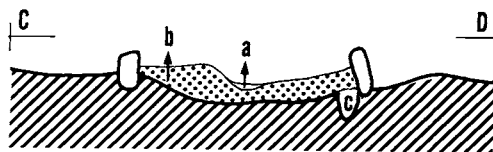
a. C III - 7 住居址 (2号炉)

- |                       |                   |
|-----------------------|-------------------|
| a. 黒色土層(微量の焼土を含むクロボク) | g. 褐色土層(焼土を含む)    |
| b. 赤褐色土層(焼土)          | h. 赤褐色土層(焼土)      |
| c. 黒褐色土層(焼土を含む)       | i. 褐色土層(微量の焼土を含む) |
| d. 赤褐色土層(焼土)          | j. 褐色土層(火山灰)      |
| e. 褐色土層(焼土を含む)        | k. 黒色土層(攪乱)       |



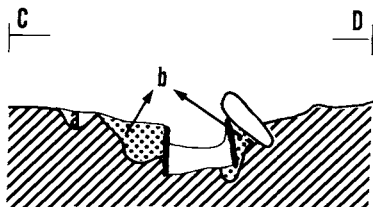
b. C III - 8 住居址

- a. 赤褐色土層(焼土)  
b. 褐色土層(焼土を含む)



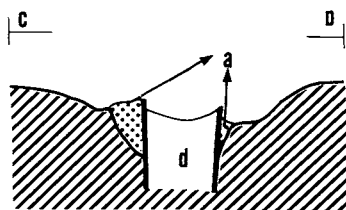
c. C III - 10 住居址

- a. 褐色土層(少量の焼土、微量の炭化物を含む)  
b. 赤褐色土層(焼土)  
c. 暗褐色土層(焼土、炭化物を含む)



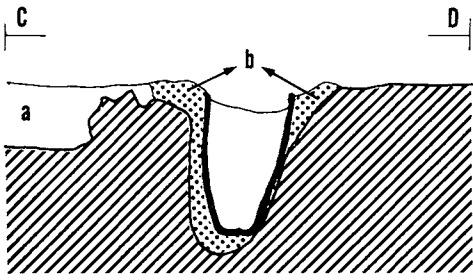
d. C III - 11 住居址

- a. 褐色土層(炭化物、焼土を含む)  
b. 赤褐色土層(焼土)

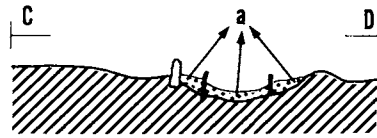


e. C III - 12 住居址

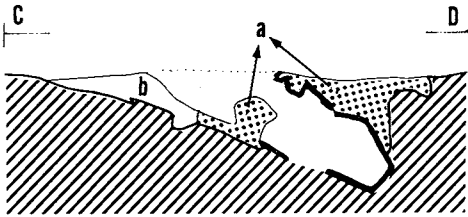
- a. 赤褐色土層(焼土)  
b. 暗褐色土層(炭化物を含む焼土)



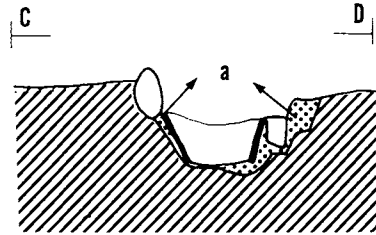
a. C IV - 1 住居址  
 a. 褐色土層(クロボクを含む火山灰)  
 b. 赤褐色土層(焼土)



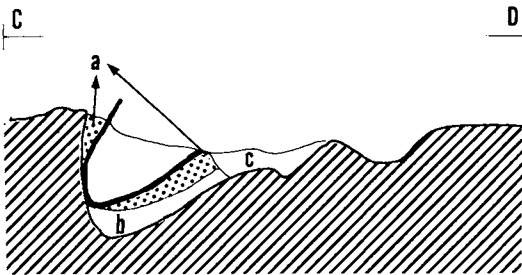
b. D II - 1 住居址  
 a. 赤褐色土層(焼土)



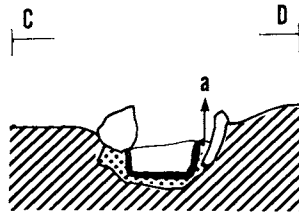
c. D II - 2 住居址  
 a. 赤褐色土層(焼土)  
 b. 褐色土層(焼土、炭化物を含む火山灰)



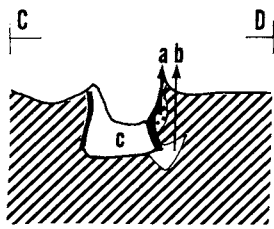
d. D II - 3 住居址  
 a. 赤褐色土層(焼土)



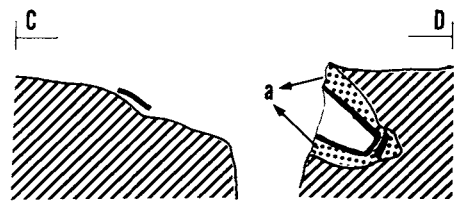
e. D II - 4 住居址  
 a. 赤褐色土層(炭化物を含む焼土)  
 b. 褐色土層(焼土を含む火山灰)  
 c. 褐色土層(焼土を含むクロボク)



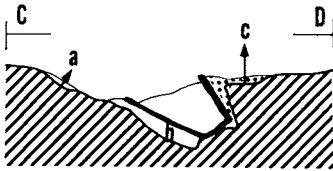
f. D II - 5 住居址  
 a. 赤褐色土層(炭化物を含む焼土)



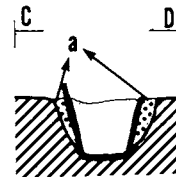
a. D II - 7 住居址  
 a. 赤褐色土層(焼土)  
 b. 褐色土層(焼土を含むよごれ火山灰)  
 c. 暗褐色土層(焼土、炭化物を含む)



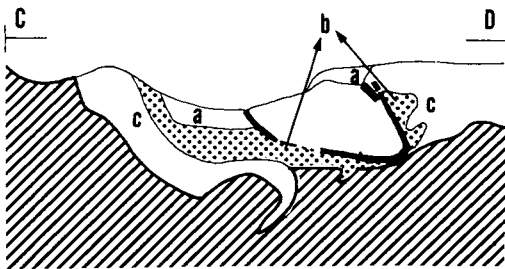
b. D II - 8 住居址  
 a. 赤褐色土層



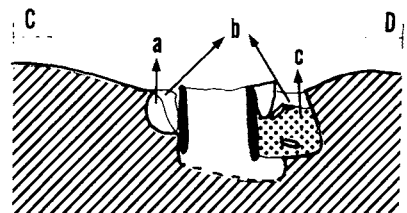
c. D II - 9 住居址  
 a. 暗褐色土層(炭化物、少量の焼土を含む)  
 b. 灰黄褐色土層  
 c. 赤褐色土層(焼土)



d. D II - 12 住居址  
 a. 赤褐色土層(焼土)

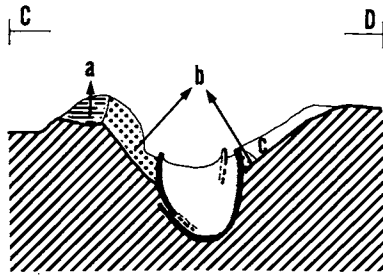


e. D III - 1 住居址  
 a. 暗褐色土層(焼土、多量の炭化物を含む)  
 b. 赤褐色土層(焼土)  
 c. 暗褐色土層(焼土、微量の炭化物を含む)



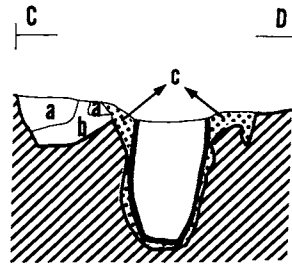
f. D III - 2 住居址  
 a. 明褐色土層(火山灰)  
 b. 黄褐色土層(火山灰)  
 c. 赤褐色土層(焼土)





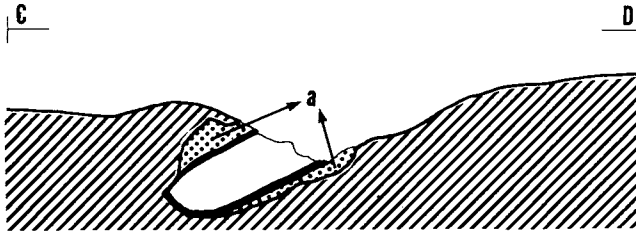
a. D III - 3 住居址

- a. 黄褐色細礫
- a. 赤褐色土層(焼土)
- c. 暗褐色土層(多量の焼土, 少量の炭化物を含む)



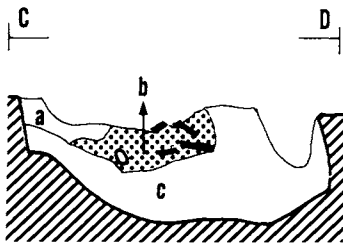
b. D III - 4 住居址

- a. 褐色土層(火山灰)
- b. 黒褐色土層
- c. 赤褐色土層(焼土)



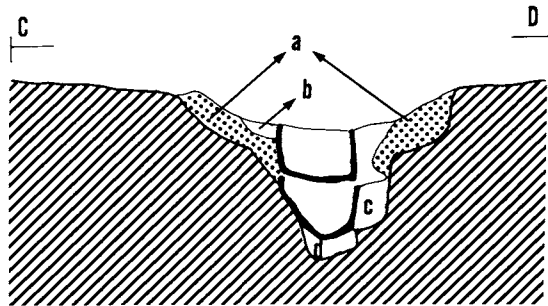
c. D III - 5 住居址

- a. 赤褐色土層(焼土)



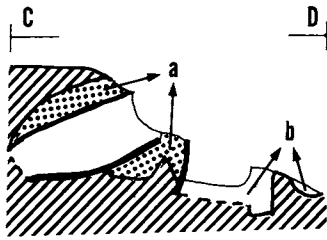
d. D III - 6 住居址

- a. 褐色土層(焼土を含むよごれ火山灰)
- b. 赤褐色土層(焼土)
- c. 褐色土層(焼土を含むよごれ火山灰)

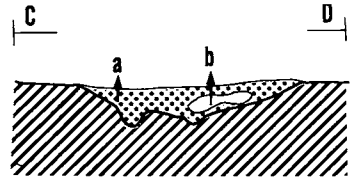


e. D III - 7 住居址

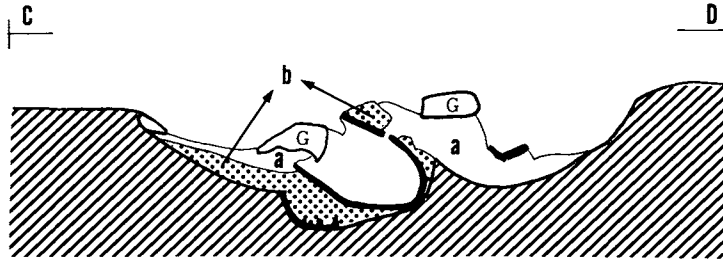
- a. 暗褐色土層(炭化物, 焼土を含む)
- b. 赤褐色土層(焼土)
- c. 褐色土層(炭化物, 焼土を含む)
- d. 褐色土層(焼土を含む)



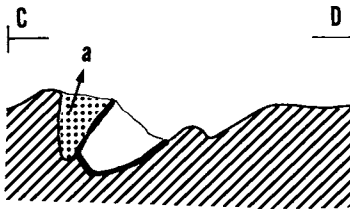
a. D III-8 住居址  
 a. 赤褐色土層(焼土)  
 b. 褐色土層(少量の焼土、炭化物を含む)



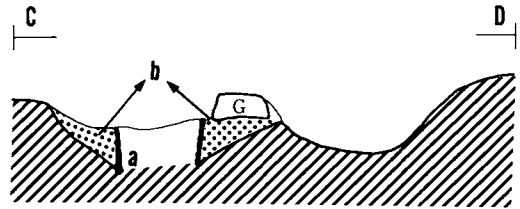
b. D III-9 住居址  
 a. 赤褐色土層(焼土)  
 b. 暗褐色土層(多量の炭化物、焼土を含む)



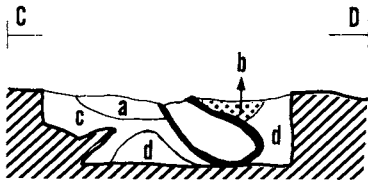
c. D III-10 住居址  
 a. 褐色土層(少量の焼土、多量の炭化物を含む)  
 b. 赤褐色土層(焼土)



d. D III-11 住居址  
 a. 赤褐色土層(焼土)

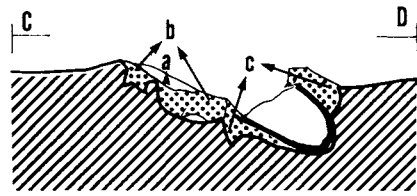


e. D IV-1 住居址  
 a. 暗褐色土層(多量の炭化物、焼土を含む)  
 b. 赤褐色土層(焼土)



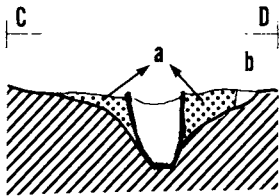
a. E II - 1 住居址

- a. 黒褐色土層
- b. 赤褐色土層(焼土)
- c. 黒褐色土層
- d. 褐色土層(やわらかい火山灰)



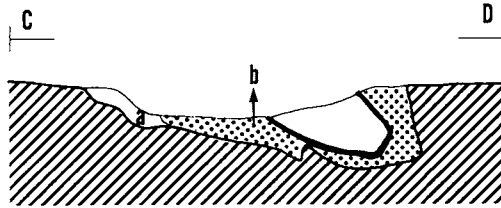
b. E II - 2 住居址

- a. 黒褐色土層(焼土を含む)
- b. 赤褐色土層(焼土)
- c. 赤褐色土層(焼土)



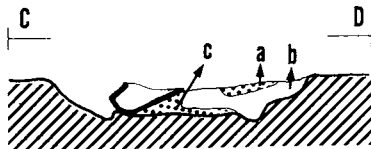
c. E II - 3 住居址

- a. 赤褐色土層(焼土)
- b. 褐色土層



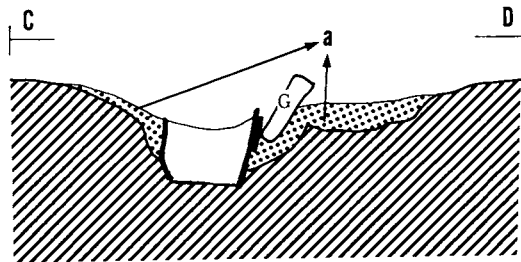
d. E II - 4 住居址

- a. 明褐色土層
- b. 赤褐色土層(焼土)



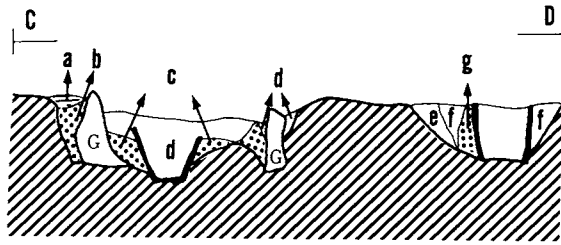
e. E II - 5 住居址

- a. 赤褐色土層(少量の炭化物を含む焼土)
- b. 褐色土層(炭化物を含む火山灰)
- c. 赤褐色土層(焼土)



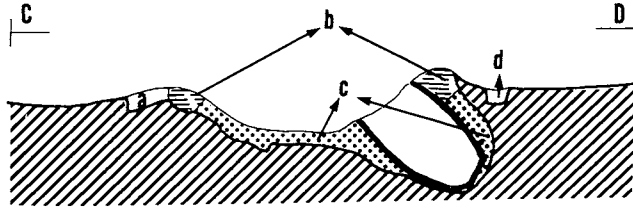
f. E II - 6 住居址

- a. 赤褐色土層(炭化物を含む焼土)



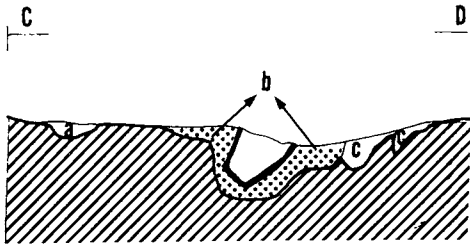
a. E II - 7 住居址

- a. 黄褐色細礫
- b. 赤褐色土層(焼土)
- c. 赤褐色土層(焼土)
- d. 黒色土層(微量の炭化物を含む焼土)
- e. 褐色土層(よごれ火山灰)
- f. 暗褐色土層(微量の炭化物、焼土を含む)
- g. 赤褐色土層(焼土)



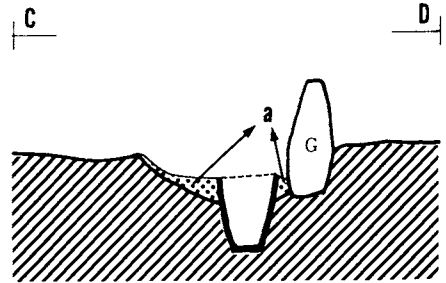
b. E II - 8 住居址

- a. 褐色土層
- b. 黄褐色細礫
- c. 赤褐色土層(焼土)
- d. 黒褐色土層(火山灰を含む)



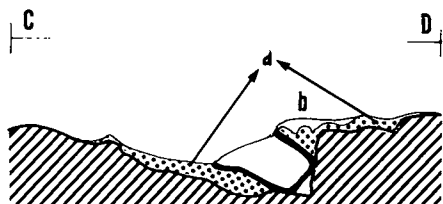
c. E II - 9 住居址

- a. 暗褐色土層(焼土を含む)
- b. 赤褐色土層(焼土)
- c. 暗褐色土層(焼土を含む)



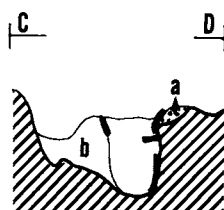
d. E II - 11 住居址

- a. 赤褐色土層(焼土)



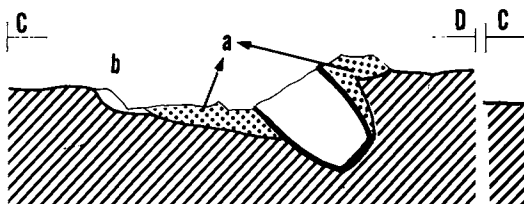
a. E II-12住居址

- a. 赤褐色土層(焼土)
- b. 黒色土層(焼土を含む)



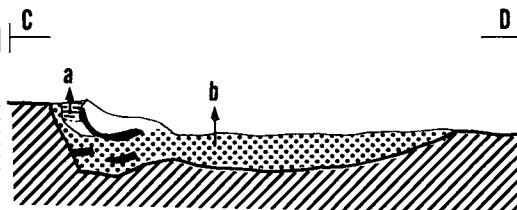
b. E II-13住居址

- a. 赤褐色土層(焼土)
- b. 黒褐色土層(火山灰を含む)



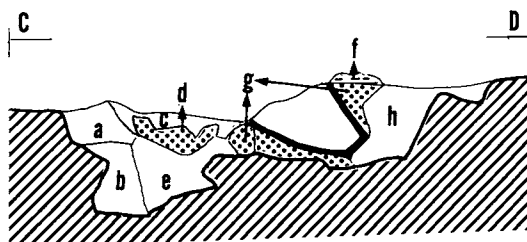
c. E II-14住居址

- a. 赤褐色土層(微量の黄褐色細礫を含む)
- b. 暗褐色土層(少量の焼土を含む)



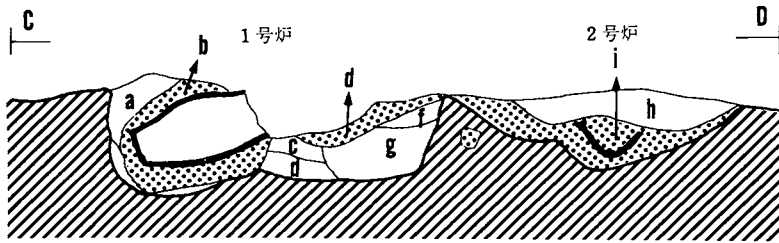
d. E II-15住居址

- a. 黄褐色細礫
- b. 赤褐色土層(焼土)



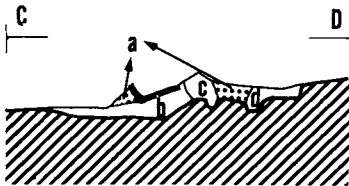
e. E II-16住居址

- a. 黄褐色土層(火山灰)
- b. 褐色土層(よごれ火山灰)
- c. 褐色土層(微量の焼土、炭化物を含む火山灰)
- d. 赤褐色土層
- e. 暗褐色土層
- f. 黄褐色細礫
- g. 赤褐色土層(焼土)
- h. 暗褐色土層



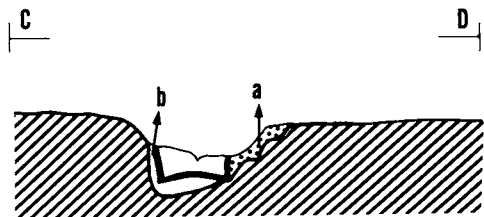
a. E II-17住居址

- |                 |                 |
|-----------------|-----------------|
| a. 褐色土層(火山灰)    | f. 黒褐色土層        |
| b. 赤褐色土(焼土)     | g. 褐色土層(よごれ火山灰) |
| c. 褐色土層(よごれ火山灰) | h. 褐色土層(よごれ火山灰) |
| d. 褐色土層(よごれ火山灰) | i. 赤褐色土層(焼土)    |
| e. 赤褐色土層(焼土)    |                 |



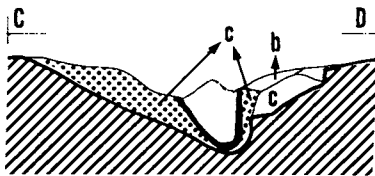
b. E II-18住居址

- |                 |
|-----------------|
| a. 赤褐色土層(焼土)    |
| b. 暗褐色土層        |
| c. 黒褐色土層        |
| d. 褐色土層(よごれ火山灰) |



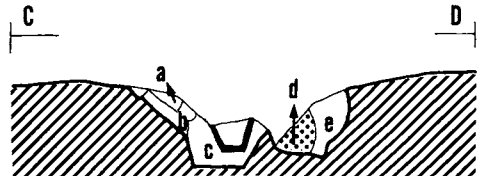
c. E II-19住居址

- |              |
|--------------|
| a. 赤褐色土層(焼土) |
| b. 暗褐色土層     |



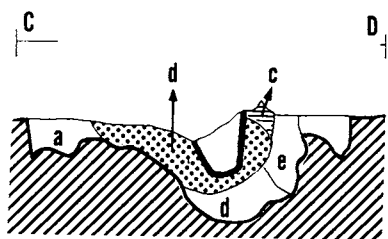
d. E II-20住居址

- |                    |
|--------------------|
| a. 赤褐色土層(焼土)       |
| b. 褐色土層(微量の炭化物を含む) |
| c. 褐色土層            |



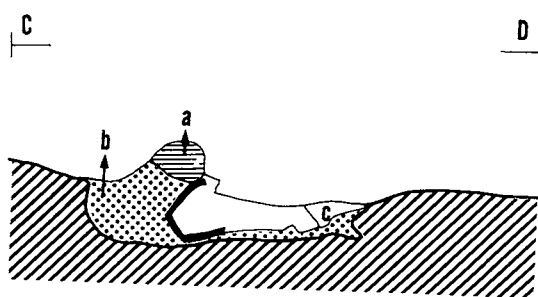
e. E II-21住居址

- |                   |
|-------------------|
| a. 暗褐色土層          |
| b. 赤褐色土層(焼土)      |
| c. 褐色土層(焼土)       |
| d. 褐色土層(多量の焼土を含む) |
| e. 明褐色土層(よごれ火山灰)  |



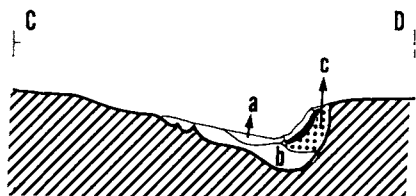
a. E II-22住居址

- a. 褐色土層(よごれ火山灰)
- b. 赤褐色土層(焼土)
- c. 黄褐色細礫
- d. 褐色土層(やわらかい火山灰)
- e. 黄褐色土層



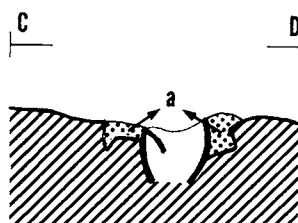
b. E II-24住居址

- a. 黄褐色細礫
- b. 赤褐色土層(焼土)
- c. 黒褐色土層



c. E II-25住居址

- a. 暗褐色土層
- b. 褐色土層
- c. 赤褐色土層(焼土)



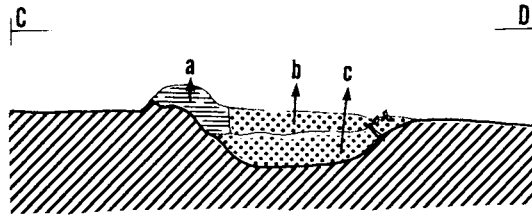
d. E II-26住居址

- a. 赤褐色土層(焼土)



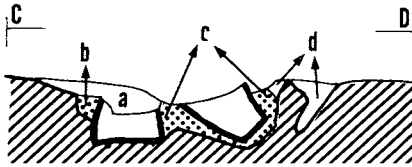
e. E II-27住居址

- a. 赤褐色土層(焼土、上部に微量の黄褐色細礫を含む)



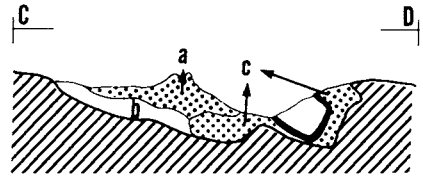
a. E II-28住居址

- a. 黄褐色細礫(焼土を含む)
- b. 赤褐色土層(焼土、c層よりやわらかい)
- c. 赤褐色土層(焼土)



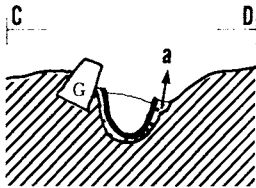
b. E II-29住居址

- a. 褐色土層(砂礫を含む)
- b. 赤褐色土層(焼土)
- c. 赤褐色土層(焼土)
- d. 黄褐色細礫



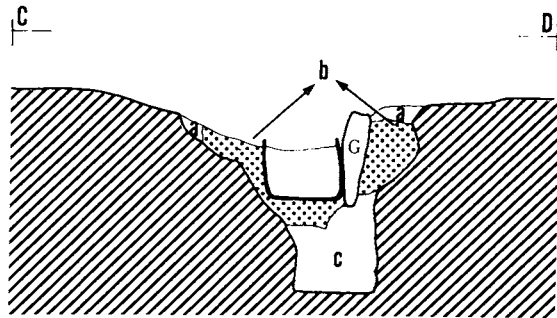
c. E II-30住居址

- a. 赤褐色土層(焼土)
- b. 黒褐色土層
- c. 赤褐色土層(焼土)



d. E III-1住居址

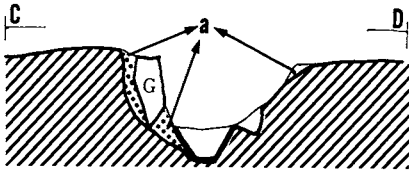
- a. 赤褐色土層(焼土)



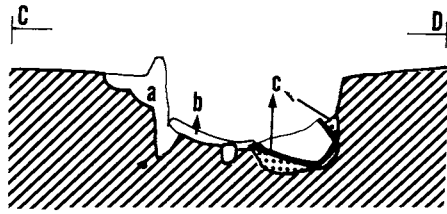
e. E III-2住居址

- a. 褐色土層(よごれ火山灰)
- b. 赤褐色土層(焼土)
- c. 暗褐色土層(焼土、炭化物を含む)

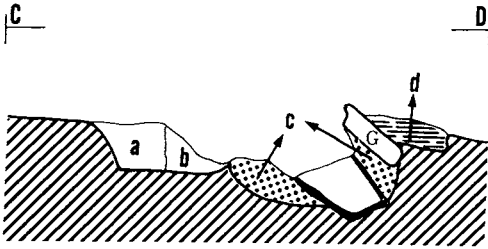




a. E III-3 住居址  
a. 赤褐色土層(燒土)



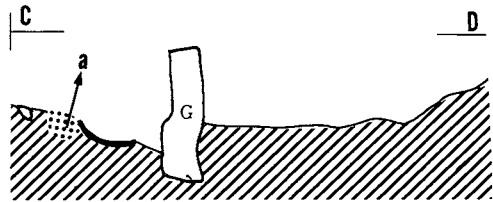
b. E III-4 住居址  
a. 褐色土層(燒土、炭化物を含む火山灰)  
b. 赤褐色土層(燒土を含む火山灰)  
c. 赤褐色土層(燒土)



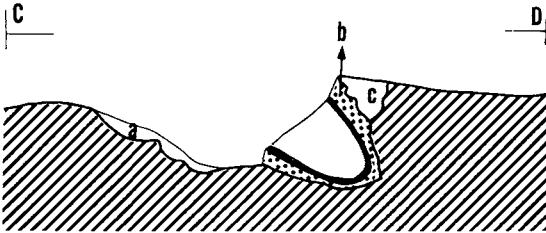
c. E III-5 住居址  
a. 黑色土層  
b. 褐色土層(火山灰)  
c. 赤褐色土層(燒土)  
d. 黄褐色細礫



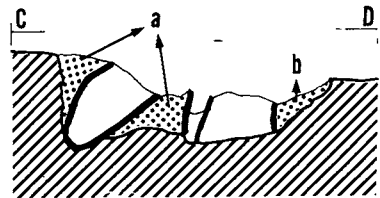
d. E III-6 住居址(1号炉)



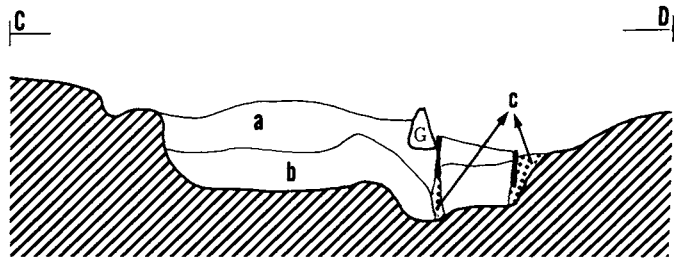
e. E III-6 住居址(2号炉)  
a. 赤褐色土層(燒土)



f. E III-7 住居址  
a. 濃い褐色土層(炭化物を含む火山灰)  
b. 明赤褐色土層(炭化物を含む燒土)  
c. 黄褐色土層(炭化物を含む)

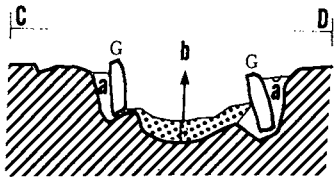


g. E III-8 住居址  
a. 赤褐色土層(燒土)  
b. 赤褐色土層(燒土)



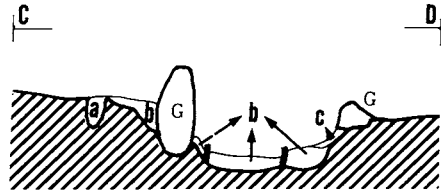
a. E III-9 住居址

- a. 黒褐色土層(微量の焼土、炭化物を含む)
- b. 褐色土層
- c. 赤褐色土層(焼土)



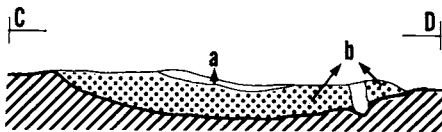
b. E III-10 住居址

- a. 暗褐色土層
- b. 赤褐色土層(焼土)



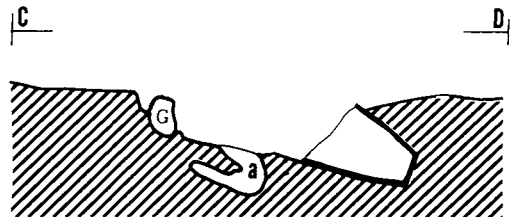
c. E IV-1 住居址

- a. 暗褐色土層
- b. 明褐色土層(焼土、炭化物を含む)
- c. 褐色土層(焼土、炭化物を含む)



d. E IV-4 住居址

- a. 暗褐色土層(焼土を含む)
- b. 赤褐色土層(焼土)
- c. 赤褐色土層(焼土)

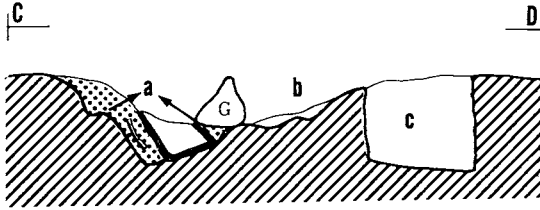
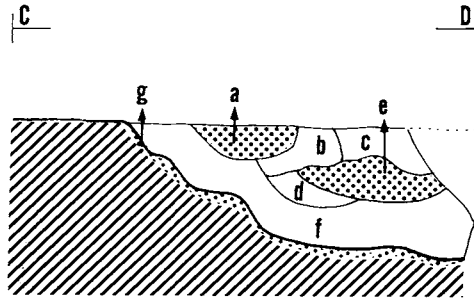


e. E IV-2 住居址

- a. 褐色土層(焼土を含む火山灰)

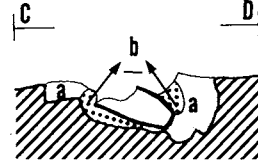
a. E IV - 5 住居址

- a. 赤褐色土層(焼土)
- b. 黒褐色土層(炭化物を含む焼土)
- c. 褐色土層
- d. 黒褐色土層(少量の焼土を含む)
- e. 赤褐色土層(焼土)
- f. 黄褐色土層(火山灰)
- g. 赤褐色土層(焼土)



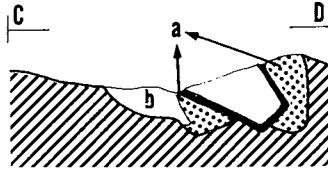
b. F II - 2 住居址

- a. 赤褐色層(焼土)
- b. 暗褐色土層
- c. 暗褐色土層(柱穴)



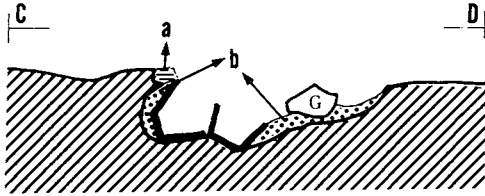
c. F II - 3 住居址

- a. 黒褐色土層
- b. 赤褐色土層(焼土)



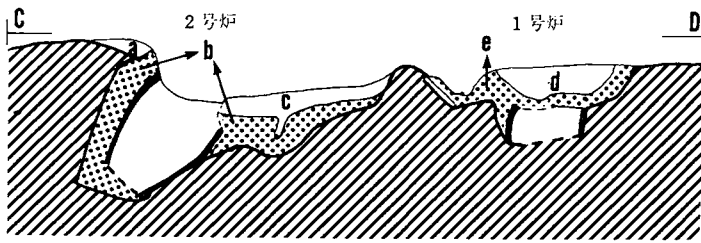
d. F II - 4 住居址

- a. 赤褐色土層(焼土)
- b. 暗褐色土層(炭化物を含む焼土)



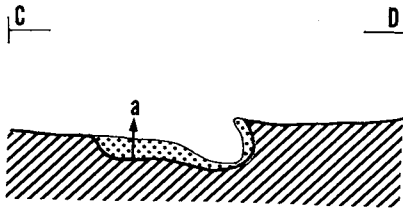
e. F II - 6 住居址

- a. 黄褐色細礫
- b. 赤褐色土層(焼土)



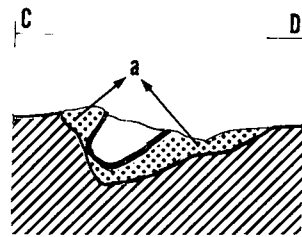
a. F II - 8 住居址

- a. 明褐色土層(微量の焼土を含む)
- b. 赤褐色土層(焼土)
- c. 黒色土層(炭化物、焼土を含む)
- d. 褐色土層
- e. 赤褐色土層(焼土、火山灰を含む)



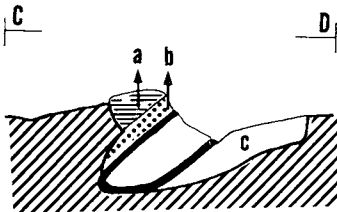
b. F II - 10 住居址

- a. 赤褐色土層(焼土)



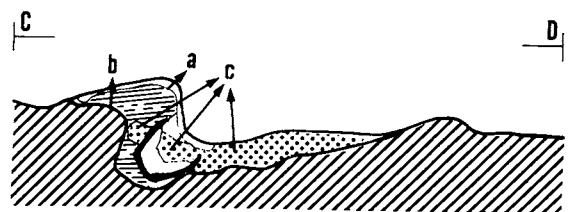
c. F II - 11 住居址

- a. 赤褐色土層(焼土)



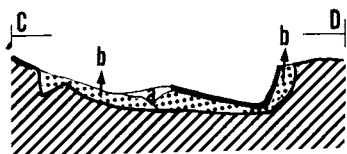
d. F II - 12 住居址

- a. 黄褐色細礫
- b. 赤褐色土層(焼土)
- c. 黒褐色土層(焼土、炭化物を含む)



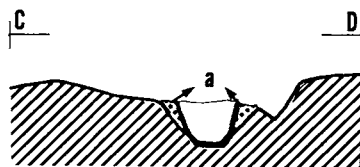
e. F II - 13 住居址

- a. 黄褐色土層(火山灰)
- b. 黄褐色細礫
- c. 赤褐色土層(焼土)



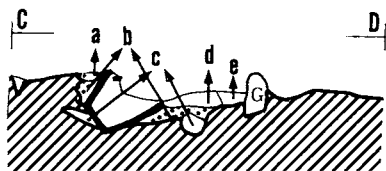
a. F II-14住居址

- a. 褐色土層(焼土を含む)
- b. 明赤褐色土層(火山灰を含む焼土)



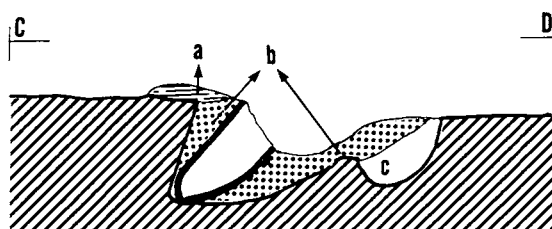
b. F II-15住居址

- a. 赤褐色土層(焼土)



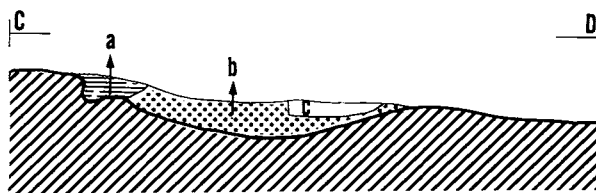
c. F II-16住居址

- a. 黄褐色細礫
- b. 赤褐色土層(焼土)
- c. 暗褐色土層
- d. 褐色土層(火山灰)
- e. 褐色土層



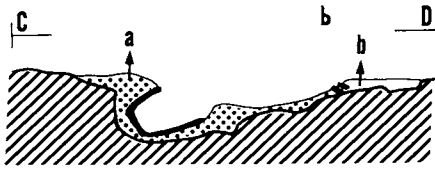
d. F II-17住居址

- a. 黄褐色細礫
- b. 赤褐色土層(焼土)
- c. 褐色土層(炭化物を含む火山灰)



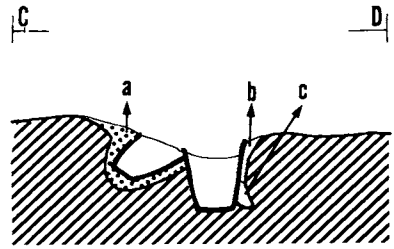
e. F II-18住居址

- a. 黄褐色細礫
- b. 赤褐色土層(焼土)
- c. 黒褐色土層(焼土を含む)



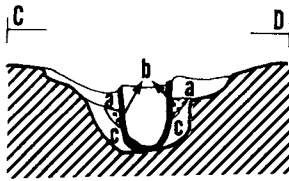
a. F II - 19住居址

- a. 赤褐色土層(焼土)
- b. 褐色土層



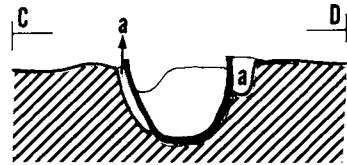
b. F III - 2住居址

- a. 赤褐色土層(焼土)
- b. 黄褐色土層(焼土を含む)
- c. 黒褐色土層(火山灰を含む)



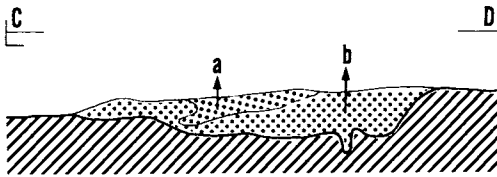
c. F III - 5住居址

- a. 暗褐色土層(炭化物を含む)
- b. 赤褐色土層(焼土)
- c. 褐色土層(よごれ火山灰)



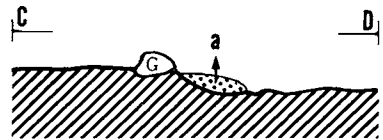
d. F III - 7住居址

- a. 明褐色土層(炭化物、焼土を含む)



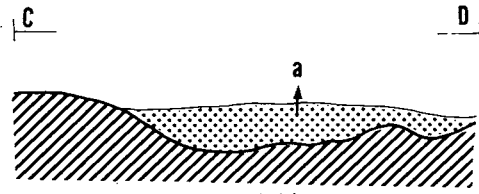
e. F III - 9住居址

- a. 赤褐色土層(焼土)
- b. 赤褐色土層(焼土)

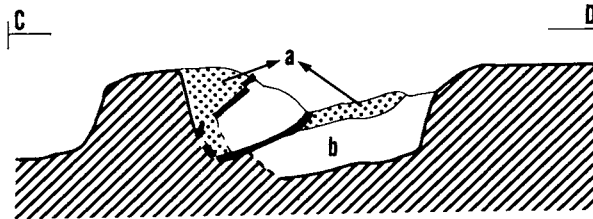


f. F III - 10住居址

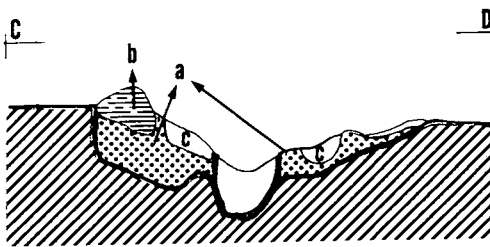
- a. 赤褐色土層(焼土)



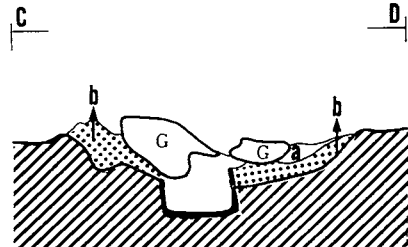
a. F IV - 4 住居址  
a. 赤褐色土層(焼土)



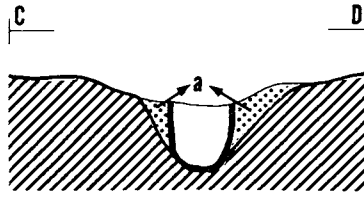
b. G II - 1 住居址  
a. 赤褐色土層(微量の炭化物を含む焼土)  
b. 褐色土層(少量の炭化物を含む火山灰)



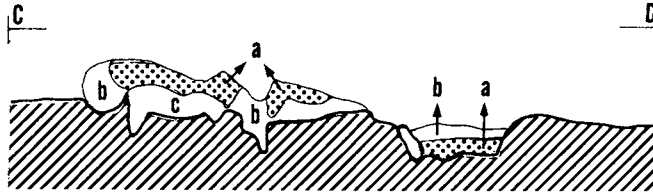
c. G II - 2 住居址  
a. 暗褐色土層  
b. 黄褐色細礫(風化をうけ砂細化)  
c. 赤褐色土層(焼土)



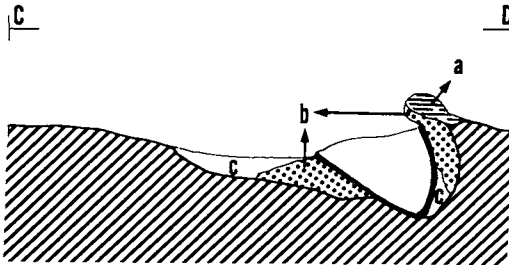
d. G II - 3 住居址  
a. 黒褐色土層(少量の炭化物を含む焼土)  
b. 赤褐色土層(焼土)



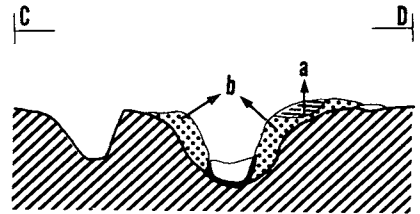
a. G II - 5 住居址  
a. 明赤褐色土層(炭化物を含む焼土)



b. G II - 7 住居址  
a. 赤褐色土層(炭化物を含む焼土)  
b. 暗褐色土層(微量の炭化物を含む)  
c. 黒褐色土層(炭化物を含む)

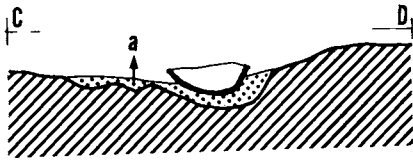


c. G II - 10 住居址  
a. 黄褐色細礫  
b. 赤褐色土層(焼土)  
c. 黒色土層

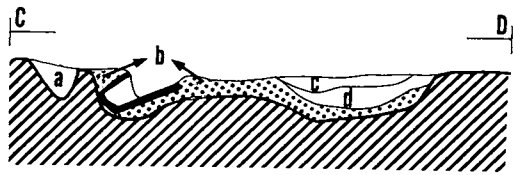


d. G II - 11 住居址  
a. 黄褐色細礫  
b. 赤褐色土層(焼土)

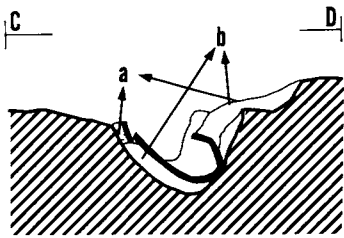




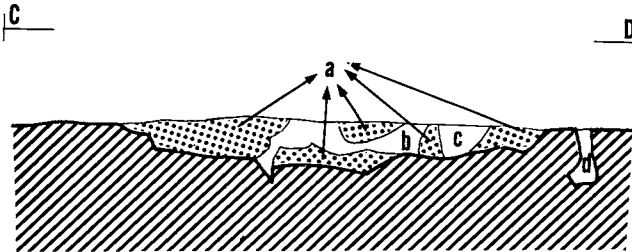
a. G II-12住居  
a. 赤褐色土層(焼土)



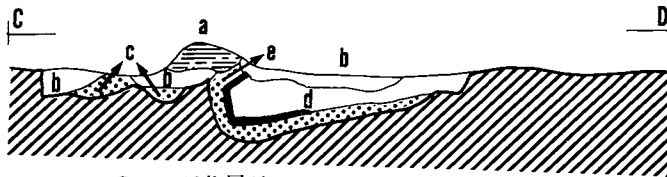
b. G II-13住居址・G II-21住居址  
a. 暗褐色土層  
b. 赤褐色土層(微量の炭化物を含む焼土)  
c. 黒色土層(微量の炭化物を含む)  
d. 褐色土層(炭化物、焼土を含む)



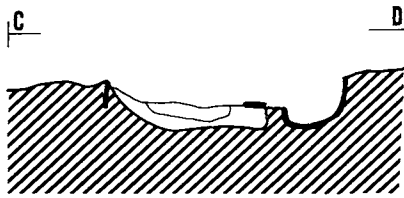
c. G II-14住居址  
a. 赤褐色土層(焼土)  
b. 明赤褐色土層(よごれ火山灰、堀り方)



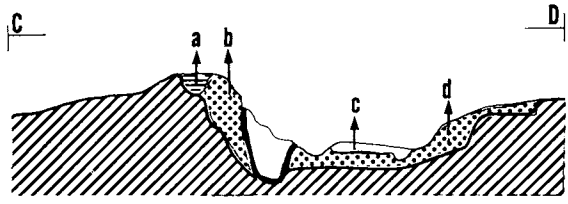
d. G II-15住居址  
a. 赤褐色土層(焼土)  
b. 明褐色土層(炭化物、焼土を含む)  
c. 明褐色土層(炭化物、焼土を含む)  
d. 黒褐色土層(クロボク)



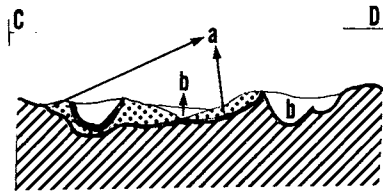
e. G II-16住居址  
a. 黄褐色細礫  
b. 褐色土層(よごれ火山灰)  
c. 赤褐色土層(焼土)  
d. 褐色土層(よごれ火山灰)  
e. 赤褐色土層(焼土)



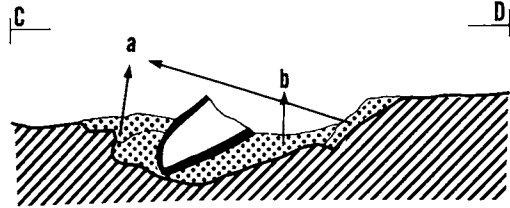
a. G II-18住居址  
土層注記なし



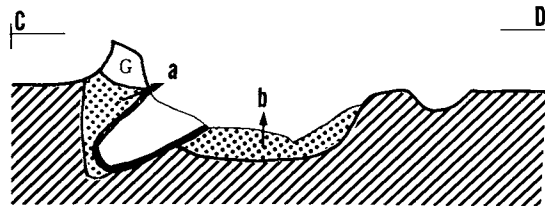
b. G II-19住居址  
a. 黄褐色細礫  
b. 赤褐色土層(焼土)  
c. 黄褐色土層(火山灰)  
d. 赤褐色土層(焼土)



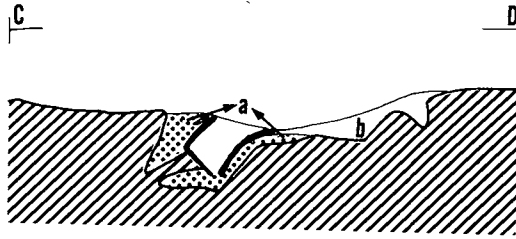
c. G II-20住居址  
a. 赤褐色土層(焼土)  
b. 褐色土層(焼土、微量の炭化物を含む)



d. H II-1住居址  
a. 赤褐色土層(焼土)  
b. 赤褐色土層(焼土)

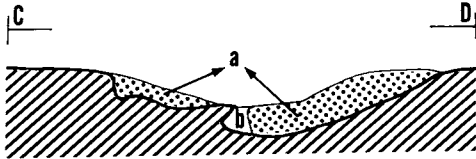


e. H II-3住居址  
a. 赤褐色土層(焼土)  
b. 褐色土層



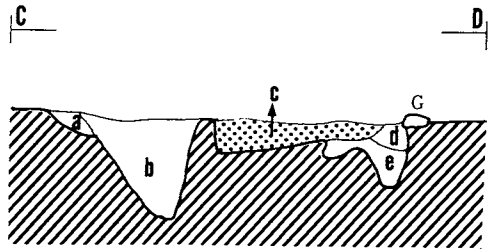
a. H II - 4 住居址

- a. 赤褐色土層(焼土)
- b. 明褐色土層(少量の炭化物混入)



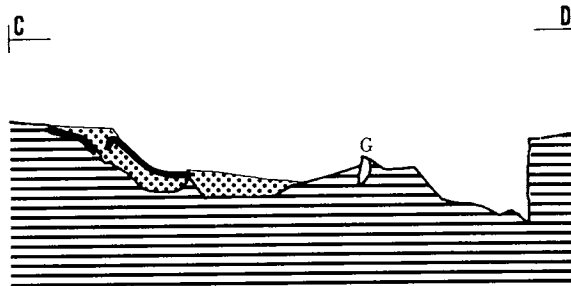
b. H II - 5 住居址

- a. 赤褐色土層(焼土)
- b. 暗褐色土層



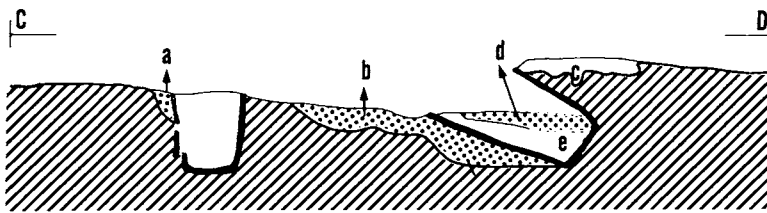
c. H II - 6 住居址

- a. 褐色土層
- b. 暗褐色土層(炭化物、焼土を含む)
- c. 赤褐色土層(焼土)
- d. 褐色土層(火山灰)
- e. 暗褐色土層



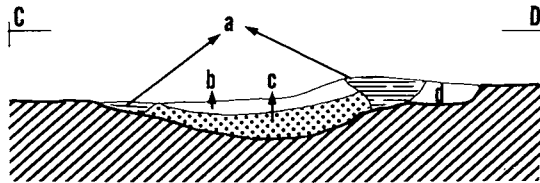
d. H II - 7 住居址

- a. 赤褐色土層(焼土)



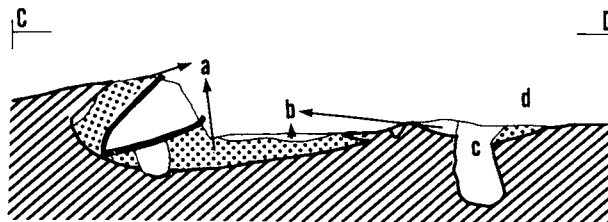
a. H II - 8 住居址

- a. 赤褐色土層(焼土)
- b. 赤褐色土層(焼土)
- c. 明褐色土層
- d. 赤褐色土層(焼土)
- e. 暗褐色土層



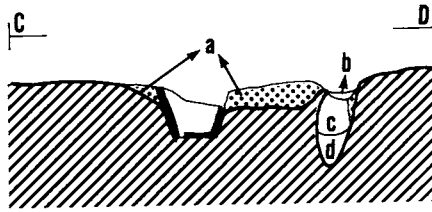
b. H II - 10 住居址

- a. 黄褐色細礫
- b. 黒褐色土層(炭化物、焼土をブロック状に含む)
- c. 赤褐色土層(焼土)
- d. 明褐色土層



c. H II - 11 住居址(1号炉)

- a. 赤褐色土層(焼土)
- b. 黒褐色土層
- c. 暗褐色土層(焼土を含むクロボク)
- d. 赤褐色土層(焼土)

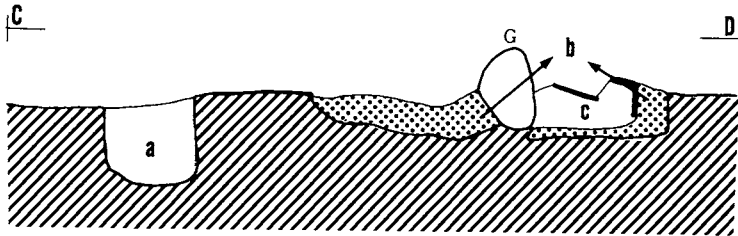


a. H II-11住居址(2号炉)

a. 赤褐色土層(焼土)

b. 暗褐色土層

c. 褐色土層(火山灰)

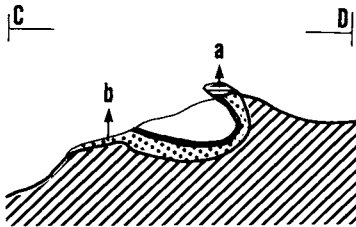


b. H II-12住居址

a. 黒褐色土層(微量の焼土を含む)

b. 赤褐色土層(焼土)

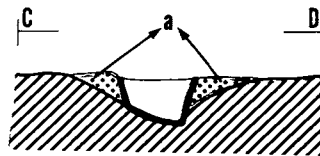
c. 褐色土層



c. H II-13住居址

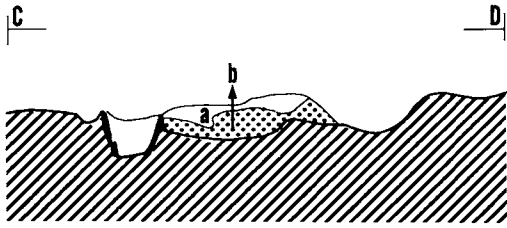
a. 黄褐色細礫

b. 赤褐色土層(焼土)

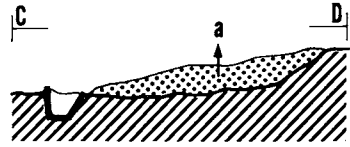


d. H II-14住居址

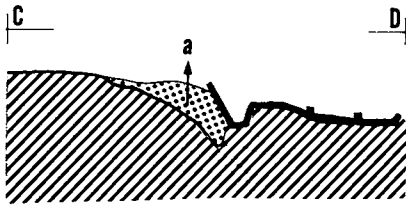
a. 赤褐色土層(焼土)



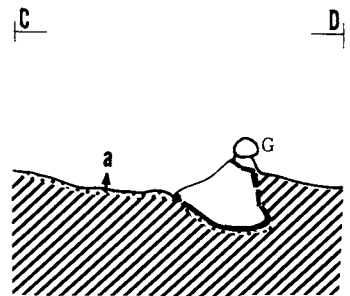
a. I II - 3 住居址  
 a. 黑褐色土層  
 b. 赤褐色土層(燒土)



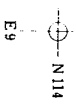
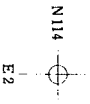
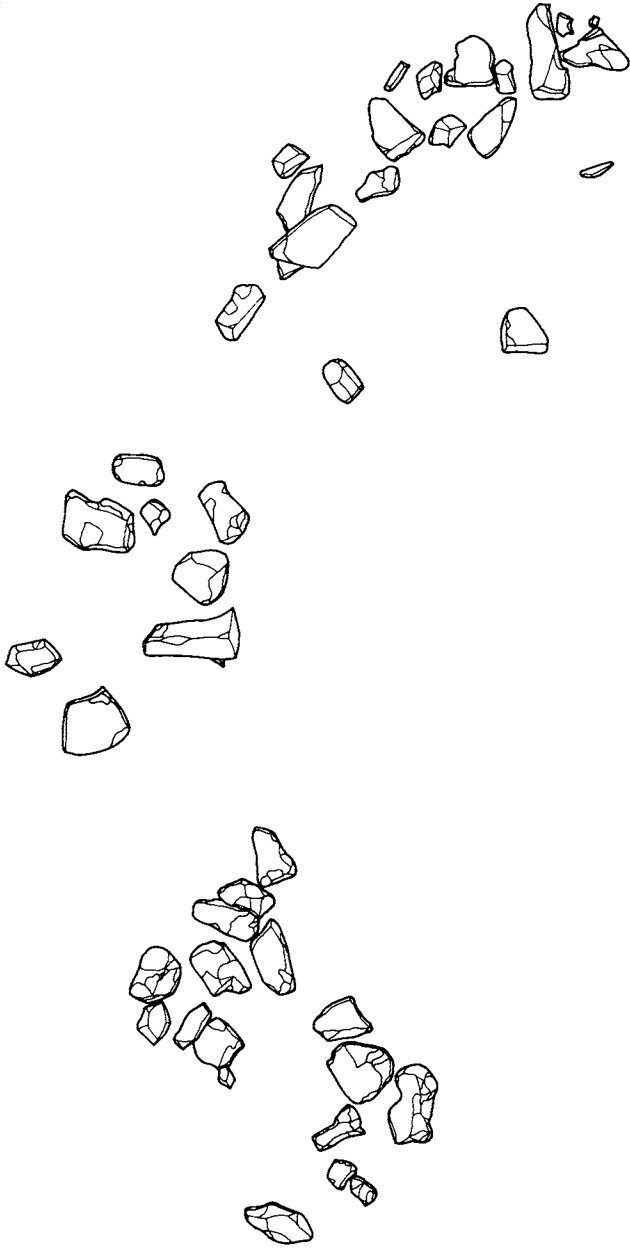
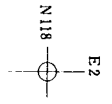
b. I II - 4 住居址  
 a. 赤褐色土層(燒土)



c. I II - 5 住居址  
 a. 赤褐色土層(燒土)



d. I II - 7 住居址(燒土)  
 a. 赤褐色土層(燒土)

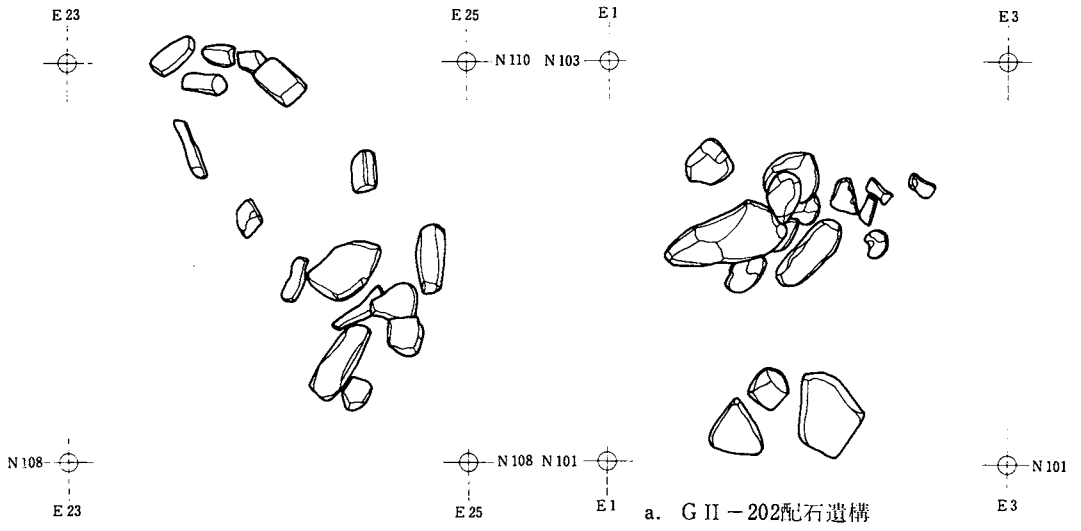


G II - 2016 卵石遗物

2

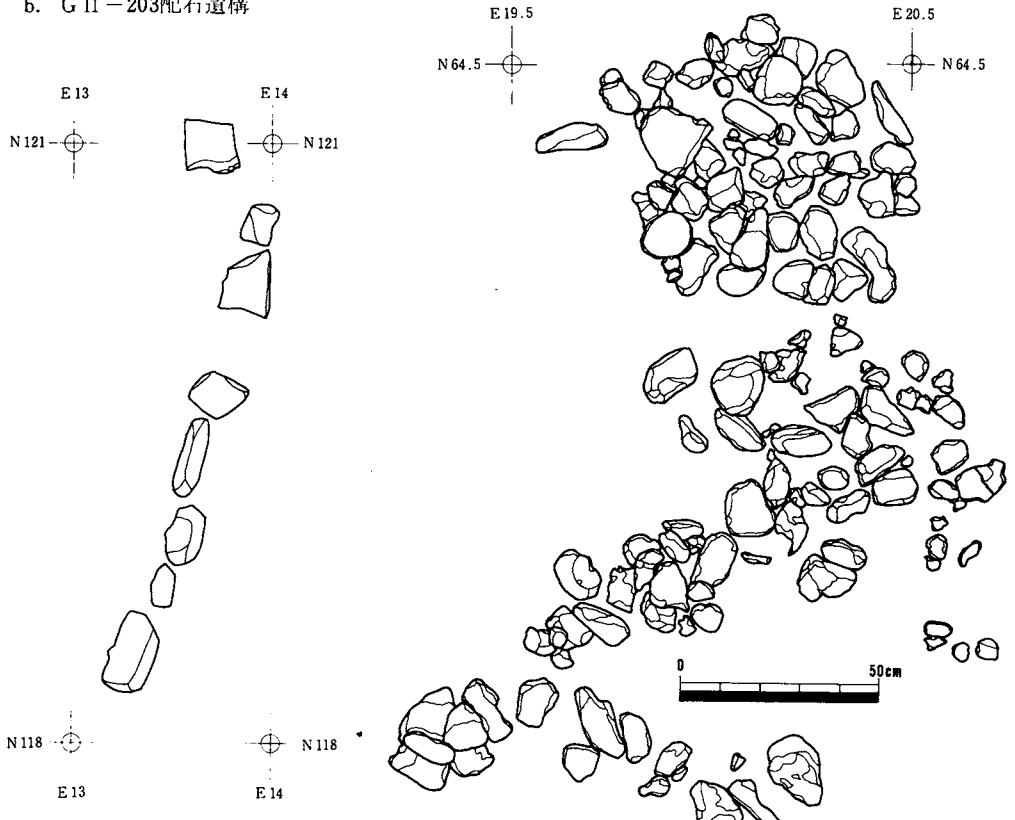
图版115

比例尺  $\frac{1}{40}$



b. G II - 203配石遺構

a. G II - 202配石遺構

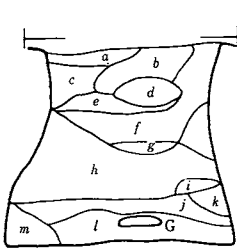


c. G II - 204配石遺構

d. H II - 201配石遺構

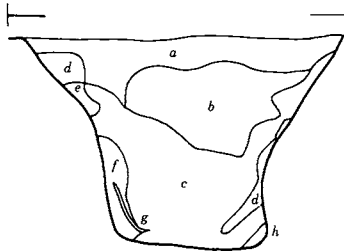
圖版116





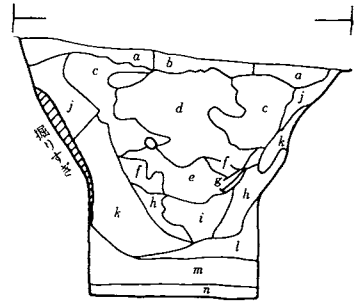
a. B IV-51フラスコ形ピット

- a. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- b. 暗褐色土層(含、炭化物)
- c. 褐色土層
- d. 褐色土層(含、焼土)
- e. 褐色土層
- f. 褐色土層
- g. 褐色土層(含、炭化物)
- h. 黄褐色土層(汚れ火山灰、含、炭化物)
- i. 黄褐色土層(火山灰)
- j. 黄橙色土層(汚れ火山灰、含、炭化物)
- k. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- l. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- m. 黄褐色土層(汚れ火山灰)



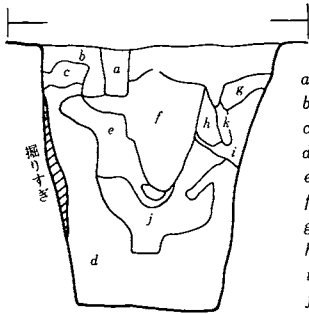
b. B IV-52フラスコ形ピット

- a. 暗褐色土層(含、炭化物)
- b. 黒褐色土層(含、焼土)
- c. 暗褐色土層(含、焼土)
- d. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- e. 褐色土層
- f. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- g. 暗褐色土層
- h. 黄褐色土層(火山灰)



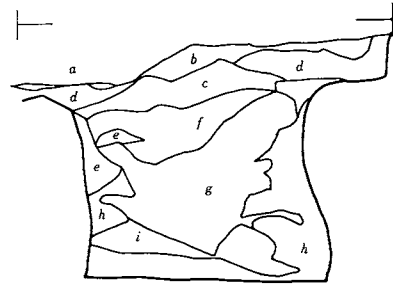
c. B IV-53ビーカー形ピット

- a. 褐色土層
- b. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- c. 褐色土層(含、焼土、炭化物)
- d. 黒褐色土層(含、焼土、炭化物)
- e. 暗褐色土層
- f. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- g. 黄橙色土層(火山灰)
- h. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- i. 褐色土層(含、焼土、炭化物)
- j. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- k. 黄橙色土層(火山灰)
- l. 暗褐色土層(含、炭化物)
- m. 黄橙色土層(火山灰)
- n. 黄橙色土層(火山灰)



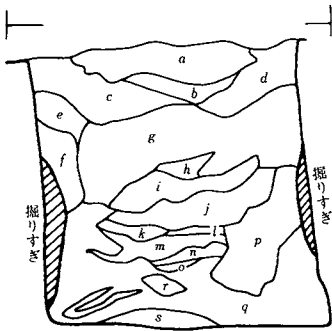
d. B IV-54ビーカー形ピット

- a. 褐色土層
- b. 暗褐色土層(含、焼土)
- c. 暗褐色土層
- d. 黄褐色土層(火山灰)
- e. 暗褐色土層
- f. 黒褐色土層(含、焼土)
- g. 黒褐色土層(含、焼土、炭化物)
- h. 黒褐色土層(含、焼土)
- i. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- j. 黒褐色土層
- k. 黄褐色土層(火山灰)



e. C III-51フラスコ形ピット

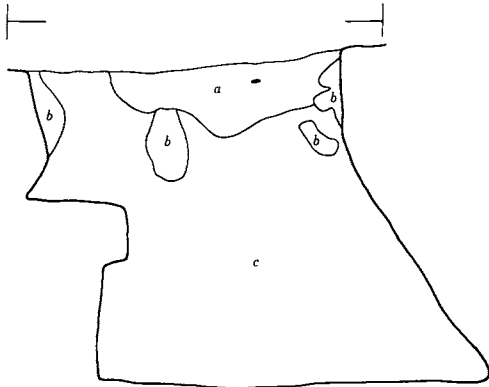
- a. 暗褐色土層
- b. 暗褐色土層(含、焼土)
- c. 暗褐色土層(含、炭化物)
- d. 黒褐色土層(含、焼土、炭化物)
- e. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- f. 黒褐色土層
- g. 黒褐色土層
- h. 黄橙色土層(汚れ火山灰)
- i. 黄褐色土層(汚れ火山灰)



f. C III-52フラスコ形ピット

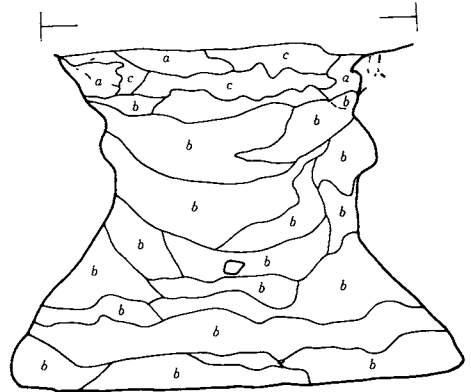
- a. 黒褐色土層(含、焼土、炭化物)
- b. 黄褐色土層(含、焼土、炭化物)
- c. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- d. 褐色土層(含、焼土、炭化物)
- e. 黄褐色土層(火山灰)
- f. 黄褐色土層(火山灰)
- g. 黄褐色土層(火山灰)
- h. 黄褐色土層(火山灰)
- i. 黄褐色土層(含、火山灰、焼土、炭化物)
- j. 明褐色土層(含、炭化物)
- k. 明褐色土層
- l. 明黄褐色土層(含、火山灰、焼土、炭化物)
- m. 黄褐色土層

- n. 黄褐色土層
- o. 褐色土層
- p. 明褐色土層(含、汚れ火山灰、炭化物)
- q. 明黄褐色土層(汚れ火山灰)
- r. 暗褐色土層
- s. 黄褐色土層(含、炭化物)



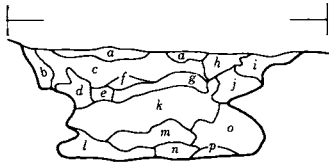
a. C III-54 フラスコ形ピット

- a. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- b. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- c. 黄橙色土層(火山灰)



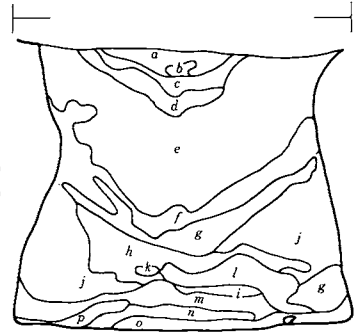
b. C III-56 フラスコ形ピット

- a. 褐色土層
- b. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- c. 黄橙色土層



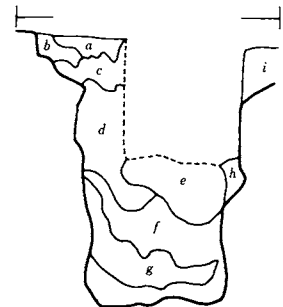
c. C III-57 フラスコ形ピット

- a. 褐色土層(含、焼土、炭化物)
- b. 黄褐色土層(含、焼土、炭化物)
- c. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- d. 褐色土層(汚れ火山灰)
- e. 明褐色土層
- f. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- g. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- h. 黄褐色土層(含、焼土、炭化物)
- i. 黄褐色土層(含、焼土、炭化物)
- j. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- k. 黄橙色土層(含、焼土、炭化物)
- l. 黒褐色土層(含、焼土、炭化物)
- m. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- n. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- o. 褐色土層(含、焼土)
- p. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- q. 明褐色土層



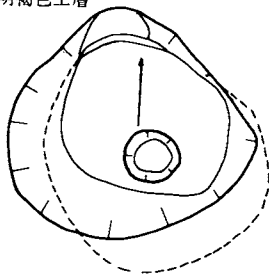
d. C III-59 フラスコ形ピット

- a. 黄橙色土層(火山灰)
- b. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- c. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- d. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- e. 褐色土層(含、焼土、炭化物)
- f. 黄橙色土層(火山灰)
- g. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- h. 暗褐色土層
- i. 黄橙色土層(火山灰)
- j. 黄橙色土層(火山灰)
- k. 黄橙色土層(火山灰)
- l. 褐色土層
- m. 褐色土層
- n. 褐色土層(含、焼土、炭化物)
- o. 褐色土層(含、焼土、炭化物)
- p. 黄橙色土層(火山灰)
- q. 褐色土層

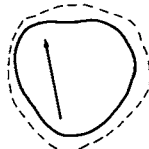


g. C IV-52 ビーカー形ピット

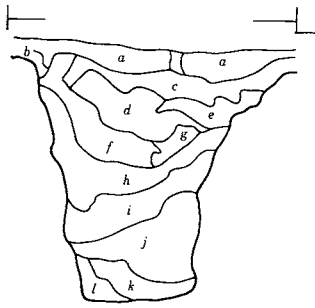
- a. 黄褐色土層(火山灰)
- b. 褐色土層
- c. 明褐色土層(含、焼土)
- d. 黒褐色土層(含、焼土)
- e. 黒褐色土層
- f. 褐色土層
- g. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- h. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- i. 暗褐色土層



e. C III-58 フラスコ形ピット



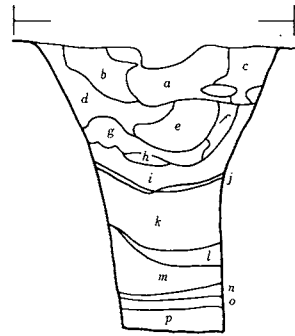
f. C III-60 フラスコ形ピット



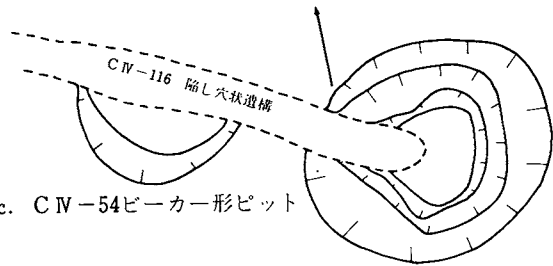
a. C IV-53ビーカー形ピット

- a. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- b. 明褐色土層(汚れ火山灰)
- c. 黒褐色土層(含、焼土)
- d. 黒色土層(クロボク)
- e. 褐色土層
- f. 黒色土層(クロボク)
- g. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- h. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- i. 明黄褐色土層(火山灰)
- j. 明黄褐色土層(火山灰)
- k. 明褐色土層
- l. 黒褐色土層

- a. 黒褐色土層(含、焼土、炭化物)
- b. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- c. 褐色土層
- d. 暗褐色土層(含、炭化物)
- e. 褐色土層
- f. 褐色土層
- g. 黒色土層
- h. 褐褐色土層
- i. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- j. 黒褐色土層
- k. 黄色土層(汚れ火山灰)
- l. 黒褐色土層(クロボク)
- m. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- n. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- o. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- p. 黄褐色土層(汚れ火山灰)

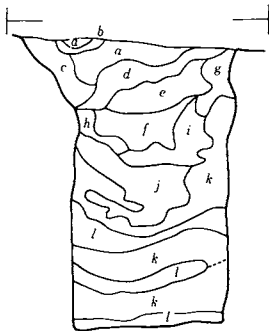


b. C IV-56ビーカー形ピット



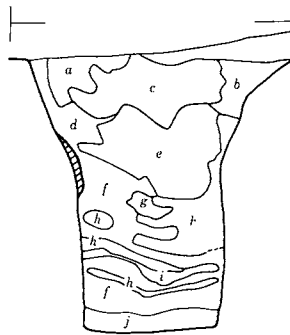
c. C IV-54ビーカー形ピット

d. C IV-55ビーカー形ピット



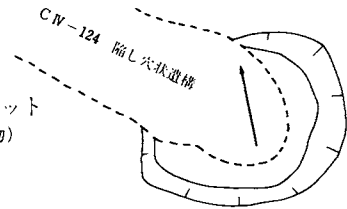
e. C IV-57ビーカー形ピット

- a. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- b. 黄褐色土層
- c. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- d. 黒褐色土層(含、焼土、炭化物)
- e. 黒色土層(クロボク)
- f. 黒色土層(クロボク)
- g. 黄褐色土層(含、焼土、炭化物)
- h. 暗褐色土層
- i. 褐色土層
- j. 暗褐色土層
- k. 明黄褐色土層(火山灰)
- l. 暗褐色土層

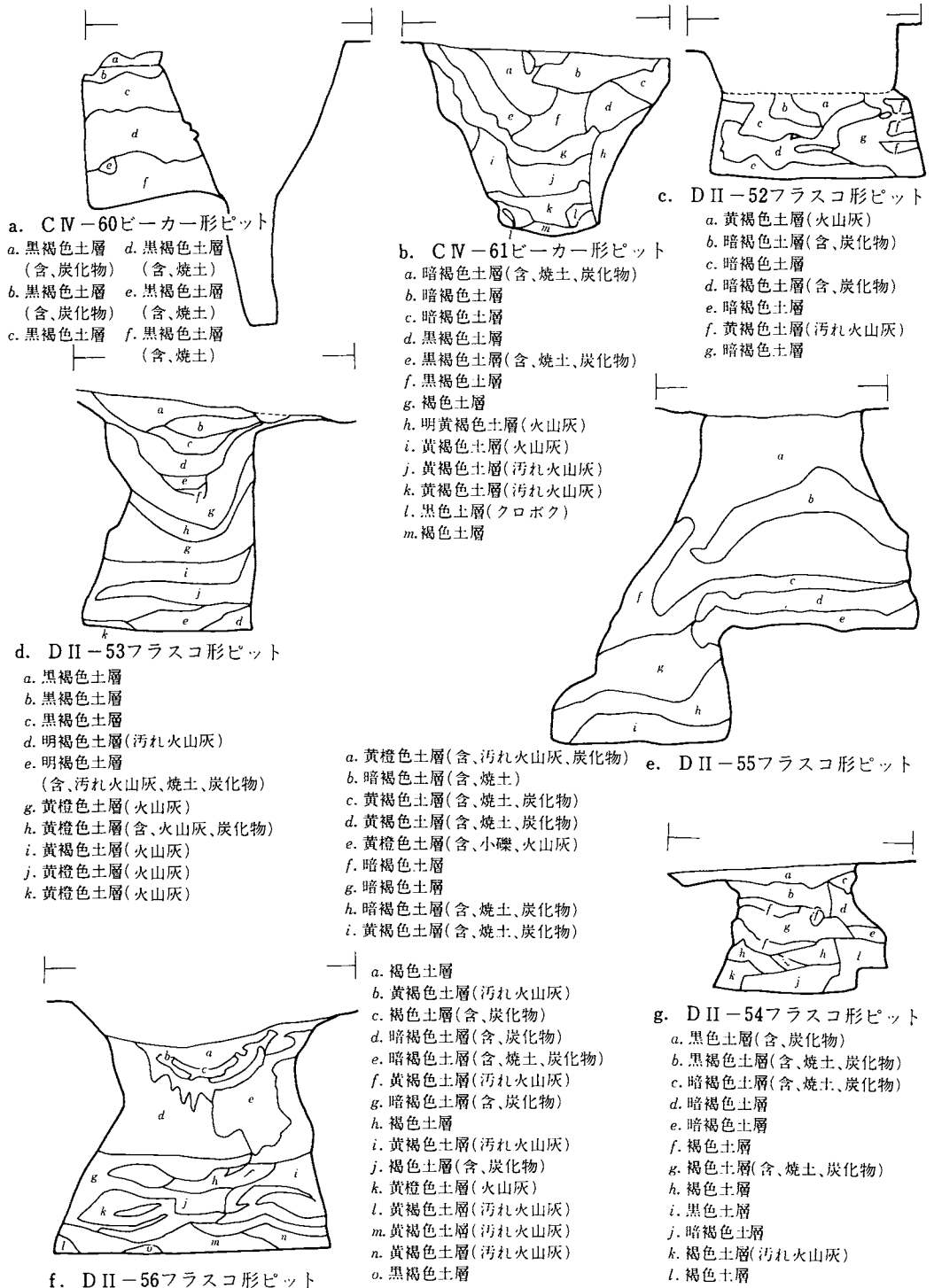


f. C IV-58ビーカー形ピット

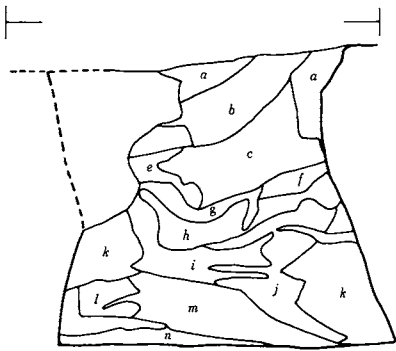
- a. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- b. 褐色土層(含、焼土、炭化物)
- c. 暗褐色土層(含、焼土)
- d. 褐色土層
- e. 暗褐色土層(含、焼土)
- f. 褐色土層
- g. 暗褐色土層(含、炭化物)
- h. 黄褐色土層(火山灰)
- i. 褐色土層(含、炭化物)
- j. 黄褐色土層(汚れ火山灰)



g. C IV-59ビーカー形ピット

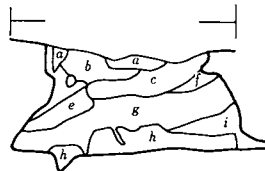


図版 120



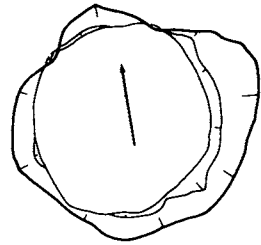
a. D II-57フラスコ形ピット

- a. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- b. 明褐色土層(含、炭化物)
- c. 暗褐色土層(含、炭化物)
- d. 褐色土層
- e. 褐色土層(含、炭化物)
- f. 褐色土層
- g. 黒褐色土層(含、炭化物)
- h. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- i. 褐色土層(含、炭化物)
- j. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- k. 黄橙色土層(火山灰)
- l. 暗褐色土層(含、炭化物)
- m. 暗褐色土層
- n. 暗赤褐色層(含、焼土)

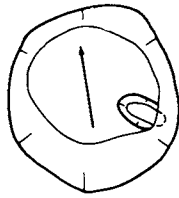


b. D II-58フラスコ形ピット

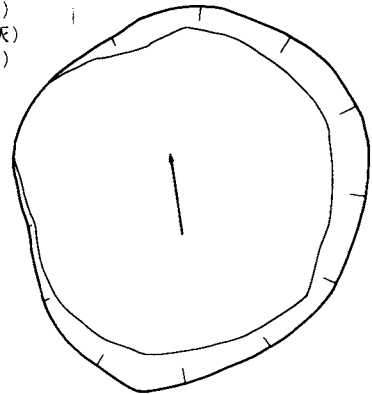
- a. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- b. 暗褐色土層(含、焼土)
- c. 褐色土層(含、焼土、炭化物)
- d. 褐色土層
- e. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- f. 暗褐色土層
- g. 黒褐色土層(含、炭化物)
- h. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- i. 暗褐色土層(含、炭化物)



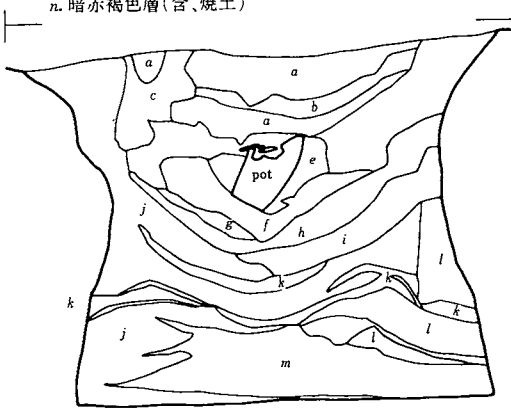
c. D II-59フラスコ形ピット



d. D II-63ピーカー形ピット

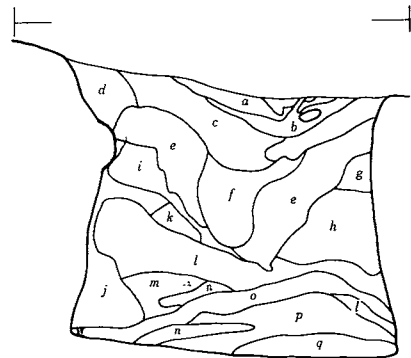


e. D II-62ピーカー形ピット



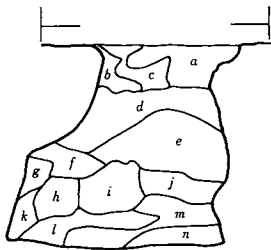
f. D II-61フラスコ形ピット

- a. 黄橙色土層(火山灰)
- b. 褐色土層
- c. 褐色土層(火山灰が優占する)
- d. 暗褐色土層(含、炭化物)
- e. 褐色土層(含、炭化物)
- f. 暗褐色土層(含、炭化物)
- g. 黒褐色土層(クロボクが優占する)
- h. 黒褐色土層(含、炭化物)
- i. 褐色土層(火山灰が優占する)
- j. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- k. 褐色土層(含、炭化物)
- l. 黄橙色土層(火山灰)
- m. 暗褐色土層(含、炭化物)



g. D III-51フラスコ形ピット

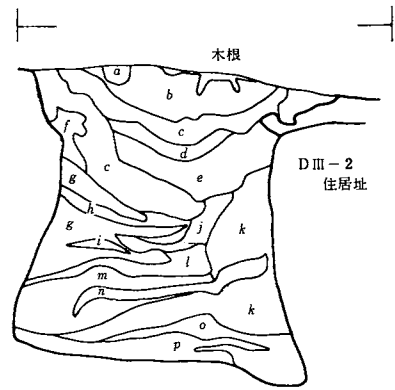
- a. 黄橙色土層(火山灰)
- b. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- c. 褐色土層(含、炭化物)
- d. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- e. 褐色土層(含、炭化物)
- f. 褐色土層(焼土、炭化物)
- g. 褐色土層
- h. 褐色土層
- i. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- j. 黄橙色土層(火山灰)
- k. 黒色土層
- l. 黄褐色土層(火山灰)
- m. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- n. 黒褐色土層
- o. 黒褐色土層
- p. 褐色土層(含、炭化物)
- q. 暗褐色土層(含、炭化物)



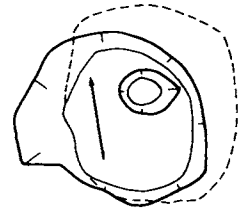
a. D III-52 フラスコ形ピット

- a. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- b. 褐色土層(含、炭化物)
- c. 暗褐色土層(含、炭化物)
- d. 暗褐色土層(含、炭化物)
- e. 暗褐色土層(含、炭化物)
- f. 暗褐色土層(含、炭化物)
- g. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- h. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- i. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- j. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- k. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- l. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- m. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- n. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)

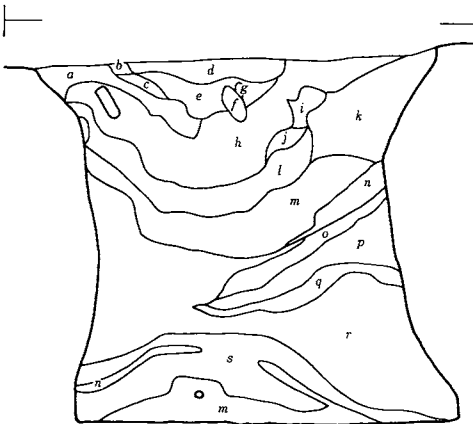
- a. 褐色土層
- b. 黄、橙色土層(火山灰)
- c. 暗褐色土層(含、炭化物)
- d. 褐色土層(含、焼土、炭化物)
- e. 褐色土層
- f. 明褐色土層(含、炭化物)
- g. 黄橙色土層(火山灰)
- h. 暗褐色土層
- i. 褐色土層
- j. 褐色土層(含、炭化物)
- k. 褐色土層
- l. 褐色土層(含、焼土、炭化物)
- m. 褐色土層(汚れ火山灰)
- n. 明褐色土層(含、炭化物)
- o. 明褐色土層
- p. 褐色土層
- q. 褐色土層(含、炭化物)



b. D III-53 フラスコ形ピット

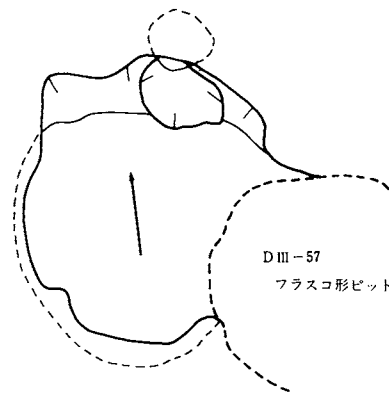


c. D III-54 フラスコ形ピット



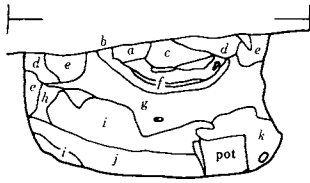
d. D III-55 フラスコ形ピット

- a. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- b. 褐色土層(含、炭化物)
- c. 黒褐色土層
- d. 黒褐色土層(含、焼土)
- e. 褐色土層(含、焼土)
- f. 褐色土層(火山灰)
- g. 暗褐色土層
- h. 褐色土層(少量の炭化物を含む火山灰)
- i. 暗褐色土層(含、炭化物)
- j. 褐色土層(含、炭化物)
- k. 暗褐色土層(含、炭化物)
- l. 褐色土層(火山灰)
- m. 褐色土層
- n. 褐色土層(火山灰)
- o. 褐色土層(含、焼土)
- p. 褐色土層(火山灰)
- q. 黒褐色土層
- r. 黄褐色土層(火山灰)
- s. 黒褐色土層



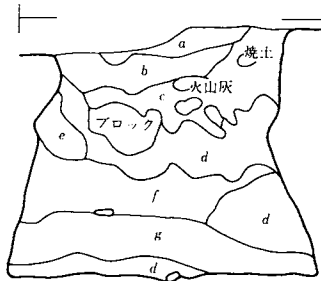
e. D III-56 フラスコ形ピット

D III-57  
フラスコ形ピット



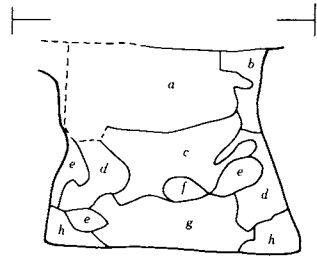
a. D III-57フラスコ形ピット

- a. 暗褐色土層(含、炭化物)
- b. 褐色土層(含、炭化物)
- c. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- d. 褐色土層(含、焼土、炭化物)
- e. 黄褐色土層(火山灰)
- f. 暗赤褐色土層(焼土)
- g. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- h. 黄褐色土層(汚れ火山灰、焼土、炭化物)
- i. 黄褐色土層(火山灰)
- j. 黒褐色土層(含、炭化物)
- k. 暗褐色土層(含、炭化物)



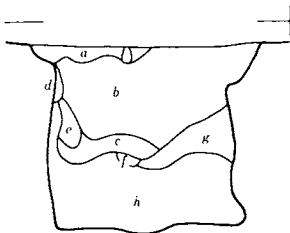
b. D III-60フラスコ形ピット

- a. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- b. 褐色土層(含、焼土、炭化物)
- c. 褐色土層(含、焼土、火山灰、炭化物)
- d. 黄橙色土層(火山灰)
- e. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- f. 黒褐色土層(含、焼土、火山灰)
- g. 暗褐色土層



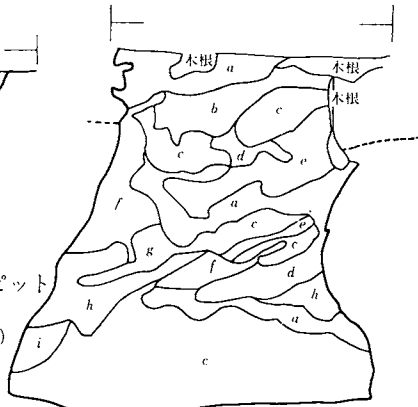
c. D III-61フラスコ形ピット

- a. 黄橙色土層(火山灰)
- b. 暗褐色土層
- c. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- d. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- e. 黄褐色土層(火山灰)
- f. 黒褐色土層(含、焼土、炭化物)
- g. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- h. 黄褐色土層(汚れ火山灰)



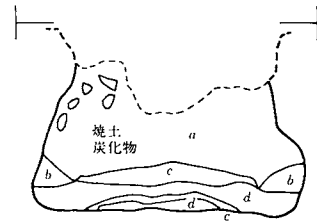
d. D III-62フラスコ形ピット

- a. 暗褐色土層
- b. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- c. 褐色土層
- d. 黄橙色土層(火山灰)
- e. 黄橙色土層(火山灰)
- f. 褐色土層
- g. 暗褐色土層(含、炭化物)
- h. 褐色土層



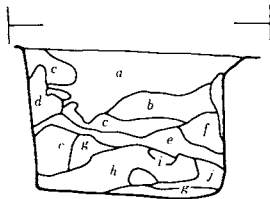
e. D III-63フラスコ形ピット

- a. 明褐色土層(汚れ火山灰)
- b. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- c. 黄橙色土層(火山灰)
- d. 黄橙色土層(火山灰)
- e. 暗黄褐色土層(含、焼土、炭化物)
- f. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- g. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- h. 暗褐色土層
- i. 暗褐色土層(火山灰が優占)



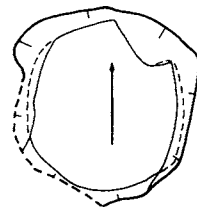
f. D III-64フラスコ形ピット

- a. 黄橙色土層(含、火山灰、焼土、炭化物のブロック)
- b. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- c. 黄褐色土層(含、焼土、炭化物)
- d. 黄橙色土層(含、焼土、炭化物)

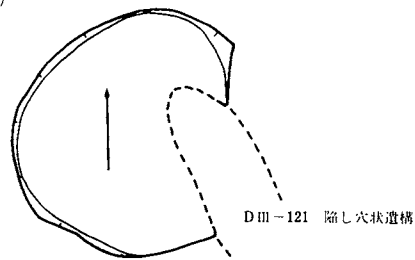


h. D III-68フラスコ形ピット

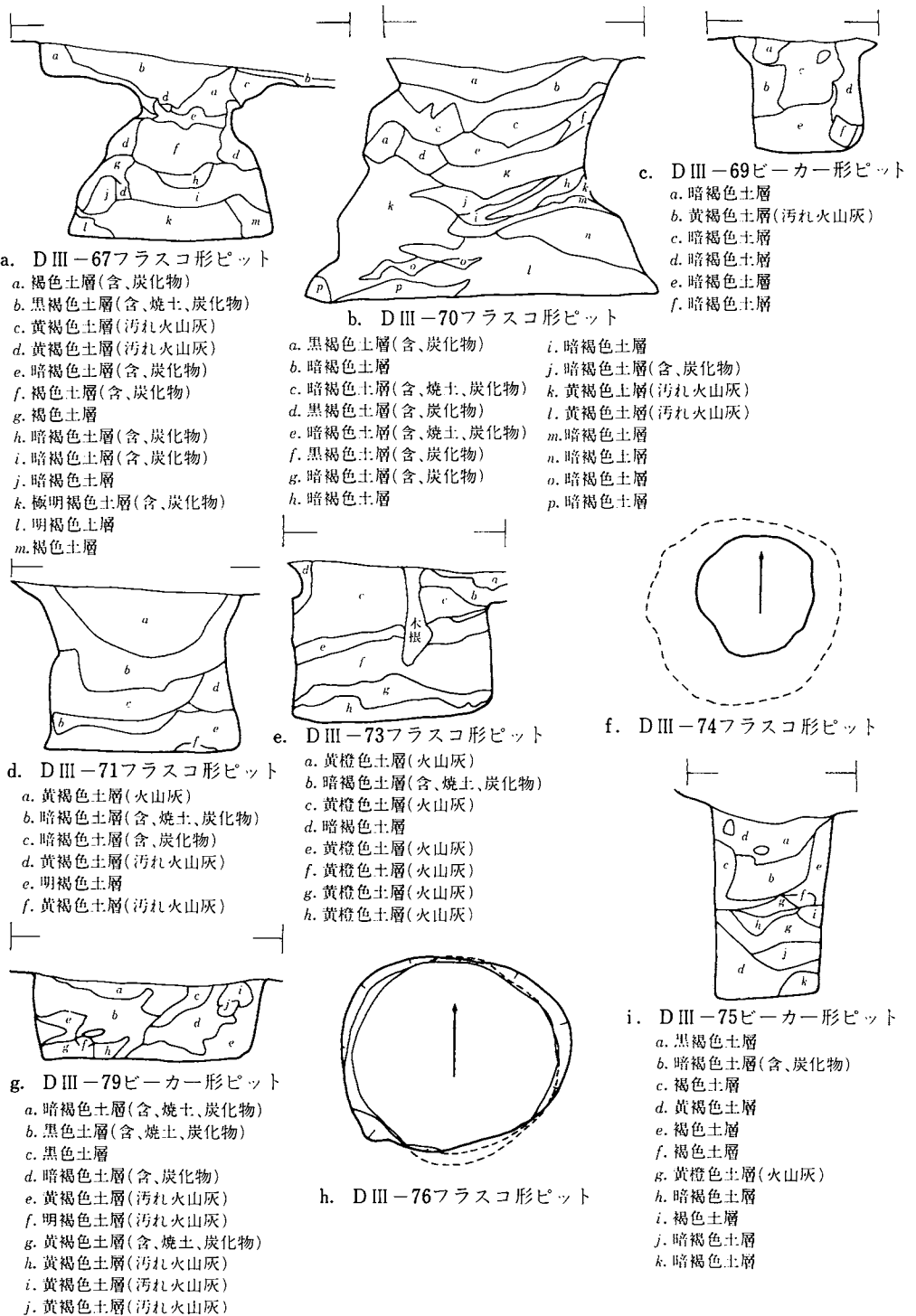
- a. 黒褐色土層(含、焼土、炭化物)
- b. 褐色土層(含、炭化物)
- c. 黄橙色土層(火山灰)
- d. 黄橙色土層(火山灰)
- e. 黒褐色土層(含、炭化物)
- f. 暗褐色土層(含、炭化物)
- g. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- h. 暗褐色土層
- i. 褐色土層(含、炭化物)
- j. 暗褐色土層



g. D III-65フラスコ形ピット

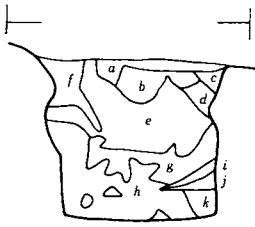


i. D III-66ピーカー形ピット



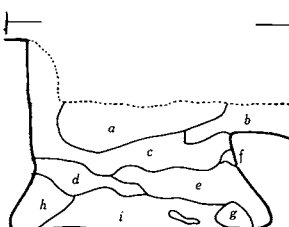
図版124





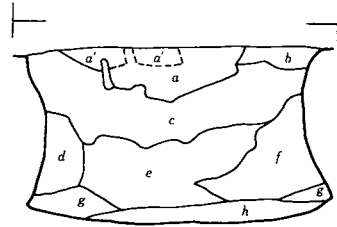
a. D III-82ピーカー形ピット

- a. 黒色土層(クロボク)
- b. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- c. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- d. 褐色土層
- e. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- f. 褐色土層
- g. 黄褐色土層(火山灰)
- h. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- i. 黄褐色土層(火山灰)
- j. 黄褐色土層(火山灰)
- k. 黄褐色土層(汚れ火山灰)



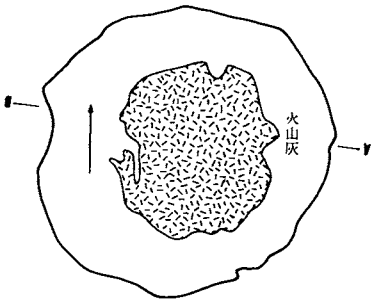
b. D III-83フラスコ形ピット

- a. 褐色土層
- b. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- c. 暗褐色土層
- d. 暗褐色土層
- e. 暗褐色土層
- f. 黄褐色土層(火山灰)
- g. 褐色土層(含、炭化物)
- i. 黄褐色土層(火山灰)

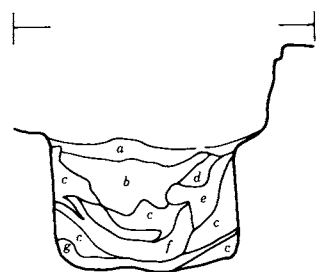


c. D IV-52フラスコ形ピット

- a. 黄褐色土層(汚れ火山灰)  
(a' 黄褐色火山灰)
- b. 暗褐色土層
- c. 黒褐色土層(含、焼土、炭化物)
- d. 褐色土層
- e. 暗褐色土層(含、炭化物)
- f. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- g. 暗褐色土層
- h. 暗褐色土層(含、炭化物)

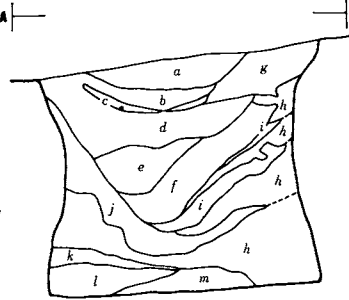


d. D IV-51フラスコ形ピット



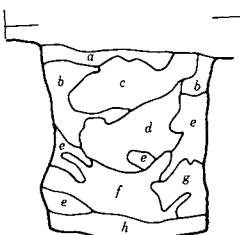
f. D IV-53ピーカー形ピット

- a. 褐色土層
- b. 黒褐色土層(含、焼土)
- c. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- d. 褐色土層
- e. 褐色土層
- f. 褐色土層
- g. 褐色土層(含、焼土)



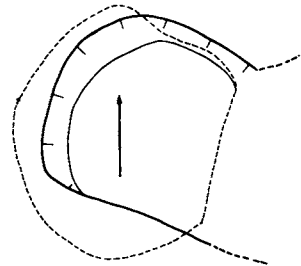
e. D IV-51フラスコ形ピット

- a. 黄褐色土層
- b. 黒褐色土層
- c. 黒色土層(含、炭化物)
- d. 暗褐色土層(含、炭化物)
- e. 暗褐色土層(含、炭化物)
- f. 暗褐色土層
- g. 暗褐色土層
- h. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- i. 黒褐色土層
- j. 褐色土層
- k. 褐色土層
- l. 褐色土層
- m. 褐色土層

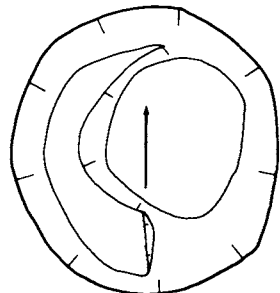


g. D IV-53ピーカー形ピット

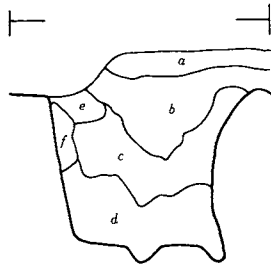
- a. 褐色土層(含、炭化物)
- b. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- c. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- d. 黒褐色土層(含、炭化物)
- e. 褐色土層
- f. 黒褐色土層(含、炭化物)
- g. 黄褐色土層
- h. 黒褐色土層(含、炭化物)



h. D IV-54フラスコ形ピット

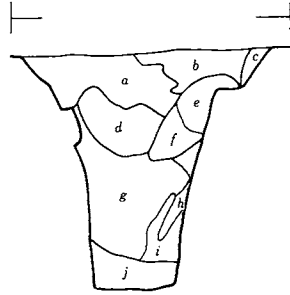


i. D IV-61ピーカー形ピット



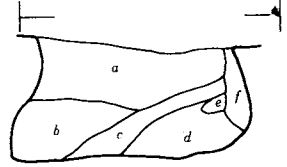
a. D IV-56ビーカー形ピット

- a. 黒褐色土層(含、焼土、炭化物)
- b. 黒褐色土層(含、焼土、炭化物)
- c. 暗褐色土層
- d. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- e. 暗褐色土層
- f. 黄褐色土層(汚れ火山灰)



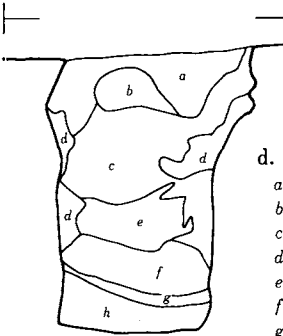
b. D IV-57ビーカー形ピット

- a. 黒褐色土層(含、焼土)
- b. 黒褐色土層
- c. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- d. 黒褐色土層
- e. 褐色土層
- f. 褐色土層(e層に似る)
- g. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- h. 黄褐色土層(火山灰)
- i. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- j. 黄褐色土層(含、炭化物)



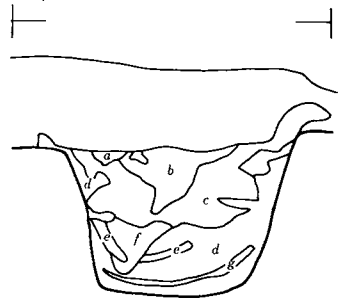
c. D IV-59フラスコ形ピット

- a. 褐色土層(含、焼土、炭化物)
- b. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- c. 暗褐色土層
- d. 黄褐色土層(火山灰)
- e. 暗褐色土層
- f. 褐色土層



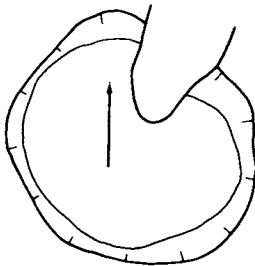
d. D IV-58ビーカー形ピット

- a. 黒褐色土層
- b. 黒褐色土層(含、焼土、炭化物)
- c. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- d. 黒褐色土層
- e. 黒褐色土層(クロボク)
- f. 黄褐色土層
- g. 黒色炭化物層
- h. 暗褐色土層(含、炭化物)



e. D IV-60ビーカー形ピット

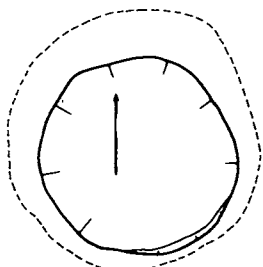
- a. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- b. 黒色土層(クロボク)
- c. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- d. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- e. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- f. 褐色土層
- g. 黒褐色土層



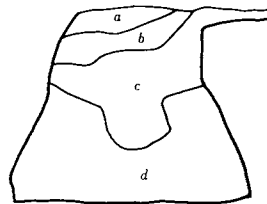
f. E II-51ビーカー形ピット

i. E II-53フラスコ形ピット

- a. 明褐色土層
- b. 暗褐色土層
- c. 暗褐色土層
- d. 明褐色土層

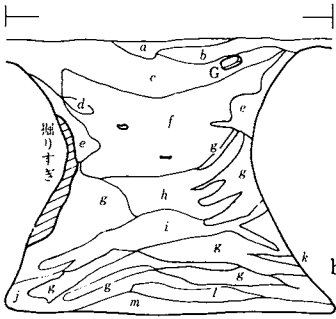


h. E II-52フラスコ形ピット



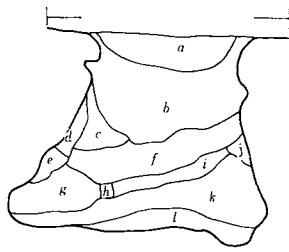
g. E II-54フラスコ形ピット

- a. 暗褐色土層(含、炭化物)
- b. 褐色土層
- c. 褐色土層
- d. 明褐色土層
- e. 黒褐色土層
- f. 褐色土層
- g. 黒褐色土層(含、炭化物)
- h. 黒褐色土層(含、焼土、炭化物)



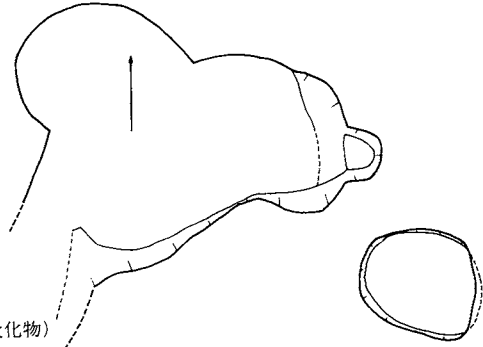
a. E II-56 フラスコ形ピット

- |                   |                 |
|-------------------|-----------------|
| a. 暗褐色土層(含、炭化物)   | g. 黄褐色土層(汚れ火山灰) |
| b. 明褐色土層(含、炭化物)   | h. 黄褐色土層(含、炭化物) |
| c. 褐色土層(含、焼土)     | i. 褐色土層(含、炭化物)  |
| d. 明褐色土層          | j. 褐色土層         |
| e. 橙色土層(含、焼土、炭化物) | k. 暗褐色土層        |
| f. 暗褐色土層(含、炭化物)   | l. 明褐色土層        |
|                   | m. 褐色土層         |

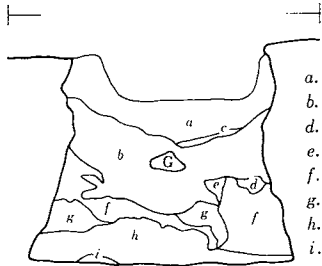


b. E II-58 フラスコ形ピット

- |                    |
|--------------------|
| a. 褐色土層(含、焼土、炭化物)  |
| b. 暗褐色土層(含、炭化物)    |
| c. 黒褐色土層(含、焼土、炭化物) |
| d. 褐色土層(含、炭化物)     |
| e. 褐色土層            |
| f. 極暗褐色土層          |
| g. 暗褐色土層           |
| h. 褐色土層            |
| i. 暗褐色土層(含、焼土)     |
| j. 黄褐色土層           |
| k. 褐色土層(含、焼土、炭化物)  |
| l. 黒褐色土層           |

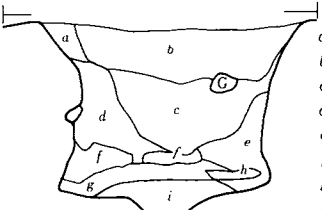


d. E II-60 フラスコ形ピット



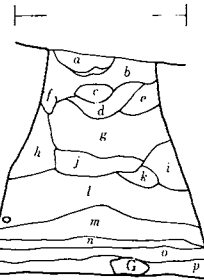
c. E II-59 フラスコ形ピット

- |                    |
|--------------------|
| a. 黒褐色土層(含、焼土)     |
| b. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物) |
| d. 明褐色土層           |
| e. 暗褐色土層           |
| f. 黄褐色土層(汚れ火山灰)    |
| g. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物) |
| h. 暗褐色土層(含、炭化物)    |
| i. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物) |



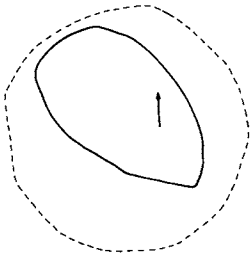
e. E II-64 フラスコ形ピット

- |                    |
|--------------------|
| a. 暗褐色土層           |
| b. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物) |
| c. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物) |
| d. 褐色土層(含、炭化物)     |
| e. 褐色土層            |
| f. 褐色土層(汚れ火山灰)     |
| g. 暗褐色土層           |
| h. 褐色土層            |
| i. 褐色土層(含、炭化物)     |

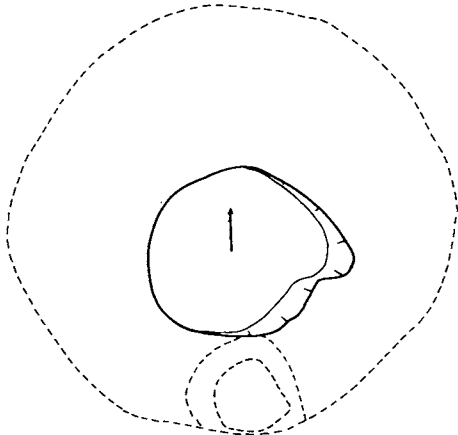
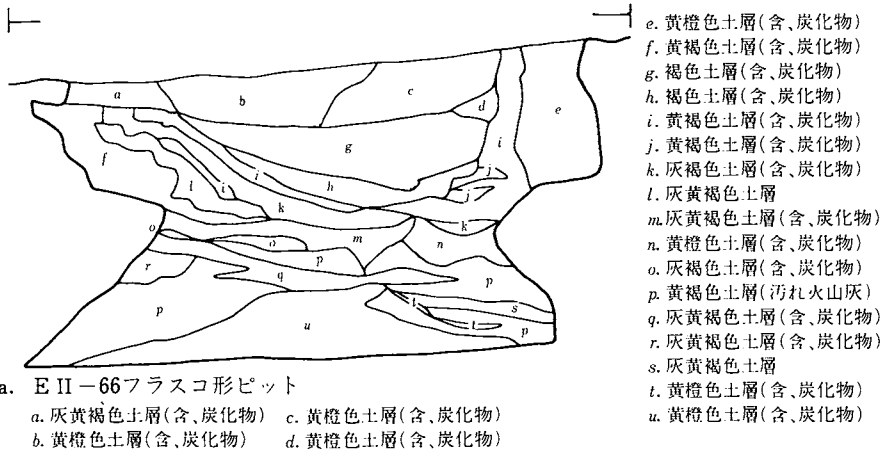


f. E II-65 フラスコ形ピット

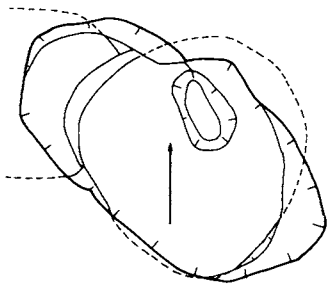
- |                    |                    |
|--------------------|--------------------|
| a. 黄褐色土層(含、炭化物)    | i. 暗褐色土層(含、炭化物)    |
| b. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物) | j. 明褐色土層(含、焼土、炭化物) |
| c. 褐色土層(含、炭化物)     | k. 暗褐色土層(含、炭化物)    |
| d. 黄褐色土層(含、炭化物)    | l. 暗褐色土層(含、炭化物)    |
| e. 暗褐色土層(含、炭化物)    | m. 黄褐色土層(含、焼土、炭化物) |
| f. 黄褐色土層(火山灰)      | n. 赤褐色土層(焼土)       |
| g. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物) | o. 明褐色土層(含、焼土、炭化物) |
| h. 暗褐色土層(含、炭化物)    | p. 黄褐色土層(含、焼土、炭化物) |



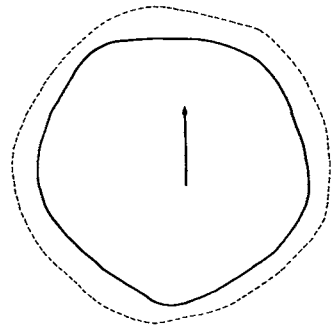
g. E II-63 フラスコ形ピット



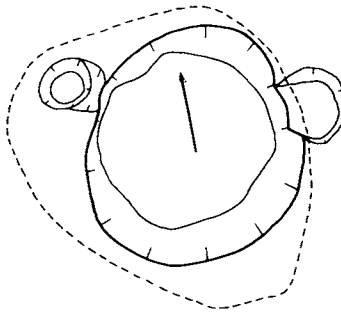
b. E II-67 フラスコ形ピット



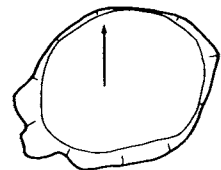
d. E II-69 フラスコ形ピット



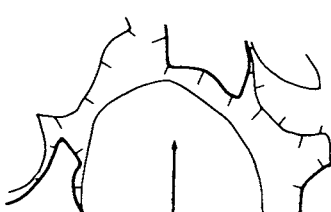
c. E II-68 フラスコ形ピット



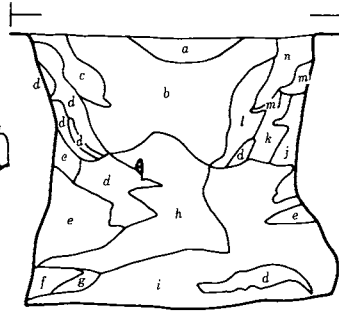
e. E II-70 フラスコ形ピット



f. E II-71 ピーカー形ピット

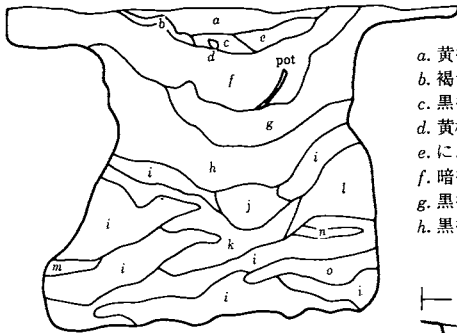


a. E III-52 ビーカー形ピット



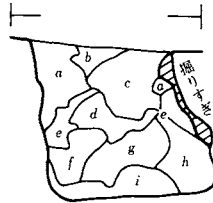
b. E III-53 フラスコ形ピット

- a. 黒色土層(含、炭化物)
- b. 明褐色土層(含、焼土、炭化物)
- c. 暗褐色土層
- d. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- e. 黄橙色土層
- f. 暗褐色土層
- g. 暗褐色土層
- h. 明褐色土層(含、焼土、炭化物)
- i. 暗褐色土層(含、炭化物)
- j. 明褐色土層(含、炭化物)
- k. 黒褐色土層(含、炭化物)
- l. 黒褐色土層(含、焼土、炭化物)
- m. 明褐色土層(含、焼土)
- n. 黒褐色土層(含、炭化物)



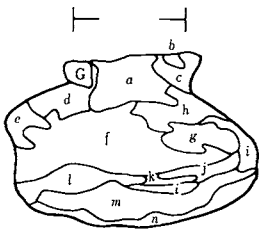
c. E III-54 フラスコ形ピット

- a. 黄褐色土層(含、焼土、炭化物)
- b. 褐色土層
- c. 黒褐色土層(汚れ火山灰)
- d. 黄橙色土層
- e. にぶい褐色土層
- f. 暗褐色土層
- g. 黒褐色土層
- h. 黒褐色土層
- i. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- j. 褐色土層
- k. 暗褐色土層
- l. 黒褐色土層
- m. 暗褐色土層
- n. 褐色土層
- o. 明褐色土層



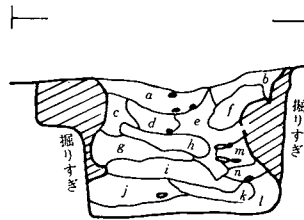
e. E III-56 フラスコ形ピット

- a. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- b. 黒色土層(クロボク)
- c. 黒褐色土層
- d. 褐色土層
- e. 暗褐色土層
- f. 黒褐色土層
- g. 黒褐色土層
- h. 褐色土層
- i. 褐色土層



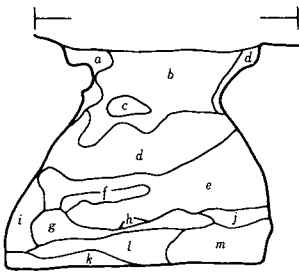
d. E III-55 フラスコ形ピット

- a. 黒色土層(クロボク)
- b. 暗褐色土層
- c. 明褐色土層(含、炭化物)
- d. 黒褐色土層
- e. 暗褐色土層(含、炭化物)
- f. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- g. 暗褐色土層(含、炭化物)
- h. 黒褐色土層
- i. 明褐色土層
- j. 黒褐色土層(含、炭化物)
- k. 暗褐色土層
- l. 明褐色土層
- m. 黒褐色土層(含、焼土)
- n. 黒色土層



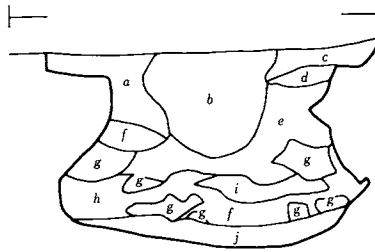
f. E III-58 フラスコ形ピット

- a. 褐色土層(含、焼土)
- b. 褐色土層(含、炭化物)
- c. 褐色土層(含、焼土、炭化物)
- d. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- e. 褐色土層(含、炭化物)
- f. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- g. 暗褐色土層
- h. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- i. 黒褐色土層(含、焼土、炭化物)
- j. 褐色土層
- k. 褐色土層(汚れ火山灰)
- l. 褐色土層(汚れ火山灰)
- m. 褐色土層(含、炭化物)
- n. 褐色土層(含、炭化物)



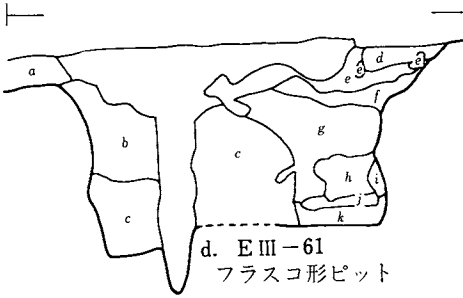
a. E III-57 フラスコ形ピット

- a. 暗褐色土層
- b. 暗褐色土層(含、炭化物)
- c. 褐色土層(含、炭化物)
- d. 褐色土層(含、焼土、炭化物)
- e. 明褐色土層(含、焼土、炭化物)
- f. 黒褐色土層
- g. 暗褐色土層
- h. 明褐色土層(汚れ火山灰)
- i. 黒褐色土層
- j. 明褐色土層(汚れ火山灰)
- k. 褐色土層
- l. 褐色土層(汚れ火山灰)
- m. 褐色土層



b. E III-59 フラスコ形ピット

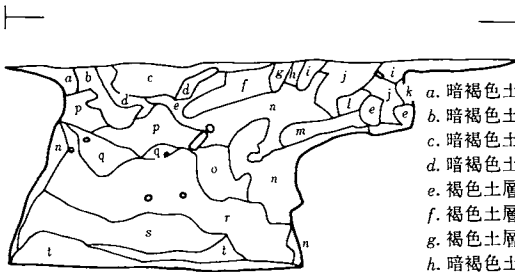
- a. 暗褐色土層
- b. 黒色土層(クロボク)
- c. 暗褐色土層
- d. 暗褐色土層
- e. 暗褐色土層
- f. 黄褐色土層
- g. 黄橙色土層(火山灰)
- h. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- i. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- j. 明褐色土層(汚れ火山灰)



c. E III-60 ピーカー形ピット

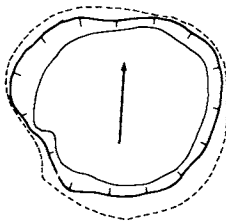
- a. 明褐色土層
- b. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- c. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- d. 暗褐色土層(含、焼土)
- e. 明褐色土層
- f. 黄褐色土層
- g. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- h. 黄褐色土層
- i. 黄褐色土層
- j. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- k. 黄褐色土層

d. E III-61  
フラスコ形ピット

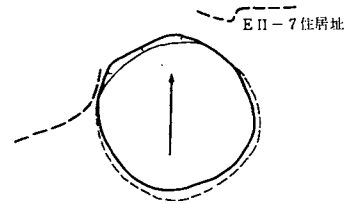


e. E III-66 フラスコ形ピット

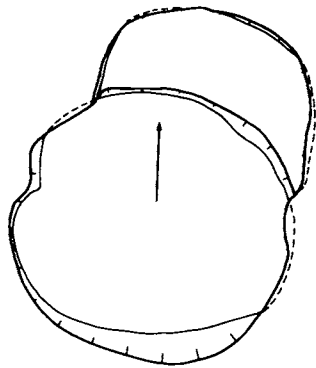
- a. 暗褐色土層(含、焼土)
- b. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- c. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- d. 暗褐色土層
- e. 褐色土層
- f. 褐色土層(含、焼土、炭化物)
- g. 褐色土層
- h. 暗褐色土層
- i. 暗褐色土層
- j. 暗褐色土層(含、炭化物)
- k. 褐色土層(汚れ火山灰)
- l. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- m. 褐色土層(含、炭化物)
- n. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- o. 褐色土層(汚れ火山灰)
- p. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- q. 黒褐色土層(含、炭化物)
- r. 暗褐色土層(含、炭化物)
- s. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- t. 褐色土層(汚れ火山灰)



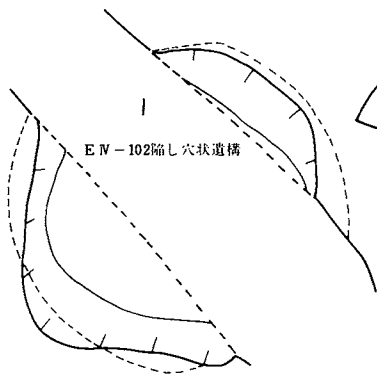
f. E III-61 フラスコ形ピット



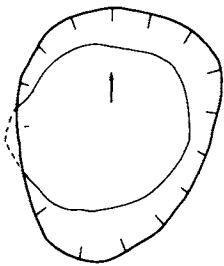
g. E III-64 フラスコ形ピット



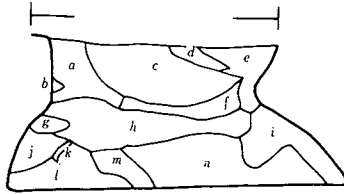
a. E IV-51ピーカー形ピット  
E IV-52ピーカー形ピット



c. E IV-54フラスコ形ピット

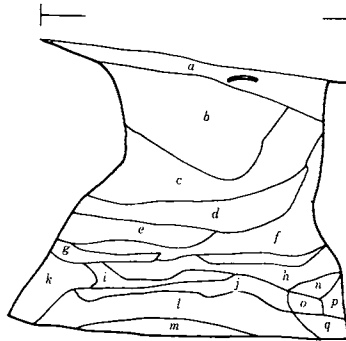


e. E IV-56ピーカー形ピット



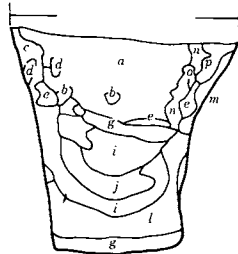
b. E IV-53フラスコ形ピット

- a. 黒褐色土層
- b. 黄褐色土層
- c. 黄褐色土層(含、炭化物)
- d. 黄褐色土層
- e. 黄褐色土層(含、炭化物)
- f. 黄褐色土層
- g. 黄褐色土層
- h. 黄褐色土層
- i. 黄褐色土層(火山灰)
- j. 黒褐色土層
- k. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- l. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- m. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- n. 黄褐色土層(汚れ火山灰)



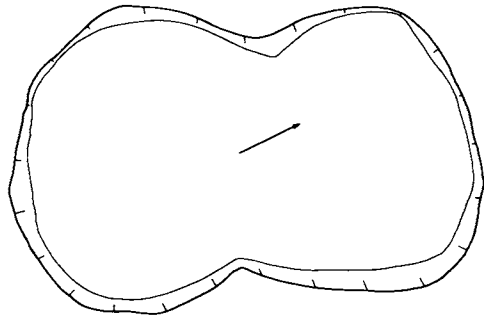
d. E IV-55フラスコ形ピット

- a. 暗褐色土層
- b. 暗褐色土層(含、炭化物)
- c. 暗褐色土層(含、炭化物)
- d. 暗褐色土層(含、炭化物)
- e. 極暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- f. 極暗褐色土層(含、炭化物)
- g. 明褐色土層
- h. 暗褐色土層
- i. 明褐色土層(含、焼土、炭化物)
- j. 黒褐色土層(含、焼土、炭化物)
- k. 暗褐色土層(含、炭化物)
- l. 明褐色土層(含、炭化物)
- m. 極暗褐色土層
- n. 暗褐色土層(含、炭化物)
- o. 明褐色土層(含、炭化物)
- p. 暗褐色土層(含、炭化物)
- q. 暗褐色土層(含、炭化物)

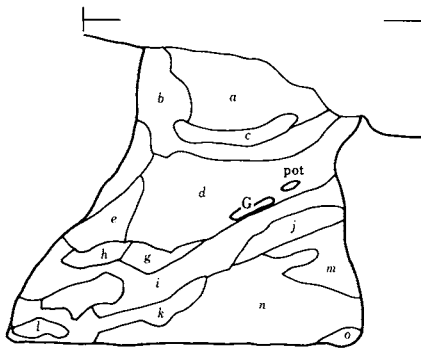


f. E IV-59ピーカー形ピット

- a. 黒色土層
- b. 黄褐色土層
- c. 黄褐色土層
- d. 明褐色土層
- e. 黄褐色土層
- f. 黒色土層
- g. 黒色土層
- h. 明褐色土層
- i. 黄褐色土層
- j. 黄褐色土層
- k. 黄褐色土層
- l. 黄褐色土層
- m. 黄褐色土層
- n. 明褐色土層(含、焼土)
- o. 明褐色土層
- p. 明褐色土層(含、炭化物)

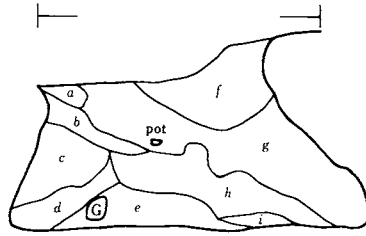


g. E IV-58 A・Bピーカー形ピット



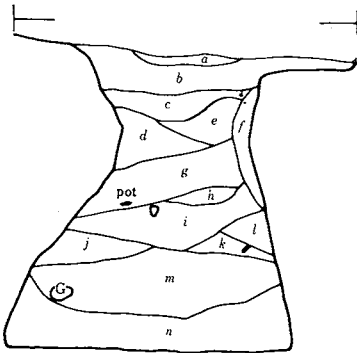
a. F II-51フラスコ形ピット

- a. 黄褐色土層(含、焼土、炭化物)
- b. 明褐色土層(含、焼土、炭化物)
- c. 黄橙色土層(含、炭化物)
- d. 黒褐色土層(含、炭化物)
- e. 暗褐色土層(含、焼土)
- f. 暗褐色土層
- g. 赤褐色土層(含、焼土)
- h. 暗赤褐色土層(含、焼土、炭化物)
- i. 黒褐色土層(含、焼土、炭化物)
- j. 黄褐色土層(含、炭化物)
- k. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- l. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- m. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- n. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- o. 黒褐色土層



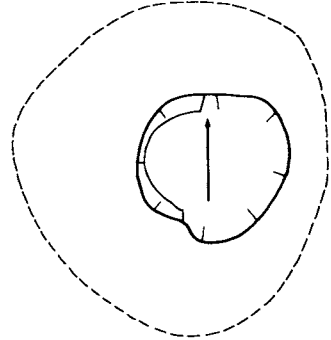
b. F II-52フラスコ形ピット

- a. 暗褐色土層(含、焼土)
- b. 褐色土層
- c. 褐色土層(火山灰)
- d. 褐色土層(火山灰)
- e. 明黄褐色土層(火山灰)
- f. 極暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- g. 黒色土層(含、炭化物)
- h. 褐色土層
- i. 暗褐色土層

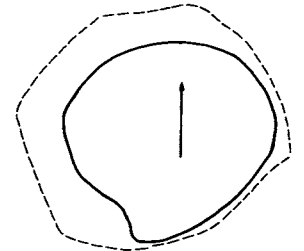


c. F II-53フラスコ形ピット

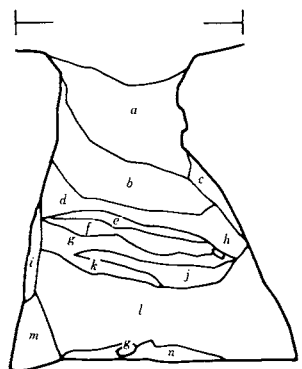
- a. 黒褐色土層(含、炭化物)
- b. 黒褐色土層(含、炭化物)
- c. 黒色土層(含、炭化物)
- d. 黒褐色土層
- e. 暗褐色土層
- f. 褐色土層
- g. 暗褐色土層(含、炭化物)
- h. 暗褐色土層(含、炭化物)
- i. 暗褐色土層(含、炭化物)
- j. 暗褐色土層
- h. 褐色土層
- l. 暗褐色土層(含、炭化物)
- m. 暗褐色土層(含、炭化物)
- n. 褐色土層



d. F II-55フラスコ形ピット

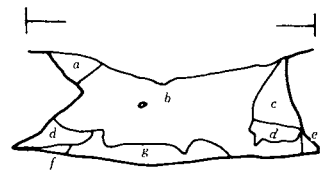


e. F II-57フラスコ形ピット



f. F II-54フラスコ形ピット

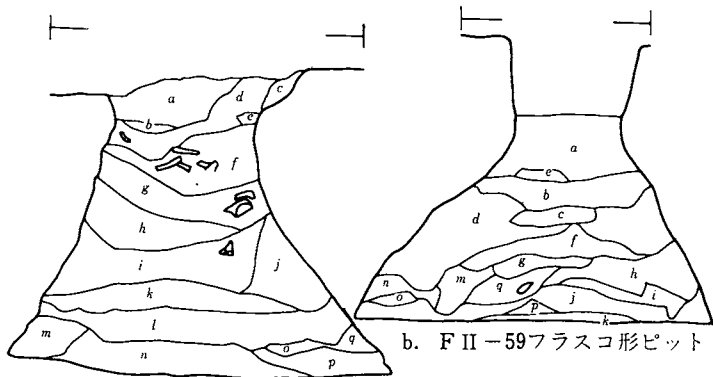
- a. 黒褐色土層
- b. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- c. 明褐色土層
- d. 暗褐色土層(含、炭化物)
- e. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- f. 褐色土層(含、焼土、炭化物)
- g. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- h. 褐色土層
- i. 暗褐色土層(含、炭化物)
- j. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- k. 黒褐色土層(含、焼土、炭化物)
- l. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- m. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- n. 褐色土層(含、焼土)



g. F II-56フラスコ形ピット

- a. 褐色土層(含、焼土)
- b. 黒褐色土層(含、焼土、炭化物)
- c. 暗褐色土層
- d. 黄褐色土層(含、炭化物)
- e. 褐色土層
- f. 明褐色土層 暗
- g. 暗褐色土層(含、炭化物)



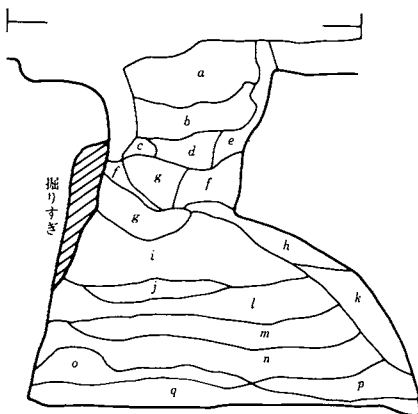


a. F II-58 フラスコ形ピット

- a. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- b. 黄褐色土層
- c. 褐色土層
- d. 黒褐色土層(含、焼土、炭化物)
- e. 明褐色土層(含、焼土、炭化物)
- f. 黒褐色土層(含、焼土、炭化物)
- g. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- h. 黒褐色土層(含、焼土、炭化物)
- i. 褐色土層(含、焼土、炭化物)
- j. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- k. 暗褐色土層
- l. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- m. 暗褐色土層(含、焼土)
- n. 褐色土層(汚れ火山灰)
- o. 黒褐色土層
- p. 黒褐色土層(含、炭化物)

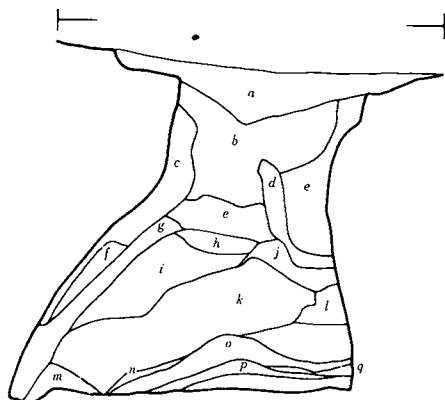
b. F II-59 フラスコ形ピット

- a. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- b. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- c. 暗褐色土層
- d. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- e. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- f. 黒褐色土層(含、炭化物)
- g. 暗褐色土層(含、炭化物)
- h. 暗褐色土層(含、炭化物)
- i. 暗褐色土層(含、炭化物)
- j. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- k. 暗褐色土層(含、焼土)
- l. 黒色土層(クロボク)
- m. 暗褐色土層(含、炭化物)
- n. 暗褐色土層(含、炭化物)
- o. 黒褐色土層(含、炭化物)
- p. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- q. 暗褐色土層



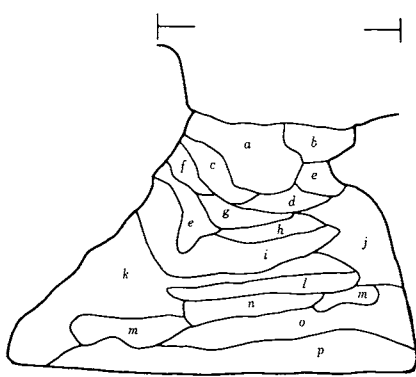
c. F II-60 フラスコ形ピット

- a. 暗褐色土層(含、炭化物)
- b. 黒褐色土層(含、焼土、炭化物)
- c. 暗褐色土層
- d. 黒褐色土層(含、焼土、炭化物)
- e. 黄褐色土層
- f. 暗褐色土層(含、炭化物)
- g. 黒褐色土層(含、焼土、炭化物)
- h. 暗褐色土層(含、炭化物)
- i. 黒褐色土層(含、焼土、炭化物)
- j. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- k. 暗褐色土層(含、炭化物)
- l. 黒褐色土層(含、焼土、炭化物)
- m. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- n. 黒褐色土層(含、焼土、炭化物)
- o. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- p. 黒褐色土層
- q. 暗褐色土層(含、炭化物)



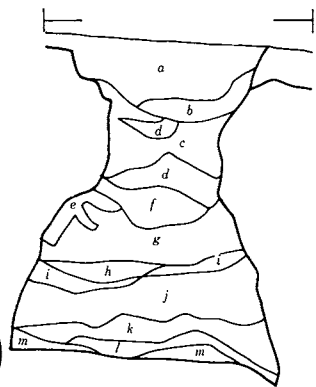
d. F II-61 フラスコ形ピット

- a. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- b. 黒褐色土層(含、焼土、炭化物)
- c. 褐色土層(汚れ火山灰)
- d. 黄褐色土層(火山灰)
- e. 黒褐色土層(含、焼土、炭化物)
- f. 黄褐色土層(火山灰)
- g. 黒褐色土層(含、焼土、炭化物)
- h. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- i. 黒褐色土層(含、焼土、炭化物)
- j. 黒褐色土層(含、焼土、炭化物)
- k. 黒褐色土層(含、焼土、炭化物)
- l. 暗褐色土層(含、炭化物)
- m. 黒褐色土層(含、炭化物)
- n. 黒色土層(含、焼土、炭化物)
- o. 黒色土層
- p. 明褐色土層
- q. 黒色土層
- r. 暗褐色土層



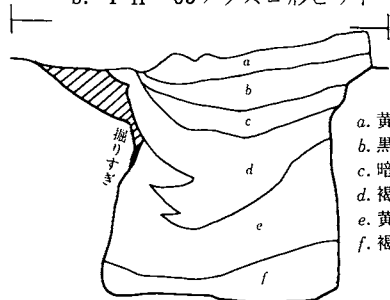
a. F II-62 フラスコ形ピット

- a. 暗褐色土層(含、炭化物)
- b. 暗褐色土層(含、炭化物)
- c. 暗褐色土層(含、炭化物)
- d. 暗褐色土層(含、炭化物)
- e. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- f. 暗褐色土層
- g. 暗褐色土層
- h. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- i. 暗褐色土層(含、炭化物)
- j. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- k. 黄褐色土層(含、炭化物)
- l. 褐色土層(含、炭化物)
- m. 褐色土層(汚れ火山灰)
- n. 褐色土層
- o. 褐色土層(汚れ火山灰)
- p. 黄褐色土層



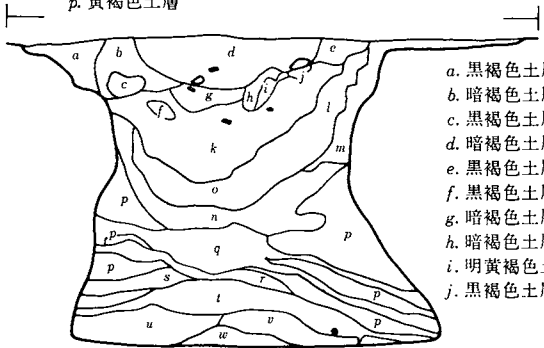
b. F II-63 フラスコ形ピット

- a. 黒褐色土層
- b. 黒褐色土層(含、焼土)
- c. 褐色土層
- d. 黒褐色土層
- e. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- f. 暗褐色土層(含、炭化物)
- g. 暗褐色土層(含、炭化物)
- h. 暗褐色土層
- i. 暗褐色土層
- j. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- k. 暗褐色土層(含、炭化物)
- l. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- m. 褐色土層(含、炭化物)



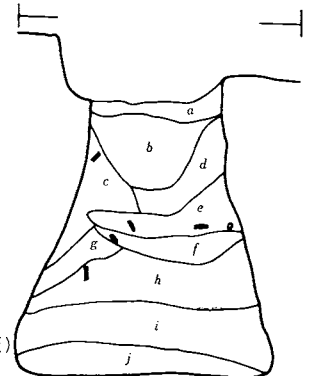
c. F II-64 フラスコ形ピット

- a. 黄褐色土層
- b. 黒褐色土層
- c. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- d. 褐色土層(含、焼土、炭化物)
- e. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- f. 褐色土層(含、焼土、炭化物)



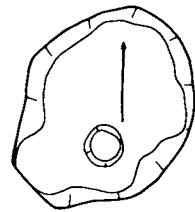
d. F II-65 フラスコ形ピット

- a. 明赤褐色土層(含、炭化物)
- b. 暗褐色土層(含、炭化物)
- c. 暗褐色土層(含、炭化物)
- d. 黄橙色土層
- e. 褐色土層(含、炭化物)
- f. 暗褐色土層(含、炭化物)
- g. 黒褐色土層
- h. 褐色土層
- i. 黒褐色土層(含、炭化物)
- j. 黒褐色土層(含、焼土、炭化物)
- k. 暗褐色土層(含、炭化物)
- l. 黒褐色土層(含、炭化物)
- m. 褐色土層
- n. 暗褐色土層
- o. 暗褐色土層(汚れ火山灰)
- p. 黄褐色土層(含、炭化物)
- q. 暗褐色土層(含、炭化物)
- r. 褐色土層
- s. 暗褐色土層(含、炭化物)
- t. 褐色土層(含、炭化物)
- u. 暗褐色土層(含、炭化物)
- v. 褐色土層(含、炭化物)
- w. 褐色土層(含、炭化物)

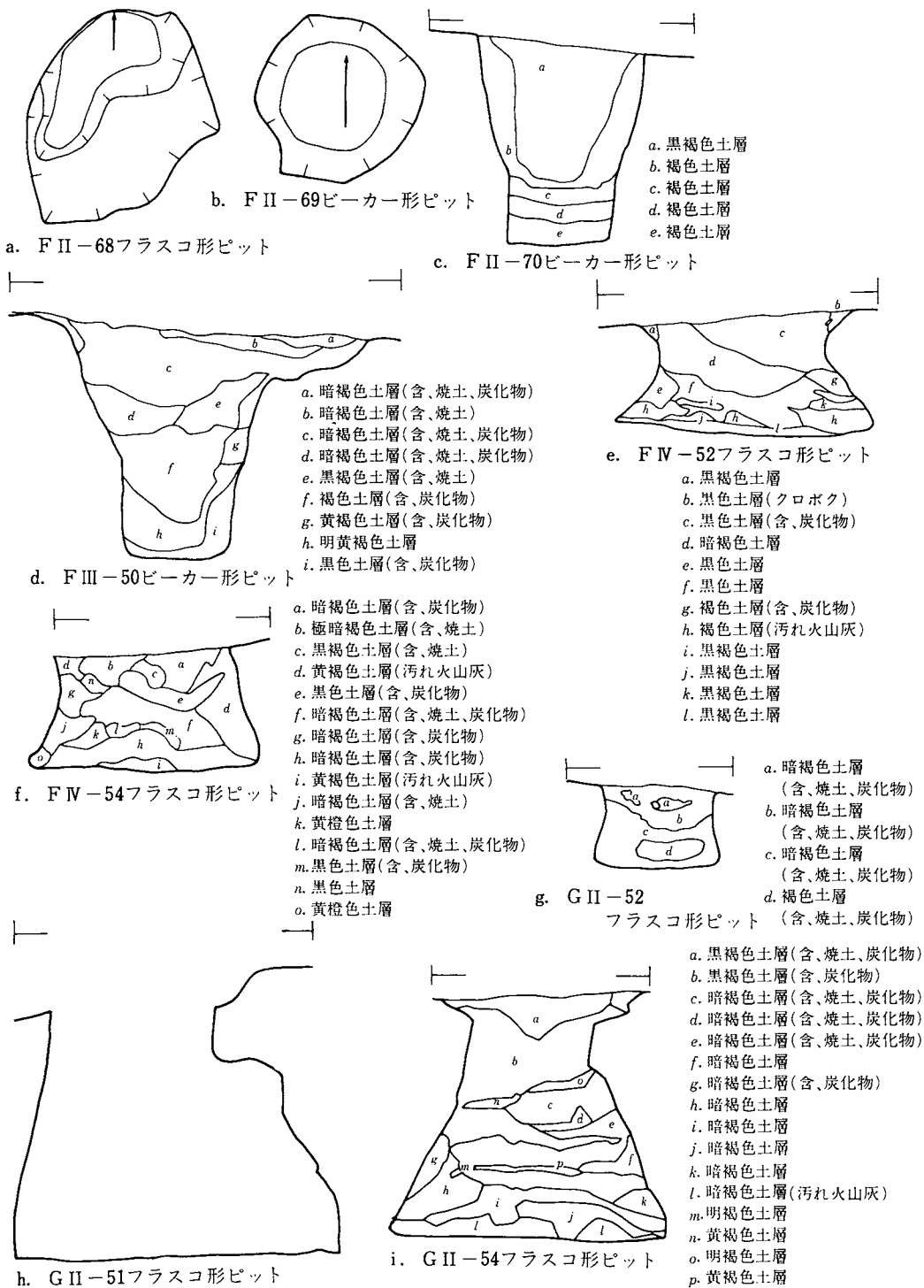


e. F II-66 フラスコ形ピット

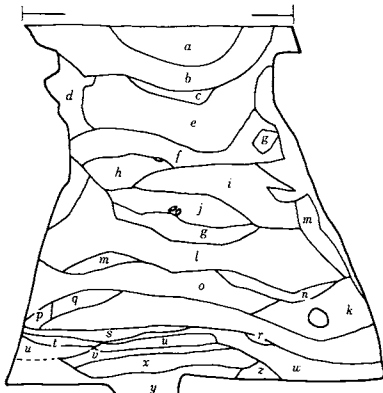
- a. 黒褐色土層
- b. 暗褐色土層(含、炭化物)
- c. 黒褐色土層
- d. 暗褐色土層
- e. 黒褐色土層
- f. 黒褐色土層
- g. 暗褐色土層(含、炭化物)
- h. 暗褐色土層
- i. 明黄褐色土層(汚れ火山灰)
- j. 黒褐色土層



f. F II-67 フラスコ形ピット

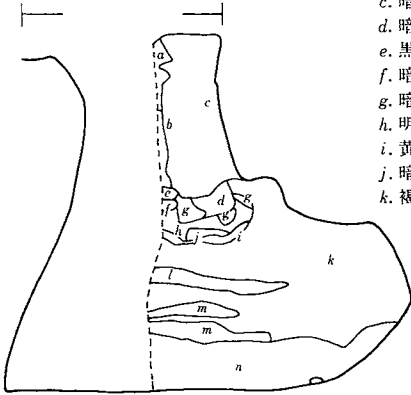


図版 135



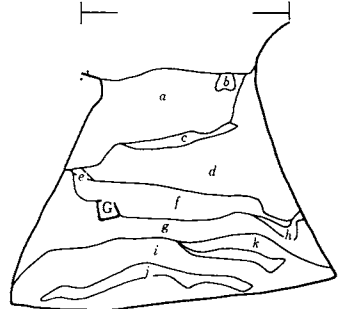
a. G II-53 フラスコ形ピット

- a. 黒褐色土層(含、焼土、炭化物)
- b. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- c. 黄褐色土層(含、焼土、炭化物)
- d. 暗褐色土層
- e. 黒褐色土層(含、焼土、炭化物)
- f. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- g. 明黄褐色土層(含、炭化物)
- h. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- i. 黒褐色土層(含、焼土)
- j. 黒褐色土層(含、焼土、炭化物)
- k. 黒褐色土層(含、炭化物)
- l. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- m. 褐色土層(含、焼土、炭化物)
- n. 暗褐色土層(含、炭化物)
- o. 黒褐色土層(含、焼土、炭化物)
- p. 黒褐色土層(含、炭化物)
- q. 黄褐色土層
- r. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- s. 黒褐色土層(含、炭化物)
- t. 褐色土層
- u. 暗褐色土層(含、炭化物)
- v. 黒褐色土層(含、炭化物)
- w. 暗褐色土層(含、炭化物)
- x. 暗褐色土層(含、炭化物)
- y. 褐色土層(含、炭化物)
- z. 暗褐色土層(含、炭化物)



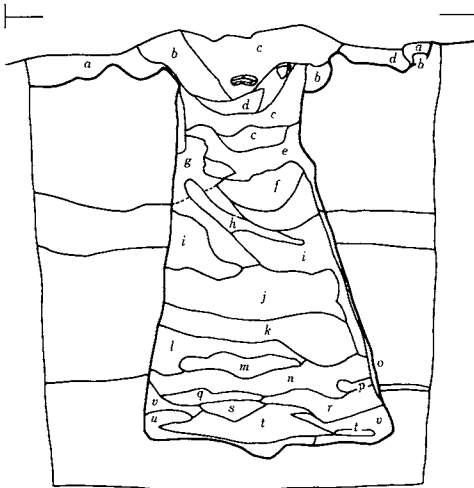
b. G II-56 フラスコ形ピット

- a. 暗褐色土層(含、炭化物)
- b. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- c. 暗褐色土層(含、炭化物)
- d. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- e. 黒褐色土層(含、炭化物)
- f. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- g. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- h. 明黄褐色土層(含、炭化物)
- i. 黄褐色土層(含、炭化物)
- j. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- k. 褐色土層(含、炭化物)



c. G II-55 フラスコ形ピット

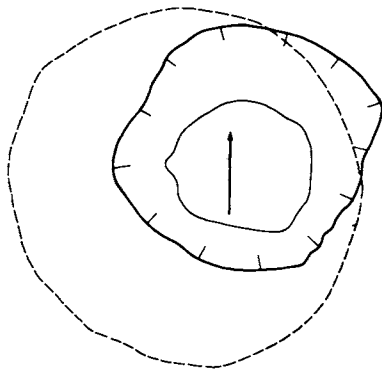
- a. 暗褐色土層(含、炭化物)
- b. 暗褐色土層(含、炭化物)
- c. 明黄褐色土層(含、炭化物)
- d. 暗褐色土層(含、炭化物)
- e. 赤褐色土層(焼土)
- f. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- g. 黄褐色土層
- h. 暗褐色土層(含、焼土)
- i. 暗褐色土層(含、焼土)
- j. 暗褐色土層(含、炭化物)
- k. 暗褐色土層
- l. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- m. 暗褐色土層(含、炭化物)
- n. 暗褐色土層(含、炭化物)



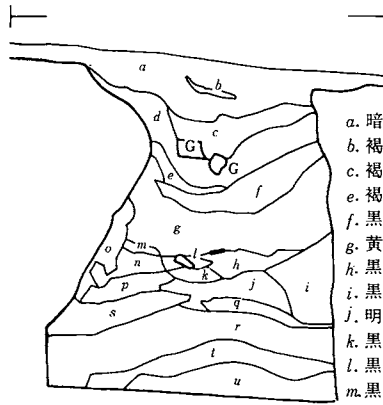
d. G II-59 フラスコ形ピット

- a. にぶい黄褐色土層
- b. にぶい黄褐色土層(含、炭化物)
- c. 灰黄褐色土層
- d. にぶい黄褐色土層(含、焼土、炭化物)
- e. にぶい黄褐色土層(含、焼土、炭化物)
- f. 明黄褐色
- g. 黒褐色土層(含、焼土、炭化物)
- h. 黒褐色土層(含、焼土、炭化物)
- i. 黒褐色土層(含、焼土、炭化物)
- j. 黒色土層(含、焼土、炭化物)
- k. 黒褐色土層(含、炭化物)
- l. 灰黄褐色土層
- m. 黒色土層(含、炭化物)
- n. 黒色土層(含、炭化物)
- o. 黒褐色土層
- p. 黒褐色土層(含、炭化物)
- q. 黒褐色土層(含、炭化物)
- r. 黒褐色土層(含、焼土、炭化物)
- s. 黒褐色土層(含、焼土、炭化物)
- t. 明黄褐色土層(含、焼土、炭化物)
- u. 黒色土層
- v. 黒褐色土層

図版136



a. G II-58 フラスコ形ピット

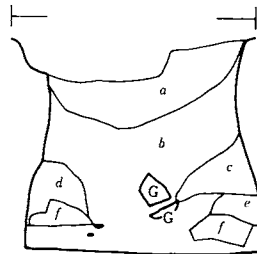


b. G II-61 フラスコ形ピット

- a. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- b. 褐色土層(含、炭化物)
- c. 褐色土層(含、炭化物)
- e. 褐色土層(含、炭化物)
- f. 黒褐色土層
- g. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- h. 黒褐色土層(含、焼土、炭化物)
- i. 黒褐色土層(含、炭化物)
- j. 明黄褐色土層(含、焼土、炭化物)
- k. 黒褐色土層(含、焼土、炭化物)
- l. 黒褐色土層(含、焼土)
- m. 黒褐色土層(含、炭化物)
- n. 明黄褐色土層
- o. 暗褐色土層
- p. 明黄褐色土層
- q. 黒色土層(含、焼土、炭化物)
- r. 暗褐色土層
- s. 黒褐色土層(含、炭化物)
- t. 暗褐色土層
- u. 黄橙色土層

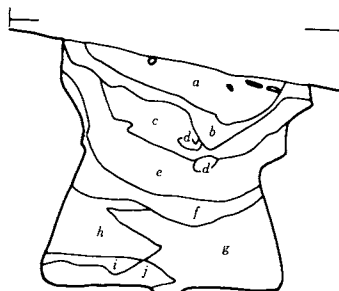


c. G II-60 フラスコ形ピット



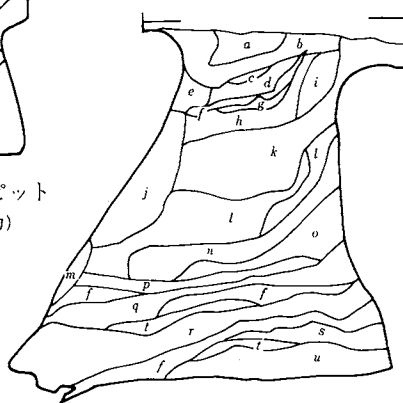
d. G II-62 フラスコ形ピット

- a. 暗褐色土層(含、炭化物)
- b. 黒褐色土層(含、焼土、炭化物)
- c. 褐色土層(含、炭化物)
- d. 黄褐色土層(含、炭化物)
- e. 褐色土層(含、炭化物)
- f. 明褐色土層(汚れ火山灰)



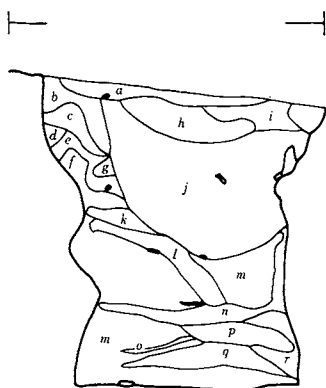
e. G II-65 フラスコ形ピット

- a. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- b. 褐色土層(含、炭化物)
- c. 黄褐色土層
- d. 褐色土層
- e. 黒褐色土層(含、炭化物)
- f. 黒褐色土層(含、炭化物)
- g. 暗褐色土層(含、炭化物)
- h. 黄褐色土層(含、炭化物)
- i. 明褐色土層
- j. 黄褐色土層



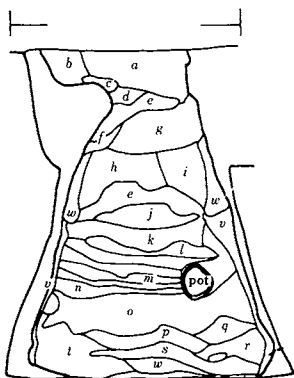
f. G II-63 フラスコ形ピット

- a. 黒褐色土層(クロボク)
- b. 黒褐色土層(含、焼土、炭化物)
- c. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- d. 黒褐色土層(含、焼土、炭化物)
- e. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- f. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- g. 黒褐色土層(含、炭化物)
- h. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- i. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- j. 黒褐色土層(含、炭化物)
- k. 黒褐色土層(含、焼土、炭化物)
- l. 褐色土層(含、焼土、炭化物)
- m. 暗褐色土層(含、炭化物)
- n. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- o. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- p. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- q. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- r. 黒褐色土層(含、焼土、炭化物)
- s. 黒褐色土層
- t. 黒色土層(含、炭化物)
- u. 暗褐色土層(含、炭化物)



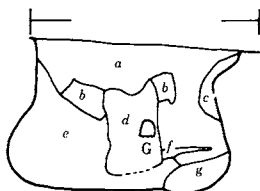
a. G II-64 フラスコ形ピット

- a. 褐色土層
- b. 褐色土層(含、炭化物)
- c. 褐色土層(含、焼土、炭化物)
- d. 褐色土層(含、焼土)
- e. 暗褐色土層
- f. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- g. 暗褐色土層(含、含、炭化物)
- h. 褐色土層(含、焼土、炭化物)
- i. 褐色土層(含、焼土、炭化物)
- j. 褐色土層
- k. 褐色土層(含、焼土)
- l. 暗褐色土層(含、炭化物)
- m. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- n. 褐色土層(含、炭化物)
- o. 暗褐色土層(含、炭化物)
- p. 赤褐色土層(焼土)
- q. 褐色土層
- r. 褐色土層(含、焼土、炭化物)



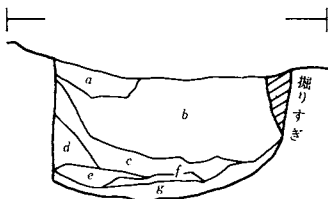
c. G II-67 フラスコ形ピット

- a. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- b. 明黄褐色土層(含、焼土、炭化物)
- c. 明黄褐色土層
- d. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- e. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- f. 褐色土層(含、焼土、炭化物)
- g. 褐色土層(含、炭化物)
- h. 黄褐色土層(含、焼土)
- i. 黄褐色土層(含、焼土)
- j. 暗褐色土層(含、炭化物)
- k. 暗褐色土層(含、炭化物)
- l. 明褐色土層(含、焼土、炭化物)
- m. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- n. 黄褐色土層(含、焼土、炭化物)
- o. 明褐色土層(含、焼土、炭化物)
- p. 黄褐色土層(含、焼土、炭化物)
- q. 明褐色土層(含、炭化物)
- r. 褐色土層(含、焼土、炭化物)
- s. 黒褐色土層(含、炭化物)
- t. 黄褐色土層(含、焼土、炭化物)
- u. 明褐色土層
- v. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- w. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)



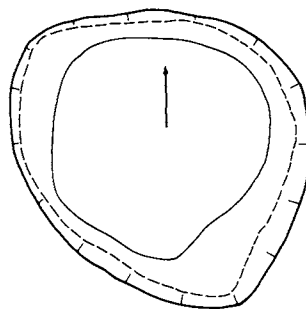
e. G II-69 フラスコ形ピット

- a. 黒褐色土層(含、焼土、炭化物)
- b. 褐色土層
- c. 褐色土層(含、炭化物)
- d. 暗褐色土層(含、炭化物)
- e. 黒褐色土層(含、焼土)
- f. 黒褐色土層
- g. 黒褐色土層

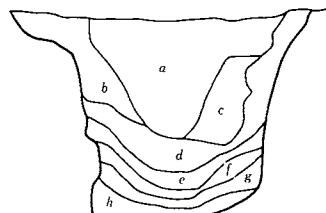


g. G II-71 フラスコ形ピット

- a. 黒褐色土層
- b. 黒褐色土層(含、焼土、炭化物)
- c. 暗褐色土層(含、炭化物)
- d. 褐色土層
- e. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- f. 褐色土層(含、炭化物)
- g. 褐色土層(含、炭化物)

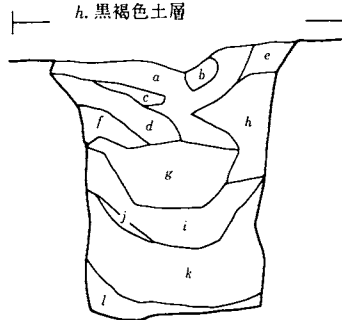


b. G II-66 フラスコ形ピット



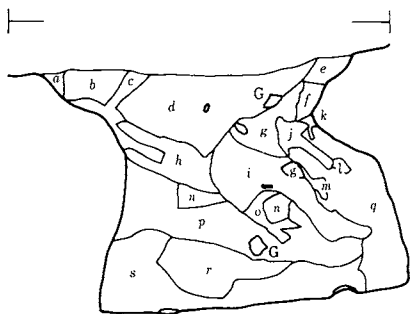
d. G II-68 ビーカー形ピット

- a. 黒色土層
- b. 黒褐色土層
- c. 黒褐色土層
- d. 褐色土層(含、炭化物)
- e. 明褐色土層(含、炭化物)
- f. 褐色土層(含、炭化物)
- g. 明褐色土層(含、炭化物)
- h. 黒褐色土層



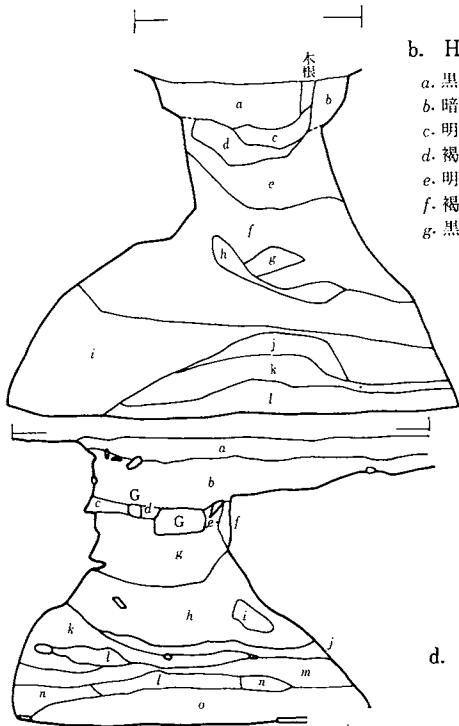
f. G II-70 ビーカー形ピット

- a. 黒色土層(含、炭化物)
- b. 黒褐色土層
- c. 黒色土層
- d. 暗褐色土層
- e. 褐色土層
- f. 褐色土層
- g. 褐色土層(含、炭化物)
- h. 明褐色土層
- i. 褐色土層(含、含、炭化物)
- j. 褐色土層
- k. 明褐色土層(汚れ火山灰)
- l. 明褐色土層(汚れ火山灰)



a. G III-51 フラスコ形ピット

- a. 黄褐色土層
- b. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- c. 茶褐色土層(火山灰)
- d. 黒褐色土層(含、焼土、炭化物)
- e. 茶褐色土層(火山灰)
- g. 黄褐色土層(火山灰)
- h. 黒褐色土層(含、焼土、炭化物)
- k. 暗褐色土層(含、炭化物)
- l. 茶褐色土層
- m. 黄褐色土層
- n. 明褐色土層(含、焼土、炭化物)
- o. 黒褐色土層(含、焼土)
- p. 黄褐色土層(含、焼土)
- q. 黄褐色土層
- r. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- s. 茶褐色土層

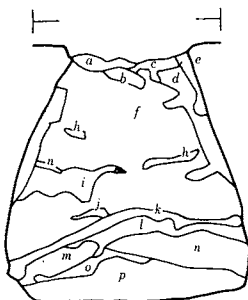


b. H II-51 フラスコ形ピット

- a. 黒褐色土層(含、炭化物)
- b. 暗褐色土層
- c. 明褐色土層
- d. 褐色土層
- e. 明褐色土層
- f. 褐色土層
- g. 黒褐色土層
- h. 明褐色土層
- i. 暗褐色土層
- j. 黒褐色土層
- k. 褐色土層
- l. 暗褐色土層

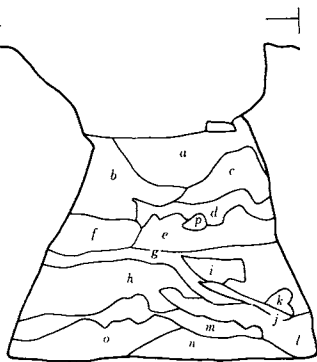
c. H II-53 フラスコ形ピット

- a. 黒褐色土層(含、焼土、炭化物)
- b. 褐色土層(含、焼土、炭化物)
- c. 褐色土層(含、焼土、炭化物)
- d. 明黄褐色土層(含、焼土、炭化物)
- e. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- f. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- g. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- h. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- i. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- j. 黒褐色土層(含、焼土、炭化物)
- k. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- l. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- m. 黒褐色土層(含、焼土、炭化物)
- n. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- o. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)



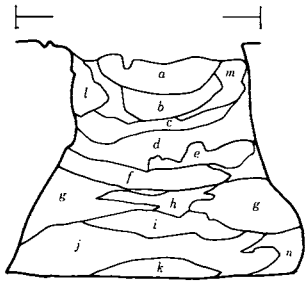
d. H II-54 フラスコ形ピット

- a. 黒褐色土層(含、炭化物)
- b. 褐色土層(含、焼土、炭化物)
- c. 暗褐色土層(含、炭化物)
- d. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- e. 明褐色土層(含、炭化物)
- f. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- g. 黒褐色土層
- h. 暗褐色土層
- i. 暗褐色土層(含、炭化物)
- j. 黒褐色土層
- k. 暗褐色土層
- l. 暗褐色土層(含、炭化物)
- m. 暗褐色土層(含、炭化物)
- n. 暗褐色土層
- o. 暗褐色土層(含、炭化物)
- p. 黒褐色土層



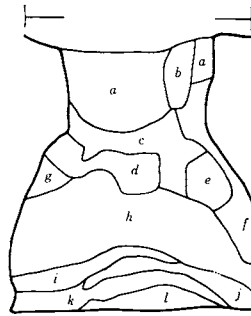
e. H II-55 フラスコ形ピット

- a. 黄褐色土層
- b. 褐色土層(含、炭化物)
- c. 黄褐色土層(含、焼土、炭化物)
- d. 褐色土層(含、炭化物)
- e. 黄褐色土層
- f. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- g. 褐色土層(含、炭化物)
- h. 黄褐色土層
- i. 暗褐色土層
- j. 褐色土層(含、焼土)
- k. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- l. 褐色土層(含、炭化物)
- m. 褐色土層
- n. 黒褐色土層(含、炭化物)
- o. 褐色土層
- p. 褐色土層(含、炭化物)



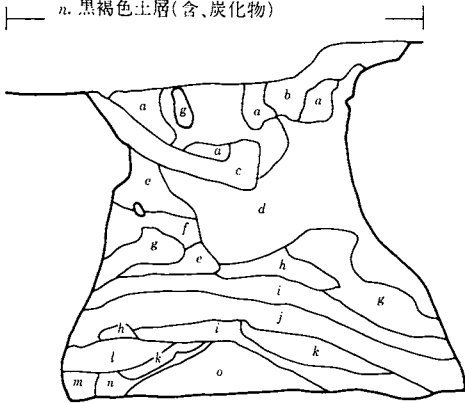
a. H II-54 フラスコ形ピット

- a. 黄褐色土層(含、炭化物)
- b. 黒褐色土層(含、焼土、炭化物)
- c. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- d. 暗褐色土層(含、焼土)
- e. 暗褐色土層
- f. 暗褐色土層(含、炭化物)
- g. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- h. 黒褐色土層
- i. 暗褐色土層
- j. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- k. 黒褐色土層
- l. 暗褐色土層(含、焼土)
- m. 暗褐色土層
- n. 黒褐色土層(含、炭化物)



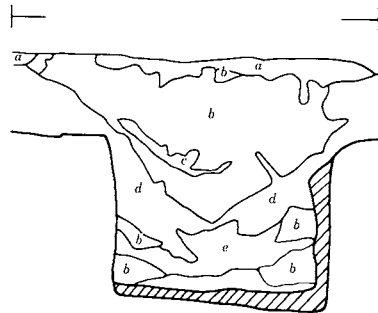
b. H II-57 フラスコ形ピット

- a. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- b. 黄褐色土層(火山灰)
- c. 暗褐色土層(含、炭化物)
- d. 黄褐色土層
- e. 黄褐色土層(火山灰)
- f. 黒褐色土層(含、炭化物)
- g. 明褐色土層(含、炭化物)
- h. 黒褐色土層(含、焼土)
- i. 暗褐色焼土層
- j. 褐色土層(含、焼土)
- k. 黒褐色土層(含、炭化物)
- l. 暗褐色土層(含、炭化物)



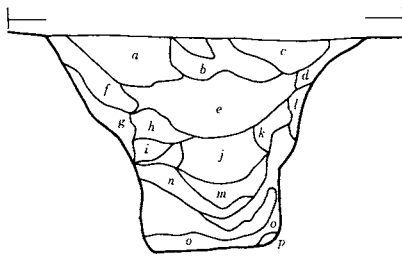
c. H II-58 フラスコ形ピット

- a. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- b. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- c. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- d. 暗褐色土層(含、炭化物)
- e. 褐色土層(含、炭化物)
- f. 褐色土層(含、炭化物)
- g. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- h. 暗褐色土層
- i. 暗褐色土層(含、焼土)
- j. 褐色土層(含、炭化物)
- k. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- l. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- m. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- n. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- o. 黄褐色土層(火山灰)



d. H II-59 ビーカー形ピット

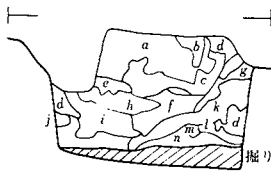
- a. 褐色土層(含、炭化物)
- b. 黄褐色土層
- c. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- d. 暗褐色土層(含、炭化物)
- e. 褐色土層



e. H II-61 ビーカー形ピット

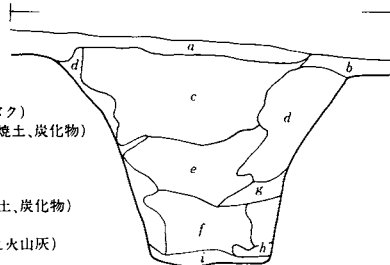
- a. 暗褐色土層
- b. 黒褐色土層
- c. 黒褐色土層
- d. 黒褐色土層(含、炭化物)
- e. 黒褐色土層
- f. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- g. 暗褐色土層
- h. 暗褐色土層
- i. 暗褐色土層
- j. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- k. 黒褐色土層
- l. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- m. 黒褐色土層
- n. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- o. 暗褐色土層(含、炭化物)
- p. 黄褐色土層(汚れ火山灰)





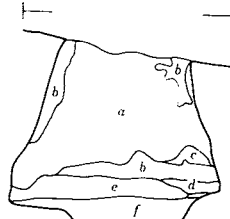
- a. 黄褐色土層(含、炭化物)
- b. 暗褐色土層
- c. 褐色土層
- d. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- e. 暗褐色土層(含、炭化物)
- f. 暗褐色土層
- g. 褐色土層
- h. 黒褐色土層(含、炭化物)
- i. 褐色土層
- j. 褐色土層(含、焼土)
- k. 黒褐色土層
- l. 褐色土層
- m. 暗褐色土層
- n. 暗褐色土層

a. H II-60ピーカー形ピット



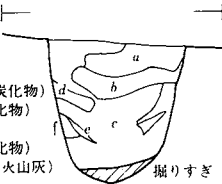
- a. 黒色土層(クロボク)
- b. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- c. 黒褐色土層
- d. 褐色土層
- e. 黒褐色土層
- f. 褐色土層(含、焼土、炭化物)
- g. 黒褐色土層
- h. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- i. 褐色土層

b. H II-62ピーカー形ピット



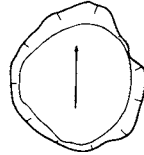
c. H II-63フラスコ形ピット

- a. 黄褐色土層(火山灰)
- b. 黒色土層(クロボク)
- c. 黒褐色土層(含、炭化物)
- d. 黄褐色土層(火山灰)
- e. 黒褐色土層(含、炭化物)
- f. 黄褐色土層(火山灰)

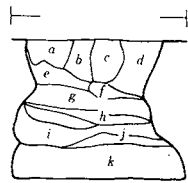


- a. 褐色土層
- b. 暗褐色土層(含、炭化物)
- c. 褐色土層(含、炭化物)
- d. 褐色土層
- e. 黒色土層(含、炭化物)
- f. 黄褐色土層(汚れ火山灰)

d. H II-65ピーカー形ピット

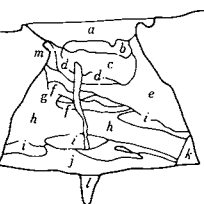


e. H II-64ピーカー形ピット



f. I II-51フラスコ形ピット

- a. 褐色土層(含、焼土、炭化物)
- b. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- c. 暗褐色土層(含、炭化物)
- d. 暗褐色土層(含、炭化物)
- e. 暗褐色土層(含、炭化物)
- f. 黄褐色土層
- g. 暗褐色土層(含、焼土)
- h. 褐色土層
- i. 暗褐色土層(含、炭化物)
- j. 黒褐色土層
- k. 暗褐色土層



g. I II-52フラスコ形ピット

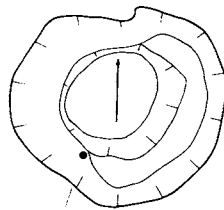
- a. 黒褐色土層(含、焼土、炭化物)
- b. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- c. 褐色土層(含、焼土、炭化物)
- d. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- e. 黒色土層(クロボク)
- f. 暗褐色土層(含、焼土)
- g. 暗褐色土層(含、炭化物)
- h. 黒色土層(クロボク)
- i. 黄褐色土層(含、焼土、炭化物)
- j. 黒色土層(含、炭化物)
- k. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- l. 暗褐色土層(含、炭化物)
- m. 褐色土層(火山灰)



h. E III-67フラスコ形ピット

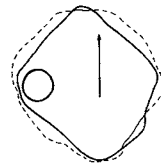
- a. 暗褐色土層(含、炭化物)
- b. 褐色土層
- c. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- d. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- e. 暗褐色土層

- f. 明黄褐色土層(含、焼土、炭化物)
- g. 黄褐色土層(火山灰)
- h. 明褐色土層(含、焼土、炭化物)
- i. 黄褐色土層(火山灰)
- j. 黒褐色土層
- k. 暗褐色土層
- l. 褐色土層
- m. 黄褐色土層
- n. 黒褐色土層
- o. 黄褐色土層
- p. 黄褐色土層



i. E III-67フラスコ形ピット

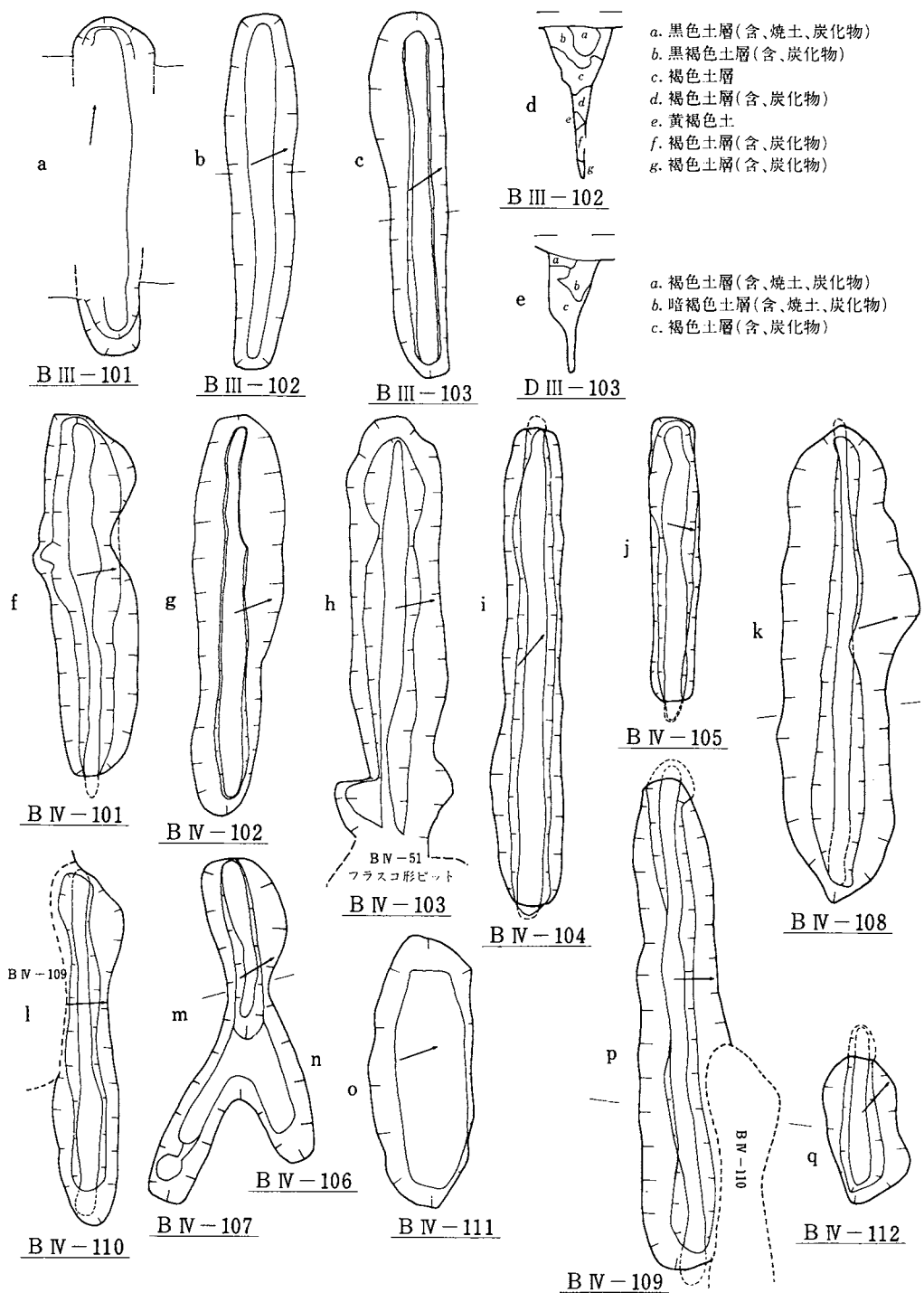
●は石筈状り製品出土地点



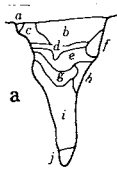
j. D II-64フラスコ形ピット

図版141



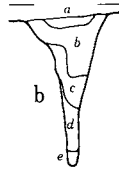


図版142



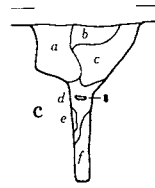
**B IV - 101**

- a. 明黄橙色土層
- b. 黑色土層(含、燒土、炭化物)
- c. 黄褐色土層(含、燒土)
- d. 暗褐色土層
- e. 明黄橙色土層(含、炭化物)
- f. 褐色土層(汚れ火山灰)
- g. 黄橙色土層(含、燒土、炭化物)
- h. 明褐色土層(汚れ火山灰)
- i. 暗褐色土層(含、炭化物)



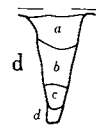
**B IV - 102**

- a. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- b. 褐色土層(含、炭化物)
- c. 黄褐色土層(含、汚れ火山灰)
- d. 褐色土層
- e. 褐色土層(含、炭化物)



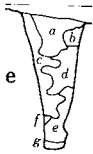
**B IV - 103**

- a. 黄褐色土層(火山灰)
- b. 暗褐色土層(含、燒土)
- c. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- d. 暗褐色土層(含、炭化物)
- e. 黄橙色土層(火山灰)
- f. 黄褐色土層(汚れ火山灰)



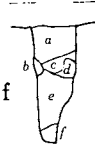
**B IV - 105**

- a. 褐色土層(含、炭化物)
- b. 黄褐色土層(含、燒土、炭化物)
- c. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- d. 黄褐色土層



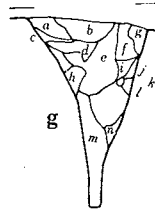
**B IV - 104**

- a. 褐色土層(含、炭化物)
- b. 明褐色土層(汚れ火山灰、含、燒土)
- c. にぶい褐色土層(汚れ火山灰)
- d. 褐色土層(含、炭化物)
- e. 褐色土層(含、炭化物)
- f. 明褐色海土層
- g. 褐色土層(汚れ火山灰)



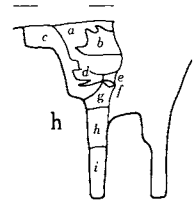
**B IV - 107**

- a. 褐色土層(含、燒土、炭化物)
- b. 明褐色土層
- c. にぶい黄褐色土層(含、炭化物)
- d. にぶい黄褐色土層(含、炭化物)
- e. にぶい黄褐色土層(汚れ火山灰)
- f. 明黄褐色土層



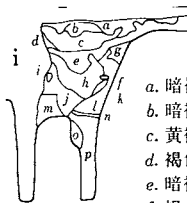
**B IV - 108**

- a. 褐色土層(含、燒土、炭化物)
- b. 暗褐色土層(含、炭化物)
- c. 黄褐色土層(含、燒土、炭化物)
- d. 暗褐色土層(含、燒土、炭化物)
- e. 暗褐色土層(含、燒土、炭化物)
- f. 暗褐色土層(含、燒土、炭化物)
- g. 褐色土層(含、炭化物)
- h. 黄褐色土層(含、炭化物)
- i. 黄褐色土層(含、炭化物)
- j. 褐色土層(含、燒土、炭化物)
- k. 黑褐色土層
- l. 明褐色土層(含、炭化物)
- m. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- n. 明黄褐色土層



**B IV - 109 B IV - 110**

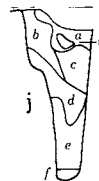
- a. 暗褐色土層(含、炭化物)
- b. 褐色土層(含、燒土、炭化物)
- c. 褐色土層(含、炭化物)
- d. 暗褐色土層(含、燒土、炭化物)
- e. 褐色土層(含、燒土、炭化物)
- f. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- g. 褐色土層(含、炭化物)
- h. 褐色土層(含、炭化物)
- i. 黄褐色土層(汚れ火山灰)



**B IV - 109**

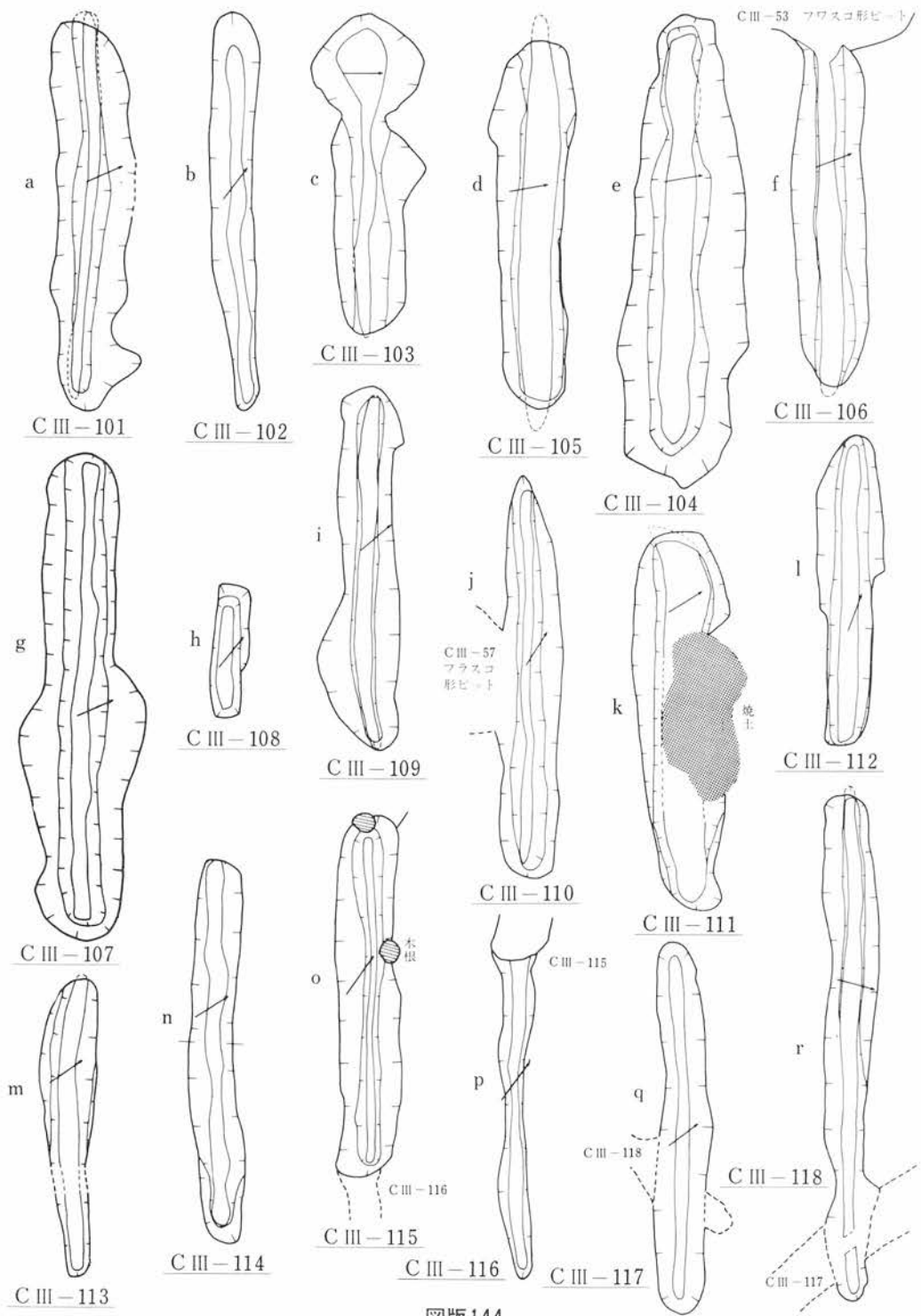
**B IV - 110**

- a. 暗褐色土層(含、炭化物)
- b. 暗褐色土層(含、燒土、炭化物)
- c. 黄褐色土層(含、炭化物)
- d. 褐色土層
- e. 暗褐色土層(含、燒土、炭化物)
- f. 褐色土層
- g. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- h. 褐色土層(含、燒土、炭化物)
- i. 黄褐色土層(含、燒土、炭化物)
- j. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- k. 黄褐色土層
- l. 暗褐色土層
- m. 黄橙色土層
- n. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- o. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- p. 黄褐色土層(汚れ火山灰)

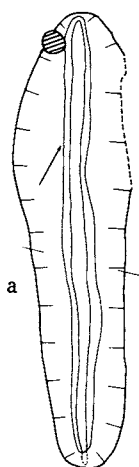


**B IV - 111**

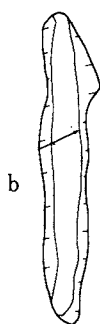
- a. 黑褐色土層
- b. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- c. 褐色土層
- d. 黄橙色土層(火山灰)
- e. 黄橙色土層(火山灰)
- f. 黄褐色土層(汚れ火山灰)



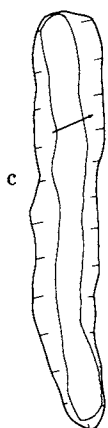
図版 144



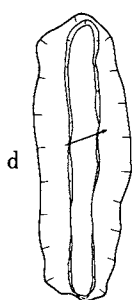
C III-119



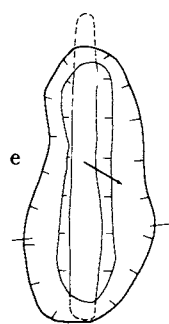
C III-120



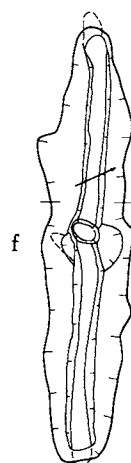
C III-121



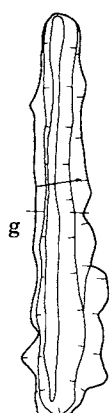
C III-122



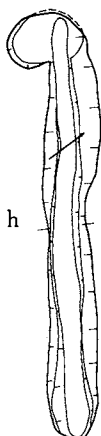
C III-123



C III-124



C III-125

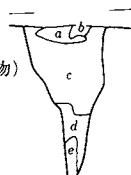


C III-126

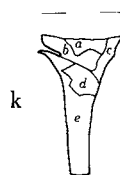


C III-127

- a. 黑褐色土層(含、燒土)
- b. 黑褐色土層(含、燒土、炭化物)
- c. 明褐色土層(汚れ火山灰)
- d. 明褐色土層
- e. 黄褐色土層



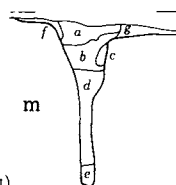
C III-101



- a. 黑褐色土層(含、燒土、炭化物)
- b. 暗褐色土層(含、炭化物)
- c. 暗褐色土層(含、燒土)
- d. 暗褐色土層
- e. 黑色土層

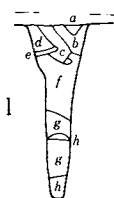
C III-102

- a. 黑褐色土層
- b. 褐色土層(含、燒土、炭化物)
- c. 黄褐色土層
- d. 黄褐色土層
- e. 黄褐色土層
- f. 褐色土層(含、燒土)
- g. 黄褐色土層(含、燒土、炭化物)

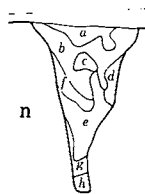


C III-103

- a. 暗褐色土層(含、炭化物)
- b. 褐色土層(含、炭化物)
- c. 黑色土層(含、炭化物)
- d. 黄褐色土層(含、炭化物)
- e. 黄橙色土層
- f. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- g. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- h. 黑色土層

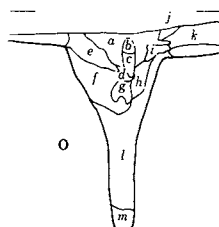


C III-106



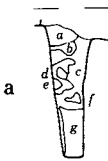
C III-107

- a. 黄褐色土層(含、燒土、炭化物)
- b. 暗褐色土層(含、燒土、炭化物)
- c. 褐色土層(含、炭化物)
- d. 黄褐色土層
- e. 黄褐色土層(含、炭化物)
- f. 黄褐色土層(含、炭化物)
- g. 褐色土層(含、炭化物)
- h. 黑褐色土層(含、炭化物)



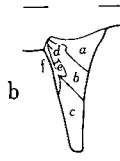
C III-104

- a. 黑褐色土層(含、燒土)
- b. 暗褐色土層
- c. 黑色土層
- d. 黄褐色土層(含、燒土)
- e. 暗褐色土層(含、炭化物)
- f. 黄褐色土層(含、燒土、炭化物)
- g. 明褐色土層
- h. 黄褐色土層
- i. 黑褐色土層
- j. 黄褐色土層(含、炭化物)
- k. jと似ている
- l. 黄褐色土層(含、炭化物)
- m. 黄褐色土層



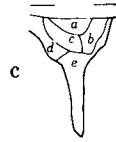
C III-108

- a. 褐色土層(含、炭化物)
- b. 褐色土層(含、焼土、炭化物)
- c. 明褐色土層(含、焼土、炭化物)
- d. 暗褐色土層(含、炭化物)
- e. 明褐色土層(含、炭化物)
- f. 暗褐色土層(含、炭化物)
- g. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)



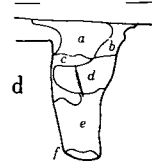
C III-109

- a. 暗褐色土層(含、焼土)
- b. 暗褐色土層
- c. 暗褐色土層(汚れ火山灰)
- d. 黒褐色土層
- e. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- f. 黄褐色土層(火山灰)



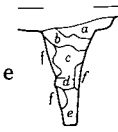
C III-110

- a. 黒色土層
- b. 黒褐色土層(含、焼土)
- c. 黒褐色土層
- d. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- e. 黄褐色土層(汚れ火山灰)



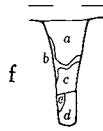
C III-111

- a. 褐色土層(含、焼土、炭化物)
- b. 褐色土層
- c. 褐色土層
- d. 褐色土層(汚れ火山灰)
- e. 褐色土層(汚れ火山灰)
- f. 褐色土層



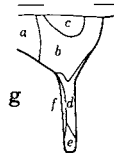
C III-112

- a. 黒褐色土層
- b. 暗褐色土層
- c. 褐色土層
- d. 黄褐色土層
- e. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- f. 黄褐色土層(汚れ火山灰)



C III-114

- a. 暗褐色土層(含、炭化物)
- b. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- c. 暗褐色土層(含、炭化物)
- d. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- e. 黄褐色土層(火山灰)



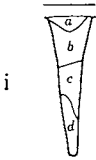
C III-115

- a. 褐色土層(含、炭化物)
- b. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- c. 黒褐色土層(含、焼土)
- d. 黄褐色土
- e. 褐色土層(含、焼土、炭化物)
- f. 褐色土層(含、炭化物)



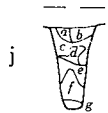
C III-116

- a. 褐色土層(含、焼土、炭化物)
- b. 褐色土層
- c. 褐色土層(含、炭化物)
- d. 暗褐色土層(含、炭化物)



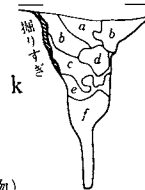
C III-117

- a. 黒褐色土層
- b. 褐色土層(含、焼土、炭化物)
- c. 黄褐色土層(含、炭化物)
- d. 黄褐色土層(汚れ火山灰)



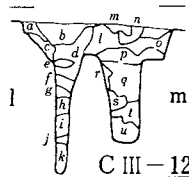
C III-118

- a. 黒褐色土層(含、焼土、炭化物)
- b. 暗褐色土層(含、炭化物)
- c. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- d. 黒褐色土層(含、炭化物)
- e. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- f. 暗褐色土層(含、炭化物)
- g. 黄褐色土層(汚れ火山灰)



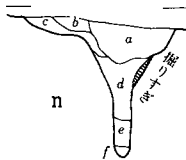
C III-119

- a. 黒色土層(クロボク)
- b. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- c. 暗褐色土層
- d. 黒褐色土層(含、焼土、炭化物)
- e. 黄橙色土層(含、炭化物)
- f. 黄褐色土層(汚れ火山灰)



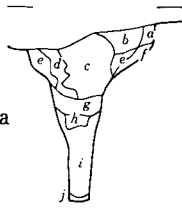
C III-120

- a. 褐色土層
- b. 黒褐色土層(クロボク)
- c. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- d. 暗褐色土層
- e. 極暗褐色土層
- f. 明褐色土層(汚れ火山灰)
- g. 褐色土層
- h. 暗褐色土層
- i. 褐色土層
- j. にぶい褐色土層
- k. 暗褐色土層
- l. 褐色土層(汚れ火山灰)
- m. 灰褐色土層(汚れ火山灰)
- n. 褐色土層(汚れ火山灰)
- o. 褐色土層(汚れ火山灰)
- p. 暗褐色土層
- q. 暗褐色土層
- r. 明褐色土層(火山灰)
- s. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- t. 黄褐色土層
- u. 明黄褐色土層(火山灰)



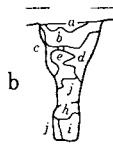
C III-122

- a. 黒褐色土層
- b. 暗褐色土層
- c. 褐色土層(含、炭化物)
- d. 褐色土層
- e. 黄褐色土層
- f. 黄褐色土層



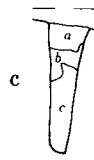
C III-123

- a. 褐色土層
- b. 暗褐色土層
- c. 暗褐色土層(含、炭化物)
- d. 褐色土層
- e. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- f. にぶい褐色土層(火山灰)
- g. にぶい黄褐色土層(火山灰)
- h. にぶい黄褐色土層(含、炭化物)
- i. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- j. 暗褐色土層



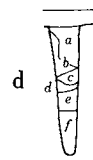
C III-124

- a. 褐色土層
- b. 褐色土層
- c. 明褐色土層(汚れ火山灰)
- d. 明褐色土層(含、炭化物)
- e. 黄褐色土層
- f. 茶褐色土層
- g. 明褐色土層
- h. 暗褐色土層
- i. 明褐色土層(含、炭化物)
- j. 明褐色土層



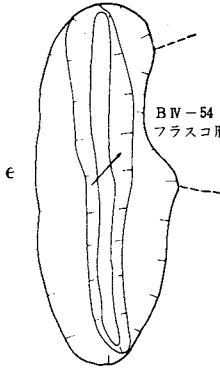
C III-125

- a. 暗褐色土層(汚れ火山灰)
- b. 暗褐色土層(汚れ火山灰)
- c. 褐色土層(汚れ火山灰)

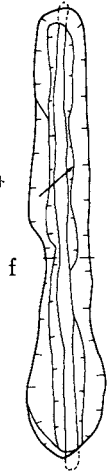


C III-126

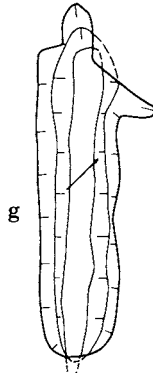
- a. 黒褐色土層(含、焼土、炭化物)
- b. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- c. 褐色土層(含、炭化物)
- d. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- e. 明褐色土層(含、炭化物)
- f. 黄褐色土層(汚れ火山灰)



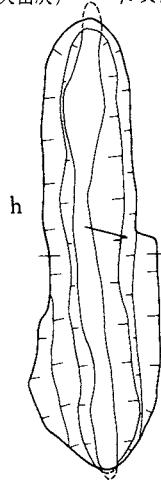
C IV-101



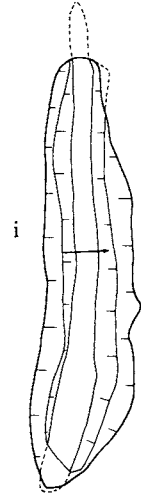
C IV-102



C IV-103



C IV-104



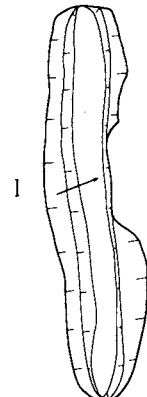
C IV-105



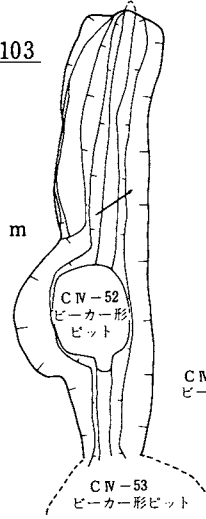
C IV-106



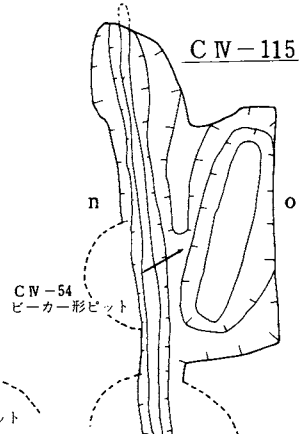
C IV-107



C IV-108



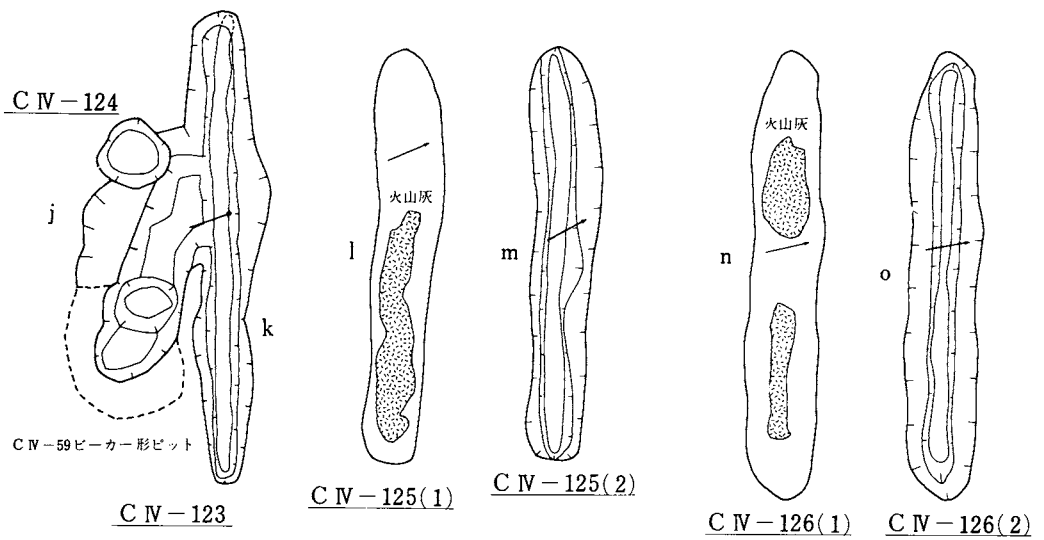
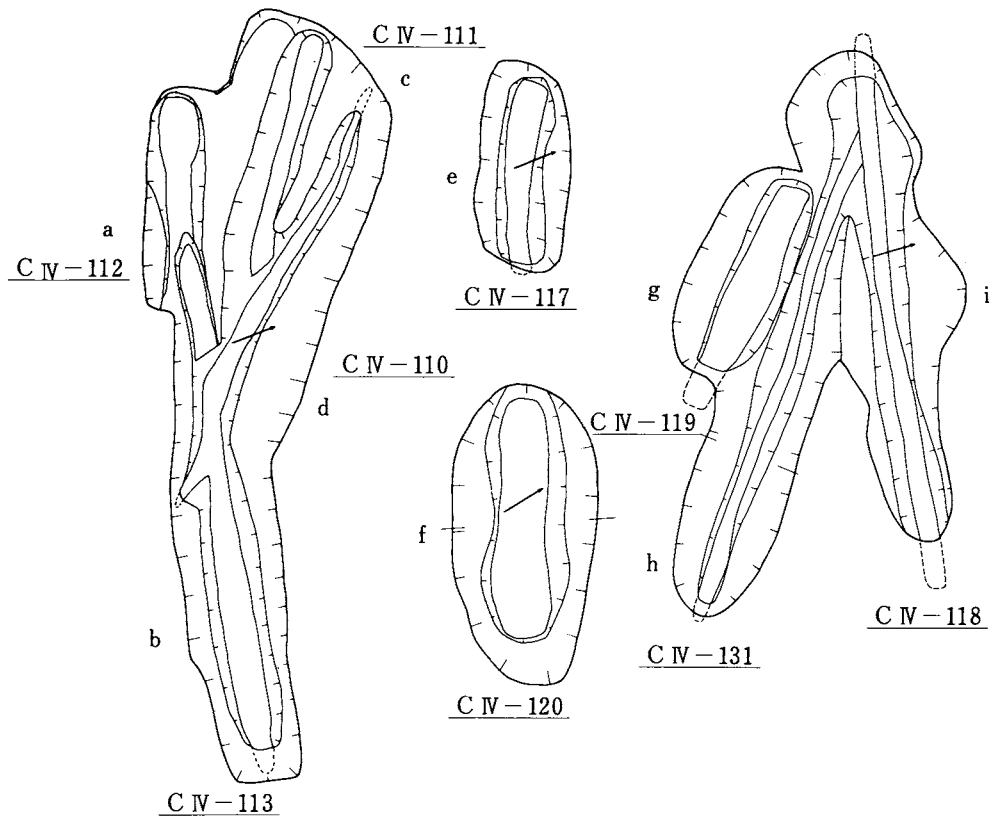
C IV-109



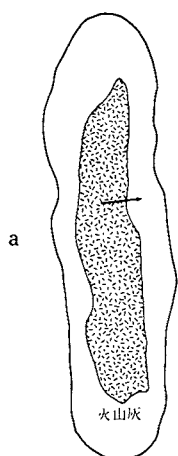
C IV-115

C IV-106

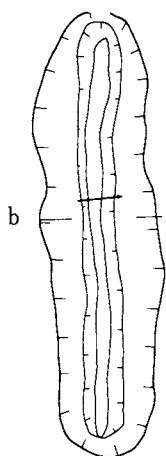
図版147



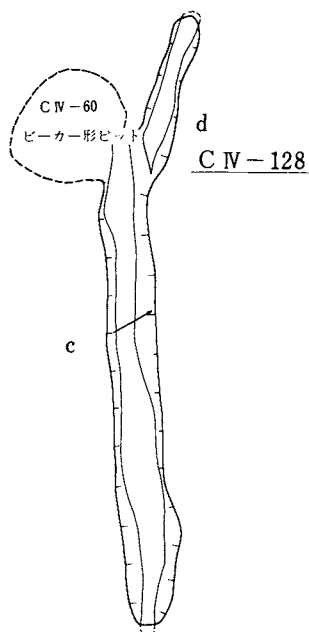




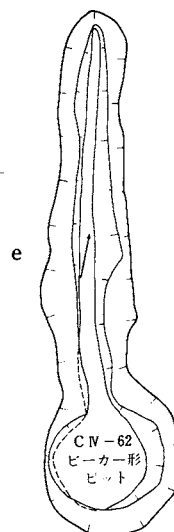
C IV-127(1)



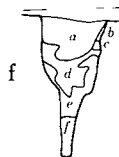
C IV-127(2)



C IV-129

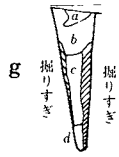


C IV-130



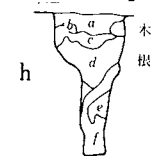
C IV-101

- a. 黒褐色土層
- b. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- c. 黄褐色土層(含、火山灰、炭化物)
- d. 褐色土層(含、炭化物)
- e. 黄褐色土層(含、火山灰土、炭化物)
- f. 黄褐色土層(含、炭化物)



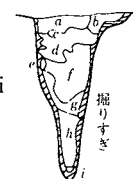
C IV-102

- a. 暗褐色土層
- b. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- c. 黄褐色土層(火山灰)
- d. 黄褐色土層(汚れ火山灰)



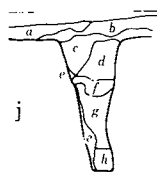
C IV-103

- a. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- b. 褐色土層
- c. 明黄褐色土層
- d. 褐色土層
- e. 明黄橙色土層
- f. 橙色土層(火山灰)



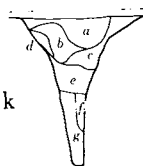
C IV-104

- a. 黑色土層(含、焼土)
- b. 黒褐色土層(含、炭化物)
- c. 褐色土層
- d. 黒褐色土層(含、焼土、炭化物)
- e. 黄褐色土層(火山灰)
- f. 褐色土層(含、炭化物)
- g. 褐色土層(火山灰)
- h. 黄褐色土層(含、炭化物)
- i. 黄褐色土層(含、炭化物)



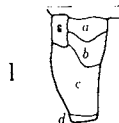
C IV-105

- a. 暗褐色土層
- b. 褐色土層
- c. 暗褐色土層
- d. 黒褐色土層
- e. 明黄褐色土層
- f. 暗褐色土層
- g. 黄褐色土層(火山灰)
- h. 褐色土層(火山灰)



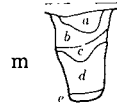
C IV-108

- a. 暗褐色土層
- b. 褐色土層
- c. 褐色土層
- d. 褐色土層(含、炭化物)
- e. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- f. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- g. 黄褐色土層(汚れ火山灰)



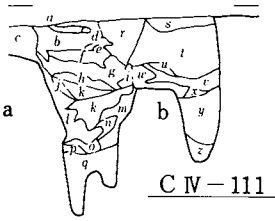
C IV-107

- a. 褐色土層(含、炭化物)
- b. 褐色土層(汚れ火山灰)
- c. 褐色土層(汚れ火山灰)
- d. 暗褐色土層



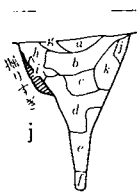
C IV-106

- a. 褐色土層(汚れ火山灰、含、焼土)
- b. 明褐色土層(火山灰)
- c. 明褐色土層
- d. 明褐色土層
- e. 黄橙色土層(火山灰)



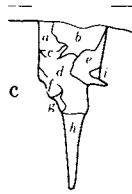
C IV-110

- a. 褐色土層(含、燒土、炭化物)
- b. 黄褐色土層(含、炭化物)
- c. 明褐色土層(含、炭化物)
- d. 明褐色土層(含、炭化物)
- e. 黄褐色土層
- f. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- g. 暗褐色土層(含、燒土、炭化物)
- h. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- i. 黄褐色土層(含、炭化物)
- j. 黑褐色土層(含、炭化物)
- k. 暗褐色土層(含、炭化物)
- l. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- m. 明褐色土層(汚れ火山灰)
- n. 暗褐色土層
- o. 暗褐色土層
- p. 褐色土層(汚れ火山灰)
- q. 黄褐色土層
- r. 暗褐色土層(含、炭化物)
- s. 明褐色土層(含、炭化物)
- t. 明褐色土層(含、炭化物)
- u. 暗褐色土層(含、炭化物)
- v. 暗褐色土層(含、炭化物)
- w. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- x. 暗褐色土層
- y. 褐色土層(含、炭化物)
- z. 暗褐色土層(汚れ火山灰)



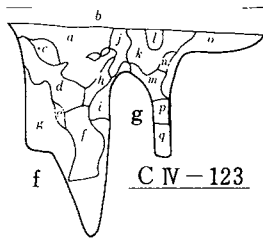
C IV-127

- a. 褐色土層(含、炭化物)
- b. 黑褐色土層(含、燒土)
- c. 暗褐色土層(含、燒土)
- d. 黄褐色土層
- e. 黄褐色土層
- f. 黄褐色土層(含、炭化物)
- g. 明褐色土層(含、燒土、炭化物)
- h. 暗褐色土層(含、燒土、炭化物)
- i. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- j. 黄橙色土層(火山灰)
- k. 黄褐色土層(汚れ火山灰)



C IV-116

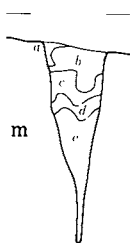
- a. 褐色土層
- b. 黑褐色土層
- c. 黄褐色土層
- d. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- e. 褐色土層
- f. 黄褐色土層
- g. 明黄褐色土層(含、炭化物)
- h. 暗褐色土層
- i. 黑褐色土層



C IV-123

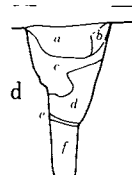
C IV-124

- a. 黑褐色土層(含、炭化物)
- b. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- c. 褐色土層
- d. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- e. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- f. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- g. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- h. 褐色土層(含、炭化物)
- i. 黄橙色土層(火山灰)
- j. 褐色土層(含、燒土)
- k. 暗褐色土層(含、燒土、炭化物)
- l. 黑褐色土層(含、燒土、炭化物)
- m. 明褐色土層(含、炭化物)
- n. 褐色土層(含、燒土)
- o. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- p. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- q. 黄褐色土層(汚れ火山灰)



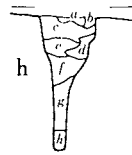
C IV-131

- a. 黑褐色土層
- b. 黑色土層
- c. 暗褐色土層
- d. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- e. 明黄褐色土層(含、炭化物)



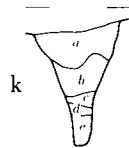
C IV-117

- a. 暗褐色土層(含、炭化物)
- b. 褐色土層(含、燒土、炭化物)
- c. 褐色土層(含、燒土、炭化物)
- d. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- e. 黑色土層
- f. 黄褐色土層(汚れ火山灰)



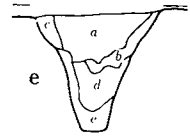
C IV-125

- a. 明褐色土層
- b. 暗褐色土層
- c. 黑色土層(クロボク)
- d. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- e. 黑褐色土層
- f. 褐色土層(汚れ火山灰)
- g. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- h. 黄褐色土層(汚れ火山灰)



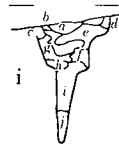
C IV-130

- a. 黑褐色土層
- b. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- c. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- d. 黄褐色土層(火山灰)
- e. 黄褐色土層(汚れ火山灰)



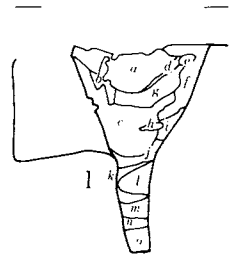
C IV-120

- a. 黑褐色土層
- b. 暗褐色土層
- c. 褐色土層
- d. 明褐色土層(汚れ火山灰)
- e. 黄褐色土層(汚れ火山灰)



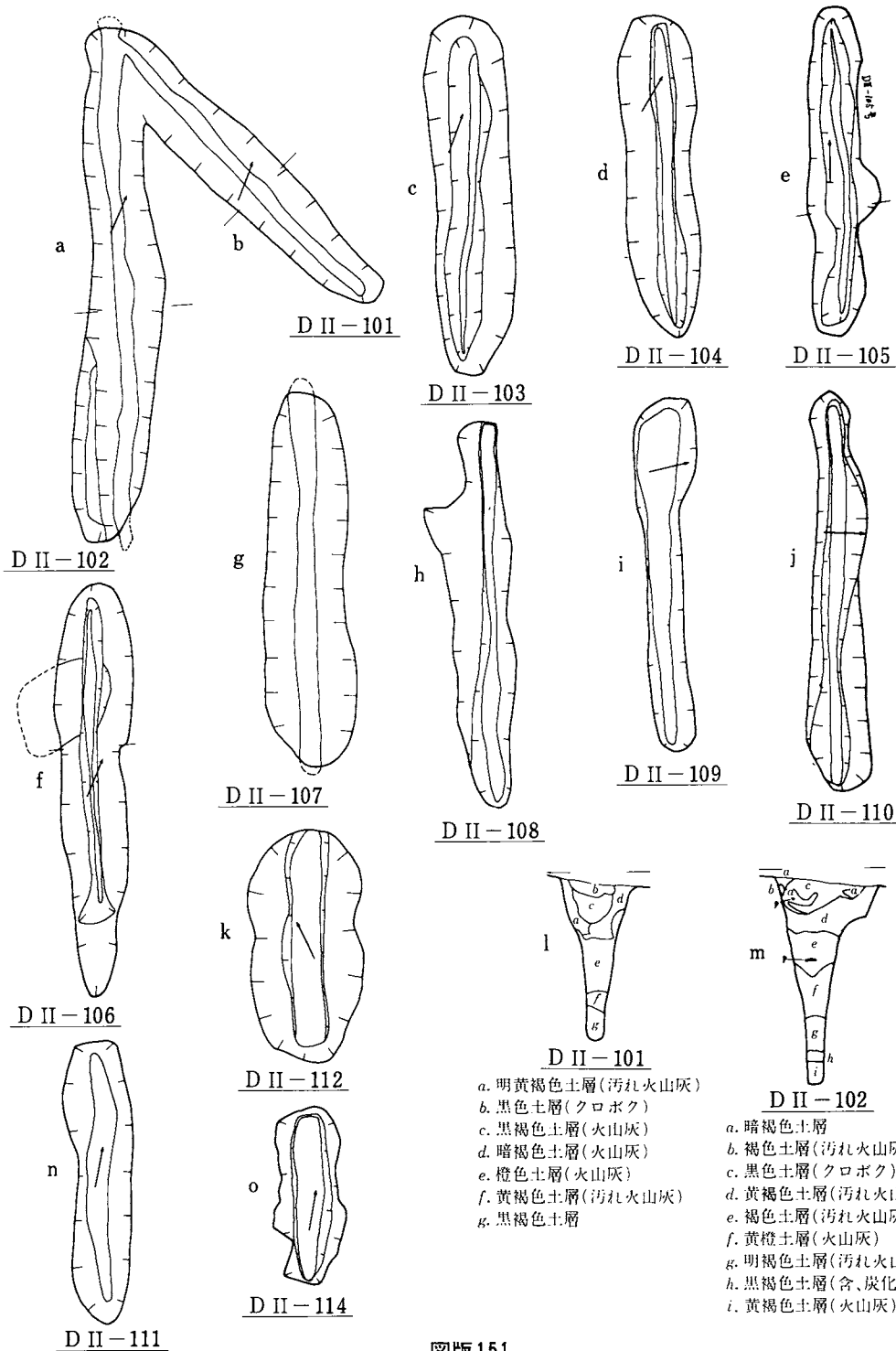
C IV-126

- a. 明黄褐色土層
- b. 暗褐色土層
- c. 褐色土層
- d. 黄褐色土層(火山灰)
- e. 暗褐色土層
- f. 褐色土層
- g. 灰褐色土層
- h. 明褐色土層(汚れ火山灰)
- i. 明褐色土層(汚れ火山灰)
- j. 橙色土層(汚れ火山灰)



C IV-129

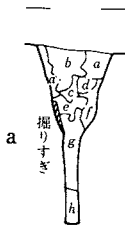
- a. 黄褐色土層
- b. 暗褐色土層(含、炭化物)
- c. 黑褐色土層(含、燒土、炭化物)
- d. 黑色土層(含、炭化物)
- e. 黑色土層(含、燒土、炭化物)
- f. 黑褐色土層(含、燒土、炭化物)
- g. 黑褐色土層(含、燒土、炭化物)
- h. 暗褐色土層
- i. 黑褐色土層(含、燒土)
- j. 黄褐色土層
- k. 黑褐色土層
- l. 暗褐色土層
- m. 黑褐色土層(含、炭化物)
- n. 褐色土層
- o. 黄褐色土層



- a. 明黄褐色土層(汚れ火山灰)
- b. 黑色土層(クロボク)
- c. 黑褐色土層(火山灰)
- d. 暗褐色土層(火山灰)
- e. 橙色土層(火山灰)
- f. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- g. 黑褐色土層

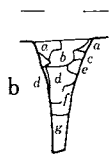
- a. 暗褐色土層
- b. 褐色土層(汚れ火山灰)
- c. 黑色土層(クロボク)
- d. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- e. 褐色土層(汚れ火山灰)
- f. 黄橙土層(火山灰)
- g. 明褐色土層(汚れ火山灰)
- h. 黑褐色土層(含、炭化物)
- i. 黄褐色土層(火山灰)

図版151



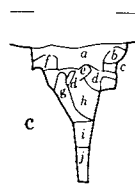
**D II-103**

- a. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- b. 黒色土層
- c. 黒褐色土層
- d. 暗褐色土層
- e. 褐色土層
- f. 黄褐色土層
- g. 黄褐色土層
- h. 黒褐色土層



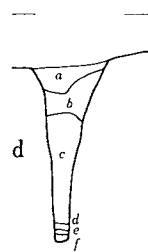
**D II-104**

- a. 黒色土層
- b. 黒色土層
- c. 黒褐色土層
- d. 暗褐色土層
- e. 暗褐色層
- f. 明褐色土層
- g. 褐色土層(汚れ火山灰)



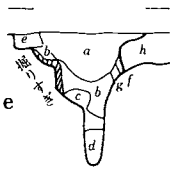
**D II-105**

- a. 黒色土層(クロボク)
- b. 暗褐色土層
- c. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- d. 暗褐色土層
- e. 褐色土層
- f. 明褐色土層
- g. 黄褐色土層
- h. 暗褐色土層
- i. 黄褐色土層
- j. 褐色土層(汚れ火山灰)



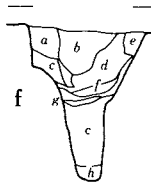
**D II-107**

- a. 黒褐色土層
- b. 暗褐色土層
- c. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- d. 黒色土層(クロボク)
- e. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- f. 黒褐色土層



**D II-108**

- a. 黒色土層(クロボク)
- b. 黒褐色土層
- c. 褐色土層(汚れ火山灰)
- d. 黒褐色土層
- e. 黒色土層(クロボク)
- f. 黒褐色土層
- g. 黒色土層
- h. 褐色土層(含、炭化物)



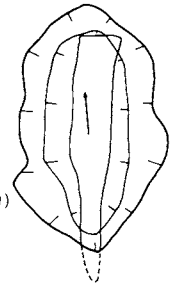
**D II-112**

- a. 褐色土層
- b. 黒褐色土層(汚れ火山灰)
- c. 黄褐色土層
- d. 黒褐色土層
- e. 黄褐色土層
- f. 褐色土層
- g. 黒褐色土層
- h. 黄褐色土層(汚れ火山灰)

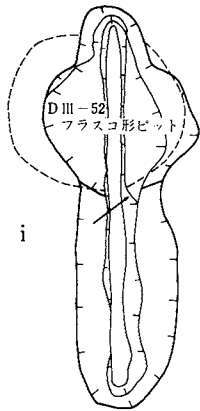


**D II-114**

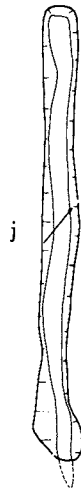
- a. 暗褐色土層(含、炭化物)
- b. 褐色土層
- c. 黒褐色土層(含、焼土、炭化物)
- d. 黄褐色土層



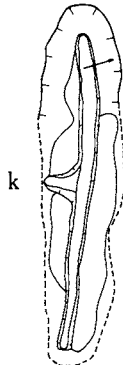
**D III-101**



**D III-102**



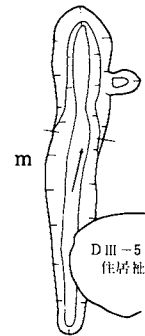
**D III-103**



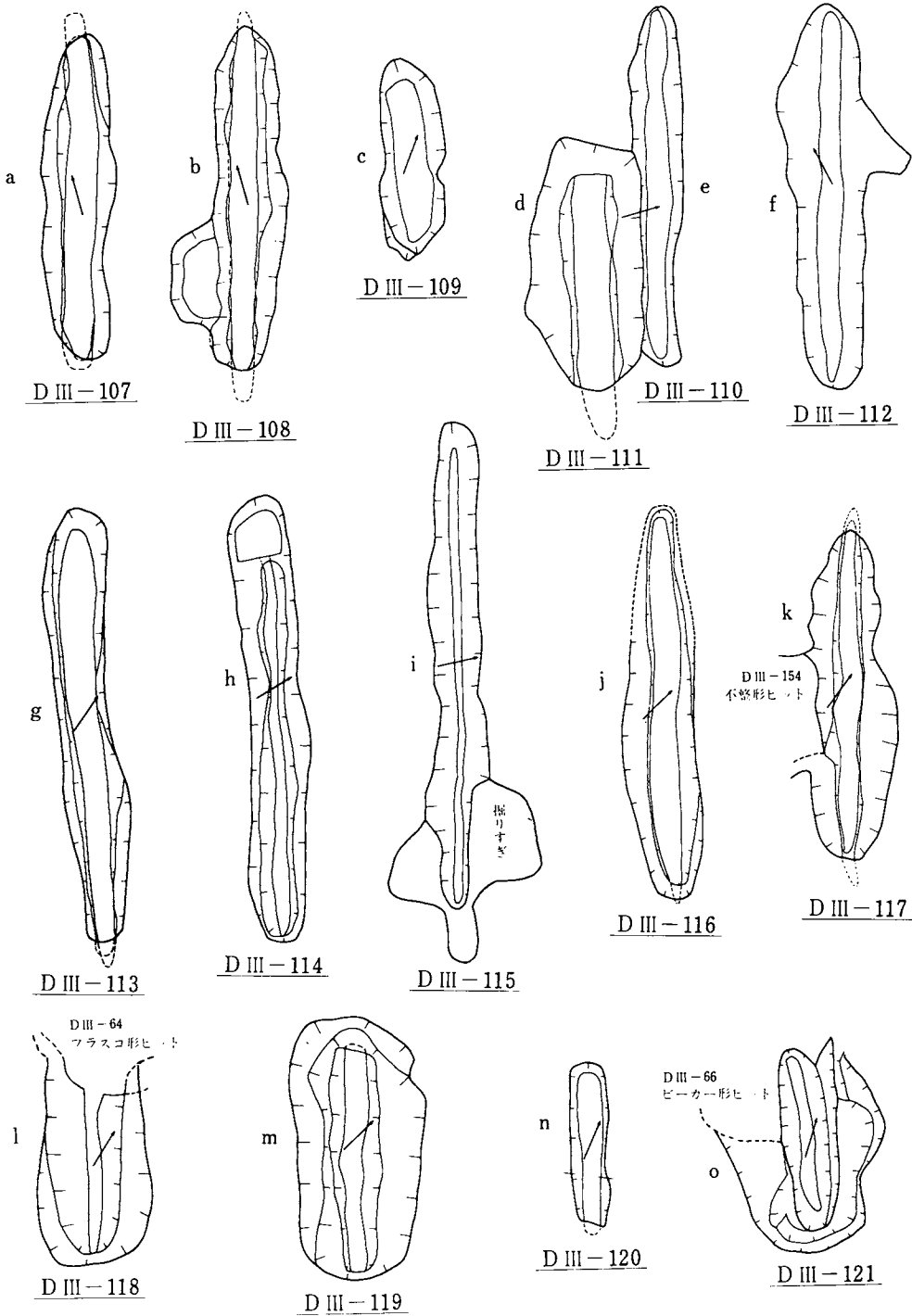
**D III-104**



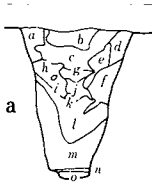
**D III-105**



**D III-106**

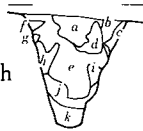


図版153



D III-101

- a. 暗褐色土層(含、燒土、炭化物)
- b. 黑褐色土層(含、燒土、炭化物)
- c. 黑色土層(含、燒土、炭化物)
- d. 褐色土層(含、燒土、炭化物)
- e. 黑色土層(含、燒土、炭化物)
- f. 明黃褐色土層(含、炭化物)
- g. 極暗褐色土層(含、燒土、炭化物)
- h. 黃褐色土層(含、炭化物)
- i. 極暗褐色土層
- j. 暗褐色土層(含、燒土、炭化物)
- k. 褐色土層(含、燒土、炭化物)
- l. 黃褐色土層(含、燒土、炭化物)
- m. 黃褐色土層
- n. 黑褐色土層(含、炭化物)
- o. 明黃褐色土層



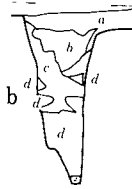
D III-105

- a. 褐色土層(含、炭化物)
- b. 黃褐色土層(含、炭化物)
- c. 黃褐色土層(含、燒土、炭化物)
- d. 暗褐色土層(含、燒土、炭化物)
- e. 暗褐色土層(含、燒土、炭化物)
- f. 明黃褐色土層
- g. 黃褐色土層
- h. 黃褐色土層(含、炭化物)
- i. 黃褐色土層(含、炭化物)
- j. 黃褐色土層(含、炭化物)
- k. 明褐色土層



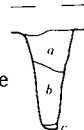
D III-114

- a. 黑色土層(クロボク)
- b. 黑褐色土層(含、炭化物)
- c. 黑褐色土層
- d. 暗褐色土層
- e. 黃褐色土層(汚れ火山灰)
- f. 暗褐色土層
- g. 黃褐色土層(火山灰)
- h. 黃褐色土層(汚れ火山灰)



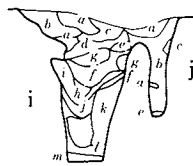
D III-102

- a. 黑色土層(クロボク)(含、炭化物)
- b. 黑褐色土層
- c. 褐色土層(含、炭化物)
- d. 黃褐色土層(含、炭化物)
- e. 暗褐色土層



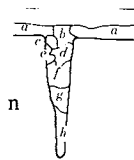
D III-106

- a. 暗褐色土層
- b. 褐色土層
- c. 褐色土層



D III-111

- a. 黃褐色土層
- b. 暗褐色土層
- c. 暗褐色土層(含、燒土、炭化物)
- d. 黑褐色土層(含、炭化物)
- e. 暗褐色土層
- f. 黃褐色土層(汚れ火山灰)
- g. 黃褐色土層
- h. 明褐色土層
- i. 明褐色土層(汚れ火山灰)
- j. 褐色土層(含、炭化物)
- k. 明褐色土層(火山灰)
- l. 明褐色土層(火山灰)
- m. 黑色炭化物層



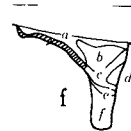
D III-115

- a. 暗褐色土層(第II層)
- b. 暗褐色土層
- c. 黑褐色土層
- d. 暗褐色土層
- e. 黃褐色土層
- f. 暗褐色土層
- g. 褐色土層
- h. 褐色土層



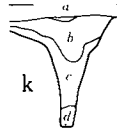
D III-103

- a. 褐色土層
- b. 暗褐色土層
- c. 褐色土層
- d. 暗褐色土層

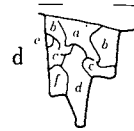


D III-108

- a. 褐色土層(含、炭化物)
- b. 暗褐色土層
- c. 暗褐色土層
- d. 黃褐色土層(汚れ火山灰)
- e. 褐色土層(含、炭化物)
- f. 黃褐色土層(火山灰)



- a. 黑褐色土層(含、燒土、炭化物)
- b. 暗褐色土層(含、燒土)
- c. 黃褐色土層(火山灰)
- d. 暗褐色土層



D III-104

- a. 黑色土層
- b. 暗褐色土層(含、炭化物)
- c. 暗褐色土層(含、炭化物)
- d. 褐色土層(汚れ火山灰)
- e. 黃褐色土層(火山灰)
- f. 明褐色土層(火山灰)



D III-109

- a. 暗褐色土層(含、燒土、炭化物)
- b. 火山灰
- c. 暗褐色土層(含、燒土、炭化物)
- d. 褐色土層(含、燒土)
- e. 暗褐色土層(火山灰)
- f. 黃褐色土層(含、炭化物)
- g. 黃褐色土層
- h. 黃褐色土層
- i. 黃褐色土層
- j. 黃褐色(火山灰)
- k. 暗褐色土層
- l. 黃褐色土層
- m. 黃褐色土層



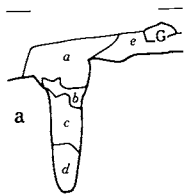
D III-113

- a. 黑褐色土層
- b. 褐色土層(含、汚れ火山灰)
- c. 褐色土層(含、汚れ火山灰)
- d. 暗褐色土層
- e. 褐色土層
- f. 黃褐色土層(汚れ火山灰)
- g. 黃褐色土層(汚れ火山灰)



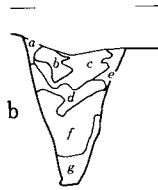
D III-116

- a. 黑色土層(クロボク)
- b. 暗褐色土層
- c. 暗褐色土層
- d. 黃褐色土層
- e. 黑色土層



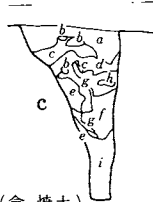
D III-117

- a. 黒褐色土層(含、炭化物)
- b. 暗褐色土層
- c. 褐色土層
- d. 暗褐色土層(火山灰)
- e. 暗褐色土層(含、焼土)



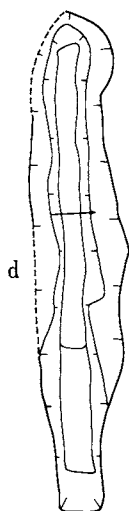
D III-118

- a. 黒色土層
- b. 黒色土層(含、炭化物)
- c. 褐色土層
- d. 褐色土層(含、炭化物)
- e. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- f. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- g. 明褐色土層(汚れ火山灰)

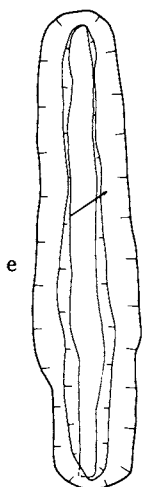


D III-119

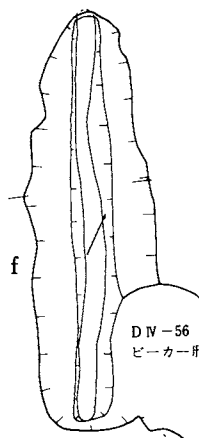
- a. 褐色土層(含、炭化物)
- b. 黄褐色土層
- c. 褐色土層(含、焼土)
- d. 褐色土層
- e. 黒色土層(含、炭化物)
- f. 暗褐色土層(含、炭化物)
- g. 褐色土層(含、炭化物)
- h. 黄褐色土層(含、炭化物)
- i. 黄褐色土層



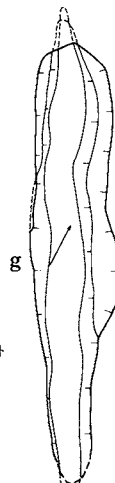
D IV-101



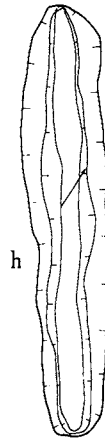
D IV-102



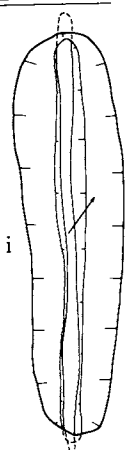
D IV-103



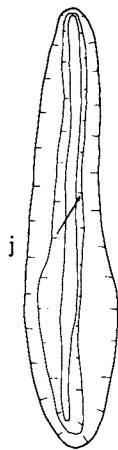
D IV-104



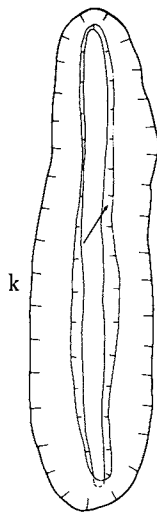
D IV-105



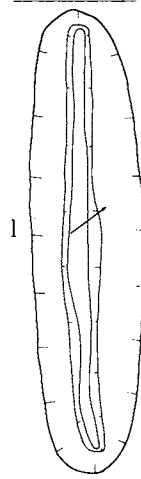
D IV-106



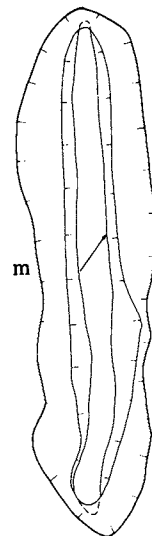
D III-107



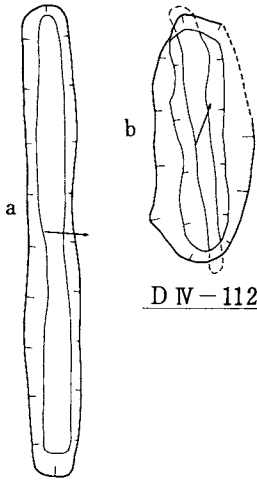
D IV-108



D IV-109

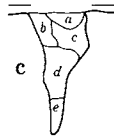


D IV-110



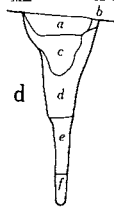
D IV-111

D IV-112



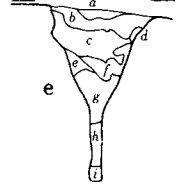
D IV-101

- a. 黑色土層(含、焼土)
- b. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- c. 黒褐色土層(含、焼土、炭化物)
- d. 褐色土層(汚れ火山灰)
- e. 暗褐色土層(含、焼土)



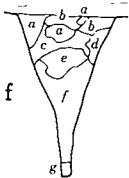
D IV-102

- a. 黑色土層(クロボク)
- b. 黒褐色土層(含、炭化物)
- c. 黒褐色土層(含、炭化物)
- d. 暗褐色土層
- e. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- f. 明褐色土層(火山灰)



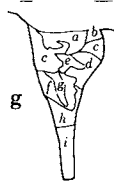
D IV-103

- a. 黑色土層(クロボク)
- b. 黒褐色土層(火山灰)
- c. 黒褐色土層
- d. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- e. 明黄褐色土層(火山灰)
- f. 暗褐色土層
- g. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- h. 黄褐色土層(火山灰)
- i. 暗褐色土層



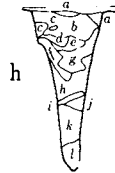
D IV-104

- a. 褐色土層(汚れ火山灰)
- b. 黒褐色土層(含、炭化物)
- c. 黒褐色土層(火山灰)
- d. 明黄褐色土層(火山灰)
- e. 黒褐色土層(火山灰)
- f. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- g. 暗褐色土層(火山灰)



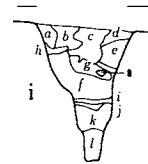
D IV-106

- a. 黑色土層
- b. 黒褐色土層
- c. 暗褐色土層
- d. 棕色土層
- e. 暗褐色土層
- f. 褐色土層(汚れ火山灰)
- g. 棕色土層(火山灰)
- h. 棕色土層(汚れ火山灰)
- i. 明褐色土層(汚れ火山灰)



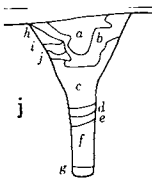
D IV-107

- a. 黄褐色土層(含、炭化物)
- b. 黒褐色土層
- c. 褐色土層(汚れ火山灰)
- d. 褐色土層(汚れ火山灰)
- e. 極暗褐色土層
- f. 濃い褐色土層(汚れ火山灰)
- g. 明褐色土層(汚れ火山灰)
- h. 明褐色土層
- i. 褐色土層
- j. 棕色土層(汚れ火山灰)
- k. 黄棕色土層
- l. 明褐色土層(汚れ火山灰)



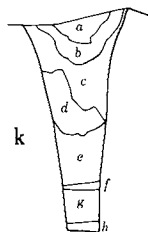
D IV-108

- a. 暗褐色土層
- b. 黒褐色土層
- c. 黑色土層
- d. 黒褐色土層
- e. 黒褐色土層
- f. 褐色土層
- g. 黒褐色土層
- h. 黄褐色土層
- i. 棕色土層
- j. 黄褐色土層
- k. 明褐色土層
- l. 棕色土層



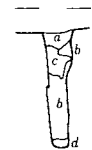
D IV-109

- a. 黑色土層(クロボク)
- b. 暗褐色土層
- c. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- d. 褐色土層(含、炭化物)
- e. 黄褐色土層
- f. 黄褐色土層
- g. 黄褐色土層
- h. 褐色土層
- i. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- j. 暗褐色土層



D IV-110

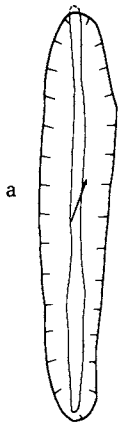
- a. 黑色土層(クロボク)
- b. 褐色土層(汚れ火山灰)
- c. 褐色土層(汚れ火山灰)
- d. 褐色土層(汚れ火山灰)
- e. 黄棕色土層(火山灰)
- f. 褐色土層(汚れ火山灰)
- g. 褐色土層(汚れ火山灰)
- h. 黄棕色土層



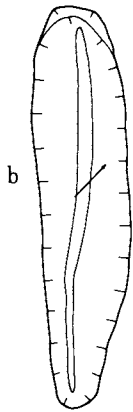
D IV-111

- a. 黒褐色土層(含、炭化物)
- b. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- c. 暗褐色土層(火山灰)
- d. 明褐色土層(火山灰)

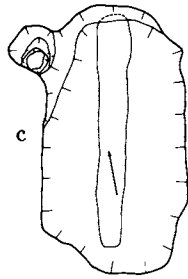




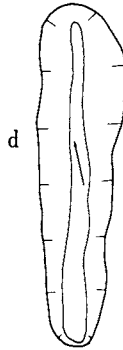
E II-101



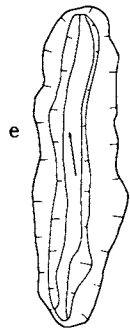
E II-102



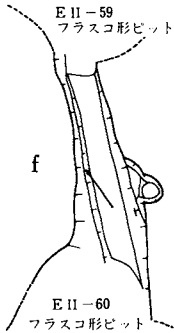
E II-103



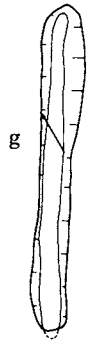
E II-104



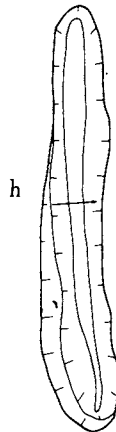
E II-105



E II-106



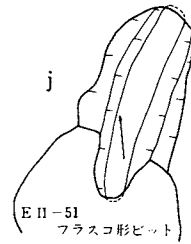
E II-107



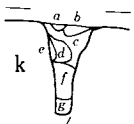
E II-108



E II-109

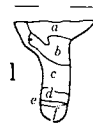


E II-110



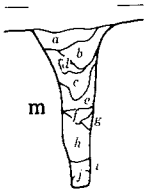
E II-101

- a. 褐色土層(含、焼土、炭化物)
- b. 褐色土層(含、焼土、炭化物)
- c. 暗褐色土層(クロボク)
- d. 褐色土層
- e. 褐色土層
- f. 褐色土層(含、炭化物)
- g. 暗褐色土層(含、炭化物)



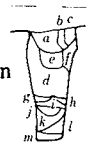
E II-104

- a. 黒褐色土層(クロボク)
- b. 明褐色土層
- c. 明褐色土層(汚れ火山灰)
- d. 明褐色土層(汚れ火山灰)
- e. 明褐色土層(汚れ火山灰)
- f. 明褐色土層



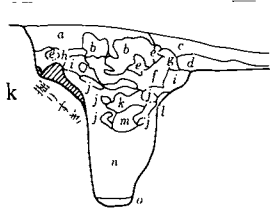
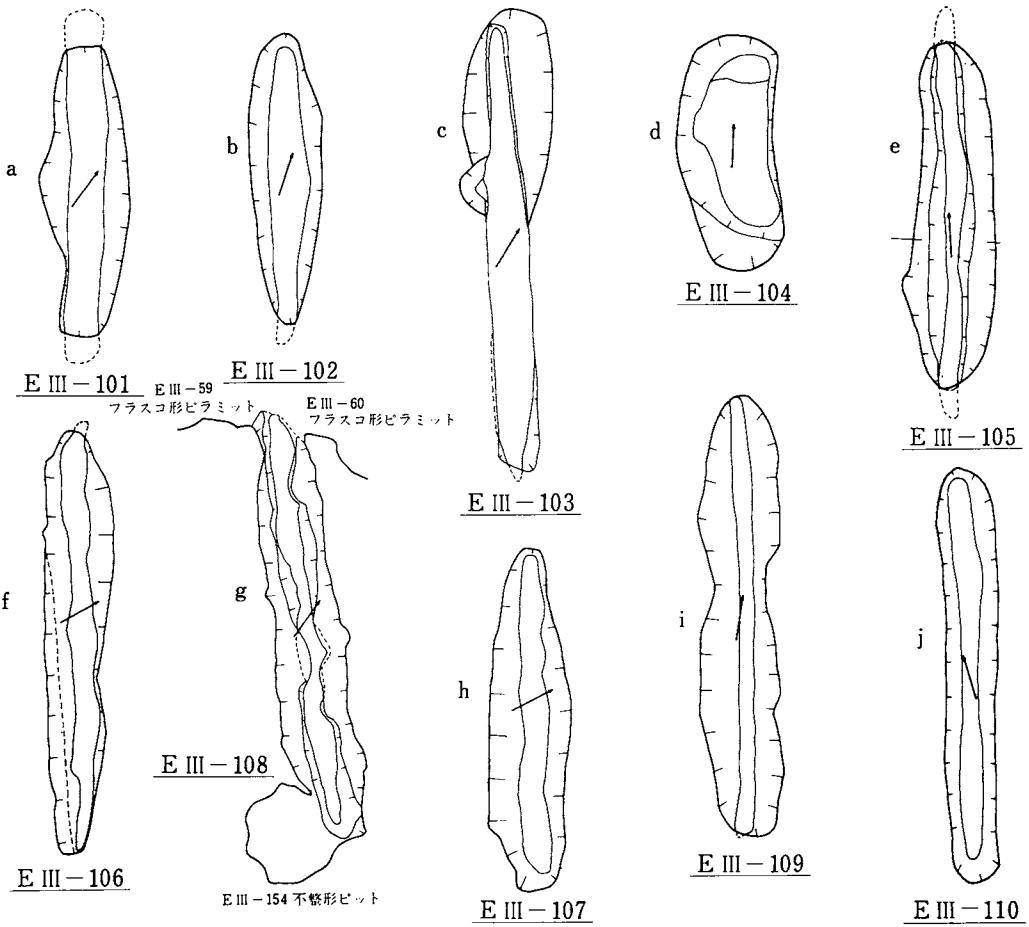
E II-102

- a. 黒褐色土層(含、焼土、炭化物)
- b. 黒褐色土層(含、焼土、炭化物)
- c. 明褐色土層(汚れ火山灰)
- d. 暗褐色土層(含、炭化物)
- e. 黄褐色土層(含、炭化物)
- f. 明褐色土層(汚れ火山灰)
- g. 明褐色土層(汚れ火山灰)
- h. 明褐色土層(含、炭化物)
- i. 黒色土層(含、炭化物)
- j. 明褐色土層(含、炭化物)

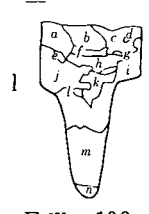


E II-106

- a. 黒褐色土層(クロボク)
- b. 褐色土層
- c. 黒褐色土層(含、炭化物)
- d. 褐色土層(火山灰)
- e. 暗褐色土層(含、炭化物)
- f. 褐色土層(含、炭化物)
- g. 黄褐色土層(含、炭化物)
- h. 褐色土層
- i. 暗褐色土層(含、炭化物)
- j. 黄褐色土層
- k. 褐色土層
- l. 黄褐色土層
- m. 暗褐色土層(含、炭化物)



- E III-101**
- a. 暗褐色土層(含、炭化物)
  - b. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
  - c. 暗褐色土層(含、炭化物)
  - d. 暗褐色土層(含、炭化物)
  - e. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
  - f. 黒色土層(クロボク)
  - g. 暗褐色土層(含、炭化物)
  - h. 暗褐色土層

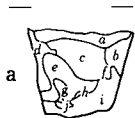


- E III-102**
- i. 黒色土層(クロボク)
  - j. 暗褐色土層
  - k. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
  - l. 黄褐色土層
  - m. 暗褐色土層
  - n. 黄橙色土層(汚れ火山灰)
  - o. 黄褐色土層(汚れ火山灰)



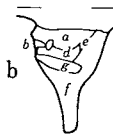
- E III-103**
- a. 褐色土層
  - b. 黄褐色土層(含、炭化物)
  - c. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
  - d. 黒褐色土層
  - e. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
  - f. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
  - g. 黒褐色土層
  - h. 黒褐色土層

図版158



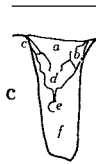
E III-104

- a. 黑褐色土層(含、焼土、炭化物)
- b. 暗褐色土層
- c. 黑褐色土層
- d. 明褐色土層(含、炭化物)
- e. 黑色土層(含、炭化物)
- f. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- g. 暗褐色土層
- h. 黑褐色土層
- i. 明褐色土層(含、炭化物)
- j. 黄橙色土層



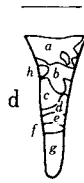
E III-105

- a. 黑色土層(クロボク)
- b. 褐色土層
- c. 明褐色土層
- d. 褐色土層(汚れ火山灰)
- e. 明褐色土層(汚れ火山灰)
- f. 明褐色土層(汚れ火山灰)
- g. 暗褐色土層



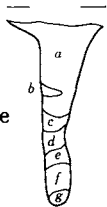
E III-107

- a. 暗褐色土層(クロボク)
- b. 黑褐色土層(含、炭化物)
- c. 褐色土層
- d. 黑褐色土層(含、炭化物)
- e. 褐色土層(汚れ火山灰)
- f. 黄褐色土層(汚れ火山灰)



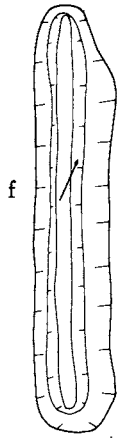
E III-108

- a. 暗褐色土層(含、炭化物)
- b. 褐色土層
- c. 暗褐色土層
- d. 橙色土層
- e. 褐色土層
- f. 暗褐色土層
- g. 灰褐色土層(含、炭化物)
- h. 黑褐色土層
- i. 明褐色土層

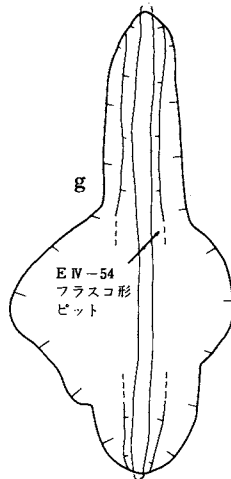


E III-109

- a. 黑色土層(含、焼土、炭化物)
- b. 黄橙色土層(火山灰)
- c. 黄橙色土層(火山灰)
- d. 黑色土層
- e. 黄橙色土層
- f. 黑色土層
- g. 黑色土層

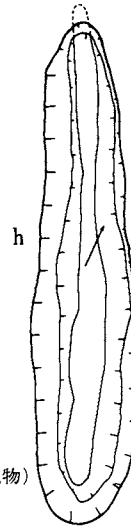


E IV-101

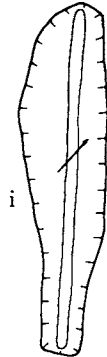


E IV-102

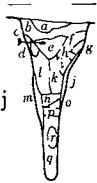
- a. 黑褐色土層(含、焼土、炭化物)
- b. 黄褐色土層(火山灰)
- c. 暗褐色土層(含、炭化物)
- d. 黄褐色土層(火山灰)
- e. 黄褐色土層(火山灰)
- f. 黄褐色土層(火山灰)
- g. 黄褐色土層(火山灰)
- h. 黄褐色土層
- i. 黄褐色土層
- j. 黄褐色土層
- k. 黑褐色土層
- l. 黑褐色土層



E IV-103



E IV-104

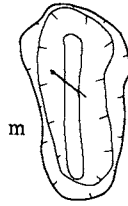


E IV-101

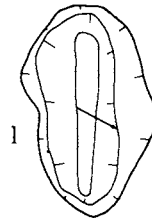
- a. 灰色土層(含、焼土)
- b. 黑褐色土層(含、焼土、炭化物)
- c. 黄褐色土層(火山灰)
- d. 黄褐色土層(火山灰)
- e. 黑褐色土層
- f. 暗褐色土層
- g. 黄褐色土層(火山灰)
- h. 暗褐色土層
- i. 黄褐色土層(火山灰)
- j. 黄褐色土層(火山灰)
- k. 黄褐色土層(含、炭化物)
- l. 黄褐色土層(火山灰)
- m. 黄褐色土層(火山灰)
- n. 黄褐色土層
- o. 褐色土層
- p. 黑褐色土層(含、焼土、炭化物)
- q. 褐色土層(火山灰)
- r. 黄褐色土層(火山灰)



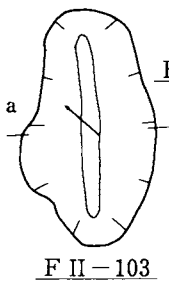
E IV-102



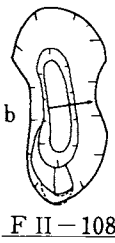
F II-101



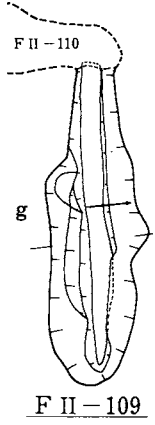
F II-102



F II-103

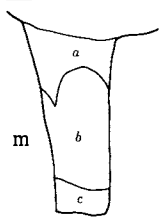


F II-108

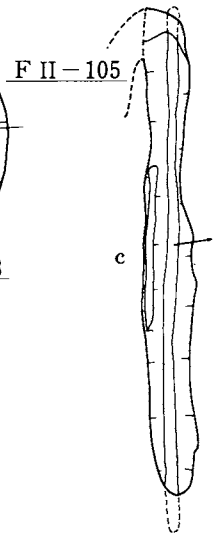


F II-109

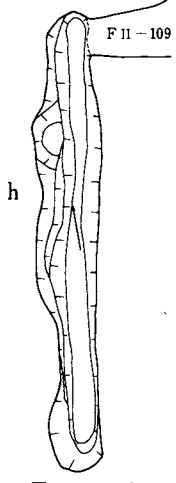
- a. 暗褐色土層
- b. 黄褐色土層
- c. 黑褐色土層



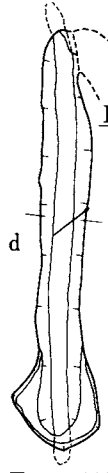
F II-105



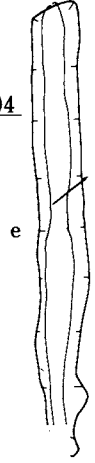
F II-104



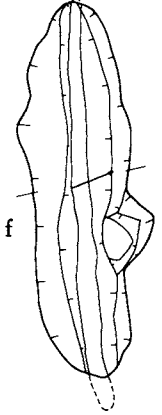
F II-110



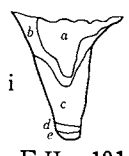
F II-105



F II-106

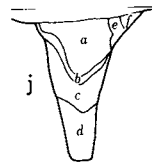


F II-107



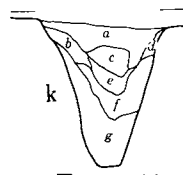
F II-101

- a. 黑褐色土層
- b. 明褐色土層(含、炭化物)
- c. 明褐色土層(汚れ火山灰)
- d. 黄褐色土層
- e. 明褐色土層



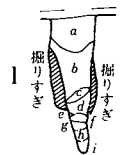
F II-102

- a. 黑色土層
- b. 明褐色土層
- c. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- d. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- e. 暗褐色土層
- f. 褐色土層



F II-103

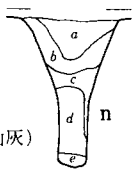
- a. 黑色土層
- b. 褐色土層
- c. 黑褐色土層
- d. 褐色土層
- e. 暗褐色土層
- f. 褐色土層
- g. 黄褐色土層(汚れ火山灰)



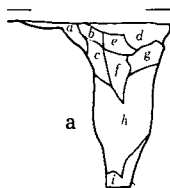
F II-104

- a. 褐色土層(含、炭化物)
- b. 黑褐色土層(含、焼土)
- c. 明褐色土層
- d. 暗褐色土層
- e. 黑褐色土層
- f. 明褐色土層
- g. 黑褐色土層
- h. 明褐色土層(汚れ火山灰)
- i. 明褐色土層

- a. 黑色土層(クロボク)
- b. 暗褐色土層
- c. 褐色土層
- d. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- e. 黑色土層(クロボロ)

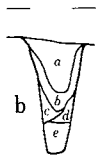


F II-107



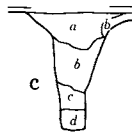
F II-108

- a. 暗褐色土層(含、炭化物)
- b. 黑褐色土層(含、炭化物)
- c. 黑褐色土層(含、炭化物)
- d. 極暗褐色土層
- e. 黑色土層
- f. 黑褐色土層
- g. 褐色土層(含、炭化物)
- h. 明褐色土層(汚れ火山灰)
- i. 明褐色土層(汚れ火山灰)



F II-110

- a. 黑褐色土層
- b. 褐色土層
- c. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- d. 褐色土層
- e. 褐色土層(汚れ火山灰)

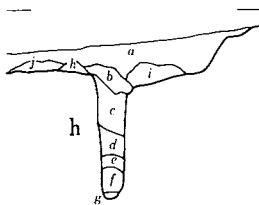


F II-109

- a. 暗褐色土層(クロボク)
- b. 褐色土層
- c. 褐色土層(汚れ火山灰)
- d. 暗褐色土層



F III-102



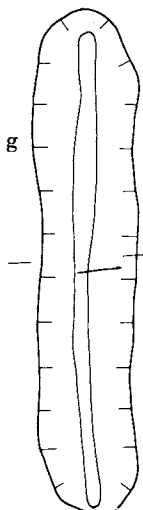
F III-101

- a. 暗褐色土層(含、炭化物)
- b. 暗褐色土層(含、焼土、物)
- c. 褐色土層(含、焼土、炭化物)
- d. 黄褐色土層
- e. 黑褐色土層(含、炭化物)
- f. 褐色土層
- g. 黑褐色土層
- h. 黄褐色土層(含、炭化物)
- i. 黄褐色土層
- j. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)

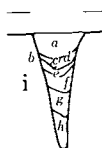
F III-101



F III-103

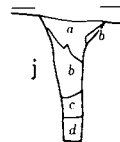


F III-105



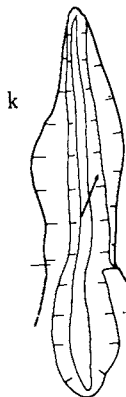
F III-102

- a. 黑褐色土層(クロボク)
- b. 褐色土層(汚れ火山灰)
- c. 黑褐色土層(汚れ火山灰)
- d. 褐色土層
- e. 黑褐色土層(汚れ火山灰)
- f. 明褐色土層
- g. 灰褐色土層(汚れ火山灰)
- h. 黑褐色土層(含、焼土)



F III-103

- a. 黑色土層(クロボク)
- b. 黑褐色土層
- c. 黑褐色土層
- d. 褐色土層(汚れ火山灰)

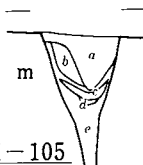


F IV-101



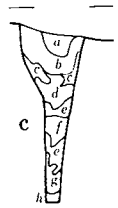
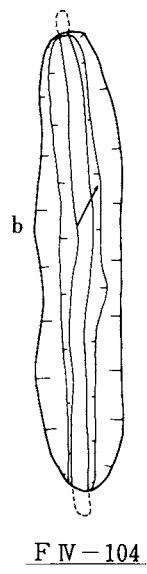
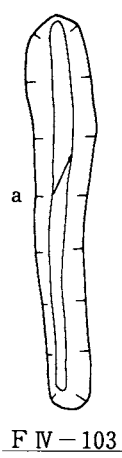
F IV-102

F IV-51  
フラスコ形ピット

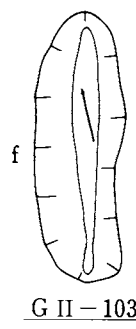
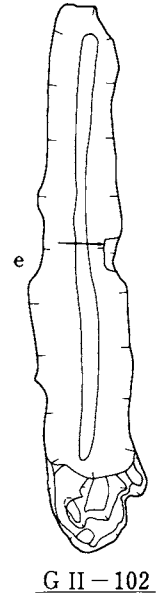
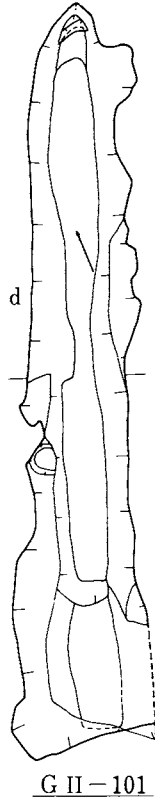


F III-105

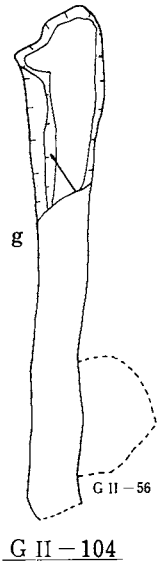
- a. 黑褐色土層(クロボク)
- b. 黑褐色土層
- c. 黑褐色土層
- d. 褐色土層(汚れ火山灰)
- e. 黄褐色土層(汚れ火山灰)



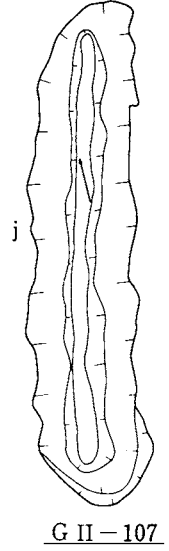
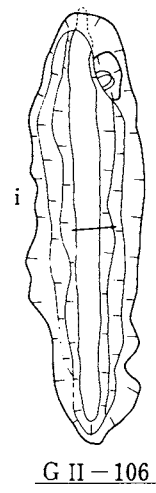
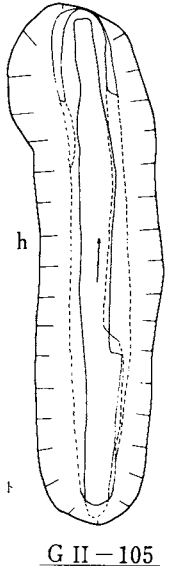
- F IV-104**
- a. 黒色土層(クロボク)
  - b. 黒褐色土層
  - c. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
  - d. 暗褐色土層
  - e. 黄褐色土層
  - f. 暗褐色土層(汚れ火山灰)
  - g. 暗褐色土層
  - h. 黒褐色土層

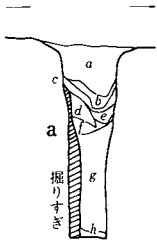


G II-51 フラスコ形ピント



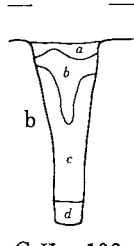
G II-56 ビーカー形ピント





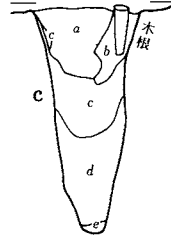
G II-101

- a. 極暗褐色土層(含、炭化物)
- b. 褐色土層
- c. 黄褐色土層
- d. 明黄褐色土層
- e. 褐色土層
- f. 黄褐色土層
- g. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- h. 暗褐色土層



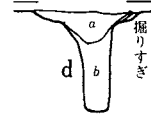
G II-102

- a. 暗褐色土層(含、炭化物)
- b. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- c. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- d. 黒褐色土層(含、焼土、炭化物)



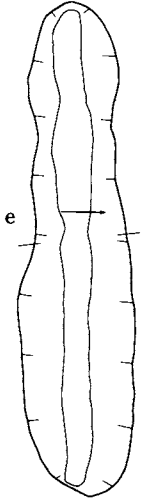
G II-105

- a. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- b. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)
- c. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- d. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- e. 暗褐色土層(含、焼土、炭化物)

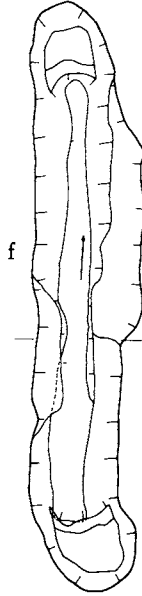


G II-106

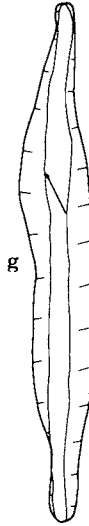
- a. 黒褐色土層(含、焼土、炭化物)
- b. 褐色土層(汚れ火山灰)



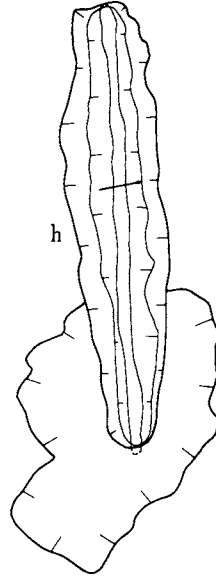
G III-101



G III-102



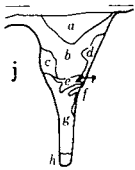
G III-103



G III-104

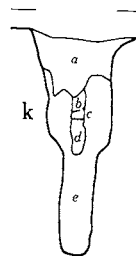


G III-105



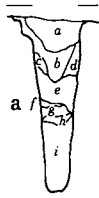
G III-101

- a. 黒色土層
- b. 黒褐色土層(クロボク)
- c. 暗褐色土層
- d. 暗褐色土層
- e. 黒褐色土層
- f. 褐色土層
- g. 黄橙色土層
- h. 暗褐色土層



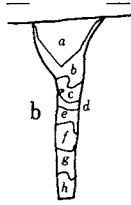
G III-102

- a. 黒褐色土層
- b. 黄褐色土層
- c. 黄褐色土層(クロボク)
- d. 黒褐色土層
- e. 黄褐色土層



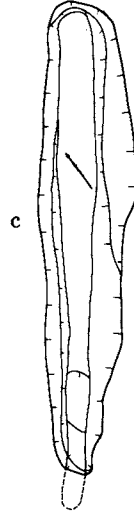
G III-103

- a. 極暗褐色土層
- b. 極暗褐色土層
- c. 褐色土層
- d. 褐色土層(クロボク点在)
- e. 褐色土層
- f. 褐色土層(クロボク点在)
- g. 明褐色土層
- h. 褐色土層
- i. 明褐色土層

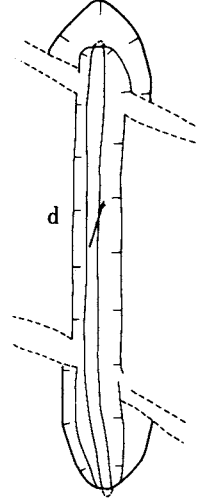


G III-104

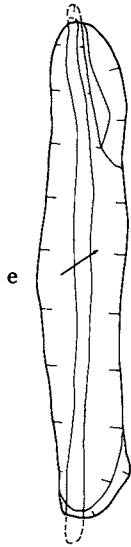
- a. 黒色土層
- b. 褐色土層
- c. 明褐色土層
- d. 黒褐色土層
- e. 明褐色土層
- f. 褐色土層
- g. 明褐色土層
- h. 黒褐色土層



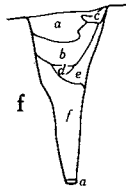
G IV-101



G IV-102

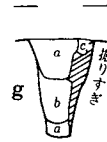


G IV-103



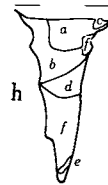
G IV-101

- a. 黒色土層(クロボク)
- b. 黒色土層
- c. 暗褐色土層
- d. 黒褐色土層
- e. 黄橙色土層(火山灰)
- f. 黄橙色土層(火山灰)



G IV-102

- a. 黒褐色土層(クロボク)
- b. 黒色土層
- c. 暗褐色土層

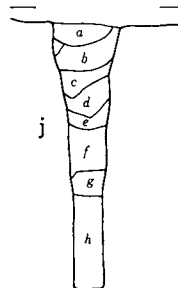


G IV-103

- a. 黒色土層(クロボク)
- b. 黒色土層
- c. 暗褐色土層
- d. 黒褐色土層
- e. 黄褐色土層(火山灰)
- f. 黄褐色土層(火山灰)



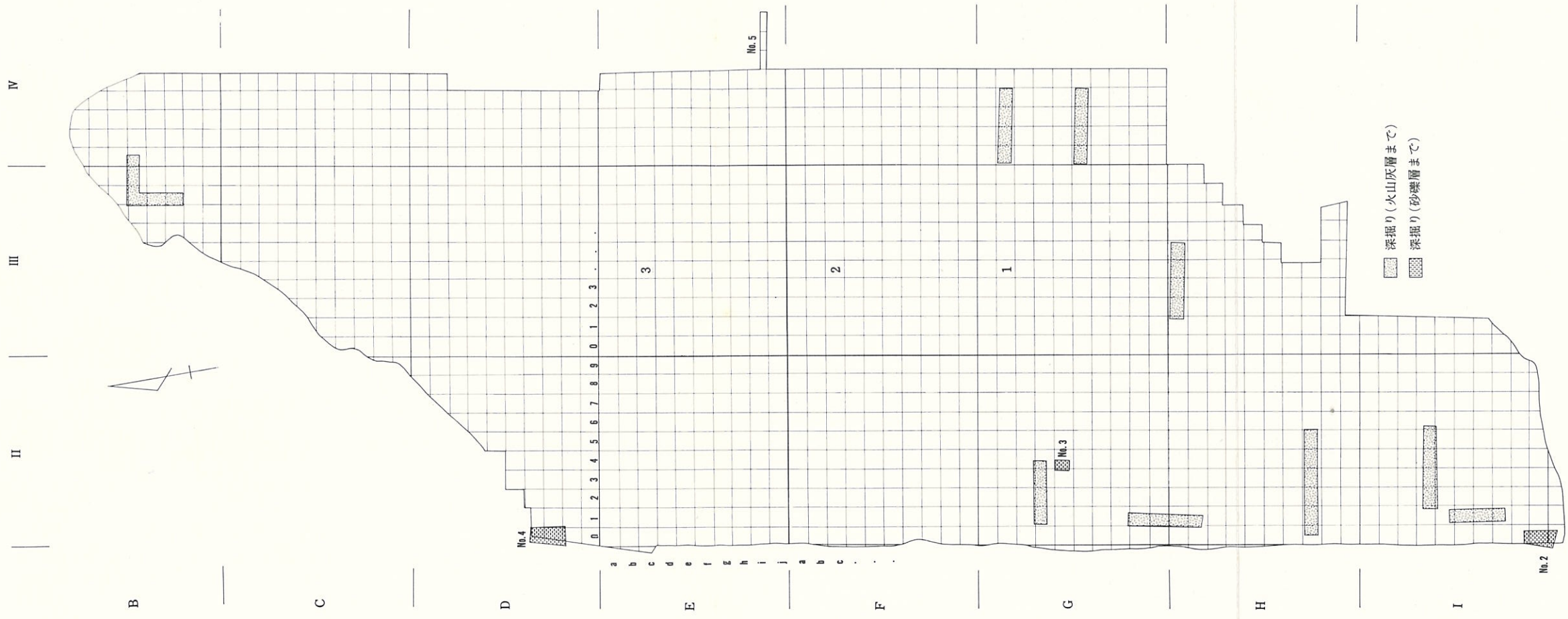
H II-101



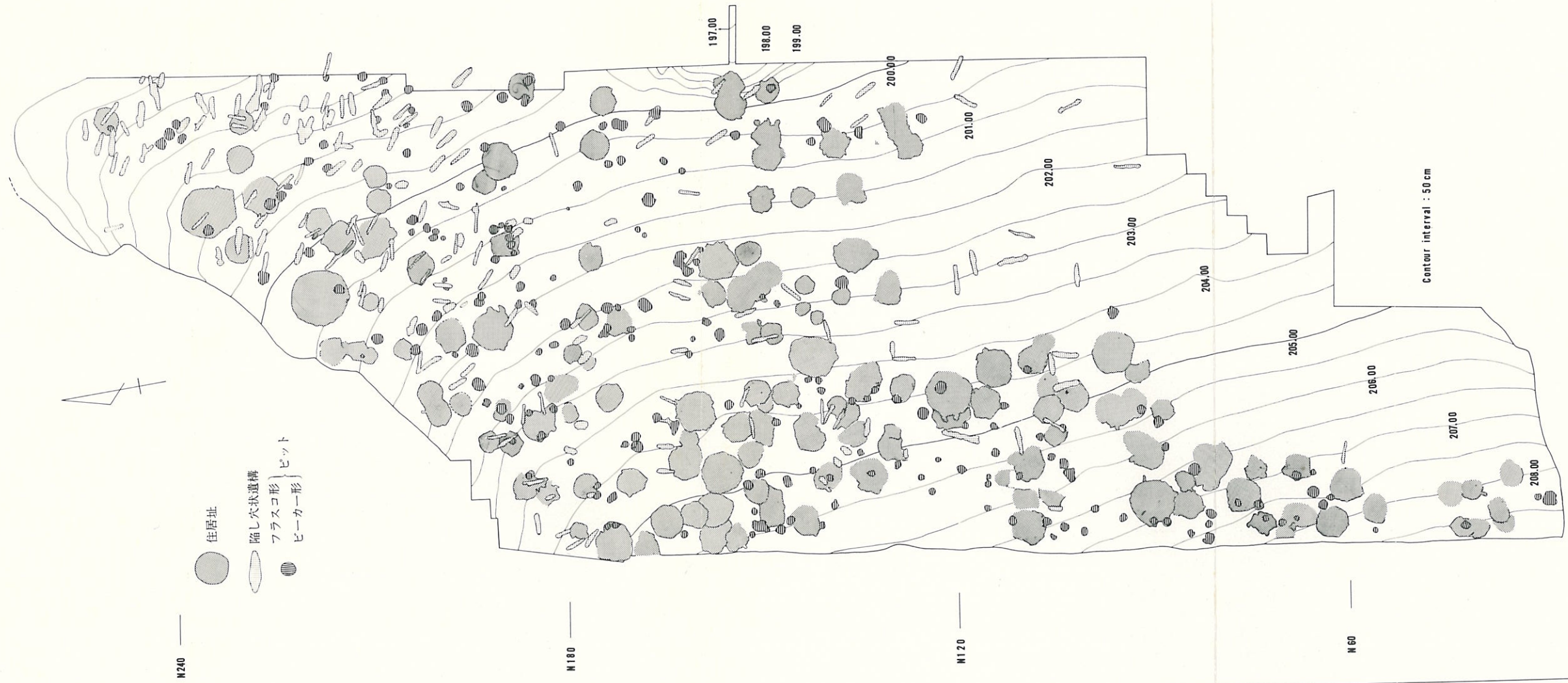
H II-101

- a. 暗褐色土層
- b. 黒褐色土層(クロボク)
- c. 黄褐色土層
- d. 黒褐色土層(クロボク)
- e. 黄褐色土層(汚れ火山灰)
- f. 黒褐色土層(クロボク)
- g. 暗褐色土層
- h. 黒褐色土層(クロボク)



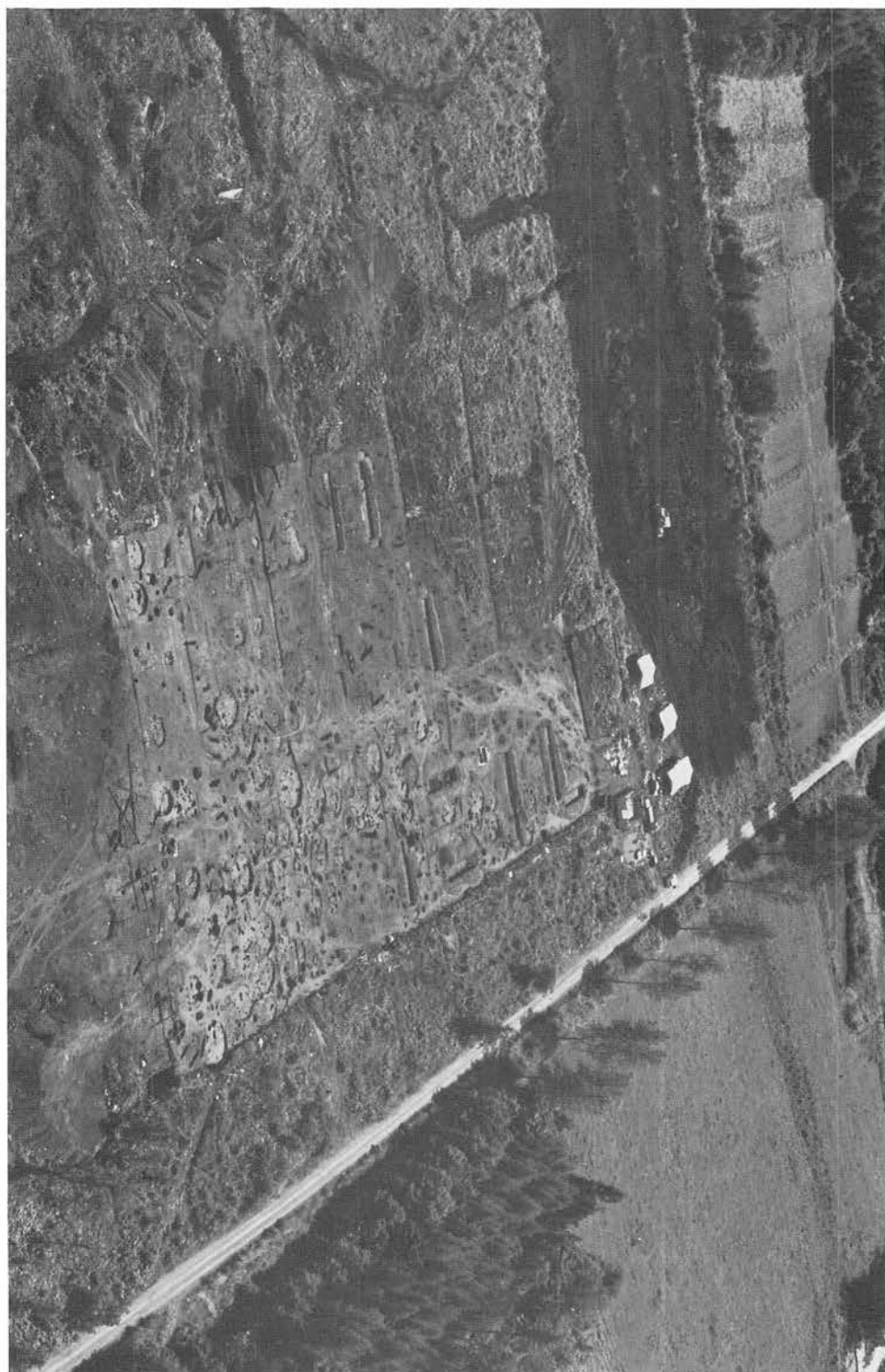


折り込み図版第I図 グリット配置図



折り込み図版第II図 遺構配置図

写真図版



遺跡全景(北東からの空中写真)  
写真図版1



a. 遺跡全景(東からの空中写真)

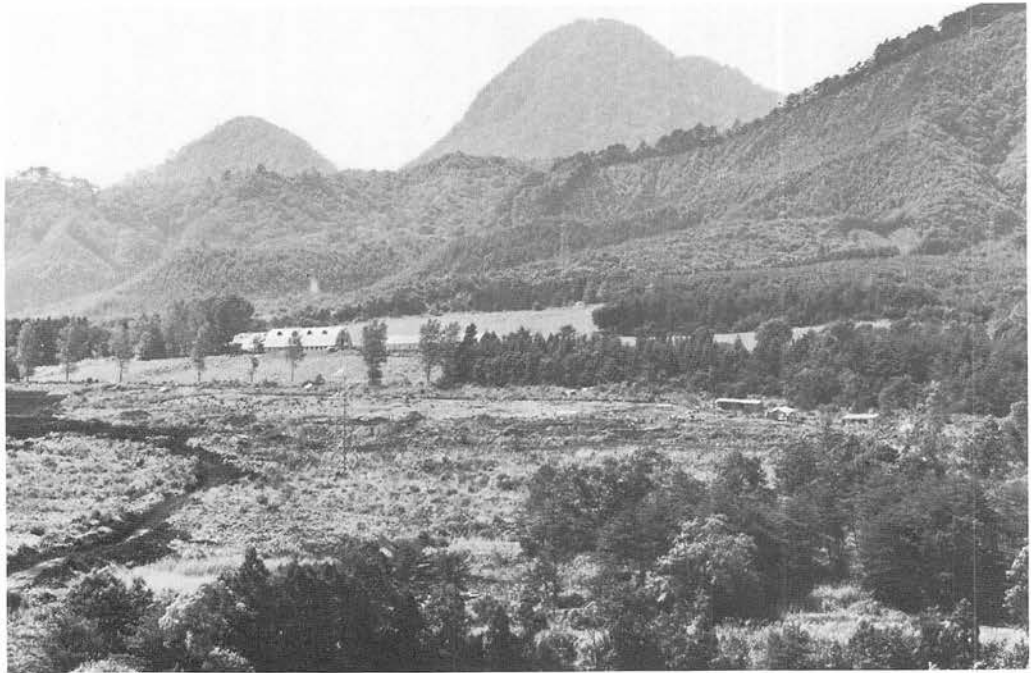


b. 遺跡全景(北東からの空中写真)

写真図版 2



a. 遺跡遠景(湯沢森から)



b. 遺跡遠景(湯沢森から)

写真図版 3



a. 調査風景



b. 調査風景  
写真図版 4



a. 調査風景



b. 第1回現地説明会  
写真図版5

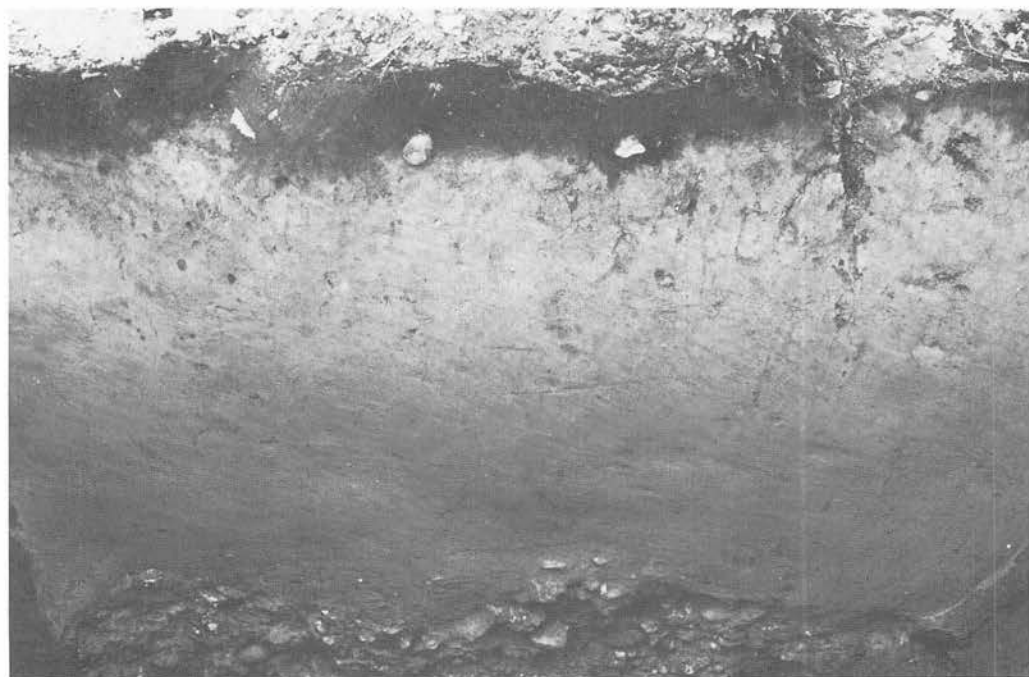




a. 検出遺構群



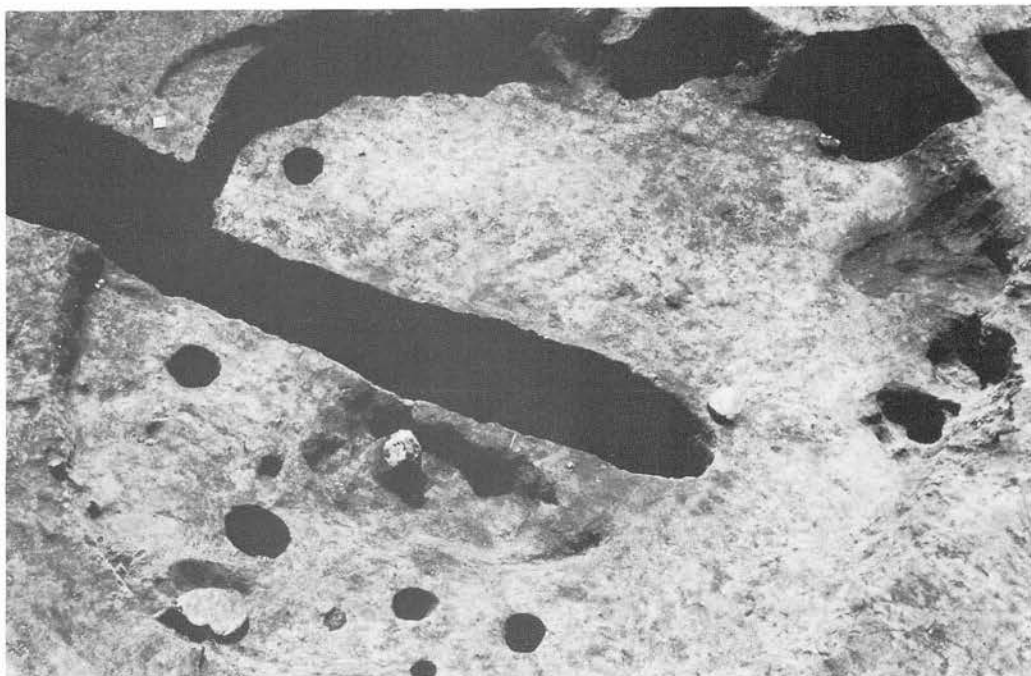
b. 検出遺構群  
写真図版 6



a. No. 1 地点深掘り断面



b. E II 区土層断面  
写真図版 7

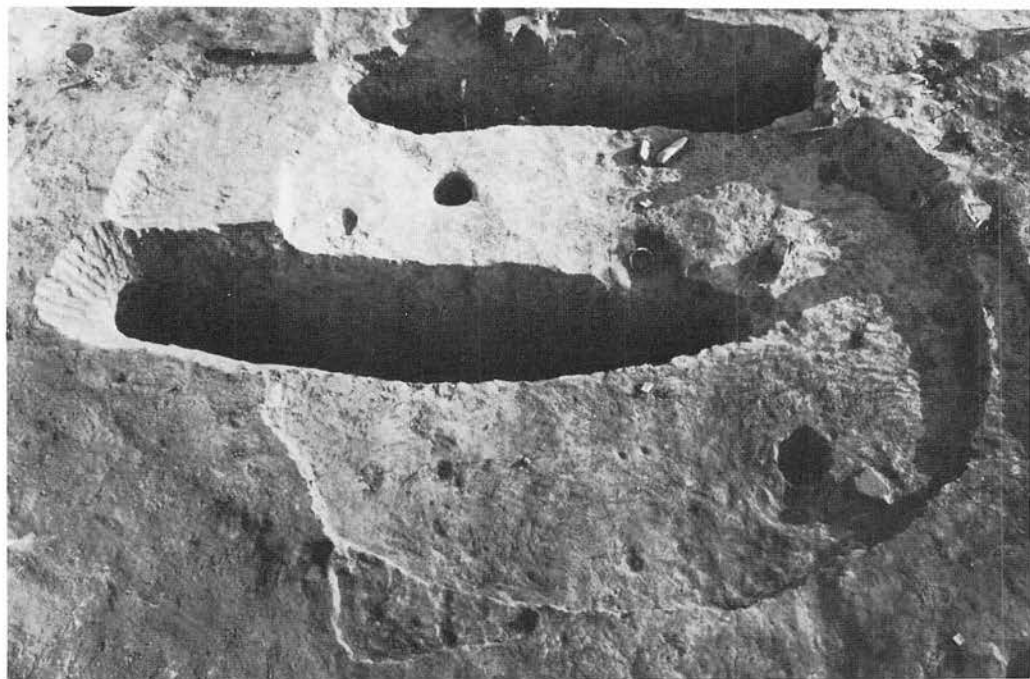


a. B IV - 1 住居址



b. C III - 1 住居址

写真図版 8

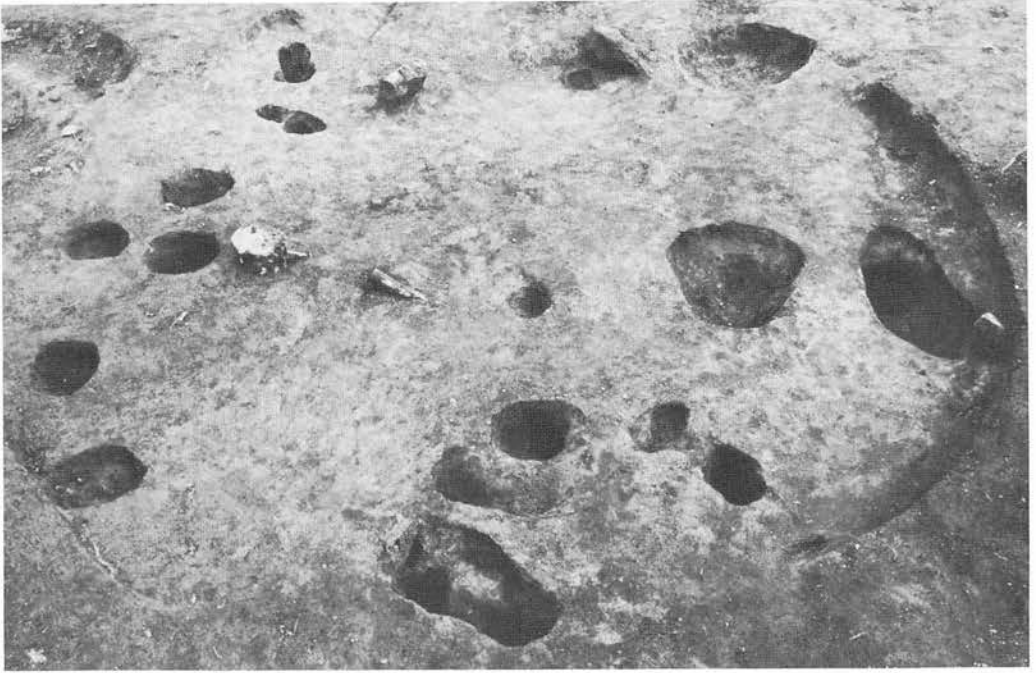


a. C III - 2 住居址

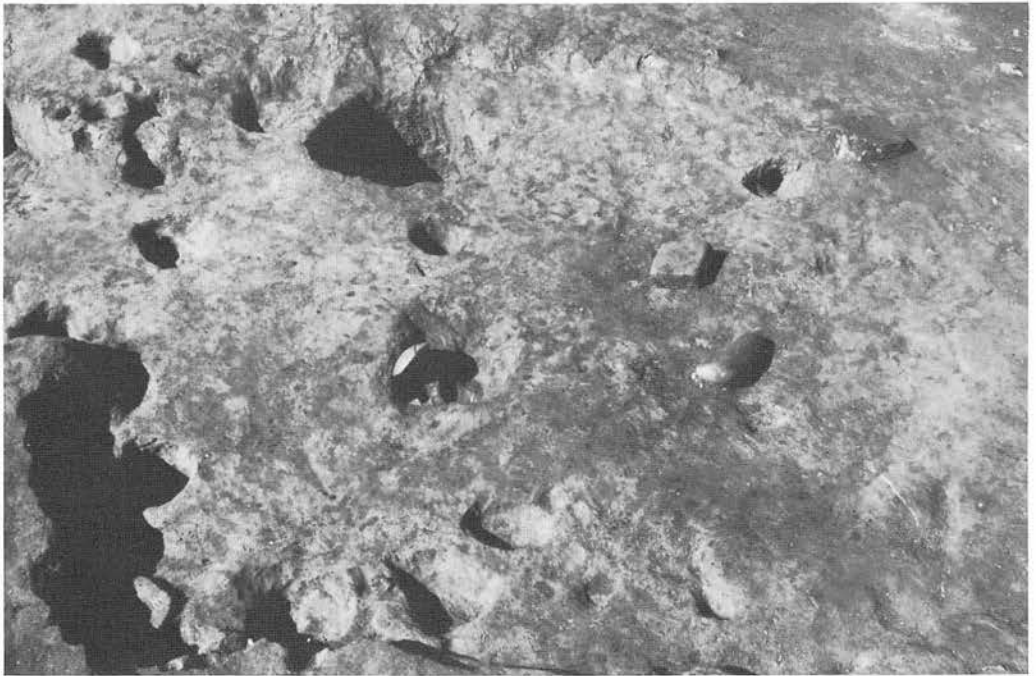


b. C III - 3 住居址

写真図版 9

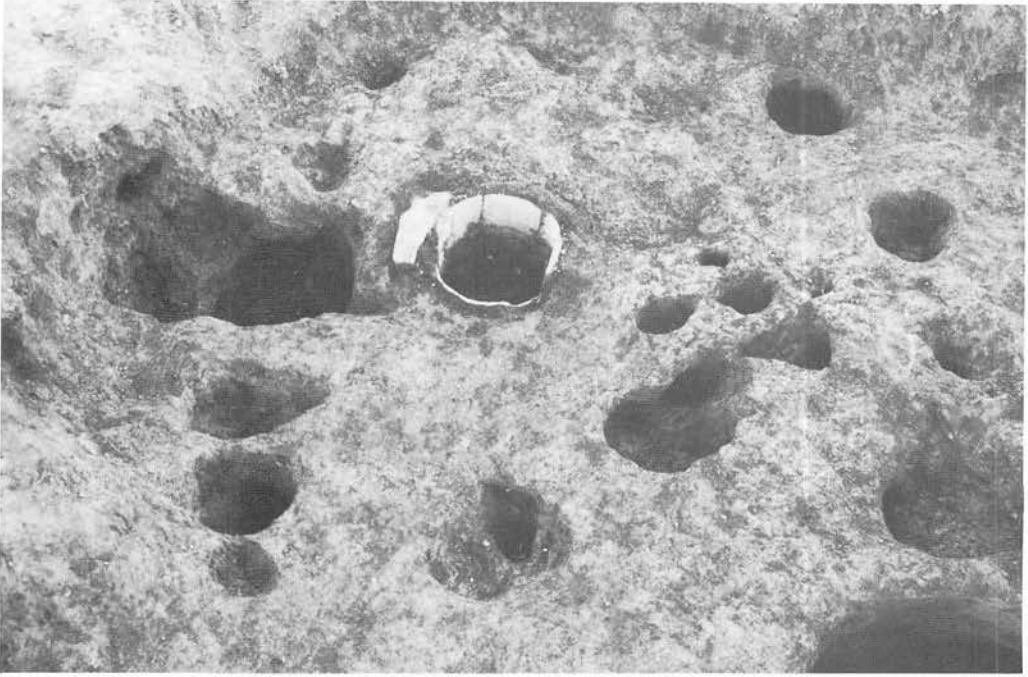


a. C III - 4 住居址

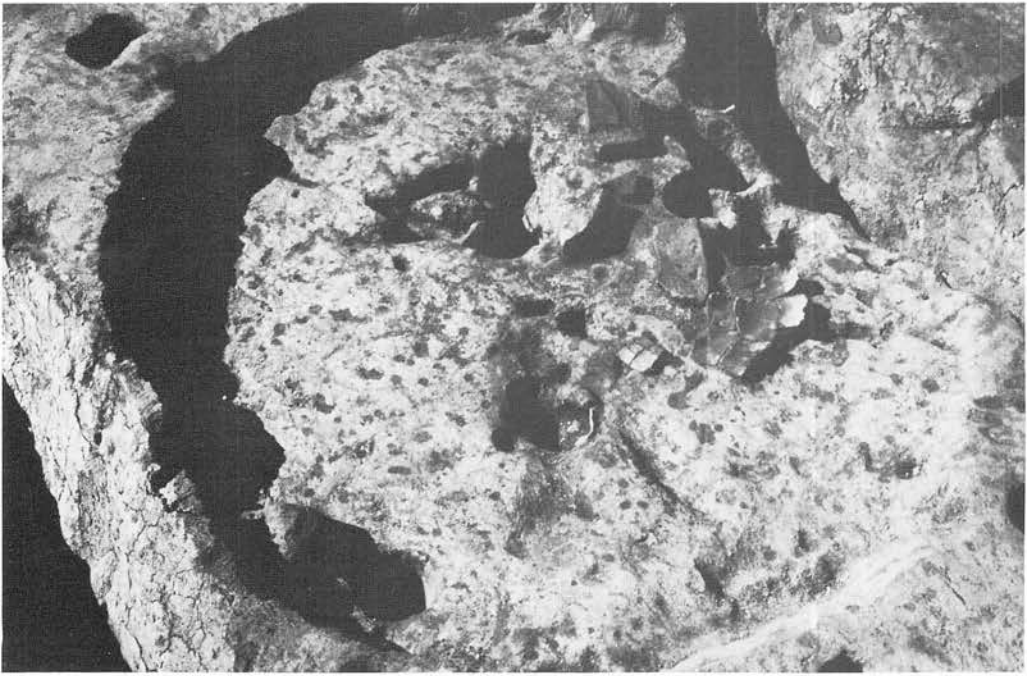


b. C III - 5 住居址

写真図版10

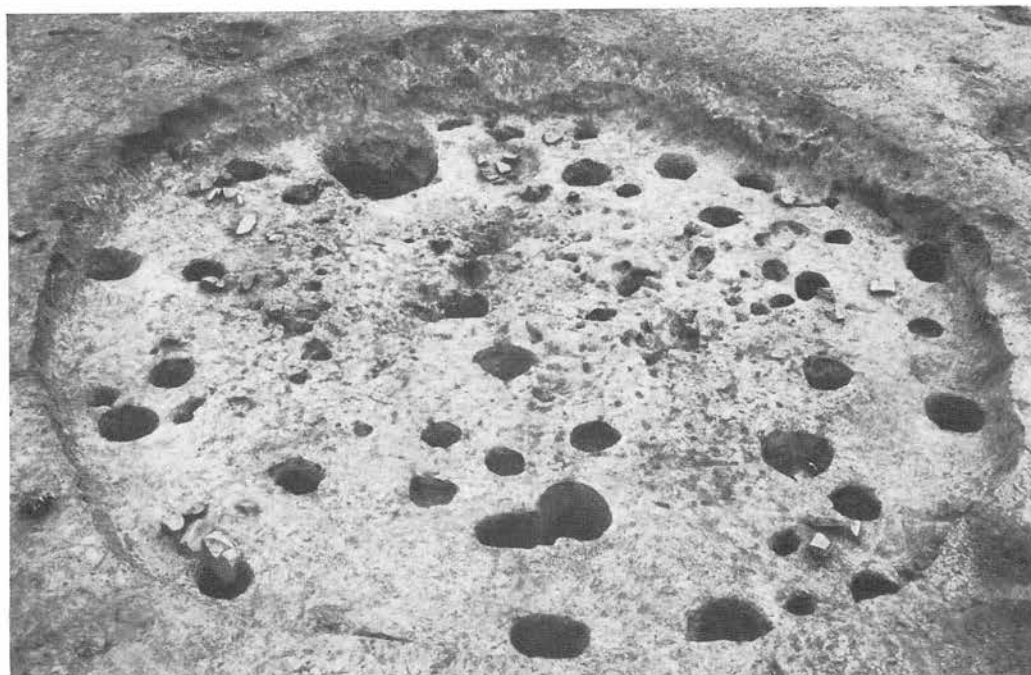


a. C III - 6 住居址



b. C III - 8 住居址

写真図版11

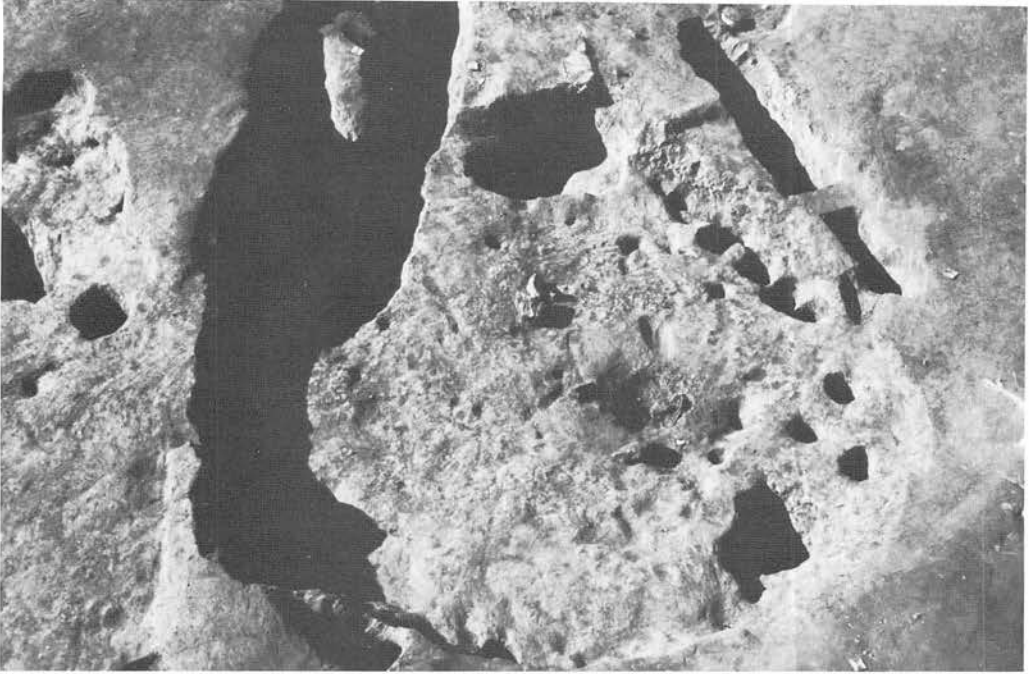


a. C III - 7 住居址

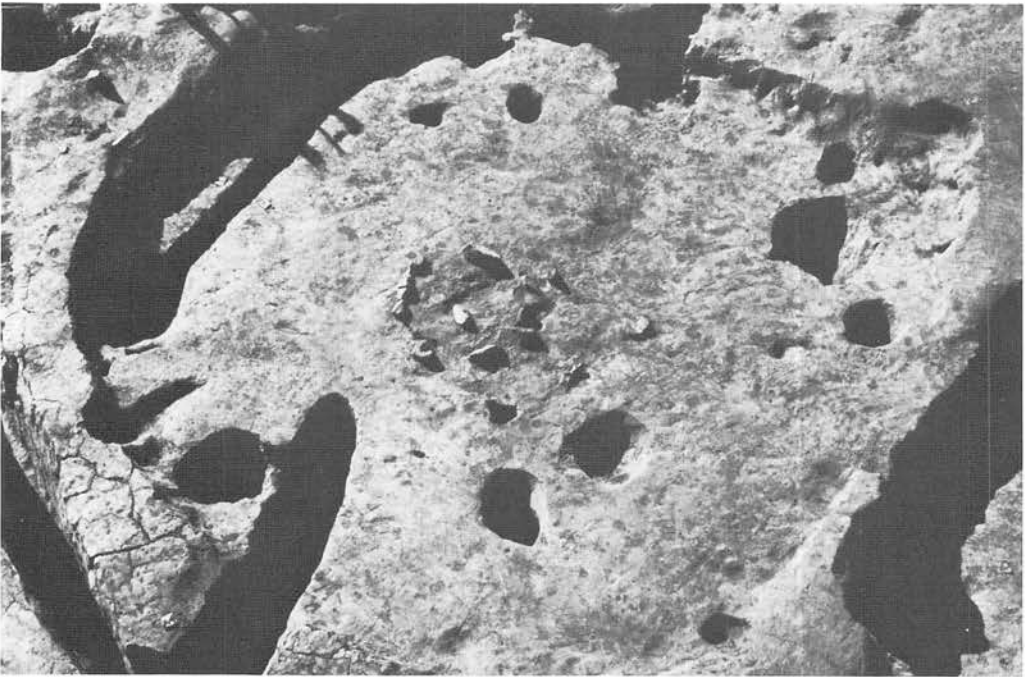


b. C III - 7 住居址(埋土の状況)

写真図版12



a. C III-9 住居址



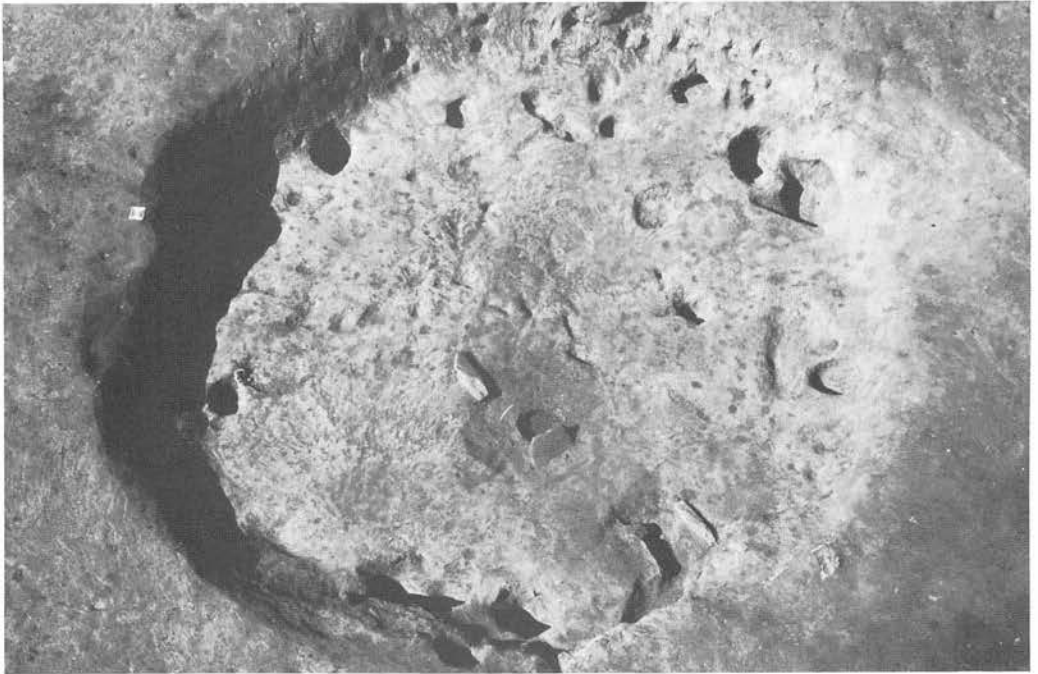
b. C III-10 住居址

写真図版13



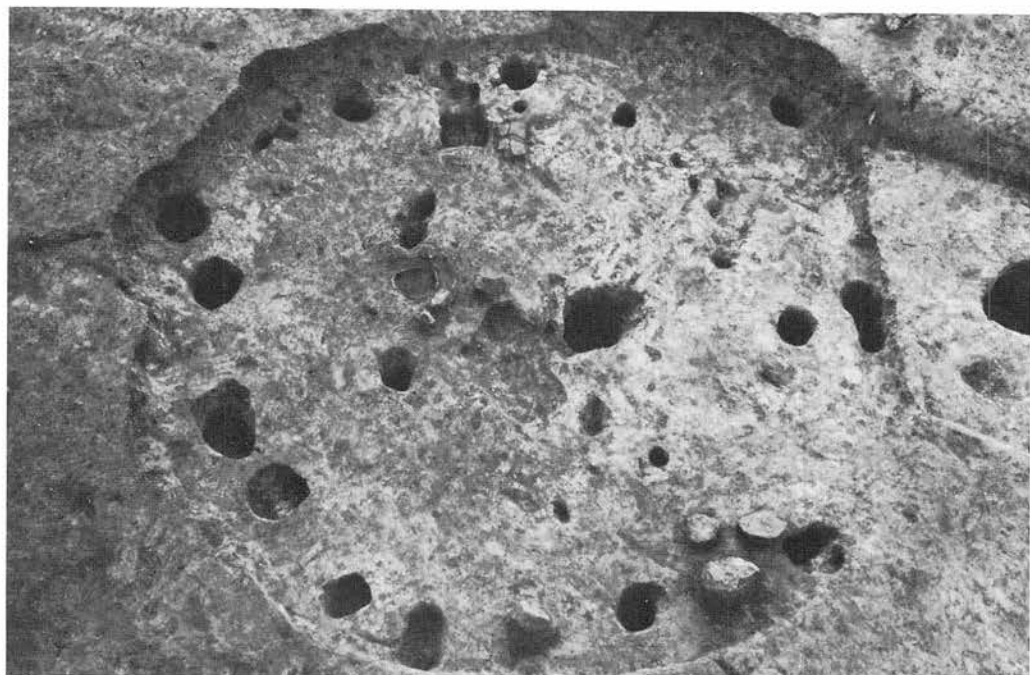


a. CⅢ-11住居址(遺物出土状況)

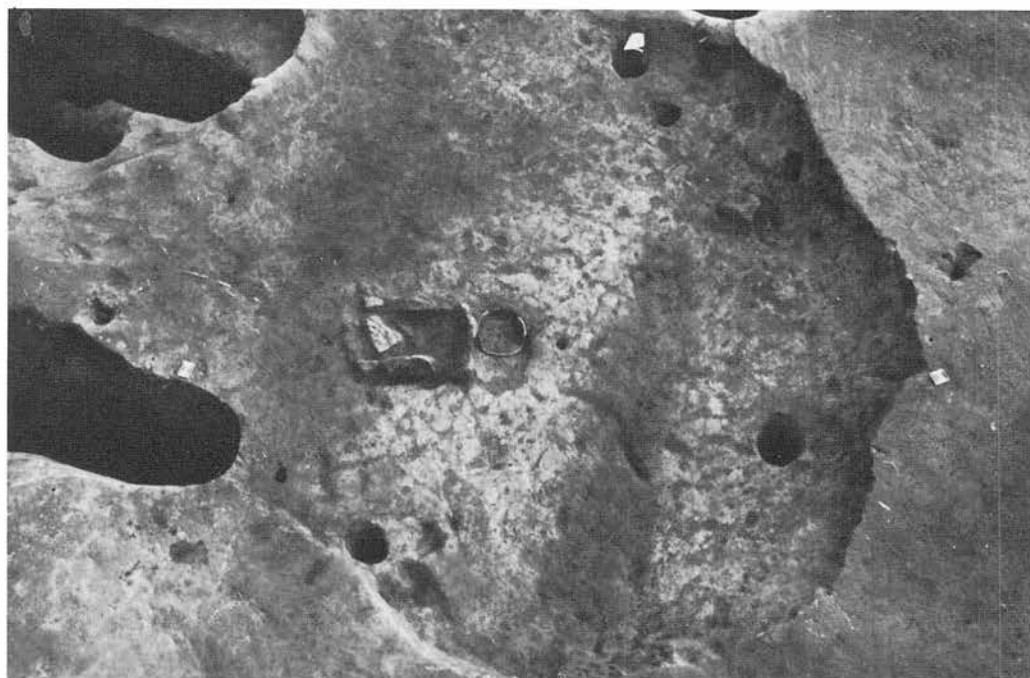


b. CⅢ-11住居址

写真図版14

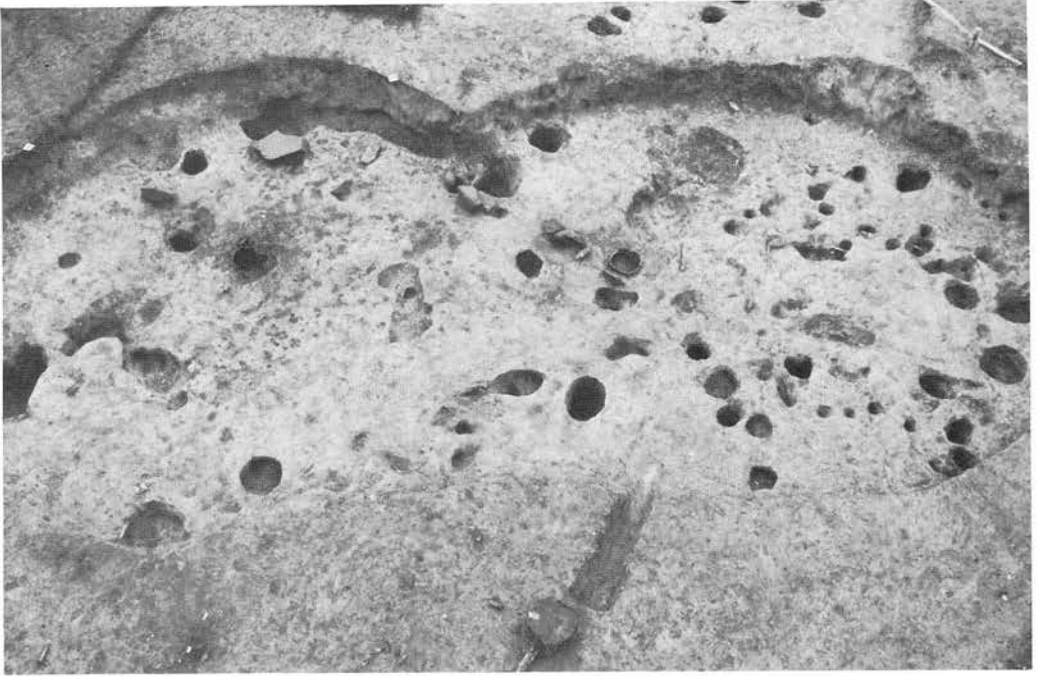


a. C IV-1 住居址

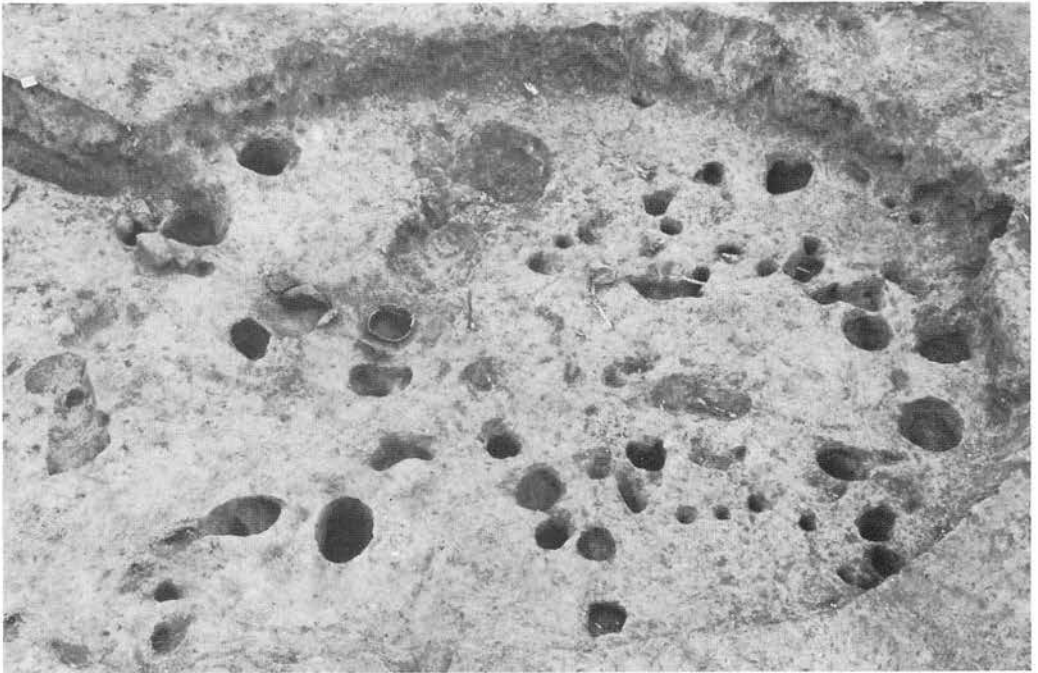


b. C IV-2 住居址

写真図版15

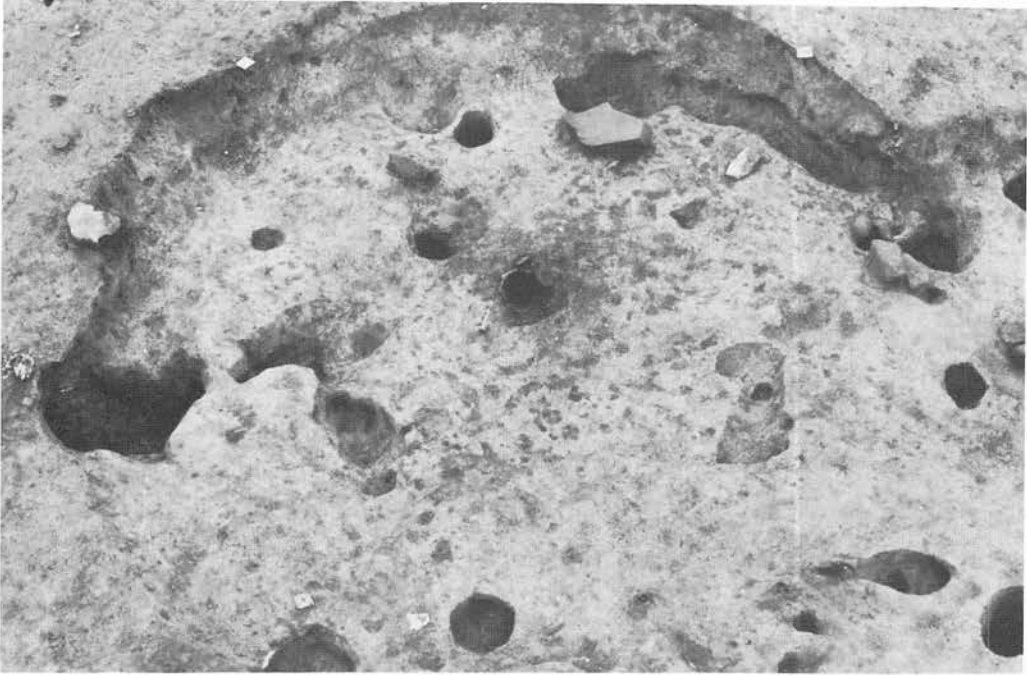


a. D II-1 住居址・D II-2 住居址

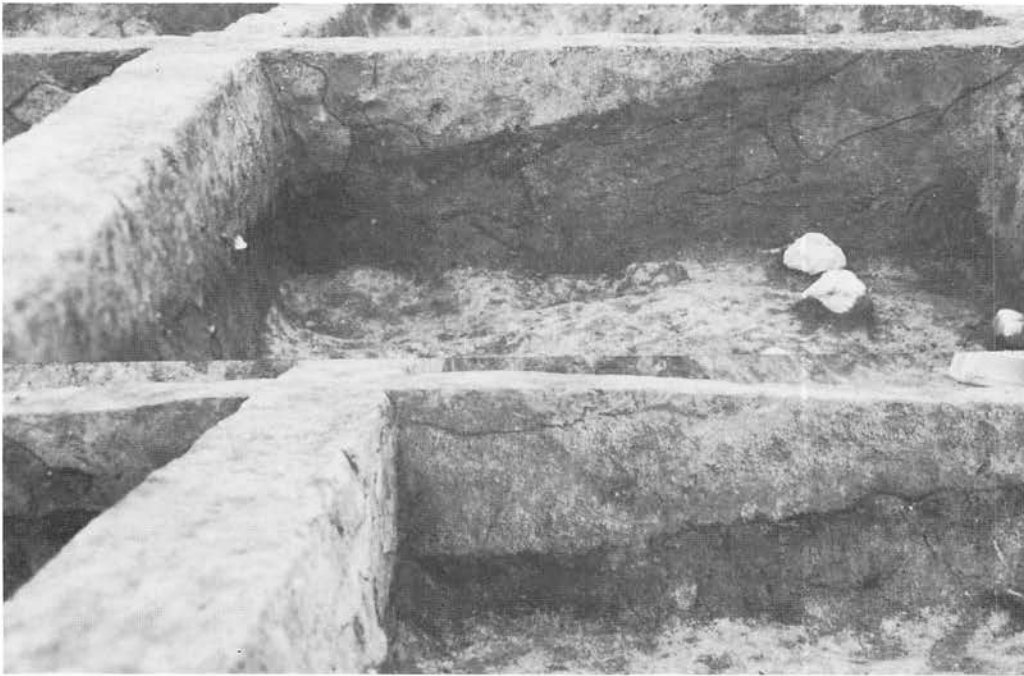


b. D II-1 住居址

写真図版16

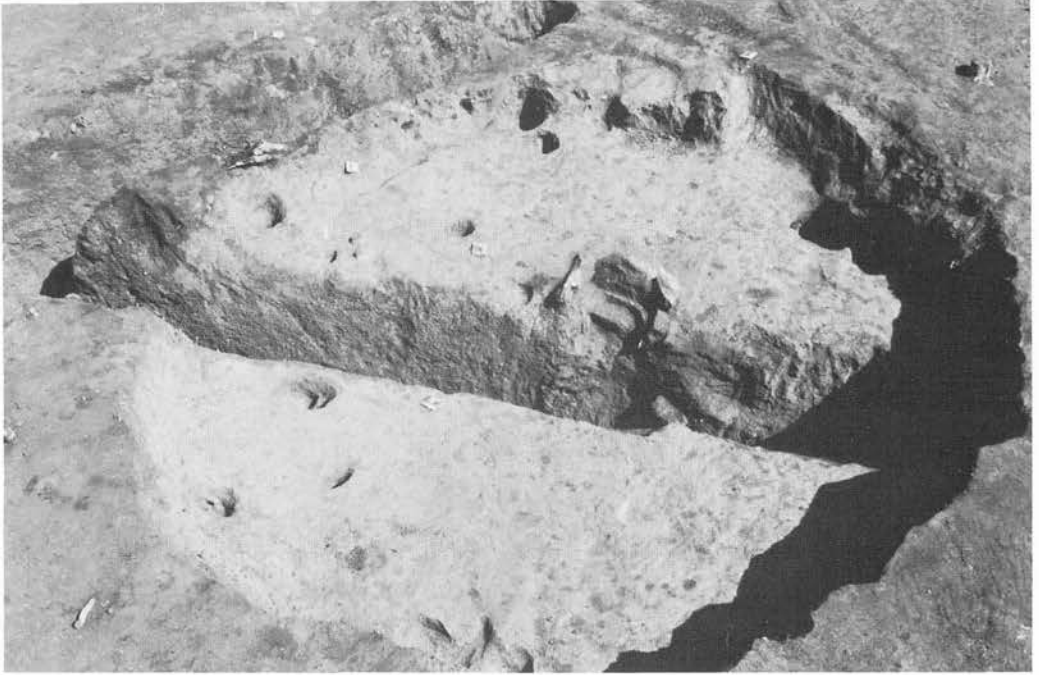


a. D II - 2 住居址



b. D II - 2 住居址(埋土の状況)

写真図版17

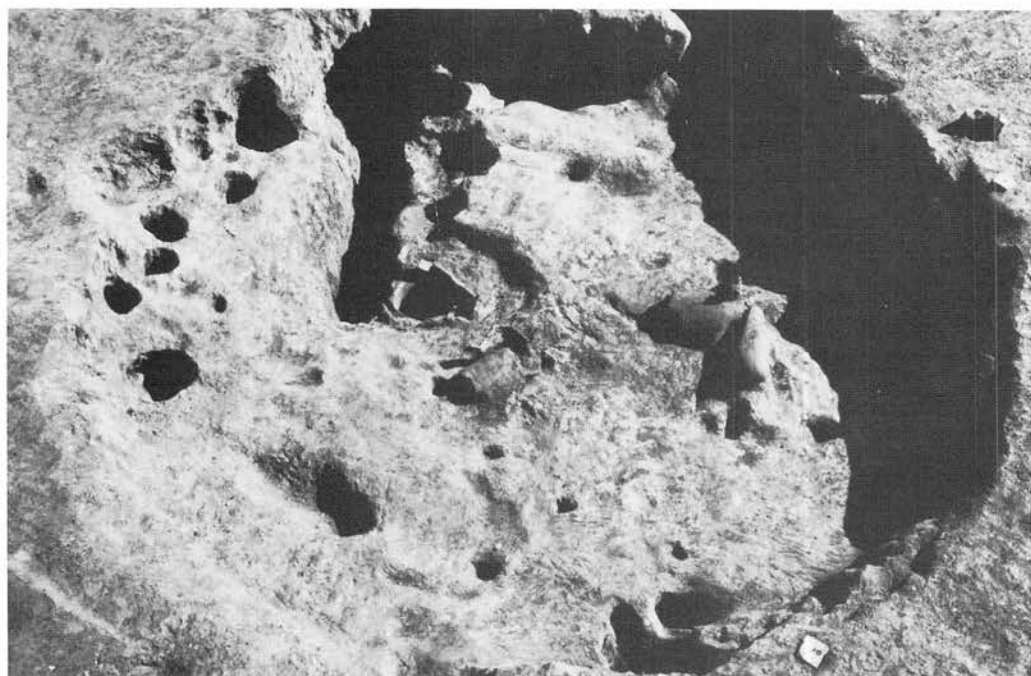


a. D II - 3 住居址



b. D II - 4 住居址

写真図版 18



a. D II - 5 住居址

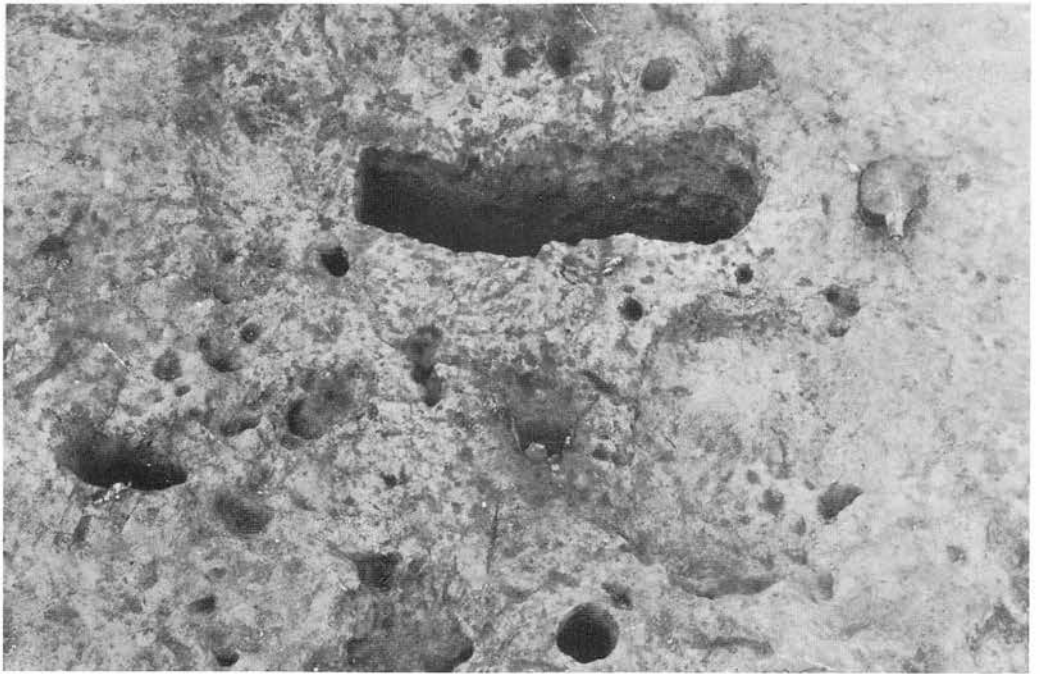


b. D II - 6 住居址

写真図版19

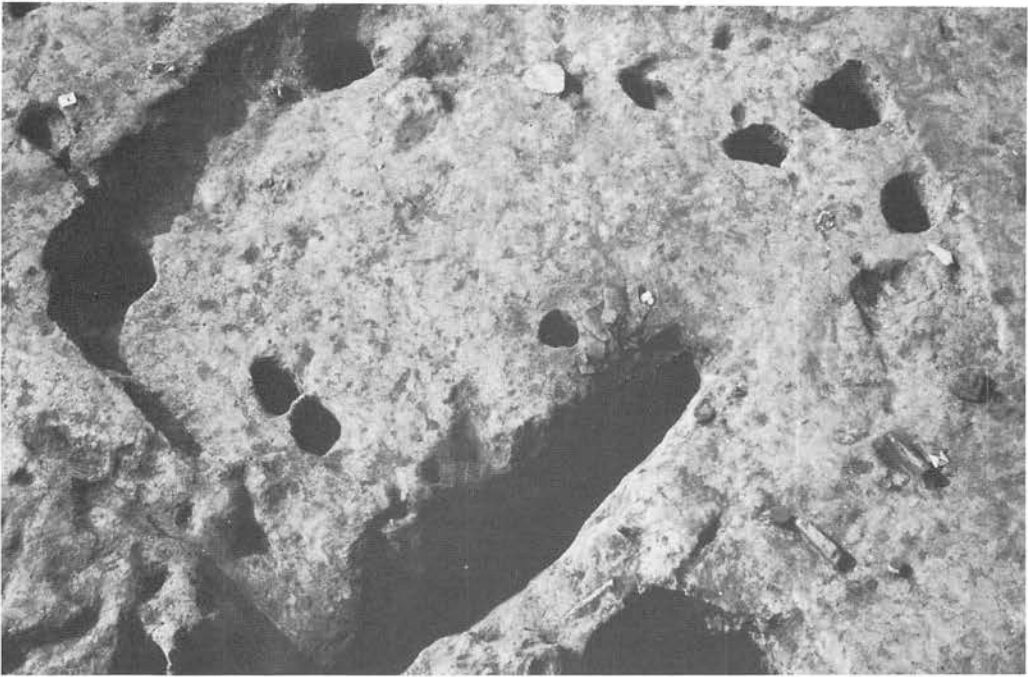


a. D II - 7 住居址

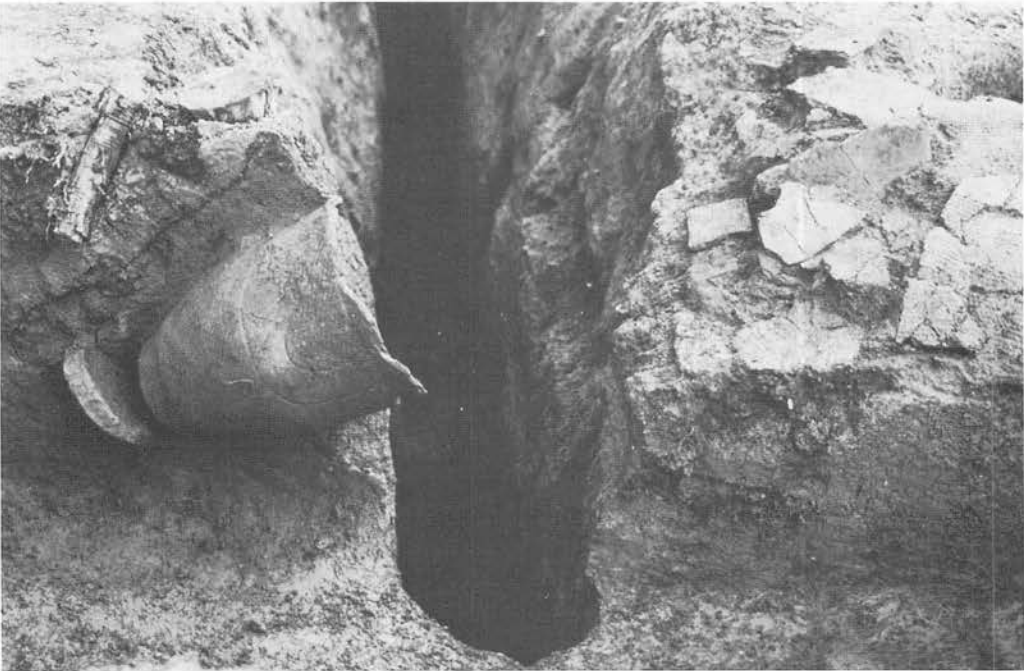


b. D II - 9 住居址

写真図版20



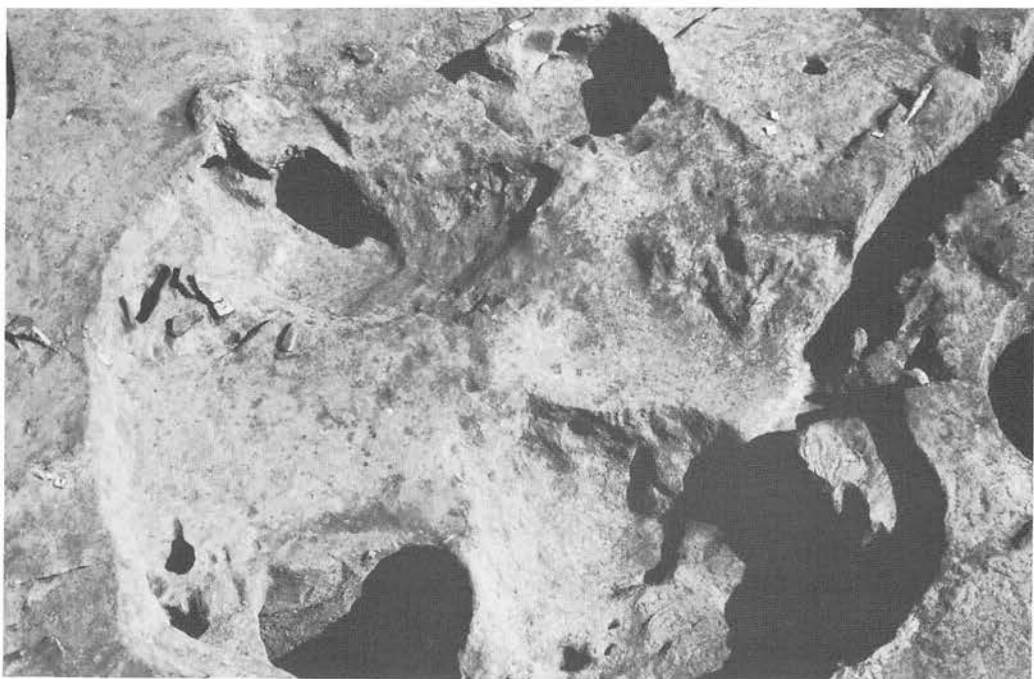
a. D II - 8 住居址



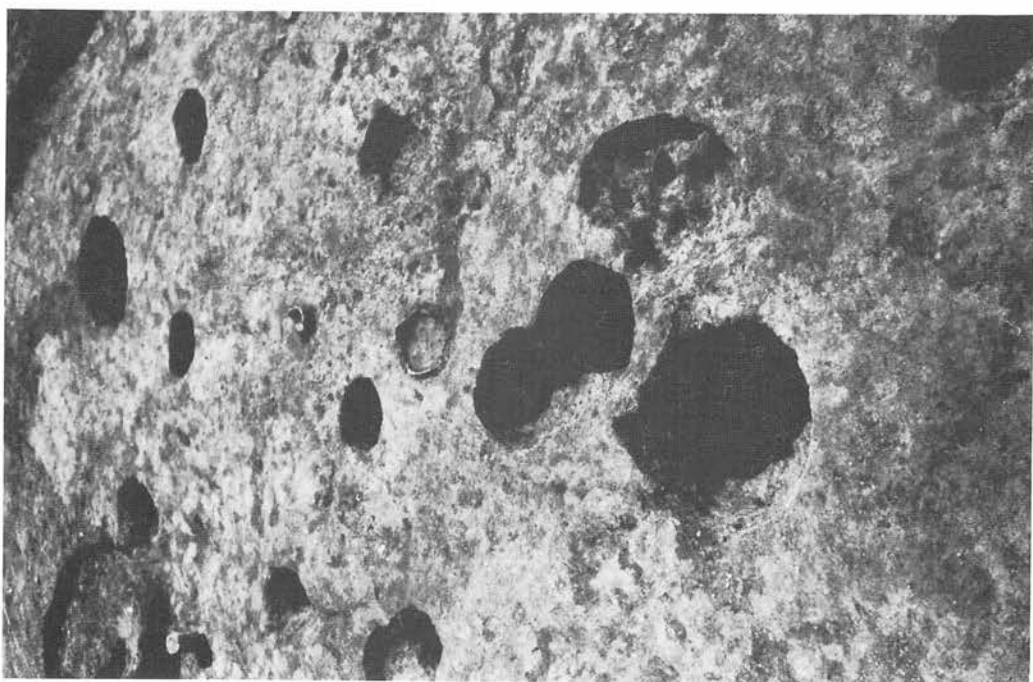
b. D II - 8 住居址(陥し穴状遺構に切られた炉)

写真図版21





a. D II-10住居址

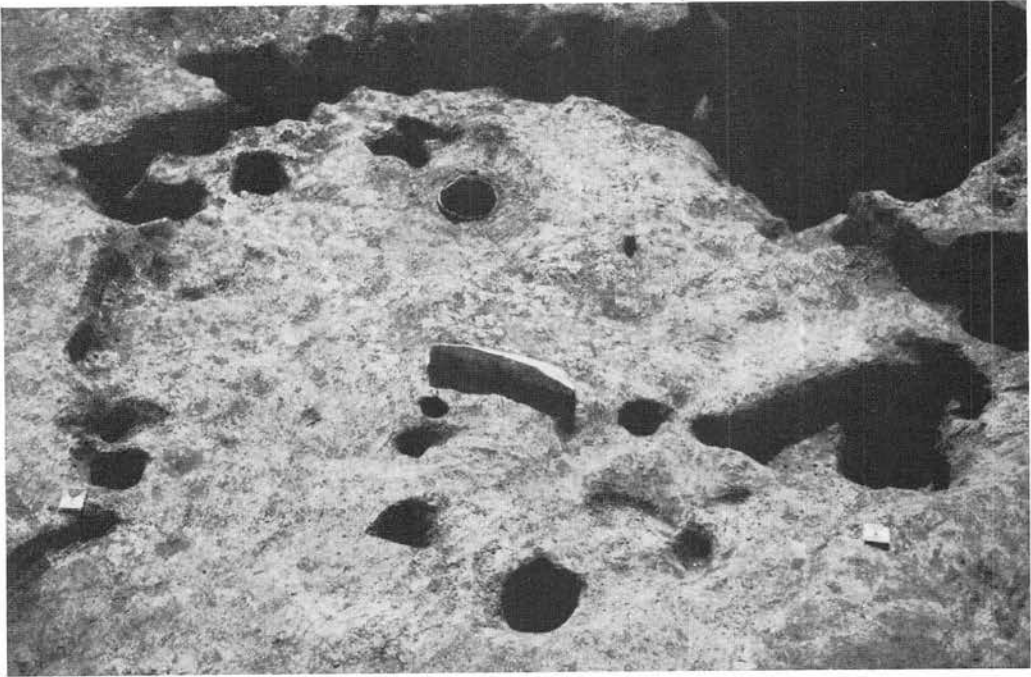


b. D II-12住居址

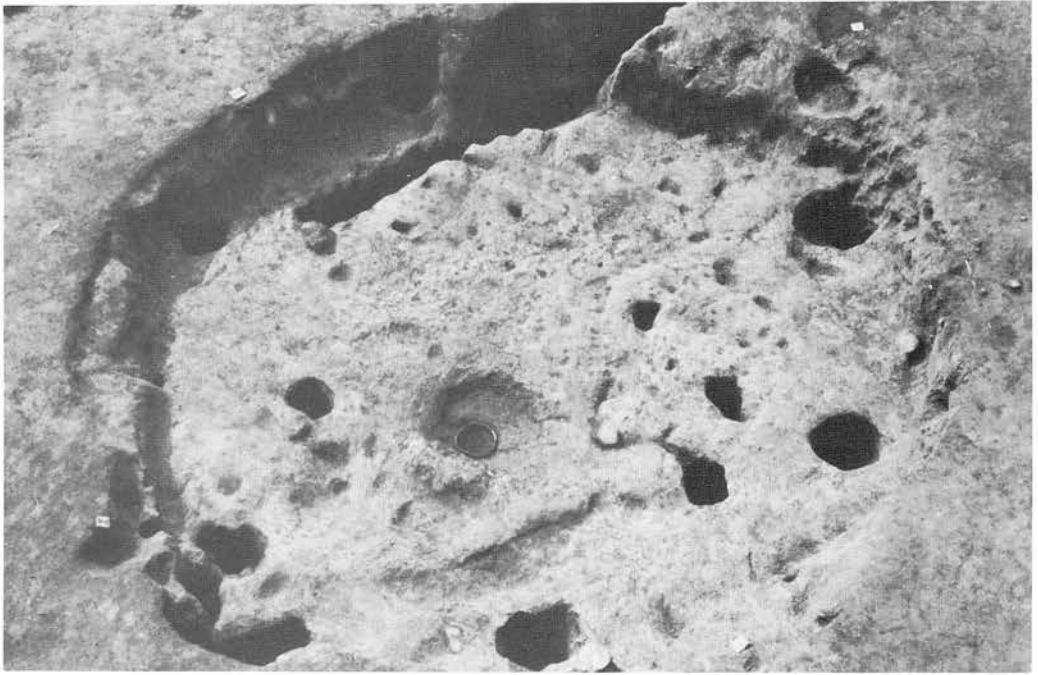
写真図版22



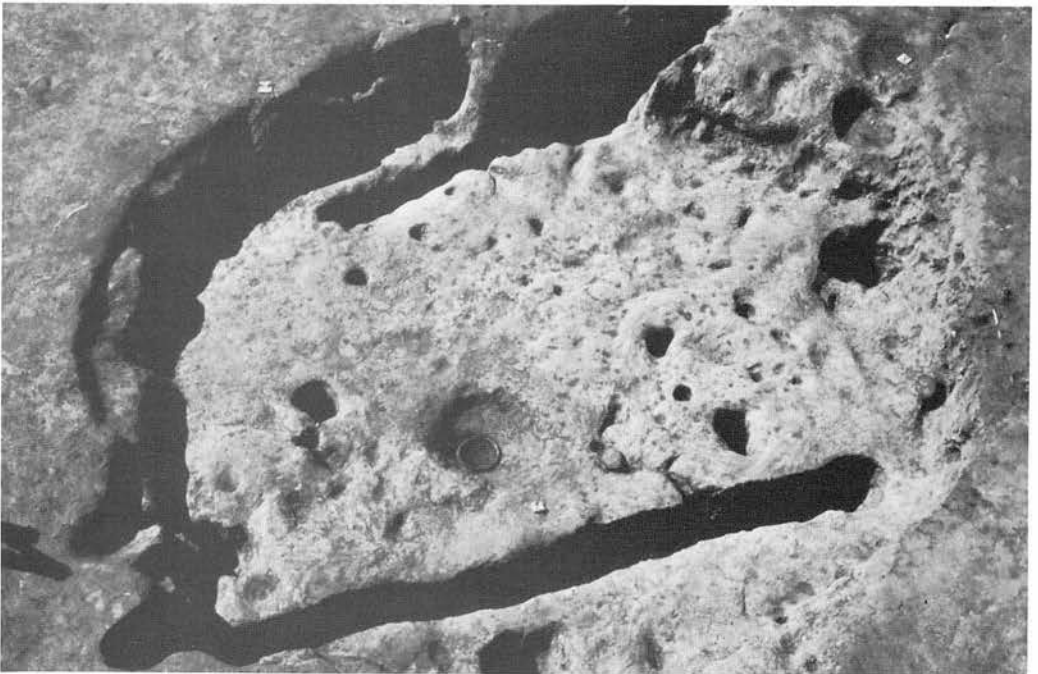
a. D III - 1 住居址



b. D III - 2 住居址  
写真図版23

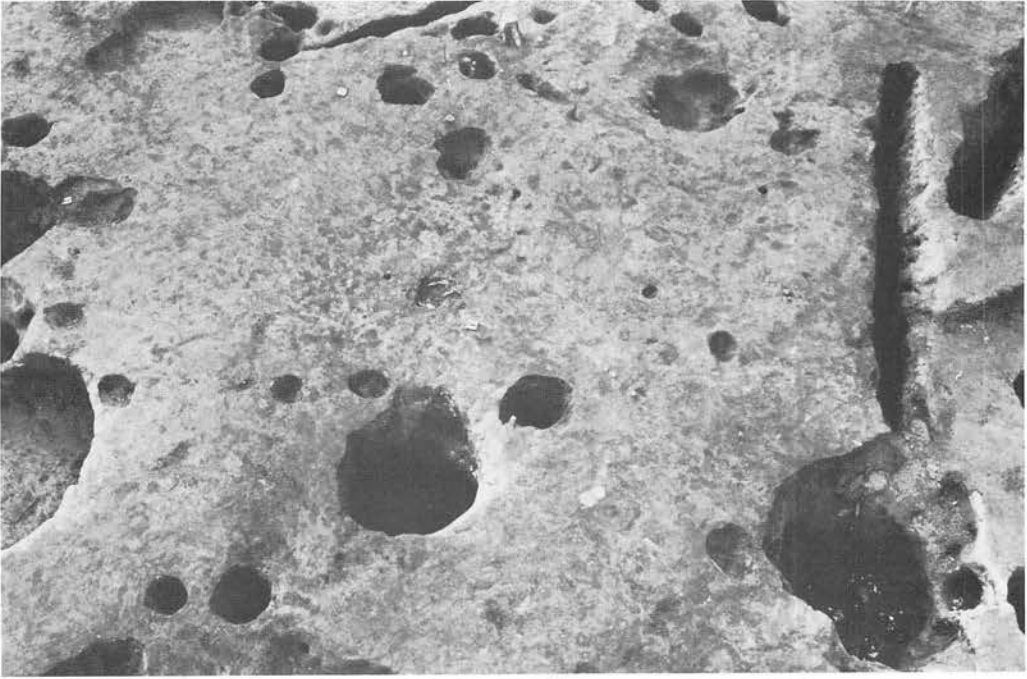


a. DⅢ-3住居址(陥し穴状遺構掘りあげ前)



b. DⅢ-3住居址(陥し穴状遺構掘りあげ後)

写真図版24

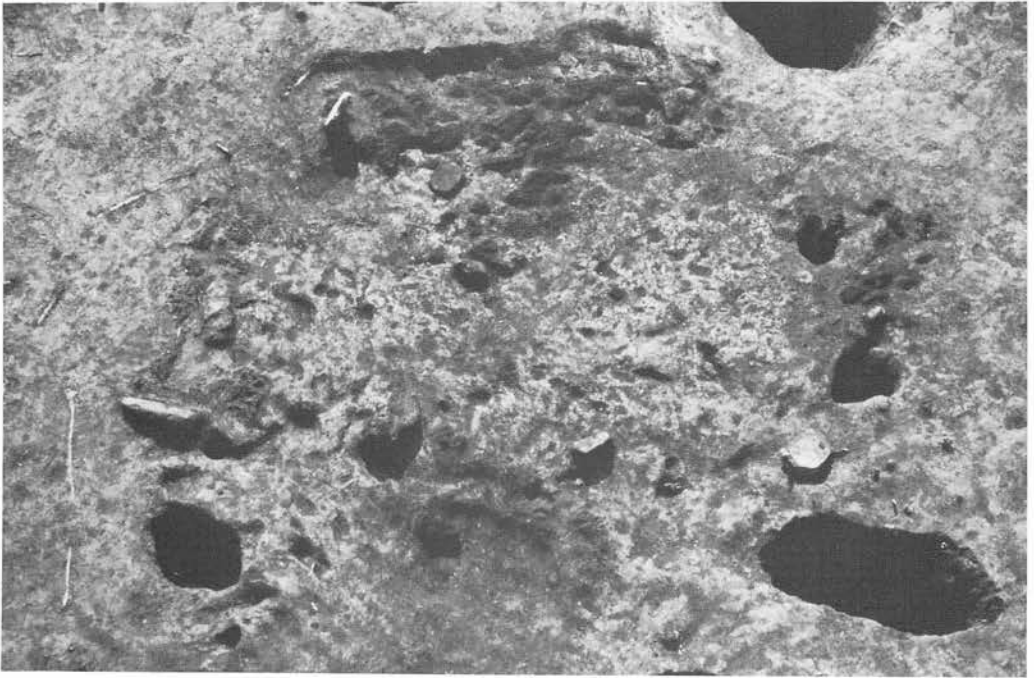


a. D III - 4 住居址

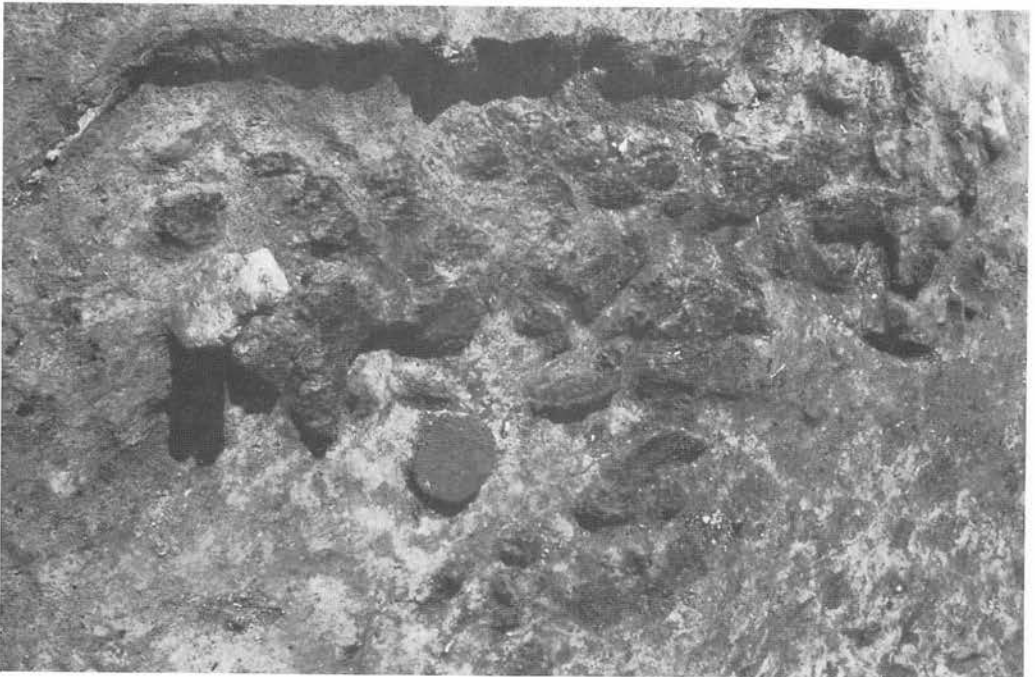


b. D III - 6 住居址

写真図版25

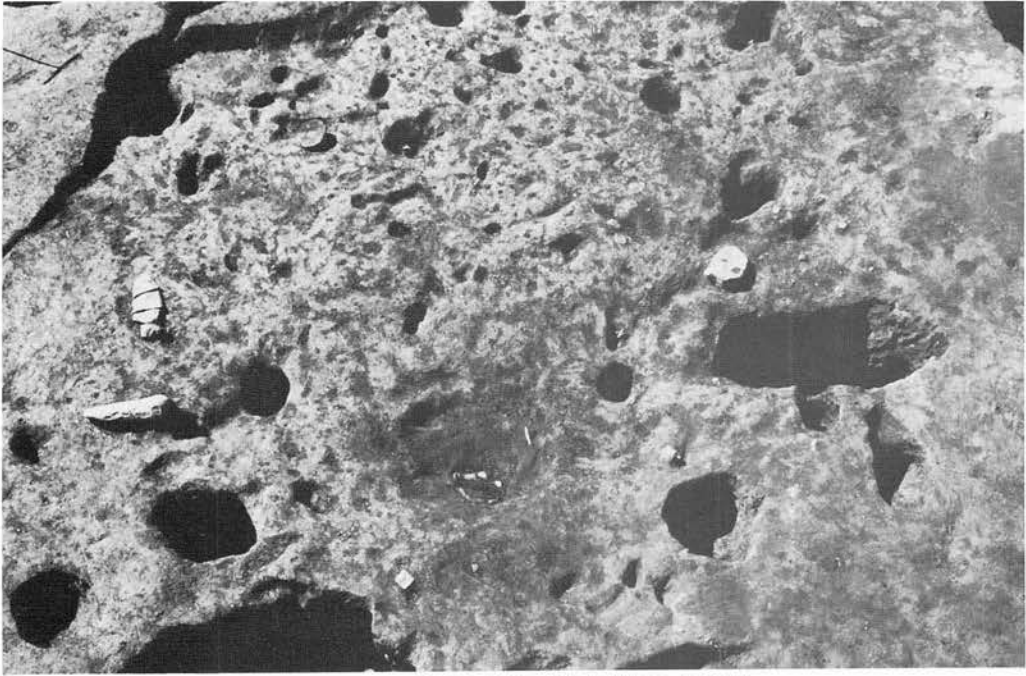


a. D III - 5 住居址(炭化材出土状況)

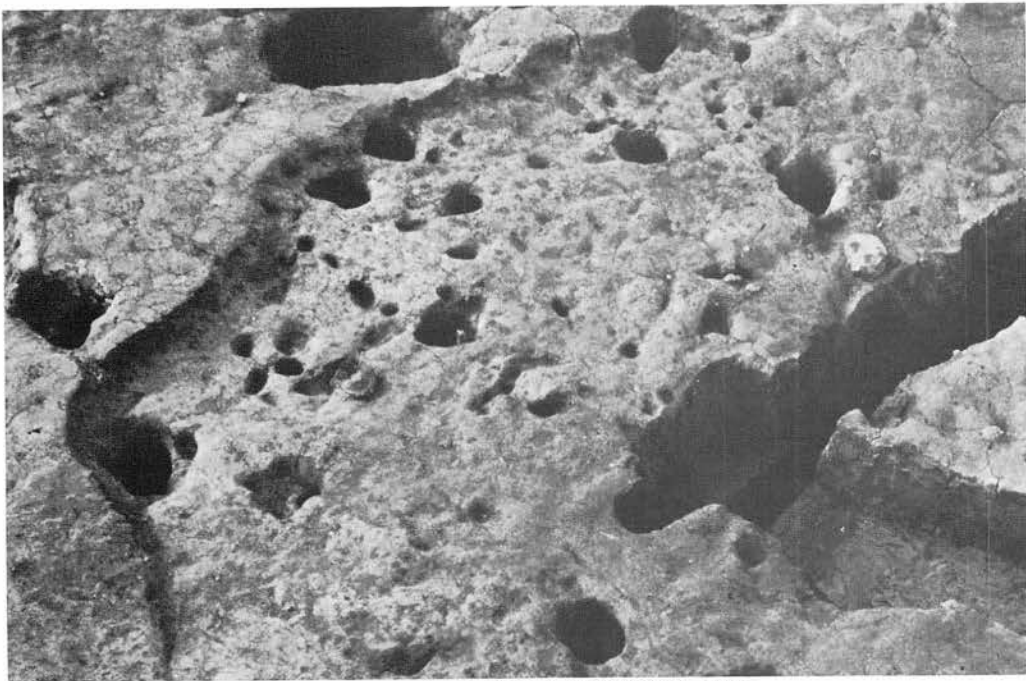


b. D III - 5 住居址(炭化材出土状況)

写真図版26

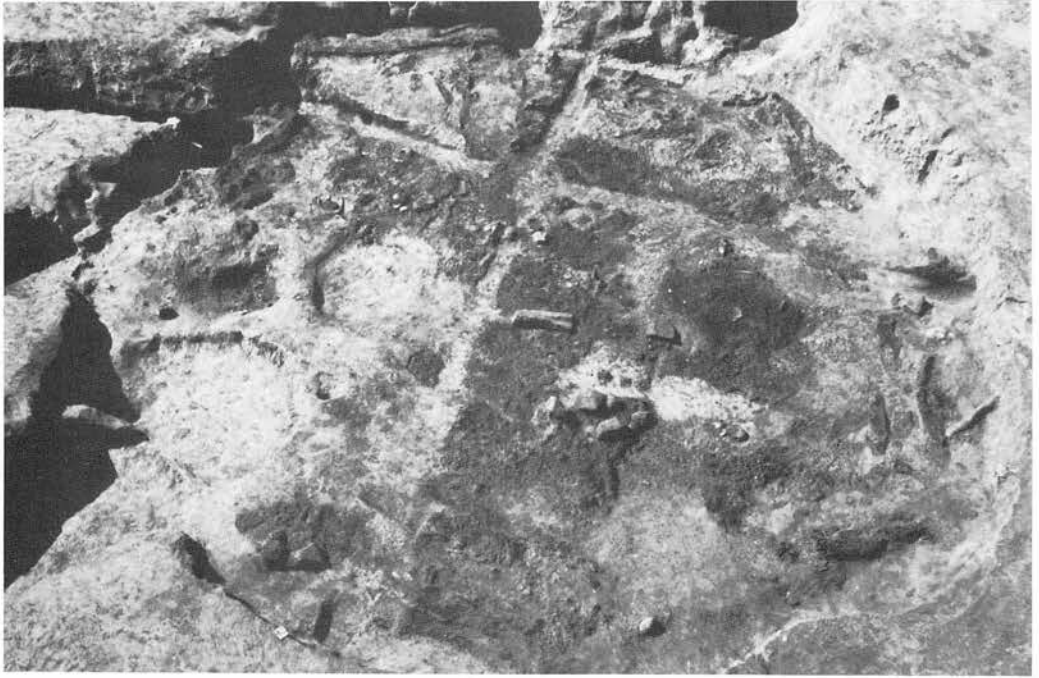


a. DIII-5 住居址(陥し穴状遺構掘りあげ前)

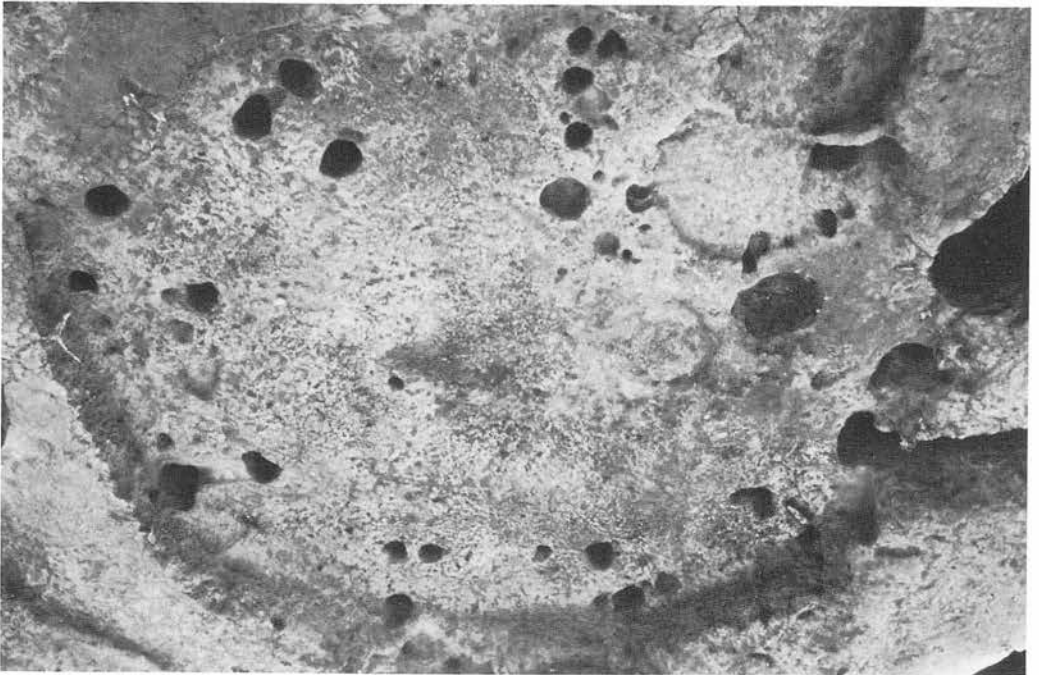


b. DIII-5 住居址(陥し穴状遺構掘りあげ後)

写真図版27



a. D III - 7 住居址(炭化材分布状况)

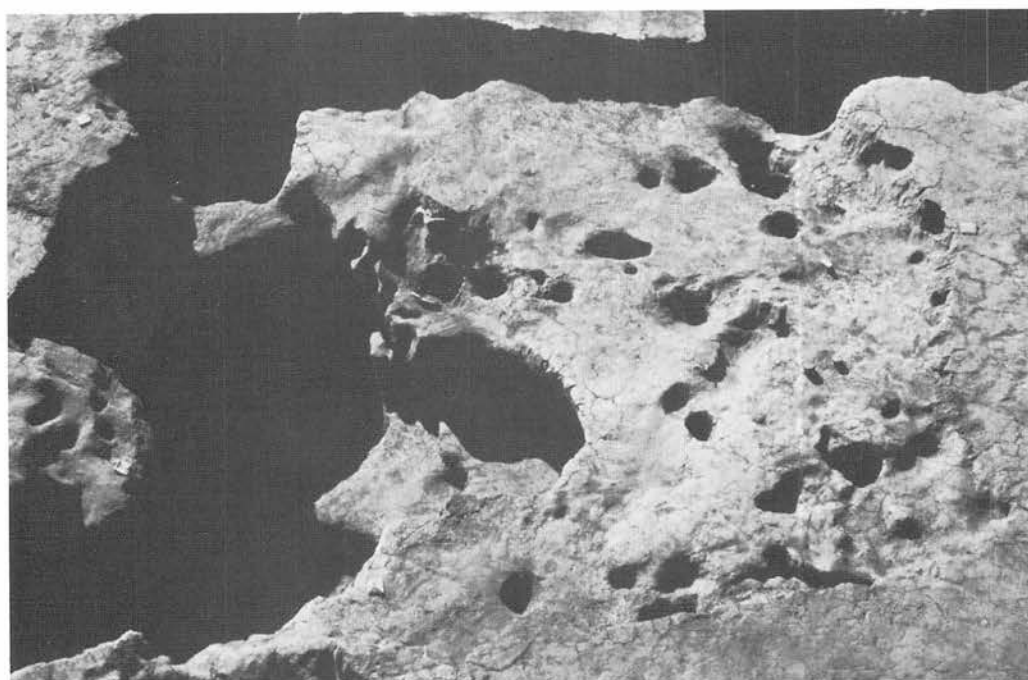


b. D III - 7 住居址

写真図版28



a. DⅢ-8住居址(埋土上面の火山灰分布状況)



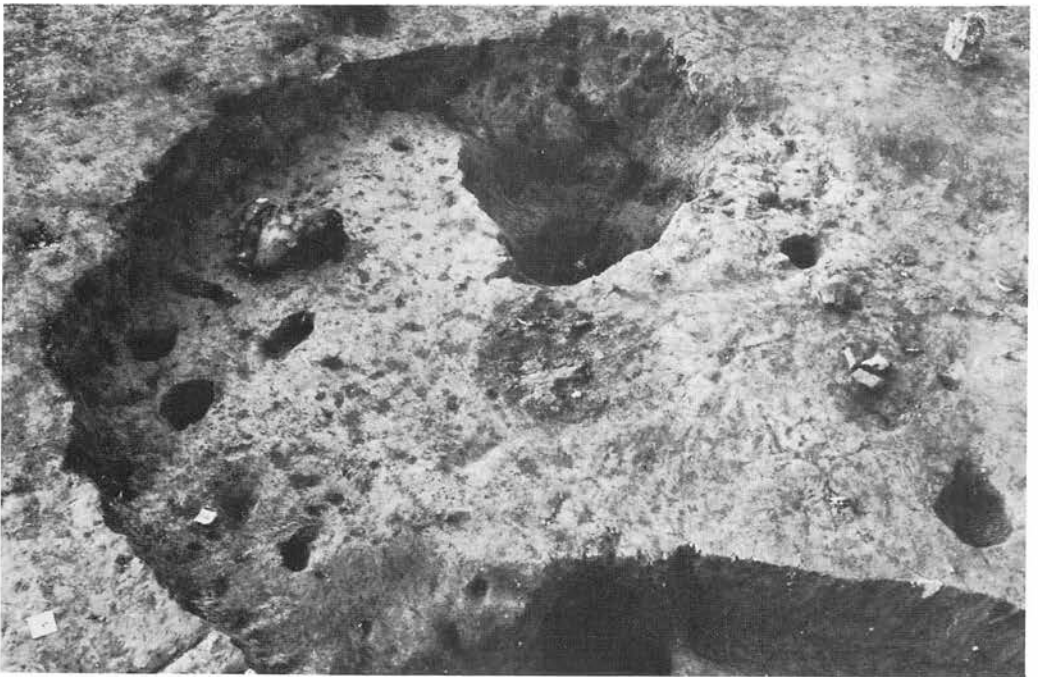
b. DⅢ-8住居址

写真図版29



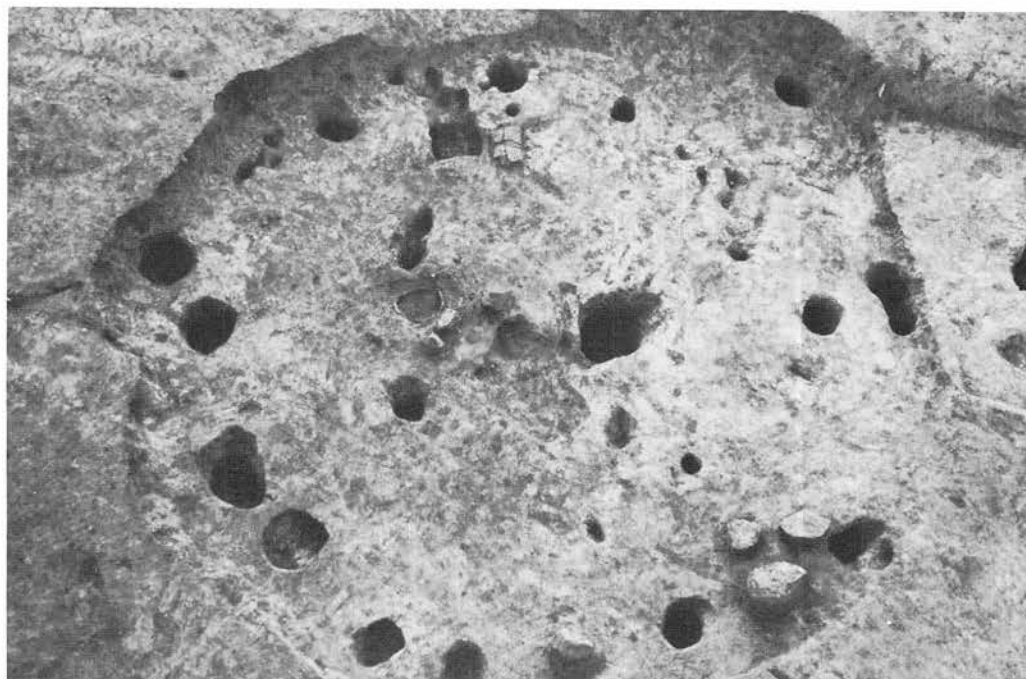


a. D III - 9 住居址・D III - 10住居址



b. D III - 9 住居址

写真図版30

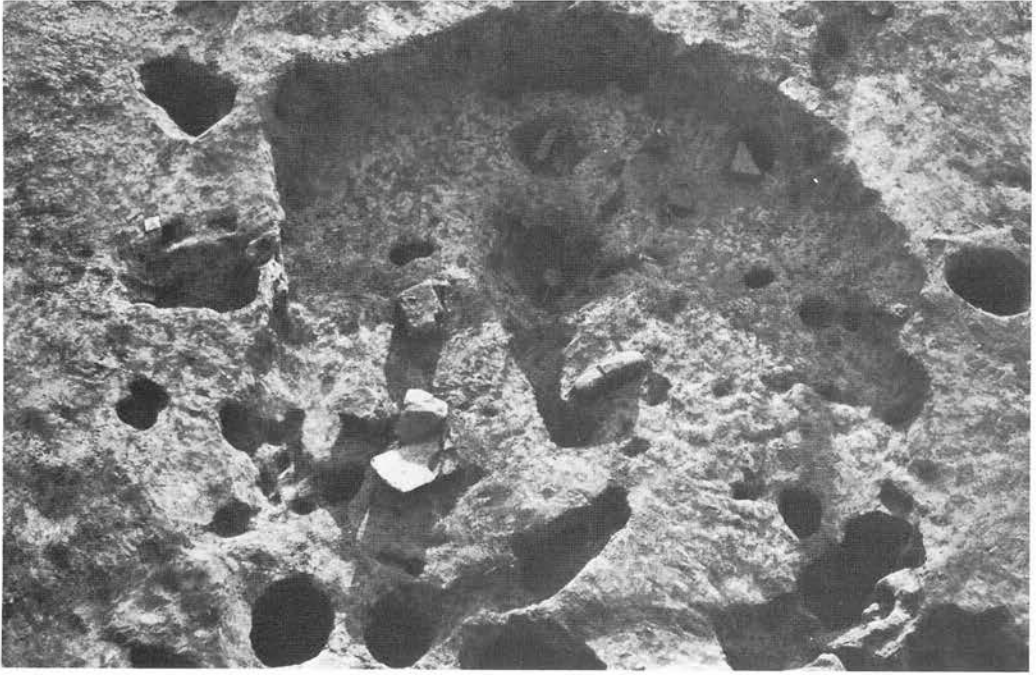


a. D III - 10住居址(遺物出土狀況)

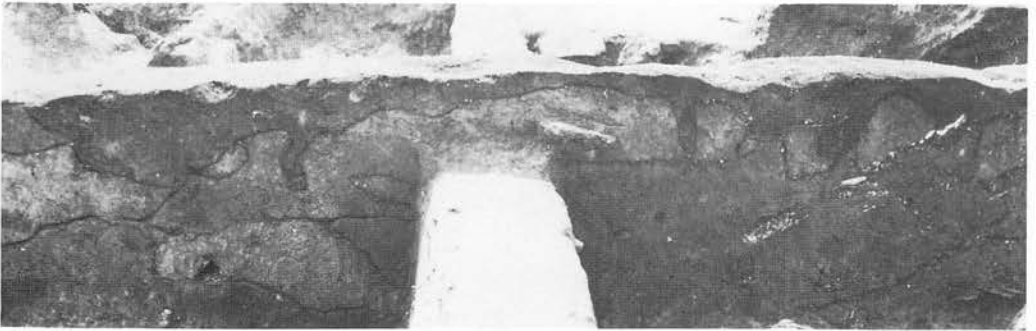


b. D III - 10住居址

写真図版31

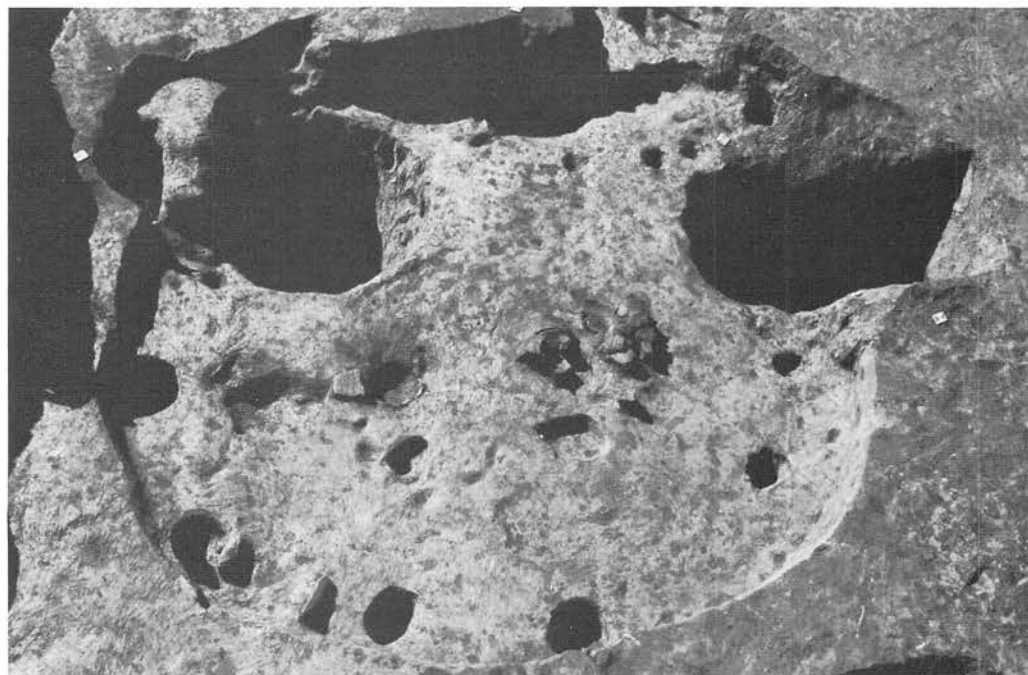


a. D III-11住居址

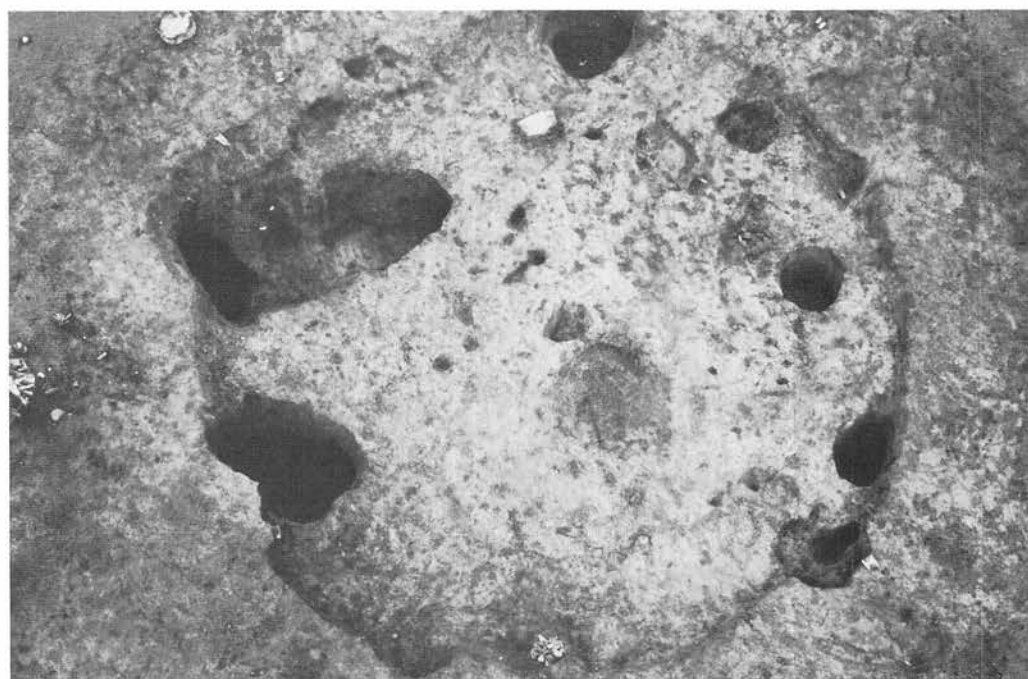


b. D III-11住居址(埋土の状況)

写真図版32

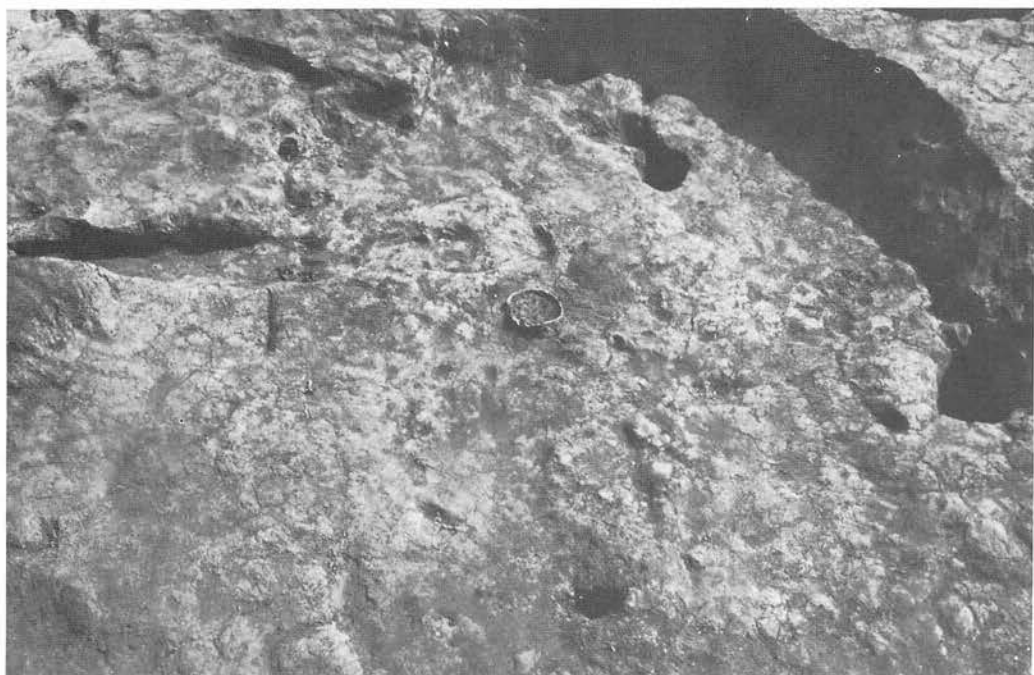


a. D IV - 1 住居址

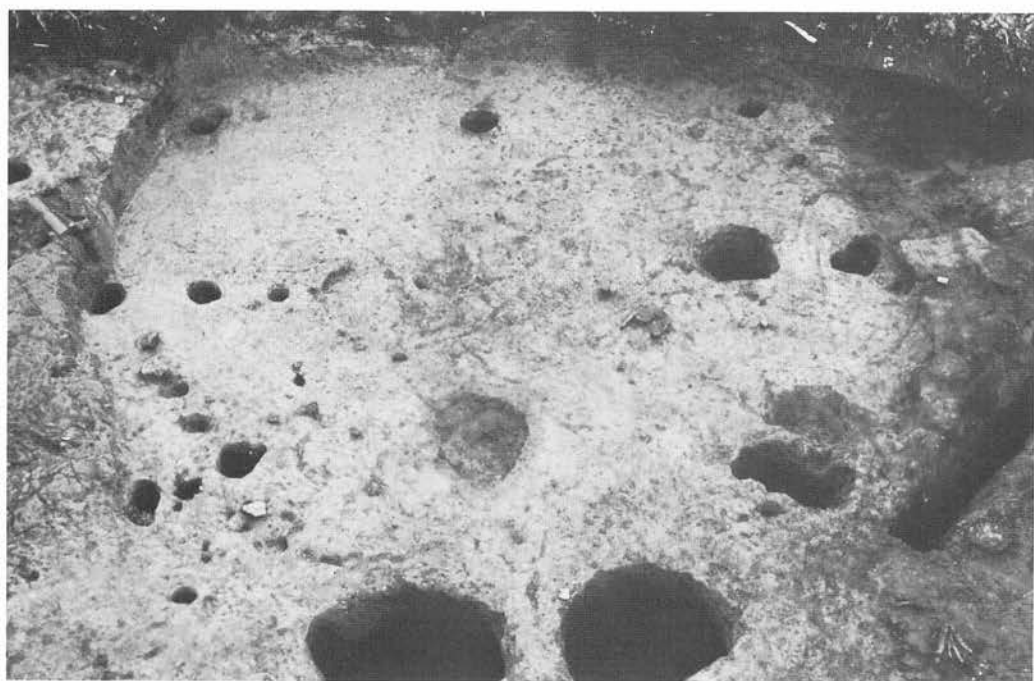


b. E II - 2 住居址

写真図版33

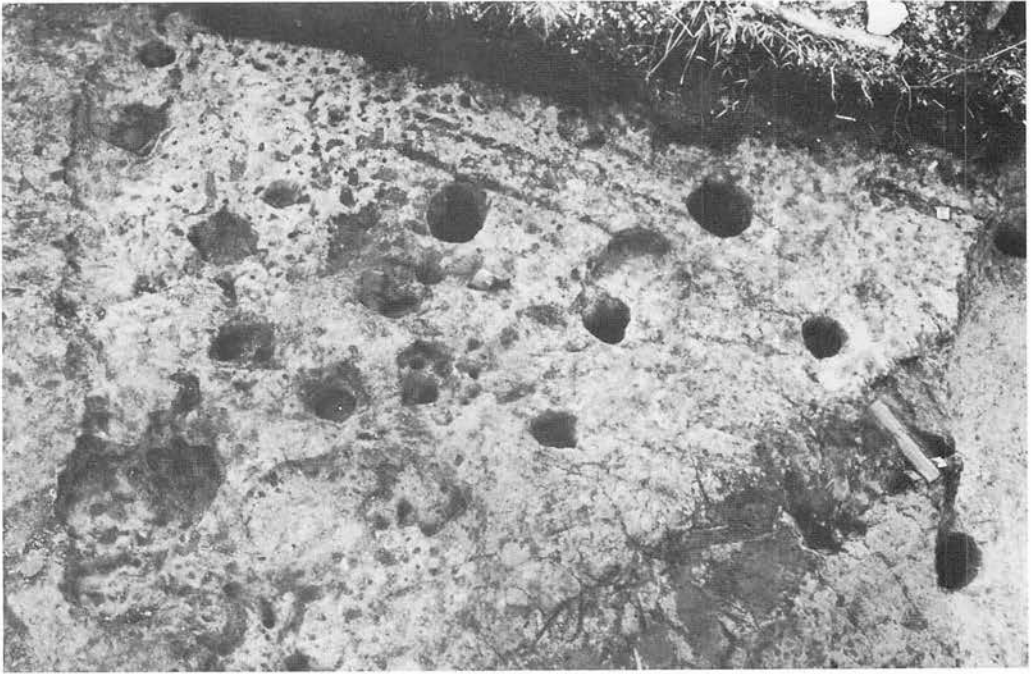


a. E II - 3 住居址

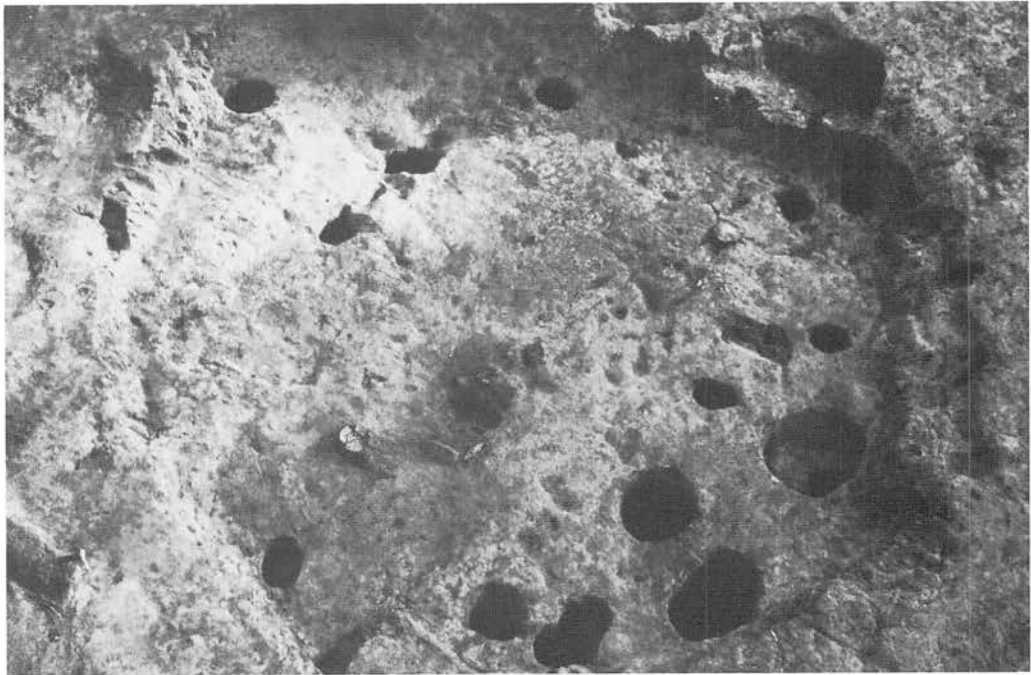


b. E II - 4 住居址

写真図版34

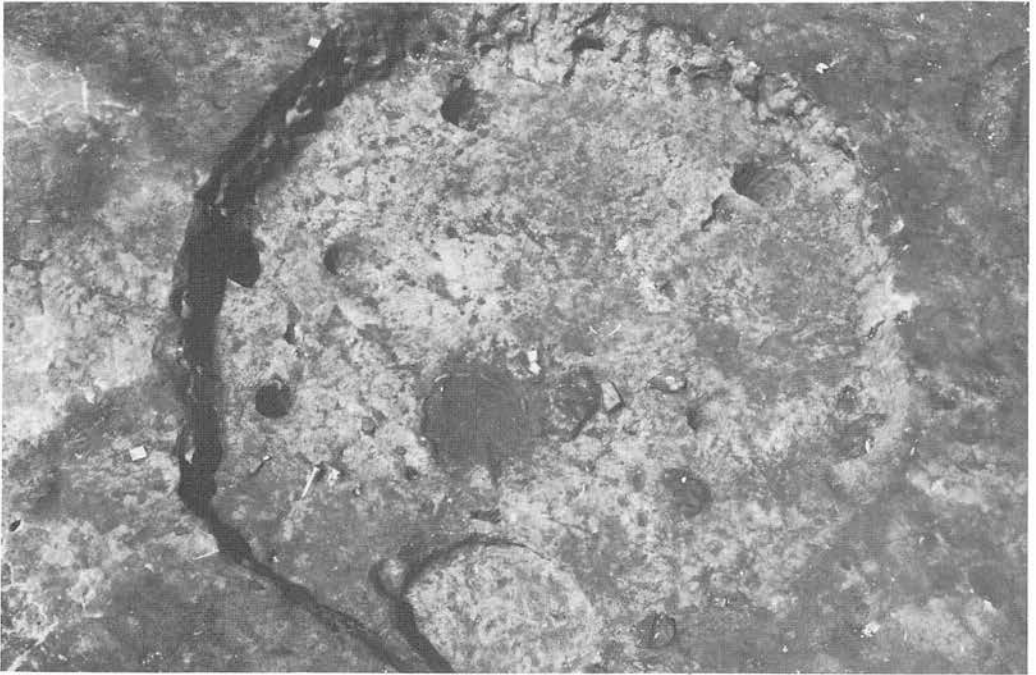


a. E II - 5 住居址

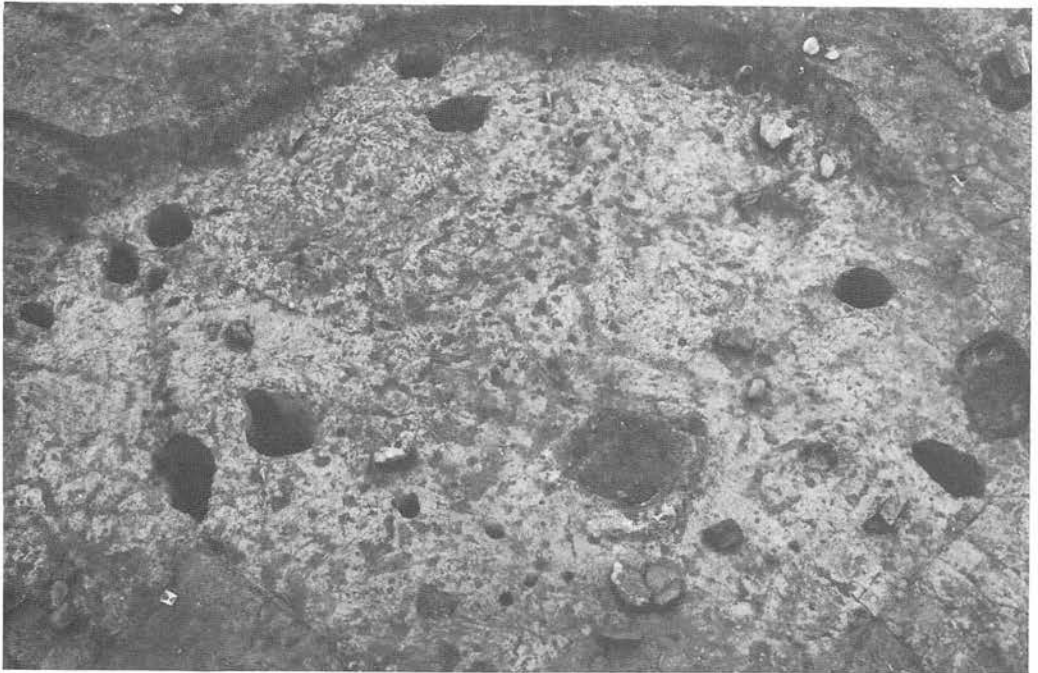


b. E II - 6 住居址

写真図版35

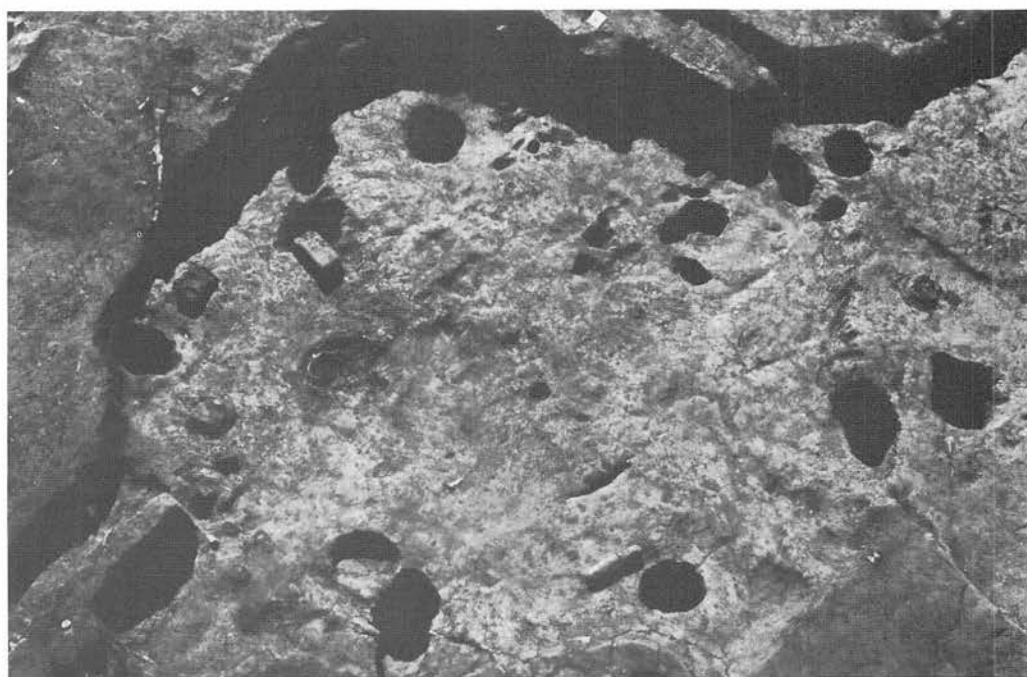


a. E II - 7 住居址



b. E II - 8 住居址

写真図版36



a. E II - 9 住居址

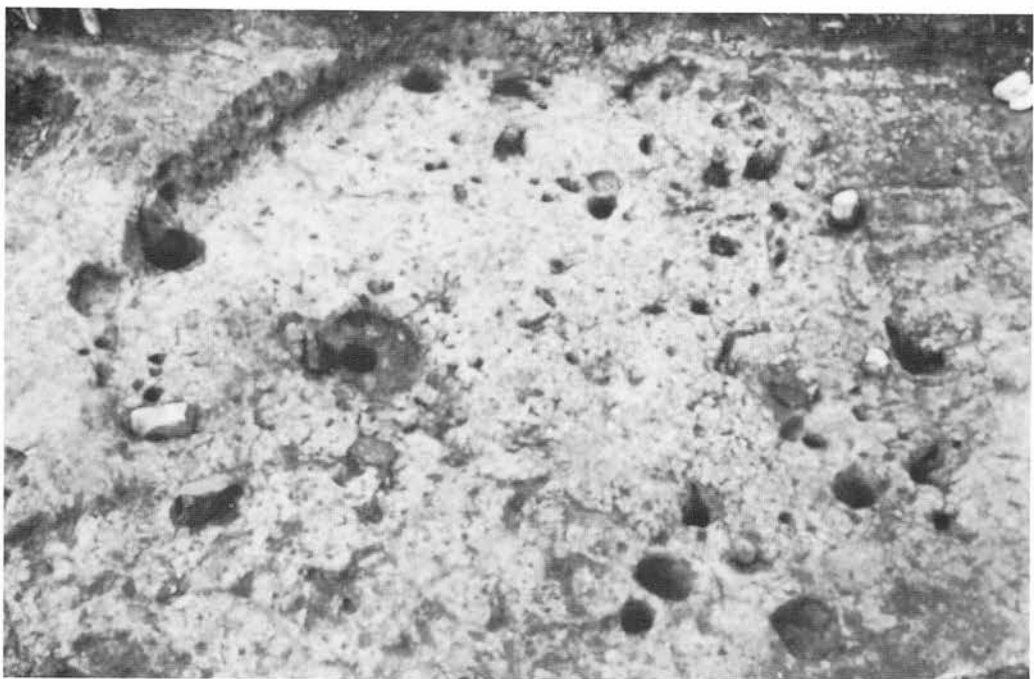


b. E II - 10 住居址  
写真図版37

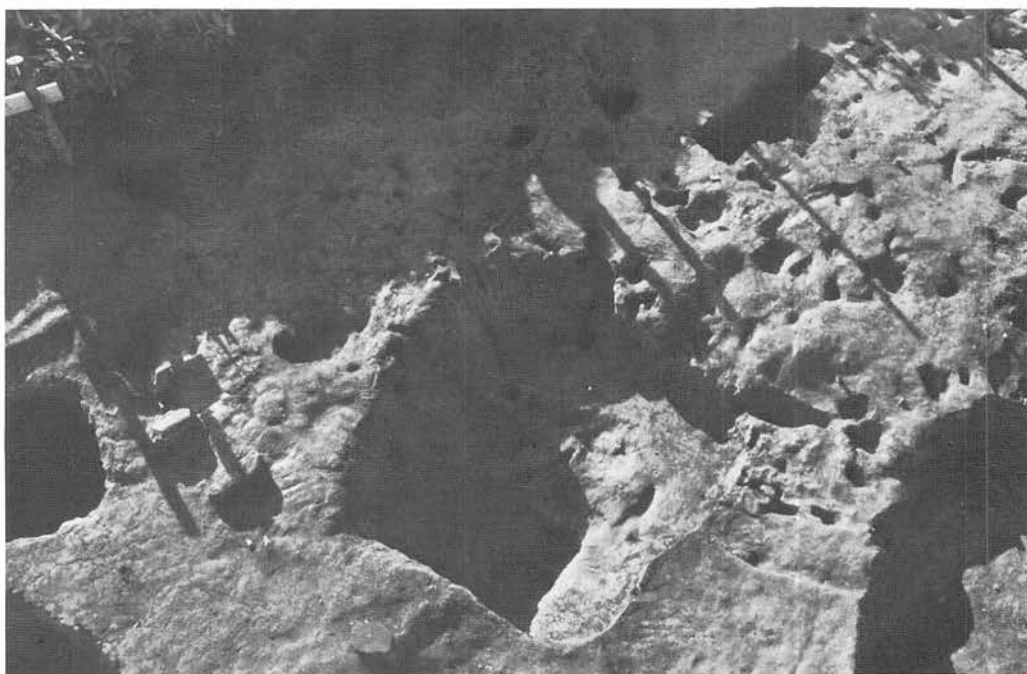




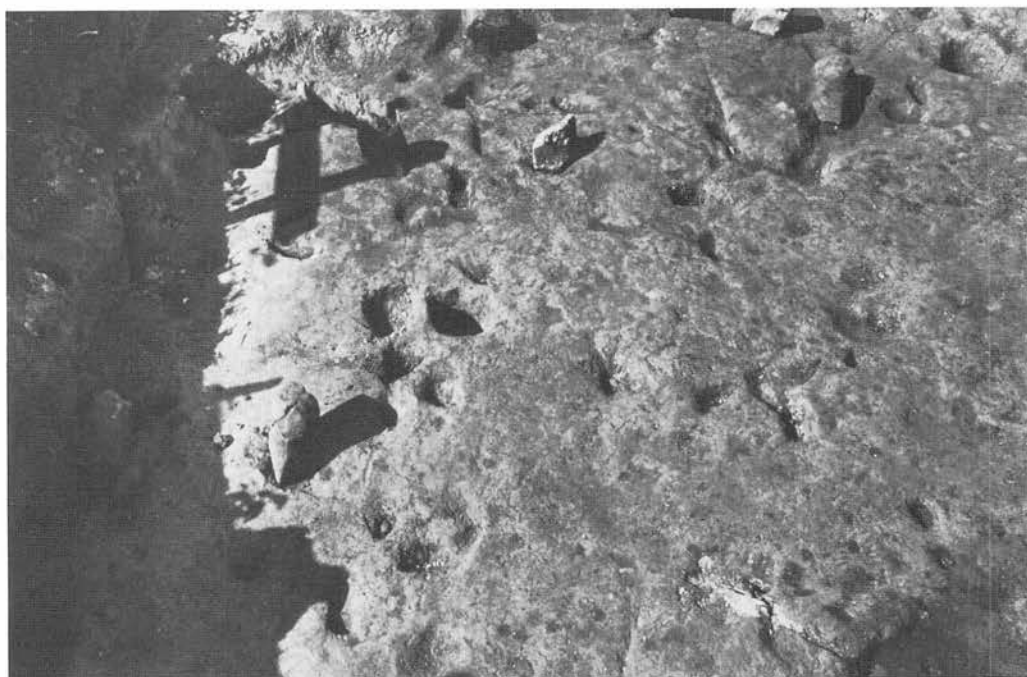
a. E II-11住居址(遺物出土状況)



b. E II-11住居址  
写真図版38

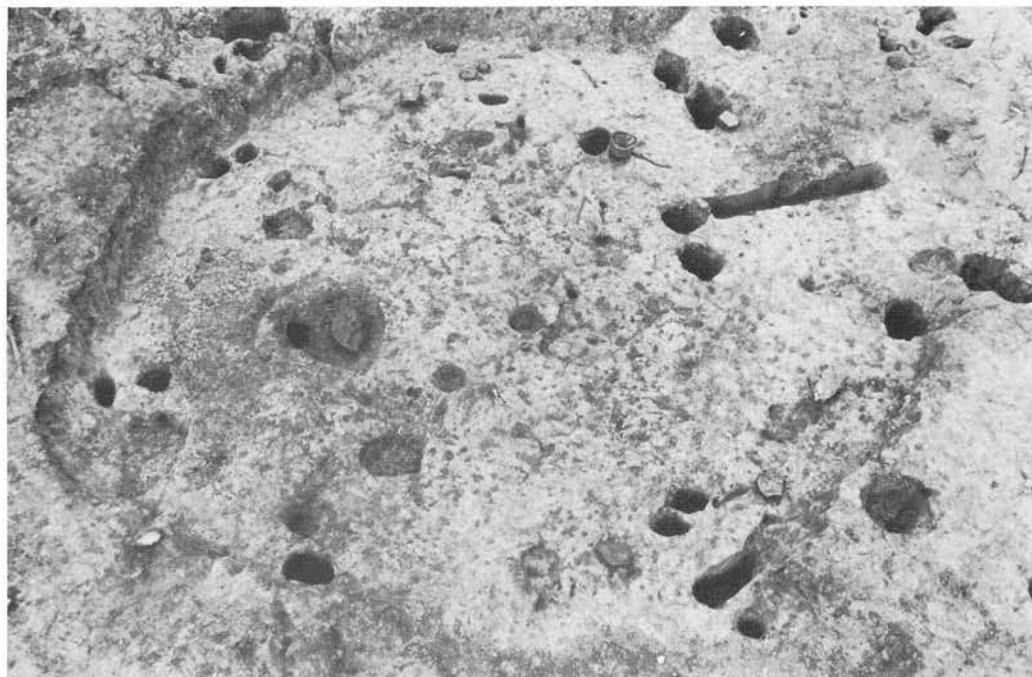


a. E II-12住居址・E II-13住居址・E II-14住居址

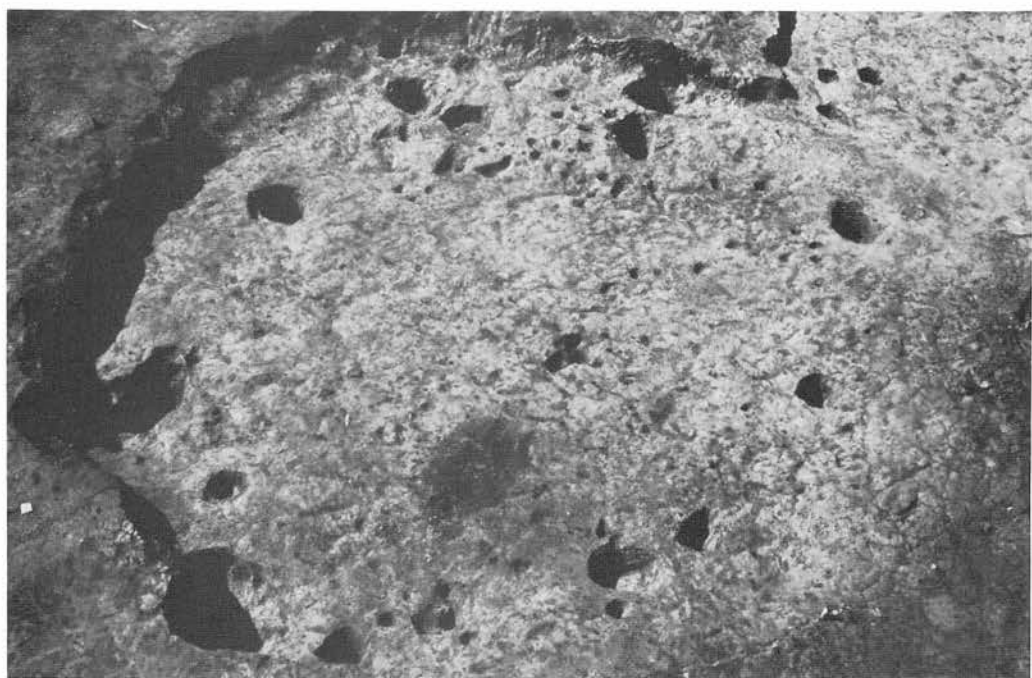


b. E II-13住居址

写真図版39

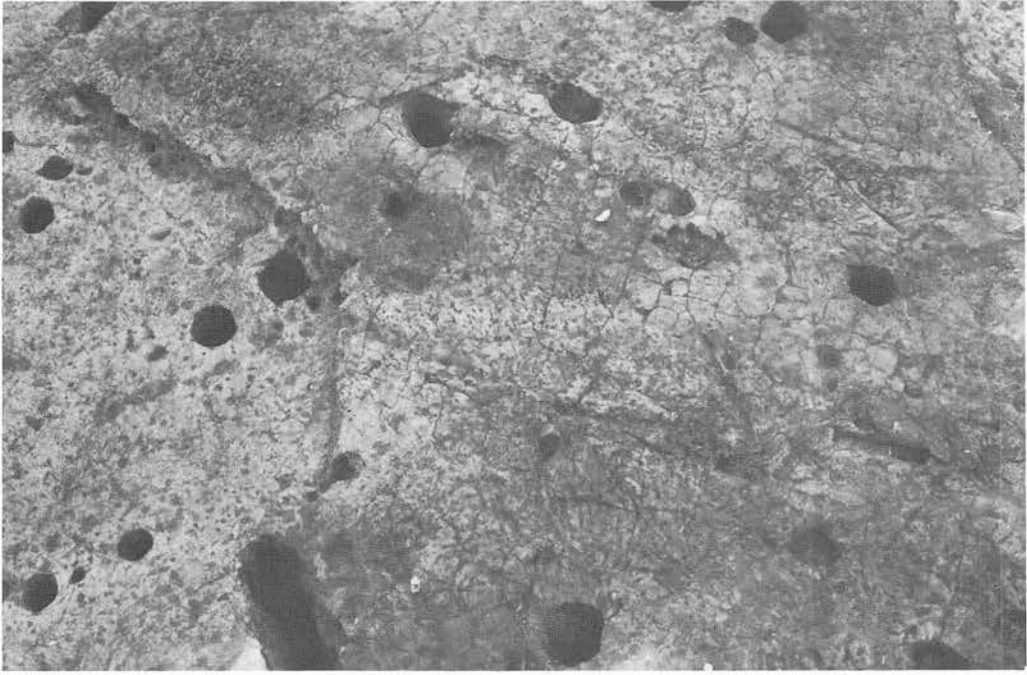


a. E II - 14住居址

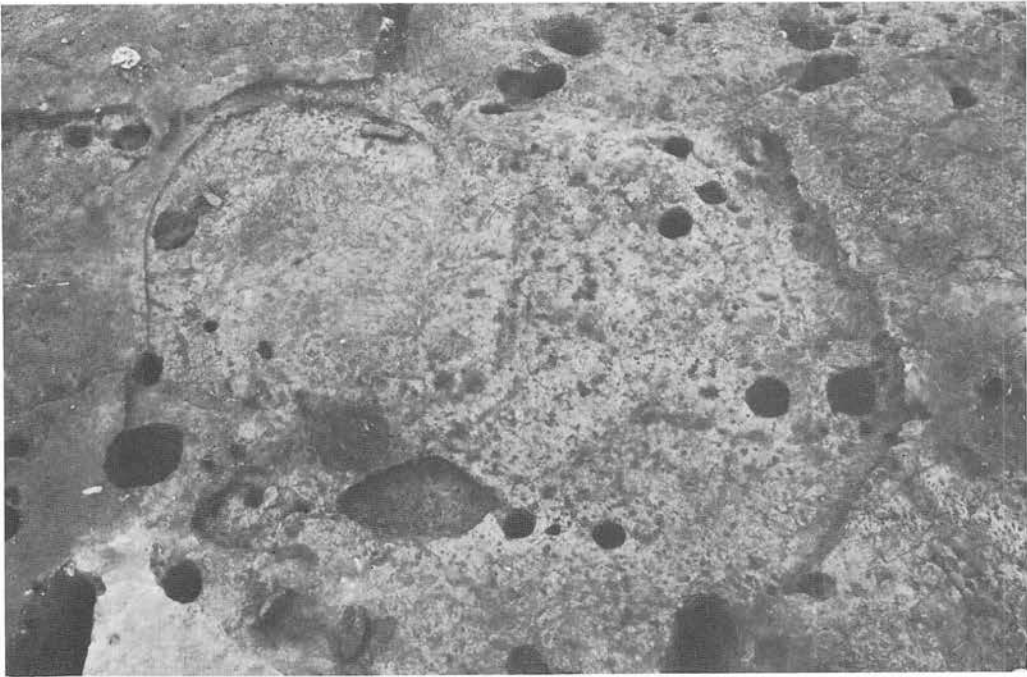


b. E II - 15住居址

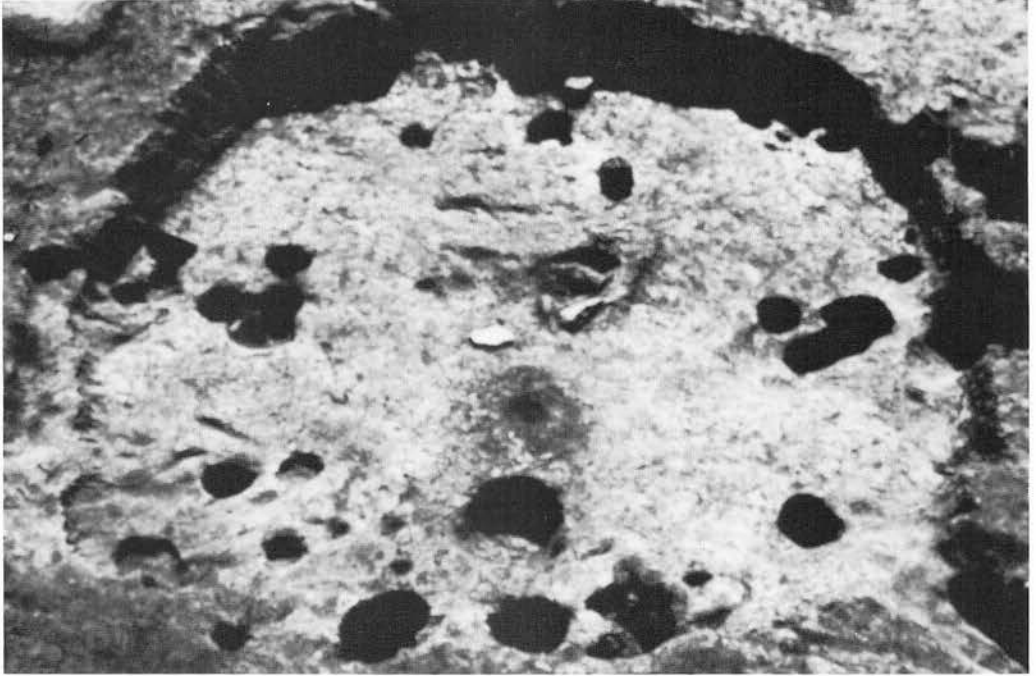
写真図版40



a. E II-16住居址



b. E II-17住居址・E II-29住居址  
写真図版41

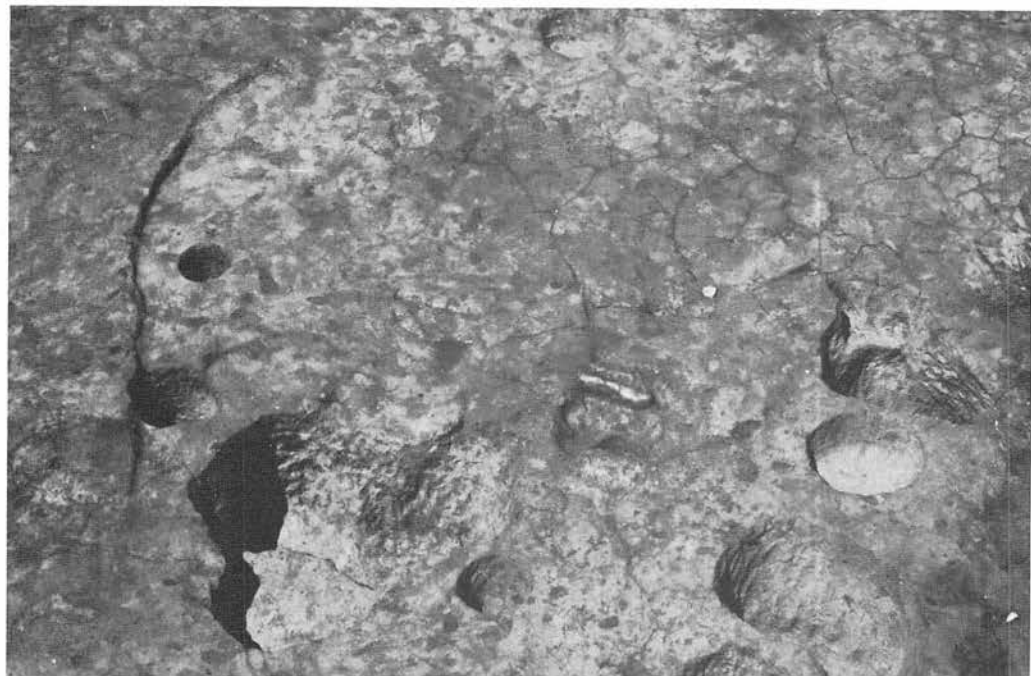


a. E II - 20住居址



b. E II - 21住居址

写真図版42

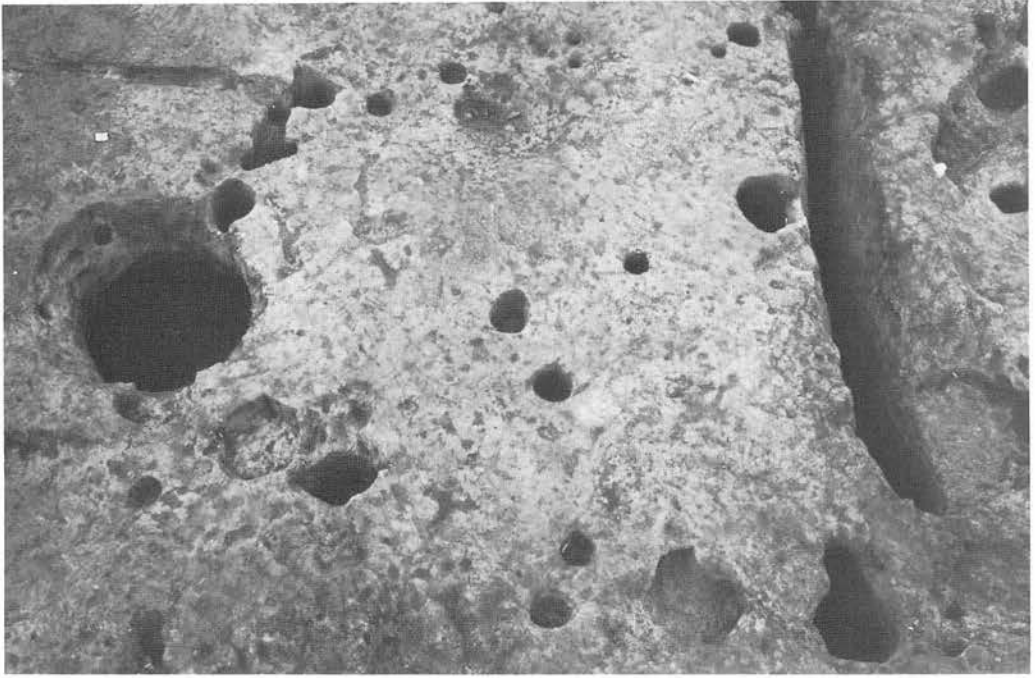


a. E II-22住居址

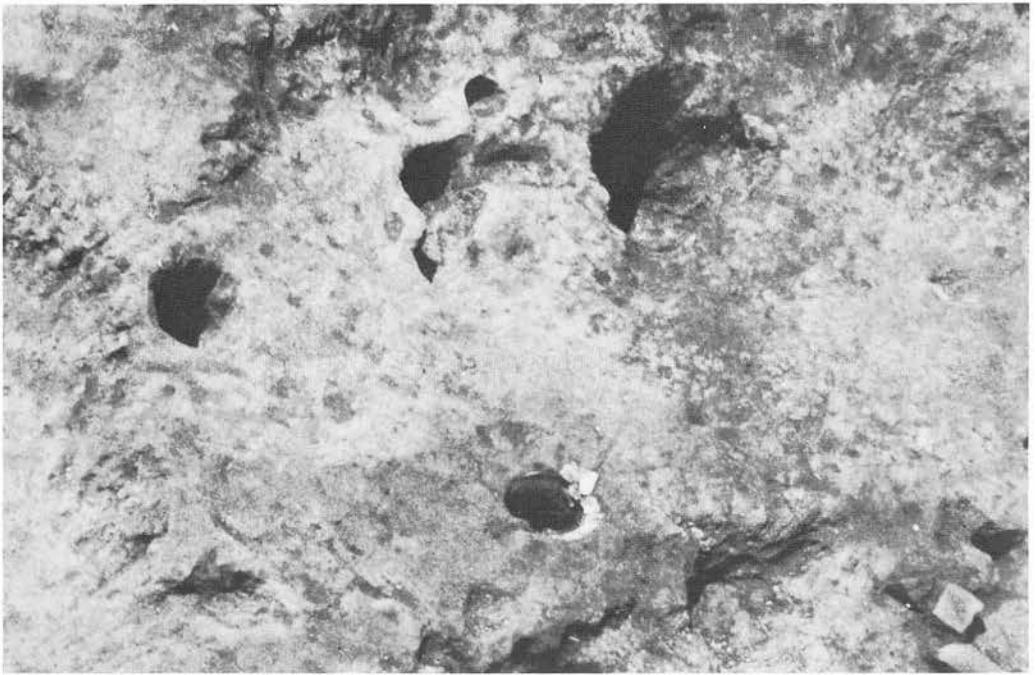


b. E II-24住居址

写真図版43

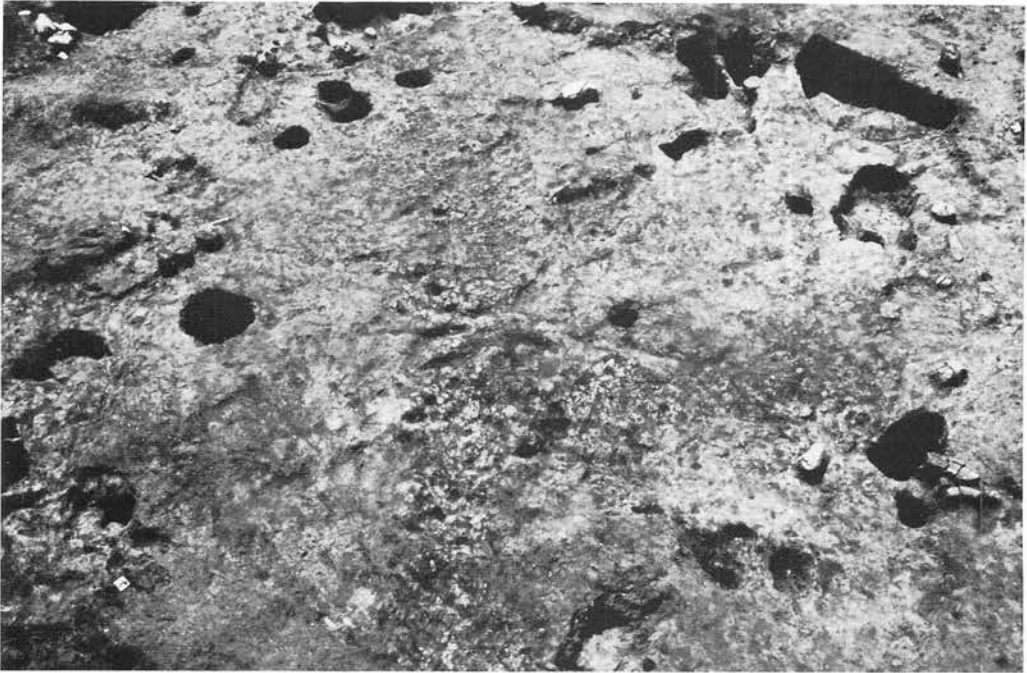


a. E II-25住居址

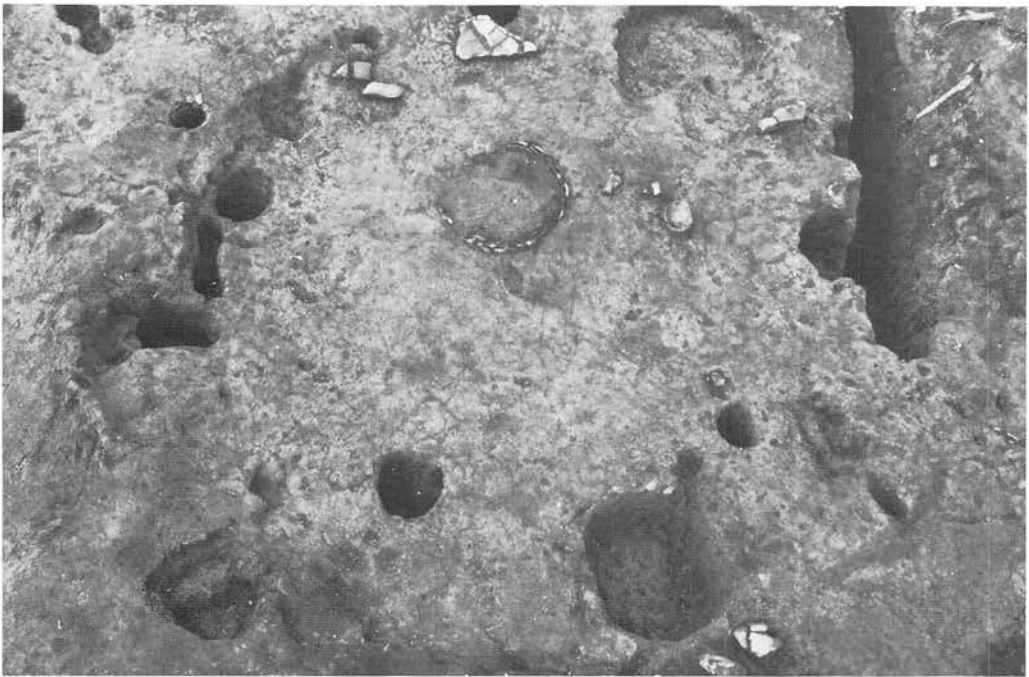


b. E II-26住居址

写真図版44



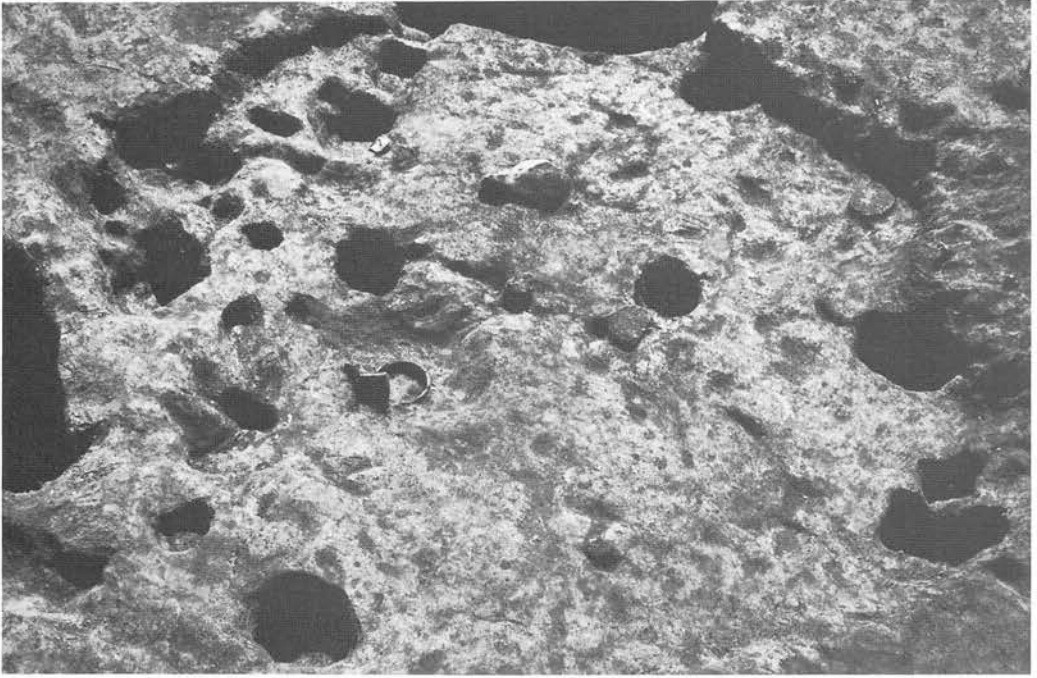
a. E II-27住居址



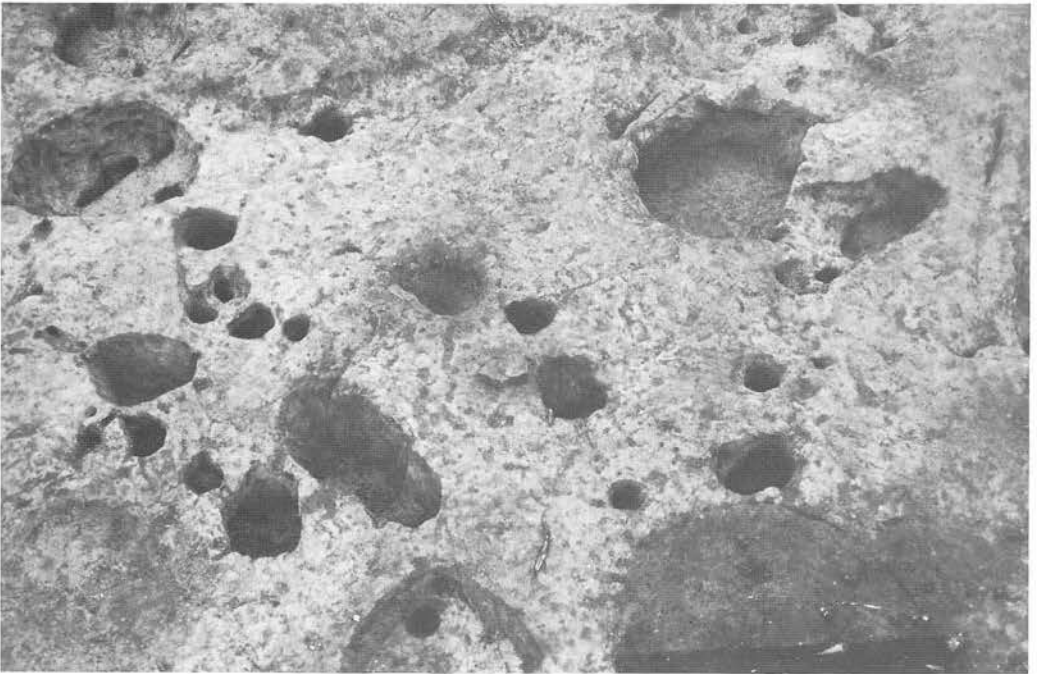
b. E II-28住居址

写真図版45



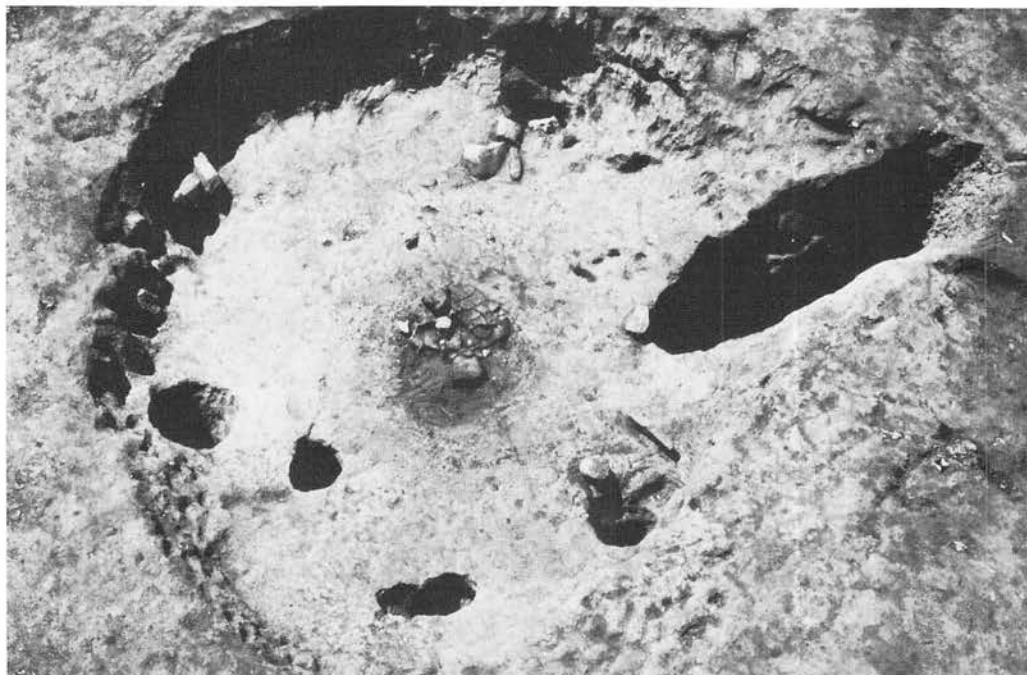


a. E III-1 住居址

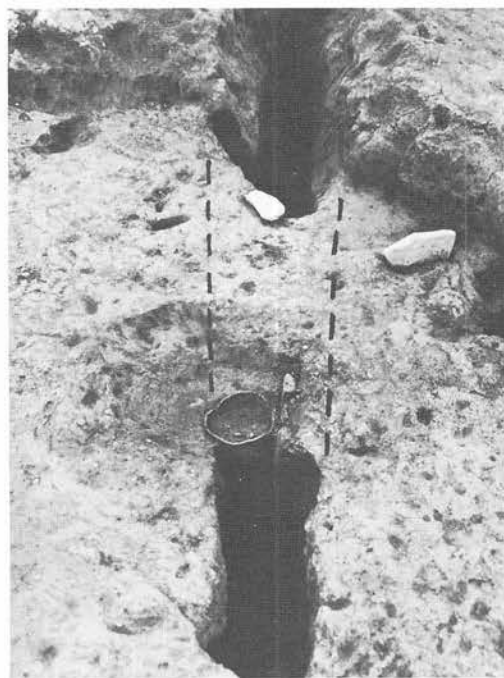
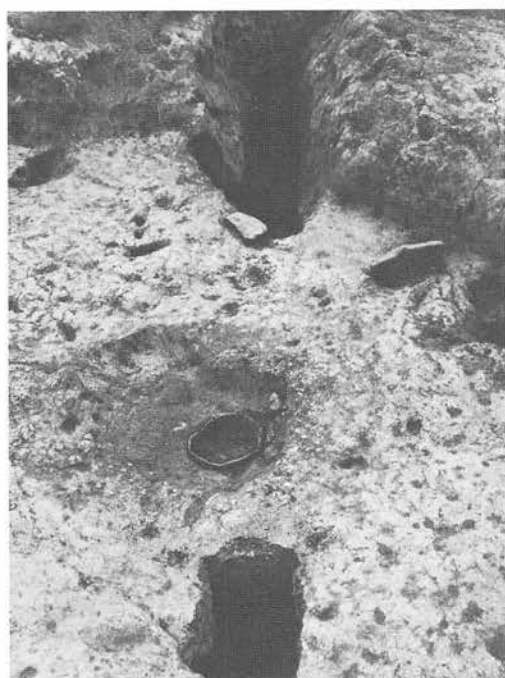


b. E III-3 住居址

写真図版46

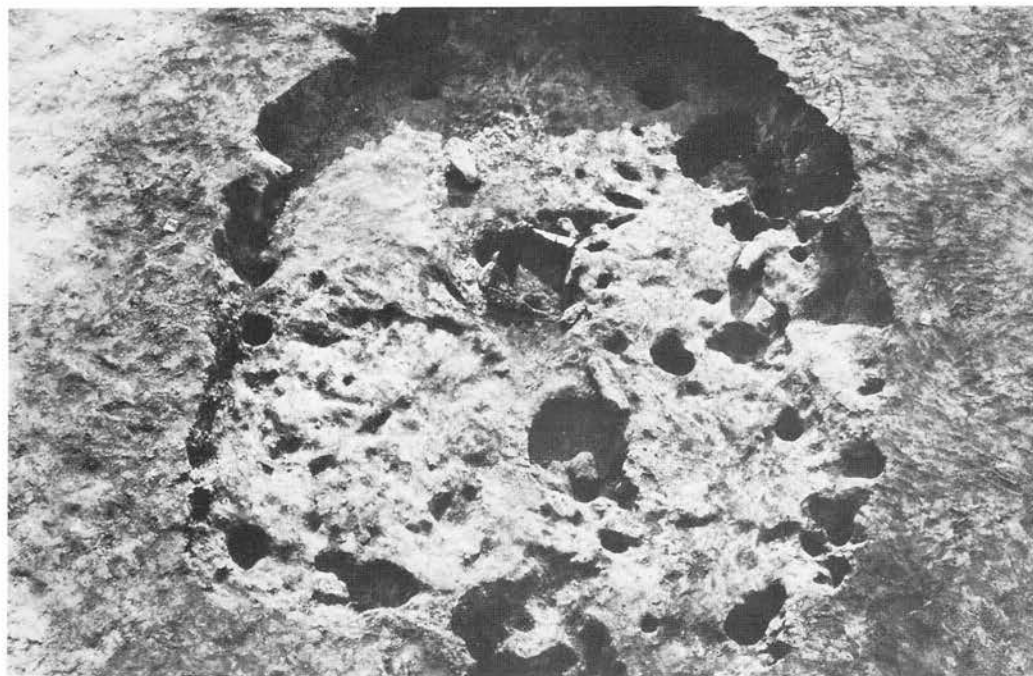


a. E III - 2 住居址

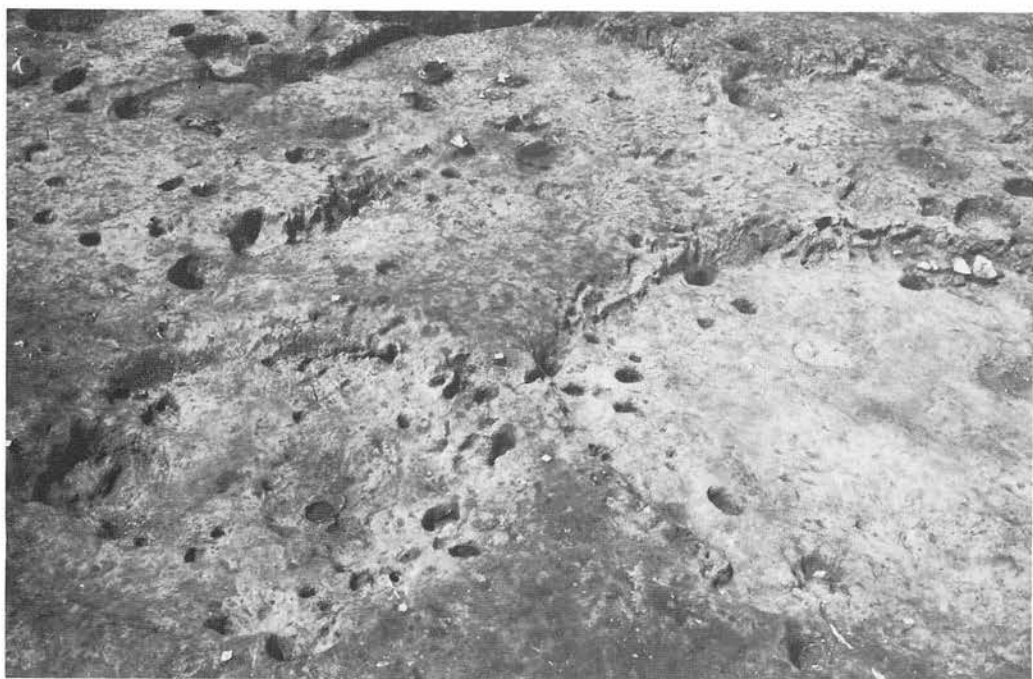


b. E III - 2 住居址(陥し穴状遺構との切り合い)

写真図版47

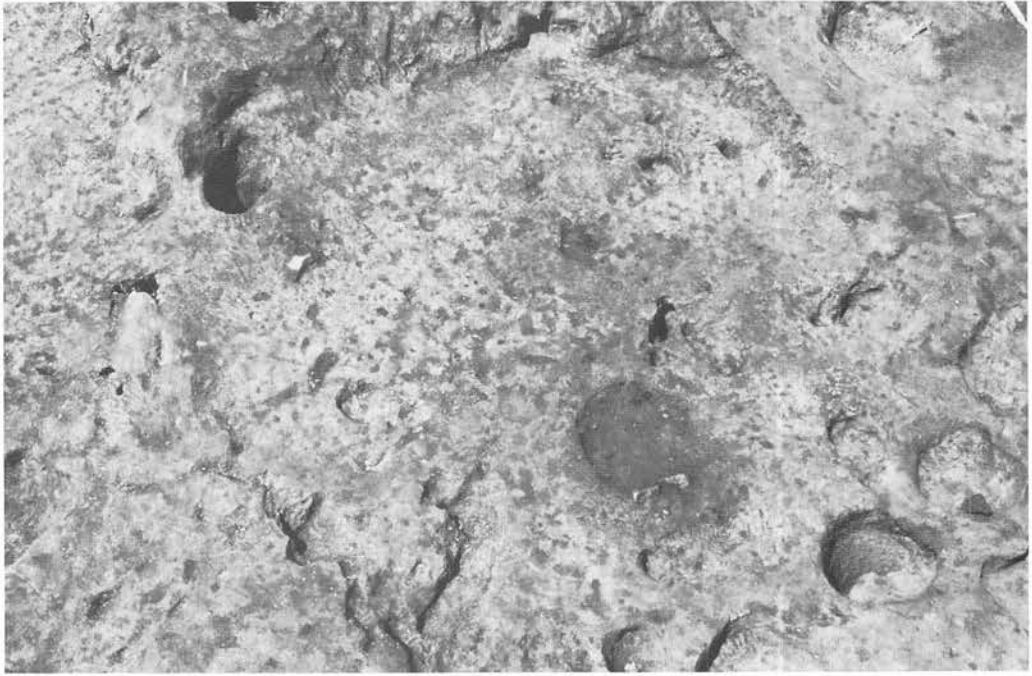


a. E III - 4 住居址



b. E III - 5 住居址・E III - 6 住居址・E III - 7 住居址・E III - 9 住居址

写真図版48

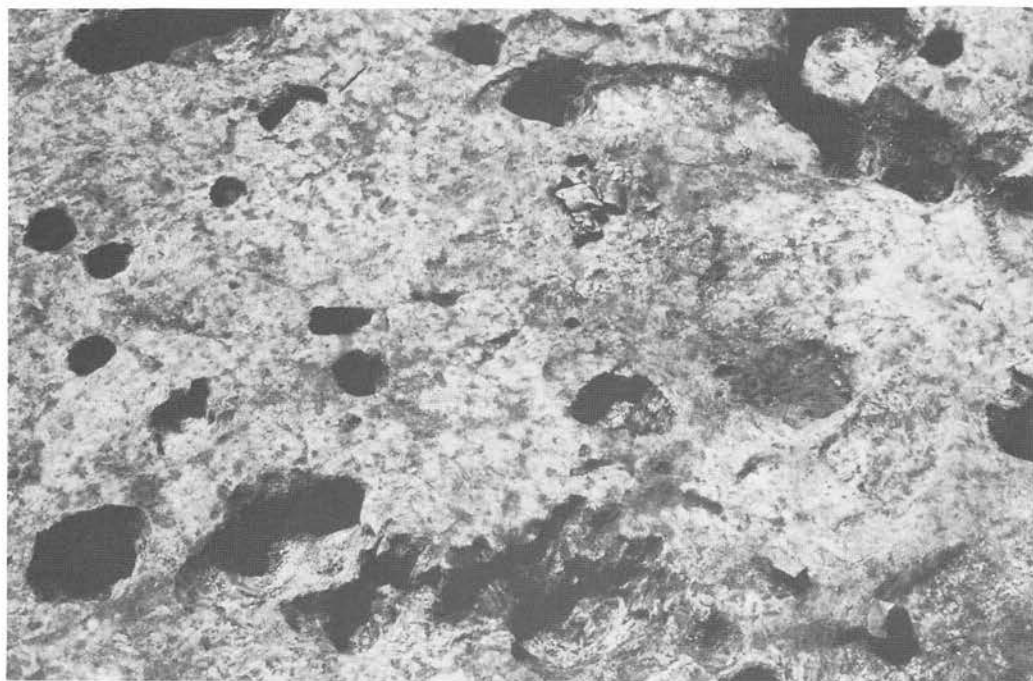


a. E III - 5 住居址

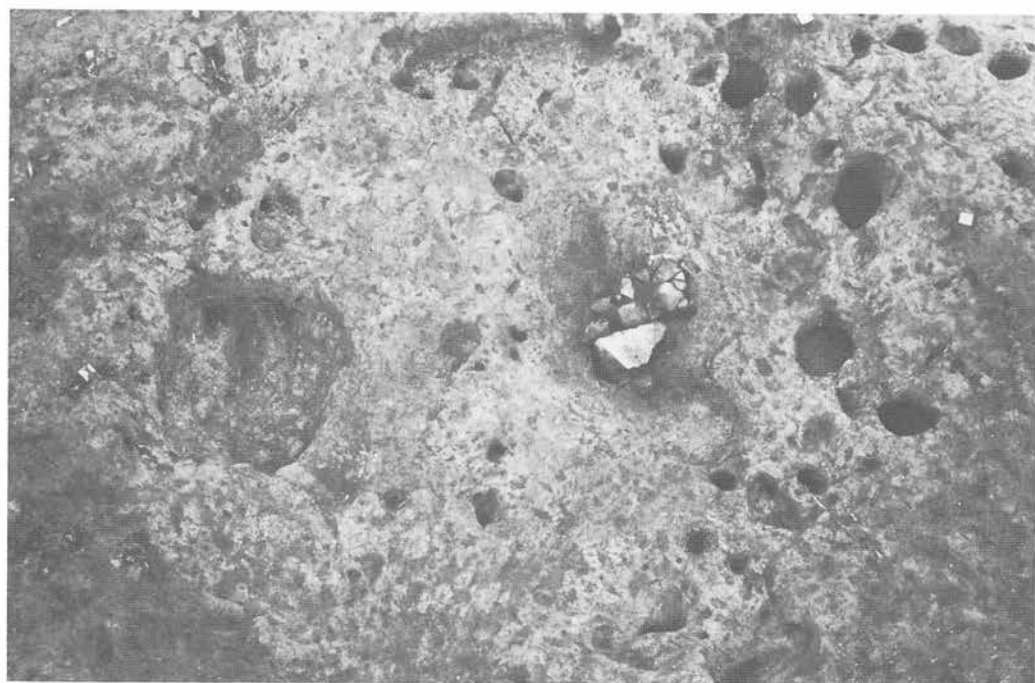


b. E III - 6 住居址

写真図版49

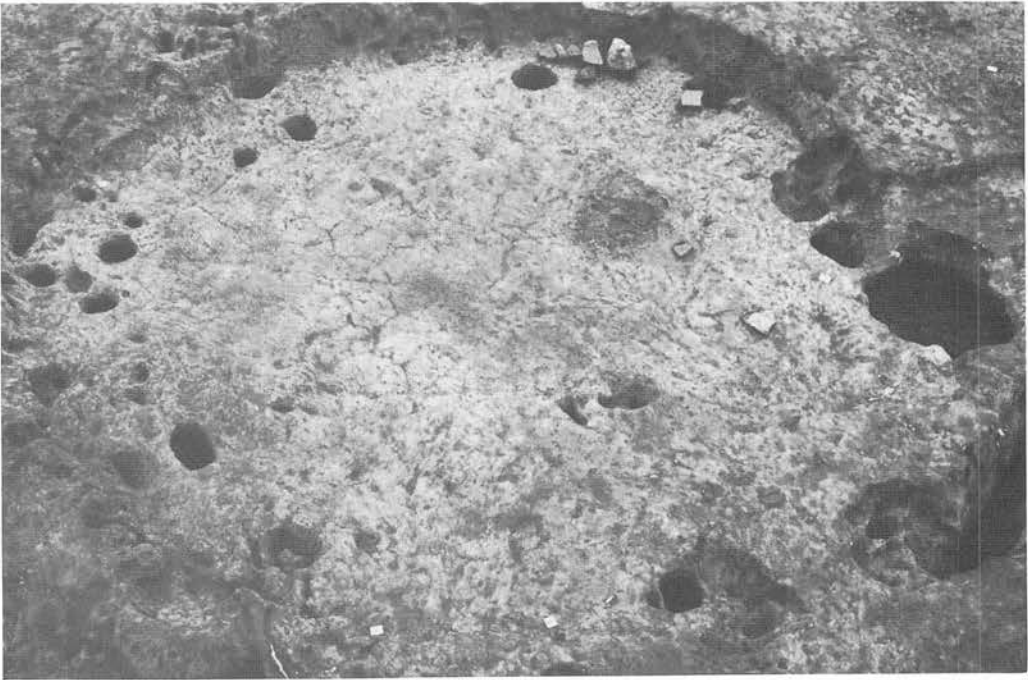


a. E III-7 住居址

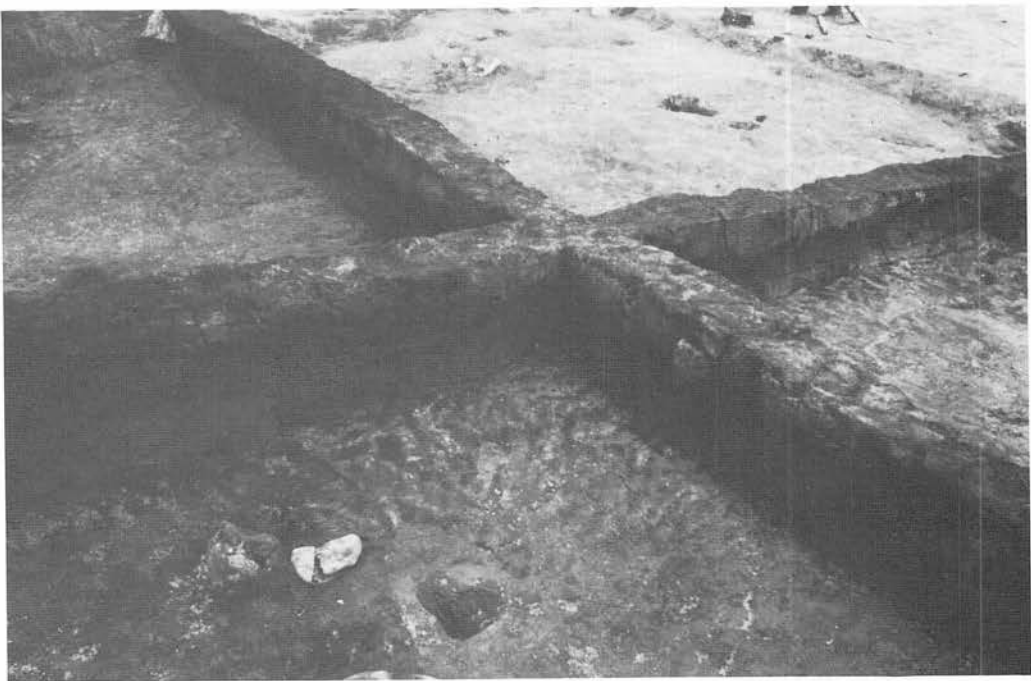


b. E III-9 住居址

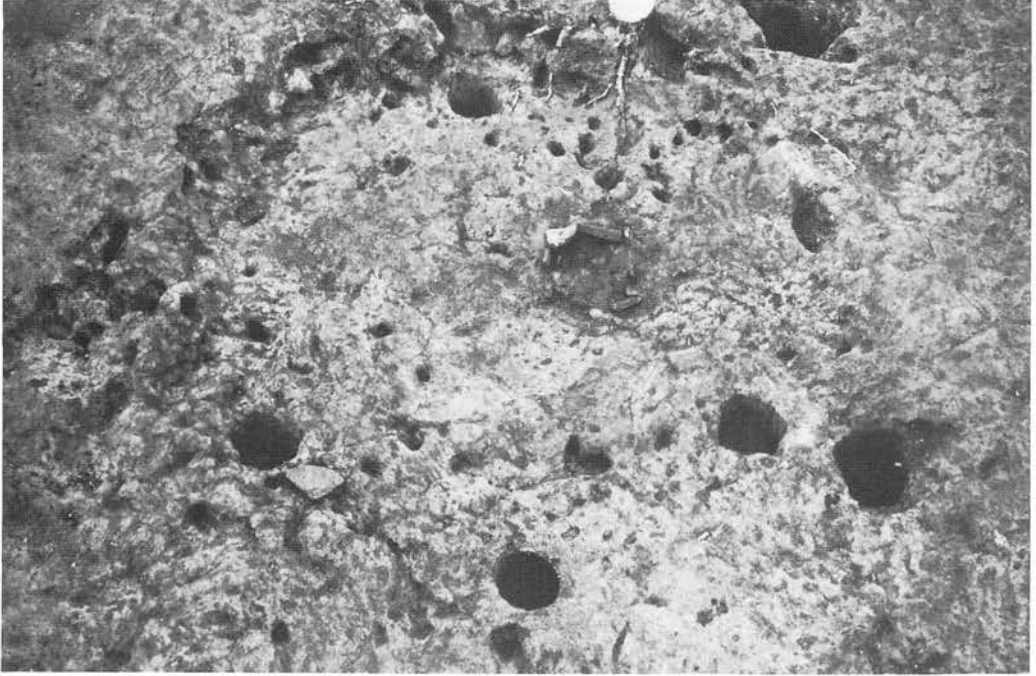
写真図版50



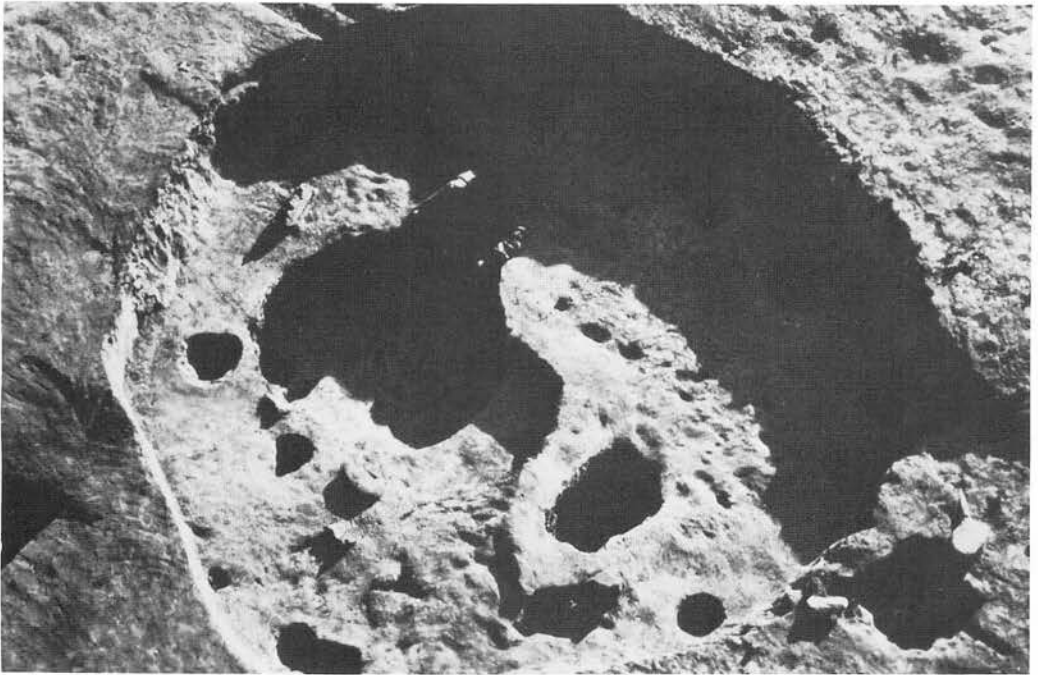
a. E III - 8 住居址



b. E III - 8 住居址(埋土の状況)  
写真図版51

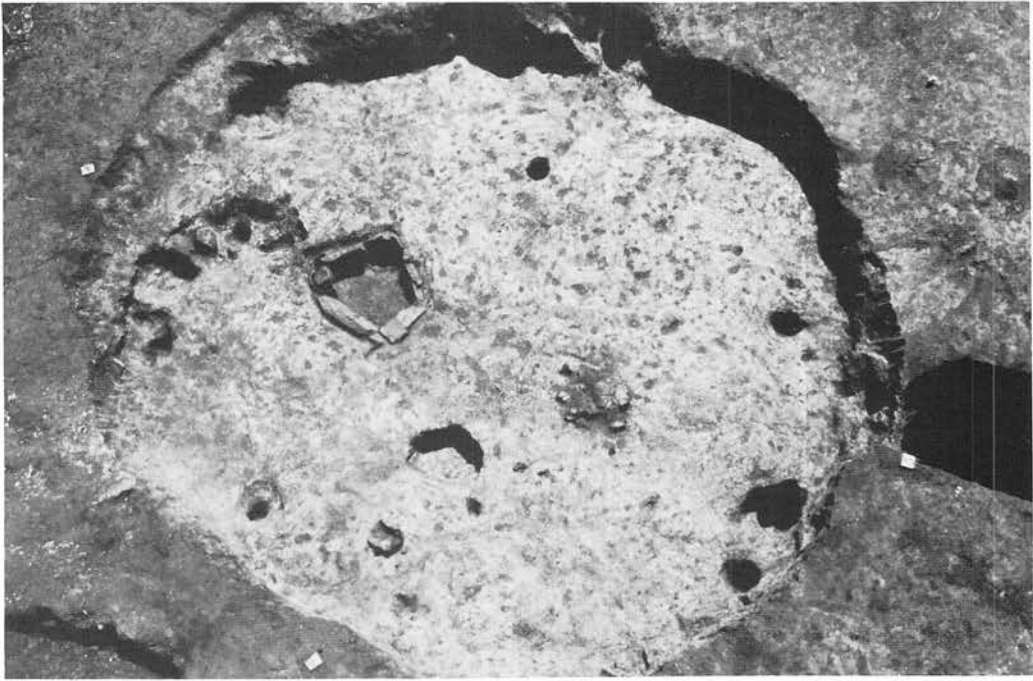


a. E III-10住居址

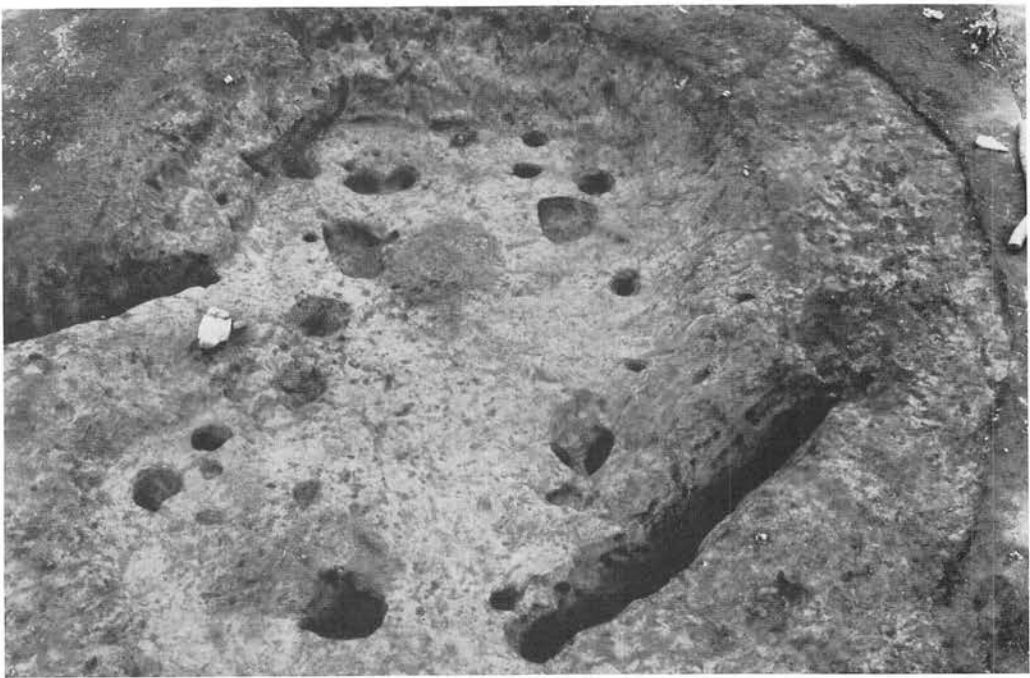


b. E IV-住居址

写真図版52



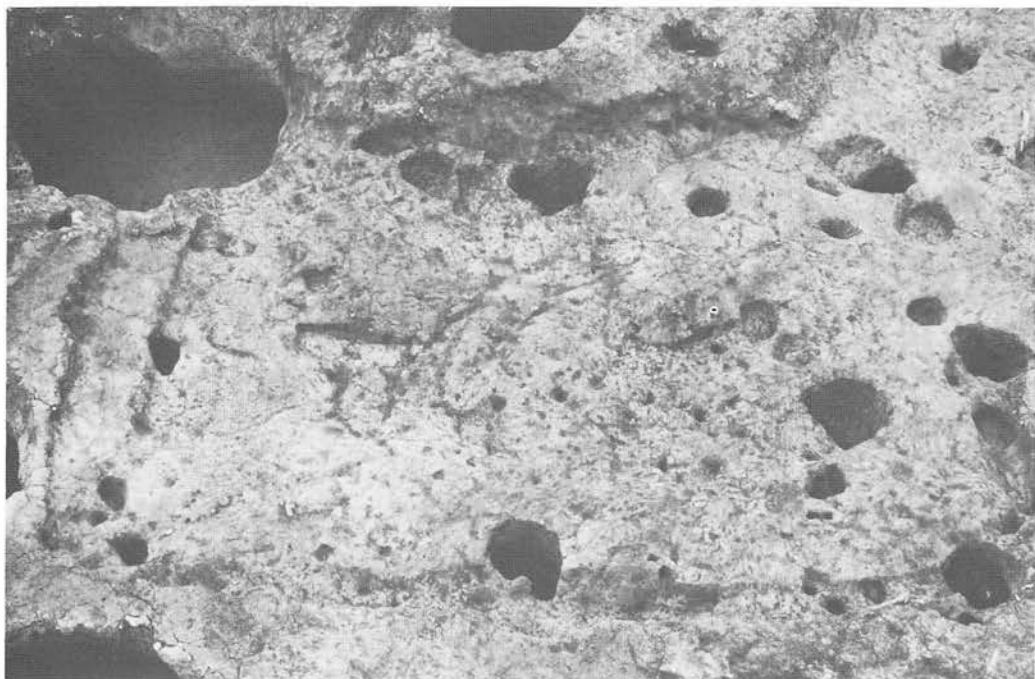
a. E IV - 2 住居址



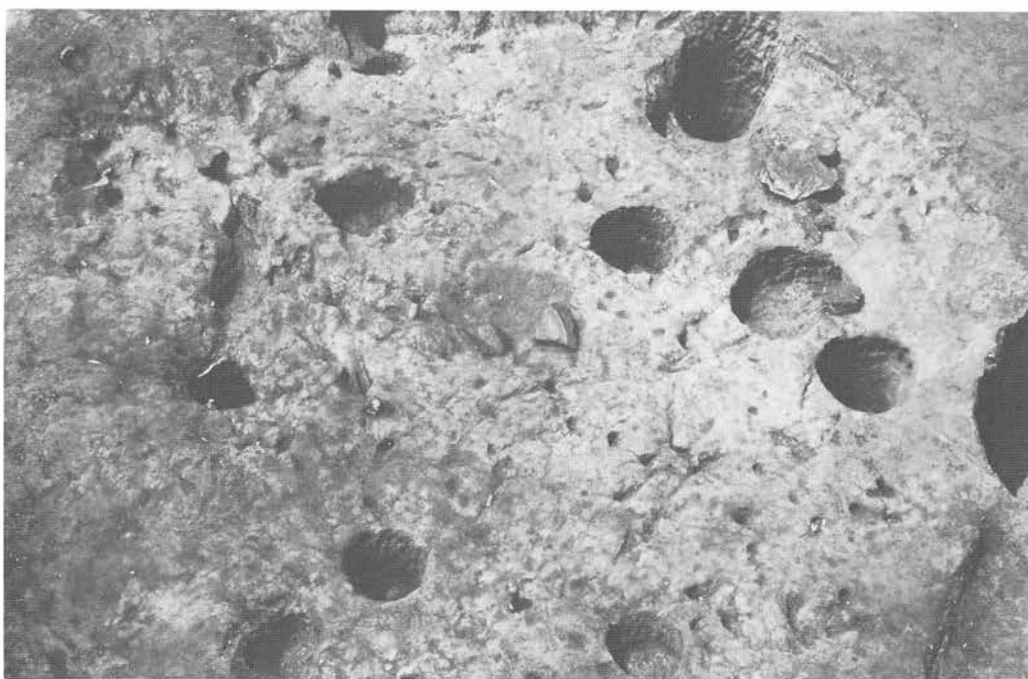
b. E VI - 4 住居址・E IV - 5 住居址

写真図版53





a. F II - 1 住居址



b. F II - 2 住居址

写真図版54



a. F II - 3 住居址

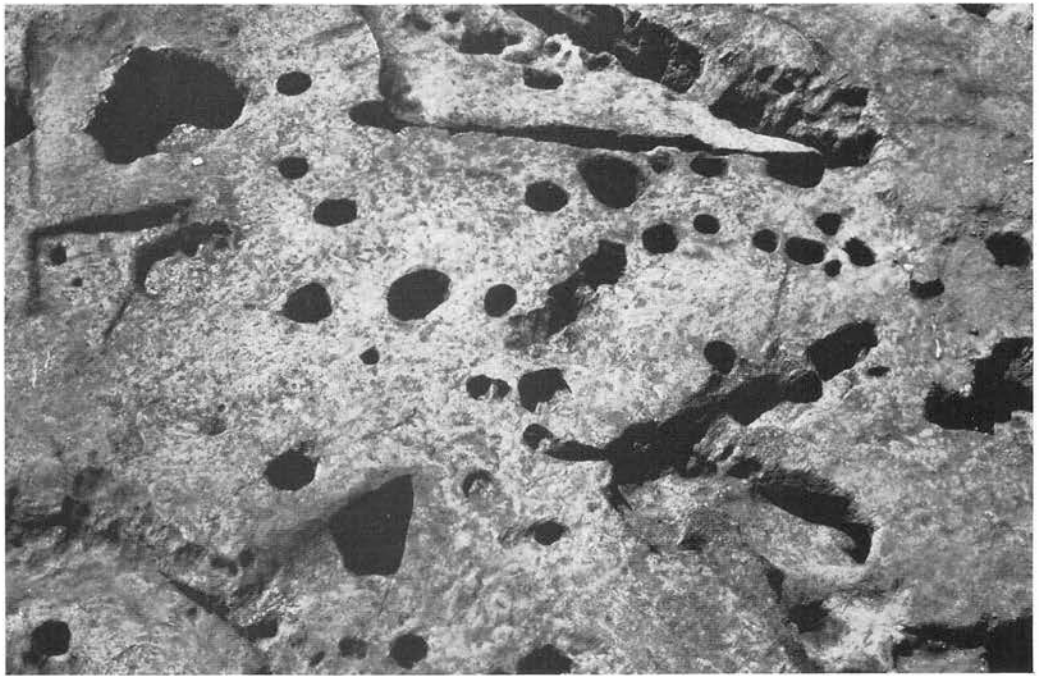


b. F II - 4 住居址

写真図版55

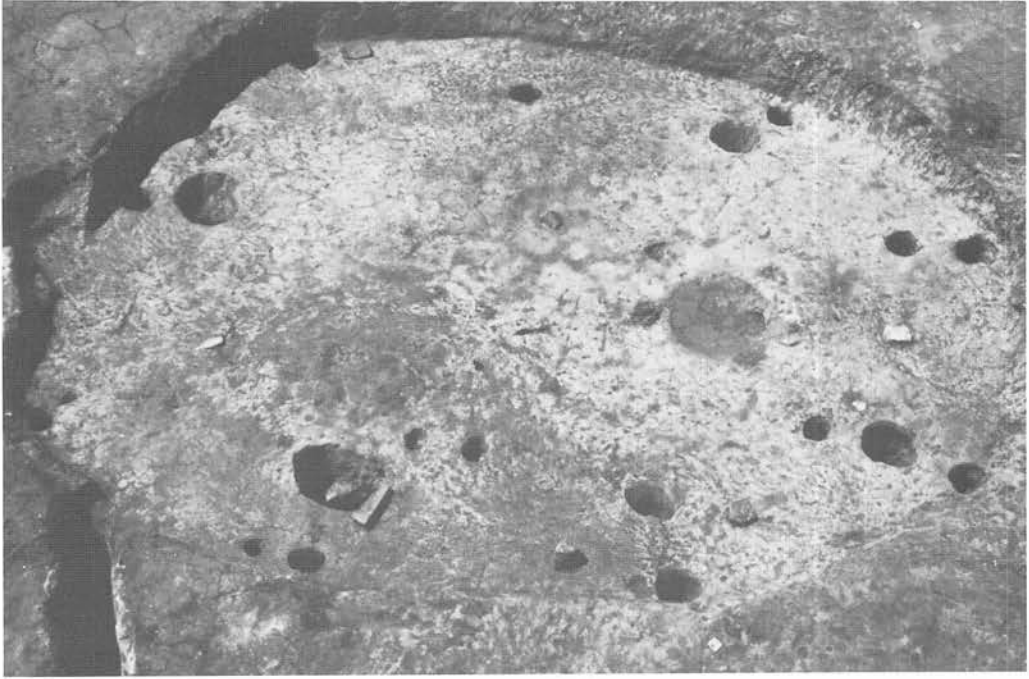


a. F II-6 住居址

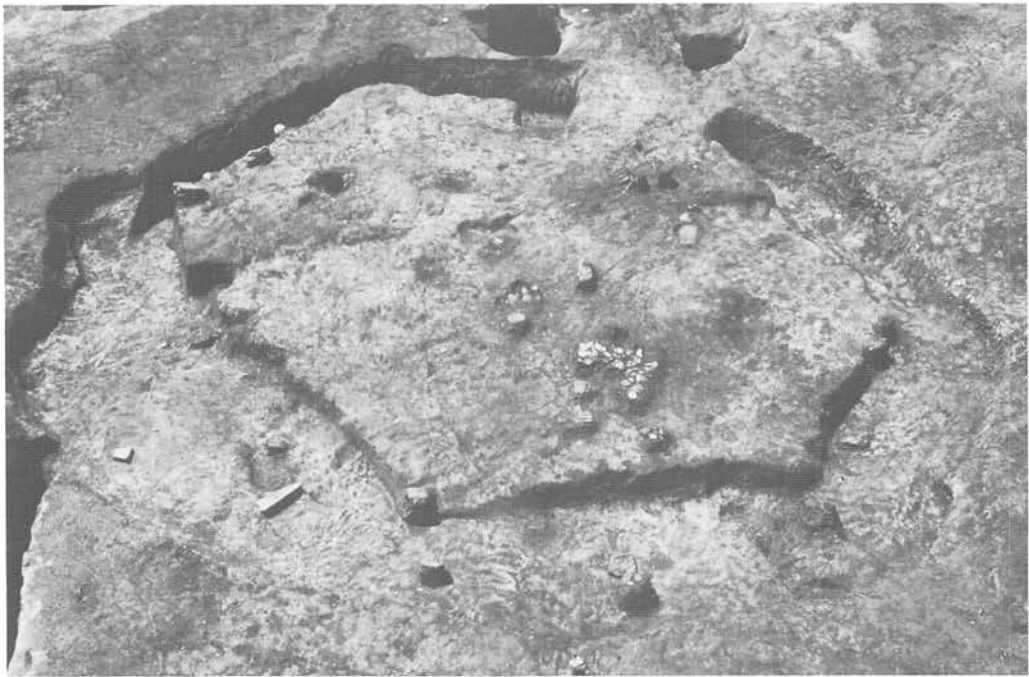


b. F II-7 住居址

写真図版56



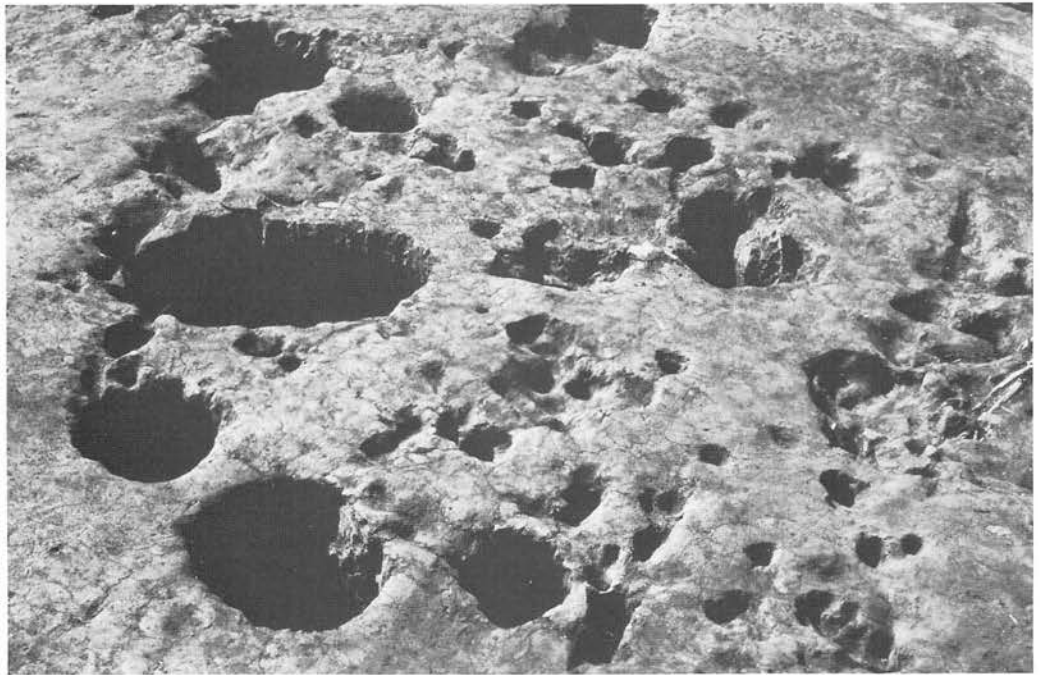
a. F II - 8 住居址



b. F II - 8 住居址(火山灰分布状况)  
写真图版57



a. F II - 8 住居址(埋土の状況)

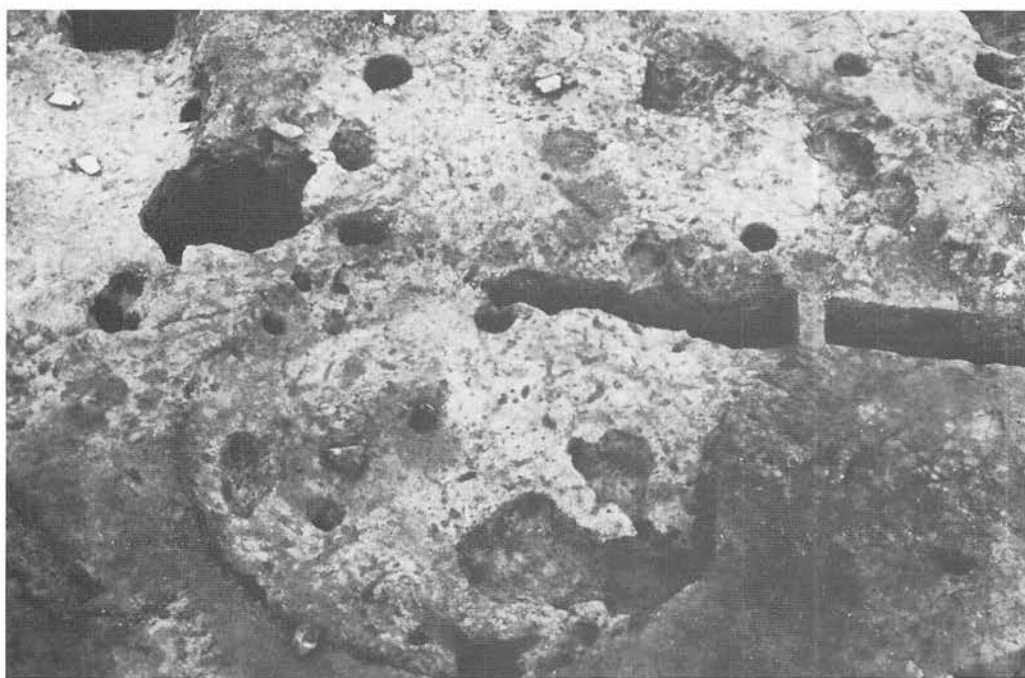


b. F II - 9 住居址

写真図版58



a. F II - 10住居址

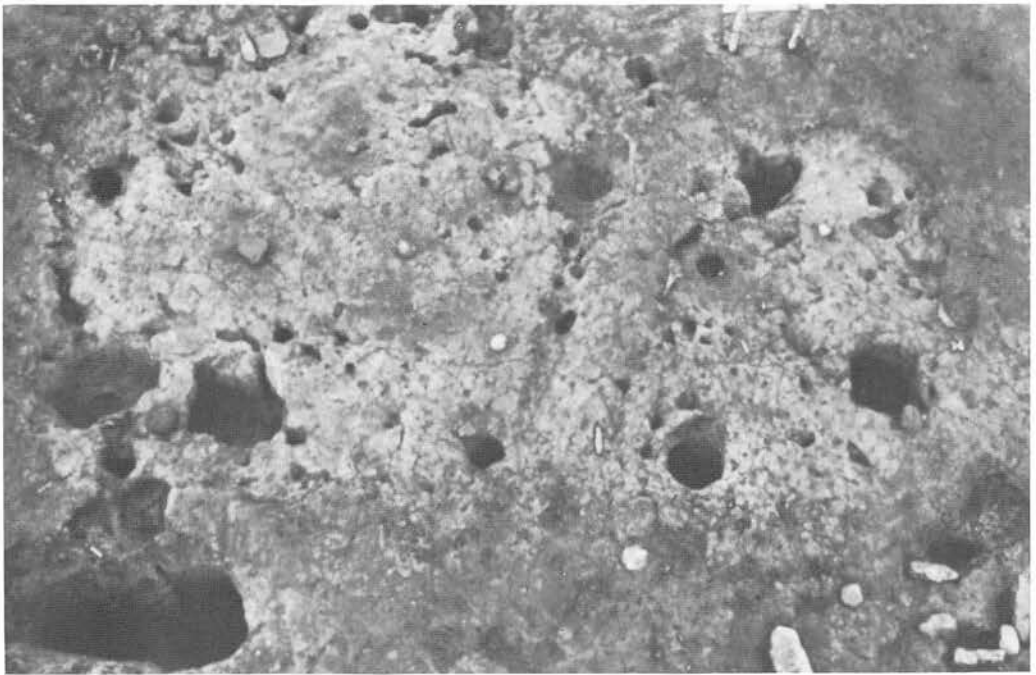


b. F II - 11住居址

写真図版59



a. F II-13住居址



b. F II-14住居址・F II-15住居址

写真図版60



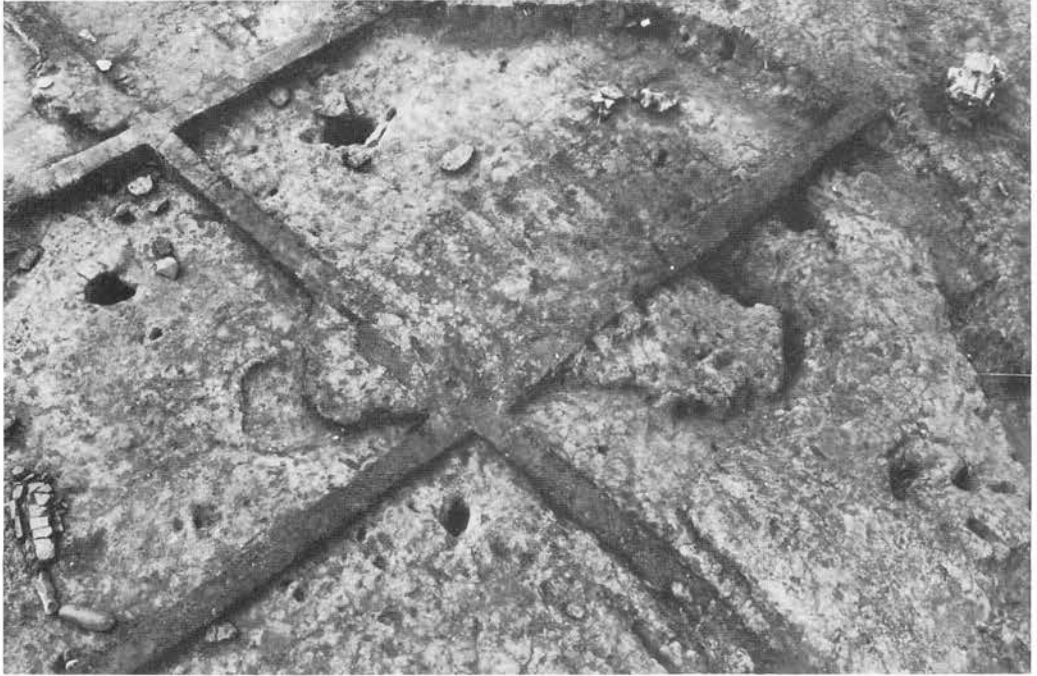
a. F II-16住居址・F II-19住居址



b. F II-17住居址・F II-18住居址

写真図版61



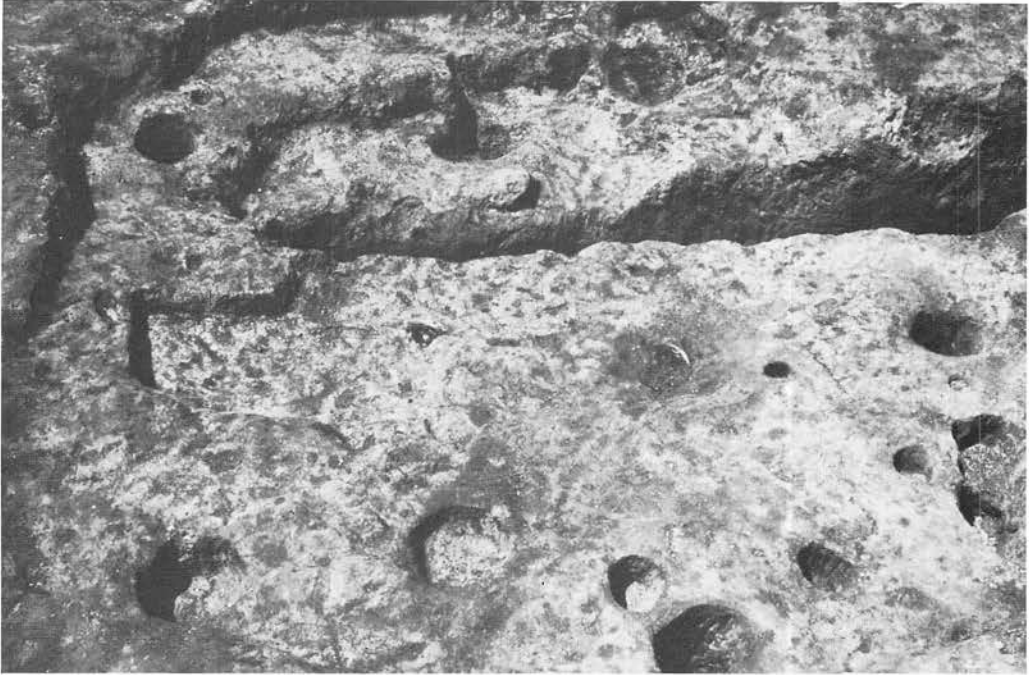


a. F II - 18住居址

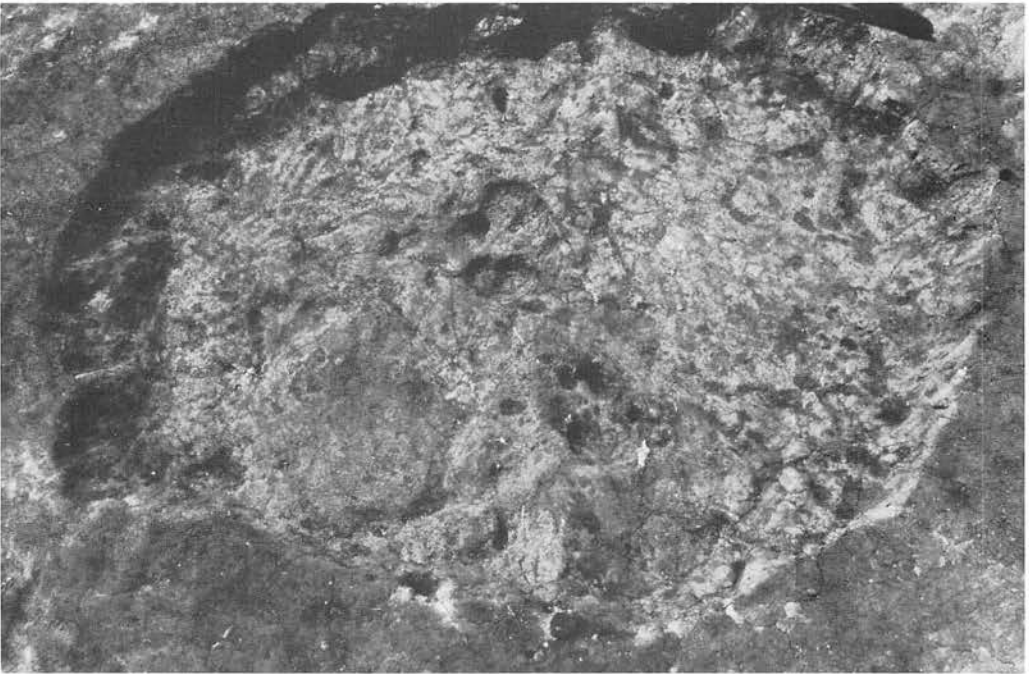


b. F III - 1住居址

写真図版62

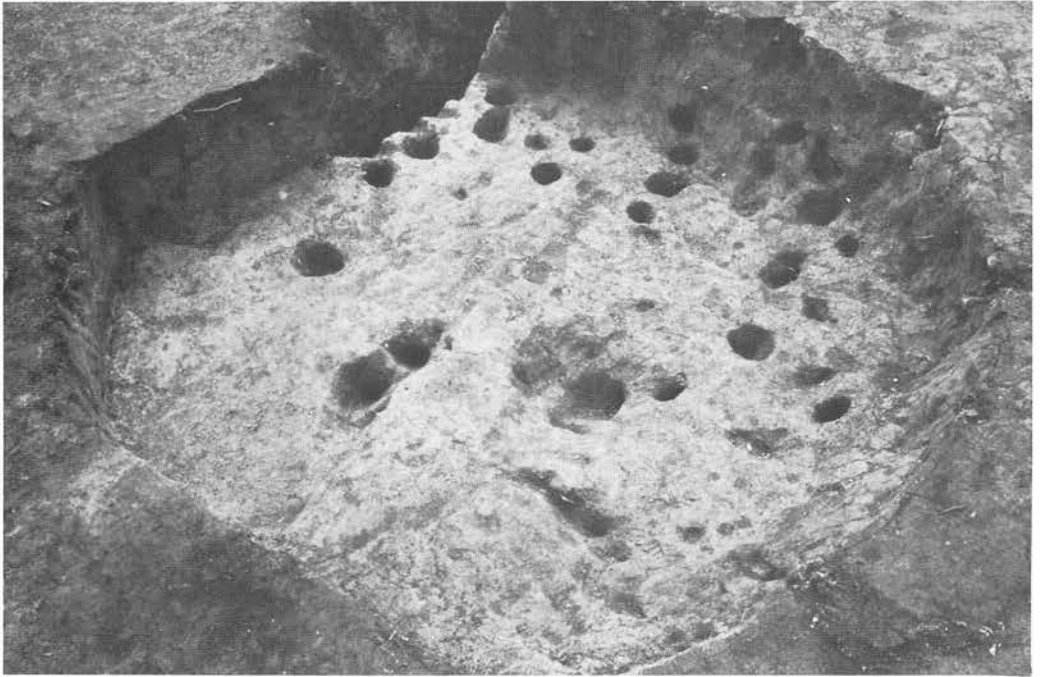


a. F III - 2 住居址

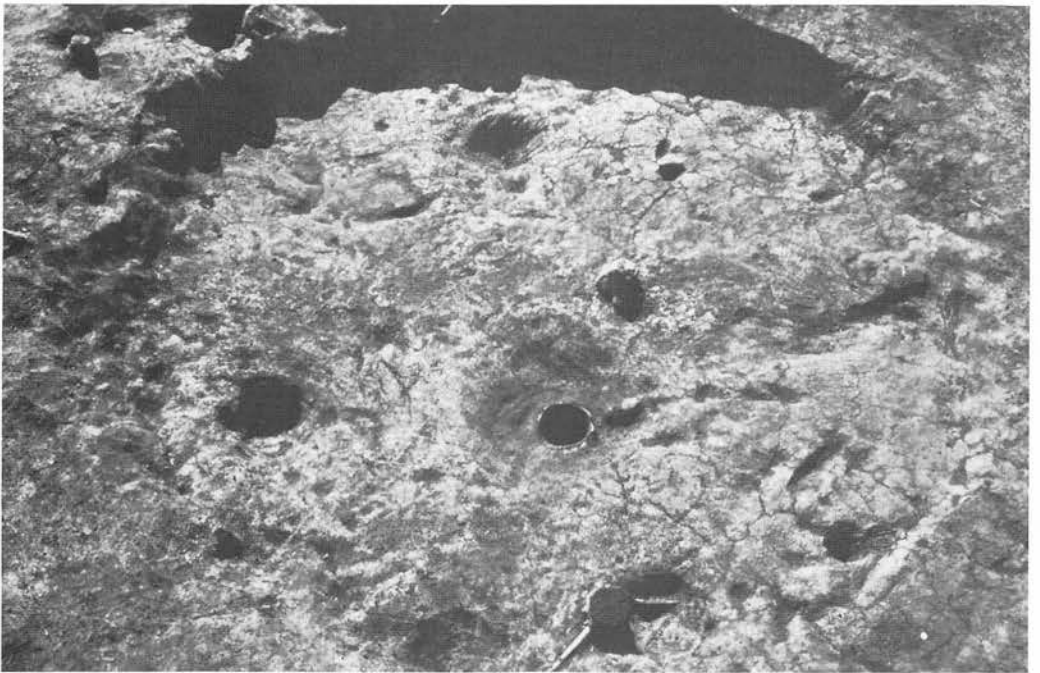


b. F III - 3 住居址

写真図版63

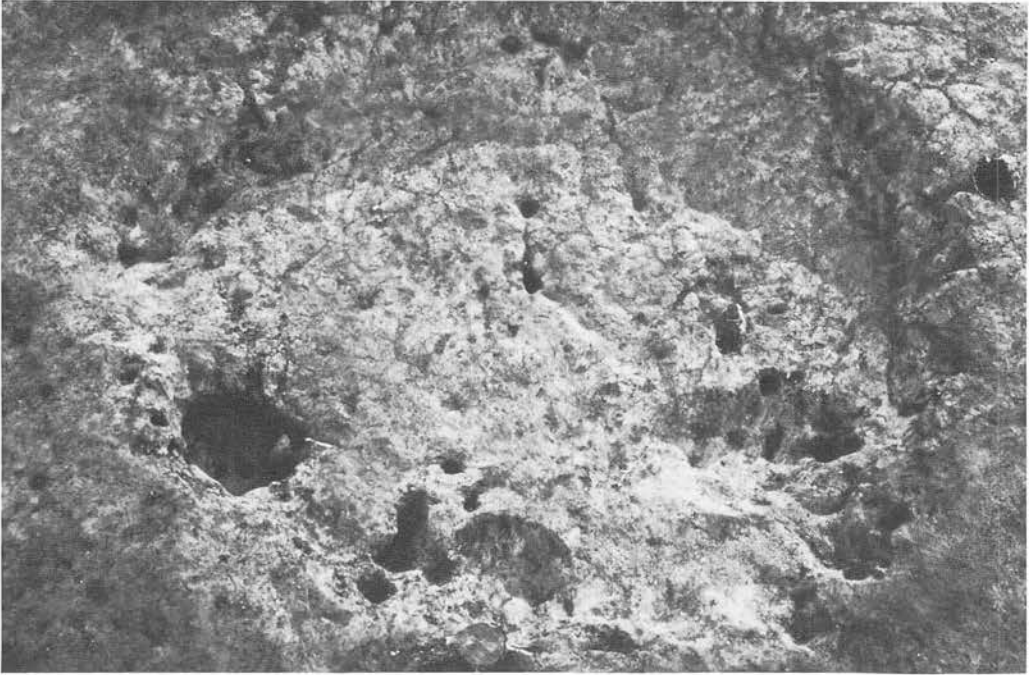


a. FⅢ-4 住居址

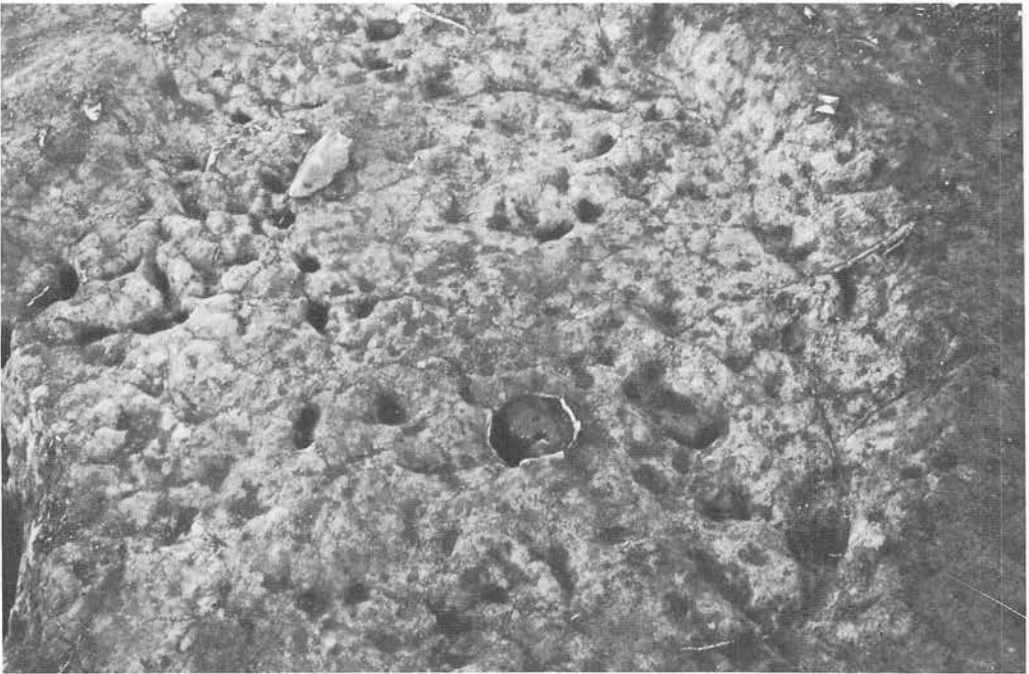


b. FⅢ-5 住居址

写真図版64



a. F III - 6 住居址

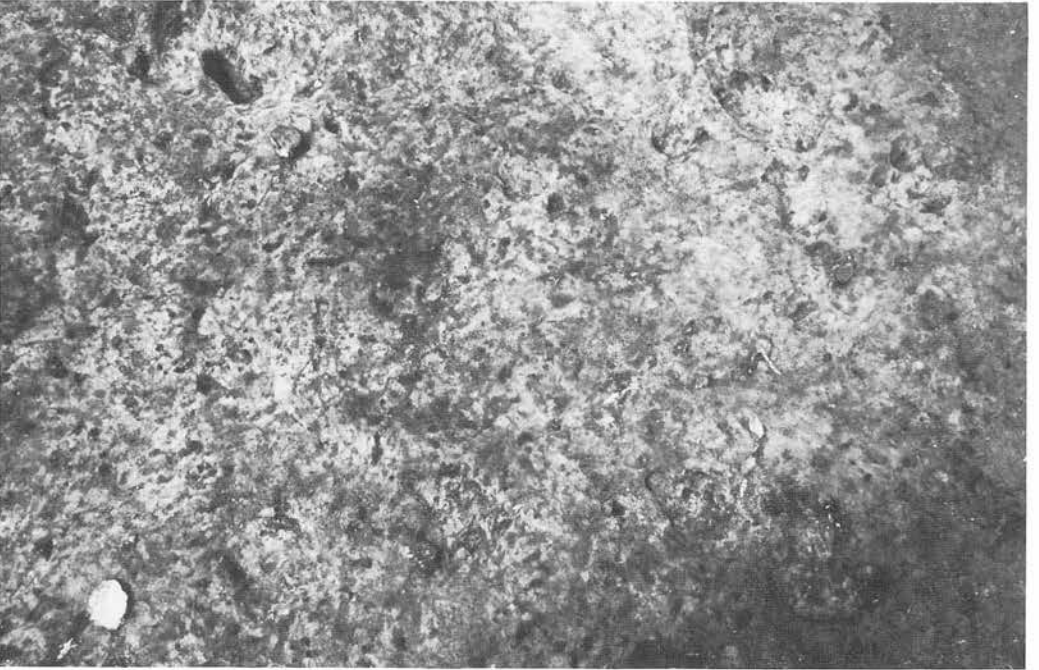


b. F III - 7 住居址

写真図版65

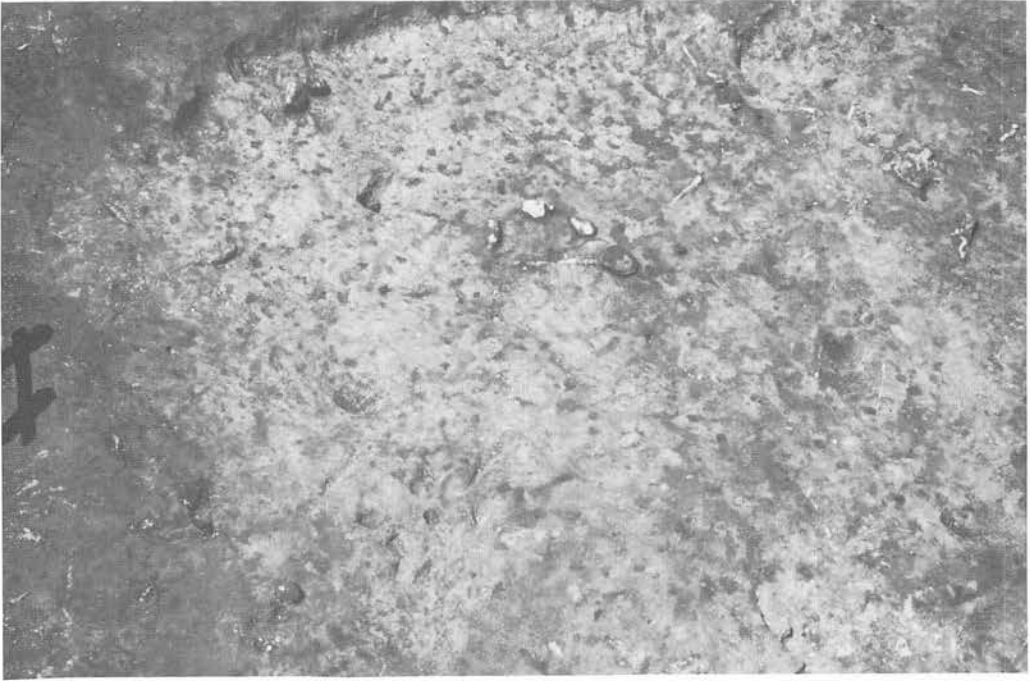


a. FⅢ-8 住居址

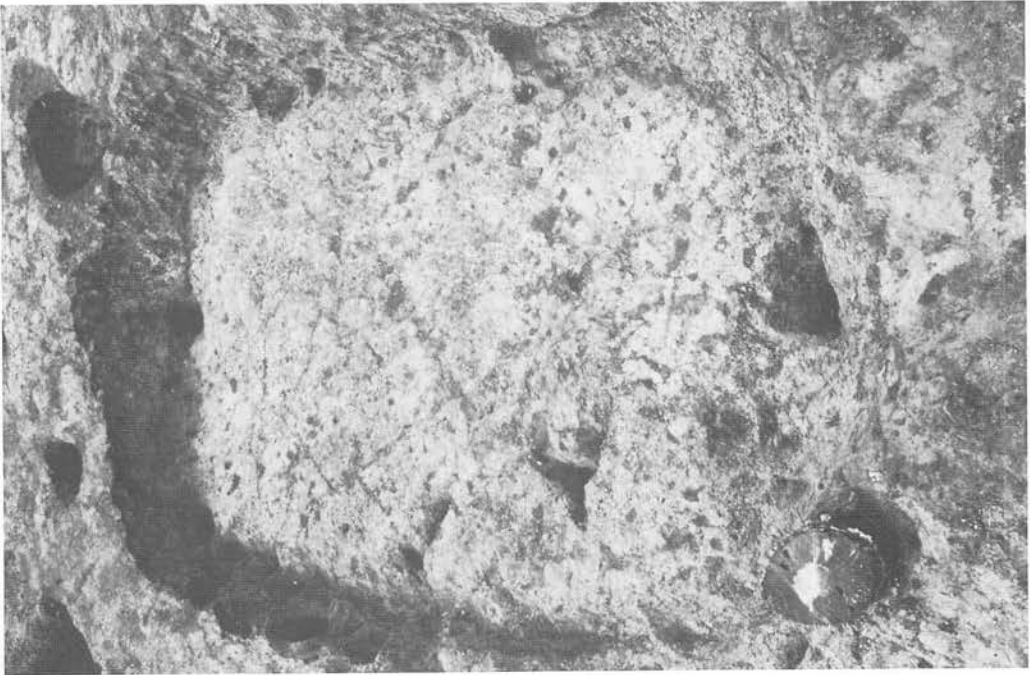


b. FⅢ-9 住居址

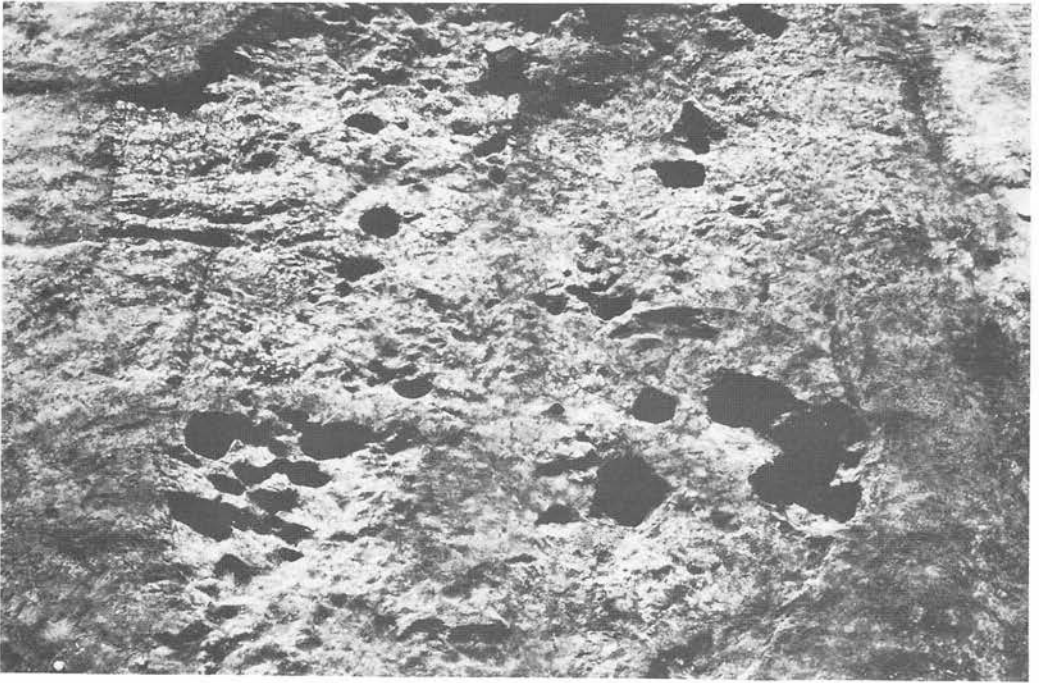
写真図版66



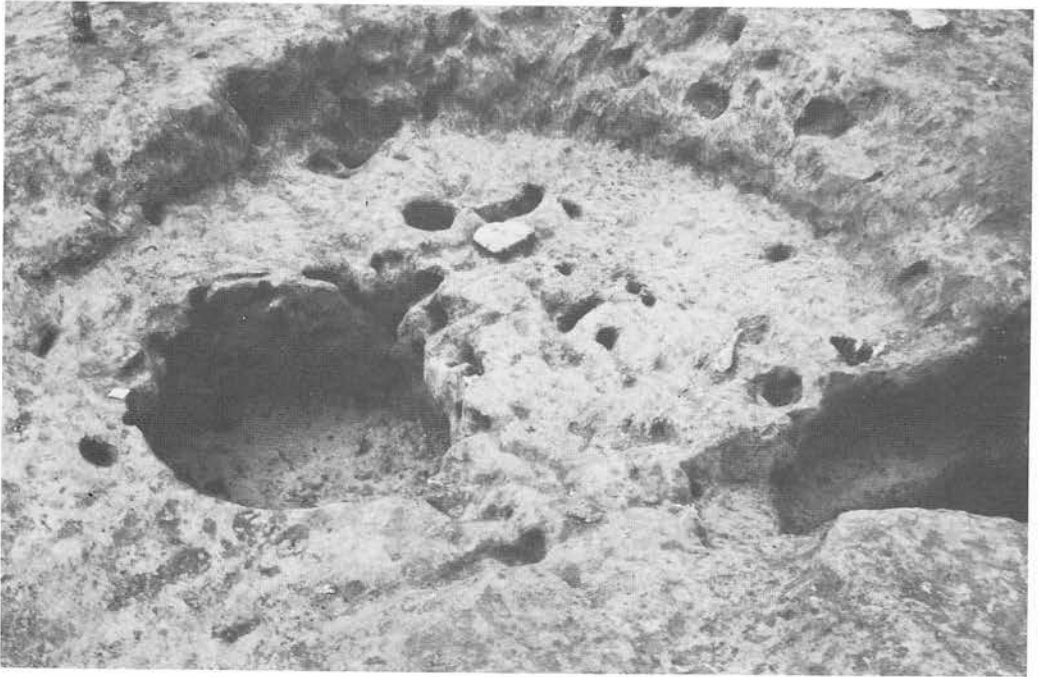
a. F III-10住居址



b. F IV-5住居址状遺構  
写真図版67

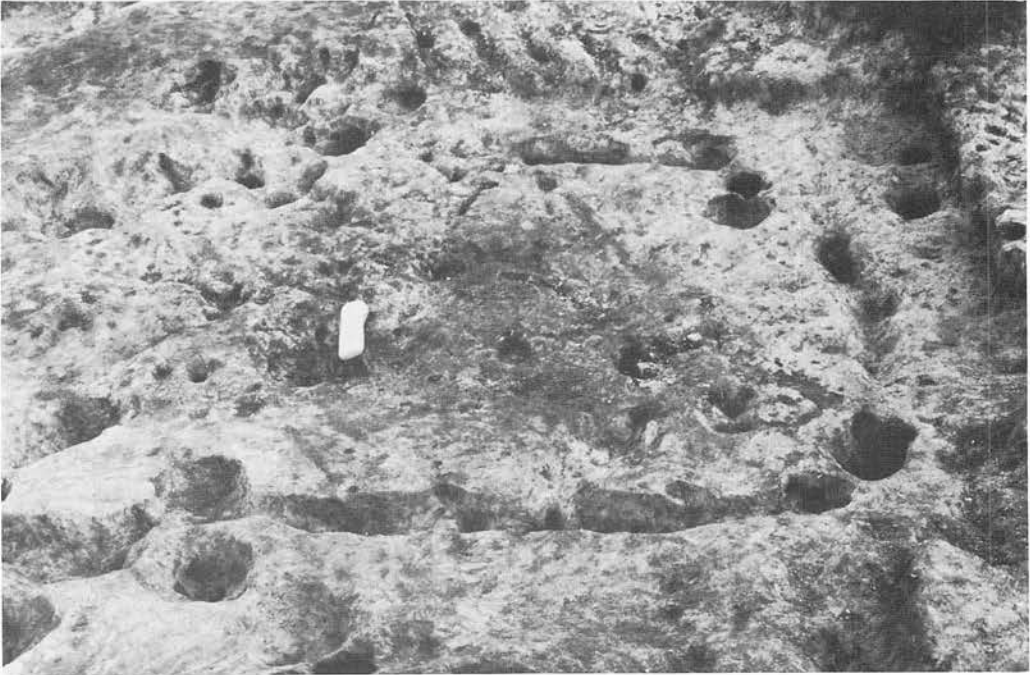


a. F IV - 1 住居址・F IV - 2 住居址

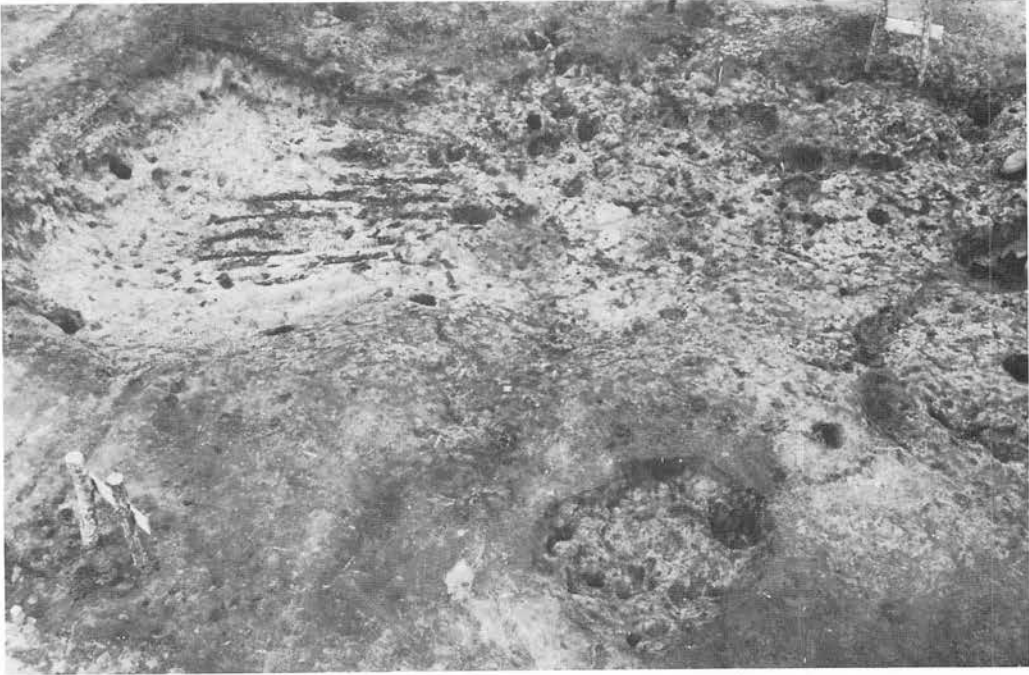


b. F IV - 3 住居址

写真図版68



a. F IV-4 住居址



b. F IV-6 住居址・F VI-7 住居址・F IV-8 住居址

写真図版69



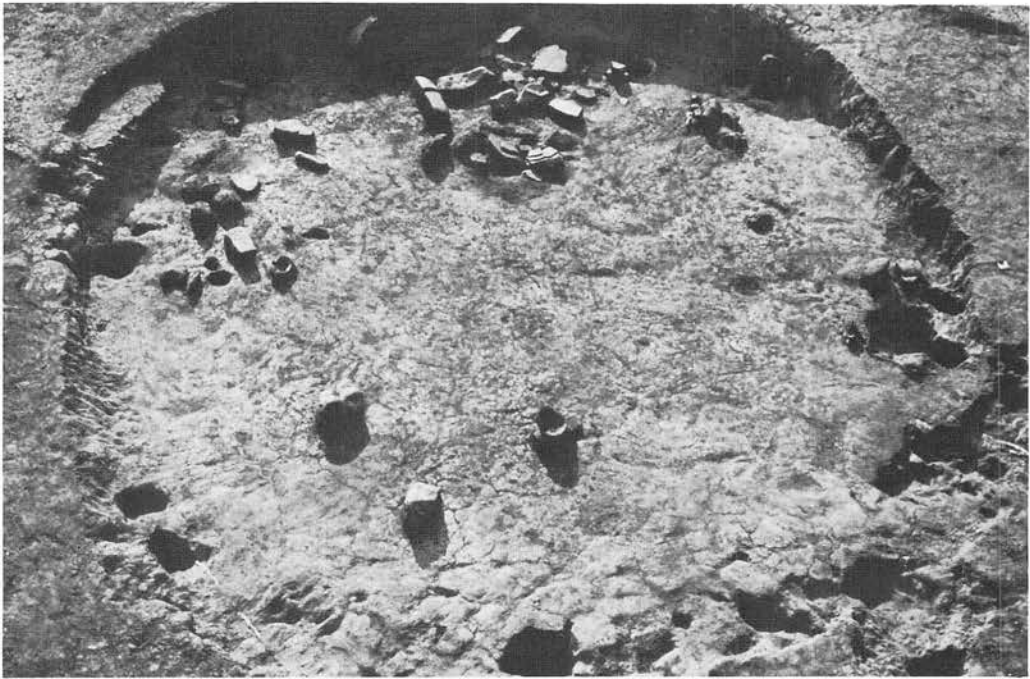


a. G II - 1 住居址



b. G II - 2 住居址

写真図版70

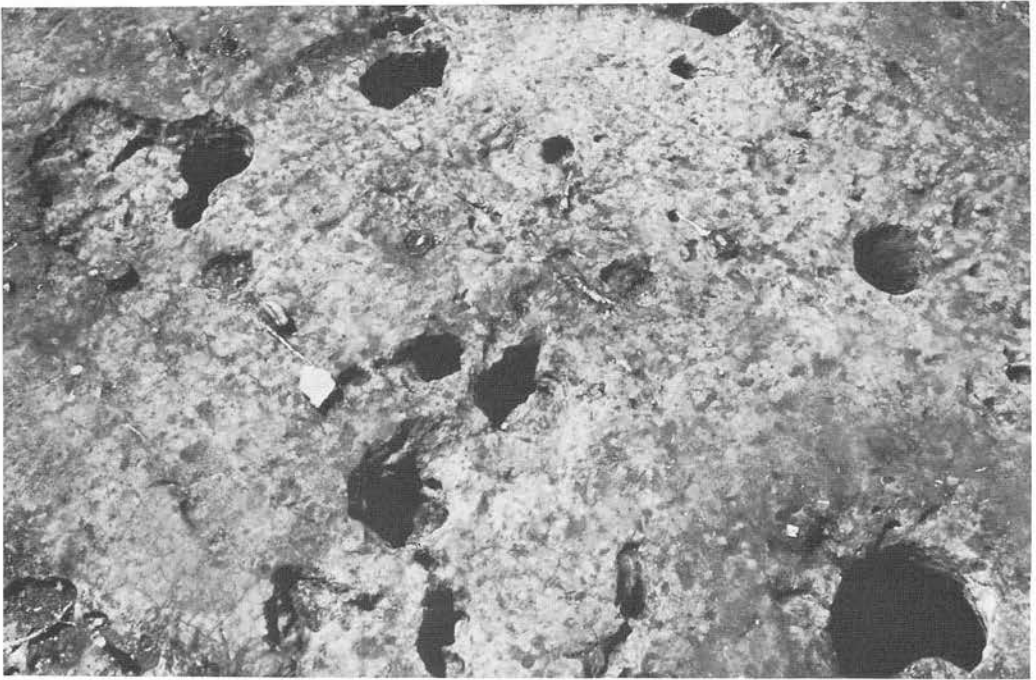


a. G II - 3 住居址

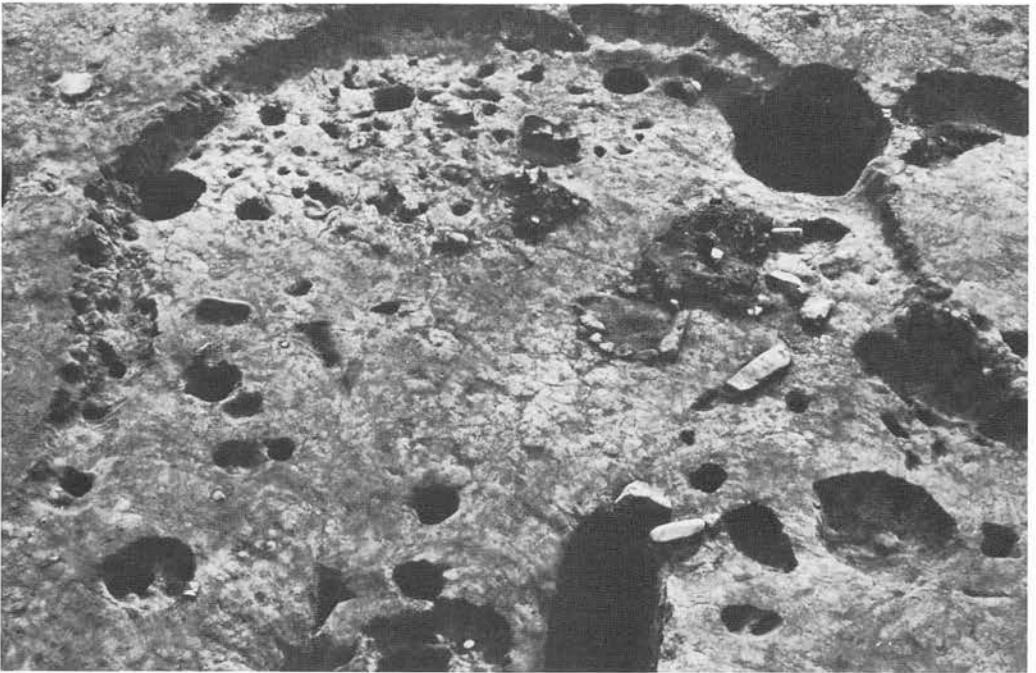


b. G II - 3 住居址(炉と礫群)

写真図版71

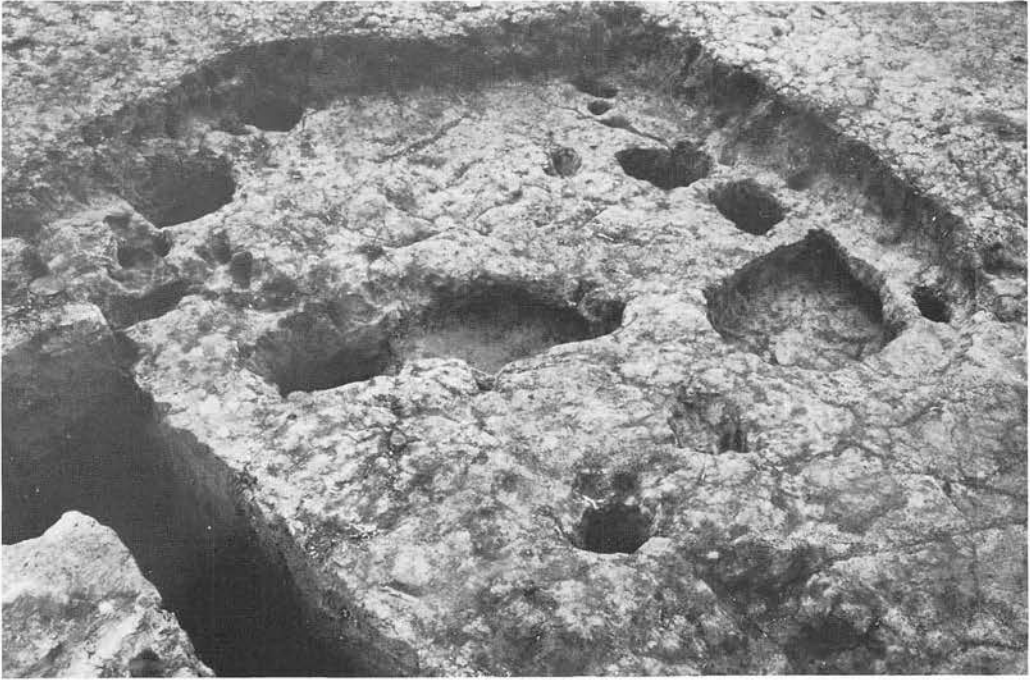


a. G II-5 住居址

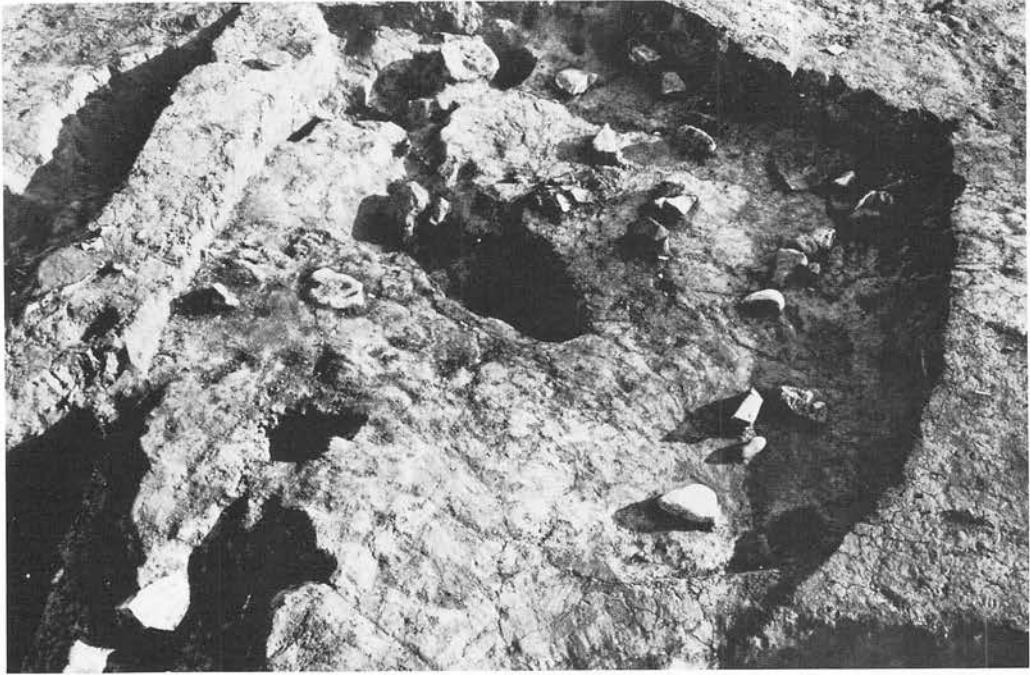


b. G II-7 住居址

写真図版72

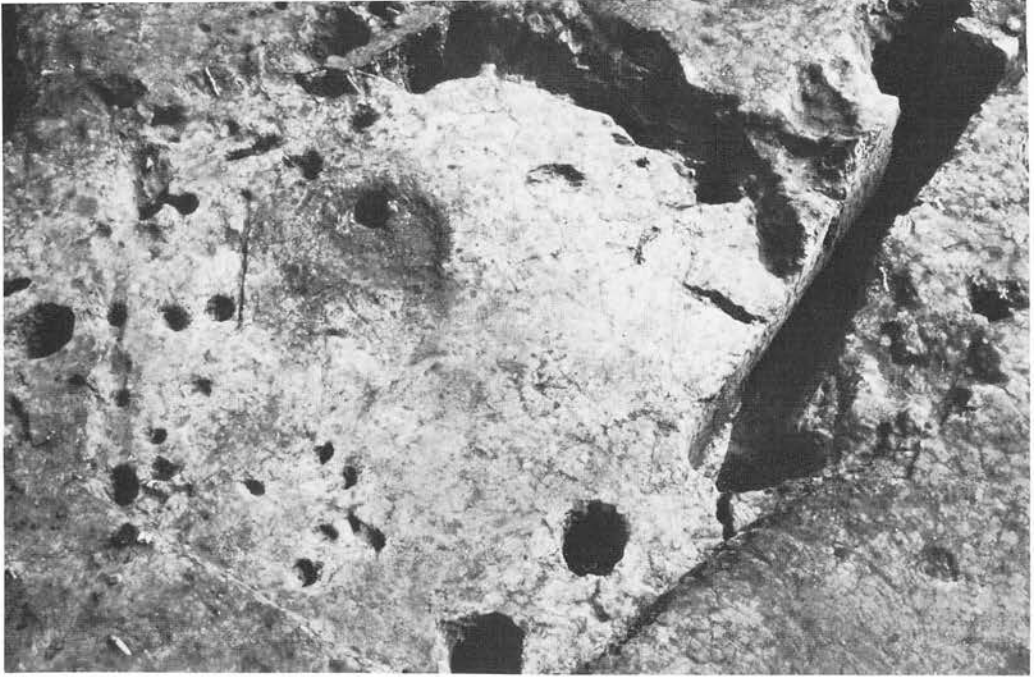


a. G II - 9 住居址

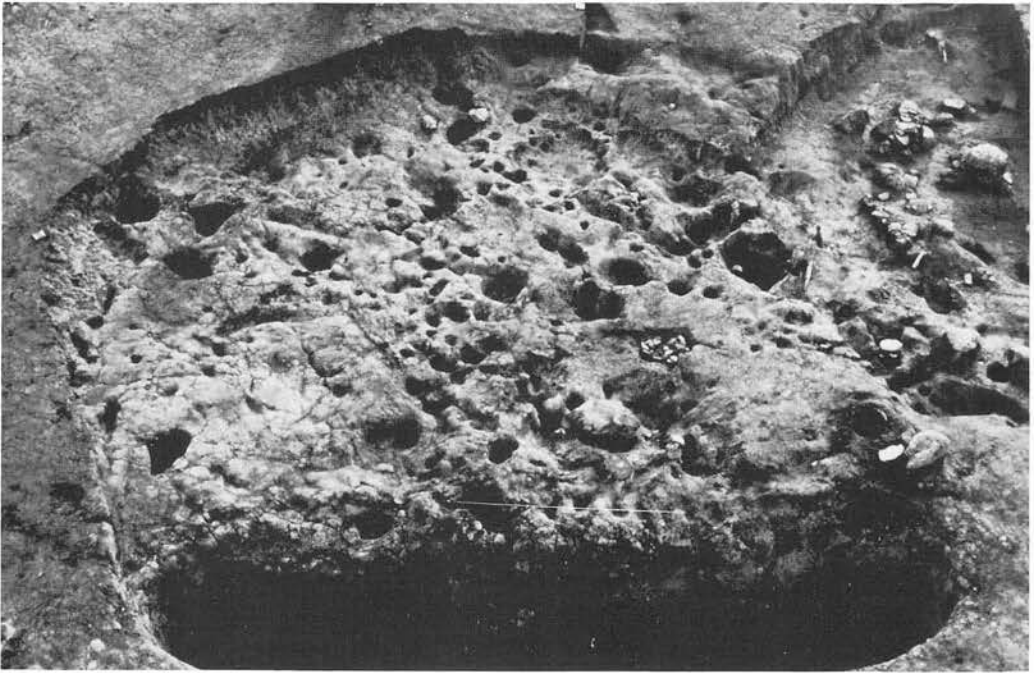


b. G II - 9 住居址(遺物出土狀況)

写真図版73



a. G II - 10住居址



b. G II - 12住居址

写真図版74

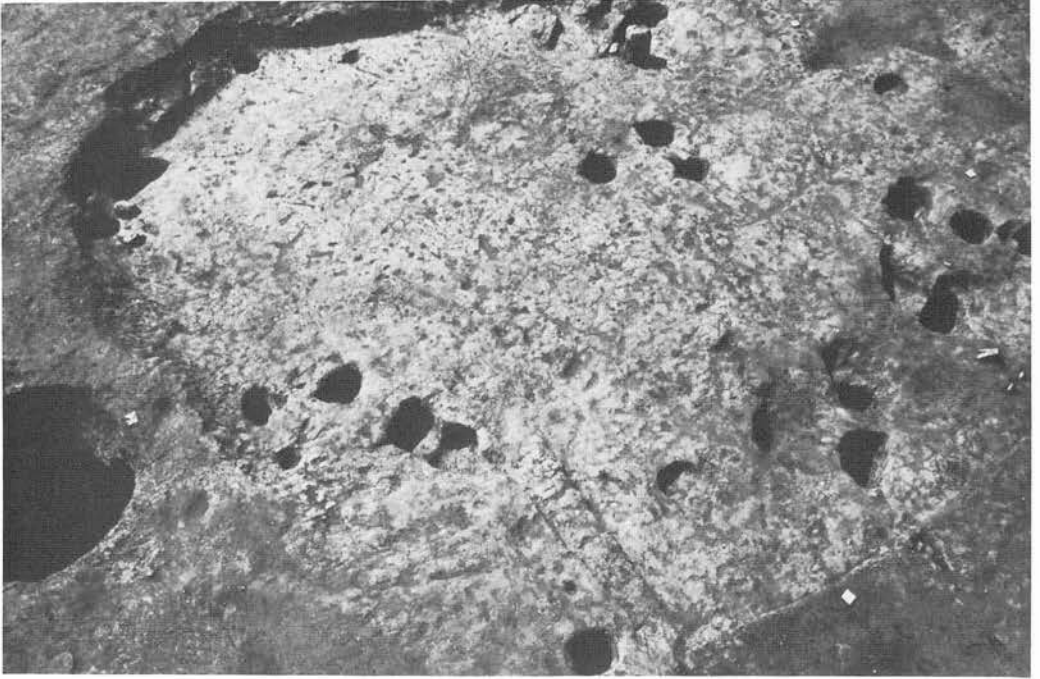


a. G II - 13住居址



b. G II - 13住居址・G II - 14住居址

写真図版75



a. G II-16住居址



b. G II-16住居址(「出入口」状施設)

写真図版76



a. G II-15住居址



b. G II-17住居址・G II-18住居址

写真図版77





a. G II-19住居址(遺物出土状況)

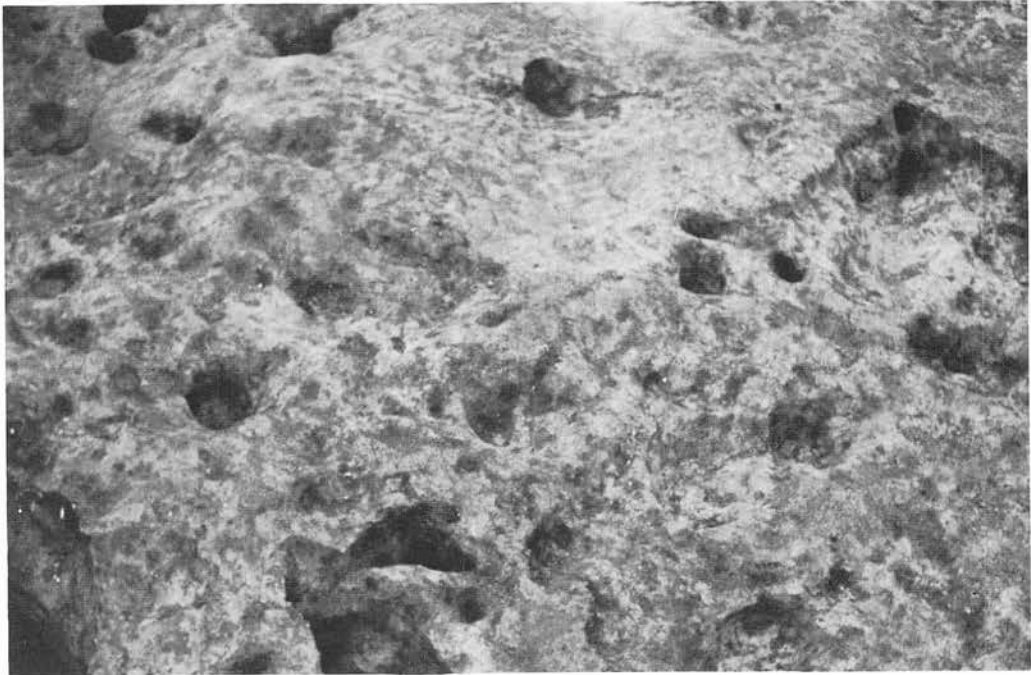


b. G II-19住居址

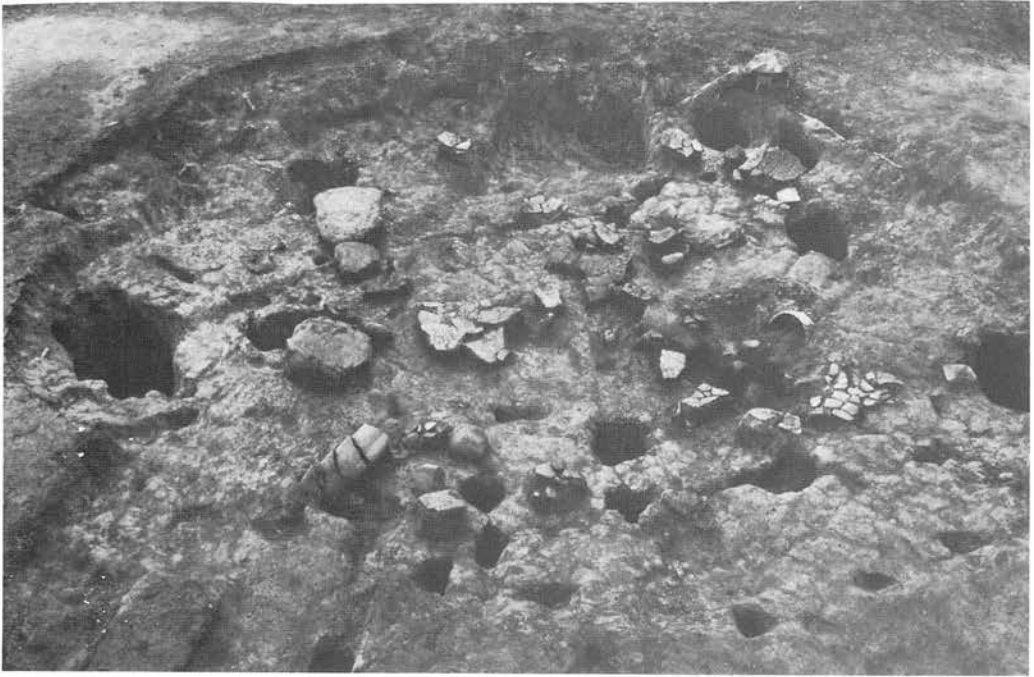
写真図版78



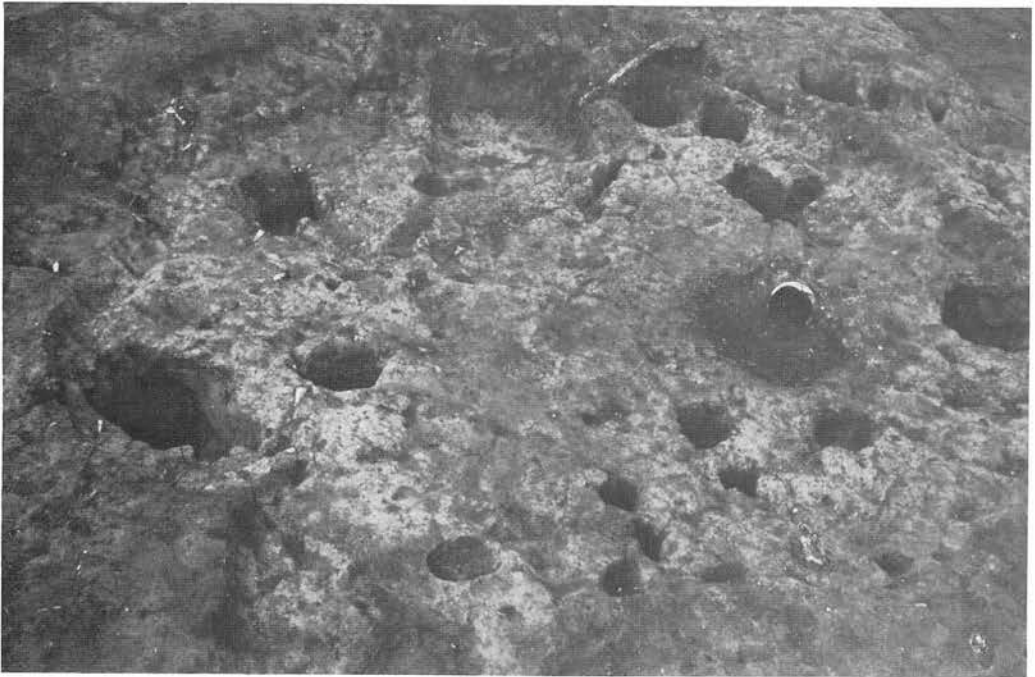
a. G II - 20住居址



b. H II - 2住居址  
写真図版79

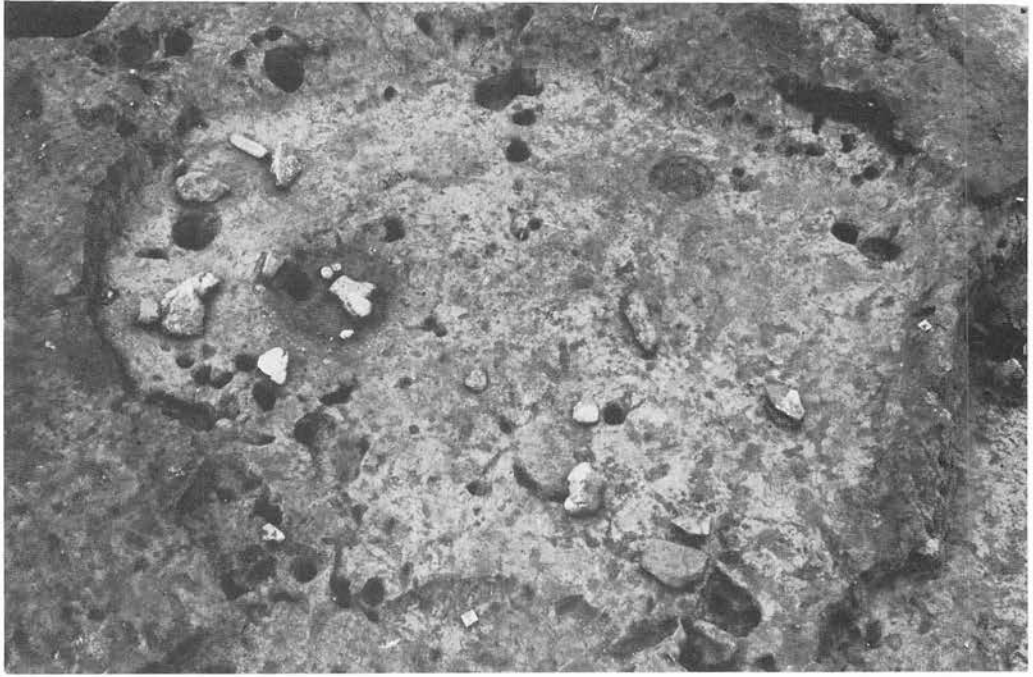


a. H II - 1 住居址(遺物出土状況)

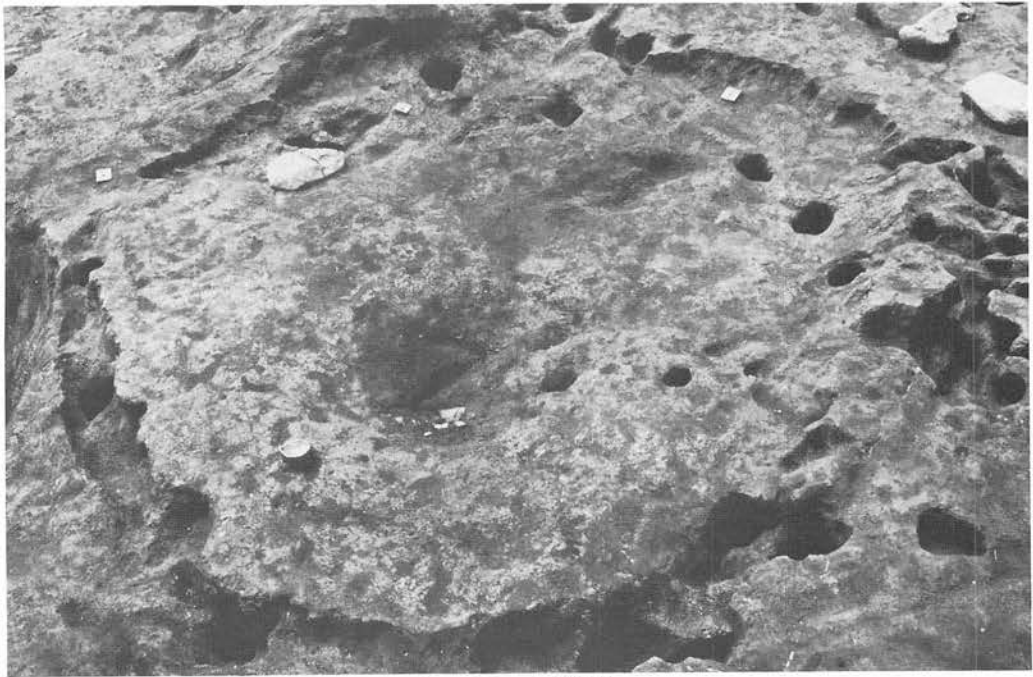


b. H II - 1 住居址

写真図版80

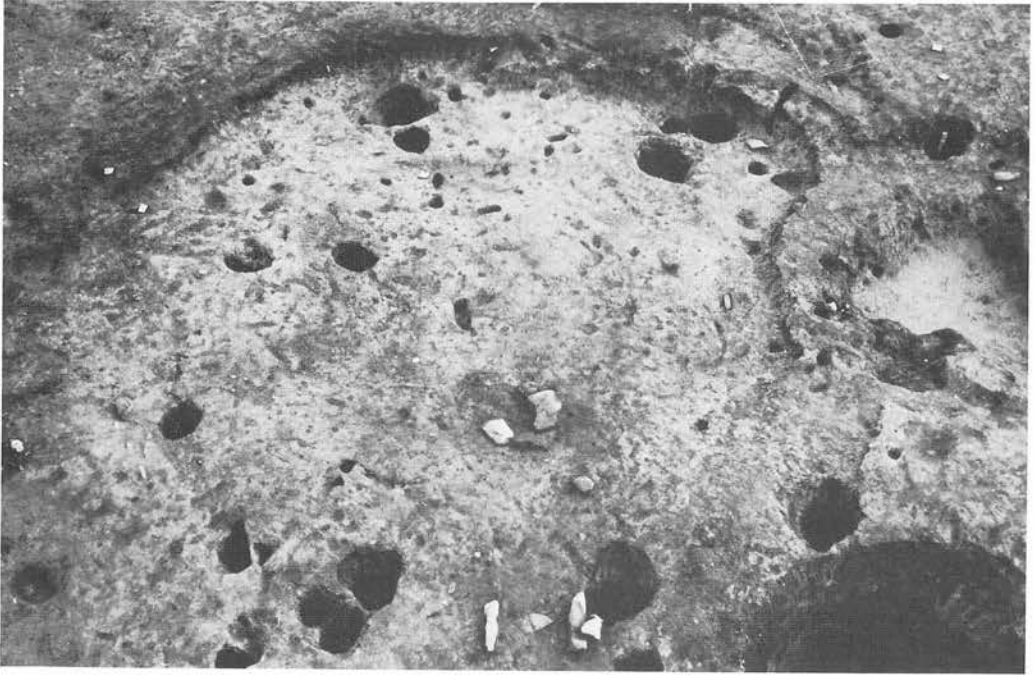


a. H II - 3 住居址

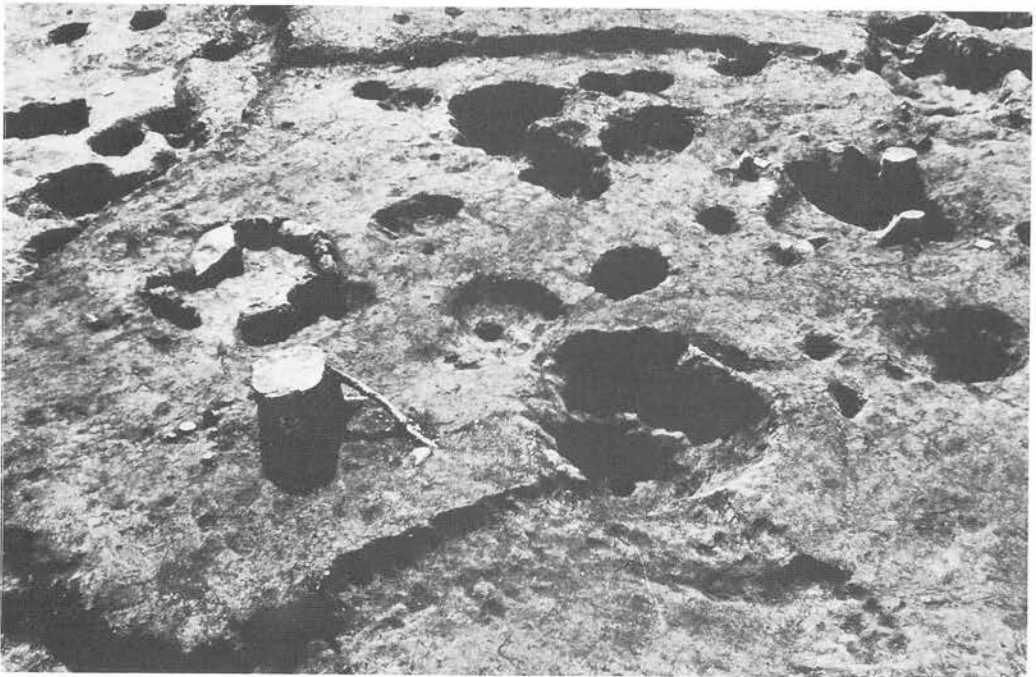


b. H II - 4 住居址

写真図版81

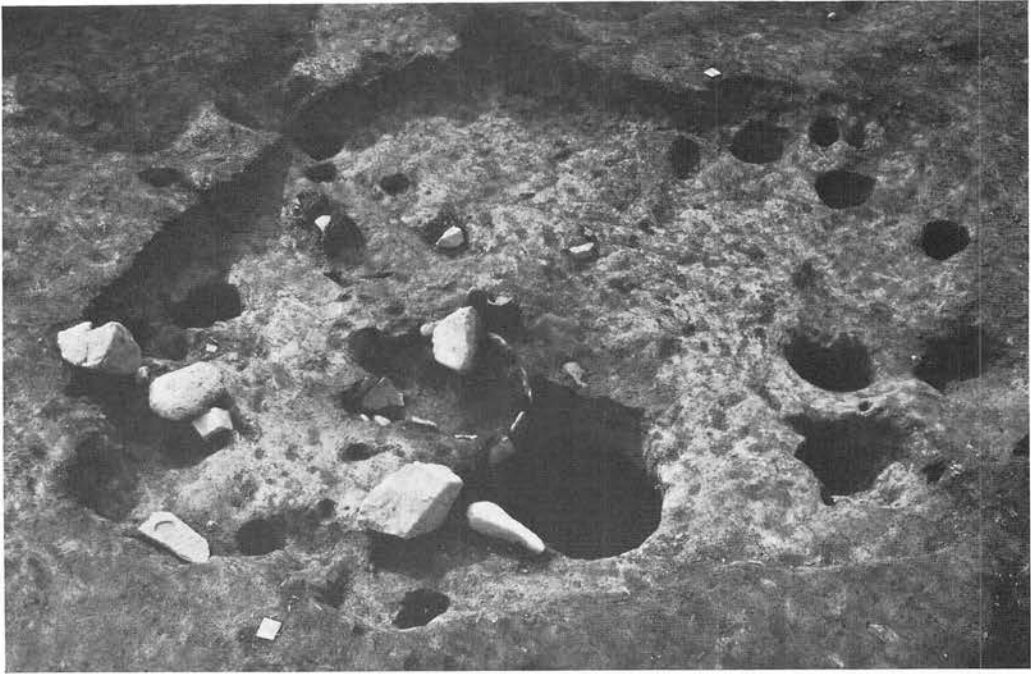


a. H II - 5 住居址

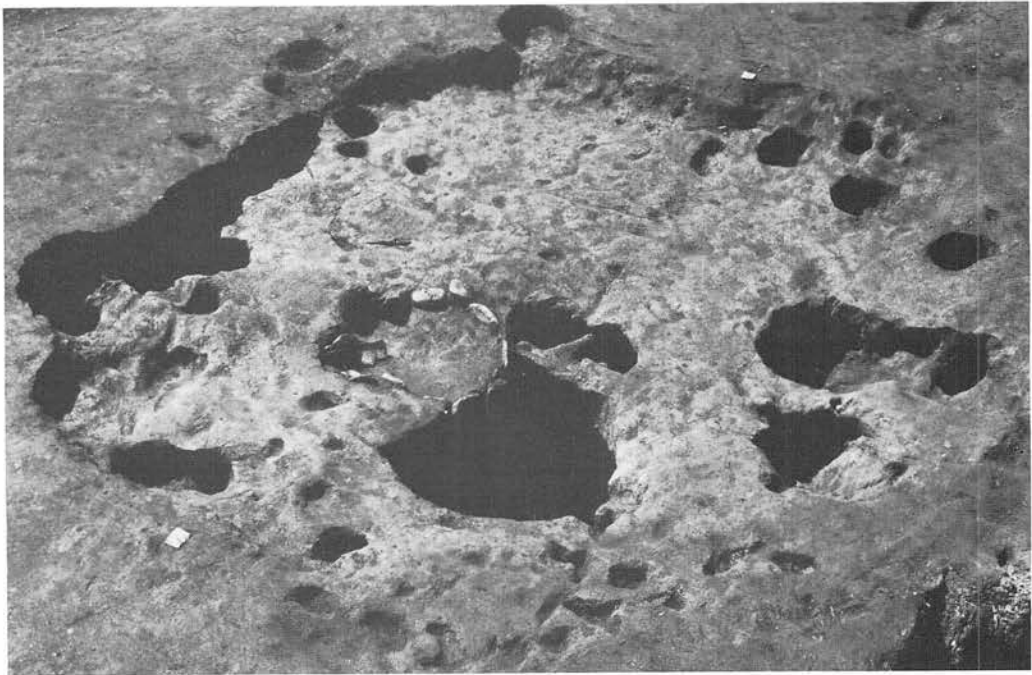


b. H II - 6 住居址

写真図版82

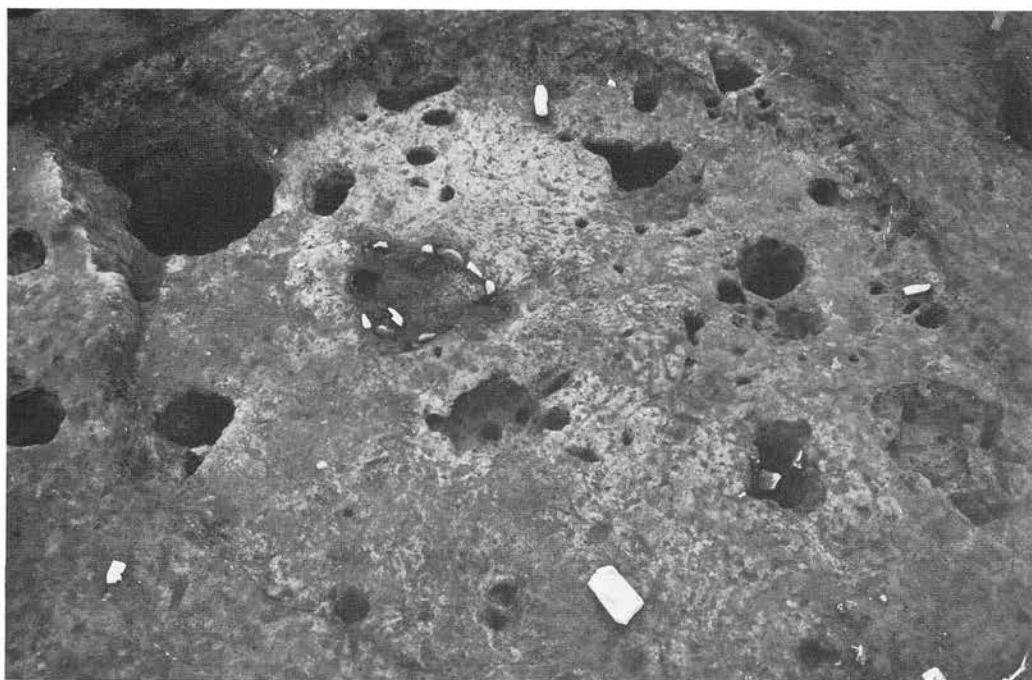


a. H II - 7 住居址(磔出土状況)



b. H II - 7 住居址

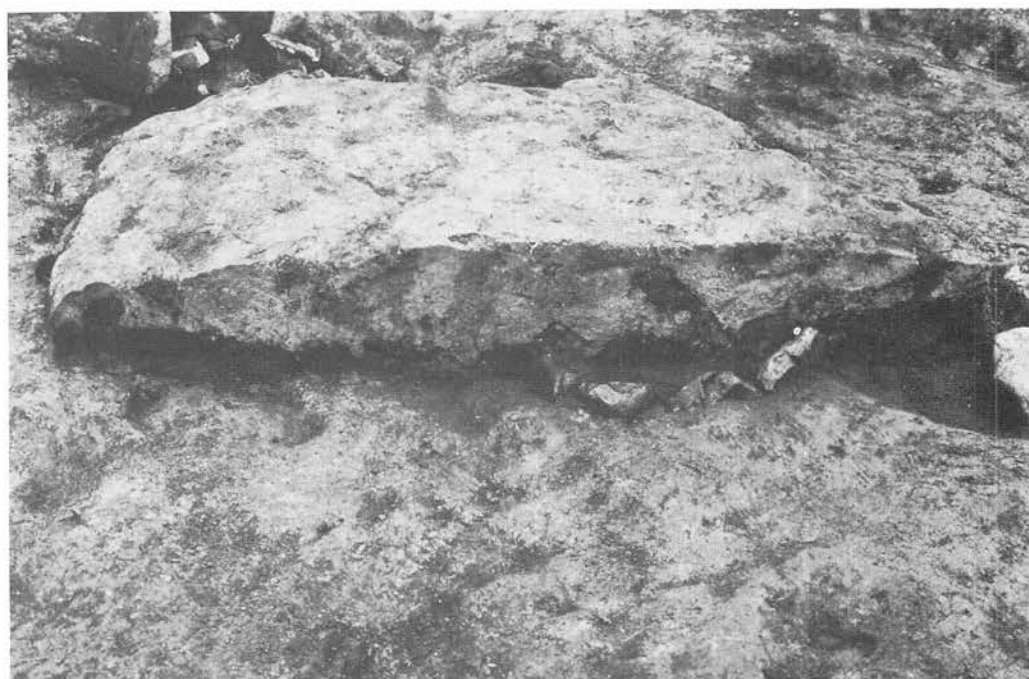
写真図版83



a. H II - 8 住居址



b. H II - 9 住居址(火山灰分布状况)  
写真図版84

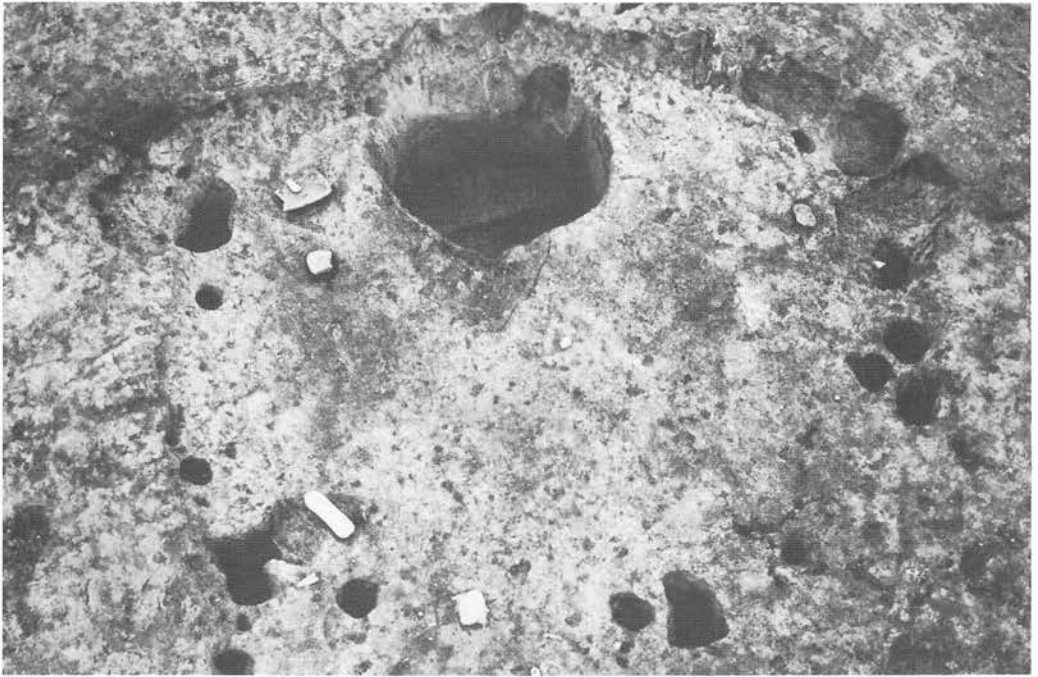


a. H II - 9 住居址(火山灰断面)



b. H II - 9 住居址  
写真図版85





a. H II - 10住居址



b. H II - 10住居址(埋土の状況)

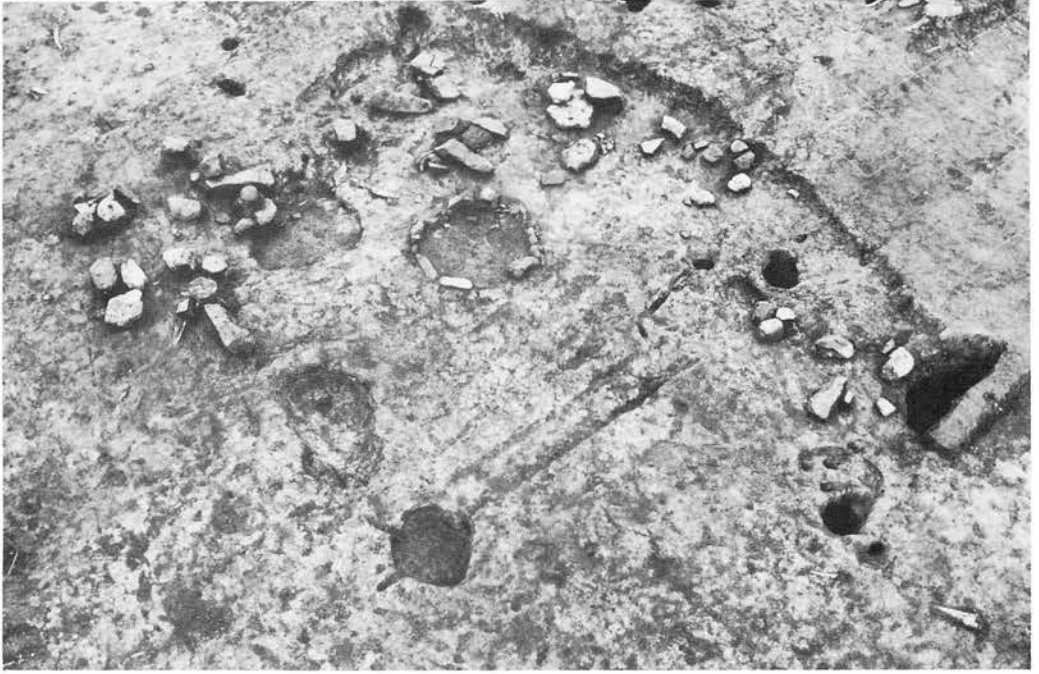
写真図版86



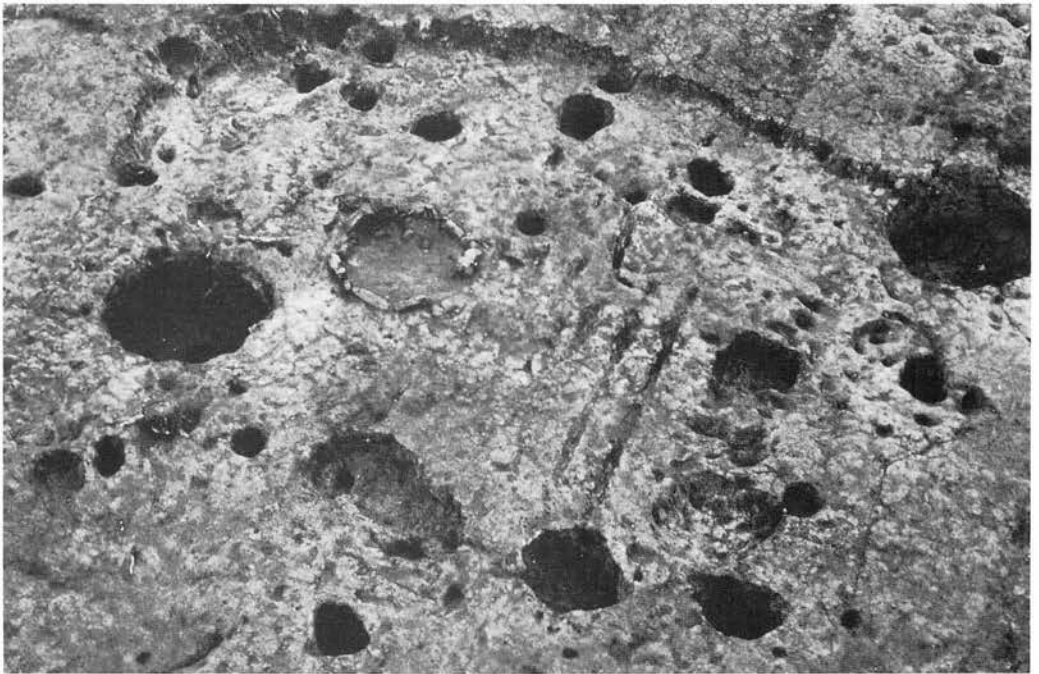
a. H II-11住居址(礫群出土状況)



b. H II-11住居址  
写真図版87



a. H II-12住居址(礫群出土狀況)



b. H II-12住居址  
写真図版88



a. H II - 13住居址

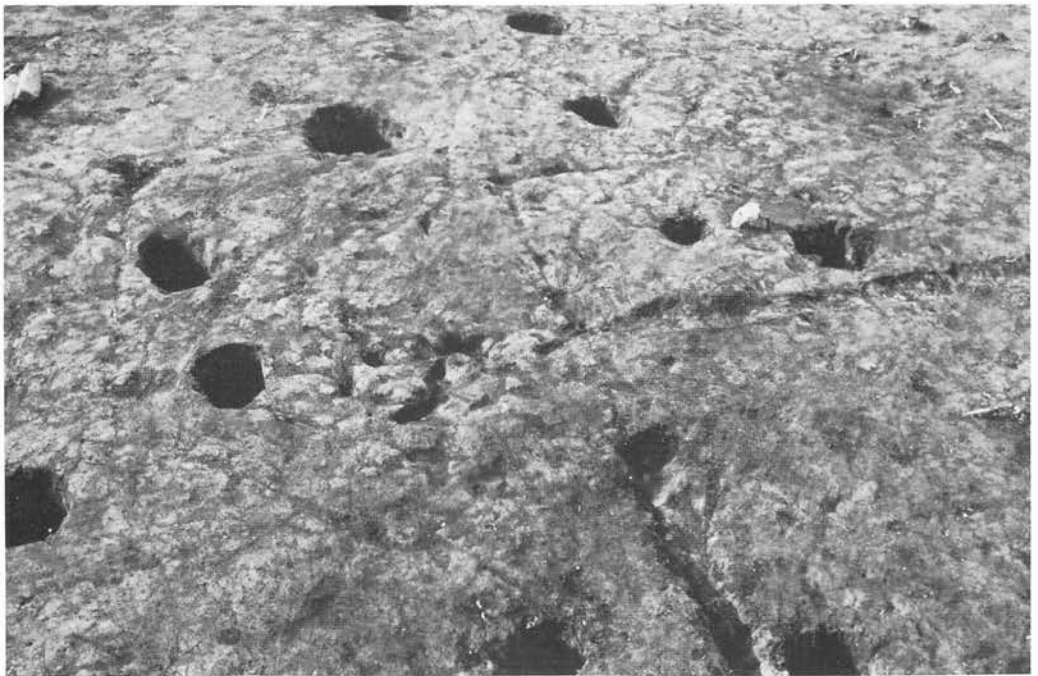


b. H II - 14住居址

写真図版89

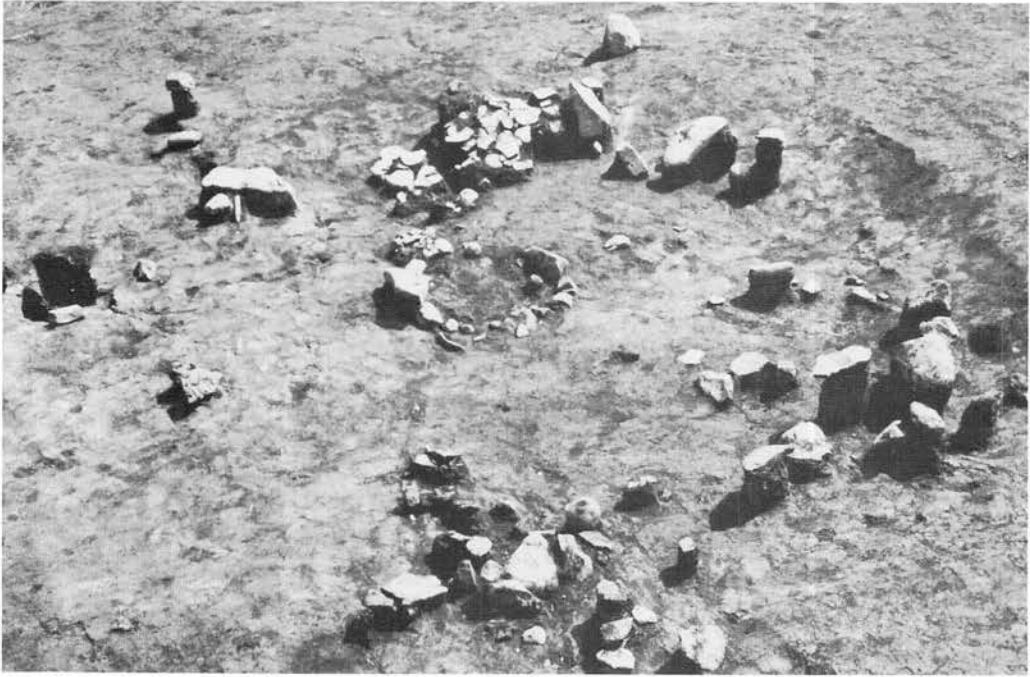


a. I II - 1 住居址



b. I II - 2 住居址

写真図版90

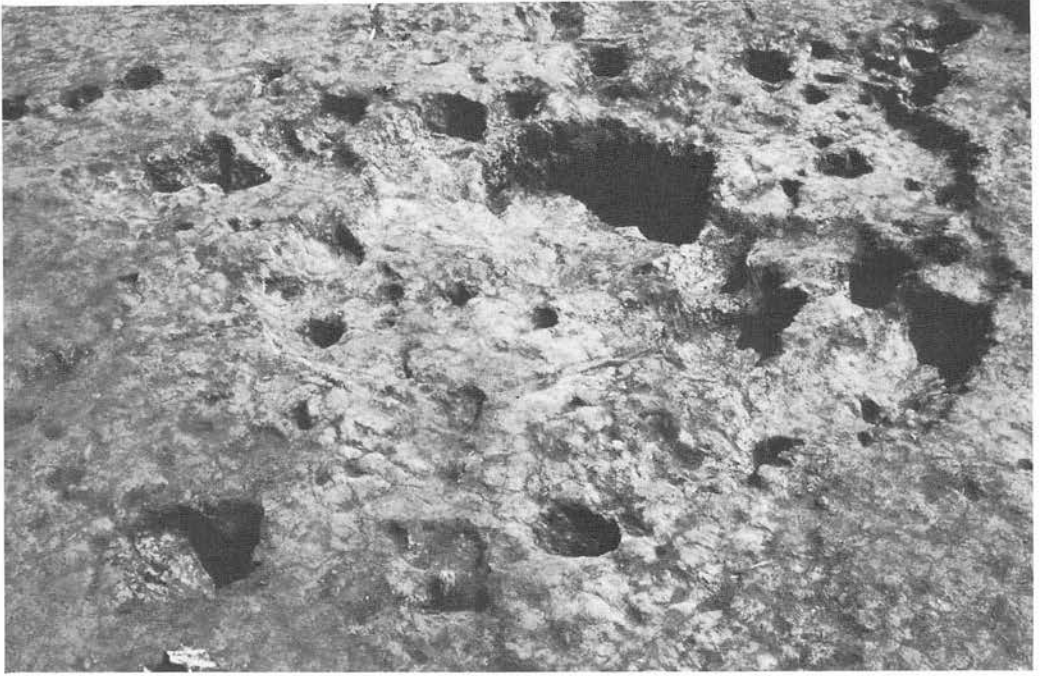


a. I II - 3 住居址(遺物出土状況)



b. I II - 3 住居址

写真図版91



a. I II - 4 住居址・I II - 5 住居址



b. I II - 8 住居址

写真図版92



a. I II - 7 住居址(礎出土状況)



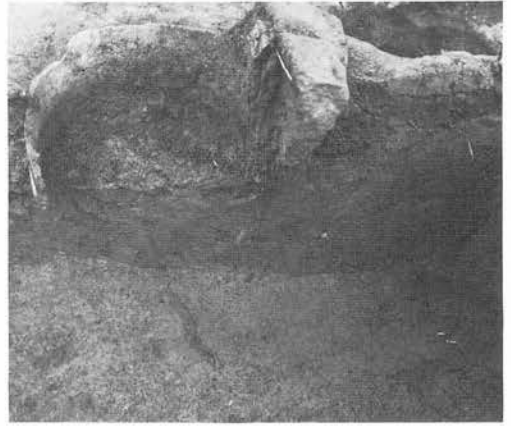
b. I II - 7 住居址

写真図版93





a. C III-4 住居址



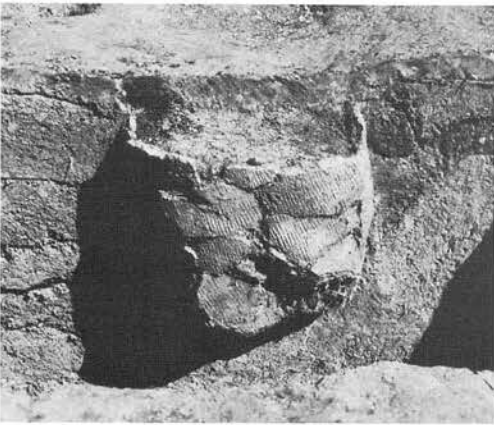
b. C III-6 住居址



c. C III-5 住居址



d. C III-5 住居址



e. C III-7 住居址(1号炉)



f. C III-7 住居址(2号炉)

写真図版94



a. C III-8 住居址



b. C III-8 住居址



c. C III-10 住居址



d. C III-10 住居址

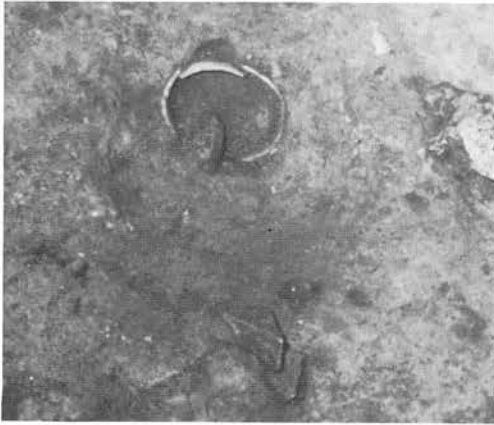


e. C III-11 住居址



f. C III-11 住居址

写真図版95



a. C III - 12住居址



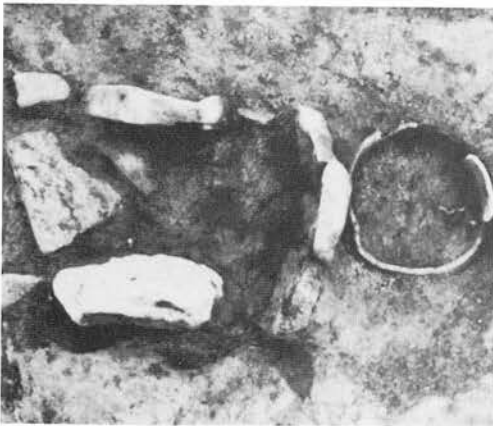
b. C III - 12住居址



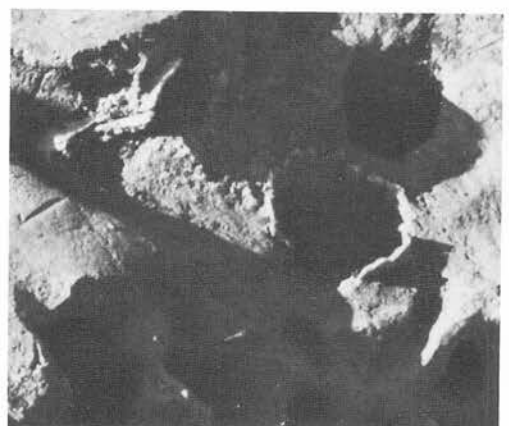
c. C IV - 1住居址



d. C IV - 1住居址

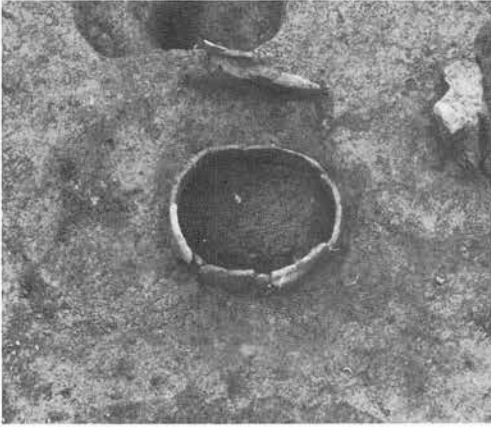


e. C IV - 2住居址



f. C IV - 8住居址

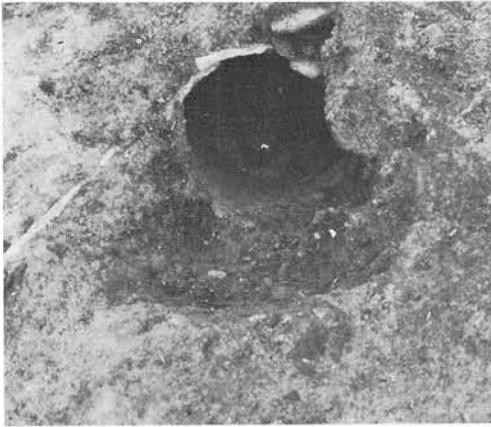
写真図版96



a. D II - 1 住居址



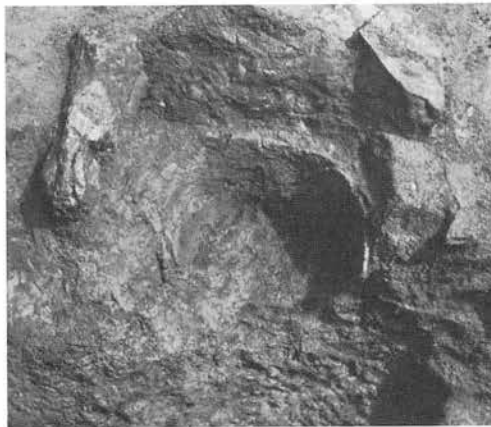
b. D II - 1 住居址



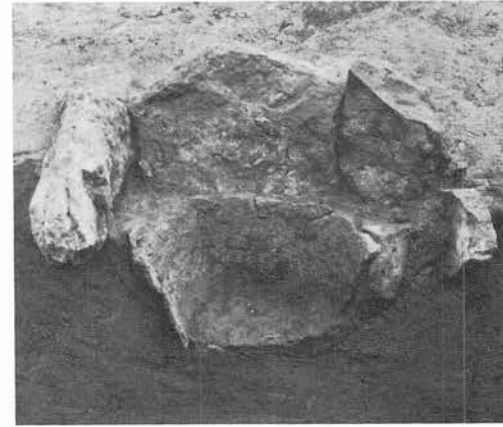
c. D II - 2 住居址



d. D II - 2 住居址



e. D II - 3 住居址



f. D II - 3 住居址

写真图版97



a. D II - 4 住居址



b. D II - 4 住居址



c. D II - 5 住居址



d. D II - 5 住居址

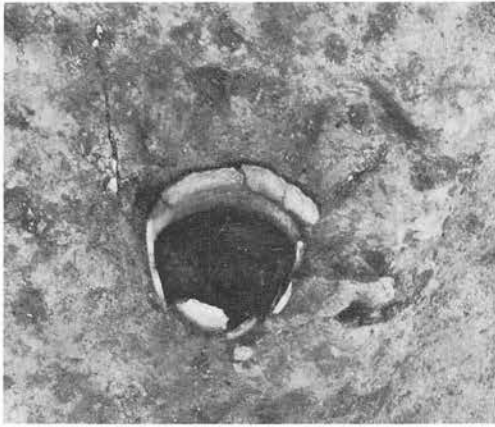


e. D II - 8 住居址

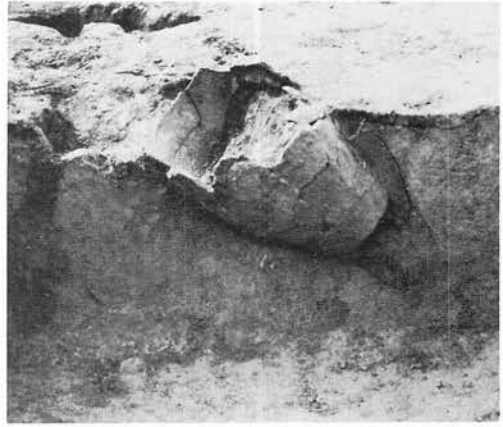


f. D II - 8 住居址

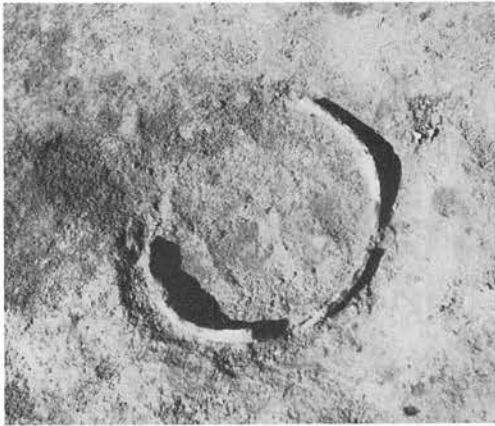
写真図版98



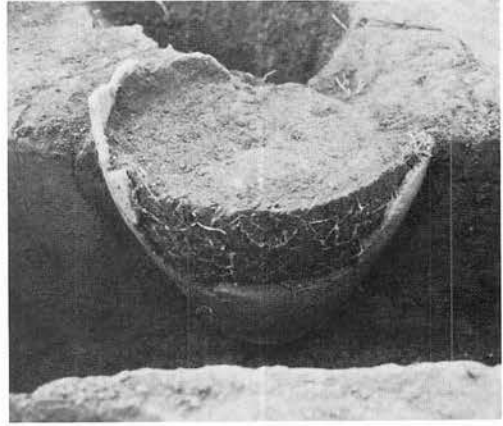
a. D II - 9 住居址



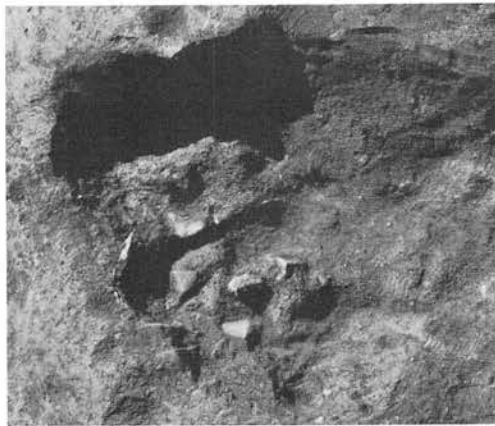
b. D II - 9 住居址



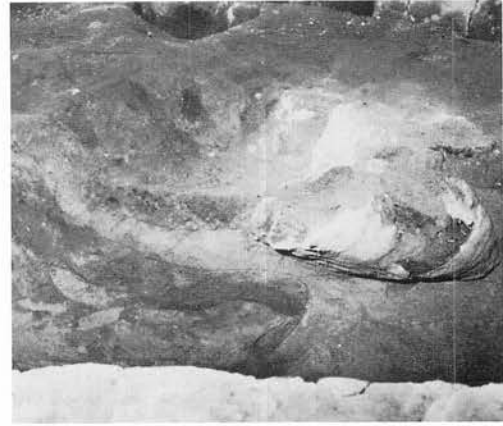
c. D II - 12 住居址



d. D II - 12 住居址



e. D II - 10 住居址

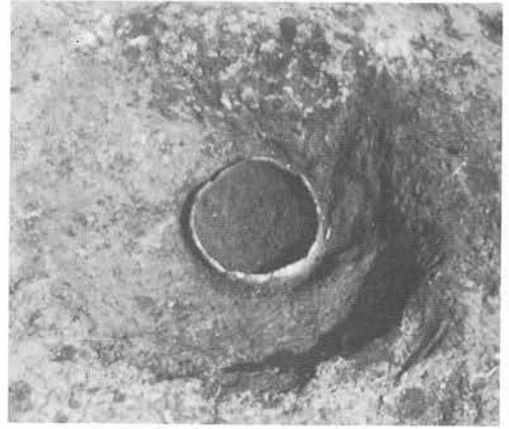


f. D III - 1 住居址

写真図版99



a. D III - 2 住居址



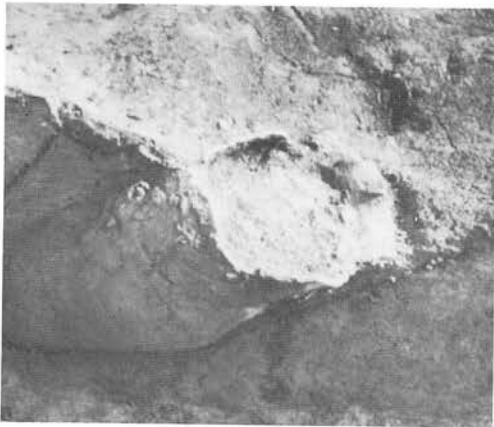
b. D III - 3 住居址



c. D III - 4 住居址



d. D III - 4 住居址



e. D III - 5 住居址



f. D III - 6 住居址

写真図版100



a. D III - 7 住居址



b. D III - 8 住居址



c. D III - 9 住居址



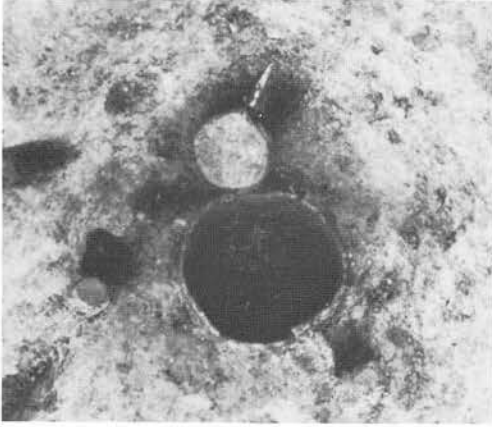
d. D III - 10 住居址



e. D III - 10 住居址

写真図版101

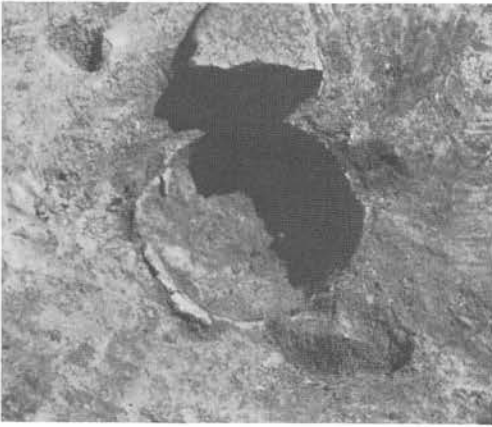




a. D III-11住居址



b. D III-11住居址



c. D IV-1住居址



d. D III-12住居址



e. D IV-1住居址



f. E II-1住居址



a. E II - 2 住居址



b. E II - 3 住居址



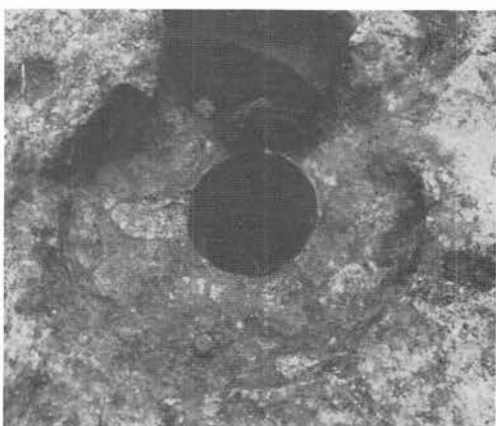
c. E II - 4 住居址



d. E II - 6 住居址



e. E II - 8 住居址

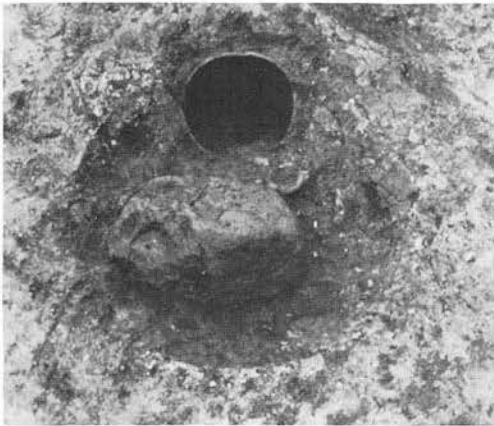


f. E II - 11 住居址

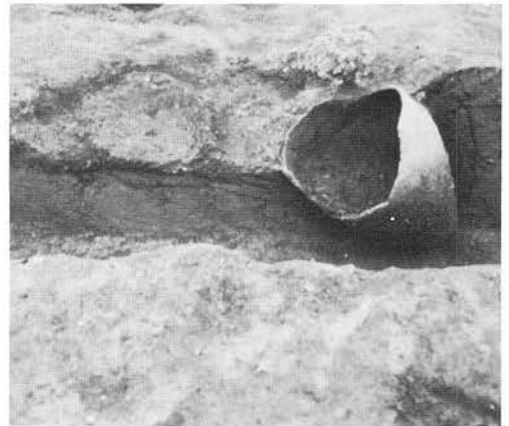
写真図版103



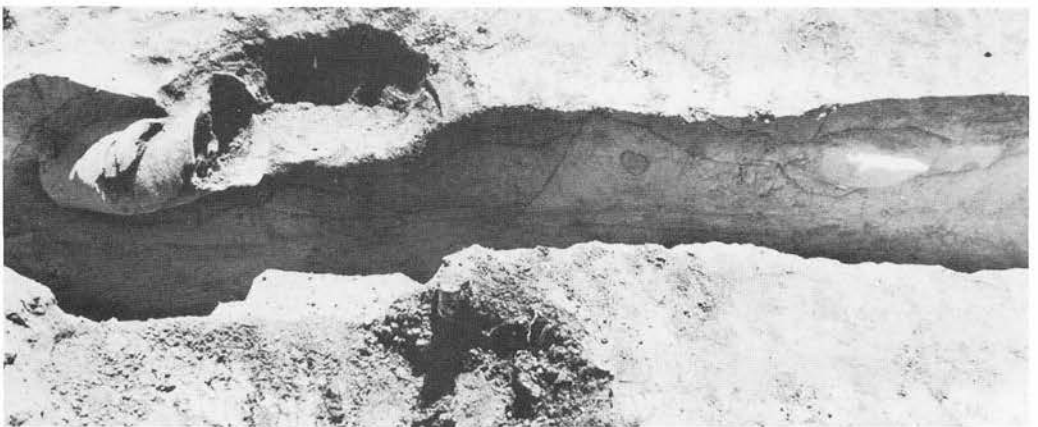
a. E II - 15住居址



b. E II - 14住居址

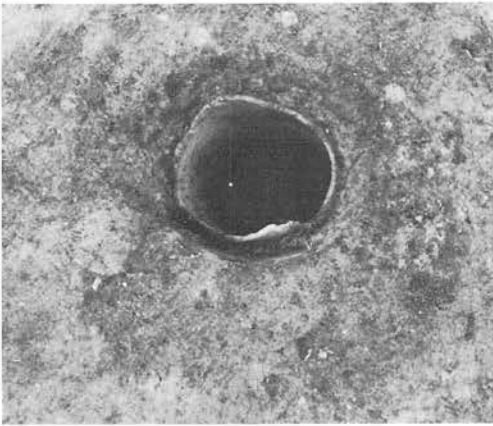


c. E II - 14住居址



d. E II - 17住居址

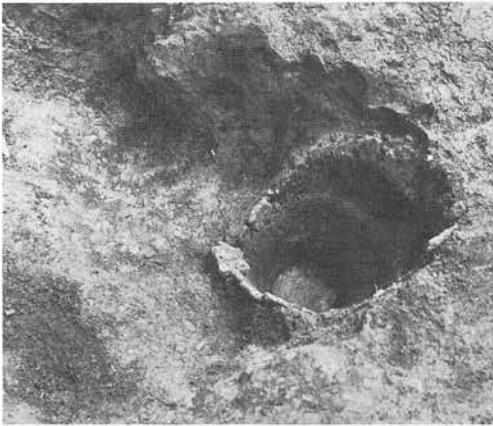
写真図版104



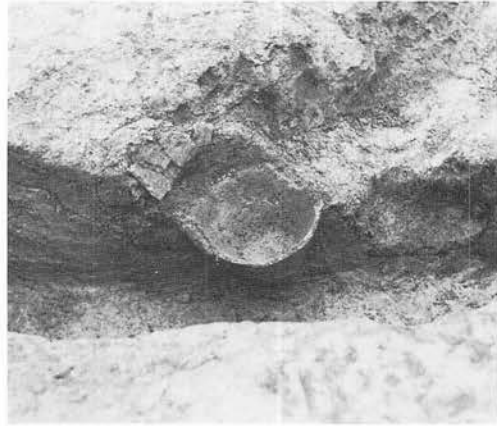
a. E II-20住居址



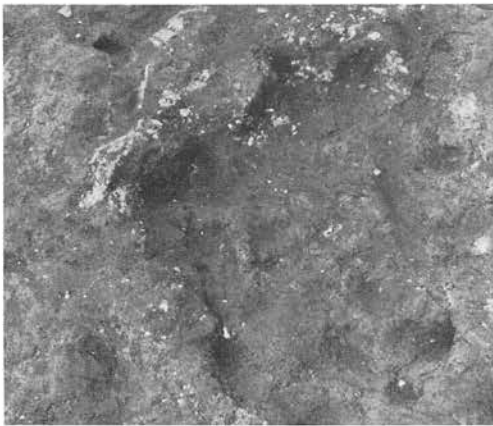
b. E II-24住居址



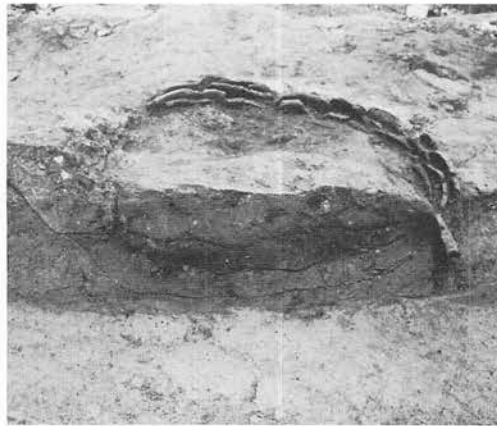
c. E II-21住居址



d. E II-21住居址

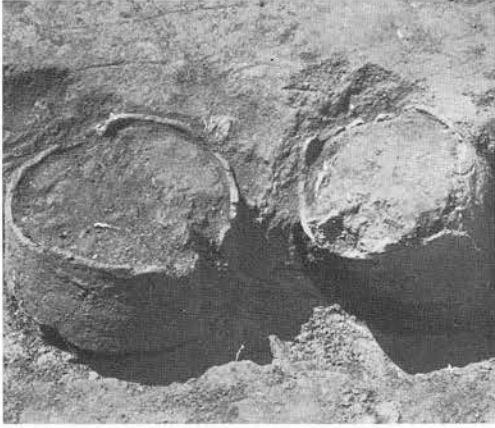


e. E II-27住居址



f. E II-28住居址

写真図版105



a. E II-29住居址



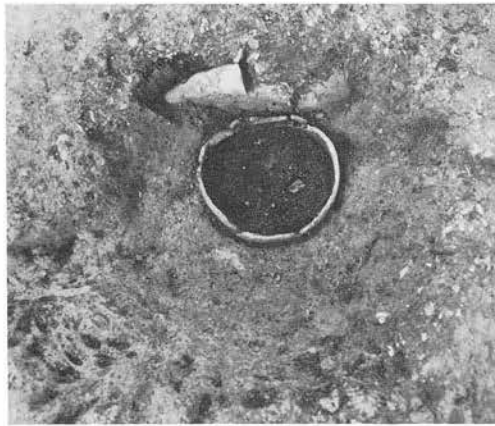
b. E II-30住居址



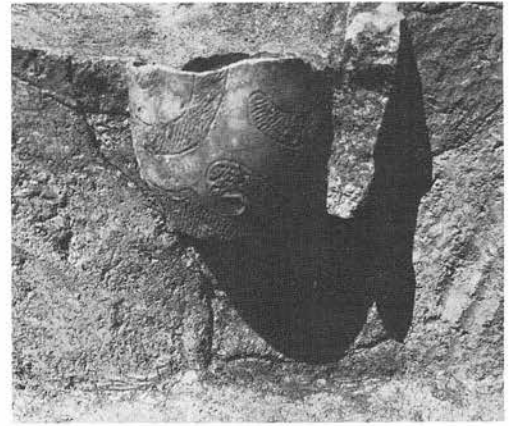
c. E III-1住居址



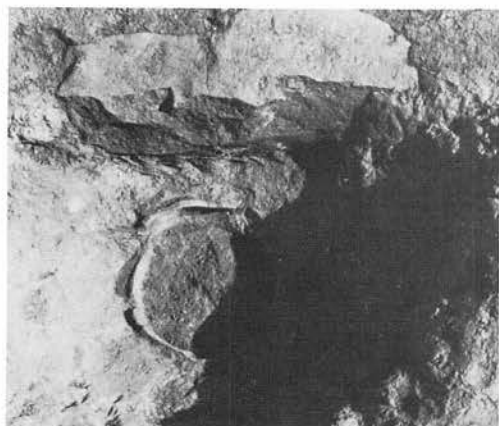
d. E III-1住居址



e. E III-2住居址



f. E III-2住居址



a. E III-3 住居址



b. E III-3 住居址



c. E III-4 住居址



d. E III-4 住居址



e. E III-5 住居址



f. E III-5 住居址

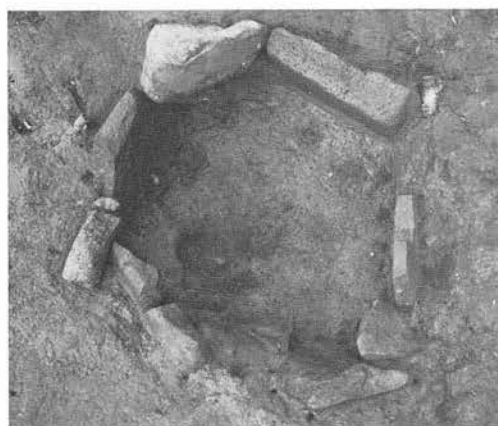
写真図版 107



a. E III-6 住居址



b. E III-7 住居址



c. E III-10 住居址



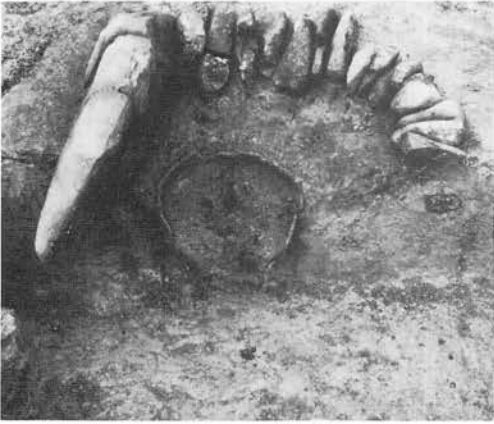
d. E III-9 住居址



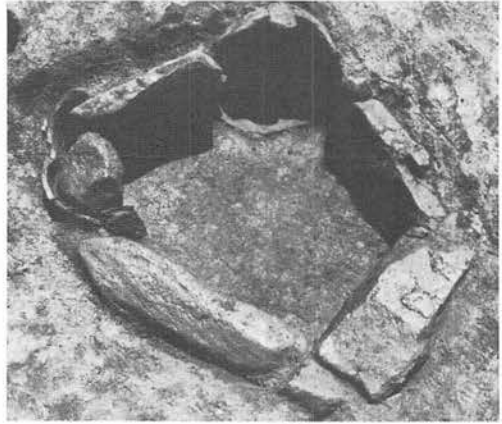
e. E III-10 住居址



f. E IV-1 住居址



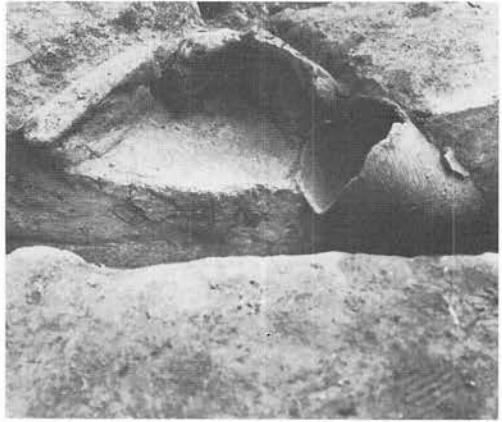
a. E IV - 1 住居址



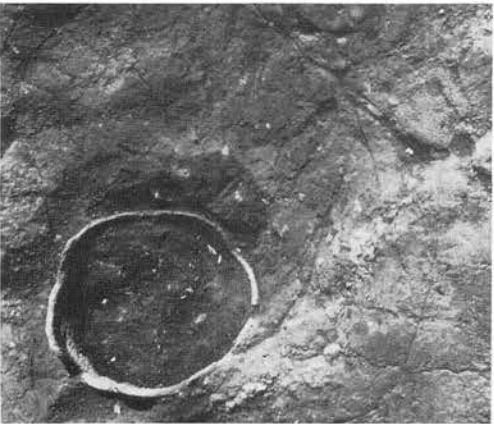
b. E IV - 2 住居址



c. F II - 3 住居址

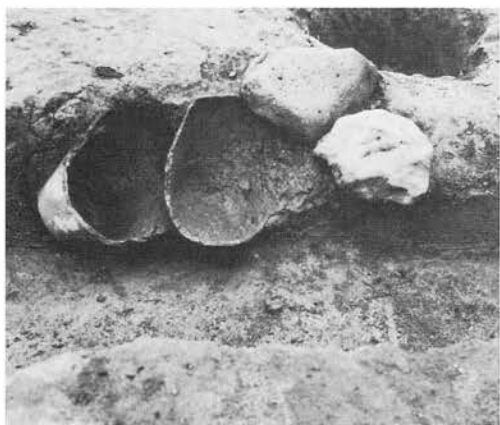


d. E IV - 2 住居址



e. F II - 4 住居址





a. F II-6住居址



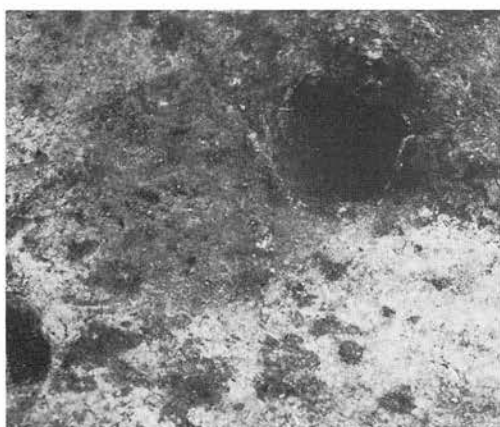
b. F II-8住居址



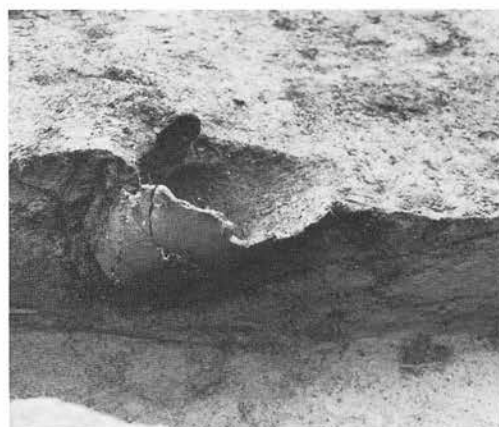
c. F II-10住居址



d. F II-15住居址

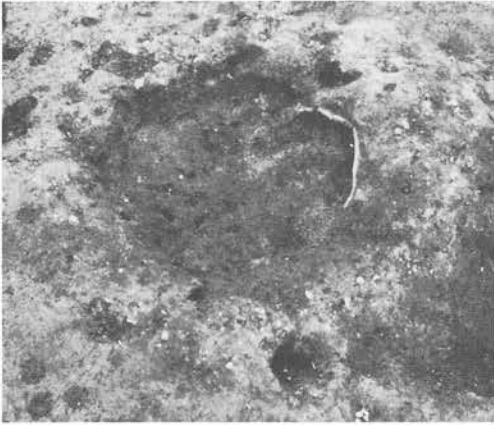


e. F II-11住居址

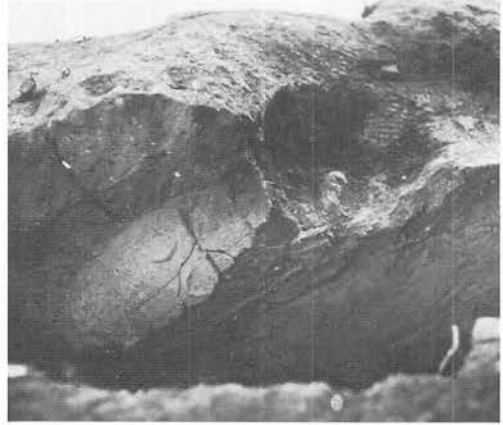


f. F II-11住居址

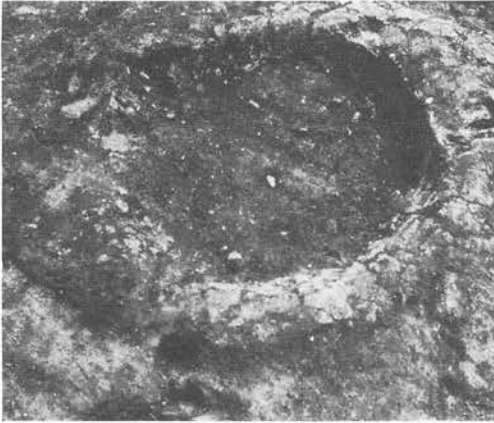
写真図版110



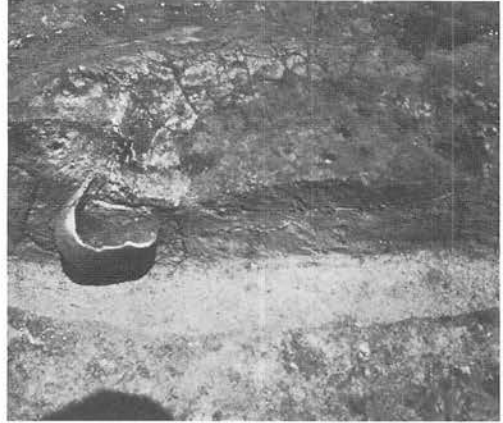
a. F II-12住居址



b. F II-12住居址



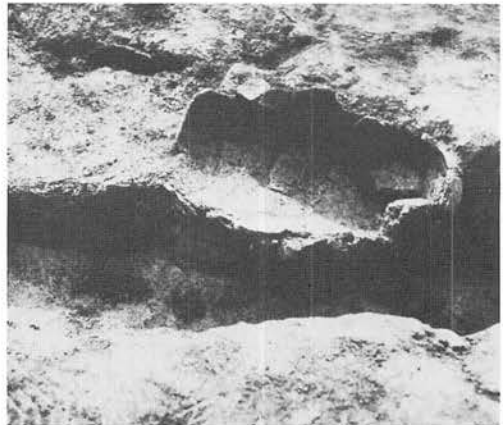
c. F II-13住居址



d. F II-13住居址



e. F II-14住居址



f. F II-14住居址

写真図版111



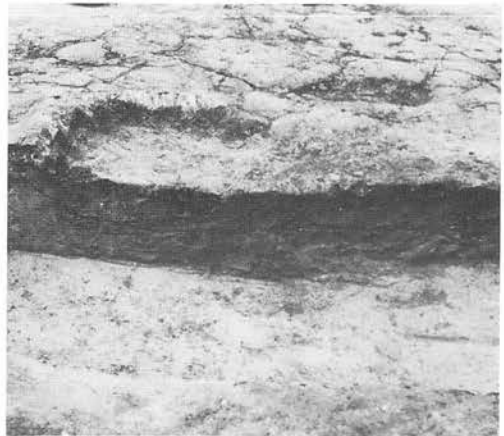
a. F II-16住居址



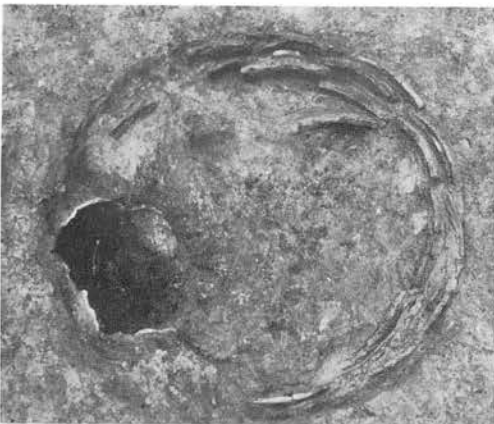
b. F II-16住居址



c. F II-18住居址



d. F II-18住居址

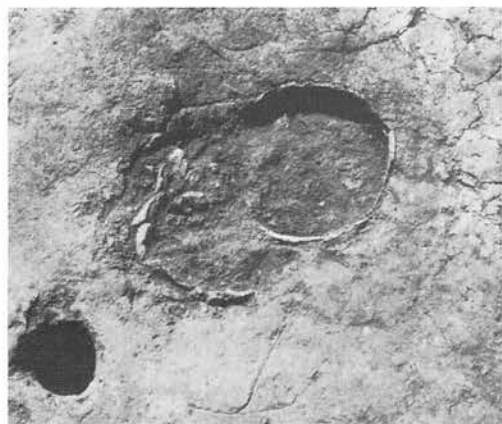


e. F II-19住居址



f. F II-19住居址

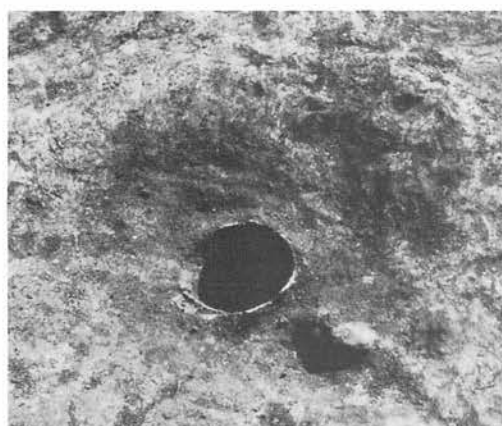
写真図版112



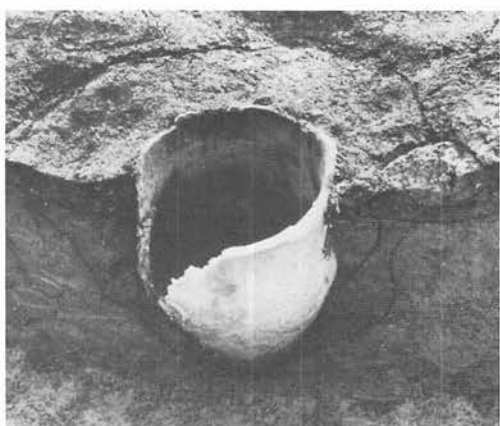
a. F III-2 住居址



b. F III-10 住居址



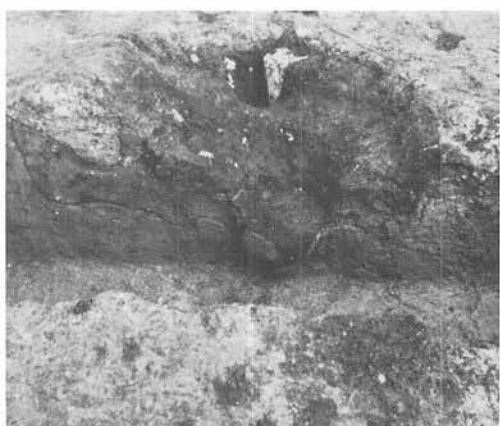
c. F III-5 住居址



d. F III-5 住居址



e. G II-1 住居址



f. G II-2 住居址

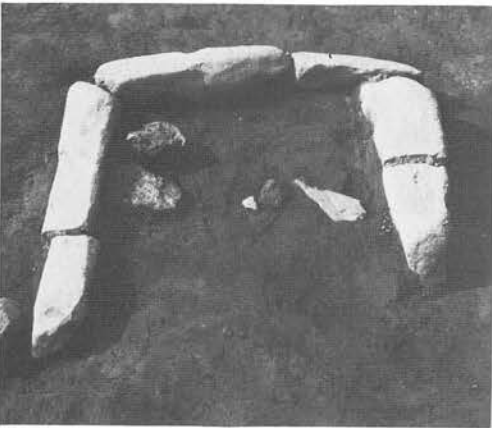
写真图版113



a. G II-3 住居址



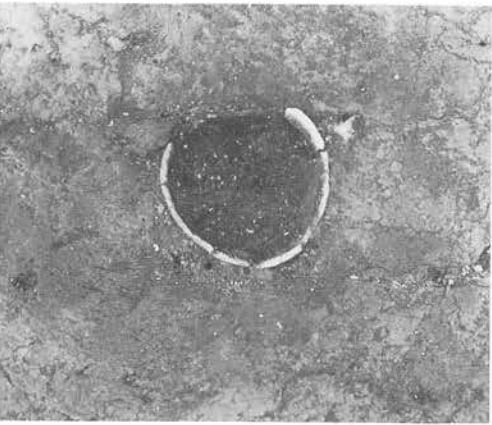
b. G II-3 住居址



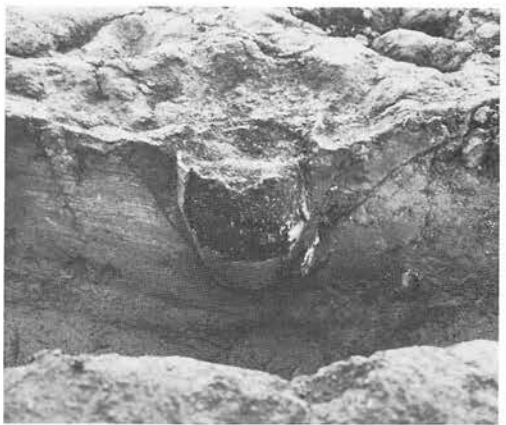
c. G II-4 住居址



d. G II-7 住居址

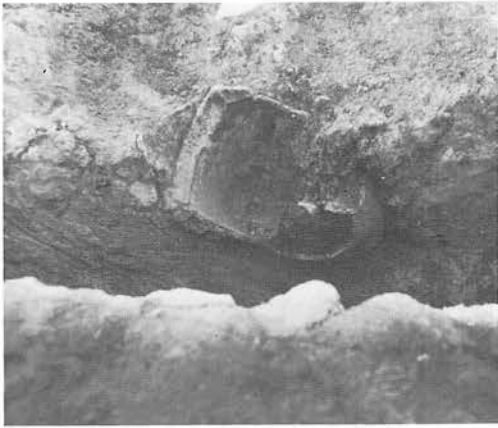


e. G II-5 住居址

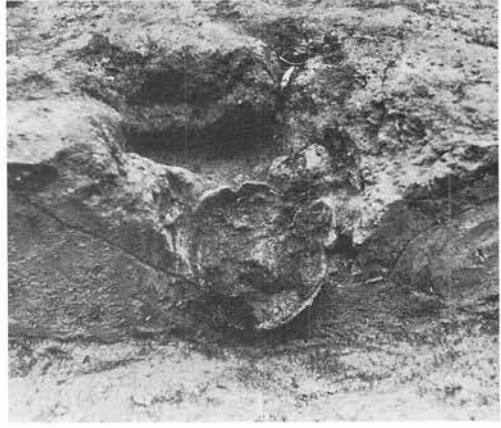


f. G II-5 住居址

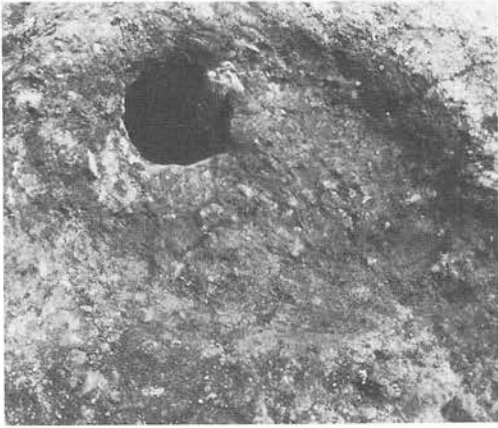
写真図版114



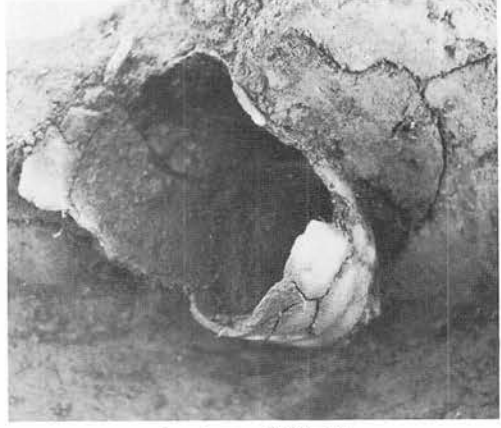
a. G II-9住居址



b. G II-11住居址



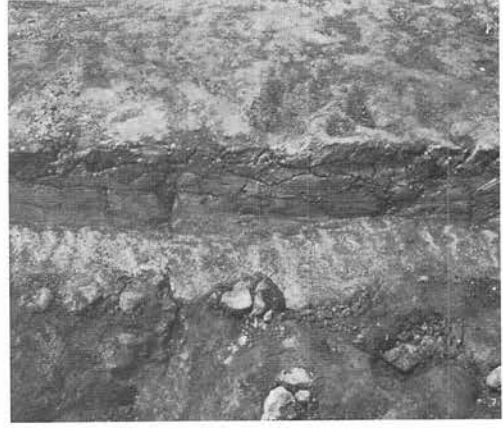
c. G II-10住居址



d. G II-10住居址



e. G II-13住居址



f. G II-15住居址



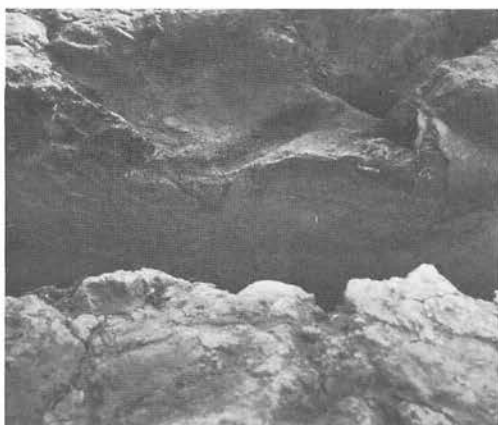
a. G II-16住居址



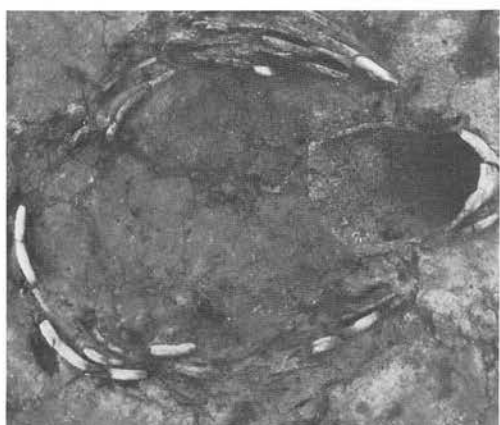
b. G II-19住居址



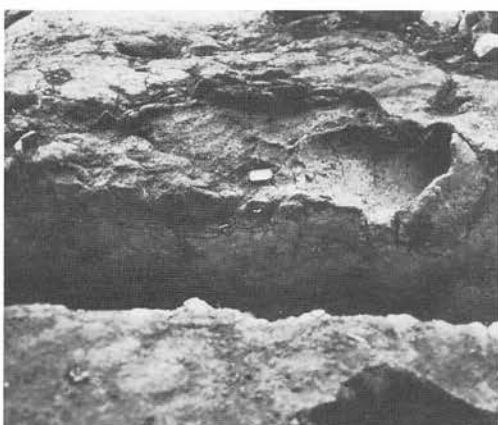
c. G II-17住居址



d. G II-17住居址

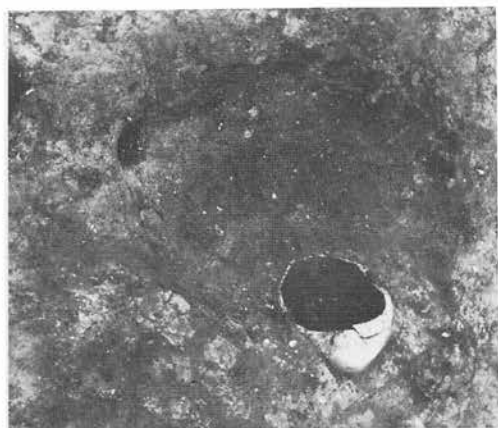


e. G II-18住居址



f. G II-18住居址

写真図版116



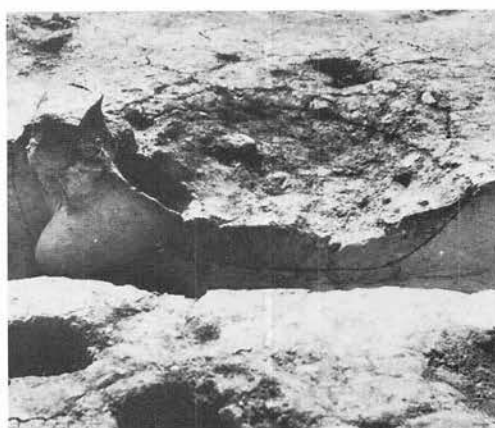
a. H II - 1 住居址



b. H II - 1 住居址



c. H II - 3 住居址



d. H II - 3 住居址



e. H II - 4 住居址



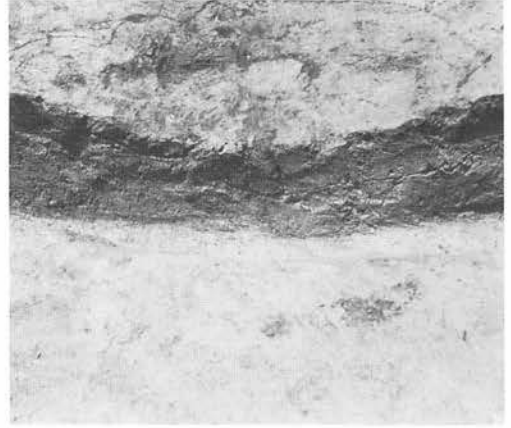
f. H II - 4 住居址

写真図版117

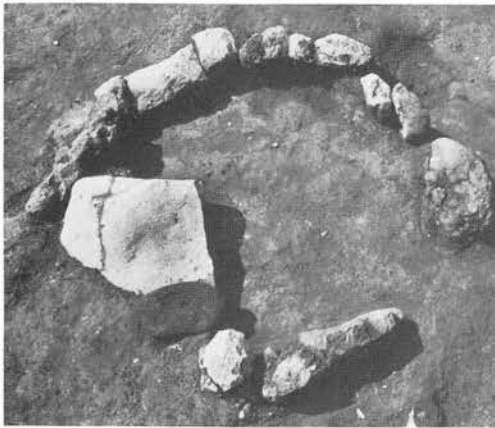




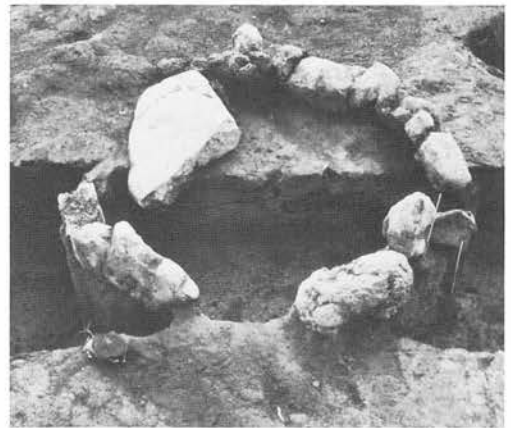
a. H II - 5 住居址



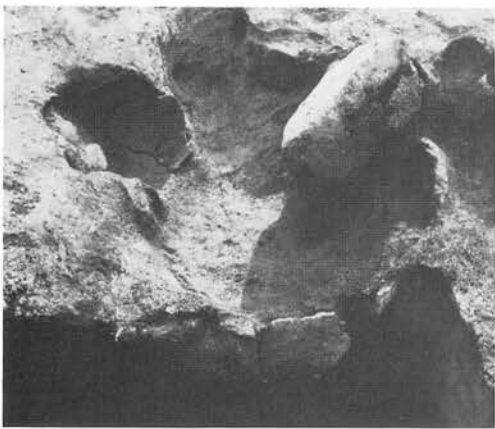
b. H II - 5 住居址



c. H II - 6 住居址



d. H II - 6 住居址

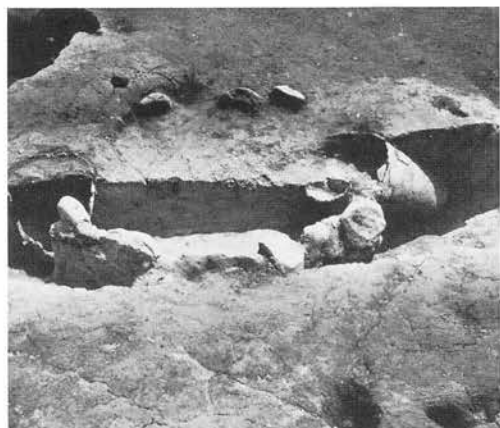


e. H II - 7 住居址



f. H II - 7 住居址

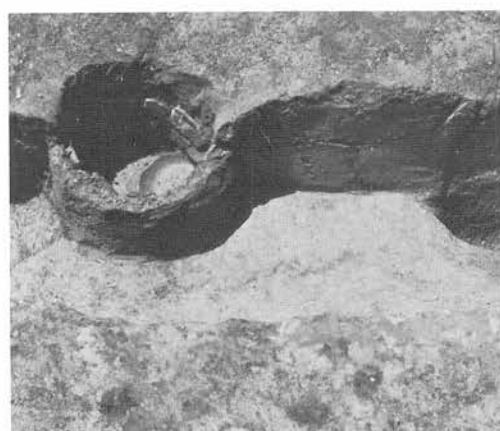
写真図版118



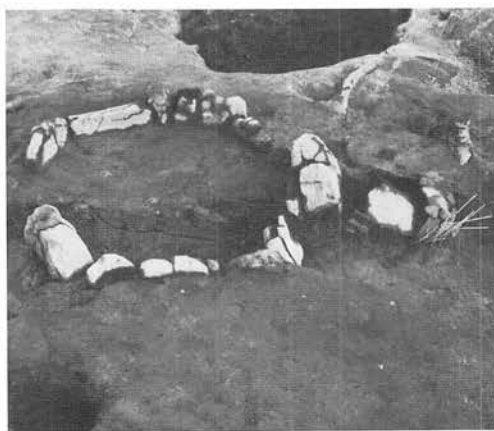
a. H II-8住居址



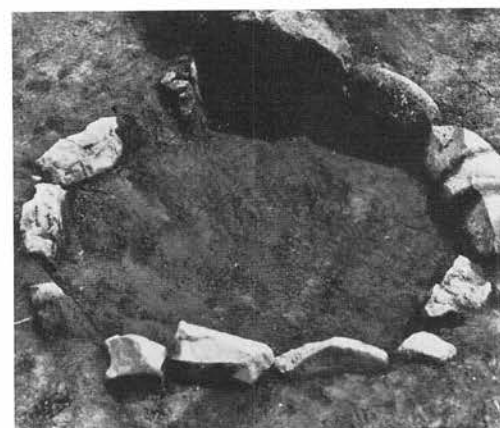
b. H II-9住居址



c. H II-10住居址



d. H II-12住居址



e. H II-11住居址



f. H II-11住居址

写真图版119



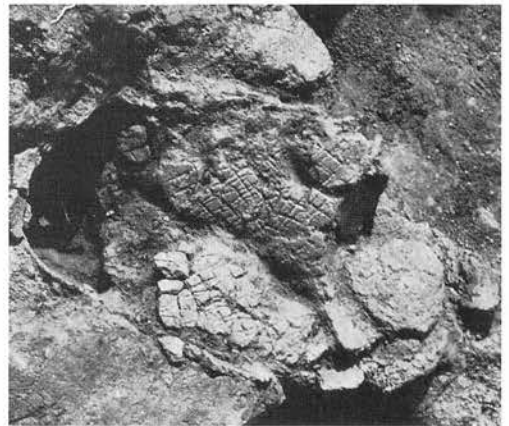
a. H II-13住居址



b. H II-14住居址



c. I II-3住居址



d. I II-5住居址

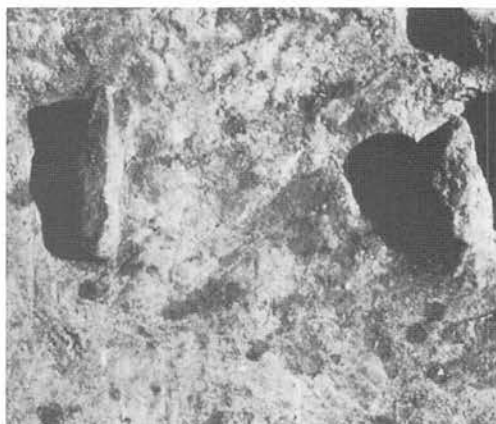


e. I II-7住居址

写真図版120



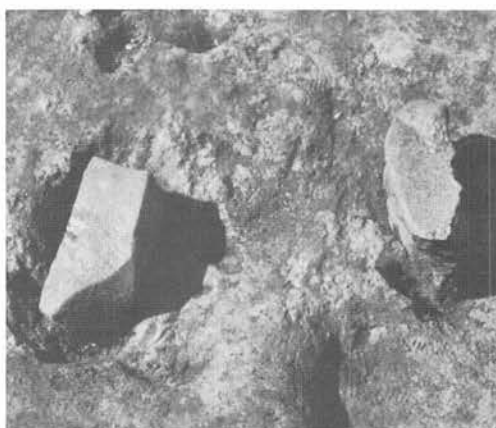
a. C III-11住居址(「出入口」状施設)



b. D IV-1住居址(「出入口」状施設)



c. E II-12住居址(「出入口」状施設)



d. E II-13住居址(「出入口」状施設)

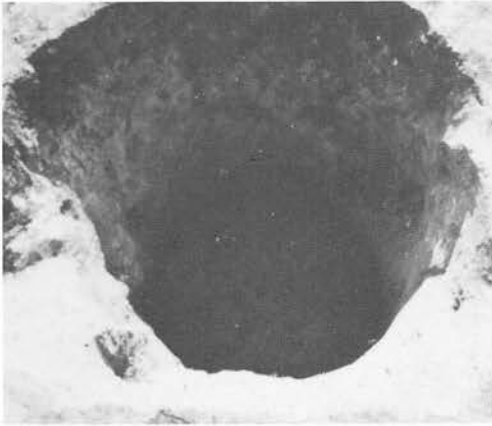


e. H II-5住居址(「出入口」状施設)

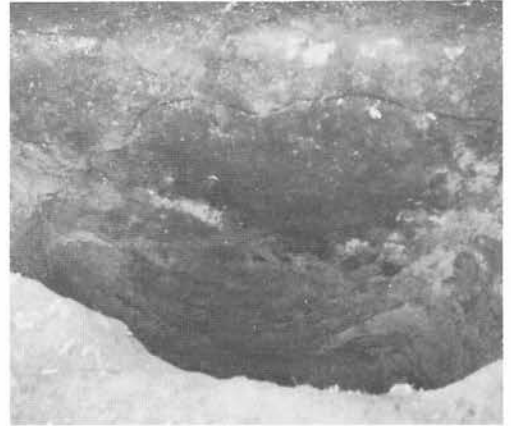


f. F II-8住居址(立石)

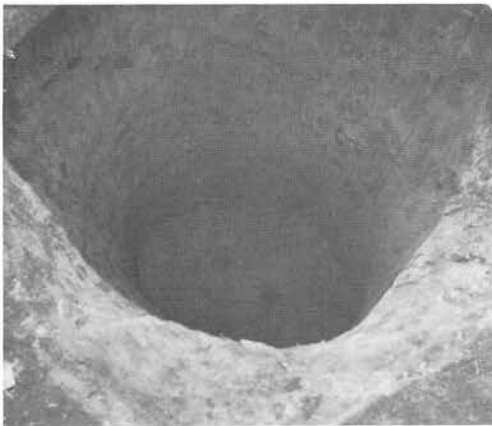
写真図版121



a. B IV-52ピーカー形ビット



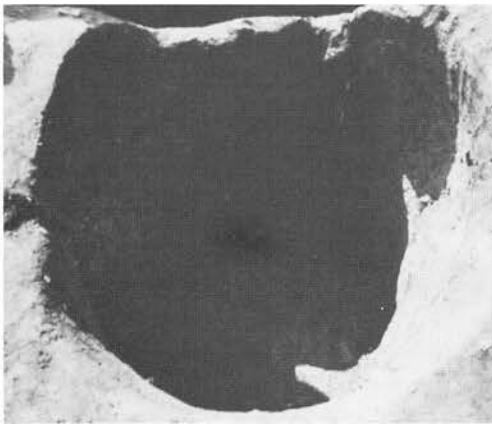
b. B IV-52ピーカー形ビット



c. B IV-53ピーカー形ビット



d. D IV-53ピーカー形ビット



e. B IV-54ピーカー形ビット



f. B IV-54ピーカー形ビット

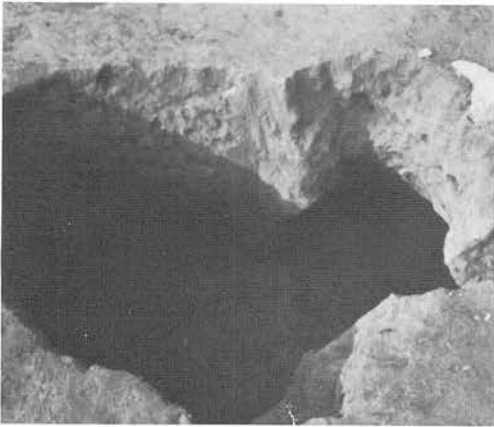
写真図版122



a . C III-51フラスコ形ピット



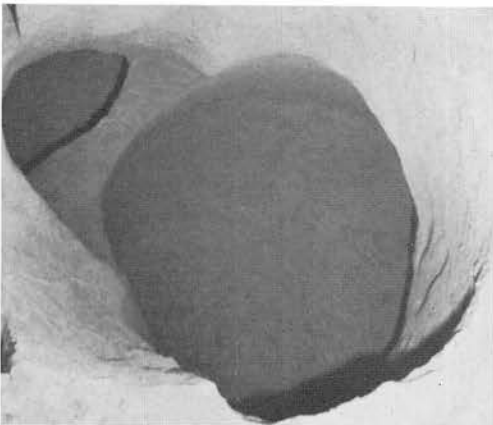
b . C III-51フラスコ形ピット



c . C III-52・C III-53フラスコ形ピット



d . C III-52フラスコ形ピット

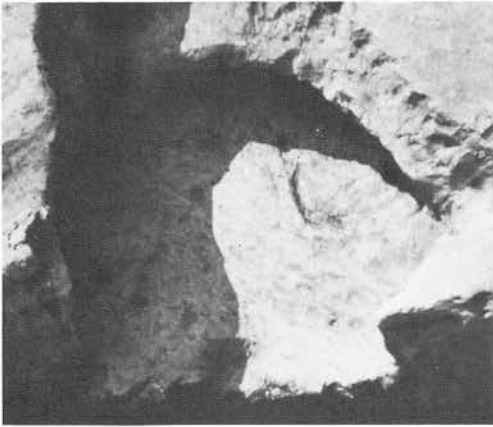


e . C III-54・C III-55フラスコ形ピット



f . C III-54フラスコ形ピット

写真図版123



a. C III-57フラスコ形ピット



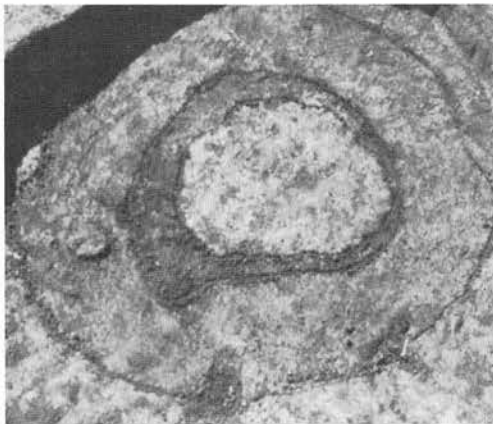
b. C III-57フラスコ形ピット



c. C III-58フラスコ形ピット



d. C III-58フラスコ形ピット



e. C III-59フラスコ形ピット

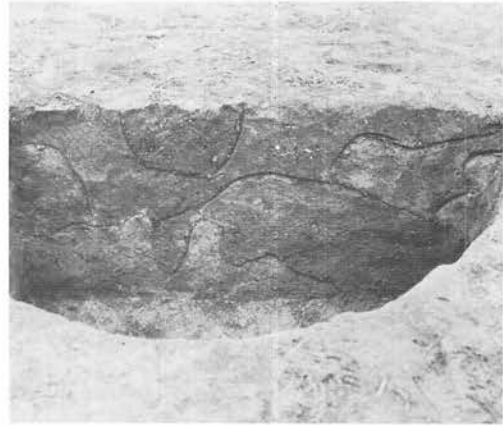


f. C III-59フラスコ形ピット

写真図版124



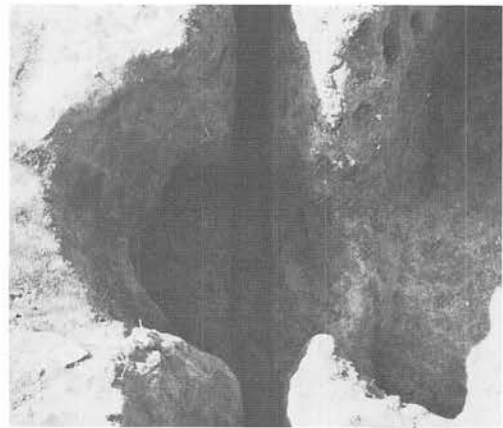
a. CIV-51ピーカー形ピット



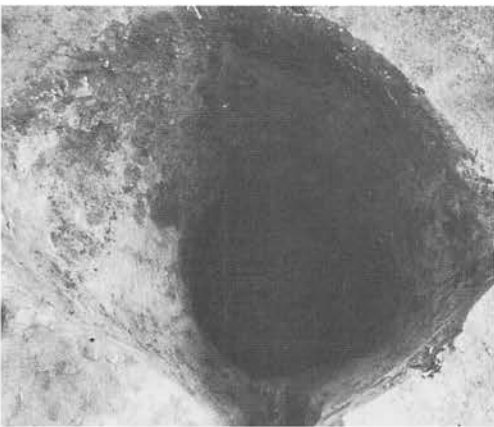
b. CIV-51ピーカー形ピット



c. CIV-52ピーカー形ピット



d. CIV-54ピーカー形ピット



e. CIV-53ピーカー形ピット



f. CIV-53ピーカー形ピット

写真図版125

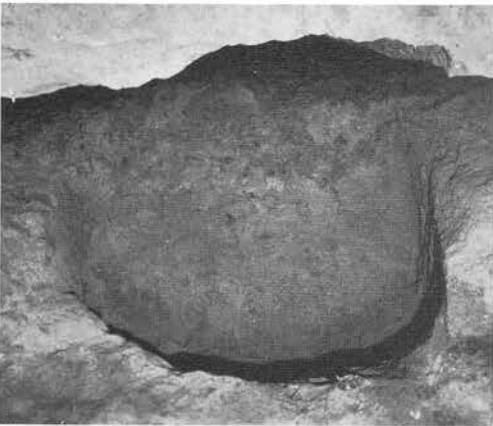




a. C IV-56ピーカー形ピット



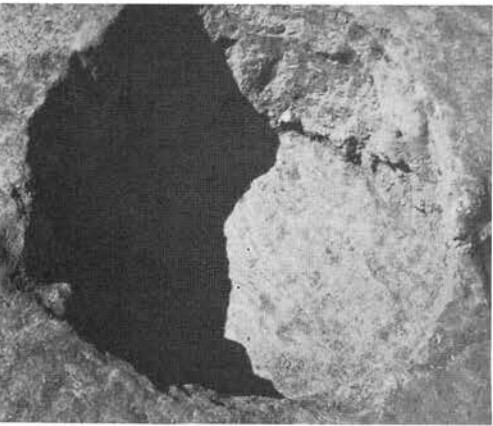
b. C IV-58ピーカー形ピット



c. D II-51フラスコ形ピット



d. C IV-58ピーカー形ピット

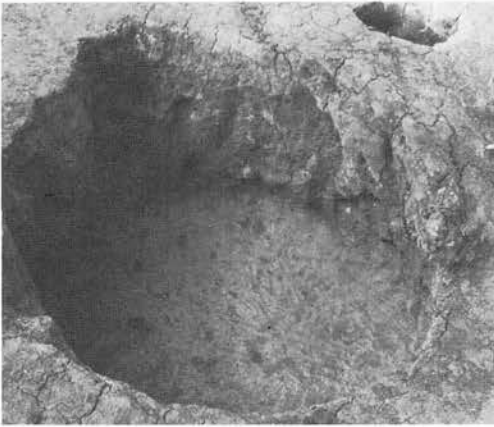


e. D II-52フラスコ形ピット



f. D II-53フラスコ形ピット

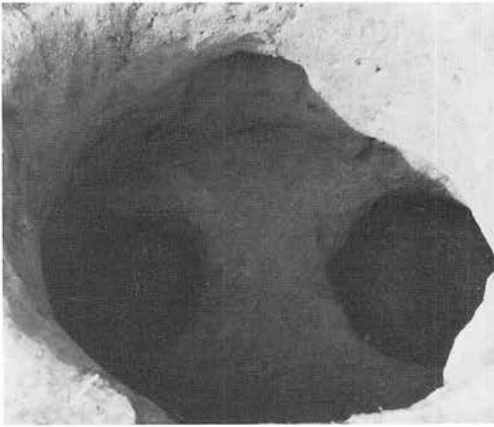
写真図版126



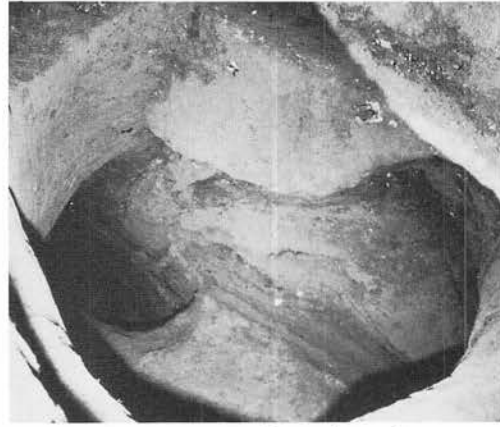
a. D II-54フラスコ形ピット



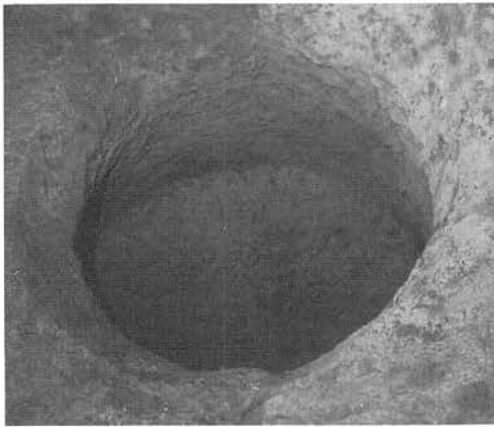
b. D II-54フラスコ形ピット



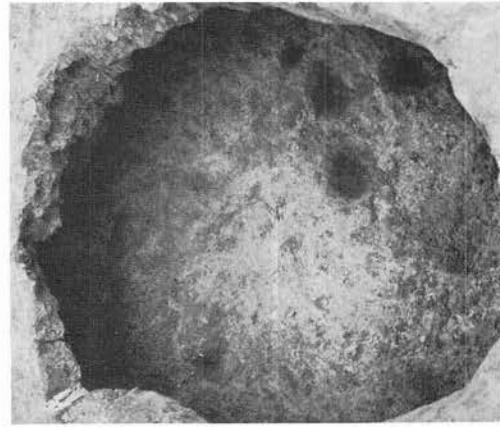
c. D II-55フラスコ形ピット



d. D II-55フラスコ形ピット



e. D II-56フラスコ形ピット



f. D II-58フラスコ形ピット

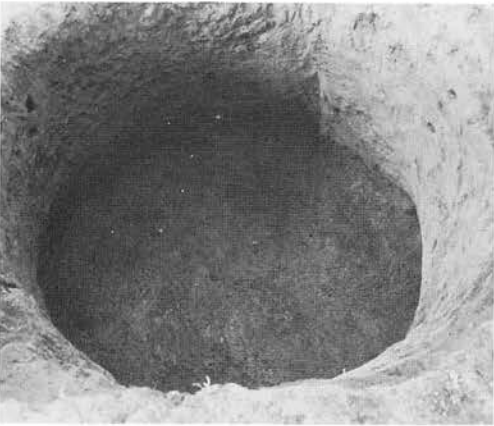
写真図版127



a. D II-57フラスコ形ピット



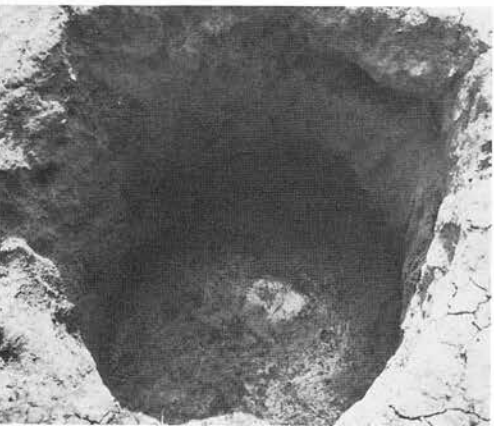
b. D II-57フラスコ形ピット



c. D II-61フラスコ形ピット



d. D II-61フラスコ形ピット

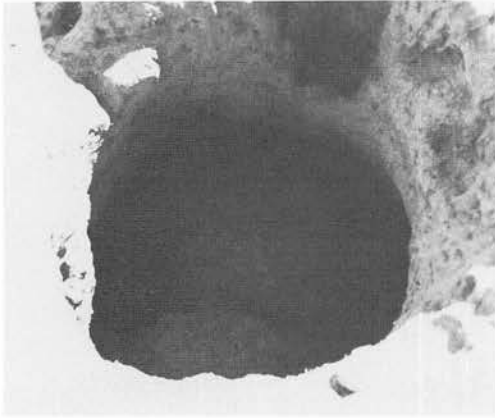


e. D II-59フラスコ形ピット



f. D III-52フラスコ形ピット

写真図版128



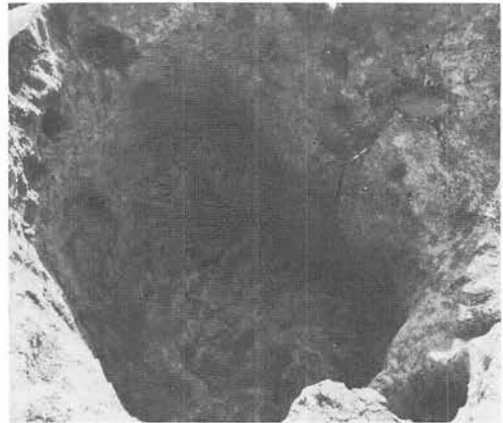
a. D III-51フラスコ形ピット



b. D III-51フラスコ形ピット



c. D III-53フラスコ形ピット



d. D III-54フラスコ形ピット

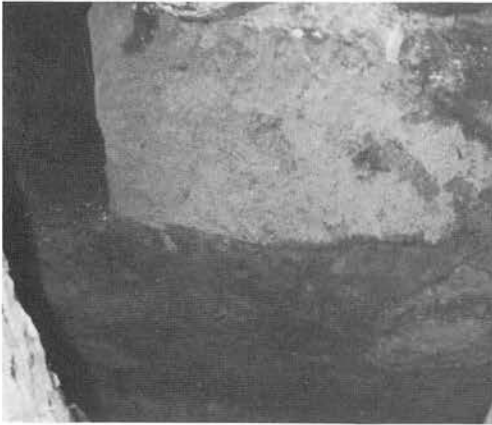


e. D III-55フラスコ形ピット



f. D III-57フラスコ形ピット

写真図版129



a. D III-61フラスコ形ピット



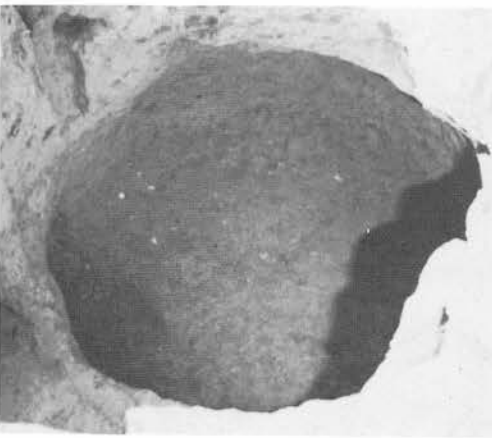
b. D III-64フラスコ形ピット



c. D III-62フラスコ形ピット



d. D III-62フラスコ形ピット

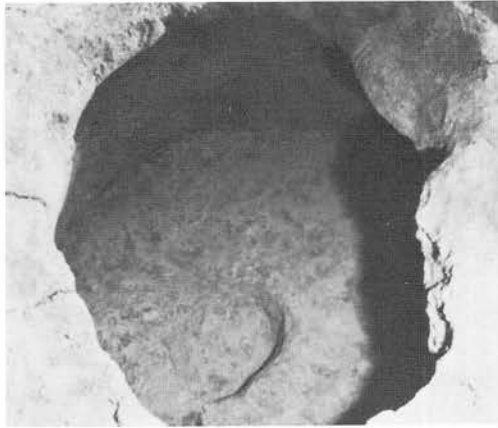


e. D III-63フラスコ形ピット

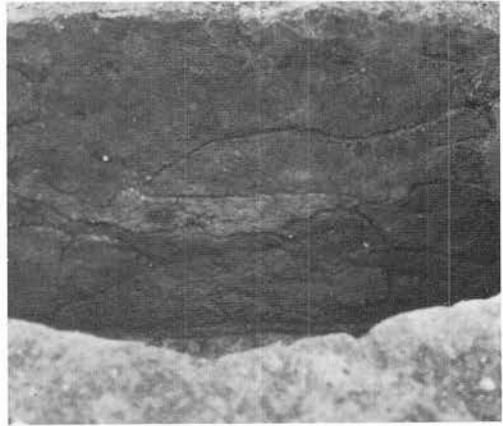


f. D III-63フラスコ形ピット

写真図版130



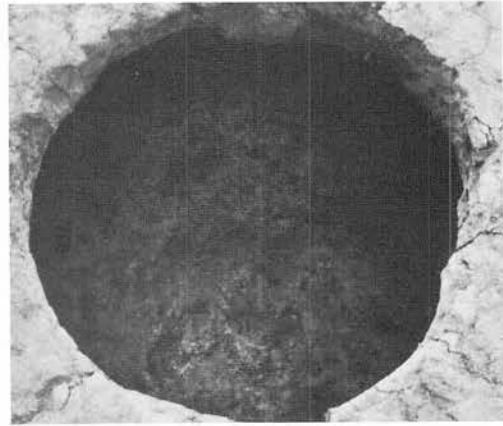
a. D III-67フラスコ形ビット



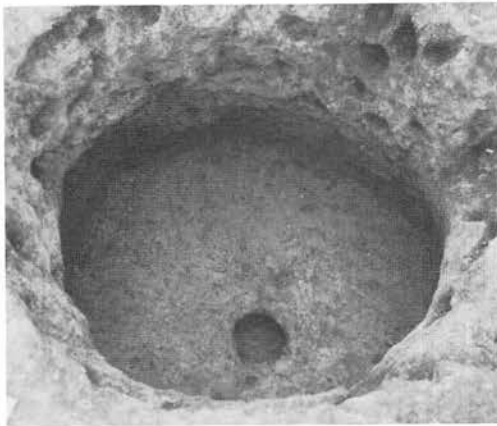
b. D III-68フラスコ形ビット



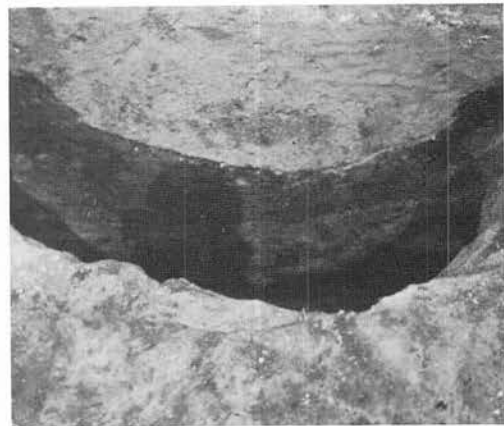
c. D III-70フラスコ形ビット



d. D III-74フラスコ形ビット

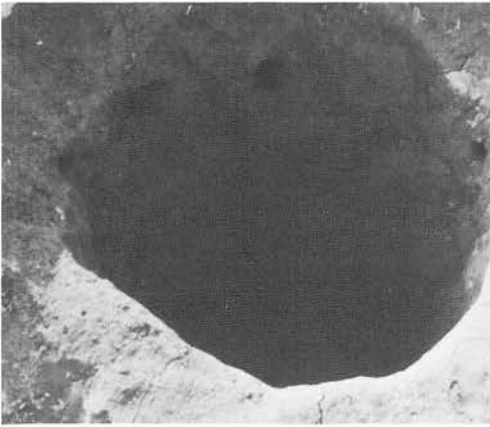


e. D III-71フラスコ形ビット



f. D III-71フラスコ形ビット

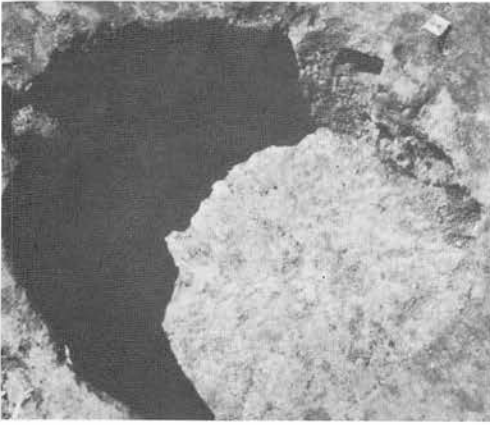
写真図版131



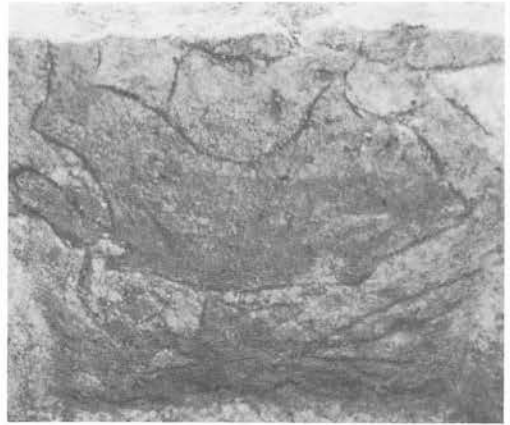
a . D III - 75ピーカー形ビット



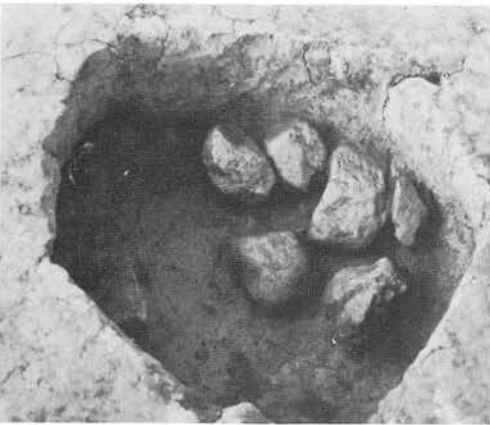
b . D III - 77ピーカー形ビット



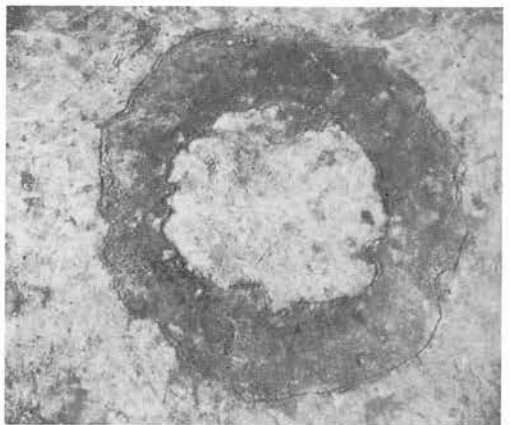
c . D III - 79ピーカー形ビット



d . D III - 82ピーカー形ビット



e . D III - 153不整形ビット



f . D IV - 51フラスコ形ビット

写真図版132



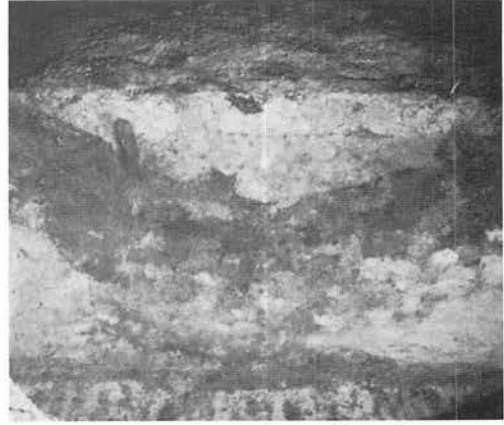
a. D IV-51フラスコ形ビット



b. D IV-51フラスコ形ビット



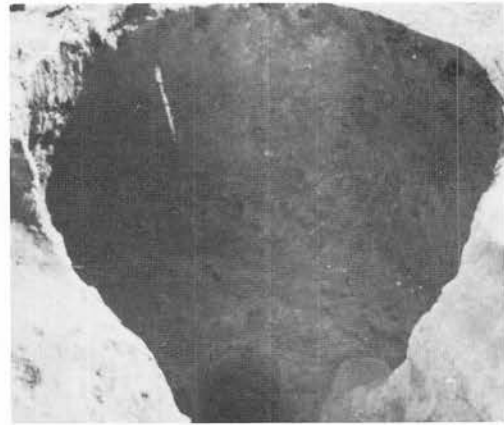
c. D IV-52フラスコ形ビット



d. D IV-52フラスコ形ビット



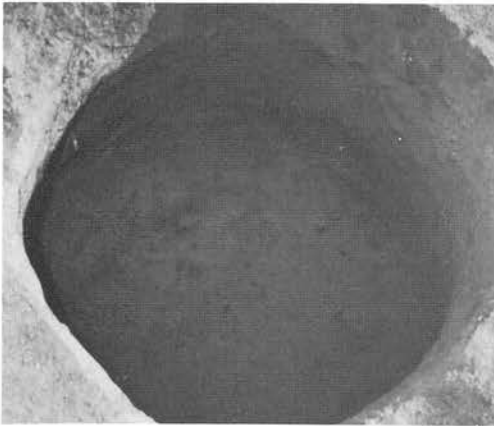
e. D IV-55フラスコ形ビット



f. E II-51ピーカー形ビット

写真図版133





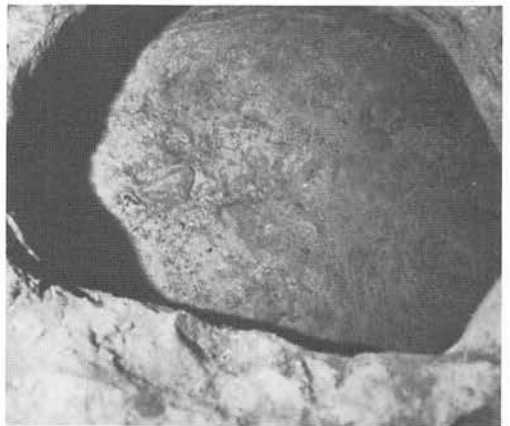
a. E II-52フラスコ形ピット



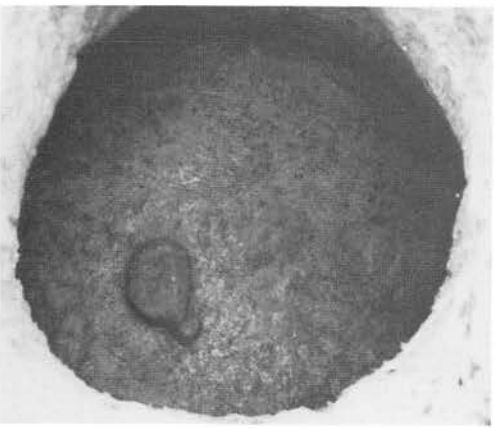
b. E II-53フラスコ形ピット



c. E II-54フラスコ形ピット



d. E II-58フラスコ形ピット

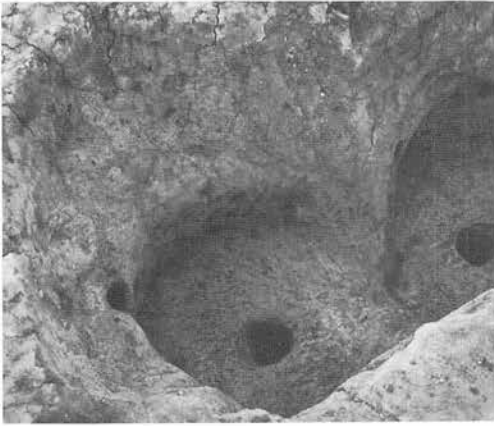


e. E II-56フラスコ形ピット



f. E II-56フラスコ形ピット

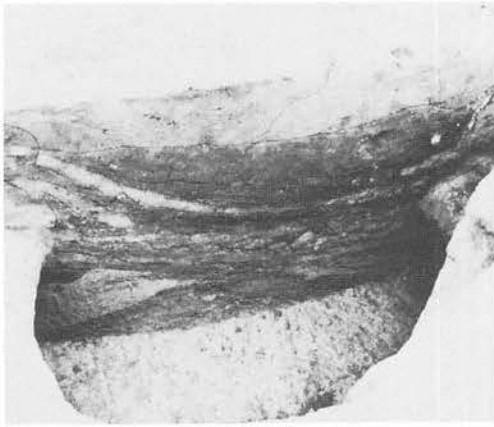
写真図版134



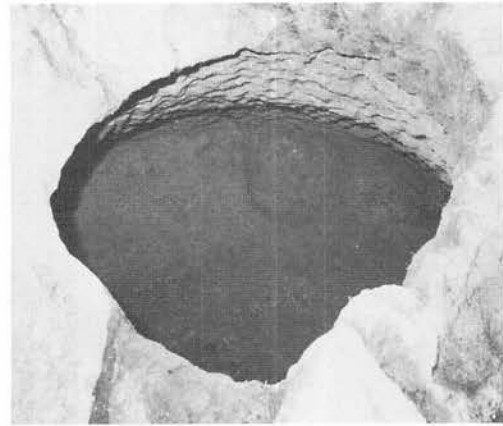
a. E II-62フラスコ形ピット



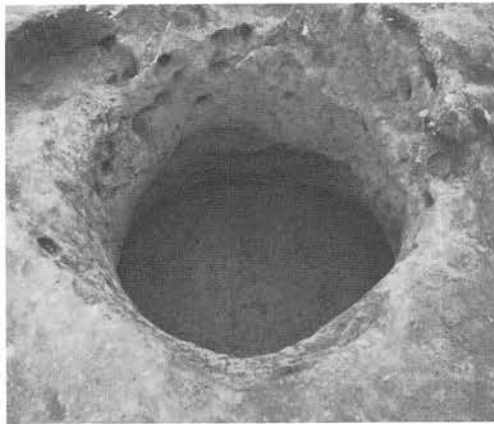
b. E II-64フラスコ形ピット



c. E II-66フラスコ形ピット



d. E II-69フラスコ形ピット



e. E III-54フラスコ形ピット



f. E III-56フラスコ形ピット

写真図版135



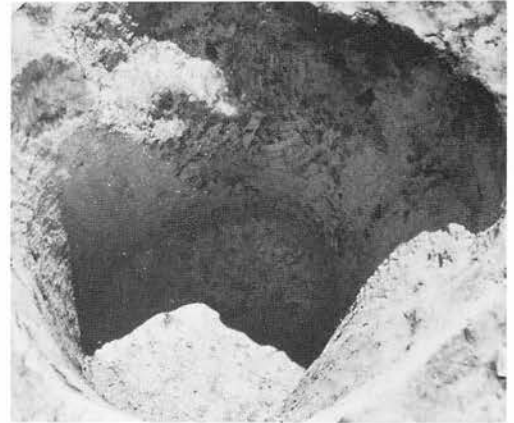
a. E III-66フラスコ形ピット



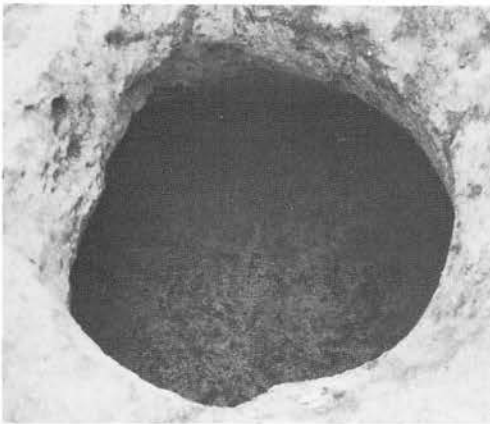
b. E IV-53フラスコ形ピット



c. E IV-54フラスコ形ピット



d. E IV-59ピーカー形ピット



e. F II-51フラスコ形ピット

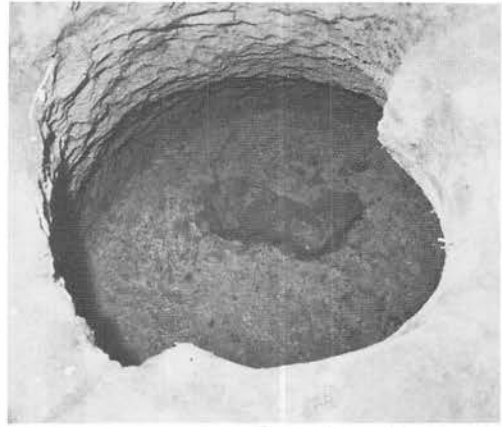


f. F II-52フラスコ形ピット

写真図版 136



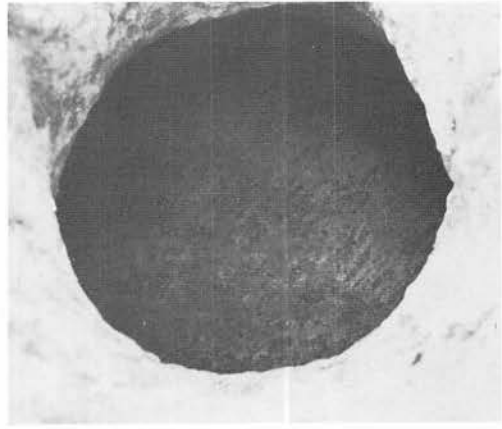
a. F II-54フラスコ形ピット



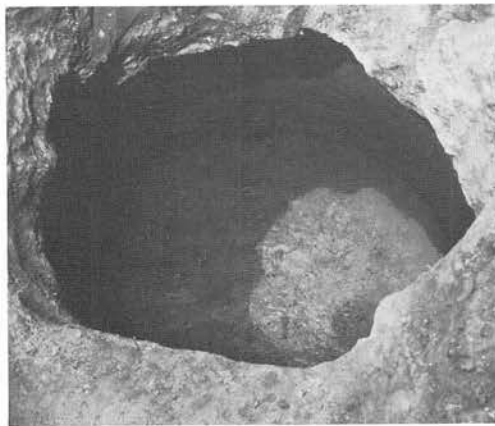
b. F II-55フラスコ形ピット



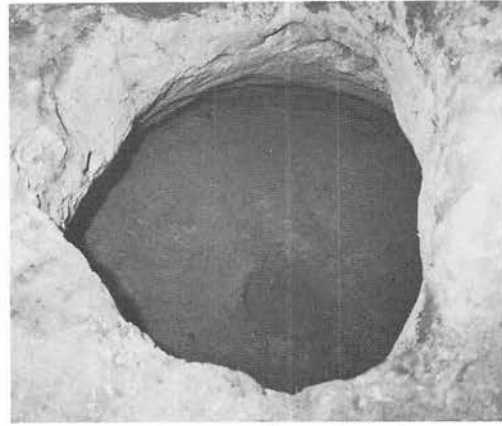
c. F II-56フラスコ形ピット



d. F II-58フラスコ形ピット

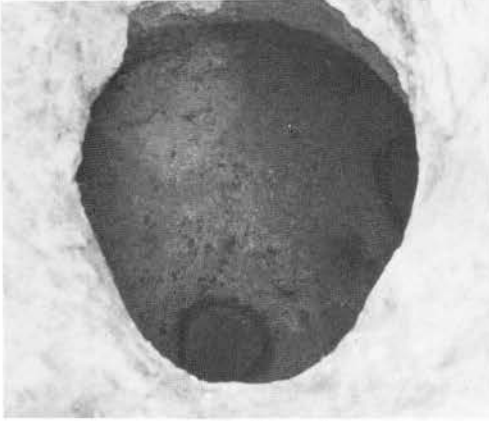


e. F II-60フラスコ形ピット

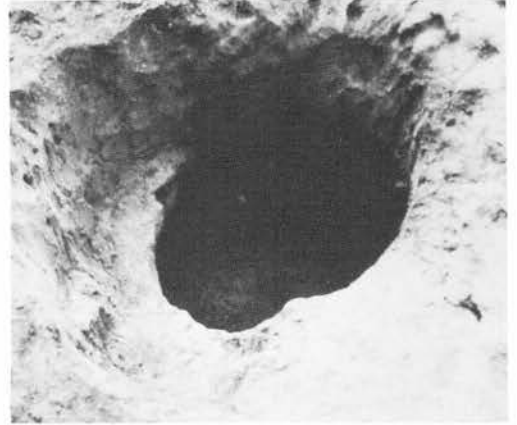


f. F II-62フラスコ形ピット

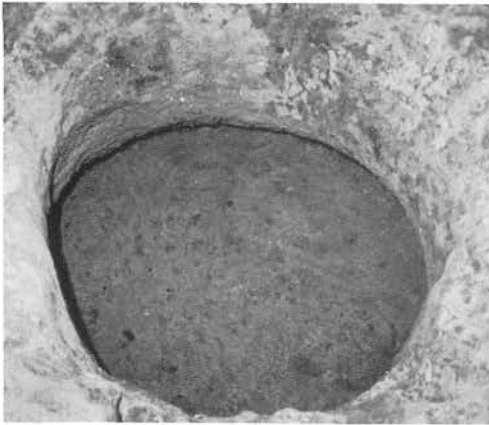
写真図版137



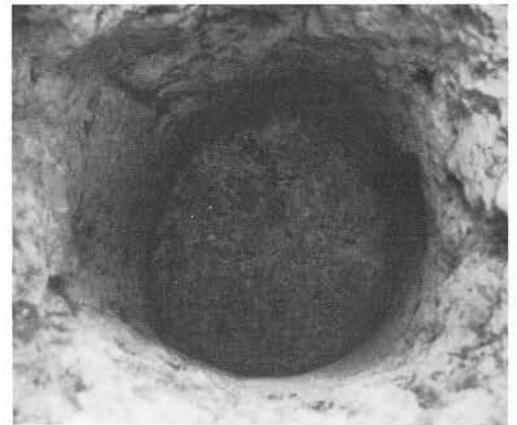
a. F II-63フラスコ形ビット



b. F II-64フラスコ形ビット



c. F II-65フラスコ形ビット



d. F II-69フラスコ形ビット

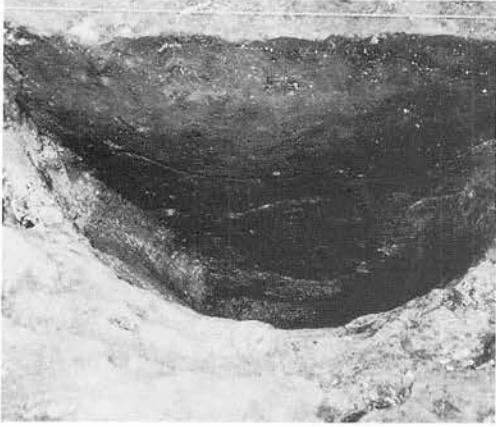


e. F II-70ピーカー形ビット

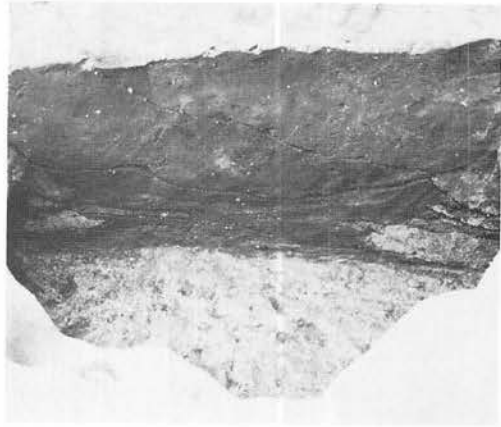


f. F III-51ピーカー形ビット

写真図版138



a. F III-51ピーカー形ピット



b. F IV-52フラスコ形ピット



c. G II-53フラスコ形ピット



d. G II-53フラスコ形ピット



e. G II-53フラスコ形ピット



f. G II-54フラスコ形ピット

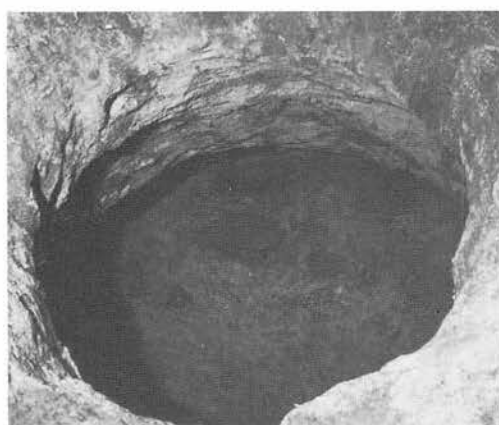
写真図版139



a. G II-55フラスコ形ピット



b. G II-55フラスコ形ピット



c. G II-58フラスコ形ピット



d. G II-61フラスコ形ピット

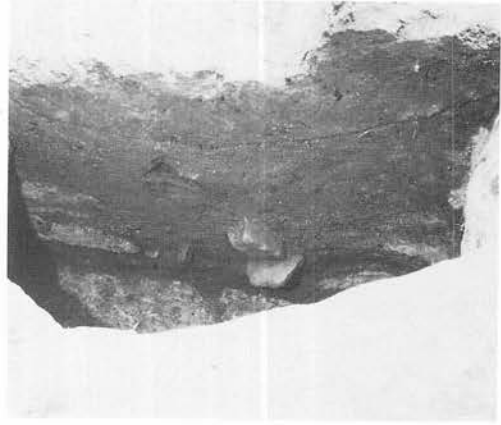


e. G II-59フラスコ形ピット

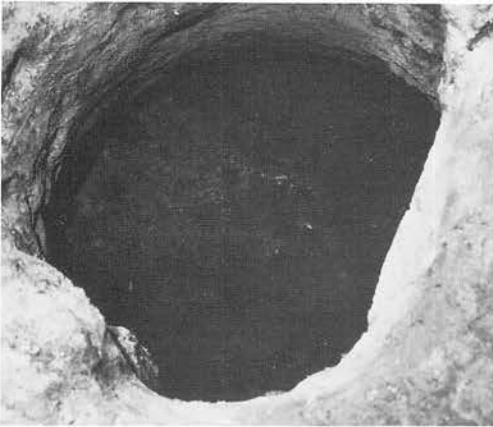
写真図版140



a. G II-62フラスコ形ピット



b. G II-62フラスコ形ピット



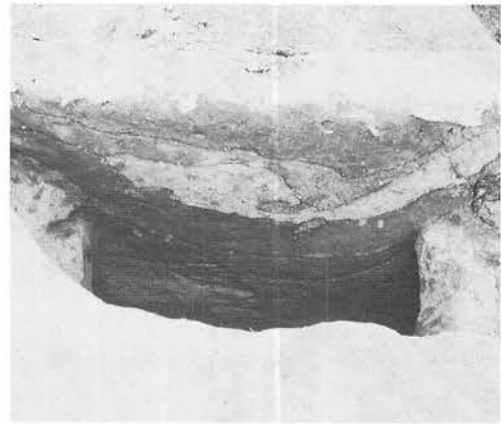
c. G II-63フラスコ形ピット



d. G II-64フラスコ形ピット



e. G II-65フラスコ形ピット



f. G II-65フラスコ形ピット

写真図版141





a. G II-66フラスコ形ピット



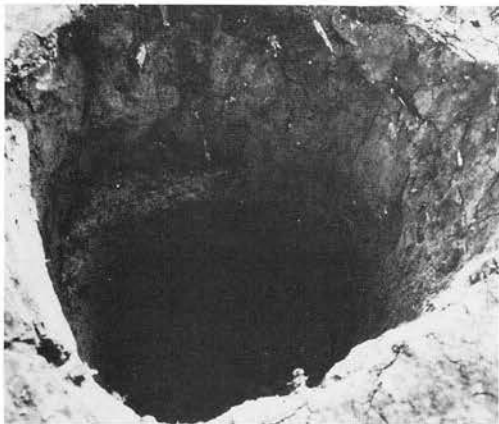
b. G II-67フラスコ形ピット



c. G II-68ピーカー形ピット



d. G II-69フラスコ形ピット

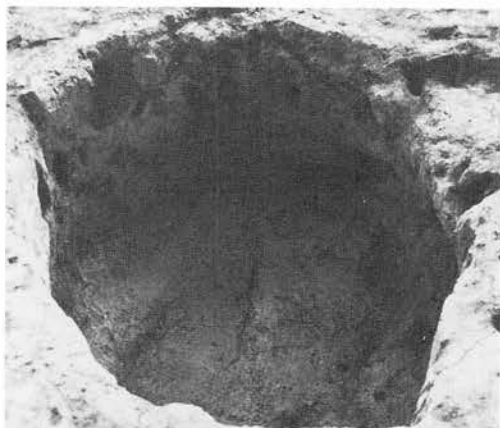


e. G II-70ピーカー形ピット

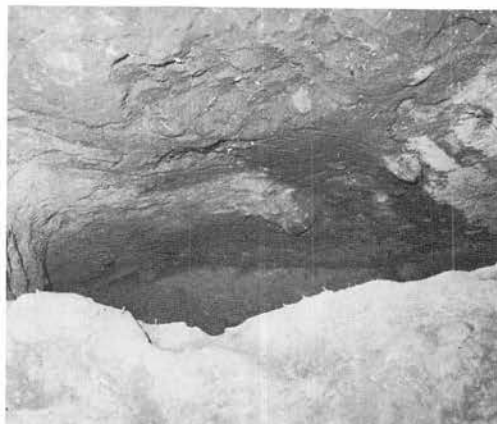


f. G II-70ピーカー形ピット

写真図版142



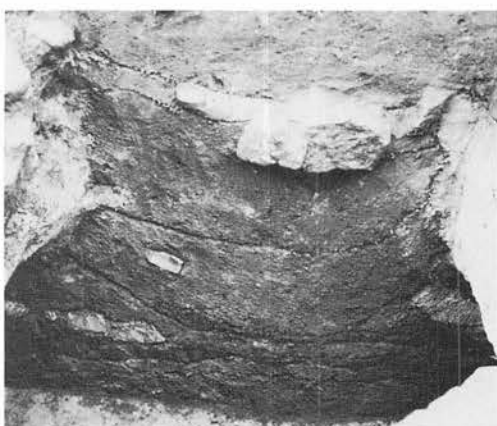
a. G II-71ピーカー形ピット



b. G III-51フラスコ形ピット



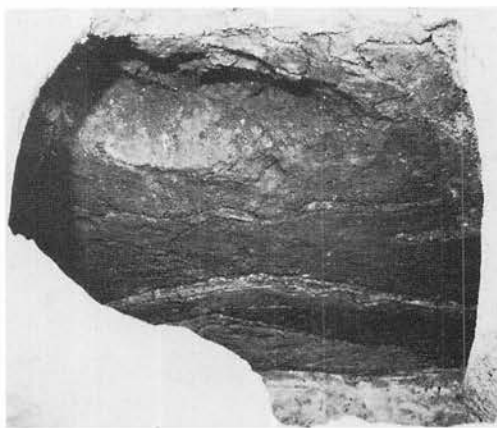
c. H II-53フラスコ形ピット



d. H II-53フラスコ形ピット

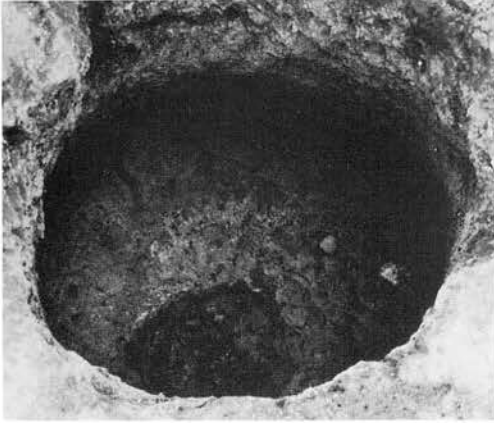


e. H II-54フラスコ形ピット

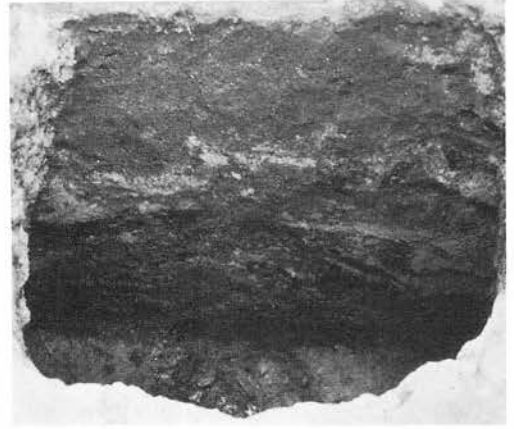


f. H II-54フラスコ形ピット

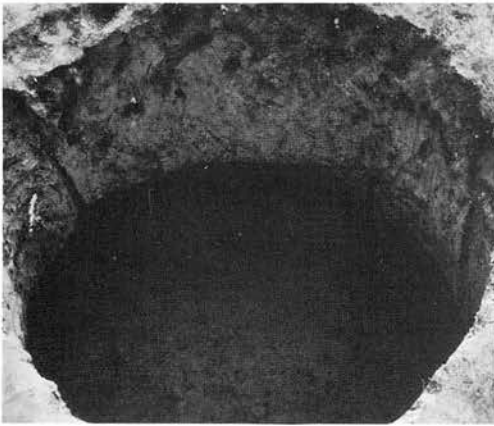
写真図版143



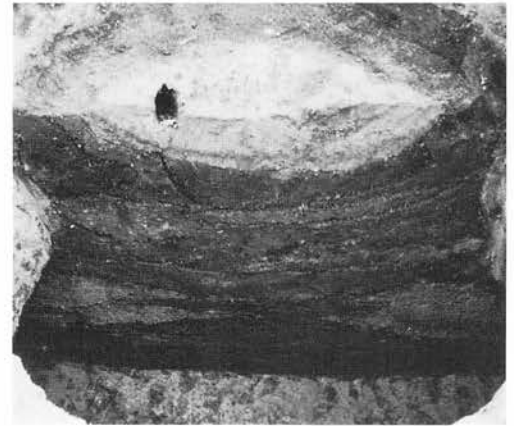
a. H II-55フラスコ形ピット



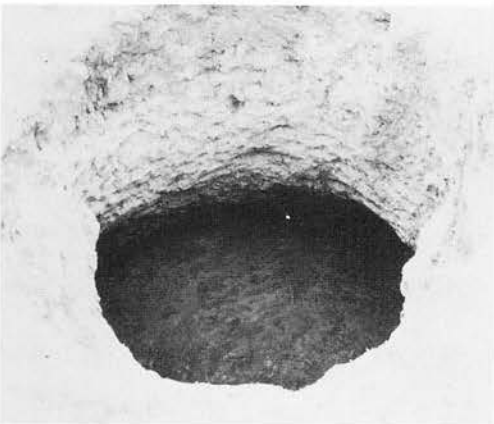
b. H II-55フラスコ形ピット



c. H II-56フラスコ形ピット



d. H II-56フラスコ形ピット

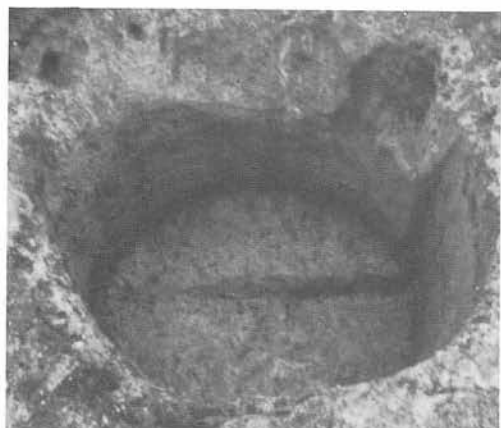


e. H II-51フラスコ形ピット

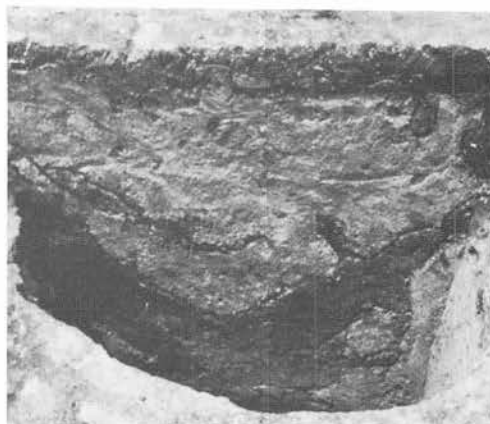


f. H II-57フラスコ形ピット

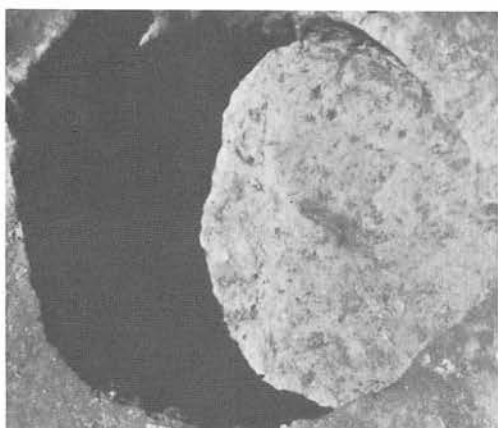
写真図版144



a. H II-59ピーカー形ビット



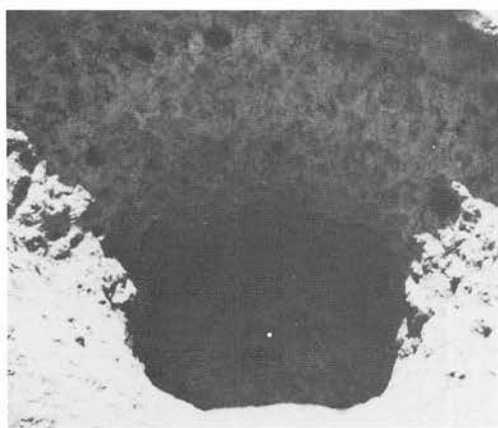
b. H II-59ピーカー形ビット



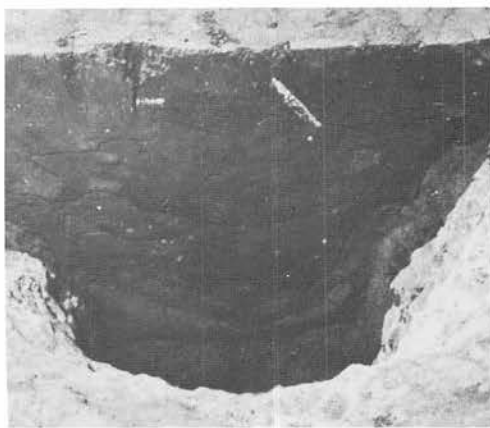
c. H II-60ピーカー形ビット



d. H II-60ピーカー形ビット



e. H II-61ピーカー形ビット

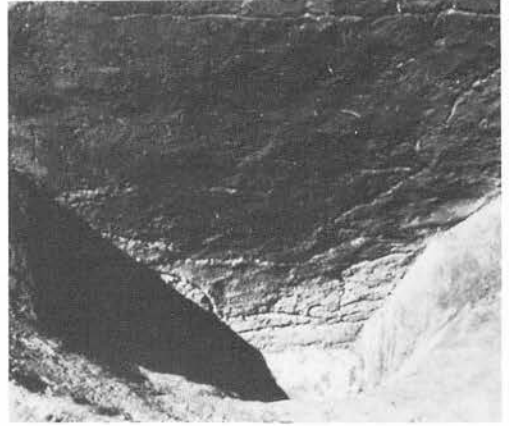


f. H II-61ピーカー形ビット

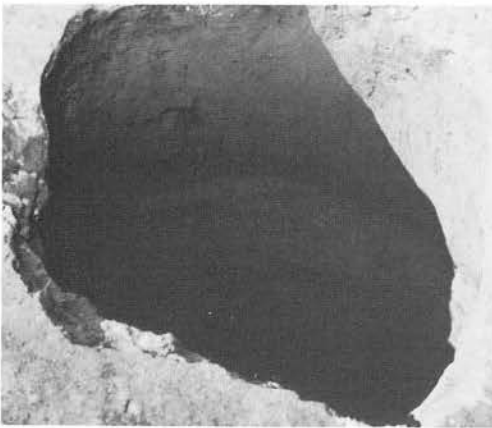
写真図版145



a. H II-62ピーカー形ビット



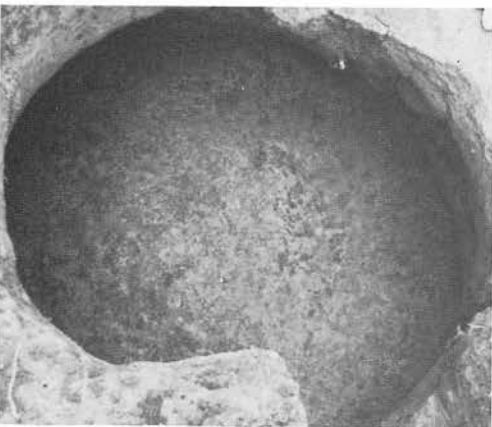
b. H II-62ピーカー形ビット



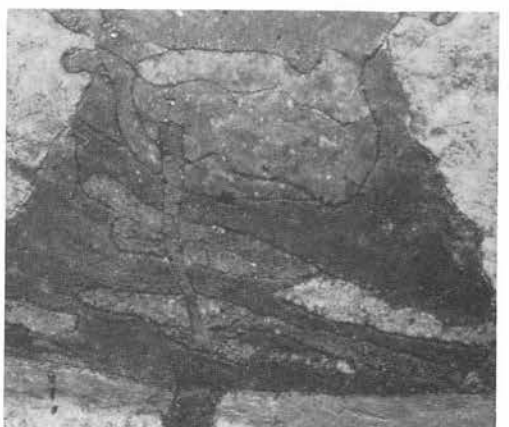
c. H II-63フラスコ形ビット



d. H II-63フラスコ形ビット



e. H II-58フラスコ形ビット



f. I II-52フラスコ形ビット

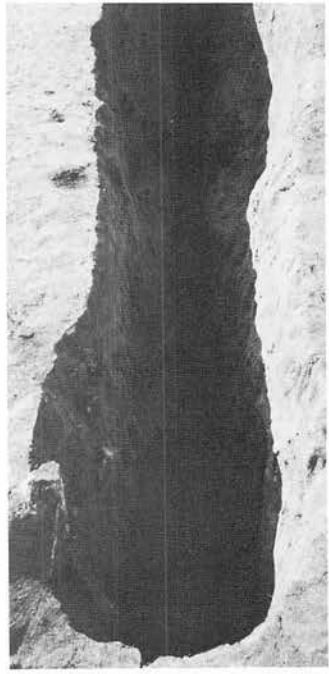
写真図版146



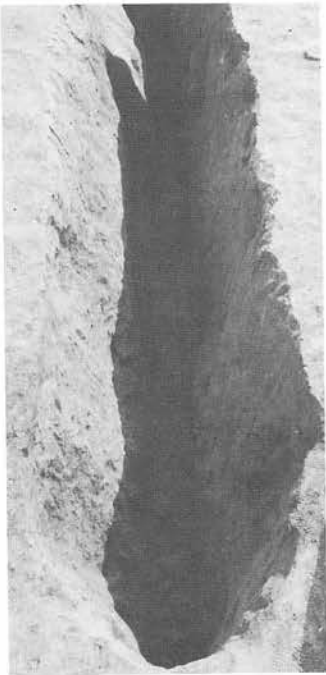
a. B III-102



b. B III-103



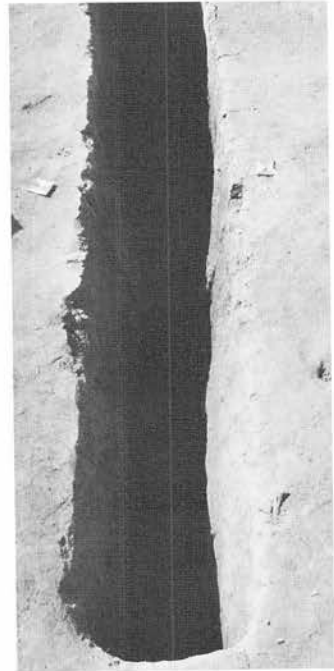
c. B IV-102



d. B IV-103



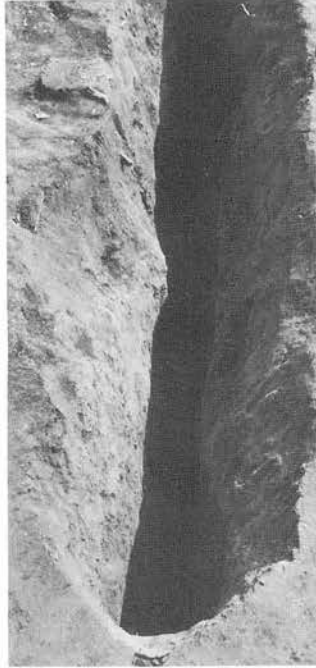
e. B IV-104  
写真図版 147



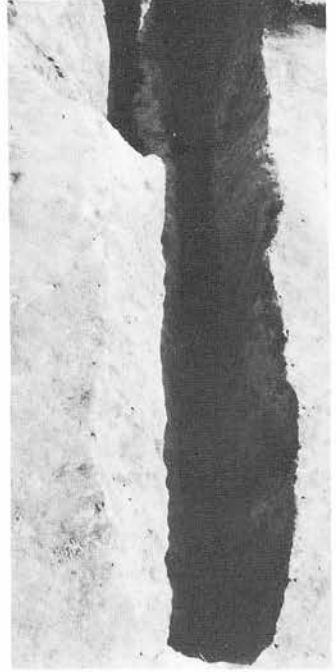
f. B IV-105



a. BV 107



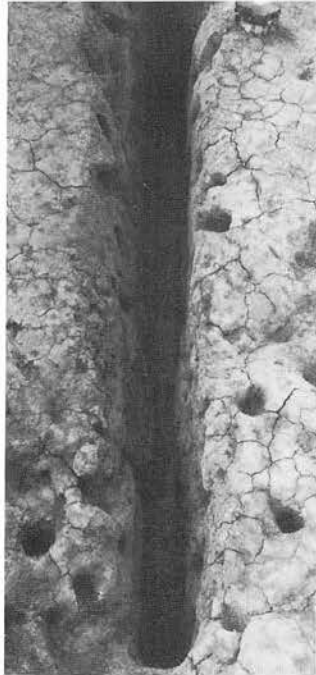
b. BV-108



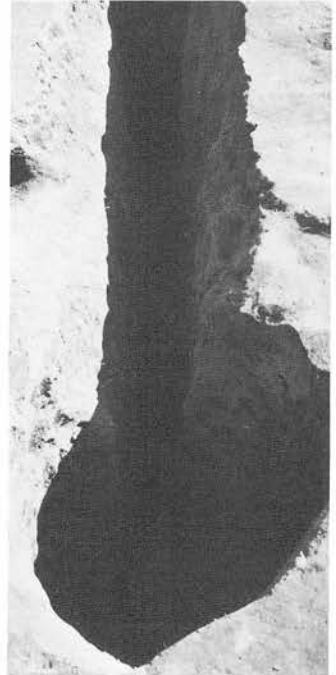
c. BV-109



d. C III-101



e. C III-102



f. C III-103

写真図版 148



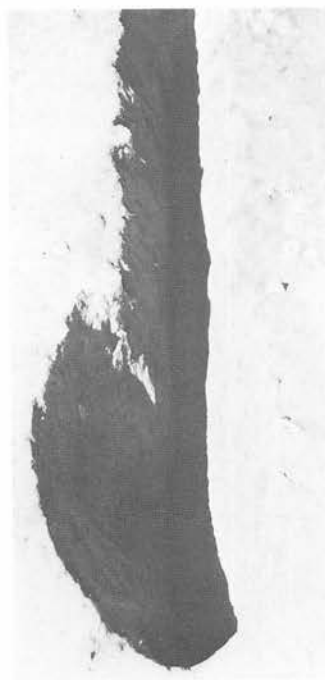
a. C III-106



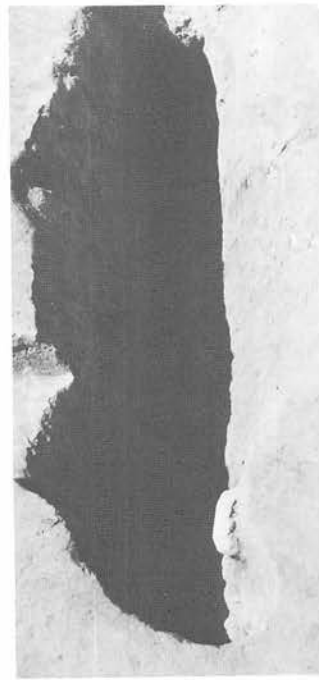
b. C III-107



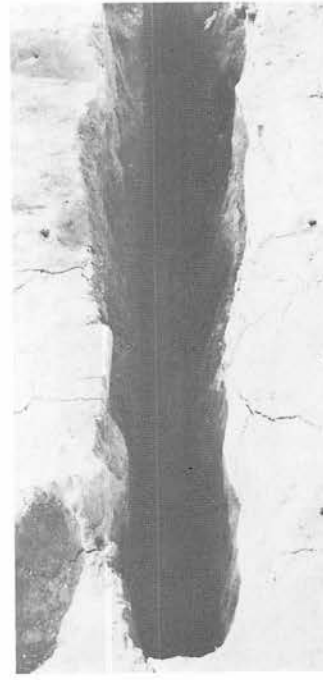
c. C III-108



d. C III-109

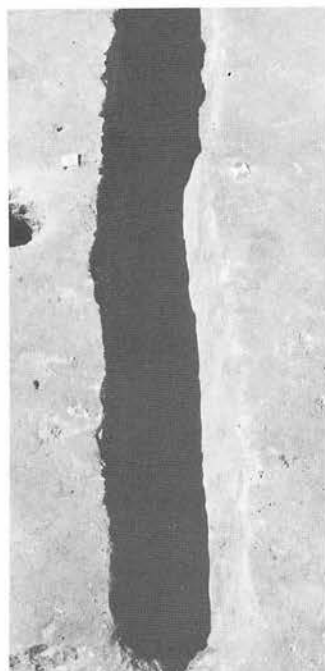


e. C III-111  
写真图版 149



f. C III-113





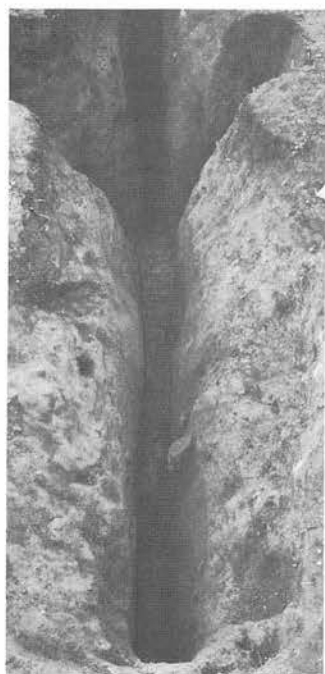
a. C III-114



b. C III-115



c. C III-116



d. C III-117



e. C III-119

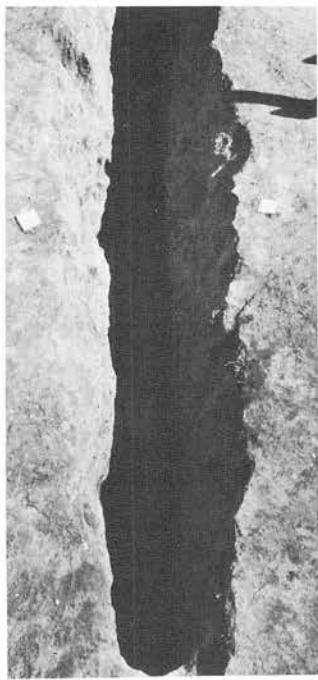


f. C III-120·C III-121

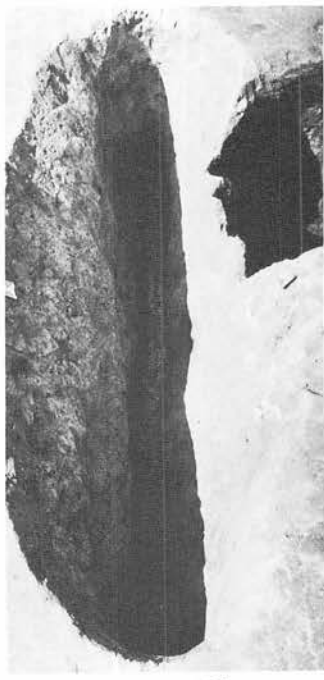
写真図版150



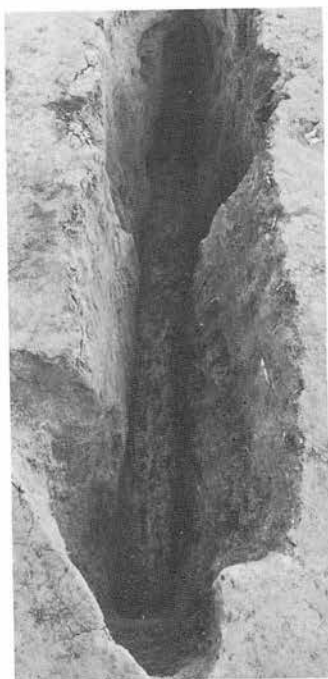
a. C III-123



b. C III-124



c. C IV-101

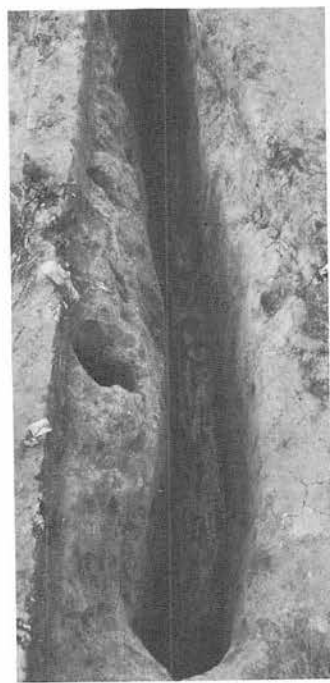


d. C IV-103

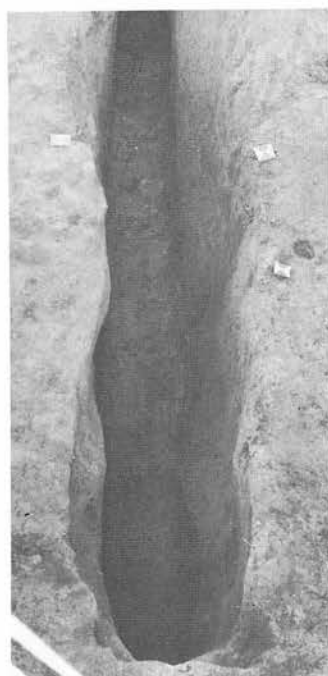


e. C IV-104

写真図版 151



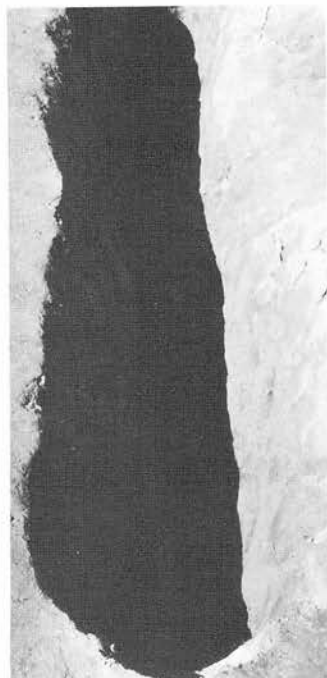
f. C IV-105



a. C IV-106



b. C IV-107



c. C IV-108



d. C IV-109

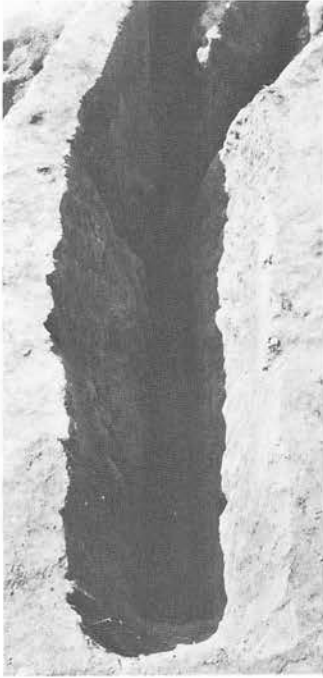


e. C IV-110

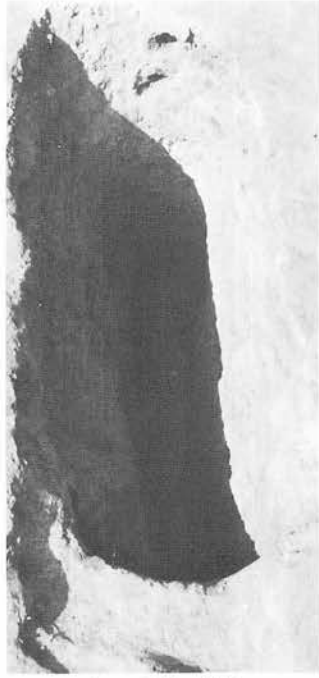


f. C IV-111

写真図版152



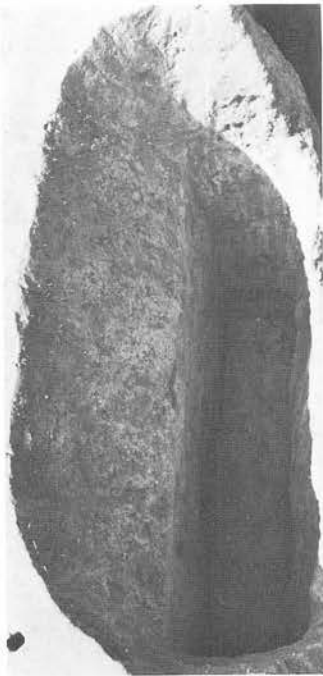
a. CV-114



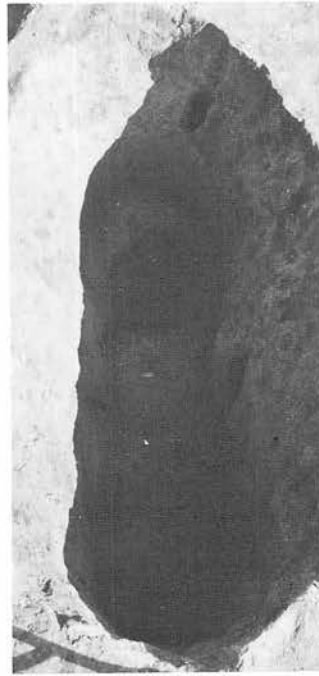
b. CV-117



c. CV-118



d. CV-119



e. CV-120



f. CV-121

写真図版153



a. C IV-125(閉塞火山灰)



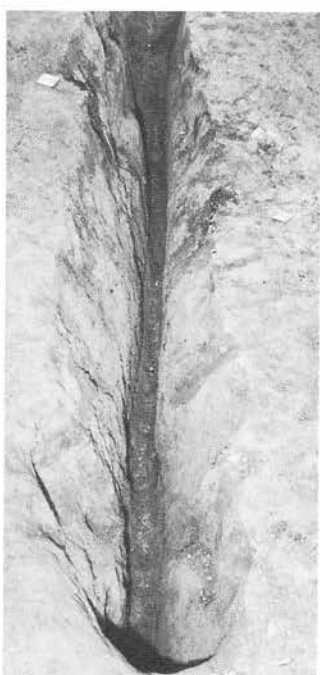
b. C IV-126(閉塞火山灰)



c. C IV-127(閉塞火山灰)



d. C IV-125



e. C IV-126



f. C IV-127

写真図版154



a. C IV-123



b. C IV-124



c. C IV-128

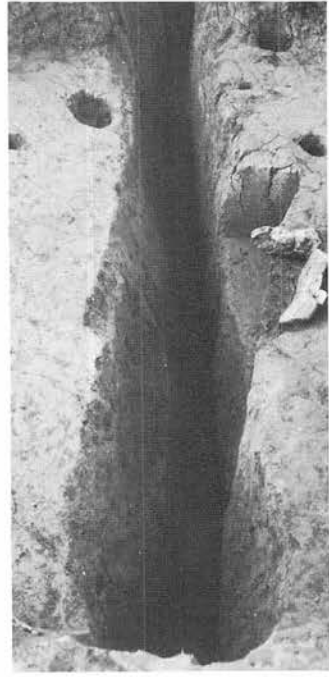


d. C IV-130

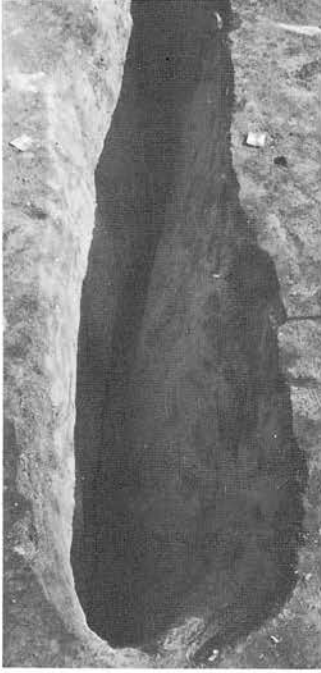


e. D II-101

写真図版155



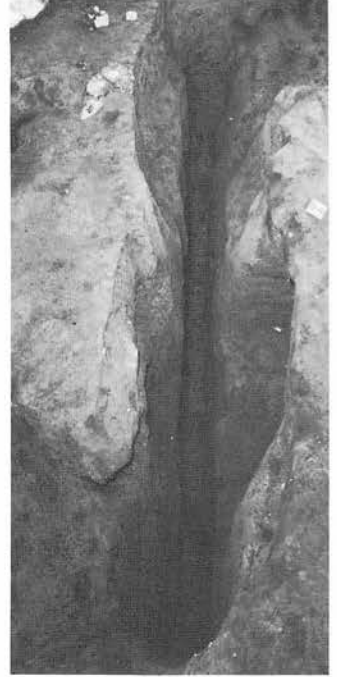
f. D II-102



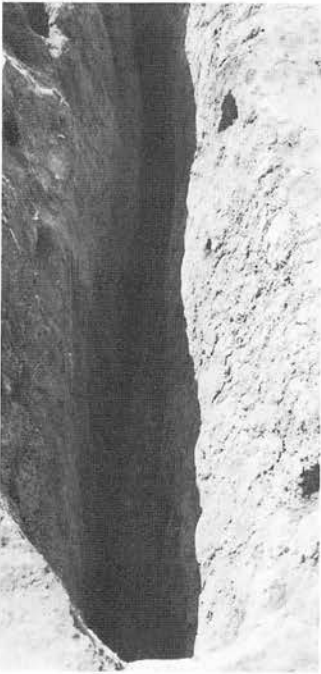
a . D II - 103



b . D II - 105



c . D II - 106



d . D II - 107



e . D II - 108

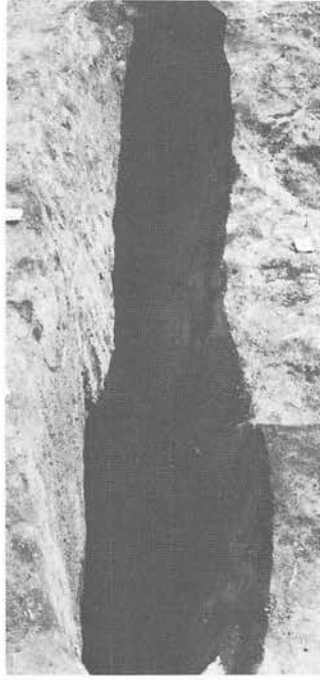


f . D II - 111

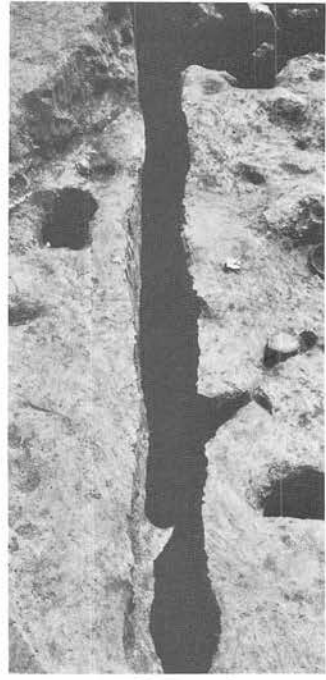
写真図版 156



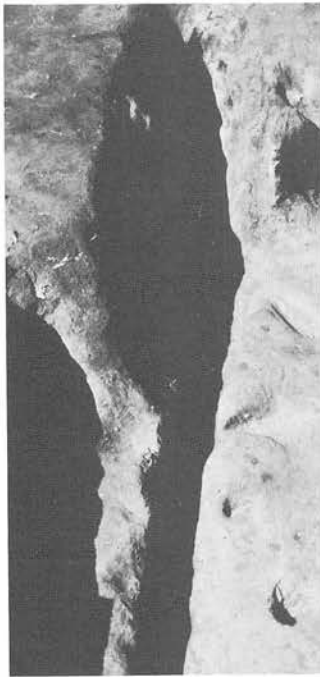
a. D II-112



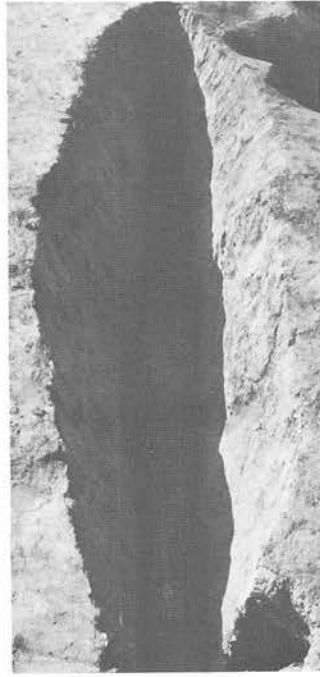
b. D III-102



c. D III-103



d. D III-104



e. D III-105



f. D III-106

写真図版 157

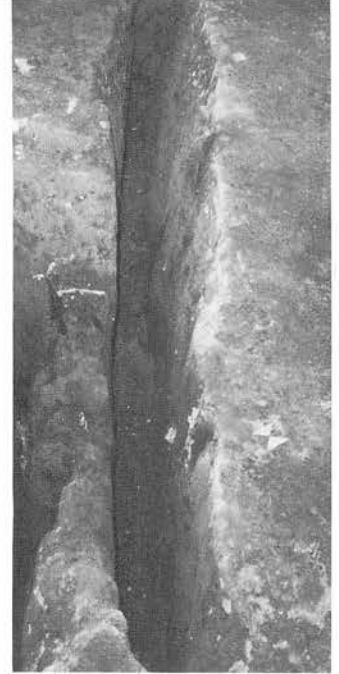




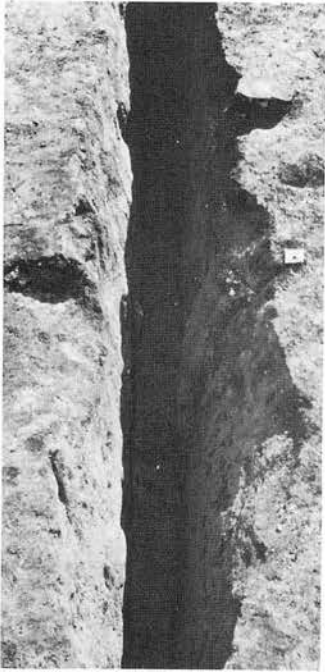
a . D III - 108



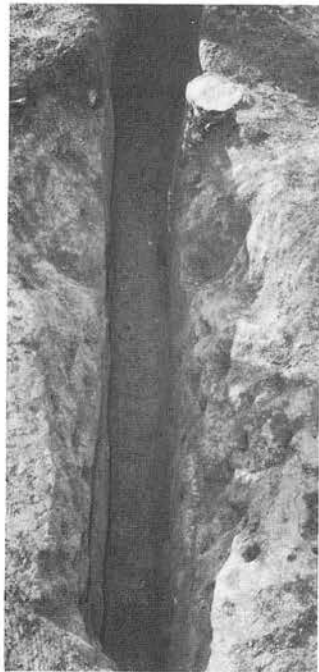
b . D III - 109



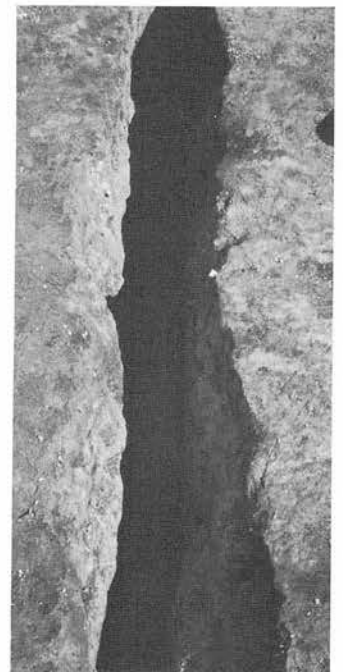
c . D III - 111



d . D III - 112



e . D III - 113

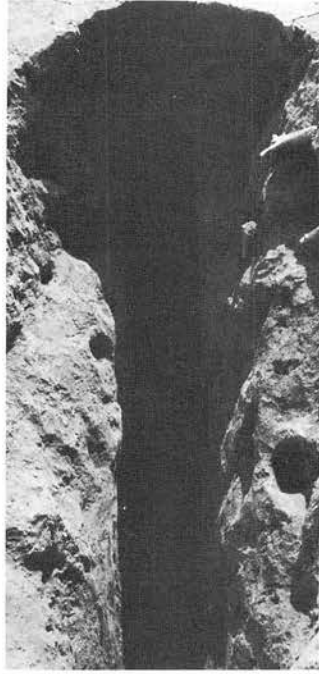


f . D III - 114

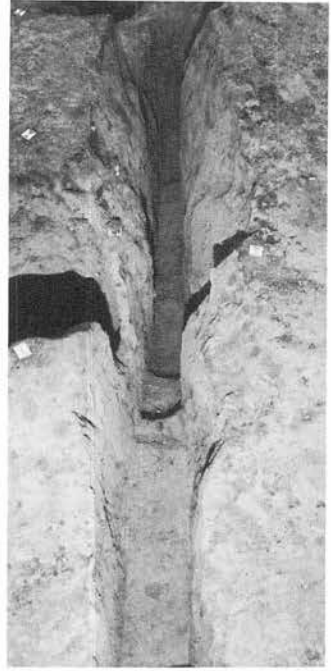
写真図版 158



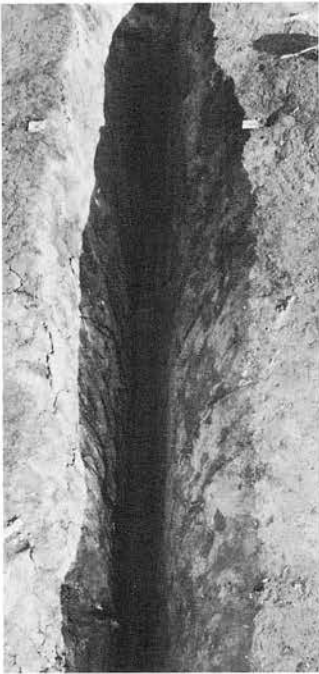
a . D III-117



b . D III-119



c . D IV-101



d . D IV-102



e . D IV-105



f . D IV-106

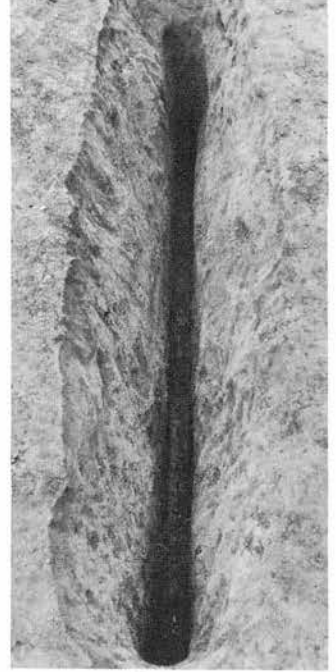
写真図版 159



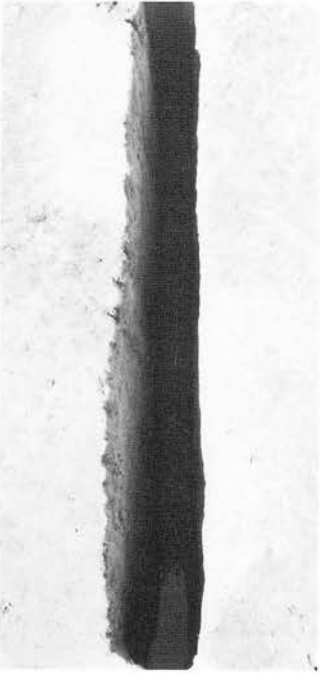
a. DV-107



b. DV-108



c. DV-109



d. DV-111

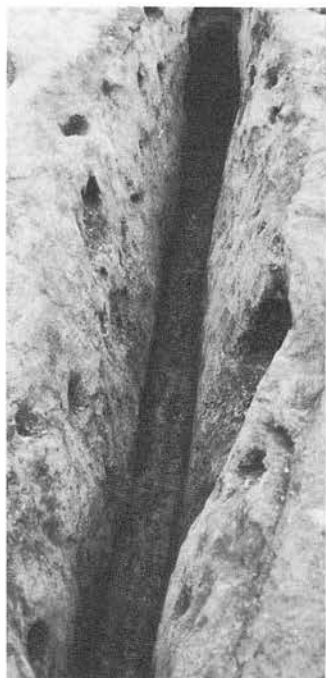


e. E II-101



f. E II-104

写真図版160



a . E II-105



b . E II-106



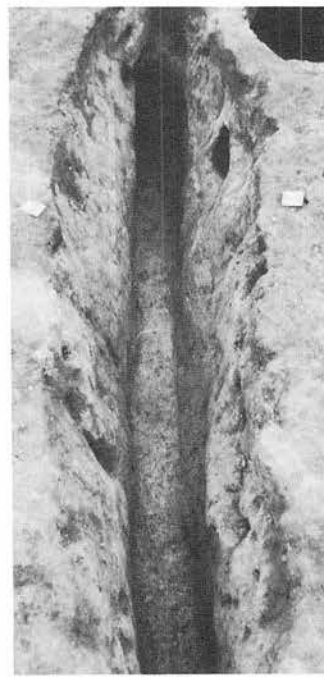
c . E II-109



d . E III-101

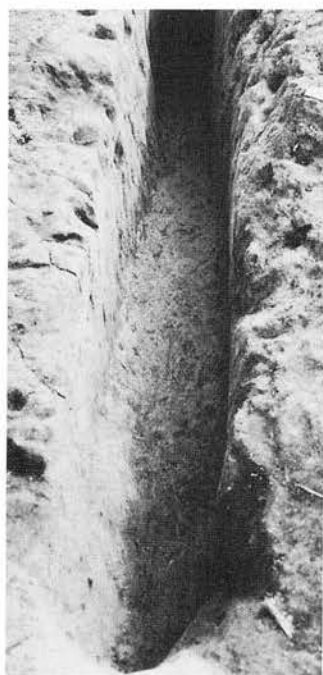


e . E III-102

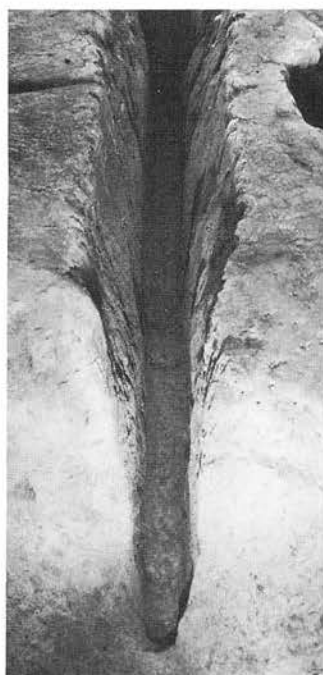


f . E III-105

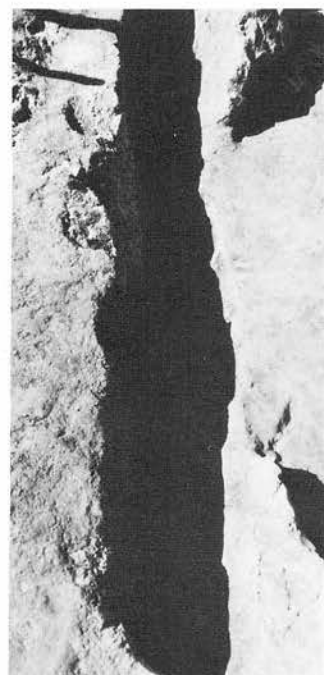
写真図版 161



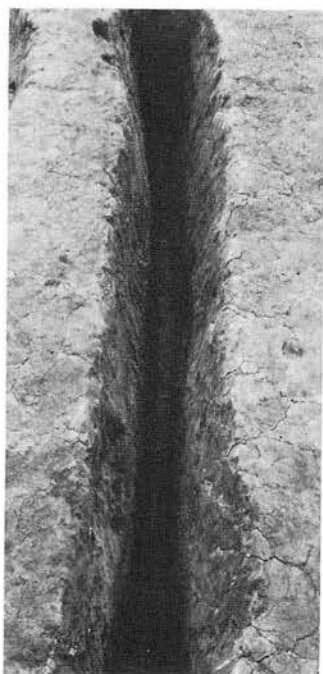
a . E III - 106



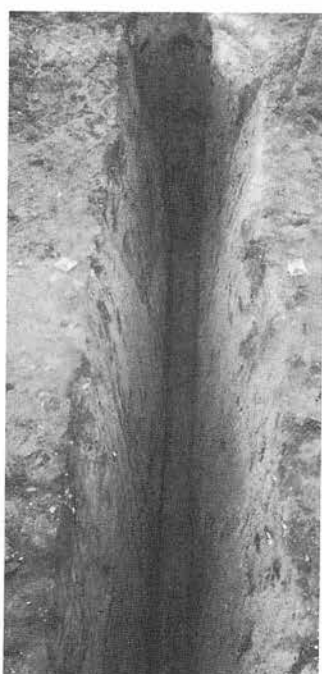
b . E III - 108



c . E III - 109



d . E III - 110

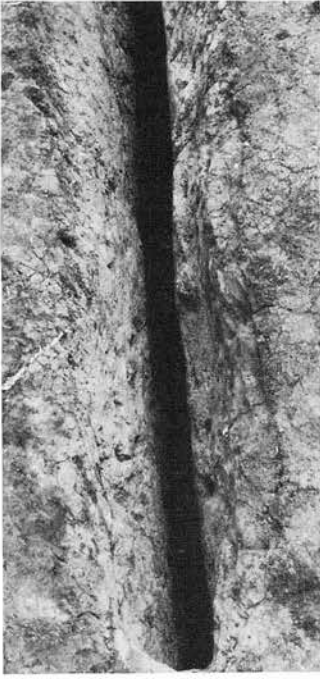


e . E IV - 101



f . E IV - 102

写真図版 162



a . E IV-103



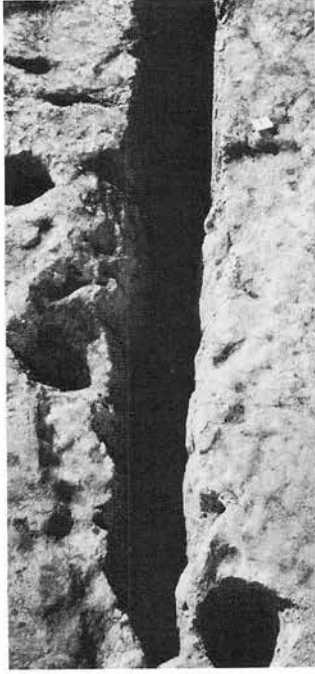
b . F II-102



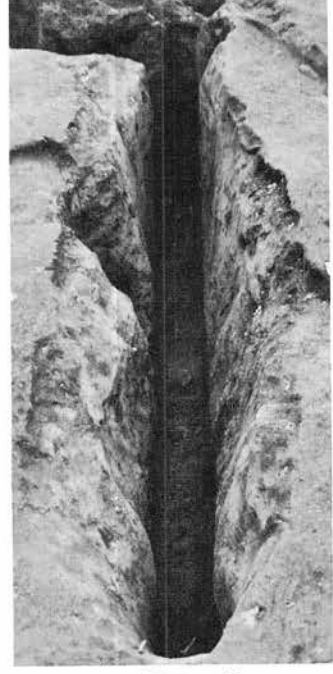
c . F II-103



d . F II-104



e . F II-106

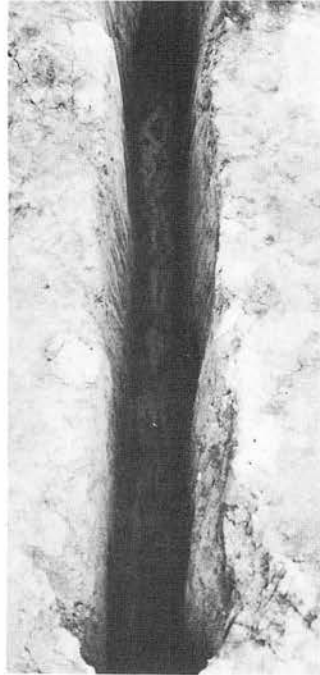


f . F II-109

写真図版163



a . F II - 110



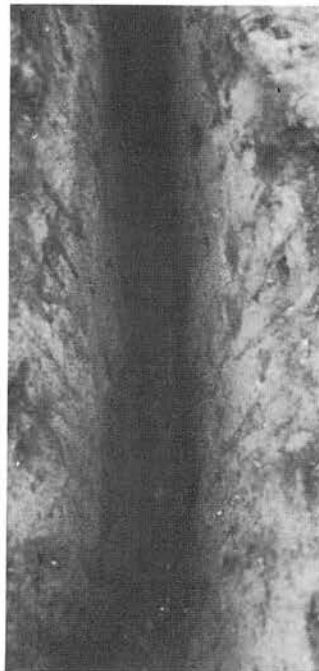
b . F III - 101



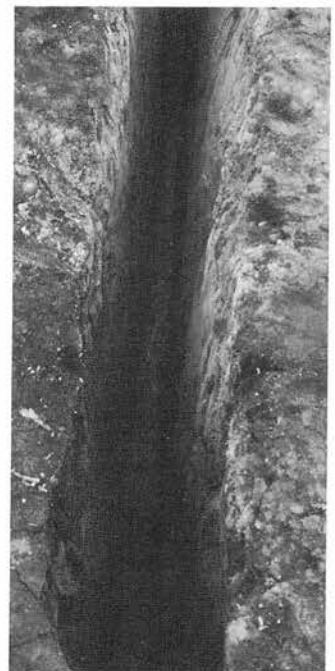
c . F III - 103



d . F III - 105

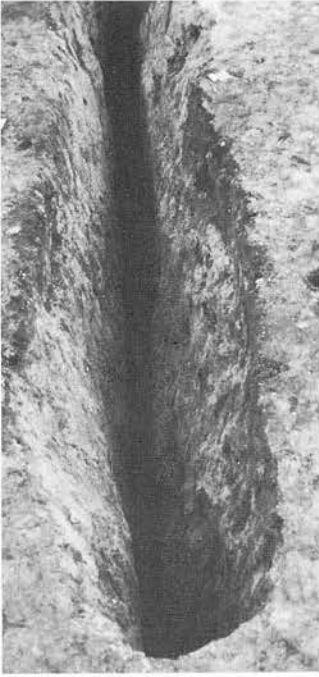


e . F IV - 101



f . F IV - 103

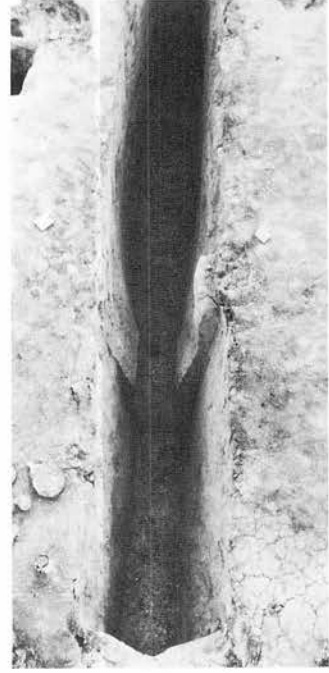
写真図版 164



a . F IV-104



b . G II-102(閉塞火山灰)



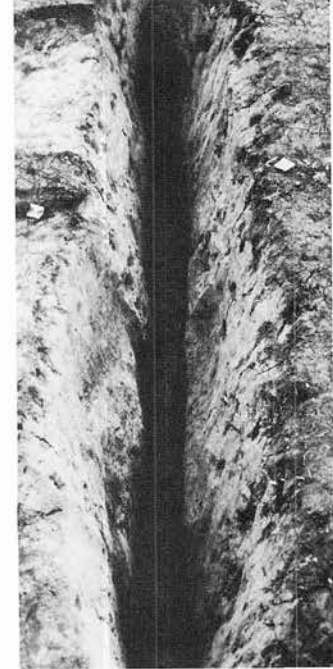
c . G II-102



d . G II-103



e . G II-107  
写真図版165



f . G III-101





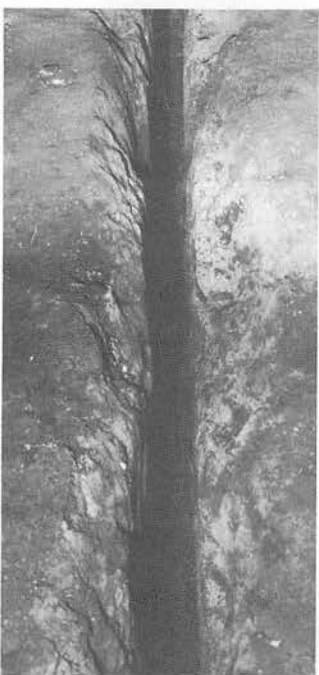
a. G III-102



b. G III-103



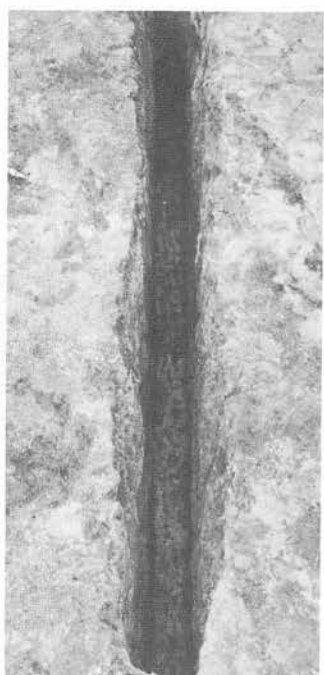
c. G III-104



d. G III-105



e. G IV-101

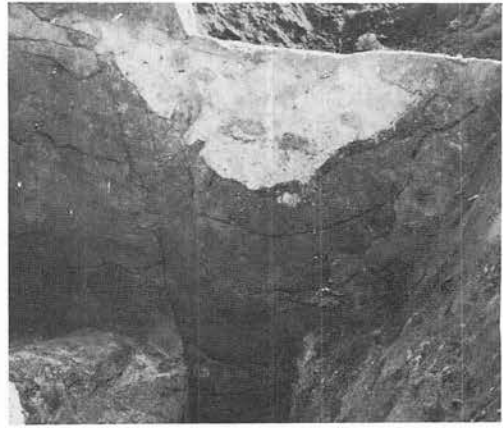


f. H II-101

写真図版166



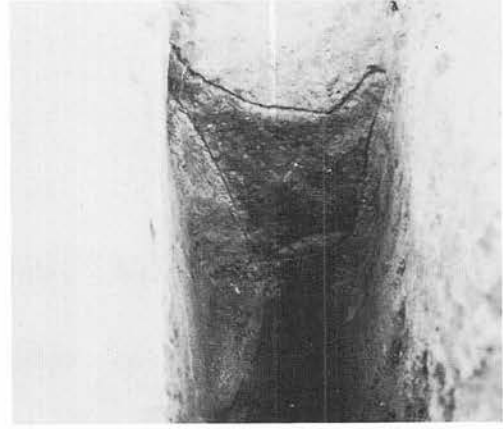
a. C IV-127



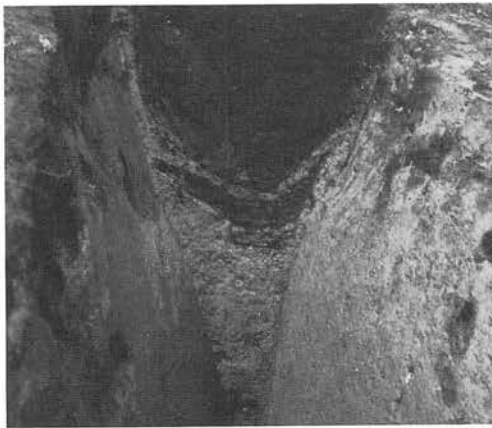
b. C IV-129



c. D IV-107



d. F II-104



e. F III-105



f. G II-104

写真図版 167



a. G III-101



b. G III-102



c. G III-104



d. G IV-102



e. G IV-103



f. H II-101



a . D II - 3 住居址(「剝片貯蔵」)



b . D III - 7 住居址(「剝片貯蔵」)



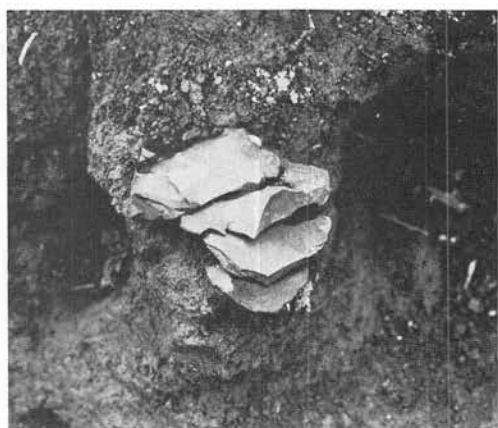
c . E II - 2 住居址(「剝片貯蔵」)



d . H II - 3 住居址(「剝片貯蔵」)

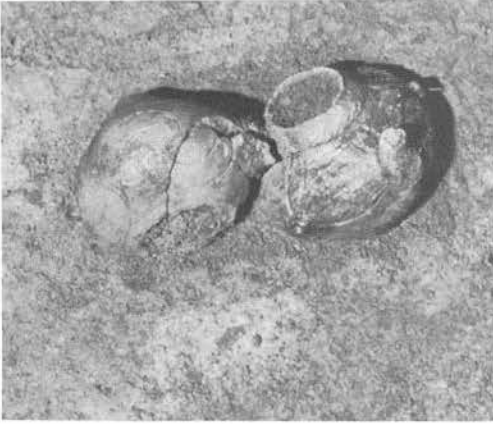


e . G II - 2 住居址(「剝片貯蔵」)



f . G II - 2 住居址(「剝片貯蔵」)

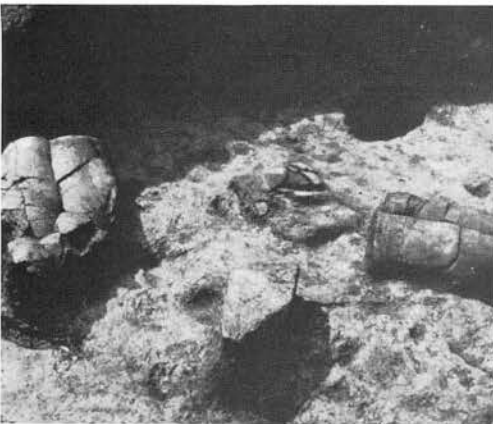
写真図版169



a. C III-10住居址(注口土器)



b. C III-10住居址(浅皿)



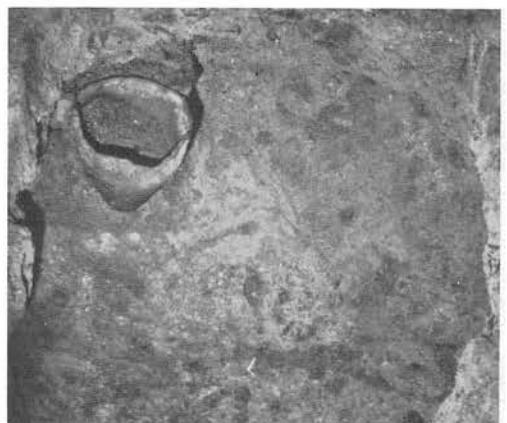
c. C III-11住居址(床面出土土器)



d. D II-110陥し穴状遺構(土器注口部)



e. D III-10住居址(注口土器)

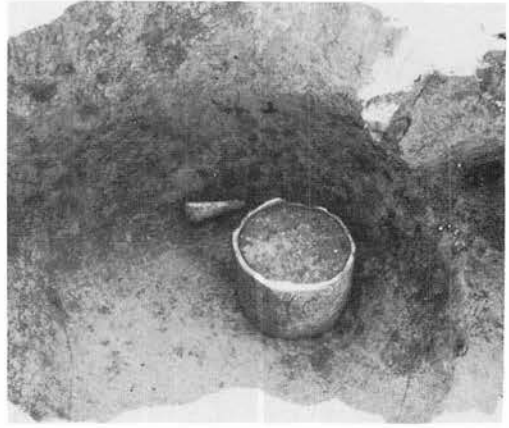


f. D II-64フラスコ形ピット(出土土器)

写真図版170



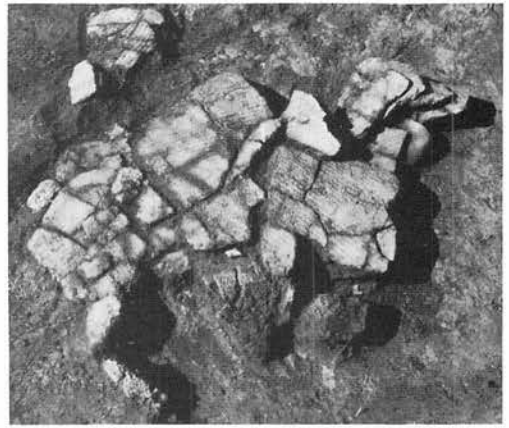
a. E II-7住居址(土器出土状況)



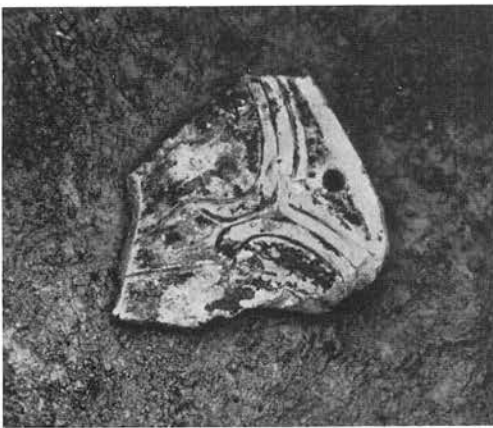
b. E II-53フラスコ形ピット(出土土器)



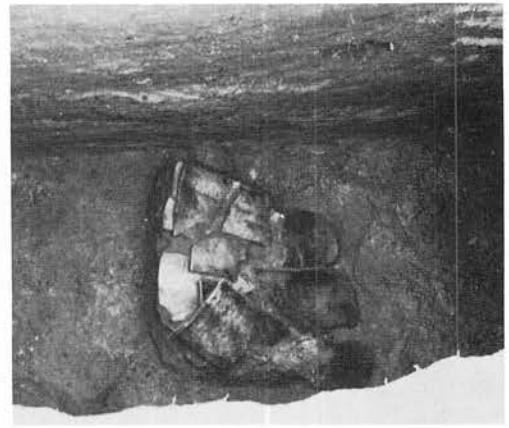
c. E II-63フラスコ形ピット(出土土器)



d. E III-7住居址(土器出土状況)

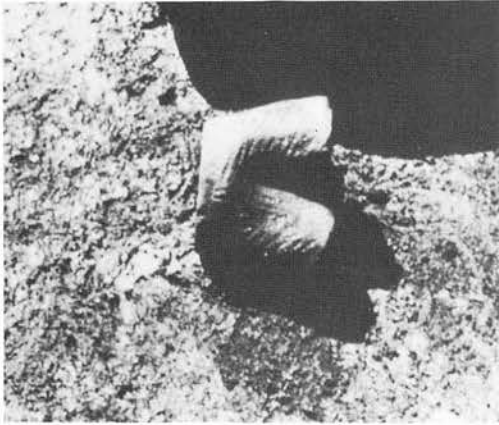


e. G II-2住居址(岩版)



f. G III-53フラスコ形ピット(土器出土状況)

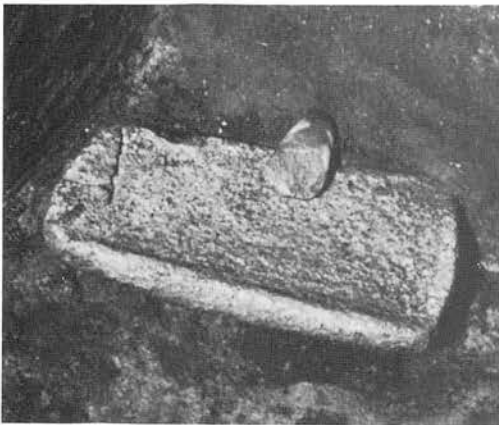
写真図版171



a. H II - 10住居址(双口土器)



b. F II - 4住居址(石皿と台石)



c. H II - 10住居址(石皿と磨製石斧)



d. C III - 7住居址(ペンダント)



e. I II - 5住居址(有孔円礫)

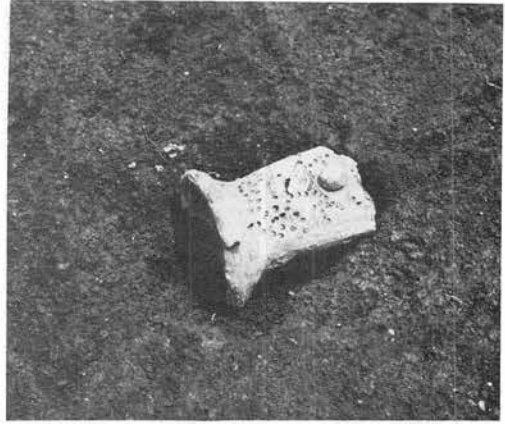


f. I II - 8住居址(黒曜石フレイク)

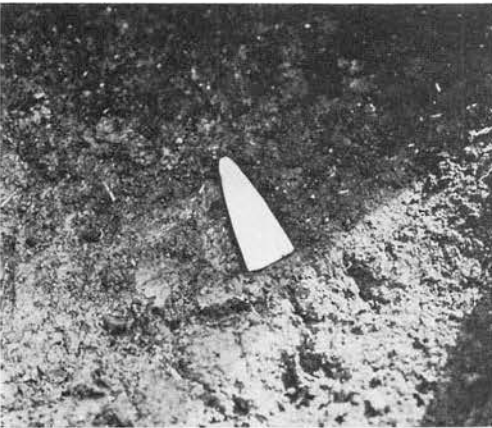
写真図版172



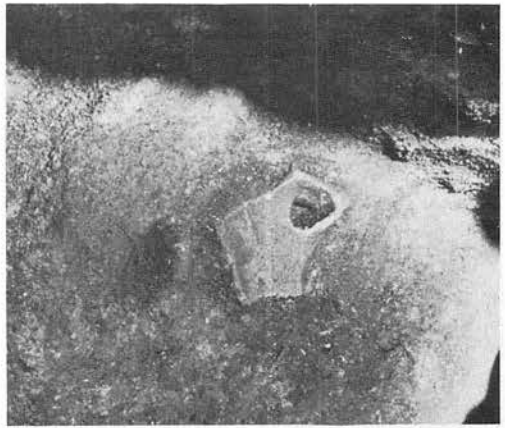
a. EIII-67フラスコ形ピット(筒状石製品出土状況)



b. HII-h2グリット土層(土偶)



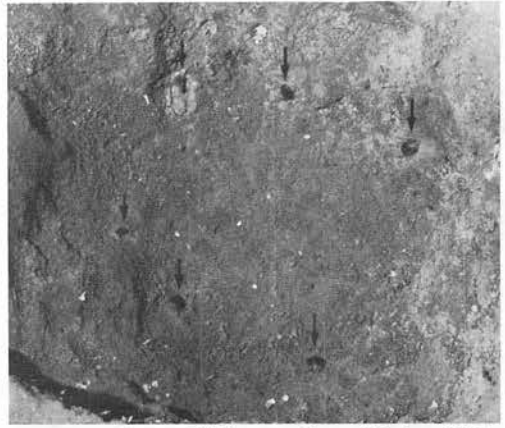
c. GII-201配石遺構(小形磨製石斧)



d. GIII-51フラスコ形ピット(円塗り土器)



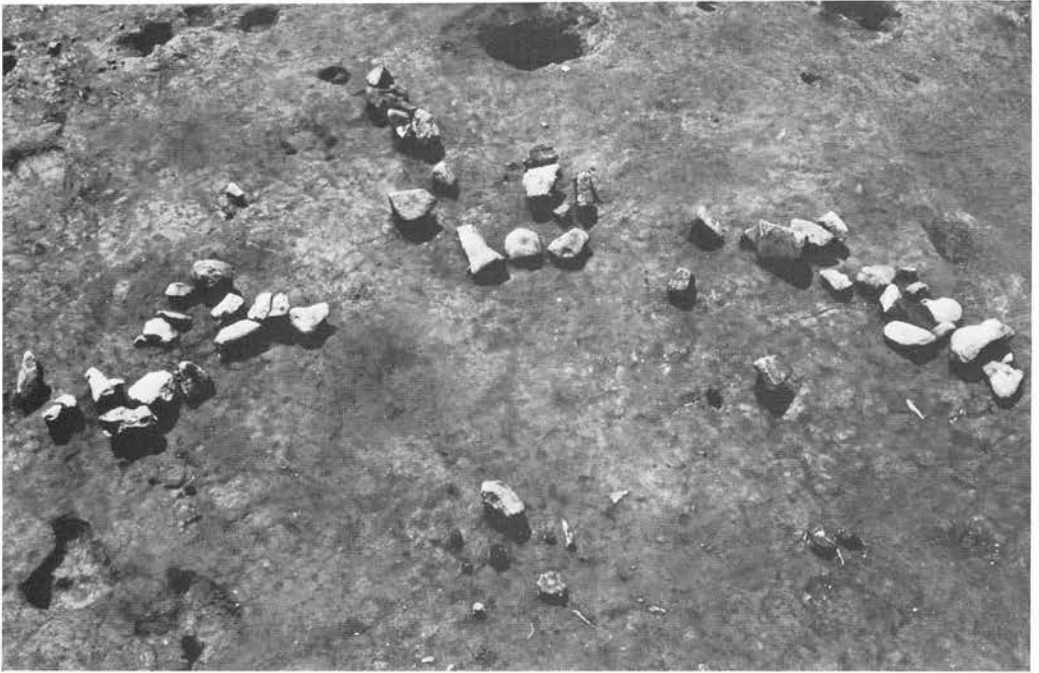
e. DIV-51フラスコ形ピット(水晶)



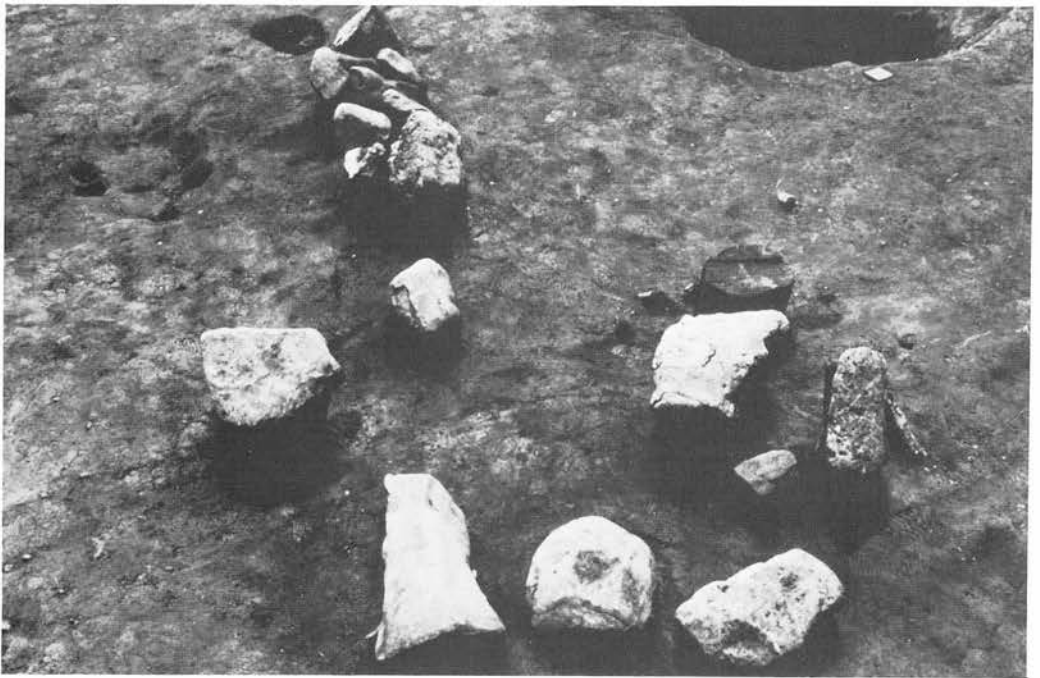
f. GII-5住居址北側ピット(ドングリ出土状況)

写真図版173





a. G II-201配石遺構



b. G II-201配石遺構(部分)

写真図版174

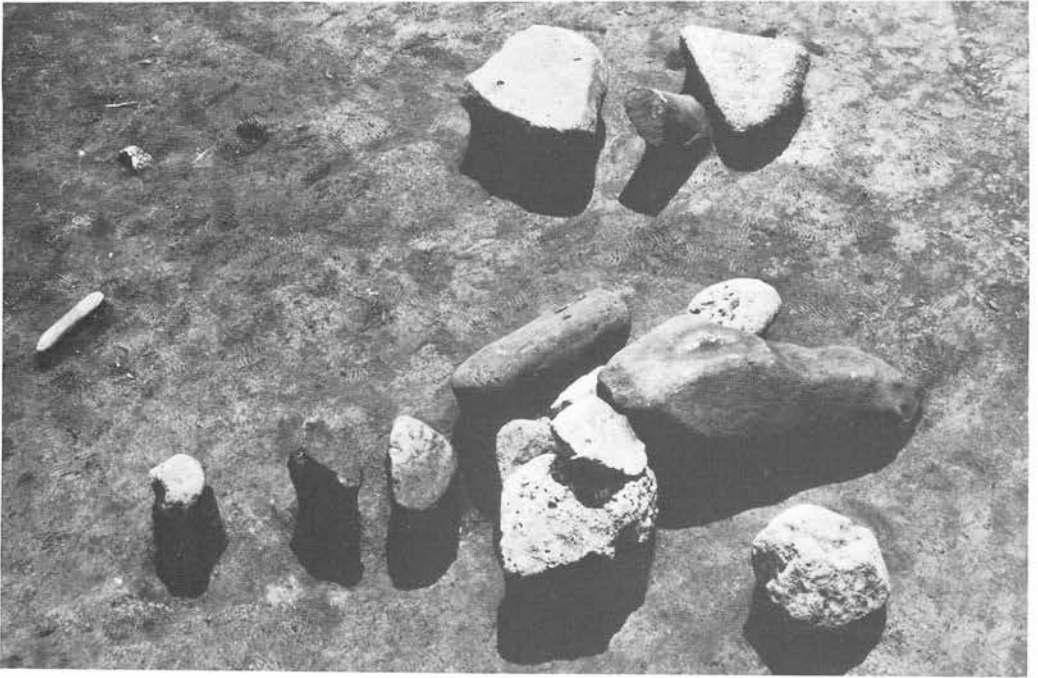


a . G II - 201配石遺構(部分)



b . G II - 201配石遺構(部分)

写真図版175



a . G II - 202配石遺構



b . H II - 201配石遺構

写真図版176

# 調 査 協 力 者 名

湯沢遺跡発掘調査協力者

都南村	藤原 幸一	都南村	中村 勝治	矢巾町	藤井 キヨ
"	熊谷 俊昌	"	猿 館 久吾	"	藤井 ハツエ
"	熊谷 仁蔵	盛岡市	越場 市太郎	"	吉田 ツネ
"	藤沢 嘉徳	都南村	田中 宮松	"	吉田 ミツエ
"	熊谷 重左衛門	"	藤原 長七	都南村	川村 ゴヨ
"	**藤原 彰	"	中村 馬太郎	矢巾町	細越 ミヤ
"	熊谷 貞夫	"	穴口 六太郎	"	佐々木 ツヨ
矢巾町	佐々木 末治	"	中村 助十郎	都南村	佐々木 ミツエ
都南村	伊藤 徳衛	盛岡市	宮野 三郎	矢巾町	立花 ウメ
"	藤原 善太郎	都南村	今川 三次郎	"	吉田 ミツイ
"	米倉 三郎	"	中村 イチ	都南村	橋場 ハツエ
"	川村 源蔵	"	中村 アキ	矢巾町	藤井 トシ
"	佐々木 金吾	"	中村 トメ	都南村	武蔵 アサヨ
"	高橋 善之助	"	中村 ツヤ	盛岡市	*川村 京子
"	中村 政吉	"	中村 サン	矢巾町	藤井 ヨシ
"	*小原 純一	盛岡市	中村 久之丞	"	*藤井 礼子
"	藤沢 ヨシ子	矢巾町	富谷 栄三郎	都南村	中村 サン
"	瀬川 文子	"	藤原 耕	"	中村 トシ
"	伊藤 恭子	都南村**	小泉 修幸	"	中村 オツ
"	瀬川 アヤ子	矢巾町	佐々木 儀三郎	"	中村 カツ子
"	村山 ミツエ	"	藤尾 正夫	"	*藤島 ヒロ子
"	田村 キヨ	都南村	*村上 敏郎	"	中村 タエ
"	熊谷 ツカ子	"	熊谷 トメ	"	浅沼 キミ子
"	小泉 トクヨ	"	熊谷 シヅエ	"	西 マツ
"	*勝政 タカ子	"	熊谷 トシ	"	熊谷 トミ
"	*佐々木 敬子	"	藤沢 節子	"	菅原 マヨ
"	*川村 ミチ子	"	*瀬川 幸子	盛岡市	竹花 タマ
"	田村 ヨシエ	"	熊谷 エイ子	"	竹花 マサヨ
"	安藤 テイ子	"	藤原 トシ子	"	滝村 チヨ
"	瀬川 文子	"	*山根 キヌエ	"	樋下 キク
矢巾町	藤井 ヤス	"	熊谷 ソノ	"	田上 アヤ

盛岡市 田上ユリ  
 " 滝村テツ  
 " 佐々木ハナヨ  
 " 浅沼ケイ子  
 " 高橋テツ子  
 " \*越場ミチエ  
 都南村 三上ナホ  
 " 三上タマ  
 " 三上マツ  
 " 猿館サツ  
 " 田中ユキ  
 " 内館キヌ子  
 " 内館ゴヨ  
 " 寺館タヨ  
 " 山崎タヨ  
 " 田村シゲノ  
 盛岡市 松岡キクノ  
 都南村 中村イシ  
 盛岡市 武蔵シノ  
 都南村 藤沢フミエ  
 盛岡市 田上セン  
 " \*川村ヨシ子  
 " 穴口カツ  
 " 藤村ミチ子  
 " 岩泉トキ  
 " 中村ルイ子  
 " 後藤歌子  
 都南村 三上テツ  
 盛岡市 築田政高  
 " 近谷久松  
 " 高橋吉次  
 " 齋藤定之丞

盛岡市 齋藤登  
 " 近谷クメ  
 " 熊谷リキ  
 " 齋藤ミヤ  
 " 齋藤ヨシエ  
 " 佐々木マキ子  
 " 工藤ナツエ  
 " 福士モヨ  
 " 齋藤イネ  
 " 齋藤スギノ  
 " 齋藤ユキ  
 " 齋藤サト  
 " 齋藤ハル  
 " 齋藤ツエ  
 " 佐々木サメ  
 " 晴山文子  
 " 瀬川ミチ  
 " 松岡ヤエ  
 " 泉館トクエ  
 都南村 飯岡タイ  
 " 飯岡ハツエ  
 " 藤原ミサオ  
 " 寺館マサヨ  
 " 寺館ユキ  
 " 堀間サダ  
 " 堀間ケイ子  
 " 佐々木ソヨ  
 " 今川ユリ  
 " 今川サダ  
 " 中村ハナキ  
 " 穴口サキ  
 " 田中トメ

都南村 滝村ハツ  
 盛岡市 齋藤百松  
 " 伊東茂子  
 " 佐藤トキ  
 " 築田チエ  
 " 齋藤コヨ  
 " 近谷サメ  
 " \*女鹿麗子  
 " 高橋トシ  
 " 高橋エサ子  
 " 柏田美智子  
 " 丹野ケイ子  
 " 高橋サダ  
 " 遠藤リヨ  
 " 齋藤ミヤ子  
 " 齋藤栄子  
 " 日向礼子  
 " 平賀サツ子  
 " 工藤イヨ  
 " 齋藤ハツミ  
 " 齋藤オヨ  
 滝沢村 佐々木ア  
 盛岡市 齋藤マツ  
 岩手大学 \*山田義人  
 学生 \*菅原貞二  
 " \*工藤篤一  
 " \*成田幸昭  
 " \*齋藤久昭  
 " \*中村順行  
 " \*佐藤義弘  
 " \*志賀栄光  
 " \*梅中治美

岩手大  
学学生

" \*中 田 建 一

" \*志馬田 綜一郎

" \*土 屋 秀 昭

" \*佐 藤 博

" \*佐 藤 雅 満

" \*八 畝 秀 樹

" \*須 貝 昇

" \*内 藤 求

" \*平 俊 一

" \*金 沢 正 樹

" \*才 川 秋 夫

" \*大 森 繁 利

" \*戸 来 正 嗣

" \*吉 川 信 一

" \*中 村 明

" \*沢 目 直 人

" \*平 館 仁

" \*畑 村 政 行

" \*菅 野 秀 一

" \*長谷田 修

盛岡工  
高生徒

" \*佐々木 良 雄

" \*内 館 良 則

" \*遠 藤 稔

" \*佐々木 正 光

" \*大 沼 均

" \*石ヶ森 良 夫

" \*佐々木 淳

" \*田 中 康 次

" \*作 山 聖 志

" \*大 鷲 喜代美

" \*外 柳 進

" \*熊 谷 政 美

盛岡工  
高生徒

" \*田 村 欣 弥

" \*川 越 正 利

岩手大  
学学生

" \*星 文 宣

" \*藤 沢 清 海

" \*寺 沢 昭 彦

" \*本 間 雄 二

" \*阿 部 真一郎

" \*中 崎 良 孝

" \*鈴 木 隆 雄

" \*辻 野 豊

" \*小笠原 鉄 治

" \*横 倉 実

日本大  
学福祉  
東北学  
院大  
学学生

芝浦工  
学大  
盛岡工  
高生徒

" \*田 村 莊 弥

" \*堀 米 篤 勉

" \*柏 崎 勉 進

" \*熊 谷 進

" \*古 川 良 一

" \*岩 崎 正 則

" \*平 子 一 博

" \*川 村 道 和

" \*浅 沼 良 雄

" \*伊 藤 和 子

" \*川 村 明 和

" \*熊 谷 璋

(\*印の人は実測担当者、\*\*印はカメラマン)

---

岩手県埋文センター文化財報告書第2集

都南村湯沢遺跡

(昭和52年度)

発行 昭和53年3月30日

発行者 (財)岩手県埋蔵文化財センター  
岩手県盛岡市向中野字向中野39-1  
(〒020 TEL.0196-35-6622)

印刷者 山口北州印刷株式会社

© 岩手県埋文センター 1978

---